ランスIF　二人の英雄

散々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ランスＩＦ　二人の英雄

【Ｎコード】
Ｎ５７５０Ｘ

【作者名】
散々

【あらすじ】
本来ならばランスに出会う前に死ぬはずの運命であった、英雄候補であるオリ主。その彼の生存によって、物語はどのように変化していくのか…という感じの作品です。Ｒａｎｃｅ１からのスタートです。

プロローグ（前書き）

原作リスペクトで行きたいと思います。
オリ主以外のオリはモブ以外無し、主人公は現状チートという程強くはありません。

プロローグ

一つの大陸があった。魂の集合体である存在が、自らの暇つぶしのために創造した大陸。その存在は三体の神を創り出し、大陸の管理をさせた。悲劇と混乱の鑑賞を愉悦とする主を退屈させぬよう、三体の神は争いが永遠に続くようバランスを考え、長い時を掛け世界を構築していった。

魔王…モンスター…ドラゴン…そして人類…

優秀すぎたドラゴンの存在を反省して創造された人類はこの混乱の時代を生き抜くには余りにも弱く、長きに渡り魔王やモンスターといった強大な存在に蹂躙され続けることとなる。

人類誕生から約３５００年…

人類は滅びてはいなかった。高い繁殖力によりその数を増し、知識により武器を生み出し、他の種族に対抗する力を身につけていた。

長く魔人の奴隷とされていた暗黒の時代も存在するが、第６代魔王ガイの時代に奴隷から解放されることとなり、各地に国が誕生する。ヘルマン・リーザス・ゼスの三大国だ。これに古くから存在するＪＡＰＡＮと多くの自由都市の間で、人類同士の争いが長く続くこととなる。魔王ガイの死と、それによる魔人進行からなる地獄が目前に迫っていることも知らずに…

ＧＩ１００６
－大陸北西部　とある森中－

「…はあっ…はあっ…」

その男は森の中を彷徨っていた。身につけている鎧はひび割れ、既に防具としての役割は果たしていない。身体中に傷を負っているが、一際目立つのはその胸の傷。モンスターに付けられたのであろうか。その傷の深さから鑑みるに、おそらく…長くはない。

「１５年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

自らも死期を悟っているのであろう。そう男は呟いたとほぼ同時に、背後で物音がする。

「さて…最後くらい楽に殺して欲しいものだがな…」

自分を殺すであろう相手を確認するため、男は振り返る。

本来、男はここで死ぬ運命にあった。多くの平行世界の歴史の中で、ＧＩ１００６年以降まで男が生き延びたことはない。

「人間…？　なぜこのようなところに…？」

そこに立っていたのは美しき女性であった。しかし、その存在は人間ではない。魔人。人類を蹂躙する存在が、そこに立っていた。

それは創造神の悪戯か。本来ここで死ぬべき運命であった人間が、仇敵とも呼べる魔人との邂逅により、生き延びることとなる。それは即ち、これより後に起こる人類と魔人の戦争に、多くの平行世界

の中で初めてその男が携わることとなるのだ。

―そして１０年の時が流れる―

破壊と混乱の時代…

時代は英雄をもとめていた…

時代がもとめる資質を備えた人物は二人…

だが…

その英雄たる資質を備えた人物の一人は…

とっても自分勝手で

とってもスケベで

とっても乱暴で

とても正義とは思えない男だった。

そしてもう一人は…

これは二人の英雄の物語である。

第1話　出会い

ＬＰ０００１　７月
―自由都市アイス―

「今回はこの仕事を引き受けて貰いたい」

とあるギルドビルの一室にある部屋で、男二人が仕事の話をしていた。話を切り出した男の歳は４０才後半から５０才というところだろうか、成金のような服を身につけ、葉巻に火を付けようとしている。この男の名前はキース・ゴールド、このキースギルドのマスターである。

「そろそろ、お前も結婚したらどうだ。なんなら俺がいい女を紹介してやってもいいぜ」
「ふん、くだらないことを言ってないでさっさと仕事の話をしろ」

それに答えたもう一人の男。薄手のプレイトメイルとマントを身にまとい、ふてぶてしい態度で佇んでいる。彼の名はランス、キースギルドに所属する戦士にして英雄たる資質を備えた人物の一人だ。しかし、彼の行動理念は「全ては俺様のために」というものであり、美女とは犯してでもＨし、邪魔する奴は皆殺しという、とても英雄とは呼べぬものであった。ただ、その実力は本物であり、いつしか彼は一部の冒険者からは鬼畜戦士という通り名で呼ばれるようになっていた。

「せっかちな野郎だな。まあいい、この写真を見てくれ」

そう言い、白い封筒から取り出した写真には白いドレスを着た赤い髪の美しい娘と、青いドレスを着た黒い髪の娘が写っていた。

「ほー、なかなか可愛い娘たちじゃないか。グッドだ！」
「この娘たちを見つけ出して保護して貰いたい」
「なんだ、人捜しか。何者なんだ」

聞けば、赤い髪の娘はブラン家の次女で名をヒカリ、黒い髪の娘はファン家の長女で名をグァンというらしい。どちらも名家のお嬢様だ。

「ヒカリの方は3週間前パリス学園に通っていて行方不明になったそうだ。グァンは彼女のルームメイトで、ヒカリを自分で見つけ出すと息巻いていたそうだが、こちらも1週間前から行方不明だ。どちらも身代金の要求はない」
「ふむ、営利誘拐では無いのか。まあ、とにかく助け出せばいいんだろう？報酬は？」
「聞いて驚け、1人救出で２０００ＧＯＬＤ、２人で４００００ＧＯＬＤだ！」
「なんだと！破格値じゃないか！どうしたんだ？」

ランスが驚くのも無理はない。普通、この程度の依頼なら1人１０００～２０００ＧＯＬＤが相場になる。それが１０倍もの報酬が提示されたのだ。俄然やる気も沸いてくる。

「それだけ大事な娘たちなんだろう」
「がははは！俺様にまかせておけ、すぐに解決してやる。じゃあな」
「それとグァンの方は…行っちまったよ。まあ持って行った資料を読めばすぐに気がつくだろ…」

キースギルドを後にし、アジトである貸家へと帰る。そこで受け取った資料に目を通し、情報を整理する。普段であればこんなに真面目に取りかかるようなランスではないが、何せ報酬が報酬だ。その上美女のおまけ付き。ここで俺様がかっこよく助け出せば、感動の余り簡単に股を開いてくれるかもしれん、いや間違いなく開く、などと真面目な顔でとんでもないことを平然と考えていると、部屋の奥から女性が現れる。

「ランス様、お茶が入りました」

お茶を持って現れたこの娘はシィル・プラインという。特徴的なピンクのもこもこ髪で、露出の高い白い装束を身につけている。今から3ヶ月ほど前に奴隷商人から１５０００ＧＯＬＤで買い取った魔法使いだ。彼女には特殊な魔法が掛けられており、ランスの命令には絶対服従である。

「あの…次のお仕事、決まったのですか？」
「人捜しをする事になった」

簡潔に答え、ランスは資料の続きを読む。邪魔をしては悪いと思い、シィルは机の上にお茶を置き、部屋から退出しようとしたが、それはランスの声によって阻まれる。

「なんだと！グァンちゃんはジオの町近辺の洞窟をアジトにしている盗賊団と一緒にいたという目撃情報があるじゃないか！キースの野郎、大事なことを言い忘れやがって！」
「お、落ち着いてくださいランス様」

話の途中でさっさと切り上げた自分の失態は棚に上げ憤慨するラ

ンス。しかし、ランスがここまで怒るのにも訳がある。一つは現在ランス家の貯蓄は底をついており、是が非でもこの報酬は手に入れなければならないのだ。そして、もう一つはキースギルドの方針である。何もこの依頼はランスだけが受けたものではない。希望者が多ければ早い者勝ちというギルド方針であるため、手を付けるのが遅れれば他の請負人にみすみす４００００ＧＯＬＤを横取りされかねない。

「急いで準備をしろ、シィル！すぐに出発するぞ！」
「はい、ランス様」

キースに文句を言って無理矢理うしバス代を出させ、ジオの町へと向かう。まだこの依頼を受けたものは少ないはず。今なら一番乗り確実だ。

「がははは！４００００ＧＯＬＤと美女二人の身体はどっちも俺様のものだ！」

―自由都市ジオ近辺の洞窟　盗賊のアジト内―

「へっへっへ、今日も楽しませて貰おうかな」
「もう…家に帰してください…」
「まーだそんなこと言ってんのか？お前はもう一生俺たちの奴隷なんだよ！」

洞窟の奥には捕らえられ、さんざん汚されぬいたグァンと、いかにもな盗賊が二人。本来はもう少し盗賊の人数が多いのだが、他の盗賊たちは今外に出払っているため、アジトには三人だけだ。

「でも大丈夫かね…お頭に黙って勝手に女を連れて盗賊団から抜け出して…」
「まだ心配してんのか？お前だっていつもいつもお頭のおこぼれに預かるのは不満だっただろ？ここはジオ、あっちはリーザス城。見つかりゃしねーよ！」

距離的には案外近いため、十分見つかる危険があると思うのだが、そこは短絡思考な盗賊。あっさりと納得する。

「そうだな…他にも賛同してついてきてくれた奴らもいるし、何も恐れることはねーな！」
「その通りだ！こっから俺らの新しいサクセスストーリーが始まるんだ！新かぎりない明日戦闘団誕生の瞬間だぜ！俺が団長な！」
「じゃあ俺は副団長か？文句はないぜ」
「「ぎゃはははははは」」

下品な笑い声が洞窟の中に響く。もしかして…本当に一生このまま…グァンは何度も頭に浮かび、その度に考えないようにしてきたことをまた思い浮かべてしまう。

「じゃあ新しい盗賊団の誕生を祝して本日の一発目を…」
「ひっ…誰か…誰か助けて…」
「何回言やぁ気が済むんだ？誰も助けになんか来ねーよ！」

「いや、助けは来るぞ。だいぶ遅れてしまったがな」

いるはずのない四人目の声を聞き、盗賊はすぐさま振り返る。その瞬間、副団長だった盗賊の首が飛んだ。団長と名乗った男も、グァンも、状況が飲み込めず呆然となるが、仲間を殺されているのだ。

自分にもこの男は向かってくるだろう。短剣を腰から抜き、目の前に立つ男に向かい声を荒げる。

「てめぇ…なにもんだっ！ぶち殺されてーのか！」

「名乗る必要があるのか？…今から死ぬ奴に」

ー盗賊のアジト入り口ー

「ふんっ、手間取らせやがって。ここがアジトで間違いなさそうだな」

洞窟の前にはランスとシィル、そして先ほどまで盗賊だった肉塊が5つ。ランスたちは運のいいことにアジトに戻る盗賊たちを偶然目にし、うしバスを途中下車してついてきたのだ。そしてアジトの前についたと同時に用済みとばかりに後ろから不意打ちを仕掛けた。何人かは反撃してくるが、こんな盗賊に手こずるランスではない。みるみるうちに皆殺しにした。

「さーて、グァンちゃんを俺様がかっこよく助けて一発やらせてもらおう」

「待ってくださいランス様、洞窟の中から誰か出てきます」

「んっ？…なんだとぉぉぉ！」

洞窟から出てきたのは二人。薄手の鎧とロングソードを装備した、どこからどう見ても冒険者である黒髪の男。両腕でグァンを抱えている。助かって気が抜けてしまったのだろうか、気を失っている。

「ま…間に合わなかった…」

「ん？おたくらは…なるほど、俺同様、依頼を受けた冒険者か。殺す直前に仲間が帰ってくるとか言っていたから警戒していたが、あんたらが片付けてくれたのか」
「あ、はい、そうです。私はシィルといいます。こちらはランス様で、私のご主人様になります」

グァンを抱えた男はそうランスとシィルに向かって話しかけるが、ランスは何かを考え込んで返事をしない。訝しげにランスを見ていると、考えがまとまったのか、ランスがしゃべり出した。

「よし、殺そう。そうすれば金も美女も俺様のものだ。我ながらグッドアイデアだな、がははは！」
「いきなりとんでもないことを言うな、あんたの主人は…」
「むっ、何を勝手に馴れ馴れしく人の奴隷に話しかけているんだ貴様」
「ランス様…一応自己紹介は済ませました…」
「なんだと、勝手なことをするなシィル、ええい、こうしてやる！」
「ひんひん…痛いです、ランス様…」

両拳でシィルの頭をぐりぐりとし始める。余りにも理不尽な光景である。

「一応ほとんどの盗賊を片付けてくれた礼に、報酬を分けてやってもいいと思ってはいたんだがな…」
「なに？それを早く言え。なかなかに下僕として見所のある奴じゃないか。分けると言わず全部寄越してしまってもいいんだぞ？」

シィルを解放し、ランスはまだ名も知らぬ冒険者に向き直る。

「ふふっ、おもしろい奴だな、あんた」

「で、貴様の名前はなんというのだ？男の名前など覚える気はないが、こっちだけ名乗っているのは気に食わん」
「ああ、名乗りが遅れたな、すまなかった」

それは、本来ならあり得ぬ出会い。世界の理から外れた男たちの邂逅。この出会いが人類同士、果ては魔人との争いに終止符を打つ始まりであったことを、このときはまだ誰も知らなかった。

「俺の名はルーク。キースギルド所属の冒険者だ」

第1話　出会い（後書き）

［人物］

ルーク・グラント（オリ主）
ＬＶ　４５／２００
技能　剣戦闘ＬＶ２　対結界ＬＶ２　冒険ＬＶ１
　キースギルド所属の冒険者。歳は２５才でランスの７つ上。本作の主人公の一人で、英雄候補。ＧＩ１００６年に行方不明となるが、ＧＩ１０１５年にキースギルドに戻ってきてキースを驚かせた。その間の動向は謎に包まれている。

ランス
ＬＶ　１０／∞
技能　剣戦闘ＬＶ２　盾防御ＬＶ１　冒険ＬＶ１
　キースギルド所属の冒険者。本編の主人公にして、本作の主人公の一人。英雄候補。才能限界に上限が無く、世界のバグとされている。

シィル・プライン
ＬＶ　１３／３５
技能　魔法ＬＶ１　神魔法ＬＶ１
　ランスの奴隷の魔法使い。ランスのベストパートナー。

［技能］

対結界（オリ技能）
　結界を無効化する。ＬＶ１で魔法結界などの人類の生み出した結界を、ＬＶ２で魔人の無敵結界をも無効化し、直接ダメージを与えることができる。魔剣カオスや聖刀日光と違い、効果は本人のみで

周りの人間がダメージを与えられるようにはならない。ランスの才能限界同様世界のバグであり、ルークのみが保有する技能である。

第2話　奇妙な協力関係

―ジオの街　酒場―

街の外れにある小さな酒場。そこそこに繁盛しているようで、店内には多くの冒険者たちがいた。冒険の成果を喜び合うもの、静かに飲むもの、酔いが回って口論を始めるもの、酒場の風景としてはよくあるものだろう。その酒場の奥のテーブルにランスたちはいた。

「おごって貰うのはいいが、分け前はまた別だぞ。わかっているな」

「わかってるって。人の好意は素直に受け取るもんだぞ」

水割りを片手にランスがルークに念を押す。ここの払いは全額ルーク持ちだ。先の礼も兼ねてというのが一つ、一応ギルドの先輩だからというのがもう一つの理由だ。

「しかし酒はまあまあだが、料理が不味いな。こんなに不味いへんでろぱなど俺様は認めん」

「酒場の料理なんてこんなもんだろ。ほれ、シィルちゃんも遠慮せずに食べな」

「すいません、いただきます」

奢りでありながら文句ばかりのランスに呆れながら、ウォッカを一口飲み、シィルにうはぁんを勧める。

「で、仕事の話に戻ろうか。グァンちゃんから聞いた話だと、ヒカリちゃんをさらったのは女忍者だったらしい。深夜にシャワーを浴びていたところを襲われたとのことだ」

「女忍者ねぇ…そんなもんがまたいたのか」
「まあ大陸にいるのは珍しいな。ＪＡＰＡＮではいまだに多く存在するようだが」

グァンは酒場の近くにある宿で寝かせている。宿に運んだあたりで一度目を覚まし、誘拐時の状況をルークに話してくれたのだ。その後は疲労からか、すぐにまた眠り込んでしまった。

「ヒカリちゃんとグァンちゃんの誘拐は全くの無関係だな。一人救出出来たのはめでたいが、ヒカリちゃんの件は情報を集める必要があるな」
「忍者が犯人などたいした手がかりにもならんぞ、まったく…」
「とりあえず俺はグァンちゃんをリーザスに送り届けて、その後はリーザスで情報収集をするつもりだ。そっちはどうするんだ」
「ふむ…シィル、お前パリス学園に入学して情報を集めろ」
「えっ、学校に行かせてもらえるのですか？」
「ふっ…」

急に話を振られたシィルはよくわからない返事をする。しっかりしていると思っていたが、思ったより天然なのか？と考え、ルークは少し笑ってしまった。

「ばか、情報を集めるんだよ、情報を。ヒカリちゃんと親しかった友達などを中心に調べろ」
「はい、わかりました」
「がははは、グァンちゃんの分の２００００ＧＯＬＤは山分けになってしまったが、もう２００００ＧＯＬＤは必ず俺様が全部もらうぞ！」
「まったく、いつから分け前が半分になったんだ…で、ものは相談なんだが、この事件お互いに協力し合わないか？」

「は？いきなり何を言い出すんだ？俺様は男と協力し合う気はないぞ」

「いや、こちらとしては早く救出して親御さんを安心させてあげたくてな。それにそちらは知らないだろうが、この案件いつも以上に急ぐ必要があるぞ」

きっぱりと協力の申し出を断ったランスに対し、ルークは意味深なことを言い出す。

「どういうことですか？」

「ええぃ、もったいぶらずにさっさと急がなきゃいけない理由を話せ！」

協力する気のなかったランスも話の内容は気になったのか、飲み干したグラスを机に強く置き、声を荒げる。

「いや、俺が仕事を受けた段階でラークとノアもこの案件に興味を持っているって話をキースがしていてな。今の仕事が片付いたら間違いなく乗り込んでくるぞ」

「げっ、あいつらか…ノアさんはかわいいから許すが、あの野郎弱いくせに調子に乗りやがって…」

ランスが嫌な顔をするのも無理はない。ラーク＆amp;ノアといえば美男美女コンビとして有名な冒険者で、今までにいくつもの困難な事件を解決してきた強者だ。キースギルド所属の冒険者の中ではトップクラスに名前が売れており、彼らがこの案件を引き受けたら２００００ＧＯＬＤとヒカリちゃんゲットの計画に暗雲が立ちこめる。

「むむむむ…」

「報酬は5：5。お互いにいい提案だと思うがね？」

いつもならば、どうせ俺様が一番に解決すると断っていただろう。しかし、今は本格的に金がないのだ。先の分け前を無理矢理折半に持ち込んだが、１００００ＧＯＬＤでは借りている金を返したら、しばらく遊んで暮らすには心許ない。やはり最低でも２００００ＧＯＬＤは欲しい。それに…

「ぐぬぬぬ…そうだな、今回だけは協力してやらんこともない。ただし、報酬は7：3だ！こっちは2人だからな」

「オーケー。６０００ＧＯＬＤでも破格だし、別にいいぜ。これからしばらくは協力関係だな。仲良くしようぜ」

「よろしくお願いします」

「ふん、男と仲良くする気などないわ」

シィルが返事をする横で、追加できた水割りを飲みながら悪態をつく。ルークは両の手のひらを上にし、やれやれといった姿を取るが、シィルは内心珍しいこともあるものだと思っていた。いくら時間もお金もないとはいえ、あのランス様が男性と組むなんて…と。

ランス自身気づいていなかったが、先の理由以外にもう一つ組んだ理由が存在していた。ランスは、ルークの雰囲気にどこか懐かしさを感じていたのだ。同じギルドに所属していながら顔を合わせるのはこれが初めてで、そんなことがあり得るはずがないのに、以前に感じたことのあるような懐かしさ。その理由をランスとルークが知るのは、かなり先のこととなる…

1週間後

ーリーザス城下町ー

シィルは途中入学の審査に楽々合格し、パリス学園への潜入に成功した。ルークはグァンを家族の元に送り届け、リーザスで情報収集を続けている。そしてランスは二人から遅れること1週間、パリス学園がある王都リーザス城へと到着していた。協力関係だとばれないようにするためである。まずランスが目指したのはパリス学園。潜入調査をしているシィルから情報を聞く手はずとなっているからだ。パリス学園に到着すると、裏口に回った。女子校なので見つかると面倒だからだ。

「シィル…」

裏口に到着すると、ランスは横にいる人にも聞こえないような小さな声でシィルを呼ぶ。3分ほどでシィルが白い学生服を着て現れた。あのような小声でも呼び出せたのは、初級魔法であるリーダーのおかげである。本来相手の考えていることを読む魔法だが、応用すればこのような使い方も出来るのだ。

「お待たせしました」
「遅いぞばか。で、何かわかったか?」
「ヒカリさんですが、学園長のミンミン先生から特別生徒にされていた優秀な生徒さんだったみたいです」
「ふーん、他には?」
「その他は、なにも」
「使えん」
「すいません…あ、私もミンミン先生から特別生徒にしてもらったんですよ」

ランスは嬉しそうに話すシィルを見る。こうして見ると白い服が中々に似合っていてかわいいかもしれない。

「あ、ランス様、この服中々似合っていると思いません？」
「似合わねぇよ、ばか。とりあえずそこの茂みでヤるぞ」

有無を言わさず茂みに連れ込むランス。１週間女を抱いていなかったため相当溜まっていたらしい。

「グッドだ」
「ひどいです、ランス様…」
「しっかり調査しておけよ」

一発抜いてすっきりしたのか、ランスはパリス学園を後にし、中央公園へ向かう。今度はここでルークと落ち合う約束になっているからだ。

「ちっ…少し早く着きすぎたか。ルークの奴、気を利かせて早く来ておけってんだ」
「あの…」

声を掛けられ振り向くと、買い物かごを両手に重そうに抱えた娘が立っていた。

「なんのようだ？」
「おサイフを無くしてしまったの。一緒に探して貰えませんか？」

見れば中々にかわいい娘である。良い事を思いついたと、いやらしい顔をしながら返事をする。

「探してやってもいいが、報酬は？」
「へ？」

「こっちはプロなんでな。報酬がないと働かんぞ。ああ、あんたの身体でもいいな」

サイフ探しにずいぶん大げさなことを言うものである。

「そ…そんな……わかりました…」

顔を真っ赤にしながら、娘は小さな声で言った。これは楽しみだと笑みを浮かべ、どこでサイフを落としたのかを問う。

「あの…この公園なんです」

ランスは公園をぐるりと見渡す。あまり大きな公園でなく、開けた場所でもあるため、サイフが落ちていればすぐに目につくはずだが、見当たらない。

「見当たらんぞ。もう取られたんじゃないのか？」

ランスが振り返ると、そこにいたのはさっきまでの娘だが、服がさっきまでとは違う。黒装束に身を包み、手にはくないとランスのサイフを持っていた。

「ええ、サイフは見つかったわ。ありがとう」

「お、俺様のサイフ…」

「この件からは、手を引いた方がいいわよ。死にたくなければね」

「自分から姿を現してくれるとはな、ずいぶんとお優しい誘拐犯さんなこって」

突然の声に娘が振り返ると、くないが弾かれ、手に持っていたサ

イフも奪われてしまう。

「これは返して貰うぜ」

「くっ…」

娘は懐から煙り玉を出し、地面に投げる。娘の姿を煙が包み、煙がはれる頃には娘の姿は風のように消えてしまっていた。

「おお、ルーク！助かったぞ。まあ俺様一人でもちゃちゃっと取り返せたがな」

「まあ、そういうことにしておいてやるよ」

「しかしあの女、次にあったら絶対に犯してやる！」

出し抜かれたのが相当腹に立ったのか、声を荒げるランス。サイフをランスに返し、ルークはベンチに腰掛ける。

「で、何か手がかりはわかったのか？これで何もわからなかったとか言ったら、報酬は９：１になるぞ」

「勝手なことを…一応有力な情報を手に入れたが…この案件、俺らの想像以上にやっかいなものかもしれん」

「どういうことだ？」

日が落ち、辺りが暗くなってくる。そのせいなのか、あるいは別の理由からか、ルークの表情が暗くなる。

「俺が手に入れたのは、ヒカリちゃんと思わしき女性がリーザス城に連れて行かれるのを見たという情報だ。この案件、リーザスのお偉いさんが関わっているな」

第2話　奇妙な協力関係（後書き）

［人物］

ラーク

ＬＶ　１８／３５

技能　剣戦闘ＬＶ１

　キースギルド所属の冒険者。コンビを組むノアと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

ノア・セーリング

ＬＶ　１５／３３

技能　神魔法ＬＶ１

　キースギルド所属の冒険者。コンビを組むラークと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

キース・ゴールド

アイスの街にあるキースギルドの主。ごつい見た目と違い、その経営手腕は本物である。ランスやルークの過去を知っている数少ない人物である。

グァン・ファン・ユーリィ（オリモブ）

　ヒカリのルームメイト。原作では名無しで、誘拐事件にも巻き込まれない。名前はアリスソフト作品の「零式」より。ファンの方、すいません。

女忍者

　いったい何者なんだ…

［技能］

○○戦闘

その武器での戦闘を得意とする才能。

魔法

攻撃魔法や補助魔法といった魔法を使う才能。

神魔法

回復魔法や浄化魔法を使う才能。

［料理／食材］

へんでろぱ

シチューのような料理。ランスの好物。

うはぁん

高級果物。

ウォッカ

ヘルマン国の地酒。アルコール度数が高い。

第3話　後に語られる出来事

―リーザス城下町―

「だから、通行手形を持たない方はお通しできません」
「ええぃ、いいからさっさと通せ」

ランスは今リーザス城の前にいた。昨日ルークからリーザス城の中にいる可能性が高いという情報を聞いたため、朝から城の中に無理に入ろうとしているのだ。

「それ以上すると捕まえて牢獄に入れますよ」
「げっ…とりあえず戦略的撤退だ！」

その場から逃げ出すと公園でルークと落ち合う。ルークの方はというと、通行手形を手に入れる手段がないか朝から情報収集をしていたのだ。

「強行突破は無理だな。そっちの方は何か手は見つかったか」
「そうだな…それにしても疲れがとれん。若干風邪気味だし。昨晩は誰かさんのせいで街の外で野宿することになったからな」

そう、昨晩二人は街の外で野宿をしていた。それというのはランスが昨晩、一人で宿を切り盛りしているＪＡＰＡＮ出身の奈美という娘に襲いかかり、宿を追い出されてしまったためだ。因みに奈美は柔道五段の持ち主で、ランスはあっさりと投げ飛ばされてしまい、結局手は出せなかった。

「ふん、あれは俺様のせいじゃない。お前が「ＪＡＰＡＮ出身…まさか忍者では…」とか呟くから確かめようとしただけだ」
「…記憶にないな」
「嘘付け！」

思いっきり目をそらしながら答えては、ランスじゃなくてもそう言いたくなる。

「まあ昨晩のことは置いておいて、話を戻そう」
「お・ま・え・が、始めたんだろうが！」
「…通行手形は中々持っている人物が少ないみたいでな、どうやら城下町の住民だと酒場のマスターが持っているらしい」
「なんだ、それなら話は早いな」
「…いい加減ランスの行動パターンも読めてきたが、一応聞いておこう。どうするつもりだ？」
「サクッと殺して奪えばいい。うむ、さすが俺様」
「予想通り過ぎて涙が出てきたよ。まあ、殺すのは別にして、とりあえず酒場に向かうか」

城下町の端にある酒場「ぱとらっしゅ」に向かう。途中買い物していたシィルと出会い、真面目に潜入調査しろというランスの雷が落ちていた。シィルは学園長の頼みと言いかけていたが、問答無用でぐりぐりのお仕置きを受けていた。さすがに不憫である。
酒場に到着し、中に入ると、客は余りおらず、店の中に辛気くさい空気が漂っていた。

「なんだ？繁盛しておらんではないか。これなら殺しても誰からも文句は出ないな」
「文句が出ないかは知らんが、この空気はあのマスターのせいだな。明らかに負のオーラを出している。おかしいな…以前にもこの店は

来たことがあるが、もっと剛胆な性格だったと思ったが…」

二人はカウンターに座り、酒を注文する。ランスが今にも斬りかかってしまいそうなので、どのように話を切り出そうか早急に考える必要があるな、とルークが考えていると、幸いなことにマスターの方から話しかけてきた。

「見た目から察するに、あんたら強い戦士なんだろ？少し頼みがあるんだが…」

「ふん、ゆっとくが俺様は安くな「どういう要件だ？」…おいっ」

せっかくマスターと仲良くなる切っ掛けを自らぶち壊しにしてしまいそうだったので、ランスの発言を遮ってルークは聞き返す。ランスは不満そうだ。

「俺の娘が盗賊にさらわれちまったんだ。救い出して欲しい」

不満そうであったランスが急に真面目な顔になり、口を開く。

「その娘…美人か？」

「全然関係ないよな、今」

「親の俺が言うのもなんだが美人だ」

「答えるなよ、おやじ…しかも親バカかよ…」

ルークの頭が痛くなってきたのは酒のせいではないだろう。風邪が悪化しなければいいが。

「がははは、ならこの俺様と下僕その１に任せておけ。大船に乗ったつもりでいろ」

「誰が下僕だ。盗賊の目撃情報なら情報屋の娘から今朝聞いたぞ。

第3地区の外れだ」
「よし、早速向かってサクッと救出だ！」
「ありがとう、頼んだぞ。ただ報酬はあまり多くは払えなくてな…８００ＧＯＬＤで頼む」
「いや、５００ＧＯＬＤで良い。その代わり通行手形を譲ってくれないか？」
「ん？あんなもんでいいなら良いぜ。最近は城の中にも行かないしな」

これで娘さえ救えば通行手形が手に入る。殺すことにならなくて良かったとルークはほっとする。ランスも美人の娘と聞いて俄然やる気だ。殺そうとしていたことなど、もう忘れているだろう。

―リーザス城下町近辺の洞窟　盗賊団のアジト―

「最近似たような洞窟を拠点にした盗賊を倒したような気が…何か関係あるのか？」
「何ぶつぶつ言ってやがる。お前の独り言は二度と信じんぞ。ここがアジトだな。早速入るぞ…なんだ！？生意気にも結界なんぞ張りやがって、これじゃあ入れないじゃないか！」

ランスが喚く横をすり抜け、ルークは結界に触れる。すると結界はルークに対して無効化されたため、ルークは何事もなかったように結界を抜ける。

「なんだ？なぜお前は入れているんだ？」
「ああ、結界を無効化して入っただけだよ」
「なんだ、お前そんな器用な魔法も使えたのか。では俺様も入ると

するか」

魔法という訳ではないんだが…まあ説明も面倒だしいいか、とルークは自らの結界無効化能力の説明を放棄する。というのも、そもそもルーク自身もこの能力に関してよくわかっていないからだ。防御結界や魔法結界を無視できるなー、便利だなー、程度の認識だ。

「って、入れんではないか！」

「無効化したのは俺だけだからな。結界自体はまだ残ってるから、ランスは入れないぞ」

「ズルだぞ、貴様！これでは美人の女の子を助けられんではないか！俺様も入れろー！」

「大声で騒ぐな、気づかれるだろ…は…はくしょん！！！」

「明らかに俺様の声よりお前のくしゃみの方がでかいだろうが！！！」

ゴゴゴゴゴゴ…

風邪気味のルークがくしゃみをすると同時にアジトに掛かっていた魔法結界が解ける。さすがに呆然とする二人。

「…まさかくしゃみで結界を無効化するとは。俺様が爆裂くしゃみと名付けてやろう」

「違うから。どう考えても偶然くしゃみが結界解除の合い言葉だっただけだから」

随分不用心な結界である。まあ盗賊は深く考えていなかったのだろう。意気揚々と洞窟の中に入っていく二人。洞窟内にはいたるところに燭台が立っており、思ったよりも明るく歩きやすくなっていた。思ったよりもちゃんとした組織かもしれない。そうルークが考

えながら歩いていると、分かれ道になった。左に進むと少し開けた場所に出る。ちょっとした小部屋になっており、奥には岩で出来た階段、部屋の中には白髪の盗賊が一人いた。

「なんだ、てめえら?新しく仲間になりにきたチンピラか?まあいい、俺は盗賊のムララ。奥に進みたきゃ２００ＧＯＬＤ払いな」

侵入者にそんなことをのたまう盗賊。それでいいのかと問いたい。

「あほか、死ねぇぇぇ！！」
「ぎゃーーーー！！」

問答無用で盗賊をぶった切るランスを尻目に、ルークは奥の階段に目をこらした。どうもあの階段にも結界が張ってあるようだ。この盗賊団には魔法使いも在籍しているのだろうか。ランスもルークもガチガチの戦士タイプであり、魔法使いのシィルは今いないため、もし魔法使いがいるとすれば少し面倒だな、と頭を掻く。

「ランス、奥の階段にも結界が張ってあるぞ。俺一人なら先に進めるが…？」
「馬鹿者、美女はこの俺様がかっこよく救わなければならんのだ。解除方法を探すぞ」
「はい、はい…」

二人は部屋の中を軽く見回したが、解除するような仕掛けもなかったため、先ほどの分かれ道に戻り、今度は右へと進んでいく。少し歩くとまた小部屋にたどり着く。棚やベッドが置いてある。どうやら盗賊の詰め所的な部屋らしい。幸いなことに今は中に誰もいない。二人は部屋に入り、結界解除のための手がかりがないかを探す。

「むぅ…特に何も見当たらんな。そっちはそうだ？」
「俺様の方も見当たらん。ええぃ、厄介なことしやがって。絶対に皆殺しだ！」

「おや、盗賊以外のお客さんは珍しいね？」

と、背後から声を掛けられ二人は身構える。ランスとルークという一流の冒険者が、声を掛けられる直前まで全く気配に気がつかなかったのだ。何者だ…ルークの頬に汗が流れる。振り返るとそこにいたのは壁に埋め込まれた赤い髪のおっさんであった。

「焦らせやがって。なんだ貴様は？壁の中にいるとか変態か？」
「僕の名前はブリティシュ。好きで壁の中にいる訳じゃないよ。ここから出して貰えると嬉しいなー」
「結界とは違うな。呪いの類か…？だとしたら出す手段を持ち合わせていないな…」
「そんなー…」

後の歴史に刻まれる出会いとは、得てしてこのようなものである。ブリティシュも、ランスも、そしてルークもそれを知る由もないが、この出会いは後に人々の間で語り告がれ、教科書にも載るような出来事となる。

ＬＰ０００１　８月　二人の英雄がかつての英雄と出会う　…と。

第3話　後に語られる出来事（後書き）

［人物］

ブリティシュ

ＬＶ　５０／１００

技能　剣戦闘ＬＶ２　盾防御ＬＶ２

　リーザスの近くにある盗賊団の洞窟の壁に埋め込まれている男。その正体は、今より１５００年ほど前にエターナルヒーローと呼ばれるパーティーを率いたリーダーであり、英雄と呼ばれていた。魔法使いシンの禁呪を受け、壁に埋め込まれる。新陳代謝が殆ど無くされており、そのために長寿となる。壁の中での長い年月を経て精神を病み、かつて英雄と呼ばれていた頃の面影はない。

堀川奈美

　リーザス城下町の宿「あいすくりーむ」を一人で切り盛りする苦労人。柔道五段。

ムララ

　かぎりない明日戦闘団の構成員。本編ではランスが初めて戦う中ボス的な扱い。しかし、洞窟内を歩いているいもむしＤＸより弱かったりする。

［技］

リーダー

　対象の思考や情報を読む初歩魔法。複雑な思考やシールドをされていると読むことが出来ない。

［その他］

エターナルヒーロー

１５００年前に魔王ジル討伐のために集まったパーティー。過去から現在に至るまで、これほどの者たちで構成されたチームは無かったという。構成員は戦士ブリティシュ、魔法使いホ・ラガ、神官カフェ、侍日光、盗賊カオスの五人である。ＧＬ０５３３年、その消息を絶つ。

ＧＯＬＤ

この世界の通貨単位。１ＧＯＬＤは約１００円。モンスターの間では、キラキラ光ってきれいなこれを多く持っていると幸せになれるという伝説があり、モンスター同士で取り合っており、強いモンスターほど多くのＧＯＬＤを持っている。

年号

創世記

Ｋｕｋｕ０００１～２０１４　魔王ククルククルの時代

ＡＶ０００１～０７２１　魔王アベルの時代

ＳＳ０００１～０５００　魔王スラルの時代

ＮＣ０００１～０９６０　魔王ナイチサの時代

ＧＬ０００１～１００４　魔王ジルの時代

ＧＩ０００１～１０１５　魔王ガイの時代

ＬＰ０００１～　魔王リトルプリンセスの時代

第４話　決戦！かぎりない明日戦闘団

―盗賊団アジト　最奥の部屋―

「ふへへへ、おら、もっと良い声を上げな」

「いや…もうやめて…」

部屋の中では４０才前後と思われる男が少女を犯していた。この男が盗賊たちのリーダー、名をライハルトと言う。周りには部下と思われる盗賊が五人。その内の四人も他の少女たちを犯している最中であった。その光景を若干冷ややかな目で見ているのは、盗賊団唯一の女性構成員だ。

「これだから盗賊家業はやめられねぇな。お前らも楽しんでいるか？」

「ええ、最高ですぜリーダー。かぎりない明日戦闘団に入って良かったですぜ」

「（…何が最高なもんか。貧しい人たちに盗んだものを分け与える正義の盗賊団だとか言われて入ってみれば、中身はただの下衆な盗賊団。さっさと抜けたいが、感づいているのかしっかりとあたしの行動を見張ってやがる…）」

女盗賊が不満そうにしているのを無視し、他の盗賊はご機嫌に話し合う。

「そうだな、俺の作ったこのかぎりない明日戦闘団は最高だ！その内せかいを股に掛けるぜ！」

「おお、さすがですぜ、リーダー！」

「残念だがそんな日は永久に来ないな」

部屋の入り口から声を掛けられ、全員が入り口の方を見る。そこに立っていたのは戦士二人。ランスとルークだ。二人はブリティシュを解放する手段がなかったため、ひとまず彼と別れたのだ。その際、いつか必ず助けに来るとルークが約束すると、ブリティシュは感謝し、階段の結界を無効化する靴の場所を教えてくれたのだった。靴は一足しかなかったが、ルークは自分で無効化できるため、こうして奥の部屋までたどり着いたのだった。

「なんだてめぇら、どうやってここまできた！」
「答える必要はないな。その娘たちを解放して貰おうか」
「面白いことを言うな。俺の機嫌のいい内にさっさと帰りな」

ルークは部屋を見回す。捕まっている娘は一人ではなかった。中にはまだ年端もいかない少女もいた。そのような少女も盗賊たちはお構いないようで、部下の一人が丁度犯している最中だった。そのことに静かに怒りを燃やす。

「まあ…こいつらに生きている資格は…ないな」
「当たり前だ。世界中の美女は全て俺様のものだ。あの少女も将来的には美人になっただろうに…むかむか」
「調子に乗るなよ、やっちまえてめぇら！！！」

そうリーダーが声を上げると、近くに控えていた部下たちが襲いかかってきた。

「俺様はあのリーダーを殺る。雑魚は任せたぞ」
「ボス一人と部下五人…さり気なく楽な方を選びやがって…しっか

りと殺せよ」
「当たり前だ、お前の方はちゃんとあの女盗賊だけは生かせよ。中々に美人だからな」
「善処する」

そう返事をし、ルークは部下五人と対峙する。部屋の中にいた場所が悪く、部下はリーダーに向かうランスの間に割ってはいることは出来なかった。一対一と五対一の構図が完成する。

「バカが、五対一で勝てると思っているのか？」
「随分無謀な男もいたもんだね…悪いけど死んで貰うよ」
「ご心配どうも。が、複数人を相手にするのは割と得意でな」

部下の中に魔法使いと思われる者がいなかったことに内心ほっとする。負けはしないだろうが、やはり戦いづらくはなるからだ。入り口や階段の結界はどこかで盗んできた魔法製品で張ったのだろう。そう考えながら、ルークはロングソードを逆手に持ち、腰を少し落とす。盗賊たちは何かする気かと身構えるが、まだ振り抜いたところで当たる距離ではない。そのまま突っ込んでくる気だろうか、と女盗賊は考えていると予想外の事が起きた。ルークはそのまま剣を左から右に横払いで振り切ったのだ。当然剣は空を切る。

「なんだぁ、射程もわからねぇ素人か？」
「恐怖の余り訳わからなくなってるんじゃねぇか？」
「なるほどな。ぎゃはははは…ん？」

大声で笑っていた男は不意に違和感を覚え、自分の身体を見る。おかしい。なぜ俺の上半身と下半身がずれ…。男の意識はそこで永久に途絶えた。周りの盗賊たちの目が、驚愕で大きく開かれる。

「「「「なっ！！！！」」」」
「…真空斬」

自らの放った技の名前を言い、再び構える。今の男を一番先に殺したのにも理由がある。他の盗賊は短剣装備だが、この相手だけ斧を装備していたのだ。二発目の準備をしているのを察し、盗賊たちから血の気が引く。

「あれを使わせるな！突っ込めー！！」
「ふん、技を放つ手間が省けたな」

焦った盗賊たちが迫ってくるのを見て、ルークは素早く真空斬の構えを解き、初めに迫ってきた盗賊を斬り伏せる。長剣と短剣だ、リーチの差がありすぎる。その盗賊は何も出来ないまま倒れ込む。正面の男が倒れきるとほぼ同時に、左右から二人目の男盗賊と女盗賊が攻撃を仕掛けてくる。男盗賊の短剣を剣で防ぎ、女盗賊の攻撃は肩だけで避けながら、彼女の腹に蹴りを入れる。

「がっ…」

女盗賊が倒れ込む際、その手に持っていた短剣を左手で奪い取ると、右の男盗賊に向かって斬りつける。頸動脈を捕らえたようで、ぐぁ…と声にならない声を上げながら、血飛沫を上げそのまま崩れ落ちる。

「くっ…くそっ！！」

他の三人と違い、命令するだけで自分は襲いかかってこなかった盗賊がいた。ルークは知らないが、この男が副リーダーだったのだ。典型的な上から命令するだけの臆病で無能な男。ようやく腰から短

剣を抜き、身構えるが…

「遅い！」

盗賊が気づいた時には既に目の前に短剣が迫って来ていた。ルークが左手に持っていた短剣を投げたのだ。その刃はそのまま盗賊の額に突き刺さり、その手から腰から抜いたばかりの短剣がこぼれ落ちる。

「ぐっ…命乞いはしない。殺せ…」

腹を押さえながら倒れ込んでいる女盗賊が呻く。

「悪いが殺すつもりはない。あんただけさっきの反吐が出る乱交に参加していなかったからな。女…というのもあるだろうが、あいつらを見る目が明らかに下衆を見る目だった」

「それだけの理由かい？一応あたしも盗賊だよ。ある程度の悪行はしてきている」

「別に時代が時代だからな。盗賊それ全てを否定する気はない。俺ら冒険者も、一歩間違えれば似たようなものだからな」

独自の考えを女盗賊に向かってしゃべると、ふと目を細め若干のさっきを含めた口調になる。

「もちろん…彼女たちの解放を邪魔しようとするなら別だがな」

「いや…邪魔する気はないよ。あたしらの負けだし、ああいった誘拐は正直不本意だった」

「良識があるようでこちらも助かる」

「名前…聞いても良いかい…？」

「ルークだ。あんたは？」

「シャイラ…シャイラ・レスだ」
「良い名前だ。そういえば、ランスはどうしたかな」

目の前の戦いに集中していたルークもシャイラも、ランスとリーダーの戦いに気を向けていなかった。二人が戦っていた方向を見ると、盗賊団のリーダーであるライハルトは既に床に倒れ伏し、命ない肉塊となっていた。その少し奥でランスは先ほどまでライハルトに犯されていた少女を無理矢理犯していた。

「「お前なにしてんだーっ!!」」
「見てわかるだろう、ナニだ!がはは、グッドだ」
「ううっ、助かったと思ったのに…」
「何を言う。しっかりと助かっているではないか。これはその分の報酬だ」
「無理矢理報酬を貰うな。さて、娘たちを解放しないとな。酒場の親父の娘さんも捜さないと…」
「あっ…それなら、私がその娘です…んっ…」
「おお、君があの親父の娘か。確かに言うとおりの美女ではないか、がはは」

偶然にもランスが犯していた少女が酒場の娘だった。名前はパルプテンクス。あの親父、どんなネーミングセンスだ。ランスがお楽しみの間に他の娘たちの鎖を解き、ようやく事を終えてランスから解放されたパルプテンクスも加えてリーザスに戻ることにした。

「俺は彼女たちを連れて先に戻るが…何でこの洞窟に残るんだ、ランス?」
「ふっ…少しやり残したことがあってな。案内に彼女を置いておいてくれればいい。後で向かうから酒場で待っていろ」
「まあ案内くらいいいけどな…だがこのアジトはたいしたものは置

いてねーぜ」

ランスはシャイラを指し、シャイラがそれに答える。娘たちを早く家まで送り届けてあげたいという思いから、ルークは特にその内容は聞き返さず、先にリーザスへと向かう。結論から言うと、ルークとシャイラは見誤っていた。ランスの性欲をだ。ランスと二人で残ることの危険性は考えていたが、先ほどまでパルプテンクスを犯していたのだ、まさかな…と。ルークが洞窟から出ていったのを見送ると、ランスの目が怪しく光る。

―リーザス城下町　酒場「ぱとらっしゅ」―

「あんたらなら娘を救ってくれると信じていたよ、ありがとう」
「もう一杯どうぞ。このブランディ、おいしいのよ」
「確かに飲みやすいな」

カウンターでルークは親娘と会話しながらランスを待っている。助けてくれたお礼の通行手形は先ほど貰い、今飲んでいる酒もサービスだ。

「あんたを気にいっちまった。どうだ、俺の娘を貰ってくれないか？」
「もう、お父さんたら…変なこと言わないで」

冒険者をやっていればこの手の話はたまに出る。慣れたように断りの言葉を入れようとするルークだが…

「それに私…ランスさんの方が…」

さすがに今の発言にはへこんだ。おかしい。さっきまでの洞窟での流れのどこにランスに惚れる要素があった。納得がいかない顔で酒を飲んでいるとようやくランスが到着した。

「あ、ランスさん。先ほどはありがとうございました」
「がははは。何、パルプテンクスちゃんもグッドだったぞ」
「ぽっ…」
「遅かったな。洞窟でいったい何をしていたんだ?」

ルークは顔を赤らめるパルプテンクスに対し、「ぽっ…じゃねーだろ!」と心の中で突っ込みながらランスに問う。

「決まっているだろう、ナニだ!」
「…はっ?」
「シャイラちゃんの身体はグッドだったぞ。おっぱいもでかかったし。がはは」
「ちょっと待て…まさか、やり残した事っていうのは…」
「ああ、シャイラちゃんを抱いていなかったからな。涙を流して喜んでいたぞ」
「どう考えても歓喜の涙じゃないだろ、それは!」
「まあ別れ際に「必ずいつかぶっ殺してやる」とは言ってたがな」
「超恨まれてるじゃねーか!」

頭を抱えるルーク。せっかく円満に終わったと思っていたのに、と嘆いていると…

「因みにお前も含まれてたぞ。「先に帰ったルークの野郎も絶対殺す!」とか言ってたし」
「理不尽だ!!」

酒場にルークの声が悲しく響いた。

第４話　決戦！かぎりない明日戦闘団（後書き）

［人物］

ライハルト
ＬＶ　７／１２
技能　シーフＬＶ１
　かぎりない明日戦闘団リーダー。装備は大鎌。本編では一応初ボスに当たるが、まず負ける相手ではない。

シャイラ・レス（オリモブ）
ＬＶ　３／２５
技能　剣戦闘ＬＶ１　シーフＬＶ１
　かぎりない明日戦闘団の女盗賊にして唯一の生き残り。本編では名無しの女盗賊で、本作同様再登場フラグとも思える言葉を発して去るが、その後２２年間音沙汰がない。きっともう出ない。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。本作での再登場の予定は一応あり。ファミリーネームを変えたことにはきっと意味がある。

パルプテンクス
　リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主の娘。ランスに好意を抱く。

「ぱとらっしゅ」の親父
　リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」の店主。意味もなく飲み代を無料にしたりと随分気っぷの良い親父だが、ネーミングセンスはない。

［技能］

シーフ
盗賊としての才能。手癖の悪さともいえる。

［技］
真空斬（オリ技）
使用者　ルーク
剣に溜めた闘気を相手へ飛ばす必殺剣。威力は普通の斬撃と変わらず、ある程度の実力者ならその軌道を読み防ぐことは出来る。風邪気味じゃなく、しっかりと集中できれば連発も可能。後衛にも攻撃できるため、ルークはこの技を重宝している。

［料理／食材］
ブランディ
ポピュラーな酒。よく使われるブランデー表記でないのはアリソフトのこだわりと言えるだろう。「ぽすちゃC」ではブランデー表記だった気もするが。

［その他］
かぎりない明日戦闘団
リーザス近辺で活動をする盗賊団。ランスとルークの活躍で壊滅した。

第5話　恐怖

ーリーザス城下町　パリス学園ー

「という訳で俺様たちはこれからリーザス城に入る。しっかりと調査を続けていろよ」
「はい、わかりましたランス様」

パリス学園の裏口でランスとシィルとルークの三人が落ち合っていた。お互いの情報の確認と今後の動き方を決めているところだ。

「しかし…まさかヒカリちゃんが初めてではないとはな…」
「そのようです。パリス学園ではこの４年間、毎年生徒が１人行方不明になっていました」
「学園の教師が怪しいな、その辺はしっかりと調べたのか？」
「はい、悪いとは思いましたが一応リーダーの魔法で心を読ませていただいたのですが…特にこれといって情報はありませんでした」
「深いところまで読み取れる魔法ではないからな…潔白と決まったわけではないが…」
「あ、一つ気になることがあります」
「なんだ？さっさと言え」
「生徒で一人だけ心を読めなかった女性がいるんです。恐らくシールドの魔法を掛けているのだと思います」
「普通のお嬢様生徒がか？用心のために親がやった可能性もあるが怪しいな。良い情報だぞ、シィルちゃん」
「えへへ…」
「よし、シィル。その生徒をマークしろ」
「わかりました。ランス様とルークさんもお気をつけて」

「ああ、ありがとう」

シィルと別れ、二人はリーザス城へと向かった。

―リーザス城―

ルークは驚いていた。ランスの強運にだ。門番に通行手形を見せると中に入れて貰えたので、まずは城に併設されているカジノに入ると、そこで「牢屋にどこから来たのかわからない女性が捕まっている」という情報を聞きだした。その情報を確かめるため、二人はリーザス城に潜入していた。どう牢屋に潜入したものかとルークが真剣に考えている横で、ランスはリーザス城のメイドたちを犯しているだけだった。が、その行動が全て良い方向に行くのだ。掃除をしているメイドを犯せば城の奥に入れるようになる鍵が手に入り、こっそりパンを盗んでいたメイドを犯せば牢屋の鍵が手に入るのだ。こいつは天から愛されている、と真面目に牢屋への潜入を考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。いや、だが牢屋の鍵を手に入れたはいいが、牢番が必ずいるはず。見つかれば潜入していることがばれてしまう…どうしたものか。

「何ぐずぐずしている。さっさと行くぞ」

「おい、間違いなく牢番に見つかるぞ。考えなしに突っ込むな！」

ランスは何も考えずに牢屋がある部屋の扉を開けてしまった。焦るルークだが、その目に入ってきたのは居眠りをしている女性牢番だった。

「なんか…どうでもよくなってきたな…」

「訳の分からんこと言ってないで行くぞ」

牢番の横を通り、鍵を使って牢を開けるとそこには一人の少女がいた。髪の色は青く、ヒカリではない。

「大丈夫か？君の名前は？」

「…ユキ・デルです…」

「なぜ牢獄に捕まっているんだ？何かしたのか？」

「…王女様に…無理矢理…」

「王女だと？王女が君をこんなところに入れたのか？」

「…すいません、忘れてください…そうでないと、また私…」

そう言って黙り込んでしまうユキ。その瞳はすでに人生を諦めてしまっているように見えた。助け出してあげたいところだが、鎖につながれており簡単には連れ出せない。それに、ここで鎖を斬って助けてしまうと潜入がばれてしまい、今後動きにくくなってしまう。因みにランスが犯したメイドたちはなぜか二人とも報告する気はないようだった。納得がいかん。

「すまない…今の俺たちは君を助けることが出来ない。少しだけ待っていてくれ、必ず君を解放してみせる」

「がははは、俺様に任せておけ！」

「…」

牢を後にする二人。部屋を出る直前、牢番が目を覚ましたようだが、「なんだぁー…勝手に入ってきちゃ駄目にゃんだじょー…」とか明らかに寝ぼけていたので無視した。

「まさか王女が誘拐に関わっているとはな…本格的にやばい案件だな」

「これでは２００００ＧＯＬＤでも割に合わんな。うむ、救出したら報酬を釣り上げよう」
「って言いながら部屋に勝手に入るな。誰かいたらどうするんだ！」
またもランスが勝手に行動してしまう。目の前の部屋の扉を勝手に開けてしまい、運の悪いことに部屋にいた女性に見つかってしまう。
「誰、健太郎くん？あれ、違う人みたい」
瞬間、ルークは全身の毛穴から汗が吹き出すのを感じた。そこにいたのはピンクの髪のおとなしそうな少女。どこからどう見ても普通の女の子で、ルーク自身なぜ彼女にここまでの畏怖を抱くのかがわからなかった。しかし、確かに感じる。コイツは…やばい…
「じーっ」
「がはは、俺様がそんなに美男子だからって、そう見つめるな」
「健太郎君のほうがかっこいいもん。それで、おじさんたち誰？」
「おじっ…」
ランスはルークの異変に気づかず、普通に少女と話を続ける。
「がはは、君はかわいいな。とぉー」
「きゃっ！」
唐突にランスが少女のスカートをめくる。白いパンツがあらわになり、ランスはご満悦だ。少女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてる。
「えっちー！」

少女の叫びと同時に、ルークは頭に浮かんだのは死のイメージ。その直後、二人を突風が襲い、部屋の外に叩き出された。壁に打ち付けられる二人。特に大きなダメージはないが、突風が起こった理由がわからず、ランスが呆然としている。

「いててて、今のはいったい何だ？」
「ランス…行くぞ…彼女に、それ以上構うな…」
「おい、勝手に行こうとするな。ええい、こら、待て！」

ルークがこの場を立ち去ろうとすると、ランスは文句を言うが、さっきの突風が多少気に掛かってはいたのか、素直に後についてくる。

「（今は、少しでも早くあの少女から離れなければ…なんなんだ、アレは…）」

―リーザス城　カジノ―

「がははは、赤の5番で大当たりだ！さあ、脱いで貰おうか、葉月ちゃん」
「あーん、おかあさーん」

がむしゃらにあの場を立ち去って、二人はカジノに来ていた。ランスはのんきに奥で脱衣ルーレットをやっている。エロい顔をした男どもがその様子を眺めていて、ちょっとした人だかりが出来てしまっていた。

「（ふう…ようやく落ち着いたな…なんだったんだ、あれは…以前にあの森で彼女の実力を見せて貰った時にもあんな恐怖は感じなかったぞ…）」

ルークは心を落ち着けながら、かつての森での生活を思い出す。彼女は元気にしているだろうか…。すると、不意にカジノの店員が話しかけてきた。青い髪の美しい女性だ。

「お客様、先程から顔色が悪かったですが大丈夫ですか？」
「ああ、心配掛けてすまない。大丈夫だ…ん？失礼だがお名前を聞いても良いかな？」
「ふふ、新手のナンパですか？アキ・デルと言います」
「デル…やはりそうか。もしかして、ユキと言うのは君の近親者か何かかな？」
「！！あなた、ユキ姉さんを知っているの！？ユキ姉さんはどうなったの！？」
「ああ。気持ちはわかるが、少し落ち着いて聞いてくれ。彼女は牢屋に捕まっていた」
「そう…まだ牢にいたのね…早く保釈金を稼いで助け出してあげないと…」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、アキは呟く。

「いったい何があったんだ？彼女はなぜ捕まっている？」
「姉さんは何もしていないのに、王女様に反乱を企てたとして捕まってしまったの。姉さんが…姉さんがそんなことをするはずがない！！」

彼女の悲痛な叫びを聞いて、ルークは一つの決意をする。アキは懐から石を取り出し、ルークに手渡す。

「もし…ユキ姉さんのもう一度会うのなら…これを渡していただけませんか？」
「これは？」
「私たちの家に代々伝わるやすらぎの石です。この石が…少しでも姉さんの心をやすらげてくれれば…」
「…任された。必ず姉さんに渡しておくよ」
「ありがとうございます。それと、これは少ないですお礼です」

アキはサイフからＧＯＬＤを出そうとするが、ルークはそれを制止する。

「それは貰えないな…それと、保釈金を稼ぐためとはいえ無理に働きすぎては駄目だぞ」
「でも…少しでも早く姉さんを助け出してあげないと…」

そう言い残し去ろうとするルークに、アキは小さい声で反論する。それを聞いて、ルークは彼女に一度だけ振り返り、口を開く。

「大丈夫、姉さんはもうすぐ帰ってくるよ。約束する」

騒がしいカジノの中で、ルークのその力強い言葉が、アキの心に大きく響いた。

―リーザス城　客間―

その少女は椅子に腰掛け、足をぷらぷらとさせながら、愛しの彼がはんばーがーを買って戻ってくるのを待っていた。頭に浮かぶの

は先ほどのおじさん二人組。スカートをめくられたのは口が大きいおじさんだったが、彼女が今考えているのはその奥にいた黒髪の顔の整ったおじさんのほうであった。

「あのおじさん…初めて見る人だよね。なんかいやな感じがしたな一。なんだろう？」

そう独りごちる。ルークほどではないが、彼女も何かを感じていたのだろう。

「んー、そろそろリーザスからも離れなきゃだめかな一。結構この国好きだったんだけどな一。健太郎君が戻ってきたら相談してみよっと」

そう自分の中で決意したところでお腹が鳴る。はんばーがーはまだかな、お腹すいたな、と悲しそうな顔をする彼女は、やはりどこからどう見ても普通の少女にしか見えない。彼女の名は来水美樹。しかし、彼女にはもう一つ名前がある。その名を…

「あーあ…魔王になんか…なりたくないのに…」

魔王リトルプリンセス

第5話　恐怖（後書き）

［人物］

来水美樹

ＬＶ　１／∞

技能　魔王ＬＶ１

　現在の魔王。魔王名は「リトルプリンセス」。元々は異世界で暮らす中学二年生だったが、先代魔王ガイにこの世界に連れてこられ、魔王にされる。魔王になりたくない彼女は、追ってきた恋人の小川健太郎と共に、大陸中を逃げ回っている。

ユキ・デル

　謀反の冤罪を掛けられ、投獄された女性。投獄前は妹と一緒にパン屋をやっていた。

アキ・デル

　姉の保釈金を稼ぐためにカジノで働く女性。勝ち気な見た目とは裏腹に、姉思いの優しい女性。ランスクエストに出なくて泣いたのは筆者だけではないはず。デル姉妹大好きです。

甲州院葉月

　リーザス城カジノ店員。脱衣ルーレット担当。的中率１／１０で配当３．６倍。

お掃除メイド

　リーザス城メイド。お掃除に情熱を掛けている。

パン盗みメイド

　リーザス城メイド。手癖が悪く、常にパンを盗んでいる。お掃除

メイドと共に、ランスクエストにて２２年ぶりの再登場を果たす。
ＣＧ出た瞬間に喚起でうぉぉぉ！と叫んだのはきっと筆者だけ。

リーザス城門番
　通行証をチェックする女の子門番。ちゃんと仕事しているほう。

リーザス城牢番
　牢屋を見張る女の子兵士。仕事していないほう。牢番ェ…

［技能］
魔王
　魔王のみが保有する技能。二級神をも上回る力を手にする。

［アイテム］
やすらぎの石
　持っていると心がやすらぐ。没落貴族であるデル家に代々伝わる家宝。

［料理／食材］
はんばーがー
　美樹が健太郎にパシらせていた料理。

第6話　トーナメント

―リーザス城　牢屋―

その女性は、城を出ることを既に諦めていた。身に覚えのない罪で投獄され、王女に汚されぬいた。余計なことをしゃべれば殺すとも言われた。その彼女の心を未だに繋ぎ止めていたものは、かわいい妹の存在であった。アキに…出来ることならもう一度会いたい…

ギィッ、と牢のドアが開く。ああ、また王女が来たのであろうか。そういえばさっきは見かけない男が二人ほど来ていたが、あれはなんだったのだろうか。既に誰と話したのかさえおぼつかなくなってきてしまっている。

「どなた…ですか…」

「ただの冒険者さ。妹のアキさんから頼まれたものを届けに来た」

「えっ…」

アキという言葉にぼやけていた意識を取り戻す。よく見れば、先ほども来た二人の冒険者がそこに立っていた。

「アキに…会ったんですか…」

「ああ、これが妹さんからの預かりものだ。受け取ってくれ」

ユキはやすらぎの石を受け取る。ぐちゃぐちゃに汚されていた心が、落ち着きを取り戻していく。涙が流れるのを止められない。

「アキ…ありがとう…」

ふと、冒険者が後ろにいたもう一人の男に声を掛ける。

「ランス…先に謝っておく…すまん」

「ん？」

言うやいなや、冒険者は持っていた剣を振り抜いた。ユキの足に繋がれていた鎖を叩き壊したのだ。

「えっ…どうして…」

「「ぱとらっしゅ」という酒場は分かるな？そこの親父に既に話を通してある。二、三日の間そこに隠れていてくれ」

突然の出来事に思考が追いつかない。この人は私を助けてくれたのか。なぜそんなことをする。それに、私が抜け出せば城は大騒ぎになる。

「大丈夫。大騒ぎにはならないし、すぐにまた妹さんとも暮らせるようになる」

「どうして…ですか…」

「すぐに…全てを終わらせるから」

そう言って優しく手を引いて立ち上がらせてくれる。まともに歩くのは久しぶりなため、足下がおぼつかない私を見て、そっと肩を貸してくれる。

「さあ、行こう」

「お名前…聞かせていただいてもいいですか…？」

「ルークだ。妹さんと仲良くな」

―リーザス城　コロシアム―

「悪かったな…これで今後は動きにくくなる」
「ん？ユキちゃんが助かったんだ、何も問題はあるまい。がはは」

そう言って笑い飛ばすランス。器がでかいな、とルークはランスを少し見直していた。同時にランスもルークの思わぬ熱い一面が見られ、少しルークの見方を変えていた。

「ああ、つまらないわ、みんな弱い人ばかりで！」

不意にそんな言葉が聞こえてきた。声のした方向を見てみると、黄金の鎧をつけた女戦士がいた。

「最近の男はだらしないわね。闘ってもまるで張り合いがない」
「おい貴様、少しばかり生意気だぞ！俺様がお仕置きしてやろうか？」

女の発言に気を悪くしたランスは、怒り心頭で女戦士に突っかかっていく。

「あら？あなたなら私に勝てるって言うの？」
「その通りだ」
「自信満々なのね。それなら、このコロシアムで私と勝負しない？あなたのその自信、打ち砕いてあげるわ」
「むかむか、いいだろう！ただし、俺様が勝ったらヤらせてもらうぞ！」
「私が負けるわけないけど、勝ったらね」
「よーし、その身体もらった！」

「ふっ…戦いは明日のトーナメントで。しっかりと申し込んでおきなさいよ。楽しみにしているわ」
「ふん、身体をきれいにして待っているんだな。そういえば貴様の名前は？」
「ユラン・ミラージュ、このコロシアムのチャンピオンさ！」

―リーザス城下町　酒場「ぱとらっしゅ」―

「へー、それでランスさんは明日のトーナメントに出ることになったんですね」
「ああ、今受付に行っている」

ルークはパルプテンクスと話しながら、酒を飲んでいる。トーナメントの申し込みに時間が掛かりそうだったので、ランスを置いて先に酒場に来ていたのだ。

「親父さん、悪かったな…無理を言って…」
「なーに、良いって事よ！パン屋のユキちゃんを救ってくれたんだからな！二、三日と言わず一生住み着いてくれてもいいくらいだぜ」
「そうですよ、気になさらないでください。ユキさんは私の部屋で寝ています。よっぽど安心したんでしょうね。気持ち…少しですが分かりますし…」

この親娘は本当にいい人たちだ。言葉にするとまた何か言われてしまうので、心の中で感謝をしていると、申し込みを終えたランスがやってきた。

「がははは、申し込み完了だ！これで明日の試合に参加できるぞ

！」
「お疲れ様です。どうぞ、まずは一杯」
「おう、ありがとうなパルプテンクスちゃん」
「ぽっ…」

もうこの状況になれてしまったルークは特に突っ込まず、酒の追加を親父さんに頼む。考えるのは明日、自分がどう動くかだ。ランスがトーナメントに出ている間、自分だけ何もしないわけにはいかない。しかし、城に潜り込むのはもう無理だろう。

「でも…ユランさんは強敵ですよ？大丈夫ですか？」
「そうだな、本人が望めばリーザス軍の副将くらいにだったら十分なれるって評判だしな」
「ふん、俺様の相手ではないわ」
「そうですね、ランスさんは無敵ですものね！」
「がはははは！！」
「あんまりつけあがらせないでくれ、足下掬われるから…」
「ユランの必殺技は幻夢剣っていってな、ありゃすげー技だぜ。でも以前酒場で飲んでた奴が、ヒララレモンを鎧に塗っておけば滑って当たらないとか言っていたような」
「む、それは本当だろうな？親父、ヒララレモンをよこせ」
「相手ではないと言っておきながら万全を期す。戦士の鏡ですね、ランスさん！」
「もう勝手にやっててくれ…」

パルプテンクスに煽られてどんちゃん騒ぎを始めたランスを見て、さすがにルークは呆れる。器がでかいんじゃなくて、何も考えてないんだな、多分。

「明日の試合に控えて早めに寝ておけよ。で、俺は明日もう一度城

下町で聞き込みをしようと思っている」
「ん？何を訳の分からんことを言ってるんだ？」
「は？」
「明日はお前もトーナメントに参加だぞ。定員が３２人で俺様が３１人目だったから、気を利かせて申し込んでおいたぞ。感謝しろ」
「何勝手なことしてくれてんだ！！」

ー深夜　リーザス城　とある部屋ー

「…ユキの動向は？」
「…まだわかっていません」
「…あの牢番はクビにしておきなさい。ユキと侵入者を急いで捜すこと。いいわね」
「…はっ！」
「…ふふ、誰に喧嘩を売ったか教えてあげないとね」

ー翌日　リーザス城　コロシアムー

「ふんっ！」
「なぜだ…なぜハニワ神は私を見捨て…ぐふっ」
「それまで！ルーク選手の勝利です。ハニーフラッシュの使い手であるおたま男選手を破り、堂々の準決勝進出です！」

司会者がそう言うと観客席から歓声が沸く。これで準決勝へと駒を進めた選手は三人。ランス、ユラン、そしてルークだ。ルークは出場者用の観覧席に戻っていく。

「ふん、時間を掛けすぎだ！退屈でしかたなかったぞ」
「労いの言葉くらいかけられんのか」

戻るやいなや文句を言ってくるランス。ランスは一回戦でサイボーグ戦士であるフブリ・松下を、二回戦でくぐつ伯爵を、そして先ほど巨人のこんごを破り一足先に準決勝行きを決めていた。

「その退屈はすぐに終わるさ。次は私とだからね」
「ふん、もうすぐ貴様は俺の女だ」

ユランが話しかけてくる。彼女も危なげなく準決勝行きを決め、次のランスの対戦相手だ。ルークは会場に視線を戻す。今は準々決勝最終試合の最中で、赤髪の男剣士と赤髪の男武闘家が闘っていた。

「次の俺の相手は武闘家かな」
「まあそうなるだろうね。あっちの若い坊やとはモノが違うよ」

そう話しているとほぼ同時に武闘家の拳が剣士の顎に入り、武闘家の勝利が決まった。

「それまで！アジマフ選手、惜しくもここで敗退です！遂に残すところはあと三戦、果たして誰が優勝という名誉とリーザス軍武将とのエキシビションマッチの権利を得るのでしょうか？司会は私、シュリ・セイハジュウ・ナガサキが引き続きお送りします」

会場がまたも沸き立つ。どうやら貰えるのは名誉と挑戦権だけで、優勝賞品はないらしい。名誉や挑戦権などどうでもいいルークは先ほどまで棄権しようかとも思っていたのだが、今の武闘家を見て心変わりしていた。あいつと…手合わせしてみたいな、と。

「我らが偉大なチャンピオン、ユラン選手か？」
「あの巨人のこんご選手すらねじ伏せた剛剣の使い手、ランス選手か？」
「華麗な剣技でここまで無傷で勝ち上がってきた柔剣の使い手、ルーク選手か？」
「あるいは…」

司会者の女性が会場をさらに盛り上げる。それに呼応するように、会場は興奮のるつぼと化している。そのとき、先ほど勝ち上がった武闘家が部屋に戻ってきてルークと目が合う。挑発しているわけではないが、その目が互いに語っている。負ける気はないと。

「大陸を旅する武闘家、アレキサンダー選手か？準決勝、まもなく始まります！」

第6話　トーナメント（後書き）

［人物］

フブリ・松下
　トーナメント出場者。身体全体の内、６０パーセントが機械化しているサイボーグ戦士。

くぐつ伯爵
　トーナメント出場者。脳をえぐるのが最高の楽しみという、恐ろしい男。

こんご
　トーナメント出場者。トロール殺しの巨人で、身長は2メートル６０。

おたま男
　トーナメント出場者。なぜか人間なのにハニーフラッシュを使える。

アジマフ・ラキ（オリモブ）
　トーナメント出場者。準々決勝でアレキサンダーに敗れた若き戦士。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

シュリ・セイハジュウ・ナガサキ（オリモブ）
　コロシアムの受付兼司会者。大会と言えばこの人。年齢は不明。名前はアリスソフト作品の「闘神都市」シリーズより。

［技］

ハニーフラッシュ
使用者　ハニー族　おたま男
　ハニー族が顔の穴から放つ衝撃波。防御力無視、絶対命中という厄介な技。

［料理／食材］
ヒララレモン
　柑橘系の果物。別名ヒラミレモン。日常的に料理によく使われるが、値段は高価。一つ２００ＧＯＬＤが相場。

第7話　惹かれあう強者たち

―リーザス城　コロシアム―

「はっ、想像以上だよ！私の剣をここまで防いだ男は初めてだ！」
「ふん、当然だ。ええぃ、俺様の攻撃を避けるんじゃない！」
「嫌なこったね！」

舞台では準々決勝までとはレベルの違う攻防が繰り広げられていた。金属が衝突し、火花を散らす。ユランは絶え間なく攻撃を仕掛け、手数の多さでランスを圧倒する。一見、ユランが圧倒的優勢にも見える。我らがチャンピオンの優勢を感じ、観客たちは大いに盛り上がる。

「ユラン選手、攻め続ける！ランス選手もそれをギリギリで捌き、なんとか持ち答えています！この状況をどう見ますか？」

実況席のシュリが隣に解説にやってきていたリーザス兵に問いかける。彼が優勝した選手とエキシビションを行う予定の兵士だ。髪の色は金、美男子という言葉がピッタリなほど整った顔立ちをしている。

「そうですね…一見押しているのはユラン選手のようにも見えますが…優勢なのはランス選手の方ですね」
「えっ！主導権を握っているのはユラン選手のように見えますが？」
「確かに手数で押しているようにも見えますが、その実攻撃は全て防がれています。一撃たりともランス選手に届いていません。ユラン選手の素早い攻撃を見切る動体視力、そして攻撃の先読みをする

戦士としての勘。申し分ないですね。それに…」

解説の男が言いかけた瞬間、ランスが動く。ユランの連撃の中、一瞬の隙を見つけて剣を振り下ろす。不意を突かれた形になるユランだが、すんでのところで攻撃を躱し、バックステップで距離を置く。ランスの攻撃は地面に当たる。

「むかむか、避けるな卑怯者！」

「（ふざけるんじゃないよ、なんだこのでたらめな威力は）」

ユランが文句を言いたくなるのも無理はない。今の一撃で地面が大きく抉れているのだ。

「ご覧の通り、ランス選手の攻撃は剛剣。もし命中してしまえば、おそらく一撃でユラン選手はリングに倒れるでしょう。ユラン選手はいつ、どこからでも逆転負けの可能性がある。精神的にかなりの負担となりますね」

「なるほど…参考になります。手数のユラン選手か、一撃のランス選手か？どちらがこの勝負を制すのでしょうか！」

再びユランが連撃を仕掛け、それをランスが捌く形となる。が、どうしてもユランが攻めあぐねる。互いに決め手に欠ける状態が続く中、先に動いたのはユランであった。ランスの攻撃のパターンを読み取り、避けた直後に下がるのではなく前に出たのだ。

「おおっと、ユラン選手、あの剣の軌道は！！」

このコロシアムに通う者ならば誰しもが知っている。チャンピオン、ユランの必殺剣。コロシアムで多少強かった対戦相手も、全てこの剣の前に倒れてきた。剣の軌道が妖しくも美しく流れる。観客

も、そして目の前に対峙するランスも、その剣の軌道を目で追ってしまう。

「（認めよう…あんたは私より強いよ…）」

この技にはユラン以外誰も知らない隠された効果がある。今まで放った相手は、そのほとんどが格下であったため知られずにいた効果。それは、自分よりも格上の相手に放った場合、その威力が増すのだ。それも、格段に。

「（だからこそ、あんたはこの技で敗れることになる！）」

―その軌道、正に夢幻の如し…―

「幻夢剣！！！」

一閃。流れるような動きをしていた剣が、恐るべき早さでランスの身体に迫る。ランスは反応できていない。その場にほとんどのモノがユランの勝ちを確信した。確信していなかったのは二人。ランスの目を見て、何かあると感じた解説の男と、種明かしを知っているルークだ。ユランの剣がランスの鎧に到達した瞬間、その軌道が曲がる。鎧が滑るのだ。

「なんだって！」

「がははは、幻夢剣破れたり！」

そう、昨日「ぱとらっしゅ」の親父から聞いていた幻夢剣の破り方を実行したのだ。朝の内にパティという女の子が経営しているアイテム屋でヒララレモンを買い、この試合直前に鎧に塗りたくっていた。攻撃を食らえばユランにばれる可能性があったため、ここま

で必死に捌いてきたのだ。そして頃合いを見計らって若干の隙を見せる。ワンパターンな攻撃がそれだ。

「まさか…誘われたのか！？」

「がははは、気がつくのがちょっと遅かったな！」

ランスは剣を両手持ちし、頭上からがむしゃらに振り下ろす。

「ランスアタァァァック！！」

しかし、その軌道はユランではなく、その目の前の地面に振り下ろされる。地面には昨程までとは比べものにならない大きな穴が開く。まさか…外したのか、とユランは思うがそうではない。これはランスの情けか、はたまたこれから抱く女を傷つけたくなかったのか。直後ユランを衝撃波が襲う。とてつもない威力に鎧は崩れ、吹き飛ばされるユラン。発生源はランスアタックが振り下ろされた地面だ。

「（近くにいた衝撃だけでこの威力とは…直撃していたら今頃私は…）」

吹き飛ばされながらそんなことを考える。地面に叩きつけられ、目を開くと目の前に剣を向けるランスが立っていた。

「どうだ、俺様は強いだろう？」

「そうだね…幻夢剣を破る奴が、アリオス以外にもいるとはね…」

「ふっ、負けを認めるな？ユラン」

「ああ…あんたの勝ちだよ、ランス」

そうユランが宣言する。ユランが負けたことにショックを隠せな

い観客も多いが、目の前のこの凄い技を見せられれば納得するしかない。

「それまで！勝者、ランス選手！決勝進出決定です！」

うぉぉぉ！大歓声が上がる。そんな中、少し違うことを考えている男がいた。ルークだ。

「（あの技…よく似ている…ふっ、考えすぎだな…）」

ランスとユランの試合から十分後、会場に開いた穴の整備などが終わり、準決勝二回戦の開始となる。ルークとアレキサンダーが会場に呼ばれる。

「さあ、興奮冷めやらぬ中二回戦です！ルーク選手とアレキサンダー選手、ランス選手への挑戦権を勝ち取るのはどっちだ！試合、開始です！！」

シュリが宣言するとお互いに構える。お互いに間合いを計った後、先に攻撃を仕掛けたのはアレキサンダーだ。

「この試合はどう見ますか？」

「そうですね…申し訳ないですが、相手にならないでしょうね」

「へ？」

予想外の返答に戸惑うシュリだが、ほぼ同時に歓声が沸く。見れば、状況は余りにも一方的。攻め立てているのはアレキサンダー。それをルークが紙一重で躱す。状況的には先ほどのランス対ユランとよく似ているが、ルークは剣で捌くのではなく、その体術だけで

全ての攻撃を躱しているのだ。それだけではない。アレキサンダーに少しでも隙があれば、拳や蹴りをカウンターで入れるのだ。これではどちらが格闘家なのか分かったものではない。

「ご覧の通り、現在立っているレベルが違いすぎます。アレキサンダー選手も素晴らしい才能の持ち主ですが、相手が悪すぎる」
「ではなぜすぐに決着を付けないのでしょうか？ルーク選手は剣をほとんど使っていませんが？」
「分かりかねます。無駄にいたぶるような選手でもないと思うのですが…」

一番困惑していたのは解説や観客ではない。対戦相手のアレキサンダーだ。遊ばれている訳ではない。これでは稽古だ。それは、大陸を武者修行し、己の力にある程度の自信があったアレキサンダーにとっては侮辱とも感じられていた。だがどうあがいてもその拳がルークに届かない。もどかしい思いを抱きながら、まだ仕留める気がないルークの戦い方を逆に利用させて貰う。修行中に編み出した渾身の一撃を何としても決めるのだ。

「ルーク選手…確かに…あなたは強い…」
「まあな、悪いがあんたとはレベルが違いすぎる」
「だが…こちらにも意地がある！」

空気が変わる。アレキサンダーの拳を闘気のようなものが覆う。

「全力の拳を叩き込んでこい！次は避けん！」
「！？…その油断が…命取りだ！！」

アレキサンダーが拳を放つ。アレキサンダーは特に技の名前などに拘る人物ではなく、その技を編み出した際、相手モンスターの装

甲ごと破壊したことから、単純にそう呼んでいる。

「この一撃がこの試合の分水嶺…装甲破壊パンチ！！」

その一撃をルークは剣で受ける。が、拳はルークの剣を叩き折り、その刃が宙を舞った。この拳、届いた…アレキサンダーの集中が一瞬切れる。だがルークは動揺することもなく、既に次の行動に移っていた。宙を舞う刃を左手で掴み、右手でアレキサンダーの顔面を掴み押し倒す。一瞬の間にルークがアレキサンダーの上に馬乗りになり、刃をその首に突きつけていた。その動きを目で追いきれなかった観客も、目の前の現状に息をのむ。既に決着が付いているであろう状況の中、アレキサンダーが口を開く。その瞳には涙。

「私は…私自身を許せない…」

「理由を…聞いても良いか？」

「拳が届いた瞬間…私の心は満ち、集中を欠いてしまった…武闘家としてあるまじき恥だ…」

「ああ…それがあんたの敗因だ」

「…まいった」

アレキサンダーのギブアップ宣言が会場に響き、静かになっていた観客も、熱気を取り戻し、歓声を上げる。

「それまで！勝者ルーク選手！決勝進出決定です！」

宣言されると同時にルークはアレキサンダーから離れ、控え室に引き返そうとするが、後ろから声を掛けられる。

「ルーク殿！もしまた…どこかで巡り会ったら…手合わせしていただけませんか！」

「いいぜ。その腕、鍛え上げておけ、アレキサンダー」

そう背中越しに返事をし、奥へと下がっていく。アレキサンダーは自らの拳を見つめ、決意をする。

「（また一から鍛え直しだな…）」

帰りながらルークは先ほどの戦い方に自ら苦笑する。あのような相手を侮辱するような戦い方は本意ではなかった。しかし、せっかく見つけたダイヤの原石。あの程度の実力で満足してしまっては困るのだ。強者を多くしておく必要がある…後に控える、人類の存亡を掛けた大戦のために…

二十分のインターバルを置き、遂に決勝の幕が上がる。観客のボルテージは最高潮だ。

「皆様、大変長らくお待たせしました。いよいよ決勝戦です！果たして栄冠を手にするのはどちらなのか？それでは、ランス選手、ルーク選手、入場してください！」

うぉぉぉぉっ！と観客席から地鳴りのような歓声が沸く。が、なぜか二人とも出てこない。観客席からだんだんと不安そうな声が上がる。シュリも二人が出ないことに戸惑っていると、控え室整備の女性従業員パニィが慌てた様子で掛けてくる。

「た、大変ですシュリさん。部屋にこんな置き手紙が…」

「置き手紙？一体何が…」

シュリが手紙に目を通すと恐ろしいことが書いてあった。

ーユランちゃんと一発やってくるので棄権するぞ　がはは　byランス様ー
ー涼しい顔装っていたけど正直剣が折れると思わなかった　戦えません　byルークー

「これを…発表しろと言うのですか…」
「でも…いつまでもお客様を待たせるわけにも…」

絶望の表情に変わる二人。いつ決勝が始まるんだとヤジが飛び交う。

「…エキシビションが中止になったことを、あの方にもお伝えしなければいけないのでここはまかせます！」
「そ、そんな！ずるいですよ、シュリさん！」
「大丈夫、パニィさん、あなたならやれるわ！じゃあ、頑張って！！」
「ま、待ってくださぁぁい」

ーリーザス城　コロシアム　ＶＩＰルームー

「というわけで、エキシビションが中止になってしまったんです。無理を言って解説とエキシビションを引き受けていただいたのに、本当に申し訳ありません」
「いえ、いいんですよ。しかしお二人ともいなくなってしまうとは…少し残念ですね…」

シュリから報告を受け、先ほどまで共に解説をしていた男は残念

そうに口を開く。既にエキシビションに備えて甲冑に身を包んでいるところだった。その整った顔は「忠」の文字が入ったヘルメットに隠されていた。

「残念?リック将軍はあの二人と闘いたかったんですか?」

男の名はリック・アディスン。リーザス赤の軍の将軍にして、世界にその名が知れ渡っているリーザス最強の戦士。

「ええ…ですが、いずれまた会う機会もあるでしょう」
「え?それはどうしてでしょうか?」
「あれ程の強者です。いずれ、どこかの戦場で出会いますよ…必ず」

それは同じ強者であるからこその勘であろうか。まだ誰も知り得ぬ事ではあるが、リックの予想は見事に的中する。これより約八ヶ月後、ランス、ルーク、リックの三人は、肩を並べ、このリーザスで魔人と死闘を繰り広げることになる。

「お客様、物を…物を投げないでくださぁぁぁぁぁい」

哀れ、パニィさん。

第7話　惹かれあう強者たち（後書き）

［人物］

リック・アディスン
ＬＶ　３８／７０
技能　剣戦闘ＬＶ２
　リーザス赤の軍将軍。将軍就任の最年少記録を更新し、就任一年目でヘルマン一個軍をたった一人で撤退させるという活躍を見せ、他国からは「リーザスの赤い死神」の異名で恐れられている。人類最強クラスの剣士。

ユラン・ミラージュ
ＬＶ　１４／２７
技能　剣戦闘ＬＶ２
　コロシアムのチャンピオン。軍には所属していないが、その実力は本物である。これより数ヶ月ほど前、勇者アリオス・テオマンと共にとある奴隷商人を壊滅させている。

アレキサンダー
ＬＶ　１２／７７
技能　格闘ＬＶ２
　修行のため世界を回る武闘家。非凡な才能を持ち合わせており、鍛え上げれば人類最強クラスにもなり得る人物である。ルークに敗れ、一から鍛え直すことを誓う。彼も間違いなく強者、いずれまた巡り会うだろう。

パティ
　リーザス城下町のアイテム屋「ちゃん」で働いている女の子。一年中下着姿。

夢色・パニィ（オリモブ）
　コロシアムの整備員。不憫。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

［技］

ランスアタック
使用者　ランス
　ランスの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす。直撃すればもちろんのこと、周りに発生する衝撃波を食らっても大ダメージを受ける。

幻夢剣
使用者　ユラン・ミラージュ
　ユランの必殺技。集中力を必要とするため、連発することは出来ないが、軌道が読みにくく、躱すことは困難である。また、格上相手には威力が2倍以上になる。ヒララレモンの汁で滑るという弱点を持つ。

装甲破壊パンチ
使用者　アレキサンダー
　アレキサンダーの必殺技。拳を闘気で覆い、渾身の力で相手に放つ。その威力は相手の装甲ごと身体を破壊する程である。

第8話　牽制

―リーザス城　コロシアム外―

「で、ユランとお楽しみで俺の試合は見ていなかったと」
「がはは、当然だ。誰が男同士のむさくるしい試合など見ていられるか。抱いてるときのユランちゃんはかわいかったぞ。普段とギャップがあってだな…」
「聞く気はない。興味もない。」
「何だ、インポか？男として終わっているな、がはは」
「違うわ！」

決勝戦をバックれたルークは会場を出たところでランスと落ち合った。あちらも丁度ユランとの情事を済ませたところだったらしい。今後の方針を話し合うため、酒場に向かおうとしていた二人に後ろから声が掛かる。

「すみません。少しお時間をいただけますか？」

振り返り、声を掛けてきた女性を見る。白い薄手のローブを身につけた美しい緑髪の女性。高級そうな服装を見るに、王宮関係者であろうか。

「お、美人ではないか」
「私は、王女様の侍女をしているマリスといいます。先ほどのトーナメント、たいへん見事な腕前でした」
「で、その侍女さんが俺たちに何のようだ？」
「王女様が貴方様方のお力をぜひお借りしたいと言われておられま

す」

なんという幸運。王女の調査が困難になってしまったと思っていた矢先に、あちらの方からわざわざ近づいてきてくれるとは。切っ掛けはランスが勝手に申し込んだトーナメントということを考えると、やはりこの男、天に愛されている。

「王女様と言うからには美女なんだろうな？」
「それはもう。あれ程の美しさを兼ね備えた方を私は知りません」
「がははは、では話を聞こう」
「そうだな、こちらも異存はない」
「それでは案内させて頂きます。私に付いてきてください」

―リーザス城　王女の間―

「はじめまして。冒険者の方なのでご存じないかもしれませんが、私はこの国の王女、リア・パラパラ・リーザスと言います」

そう言って挨拶をしてきたのは優しそうな女性。とてもユキを冤罪で投獄したり、誘拐に関わっているような人物には見えない。

「お初お目に掛かる。私はギルドに所属している冒険者で、名をルークと申します」
「そして俺様が英雄ランス様だ！王女様は可憐だな、１００点だ！」

王女様相手にとんでもない挨拶をかますランスだが、それを笑顔で許容する王女。侍女のマリスは無表情で王女の後ろに控えている。

「あなたたちの強さを見込んで一つ頼みがあります。私の大事な魅力の指輪が妃円屋敷の悪霊に奪われてしまったのです。あなたたちには、その屋敷に行って悪霊を退治し、指輪を取り返して貰いたいのです」

「王宮の兵士ではなく、なぜ私たちに？」

「それは、この頼みは私の個人的な理由からなるものであるため、王宮の兵士を動かすことは出来ないのです」

「なるほど、そこで強くてかっこいい俺様他一名に頼みに来たわけだな！見返りは？なんなら王女様の処じ「何がいただけるのでしょうか？」」

不敬罪で首が飛びかねない発言をしようとしたランスの言葉を遮り、ルークが聞き返す。ふ、と場の空気が変わった。緊迫感が増す。

「…あなたたちは、ヒカリって娘を捜しているのでしょう？その娘に関する情報を提供しましょう」

「…どうして私たちがヒカリという娘を捜していると知っているのでしょうか？」

確かにルークはリーザス城下町で聞き込みを一週間ほど続けていた。しかしそこはルークもプロ。足の付くような聞き込みはしていない。ルークの問いに、これまで無言で後ろに控えていたマリスが薄く目を開け、静かに答える。

「…我が国の情報網は完璧です」

「…なるほど、大した情報網だ。忍者でも雇っているのでしょうかね？」

「さて…そのような存在が、大陸にいるのでしょうかね…？」

牽制しあうルークとマリス。一瞬の静寂が訪れるが、ランスがそ

れをすぐに破る。

「わかった、引き受けよう。ヒカリの情報は頼んだぞ」
「ありがとうございます。妃円屋敷の鍵は情報屋の娘が持っていますので、屋敷に行く前に受け取っていってください」
「了解しました。それではこれで失礼させていただきます」

一礼をし、ランスは先に部屋を後にする。続いてルークも部屋から出ようとするが、後ろから王女が問いかけてきた。

「…それと…ユキ、という娘の居所をご存じありませんか？」
「…はて、そんなことは冒険者風情ではなく、後ろの侍女に聞いた方がよいのではないでしょうか？この国の情報網は完璧のようですからね」

ルークの挑発にマリスは表情一つ変えず、リアは妖しく微笑む。誘拐に関わっている人物に見えないと思ったが、前言撤回だ。間違いない、こいつらが犯人だ。

―リーザス城下町　情報屋―

ひとまずランスとルークは二手に分かれた。ルークは情報屋で鍵を貰い、ランスは折れてしまったルークの剣を買いに行き、妃円屋敷の前で落ち合う手はずとなっている。パシリのような仕事にランスは難色を示したが、６００ＧＯＬＤ手渡し、余った金で好きなものを買っていいと言ったら喜んで武器屋に向かった。武器を自分が買い、ランスに鍵を取りに来させるのが本来望ましい行動だろうが、ルークが情報屋に来たのは訳があった。彼女をランスに会わせるの

は危険だ。情報収集をしている際に出会ったその女性は、とても美しかった。が、他人に心を開かない。理由はその足にある。ほとんど動かすことが出来ず、車いすでの生活を余儀なくされている。そんな彼女とランスを会わせるのは、ライオンの檻に野ウサギを入れるようなものだ。

「あ…いらっしゃい、ルークさん…」

彼女の名前は朝狗羅由真。ルークが初めてこの情報屋を訪れた際、彼女は心ない冒険者に暴行される直前にあった。ルークはその冒険者をその場で斬り捨て、由真を救っていた。そのこともあり、彼女はルークにだけは若干心を開いていた。

「事情は分かっています。こちらが鍵です」
「流石は優秀な情報屋、耳が早いな」
「いえ…私がもっと早く気がついていれば…お気づきかもしれませんが、事件の犯人は…」
「待った。それ以上はいけない。どこで聞かれているか分からないからね」

言いかける由真をルークは制止する。敵は強大、彼女を巻き込むわけにはいかない。

「…お気遣いありがとうございます…お気を付けて」
「ああ、ありがとう。事件が終わったら、また寄らせて貰うよ」

情報屋を出たルークはついでに正面のレベル屋に足を運ぶ。

「ようこそレベル屋へ。儀式を行わせて貰います」
「ああ、よろしく頼む」

水晶玉に電流が走り、レベルアップの儀式が行われる。彼女の名前はウィリス。優秀なレベル屋で、今度レベル神への昇進試験を受けるらしい。因みに彼氏持ちである。

「…駄目ですね、経験値が不足しています」
「そうか、手間を掛けた」
「ルークさんは既にかなりのレベルですからね。これだけ高い人は滅多にいないですよ」
「ありがとう、それでは邪魔をした」
「あ、ルークさん。今って外は晴れていますか？」
「ん？快晴だが、どうかしたのか？」
「今日この後彼とデートなんですー」

職務中だぞ、この野郎。お幸せに。

―リーザス城下町　妃円屋敷―

「遅かったな」

約束の時間よりもかなり遅れてランスがやってきた。武器屋方面には特にこれと言って足止めを食いそうな施設はなかったはずだが。

「がはは、武器屋のミリーちゃんと一発ヤってきたからな」
「人を待たせて置いて…まあ予想通りだが…」

やはり情報屋に向かわせなくてよかった。ますます由真が人間不信になってしまう。

「とりあえず買ってきた剣を渡してくれ。流石に丸腰では、悪霊がいるらしいこの屋敷では危ないんでな」
「ほれ」
ランスが買ってきた剣をルークに手渡す。ルークは受け取るが、その刀身に違和感を覚える。刃がぷるぷると震えている変わった剣。こんなもので敵が斬れるのだろうか。
「ランス…俺の記憶が正しければ、これはあの店で一番安い剣じゃないか？」
ここでルークはランスの装備が大きく変わっていることに気がつく。どれも一流の冒険者が身につけるような良質の装備である。
「さすがリーザス、中々に良い武器を売っているな。その剣とこの一式でぴったり６００ＧＯＬＤだったぞ。がはは」
「金返せ、この野郎っ！！」
「馬鹿言うな！貴様のものは俺様のもの、俺様のものも当然俺様のものだ！！！」
口喧嘩をしながら妃円屋敷へ入る二人。すると、今入ってきた扉が勝手に閉まり、どこからともなく悲しげな女性の声が響く。
「…ようこそ妃円屋敷へ。貴方もあの王女の部下かしら…？」
なるほど、これが悪霊か。一筋縄ではいきそうにないな。

第8話　牽制（後書き）

［人物］

リア・パラパラ・リーザス
ＬＶ　３／２０
技能　なし
　リーザス国王女。美しい容姿の裏に影を持つ。政治家としても非常に優秀であり、野心家で、既に実の両親である現国王と女王を隠居させる計画も密かに進めている。生まれてこの方人に怒られたことがない温室育ち。誘拐事件の犯人最有力候補。というか間違いなく犯人。

マリス・アマリリス
ＬＶ　２５／６７
技能　神魔法ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス国筆頭侍女。事実上リーザスの政治を司っているとさえ言われる影の実力者。戦闘能力も非常に高く、その才能はリーザス最強剣士リックに次ぐが、自ら前線に立つことはほとんどなく、常にリアの側を離れないようにしている。リアを溺愛。

ウィリス
リーザス城下町のレベル屋で働く女性。年下の彼氏とはラブラブ。本編では１の時点では名無しの女性であった。その後、現在までに６作品に登場。大出世である。

ミリー・リンクル
　リーザス城下町の武器屋「ＰＯＮＮ」の女性店員。自殺願望あり。

朝狗羅由真　（オリモブ）

リーザス城下町の情報屋「ＮＥＴ」のオペレーター。コンピューターを使う優秀な情報屋であり、本編では名無しの女性。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。情報戦といえば彼女。

［装備品］

えくすかりば

ランスが購入。伝説の聖なる剣の量産品。２００ＧＯＬＤ。

ごっずアーマ

ランスが購入。特殊な金属で作られた高級な鎧。２００ＧＯＬＤ。

めでうさの盾

ランスが購入。鏡で出来た優秀な盾。１８０ＧＯＬＤ。

ぷるぷるの剣

ルークが購入（不本意）。ぷるぷる震えて敵に打撃を与える剣。２０ＧＯＬＤ。これでピッタリ６００ＧＯＬＤ。因みに本編でも本当にこの値段である。

［アイテム］

魅力の指輪

リアの私物。その名前から魅力が上がると思われるが、多分ただの指輪。

第9話　妃円屋敷の幽霊

ーリーザス城下町　妃円屋敷ー

「とりあえず二手に分かれて探索しよう」

そうランスに提案するルーク。中々に広い屋敷、わざわざ男二人肩寄せ合って一緒に探索する理由はない。

「うむ、しっかり働けよ」

「何いきなりロビーの椅子に腰掛けてるんだ！そっちも探すんだよ！」

渋るランスを無理矢理立たせて西にある広間や倉庫の探索に向かわせる。ルークは東にある食堂や厨房、応接間を担当する。厨房を調べているとき、一つのメモ帳を見つけた。悪霊が住み着く前、ここに勤めていた料理人が書いたものらしい。パラパラと中身を確認していくと、気になる一文を発見した。

ー王女様のお食事の注意ー

「この屋敷には王女が住んでいた…？」

ガタッ、と後ろから物音がし、振り返ると四匹のさけび男がこちらに迫ってきていた。ルークは目の前まで来ていた一匹に斬りつけるが、一撃で倒せない。相手が霊体系のモンスターで物理攻撃が効きにくいというのもあるが、やはり剣が悪い。厨房は狭く、戦い辛かったため、隣の応接間までひとまず移動する。部屋に入った瞬間、暖炉の奥の光る何かが目に入る。どうやら剣のようだ。手に取ろう

としたところに二匹目のさけび男が迫ってきたため、その剣で振り抜くと、さけび男が真っ二つになり消滅した。

「この剣は…火事場泥棒みたいで申し訳ないが、使わせて貰おう」

残りの二匹も一撃の下に粉砕する。中々の業物。誰も住んでいない幽霊屋敷に置いておくのは勿体ないおばけが出てしまうと考えたルークは、とりあえず頂いておくことにする。冒険者とはこんなものだ。暖炉の奥には代わりにぷるぷるの剣を備えておく。

「何か手がかりはあったか？む、なんだその剣は？俺様に寄越せ！」
「俺の金で新しい剣買ったばかりだろうが！」

ロビーに戻ると西の探索を終えたランスがいた。いきなりたかられるルーク。

「そうだな…この屋敷に王女が住んでいた可能性が高いということくらいだな」
「ふん、使えんな。俺様は倉庫で変な映像を見たぞ。いきなり突風が吹いて、目を開けたら女の子が三角木馬に乗せられて拷問を受けていた。話しかけたらすぐに消えてしまったがな」
「拷問を受けていた女の子…この屋敷の幽霊と関係がありそうだな」
「それとこんなものも見つけたぞ」

ランスが手に持っていたのは、日記帳であった。ルークはそれを受け取り、ページを開く。日記の最後のページには、美しい字体でこう書かれていた。

―また今夜も地獄の時間が始まる。何度死のうと思ったかわからない。でも…夜９時から１１時までの間、この時間が私の地獄の時間―

「これを読んで俺様はこの屋敷の謎に気がついてしまった！どうだ、分かるか？」
「はて…特に新しい情報はない気がするが？」
「ふっ…これが英雄と凡人の差だな。あれを見ろ！」

ランスが指指した先には壊れた柱時計が置いてあった。その時間は１０時２５分で止まっている。

「この屋敷の時計は１０時２５分で止まっている。このせいで彼女は死んでも拷問から抜けられないのだろう。つまり、あの時計の時間をずらせば、悪霊はきれいさっぱり消えるというわけだ。がははは！」
「そんな単純な…別にこの屋敷の時計があれ一つという訳でもあるまいに」
「言ったな！ではあの時計で解決したら報酬の分け前は８：２だぞ！」
「関係なかったら６：４な。やれやれ」

呆れるルークをよそに、ランスは時計の時間を１２時２５分にずらす。何も起こる訳が…と思った矢先、屋敷を覆っていた邪悪な気配がきれいさっぱり消えてしまった。更には奥の厨房の方から大きな音がする。

「なん…だと…」
「がははは、１６０００ＧＯＬＤゲットだ！」

ランスは意気揚々と、ルークはショックを隠しきれない様子で音のした厨房に向かう。すると、地下室への階段が新しく出来ていた。

「おやおや、厨房を散策していながらこんなものも見つけられなか

った冒険者がいるのだな。情けない奴だ、顔を見てみたい。これは分け前が9：1まで有り得るな」

もはやぐうの音も出ない。正反対のテンションで二人は階段を下りていくと、部屋の中央には悲しげな顔で少女が立っていた。その身体は青みがかって若干透けている。

「おお、あの娘だ！さっき俺様が見た拷問を受けていた娘だ」
「彼女がこの屋敷の幽霊か」
「ありがとうございます…あなたたちのお陰で私は地獄の時間から解放されました」
「聞いたか？やはり時間だ、がはは！それじゃあ魅力の指輪を返してくれるか？」

勝ち誇るランスがそう言うと、彼女の周りの光が一瞬暗くなり、彼女は黙り込んだ。

「あの指輪だけは返すことは出来ません」
「なぜ？」
「それは…」
「君を死に追いやったのが…その持ち主だからか？」

ルークの問いに静かに頷き、自分の身に起こったことを語り始める。

「私の名前はラベンダー、パリス学園の生徒です。私がパリス学園に入学したのは二年前でした。そのときの私は、あの学校の真の姿を知りませんでした。学園長のミンミン先生から優秀生徒に任命されてから一週間後、眠り薬を飲まされて…」
「やはり学園もグル…か…」

「気がつくと王女様の目の前にいました。王女様は私をペットにすると言って…それからこの屋敷に隔離されて毎日、毎日…」
「この地下室で拷問を受けていたわけだな」
「あの王女様は残忍です。私の前にペットにしていたメイドの女性は、狂い死んでしまったから残念だったと、笑いながら話していました。私に残されたのは、自分から命を絶つことだけでした…」
「それでせめてもの復讐に指輪を奪ったというわけだな」
「はい…王女様が憎い…」

小さな唇を噛みしめながら彼女は言った。その目には涙が浮かぶ。

「こうしている間にも、また他の女の子が王女様の餌食になっていると思います」
「それが…ヒカリちゃんか…」
「わかった。俺様が王女を懲らしめてあげよう。それで、君は安心できるかい」
「!?…ありがとう!」

ランスは彼女に抱きつかれる。ランスの腕に、無いはずの質量が少しだけ伝わってくる。彼女はランスの胸で泣きじゃくった。それを静かに見守るルーク。

「絶対に王女様を止めてくださいね。そうしてくれなかったら、化けて出ちゃうから」
「任せろ。まあラベンダーちゃんみたいなかわいい子だったら、化けて出てくれて構わんがな。がはは!」

悪戯っぽく言う彼女に対し、ランスが笑いながらそう返すと、彼女は微笑みながら、その身体を少しずつ消していった。どうやら成仏したらしい。後には、彼女が王女から盗んだ魅力の指輪が床に落

ちているだけであった。ランスはそれを拾い、懐へとしまう。

「随分と無茶な約束をしたな。王女を懲らしめるとは…大国リーザスを敵に回すつもりか？」

「ふん、関係ないな。悪い娘はお仕置きしてやるのがいい男の勤めだ」

「ただではすまんぞ？」

「ユキちゃんを牢から逃がした奴が何を言ってるんだかな」

ランスはルークを見る。知らないものが見れば、ランスの顔はいつも通りの笑い顔であっただろうが、ルークの見解は違う。ランスは今、戦士の顔つきになっていた。

「ルーク、とっくにお前もリーザスを敵に回す覚悟は出来ているんだろう？」

「当然だ。あの王女、野放しには出来ん」

ランスが初めてルークの名前を呼ぶ。それに気がついていたかは定かではないが、ルークも戦士の顔つきになり、ランスに笑い返す。二人は肩を並べて、屋敷から出て行った。

―リーザス城下町　パリス学園―

「シィルさん、少し話があるのだけど、ちょっといいかしら？」

シィルにクラスメイトのセラが話しかけてきた。以前ランスに報告していた、思考をシールドの魔法でガードし、考えを読み取ることが出来なかった生徒だ。要注意人物としてマークしていたが、特

に怪しいそぶりは見せておらず、心配のしすぎかとシィルは思い始めているところであった。

「はい、なんでしょうか？」

シィルが振り向いた瞬間、腹部に衝撃が走る。

「えっ…？」

「おやすみ、シィルさん」

倒れていくシィル。だんだんと意識が遠のいていった。

「（ランスさ…ま…）」

それを抱き留めるセラ。彼女の正体は、リア王女の侍女、マリスであった。

第9話　妃円屋敷の幽霊（後書き）

［人物］

ラベンダー

妃円屋敷に出没する幽霊。かつてリア王女に度重なる拷問を受け、自ら命を絶った少女。ランスの腕の中で成仏する。

ラベンダーの前任のメイド（半オリモブ）

ラベンダーの前に拷問を受けて死んだ少女。彼女もこれより数年後、リーザス城に悪霊として出没するようになる。自分の拷問の姿を見せて兵士を怖がらせようとするが、Ｈな映像であるため男性兵士を喜ばせているだけである。出番はランスクエスト本編で。地下で拷問を受けていたと書いてあったから、おそらく妃円屋敷の被害者。

セラ

パリス学園に通う生徒。その正体はマリス・アマリリス２３才。色々な意味で恐ろしい変装である。学園の生徒はきっと見て見ぬふりをしてくれていたのだろう。

［モンスター］

さけび男

アンデッド系。赤いもやが集まって出来たような顔だけのモンスター。物理攻撃が効きづらく、ＥＸＰを奪うというような嫌らしい攻撃も仕掛けてくる。

［技］

シールド
　リーダーから思考を守る初級魔法。ある程度の魔法使いなら用心のために極力掛けるようにしておく。

［装備品］
妃円の剣
　妃円屋敷に隠されていた業物の剣。盾と鎧も存在するが、二人は発見できなかった。

第１０話　ここより変わるリーザスの物語

―リーザス城　城門前―

ランスが城門前までやってくる。門番に通行手形を見せて城の中に入ろうとすると、マリスが門から出てきてランスを出迎える。

「ランス様、指輪は手に入れられたみたいですね」
「耳が早いな。手に入れたのはついさっきだぞ」
「リーザスの情報網は完璧ですから。さあ、どうぞこちらへ」
「うむ、案内を頼む」

そう言って案内をしようとするマリスだが、その歩みを止める。

「ところで…ルーク様はどちらへ？」
「指輪を手に入れたのは知っているのに、それは知らんのだな。少し寄るところがあるから、先に俺様だけやってきたのだ」

そう、今この場にいるのはランスのみで、ルークの姿はない。ランスが説明をするとマリスは納得したようで、王女の間へ案内するため、再びランスの少し前を歩き始めた。後に付いていくランスだが、ふと違和感を覚える。

「おかしいな…来るのは二回目だが、こんな道だったか？」
「王女様の部屋までは特殊な結界が張ってあって、私の案内無しでは何者も侵入できません」

ーリーザス城　王女の間ー

「戦士ランス様、無事に悪霊から魅力の指輪を奪い返していただけましたか？」

部屋に到着したランスに、王女はそう話しかけてきた。マリスは既に王女の後ろに控えている。ランスは先ほど拾った指輪を懐から取り出す。

「これの事か？」

「本当に取り返してくれたのですね。ではその指輪をこちらに…」

「その前に聞いておきたいことがある。屋敷にいた幽霊は、ラベンダーという美少女だった。知っているか？」

言いかけた王女の言葉をランスが遮る。王女は困惑の表情を見せて黙り込んだが、すぐに元の笑顔に戻っていった。

「知りませんわ」

「ふん、まあいい。で、ヒカリちゃんの情報はどうなった？」

「そうでした…マリス、ヒカリをここに」

王女が指示すると、マリスは一度カーテンの後ろに下がる。しばらくの後、カーテンの奥から再び姿を現すと、その横には両手を縛られた少女を連れていた。写真で見ていた少女で間違いない、彼女がヒカリだ。

「ランス様、これがあなたたちお捜しのヒカリ嬢ね？」

「ふん、やはりそう言う事か。ラベンダーちゃんの話は正しかったようだな。この変態レズ王女め」

ランスがそう言うと、静かに控えていたマリスがカッと目を開き、声を荒げる。

「口を慎みなさい！リア王女に対し、何という事を！」

「残念だけどヒカリは私のかわいいペット。返すことはできないわ。知りすぎてしまったあなたたちもね…もう一人はこの場にいないみたいだけど、どうせ後からのこのことやってくることでしょう。そのときはマリス、ここまで案内して差し上げなさい。目の前でゆっくりといたぶってあげるわ」

そう言い放つ王女。それに対し、素直に返答するマリス。国の上層部にいるものは、得てしてこのような歪みを持ち合わせているものである。それは、リーザスと並び立つ二つの大国、魔法大国ゼスと軍事大国ヘルマンにも言えることである。その歪みがランスとルークの前に立ちはだかるのはもう少し先の話となる。

「がはは、本性を見せたな。ならば力ずくで返して貰うまでだ。ついでにレズ王女様にもお仕置きだ！」

王女に飛びかかろうとするランスだが、急に後ろに気配を感じた。振り返ろうとしたランスの首に、細いひものようなものが巻き付く。

「なに！」

後ろから現れた黒装束の娘は、ランスの首に絡ませたひもを締め上げる。もがくランスだが、ひもは外れない。このままでは窒息死してしまう。

「お前は…あのときの公園の…（うぐっ…やばい、このままでは…）」

以前に公園でサイフを盗もうとした女忍者であると気がつく。そうこうしている間に紐は食い込みを増し、ランスの顔がだんだんと青ざめてくる。ランスの意識が無くなりかけてきたそのとき、聞き慣れた声が部屋に響いた。

「マジックミサイル！！」

部屋の外から炎の塊が飛んできて、ランスの首を絞めていた女忍者を吹き飛ばし、ランスの首のひもが緩む。間一髪で事なきを得たランス。

「ランス様！大丈夫ですか！？いたいのいたいの、とんでけーっ！」

シィルがランスに駆け寄り、ヒーリングの呪文を唱えると、ランスの首に出来ていたアザが消え、息苦しさがなくなっていく。

「げほっげほっ、助けに来るならもっと早く来い、バカ」

「なぜこの娘がここに！？隣の部屋に縛っていたはず！」

そう、シィルは王女の次のペット候補兼、いざというときの人質として捕らえられていたのだ。そのシィルがなぜここに…困惑するマリス。

「理由は簡単。俺が助け出しただけだ」

シィルの後ろから声がする。この場にいなかったもう一人の戦士、ルークだ。

「なぜあなたがここに…」

「以前シィルちゃんが優秀生徒になったと聞いていたのを思い出してな。ラベンダーも任命された後に誘拐されたと言っていたから様子を見に行ってみれば、既に誘拐された後。流石に焦ったぞ。まあミンミン学園長を拷問したら、あんたが連れて行ったことをすぐに白状したがな。それでこうして助けに来たわけだ。わかったかい？完璧な情報網を持つリーザスの侍女さん」

「あの学園長…処刑ね」

王女が冷たく言い放つ。後ろに控えていたマリスは、今は王女を守るように前に立ち、ルークに対し、再び問う。

「なるほど…ですが一番聞きたいのはそこではありません。なぜ結界を突破できたのですか！？あなたは魔法使いではないでしょうに！」

なるほど、とルークはマリスの疑問に頷く。確かに普通の戦士であったなら、あの高度な結界を突破することは不可能だっただろう。しかし、今この場にいる男は…

「誤算だったな。あの程度の結界、俺には何の意味も持たんぞ」

「くっ…」

結局なぜ結界が破れたのかは分からないマリスだが、現実問題としてルークが今ここにいる。状況の悪さから、額に汗が流れる。その状況を察してか、女忍者がルークとランスの前に立ちふさがる。

「リア様、マリス様、ここはお任せを」

その言葉を受け、王女とマリスは部屋の奥に下がり床を持ち上げる。そこには逃亡用の隠し階段があった。地下へと逃げる二人。

「シィル、あそこで倒れているヒカリちゃんの治療をしておけ。ルーク、この場は任せた。俺様は王女を追う。あの王女に説教してやらんとな！」

真面目な顔つきで指示を出すランス。その表情はお仕置きと称して飛びかかろうとしていたときの顔とは違う。その顔を見てルークはそれに答える。

「了解だ。あの王女に世間の厳しさを教えてやれ！」
「簡単に行かせると思わないでよ！」

ランスに対して手裏剣を投げつける女忍者。が、一瞬でランスと女忍者の間に割り込んだルークに、全てはたき落とされる。

「行け！ランス！」
「がはは、俺様に任せておけ！」

そう言い、王女たちを追って地下への階段を下りていくランス。それを追おうとする女忍者だが、ルークに阻まれる。先ほどまでと立場が逆転した。

「さて…ランスが王女の説教係なら、俺はあんたに説教することにするかな」
「説教ですって！？ふざけたことを…死んで貰うわ！」

女忍者は言うと、手裏剣を放つ。それを全てはたき落とすが、目の前から女忍者が消えていた。いや、消えたのではない、飛んだのだ。両手にくないを持ち、空中からルークに迫る。

「死ね！」
「そんな無防備に空中に飛び上がるとは…」

ルークはそう言いながら腰を沈め構える。そして素早く剣を左下から右上に振り切る。発生した真空波が女忍者に直撃する。

「真空斬、手加減版」
「ぐぇっ！」

女の子が出してはいけないような声を出して、女忍者が吹き飛ぶ。壁に激突し、一瞬意識が飛びかけるが、頭を振り立ち上がろうとする。が、それを阻むように首に刃が突きつけられる。

「戦い方がまるで素人だ…隠密要員であって、戦闘は場数を踏んでいないようだな」
「くっ…バカにして…」

懐から手裏剣を取り出そうとするが、一瞬殺気を込められ、「ひっ…」と声を出して手裏剣を取りこぼす。やはり場数はあまり踏んでいないようだ。

「少し…聞きたいことがある」
「何よ…拷問されたって、リア様のことは話したりしないわ」

そう言い放つ女忍者に対し、ルークは予想外の行動に出る。首に突きつけていた剣を下げたのだ。困惑する女忍者。

「王女の事が聞きたいわけではない。あんたの意見を聞きたい」
「私の…？」
「ああ…君は、王女が行っていた今回の犯罪、本当に正しいと思っ

ていたのか？」
「…っ！」

ルークが尋ねた内容に驚愕し、目を開かせる。一瞬言いよどむが、すぐに返事が返ってくる。

「私の意見などないわ。忠臣として、命じられたことに答えるのは当ぜ…」
「それは真の忠臣ではない！！」

言いかけた女忍者の声を、ルークが遮る。先ほどまでの話し方と違い、その一言一言に、迫力が増す。

「忠臣として等と逃げるのではなく、君自身の意見を言ってくれ」
「…リア様が行っていたことに…間違いなどは…」
「罪もない民を自分の快楽だけのために死なせることがか？それが本当に上に立つ者の行動だとでも？」
「…」

ルークの問いかけに女忍者は答えることが出来ない。その拳が強く握られたのは、何に対しての悔しさからだったのであろうか。

「先ほど忠臣と言ったな。真の忠臣であるのならば、主がその道を違えたら、横っ面引っ叩いてでも道を正すものじゃないのか？」
「それでも…自分の意志を殺してでも主の命に従うのが…忍びとしての役目です…」

自分の意志を殺してでもと言ったのを聞き逃すルークではない。先ほどまでの迫力のある喋り方から一転、穏やかな喋り方になる。

「確かに…忍びとしてはそれが正しいのかもしれない。だが、忠臣として…人間として…そして、一人の女の子として、その考えは絶対に間違っている」

自然と涙がこぼれる。情けない、恥ずかしい。涙を止めようとするが、止めることが出来ない。

「私だって…あんなことしたくなかった…でも…恩義に報いるために…」

嗚咽混じりに答える。やはり、彼女の行動は本意ではなかったらしい。ルークがそれを感じたのは以前の公園での出来事。あのように姿を現し、手を引けと忠告するのがそもそもおかしいのだ。殺すのなら忠告などせずにさっさと殺せばいい。彼女は王女を止めることが出来なかった。だからこそ、巻き込まれて犠牲になる様な人を減らしたかったのだ。彼女もまた、足掻いていたのだ。ルークは女忍者の頭に手を置き、泣き止むまでしばらく待ってやった。シィルも気絶しているヒカリを介抱しながら、静かにそれを見守る。少しの後、泣き止んだ彼女は、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「すいません…恥ずかしいところを…」

「いや、気にしてないさ。恩義っていうのを聞いてもいいかな?」

「命の恩人なんです。祖国のＪＡＰＡＮに帰れず、大陸を行くところもなく彷徨っていた私を、リア様が拾ってくださったんです」

「そうか…」

それは、ただの気まぐれだったのかもしれない。あるいは、大陸には珍しい忍者を貴重に思ったのかもしれない。しかし、あの王女が彼女の命を救った、これは一つの真実でなのである。なればこそ、彼女は王女に仕えたのだ。たとえ自分の意志を殺してでも、その恩

義に報いるために。

「因みに…祖国にはどうして戻れないんだ？捨て駒扱いで切り捨てられたとか、何かの秘密を握ってしまって命を狙われているとかか？」

ぴくっ、と女忍者の動きが止まる。はて、何か変なことを聞いてしまっただろうか、と考えるルークに対し、言いにくそうに彼女が答える。

「…ゅう…でまい…って…」

「ん？何か言いにくいことだったか？それだったら無理しなくても…」

「…研修旅行で迷子になって…勘違いで抜け忍扱いされて…帰れなくて…」

屋内なのに冷たい風が吹く。女忍者の顔は、先ほどよりも更に赤みを増している。

「んっ…それは…災難っ…だったな…くっ…」

「笑った！今笑いましたよね！！」

「いや…全然笑ってなんかいないぞ…ぷっ…くくっ…」

「隠せてない！全然隠せてないですから！だから言いたくなかったのにぃ！！」

今にも泣き出しそうな顔をしてルークに詰め寄る。ルークは必死に堪えるが、笑いが抑えられない。それを見かねて、シィルがフォローに入る。

「ルークさん、笑っちゃかわいそうですよ…ふふっ…あははっ！！」

「うわぁぁぁぁぁん！！！！」

まったくもってフォローになっていなかった。

ーリーザス城　地下通路ー

ルークは女忍者を引き連れてリア王女が逃げた通路を歩いていた。途中で気絶していたマリスを拾う。ランスの前に立ちふさがり、返り討ちにあったのだろう。目覚めたマリスに、先ほど女忍者にしたのと同じような事を言った。

「…返す言葉もございません。リア様のためを常に考え、叱らずにいたことが…甘やかしてしまっていたのかもしれません…」

そうルークに答えるマリス。だが、話を聞いているとその役目をマリスに託すのは酷であったかもしれない。リア王女とマリスの年の差は7つで、王女が幼い頃から仕えていたため、どうしても妹を見るような目になってしまっていたのだろう。本来、叱るのは親の役目だが、リアの両親は幼い頃から優秀であった娘を恐れ、遠ざけてしまっていたらしい。彼女のしたことは決して許されることではないが、彼女が歪んでしまった原因を考えると、彼女もまた被害者なのかもしれない。

「まあ、今頃ランスがしっかりと叱っていてくれてるだろう」

「大丈夫なんですか？正直…あの男と二人きりにするのは危ない気が…」

問いかける女忍者に笑いながら答える。

「まあ、大丈夫だろう。別れ際にかなりまじめな顔をしていたからな。ランスも許せなかったんだろう。まだ出会ってから一月も経ってないが分かる。あいつは…決めるときは決める男さ」

言っていると、目の前に光が差し込む。長い地下通路を抜けた先には泉があった。そのほとりの方で声がする。三人はそちらに向かって走り出した。

「ああっ…もっと、もっと気持ちよくして！」
「がははは、ではもっとお仕置きしてやろう！」

そこにはお仕置きと称して王女とヤっているランスがいた。

「はふぅ…」

マリスが倒れる。目の前の現実に打ちひしがれたのだろう。

「って、やっぱり全然駄目じゃない！何があいつ決めるときは決める、ですか！！」
「キめていたじゃないか…それはもう、バッチリと…」
「何上手いこといった風な顔してるんですか！」

まさか本当に王女に手を出すとは…あの真面目な顔はなんだったんだろうか。ランスにとって王女とHすることは、大まじめな顔をするに価する出来事だったてことか。

「がははは！どうだ、もう悪いことはしないな？」
「もう悪いことしません、庶民もいじめません。だからもっとぉぉ！」

「まあ…あれはあれで改心したってことでいいんじゃないか？」
「よくなぁぁぁぁぁい！！」

―数日後　アイスの街　ランス宅―

無事に仕事が終了し、報酬を受け取ったランスはＧＯＬＤで敷き詰めた風呂に入っていた。ルークとの分け前は宣言通り８：２にし、計２６０００ＧＯＬＤを手にしたランスは満足そうだった。

「がはははは！大もうけだ！だがＧＯＬＤ風呂は痛いだけだな、もうやめておこう。」
「よかったですね、ランス様」

あの後、王女が許していたので怒るマリスと女忍者を尻目にしっかりと帰路についたランス。ルークとは今朝別れた。俺様が女を抱く邪魔をしないし、色目も使わん。俺様程じゃないまでもそこそこの腕はある。まあいても邪魔にはならんな、というのがランスのルークに対する評価であった。

「そうだ、一応奴隷として少しは活躍したからな。お前にも服を買ってやろう」
「本当ですか？私、外出用のお洋服が欲しいです」
「そうだな、すけすけのネグリジェか超ミニスカートを買ってやろう」
「…はい、ありがとうございます…そういえば、ランス様宛に手紙が届いてましたよ」
「ん？俺様宛のファンレターかラブレターか？」
「お城からの手紙みたいですね」

ランスはシィルから受け取った封筒を開き、中の手紙を読む。
―親愛なるランス様。我が王家には、初めて交渉した者と結婚しなくてはならないという
代々伝わる伝統があります。それに従ってあなたは責任をとって私と結婚して頂きます。
ではこれより、すぐにあなたの所に嫁がせて頂きます　王女リア・パラパラ・リーザス―

「…シィル、逃げるぞ」
「へ？」

結婚などする気のないランスは逃げようとするが、時既に遅く、家の扉が大きくノックされる。

「ダーーーリン！！開けてーーー！！リアが参りました！！」

声が聞こえた瞬間に、ランスはシィルを連れて一目散に逃げ出していた。

「シィル！ついてこい！」
「はい！ランス様、どこへでも！」

―アイスの街近辺　街道―

ルークは一人その道を歩いていた。約束の報酬をランスに渡した後、次のギルド仕事を受け、休む間もなくアイスの街から旅立っていた。歩きながら、ルークは思う。面白い奴であったと。またどこ

かで巡り会いたいものだと。すると、遠くから声が聞こえてくる。ルークが歩いている街道の向こう、今考えていた男が、パートナーを連れて王女と侍女から全力で逃げている。最後まで退屈させない奴だ。

「やれやれ…また会いたいとは思ったが、早すぎるだろう…」

そう思うルークに、こちらに気がついた女忍者が道を外れて近づいてくる。

「どうした？王女様から離れていいのか？」

「すぐに戻りますから。ルークさんに…一言お礼を言いたくて」

「礼などいらんさ。今後、リーザスがどのような道程を辿るか楽しみだよ。道を違えそうになったら…」

「私が戻します。今はまだ無理だけど…いつか、真の忠臣と呼ばれるように…」

「上出来だ」

ふと二人が笑いあう。ランスたちが少し離れてしまったのでルークに一礼し、追いかけようとする女忍者をルークは呼び止める。振り返る彼女に、もっと早く聞いておくべきだった事を問いかける。

「名前、まだ聞いてなかったな」

「かなみ、見当かなみです」

満開の笑顔を向けてくる。これは、良い気分で次の仕事に移れそうだ。青天の下、ルークはそんなことを考えていた。

第１０話　ここより変わるリーザスの物語（後書き）

［人物］

見当かなみ

ＬＶ　１４／４０

技能　忍者ＬＶ１

　リーザス王女リア直属の忍者。不本意にも抜け忍になってしまっていたところをリアに拾われ、恩義に報いるため諜報から暗殺まで忠実にこなす。ルークの言葉を受け、少しずつだがリアに自分の意見を言うようになる。意外なことに、関係は以前よりも良好。本編では一応１のラスボス。一応とか言うな。

ヒカリ・ミ・ブラン

　ブラン家の次女。リアに誘拐されていたが、実はそのときに色々と目覚めてしまい、リアのことが大好きになってしまう。ランスとルークのことは、気を失っていたのであまり覚えていない。ランス１のサブタイトル「光を求めて」が、彼女の名前と掛かっていることはファンの間では有名である。

ウェンズディング・リーザス

　リーザス国国王にしてリアの父。実権は娘に握られている。婿養子であり、結婚前の名前を名乗るなど少し頭がおかしくなり始めている。

カルピス・パラパラ・リーザス

　リーザス国女王にしてリアの母。頭の良すぎた娘をあまり良く思っておらず、知らず知らずの内に遠ざけてしまっていた。

ミンミン

パリス学園の学園長。裏でリアと繋がっており、美少女を定期的に提供していた。事件解決後、全て自分一人で犯行を行ったという遺書と共に遺体で発見される。マリスが一晩でやってくれました。

［技能］

忍者

忍者としての才能。隠密としての素質や、強力な忍術の使用に関わる。

［技］

ヒーリング

傷を癒す初級神魔法。暖かい光で包み込み、傷だけでなく体力も回復させる。

マジックミサイル

炎の塊をぶつける初級魔法。炎の矢よりも威力は低いが、塊であるため敵に命中しやすい。本編では炎の矢の旧名であり同一魔法。後にダイジェスト版が出た際、名前が炎の矢に統一され、その存在が抹消される。本作では別魔法扱い。これは、筆者がマジックミサイルでランスの窮地をシィルが救うシーンが1屈指の名シーンだと思っており、名前を変えたくなかったためである。

第１１話　反逆の少女たち

ＧＩ１００９
ー自由都市カスタムー

話は少し前にさかのぼる。自由都市地帯のほぼ中央に位置する町、カスタム。この年、とある老魔法使いが魔法塾を開塾する。男の名はラギシス。人当たりが良く、町の住人からの信頼も厚かった。これを受け、カスタムの町では一つの事項を決定する。それは、町を守る魔法使いを育てるため、三人の娘をラギシスに弟子入りさせるというものだ。

幼い娘たちにそのような重荷を背負わせることに初めは疑問の声も上がったが、三人の娘は彼に良くなつき、魔法の修行も自ら進んで行った。三年後のＧＩ１０１２年にはもう一人娘が加わるが、こちらもすぐにラギシスに懐いた。四人の娘と一人の老魔法使い。師匠と弟子、というよりは親子のようだな、と住人の一人が言った。何を今更、もう彼女たちの育ての親だよ、ラギシスさんは、と聞いていた住人が答えた。

「うわぁぁぁ、きれーい」

本日の授業は草原で行われていた。ラギシスが腕を振るうと、その腕から花びらが舞う。入塾したばかりの紫色の髪の少女は目を輝かせる。

「本当…きれいね」
「そんなのより攻撃魔法を教えて欲しいわ」
「もう…」

赤い髪の娘が言うと、緑色の髪の娘が別の魔法が良いと言う。隣にいた青い髪の娘がとがめるが、ラギシスは優しく微笑む。本当に不満に思っているわけではないのを知っているからだ。そう文句を言った娘も、舞い踊る花びらを見ながら優しく微笑んでいたからだ。花びらが彼女たちを包むように回り始める。その美しい光景に、娘たちの目の輝きが更に増す。

「ふぅん…目隠しくらいには使えそうね。今日の授業はやっぱりこれでいいわ」
「もう…素直じゃないんだから」

あはは、と笑い声が草原に響く。言われた娘はふん、と拗ねた風な顔を見せるが、耐えきれなかったのかすぐに吹き出してしまう。平和な光景が、そこには広がっていた。

そして…月日は流れる…

ＬＰ０００１　１０月
ー自由都市カスタムー

「ラギシス！」

ラギシスの前には美しく成長した娘たちが立っていた。しかし、様子がおかしい。ある娘は剣先をラギシスに向け、ある娘は魔法を使う構えを取る。

「どうしてもやるのか…」

悲しげに呟くラギシス。返ってきたのは言葉ではなく、魔法。紫の髪の娘が、小型の幻獣をラギシスに放った。

「…！！」

それが始まりの合図であった。師であるラギシスだが、既に老体の身。それにリーダー格であった緑髪の娘は、既にラギシスをも凌駕した力を持ち合わせている。更に、四対一。必死に抗戦するが、徐々に追い詰められていくラギシス。青い髪の娘が水の魔法を放つ。防御魔法でそれを防ぐと、剣を持った赤髪の娘がラギシスに迫った。

「くっ・・」

ギリギリで剣を躱し、距離を置くラギシス。が、すぐに気がつく。誘導させられた、と。他の三人が左右に分かれ、道を開く。今、ラギシスと一直線上に対峙するのは、リーダー格の娘。既に呪文詠唱を終え、放つ直前だ。ラギシスに逃げ場はない。

「死ねぇぇぇぇぇ！！！」

「っ！！」

ラギシスを光が包む。結界を張るが防ぎきれない。吹き飛ばされ、動けなくなるラギシス。柱が崩れ、瓦礫がラギシスの身体に落ちていく。薄れゆく意識の中でラギシスは思った。

「（指…輪…）」

ラギシスの身体が瓦礫に埋もれていく。それとほぼ同時に、空中に魔方陣が現れ、町全体を包む。娘たちの誰かが使ったのであろうか。恐ろしい魔力で魔方陣はカスタムの町を地下に陥没させていった。

住人は言う。娘たちが狂った。育ての親である師匠を殺し、地上に出られないよう封印を掛けた。あの娘たちは悪魔だ。誰か…この町を救ってくれ。四人の娘たちの指には、それぞれ違った色の指輪が妖しく光っていた。

―アイスの町　キースギルド―

男は数多くある依頼書の中から、その依頼書に目を付けた。
一反逆の少女たち、親代わりでもあった師匠を殺し、町を封印する。彼女たちは今こう呼ばれている、カスタムの四魔女、と。―

「なんだ?その仕事受けるのか?こっちとしちゃーありがてーが、報酬はそんなに高くないし、割にあった仕事じゃねーぞ?」
「割に合わない仕事はいつものことさ。この四魔女というのが少し気になってね…」
「なんだ?遂にお前にも春が来たってか?」

下品な笑みを浮かべるギルドマスターのキースに対し、そんなんじゃないさ、と返す。

「まあ、そこまでお前が興味持ったって事は、受けるんだろ?」
「ああ、この依頼、受けさせて貰う」
「あいよっ!頼んだぜ、ルーク!」

第１２話　地下に沈んだ町

―荒野―

砂埃舞う荒野をルークは歩いていた。向かうはカスタムの町。アイスの町からそう遠くない町だが、ルークは迷ってしまっていた。

「…おかしいな、地図によるともうそろそろのはずなんだが…」

というのも、ルークはカスタムの町をほとんど訪れたことがない。理由としては二つ。リーザスやポルトガルといった、仕事で訪れることの多い大都市に向かう際の通り道からは少し外れてしまっているというのが一つ。もう一つは、いままでギルドに依頼されるような事件は起こらない平和な町であったため、訪れる機会がなかったのだ。そのような平和な町での異変。一体何が起きているのだろうか。

「訪れるのは約２０年ぶり、あの時とはどれほど変わっているのかね…」

前述の通り、ルークはこの町を訪れたことがないわけではない。かつて、たった一度だけこの町に来たことがある。１８年前、７つの時だっただろうか。ルークはかつての光景を思い出す。

ＧＩ０９９８　冬
―カスタムの町―

身なりはボロボロ、全身に擦り傷を付けた二人の子供が町の前に立っていた。声を掛けようとする者はいない。その目だ。後ろに連れられている少女は普通だが、もう一人の男児の目が普通ではない。濁っている。まるで、この世全てを恨んでいるかのように。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

そんな中、一人の男が声を掛ける。この町に最近移り住んできた魔法使いだ。それが、ルークとこの男の出会いであった。

LP0001　10月
―荒野―

ふ、と自嘲気味に笑うルーク。懐かしい思い出でもあり、同時に出来ることならば思い出したくはない過去である。そう、あの時はまだ彼女が隣にいたのだ…と。そんなことを思っていると、目の前に洞窟の入り口が見えてくる。そこには一人の少女が立っていた。こちらに微笑んで近づいてくる少女。

「お待ちしておりました。ルーク様でいらっしゃいますね？」
「そうだが、君は？」

少女は顔をパッと輝かせると、深々とお辞儀をした。

「ようこそおいでくださいました、カスタムの町へ。私は町長の娘、チサと言います」
「町…？どこにあるんだ？」

「さぁ、どうぞこちらへ。父がお待ちしています」

娘はそう言うと、ルークを案内するように洞窟の中へと入っていく。

「まさか…洞窟の中か…？」

―カスタムの町―

洞窟をしばらく進むと、そこには地下の空洞の中に町があった。

「地下に町が丸々入っているのか！？以前来たときは普通の町だったが…封印というのはこういうことだったのか…」

「以前に町を訪れたことがあるのですか？すいません、町長の娘ともあろうものが、覚えていなくて…」

申し訳なさそうに頭を下げるチサに対し、こちらもすまなそうに返すルーク。

「いや、謝らなくて良い。多分君が生まれる前の話だ。２０年くらい前だからね」

「そうだったんですか。…ルーク様から見て、今の町はどのように見えますか？」

周りを見回す。だいぶ過去の話なので記憶も曖昧だが、以前はもっと住人の元気な声が飛び交う町だったはず。それに、所々破壊された家が目に入ってくる。

「正直…以前の姿を知っている者からすれば…信じられない光景だな」
「それも全て…彼女たちが…」

悲しそうな、それでいて悔しそうな顔をする。そんな話をしている内に、町長の家に着き、中に案内された

「これはこれは、よくぞ来てくださいました。身体が少し弱いので、床に入ったままで失礼します。私は町長のガイゼル・ゴードといいます」

町長を見るルーク。以前の町長とは違うな。あちらもルークのことを覚えていない。無理もない、１８年も前の話だ。それに、この町に滞在していた期間も短かった。

「あなたはキースギルドに所属する冒険者の中でも、特に優秀な戦士だと聞いています。どうか、この町をお救いください」

キースめ、大げさに言いやがったな、とルークは思う。多くの人々を救った優秀な冒険者、という点では、ラーク&ｐ;ノアコンビの方がよっぽど当てはまる。というのも、ルークの仕事の請負方には癖があるからだ。事件の規模や報酬ではなく、強そうな奴に会えるか、その依頼者との繋がりが大きな意味を持ちそうかという事を最も重要視している。そのため、時には初級冒険者が請け負うようなお使いのような依頼もこなす。以前ラークに苦言を呈されたが、先の大戦を見据えているルークにとって、この方針を変えるつもりはなかった。

「まあ、任せておいてくれ。受けた依頼はきっちりこなすさ」
「それは頼もしい！それでは町の状況を説明させて頂きます。チサ、

頼んだ」

ガイゼルがそう言うと、チサが一歩前に出てくる。

「はい、ルーク様もご存じの通り、この町は元々地上にありました。ですが、少し前に魔法使いたちの戦闘がこの町に起こりました。一人の魔法使いの名前をラギシス。この町で魔法塾を開いていた方です。彼は私たちを守って戦ってくださいました。悪いのは四人の魔女たち。ラギシスの塾生であった彼女たちは、突如反逆を起こしました。ラギシスの持っていた指輪を奪い、ラギシスを殺した彼女たちは、指輪の力でこの町を地下へと沈め、町を封印してしまいました」

「町一つを地下へ沈めたというのか…その娘たちが…」

にわかには信じがたいことである。魔法大国のゼスでも、たった四人でそんなことを出来る者は限られてくるだろう。

「きっと、指輪の力で彼女たちの魔力を増幅させているんです。そして彼女たちは地下に迷宮を築くと、私たちの生活を脅かすようになりました。数々のモンスターが町へ進入してきたり、若い女性が誘拐されたり…」

「彼女たちを倒そうとはしなかったのか？」

「いいえ、青年団が四人の魔女を倒そうと迷宮に潜っていきましたが…まだ誰も帰ってきません…」

そう、肩を落とすチサ。

「酷な話だが…もう生きてはいないだろうな」

「あうっ…か、彼女たちの目的は分かりませんが、お願いです。私たちをお救いください！」

「私からもお願いします。彼女たちを倒して、この町を以前のような平和な町にしてください」

ゴード親子がルークに対し懇願する。ルークは右拳を少し前に出し、力強く握ると、口を開いた。

「任せておけ。すぐにこの町を元の平和な町に戻してやる」

「ありがとうございます！ルーク様！」

ルークの手をチサの手が包み込む。その光景にごほん、とガイゼルが咳払いをすると、恥ずかしそうにチサが手をすぐに下げた。

「…娘はやらんぞ。で、報酬のことだが…」

「安心してください。どこかの冒険者と違って、節操なしではないんで…」

ルークは三ヶ月ほど前、共に仕事をした男の顔を頭に浮かべる。あいつだったら、報酬はチサちゃんが良いとか言い出すだろうな…

「うむ、それならいい。で、報酬なのだが一応２００００ＧＯＬＤ用意しています。ただ、依頼した冒険者は一人ではないため、早い者勝ちになってはしまいますが…」

ふむ、２００００ＧＯＬＤか。事件の規模を考えると割の良い仕事とは言えない。町を沈める程の魔力を持った魔法使いと、命を掛けて戦わねばならないのだ。前回の誘拐事件の割が良すぎたのもあるが、（まあ結果としてあれもリーザス王家が絡んでいたから、割の良い仕事では無かったが）それにしても安すぎる。報酬の額を気にするルークではないが、この案件は個人の依頼ではなく、町としての大規模な依頼。あまり安くされると、キースギルドの名が汚さ

れると同時に、カスタムの町の評判も落ちてしまうのだ。

「少し安すぎますね。復興のための資金を貯めなければならないのは分かりますが、３００００ＧＯＬＤが最低限のラインですね。そうでないと、ウチのギルドだけでなく、カスタムの町の評判も落ちます。それに、その値段では請け負ってくれる冒険者が極端に減るでしょうね。早く解決させた方が、結果として出費を安く抑えられると思いますよ」

「なるほど…申し訳ありません。今までギルドに依頼などしたことが無かったものですから、相場が分からなくて。それでは３０００ＧＯＬＤとさせていただきます」

「了解だ。それでは、正式に受けさせて貰う」

そう言い、部屋を出て行くルーク。

「…なんて頼もしく勇ましいお方。あの方ならきっと大丈夫ですね、お父様」

「うむ、彼になら任せても良さそうだな…だが、娘はやらんぞ」

「…あっ、お父様。もうすぐ次の冒険者様が到着する時間なので、町の入り口まで迎えに行ってきますね」

ルークは町の中を見て回っていた。時間を掛けて町を一周するが、中々に入り組んだ町であると同時に、モンスターに荒らされてしまっているため、店の場所などを覚えることが難しかった。と、チサが歩いているのが目に入る。

「ああ、チサちゃん、ちょっといいかな」

「あら？どうされましたか、ルーク様」

「ちょっと町の地図をいただけないかな？少し覚えるのに時間が掛

かりそうだ」
「それでしたら、家にいくつか予備がありますのでついて来てください」

チサの後をついて行き町長の家まで引き返すルーク。道中無言なのも気まずいので、世間話感覚でチサに話しかける。

「そういえば、チサちゃんは買い物か何かかな？」
「はい、ルーク様の次にもう一組冒険者様がお見えになったんですけど、お茶菓子を切らしてしまいまして」

そう言い、家の中へ入る二人。すると、町長の部屋の方から大声が聞こえる。これがもう一組の冒険者の声だろうか。それにしても、どこかで聞き覚えのある声な気が…

「がははは、安すぎる！！報酬は５００００ＧＯＬＤか、チサちゃんの処女だ！！！そうでないと俺様は降りるぞ」
「駄目だ駄目だ駄目だーーー！チサには指一本触れさせんぞーーー！！！」

間違いない、あいつだ。

第１２話　地下に沈んだ町（後書き）

［人物］

ガイゼル・ゴード

　カスタムの町の町長。病に倒れながらも、町再建のために奔走する。親バカである。

チサ・ゴード

　カスタム町長の娘。父親思いの優しい少女である。５０００ＧＯＬＤに吹っかけた冒険者に対しても、頼もしく勇敢で彼なら大丈夫とのたまう辺り、あまり深く物事を考えていないと思われる。

［都市］

リーザス王国

　大陸東北部に位置する、人口約５０００万人の豊かな国。ヘルマン帝国に反乱を起こしたグロス・リーザスがＧＩ０５３４年に建国。以後、長きに渡りヘルマンとの争いが続くこととなる。土地が豊かで食料に恵まれ、商工業も盛んで暮らしは豊か。魔人界とも隣接していないため、基本的には平和な国である。

アイスの町

　自由都市。ランスが生活している町であり、キースギルドの他に、冒険者のお供として有名な回復薬「世色癌」で薬市場の約５０％を占めている世界有数の製薬会社「ハピネス製薬」などがある。

ジオの町

　自由都市。「ジーク・ジオ」を合い言葉としており、経済力は高い町である。

第１３話　トマト爆誕

―カスタムの町　酒場―

「まさかこんなに早く再会する事になるとはな…稼いだからしばらく働かないんじゃなかったのか？」

ルークは自分同様、依頼を受けるためカスタムまで来たランスとシィルと共に、町の酒場で食事を取っていた。当然のようにルークの奢りになってしまっている。テーブルの上には注文した料理が並んでいる。口を付けたうろろーんが余りにもまずかったので、ビールで口直しをしながらルークが尋ねる。

「ふん、どうせ再会するならヒカリちゃんとかの方が良かったがな。ん？金か？あんなもんとっくに使い切ったわ」

言い放つランス。少し贅沢な生活をしていても、しばらくは大丈夫なレベルの大金があったはずなのだが。シィルの方を見ると、食べていたチョコレートパフェをテーブルに置き、申し訳なさそうに頷く。本当に使い切ったのか…

「まあ５００００ＧＯＬＤで交渉成立したから、この仕事が終わったら、またしばらく仕事する気はないがな」

上機嫌に出来たてのへんでろぱを食べるランス。そう、先ほどガイゼルに対する値上げ交渉は見事に成功し、報酬は５００００ＧＯＬＤへと跳ね上がっていた。娘を守るための苦渋の決断だったのだろう。

「そこで、提案なんだが。どうだ、またこの間みたいに手を組まないか？」
「ん？まあ…分け前次第だな…」
ルークの提案に珍しく応じる気配を見せるランス。理由としては、ルークの実力を知っており、同時に自分が女を襲う邪魔をしない男というのが一つ。もう一つは四魔女が美少女であった場合、ヤる気満々なため、ランスはさっさと事件を解決させたいのだ。
「そうだな…俺は１００００ＧＯＬＤ貰えれば十分だな」
「むぅ…まあいいだろう。がはは、俺様のためにしっかり働けよ」
ルークに１００００ＧＯＬＤ支払っても、当初提示された報酬よりも多いのだ。それに、ルークと一緒にいると今夜の食事のように、所々で奢らせることが出来る。これ幸いと手を組むことにするランス。
「はい、ご注文のうはあんお待たせ」
店の自称看板娘であるエレナが追加で頼んだ料理を持ってくる。と同時に、シィルの頭を撫で始める。
「…おい、人の奴隷に何やってるんだ？」
「わっと、ゴメンなさい。私って、人の頭を撫でるのが好き…で…ふぁぁっっ！何これぇ！」
頭を撫でていたエレナが突如騒ぎ出す。
「な、なに、この頭…あったかくて…優しくて…心が引きずり込ま

れていく…正にゴッドオブヘアー…」
「あ…あの…あんまり中で動かさないでください…」
「ええぃ、さっさと離れろ！」

ランスに引きはがされるエレナ。その顔は恍惚の表情を浮かべている。特徴的なもこもこヘアーだが、あの中はそんなにも気持ちの良いものなのか…？

「…おい、ルーク。何を人の奴隷の頭に手を伸ばそうとしているんだ？」
「…そんな事してないですよ？」
「喋り方が普段と違うし、目を反らすんじゃない！」

ランスが暴れ始めて酒場の中が騒然となる。シィルは周りに平謝り。こうして夜が更けていった。

―翌日　カスタムの町　アイテム屋―

迷宮に挑むことになるため、それに備えてアイテム屋に寄るのは冒険者の常識。ということで三人はアイテム屋にやってきていた。

「いらっしゃいませですねー？ここはアイテム屋ですかー？」
「…それを店主のあんたが聞いてどうするんだ？」

店に入ると整った容姿の店員がそんなことを言ってきた。頭の弱い娘なのだろうか？ミミックと思われるモンスターが檻に入れられている。どうやらペットのようだ。

「おう、中々にグッドな娘さんだな。名前は何という？」
「トマトですかねー？」
「自分の名前だろうが。オススメの剣と鎧はどれだ？」
「それを私が知っているんですか？」
「ええい、お前はここの店主だろう」
「…果たしてそうなんでしょうか？」
「うがーーー！なんなんだ、この店は！！」

駄目だ、頭痛くなってきた。

「ら、ランス様、落ち着いてください。彼女はきっと、語尾に「？」が付くというキャラ付けをしているんですよ」
「だー、面倒な！…ん、良いことを思いついたぞ。この剣はいくらだ？高くて良さそうな剣だ」
「それは我が家の家宝の剣ですね？そうなら５０００ＧＯＬＤですかね？」
「いいや違う、１ＧＯＬＤだ。金は置いていくぞ、がははは、とーくした！」

トマトをかわいそうと思うよりも、頭が回るな、とルークは感心する。店を出て行こうとするランスの腕がグワシッ、と掴まれる。

「ふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる！！」

涙目ウルウル首ブンブン状態になった。ちょっとかわいい。

「反省したのだな」
「すいません。ちゃんと反省しました」
「…」
「かな？」

トマトの頭に二人のチョップが炸裂した。

「しくしく…何をお求めになられますか」

「自業自得だな、さすがに。んー…棚がすかすかだな」

「町がこんな状況なので、物資があまり届かないんですよー。特に剣が品薄なんですよね？」

「こっちに振るんじゃない。とりあえずこの剣と鎧を貰うかな。ルーク払っておけよ」

「いつから俺はお前のサイフになったんだ！というか、この間俺の金で勝手に買った装備はどうした？」

リーザスで買っていた装備の方が、今選んだ装備より良いものだと思うのだが、とルークは思う。

「ああ、盾は装備してても戦いにくいんであの後すぐに売った。剣と鎧はもうちょい後に生活費の足しにするため売った」

「人の金で買ったものを…」

「すいません、すいません…」

シィルが謝る横で、ルークも店内を物色した。剣は妃円の剣がまだまだ刃こぼれを起こしていないので、鎧と世色癌を購入。

「ん？シィルちゃんも遠慮しないで買って良いんだぞ？」

「いえ…申し訳ないですし…」

「主人と違って謙虚だな、シィルちゃんは。店主、そこのローブもついでに買わせて貰うぞ」

「はーい、お優しいんですねー？」

「すいません、ありがとうございます」

「あ、こら！勝手に俺様の奴隷に服を着せるんじゃない」

「ダンジョン潜るときくらいは羽織るくらいいいだろ。流石に危ないぞ…って、何勝手に世色癌そんな大量に買ってんだ！」
「全部で４０００ＧＯＬＤになりますー？」
「高っ！ランスお前、何買いやがった！！」
「がははは、高そうな鎧とは思ったが、中々の値段になったな」

渋々払うルーク。流石に分け前をもう少し上げて貰おう、と心に誓うのだった。トマトはほくほく顔でお金を受け取りながら、先ほどランスから返して貰った家宝の剣を大事そうに抱えていた。

「そんなに大事な剣だったのか？」
「はい、家宝というのもありますが、私、いつか自分で冒険をしたいと考えているんです…よね？」
「アイテム屋さんなのにですか？凄いですね」
「全く鍛えてるようには見えんが…危ないぞ。俺様が近くで守ってやろう」

シィルが感心し、ランスが下心満載で護衛に志願する。

「鍛えてはいないですけど、何とかなりますよ。…その、気合いで？」
「それはある程度ちゃんと鍛えた奴が最後に頼るものだよ。ふむ…でも素質は悪くなさそうだな。鍛えれば一端の冒険者になれるかもしれないな」
「え？本当ですか？わーい、そうなったら、いつか一緒に冒険してくださいね？」
「がはは、最強の俺様はいつかじゃなく、今すぐでもいいんだがな」
「いつかそんな日が来るのを待っているよ」

店を出て行く三人を見送るトマト。流石にお世辞なのは分かって

いたが、ちょっと剣の修行をしてみようかな、と思うのであった。

―カスタムの町　ラギシス邸跡―

その家は戦闘の影響でか、崩れかけであった。部屋は薄暗く、床には魔方陣が刻まれている。

「ランス様…ここ、なんだか怖いです。なにか…気配みたいなもの感じませんか？」
「ラギシスの亡霊でもいるのか？馬鹿馬鹿しい、びびりすぎだ」
「で…でも、もしかしたら…」

ブルブルと震えるシィル。するとそのとき、ぺしーんと音が響いた。

「ひゃぁぁぁぁぁぁ」
「がはは、尻を叩かれたくらいでびびりおって。情けないぞ」
「ひどいですよぉ…ランス様…」

悪ガキっぽく笑うランス。シィルは目に涙を浮かべながら、腰を抜かして床に座り込んでしまった。その姿が中々にそそる。

「よし、ヤるぞシィル。ルーク、ちょっと外で待ってろ」
「はいはい、早めに済ませてくれよ」
「え、え、え、…その…ここは怖いんでせめて場所を変えましょうよ」

シィルの胸を揉み始めるランスに、場所替えを提案するシィル。

それを尻目に部屋から出て行こうとするルークだったが、部屋の中心部、魔方陣のあった辺りが光輝き、青白い人の形を成したものが出来上がっていった。

「こら、神聖なる屋敷で不埒な行いをするんじゃない。そこの男も出て行かないでちゃんと止めろ」

「うわっ、なんだこの親父は！おばけか？」

ランスがそう言うと、シィルは怖がってランスの後ろに隠れる。ルークも出て行こうとしていたのを止め、剣に手を伸ばして臨戦態勢に入る。

「お化けにあらず…怯える必要はない。私こそ、この町の守護者、ラギシスだ…」

死してなお、その魔法使いは地縛霊となりこの世に留まっていた。それは自分の弟子を止められなかった後悔からか、あるいは別の未練があるとでもいうのだろうか…

第１３話　トマト爆誕（後書き）

［人物］

ランス　（２）
ＬＶ　１０／∞
技能　剣戦闘ＬＶ２　盾防御ＬＶ１　冒険ＬＶ１
　早々にルークと再会した鬼畜戦士。誘拐事件解決時にはＬＶ１５ほどになっていたが、その後ほとんど冒険をしないでいたらレベルダウンしていた。

シィル・プライン　（２）
ＬＶ　１０／４０
技能　魔法ＬＶ１　神魔法ＬＶ１
　ゴッドオブヘアーの持ち主。ランス同様、冒険していなかったため仲良くレベルダウン。

トマト・ピューレ
ＬＶ　１／３７
技能　剣戦闘ＬＶ１
　カスタムの町アイテム屋店主。趣味は盆栽と俳句で、ミミックをペットにしている変わった娘。大冒険に興味がある。本家２とリメイク版である０２で性格がだいぶ違う。本作では０２仕様。因みにＲａｎｃｅ１のパッケージは彼女だったりする。しかし、１に彼女は登場しない。最新作ランスクエストにて再登場。その保有スキルの使いやすさから、お世話になったプレイヤーも多いのでは？

エレナ・エルアール
　カスタムの町酒場の看板娘。覆面社交パーティーで抱かれた初恋の男を捜すため、５００ＧＯＬＤで体を売っている。

［モンスター］

ミミック

　宝箱に潜むモンスター。強力なレーザー攻撃を放つため、油断は禁物。なぜかトマトがペットにしている。

［装備品］

イナズマの剣

　ランスが購入。切れ味は並だが、雷属性の武器であり、通が好むとされている。

界陣の鎧

　ランスが購入。戦士向けの本格的な鎧で、値段も１８００ＧＯＬＤと中々の値段。

真紅の鎧

　ルークが購入。若者に大流行の軽鎧。付属のマントはランスに上げた。

防御のローブ

　シィルが購入。女性用の防具で、見た目は軽いがそこそこの防御力を持つ。

［アイテム］

世色癌

　回復薬。ハピネス製薬が発売しており、冒険者のお供。苦い。どこかの世界にはこれを１０００粒くらい一気のみする猛者がいるら

しい。名前はナクト、きっと世色癌食ＬＶ３の技能保有者なのだろう。

［料理／食材］

うろろーん

ねちょーりして、ガリンゴリンしていて、それでいて半生の料理。つまり不味い。

うはあん

桃りんごを用いて作る高級料理。果物である「うはぁん」と名前が似ているが、別物である。

ビール

ご存じビール。本家２でエレナが勧めてくる。

チョコレートパフェ

ランス曰く男の食べ物。よって、シィルはあまり食べさせて貰えない。

第１４話　抱く疑念

－カスタムの町　ラギシス邸跡－

「あんたが四人の魔女に殺されたラギシスに間違いないんだな？」
「いかにも。お主たちはこの町の住人ではないな。雇われた冒険者であるか？」

廃墟と化したラギシス邸跡で、ルークは霊体になったラギシスと話をしていた。未練を残した人間が霊体となってこの世に留まるのは、珍しくはあるが決してあり得ない事ではない。この間の誘拐事件の際も、ラベンダーという幽霊になった女の子がいたように、冒険者を長く続けていれば、何度かは出くわす事もあるケースだ。ラギシスは長髪に髭を生やした、ナイスミドルという言葉がよく似合いそうな、老人一歩手前の中年であった。平穏無事なら、まだまだ余生を過ごせたであろう。

「ふふん、俺様こそ史上最強の戦士、ランス様だ！こっちは奴隷のシィルで、こいつは下僕のルーク」
「よ、よろしく…お願いします…」
「俺はいつになったら下僕を卒業できるんだ…？」

ランスがポーズを取りながら自己紹介をし、その後ろから控えめにシィルが顔を出しお辞儀する。

「そうか…頼む、どうかこの町を救って欲しい。私にはもう、それを行う力はない…」

申し訳なさそうに霊体となったラギシスが頼み込む。その顔はどこか悔しそうであった。町を守れなかったこと、弟子たちに反乱を起こされたこと、現世に相当な未練があるのだろう。

「任せておけ。で、出来ることなら事のあらましを本人から聞きたいのだが」

「さて、そう言われても…どこから話していいものか…そうだな、私はこの町の守護者として長い間この町を守ってきた。だが、老いには勝てん。力が衰えていくのを感じた私は、魔力に素質のある者を四人集め、後継者として育て始めた。ゆくゆくは、この町の守護者として跡を継いで貰おうと。幼い彼女たちに魔法を教えている時間は、安息に満ちた時間であった。日に日に魔力を増した彼女たちを見るのは…」

「まてまて、要点だけ話せジジイ。お前の思い出話が聞きたいんじゃない。話したいならその辺の石にでも話してろ」

「……」

バッサリと切って捨てるランス。が、内心ルークは拍手していた。正直ルークも、この先関係ない話が続きそうな気配を感じ取り、どうしたものやらと考えていたからだ。

「…要点だけ話そう。ある日奴らは私の大事なフィールの指輪を奪っていった」

「フィールの指輪？聞いたことがないな…」

「以前にゼスのとある魔法使いから譲り受けたものでな。はめた者の魔力を数倍にも増幅させるのだ」

話を聞いてルークは驚く。今この男は数倍と言ったか？確かに魔力を増幅させる装飾品が無いわけではない。例えばカラー族のクリスタル等がそうだ。彼女たち一族の額に埋め込まれたクリスタルは、

ある方法を用いると魔力が増幅され、強力なマジックアイテムの材料となる。これを加工したクリスタルリング等は、魔力を増幅させる装飾品と呼べるだろう。が、それでも増幅する魔力はせいぜい二倍。相場２０万ＧＯＬＤのクリスタルを加工した、市場にあまり出回らないクリスタルリングでさえその程度なのだ。なればこそ、数倍にもなるようなマジックアイテムがあれば、国宝になっていてもおかしくはない。それを手放すゼスの魔法使い、そんなことが有り得るのか…

「奴らはこともあろうに、師である私に戦いを挑んできたのだ。普通であれば未熟者が束になろうと負けはせん。が、フィールの指輪を装備した奴らは絶大な魔力を手にしていた。特に、リーダー格であった娘は私をも凌駕する魔力…私は敗れ、このような姿になってしまった。…このまま野放しにするわけにはいかない！」

「待て、今の話し方からすると、フィールの指輪は一つではないのか」

「うむ、全部で四つある」

四つ…一つでも国宝になりかねん、そんな指輪が四つだと…

「ふん、自分の弟子に負けるなど情けない奴め。とりあえず、彼女たちの情報について教えて貰おう。名前、得意技、スリーサイズを答えろ！」

「スリーサイズは知らんが…答えられる範囲で答えよう」

魔力の増幅などに興味のないランスは、指輪の異常さに気がつかず話を進める。ラギシスがそれに答え、彼女たちの説明を始めるが、ルークは未だ頭からフィールの指輪のことが離れていなかった。

「まずは、マリア・カスタード。氷雪系の中でも、取り分け水魔法

を得意とする少女だ。魔法以外にも研究や発明の才能もあったな。ひょっとしたら育てればそちらの方が伸びたかもしれん」

「可愛いのか？」

「たとえ殺されようと…どの子も、私にとっては可愛い娘だ」

そう言うラギシスに対し、ちょっと感動したのかシィルがうるうると涙目になっている。奴隷として売られていたということは、両親は亡くなっているか、生きていたとしても長く会えていないのだろう、とルークはシィルを見ながら思った。

「次にミル・ヨークス。他の三人よりも弟子入りしたのが遅く、年齢も一番若い。珍しい幻獣魔法の使い手だ。指輪の魔力を持っている今では、ほぼ無尽蔵にモンスターを生み出すだろう」

「厄介だな。次。」

「三人目はエレノア・ラン。彼女は剣の腕にも秀でた魔法剣士で、初級魔法レベルのものを手広く学んでいる。その中でも幻惑系の魔法を最も得意としている」

「つまり器用貧乏タイプだろ。一番中途半端なタイプだな」

三人目までの説明を聞き、戦い方を考えるルーク。ランスも言ったように、ここまでで一番厄介なのはミルという娘だ。前衛に守らせ、後ろで詠唱をするという魔法使いの基本戦術。基本であるが故に、ただ単純に強い。その前衛を、無尽蔵に生み出すというのだ。単体ではもちろん、他の魔女と組まれると非常に不味い。逆にエレノアという娘は、幻惑魔法にさえ気をつければ、比較的やりやすい。そして、問題の四人目だ。リーダー格であり、指輪を付けていたとはいえ、師であるラギシスをも上回る魔力を持ち合わせた人物。

「そして最後が…ランス、ルークよ、彼女には特に気をつけるんだ。将来的には間違いなく人類最強クラスの魔法使いになるであろう素

質を持っている。魔法大国ゼスでも、これ程の才の持ち主は限られるだろう」

ゼスでも有数の魔法使いか。ふと、一人の青年が思い出される。何度か仕事を共にしたことのある魔法使い。魔法使いにあらずば人にあらずという思想が蔓延するゼスにおいて、そういった思想に捕らわれない珍しい男。初めて出会ったとき、あいつはまだ学生だった。ギルド仕事で学園を訪れた際、モンスターが現れ駆り出されたあいつは、得意の炎魔法で敵を消し炭に変えていった。正直、別のギルドから派遣されていた魔法使いや、その場に居合わせた教師なんかよりも、よっぽど才能を持ち合わせていた。つい先日、約１０年ぶりに再会を果たした際、ゼスの兵隊になっていたのを見たときは時の流れに驚かされたものである。まあ、あちらも、１０年も顔を見せないから死んだと思っていた俺と再会して、たいそう驚いてはいたが。そんな事を懐かしんでいると、最後の娘の名前を聞き逃す。

「あ、すまない。考え事をしていて聞き逃した。最後の娘の名前は？」

「ぼーっとしてるんじゃない、馬鹿者。志津香だ、志津香！」

「気をつけろよ、彼女も数多くの属性の魔法を…」

「返す言葉もないな。ゼスと聞いて友人のことを思い出していた」

「ん？美少女か？だったら俺様に紹介しろ」

「いや、男だよ」

「なんだ男か。…ん、なるほど、以前女に興味ないとか言っていたが、そういう事か。貴様、ホモだな！」

「一応訂正しておくが、女じゃなくて、お前が誰を抱いたって話に興味なかっただけだからな。」

「ル、ルークさんにそんな趣味が…」

「違うから。あり得ないから。信じないでくれ、シィルちゃん！」

ががは、と一歩ルークから離れながら笑うランス、信じてしまったのかショックを隠しきれない様子でルークを見るシィル、必死に弁解するルーク。やんややんやと大騒ぎを始める。

「あの…まだ話の途中なんだが…」

―カスタムの町　地獄の口―

ラギシスから少女たちの情報を聞いた三人は、彼女たちが築いたという迷宮の前まで来ていた。住人の間では、地獄の口と呼ばれて恐れられている場所だ。

「さあ、入るぞ！ががは、とっとと少女たちをお仕置きして、報酬ゲットだ！」

ランスが先頭に立ち、その後ろをルークとシィルがついて行く。中に入ると辺りは暗く、少し先も見通せないほどだった。ただでさえ暗い洞窟が、地下にあることで光の全く差し込まないダンジョンになっていた。

「とりあえず明るくしますね」

シィルが呪文を唱えると、2メートルくらいの位置にミニ太陽が現れ、ダンジョン内を明るく照らす。

「んー、やはり魔法使いがパートナーだと仕事がやりやすいな。もうちょい大事に扱ってやれよ、ランス」

「ふん、こいつは俺様の奴隷だから、俺様がどう扱おうが問題ない。余計なこと言ってないで、さっさと奥に進むぞ」

そう言って先に歩いていってしまうランス。ダンジョン内はあまり入り組んでおらず、出現するモンスターもきゃんきゃんやミートボール、ハニースライムなど、雑魚モンスターばかり。道中出るモンスターを倒しながらスムーズに奥へと進んでいく三人。と、ランスの足が滑る。足下が急に坂になっていたのだ。

「げ！！」

「うおっ、人の足を掴んで巻き込むな！！」

「きゃあぁぁぁぁぁ！！」

巻き込まれるルークとシィル。三人は下にあった地下水湖に仲良く落ちていった。

―洞窟内　研究室―

洞窟内のある一室、ダンジョンを築く際、わがままを言って無理矢理作った部屋だ。机の上には怪しげな薬品の入ったビーカーや、拡げたままの難しそうな書物が散乱していた。そこに、少女はいた。白衣を身につけ、顔には特徴的なまん丸メガネ。彼女がここで研究しているのは、新たな兵器。魔法の才能を持たない戦士でも、魔法使い同等の威力を持った長距離攻撃を可能とする新兵器を開発していた。

「もしもこれが完成すれば…戦闘の歴史がひっくり変わるわよ…ふふふ」

怪しげな笑みを浮かべ、メガネがきらーんと光る。と、そのとき研究室の入り口前からゴゴゴゴ、と音が聞こえる。モンスター進入撃退用のトラップが発動したのだ。左右の壁が迫ってきてモンスターを押しつぶす、彼女の自信作である。

「うがぁぁぁぁ！！なんじゃこりゃぁぁぁ！！」

「きゃー、ランス様ぁぁぁぁ！！」

「まずい、駆け抜けるぞ！ギリギリ間に合うかもしれん！」

いけない、モンスターではなく人間が引っかかってしまったらしい。慌ててトラップのスイッチを切る。

「ん？止まったぞ？がはは、へっぽこトラップめ、故障したな」

むか。私の作ったものがそんなに簡単に故障してたまるものですか、と聞こえてきた声に腹を立てる少女。程なくして、部屋の扉が開かれる。そこには冒険者が三人立っていた。一応こちらが危険な目にあわせてしまったので、謝罪する。

「すいません、大丈夫でしたか？怪我はないですか？」

「うむ、怪我なら平気だ。ところで君は何者だ？」

一番前にいた口の大きな冒険者が問いかけてくる。彼の言うように、三人ともなぜか濡れているが、怪我はないようだ。ホッとしながら、彼女は男の問いに答える。

「あぁ、申し遅れました。私の名前はマリア・カスタード。よろしくお願いします」

第１４話　抱く疑念（後書き）

［人物］

ラギシス・クライハウゼン

ＬＶ　２３／３０

技能　魔法ＬＶ２

　カスタムで魔法塾を開いていた魔法使い。故人。弟子でもあり、娘のような存在であった四人の少女たちに反逆され、死亡する。死語は地縛霊となってカスタムに留まる。

［モンスター］

きゃんきゃん

　一つ星女の子モンスター。無邪気な性格で戦闘意欲はなく、人間魔物問わず、遊んでと持ちかける。

ミートボール

　槍と盾で武装した知能を持った肉団子。食べてもおいしくない。

ハニースライム

　体が溶けているハニー。ハニー誕生の儀式に失敗すると、体が固まりきらず、この形状となる。

［技］

見える見える

　ミニ太陽を生み出す初級魔法。ダンジョン内を探索するのに非常に役立つ。

［装備品］

クリスタルリング

　カラーのクリスタルを加工して作るアクセサリー。魔力を二倍にする効力があるが、非常に高価であると同時に、市場に中々出回らない。

［アイテム］

クリスタル

　カラーの額に埋め込まれている宝石。処女を失うと色が赤から青に変化し、膨大な魔力を持つようになるが、クリスタルを抜かれたカラーは消滅してしまう。相場は２０万ＧＯＬＤ。カラー族は見目麗しく、クリスタルは犯されれば犯されるほど魔力を増すため、一攫千金を狙う者たちによるカラー狩りが後を絶たない。

第15話　その娘、研究者

ー洞窟内　研究室ー

「こんなに友好的ですと戦い辛いですね、ランス様…何かの間違いじゃないのですか？」

シィルが小声でランスに問いかけるのも無理はない。四魔女の一人であるはずの少女は、今自分たちの前でご丁寧に自己紹介をしながら、ペコリと頭を下げて一礼しているのだ。シィルの言うように、自分の師匠を殺して指輪を奪うような人間には思えない。まあ、そういった初見での評価が当てにならないことは、この間の王女様で証明済みだが。

ーリーザス城　王女の間ー

「ぶぇっくしっ！」

「リア様、大丈夫ですか？風邪気味なのでしたら、今すぐお休みになって…」

件の王女が大きなくしゃみをしていた。心配そうにする侍女。

「ううん、大丈夫。ところで、ダーリンの居場所は分かった？」

「はい。かなみの調査の結果、現在ランス様は仕事でカスタムの町を訪れているようです」

「じゃあ今すぐ向かいましょう！マリス、準備を」

「申し訳ありません、リア様。例の物を持ち出す許可が下りるのに、もう少々だけお時間が…」
「えー、今すぐ出発したいのにぃ…ぷんぷん」

仕事を放り出してランスに会いに行くことは特に問題視していないマリスだが、すぐに出発しようとするリアを止める。理由は王女がランスに会いに行くに当たって、城から持ちだそうとしていたモノだ。それは本来持ち出し厳禁の代物で、裏で実権を握るマリスだからこそ、色々と手回しをして持ち出すことが可能なのだ。

「早うしの準備は整っておりますので、許可が下り次第すぐに出発できます」
「急いでね、マリス。待っててね、ダーリン！」
「かなみも準備を進めておくように」
「はっ！」

この部屋にいたもう一人の人物にマリスが声を掛ける。カーテンの裏に潜んでいたかなみはそう返事をしながら、主君が目当てにしている人物とは別の人のことを考えていた。

「（調査しているときに分かったんだけど、ルークさんも今カスタムに滞在してるみたいなのよね…偶然会ったりとかするかな…）」

ー洞窟内　研究室ー

「なんだか寒気が…」
「大丈夫ですか、ランス様？」
「それで、あんたはここで何の研究をしているんだ？」

ランスが得体の知れぬ悪寒を感じ取っている横で、ルークはマリアにそう尋ねる。すると、マリアがンバッ！と目を輝かせてルークを見た。

「興味ある？興味あるのね！しょうがないな、ちょっとだけ説明してあげる！魔法って才能ある人しか使うことが出来ないでしょ。だから自然と魔法を使えない人は戦士として前衛に立つことが今の戦闘の通例になってるの。でもそれを覆せるとしたら？戦士にも魔法使いと同じだけの破壊力を持った後衛攻撃が出来るようになったら？」

「一応遠距離をこなす戦士も少数だが存在はするんじゃないか？弓矢とかの武器もあるし、遠距離技を使う奴もいるしな」

捲し立てるように喋り出すマリアにちょっと引き気味になりながら、ルークが尋ねる。自分自身、一応真空斬という遠距離技を持っているからこそ、彼女の発言に少し引っかかったのだ。すると、マリアはやれやれ、分かってないなーという顔をしてみせる。

「確かにそういった例外もあるわ。でもね、弓矢なんかはある程度のセンスや努力が必要だし、必殺技なんかそれこそ持って生まれた才能が必須になるでしょ。そうじゃなくて、才能も努力も必要としない新兵器の開発をしているの！」

「努力を必要としないというのは無茶じゃないですか？やっぱり強くなろうとしたら、ある程度の努力が必要にはなってくるかと…」

「無茶を可能にする！そういった研究をしてるの！もしもこれが完成すれば…ふふふ…」

シィルの問いに、グッ！と右拳を握りしめマリアが答える。その瞳は燃えていた。一見すればマッドサイエンティストの類に見られ

かねないが、確かに彼女の言う兵器が本当に実現すれば、戦いの歴史は大きく動くだろう。

「そこまで言うとなると興味があるな。どういった兵器か俺様に見せてみろ」

「残念だけどそれは秘密。まだ完成していないもん。詳しい質問も受け付けないわよ。私が欲しいのは弟子じゃなくて、研究を手伝ってくれる人なんだから」

「こら待て、俺様を助手扱いとは無礼な！」

「…あれ？助手希望の人じゃなかったの？だったら助けるんじゃなかったなー」

そう言ってのけるマリア。今の発言に、ルークは少し思うところがあり、問いかける。

「つまり…助手希望の人間でなかったら、死んでしまっていても構わなかったと？」

「うん、だって時間の無駄じゃない」

先ほどまでと何ら変わらない調子で、マリアは恐ろしいことを言ってのける。それがさも当然であるかのような様子に、ルークは若干身震いする。こんな少女が…

「わぁ、私たち間違われたおかげで助かったんですね。ラッキーです」

ガクッ、とルークがこける。相変わらずシィルは少し天然が入っていた。

「喜ぶな、バカ」

「ん？助手希望じゃないとなると…もしかして敵？」
「うむ！四魔女を退治しに来たのだ！」
「あー、それじゃあお帰りはあちらです。研究の邪魔になるから出て行ってください。早く出て行かないと警備のハニーやグリーンハニーやダブルハニーをたくさん呼ぶわよ」
「ハニーに何かの拘りでも！？」

マリアがお帰りください、とルークたちの入ってきた扉を指さす。警備を呼ばれるという発言を気にする様子もなくランスが答える。

「がはは、そんな雑魚どもは全く怖くないぞ。それより、どうして町を陥没させたんだ？」
「……」
「質問を変えよう。フィールの指輪は？」
「一つは私が持っているわ。ほら、これがそうよ」

マリアが手をかざすと、その指には青い指輪が填められていた。本当にあったのか…とルークは内心動揺する。

「あなたもこの指輪が目当てなの？でも渡せないわ」
「がはは、なら力尽くで奪うまでだ！」

ランスがそう言うと同時にルークも臨戦態勢に入る。魔力を数倍にするというのが本当なのであれば、油断するわけにはいかない。魔法を使われる前に取り押さえる。

「はぁ…なら悪いけど死んでね」

油断したつもりはなかった。初級魔法ならばいくら魔力が上がっていたところで対応は可能だし、中級以上ならば呪文の詠唱をして

いる間に飛びかかれるよう構えていた。しかし、結果はどちらでもなかった。マリアの後ろに水の柱が噴き上がる。

「ほぼ無詠唱で中級魔法だと！？」

「迫激水！！」

水の柱が滝となり、ルークたちに襲いかかる。攻撃範囲が広く、逃げ場がない。

「ぐっ…」

「うがぁ、水が水が水が！！」

「あーん！ぶくぶくぶく…」

滝に飲み込まれ、部屋の外に押し流される三人。それを見届けると、マリアは新しいトラップを発動させて、時間を無駄にしたというような顔つきで研究の作業に戻っていった。

ー洞窟内　研究室前ー

「うがぁぁぁ！開けろぉぉぉ！！」

ランスが扉をがしがしと蹴る。かなり遠くまで押し流された三人が部屋の前まで戻ると、扉は固く閉ざされ中に入ることが出来なくなってしまっていた。

「結界…とは違うな。さっきのトラップと同じで、何かしらのカラクリか」

「これじゃあ、マリアさんにもう一度会うことが出来ませんね」

「ひとまず洞窟内に扉を開ける手段がないか探すぞ！あの女、今度は容赦しないぞ。あんな事やこんな事してやる！」

ぷんすかと怒りながら、洞窟内の先に進んでいくランス。それにルークとシィルはついて行くが、ルークは先ほどの見通しの甘さを反省していた。魔力が上がる、ということだけを鵜呑みにし、詠唱時間さえも早まるという可能性を考えていなかった。一つ間違えれば、それが命取りになる。冒険者として気を引き締め直すと、少し開けた場所に出た。

「あ、ランス様！あそこにどなたかいらっしゃいますよ！？」

言われた方を見る二人。そこには傷だらけの女性がいた。格好や近くに落ちている剣を見るに、冒険者だろう。すると、彼女が苦しそうにこちらに問いかけてきた。

「だっ…誰？」

「心配しなくて良い、同業者だ。俺はルーク、こっちの二人は同じく冒険者のランスと、そのパートナーで魔法使いのシィルだ」

「ふむふむ、美人じゃないか。…ぐふふ」

「よろしくお願いします」

「…どうやら貴方たちは奴らの仲間じゃなさそうね。私はネイと言い…ゲホッ」

挨拶の途中で辛そうに咳き込む。放っておくと危険な状態だ。

「シィルちゃん、とりあえずヒーリングを」

「はい。いたいのいたいの、とんでけーっ！」

シィルが治癒魔法を唱える。彼女の傷がふさがっていき、顔色が

良くなっていく。

「ふぅ…ありがとう。随分と楽になったわ」
「応急処置だからしばらくは安静にしていた方が良いな。こんな状況ですまないが少し聞いて良いかな？君は一人でこの迷宮に来たのか？」
「いいえ、私たちが迷宮に入ったのは四日前。私、ゼウス、カーネル、バードの四人で入ったの。目的は多分貴方たちと同じ、四魔女退治ね」
「うむ、俺様たちも同じ目的だ。それで、他の奴らはどうした？」
「水の彫像に負けて、みんな散り散りになってしまったわ」
「水の彫像？」
「強いんですか？」
「第二研究室を守っているガーディアンよ。恐ろしく強い上に二体いてね。私たちのパーティーでまともに応戦できていたのはバードだけだったわ」
「それはお前らがへっぽこだったからだろう。で、第二研究室とはなんだ？」
「へっぽ…！？」

ランスの発言に顔を歪めるが、一応命の恩人であるため話を続けるネイ。

「…あの迷宮にはマリアの研究室が二つあるの。一つはトラップで守られた第一研究室、もう一つが水の彫像に守られた第二研究室。基本的にマリアはどちらかにいるわ」
「俺たちが会ったのは第一研究室だな。扉を開ける手段があるか分からんし、第二研究室に向かった方が良さそうだな」
「待って。第二研究室に向かう途中の扉には鍵が掛かっているわ。頑丈な扉だし、破壊しての進入も難しいと思うわ」

「鍵か…水の彫像まで辿り着いたということは、君たちはその鍵を持っていたんだろう?その状態では探索の継続は無理だろうし、悪いが譲って貰えないかな?」
「ええ、ダンジョン内の宝箱から発見して持っていたわ。でも、彫像から逃げる途中で落としてしまったの。落とした場所は、多分地下水湖だと思う」
「おお、その場所ならさっき通ったぞ。よし、ルーク、探してこい!」
「俺かよ…」
「当たり前だ!ネイちゃんを町まで送り届けなきゃならんがそれには護衛がいるし、悪化したときのための治療用でシィルも必要だからな」

まあ筋は通っている。シィルがネイと一緒に行動するのが確定な以上、主人であるランスがそちらの護衛をするのが普通の考えだ。

「ま、いいか。町の酒場で待っていてくれ。ネイは怪我人だからな、無茶はするなよ」
「がはは、任せておけ」
「あ、一緒にかえるの耳飾りも落としてしまったの。大事なものだから一緒に探してきて貰えないかしら?」
「了解した。じゃあ行ってくる」

そう言って地下水湖に向かうルーク。残された三人の内の一人が、口をにたっと開いた。

「じゃあ、私たちも町に引き返しましょう。帰り木は持ってるのかしら?」
「……」
「…なんでにじり寄ってくるの?なんで笑っているの?なんで何も

答えないの？なんでそっちの娘は遠い目をしてるのぉぉぉぉぉ！？」

ーカスタムの町　酒場ー

「いらっしゃーい。お仲間なら奥の席にいるよ」

酒場に入ってきたルークにエレナがそう言って案内する。あの後地下水湖まで引き返したルークは、時間を掛けて探した結果、鍵と耳飾りを発見し、約束の酒場までやってきたのだ。

「戻ったぞ。一応どっちも発見した…ん、ネイはどこに行った？」

「がはは、泣きながら「いつか殺してやる」とか言ってどこかに行ってしまったわ」

…おかしい、この展開、最近どこかで体験したような。

「…無茶はしないように言っておいたはずだが…」

「うむ、英雄である俺様とのHは無茶な行動ではないな。がはは」

…そう、あれは確か盗賊団の…

「そうそう、お前も含まれてたぞ。「治療してくれたシィルはいいけど、あんたら二人にはいつか地獄を見せてやる！！」とか言ってたし」

「完全にデジャブッ！！」

第１５話　その娘、研究者（後書き）

［人物］

ネイ・ウーロン

ＬＶ　８／２７

技能　シーフＬＶ１

女冒険者。傷つき倒れたところをランスに襲われる。ランスとルークを恨んでどこかへと姿を消す。いつか某盗賊の娘と一緒に復讐に来たりするかもしれない。

ゼウス

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、モンスターに襲われ死亡。

カーネル

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、足を滑らせ転倒し死亡。

［モンスター］

ハニー

茶色い基本形ハニー。意外なことに、ランスシリーズに初登場したのは６。

グリーンハニー

緑色のハニー。右手にトライデンを持つ。１から長いことシリーズ皆勤を続けていたが、戦国ランスにて遂に記録が途切れる。正直、出して欲しかった。

ダブルハニー
　誕生の際、失敗して二体くっついてしまったハニー。右手にトライデン、左手に花を持ち、お腹には日の丸の国旗がある。右と左で性格が違う。

［技］
迫激水
　氷系内水類の中級魔法。水の柱が噴き上がり、滝となって相手に襲いかかる。

［アイテム］
帰り木
　ダンジョンから脱出する事の出来る冒険者の必須アイテム。一度使うとなくなる。

かえるの耳飾り
　ネイの大事なもの。返しそびれたのでルークが一応持っている。

［その他］
ハニー種
　ハニワ状の不思議な生物。男女の区別があり、同種内で繁殖可能。人間ともある程度共存している。魔法を無効化する「絶対魔法防御」という特性を持つ。

うし
　ムシの一種。丸っこい赤い体でみゃーみゃーと鳴く、世界で最もポピュラーな家畜。足が速く、上手く走らせれば時速１００ｋｍに

も達する。はやうまやてばさき等うしよりも速い生物も存在するが、うしが最も簡単に扱えるため、交通手段としても広く利用されている。

第16話　水使いマリア

ー洞窟内　第二研究室前ー

「これがネイの言っていた水の彫像か」
「うーん、腰のラインがいやらしい」

三人は洞窟内に戻り、第二研究室前まで来ていた。そこには美しい女神像が二体並んでいた。彼女の話の通りなら、これがこの部屋を守るガーディアン。

「部屋に入ろうとすると動き出すタイプか？」
「では入る前に破壊してしまえばいいんだろう。がはは、とぉー！」

ランスが剣を振りかぶり、女神像を破壊しようとすると、轟音と共に二体の彫像が動き出した。

「我らが眠りを妨げる不埒者ども」
「その身で償いをするがよい」
「ええい、部屋に入ろうとしなくても動き出したではないか、この嘘つきが！」
「別に断定してなかっただろうが。ランス、右の彫像は任せた。シィルちゃん、後ろから援護を頼む」
「はい！」

ルークはそう言うと、左から襲いかかってきた彫像に対峙する。見るからに頑丈そうな彫像だが、一定の距離で止まると呪文詠唱を始めた。彫像だから物理攻撃メインかと思ったが、どうやら魔法攻

撃タイプのようだ。ルークもその距離で腰を落とし、剣を左から右へ振り抜く。

「真空斬！」

ルークの放った斬激は彫像の腕に直撃し、右腕が崩れ落ちる。が、特に気にすることなく呪文詠唱を続ける。

「水雷」

「おっと…痛みを感じてないな。一気に破壊するのが得策か」

彫像の放った魔法を躱し、ルークが彫像への戦闘方針を決める。少し離れた場所で、ランスももう一体の彫像と対峙していた。が、その瞳はとろん、と閉じかけている。

「えい、炎の矢！ランス様、起きてくださーい！」

「おぉ！くそ、厄介な魔法使いやがって！」

シィルが炎の矢を彫像に放ち、寝かけていたランスを起こす。そう、ランスは彫像の放ったスリープの魔法で眠りかけていたのだ。地味ながらも強力な魔法である。

「水雷」

「ふん、一気に仕留めてやる。必殺、ランスアタァァァック！！」

彫像の放った魔法を空中に飛び上がることで躱し、その頭に渾身の力で剣を叩き込む。剣の直撃の威力と、そこから発せられた闘気が重なり合い、彫像は粉々に砕け散った。

「ふん、ざっとこんなもんよ」

そう言い、ルークの方を見る。すると、ルークもシィルの炎の矢の援護を受け、空中に飛び上がったところだった。その姿が先ほどのランスと重なる。っておい、ちょっと待て…

「真滅斬！！」

闘気を纏った刃が彫像の頭から下半身まで一直線に走る。真っ二つになった、彫像が崩れ落ちた。

「な…な…な…」
「ランス、終わっていたのか。時間を掛け過ぎたな、すまん。」
「パ…」
「パ？」
「パクリだ！俺様のランスアタックのパクリだ！貴様にはプライドがないのか！！！」

ランスがそう大声を上げ、慰謝料だ、賠償金だと騒ぎ立てる。

「いや…一応１０年以上使っている技なんだがな…」
「ふん、証拠がないな。きっとこの間のユラン戦で見てパクッたのだろう」
「一応キースに聞いて貰えれば証言してくれると思うが」
「あんなハゲの言うこと信用できるか！今後その技を使いたければ一回につき１００００ＧＯＬＤ俺様に払え！」
「いやいやいや。おかしいから、その金額。それに構えは似てるけど微妙に違うから。俺のは一点集中型。お前のは拡散型。俺にはあんな風に闘気を爆発させて周りを巻き込むなんて芸当、真似出来ん。いやー、才能の差かなー。凄いなー」
「むっ、そうだな。がはは、俺様は天才だからな。うむ、言われて

みれば確かにちょっと似ているだけで、俺様のものとはレベルが違うな。」

そうルークが煽てると、わかりやすく反応するランス。なんとか慰謝料だか賠償金だかを払う危機を乗り切ったようだ。上機嫌で第二研究室に入っていくランス。それを追いかけながら、シィルがルークにぼそっと喋り掛けた。

「すいません、ルークさん。…でも、本当に似ていましたね」

そう言ってランスの後を追っていくシィルの後ろ姿を見ながら、ルークは小さな声で呟いた。

「似てる…よな、やっぱり。ってことは…そういうことなのかね…」

その言葉は、ランスとシィルの耳に届くことはなかった。

ー洞窟内　第二研究室ー

「「「「あ」」」」

扉をくぐると、そこにはマリアがいた。扉の先はすぐに第二研究室に繋がっている訳ではなかったようで、開けた場所になっており少し道が続いている。マリアは別の道を通って、この扉の前に来たところだった。おそらく、第一研究室から直通で道が繋がっているのだろう。

「がはは、さすが俺様の強運！見ろ見ろ、しっかりマリアがいたぞ

！」
「はい、とってもラッキーです」
「げ、なんでここに」
「そちらこそどうしてここに？その道がおそらく第一研究室と繋がってるんだろうが、第二研究室に用事でも？」
「第一研究室は貴方たちのせいで水浸しになっちゃったのよ！責任取ってよね！」

ぷんすかと怒るマリアに対し、どう考えても自分のせいだろ、と思うルーク。

「ふん、そんなことはどうでもいい！さぁ、勝負しろマリア！今度は俺様が勝つ番だ！」
「まあ、三対一で申し訳ないが、諦めてくれ」
「ふん、この指輪がある限り、私は負けない。それが死なないと判らないみたいね！」

マリアがそう言って手を前に差し出すと、填められていた指輪が妖しく光る。それが戦闘開始の合図だった。

「行くぞシィル、ルーク！」
「シィルークって名前みたいですね」
「暢気だな、シィルちゃん…」
「迫激水！」

マリアが唱えると、水の柱が滝になって三人に襲いかかる。が、先ほどと違い全員がそれを避ける。第一研究室のときは、部屋が狭く、部屋の外の通路も狭い一本道であったため逃げ場がなかった。しかし、今は違う。ランスとルークは素早く左右に避ける。そう、ここは開けた場所であるため、多少範囲の広い攻撃でも十分に避け

るだけのスペースがあるのだ。シィルも扉をくぐって前の部屋に戻り滝をやり過ごした。

「ちっ、水雷」

続けて水雷を放つマリア。ルークが躱すと魔法は後ろの壁に命中し、壁が崩れた。本来はあまり威力のない魔法だが、指輪のせいでかなり凶悪なものになっていた。

「がはは、俺様がお仕置きしてやる」
「水雷水雷水雷水雷もいっちょおまけに水雷！」
「うおっ、連発するんじゃない！！！」

元々連発可能な魔法ではあるが、流石にもうちょっと時間が掛かる。ここまでノータイムで連発されては流石のランスとルークも近寄ることが出来なかった。近寄りさえすれば、一撃で仕留められる。後はどう近づくか…するといつの間にか部屋に戻ってきていたシィルが炎の矢で応戦を始める。

「炎の矢、炎の矢！」
「ふん、水雷水雷水雷水雷」

威力が違うため相殺とはいかないが、炎の矢が直撃した水雷は威力が落ち、ルークたちに届く前に地面に落ちる。が、詠唱速度が違いすぎる。

「ええぃ、シィル！もっと連発しないか！」
「すいません、ランス様。これが限界です…」
「いや十分だ。多少余裕が出来た」

シィルのお陰で避ける動作に余裕が出来たルークは腰を落とし、剣を振り抜く。

「真空斬！」

放たれた刃が水雷とぶつかり、相殺する。

「嘘…遠距離攻撃が使えたの？威力も高いし…でも速さが伴わなきゃ…」

「真空斬！真空斬！真空斬！」

「れ、連発可能！？ずるいわよ！みっ、水雷水雷水雷」

「炎の矢、炎の矢」

立場が逆転する。ルークとシィル二人の攻撃をマリアが相殺する形となり、自然とランスに攻撃の手が回らなくなる。

「決めろ、ランス！」

「おお、くらえぇぇぃ！！」

マリアの方に前進し、ほどよい距離で空中に飛び上がりランスアタックの構えを取る。狙うはマリアの手前の地面、ユランのときと同じように衝撃波で吹き飛ばすつもりだ。

「引っかかったわね、まずは…迫激水！」

そう言うとマリアがルークとシィルに向かい迫激水を放つ。それを左右へと躱す二人。と、同時にマリアの意図が読めたルークは慌てて腰を落とす。マリアはランスに向かって両手を揃えて突き出した。あれは上級魔法。

「さっきまでで斬撃の速度は見たわ、すぐに気がついたのは良かったけど、そこからじゃ間に合わないわよ。…死ね、ウォータミサイル！！」
「んげ！！！」
「ランス様ぁぁぁ！」

マリアの両手から強力な水の塊が撃ち出される。指輪で増幅されたその威力は、直撃すれば一溜まりもない。焦るランス。

「ランス、俺を信じて気にせず振り抜け！うぉぉぉ、真空斬！！！」

ルークが真空斬を放つ。間に合うわけがない、とマリアは思っていた。それが誤算。マリアは先ほどまでの真空斬がルークの全力だと思い込んでしまっていたのだ。真空斬は闘気の量によりその威力、速度、連射性が変化する。先ほどまでは連射性を上げるため、威力と速度をある程度落としていたのだ。そして、今から放つのは闘気を十二分に込めたため連射できないが、威力、速度共に申し分ない全力の真空斬。放たれたその刃は、ランスに迫っていたマジックミサイルに直撃し、水の塊が半分に割れる。割れた魔法はランスに命中することなく地面へと落ちていった。

「うそ…そんな…」
「ランスアタァァァック！！」

ランスアタックがマリアの目の前の地面に命中し、衝撃波がマリアを襲う。吹き飛ばされながらマリアはまだ自分の敗北を実感できずにいた。

―洞窟内奥　謎の場所―

その部屋にある人影は三体。明かりは点っておらず、顔が判らない。ふいに声が発せられた。

「マリアがやられたようだな…」
「フフフ…奴は四魔女の中でも最弱…」
「冒険者ごときに負けるとは魔女の面汚しよ…」

パチッ、と部屋の明かりが付く。そこにいたのは一人の少女と二体の幻獣であった。明かりを付けたのは新しく部屋に入ってきた女性、四魔女の一人エレノア・ランだ。

「もう、ミル！暗くして遊んでたら目が悪くなるでしょ。それに今の喋り方はなんなの？」
「漫画で読んだの。かっこいいでしょ？」

部屋の中にいたのはミル・ヨークス。こちらも四魔女の一人だ。

「幻獣は立ってるだけで、全部自分で喋っちゃってるじゃない。それに、マリアを勝手に最弱にしたり、負けさせたりしないの。ちゃんと謝っておきなさい」
「はーい」

まさか本当にマリアが負けていようとは夢にも思っていない二人であった。

第16話　水使いマリア（後書き）

［モンスター］

水の彫像

　第二研究室を守るガーディアン。スリープ等の高度な魔法を使用してくる強敵。初代2では、運が悪いと本当に何も出来なくなるため、初見で殺されたプレイヤーも多いはず。

［技］

真滅斬　（オリ技）

使用者　ルーク

　ルークの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす技で、構えがランスアタックと非常に似ている。衝撃波を生み出して広範囲に影響するランスアタックと違い、刃に込められた闘気は拡散することなく直撃した相手を斬り伏せる。単体攻撃だが、直撃時の威力はランスアタックよりも上。

炎の矢

　指先から生み出した炎の塊を放つ初級魔法。魔法使いがまず初めのうちに習うことになる基本魔法だが、使い勝手は良い。

水雷

　指先から生み出した水の塊を放つ初級魔法。水魔法の使い手は少ないため、割とレア魔法である。

ウォータミサイル

　揃えた両手から濃縮された水の塊を放つ上級魔法。レアな水魔法の上級呪文なため、使い手が殆どいない。

スリープ
　対象に眠りをもたらす支援魔法。非常に強力な魔法で、その分使いこなすのに高度な技術を要する。ゼスにはこれだけが得意な珍しい魔法使いもいるらしい。

第17話　明かされた真実

ー洞窟内　第二研究室前ー

「がははは、新兵器開発とか言っていたな。これが俺様のハイパー兵器だー！」

「うわ、でか！いーーーやーーー！」

部屋の中からランスとマリアの声が聞こえる。今は勝者の特権、お楽しみタイムだ。ルークとシィルは部屋の外で待っていた。一般人や無抵抗の人間を無理矢理犯そうとすれば多少の苦言は呈するが、基本的に向かってきた相手を犯すことに関してはルークは何も言わない。人によっては外道とも言うであろう行為だが、命のやりとりをしているのだ、たかだか犯される覚悟もない奴が向かってくるなというのがルークの考えだった。もちろん万人に受け入れられる感覚ではないだろう。以前ラーク&ｍｐ;ノアコンビと共に仕事をした際、この事を話したら理解できないと苦言を呈された。逆にルークから言わせるとあの二人が純粋すぎるという感覚。キースから言わせればどっちもどっち、とのこと。ふと少し離れた位置にいるシィルを見ると、悲しそうな顔をしていた。

「はぁ…」

「どうした、シィルちゃん。ため息なんかついて。やっぱり…こういうのは嫌か？」

ため息を吐くシィルを見かねたルークが問いかける。

「いえ、私はランス様の奴隷ですから…」

「…リーザスのかなみと俺が話したとき、側で聞いてたよな。その上での意見かな？」
「…出来れば、止めて欲しいです。でも…」
「まあ、言って止めるような奴じゃないだろうしな…」
「…ランス様にとって…私なんてどうでもいい存在なのかな…」

そう言って更に落ち込むシィル。自然と涙が頬を伝う。やれやれ、一番大切な人を悲しませてるんじゃねーよ、とルークは思う。まあルークがマリアとの情事を止めなかったのも原因の一環ではあるのだが、それはそれ。

「とおおおおお！！！！」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

という声が聞こえたかと思うと部屋の中が静かになる。どうやら終わったらしい。

「どうやら終わったみたいだな。シィルちゃん、部屋に戻ろうか」
「あ、はい。ありがとうございます」

そう言って部屋に戻ろうと扉に向かう二人。扉に手を掛けながら、ルークはシィルに声を掛ける。

「大丈夫だよ、シィルちゃん。ランスは君のことを大切に思っている」

そう言いながらルークが振り返り見たのは、シィルが魔力を帯びた光に包まれている姿だった。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「あれは…テレポートウェイブ！シィルちゃん！！」

シィルを包んでいた光にルークは見覚えがあった。依頼で魔法使い退治をした際、一度だけ見たことがある。光で包んだ対象をどこか別の場所にワープさせる魔法装置、テレポートウェイブ。ルークは慌ててシィルに手を伸ばすが、その手が届ききる前にシィルは光に呑まれ、この場から消えてしまった。

「しまった…」

どこかに魔女を一人倒したことでの気の緩みがあったのかもしれない。一人取り残されたルークは拳に爪を食い込ませながら自身の油断を悔やんだ。

―洞窟内　第二研究室―

「おっかしいなー、この指輪どんなことしても外れなかったのに、どうして外れたんだろう」

部屋の中では情事を終えたマリアが不思議そうに指輪を見ていた。ランスとのHが終わると、それまで絶対に外せなかったフィールの指輪が外れたのだ。

「スケベの力は偉大ということだ。それよりも、今後のことだが…」
「わかっているわ、町の人たちにこんな迷惑を掛けたんですもの。償いはちゃんとする。でも…その前にラギシスだけは許せない！」

大きな変化は指輪が外れたことだけではない。マリアの様子が変化していたのだ。自分の行いを悔やみ、町の人たちへの償いをした

いと自ら申し出てきたのだ。反省や心境の変化で済ませるにはあまりにも唐突な異変。

「ラギシスを許せないとはどういうことだ？お前たちが反乱を起こして指輪を奪ったんじゃないのか？」

「違うわ…私たちは…話したら長くなるけど…」

マリアが口を開き掛けたところで、バンッと扉が開く。部屋に入ってきたのはルークだ。が、様子がおかしい。それに一緒であったはずのシィルの姿がない。

「ランス…スマン、落ち着いて聞いてくれ…」

「ん？何だ急に？それにシィルはどうした？」

「…シィルちゃんが攫われた。…俺の失態だ」

「な…なんだとぉーーー！ルーク、貴様がいながら何をしていた！！！」

「待って、攫われたってもしかしてテレポートウェーブじゃない？だったら防ぐのは難しいんじゃ…」

「ああ、テレポートウェーブだ。だが、俺がもっと周りに気を張っていれば、シィルちゃんではなく俺が転送されるという手段もあった。一人で戦うことの出来る戦士ではなく、前衛がいないとまともに戦うのは厳しいシィルちゃんが一人になってしまったということが最悪なんだ」

「な…なんてことだ…シィル…」

ランスがへたへたと座り込んでしまう。普段の気丈な態度からは見て取れない落ち込み様だ。先ほどまでとの態度の一変に驚くマリア。

「げ、元気出してよ。きっと見つかるはずだから…」

ランスを慰めながら、マリアはその落ち込みように、実は悪い人じゃないのかも、とランスの評価を改めていた。

「…あいつに有り金全部持たせてたのにー！シィルのばかやろー！！俺様の許可もなくいなくなりやがってー！！」

「えっ！そんな理由なの！？」

「ふん、まあ俺様がすぐに見つけ出してお仕置きしてやる。シィルめ、待っていろ。がはは！」

そうあっけらかんとした様子でランスが言うのを見てマリアが呆れる。その後、とりあえず今後の方針をまとめるため一旦町まで戻ることとなった。帰り木で町にワープする直前、ルークはランスだけに聞こえるよう小さな声で話しかけた。

「本当にすまない、後でぶん殴ってくれて構わない。…必ず助け出す！」

「…ふん。しっかり働けよ」

―カスタムの町　酒場―

「いらっしゃーい、…あれ？あのゴッドオブヘアーの娘は一緒じゃないの？それにそっちのコートの人は新顔さん？」

酒場に入るとエレナが元気に声を掛けてくる。シィルがおらず、代わりにフード付きコートを深く被り、顔のよく分からない人物がいるのが気に掛かり尋ねてくる。

「がはは、あいつは邪魔になったから捨ててやったわ」
「ランスさん、ヒドすぎ…」
「宿泊用の奥の部屋、空いているかな？出来れば少しだけ使いたいのだが」
「空いてますよー。では、三名様ご案内でーす！」

この酒場は奥の部屋を宿泊施設としていた。本来宿屋が別にあったのだが、現在建物が崩れていて使い物にならないため、元々は酔った客の介抱用であった部屋や物置などを片付け、冒険者のために開放していたのだ。部屋まで通され、エレナが出て行ったのを見送ると、マリアがコードを脱ぐ。町をこんなにした犯人の一人であるマリアが見つかればパニックになるため、このように姿を隠していたのだ。

「ふぅ…暑かった」
「そういえばそちらだけにさせてしまって、こちらの自己紹介がまだだったな。俺はルーク」
「俺様は英雄ランス様だ。そして、今攫われている無能のバカが奴隷のシィルだ」
「もうちょい言い方ってものが…まあ、とりあえず始めましょうか」

そう言って、マリアは自分たちがどうしてこのような事件を起こしたか、説明を始める。

「私たちはこの町の守護者となるため、ラギシスから必死に魔法を教わったわ。そして、半年前ラギシスは私たちに卒業証書だと言って一人一つずつ指輪を渡したの。それがこのフィールの指輪よ」
「盗んだんじゃなかったのか？」
「違うわ。あっちから渡してきたの。でもこれは、着けてはいけないものだったの。その晩、私の部屋に志津香がやってきたんだけど、

ラギシスの独り言を聞いてしまったらしいの」
「やはりそうか…全てラギシスの陰謀だったんだな？」
「そう、全てあいつが元凶よ」
「なんだ？ラギシスが怪しいと気がついていたのか？」
「確信は持てなかったが…奴の話に色々と引っかかる点があってな。もう少し情報が集まったら一応お前らにも言うつもりだったんだが…」

奴の言う通りなのであれば国宝級の指輪。それを自らは身につけず弟子に渡すという不可解な行動。これらがルークには引っかかっており、素直にラギシスを信用してはいなかった。

「着けてはいけない…というのは、やはり呪いの類か？」

ルークは当初、指輪がラギシスの言っていたような効果はないのではと疑っていたが、最初にマリアと戦闘した際の魔力量や高速詠唱から、その考えを破棄。次に疑っていたのが装着者が何かしらのデメリットを被る、いわゆる呪いだ。

「その通りよ。この指輪は十人分の魔力を吸い取って成長する恐るべき指輪だったの。既に九人分の魔力を吸い取った指輪を手にしたラギシスは、最後の媒体となる四人の魔法使いを捜していたのよ」
「ほー、つまりラギシスは指輪を回収するためだけにお前たちを育てていたわけだな」
「ええ、そしてそれを私たちが偶然知ってしまった。許せなかった…信じていたのに…」
「なるほど…それが反逆へと繋がるのか」
「ええ、そうよ。それに、魔力の溜まりきったフィールの指輪を四つ全て着ければ、無限の魔力を手に入れると言うわ。でも、この指輪を外されたら最後、私たちは魔力を失ってしまう。だからラギシ

スに戦いを挑んだの。戦いの衝撃で町は地下に陥没してしまったけど…」
「なるほど…ラギシスや町長から聞いた話とかけ離れているな。それが真実か」
ルークの発言にマリアが驚きで目を見開く。目の前の男は、死んだはずの人間から話を聞いたと言ったのだ。それも、自らの手で殺した相手。
「ラギシスが生きているの!?確かに殺したはずなのに!」
「生きてはいない。奴の館に地縛霊として漂っている」
「そう…後で見に行かないとね…そして、今度こそ…ふふふ」
マリアの目に殺意がこもる。無理もない話ではあるが。
「それで、マリアたち四人が迷宮を築いたのも指輪の影響ってことで良いのか?」
「ええ、この指輪には人を悪の方へ惑わせる力があるわ。気がついたら迷宮を築いて、やってくる冒険者たちを返り討ちにしていたわ。こんな地下迷宮築いて…私たちは何を…志津香たちも救わないと!」
「なるほどな…」
「ふん、指輪のせいで悪いことをしてるなら、指輪を外してやればいいんだろう?で、この指輪を外す条件は処女を奪うで良いんだな?」
「ん、そうなのか?」
「ええ、多分。きっと魔力を込める対象になるのが処女なんだわ。その条件を失えば、指輪は外れる…っていうことだと思う」
今まで決して外れなかった指輪が、ランスに犯された直後に簡単に外れたことからマリアはそう推理した。ルークも話を聞いてその

見解に賛成した。処女というのは神聖なものとして、儀式の条件などによく持ち入られるものであったからだ。

「なるほど、つまり事件解決のためには俺様が他の三人の処女も奪えばいいんだな！ぐふふ、これは面白いことになってきた。仕方がない、正義の為に俺様が苦労してやろう」

「…別にルークさんでも良いんだけどね」

「んー…状況が状況だし、相手がランスよりも俺の方が良いと言ったら抱きはするが…」

「ふざけたことを言うな！他の三人の処女も俺様のものだ！よし、そうと決まれば行動だ！まずはあの大嘘つきなラギシスの館に向かうぞ！」

そう言って腰掛けていた椅子から立ち上がり、外に出ようとするランス。が、後ろからマントを誰かに引っ張られる。振り返ればそれはマリアだった。決意のこもった瞳をしながらで、マリアは口を開いた。

「私も…連れて行って！」

「…大丈夫なのか？」

「君は操られていただけだ。責任を感じる必要はないぞ」

「いいえ、操られていたとはいえ、町をこんなにしたのは私たちよ。足手まといにはならないわ、だからお願い！私もみんなを救いたいの！」

マリアが必死に懇願する。と、ランスがマリアの手をマントから無理矢理離して部屋から出て行こうとする。焦ったマリアが何か言おうとするが、それよりも先に口を開いたのはランスだった。

「行くぞ、ルーク、マリア。俺様の足を引っ張るなよ！」

「ああ、シィルちゃんも、操られている三人も救い出すぞ。よろしくな、マリア」

二人の話の流れについて行けず、混乱していたマリアだが、情報を頭の中で整理していき、その顔がだんだんと喜びに包まれていった。そして、満面の笑顔で二人に返事をする。

「うん、二人とも、これからよろしくね！」

第17話　明かされた真実（後書き）

［人物］

マリア・カスタード

ＬＶ　１３／３５

技能　新兵器匠ＬＶ２　魔法ＬＶ１

カスタム四魔女の一人。師であるラギシスを殺害するが、それはラギシスに裏切られたが故の行動であった。現在は他の三人を救うため、行動を共にする。水魔法を得意としていたが、指輪を外された際にその魔力のほとんどが奪われ、その力を失ってしまった。だが魔法以上に非凡な才能を持ち合わせているのは、兵器開発の面。彼女の発明の多くが、今後歴史にその名を残すことになる。

［技能］

新兵器匠

特殊な新兵器を開発する才能。ＬＶ２ともなれば、歴史に名を残せるほどである。

［装備品］

フィールの指輪

赤、青、黄、白がある四つの指輪。処女十人の魔力を吸い込んだ四つの指輪全てを身につけることにより、無限の魔力を手に入れることが出来る。長く身につけていると精神が蝕まれ、邪悪な心に支配されてしまうという呪いのアイテム。ラギシスがかつてゼスのとある魔法使いから譲り受けたものらしい。

［その他］

テレポートウェイブ
　対象者を決められた場所にワープさせる魔法装置。敵を分断させたり、自らの逃亡用などに使用することが出来る。

第18話　新たな事件とチューリップ

ーカスタムの町　ラギシス邸跡ー

「こら、ラギシス！よくも俺様を騙したな！」
「黙ってないで出てきなさいよ！！」

ラギシス邸跡に入るやいなや、ランスとマリアがそう言って大声を上げた。しかしラギシスが出てくる気配はない。

「変だな？出てこんぞ」
「どういうことかしら…本当にここにラギシスがいたのよね？」
「ああ、ここに確かにいた。逃げたか？だが、俺たちがマリアと合流したことは誰も知らないはず…」
「成仏しちまったか？」
「そんな…そんなのってないわ…私たちをこんな目にあわせて、自分だけ成仏するなんて…」

ラギシスをもう一度殺すつもりだったマリアはへなへなと崩れ落ち、悔しそうに呟く。フォローを入れようとしたルークだが、マリアはすぐに立ち上がって、くよくよしても仕方がないから気を取り直して三人を助けよう、と自分で立ち直った。中々にポジティブな性格である。

「前向きだな。いいことだ」
「だって、ラギシスは憎いけど、それ以上に他の三人が心配なんだもん。ランスだって、シィルちゃんのことが気になるでしょ？」
「馬鹿抜かせ。あいつはただの奴隷だ」

「とりあえず町長の家に向かうか。マリアの誤解を解いておかないと、ろくに町も歩けないからな」

―カスタムの町　町長の家―

「ラーーンーースーー！！ルーーーークーー！！」
「うぉぉ！なんだなんだ！暑苦しい！」

家に入るやいなや、町長のガイゼルが涙を流しながら二人に迫ってきた。普段は床に伏している彼が立ち上がって迫ってくるということは、よっぽどのことがあったのだろうか。そういえばチサの姿が見えない。買い物にでも行っているのだろうか。いや、この取り乱しようから見るに、もしかしたら…と、ルークは考え、町長に尋ねる。

「チサちゃんは何処へ行った？まさか…いなくなったのか？」
「おお！そうなんだ！大変なんだ！どうやら娘のチサが、あの魔女たちに攫われてしまったみたいなんだ！」
「なんだと！！それでは、もしかしたら今頃あんなことやそんなことに…」
「うぉぉぉ！チーーサーー！！」
「ちょ、ちょっと待って！私そんなことしてないわ！」

ランスに無駄に不安を煽られて更に騒ぎ立てるガイゼル。身に覚えのないことの犯人にさせられそうになり、慌ててマリアが話に割って入る。

「ん？誰だ…って、わー！ま、ま、マリア・カスタードじゃないか

！ランス、ルーク、敵だ敵だ！」
「ええい、落ち着け！」
「ぐふぅぅぅ！！」

そう言って腹に蹴りをかますランス。一応相手は病人なのだが、容赦がない。若干無理矢理にではあったがガイゼルを落ち着かせ、ルークたちはここまでの経緯をガイゼルに説明した。

「ふぅむ…あのラギシスが…にわかには信じられんが…あり得ない事ではない…か。つまり、娘たちは町の敵ではないと」
「いいえ、私以外はまだ町の敵です。指輪の呪縛から解放されるまでは…」
「安心しておけ。俺たちがすぐに呪縛は解くし、チサちゃんも連れて帰る」
「おお、頼もしい！」
「で、どうしてチサちゃんが魔女たちに誘拐されたと思ったんだ？何か証拠が？」

チサが誘拐されたのは心配だが、これが何か手がかりになるかもしれない。ルークが尋ねると、ガイゼルは言いにくそうにしながら口を開いた。

「そ、それはその…四時間も帰ってこなかったから…その、心配で…」
「…本当に誘拐なのか？彼氏かなんかと遊んでいるという可能性は？」
「ななな、なんてことを！チサに彼氏などいないわーーー！そんなもんいたら、とっくの昔に殺したに決まっているだろうが！」
「その通りだ！チサちゃんの処女は俺様のものだ！！」
「なんでランスまで突っかかってくるんだ！しかも町長、あんた今

とんでもないこと口走ったよな！？」
「はぁ…厳格で信頼できる町長さんだったのに…」

今の町長の姿にショックを受けるマリア。彼女の中でガイゼル町長は過去の人となった。

「でも、四時間も帰って来ないのは確かにおかしいわね。この町の状況じゃ、寄り道するようなところもないだろうし」
「そうだな…道中見つけたら保護しておくよ。魔女の誰かが攫った可能性が高いだろうしな」
「おお…頼みます…」
「その分の報酬は別払いだぞ！がはは！」
「…鬼ね」

ー カスタムの町　情報屋 ー

一応目撃情報がないか、二手に分かれて聞き込みをすることになった。早く洞窟に潜りたいところだが、流石に放っておく訳にもいかない。ルークが情報屋、ランスが教会、マリアが酒場に聞き込みに行った。町長が早々にマリアは操られていただけという情報を町中に回してくれており、また、元々町の住人も小さな頃から知っている彼女たちが反乱を起こしたというのを信じたくなかったという思いがあったようで、既にマリアは町を自由に歩き回れるようになっていた。この行動の早さ、確かに親バカなこと以外は優秀な町長である。

「あら、ルークさんね。いらっしゃい。何かご用かしら？」
「ああ、ちょっと聞きたいことがあってな。あれ、妹さんはどこへ

？」

情報屋に入ってきたルークに、コンピュータから手を放して話しかけてくる女性。彼女がこの情報屋を営む双子の姉、芳川真知子だ。ルークはこの町を初日に情報収集で一度店に寄っていたため、既にお互い顔見知りであった。が、今はもう一人の店主である妹の今日子の姿が見えない。

「あの子ならどこかへフラッと。困った子ね」
「誰かに誘拐された、ということはないかな？」
「あら、出て行ったのはついさっきなのでそんなことはないと思いますわ。でも、どうしてそんなことをお聞きになるの？」
「まだ事を荒立てたくなくて町長も声明は出していないが…チサちゃんが行方不明でな」
「あら、それは大変。ごめんなさい、その事をお聞きに来たのでしたら、私は何も知りませんわ」
「そうか、邪魔をした。今日子さんにあったら家に帰るように行っておくよ。チサちゃんが本当に誘拐なのであれば、今外を不用心に出歩くのは危険だからね」
「すいません、お願いしますわ」

そういって店から出て行くルークにペコリと頭を下げる真知子。普段の余裕のある話し方から誤解されがちだが、これでも彼女は妹思いであった。

―カスタムの町　地獄の口―

迷宮の前までやってきたルーク。情報を集めたらここで合流する

予定であった。やってきたときにはまだ二人はおらず、泣き濡れた老戦士が洞窟の前に立っていた。話を聞いたら彼の名前はＡＮＴというらしく、特に情報は持っていなかった。泣いてる理由も町から出られず困っているということだったので、特にどうすることも出来ず、放っておいたらそのままどこかへ行ってしまった。多分二度と会うことはないだろう。無駄な時間を過ごした。その後、少し待っているとランスとマリアがやってくる。が、なんだかランスが疲れた様子だった。

「すいません、待たせちゃったみたいで。ルークさん、何か情報はありましたか」
「いや、こっちは特に何も。そっちは？」
「こちらも特には…聞く前からまだ内緒のはずのチサちゃんが誘拐されたことを知ってましたけどね」
「流石は情報飛び交う酒場と言ったところか。ランスの方はどうだった？」
「教会に淫乱シスターがいた…流石の俺様もあれはちょっと…」
「は？」
「ああ…ロゼさんの事ね。あの人は…気にしないに限るわよ。ちょっと変わった人だし…」

ランスがヤる気になれなかった敗北感からか、かなり疲れた顔をしている。ランスとマリアの話を纏めると、元凶は教会にいるロゼという名のシスターらしい。よし、教会には近寄らないでおこう、と心に誓うルークだった。ふと、マリアが先ほどまで持っていなかった筒状のものを両手に抱えているに気がつく。

「ん？ところでマリア、その手に持っているものは？」
「ふふふ、よくぞ聞いてくれました。これこそが…」
「なんだ、このぶっさいくなものは。変わったこんぼうだな」

「…ランスにはこの無駄のない美しい形状が判らないみたいね。これはそんな原始的な武器じゃないわ。その名もチューリップ1号！」

バババン、とチューリップ1号という名らしい筒状の武器を高らかに掲げる。その側面にはチューリップの花の絵が描かれていた。決して口には出さないが、ルークにも無駄のない美しい形状というものは理解できなかった。

「それが以前話していた戦いの歴史をも代えかねない武器か？」
「そう！まだまだ試作段階だけどね」
「ふむ、魔法が使えなくなってへぼぴーで足手まといのお前を連れて行くのは正直迷っていたが、これで多少は戦えそうだな」

フィールの指輪を外したマリアはその際に魔法力のほとんどを吸い取られ、あの強力な水魔法を使えなくなってしまっていた。が、これで多少の戦力にはなるとルークとランスは安心する。

「ところでこれはどうやって使うものなんだ？」
「ヒララ鉱石をエネルギーにして、爆発的な破壊力を相手にぶつけるの。そうね、雷撃の魔法なんかより遙かに威力を出せる武器だと思っていいわ」
「それは凄いな。雷の矢でなく、雷撃以上か」
「ふふふ、私の自信作よ。このチューリップとヒララ鉱石があれば、魔法が使えなくなったって役には立てるんだから」
「がはは、これであのバカがいない分の後衛役は決まりだな」
「ええ、任せて。ヒララ鉱石さえあれば、モンスターなんかちょちょいのちょいなんだから！」

不意にルークは嫌な予感がした。何か先ほどからマリアの言い回しがおかしい。ヒララ鉱石が…あれば？そういえばヒララ鉱石は割

と手に入れにくい鉱物ではなかっただろうか?ランスと笑いあうマリアに、ルークは意を決して尋ねる。

「ヒララ鉱石…あるのか?」

ピタっ、とマリアの笑い声が収まる。ランスも、まさか…という顔でマリアを見る。俯いていたマリアが勢いよく顔を上げる。そしてマリアは、笑顔で元気よく答えた。

「ありません!」

「「お前もう帰れ!!」」

第１８話　新たな事件とチューリップ（後書き）

［人物］

芳川真知子

　カスタムの町の情報屋。双子の姉で、コンピュータを使って理論的に情報を導き出す。ランスのアプローチをのらりくらりと躱す。

芳川今日子

　カスタムの町の情報屋。双子の妹で、水晶玉を使って知りたいことを占う。一途な少女だが、若干いきすぎている。

ロゼ・カド

　カスタムの町のシスター。神への信仰心は無く、金儲けの手段として使っている。暇さえあれば自分で呼び出した悪魔とのＨに耽るなど、数少ないランスをどん引きさせた女性の一人。

牧場野ＡＮＴ

　冒険者。珍しい名前をしており、妹と娘がいる。シリーズでも上位に入るマイナーキャラであったが、２のリメイクとまさかのランスクエストへの再登場により知名度が上がった。ほんの少しだけだが。

［技］

雷の矢

　指先から生み出した雷の塊を放つ初級魔法。炎の矢や氷の矢と並んで良く使われる魔法であり、特にゼスでは多くの若い魔法使いがこの魔法を好んで使う。その理由としては、「雷に愛された男」「雷帝」という異名を持つ老魔法使いが、魔法学園の講師をしている

ため、自然と若い頃に触れる機会が多くなるためと思われる。

雷撃

雷を水平方向に飛ばす中級魔法。本来は手から放つ魔法だが、鍛え上げると頭上から雷を落とせるようにもなる。

［装備品］

チューリップ1号

マリアが発明した新兵器。ヒララ鉱石をエネルギーとし、爆発的な威力を出すバズーカ。側面に描かれたマリア手書きのチューリップの絵が特徴的。

［アイテム］

ヒララ鉱石

レアストーン。特殊な条件下で強力なエネルギーを発生する。

第１９話　その占い、今はまだ意味を持たず

―ピラミッド迷宮―

「これは…随分と様子が変わったな？」

結局頑なに帰らなかったマリアを連れて、三人は地下三階まで下りてきていた。するとそこは、二階までのいかにもな洞窟から、一目見て床や壁の石が明らかに人口のものと判る、整った迷宮になった。

「ここからはピラミッド迷宮になっているわ」

「こんなに突然迷宮の内部が変わるものなのか？」

「本来この迷宮は私が支配していた第二層までしかなかったの。ここから先は、他の場所から魔法で持ってきて追加したのよ。この第三層の支配者はミル。リンゲル王のピラミッドを改造したものらしいの」

「ミル・ヨークスとは仲間なんだろ？何か迷宮のことは知らないのか？」

「ごめんなさい、ずっと自分の研究室に引きこもってたから…」

「ちっ、役に立たない奴め」

「むかー、親切で教えたのにー！」

「ほらほら、喧嘩してないで進むぞ」

仲良く喧嘩する二人をなだめるルーク。迷宮の奥へ進んでいく三人。道中棺の並んだ部屋や四つの宝石が並んだ部屋があり、念入りに調査をしたが、特に何も発見することは出来なかった。更に奥へと進んでいくと大きな鏡が壁に埋め込まれた部屋に出る。

「わっ！大きーい。こういうのって高いのよねー」
「がはは、鏡に映る俺様もかっこいいな！」
「ん？部屋の隅に石版が置かれているな」

鏡の前でポーズを取るランスを放って置いて石版を拾うルーク。見れば何か文字が書いてある。薄汚れているが、ギリギリ読めるレベルだ。石版に書かれた文字を読んでいくルークだが、だんだんと呆れた顔になっていく。

「ルークさん。石版に何が書かれていたんですか？」
「あー…誤解しないで欲しいが、俺は書かれていることをそのまま読むだけだからな」
「？いいから早く読め」
「鏡の前で少女のパンティーを露出するべし。さすれば宝石の装置が起動するであろう」
「……なんなの、それ？」

マリアが冷たい視線をルークに向ける。ただ書いてあることを読んだだけのルークからしたら理不尽きわまりない。

「がはは、仕方がない。これも他の三人を救うためだ。とぉー！！」
「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

いつの間にかマリアの背後に回り込んでいたランスが一気にマリアのスカートをまくり上げる。下着を白日の下にさらされ、マリアが悲鳴を上げる。

「ばっ、ばかぁ！こんな事で本当に装置が起動するわけ…」

怒り心頭でランスに食ってかかるマリアだが、話を遮るように鏡から音声が響く。ー第一のワープ装置、解除されましたー、と。

「最低だわこの鏡！！」

「がはは、中々見所のある鏡ではないか」

「第一の…って言ったよな。宝石って…四つあったよな。つまり…」

「やめてー、ルークさん、考えさせないでー。私も気がついてはいたけど、気がつかない振りをしていたんだからー！」

ーピラミッド迷宮深部　小部屋ー

「くっそ…がぁぁっ！！」

女戦士が近寄ってきたグリーンハニーを斬り伏せる。パリンっという音と共に、その体か砕け散る。が、ハニーに気を取られていた隙にラーカイムの接近を許してしまい、その鋭利なハサミが脇腹に突き刺さる。

「っ…！！何するんだい！！」

頭頂部の岩ごとラーカイムを粉砕する。部屋の中では大量のモンスターが四人の女戦士を囲んでいた。しかし、応戦しているのはたった一人。既に他の三人の息はなく、おびただしい量の血溜まりの中に倒れ伏していた。残った女戦士も満身創痍の状態だ。傷は浅くなく、愛用のロングソードは既に折れ、今は倒れた仲間が使っていた剣を手に戦っている。

「ルー、チョルラ、アリーヌ…巻き込んじまった形になっちまった

ね…すまない。ルー、あんたのアリスソード、自慢していただけの事はあるよ。もうちょっとだけ力を貸してくれ…」

今は亡き仲間たちにそう呟く。モンスターに囲まれているだけでなく、部屋の入り口にはグリーンスライムがへばりついており、通ることが出来ない。逃げ道はない、彼女はたった一人で十体以上いるモンスターの群れを倒さなければならないのだ。普通ならば絶望に打ちひしがれ、生きることを諦めてしまってもおかしくない状況である。だが、こんな状況でも彼女の目は死んでいない。最後まで諦めずに勇敢に立ち向かった仲間のためにも…妹のためにも…

「まだ…俺は死ねないんだよぉぉぉぉ！！」

咆哮し、近くにいたこんにちわを一刀両断にする。それと同時に部屋に爆音が響いた。音のした方向は部屋の入り口、見れば通路をふさいでいたグリーンスライムが吹き飛び、煙を上げていた。敵の増援か、女戦士に緊張感が増す。

「きゃー、やったー、見た見た？これがチューリップの威力よ！」
「凄い威力だな。ピラミッド内にヒララ鉱石の採掘場があってよかったな」
「むっ、部屋の中に傷だらけの美女を発見！」

そこに立っていたのはランス、ルーク、マリアの三人。ワープ装置で飛んだ先に偶然ヒララ鉱石の採掘場があり、こうしてマリアが戦力に加わった状態で探索を続け、この部屋まで辿り着いたのだった。状況の変化に頭の回転が追いつかない女戦士だが、どうやら敵ではないらしいことを感じ取り安堵する。しかし、あそこで喜んでいる女、どこかで見覚えが…

「行くぞ！ルーク、マリア！困っているときにはお互い助け合う！それが冒険者の正しい姿だ！」
「すまないね、恩に着る！」
「もし襲われているのが男だったら？」
「一文の得にもならんから立ち去る」
「期待通りの発言、ありがとう。まあいい、さっさと仕留めるぞ！」

群れを成していたとはいえ、この部屋にいたモンスターは大した強さを持ち合わせてはいなかった。みるみる内に数をその減らしていく。いや、本来であればもう少し苦戦していたかもしれない。元々この部屋にいたモンスターはもっと多かったからだ。ミリは死んでいった仲間たちに感謝しながら、最後のこかとりすを仕留めた。すると、緊張の糸が切れたのか、床に倒れ込む。

「おい、大丈夫か！？せっかくの美女だ、このまま死んだら許さんぞ」
「死にゃしないさ。あんたたちのおかげで助かった。礼を言うぜ。俺はミリ・ヨークスだ…」
「待って…ミリ・ヨークスって…」

名前を聞いて、先ほど喜んでいた女が近寄ってきた。やはり見覚えがある…と、ミリはすぐにその正体に気がつく。怒りで目を見開き、口元に付いていた血を拭うとマリアに食って掛かるように叫んだ。

「！！お前はマリア・カスタード！俺の妹をどこにやりやがった！」
「ヨークス…なるほど、ミルの姉か！」
「あぁ、俺は妹を捕まえて始末をつけるために、ここまで来たんだ。あんだけの事をしでかしたんだ。姉として…俺が始末をつけなきゃならないんだ！」

「そういうことか。そうとなれば、誤解を解いておかなければならないな」

そう言い、自己紹介をすませた後、全ての元凶はラギシスにあることを説明するルーク。話を聞いている内に、少しずつ安堵の表情へ変わっていく。やはり妹が自分の意志で事件を起こしたわけではないということが判って、ホッとしたのだろう。が、ミリはすぐに真剣な表情に戻し、口を開いた。

「事情は判った。だとしても、このまま手を引く訳にはいかないな。目的が、操られている妹の救出に変わるだけさ」
「その怪我で探索を続ける気か？」
「…妹は、放っておけないもんさ。だが、俺の仲間は見ての通り全滅だ。頼む、俺も一緒に連れて行ってくれ！」
「…妹…か。そうだな、放っておいては…いけないな」
「がはは、俺様に任せておけ。だが、弱い奴はいらんぞ」
「ありがとよ、ルーク、ランス！話の判る奴らは好きだぜ！」
「がはは、そのまま惚れてしまっても構わんぞ！」

こうしてパーティーに新たにミリ・ヨークスが加わった。怪我を押して先を急ごうとするミリだが、ルークがそれを引き留める。

「待った。一旦町へ帰り木で戻ろう。ワープ装置を動かせるから、ここまでならすぐに戻って来られる」
「なんだい、ルーク！？俺の怪我の治療のためとか言うなら、そんなもんはいらないよ！」
「そうじゃないさ…」

ルークが床に視線を落とす。ミリもそれに併せて視線を落とす。そこには、掛け替えのない仲間たちの…遺体。

「葬ってやらんとな。戦士の定めとは言え…大事な仲間なんだろ？」
「…すまない」

ー迷宮内　どこかの泉ー

そこに倒れていたのはシィル。泉から流れる水が頬を伝い、目を醒ます。朦朧とした意識がはっきりとしてきた。そうだ、自分はテレポートウェイブでどこかへ飛ばされてしまったのだ。見覚えのない場所、近くにランスたちがいないか、声を出す。

「ランス様ぁー？ルークさんー？いませんかー？いたら返事してくださぁーい」

返事はない。が、ふと岩陰から気配がする。誰かが声に反応したようだ。

「だ、誰かいらっしゃるんですか…？」
「……」
「も、もしかしてランス様ですか？」
「うぅ…ぐっ…」

そこには一人の戦士が倒れていた。大きな怪我は無いようだが動けない様子。慌てて駆け寄り、ヒーリングを唱えるシィル。

「だ、大丈夫ですか！？しっかりしてください！いたいのいたいの、とんでけーっ！」
「ん…ありがとう、もう大丈夫だ…君のおかげでこの命、拾うこと

が出来た」
「よかった、わたしはシィル・プラインと言います」
「僕の名前はバード。バード・リスフィ。君の魔法のお陰で助かったよ。改めて礼を言わせて貰う」
「え…えへへ」

こうもはっきりと感謝されることにシィルは慣れておらず、ちょっと照れる。ランスが素直に礼を言うなんて事、ほとんど無いからだ。バードという名の戦士が立ち上がり、辺りを見回す。

「君もあの変な魔法でここへ？」
「はい、早くランス様と合流しないと…」
「ならば、互いの目的は一緒だね。僕も君もここから脱出したい。どうだろう、ここからは僕と協力しないか？帰り木も奪われてしまったようでね」
「ええ、よろしくお願いします」
「ああ、よろしく…誰だっ！？」

バッっと後ろを振り返るバード。シィルもそちらの方向に目をやる。そこには赤い頭巾に身を包んだ少女が立っていた。緊張を解く二人。

「こんにちは。こんな迷宮内に来るなんてよっぽど物好きな人なのね」
「こんにちは。可愛い子ですね」
「お嬢ちゃん？君は？」
「失礼しちゃう。アーシーはお嬢ちゃんなんかじゃないわ。こう見えても、てんちゃい占い師なんだから。おかし女が持っているお菓子をくれたら占ってあげてもいいよ」
「干し芋じゃ駄目かい？」

腰に掛けていた袋から干し芋を取り出すバード。

「駄目駄目。干し芋をお菓子のカテゴリーに入れないで」

「甘いんだけどなぁ…」

残念そうに干し芋をむしゃむしゃ食べるバード。隣のシィルにも手渡し、シィルもそれを受け取って二人で干し芋を食べ始める。そんな二人を見ながら、アーシーはおかしな事に気がつく。

「あれ…そこのお兄ちゃん…」

「ん？僕がどうかしたかい？」

「…なんでもない。教えて欲しかったらお菓子持ってきてね」

「そう言われると気になるな。でもごめんね、お菓子は持っていないんだ。君もこんな所にいると危ないから一緒について来るかい？」

「大丈夫…モンスターさんには占いのお陰で出会わないから」

「そう、じゃあ私たちは行くね。アーシーちゃんも気をつけてね」

そう言って泉から離れ、ダンジョンを進んでいくバードとシィル。その二人の背中を見送りながら、アーシーはぽつりと呟いた。

「あのお兄ちゃん…凶の運命の持ち主だったな。かわいそう。それに、寿命がとっくの昔に無くなっちゃってるのに…なんでまだ生きてるんだろう…悪運？あんな人初めて見た」

アーシーのつぶやきは、誰の耳にも届かないまま虚空へと消えていった。

第１９話　その占い、今はまだ意味を持たず（後書き）

［人物］

ミリ・ヨークス
ＬＶ　１５／２８
技能　剣戦闘ＬＶ１

　ミル・ヨークスの姉。腕の確かな女剣士で、Ｈの腕はそれ以上。ランスがヤルのを嫌がる数少ない女性の一人。妹に事件の責任を取らせるため迷宮に潜っていた。誰にも打ち明けていないが、重い病を患っている。

バード・リスフィ
ＬＶ　１５／４２
技能　剣戦闘ＬＶ１

　冒険者。顔、性格、腕の三重奏揃った戦士だが、幸が薄い。惚れっぽい性格をしており、気がつけば毎回違う女性を連れ歩いているが、本人に悪気はない。

アーシー・ジュリエッタ
ＬＶ　１／３
技能　占いＬＶ２

　魔人バークス・ハムの使従。姉妹が二人いる。その占いの的中率は１００％と言われており、お菓子をあげると占って貰える。

ルー　（オリモブ）

　ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリとは三人の中でも一番性格が合い、飲み友達でもあった。ミリが持っているアリスソードは彼女の愛剣である。名前はアリスソフト作品の「ＤＡＬＫ」より。

チョルラ　（オリモブ）
　ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリ、ルーと共によく一晩中飲み明かしていた。名前はアリスソフト作品の「ＤＡＬＫ」より。

アリーヌ　（オリモブ）
　ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。普段から飲み過ぎな三人に頭を抱えていた苦労人。名前はアリスソフト作品の「ＤＡＬＫ」より。

［モンスター］

こかとりす
　鳥系モンスター。肉の味が絶品で、冒険者によく狙われている。へんでろぱの材料でもある。

こんにちわ
　顔が三つある球体のモンスター。怨念が深いと、倒された際こんばんわというモンスターとして復活することがある。

ラーカイム
　ヤドカリに似たモンスター。岩を背負い、鋭いハサミを持っている。

グリーンスライム
　緑のねばねばしたモンスター。物理攻撃を無効化する。

おかし女
　一つ星女の子モンスター。お菓子を作るのが大好きで、その味は

絶品。戦闘能力は低い。

［技能］

占い

物事を占う才能。ＬＶ２以上にもなると、未来予知とも呼べるものになる。

［装備品］

ロングソード

ごく一般的な剣。値段の割にはそこそこ攻撃力もあるため、とりあえずこれを装備している冒険者も多い。

アリスソード

柄に女神アリスをモチーフにした紋章が飾られている剣。攻撃力は高いが、見た目以上に軽く、力のない魔法使いや神官でも装備可能。

第２０話　未だ見ぬ宿敵

―ピラミッド迷宮　鏡の間―

「今度は鏡の前で少女が胸を見せる、だとさ」
「いーーーーやーーーーー！！」
「一応言っておくが俺もやらないぞ」
「がははは、全く持ってけしからん！が、これも三人を救うためだ。頑張るのだマリア、カスタムの未来はお前の両乳にかけられたぞ」
「ぜっっったい、いやっ！！」

一度町に戻り、三人を丁重に埋葬した一行は、再び迷宮に潜っていた。一つ目のワープ装置を利用しようとしたが、あの先は行き止まりであったとのミリの証言によりそれを中止し、なんとか二つ目のワープ装置を作動させられないか調べるため、鏡の間までやってきていた。その際、偶然にもミリが石版を宝箱から発見していたことを聞き、ルークが受け取り書いてあることを読んだのが今。嫌な予感のしていたマリアは、内容を聞くやいなや悲鳴を上げた。

「そうだ、前は私がやったんだし、今回はミリさんが…」
「嫌だぜ、俺は。そんな馬鹿馬鹿しいこと」
「んがっ！」
「ええい、まどろっこしい！早く見せんか！！」

渋るマリアをランスが後ろから羽交い締めにし、服をずり下げ胸を露出させる。ルークに出来ることはそっぽを向いて見ないようにしてあげることだけだった。南無南無。

「きゃああ！ちょ！いやーーー！」
「うふふ、可愛い胸だね」
「さあ、鏡様にお前の胸を見て貰うんだ！上下に揺すって乳揺れのサービスだ！」
「こんなのひどすぎるーーー！！」

マリアの絶叫と第二のワープ装置解除の放送が迷宮内に空しくこだました。

「あと二回…か…」
「ルークさん、その通りですけど不吉な発言しないでください！」

ーピラミッド迷宮　棺の間ー

二つ目のワープ装置を使用し、少し進むと棺が大量に置かれた部屋に辿り着いた。その部屋の奥、他の棺に比べ多少豪華な装飾を施してある棺に、ミイラ男が腰掛けていた。モンスターかと身構える四人に落ち着いた様子でミイラ男が話しかけてくる。

「誰だい。ああ、そう身構えんでいい。戦うつもりなんてないんね」
「なんだ貴様は？」
「なーに、ただのミイラ男さね」
「ただの…ねぇ。ただ者には見えないが？」
「え？どういうこと、ルークさん？」

声を聞く限りは中年男。包帯に隠れておりよく判らないが、体格はでっぷりとしており、とても強そうには見えない。ルークの発言

にからからと笑うミイラ男。

「おんやまぁ。死んでから２００年、こんだけ鈍っちまった体なのによく気がついたね」

「座り方がな…隙だらけのようでいて、その実、隙がない。生前はかなりの実力者とお見受けしたが？」

「そんな大したもんじゃねーよ。おいちゃんは、リンゲル王ザーハードス６世に仕える親衛隊副隊長、バ・デロス・ガイアロードじゃ」

「なんつー大層な名前だ。まぁ今はただのミイラだがな。がはは、情けない」

リンゲル国。２００年前に滅んだ国だ。ゼスと隣接した砂漠の中に栄えた国で、近隣諸国との関係も良好であったと文献には残されている。ピラミッドも、国の滅亡後に近隣諸国が建て、集められた関係者の死体を埋葬したものだという。そういえば、マリアがこの迷宮はリンゲル王のピラミッドを改造したとか言っていたか。

「砂漠の真ん中にあったんじゃが…いつの間にか地下じゃ。不思議な…」

「あ、ごめんなさい。それは私たちが魔法で移動させたせいなの…」

「ん？ほー、お嬢ちゃん若いのに凄い魔法を使えるんだの？」

「あんな広大な砂漠の真ん中とは、随分とへんぴな国だったんだねぇ？」

「広大？うんにゃ、小一時間も歩けば渡りきれるちっぽけな砂漠さね」

ミイラ男の発言の意味が分かっていない様子のランスとミリ。逆にその意味を正確に理解しているのはルークとマリアだ。

「死んでる期間が長くてボケたのか？」

「違うわよ、ランス。あの砂漠はね、昔はなかったの」
「そうなのかい？」
「ああ、今から２００年ほど前、広大な大地を目当てにゼスに攻め込んだヘルマン軍とゼスとの戦争があってな。ゼスは禁断とも言われた秘術でその大地を砂漠化することにより、ヘルマンの目的をなくすと同時に、以後ヘルマン軍がゼスに侵攻するのを難しくした。なにせ、ゼス中心部に攻め込むためにはその砂漠を通らなきゃならないからな。その秘術を使う際に、媒体としたのが数年前に滅んでいたリンゲル国の砂漠だったと伝わっている」

世界の中心部に位置するキナニ砂漠。専門の案内人なしに越えるのは自殺行為とも言われるほどの広大な砂漠の誕生にはこういった背景があった。

「あんれま、今砂漠はそんなことになっとんたんか」
「２００年の間に、世界は大きく変わっていますよ」
「２００年か…言われてみりゃ長いもんじゃ。あの時代が懐かしいわい。アホな隊長とノー天気な部下に挟まれた日々は大変じゃったが、楽しかったなぁ…モエモエ国の行方不明だった騎士隊長はその後見つかったんだろうか…娘のリスガドールはどうしとるかのう…」

昔を懐かしみ、遠い目をするミイラ男。平和な国を突如襲った悲劇。ソレは無抵抗な民を虐殺した。ソレは抵抗する親衛隊を全滅させた。ソレはわずか二日で国を滅ぼした。

「２００年も前じゃ騎士隊長も娘もとっくにじじぃばばぁになって死んでるだろ。それよりも、ミルという娘を捜してるんだが、何か情報を持っていないか？」
「それもそうか、はっはっは。ミル？その娘かどうかは判らんが、四つ目のワープ装置の先で娘の話し声がよくするぞい。その部屋は

この部屋と壁挟んだ隣でな。因みにワープコードは鏡の前でレズ行為じゃ。以前迷宮内を歩いてるとき石版に書いてあった」
「ぎゃぁぁぁぁぁ！！」
「おっ、それは俺の出番でもあるな。頑張ろうぜ、マリア」
「なんで張り切ってるんですか！」
「そりゃま、俺は男も女もいけるクチだからな…ふふ、楽しみだねぇ」
「がはは、楽しみ…いや、町の平和のためだ。仕方ない。じゅるり」
「もういや…なんで私ばっかりがこんな目に…」
「マリア、前向きに考えろ。三回で済んで良かったじゃないか！」
「全然良くありません！！」

ルークの精一杯のフォローが失敗に終わる。ランスとミリは既に行為を想像しているのか、ランスの表情はイヤらしく、ミリの表情は妖艶なものになっていた。

「情報ありがとうな、副隊長さん。安らかに眠ってくれ」
「おお、ちょっと待った。これ、持ってけ」

部屋を後にしようとするルークたちに対し、ミイラ男は何かを放り投げる。ルークが受け取り、見ればそれは剣。棺同様、装飾が施されているが決して武器を振る邪魔にはならず、斬れ味も良さそうだ。

「それはおいちゃんが生前使っていた幻獣の剣だ。一緒に棺に納められてた。このまま腐らすのも勿体ないからな、あんたらが使ってくれ」
「いいのか？」
「がはは、ルーク、俺様に寄越せ！」
「お前この間新しい剣買ったばかりだろうが。しかも人の金で！」

「はっはっは、誰が使ってくれても構わんよ。おいちゃん、あんたらが気に入ったからな。やる」
「豪快なおっさんだね。ま、貰えるもんは貰っておくもんさ。俺はルーの剣があるからいらないけどな。さあ、行こうか」
「うぅ…鏡の間…嫌だな…」

豪快に笑うミイラ男に感謝するルークたち。ランスがまず部屋を後にし、ミリがマリアを引きずりながらそれについて行く。ルークも部屋を出ようとするが、ミイラ男がポツリと呟いた一言に足を止める。

「あんた…ケイブリスって…知ってるかい…」

ケイブリスダーク。その事件は、今より２００年前にゼスに侵攻した魔人の名前を取ってそう呼ばれている。多くの人間が虐殺された、地獄の一年。ゼスと隣接していたリンゲル国も、この魔人に滅ぼされたのだ。

「…ああ、知っている。見たことはないが…かつて何度も聞いた名前だ…」
「そうかい…あれに出会っちゃいけねぇ…ありゃ化け物だ…ちょっとは腕に覚えがあったが…一分も持たなかったよ…ははっ…」
「そうか…だが会うなというのは無理な話だな…」
「ん？どういうことだんね？」

ルークは一瞬だけ振り返り、静かに笑う。それは己が身に過ぎたる事を言うことへの自嘲か、あるいはもっと別の何かか。

「いずれ…必ず戦わねばならない相手だ。あんたのその無念、俺がこの剣と共に持って行く」

―ピラミッド迷宮　鏡の間―

「いやー、もういやー！おうち帰るー！！」
「ふふふ、虐めがいがあるねぇ、マリアは…」
「おお、いいぞいいぞ。ほれ、もっと股を開け！」
「はいはい、踊り子さんには手を触れないでください…」

こうして最後のワープ装置は解除された。頑張れマリア。

―ピラミッド迷宮深部　通路―

「もう…お嫁に行けない…」

一行は最後のワープ装置を起動させて迷宮の奥へと進んでいく。聞いていた部屋までは少し距離があるようだ。後ろでマリアがさめざめと泣いている。ミリが慰めているが、泣かせた張本人にフォローされても効果は薄いだろう。と、少し開けた部屋に出る。なんだか少し寒気がする。

「ねぇ、ランス…なんだかこの部屋寒気がするわ…早く抜けましょう」
「うむ、こんな部屋に長居は無用だな。ん？なんだこの札は。ていっ！」

壁に貼ってあったお札を考え無しに剥がすランス。すると、煙と

共に角の生えた緑色の髪の女性が現れた。その強力な邪気に、ルークの緊迫感も増す。すると女性が深々と頭を下げながらこう言った。

「はじめまして、悪魔の札により召喚された者です。事情により名前は言えませんが、以後お見知りおきを」

「悪魔…だと…」

「ちょっと待って、私たちは別にあなたを呼び出してなんかいないわよ！」

「そこの戦士の方が札を剥がしてくださいましたでしょう。あれが私を呼び出す方法です」

「で、お前は何しに出てきたんだ？」

悪魔の女性はコホン、と咳払いを一つし、自分のやってきた目的を話し始める。

「私は呼び出された方の願い事を三つだけ叶えます。もちろん、私の力の範囲内なので、不老不死や世界平和などは無理ですが。さぁ、願いを仰ってください。ですが、見返りとして…あなたの魂を頂きます。安心してください、魂は死後に引き取りに来ますので、今後の生活が変わるわけではありません」

キャッチセールスの様な口調で話を続ける悪魔。彼女は内心こんなことを思っていた。

「（ようやく悪魔の契約係を任せられるくらいに出世したんだもんね…初仕事頑張らなきゃ…）」

「むっ、それはかなえられる範囲ならどんな願い事でもいいんだな？」

「ちょっとランス、危険よ！」

「確かに俺も危ないと思うぜ。話が美味すぎる」
「契約するなら無理には止めないが…賛同は出来んな…」

彼女はこの日、目の前の男と出会ったことにより転落人生を歩むこととなる。だがそんなことを知る由もない彼女。

「がはは、大丈夫だ。悪魔の娘、その契約乗ったぞ！」
「（やった、初仕事成功！私って幸先いい！！）」

彼女は今、とても幸せそうだった。

第２０話　未だ見ぬ宿敵（後書き）

［人物］
バ・デロス・ガイアロード
ＬＶ　２５／３３　（生前）
技能　剣戦闘ＬＶ１
　リンゲル国親衛隊副隊長。平和な国、尊敬できる王、信頼できる仲間、美人の妻と愛娘、その全てを魔人ケイブリスに奪われた。現在はピラミッドの中でミイラとして暮らしている。この生活もそれなりに気に入ってはいるようだ。

［装備品］
幻獣の剣
　生前、ガイアロードが使っていた業物の剣。特殊な結界に覆われていてダメージを与えられない幻獣をも斬り伏せる。盗難防止のため本人以外の男性が触ると電流が走る仕掛けとなっているが、その仕掛けを解除してルークたちに手渡した。

［都市］
リンゲル国
　自由都市。近隣諸国と良好な関係を築いており、特にゼスやモエモエ国との親交が深かった。ピラミッド内の装置はその名残。約２００年前、魔人ケイブリスによって二日で滅ぼされる。

［その他］
ＧＩ０８０２　魔人の後押しを受けゼス建国　モエモエ国騎士隊長

行方不明に
ＧＩ０８０８　モエモエ国、ゼスに併合され滅びる
ＧＩ０８１３　ケイブリスダーク発生　リンゲル国滅びる
ＧＩ０８１６　ゼスヘルマン戦争勃発　キナニ砂漠が誕生

第２１話　転落人生

―ピラミッド迷宮　お札の間―

悪魔との契約を結ぶことにしたランス。その返事を聞いた悪魔の娘は、嬉しそうに羽尾をパタパタと動かす。マリアは心配そうにランスを見ているが、ルークとミリは何となくこの後の展開の予想がついている。

「おい、お前に叶えられる範囲ならなんでもいいんだな？」
「はい。ではさっそく、願いの方をお願いします」

ランスに問いかけられ、嬉しそうに綻んでいた表情を引き締める悪魔。ランスもキリッと真面目な顔になる。ゴクリッ、息を呑むマリア。

「うむ…俺様の願いはズバリ…」
「ズバリ…？」
「ヤらせろ！」
「……へ？」

想定もしていなかったであろう回答に思考が追いつかないのか、ポカーンとアホ面になる悪魔娘。隣では盛大にマリアがずっこけている。

「この男はなんだって、こう…」
「そうか？俺は言うと思ってたぜ？」
「まあ、これでこそランスというか、何というか…」

予想通りの展開にちょっと誇らしげなミリ。

「どうした？まさかこの願いは駄目だとか言うつもりはあるまい？」

「へぁ！？モ、モチロンそんなことありませんよ。ただ…そんな願い今まで話にも聞いたこと無かったので…」

「がはは、それではさっそくゴーだ！」

「え、ここでですか？せめて他の方を別の場所にとか…」

ちらりとルークたちを見る悪魔娘。気のせいか視線が助けを求めている気がする。

「なんだ？悪魔のくせに恥ずかしいのか？情けないな！」

「カッチーン！そ、そんなことはありません。さぁ、どこからでも来てください！！」

「ああ…まんまと挑発に乗っちゃったぞ、あの悪魔…」

「男慣れしてないんだろうねぇ」

「そういう問題なの？」

「ぐふふ、では…とーーーー！」

「きゃあ！」

悪魔に飛びかかり、情事を始めるランス。ミリがそれをやんややんやと観戦し、ルークとマリアは部屋の隅で壁とにらめっこし、事が終わるのを待つ。もし万が一悪魔が反抗した場合の時に備え、部屋からは出て行かない二人。その背中は哀愁が漂っていた。

「がはは、悪魔はエロエロだぞ！マリアも見ろ！」

「ルーク、あんたもこっちに来たらどうだ？悪魔と人間の行為なんて、中々見られるもんじゃないぜ」

「…ギャラリー増やそうとしないで」

ランスとミリが壁を向いている二人を誘う。ルークを誘ったミリをランスが止めなかったのは、ルークがランスからそれなりの信頼を得ているのか、はたまた気持ちよすぎて深く考えなかっただけなのか。

「悪魔とのHに別に興味ないんでパス。魔人となら見学もちょっと考えた」

「私もパスします。女の子がランスにHされてるとこなんて、見たくないもん」

「がはは、マリアはやきもち焼きだな」

「…馬ぁ鹿」

「なんか今さらりと凄い発言が飛び出た気がするんだが…俺の聞き間違いか？」

「…胸揉みながら普通に会話とかしないで」

先ほどから悪魔娘がぼそりと抗議を続けるが、誰も聞いていなかった。

二十分ほど行為が続き、しっかりと本番まで終わらせたランス。悪魔娘はぐったりとしながら、人間のくせに…と小さく呟いている。トラウマにならなければいいが。

「ほら、いい加減起きろ。悪魔のくせによわっちいな」

「くぅぅ…（人間のくせに、人間のくせに、人間のくせに！！）」

「さて、それじゃあ次の願い事だが…」

悪魔娘を無理矢理起こして二個目の願い事を頼もうとするランス。一体何を頼む気だろうか。金か？女か？順当にシィル救出の手伝い

か？思考を巡らせるルーク。

「ズバリ、ヤらせろ！！」

「……」

「……お、鬼だわ！」

「……これはさすがに読めなかったな」

「……大した男だ」

「おねが、お願いです！お願いですから別の願い事に…いやぁぁぁぁ！！！」

カーン、とどこかでゴングが鳴る音が聞こえた気がする。第二ラウンド突入。それはつまり、ルークとマリアの壁とのにらめっこ第二ラウンド突入も意味していた。

「それでは…次が最後の願いです…よく…よーく考えた上でお願いします」

第二ラウンドもたっぷりと時間を掛けられ楽しまれた悪魔娘。まさかの三ラウンドを警戒してか、必要以上に念を押してくる。それに対し、既に三つ目の願いを決めていたのか、ランスは即答する。

「俺様の魂を取るという話をなかったことにしろ」

「……えっ？」

「何だ？お前に叶えられる範囲のことだろう、この願いは」

「…上手いな」

ルークが感心する。こういう悪知恵に対しての頭の回転は本当に凄い。

「い、いえ…その…あの…」
「まったく、悪魔というのは自分が交わした契約一つ守れないのか。あぁ、情けない」
「……わかり…ました…受理させて…いただきます…」

ガクリと頭を下げる悪魔娘。その頬を涙が伝う。なぜかマリアの胸の中に親近感が沸いてきたらしく、私今なら悪魔と仲良くなれるかも…とか呟いている。

「がっはっは、悪魔とタダでHしてやったぞ！とーくしたー！」
「う…うーわん！この悪魔ーーーー！！二度と私の前に現れるなーーーー！！！」

泣きながらどこかへと去っていく。悪魔に悪魔と呼ばれる人間が誕生した瞬間であった。

―ピラミッド迷宮　幻獣の間―

その部屋は、ただ広いだけの何も置いていない部屋だった。ここは四魔女の一人、ミル・ヨークスが改造して造った幻獣たちと遊ぶ部屋。自分が生み出したたくさんの幻獣たちと、あるときは魔法の修行を、またあるときは鬼ごっこやボール遊びを楽しんだ。そういった目的ゆえに余計な物を置いておらず、ミルの部屋はこの部屋の奥に別に造ってあった。先ほどまで幻獣たちと遊んでいたミルは自分の部屋に引き返そうとするが、入り口から誰かが入ってきたのが見える。

「だぁれ？なにかご用？」

「ミルッ！！」
「おお、あれがミルだな。ぐふふ、彼女も美人ではないか」
「あっ、ランス、言っておかなきゃいけないことがあるんだけど、ミルはね…」

部屋に入ってきたのは四人。男二人は知らない人だが、女性の方は同じく四魔女の一人
マリアと、実の姉であるミリであった。予想外の客人に目を丸くするミル。スレンダー美人であるミルに対し感想を述べたランスにマリアが何か言いかけるが、ミルの言葉に遮られる。

「あれ、お姉ちゃん？もう、なんで来たのよ。私のことは放っておいてよ！」
「ようやく見つけたぞミル！町の人たちにこんなに迷惑かけやがって…指輪を外して姉ちゃんと来るんだ！」
「ふんだ！」

ぷいっ、と頬を膨らませそっぽを向くミル。妹の反抗にミリが額に青筋を立て、声を荒げる。

「こら！いい加減にしないとお尻ペンペンじゃすまさないよ！」
「ひっ…」
「子供かよ…」

ミリの発言もどうかと思ったが、それにびびるミルに対し呆れるルーク。あれではまるで子供だ。

「な、なによ、なによ。全然怖くなんかないんだからね！もう、さっさと帰って！！」

ミルがそう言って手を振ると、虚空からザワザワと何かが生まれる。体は青白く、鋭い爪にギョロリとした目。あれが、幻獣。ミルを一瞬のうちに数体もの幻獣を生みだしたのだ。

「やっちゃって、幻獣さん！！」

「まずいわ！！」

ミルの合図と共に、幻獣たちがルークたちめがけて宙を走る。幻獣の呪文とは、無の世界から怪物を召喚する力。その怪物たちはある特殊な性質を持っていた。

「がっはっは、動きが鈍いな！俺様の華麗な剣技で真っ二つだ！！」

そう言って向かってきた幻獣に剣を振るランス。しかし、その剣は幻獣の体をすり抜けてしまう。

「あ、あれ？どういうことだ！？」

「駄目、私のチューリップも効かない！」

「あっはっは、私の幻獣さんにはそんな攻撃効かないわ！！倒したかったら大昔に所在不明になった幻獣の剣でも持ってくるのね！！」

「くそっ、どこまで世間様に迷惑かければ気が済むんだ、ミル！！」

これが幻獣の特性。その体を覆った特殊な結界のせいで攻撃がその体をすり抜けてしまい、ダメージを与えられない。一気に幻獣たちに囲まれてしまうランスたち。

「今ならごめんなさいすれば無傷で帰してあげるわよ。さぁ……えっ？」

勝ち誇るミルだが直後信じられない光景を見る。一閃。目の前の

幻獣が先ほどまで静かにしていた男に斬られ、消滅していた。

「わざわざ説明ありがとう。幻獣の剣…っていうのはこいつのことかな？」

「ど、どうしてそれを！卑怯よ、反則だわ！その剣は幻獣使いにとって天敵なのよ！」

男が持っていたのは先ほどミルが口走った幻獣の剣。あの剣は幻獣の結界を無効化してしまう特殊な剣で、幻獣使いのミルにとっては発言通り天敵とも呼べる代物だった。

「おお、ミイラ男に貰った剣か。仕方がない、今この場で戦えるのはお前だけだ。さあ、働け！」

ランスがルークに指示を出すが、今の一撃で何かを確信したルークは、手に持っていた幻獣の剣をランスに向かって投げる。反射的に受け取ってしまうランス。

「ランス、使え。貰いもんなんだから後でちゃんと返せよ」

「むっ、貴様自分が楽するために俺様に剣を渡したな。めんどくさいからお前が…っておい！」

ランスの話が終わる前に、元々の装備である妃円の剣を抜いて幻獣に突っ込んでいくルーク。幻獣が鋭い爪をルークに振り下ろす。

「だめ、ルークさん危ないわ！！」

「何やってんだ！さっさと下がれ！！」

マリアとミリも声を上げる。普通の剣で幻獣に向かうなど自殺行為だ。幻獣の腕とルークの剣が交差する。剣はその体をすり抜け、

爪がルークを引き裂く、とその場にいた誰もが思っていた。が、現実に起こったのは全くの逆。幻獣の腕をルークの剣が斬り裂き、そのまま体ごと真っ二つにしていた。

「嘘、どうして!?なんで普通の剣で幻獣さんに攻撃できるの!?」

「残念だったな、ミル・ヨークス。どうやら俺は幻獣使いにとって…」

ミルが先ほど以上に大声を上げる。マリアとミリも目の前の光景に唖然とする。普通であれば幻獣の結界に攻撃は遮られるはずなのだ。普通であれば、だ。しかし、今目の前に立つ男の持つ世界に唯一の技能は普通ではない。対結界。それは、ミルにとって幻獣の剣以上の…

「天敵みたいだ!!」

ー悪魔界　某所ー

「願い事を叶えたのに契約を破棄されたですって、このグズ!フェリス、あなたは降格処分ね…」

「そ、そんなぁぁぁぁぁ!!フィオリ様ぁぁぁぁ!!!」

転落人生、スタート。

第２１話　転落人生（後書き）

［人物］

フェリス

ＬＶ　－／－

技能　悪魔ＬＶ１

元カラーの悪魔。若くして第六階級まで上り詰めたエリートであったが、ランスのせいで降格させられた。悪魔は通常のＬＶ概念から外れており、階級や功績により強さがある程度変動する。第六階級ともなれば、並の魔人とも同等に渡り合える実力を持つ。降格したが。

フィオリ・ミルフィオリ　（ゲスト）

ＬＶ　－／－

技能　悪魔ＬＶ２

フェリスの上司。ドＳ。第三階級悪魔で、広大な領地を持つ君主。その実力は並の魔人では到底太刀打ちできない。最近空中に浮かぶ都市が気になっているとかいないとか。アリスソフト作品の「闘神都市３」よりゲスト出演。

［技能］

悪魔

悪魔としての才能。人間やカラーから転成した者は、転成する際に身につく。

第２２話　幻獣使いミル

―ピラミッド迷宮　幻獣の間―

「なんで…なんでよ…なんで幻獣さんが倒せるのよ！」

目の前で起こっている事態にミルが声を張り上げる。今までどんな相手にも敗れることの無かった幻獣。ランの剣も無効化し、あの四魔女最強の志津香も幻獣を破る手段は持ち合わせていなかった。それがささやかな自慢だった。だが、その自信が今音を立てて崩れていく。目の前にいる二人の戦士が、次々と幻獣を消滅させていくのだ。茶髪の戦士の方はまだ理解できる、彼が装備しているのは幻獣を打ち破れる特殊な剣だ。では、もう一人の黒髪の戦士は一体何なのか。ミルが魔力を込め、手を振る。先ほど生みだしたよりも更に大量の幻獣が召喚される。

「やっちゃって、幻獣さん！特にあの黒い髪のおじさん、絶対許さないんだから！！」

「お…おじさん…」

幻獣を斬り伏せていたルークの手が止まり、顔が引きつる。流石に聞き捨てならない言葉だったのか、ミルに対し反論する。

「失敬な！俺はまだ２５だ！お兄さんと呼べ、お兄さんと！」

「がはは、十分おっさんだ！」

「あ、結構年上だとは思っていたけど、私よりも８つも上なんですね」

「まあ…ミルから見たらおじさんだろうな」

まさかの味方からの追い打ちに肩を落とすルーク。ランスがやーい、じじいと更なる追い打ちを掛けるが、直後のミリの発言にその挑発が止まる。

「ってことは今この場に二十代はあんただけか」
「ん…ちょっと待てミリ、お前年はいくつだ？」
「俺か？今年で１９だけど？」
「「なんだと！！！」」
「…あんたら二人、後で覚えておけよ」

ふざけながらもルーク、ランス共に一流の冒険者。新しく迫ってきた幻獣の攻撃を躱し、お返しにとその体を両断する。幻獣の動きは基本的に鈍い。攻撃さえ普通に与えられれば、低級モンスターを相手にしているようなものだ。ふと見れば、ミルが更に幻獣を召喚していた。

「とは言え…キリがないな。指輪のせいで魔力切れも遠そうだし…術者を倒すのが手っ取り早いな」
「ひっ…」

そう言い放ち、ミルに向かって殺気を含んだ視線を飛ばす。その殺気もミリの妹なので多少甘めのものだが、十分効果はあったらしい。

「こ、来ないでよ…幻獣さん！あのおじさん絶対に殺して！！」

四度手を振ると、またも大量の幻獣が生み出される。既に部屋にいるのと併せて、その数は三十体以上にも及ぶ。これを倒すのは骨が折れそうだ。そう思っていると、ミルは走って奥の部屋へと逃げ

て行ってしまう。

「ランス、追え。ミルの指示通り、幻獣は俺を狙ってきている。もしテレポートウェイブなんかの装置があって逃げられると厄介だ。マリアとミリもついて行け。ダメージを与えられない以上、残っていてもしょうがないしな」

「ふん、ならここは任せた。ミルのお仕置きと処女は俺様に任せろ！」

「悪いね、頼んだよ」

「ルークさんも気をつけて」

そう言って目の前の幻獣をランスが斬り伏せ、ミルを追う三人。幻獣は単純な思考回路らしく、追う三人よりも直接指示を受けたルークの方に寄ってくる。部屋を出て行く間際のミリの背中に向かって声を掛ける。

「ミリ、必ず妹を救い出せよ！」

「…ああ、恩に着る！」

こうして部屋にはルークただ一人取り残された。周りを囲むのは三十体を越える幻獣。特にルークに近かった幻獣三体の爪が一斉に襲いかかってくる。そんな状況に置かれながらも、ルークは不敵に笑った。

「ふっ…最近魔法攻撃中心の敵との戦闘が多くてな…やはり近接戦闘はやりやすくていいな！」

―ピラミッド迷宮　ミルの間―

ミルを追ってきたランスたちも、奥の部屋で幻獣を相手取っていた。結果として脱出装置のようなものはなく、単純に追い詰めた形となったが、無制限に生み出される幻獣が面倒なことこの上ない。しかもこの場で戦えるのはランス一人、そんな状況にだんだんと苛立ちが溜まってきていた。

「あー、なんか面倒になってきたなぁ…」
「そんなこと言わないでよ、ランス」
「ほらほら、まだまだ幻獣さんたちはいるんだから、早く帰ってよね！」
「バカ抜かせ！妹を残してどこに帰れってんだ！お前がいるところが、私がいる場所だ！」
「……おねえちゃん…」

やる気をなくしているランスを必死にフォローするマリア。ミリとミルは二人で盛り上がっている。なんだ、姉妹仲良いんじゃないかと思っていたランスはふとある作戦が頭に浮かぶ。

「…うむ、俺様自身恐ろしくなってしまうほどに完璧な作戦だ。これが持って生まれた才能か」
「？何言ってるの、ランス？」
「まあ、見ておけ」

近場にいた幻獣を倒したランスは、隣で盛り上がっているミリの背後にこそこそと回っていく。そして突如ミリを腕で拘束し、その首筋に剣先を押し当てた。

「これが目に入らぬか！ミル！！」
「なっ！！！」

「おい、ランス…」
「見てろって…この光景を…？最低…」
「さぁミル、降伏するんだ！姉のミリがどうなってもいいのか！！」

清々しいまでに外道な作戦を実行したランス。マリアの軽蔑の眼差しなど気にしていない様子で、ミルに降伏するよう迫る。困惑するミルだが、易々とは降伏しない。

「あ、あんた最低！おねえちゃんとは仲間だったんじゃないの！？…そ、そんな猿芝居に騙されたりなんか…」
「おおっと、手が滑った！」

そう言って剣先を少しずらすランス。ミリの首筋に薄い切り傷が出来、一滴の血が流れる。

「ランス、お前いい加減にしろよ。本気なのか？それなら俺も全力で抵抗させて…」
「バカ。演技に決まってるだろ！お前も協力しろ」

ミリの問いかけに対し、ミルに聞こえないよう小声で回答するランス。その答えにミリが少し安堵の表情を浮かべる。

「まあ…考えてみればそうだよな。本気でこんな事するわけ…」
「うむ。だから弾みや流れで殺してしまっても恨むなよ」
「……うぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
「バ、バカ。何全力で拘束から逃れようとしてるんだ！」
「もうやめてーーーー！！！」

危うく作戦が頓挫する直前でミルが大声を上げる。たった一人の大切な姉、放っては置けない。指輪で心が悪に染まっていても、そ

の絆までは消されていなかったようだ。

「わ、わかったから…降伏するから…おねえちゃんにヒドいことしないで…」

「がはは、そうか！では命令を聞いて貰うぞ！まずは服を脱げ！それから…」

「えぇっ！？」

「ちょっと待ってランス、まだミルは…」

「ええい、うるさい。処女を失わんと指輪を外せないんだろうが！」

「うっ…まあそうなんだけど…」

ランスとマリアが問答をしている間にミルは着ていた服を脱ぎ去った。下着姿で恥ずかしそうにしながら口を開く。

「……これで…いい？」

「まだまだ、さあここからが本番だ。ぐふふ…」

「ほん…ばん？」

―ピラミッド迷宮　幻獣の間―

こちらでは丁度ルークが最後の幻獣を倒したところであった。見ればその体はほぼ無傷。高レベルな事もあり、近接戦闘であればこの程度の相手がいくらいようと、その動きの鈍さを見切って無傷で倒しきることは十分可能であった。とは言え数が数、多少くたびれた様子で肩を回すと、奥の部屋の方を見る。

「さて…俺も行くか。もう終わってるかもしれんがな」

そう言って、ルークは奥の部屋へと向かう。戦闘の音がしてこない。やはり決着はもうついてしまったらしい。少し残念そうにしながら入り口を潜る。しかし、ルークは部屋に入って飛び込んできた光景に驚愕し、持っていた剣を落としてしまう。

「びえーん！痛いよー！！」
「なんだ、なんだ、なんだーー！！？」

先ほどまでこの場にいなかった裸の少女がわんわんと泣いており、その横でランスが困惑していた。少女とランスは既に事を済ませた後のようだった。ここまでは見慣れた光景であるが、問題なのはその少女の年齢。明らかにまだ１０前後である。

「ランス…お前…あんな幼い娘になんてことを…流石に容認できんぞ……」
「ち、違うわ！こんなちんちくりんなガキ、俺様は知らん！」
「おぉ…ランスにそんな趣味があっただなんて…よーいちろーがやってきてしまう…」
「だから違うと言ってるだろうが！」
「ランス、ルークさん、これがミルの本当の姿なの」

状況が飲み込めていない二人に、マリアがフォローを入れる。

「なっ？これがミルだと！？全然姿が違うではないか！」
「多分、強すぎる魔力にも耐えられるように、指輪がミルの体を成長させていたんだろうな」
「それを知らずにヤっちまった訳か…因みに今いくつなんだ？」
「ミルはまだ９才だよ」

ぎろっ、とどこかでソフリンちゃんが睨んでいる気がする。聞い

てはいけない質問だったようだ。年齢を聞いて更にショックを受けた様子のランス。

「さて…と、悪いけど俺はここで抜けさせて貰うぜ。ミルを町に連れて帰らないとな」

「あれ？一度置いてきて合流はしてくれないの？」

「ミルを見ててやらないとな。指輪にどんな悪影響があるかも判らないし」

「まあ、そうだな。こっちは大丈夫だから、妹と一緒にいてやれ」

「悪いな。短い間だったけどお前らとの冒険、なんだかメチャクチャで楽しかったぜ。またな、ランス、ルーク！」

そう言ってミルを連れて帰り木で町へとワープしたミリ。それを見届けた後、マリアが張り切った声を上げる。

「なんにしてもこれで指輪はあと二つね。さあ、四層にいるランのところに向かうわよ！」

「あんなガキンチョに…俺様のプライドが…」

「ほらほら、行くぞ」

未だ立ち直れないランスを引きずっていくルークとマリア。四層へと続く階段はミルの部屋の近くにあった。気を引き締めてその階段を下りようとしたとき、下の階から声が聞こえてきた。

「…ス…ま…たすけ…」

「！？ランス、今の声！」

「シィルの声じゃねえか！行くぞ！！」

「え、なになになに？」

先ほどまでの力の抜けた状態から一転、剣を握りしめながらラン

スは下の階層へと走り出した。

―ピラミッド迷宮　棺の間―

「お、音がやんだな。おいちゃんの剣は役に立ったかねぇ？」

壁向こうのミルの部屋から聞こえていた戦いの音が止み、ミイラ男は一人呟く。まさか自分の剣が人質作戦などと言う卑怯な手に使われたとは夢にも思っていない。すると、突然声を掛けられる。

「おほほほほ、お久しぶり。聞こえたでおじゃるよ。あの剣、誰かに渡したのでおじゃか？」

部屋に入ってきたのは、体は人間だが顔が猫である何か。真っ赤なタキシードを着て、手には看板を持っている。

「おお、K・D殿、お久しぶりです。またここには暇つぶしで？」

「その通りおじゃ。さあクイズするでおじゃよ。で、質問の返答は？」

「ええ、中々に見所のある戦士が二人いたんで、譲ったんでさぁ。こんなところで腐らすよりいいからねぇ」

「ふむ、大事な剣を譲るほどに将来有望そうな戦士。まろも見てみたかったでおじゃ」

「はっはっは、ケイブリスの事を言っても、逆に俺が倒してやるみたいな目をしていたよ。端かりゃ見りゃ、世間知らずかただのバカだが…そういう感じでもなかったんね。おいちゃん気に入っちゃったよ」

「おほほほほ、それにしてもあの貧弱だったリスちゃんが今や魔人

四天王とは…時代の移り変わりは凄いものでおじゃね」
「またその話ですか。K・D殿の話はどこまで信用して良いのか困りますなぁ」

慣れた様子でK・Dの発言を受け流すミイラ男。あまりにもスケールが大きすぎる内容はいつものことのようで、全く信用していない。

「本当なんでおじゃがね…」

落ち込んだ様子のK・Dと呼ばれた生物。まだ随分と先の話になるが…彼もまた、ルークと深く関わることになる。K・D（キング ドラゴン）。その正体は、今から４０００年以上前の話だが、かつて大陸に統一国家を建国したドラゴン族の王であった。その彼がなぜこのような姿をしているのか、なぜ戦うことを止めたのか…それを知る者は少ない。

第２２話　幻獣使いミル（後書き）

［人物］
ミル・ヨークス
ＬＶ　１０／３４
技能　幻獣召喚ＬＶ１
　カスタム四魔女の一人。非常に珍しい幻獣魔法の使い手であり、まだ幼いながらも他の三人にも一目置かれていた。ミリの妹であり、家に帰った後はこってりと絞られたが、姉妹仲は良好。ランスに処女を奪われる。おお…ソフリンちゃんがお怒りだ。

Ｋ・Ｄ
　クイズ好きの猫人間。その正体はドラゴンの王、マギーホア。かつて大陸を統治したドラゴン族だが、今ではごく少数が翔竜山に生息するのみである。彼らに何があったのか、その真実は謎に包まれている。

［技能］
幻獣召喚
　異空間から幻獣を呼び出すことが出来るレア技能。その姿は術者の精神に影響を受ける。

［その他］
よーいちろー
　悪い子にしているとよーいちろーがくるよ、と子供のしつけによく使われるなまはげ的存在。やってくるのは可愛い少女のところのみ。

ソフリンちゃん

その睨みはハニーキングをも震え上がらせるというＰＣゲーム界のドン。その割には６でカーマ、７で香姫、８でオノハと意外に寛容な面もある。

第２３話　幻術使いラン

―妖体迷宮　通路―

第四層に位置するエレノア・ランの迷宮の中を、シィルとバードは歩いていた。ワープ装置が数多くあり、少しでも手順を間違えれば同じ場所をループさせられるまさしく迷宮。二人は自分たちが今どこにいて、どこに向かっているかも判らなくなってしまっていた。

「彼女たち…一体どこに連れて行かれてしまったのでしょうか…」

「わからない…早く助け出してあげないと…」

彼女たちというのはランに捕らえられていた女性たちだ。以前にチサが話していた誘拐された若い女性たちというのが彼女たちなのだろう。出口を探すシィルたちが拷問戦士に嬲られているのを発見し、これを救出。しかし、少し目を離した隙に再度ランに攫われてしまったのだ。

「魔女たちは彼女たちを攫って一体何をしようとしているんだ…」

バードが独りごちる。目的が見えない行動は、それだけで恐怖の対象となる。ましてや相手は魔女。バードの脳裏には先ほど救出した三人が人体実験を受けているシーンが浮かぶ。自然と顔が強ばり、その緊張はシィルにも伝わってしまう。

「私たち…このまま出られないんでしょうか…？」

「何を言ってるんだシィルちゃん！諦めちゃだめだよ」

「でも…もう何時間もこうして歩いているのに手がかり一つ…」

「大丈夫だ！君のことはこの僕が命に代えても守ってみせる！」
「…ありがとうございます。すいません、弱気になっちゃって」

バードは共に迷宮を探索している間にシィルに惹かれていた。本人は積極的にアプローチをしているつもりもなかったが、言葉のそこらかしこにそれが垣間見える。シィルも薄々感づいてはいたが、好意を持っている人物が他にいるため、気がつかない振りをしていた。

「早くランス様と合流しないといけないですし、弱音なんて吐いていられませんよね」

好意を持っている人物であるランスの名前を出し、自分を奮い立てるシィル。しかし、隣にいたバードはその発言に少しむっとする。道中シィルからランスの奴隷であるという話を聞いたバードは、黙っていられなかった。

「シィルちゃん、君はどうしてランスとかいう男と会いたがっているんだ？君を奴隷にしているような奴なんだろう？…そうか、逃げたらもっと酷い目に会うと思ってしまい逃げられない程に酷いことをされているんだね。なんて最低な男なんだ、ランス！」
「え…いえ、そういう訳ではなくて…」
「無理しなくていいんだ、シィルちゃん！君は僕が救い出す！」

そう言ってシィルを抱きしめるバード。いきなりの行動にシィルが慌てるが、バードはどんどんと話を進めてしまう。既に彼の頭の中には外道ランスと囚われの姫シィル、そしてそれを救い出す英雄バードの構図が出来上がってしまっていた。

「安心してシィルちゃん、僕がきっとランスの魔の手から君を救い

出して見せるから」
「あ、いえ…そうじゃなくて…私がランス様と一緒にいるのは自分の意志というか…一緒にいる内にランス様の魅力に気づいて…そ、その…」
「……うん、判った。ランスのことが好き、そう言いたいんだろう？」
「……えっと…は、はい…」

顔を紅潮させながらも小さく頷くシィル。どうやら伝わってくれたらしいと胸をなで下ろす。

「そして、そうしなければいけないと思えるほどに酷い目に遭わされてきたんだね！」
「……あれ？」
「うぅ…もう許しておけない。その外道は必ず僕が倒す！」

シィルに同情したのかポロポロと涙を流しながら誓うバード。決して悪い男ではないのだが、若干自分に酔っている。どうしたものかとシィルが困っていると、前方から女性が現れる。

「バード、助けに来たわよ。あら…その人は…？」
「えっ！？どうして君がここにいるんだ、今日子？」

現れたのは情報屋の双子の妹、今日子。行方不明になっていたのは誘拐されたわけではなく、バードが迷宮で行方不明になったことを知って、冒険者も連れず一人で救出に来ていたのだ。中々に行動力のある娘である。バードがシィルを抱きしめている光景を見て、少し目を丸くするが、すぐに冷静な表情に戻る。

「……別に、ここに占いに使える道具があるって聞いたから探しに

来ただけよ」
「あれ?今バードさんを助けにって…」
「……聞き間違いじゃないかしら?どうして私がバードを助けに来る必要が?」
「そうだよ、シィルちゃん。僕と今日子はただの知り合いだからね」
バードの発言に一瞬だが顔を歪ませる今日子。天然で火に油を注ぐ男である。
「ま、そういうことだから私は行くわ」
「ちょっと待った、今日子。一人は危ない。一緒に行かないか?」
「誰があなたなん「あら?ここにも生気が滾った娘がいるわね」…!?」
今日子の言葉を遮るように迷宮に声が響く。すると、突然今日子の後ろから赤い髪の女性が現れた。振り返り顔を見た今日子は、彼女の名前を口走る。
「……エレノア・ラン」
「ふふ、お久しぶりね今日子さん。そして…さよなら」
ランがそういった瞬間彼女の目が妖しく光り、今日子の体が崩れ落ちる。幻惑魔法の使い手であるラン。その彼女が最も得意にしているのがこの催眠の魔法だった。その目を見た者は幻想の世界に投げ込まれ、行動の自由を奪われる。
「今日子さん!!」
「ラン、ここでお前を倒して今日子と三人の娘たちを救い出す!今日がお前の命日だ!」
「あらら、怖い怖い。早く今日子さんを志津香様のところに送りた

いのだけれど……まあいいわ。私が直々に可愛がってあげる」
「!?シィルちゃん、彼女の目を見てはいけない!」

そう言って再び目を妖しく光らせるラン。バードはシィルの前に立ちはだかるように躍り出る。シィルも慌てて目を閉じる。が、直後辺りを切り裂くような悲鳴が響いた。

「うぁぁぁぁぁぁぁっっ!!!!」
「バードさんっ!?」

目を開いたシィルが見たのは、ランに左腕を肩口から斬り飛ばされるバードの姿だった。腕がゴロゴロと転がる。

「あははは!信じられない!敵を目の前にして二人して目を閉じるなんて。幻惑魔法だけじゃなくて剣も使えるって知らなかったの?それに…攻撃魔法もね。炎の矢!」

そう言って指先から炎の矢を放つラン。対象はシィルでもバードでもない、床に転がっていたバードの左腕だ。炎の矢が直撃し、一気に燃え上がる左腕。辺りに肉の焦げる臭いが充満する。

「これであなたはもう一生片腕ね。冒険者稼業は廃業かしら?くすくす」
「うっっぐぅぅぁあぁぁぁぁ!!ラン!!!!」

剣に付いた血を舐めながら、ランが笑う。バードが苦痛に声を上げながらも、剣を握りしめランに向かっていこうとする。

「駄目です、バードさん。ここは一旦引いて早く治療しないと!」
「に、逃がさないぞ!!」

バードが腕を掴み、逃げられないようにする。しかしその相手はランではなくシィル。驚いたシィルがバードの顔を見る。その目からは正気が失われていた。

「まさか…バードさん、幻術に!?」
「シィルさん」

思わぬランの呼びかけについ振り向いてしまうシィル。失策。しかし、後悔してももう遅い。その瞳が妖しく光る。

「あっ…あぁぁぁ……」
「ふふふ、こんなに簡単に操られるなんて…滑稽すぎるわよ、あなたたち。さて、このまま志津香様のところへ…」
「ランス様……」
「あら?まだ意識が少し残っているのね?催眠が効ききっていないところを見ると、彼女もそれなりに才能ある魔法使いみたいね」
「助けて……」
「助けなんてこないわよ。さぁ、志津香様のところへ。それとも少し私が楽しもうかしら」
「ランス様……助けて……」
「うふふふふ、だから助けなんて……きゃいんっ!」

突如ランの後頭部に激痛が走る。振り返れば仲間であるはずのマリアと見覚えのない男が一人。この男にげんこつをされていたのだ。頭を押さえ、涙目になりながら怒りの声を上げる。

「な、な、な、何者よあなた!急に現れて!」
「俺様を知らないのか?勉強不足だな!よーく覚えておけ!!」

聞き慣れた声が辺りに響き渡る。今の一撃で催眠が解けたのか、シィルの意識が戻っていく。

「ある時は今世紀最強の天才剣士！またある時は女たちのハートを射止める絶世の美男子！そしてまたある時は数々の謎を解き明かす知的な冒険家！」

「あ…あぁ…」

シィルの目に涙が溜まっていく。意地悪で口も悪いが、自分のピンチには必ず駆けつけてくれる大好きなご主人様。

「そしてそこのピンクモコモコ奴隷のご主人様にして世界の大英雄！ランス様だ！！！」

「そこまで自分で言うの…？」

「ランス様ぁぁぁぁぁ！！！」

マリアの突っ込みをよそに、シィルがランスに抱きつきに行こうとする。感動の再会だ。ちょっとロマンチックかもしれないとシィルが考えていたが、その頭にすこーんとランスの投げた石がヒットする。

「ひどっ！ちょっとランス、シィルさん可哀想でしょ！！」

「ばかもん、シィル！こんな雑魚にやられやがって！俺様の奴隷を名乗るならもっとちゃんとしろ！」

「ひんひん、ごめんなさい……」

ロマンチックどころか色々と台無しな再会であった。

「ラン、その指輪には恐ろしい悪の作用があるの！元の優しかった貴方に戻って！」

「恥を知りなさい、マリア！そんな男の軍門に下るなど！こんな男、私が倒してあげるわ！」

自信満々に右手で剣を取るラン。左手に魔力を溜め、目も再び妖しく光り始める。

「がはは、お前みたいな雑魚が俺様に勝てるわけないだろ！」
「雑魚ですって！？バカにして…剣、魔法、そしてこの魔眼！一戦士風情が私に向かって雑魚などと…」
「まあ…雑魚と言われてもしょうがないだろうな。まだ気がついていないんだから」
「へ？」

チャキっ、と後ろから首筋に剣を突きつけられる。固まるラン。剣を突きつけているのはルーク。ランスたち登場の前に身を隠し、ランの後ろに回り込んでいたのだ。

「侵入者の人数くらい把握しておくべきだったな。おおっと、振り返るなよ。幻術を使おうとしたら問答無用で首を飛ばすぞ」
「がはは、雑魚すぎる！」
「……くすん」

こうして自信満々だったランは、四魔女中最速で敗れ去った。その背中が少し寂しそうであったと、後にシィルが語った。それと時をほぼ同じくして、町の方で二つほど動きがあった。

―カスタムの町　ラギシス邸前―

「お姉ちゃん、ごめんなさい…」
「俺じゃなくて町の人にちゃんと謝るんだぞ」
「はい…」

ルークたちと別れ、一足先に町に戻っていたミリとミル。町長に話を済ませ、今は自宅に帰る途中であった。が、廃墟となったラギシス邸の前を通ったときに異変に気がつく。家の中から気配を感じるのだ。

「誰だ！」

ミリが叫ぶ。すると屋敷の暗闇から、湧き出るように一人の少女が現れた。その瞳は焦点が合っておらず、ぼんやりとしている。

「お姉ちゃん。この人…」
「あぁ…行方不明だったチサだ。おい、大丈夫か！」

ラギシス邸にいたのは行方不明になっていた町長の娘、チサであった。程なくして意識を取り戻すが、行方不明の間のことは全く覚えていないようだった。

「攫ったのは…ランか志津香だと思っていたが…違うのか…？」

ミリの呟きに答えられる者はこの場にはいなかった。そしてもう一つ…

―カスタムの町　酒場―

「お客様、三名様ですね。…随分と高貴な出で立ちですね」
「当たり前じゃない！で、ダーリンはどこにいるの！」
「へ？ダ、ダーリン？」
「リア様、ここはお任せください。私たちはリーザスの者で、ランス様という冒険者を捜しているのですが…」
「（マリス様の話が終わったら、ルークさんのことも聞いてみようかなぁ…）」

全ての準備を終え、リア一行がカスタムの町に到着していた。

「…かなみ、心配しなくても一緒に聞いておいてあげますからね」
「へ！？な、何のことですか！？」

第２３話　幻術使いラン（後書き）

［人物］

エレノア・ラン

ＬＶ　１６／３０

技能　剣戦闘ＬＶ１　魔法ＬＶ１

　カスタム四魔女の一人。珍しい幻惑魔法の使い手であると同時に、剣も使いこなす魔法剣士。本来は非常に優しく、真面目な性格である。考えすぎてしまう傾向があり、悩みすてその内自殺でもしてしまうんじゃないかと一部で心配されていたりもする。雑魚じゃありません、器用貧乏なだけです、とは本人の談。また、エレノアが名前のはずだが、なぜかランと呼ばれることが多い

エルム・トライ

　ランに捕らえられていた赤い髪の少女。拷問戦士から空気ポンプの拷問を受けていた。

ゼリフィ・ゴーラ

　ランに捕らえられていた緑髪の少女。拷問戦士から逆さ吊りの拷問を受けていた。

レザリアン

　ランに捕らえられていた緑髪の少女。拷問戦士から鞭打ちの拷問を受けていた。

［モンスター］

拷問戦士

　女の子の拷問を生き甲斐とする残忍な戦士。剣の他に雷撃などの

魔法も使用してくる厄介な相手。

［技］

催眠

魔眼から放たれる光で敵を自分の意のままに操る初級魔法。初級とはいえ、幻惑魔法の使い手は少なく、非常に珍しい魔法である。

第２４話　戦士三人

―妖体迷宮　通路―

「わたし…町の人たちにあんな酷いことを…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「随分性格が変わったな。って、こらシィル、いつまで抱きついているんだ。ウザイぞ」

「だって…うぅっ…ランス様…」

「元は優しい性格だったってマリアがさっき言ってただろ。それと、せっかくの再会なんだ。もう少しそのままにしててあげろよ」

「ラン、落ち込まないで。みんな指輪のせいなんだから」

あの後ランスがしっかりとランの処女を奪い指輪を外すことに成功した。するとランの性格が一変し、今までの自分の行いを悔やみ、ボロボロと涙を零し始めたのだ。マリアがランをフォローし、ランスは抱きついて泣いているシィルを引きはがそうとしている。ルークは倒れていた男戦士の止血をし、今日子の介抱をしていた。

「でも私…信じられないようなことを…今日子さんにだって…そこの冒険者さんの左腕だって…全部私が…もう町の人たちに会わせる顔がない…もう町には帰れない…」

言った瞬間ポカーンとランスのげんこつが飛ぶ。二度目のげんこつに再び頭を抱えるラン。

「ふん、終わったことをウジウジと。町の人たちに会えないなら新しい町にでも引っ越すんだな。そこの町の人たちはお前が何をした

のか知らんから簡単に顔を会わせられるぞ」
「もう、ランス！新しい町なんて引っ越しても何の解決にもならないでしょ！…あれ、新しい町…それって考えようによっては…」
「もう私に出来ることは…死んでお詫びすることしか…」
「！？ちょっとラン！！」

パン、っと乾いた音が辺りに響いた。もう一度げんこつを飛ばそうとしたランスよりも早く、ランの左頬をルークの平手が打っていたのだ。

「君は今最低な行為を口にした。それは、君をここまで助けに来たマリアに対する侮辱だ」
「……」
「マリアだけじゃない。ミリもミルも君のことを心配している。町の人だってそうだ。町長が既に誤解を解いて、町の人たちは君たちの帰りを待っている。その想いを自ら踏みにじるのか？」
「ルークさん……」
「……うっ……うっ……」
「死ぬことは償いなどではない。自害という命の投げ捨てなど尚更だ。生きて町の復興に力を尽くせ」
「そうだそうだ！もし自殺なんかしてみろ。お前の死体にいっぱい悪戯してやるからな！」
「うわ…台無し…」
「う…うん、ありがとうルークさん、ランスさん…」

涙を拭いながら返事をするラン。その表情は先ほどまでの沈んでいたものと違い、若干ではあるが笑顔が戻っていた。

「ん？もしかして今のってランスなりの励ましだったの？優しいとこあるじゃない」

「ふん、俺様は可愛い女の子には優しいのだ。シィル、いい加減離れろ！」
「きゃん！ランス様ぁ…」
「ルークさんもありがとう」
「別に礼を言われるようなことは…」
「流石年を重ねているだけのことはありますね！」
「ぐはっ！」

マリアの悪気のない発言に倒れ込むルーク。ミルのおじさん発言をまだ引きずっていたようだ。そのとき、一振りの剣がランスに迫った。

「うぉおおおお！！」
「きゃぁぁぁ、ランス様危ない！」

ガキィィィン、と音が響く。ランスは迫ってきていたバードの剣を冷静に防ぎ、腹部に矢のような蹴りを入れた。倒れていたルークもすぐさま起き上がり、剣を抜く。

「ぐはぁぁっ！！」
「なんだお前、新手か？」
「違いますランス様。この方はバードさんと言って、一緒に協力してここまで来た人です」

シィルの発言に今すぐにでも斬り殺そうとしていたランスはその殺気を抑え、バードをジロジロと見回す。

「ふぅん…つまり、雑魚以下か」
「なん…だと！僕の剣の腕まで侮辱する気か！！」
「だってお前雑魚のランに負けたんだろ？つまり雑魚以下だ」

「雑魚じゃありません！器用貧乏なだけです！！」
「そうよ、ランス。ランはちょっと全部が中途半端なだけなんだから！！」
「マリア…とどめ刺してるぞ…」
「え？あれ、ラン？どうしてそんなに落ち込んでるの？さっきまでの元気はどこにいったの？」

ランがまた自殺しそうな顔に戻ってしまった。もう一発、今度はマリアに必要だろうかと考えるルーク。

「ランス、貴様と男と男の話がある！シィルちゃんは僕が守る！」
「シィルちゃん…だと？ふん、面白い。聞かせてみろ」
「あっ…ランス様…」

そう言ってバードと一緒に洞窟の奥深く潜って行ってしまうランス。シィルが追いかけようとするが、ルークが制止する。

「男の話だ。聞かない方が良い。シィルちゃんは今日子さんの介抱を頼む」

―妖体迷宮　通路奥―

「ランスさん、貴方はいつもシィルちゃんに酷いことをしているそうですね？貴方みたいな人にシィルちゃんを任せておけない！」

先ほどから少し冷静さを取り戻し、呼び捨てにするのを止める。抑えている左腕は止血したとはいえ、かなりの激痛のはずだ。その苦痛に耐えてでも早急に片を付けなければならないことがあったの

だ。勘違いではある。先走りでもある。しかし、彼は全力で一人の少女を救い出そうとしていたのだ。その行動は、間違いではない。

「なんだお前、シィルに惚れてるのか？」

「あぁ、そうだ！彼女は僕が守る！！」

「ふん、何を勘違いしてるんだお前。シィルは俺様にメロメロなんだよ」

「なんて自信過剰な人なんだ！彼女の幸せのために貴方が立ちはだかるなら…力ずくでも…」

「思い上がるなよ雑魚！片腕一本で俺様に勝てる気か？シィルを守る守るって、お前はシィルのピンチに何をしていた！」

「うっ…それは……」

「それに、助けられたときにシィルがお前ではなく俺様に抱きついてきたのを見ていなかったのか？」

「あっ……」

ランの催眠と左腕の激痛に意識がぼんやりとはしていたが、バードは確かに見ていた。ランスに嬉しそうに抱きつくシィルの顔を。自分には向けてくれなかったあの顔を忘れられるわけがなかった。

「全て…僕の勘違いだったと…言うのか…」

「ふん、やっと気がついたか。じゃあな、勘違い男」

そう言ってシィルたちのいる場所に戻ろうとするランス。その背中に向かってバードが悔しそうに声をかける。

「僕はきっと…この腕を治してもう一度貴方の前に現れる！そのとき…もしシィルちゃんが不幸であったなら…僕が貴方を倒す！！」

その言葉に、ランスはふん、とだけ言い、返事をすることなく通

路を戻っていく。すぐ側にあった曲がり道を曲がったところにルークが立っていた。

「……聞いてたのか？盗み聞きなど男らしくないぞ」
「一応、斬り合いにでもなったら止めようと思っていたんだが…割と寛大な処置だな」
「ふん、今の話、誰にもするんじゃないぞ。言ったら叩っ斬るからな。」
「誰にもする気はないさ。それより…」

ルークを通り過ぎ、シィルたちのところに戻ろうとしていたランスに問いかける。

「俺もシィルちゃん、って呼んでいるんだが…よかったのかな？」
「……ふん！」

―妖体迷宮　通路―

「あ、ランス様お帰りなさい。なんの話を…」
「なんでもいいだろう。さぁ、帰るぞ」

そう言って帰り木を使おうとするランス。

「えっ、ちょっと待って。ルークさんは？」
「先に帰ってろだとよ。ふん、偉そうに俺様に命令しやがった。…シィル、帰ったらヤるぞ！勝手に俺様から離れたお仕置きをしてやる！」
「はい、ランス様！」

「くそっ…くそっ…」

バードは泣いていた。先走ってしまったことに、女性一人守れないことに、左腕を無くしたことに、それらを招いた自分の不甲斐なさに。すると、ランスの去った方から声を掛けられる。

「あっちとは帰りづらいだろ。帰り木、持ってきてやったぞ」
「あなたは…ランスさんたちと一緒にいた…」
「ルークだ。お前と同じ冒険者さ」

現れたのはルーク。手には帰り木を持っており、バードと共に町に帰還するつもりらしい。バードの隣に腰を下ろし、口を開く。

「バードって言ったか。冒険者はまだ続けるつもりなのか？」
「はい」
「……その左腕でか？」
「義手でもなんでも手段はあります。必ず…強くなってみせます」
「そうか…なら、強くなるまでは女を連れるのは止めておけ」
「…？それはどういった意味ですか？」

思いも掛けないルークの言葉にその真意が判らず聞き返すバード。

「ランスが言っていただろ。守る、守るってお前は何していたって。あれ、間違いじゃない。守る力もないのに弱い者を巻き込むのは…罪だ」

「……」

「それが元々戦いの中で死ぬ覚悟のある奴ならいいさ。ネイのような生粋の冒険者だったりな。でも……今日子さんやシィルちゃんは違う。これから先、そういった覚悟のない女性と共に冒険をするつもりなら…命がけで守れ。それが出来ないなら安請け合いするな」

「……はい」

「それと……シィルちゃんをここまで守ってくれて…ありがとうな。ランスに変わって礼を言わせて貰う。ああ見えてランスも感謝してるんだぞ。そうじゃなきゃ喧嘩売った時点で殺されてる」

「……ありがとうございます。必ず…必ず強くなってみせます！」

先ほどまでよりも更に大粒の涙を流すバード。しかし、その瞳は先ほど以上に決意に満ちあふれていた。こいつはきっと強くなる、ルークはそう確信しながら帰り木で共に町へと帰還した。

ー溶岩迷宮　とある部屋ー

「ランもやられたみたいね…」

迷宮第五層、溶岩迷宮のとある部屋で緑色の髪の女性が独りごちる。彼女こそが、カスタム四魔女最後の一人にして、最強を誇る人物。魔想志津香。

「もう準備は整ったことだし…私一人でもどうとでもなるわ」

そう言って結界維持に回していた魔力を切る。彼女の計画に必要な全ての準備が整い、それを維持する必要がなくなったからだ。この瞬間、カスタムの町を覆っていた結界は解除された。

「ふぅ…これで大丈夫そうね。あと少し頑張れば…」

そう言って疲れた様子で椅子に腰掛ける志津香。録に寝ていないのか、目には若干くまのようなものが出来ている。机の上に置いてあった竜角惨を飲み、気合いを入れ直す。

「もうすぐ…もうすぐだからね…待っていて、お父様…」

最後の魔女との決戦は近い。

第２４話　戦士三人（後書き）

［アイテム］

竜角惨

　気力を回復させる黄色い錠剤。冒険者だけでなく、労働者にも愛用されている。

第２５話　王女襲来

ー カスタムの町　町長の家 ー

町に帰還後、バードと別れたルークは町長の家まで来ていた。既にランスとシィルが先に到着しているが、マリアとランの姿はない。そして驚いたことに、町長の隣に行方不明だったはずの娘のチサが立っていた。

「チサちゃん…無事だったのか？」
「はい、おかげさまで。ラギシス邸でミリさんに見つけて貰いました。いなくなっていた間のことは覚えていないのですが…」
「ラギシス邸で…？」
「うむ、無事に戻ってきてくれて何よりだ。それと、ラギシス邸はもう無い。事の真相を知った町の若者たちが取り壊してしまったよ。チサがラギシス邸で発見されたことも怒りに拍車をかけたようだ」

もう一度あの館を調べようと考えていたルークにとって、この知らせはあまり嬉しいものではなかった。が、住人の心境も考え、黙っておくことにする。

「それともう一つ大きな動きがあってな。町の結界が遂に解けたのだよ。おそらく四人中三人が解放されたことで、維持できなくなったのでしょう。これもランスさんとルークさんのお陰です」
「うむうむ、俺様を崇め奉るがいい」
「町の復興にはどれほどかかりそうなんです？」
「うむ…軽く一年以上はかかるかと…ですが町の者みんなで協力して再建していきます。三人の娘たちも積極的に復興に協力してくれ

ているんですよ」
「そうなんです。既にマリアさんは町の外で新しい町の開発の陣頭指揮に、ミルちゃんはお姉さんと一緒に薬屋を営み、ランさんは役所で外交を行っています。みんな町のために精一杯です！」

チサの説明にホッと胸をなで下ろすルーク。彼女たちは悪くないという説明を受けて納得していた町人も、いざ彼女たちが帰ってきたときどのような反応を示すか心配していたのだ。が、その心配は杞憂に終わったらしい。町長の家を出た後、それぞれの仕事場を見て回ることにした。ランスとシィルは外の工事現場と薬屋を、ルークは役所と今日子が無事帰っているか確かめるため情報屋を回ることにし、終わったら酒場で集合することになった。

―カスタムの町　情報屋―

「あら、ルークさんいらっしゃい。今日子を見つけてくれたようでありがとうございます」
「ん？今日子さんの姿が見えないようだが…」

情報屋にやってきたルークは今日子の姿が見えないことに疑問を抱く。ふぅ、と真知子がため息をつく。

「帰ってきてすぐに旅に出てしまいました。この町にはいられないんだとか」
「何かあったのか？」
「多分…バード君に失恋したんでしょうね。あの子…バード君のこと好きだったから。バード君もルークさんの少し前にウチに寄ったのよ。で、今日子がいなくなったって教えたら僕の責任だって追い

かけて行ってしまったわ」
「やれやれ…あの左腕で無茶をする。俺の言ったことはちゃんと守るんだろうな…？」
「悪い子ではないんだけどね…ちょっと自分に酔っているところがあるから…」

はぁ、と今度は二人でため息をつく。なんだか次に会うときにはもう女の子を隣に侍らしている気がする。もしそうだったら脳天チョップ確定だな、と心に誓うルークだった。

「バカよね…この世に男性も女性も、一人ではないというのに。もっと魅力的な男性が、たくさんいるかもしれないのにね」
「まあ…な。だが、それだけ一人を好きになるっていうのも、いいものかもしれないがな」
「あら？ルークさんにもそういう相手がいたのかしら？」
「まさか。寂しい独り身さ」
「ふふふ、ルークさんの魅力に気がつかないなんて、周りの女性はよっぽど見る目がないのね」
「リップサービスでも嬉しいよ。じゃ、俺はそろそろ行くよ。真知子さん、お元気で」
「ルークさんもお元気で。志津香さんの件もあるからまだ町にはいるのでしょう？町を出て行く前に、顔くらい見せてくださいね」
「ああ、必ず寄らせて貰うよ」

そう言って店を出て行くルークの背中を見つめながら、真知子は小さく呟いた。

「リップサービスでは…ないのですけどね。ふふふ、私も今日子の事は言えないわね…一人の男性に…執着しそうになってしまっているんですもの…」

―カスタムの町　役所―

地下都市の一角を利用した臨時の役所。復興のためにはどうしても必要らしく、早急にでっちあげた場所らしい。他の場所と比べてもかなり忙しいようで、人々がせわしなく動いている。その奥の方の席にランがいた。

「しっかりと復興のために働いてるみたいだな、ラン」
「あ、ルークさん。はい、これが私の償いですから。志津香のこと…よろしくお願いしますね。もう…あまり時間はないと思いますから」
「…どういうことだ？」
「結界が解けたのが理由です。あれは三人が解放されたから解けたんじゃありません。元々結界は志津香一人で張っていたんです」
「なるほど…解けたんじゃなく、解いたということか。となると…何かしらの計画の準備が終わった、ということか」
「誘拐された少女たちの安否も心配です。一体彼女たちを使って何を…」
「ま、俺とランスに任せておけ。必ずみんな助け出してみせるよ。志津香もな」

そう言ってポン、とランの頭の上に手を置く。四魔女の中でも最年長であり、他の娘のお姉さん役であることも多かったためか、あまり年上の男にこういったことをされるのには慣れていないらしく、顔が赤く染まっていく。

「…あぅ」

「あら?ランさん、ひょっとして彼氏さんですか?」

その様子をみた役所の職員がランをからかいにくる。真面目なランの珍しい姿に興味を引かれたのだろう。

「ひゃい!?そ、そんなことないですよ!!」
「お、振られちゃったな」
「残念でしたね、私なんてどうです?」
「はは、名前も知らない女性といきなりはつきあえないさ」
「きゃ、私も振られちゃいましたね」

笑い会う二人をよそに、まだ顔の赤いランは二人の会話が耳に入ってきていないようだった。

「で、ランは今どういった仕事を任されてるんだ?」
「えっ!?い、今は町の再建費用を隣の王国から借り入れする交渉をしています。あちらの王女様が中々曲者で…こちらが必要な額を完全に把握していてカスタムが支配都市になるよう色々条件を突きつけてきて…」
「隣の王国…というとゼスではなくリーザスかな。確かにあの王女と侍女は曲者だな」

ルークの頭に誘拐王女と甘やかし侍女の顔が浮かぶ。うぅむ、懐かしい。会いたいような、会いたくないような。

「ご存じなんですか?」
「以前、仕事で顔を会わせたことがある程度さ。そうか…リーザスからの資金か…」
「それでも凄いですよ。なんにしても私、町のために頑張ります」
「ああ、いい町にしてくれ。それじゃ、あまり邪魔しても悪いから

そろそろ行くよ」
「はい、本当にありがとうございました。それと…お気を付けて」

―カスタムの町　酒場前―

「お、タイミングぴったしだったな」
「ルークさんもお疲れ様です」

酒場の前まで来たルークは、丁度反対側から歩いてきたランスたちと店の前で合流する。聞けば、ミリとミルは姉妹仲良く薬屋を営み、町の人からも頼られており、マリアは設計の才能があったらしく、新しい町作りのため工事現場を張り切って仕切っているという。そして、どちらからも志津香を頼むと言われたらしい。

「ま、こんだけ女の子に頼られたら…助けない訳にはいかんわな」
「がはは、当たり前だ。志津香の処女も頂いて四魔女コンプリートだ！」
「そこかよ…」

そう言いながら酒場に入っていく一行。入るやいなや、エレナが声を掛けてくる。

「いらっしゃい、ランスさん。二階のお部屋にお客様が尋ねてきていますよ」
「なに？もちろん美人なんだろうな？」
「そりゃもう、とびっきりの美人さんが三人ですよ。ランスさん本当にもてるんですね」
「三人も？特徴とか何かあるかな？」

「なんだか高貴なかたでしたよ」

その言葉に先ほど話題に上がったある人物が頭に浮かぶ。が、まさかなとその考えを吹き飛ばす。

「おお、それではすぐに二階に上がるぞ！」

「あっ、待ってください、ランス様！」

「それと…三人の内の一人はどちらかというとルークさんに会いに来たみたいですよ。ルークさんももてますねー」

「俺に…はて？」

そう言われながらランスの後についてルークも二階に上がる。臨時の宿泊施設として使っている最奥の部屋、客人が来ているという部屋の前まで来て、ランスが豪快に部屋を開ける。

「さあ、俺様への客というのは誰かな？」

「きゃあ、ダーリン！！リアです！！」

パタン、と扉を閉めるランス。女好きのランスにしては非常に珍しい反応である。しかし、すぐに内側から扉が開けられる。

「ってダーリンったら酷い。いきなり閉めるなんて！」

「うおっ、やっぱりリアか！結婚はしないと言っただろうが！ダーリンって呼ぶな！」

「そんな…私のことが嫌いなんですか…？」

「うっ…」

「ごめんなさい、ダーリン…でも困らせる気はないの…妻と認めて貰える日までずっと待ち続ける覚悟はあります！」

「ええい、そんな日は来んわ」

客人というのはルークの予想通り、やはりリア王女一行であった。結婚する気はないとはいえ、美人の涙には弱いランス。リアの積極的なアプローチにたじたじとなっている。シィルもリアの勢いに呆然となっている。その横でルークはマリスと挨拶を交わしていた。

「久しぶりだな、マリス。息災で何より」
「お久しぶりです、ルーク様。そちら様もお変わりないようで」
「で、リア王女の悪癖は収まったのか？」
「お陰様で。ランス様からもきつく言われたようで、今ではそのようなことは一切しておりません」
「それは何より」

軽く挨拶を交わしているルークとマリス。その間に、ぬっとリアが割り込んでくる。

「ね、マリス。ダーリンを困らせないように妻と認めて貰える日まで待ち続けようとする私ってけなげよね？」
「はい、その控えめな態度がきっといつかランス様に通じることでしょう」
「えへへ、待ってるからね、ダーリン！」
「待たんでいい！」
「…相変わらず甘やかしてはいるみたいだな」
「あら、この程度甘やかしている内には入りませんよ」

まあ悪事をしていないのならいいか、と深く追求することは止めるルーク。騒ぎ続けるランスとリアを尻目に、部屋の隅に控えていたもう一人の女性に声を掛ける。

「…久しぶりだな。息災で何よりだ、かなみ」
「お久しぶりです、ルークさん」

そう言って軽く礼をするかなみ。若干だが流れてくる雰囲気が以前とは違う。

「なるほど、前より鍛えられている。忠臣になるべく励んでいるようだな」

「わかりますか！？」

「わかるさ。以前とは纏っている空気が違う。よく頑張っているな」

「…ありがとうございます」

「そうそう、かなみったら最近以前にも増して張り切っちゃってるんだから」

「わずか二、三ヶ月の間にレベルを四つも上げてくれました。隠密の仕事をこなしながらということを考えれば、十分すぎる成果です。こちらとしても喜ばしい限りです」

リアとマリスにも褒められ、恥ずかしそうにしながらも若干誇らしげなかなみ。それに対してランスが茶々を入れる。

「がはは、へっぽこ忍者も少しは使えるようになったのか？」

「……ふん、今ではランスさんより強いかもしれませんよ」

「がはは、言ったな！今何レベルだ？」

「１８レベルです！ランスさんは？」

「今から計ってやろう。レベル神ウィリス、俺様の呼び出しに応じて直ちにこの場に姿を現せ！」

主の前だというのに挑発に乗ってしまうかなみ。精神の修行はまだまだだな、と失笑するルーク。リアも愛しのランスのレベルには興味があるらしく、特に争いを止めるでもなく状況を見守っている。ランスの呼びかけに応じてレベル神が姿を現す。誘拐事件の時はレベル神が付いていなかったはずなのだが、いつのまに契約を結んだ

のだろうか。

「私は偉大なるレベル神ウィリス、呼び出したのは貴方ですね。レベルアップをお望みか？」

「そうだ。この身の程知らずに力の差を思い知らせてやらんとな」

「…ん？君はリーザスの城下町でレベル屋をしていた子か？レベル神になっているということは昇進試験には受かったのか」

「あ、ルークさんじゃないですか。お久しぶりです。先日無事に合格しました」

「がはは、俺様が手伝ってやったのだ！」

「なるほど、それで専属契約を結んでいる訳か」

誘拐事件から今までの間ずっとサボっていたのかと思っていたが、しっかりと仕事もこなしていたランス。この短期間の間に彼女の昇進試験を手伝い、専属契約を結んでいたのだ。

「というか、ルークさんはレベル神と契約を結んでいないんですか？貴方ほどの人なら結んでいない方が逆に珍しいんですけど？」

ルークのレベルを知るウィリスが問いかけてくる。

「以前カグヤさんというレベル神と契約していたんだが…寿引退してしまってね。その際の引き継ぎがどうやらトラブっているらしく、今はいないんだ」

「あ、それなら私と契約しませんか？今丁度手が空いてますし」

「お、それは助かるな。ぜひお願いするよ」

「ええい、世間話しとらんでさっさとレベルアップの儀式をしろ！」

「あ、すみません。ルークさんも一緒にしておきますね」

「ああ、頼む」

「うーら　めーた　ぽーら　ほら　ほら。らん　らん　ほろ　ほろ

ぴーはらら」

力の抜けるレベルアップの儀式である。以前契約を結んでいたレベル神とは呪文が違うんだなぁ、とどうでもいいことを考えるルーク。そんなことを考えている内に儀式が終わったようだ。

「ランス様は経験豊富とみなされて２０レベルになりました」
「がはは、どうだ聞いたか、へっぽこ忍者！」
「くっ……」
「きゃー、さすがダーリン、かっこいい！！！」
「流石はランス様。優秀な冒険者ですね」

悔しそうに歯がみするかなみ。しかし、この後のウィリスの言葉に更に追い打ちを掛けられる。

「シィル殿は経験豊富とみなされて１９レベルになりました」
「わーい、やったー」
「がーん！！」
「がはははは、俺様の奴隷にも負けるとは情けない。真の忠臣にはほど遠いな」
「ランス、あんまり追い打ち掛けるな。かなみ、隠密の仕事が主である君と違って、こっちは冒険者でレベルが上がりやすいんだ。あまり気にしなくていいんだぞ」
「…はい。すいません気を使わせてしまって」

涙目のかなみにフォローを入れるルーク。ランスが勝った勝ったと騒ぎ立て、リアも一緒になってはしゃいでいる。が、この空気がウィリスの発言で凍り付くこととなる。

「ルーク様は経験豊富とみなされて４６レベルになりました」

「「「「えっ！？」」」」
「なんだとっ！！」

一気に全員がルークに視線を向ける。その視線にルークとウィリスは一瞬びくっとなる。

「貴様、なんだそのレベルは！！」
「お強いとは思っていましたが、そんなにレベルが高かったんですか！？」
「あれ、ルークさん？みなさんに言ってなかったんですか？」
「あー、話したことはなかったな。まあ冒険者としては少し高い程度さ」
「た、た、高いってもんじゃないですよ、ルークさん！一国の将軍クラス、いや、それ以上ですよ！」
「……マリス！」
「はい、リア様。……ルーク様、こちらにサインをお願いできますか？」

一枚の紙を取り出し、ルークに署名を求めるマリス。勢いでサインしそうになるルークだが、よくよく見るとリーザス国への兵士入隊の書類であった。

「って、おい！何勝手に入隊させようとしてるんだ！」
「……ちっ」
「…ルーク様。リーザス国は他にはないほどの好待遇で迎え入れる準備がありますが？」
「んー。すまないが、まだどこかに収まる気はないんだ」
「指揮官適正の結果次第ですが、今なら特別に副将の地位もお約束するのですが…」
「わ、私もルークさんにリーザスに来ていただきたいのですが…」

「スマン、かなみ。かなりの好条件だがお断りさせていただく」
「…残念です」
「おい、ルークばっかり目立ちやがって。俺様に誘いがないとはどういうことだ！」
「あら、ダーリンは私の夫としてリーザスの王になって貰うんですもの」
「…しまった」
「ランス様、やぶへびです…」

こうして、リアたちがカスタムの町を訪れた理由もまだ聞いていないというのに、長い時間大騒ぎをするルークたちであった。

「…二階、騒がしすぎて営業妨害だよ…くすん」

下の階では、高貴なかた相手に注意に行くことも出来ず、エレナが一人泣いていた。

第２５話　王女襲来（後書き）

［人物］

ウィリス　（２）

　ルーク、ランスと契約を結んでいるレベル神。先日まではレベル屋で働く普通の人間であったが、ランスの助力もありレベル神へと見事昇進を果たす。彼氏には人間を辞めたことはまだ内緒にしている。儀式呪文は「うーら　めーた　ぱーら　ほら　ほら。らん　らん　ほろ　ほろ　ぴーはらら」。

アガサ・カグヤ　（オリモブ）

　かつてルークと契約を結んでいたレベル神。黒髪が美しく、ファンも多かったが、一年前レベル神を寿引退。儀式呪文は「さーくーら　さーくーら　こよいも　よるも　わが　よいの　かえる　ぴょこ　ぴょこ」。名前はアリスソフト作品の「闘神都市２」より。

長柄亮子

　カスタムの役所で働く女の子。役所の女の子の中では最もランと仲が良い。

第２６話　面影

ー カスタムの町　酒場二階 ー

「で、わざわざランスの顔を見にカスタムまでやってきたのか？…マリス、いい加減書類を仕舞ってくれ」

そう言われ、渋々と書類を引っ込めるマリス。どうやらまだ諦めきれないらしく、ジッとこちらを見ている。まあ三大国の中ではリーザスが一番肌に合っているかなとは思うルークであったが、今はまだその時ではない。

「もっちろん！ダーリンに会いにここまで来たの！」

「…職務はいいのか？」

「万事抜かりありません。三日先の分まで終わらせてありますし、有事の際は優秀な者に後を任せてあります」

「わざわざ会いに来るのにそこまでせんでいい。まったく…」

「あん、ダーリン。リアね、お土産も持ってきたの」

「お土産？なんだ、金目のものか？」

「かなみ、持ってきて」

リアがそう言うと、かなみがカーテンの後ろにわざわざ隠してあった剣と鎧を持ってくる。どちらも美しい光沢を放っているが、観賞用というわけではなく装備品として一級品であることが見て取れる。

「これは我がリーザス王国に古くから伝わる秘伝の聖剣と聖鎧です。どうぞお納めください」

「それをリアだと思って大事に使ってね、ダーリン！」
「武器をそう思うのは無茶があるな…」
「うむ、貰えるものは全てありがたく頂いておくぞ。がはは」

そう言って聖剣と聖鎧を装備するランス。今まで装備していたイナズマの剣と界陣の鎧をシィルに手渡し、なにやら耳打ちしている。あいつ、絶対売りさばくつもりだ。俺の金で買ったもんだし、回収してやろうか、とルークは考える。

「というかそんな大事なもんほいほい渡しちまって良かったのか？」
「もちろん！将来の旦那様ですもの！」
「えぇい、やかましい。まだ依頼が済んでいないから俺様たちはもう行くぞ！」
「ダーリン、リアはあなたが振り向いてくれるまでいつまでも待っています」

そう言って貰うものだけ貰い部屋から出て行くランス。その後をシィルが追いかける。随分と静かにしていたが、王女相手に物怖じしていたのだろうか。ルークもそれに続こうとするが、ふとあることを思い立ってリアとマリスに話しかける。

「少し頼みがある。ムシのいい話ではあるんだが…」
「…あら？確かにムシのいい話ね。そんな要求じゃあ…」

交渉に入った瞬間、王女と侍女の目つきが変わった。ランスの前ではあんな状態だが、やはり政治家としての手腕は高い二人である。数分の後、ある程度の落としどころで交渉がまとまる。

「すまないな、無理を言って」

「まぁ、以前の借りもあるしね。こちらの条件も呑んで貰ったことだし」
「ルーク様、リーザスはいつでも副将のポストを準備してお待ちしておりますので」
「ま、当分ないと思ってくれ。それじゃあ俺もそろそろ行くとするか」
「お気を付けて。ルーク様には何もお持ちできず申し訳ありません」

マリスが深々と頭を下げる。リアは気にしていない様子だが、かなみも申し訳なさそうにしている。

「んー、そうだな。かなみ。手裏剣とかくないとかの予備があったら一つ貰えるか？」
「え？あ、くないならここに予備が。手裏剣はしびれ薬を塗ってあるのしかなく、取り扱いが…」

ごそごそと懐からくないを取り出すかなみ。それをパッと受け取るルーク。

「リーザスからの支援、確かに受け取った。忠臣を目指す者が使う武器、そんじょそこらの支援よりも遙かに心強い。大事に使わせていただく」

そう言って部屋から出て行くルークを見送る三人。リアがまた政治家の顔つきになり、ぽつりと漏らす。

「やっぱり、一冒険者にしておくには惜しい人材ね。戦闘力、交渉力、視野の広さ、多分指揮官としても優秀でしょうね。意志が固そうだから難しいかもしれないけど、定期的にアプローチは続けておいて」

「かしこまりました。かなみ、受け取って貰えて良かったですね」
「はい。…って、別にそんなことは…」
「そうだ、かなみ。ルークにリーザスに来るよう色仕掛けで迫ってみてくれないかしら？」
「そ、そ、それは私には荷が重すぎます、リア様！」
「ふふ、冗談よ」

―溶岩迷宮　入口―

「なんだこれは、灼熱地獄じゃないか！あ、こらシィル、すり寄って来るな！余計暑くなるだろうが！」
「きゃっ、ランス様押さないでください…」
「下は溶岩で落ちたら一溜まりもないな…道も細いし気をつけながら先に進む必要があるな」

リアたちと別れた後、ルークたちは最後の魔女、志津香の拠点である迷宮第五層、溶岩迷宮までやってきていた。岩で出来た道は非常に狭く、下は溶岩が広がっているため落ちたら間違いなく即死。外気温も４０度ほどあり、吹き出る汗を拭いながら、慎重に先に進む。金とりや人食いＴＯＷＮＳといった普段であれば相手にならないようなモンスターも、この足場では倒すのに時間が掛かってしまう。ランの言っていたように全ての準備が整っているのであれば、急ぐ必要がある。程なくして目の前に屋敷が現れる。その館を見た瞬間、ルークの目が見開かれる。

「おお、ここが志津香の屋敷か！ぐふふ、待っていろよ！」

そう言って涎を垂らすランス。シィルが屋敷の扉を開けようとす

るが、鍵が掛かっていて開かない。
「ランス様、駄目です。鍵が掛かっていて開きません」
「なんだと、そんな鍵破壊してやる。ふん！」
ガキン、と金属がぶつかり合う音が響く。が、鍵は傷一つ付いていない。今度は扉を破壊しようとするランスだが、それも弾かれる。
「うがー、なんだこれは！シィル、その辺の窓から入れないか調べてみろ」
「ああ…そんなことをしても無駄だよ」
と、後ろから声を掛けられる。振り返ってみれば、枯れ木のようにやせ細った男戦士がこちらに話しかけてきていた。
「む、なんだ貴様は」
「これは失礼。私は風の戦士シィルフィード、志津香様の部下だ。その屋敷は扉にも窓にも結界が張ってあって鍵がないと中には入れないよ」
「部下ということは貴様鍵を持っているな！さぁ、すぐに寄越せ」
「それが…ラルガというサッキュバスに奪われてしまったんだ。私も取り返そうとしたんだが…精気を吸われてしまいこのざまさ」
「ふむ、ならばそのラルガから鍵を手に入れる必要があるな。そいつはどこにいる？」
「この先にラルガの屋敷がある。ラルガの元へ行くならあんたも気をつけた方がいい」
「がはは、無敵の俺様にそんな心配は無用だ。行くぞ、シィル、ルーク。…なんだルーク、ボーッと突っ立って？」
ひとまずラルガの屋敷に向かおうとしたランスだが、ルークがつ

いてこない。見ればボーッと志津香の屋敷を見ている。

「知っている…俺は…この屋敷を知っているぞ…」

「あ、おい！？」

ルークは屋敷に近づいていき、まず扉を調べる。結界を無効化して鍵を破壊することは出来そうだが、鍵になにやら結界とは別の文様が描かれている。無理に破壊すれば何かしらの罠が発動する可能性がある。次に窓を調べる。少し押すと結界が発動するが、それを無効化し窓を開く。扉とは違い、こちらには鍵を掛けていないようだ。

「あ、なんだ開くではないか。では俺様も…って、あちちちっ！」

「きゃっ、ランス様大丈夫ですか？いたいのいたいの、とんでけーっ！」

「窓が開いた…志津香様の結界だぞ…あんた一体…？」

窓に触れた瞬間、ランスの手に電流が走り少し火傷をする。シィルがそれを治療し、シィルフィードは信じられないものを見たといったように驚いている。

「……ランス、ランの言うとおりなら事態は一刻を争う。俺は先に屋敷に潜入する！」

「あ、おい待て！コンプリートが掛かっているんだ！勝手に志津香の処女を奪ったら承知せんぞ！！」

ランスの抗議をよそに、ルークは屋敷へと一人潜入していく。ランスに言った理由ももちろんあるが、それ以上にルークを突き動かしたのはこの屋敷の形だった。遠い記憶であり、絶対とは言い切れない。が、確かにそれはルークの記憶に残っていた屋敷とよく似て

いた。

―志津香の屋敷　一階―

屋敷に入ったルークが感じたのは外で感じたのと同様の既視感。ここまで広くはなかった。が、内装が非常に似通っている。間違いない、あの人の屋敷だ。それは、今回カスタムの町を目指しているときにも思い出していた記憶、１８年前、幼いルークたちがほんの数日だがお世話になった夫妻。その屋敷がなぜここに？志津香が迷宮に屋敷を作る際に参考にでもしたのだろうか？考えながら屋敷を探索していると小部屋を発見する。その扉の前に風の戦士が一人。

「むっ、貴様！何者……っ……」

「……邪魔だ」

こちらに気がつき、声を掛けたときには既に風の戦士はルークに斬られていた。倒れこむ風の戦士の横を通り、部屋に入るルーク。そこで一冊の本を発見する。パラパラと中身を読むルーク。その中で他のページよりも明らかに読み込まれたページを発見する。そこには気になる項目が書いてあった。

「時空転移魔法…過去に飛び歴史を改変するだと…？聖女モンスターにそういった力を持つ存在がいるという話をかつて聞いたことがあるが…そんなことが人間に可能なのか？……なるほど、普通では不可能だが術者の莫大な魔力に加え、女性の生気を使うことで擬似的に可能とする。女性を攫っていた理由はコレか！」

バタン、と本を閉じるルーク。ようやく目的が見えていなかった

志津香の計画の内容に行き着いた。彼女がそこまでして変えたい過去は判らないが、それを止めるためにルークは走り出した。

「過去など変えても、それが救済になどなりはしない。それ以上に、過去を変えたことによって、現世にどんな影響が起こるかも判らないんだぞ…」

階段を駆け上がった先に水の結界があった。本来であればこれも解除する必要があるのだろうが、ルークは結界を無効化し、その先にあった鉄の扉を開ける。そこには機械が置いてあった。シィルが攫われた際に使われたテレポートウェイブを使った転移装置だ。罠かもしれないと一瞬躊躇するが、その機械を作動させる。すると、周りの風景が夜空のような空間に転移される。辺りの様子を窺っていると、突如目の前の地面が盛り上がり、床をぶち破ってストーン・ガーディアンが現れる。

「ここは志津香様の聖域、何人たりとも通すわけには行かぬ」
「……手強い相手だが、今は貴様と遊んでいる暇はない。どけ！！」

そう言うと、ルークは妃円の剣を抜き、一直線にストーン・ガーディアンに突っ込んでいった。

―溶岩迷宮　ラルガの屋敷―

「赤い媚薬を使うなんてずるい…うぅん、もうダメ…」
「がはは、サッキュバスなぞ俺様の超絶テクの敵ではなかったな！さあ、鍵は手に入れた。行くぞ、シィル！」
「はい、ランス様！」

「あれだけ卑怯な手で勝っておいてあんなに勝ち誇るなんて…人間って恐ろしいにゃ…」

正攻法のH勝負で一度負けたランスは、卑怯にも媚薬を使ってラルガに勝利し、鍵を手に入れていた。その様子に主人の心配をしながらも呆れるラルガのねこ。

「抜け駆けは許さん！俺様が行くまで処女のまま待っていろよ、志津香！」

―荒野―

どことも知れぬ荒野の真ん中に、その女は立っていた。最後の四魔女、魔想志津香。時空転移魔法を使って過去に渡ることに成功した彼女は、もうすぐこの場所で起こる出来事に備え、精神を落ち着けていた。

「大丈夫…やれる…私がお父様を…必ず救い出す…」

そのとき、後ろから気配がする。おかしい、まだ目的の時間には早い。振り返った志津香が見たのは、黒髪の剣士。自分よりも随分と年上の顔の整った青年剣士がそこに立っていた。

「…誰？ここにいると危ないわよ。悪いことは言わないからどこか遠くに行きなさい」

一応忠告をする志津香。その戦士を心配したというより、下手に邪魔されては困るという想いからの忠告であったが、直後に戦士か

ら発せられた言葉に目を見開く。

「……アスマーゼ…さん？」

「！？　母を知っているの！？」

目の前に立っていた戦士はルーク。志津香の後を追って環状列石の装置を作動し、過去へとやってきたルークが目にしたのは、かつてお世話になった魔法使いの奥方に瓜二つの少女の姿だった。

第２６話　面影（後書き）

［人物］

リア・パラパラ・リーザス　（２）
ＬＶ　３／２０
技能　なし
　リーザス国王女。今では改心し、誘拐騒動はもう起こしていない。ランスに会うためだけに無理矢理時間を作った。健気と言えば健気。

マリス・アマリリス　（２）
ＬＶ　２６／６７
技能　神魔法ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス国筆頭侍女。リアのわがままを聞いて秘伝の聖剣と聖鎧を一冒険者にプレゼントしてしまう。相変わらずの甘やかしである。

見当かなみ　（２）
ＬＶ　１８／４０
技能　忍者ＬＶ１
　リーザス王女リア直属の忍者。ルークの忠告を受け、忠臣目指し目下修行中。その頑張りは城の兵士たちも目の当たりにしており、将軍たちの間でも評価が上方修正されている。上達していることをルークに一目で分かって貰えたことを内心喜んでいるが、ばれないように冷静に勤める。しかし、主と侍女には見抜かれている。

シィルフィード
　志津香に仕える風の戦士の一人。ラルガに精気を吸われ、干涸らびている。

［モンスター］

ラルガ

四つ星レア女の子モンスター。サッキュバスであり、男の精気を吸い取って生きている。媚薬を使われてランスにH勝負で敗れる。

ラルガのねこ

全滅危惧種女の子モンスター。ラルガの忠実な部下。

金とり

金色に輝く鳥モンスター。こかとりすと違い、あまり美味しくない。

人食いＴＯＷＮＳ

頭がコンピュータのモンスター。雷撃で一撃死するため、初級魔法使いの経験値稼ぎとしてよく狩られる。

風の戦士

志津香の部下。モンスターに属しているが、実は普通の人間の戦士である。

ストーン・ガーディアン

魔法使いによって作られる岩石巨人のガーディアン。地面を岩で囲ってしまい、一度出会ってしまったら逃走することは出来ない。知らなかったのか、ストーン・ガーディアンからは逃げられない。

［装備品］

リーザス聖剣

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる剣。その斬れ味もさることながら、実はリーザス国にある封印の間の鍵としての役割も

担っている。

リーザス聖鎧

　リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる鎧。防御力も非常に高いが、実はリーザス国にある封印の間の鍵としての役割も担っている。

くない

　かなみが常に懐に忍ばせている忍具。ルークが一本譲り受ける。大陸では武器屋には中々売っていないため、通販で購入している。１０本５００ＧＯＬＤのところ、今なら手裏剣５枚もついてお値段据え置きのお買い得価格。

［アイテム］

赤い媚薬

　ラルガのねこがこっそり隠し持っている媚薬。どんな相手でも敏感になる代物。本編ランス０２ではなぜか赤い香水に変更されていた。ランスクエストでは媚薬で勝ったと明言されていたので、本作では旧２仕様の媚薬に。

［その他］

環状列石装置

　ストーンサークル。魔方陣よりも効果が高く、これを用いて志津香は時空転移を行った。

聖女モンスター

　神に作られた生命の母であり、全ての男の子、女の子モンスターのプロトタイプを生みだした四体の特殊な存在。四体はそれぞれ命、

力、時、地に分類される。神に位置する存在であり、あまり広くは知られていない。ルークはとある女性から彼女たちの存在を聞いていた。

レア女の子モンスター

一体しか存在しない特殊な女の子モンスター。死んでしまった場合は、別の場所に転生される。

第27話　恩人の娘　志津香

GI0998　冬
―カスタムの町―

「飲むといい、暖まるよ」
「おかわりもあるから欲しかったら言ってね」

町の前で拾った傷だらけの少年を自分たちの住む屋敷に連れてきた夫妻は、彼の前にホットうし乳を入れたコップを差し出す。彼が連れていた同じ年くらいの少女は、既に寝室で寝ている。聞けば彼の双子の妹らしい。今この場には夫妻と少年の三人、机を挟む形で向かい合っている。

「私は魔想篤胤。この町に最近移り住んできた者だ。こっちは家内のアスマーゼ。…君の名前、聞かせて貰っても良いかな？」
「……ルーク・グラント」
「差し支えなければ…何があったのか聞かせて貰っても良いかな？その傷の量は尋常ではない」

その後、ルークはここに至るまでの出来事を語り始める。平穏な暮らし、それが一変したこと、その原因を担ったのが自分であること、住んでいた町を追われたこと。ルークの過去に関しては、後にまた語ることになるので今回は置いておく。目の前の少年が体験するには、あまりにも荷が重すぎる過去に、アスマーゼの顔が曇る。篤胤も黙ってそれを聞き終えた後、静かに口を開く。

「…もし君さえよければ、しばらく一緒に暮らしてもいいんだが」

「夫婦二人で暮らすには少し大きい屋敷なの。遠慮しなくていいのよ」

「いえ…ありがたい話ですが、明日にも出て行こうと思っています」

「何か協力できることはないかな？」

「…じゃあ、もし知っていたら評判の良いギルドを教えてください」

「その年で冒険者を目指す気か？」

「はい、自分たちの手だけで生きていかなければならないので」

危険性を説いて止めるよう勧める篤胤だが、ルークという少年の決意は固く、最終的には篤胤の方が折れる形になり、アイスの町のキースギルドへの紹介状を書くことになる。

「紹介状を書く代わりといってはなんだが…明日に出て行くのは止めて何日か滞在していきなさい。その傷を治していかないとな。それに、妹さんも少し休ませてあげないとな」

「……本当に色々と、ありがとうございます」

こうしてルーク兄妹は数日の間、魔想の家に厄介になることになる。篤胤もアスマーゼも、二人に暖かく接してくれた。特にアスマーゼは、実の子供のように二人を可愛がっていた。

「妊娠されているんですか？」

「ええ、まだ二ヶ月だけど、主人の魔法で女の子ということだけは判っているの」

こうして、数日はあっという間に過ぎた。アイスの町に旅立つ日、夫妻は町の前まで二人を見送りに来ていた。

「この地図通りの街道を通ればほとんどモンスターも出ないはずだ。初めのうちは危険の少ない依頼をこなしていきなさい。そういった

仕事をギルド長のキースが優先して回してくれるはずだ」
「いつでも町に寄ってくれていいからね」
「ありがとうございます。冒険者として一人前になったと思った暁には、立ち寄らせていただきます」

こうして、二人はアイスの町へ向けて旅立った。その背中を見送りながら、アスマーゼが悲しそうに呟く。

「あんな幼い子が…冒険者にならなければいけないなんて…」
「だが、止められなかった。譲れないものがあったのだろう、目がその信念を語っていた。子供とは思えんほどの決意だ」
「ルーク君、話し方も大人びていましたものね。将来的には娘の結婚相手になんてどうかしら」
「……それとこれとは話が別だ」
「ふふ、はいはい」

時間にしてみれば夫妻と過ごしたのは本当に短い間であった。が、その間にルークが受けた恩義は、今もその胸に残っていた。いつか一人前になったら、そう思いながら今日までカスタムの町を訪れていなかったルーク。その判断は間違いだったのかも知れない。

LP0001
―荒野―

「母…アスマーゼさんの娘さんか。そうか、あの時の！」
「ちょっと、質問に答えなさい。母を知っているの！？」

目の前にいるのがアスマーゼではなく、その娘だと判ったルーク。

今にも食って掛かりそうな少女に対し、落ち着かせるように質問に答える。

「ああ、よく知っているよ。アスマーゼさんも、旦那の篤胤さんもな」

「そう、父と母を知っているのね…名前を聞いてもいいかしら？」

「ルークという。冒険者だ。篤胤さん夫妻には二十年近く前に大変お世話になった者だ」

「……二十年前？」

ルークの言葉を聞いて眉をひそめた少女は、スッと目の前に手をかざす。その行動にどこか不穏な空気を感じたルーク。すると彼女の手のひらに魔力が集まり始める。

「……火爆破」

「っ！？」

瞬間、横へと飛ぶルーク。その直後ルークが先ほどまで立っていた場所で足下から炎の柱が立ち上がる。すぐに少女に向き直るルーク。

「元の時代に戻った際に両親のことを聞こうと思って名前を聞いてみたら、まさか二十年前にお世話になったとか言い出すとはね…あなた、この時代の人間じゃないわね！冒険者って事は私を追ってきたのかしら？」

「そうか…四魔女の話を町長から聞いているときに上の空で名前をちゃんと聞いていなかったのが徒になったな。君が、四魔女最後の一人…」

「ええ、魔想志津香よ」

言葉と同時に、炎の矢が弾丸めいた速度で連射される。それを躱しながらルークは叫ぶ。

「待て、篤胤さんの娘さんと争いたくはない！話を聞かせてくれ、過去にさかのぼって、君は一体何をしようとしているんだ！」

その言葉に、ピタっ、と炎の矢の連射を止める志津香。

「目的？そんなこと、決まっているでしょう！父にお世話になったとか言っていたのに、娘の私の目的に見当もつかないの！？」

「……見当がつかない。頼む、教えてくれ」

「ふん、まあいいわ。私がここにやってきたのは、卑怯な手段で殺された父を助け出すためよ！」

志津香の言葉を聞いた瞬間、ルークの目が見開かれる。

「殺された…だと。篤胤さんが！？」

―志津香の屋敷　一階―

「いたぞ、侵入者だ！仲間をやったのはお前だな！！」

「うおっ、なんだなんだ！！」

ようやく志津香の屋敷に辿り着いたランスだったが、先に潜入していたルークが風の戦士を倒してしまっていた影響で、警備が頑丈になってしまっていた。思わぬ足止めを食ってしまうランス。

「ルークさんはこんな厳重な警備を一人で大丈夫なのでしょうか…」

「ふむ、ルークなどどうでもいいが志津香の処女は心配だ。急ぐぞ！」

この厳重な警備がルークのせいであるとは思っていないランスとシィルだった。

―荒野―

「…知らなかったの？ラガールという魔法使いに卑怯な手段で父は殺され、母は連れ去られた…私が生まれて間もない頃にね」

「いや、知らなかった。…キースめ、黙っていたな」

そう言って恩人たちのその後に顔を曇らせるルーク。キースは事の顛末を知っていたが、そのときまだ幼かったルークに話すにはあまりにも思いと考え、いつか話そうと先送りにしていたのだ。が、その後ルークは１５才のときから約１０年近く行方知れずになるため、キースが伝え忘れていたのだ。

「そう、ならさっさとここから消えてくれる。あなたも父と母にお世話になったのなら、まさか私を止めはしないわよね？」

「……過去の改変など、どんな影響が出るかも判らないんだぞ。それを判っていない君ではあるまい？」

「ええ、今いる世界が変わるのか、平行世界として別の世界が出来上がるのか、検討がつかないわ。本にも載っていなかったしね」

「…歴史だけではなく、君のこれまでの思い出にも、大きな影響を及ぼすかもしれないんだぞ」

一瞬、躊躇うような顔を覗かせる志津香。頭に浮かんだのは、青

い髪のメガネをかけた親友の顔。が、それを振り払うかのように口を開く。

「構わないわ。父を救い出せる可能性が少しでもあるならば、実行するまでよ！」

「……気持ちは判る。が、町の少女たちを誘拐して生気を集め、世界にどんな影響を及ぼすかも判らないその行為を認めるわけにはいかない」

「そう、父と母の話を聞きたいと思っていたのだけれど…邪魔をするなら死んで貰うわ！」

そう言ってこちらに魔法を放とうとしてくる志津香。身構えるルークだが、志津香の後ろ、若干遠くはあるが記憶にある男女の姿が目に映る。

「篤胤さん、アスマーゼさん…？」

「っ！？隠れて！！」

そう言って攻撃を止め、ルークを引っ張り物陰に隠れる志津香。ルークもここで夫妻に出会ってしまっては歴史に多少なりとも影響を及ぼしてしまうかも知れないと思い、素直に応じる。無理に戦えば二人にばれてしまう可能性があるため、自然と一時休戦の形となった。物陰から顔を出し、夫妻を見る。志津香が生まれた直後ということは、ルークが会ったときとそう時は経っていない。記憶にあるままの姿で魔想夫妻が荒野に立っていた。

「お父様…お母様…」

横を見ると志津香の瞳が少し潤んでいた。幼い頃に失ったため、写真や人から聞いた話でしか知ることのなかった両親。涙が抑えら

れないのも無理もない。そう思いながら志津香の顔を見ていたルークだが、志津香が見られているのに気がつき、力一杯ルークの右足を踏みつける。

「…っ！！！」

「見てんじゃないわよ！」

すると、夫妻の話し声が聞こえる。志津香の表情が引き締まる。ルークも足を押さえながら夫妻の方をばれないように見る。

「…さんに言われたとおりここに来たけど、いったい何の用なのかしらね？」

「うむ、町にいる間あまり話したこともない相手で、嫌われているのかと思っていたのだがな。こんなところに呼び出すとは、よっぽど周りに聞かれたくない相談なのか…っ！？」

「あなた！！！」

話をしていた夫妻だが、突如篤胤の体を雷撃が襲う。足下に魔力装置の罠があったのだ。それも、違法なまでに改造を加えたものだ。そのダメージから立っていることが出来ず、崩れ落ちる篤胤。アスマーゼが悲鳴を上げると、ルークたちとは夫妻を挟んで反対側の物陰から男の声が響く。

「ふはははは！いい様だな、魔想よ！」

「…あなたは！？」

「ラガール…なぜここに！？」

漆黒のマントに身を包み、左手には爪を装備した魔法使いに対し、先ほど志津香が父の仇と言った男と同じ名前を篤胤が叫ぶ。この男が…ラガール。

「衰えたな魔想よ…かつての貴様であればこんなに簡単には罠に掛からなかったであろう。その後悔を抱いたまま、愛する者の前で無様に死ね！！」

「させないわ！ラガール、死ぬのは貴方よ！！」

「っ！？待て！！」

篤胤の危機に、飛び出していく志津香。ルークが止めるが、その腕を振り払っていってしまう。両親とラガールの前に立つ志津香。が、様子がおかしい。篤胤も、アスマーゼも、ラガールも志津香を見ていないのだ。志津香もすぐに気がつき、最悪の想像が頭の中に浮かぶが、それを振り払うかのようにラガールに向かって魔法を放つ。

「ファイヤーレーザー！！」

両手から放たれた火柱が一直線にラガールを襲い、直撃する。が、ファイヤーレーザーはラガールの体をすり抜けてしまう。

「まさか…そんな…」

「…そういうことか。俺らは今過去に実体化しているのではない。過去の…映像を再生しているようなものだ」

三人の反応を見た時点で想定していた最悪の予想をルークに言われ、否定するように志津香が声を荒げる。

「時空転移魔法は成功したわ！そんなはずはない！！！」

「本が間違っていたのか、魔力が足りなかったのかは俺には判らない。が、そもそも過去改ざんなんて悪用される恐れもある無茶苦茶な魔法、実在するのであれば魔法大国のゼスが放置しておくはずが

ない」
「そんな…それじゃぁ…父を…お父様を救えないじゃない！！！」

叫ぶ志津香。それと同時に、目の前で篤胤の体をラガールの爪が貫く。おびただしい量の血が吹き出て、その目から光が失われていく。恩人の死を目の当たりにしたルークは、自然と右拳を握りしめていた。

「いやぁぁぁぁ！！あなたぁぁぁぁぁ！！！」
「お父様ぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「ははははは！やったぞ、魔想をこの私が殺したのだ！！！安心しろ、アスマーゼさんは私が大事にしてやる。ふはははははは！！！！」

辺りにアスマーゼと志津香の悲鳴が響き、ラガールが狂ったように笑い続ける。その瞬間、世界を光が包む。志津香が冷静さを失い、魔法を維持できなくなったのだ。空間の壁がルークと志津香を飲み込み、元の世界へと戻ってくる。志津香は涙で顔を濡らしながら、絞り上げるような声で呟いた。

「殺してやる…ラガール…どこにいるかは判らないけど、必ず見つけ出してこの手で殺してやる…」

その右肩にそっと左手を乗せるルーク。相当弱っているのかその手を振りほどこうとせず、志津香がルークに問いかける。

「…何のつもり？まさか復讐はいけないとか言って、また邪魔するつもりじゃないでしょうね？」
「いや、そのつもりはない」

そう言うルークの右拳に爪が食い込み、血が滴っているのを志津香は見る。恩人の死にルークも憤りを感じていた。

「俺も協力しよう。冒険者の俺の方が居場所の情報を掴める可能性は高いからな。奴を…必ず殺すぞ」

「…役に立たないと判断したら…切り捨てるからね」

こうして仇討ちという目的の下、ルークと志津香は手を結ぶことになった。これより、長く深い付き合いとなる二人の出会いであった。

第２７話　恩人の娘　志津香（後書き）

［人物］

魔想志津香
ＬＶ　２０／５６
技能　魔法ＬＶ２

　カスタム四魔女の一人。才能は篤胤、容姿はアスマーゼの血を色濃く継いでいる。ラギシス殺害後、殺された父を救うためフィールの指輪と少女たちの生気を使って過去へと飛ぶが計画は失敗に終わる。その後は父の仇であるラガールを殺すことに目的を変更し、情報収集のためルークと手を結ぶ。ルークにとっては恩人の娘であり、守るべき存在。

魔想篤胤　（半オリ）
ＬＶ　３８／５０　（生前）
技能　魔法ＬＶ２

　志津香の父であり、ルークの恩人。優秀な魔法使いであったが、ラガールに不意打ちされその命を落とす。名前はアリスソフト作品の「ぱすてるチャイムＣｏｎｔｉｎｕｅ」より。

魔想アスマーゼ

　志津香の母であり、ルークの恩人。夫を目の前で殺され、ラガールに攫われる。その後はラガールに犯され、精神を病み衰弱死する。死ぬ直前、妊娠していたという噂もあるが、定かではない。

チェネザリ・ド・ラガール
ＬＶ　３９／５０
技能　魔法ＬＶ２

　志津香の両親の仇である魔法使い。アスマーゼを攫った後の所在

は謎に包まれている。

［技］

火爆破

　敵の足下から炎の柱を噴き上がらせる中級魔法。同時に複数の相手に使用することが出来るため、集団戦で重宝される。

ファイヤーレーザー

　両手から追尾能力のある高熱光線を放つ上級魔法。ある程度の才能がなければ使用することが出来ない強力な魔法である。

［装備品］

ポイズンガントレッド

　ラガールが左手に装着していた爪。魔力で遠隔操作も可能な魔法の籠手。ラガールが改造して造り出した。

［料理／食材］

うし乳

　うしから取れる白い液体。栄養満点で、子供に飲ませると良いとされている。独特の臭みがあり、好き嫌いの分かれる一品。

第２８話　祝賀会

―志津香の屋敷　二階　環状列石装置前―

「もうここにいる必要もないだろう。町に帰るぞ。誘拐した娘たちは？」

「奥の部屋にいるわ。もう彼女たちに用もないし、一緒に連れて帰りましょう。一応対等な協力関係だから、ルークって呼び捨てにさせて貰うわよ」

「ああ、別に構わん。こちらも志津香と呼ばせて貰う」

泣き止んだ志津香にルークが町に戻るよう持ちかける。計画が頓挫した今、ここに残る理由もない志津香はそれに応じる。残った問題は指輪だけだ。

「で、その指輪なんだが…それは呪われたアイテムでな。それを身につけていると…」

「ああ、それなら知っているわ。ラギシスに貰って指に填めた瞬間、呪われてるってすぐに気がついたから」

「そうなのか！？」

「ええ。で、こんなもの寄越したラギシスを怪しんで探ってみたのよ。そしたら奴がボロを見せたって訳。とりあえず私たちを利用するつもりだったラギシスを殺して、指輪はありがたく魔力増強に利用させて貰ったわ」

「そこまで判っていながら指輪を使ったのか？」

「少しずつ魔力を吸われるけど、それ以上に魔力が増えるしね。一時的に魔力ブーストするには十分役に立つわ。心が悪に染まるっていうのも、自分にガード魔法かければほとんど影響を及ぼさないし

ね」
「なんだって？じゃあ、指輪の悪影響は殆ど受けていないのか？」
「そういう事」

そう言って赤い指輪をルークに見せる志津香。聞くところによると、この指輪は外す際に装備者の魔力を大量に奪う仕組みになっているが、普段も微量ながらも少しずつ魔力を吸収しているらしい。だが、吸われる以上に増える魔力量が圧倒的に多いため、魔力増強装備としての効果は本物のようだ。

「志津香の言うとおりなら、外すには処女を失わなければいけない上に、大量の魔力を持って行かれるんだろ？どうするつもりだ」
「ん？別に外せるわよ、これ」
「は？」

そう言って右手に魔力をこめた志津香は、左手の中指に填めている指輪を右腕で包み込み、少しずつ外していく。特に何も起こらないまま、指輪は志津香の指から外れた。

「処女を失わなければ外せない、って呪いとしては低級なものよ。ちょっと魔力で覆ってやれば認識阻害することは簡単って訳」
「…マリアたち、可哀想に」
「えっ！？マリアたち処女失っちゃったの？ミルも？あんたがやったの！？」

キッとこちらを睨み付けてくる志津香に、慌てて弁解するルーク。

「違う、違う。ここにはいないが仲間のランスって奴が全部やった。まあ緊急事態だったわけだから責めないでやってくれ。それに、処女を奪えばって言うのはマリアが教えてくれたんだぞ」

「…ちゃんと教えておくべきだったわね。悪いことしちゃったかしら」

時空転移装置を完成させることに躍起になっていた志津香は、他の三人への説明を怠っていた。まさか自分たちを倒すほどの相手が来るとは思っていなかったというのもある。流石に友人の処女を奪う原因となってしまったことに、その表情を曇らせる。指輪をマントの裏地にあるポケットにしまいながらルークに向き直った。

「さ、話はこの辺にして娘たちと一緒に町へ帰りましょう」

「ああ。が、その前に…」

そう言って、ゴンッ、と志津香の頭にげんこつを落とすルーク。帽子の上からなので衝撃は若干和らいではいるが、突然の暴挙と頭に走る激痛に志津香が声を荒げる。

「っ……！！いきなり何するのよ！！！」

「指輪の影響がなかったってことは、娘たちを攫ったのは素の状態でやったって事だろう？流石にそれは見過ごせないな。篤胤さんやアスマーゼさんだったら、絶対に注意していただろうから、その代わりにな」

「っ、余計なお世話よ！」

「指輪のせいだったってことにしていいから、ちゃんと謝るんだぞ。町の人たちにもな」

ふん、とだけ言って娘たちが捕らわれている部屋に向かう志津香。その後を追うルーク。部屋は環状列石装置の近くにあり、中に捕らわれていた娘たちを解放する。全員が裸であったのはその方が生気を奪いやすいからとのこと。志津香は奪っていた彼女たちの服を返し、全員を着替えさせた。ルークはその間、部屋の外で待つ。部屋

の中に耳を傾けていたら、小さくだが志津香が彼女たちに謝罪をしている声が聞こえてきた。文句を言いながらも、しっかりと謝れる辺り、根は悪い子じゃないんだな、と思うルーク。ほどなくして着替え終わった娘たちを連れて志津香が部屋から出てくる。

「終わったわ。さ、帰りましょう。帰り木は持ってるの？」

「ああ。ん？あれは…」

町へ帰還するため、帰り木を取り出したルークだが、前から誰か迫ってきていることに気がつく。目をこらしてよく見れば、それはランスとシィルであった。何か叫びながら全力でこちらに向かってくるランス。

「ルークぅぅ！！貴様、そんなに美少女を侍らして何をしてるかぁぁ！！この世の美女は全て俺様のものだぁぁ！！」

「……なにあれ？」

「……あれがさっき話した、仲間のランスだ。まあ、根は悪い奴じゃないんだがな」

厳重な警備に足止めされていたランスが、ようやくここまで到着したのだ。ルークの前まで駆けてくるランス。後ろではシィルが息切れしている。

「で、どれが志津香だ？抜け駆けしていないだろうな？」

「志津香は私だけど」

「おお、性格はきつそうだが美女ではないか。グッドだ！…ん？」

そう言って手を上げる志津香。イヤらしい目つきで志津香をジロジロと見回すランスだが、あることに気がつく。どちらの手にも指輪をしていないのだ。

「な、な、な！ルーク、貴様俺様を出し抜いて志津香の処女を奪いやがったな！！はっ、まさか…周りの娘たちも一緒にハーレム行為に及んでいたのでは…ゆ、許さんぞ！！」

そう言って剣を抜くランス。隣で志津香が汚らしいものを見るような目をしている。

「…これで、根は悪くないとか正気？こいつ頭大丈夫なの？」
「ま、これも味があるというかなんというか。ランス、剣を仕舞え。指輪は別に外す手段があって、俺は手を出してないから安心しろ」
「ん？そうなのか？がはは、ならば俺様が志津香の処女をゲットして四魔女コンプリートだ。英雄の俺様に抱かれることを泣いて感謝するがいい。とうっ！」
「……粘着地面」
「んがっ！！」

志津香に飛びかかろうとしたランスだったが、両足が地面とくっつき、盛大にこける。こけた拍子に今度は全身が地面とくっつき剥がれなくなってしまう。

「んがが、なんだこれは。くっついて取れんぞ！」
「さ、馬鹿は放っておいて帰りましょう」
「…ま、娘さんたちを送り届けないといけないしな。剥がすのに時間も掛かりそうだし、悪いが先に帰っているよ。シィルちゃん、頑張ってな」

ランスの体を地面から剥がそうと頑張るシィルにそう言い残し、帰り木で町まで帰還してしまうルークたち。ワープする直前、志津香がルークにだけ聞こえるように呟いた。

「後でさ…両親のこと聞かせて貰える？」
「ああ、勿論」
「こら、勝手に帰るんじゃない。いたた、シィルもっとゆっくり剥がせ、バカ！」
「ランス様、動かないでください。余計外せなくなってしまいます…」

取り残されたランスとシィルの声だけが辺りに空しく響いたのだった。

―カスタムの町　祝賀会会場―

その晩、事件解決を祝して町を挙げての祝賀会が催された。町長の屋敷にはたくさんの人たちが集まり、中に入りきれないため臨時の第二会場として酒場を利用するほどの大盛況であった。四人の魔女たちを倒し、町の封印を解き、四魔女たち自身や攫われた少女たちも無事帰ってきたのだ。町中の人たちがルークとランスに感謝しており、会場には「ランスさん、ルークさんありがとう記念！カスタムの町復興祝勝会」と書かれた垂れ幕がかけられていた。その下にはリーザス国提供と書かれた花輪が飾ってある。どうやらこの祝賀会にはリーザスも金を出しているらしい。が、その王女様一行の姿は見えない。気になってルークは町長のガイゼルに聞いてみると、なにやら緊急の案件が国で起きたらしく、駄々をこねる王女をなんとか侍女が説得し、既に帰国してしまったらしい。一緒にいた女忍者も王女を説得しながらも、どこか寂しそうだったとのこと。

「がははは！酒だ、酒だ！ドンドン、持ってこいよー！お、そこ

の君、こっちに来て恩人の俺様に感謝するのだ！」
「ランス様、へんでろぱ取ってきました。お酒もお注ぎしますね」

ランスが上機嫌に騒ぐ。町に戻ってきたランスはルークに文句を言ってきたが、この見事な祝勝会で機嫌を取り戻したようだ。シィルは甲斐甲斐しくランスのコップにお酒を注いでいる。実はこの酒、少し薄めてある。あまり酒に強くないランスを思って、悪酔いしないよう、普段からこっそりとランスの酒を薄めて渡しているのだ。どちらかというとかっこつけの為に飲んでおり、酒の味はあまり分からないランスは、普段からそれに気がつかず飲んでいるのだった。献身的な娘である。

「あ、ルークさんもどうぞ」
「ありがとう、シィルちゃん。……俺のは薄めなくて大丈夫だからな」
「……知っていらしたんですか。どうかランス様には…」
「大丈夫。そんな野暮なことはしないさ」

ルークもランスの隣で飲んでいた。真犯人であるラギシスの姿が消えたのは気になっていたが、せっかく町の人たちが自分たちの為に開いてくれた祝賀会だ。悪酔いしすぎない程度に軽く酒を飲みながら、会場を見回す。町の人たちはみな一様に笑顔であった。こういう光景を見られるのも、冒険者稼業の利点だなとルークは思う。そんなルークとランスに今回の事件で特に関わりの深かった人たちが寄ってくる。四魔女やミリ、ガイゼル、トマト、真知子といった人々だ。エレナは第二会場の酒場で仕事をしているのでこちらには不在。

「妹のこと、ありがとうな。感謝してるぜ、ランス、ルーク」
「ランス、今回は本当にありがとうね」

「ミリとミルか。うむうむ、俺様に感謝しておけ。ミルは１０年…いや、５～６年後にまたやらせろ」
「今してもらっても…いいのよ？うふふ」

セクシーな流し目をランスに送るミル。どうやらすっかりランスに懐いてしまったらしい。

「いらね」
「がーーーん！！」
「ばっさりだな。ま、いるって言うのも問題だが」
「ルーク、ちょっと聞きたいことがあるんだ。後でいいから俺とあっちで飲まないか？なに、ほんの少しでいいんだ」
「ん？構わないぞ。ちょっと待っていてくれ、他の人にも挨拶を済ませないとな」

ミリがルークを差し飲みに誘う。思わぬ所からの誘いに驚きながらも、他にも寄ってきた人がいたため、そちらの対応を済ませてからならとそれに応じる。ランスは話しかけてきたガイゼルにチサの処女を寄越せと言って、横で揉めている。ルークの方にはトマトと真知子が寄ってきた。

「ルークさん、お疲れ様ですかねー？ルークさんに剣の見込みあるかもって言われたんで、私も今冒険者目指して頑張っているんですかねー？」
「トマトさんか、相変わらずの話し方だな。本当に修行を始めたんだな」
「はい、昨日は剣の素振りを五回もしたんですよ？」
「……先は長そうだな。まあ、頑張れ」
「聞いていましたわよ、ルークさん。ミリさんの後は私とお酒を付き合って貰えるかしら」

「真知子さん。どれ位かかるか判らないからその後でも良いなら…」
「ええ、待っていますわ。必ず声をかけてくださいね」

トマトと真知子の二人とそういったたわいもない話をしていると、今度はランが話しかけてくる。ランスも丁度ガイゼルとの話が終わったようで、二人でランの話を聞く。

「ルークさん、ランスさん。本当にありがとうございました。私がしたことは許されることではないですが、お二人のお陰でこうして町の人たちにも受け入れられ…」
「あーあーあー、酒が不味くなる。辛気くさいのはナシだ」
「俺もランスに賛成だな。ラン、君は普段からもっと明るくしていた方がいいぞ。その方が今よりもっと魅力的だ」
「えっ…あっ…ありがとうございます。頑張ります」
「こら、俺様の女を口説くな」
「ん？別に口説いたつもりはないが」
「というか勝手にランを自分の女にしないの、ランス」

そう言ってやってきたのはマリア。その足下にはグデグデに酔っ払った志津香がいた。先ほどまでのきりりとした姿とのギャップに驚くルーク。

「本当にありがとうね、ランス、ルークさん。二人がいなかったら大変なことになってたと思う。あっ、もちろんシィルちゃんもね」
「うむ、当然だな。たっぷり感謝しておけ」
「ところで…志津香はどうしたんだ？」
「あはははは、あはははは！」

ゲラゲラと大笑いする志津香。どうやら笑い上戸らしい。

「あはは…やけ酒を一気に飲んだらこうなっちゃった…あんまり見ないであげてください」
「それは難しいな、良い笑顔だ」
「あはははは、殺してやる、ラガール。あはははは！」

物騒な事を言いながらも真っ赤な顔で上機嫌に笑い続ける志津香。その懐から、フィールの指輪が床に落ちる。それを拾うランス。これで四つの指輪コンプリートだ、と騒いでいる。一応後でちゃんと返すように伝えておこう、と思いながら、志津香の顔を見る。このように笑っていると、本当にアスマーゼさんそっくりだなと昔を懐かしむルーク。

「志津香、ちゃんと口にはしないけど感謝してましたよ。ご両親のことを聞けて…」
「たいしたことはしていないさ。ほら、志津香。ここで寝ると風邪引くぞ」
「あははは、ルーク、しっかりと手がかり見つけなさいよー！」

志津香を起こそうとしたルークに寄りかかってくる志津香。見ようによっては抱き合っているような光景が出来上がる。瞬間、パシャッとフラッシュ音が響いた。見れば金髪の少女がカメラを向けていた。

「やーやーやー、どうも。写真家のぺぺって言います。良い写真を激写してしまいましたね。今度ゼスのお抱え写真家オーディションに投稿させて貰いましょう」
「流石に可哀想だから止めてやってくれ。ゼスで写真家をやりたいのか？」
「はい、ゼスで写真家としてのし上がり、ゆくゆくは世界を股に掛ける美人写真家になるのが私の夢なんです」

「そうだな…ゼスの結構偉い軍人に知り合いがいるから、今度紹介しておいてやる。だからその写真は決して投稿しないこと」
「わふー。こいつはラッキー。ぜひお願いしますね。これ、私の連絡先です。では皆様ご一緒に、ラストに一枚！パシャリンコッコッコ！」

今度はルークと志津香だけでなく、ランスとシィル、マリア、ラン、ミリ、ミルにトマト真知子も含めた全員の集合写真を撮る。突然ではあったが、笑ってピースするランスと女性陣。ガイゼルは運の悪いことに見切れてしまっていた。

ー カスタムの町　祝賀会会場外 ー

「で、聞きたい事って言うのは？」

ルークとミリは会場から出て、夜風に当たりながら酒を飲んでいた。会場内の喧騒がほんの少しだけ聞こえるのみで、町の灯りも町長の家と酒場以外はほとんど消えてしまっている。中々に風情のある静かな夜であった。

「ああ…別にたいしたことじゃないんだ。俺がちょっと気にかかっただけなんだが…ルーク、あんた妹いるんじゃないのか？」
「……どうしてそう思った」
「迷宮で初めて会ったときにさ、俺が妹を放っておけないって言ったとき、ちょっと表情が変わったのが気になっただけで、後はただの勘さ。妹を持つ身としてのね」

そう笑いながら酒を一口くい、と飲むミリ。普段の立ち振る舞い

からはあまり想像できないが、ミリは周りをよく見ており、中々に鋭いところもある。

「そうだな。双子だが、妹がいる。いや…正確には、いた…だな」
「……悪いこと聞いちまったかね」
「気にしなくていいさ。死んだのは二年前で、俺もあいつも成人してからだ。それよりも、冒険に明け暮れて碌に故郷にも戻らず、妹が死んだことを一年以上も後になって知った馬鹿な兄貴が問題さ。こんな風にはなるな。ミルを大切にしてやれ」
「そうだったのかい…悪かったね。ま、俺は大丈夫さ。言われなくてもミルのことは大事に育てるよ」

今は亡き妹の話に、少し昔を思いだすルーク。結局、かつて魔想の屋敷で数日の間生活をした四人の内、二人がもうこの世にはいないのか、と感傷に浸る。ルークもその可能性を考えてはいたが、誘拐されたアスマーゼももうこの世にはいない。実際にはあの四人の内で生きているのはルークだけであった。ミリがスッとグラスをルークの目の前に差し出す。

「乾杯し直しといこうじゃないか。亡くなった妹さんにな」
「悪いな。それと、ミルの成長と…迷宮で命を落としたミリの三人の仲間にもな」

ミリの差し出したグラスに、ルークは自分のグラスを当てる。カラン、という音が静かな夜に響く。

「やっぱ…いい男だな、あんた。俺を抱く気はないかい？真知子との酒が終わったら俺の部屋に来ないか？」
「魅力的なお誘いだが断っておくよ。ランスでも誘ってくれ」
「ランスはなぁ…体力は凄いんだがテクニックがまだまだなんだ」

「もうヤッってんのかよ。いつの間に…」

空気を変えるため、あえてそういった話題にシフトしたミリ。ルークもそれに乗り、二人で笑いながら酒を煽る。そういえば、この後酒を飲む約束になっている真知子も妹持ちである。リーザスで無理をして助けたデル姉妹もだ。知らず知らずのうちに、兄妹、姉妹という存在に惹かれているのかも知れないな、と酒を飲みながらルークは考えていた。

―カスタムの町　祝賀会会場　チサの部屋―

「ぷひー、えがっだ…」

ランスは祝賀会会場としている町長の家のホールを抜けだし、チサの部屋のベッドで横になっていた。ルークが出て行ったすぐ後、チサがランスを自分の部屋に誘いに来たのだ。まだチサの処女を奪っていなかったランスはこれを承諾。チサの部屋につくやいなや情事に入り、それを終えた今はベッドの上で脱力感に身を浸らせていた。

「町を救って頂き、本当にありがとうございます。あの、ランス様。その指輪、つけてみても良いですか？」

「ん？別に良いぞ。魔法使いでも処女でもないチサちゃんがしたところで何の意味もないからな」

チサがランスの服の側に置いてあったフィールの指輪を指さす。H後で上機嫌だったランスは、難なくOKを出した。左手の指に四つの指輪を填めていくチサ。すると、突然チサがおかしな笑い方を

始めた。目は正気を失っている。

「ふふ、ふふふ、ふふふふふふふふふ」

「…チサちゃん？」

「ふふふくくく、ありがとう、ランス君。私からも礼を言おう！」

この場にいないはずの初老の男の声が響く。それと同時に、ランスは金縛りに襲われ動けなくなってしまった。ランスはこの声に聞き覚えがあった。チサの後ろに、その男の姿が浮かび上がる。

「なっ、てめえ、その声は生きてやがったのか！ラギシス！！」

「ふはははは、久しぶりだなランス。この娘が行方不明になったことがあっただろう。そのときに内側に潜ませて貰っていたのだ。くくく、結果は上々だ。こうして私の元に指輪を持ってきてくれたのだからな！」

「てめぇ、そこを動くな！今ギッタギッタにしてやる！」

「はははは、それは恐ろしい。感謝の意を込めて君は生かしておいてやろう。さらばだ、ランス」

そう言い残し、勝ち誇った笑いを浮かべながら四つの指輪と共に姿を消すラギシス。部屋には金縛りの解けたランスと、気絶しているチサだけが残されていた。

第２８話　祝賀会（後書き）

［人物］

ペペ・ウィジーマ

　世界を股に掛ける写真家を夢見る少女。思わぬ形でゼストとのパイプが出来そうで上機嫌。撮った写真はちゃんと写っている全員に渡しました。志津香にツーショット写真を渡した際、ネガを燃やすから寄越せと追いかけられる羽目になった。

［技］

粘着地面

　一定サイズの地面を粘着質にして動きを止める初級魔法。術者の能力次第で効果範囲や粘着度に差が生まれ、ある程度の術者であれば戦闘支援魔法としても優秀な魔法となる。

［その他］

ＧＩ０９９８　ルーク、カスタムの町を訪れ魔想夫妻の世話になる

ＧＩ０９９９　志津香誕生　直後、篤胤は殺され、アスマーゼは攫われる

ＧＩ１００６　ルーク、行方不明になる

ＧＩ１０１４　ルークの妹、死亡

ＧＩ１０１５　ルーク帰還、妹の死を知る　その数日後、元号がＬＰへと変化する

第２９話　怨嗟

―カスタムの町　臨時宿泊施設―

「頭いたっ……」

志津香が目を覚ますとそこは酒場に作られた臨時の宿泊部屋であった。どうやらマリアが連れてきてくれたらしい。昨晩の記憶がまるでない。どうやら飲み過ぎてしまったようだ、と痛む頭を抱えながらベッドから抜け出す志津香。部屋を出て営業場の方に行くと、何人かの客が朝食を取っている。志津香と同じように二日酔いに頭を抱えているものも多い。奥の席にマリアの姿が見える。マリアもこちらに気がついたようだ。

「あ、おはよう志津香。……調子悪そうね」

「おはよう、マリア。…最悪ね。頭痛いし、昨晩のことは何にも覚えてないし」

「あはは…そうなんだ…」

そう言って志津香はマリアの前に座る。マリアの苦笑いが少しだけ気になる様子であったが、今の状態ではあまり深くは考えられないようで、エレナに水の注文をする。

「はい、水。昨晩は随分とはしゃいじゃったみたいね。あまり気にしない方が良いわよ」

「あっ、エレナさん！それは…」

「……どういうこと？」

水を持ってきたエレナが志津香にフォローを入れる。が、昨晩のことを覚えていない志津香にとってそれは逆効果であった。マリアの方に向き直り、昨晩のことを問う。

「ねえ、マリア。私昨晩どんな状態だったか聞かせてもらえる？」

「え、えっとね……落ち着いて聞いてね」

これは隠しきれないと判断し、観念して昨晩のことを話し始めるマリア。親友のことを思い、極力オブラートに包んで説明を続けた。が、その努力は無駄になる。志津香の様子を見に酒場に入ってきたミリが、その姿を見るやいなや志津香に向かってこう言ったのだ。

「お、なんだ元気そうじゃないか。昨晩は凄かったな。真っ赤な顔で騒ぐわ、絡むわ、爆笑するわ。抱きつかれたルークが困ってたぞ」

その発言になぜかマリアの血の気が引く。ミリに黙っているようにジェスチャーを送るがもう遅い。志津香は机に突っ伏しながら、二度と酒は飲み過ぎないようにしようと心に誓うのだった。

―カスタムの町　街路―

町長の家に向かってルークは道を歩いていた。一応事件解決ではあるが、消えたラギシスの問題が残っていたからだ。酒場の前を通ると、店からマリアとミリ、ミル、そして俯いた状態の志津香が出てきた。

「おはよう。みんなで朝食でも取っていたのか？」

「あ、ルークさん。おはようございます」

挨拶をしながら四人の方に寄っていったルークだが、いきなり志津香に右足を踏まれる。見れば志津香がこちらをものすごい顔で睨んでいた。

「……昨日のことは記憶から抹消しなさい。死にたくなかったらね」

「ん？ああ、そのことか。別に俺は気にしていないんだがな…」

「私が気にするのよ！」

「お、仲良いな」

「おねえちゃん、あれは仲良いって言うの？」

志津香のヤクザキックがルークに飛んでくる。そんな感じで談笑をしていると、町長の家の方からランが慌てた様子で走って来る。マリアがいち早くランに気がつき、声をかける。

「どうしたのラン？そんなに慌てて」

「良かった、みんな揃っている。今すぐ来て、大変なことになったの！」

―カスタムの町　町長の家前―

「フィールの指輪を奪われたですって！というか、いつの間に私の指輪持って行ったのよ！」

「ランスの馬鹿。４０人分の魔力を吸ったあの指輪はとんでもない魔力を秘めているわ。そんなものラギシスの手に渡ったら…」

「ランスのバカ、バカ、バカ！！」

「いた、いたた。そんな怒るな」

町長の家の前にいたランスから一行は昨晩の報告を受ける。四魔女である志津香、マリア、ミルは特に激怒しランスに食って掛かる。町長の屋敷に用事があって寄っていたランは、先に報告を受けていたため食って掛かるようなことはしないが、やはり相当怒っていた。ミリは達観した様子で事の成り行きを見守る。ルークは自分の迂闊さを後悔する。ラギシスに対する懸念はあったし、チサがラギシス邸で見つかった話は聞いていた。あの時疑念を抱いておくべきだった、と。

「やはり生きていたか、ラギシス。シィルちゃん、ラギシスが今どこにいるかは判っているのか？」
「はい。あちらの森の方に向かわれたのを目撃した住人の方がいました」
「多分まだ指輪の力を完璧には扱いきれていないんだわ。あの森で魔力に慣れるつもりよ」
「…マリア、ミル、ラン、行くわよ。私たちの手でラギシスをもう一度殺しに」

志津香の言葉に三人が頷く。騙されていたとはいえフィールの指輪を完成させてしまった者として、ラギシスの弟子として、四魔女で決着を付けるつもりらしい。

「水くせーな。俺も行くよ。妹だけ向かわす訳にはいかないだろ」
「ま、このまま放っておける存在ではないな。最後まで付き合おう」

志津香の言葉に反応したのは三人だけではない。ミリとルークも共に戦う腹づもりの様だ。が、ランスだけが憮然とした態度でこう言ってのける。

「めんどいから俺様は行かんぞ。俺様の仕事は四魔女退治とこの町

の開放だ。後は知らん」
「でもランス様…」
「それに４０人分の魔力を持った相手だろう？お前たちに敵うような相手じゃないだろ。俺様ほどではないが多少は強いルークが協力したとしても、死ぬかもしれんぞ」
「それでも行かないといけないのよ」

ジロリとだけランスを一瞥した志津香は、マントを翻して颯爽と歩き始めた。ミリ、ミル、ランがそれについて行く。

「止めたらどうだ？マリア、ルーク」
「そんなわけにはいかないわ。ラギシスを放っておけないもの」
「奴を放置するのは危険だからな。指輪に慣れていない今のうちに叩いておくのも冒険者の勤めだ。が、ランスの判断を否定するつもりはない。そちらの言っていることも正しい。仕事でもないのに命をかけてまでやることではないからな」
「…シィル、帰り支度をしておけ。そろそろアイスの町に帰るからな」
「ランス様……」

シィルが悲しそうな表情でランスを見つめる。どうやらシィルはみんなに協力をしてあげたいと思っている様だ。が、主人のランスの意見には逆らえない。

「今までありがとうね、ランス。シィルちゃんも元気でね。バイバイ」
「ま、俺が誰も死なせはしないさ。またその内、冒険を一緒にすることもあるだろ」

そう言ってマリアとルークは軽やかに志津香の後に付いていった。

「…ふん、馬鹿な奴らだ」
「……」

ーカスタムの町近隣の森ー

六人はラギシスがいるという森の中まで入ってきていた。志津香が魔力を察知し、道案内をする。マリアはゴロゴロと砲台を乗せた台車を転がしていた。ルークもそれを後ろから押す。

「すいません、ルークさん。手伝って貰っちゃって」
「気にしなくていい。で、これは一体何なんだ?」
「よくぞ聞いてくれました!これはマレスケ。長距離用のチューリップ2号です。指輪に魔力を吸われすぎた私が付いて行っても足手まといだからね。ちょっと離れたところからこれでみんなを援護するわ」
「なるほどな、ラギシスの正確な位置は判るのか?」
「GPSっていう物が手に入れば良かったんですけど、手に入らなかったんで志津香の魔法でターゲットして、その位置を特定して発射できるようにしています」
「この辺りが広くてよさそうね。マリア、ここから援護して。頼んだわよ」
「そういえばランとミルは吸われた魔力は大丈夫なのか?」

マレスケを台車から降ろしながらルークが二人に尋ねる。指輪を外すときにこの二人も魔力を相当量吸われているはずだ。魔法を使えないのであればマリアと共にここに残った方が良い。

「かなり吸われはしましたが、魔法を使えなくなるほどではありません。それに、私は一応剣も使えますし」
「幻獣さんの出せる量は減っちゃったけど、少しならまだ出せるよ」

どうやら魔法を使えなくなるほどにまで吸われてしまったのはマリアだけらしい。運が悪かったのか、元々の魔力量に差があったのか。

「志津香、調整が必要だからマレスケが撃てるようになるまでもう少し掛かるんだけど…」
「待てばその分ラギシスが指輪に慣れるわね…いいわ、先に戦っていましょう。準備が出来次第、援護をよろしく」

こうしてマリア一人を森の広場に残し、五人で奥へと進んだ。少し進むと洞窟が見えてくる。この中でラギシスは指輪の魔力に慣れているのだろう。洞窟の仲ではマレスケの砲撃が届かないため、なんとか外に誘導できないか辺りを窺っていると、突如洞窟の入り口前の時空が歪み始める。その時空の裂け目からラギシスが現れる。

「貴様らか…何故私の前に立つ」
「ラギシス、観念しなさい！」
「貴様を野放しにしておくのは危険なんでな」
「ふはははは！無限の魔力と生命力を持つこの私に楯突こうとはな。よほどの命知らずらしい」
「もう一度殺して、今度こそ地獄に送ってやるわ！」
「おお、ミル、ラン、志津香。私の可愛い娘たちよ。命だけは助けてやったというのに…」

その言葉に志津香がキッとラギシスを睨み付ける

「私の父は一人だけよ！あんたなんかじゃない！！」
「くくく…そうか。なら、殺されても文句は言うまい！！！」

その言葉が開戦の合図となった。全員が臨戦態勢に入る。純粋な剣士であるルークとミリがラギシスに向かっていく。その二人に向かって志津香が声をかける。

「私がラギシスの魔法を封じ込めるわ。あまり長くは持たないと思うから、その間に奴を倒して」
「了解、頼んだぜ志津香！」
「こういう役回りは俺たちに任せろ。ミルはあまり前線に来るな。ランは志津香が攻撃魔法を使えない分、剣ではなく魔法で援護を！」

ルークが的確に指示を出す。ランとミルもそれに頷き、前衛ルークとミリ、中衛ランとミル、後衛志津香という布陣が出来る。向かってくるルークとミリに対し、ラギシスが何やら呪文を唱えようとするが、その魔力が志津香の妨害魔法によって封じ込められる。

「なるほど…我が魔法を封じ込めるか。簡単な魔法ではないのだが、さすがは志津香だ。これ程の魔力を有しているとは…」
「そうだな。そして貴様は何も出来ないまま死ね！」
「おりゃ！」

ルークとミリの剣がラギシスを斬る。ミリの剣は胸を、ルークの剣がその首を真一文字に斬り裂いた。が、ミリが付けた胸の傷もルークが付けた首の傷も、ジュクジュクと音を立てながら再生してしまう。

「もはや人間ではないな…」
「無限の生命力を持つと言ったであろう」

「援護します。炎の矢！」
「幻獣アタック！」

ランの放った炎の矢がラギシスの右腕を燃やし、ミルの幻獣が体当たりをする。ミルの幻獣は、洞窟の中で見た凶暴な姿からなにやらファンシーな可愛らしい物に姿を変えていた。これはミルの精神状態で変化する物なので、あの時と違い元の幼い状態で、かつ指輪の悪影響を受けていないミルが呼び出すとこういう姿になってしまうのだった。丸焦げになった右腕が、じわじわと再生していく。

「ちっ、化け物め！」
「ミリ、手を止めるな！再生力を上回るダメージを与えれば勝てる！真空斬！」
「こざかしい…魔法の攻撃が出来なくとも、我がパワーを防ぐことは出来まい」
「！？ぐあっ！！」
「おねえちゃん！！」

突如、ラギシスの体から鋼鉄の触手が伸び出し、目の前にいたミリに襲いかかった。直撃は避けたミリだが、脇から出血をしている。今この場に回復役はいない。一人の離脱がそのまま戦況を大きく動かしかねない。特に前衛のミリは貴重な存在だ。倒れられるわけにはいかない。ルークがミリの方を見るが、右手を上げてこちらに合図をしてくる。

「心配しなくていいよ、かすり傷だ！」
「魔力を肉体の改造にも使えるのか。厄介だな」
「外に放たない魔力は抑えることが出来ないわ、悪いけどそっちでなんとかして！」

ラギシスの魔力を抑えているのが相当きついのか、青ざめた顔をしながら志津香が叫ぶ。一人で強大なラギシスの魔力を抑えている志津香にこれ以上の無茶はさせられない。迫る触手を斬り伏せるルーク。

「任せろ。みんな、この触手は鋭いが動きは鈍いし防御ももろい。落ち着いて対処するんだ！」

「判りました、ルークさん。たあっ！」

ランも迫ってきた触手を剣で斬り、左手で炎の矢を放って奥の触手も同時に燃やす。ミルもランの後ろに隠れながら幻獣で応戦する。ルークも真空斬を連発し、次々と触手を撃ち落としながら、ラギシス本体にもダメージを与えていった。

「そうか、この姿のままでは貴様らを倒すのは難しいか…ならば姿を変えさせて貰おう！」

そう言ってのけたラギシスの姿が、緑色の魔力鎧に覆われる。そのまま巨大化し、ルークたちの前に立ちふさがる。鎧の間からかすかに肌色の肉が見える。が、その形状は既に人間のものではなかった。

「何よこれ…」

「本当に化け物だな…」

「おねえちゃん…」

「くっ…もう魔力を完璧には抑えきれないわ…初級魔法くらいは飛んでくると思って…」

「指輪から無限のエネルギーを補給できる私に不可能はない！この力があれば、かつて私の考えを認めなかったあのカバッハーンの野郎も、目障りだったラグナロックの若造も敵ではない。ははははは

！」

「でかい図体の割には、言うことが小さいな。自分が小者だと伝えているだけだぞ」

「なんだと…」

高らかに笑っていたラギシスだが、ルークの言葉を聞きその笑いが止まる。ルークは意味もなく挑発したわけではない。ランもミリもミルも戦意が落ちてしまっている。今襲われては総崩れしかねない。だからこそ、自分に意識を向けさせたのだ。

「そうか、そんなに死にたいのか。ならば望み通り死ね、ルーク！！」

ラギシスが両拳を握りしめ、ルークの立っていた場所に振り下ろす、轟音と共に砂煙が巻き起こる。見れば地面が抉れている。恐ろしいほどの威力だ。ランたちは焦ってその場を見るが、ルークの姿がない。

「ぐあっ！！」

ラギシスがうめき声を上げる。ラギシスの攻撃を素早く躱したルークが、少し離れた場所で鎧の間から剣を突き刺していたのだ。

「触手同様動きが鈍いな。これではただのでかい的だ」

「貴様ぁ！炎の嵐！！」

ラギシスが初級呪文を放つが、それを躱しながら鎧の間を攻撃していくルーク。更に執拗にラギシスを挑発し、それに誘導されるようにラギシスはルークばかりを狙い続ける。さすがに完全には躱しきれなくなっていき、少しずつその体を傷つけられていく。

「あそこまでラギシスの注意を引きつけてくれたんだ。俺たちも行くよ！」
「うん、おねえちゃん！」
「ルークさん、今援護します！」
「みんな…頑張って…」

戦意を失いかけていた三人が再びラギシスへ攻撃を始める。志津香も青い顔をしながら必死にラギシスの魔法を抑えている。今は初級魔法のみで済んでいるものの、志津香が崩れれば一体何が飛んでくるか判ったものではない。早く勝負を付けなければ敗北は必至。ルークはここにきて大技を放つ。狙うはラギシスの右腕。

「真滅斬！！！」
「ぐっっっ！！貴様ぁぁぁぁ！！」

ラギシスの右腕が斬り落とされる。怒り狂うラギシス。志津香の妨害魔法の影響がある中、無理矢理にでも魔力を込め上級魔法を放とうとする。

「ぐっ……これ以上は……抑えきれない……」
「ははははは、死ねぇぇぇ！！！」

ラギシスがそう言って魔法を放とうとした瞬間、空が光った。直後、ラギシスを強力な砲撃が襲い、その体が灼熱に包まれる。

「ぐぉぉぉぉぉぉ！！！！！」
「マリアよ、マリアの砲撃が間に合ったのよ！」
「なんという威力だ…マリアめ、あいつは本当の天才かもしれんな…」

更にもう一発追い打ちの砲撃が飛び、業火の中ラギシスの体が見えなくなる。鋼鉄の鎧がメキメキと音を立てて崩れていく。

「やった…のか…？」

「大丈夫だよ、おねえちゃん。これでやれなきゃ本当の化け物だよ」

「！？いや、まだみたいだ…」

炎の中から異形の生物が姿を現す。鎧に覆われていた肉の塊が姿を現したのだ。所々から触手が伸び、手足は無くナメクジのように地面を這っている。全長は一体どれほどになるのだろうか。遙か高い位置から見開かれた両目でルークたちを見下ろすラギシス。

「……黒色破壊光線」

「みんな逃げて！！」

ラギシスが強力な魔法を放つ。志津香が叫ぶが、時既に遅し。ルークは他の四人を庇うように前に出るが、防ぎきれるものではない。暗黒の光線が五人を包んだ。

ーカスタムの町近隣の森　広場ー

遠くで轟音が響く。と、同時にマレスケの目標座標も担っていた志津香の封印魔法が解除されてしまった。

「ダメ、これじゃあもう砲撃は出来ない。志津香、お願いもう一度魔法を…」

座標が特定できなければみんなを巻き込んでしまう可能性があるため、下手にマレスケを撃つことは出来ない。が、再度魔法が掛けられる気配はない。青ざめていくマリア。

「うそ…みんなやられちゃったの…志津香…」

目に涙を浮かべ、その場に座り込んでしまうマリア。絶望の中呟いたのは、この場に男の名前であった。

「……助けて……ランス……」

ーカスタムの町近隣の森　洞窟前ー

「あーはっはっはっはっはっ！！身の程を思い知ったか雑魚ども！！」

ラギシス以外その場に立っている者はいなかった。幼いミルは気を失っている。志津香、ミリ、ランの三人は意識を保ってはいたが、全く体を動かせず地面に横たわっていた。一番酷いのはルークだ。庇うように前で直撃を受けたため、地面に倒れ込んだままピクリとも動かない。

「ラギ…シス…」

「私の黒色破壊光線を受けてまだその目が出来るとは、やはり大した奴だな、志津香よ。そうだ、冥土の土産に一つ良いことを教えてやろう」

「良いこと…ですって…」

「そうだ、お前が捜し求めていた両親の仇のことだ」

「!?ラガールを…知っているの…」
「知っているとも。何せ、奴に魔想がこの町にいると教えたのは、この私だからな!」

その告白に、志津香の目が見開かれる。苦しそうな声を絞り出してラギシスに聞き返す。

「なん…ですって…」
「目障りだったんだよ、奴が。いきなりこの町に越してきたと思えば、住民とすぐに打ち解けてな。私の研究にもそれは危険だとかケチをつけてきやがった。そんなとき、ゼスで魔想を捜しているという男の情報を聞いてな。情報を提供した相手には魔力増幅の指輪を寄越すとの事だった。くくく、好都合だった」
「魔力増幅の指輪…まさか!?」
「そうだ、このフィールの指輪はラガールが造り出したものだ。魔想夫妻を話があると言って荒野まで呼び出し、ラガールに殺させた。その報酬として指輪を譲り受けた。四つの指輪には既に9人分の魔力が込められていた。そして町にはおあつらえ向きに魔法の才能がある娘たちが数人いた。頃合いを見計らってこの娘たちに指輪を填めさせればいい。そのために私は貴様らを弟子にしたのだ」
「そんなに昔から…全て自分が指輪の力を手に入れるためだけに…」
「志津香よ。お前に指輪を渡し、それを嬉しそうに指に填める姿を見て、笑いを堪えるのが大変だったのだぞ。捜し求めている父の仇が造った指輪を嬉しそうに指に填めるその顔、実に滑稽であったぞ。ふふふ、ははははは!!!」

ゲスな笑い声が辺りに響く。志津香が土を握りしめ、目を血走らせる。ミリとランも倒れたままラギシスを睨み付ける。

「……殺してやる、殺してやる、殺してやる!!!」

「外道が……」
「やっぱり…この男だけはもう一度殺す必要があるわね…」
「ふはははは、この無限の魔力を手にした私を殺すだと！それは不可能だ！さあ、話も終わった。貴様らは実によく役に立ってくれたよ。一度殺されたのは誤算だったがな。あの時のお返しだ、志津香。貴様から死ね！」

そう言って鋭い触手が志津香に迫る。満身創痍の体では避けることも迎撃することも出来ない。しかし、気丈にも目を瞑ることはなく、その瞳はラギシスを睨み付けていた。迫る触手に自分の死を悟る。恐怖よりも、悔しさが募る。父の仇を…討てなかった…。が、迫っていた触手は志津香の直前で両断される。

「つまり、貴様も篤胤さんとアスマーゼさんの仇って事だな…」
「貴様、まだ立つのか…」

志津香は見る。自分を守るようにラギシスの前に立ちふさがる男の姿を。大きく、頼りがいのある背中。黒色破壊光線の直撃を受け、誰よりもダメージ大きいはずのルークが、それでもまだ立ち上がり、ラギシスと対峙していたのだ。

「ならば貴様はここで殺すぞ、ラギシス！俺と志津香の手でな！！」

第２９話　怨嗟（後書き）

［技］

幻獣アタック

使用者　ミル

　呼び出した幻獣たちを一斉に体当たりさせるミルの必殺技。幻獣の数が多ければ多いほどその威力を増す。

炎の嵐

　小規模範囲を炎で包む初級魔法。火爆破よりも範囲が狭く、ある程度の魔法を習うと徐々に使わなくなるため、あまり戦場で目にすることはないある種レアな魔法。

黒色破壊光線

　暗黒の光線が敵を飲み込む最上級魔法。数ある攻撃魔法の中でも最強とされている究極呪文だが、その分扱いは難しく使用者は限られている。本来ラギシスはこの魔法を使うことは出来ないが、指輪の魔力で無理矢理使用している。

［その他］

チューリップ２号「マレスケ」

　長距離固定砲台のチューリップ２号。驚異的な威力を叩き出すが、座標指定がネックとなる。そこまで大きくないため台車での持ち運びが可能。マリアはまだまだ満足しておらず、砲身をもっと巨大化し、ＧＰＳも付けて超巨大長距離固定砲台にしたいらしいが、そんな金はカスタムの町にはない。

第３０話　英雄は遅れてやってくる

ーカスタムの町近隣の森　洞窟前ー

ポツポツ、と雨が降ってきていた。その雨を頬に受けながら、ルークがラギシスと対峙している。既に体は満身創痍。立っているのもやっとな状態のはずだ。

「私を殺すだと？ほざけ、雑魚がっ！！！」

ラギシスの触手がルークに迫る。頭に血が上ったラギシスは、倒れている四人には目もくれずルーク一人に攻撃を集中させる。それを捌いていくルーク。ルークの体を突き動かしているものは二つ。恩人の仇である目の前のラギシス。そして、後ろにいる恩人の娘の志津香。戦士として、男として、ここで立たないわけにはいかなかった。触手を斬り落としながら志津香に向かって小袋を投げる。

「中に元気の薬が入っている。最後の一本だ。気休めにしかならんが飲んでおいてくれ」

「あんたが…飲みなさいよ…」

「俺は大丈夫だ、まだまだ戦えるさ。それに…志津香、お前の力が必要だ」

「……勝つためってことで…いいのね？」

「ああ、ミリとランには何も出来ずスマン。世色癌はさっきので燃やされてしまってないんだ」

「回復させられる一人は…あんたの判断だろ？それを信じるさ…」

「ルークさん…必ず勝ってください…」

「了解だ。志津香、援護はいらない。自分の撃てる最強の魔法を準

備だけしておいてくれ」

左手の親指でランに返事をし、ルークは更に迫ってきた触手を斬っていく。奥でラギシスが魔法を唱えようとすれば真空斬で妨害をし、中級魔法以上のものを撃たせないようにしていた。先ほどの黒色破壊光線をもう一度放たれれば、今度こそ命はない。

「ふん、粘りはするが徐々に動きが鈍くなってきているぞ」
「化け物になって目まで悪くなったのか？あんな下らない理由で力を欲するような小者の攻撃、まだまだ何時間でも捌けるぞ」
「貴様ぁ！！まだ私を小者というのか！！！」

ラギシスが言うようにルークの体に更に傷が増えていく。完全に触手や魔法を避けきれなくなってきているのだ。だが他の四人に攻撃させるわけにはいかない。あえて更に挑発を続けるルーク。志津香はその姿を見ながら歯がゆい思いであった。ルークがその性格に似合わない挑発を続けているのが自分たちを守るためだというのは判っていた。だが、そんな彼に何もする事が出来ない。ミリとランも気がついているようで、悔しそうに呟いていた。

「あの馬鹿…自分だって限界だろうに…こっちの心配までしてる場合か…」
「こんな形で足手まといになってしまうなんて…」

志津香は既にルークから貰った元気の薬は飲んでいたが、やはりここまでのダメージを負ってしまってはその回復量は気休め程度であった。体は起こせるようにはなったが、集中できず魔力をあまり溜められない。普段であれば気にもならないのに、今は頬に当たる雨粒一つにも集中力を乱していた。それなのに、雨足は更に強まる。

「炎の嵐！」
「くっ…」

ラギシスの放った魔法を避けるが、横から来た触手に左足を刺される。すぐにその触手を斬り捨て、体勢を整える。じり貧である。端から見れば十分戦えている様にも見えるが、その実、迫ってくる触手を斬るのが精一杯で碌に本体にダメージを与えられていない。魔法詠唱妨害の真空斬程度では今のラギシスの生命力ではすぐに再生してしまう。再生するのは本体だけではない。必死になって斬り落とした触手も、少しすれば再生してしまうのだ。この巨大な相手に立ち向かうには、攻め手が足りていなかったのだ。ルークは思う。せめて後一人、背中を預けられるほどの前衛がこの場にいてくれれば…、と。

「……？」

初めに異変に気がついたのはランであった。しかし、それは意外なことではない。ルークは交戦中、志津香は魔法詠唱に集中し、ミリはルークの戦闘を見ながらも気絶している妹が気になる様子。一番冷静に周囲の様子を窺っていたランが一番先に気がついたのは必然だったのだ。

「雨足が強くなっているの…私たちのいる場所だけだわ…」

「真空斬！真空斬！」
「ほらほら、どうした！小者呼ばわりした相手に追い詰められる気分はどうだ？」

ラギシスの触手を必死に真空斬で叩き落としながら、ルークは下品な笑い声を上げるラギシスを見上げる。そこでルークは意外なものを見る。巨大な肉塊に二つの目が付いたもはや人間とは呼べないラギシスの後ろ上方、洞窟の入り口である岩肌の上に一人の男が立っていたのだ。ルークの待ち望んでいた、背中を預けられる戦士。岩肌から飛び、その男はラギシスに向かって剣を打ち下ろす。

「不意打ちランスアタァァァック！！！」
「ぐぎゃぁぁぁぁぁ！！！」

その男はランス。岩肌から飛び降りながらのランスアタックは、ラギシスの左半身を縦に真っ二つにし、更に剣が地面に付いた際に生まれた衝撃波で周りの触手も吹き飛ばす。斬られた身体の断面から緑色の液体がグジュグジュと流れ出る。

「ランス、貴様ぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「げ、まだ生きてるのか。しぶとい奴だ」
「来てくれるとはな、礼を言う。…仕事は終わったんじゃなかったのか？」

丁度ラギシスを挟み込むような位置関係になったランスに向かって、ルークが問いかける。ふん、と鼻を鳴らしながらランスがそれに答える。

「お前らに恩を売っておくのも悪くない。それに、むざむざラギシスに俺様の女たちを殺させることもないからな」
「誰があんたの女よ！来るならもっと早く来なさいよ！」
「がはは、英雄は遅れてやってくるものなのだ！」
「ふ、案外そんなもんなのかもな」

志津香がランスに文句を言う。と同時に、自分の体の異変に気がつく。先ほどまでよりも傷がふさがり、体力が戻っているのだ。

「これは…」
「体が動く。ミル、大丈夫か！」
「やっぱりこの雨…」
「みなさん、大丈夫ですか！？」

森の茂みからシィルが現れる。ランたちの周りだけ雨足が強まっていたのは、シィルが普通の雨の中に隠して回復の雨を唱えていたからだ。ランとミリも体が動く程度には回復し、ミリは気絶したままのミルに寄っていって抱き起こす。ランは側に落ちていた自分の剣、ドラゴン・スレイヤーを握るが、その刀身は折れてしまっていて最早使い物にはならない。シィルの姿を見た志津香が声を上げる。

「ありがとう、シィルちゃん。でももう回復の雨はいいから、ヒーリングで私を優先して回復して！」
「え？」
「シィルさん、私からもお願い。この剣じゃもう援護も碌に出来そうにないから」
「ルークは志津香を必要としていた。それに、あの二人が前衛なら俺は足手まといさ。ミルと一緒に下がっているよ」
「二人とも…ごめん、ありがとう」
「わかりました。いたいのいたいの、とんでけーっ！」

シィルの治療を受けながら、志津香は呪文を唱えながら両手に魔力を込め、ルークに言われた通り自分の撃てる最強の魔法の準備をする。黒色破壊光線より威力は劣るが、光属性最上級魔法に位置する攻撃魔法、白色破壊光線の準備を。

「ふん、くそっ、なんだこの触手は！ああ、めんどい！やはり帰ればよかった！」
「ま、今更引き返せないだろ。しっかり働いてくれ」

言い合いながら触手を蹴散らしていくルークとランス。戦況は一気に変化した。ランスの登場によって触手の猛攻よりもこちらの手数の方が多くなったのだ。徐々にだが触手の数が間に合わなくなってきている。更にそれを後押しする要因がもう一つある。ドゴォォォン、と辺りに爆音が響く。ラギシスの顔面右下が燃え上がっていた。

「くぅぅぅぅ！マリア、育ての親でもある私に歯向かうかぁっ！！」
「今更親面しないで。もうあんたには怨みしかないんだから！いっけー、チューリップ！！」

これがもう一つの要因、マリアの参戦だ。座り込んで泣いていたところにランスとシィルが現れ、座標の問題から使用できないマレスケを置いて加勢に来ていたのだ。離れた位置からチューリップでルークとランスを援護する。最早優勢なのはラギシスではない。ラギシス自身もそれは判っているようで、徐々に焦り始める。

「無限の魔力を持つこの私が貴様らごときに！こうなれば、もう一度黒色破壊光線でまとめて吹き飛ばしてくれる！！」
「ぐおっ、一斉に触手が集まってきやがった！」
「させるか、真空斬！」
「いっけー、チューリップ！」

魔法詠唱を阻止しようとルークとマリアがラギシスの顔面を狙う。その攻撃はラギシスに直撃するが、呪文詠唱は止まらない。多少の

妨害で集中力を欠いていた先ほどまでと違い、ここへ来てラギシスも全力でこちらを殺しに掛かる。

「ちっ、まずいぞ！」
「ランス、俺が行く。マリア、援護を頼む！」
「あ、はい！了解です！」

ルークが触手の中を縫って全力でラギシスに向かっていく。全ての攻撃を捌くのは追いつかないため、道を阻むもののみ斬って捨てる。その分細かい触手からダメージを受けるがルークは構わず進む。あれを放たれれば詰みだ。後先を考えているときではない。ランスではなくルークが向かったのはラギシスまでの距離がランスよりもルークの方が近かったことと、範囲は狭いが直撃時の威力だけならランスアタックよりも真滅斬の方が上だからだ。ラギシス目前まで迫ったルークの前に一層巨大な触手が立ちはだかる。が、その触手はチューリップの砲撃で燃え上がる。

「いい援護射撃だ、マリア！お前のチューリップは戦闘の歴史を変えるかもしれないな！」
「あったりまえでしょ！私のチューリップは世界に羽ばたくんだから！いけー、ルークさん！」

崩れ落ちていく巨大な触手を足場にし、ルークは駆け上がっていく。そして、ラギシスの顔面めがけて飛び上がった。

「篤胤さんとアスマーゼさんの仇だ！くらえ、真滅剣！！」
「馬鹿め、掛かったな！私を小者と馬鹿にした報いだ！！」

ラギシスがそう言った瞬間、ルークとラギシスの間に魔法結界が発動する。物理攻撃を遮断する結界だ。これでもうラギシスに剣は

届かない。そうして無防備になったルークを魔法で吹き飛ばす算段であった。これが他の戦士であったなら、この作戦は成功していただろう。だが、目の前に対峙した男が悪かった。ルークの剣は結界を打ち破り、ラギシスの顔面右部を真っ二つに斬り裂いた。

「ぐぎゃぁぁぁぁ！！なぜだ、なぜ結界が…」

「運が悪かったな！良い手だったが、俺にだけは悪手だ！！」

「ルーク、いけるわ！離れて！！」

後ろから志津香が叫ぶ。遂に魔法の準備が整ったらしい。触手と戦っていたランスがその声を聞いてその場から離れる。ルークも横に飛び、ラギシスと志津香の直線上を空けようとするが、ラギシスの最後の意地か、その体を触手が掴む。

「ぐっ…」

「あ、馬鹿！何捕まってるんだ！！」

「ふはははは、このまま黒色破壊光線で吹き飛ばしてやろう！！」

ラギシスの顔面目の前で捕らえられたルーク。左手は自由に動くが、剣を持つ右手が触手に捕まっているため、斬って逃げることが出来ない。このままではルークを巻き込んでしまうため志津香が魔法を撃てないでいる。一方ラギシスは、先ほどまで詠唱していた黒色破壊光線の準備に取りかかる。最早逃げる手段はない、勝ちを確信したラギシスだったが、その巨大な目玉が鋭利な刃物で潰される。

「ぎゃぁぁぁ！ど、何処に武器を隠し持っていた！！」

ルークが左手に持っていたのは、かなみから受け取ったくない。懐に隠し持っていたそれでラギシスの目を潰し、触手が緩んだ隙に横っ飛びする。

「撃て、志津香！！決着はお前の手で付けろ！！！」
「白色破壊光線！！！！」

志津香の両手から、強力な光の光線が放たれる。強力な魔力を帯びたその光線は、一直線にラギシスに向かっていく。

「くそがぁぁぁぁ！その程度の魔力、私の黒色破壊光線で…！？」

黒色破壊光線で迎撃しようとしたラギシスだったが、放とうとした瞬間、体が崩れ始める。自分の体内で魔力が暴走しているのを感じる。

「ば、馬鹿な！無限の魔力と生命力を得るのではなかったのか。まさか…ラガールめ、この私を謀ったな！！おのれぇぇぇぇっ！！！」

ラギシスの言うようにフィールの指輪は欠陥品であった。四つ身につければ強大な魔力を手に入れるが、一定のキャパシティを越えたとき暴走をしてしまうのだ。だからこそ、ラガールは簡単にこの指輪を手放した。更にラギシスは知らなかったが、志津香が填めていた指輪だけ魔力の装填が足りていないのだ。外すときの呪いを回避していたため、平常時に吸い出す微量の魔力しか溜まっていなかった。これでは到底４０人分に届いていない。欠陥品の指輪に未完成の儀式。その二つの影響でラギシスの体が崩壊を始めたのだ。再生力を維持できなくなったラギシスの体を白色破壊光線が飲み込んでいく。

「こ、こんなはずでは…弟子に二度も殺されるというのか…お、おのれぇぇぇ！私は小者などではない！私が、私こそが最強のまほ…」

ラギシスは最後の言葉すら言い切れないまま、白色破壊光線と指輪の暴走によって塵となって消えた。丁度雨が止み、晴れ間が差し込む。

「勝った…のよね。やった！ラギシスを倒したわ！！」
「がははは、俺様の敵ではなかったな！」
「やりましたね、ランス様！」
「ランスさん、ルークさん、シィルさん、協力してくれて本当にありがとう…」
「あれ？おねえちゃん、ラギシスは？」
「ミル、良かった、目を覚ましたか。安心しな、全部終わったよ！俺たちの勝ちだ！」

その場にいたものが全員、歓喜に打ち震える。そんな中、座り込んで下を向いている志津香にルークは近寄っていく。

「お父様…お母様…やったよ…」
「…お疲れ様」

ルークが志津香の肩に手を乗せる。志津香もそれを振り払うことなく、ルークと話を続ける。

「そっちもお疲れ。正直、助かったわ。……ありがとうね」
「必要ないさ。この復讐は一蓮托生だろう？」
「…そうね。それに、まだ終わっていない」
「ああ、ラギシスは所詮協力者。本命が…ラガールが残っている。だが…」
「だが、なに？」
「今日くらいは素直に喜ぼうじゃないか」

そう言って、ルークは全員でわいわいと喜び合うランスたちの方を指さす。それを見た志津香が少しだけ微笑む。

「…そうね、賛成だわ」

その笑顔を、ルークはジッと見つめる。見られていることに気がついた志津香は訝しげにルークに尋ねる。

「……何よ？」

「いや、昨日笑っているのを見たときも思ったが、笑顔だと一層アスマーゼさんと似ていると思ってな」

亡き母に似ていると言われ、少し嬉しくなる志津香であったが、ふと疑問を抱く。昨日見たときも思ったってどういうことだ。私はルークの前で笑ったことがあっただろうか、と。思考を巡らせて辿り着いたのは、昨晩酔っ払って爆笑していたという失態であった。全力でルークの足を踏みつける志津香。

「ぐぁっ…け、怪我人になんてことを……」

「忘れないと死ぬって言ったでしょ？」

その時、消滅したラギシスが立っていた場所から煙が立ち上る。全員が一斉にそちらを見るが、そこにいたのは全裸の女の子たちだった。

「おお、美女がいっぱいではないか。君たちは何者だ？」

「というか、なんで裸なんですか！？何か着てください！」

「私たちはフィールの指輪に閉じ込められていた４０人の女の子たちの魔力です。今はこうして元の持ち主の体を元に実体化しています。解放していただき、本当にありがとうございます」

「なるほどな、魔力に服も何もあったもんじゃないってことか。彼女たちは元の持ち主の体に戻るのか？」
「いいえ、一度離れた魔力が戻ることはないわ。それに、もう戻るべき宿主が死んでいる子もいるでしょうしね」
ルークの疑問に志津香が答える。魔力が実体化した彼女たちもそれに頷き、その上でこちらに提案をしてきた。
「なので、私たちが消え去る前に何か一つだけ、あなたたちの願いを叶えたいと思うのですが」
「なんだと？」
「４０人分の魔力です。かなりのことが叶えられますよ。自分だけの国？世界の王？最強の体？巨万の富？はたまた不老不死？そんなことでも今の私たちなら可能ですよ。ただ、皆様併せてお一つですが」
思いもかけない規模の大きい提案に、全員がざわつく。ただし叶えられる願いはたった一つ。
「……私、チューリップの「却下だ！」…ちょっと！せめて最後まで聞いてよ！」
「ランスが振り向くくらいバインボインにして貰えないかな…」
「んー、いきなり言われると浮かばないもんだな。ま、それだけ俺は充実してるって事かもしれないけどな」
「カスタムの町の復興資金をいただけないかしら…いや、それよりも復興自体をして貰った方が…」
「あの…ランス様とずっと一緒に…いえ、なんでもないです…」
「ラガールの居場所を…いえ、もう一度時空転移魔法を…」
「こら、それは駄目だって言っただろ」

口々に自分の願いを呟く一行。そのとき、マリアに突っ込んだ以外ほとんど黙っていたランスが動く。

「がーはっはっは！そんなもん聞くまでもなかろう！これだけの美女がよりどりみどり！俺様の願いは…」

「あ、馬鹿！」

「ランス、抜け駆けは…」

「ハーレムだぁぁ！４１Ｐだぁぁぁ！！」

そう言って素早く全裸になったランスは少女たちに飛びかかり、行為を始めてしまう。

「ちょっ…ま、待って。今のナシ！」

「申し訳ありません。既に行為に及んでしまっているので願いは確定してしまいました」

「ら、ランスの馬鹿ぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「あーん、ランス。私も混ぜてー！」

「やれやれ。ま、あいつらしいな。どれ、せっかくだし俺も混ざってくるか」

「ランスさん…流石にその願いは…」

「ランス様…」

「あいつ、やっぱ殺した方が世のためなんじゃない？」

「人の身には過ぎたものだ。あんまりでかい願いを頼んだらバチが当たるってもんさ」

「それでもこの願いはないでしょうが！」

ランスの暴挙に呆れる面々。そんな中、ルークはあることに気がつく。そういえば４０人分の魔力が実体化したとか言っていた。見回すと、確かにマリアとラン、そして成長時のミルの姿をした全裸の魔力体がいる。どうやら本当らしい。そしてその奥、吸われたの

は微量の魔力であったが、一応４０人目とみなされたらしく、全裸の志津香の魔力体が立っていた。

「あ、見つけた」
「っ！見てんじゃないわよ！！！」

志津香の目つぶしがルークに炸裂する。ルークのうめき声と、ランスの笑い声が森に響くのだった。

第３０話　英雄は遅れてやってくる（後書き）

［人物］

フィールの指輪の少女たち

　フィールの指輪に閉じ込められていた魔力体が実体化したもの。正確には人間ではない。リーダー格の少女の名前はセシル。ランスと乱交をした後、消滅する。

［技］

回復の雨

　光の雨を降らせて傷を癒す中級神魔法。神魔法の中ではヒーリングと並んで重宝される魔法。

白色破壊光線

　白い光球から光の束が光線となって敵を飲み込む最上級魔法。黒色破壊光線には一歩及ぶが、一握りの天才にしか使うことの出来ない最強クラスの魔法である。

［装備品］

ドラゴン・スレイヤー

　ランが装備していた剣。ドラゴン族に大ダメージを与えられるとされているが、そもそもドラゴン族と戦う機会なんてほぼないため、効果は役に立たない。それ以外は普通の剣である。

［アイテム］

元気の薬

ミリの薬屋で売っている回復薬。効果は世色癌より上だが、小型の瓶に入った液体のため道具袋の場所を取り、世色癌ほど気軽には持ち歩けない。

第３１話　再び太陽の下で

ー カスタムの町　工事現場 ー

事件が解決し、ルークとランスがカスタムの町を去ってから数日が経っていた。ラギシスが死んだことにより何の懸念もなくなった町には、元の平和が戻りつつある。今は少しでも早く町を復興しようと、住人全員が協力し合っている。

「うん、このペースなら当初の予定の一年じゃなくて、半年くらいで移住が完了できそうね」

「はい、これもマリアさんのお陰です。そろそろ昼の休憩時間ですのでこちらは任せて休んできてください。今日は単純作業が主ですので長めに行って貰って構いませんよ」

「じゃあ、お言葉に甘えてちょっと長めに貰いますね。それじゃあ後はお願いします」

地下から抜け出し、外で町再建の陣頭指揮を執るのはマリア。頭にヘルメットを被り、設計書を睨みながら指示を出していた。若いマリアが指揮を執ることに異論を挟む者は誰もいない。マリアの指示が的確なことも理由の一つだが、今カスタムは町が新しくなるにあたって若い者たちへの世代交代をしつつあったのだ。

ー カスタムの町　町長の家 ー

「お父様、こういった場合はどのように指示を出せば…」

「うむ、これは役所に先に許可を得る必要があるな」

町長の家では、チサが前町長である実父ガイゼルから町長の仕事を教わっていた。数日前、前町長ガイゼルが引退を表明。新しくチサがカスタムの町長になっていた。

「お父様…やはり私なんかよりも町長に向いた人がいらしたのでは？ランさんとか…」

「いや、私の仕事を一番近くで見てきたお前だ。これ以上の適任はいない。ランさんも確かに優秀だが、まだ贖罪の気持ちが強い彼女にこれ以上の重荷は背負わせられないさ」

娘可愛さでの指名ではなく、しっかりと考えての後任であった。住人もチサの優秀さは理解していたため、反発はなかった。

「でも、どうしてお父様はいきなり引退してしまったのですか？」

「うむ…ルーク殿やランス殿を見て感じてはいたのだが…これから時代が欲しているのは若い力だ。事件後に町の防衛軍を設立するべきだと私に進言し、その細部まで練られた構想を持ってきたお前を見て決心したのだよ」

「あれはマリアさんや志津香さんに協力していただいて…」

「うむ、町長一人で全てが出来ると思っていたらそれは思い上がりだ。だからこそ彼女たちと協力し合って新しい町を造っていって欲しいんだ。そのためには若者同士の方がいいのだよ。頼んだぞ、チサ！」

「…はい！お父様のご期待に添えるよう、精一杯頑張りますね！」

―カスタムの町　薬屋―

「はい、お薬１０ＧＯＬＤね。ミルが塗ってあげようか？」
「ありがとう、ミルちゃん。店のお手伝いできて偉いねー」
「えへへ」

ヨークス姉妹が営む薬屋ではミルが一人店番をしていた。町の人に迷惑をかけてしまったことへの贖罪と、少しでも姉の役に立ちたいという思いから、９才にも関わらずミルはよく働いていた。その頑張る姿を見ている町の人々、特に年配者からミルは可愛がられていた。カラーン、と店の扉が開く。役所に行っていたミリが戻ってきたのだ。

「あ、おねえちゃんお帰りなさい」
「ただいま、ミル。しっかり店番出来たか？」
「うん、おねえちゃんも防衛軍の話し合い終わった？」
「まあな。有事の際の実戦部隊指揮を任されちまった。それと、薬屋があるから不定期にだが訓練も見てやることになった。やれやれ、柄じゃないんだが…」

カスタムの町でも屈指の剣の使い手であるミリは、ランと共に有事の際は最前線で戦うこととなった。それだけならいいのだが、どうも人の上に立つというのは苦手らしく、ポリポリと頭を掻いた。

「頑張ってね、おねえちゃん」
「ま、やるだけやってみるかね…ゴホッ、ゴホッ…」
「あ、また咳してる。風邪だったらゆっくりしてなきゃ駄目だよ！」
「なに、大したことないさ。それよりも薬の配達のお使いに行ってきてくれないか？」
「はーい。無理しちゃ駄目だよ、おねえちゃん」

配達の荷物を持って元気よく店を飛び出していくミル。その妹の背中を見送りながら、ミリはまた咳き込んでいた。

「ゴホッ、ゴホッ…うーん、あんま体調良くないな。一度ちゃんと見て貰った方がいいかもしれないな。今度セルのところにでも寄ってみるか…」

ーカスタムの町　酒場ー

「いらっしゃい。あら、珍しいですね、真知子さんがウチに寄るなんて」

「ふふ、たまにはね。あら?でも満員みたいね。やっぱりお昼時は混むのね」

「あ、真知子さーん。私のテーブル余裕あるんで一緒に食べませんか?」

「じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとう、トマトさん」

誘いに応じ、真知子はトマトと同じテーブル席に着く。エレナにへんでろぱを注文し、既に食事をしているトマトとしばし談笑する。

「トマトさん、防衛軍に立候補したんですって?」

「そうなんですかー?」

「ふふ、貴方のことでしょう。その疑問系で話すキャラ付け、防衛軍として有事の際は場を混乱させるだけだから、今のうちに止めておいた方が良いわよ」

「でも私特徴ないんで、こうでもしないと印象に残らない気が…」

「ミミックをペットにしている時点で十分特徴的よ、あなたは。で、どうして防衛軍に立候補したの?」

「えへへ、冒険者になるのが私の夢なんです。なので、防衛軍で鍛えていただいて、いつか冒険に出たいなーと思っているんですよ」
「ふふ、素敵な夢ね。それと、私も防衛軍に入ることになったからよろしくね」
「え？そうなんですかー？」
「前線ではなく、後ろで戦略を練る方だけどね。私のコンピュータが役に立つからってお願いって、マリアさんに誘われたの」
「はい、へんでろぽお待たせ！」

エレナが出来たてのへんでろぽを持ってくる。少し店が空いてきたようで、エレナがそのまま真知子とトマトの話に合流する。

「そういえば今日子さんは帰ってきたの？」
「まだよ。全く、バード君に失恋したくらいでしょうがない子ね。それより聞いたわよ。エレナさん、初恋の人が見つかって付き合っているんですって？おめでとう」
「あ、そうなんですかー。おめでとうございますー。」
「ありがとう、二人とも。偶然酒場に寄った人がそうだったの。今もうラブラブなんです」
「ふふ、先を越されちゃったわね」

へんでろぽを食べながら意味深に笑う真知子。彼女の態度にエレナがピンと来る。

「あ、もしかして真知子さんも好きな人がいるのかしら？ひょっとして、この間カスタムを救ってくれた…」
「あ、わかりました！ランスさんですねー！」
「ふふ、残念ハズレ。もう一人の方よ。完全な片思いだけどね」
「おお、ルークさんか！というか、トマトさんはどうしてランスさんだと思ったのよ」

確かにランスもある種の魅力はあるが、普通に考えればルークの方である可能性が高いのに、なぜランスだと思ったのか疑問に思うエレナ。食後のお茶を飲みながらトマトがボソッと呟く。

「だって…そうじゃないと私と一緒になっちゃいますし…」

「へ？」

「あらあら、ライバルになっちゃったわね。他にも多そうだけれども」

―カスタムの町　役所―

「くしゅんっ！」

「あら？風邪ですか？」

役所ではランがくしゃみをしていた。風邪ではないのでどこかで噂話でもされているのだろう。今は町の復興のために、リーザスからなんとか好条件で再建費用を借り入れられるよう頑張っていた。しかし、ルークに以前話したとおり、資金の借り入れは難航していた。

「ランさん、やっぱりリーザスからお金を借りるのは難しそうですか？」

「うん…こちらの望む金額だと中々条件が厳しくて…あんな条件飲んでしまったら、カスタムはリーザス領になってしまうのも同然なの…」

「難しいですね…ゼスの方からは借りられないんですか？」

「それも厳しいのよ…せっかくみんなが頑張ってくれているのに…

お金がないんじゃ…」

その時、役所の扉が盛大に開かれる。見れば慌てた様子で役所職員の亮子が立っていた。

「ラ、ランさん！大変です！！リーザスから書状が届いたんですが、費用の援助をして貰えるそうです！！」

「えっ！？一体どうして！？」

ランが亮子の持ってきた書状を見る。中には亮子の言うように、多少の利子はあるもののそれ以外はほぼ無条件で資金の提供をしてくれると書いてあり、リア王女の署名も付いていた。驚くほどの好条件である。だが、つい先日までこちらの足下を見た条件を出してきていたのに、いったい、と疑問に思うランだったが、ふとその書状とは別にもう一枚封筒があることに気がついた。

「あ、そちらの手紙はランさん宛だったんで読んでいません。そちらもリーザスからです」

確かにエレノア・ラン宛と書いてある。封を開け、中の手紙を読むラン。中にはほんの少しの言葉しか書いていなかったが、それを読み終えたランの目からは、自然と涙が零れていた。

「ど、どうしたの、ランさん！」

「いえ、大丈夫です。……ありがとう、ルークさん」

ハラリ、と机の上に落ちた手紙を亮子が見る。そこにはこう書かれていた。

ールークと約束したから資金提供してあげる。ルークに感謝しておきなさい。　リーザス国王女　リア・パラパラ・リーザス一

ーリーザス国　王女の間ー

「よろしかったのですか、リア様？」
「ん？どうしたの、マリス？」

昼食に好物のレアステーキを食べているリアに質問を投げかけるマリス。今この部屋にはリアとマリスとかなみしかいない。となればそれ相応の密談だろう。

「リア様の指示通りカスタムに資金提供をすることにはなりましたが、本当にあのような条件で…」
「条件っていうのはルークのも含んでってことよね？」

コクリ、と頷くマリス。思い出すのはカスタムを訪れた日のこと。酒場の二階でルークとリアの間で結ばれた密約。それはカスタムに資金援助をする代わりに、ルークが有事の際には他国よりもリーザスに優先して協力するというだけのものだった。

「リーザスに兵として来るのならまだしも、一冒険者でしかないルーク様が有事の際に協力したところでたかがしれています。それもあのような曖昧な約束では……」
「ああ、いいのよ、それで。そういう面には期待していないから」
「え、そうだったんですか？…あっ、失礼しました」

リアの返答が予想外だったかなみは思わず声を上げてしまう。主君の話に割って入ってしまう形になったため、すぐに謝罪をする。

「ふふ、かなみはルークに来て欲しいものね」
「……いえ、そういう訳では…」
「それで、期待していないというのは？」

マリアの問いに、スッと政治家の顔つきになるリア。

「元々カスタムとは大した条件を結べるとは思っていなかったわ。あっちの担当のランとかいう女が結構曲者だったしね。だから最終的には適当な条件で折り合いを付けるつもりだったの。領地にしても反乱を起こしそうな町だったし、それ以外で絞り上げても復興中の町じゃ大して旨みもないしね」
「それならば、恩を売る形にしておくと…」
「そういうこと。ルークに聞いたところ、優秀な技師がいて今後伸びる可能性がある町だとか言っていたしね。まぁ、これはそんなに信用していないけど」
「なるほど。そのように元々適当なところで資金を出すつもりだったのに、ルーク様からわざわざ要請があったと」
「ラッキーだったわ。こちらとしては殆どノーリスクでルークにも恩を売れるんだからね」
「ですが、あの条件は少し緩いのでは？」
「本当ならもっと良い条件にしたかったんだけど、中々にあっちも狸だったからね。とりあえず恩を売る形にだけしておいたの。まっ、先行投資ね」
「一冒険者のルーク様に、恩を売るだけの価値があると……？」

最後のステーキ片を頬張りながら、リアが薄ら笑いを浮かべながら断言する。

「あるわ。ダーリンほどではないけどね」
「どうしてそのようにお考えで？」

「勘」
「……なるほど。ですが、私もその勘には同意しておきます」
「じゃあ、話はこれで終わりね。かなみ、食後のワインを持ってきて」
「リア様、午後の職務がありますので、ワインは……」
「えー、ステーキ後のワインはド・ハニーワって決めてるのにー」
「珍しく昼からステーキなんて食べるからですよ」

この時点で有事の際にはリーザスに協力するという約束に何の期待もしていないリア。しかし、これより六ヶ月後、彼女はこの条件を結んでいた幸運に感謝することになる。ＬＰ０００２年４月、歴史に残る戦争、リーザス解放戦争の時に。

―アイスの町　キースギルド―

「がははは、おら、さっさと金を払え！」

ランスはカスタムの町の事件の解決料を貰いにキースギルドを訪れていた。後ろにはシィルが控えている。キースが耳を掻きながらイヤそうな声で答える。

「うるせーな。ほら、これが今回の解決料だ。あっちで色付けてくれたみたいで、ランスとルークにそれぞれ５００００ＧＯＬＤずつだとよ。ルークはもう受け取っていっちまったぜ」
「カスタムの町も復興で大変ですのに…ガイゼルさんに感謝しないといけませんね、ランス様」
「がはは。まあ俺様の活躍を考えれば当然だな！」
「キースさん、ルークさんはもう次の仕事に？」

「いや、仕事は受けてない。だけどゼスの知り合いに会いに行くって言って、もう町にはいないぞ」
「やれやれ、忙しない奴だ。帰るぞシィル。これでしばらく仕事はせんぞ！」
「はい、ランス様！」
「あっ、ちょっと待て、ランス！」

そう言って金を受け取り部屋を出て行こうとするランスだが、キースに呼び止められる。

「なんだ？下らん用事だったら殺すぞ」
「いや…ルークには聞きそびれちまったんだが…お前ら、一緒に仕事をしたのか？」
「まあ、そうだ。俺様の下僕として使ってやったわ！がはは！」
「以前の誘拐事件の時にも一緒に協力して解決したんですよ」
「……そうか、いやなんでもない。悪かったな、変なこと聞いて」
「ふん、下らん用事だったが、金も入って気分が良いから許してやろう。がははは！」
「あ、待ってください、ランス様！」

そう言い残し、部屋を出て行くランスの背中を見送った後、椅子に深く座り込んだキースが一人呟いていた。

「……まさか、あいつらがな。……ルークは知っているのか？」

葉巻に火を付ける。思い出すのはかつてのこと。ルークとランス、その二人の過去を思い出しながら煙を吐いた。

「これも運命なのかね……」

―カスタムの町　志津香の部屋―

「ほら、起きて志津香！」
「ん？ああ、マリア。おはよう……」
「おはようって…もう昼過ぎよ、全く。」

昼の休憩を長めに貰ったマリアは、志津香の部屋を覗きに来ていた。そこには寝ぼけ眼の親友がいた。どうやらこの時間まで寝ていたらしい。

「昨日ちょっと遅くまで調べ物しててね……」
「もう。3時からランと防衛軍のことで話し合いがあるんでしょ」
「んー…明日じゃ駄目かな？」
「駄目に決まってるでしょ。ほらほら、起きた、起きた！」
「あんた年々おばさんくさくなっていくわね」
「もう！怒るわよ！」

志津香を布団から無理矢理引っぺがす。観念して起き出した志津香は、マリアが持ってきたお弁当を一緒に取ることにする。

「おいもの塩、きいてないわ。もう少し濃い方がいいな」
「だめよ、体に悪い。志津香、放っておくと気分次第で何も食べなかったりするんだから」
「別にいいじゃない」
「もう…お料理作ったら、志津香の方が上手なのに…」
「気が乗らなきゃ作る気にならないのよね…」
「で、作るのは栄養バランス考えてない自分の好物だけなんだもん」

文句を言い合う二人だが、それも親友だからこそだろう。マリアが数日前の事を思い出しながら話題を変える。

「色々あったね…」
「…そうね」
「本当に、ランスとルークさんがいなかったらどうなっていたか」
「ま、感謝はしてるわ。一応ね」
「私たちを助けてくれた。ラギシスも倒した。町に太陽を取り戻してくれた。…ランスがしょっちゅう自分のことを英雄だって言ってるけど、ランスとルークさん、本当に英雄だったりして」
「……少なくともランスは違うでしょ。ごちそうさま」

そう言って弁当箱を片付け始める志津香。そんな親友に、マリアはしたり顔で尋ねる。

「あら？じゃあルークさんは英雄かもって思ってるってこと？」
「……言葉のあやよ。…なにその顔、ふん！」
「い、いたふぃ…はなひて…」

なんだかむかつく顔をしていた親友の頬を引っ張る志津香。最初こそ真剣な顔をしていたが、段々と笑いが堪えられなくなる。

「ふふ、おかしな顔してるわよ、マリア」
「もう。…あ、そろそろ休憩終わるから行くね。志津香もちゃんと役所にいくのよ！」
「はい、はい」

志津香の家を出たマリアは工事現場に向かって歩き出す。親友のことを思いながら、素直じゃないんだから、と思っていた。マリアは知っている。机の中にぺぺさんが渡してくれた集合写真を志津香

が大事に仕舞っていることを。あまりそういうのには無頓着で、昔カスタムの人たちで撮った写真なんかは適当にほん投げてあったのに、なぜその写真は大事に取ってあるのか。そんなの理由は一つしかない。カスタムの人以外で大事な人が写っているのだ、とマリアは考えていた。

「さて、この写真どう処分しようかしらね」

マリアは知らない。集合写真を仕舞っている場所よりも更に奥、わざわざ魔法で結界までした封筒の中に入っているもう一枚の写真を。ペペがルークに渡す前にネガを処分したので、既にこの世に一枚しか存在しない写真。ルークと、ルークに酔っ払って抱きつく志津香のツーショット写真。処分したいのであればさっさと炎の矢ででも燃やしてしまえばいいのに、なぜか未だに処分を先送りにしている。その真意は志津香しかしらない。

「うわっ、眩しい。やっぱり太陽って良いわね！」

地下から外へ戻ったマリアは、太陽の明るさに目を眩ませながらも、嬉しそうにしていた。みんなで協力して町に取り戻した太陽。その太陽の下、午後の仕事に一層気合いを入れるマリアだった。

その後、カスタムの町は諸国も目を見張るほどの速さで復興を遂げただけでなく、大陸随一の技術を持った都市としてその名を轟かせる。それらを成し遂げたのは、前町長ガイゼルの見越したとおり、新世代の若者たちであった。

第３１話　再び太陽の下で（後書き）

［料理／食材］

ド・ハニーワ

リアが好んで飲むワイン。食後、特にステーキの後は必ずこのワインを飲む。

［都市］

カスタムの町

自由都市。一度地下に沈んでしまったが、その後驚くべき速さで実に見事な復興を遂げる。近年ではその高い技術力から諸国の注目を集めている。

第３２話　炎の色男

ＬＰ０００１　１１月
―ゼス　サバサバ―

ゼス北部に位置し、キナニ砂漠に面した都市、サバサバ。その位置関係からゼスの田舎とも呼ばれているが、町を歩いていた一人の男が呟く。

「これで田舎ならアイスは何世代も前の町だな…」

そう呟いたのはルーク。立ち並ぶ様々な店の数、洋服屋だけでここまで何件見たことか。飲食店も多い。小さな町では酒場しか食事場所がないところもあるというのに。ふう、とため息を付きながら、待ち合わせ場所であるオープンカフェを目指す。ルークはとある人物と会うためこの町に来たのだ。目的地のカフェが見えてくると、外に置いてあるテーブル席から赤い髪の男が手を振ってくる。

「おう、ここだ、ここだ！」
「待たせちまったかな？」
「なーに、俺も今来たところさ。…こういうセリフは女の子だけに使いたいもんなんだがね」
「相変わらずだな、サイアス」

軽口を叩き合いながら席に着くルーク。目の前の男の名前はサイアス・クラウン。ゼスの軍に所属する魔法使いである。ルークとはもう１０年以上の付き合いになる。

「聞いたぞ、四将軍に抜擢されたってな。兵になってからたった一年でそこまでいくとはな…」
「国王が変わってから実力主義に変わってきているからな。ま、俺の実力なら当然の抜擢ってとこだ」

一月前、サイアスは炎の魔法団団長に抜擢され、四将軍となっていた。魔法兵になってから一年での異例の出世である。サイアスが軍に入ったのは２４才の時。これはかなり遅い年齢である。というのもクラウン家はゼスでも高貴な家柄で、軍に入るのを周りがよしとせず、妨害工作をされていたのだ。国王が変わり、制度が変わってようやく軍に入ることが出来たサイアスは、その頭角をメキメキと現したのだ。

「ふ、ただの学生だったお前がね。感慨深いものがあるよ」
「同い年なのに感慨深くなってんじゃねーよ」

サイアスがルークと出会ったのは１２年前の学生時代、その日はギルド仕事で学校に何人かの冒険者がやってきていた。近くに巣を作ってしまったモンスターを何とかして欲しいという依頼であったが、突如そのモンスターが学校を襲ったのだ。学生であったサイアスも駆り出され、モンスターの対処に当たる。冒険者は大して役に立たず、ほとんどの教師も実戦経験はほとんど無いらしく、狼狽えてばかりであった。まともに戦えていたのはサイアスと臨時講師として偶然居合わせた雷帝カバッハーン、そして自分と同い年くらいの冒険者の三人だけであった。それが、ルーク。この事件を期に互いに興味を持ち合い、有事の際には互いに協力し合う関係となる。

「ご注文のぴんくうにゅーん、お待たせしました」
「お、ありがとう」
「この寒いのにそんなにキンキンに冷やしたのを飲むのか」

「いいんだよ。普段から炎ばっかり使ってるから、体を冷やさないとな」
「……」
「……お前は何飲む？」
「……そうだな、エスプレッソのダブルで」
「……」
「だとさ。持ってきてくれるか」
「かしこまりました」

店に来たばかりのルークに注文を聞こうともしない店員。サイアスが気を利かせて注文を頼んでくれる。

「……悪いな」
「なに、もう慣れたさ。……だが、この国は相変わらずか？」
「まあな。3年前、新国王にガンジー様が即位してから色々と変わっては来ているが…膿がでかすぎる」
「親戚もそうだっけか」
「金融長官のズルキな。ま、わかりやすい膿だ。が、でかすぎて取り除けない」
「難儀なもんだな。それにしても、サバサバがゼスの田舎ってのは誰が呼び出したんだ？」
「田舎さ。呼び出した奴らの言うところの、ゼスの都市の中ではな」
「……なるほど、そういうことか」

これこそがゼスに古くから蔓延る思想、魔法使い絶対主義。魔法使いにあらずば人にあらずという考えで、魔法を使えない者は2級市民とされ奴隷のような扱いを受けることになる。こういった2級市民の暮らす町も多くあるのだが、サバサバを田舎と言い出した連中はそういった市民が暮らす町を、町として認めていないのだろう。

「で、俺を呼び出したのはどういった要件だ？」
「二つ頼みがあってな。小さい方から片付けるか。一人写真家を紹介するから、実力を見て貰えるよう便宜を図って貰いたい」
「珍しいな、そんな頼み事をしてくるなんて」
「なに、実力が伴わなければ仕事を回す必要はない。あくまで機会を与えて欲しいんだ」
「了解、そのくらいならおやすいご用だ。名前は？」
「ペペ・ウィジーマ。これが連絡先だ」
「女か！？なんだ、なんだ。遂にお前にも春が来たのか？」

大げさに身を乗り出してくるサイアス。それを片手で制止するルーク。

「違う、違う。最近受けた仕事で知り合っただけさ。色々あって、交換条件で受けちまったんだ」
「なんだ、つまらん。お前はもっとがっつかなきゃ駄目だ」
「お前ががっつきすぎなんだよ」
「エスプレッソお待たせしました」

注文していたエスプレッソが持ってこられる。サイアスの注文は目の前に置いていたのに、ルークの注文はテーブルの端に置いて店員はさっさと立ち去ってしまう。ゼスに来るたびにこういった仕打ちを受け気味なので、もう慣れたものだ。エスプレッソを目の前に寄せ、一口飲んだところでサイアスが話を続けた。

「で、二つ目の要件は？」
「……人を捜している。名前はラガール。中年の男魔法使いだ」
「ラガール…二年前に四天王に就任した奴と名前が一緒だな」
「本当か！？」
「が、そいつは中年の男じゃない。若い女だ。名前はナギ・ス・ラ

ガール」
「……そいつに近親者はいるか？」
「さあな。いないってことはないだろうが、そもそもナギ自身、ほとんど公の場に姿を現さないからな。お陰で口説けやしない」
「……相手は四天王。先走りすぎるのも危険か…もし人違いなら取り返しがつかんしな…」
「…訳ありか？必要なら情報を集めるが？」

サイアスの目が若干真剣味を増す。普段の軽い印象とは違う、真面目な表情。ルークの様子から、ペペの件とは違って重要な件だと察したらしい。流石は四将軍と言ったところか。

「こちらとしてはありがたいが…ばれたらお前も危ないんじゃないのか？」
「なに、危なくなったらナギを口説こうと思ってたから調べてましたって言えば、俺なら逃げられるさ。だが、さっきも言ったように中々公の場に出てこない相手なんでな、時間は掛かると思うぞ」
「いや、どれだけ時間が掛かっても構わない。手がかりもない状況だからな、わずかな情報でも欲しいんだ。スマン、恩に着る」
「なに、いいってことよ。その代わりと言っちゃあなんだが、この後仕事を手伝ってくれないか？」
「仕事？」
「最近、キナニ砂漠に不気味な塔が突如として現れたんみたいでな。その塔から新月の日に盗賊団が出てきて、近くの町から少女を攫っているらしい。その調査を千鶴子様から頼まれたんだ」
「なるほど、それで待ち合わせ場所をキナニ砂漠に近いサバサバにしたのか。いいぜ、丁度抱えていた仕事も終わったところだしな」
「そういうこと。話が早くて助かるよ」

そう言って、残っていたぴんくうにゅーんを飲み干すサイアス。

依頼を受けたルークだが、気になるところがありサイアスに尋ねる。

「ゼスの軍は動かないのか？」

「被害を受けてるのが自由都市なんでな。軍を大々的に動かすと周りを刺激しちまうのさ。で、少数精鋭って事で俺が頼まれたわけ。一応冒険者を何人か雇うのは許可されてるんだが、あまり多くても邪魔なんでな。安心しな、依頼料はしっかりゼスから払われるからよ」

「こっちの頼みも聞いて貰ったんだし、別にいいんだがな…」

「相変わらずか。前から言ってるが、お前は金に無頓着すぎる。いつか痛い目見るぞ」

「こればっかりは性分でな…一応心に留めておくよ」

「その言葉聞き飽きたぞ……」

ルークの相変わらずな態度に呆れるサイアス。そんなものかね、と思いながらルークもエスプレッソを飲み干す。

「ってことは、俺とお前の二人だけか？」

「いや、もう一人上層部曰く有望な若手が一緒さ。ま、ガチガチな人物だがな。お、来たみたいだ」

サイアスが誰かを捜している様子の少女に向かって手を上げ合図をする。どうやら気を利かせてルークとの話が終わりそうな頃合いを見計らって、待ち合わせ時間をずらしていたらしい。出来る男である。手を上げているサイアスに気がついた少女がこちらに寄ってくる。髪の色は茶、ショートヘアーで、左右を黄色いリボンで止めている。隣に二体の指揮ウォール・ガイを連れている。

「ゼス治安部隊副隊長、キューティ・バンド。ここに。お待たせしてしまって申し訳ありません、サイアス様。今回の抜擢に深く感謝

すると共に、粉骨砕身…」
「堅いのはいいさ。ま、よろしく頼むよ」

そう言って長くなりそうなキューティの話を切るサイアス。サイアスに敬礼をした後、ルークの方に侮蔑の視線を送るキューティ。そのままサイアスに進言する。

「サイアス様。このような魔法使いでもない冒険者がおらずとも、私が前線もこなせますので大丈夫です！」
「なるほど、ガチガチだ」
「だろ？」
「？」

先ほどのサイアスの言葉を思い出して失笑するルーク。サイアスもそれに答え、何のことだか判っていないキューティは不思議そうにサイアスを見ていた。

「じゃ、そろそろ行くか。お姉さん、領収書を頂けるかな。宛名は王者の塔で」
「まめだな」
「サイアス様の行動は当然のことです。これだから定職と呼べるものについていない下品な冒険者は……」

後ろでぶつぶつ言っているキューティ。完全に魔法使い絶対主義思想に染まっている。あまり気にしないことにしたルークは、領収書を受け取って席を立つサイアスの後を歩きながら、今回の仕事について問いを投げる。

「で、盗賊団の情報とかはあるのか？」
「名前がグリーンスコルピオンってことしか判っていない。ま、町

に着いたら情報を貰える手はずになっているから、そこで聞くことにしよう」
「突如として現れた不気味な塔…やはり魔法使いの仕業でしょうか？」
キューティがルークに見向きもせずサイアスに問いかける。
「さて、どうだろうな。……そういえば、その塔だが町の人たちはおかしな呼び方をしているらしいぞ」
「おかしな呼び方？」
「ああ、どうも形状が人の形に似てるとかで付いた呼び名らしい。その名も……」
先を歩いていたサイアスが、振り返りルークとキューティを見る。
フッ、と少しだけ笑い、町の人たちが呼んでいる塔の通称を口にした。
「砂漠のガーディアン」

第３２話　炎の色男（後書き）

［人物］

サイアス・クラウン
ＬＶ　３４／４１
技能　魔法ＬＶ２

　ゼス四将軍の一人にして炎の魔法団団長。高貴な家柄であるため、周りには軍に入ることを反対されたが、自らの意志で入隊。わずか一年で四将軍へと上り詰めた実力者。趣味はナンパという軽い性格ではあるが、公私はきっちりとしており、目上に対する礼儀もなっているため、上層部からの覚えも良い。ルークとは古い付き合いである。

キューティ・バンド
ＬＶ　１７／２８
技能　魔法ＬＶ１

　ゼス治安部隊副隊長。若いながらに優秀な人材で、今回の抜擢は隊長への昇進も見越し、実戦経験を積ませる意味合いが強い。幼い頃からそう教えられてきたため、ガチガチの魔法使い絶対主義思想家。攻撃魔法よりも支援魔法を得意としている。その真面目一辺倒な性格から友人、恋人はおらず、話し相手は側に控えた二体の指揮ウォール・ガイだけ。

［モンスター］

ウォール・ガイ

　ゼス国内で魔法詠唱の間の壁として重宝される生成生物。壁としてだけでなく、雷での攻撃も可能。指揮ウォール・ガイは隊長、副隊長といった一部のものにしか与えられない名誉あるウォール・ガ

イである。

［料理／食材］

ぴんくうにゅーん

キンキンに冷やすと最高に美味いとされる飲み物。ランスも好んで飲む一品。

エスプレッソ

世界的に飲まれているが、特にゼスのイタリア周辺でよく飲まれているコーヒー。ゼス四天王、山田千鶴子の好物でもある。

［その他］

ゼス四天王

ゼス王国において国王の次に地位の高い四人のこと。国政と四天王の塔の管理が主な役割。かつては名門貴族による世襲制であったが、近年、実力主義制に改められた。

ゼス四将軍

ゼスが誇る魔法部隊、炎軍、氷軍、雷軍、光軍を束ねる四人の団長のこと。政治絡みの四天王と違い、以前より実力主義で選抜されていた。

第３３話　グリーンスコルピオン

―ジウの町―

キナニ砂漠南東部に位置する町、ジウ。本来なら専用の砂漠案内人無しに入るのは自殺行為と呼ばれているキナニ砂漠だが、ジウの町は砂漠の中でも本当に端に位置しているため、比較的簡単に立ち寄ることが出来るのだ。これが砂漠の中央に位置するシャングリラに行こうともなれば話は別だが。

「依頼のあった町がジウで良かったよ。シャングリラだったらこの依頼、断っているところだったよ」
「無責任な。これだから魔法使いじゃな…」
「ああ、俺もだ。ん？何か言ったか、キューティ？」
「……いえ、何も言っておりません、サイアス様」

ルークに苦言を呈そうとしたキューティであったが、予想外にもサイアスがルークに乗ったため、何も言えず押し黙る。これから一緒に依頼を受ける仲間だ、少しは仲良くなっておこうとルークがキューティに話しかける。

「ところで、俺は君を何と呼べばいいかな？」
「別に呼ばなくて結構です」
「キューティ、ルークはこれから一緒に戦う仲間だ。仲良くやれ」
「……はっ、サイアス様がそう言うのであれば、善処します。私のことは好きに呼んでください」
「ではキューティと呼ばせて貰おうかな。うん、良い名前だ」
「……馴れ馴れしくしないでください」

「さて、町の案内人が来ているはずなんだが…」

ジウの町に入ってすぐの広場に辿り着いたサイアスは、辺りを見回す。すると、執事服を着た老人がこちらに近寄ってくる。

「貴方様がサイアス様で？」
「ああ、案内人ですかな？」
「ようこそわざわざお越しくださいました。主人がお待ちですので、どうぞこちらへ」

そう言ってこちらの手荷物を受け取り、前を歩き出す老執事。ルークたちはその後を付いて歩きながら、ジウの町を見回す。発展した町とは呼べないが、町のそこらかしこに行商人がおり、活気に溢れた町だ。

「文化の遅れた国ですね」
「そうか？活気に溢れる良い町じゃないか」
「我がゼスは貴方の住んでいるところとは生活水準が違いますからね」
「まあ、生活水準は高いのは事実だな。ごく一部の話だが」

ふふん、とルークに自慢げに語るキューティの横からサイアスが一言加える。確かに魔法使いが生活する場所だけを見れば、資源豊かなリーザスよりもその生活水準はかなり上、世界でも屈指と言っていいものだろう。その反面、２級市民の生活は悲惨極まりないものである。

「サイアス様まで…より優秀な者が良い暮らしをするのは当然のことではないですか」
「優秀ねぇ……」

「魔法が使えるか使えないか。ただそれだけのことなんだがね…」
「それが大事なのです！魔法使いこそが人の上に立つべきなのです！！」

そう熱弁するキューティの前、道案内をしている老執事の表情が若干影を落とす。ジウの町はゼスに近いこともあり、こういった思想の輩が町を訪れることも多い。彼のように年を重ねている者は、それだけ嫌な思い出も多いのだろう。ルークは老人に聞こえないように、キューティに小声で忠告する。

「キューティ、そういった思想を持つのは良いが、ゼス国内を出たらもう少し自重すべきだ。前の老人がいい顔をしていない。それに、変な恨みを買って自分の身を危険にさらすかもしれないぞ…」
「……余計なお世話です」
「さあ、着きました」

町の中央部に位置する一際大きな屋敷。ここにこの町を治めている長であり、今回の調査に当たって協力を申し出てくれた人がいる。執事に誘われるまま、屋敷に入っていく三人。長の部屋の前までやってきて扉を開けると、部屋の中には褐色の肌をした黒髪の美女がいた。

「ようこそ、サイアス様とお連れ様。私がこの町の長を務めます、アニーでございます」
「ほう、貴方の様な美人が長まで勤めるとは。才色兼備であらせられるようですね」
「まぁ、お上手ですこと」

顔を見るや否やいきなり口説き文句を言う辺り、相変わらずだなと内心呆れるルーク。まあ、いきなりやらせろとか言いそうな人物

も知ってはいるが。

「貴女を口説くのはまた後ほど、仕事が終わってからにするとして、グリーンスコルピオンについてお聞かせ願ってもよろしいかな？」

「三ヶ月前、突如として現れたグリーンスコルピオンという盗賊団によって、この三ヶ月で２０人もの少女が連れ去られました」

「２０人も！？何も対策はしなかったのですか？」

同じ女性であるキューティが食いつく。アニーは目を閉じ、首を横に振りながら答えた。

「この町は元々殆ど武力を持っていません。なんとか寄せ集めの戦力で自警団を作り立ち向かいもしましたが、まるで歯が立たず、既に何人もの死傷者が出ています。グリーンスコルピオンについて判っているのは、首領が女性であるということだけです…」

「女性か…男なら少女を攫う理由も判るというものだが…」

想像してしまったのか、キューティの顔が曇る。攫われた少女を心配している様子だ。魔法使い至上主義ではあるが、その辺りの線引きは出来ている辺りまだまともな方である。思想が酷いのになると、魔法使いでない者が死のうが生きようがどうでもいいとか言い始める有様だからだ。

「サイアス、最近少女が裏で頻繁に売られているという情報は？」

「一応少女が攫われているって事は聞いていたから来る前に調べてきたが、特にはなかったな」

「となると別の理由か……」

ふとルークの頭に志津香の顔が浮かぶ。そういえばカスタムの町の事件と同じ展開だ。

「少女の生気を使って魔力を溜めている、という可能性は？」
「なるほど、禁呪か！有り得るぞ！」
「そんな手段があるんですか！？」

サイアスが同意し、キューティが驚く。どうやら志津香も使っていたこの方法は、その非人道的な行いから魔法使いの間では禁呪とされており、ゼス国内で行おうものなら厳しく罰せられるものらしい。若い世代では知らない者も多いらしく、キューティが驚くのも無理はない。

「となると女首領、あるいはそれ以外に魔法使いが関わっている可能性が高いな」
「そのような悪党、魔法使いの恥です！必ず捕まえましょう！！」

ぐっと拳を握りしめて宣言するキューティ。その様子を見ながら、ルークはキューティの評価を改めていた。なんだ、全然良い子じゃないか、と。すると、長であるアニーが物騒な事を言い出す。

「女首領だけは、捕らえるのではなく必ず殺してください！」
「……必ず殺せとは物騒ですね。あまり美人が口にしていい言葉ではない。訳を聞かせて貰ってもよろしいかな？」
「人々を多数殺害した首謀者として、どうしても許しておくことが出来ないのです！塔に攫われた少女たちも心配です。お願いします！」

アニーの瞳は真剣そのもの。しかし、若干ではあるが思い詰めたような表情をしているのをルークは見逃さなかった。町の長として、どうしてもその女首領が許せないのだろうか。あるいは…と、ルークが考える。サイアスも若干思うところがあったようだが、キュー

ティが力強く答える。

「任せてください。こちらのサイアス様はゼスでも屈指の炎の魔法使い、そのような田舎盗賊、パパパッと打ちのめしてみましょう！」

「ま、大船に乗ったつもりでいてください、アニーさん」

―ジウの町　酒場―

アニーとの会合を終え、情報収集も兼ねて酒場で夕食を取る三人。入る前はこんな下品な場所で、とか文句を言っていたキューティだが、こういった場所にはあまり訪れたことがないようで、興味深げにチラチラと店の中を見回している。

「君を注文したいって言ったら卵の黄身が出てきたんだが…」

「下らない注文しているからだ。キューティももっとなじって良いんだぞ」

「いえ、私などが四将軍のサイアス様を非難するなど…」

「つまり、四将軍じゃなかったらとっくに非難の嵐って事か？」

「い、いえ、サイアス様。そういうわけではっ！」

真剣に焦り出すキューティを見て、同時に吹き出すルークとサイアス。からかわれていたことが判り、キューティが顔を真っ赤にする。

「か、からかったんですか！？」

「ま、これで多少肩の力は抜けたかな？盗賊団と対峙する前からそれじゃあ疲れちまうぞ」

「……お気遣いありがとうございます」

納得いかない様子ではあるが、サイアスに強く言うことが出来ず、渋々引き下がりながらキッとルークの方を睨むキューティ。そこに酒場のマスターであるハニーがやってくる。

「お待たせしました。私、この酒場のマスターの飯田橋と申します。お聞きしたいことと言うのは？」

「グリーンスコルピオンについて、知っていることを聞かせて貰いたい」

「盗賊団ですか。私が知っていることと言えば、新月の夜にどこからともなく現れ、少女を攫っていくということしか…初めは皆感謝したのですが…」

「感謝？盗賊団にか？」

「はい。グリーンスコルピオンが町を初めて襲った際は少女の誘拐はせず、やったことは町のならず者を血祭りに上げたことだけでした。町の者は皆そいつらに困っていたので…魔法使いだからといって町の人たちに乱暴に振る舞うそいつらに…」

「……魔法使い、だったんですか…」

キューティが尋ねる。体ごとコクリと頷く飯田橋ハニー。先ほどから立て続けに魔法使いの悪行を聞いて、少し気分が落ちている様子のキューティ。最初の事件の話に少し思うところがあったルークは、飯田橋に問いかける。

「……そのならず者、町の長であるアニーさんと何か問題を起こした事はあるかな？」

「ちょっと、何を訳の分からない事を…「知っていらしたのですか！！」…！？」

キューティがルークに苦言を呈そうとするが、飯田橋の大声に遮

られる。

「いや、ただの勘さ。…何があったんだ？」
「あまり言いふらして良いような事ではないのでここだけの話にしてください。……アニー様は以前、そのならず者たちに白昼堂々乱暴をされた事があります。その場に居合わせた町の者たちも、ならず者を恐れ見て見ぬ振りを…」
「そんな…酷い…」
「…確かに言いふらすようなことではないな。言いづらいことを言わせてしまってすまない。さ、そろそろ店を出て宿に向かおうか」

そう言って領収書を貰い、店を出て行くサイアス。ルークとキューティもその後に続く。月が出ていない夜の中、宿を目指し歩く三人。

「ま、ある程度は見えてきたかな」
「そうだな…気が重いな」
「どういうことですか？お二人は事件の真相が分かったんですか？」

ルークとサイアスが話している内容が気に掛かり、キューティが尋ねてくる。

「ああ、女の生気を集めて何をする気かまではわからないが、女首領の目星は付いた」
「本当ですか！？」
「十中八九、アニーさんだ」

―ジウの町　アニーの屋敷―

「……もう間もなくね、今晩にでも全てが終わるわ…全てがね…」

長であるアニーが小さく呟き、夜更けに屋敷を出て行こうとする。が、屋敷の入り口に気配を感じ、様子を窺う。見れば先ほど屋敷を訪れたキューティとかいう小娘が屋敷の中を窺うように立っていた。アニーは屋敷の中に引き返し、使用人用の出入り口である裏口から屋敷を抜け出すことにする。

「はぁ…見張りまでして、本当にアニーさんが犯人なのかしら…あなたたちもそう思うでしょ？」

そう呟くのはアニーの屋敷を見張っているキューティ。隣に控える二体の指揮ウォール・ガイに話しかける。こくこく、と頷く指揮ウォール・ガイに満足そうにするキューティ。端から見れば中々に悲しい光景だ。先ほどまでの会話を思い出す。

「アニーさんが!?そんな!?まさか、ならず者を殺したからというだけの根拠で？」

「いや、それだけじゃない。砂漠の塔の事はまだ内密でな。その塔から盗賊団が出てきているっていうのはゼスが掴んだ情報で、まだあまり知られていないんだ。先ほどの飯田橋マスターも、どこからともなく盗賊団が現れてと言っていたしな」

「アニーさんも突如として現れたと言っていましたが？」

「ああ、初めの内はな。だが、こうも言った。塔に攫われた少女たちが心配だとな」

ルークがアニーとの会話を思い出しながらキューティに説明をす

る。それに続けるようにサイアスも補足をする。

「それに、多少だが残留魔力を感じた。アニーさんは魔法使いでもないのに…だ」

「俺は血の臭いも微かにだが感じたな」

そう平然と話すルークとサイアス。キューティは驚く。これら全て、自分は全く気がつけなかったからだ。

「という訳で、アニーさんの屋敷を見張っていてくれるかな。危険な事はしなくていい」

「え？私がですか？サイアス様たちはどうされるんですか？」

ピ、と空を指さすサイアス。上を見上げるキューティ。雲一つ無い夜空だが、月が出ていないため暗い。あ、と気がつくキューティ。

「盗賊団が来るのは新月の夜だからな、ルークと一緒にそちらに備えておくさ」

こうしてキューティはアニーの屋敷を見張っているのである。

「見張りなら、私じゃなくてあのルークとかいう冒険者にやらせればいいのに…そう思うでしょ？」

指揮ウォール・ガイにそう問いかけるキューティだったが、問いかけながらルークのことを考える。あの冒険者は、魔法使いでも無いのに自分の知らないような禁呪の事を知っていた。それがキューティには悔しかった。でも実力ならあんな冒険者には負けない。私は治安部隊副隊長なのだ。そう強く思っていたとき、カンカンと町

の鐘が鳴る。見れば、町の入り口の方から火の手が上がっている。キューティは急いでアニーの屋敷に入る。執事が驚いていたが、緊急事態だからと言ってアニーの部屋まで走る。扉を開けると中はもぬけの殻であった。執事も屋敷の中を捜してくれたようだが、姿が見えなかったようだ。

「逃げられた…やっぱりアニーさんが…？」

―ジウの町　広場―

町の広場まで鳥のような生物に乗った盗賊団が侵入する。先頭を走るのは女首領。その後ろを何十人もの盗賊がついてきていた。しかし、おかしい。夜更けとはいえここまで誰とも出会わない。こんなことは初めてだ。

「人がいないのが不思議かな？女首領さん？」

「！？」

広場には二人の男が立っていた。黒髪の剣士と赤髪の魔法使い。ルークとサイアスだ。

「町の人には避難して貰った。そう何度も決まって新月の夜に襲ってたんじゃ、遅かれ早かれそうなったさ」

「サイアス、顔が判るか？」

「いや、覆面でよく判らないな…スタイルはよく似ているが…」

女首領は顔を覆面で隠しており、一目ではアニーかどうかの判別が付けられなかった。盗賊団が跨がっている鳥のような生物に注目

するルーク。

「初めて見るな…あれはなんだ？」
「俺も初めて見る。ＪＡＰＡＮに生息するてばさきとかいうのによく似ているが…少し違うな」
「サイアス様！申し訳ありません、アニーさんの姿が見えなくなりました！！」

広場にキューティが走ってやってくる。その報告を受け、サイアスが女首領に向かって問いかける。

「ってことは、アニーさんで間違いないかな？」
「……やれ！」

サイアスの言葉に応えず、後ろに控えた盗賊たちに指示を出す女首領。てばさきのような生物に乗った甲冑の盗賊団が猛スピードで三人に迫る。

「聞く耳もたずか…」
「それじゃ、いっちょ暴れさせて貰うとするかね。火爆破！」

サイアスが魔法を放つ。五人もの盗賊がまとめて炎に包まれる。左右から炎を避けた盗賊が迫ってくるが、すぐさま飛んできた斬撃を受け、鳥のような生物から振り落とされる。

「真空斬」
「相変わらず使い勝手良いな、その技。火爆破！」
「真空斬！まあな、重宝しているよ。真空斬！」

軽口を叩き合いながらも次々と盗賊を撃破していく二人。二人に

襲いかかるのは得策ではないと思った盗賊の一人が、キューティの方に迫っていった。

「!?雷の矢!」

慌てて雷の矢を放つが、盗賊が乗っている生物は意外にすばしっこく、避けられてしまう。そのままキューティに襲いかかる盗賊。迫ってきた剣に思わず目を瞑るキューティだが、その剣がキューティに届くことはなかった。恐る恐る目を開くと、ルークがキューティを左手に抱きかかえ、盗賊を剣で斬り伏せていた。

「うぉ、ウォール・ガイがいるから助けて貰わなくても平気です!」
「それは悪いことをしたかな?」
「……一応、ありがとう……ございます」

キューティの礼を受けたルークだが、直接斬った際に違和感を覚え、今斬ったばかりの盗賊を見る。先ほどまでは確かに人間に見えたが、今は中身のない鎧だけになっていた。

「なんだこれは、サイアス!?」
「ああ、こちらも今確認した。こいつら人間じゃない、魔法で操られた鎧だ!」
「そんな、こんなに精巧なものが可能なんですか!?」

キューティが叫ぶのも無理はない。ガーディアンを作り出す魔法使いも多く存在するが、ここまで人間と同じ姿をし、命令にも忠実な知恵をもったものを作り出すなど聞いたことがない。サイアスが呟く。

「……こんなもの、人間業ではないぞ」

ルークも気を引き締め直す。どうやら、想像以上に厄介な依頼のようだ。三人は気がつかなかった。鎧の裏に小さく書かれた文字に。メイクドラマ3号と書かれたその文字は、一際不穏な空気を纏っていた。

第３３話　グリーンスコルピオン（後書き）

［人物］

飯田橋

　ジウの町で酒場を営むマスターハニー。酒場を営むハニーは意外に多く、カスタムの町の酒場のマスターもハニーである。

［その他］

グリーンスコルピオン

　三ヶ月前に突如として現れた砂漠の盗賊。女首領以外は人間ではなく、魔法で動く鎧である。とても人間業とは思えない魔法である。

第３４話　ただ、助けたい

ーシウの町　広場ー

「真空斬！」
「火爆破！」

ルークとサイアスの声が響き、広場に鎧の山が出来る。数十人はいた盗賊団の内、既に半数以上が敗れ、中身のない鎧へと姿を変えていた。

「流石サイアス様だわ。でも、あの冒険者がこんなに強いなんて…雷の矢！」

範囲攻撃を持たないはずのルークが、サイアスとほぼ同数の盗賊を倒している事実にキューティは驚く。それを隙と見たのか、一人の盗賊が近寄ってくるが、今度は確実に雷の矢で撃退する。

「お見事」
「馬鹿にしないでください。さっきはちょっと油断しただけです！」

ルークの言葉に反論するキューティ。今のキューティの攻撃で盗賊団の数は遂に一桁となっていた。すると、分が悪いと見たのか盗賊団が撤退し始める。

「あ、逃げていきます！」
「追うぞ！塔の場所は判っている」

そう言って、倒した盗賊が乗っていたてばさきのような生物に飛び乗るルークとサイアス。命のない鎧が乗れていただけあり、そう操縦は難しくなさそうだ。サイアスが先に駆けていき、ルークもそれに続こうとするが、ふと見るとキューティがどうしたものかと狼狽えている。

「なんだ、乗れないのか？よっと」

そう言って生物に跨がりながらキューティを抱え上げるルーク。驚いたキューティがじたばたと暴れる。

「は、離してください！」
「ついてこない気か？ほら、しっかりと背中に掴まっていろよ」
「どうして貴方なんかと一緒に乗らなきゃいけないんですか！せめてサイアス様と…」
「時間がないんだ。申し訳ないが俺で我慢してくれ」

そう言って後ろに座ったキューティの抗議を受け付けず。先に行ってしまったサイアスの後を追いかけるルーク。初めのうちこそ抗議を続けていたキューティだが、速度が上がるに連れて口数は減り、今はルークの背中にギュッとしがみついていた。

―砂漠の塔　入り口―

「これが砂漠のガーディアンか…」
「なるほど、あの辺の出っ張りを腕と考えれば、確かに人のような形にも見えるな」

盗賊団の後を追い、三人は砂漠の塔の前まで来ていた。着いたと同時に生物から飛び降りたキューティは、非難するような目でルークを見ていた。それを尻目に、妖しく緑に発光している塔を見上げながらルークとサイアスが話す。塔の形に何か思うところがあったのか、キューティも話に入ってくる。

「人の形というより、なんだかハニーっぽい気がしますが…」
「ん？……なるほど、言われてみれば確かに」

キューティに言われて再度見直してみると、確かに巨大なハニーを岩でコーティングしたような形に見えてくる。

「さて、中に入るか」
「サイアス様。扉には鍵が…」
「ファイヤーレーザー！」

いきなり扉に向かって魔法を放ち、鍵ごと扉を吹き飛ばすサイアス。唐突な行動であったため、固まるキューティ。

「ま、盗賊団のアジトにお行儀良く入る必要もあるまい」
「中は暗いな。気をつけて行くぞ」

そう言って中に入ってくルークとサイアス。キューティも二人の後を追いかけていく。入ってすぐの位置に階段があり、サイアス曰く魔力を上の階から感じるということなのでそれを延々と上っていく。塔の中は暗く、モンスターこそ出てこないが嫌な空気が漂っていた。

「空気が悪いな。歌でも歌うか？」
「はい、サイアス様。では、不肖この私がチューリップの歌でも！」

「なんでその選曲なんだ？…残念だが、歌う必要はなさそうだな」
「そのようだな」

ルークとサイアスの言葉に前を歌おうとしていたのを止め、前を見るキューティ。階段を上りきった先は緑が広がっており、とても塔の中とは思えなかった。その奥にまた別の階段が見える。しかし、その階段の前にはこんにちわの大群と、数体のロンメルが立っていた。

「大した相手じゃないが、数が厄介だな」
「少し時間を稼いでくれれば、俺がまとめて吹き飛ばすが？」
「じゃあそれでいくか。真空斬！」

そう言って呪文を唱えていたロンメルに斬撃を飛ばすルーク。体が真っ二つになり、そのロンメルが崩れ落ちる。しかし、側にいた別のロンメルの詠唱が終わりこちらに魔法を放ってくる。

「ティーゲル」
「ガードはお任せください！ライトくん、ガード！」

キューティの右に控えていた指揮ウォール・ガイがロンメルの放ったティーゲルからサイアスを守る。それと同時に、今度はこんにちわの大群がこちらに進軍を開始した。その様子を見たルークがサイアスに尋ねる。

「寄られると厄介だが、後どれくらいかかりそうだ？なんなら初級魔法で少しずつ減らすか？」
「いや、もう準備は終わった」

そう答えるサイアス。その両腕に赤い魔力を纏っている。放つ前

だというのに、それはまるで綺麗な炎のようであった。

「灰と化せ。業火炎破！」

瞬間、こちらに迫ってきていたこんにちわが業火に包まれる。絶叫が辺りに響き渡るが、それもすぐに止む。後に残ったのはサイアスの言葉通り灰のみであった。同時に、奥に残っていたロンメルも崩れ落ちる。ルークが真空斬で斬り伏せていた。呆然とするキューティ。業火炎破自体は見たことはある。が、これほどまでの威力を目の当たりにするのは初めて。これが四将軍なのか、と。そのキューティにサイアスが声をかける。

「さ、先に進もうか」

「あ、すいません！気を抜いてしまい…」

「ところでキューティ…」

サイアスに深々と頭を下げ、謝罪の言葉を続けようとするキューティの話を遮るルーク。どうも気に掛かる事があるようだ。

「ライトくんって…ウォール・ガイに名前を付けているのか？」

フッと吹き出すサイアス。どうやらサイアスも気がついていたが、気づかないふりをしていてあげたようだ。キューティの顔が真っ赤に染まる。

「べ、別に良いじゃないですか！私の勝手です！！」

―砂漠の塔　最上階通路―

奥にあった階段を上り、最上階まで辿り着いた三人。より魔力を感じる最奥の部屋に向かって狭い通路を歩いている。すると、突然目の前に小さなハニーが大群で現れた。

「プチハニー！こんな狭いところで…」

サイアスがそう言い、ルークとキューティにも緊張が走る。しかし無理もない。ハニー族の中でもプチハニーと呼ばれる小型のハニーは、衝撃を受けると爆発するという厄介な性質を持つ。しかし気に掛かるとことが一つ。普通のプチハニーとは色が違うのだ。

「白いプチハニー…新種か？」

「プチハニーなんかじゃないやい。僕たちはこの城を守るメイクドラマ2号こと、白血球ハニーだ！」

そう言って先頭にいたハニーが飛びかかってくる。ルークはそれを素早く躱し、白血球ハニーが地面に落ちる。すると、ハニーの落ちた場所の石で出来ている通路が溶け始めた。

「こいつら、溶解液を出すのか！」

「かかれー！！」

「ルーク、スマンがハニー相手では戦えるのはお前だけだ。キューティ、援護を頼む」

一斉に飛びかかってくる白血球ハニー。数が多いので真空斬では間に合わない。妃円の剣では溶かされてしまうため、特殊なコーティングのしてある幻獣の剣に変える。先頭の一体を斬り、一応刀身を確認するが溶けていない。そのまま立て続けにハニーを斬っていくルークだが数が多すぎる。上手いこと躱していたルークだが、遂

にその体を一体のハニーが捕らえそうになる。

「レフトくん、ガード！」

「スマン、助かる」

「……この状況、貴方に倒れられたらこちらも危険ですから」

すんでのところでキューティの援護が入る。指揮ウォール・ガイに阻まれた白血球ハニーにウォール・ガイから反撃の電撃が走る。電撃を受けたハニーはそのまま溶けてしまった。

「！？サイアス、こいつら魔法が効くぞ！」

「こちらも確認した。ならばやりようがある。火爆破！」

ルークとほぼ同時に魔法が効くことに気がついたサイアスはすぐに火爆破を放つ。悲鳴を上げながら、白血球ハニーたちはドロドロに溶けていった。

「なんだったんですか、こいつら。ハニーなのに魔法が効くなんて…」

サイアスが溶けてドロドロになった白い液体に少し触れる。溶かされないようにその右手は魔法でガードされている。

「これは…ハニーなんかじゃない。魔力の塊…あの鎧たちとほぼ同じだ」

「つまり、これも人工的に造られたものってことか？」

「そんなことが…可能なんですか…？」

「……わからん。だが、現実にこうして存在している。もしあの鎧も合わせて一人で造り出したとすれば…魔法ＬＶ３相当の実力は必須だな」

「ゼスの歩く災厄と同格か…もしこの塔にいるとすれば、厄介どころの騒ぎじゃないぞ」
「そんな魔力は感じないからいないと思いたいが…さて、鬼が出るか蛇が出るか…」

不穏な空気を感じながら、ルークとサイアスは奥へと歩みを進めていく。キューティも不安になりながら後に付いていく。突如現れた塔、人間業とは思えない生成物。一体何が起こっているというのか。

―砂漠の塔　最深部―

その部屋には誘拐された少女たちがいた。しかし、目を背けたくなるような行為が繰り広げられていた。少女たちは意志を持っているかのように動く三角木馬に乗せられ、生気を吸い取られていたのだ。

「ひ…酷い…」
「…サイアス、キューティ。早く解放するぞ！」
「この城を建てた奴とは仲良くやれそうにないな、俺は」

捕らえられている少女たちを次々と解放していくルークたち。最後の一人を木馬から解放したところで部屋に笑い声が響き渡った。笑い声のした奥の方を見る三人。壁が崩れ、その向こうに部屋中の壁がピンク色で蠢いている、まるで内蔵の中のような部屋が現れる。その一番奥、壁と融合した形で声の発生主はいた。褐色の肌が特徴的な女性、間違いない、アニーだ。

「やはり貴方が犯人か、アニーさん！」
「ふふふ、遅かったわね。もう全ての準備は整ったわ。間もなく復活する、史上最強のアトラスハニーが！」

アニーが叫ぶと同時に城が大きく揺れ始める。外から外壁が崩れ落ちる音が聞こえる。そのまま、ドシン、ドシンと塔が動き始める。まるで歩いているかのような振動だ。

「状況から察するに…この塔自体がそのアトラスハニーって事か？キューティの見る目は正しかったって事か」
「その通りよ！少女たちの生気を使ってこのアトラスハニーは復活したわ。今この塔はジウの町に向かって進んでいるわ。この膨大な魔力でジウの町の奴らを皆殺しにするのよ！！」
「サイアス。お前の見立てでは？」
「……可能だな。これだけ巨大な塔を動かすほどの魔力、攻撃に回せば町一つくらい簡単に消し飛ぶぞ」
「そんな…」
「おっほっほ、これでジウの町も終わりよ…うっ、がぁぁ！！」

まるで人が変わってしまったかのように目を見開いて叫ぶアニー。が、突如苦しみだし、うめき声を上げる。訝しげに状況を見守るルークたちだが、顔を上げたアニーの様子が先ほどまでの気が狂ったようなものと違い、町であったときのものに戻っていたのだ。

「サイアス様、ルーク様！私を殺してください！！」
「殺してって…そんな！？」
「どういうことだ。アニーさん、貴方は一体？」
「こうなれば全てお話しします。私はならず者に乱暴された後、自殺を考え砂漠を歩いていました。すると、突然目の前にこの塔が現れたのです。中に入ると、そこには生気の奪い方や塔の動かし方、

そして、アトラスハニーが町を吹き飛ばすだけの破壊力があることが書いてある紙が置いてありました。それを見た瞬間、私の中にもう一人の人格が生まれてしまったのです。乱暴される私を見捨てた町の人を皆殺しにしたい、もう一人の私が！」

「二重人格って訳か！」

「はい、私は今、壁と融合し塔の中枢神経の一部となっています。私を殺せばアトラスハニーは止まるはずです。お願いします、殺してください！うっ…ああっ！！」

悲痛な叫び声を上げるアニー。アトラスハニーを止めるため、町の人を救うために、アニーを殺さなければならないのだ。決断を迫られるルークたち。すると、またアニーが呻き声を上げ、またもう一つの人格に変わる。

「もう一人の私め、余計な真似を…私の邪魔をする奴は皆殺しよ！行け、メイクドラマ１号！！」

突如、地面がせり上がり水色の巨人が現れる。腕を伸ばしてこちらを攻撃してくる。それを躱すルークとサイアス。躱しがてらサイアスが炎の矢を放つが、ほとんど効いていない様子だった。

「効いてないな。少しばかりショックだね」

「ほほほ、その程度の魔法じゃこのメイクドラマ１号には傷一つ付けられないわよ！」

「キューティ、少女たちから離れるな。ウォール・ガイで守り抜いてくれ！」

「は、はい。サイアス様！」

「もたもたしていると町まで着いてしまうな。早急に決断する必要があるな…」

「アニーさんを…殺す決断ですか…」

キューティの声が悲しいものへと変わる。アニーを殺さなければもっと多くの人が死ぬ。そんなことは頭では理解している。だが、目の前の女性も被害者だ。救い出したい。魔法使いとかそんなものは関係ない。その時、ルークがアニーに向かって問いかける声が聞こえた。

「殺す必要があるのか？貴方の体と壁を融合させているその触手を斬れば、それで十分なんじゃないのか？」

「おほほ、浅はかね。この触手は強力な魔法結界でガードされているわ。決して外すことは出来ないのよ！」

アニーの言葉にルークとサイアスがピクリと反応する。

「さあ、町までもうすぐ着くわ。止めたければ殺してみなさい。そんなことが出来るものならね！まあ、メイクドラマ１号を倒せたらの話だけどね！おほほほほ！！」

勝ち誇ったように笑うアニー。どうすればいいか判らないキューティだったが、サイアスとルークが臨戦態勢に入るのが見える。

「とりあえず、役割は決まったかな。俺はあの巨人をやる」

「俺はアニーさんだな。油断するなよ」

「ふ、任せておけ」

「ちょ、ちょっと待ってください！…殺す気、なんですよね…」

そう問いかけるキューティ。判っている、それしか手段はない。それでも尋ねずにはいられなかった。そんなキューティに、ルークは小さく微笑む。

「……キューティは、どうしたい？」

殺さなければ町は滅びる。ただのわがままだ、そんなことは判っている。それでも、俯きながら声を絞り出す。瞳から涙が零れる。

「助けたい…アニーさんも町の人も…だって、あの人も被害者じゃないですか…こんなの…悲しすぎる…」

助けたい。しかし、自分には何も出来ない。魔法使い、治安部隊副隊長、自分の持つ肩書きは、今この場では何の意味も持たない。不甲斐なさから涙が止められない。その姿を見て、ルークがサイアスに呟く。

「ゼスの膿も偶には見る目があるじゃないか」
「急にどうした？」
「有望だ、確かにな」
「…なるほど、同感だ」
「安心しろ、キューティ」

ルークのその言葉に顔を上げるキューティ。アニーに向き直るその背中が、魔法使いではないルークが、ほんの少しだけ、頼りがいのあるように思えた。

「俺たちに任せろ！」

第３４話　ただ、助けたい（後書き）

［人物］

アニー

ジウの町を治める長。突如砂漠に現れた塔を偶然発見し、中を見て回る内に乱暴された自分を見捨てた町の人への復讐に駆られたもう一人の人格が生まれる。本来は優しく、穏やかな性格。

［モンスター］

ロンメル

聖骸闘将の一種。服は青く、目の部分には横長の切れ込み。聖骸闘将の中では下位に位置する。

プチハニー

オレンジ色の小さなハニー。衝撃を与えると爆発する厄介な相手。死骸は爆薬として利用される。

白血球ハニー

白く小さなハニーで、正確にはハニーではなく何者かによる生成生物。別名メイクドラマ２号。

メイクドラマ１号　（オリ魔物）

水色の巨人。伸縮自在の腕を持ち、並の魔法攻撃ではビクともしない程の高い魔法抵抗を持つ。これも何者かによる生成生物。

［技］

業火炎破

辺り一面を業火が包む中級広域魔法。その威力は火爆破よりも遙かに高い。

ティーゲル

闇の砲弾をぶつける聖魔法。使用してくる闘将によって威力が違う。その威力によってティーゲル2、ティーゲル3と分類分けされて呼ばれる。

［その他］

聖骸闘将

かつて聖魔教団という団体が作り出した戦争兵器。魔法使いの死体を使った人造魔法使いや、魂の入っていない巨大メカが主な兵器である。モンスターではないが、聖魔教団が滅んだ後も命令であった蛮人撲滅命令を守り抜いているため、人類に襲いかかってくる。

第３５話　激闘は遙か遠く

―砂漠の塔　最深部―

アニーに向かって駆け出すルーク。その行く手を壁から飛び出した触手と青い巨人が阻む。触手を避け巨人に斬りかかるが、ほとんどダメージを与えられず、すぐにその傷も再生してしまう。

「やれやれ、この間のラギシスといい、最近こんな相手ばかりだな」

「火爆破！」

サイアスが魔法を放つ。触手はその魔法で燃えたが、すぐに次の触手が壁から伸びてくる。青い巨人の方はまるで効いていない様子だった。

「おほほほほ、無駄だって言ってるでしょ！天下の四将軍様も大したことないわね！」

「おいおい、雷帝が聞いたら文字通り雷が落ちるようなこと言わないでくれるか…」

「どうだ、やれそうか？」

軽口で返すサイアス。巨人の攻撃を後ろに飛んで避けたルークがサイアスに尋ねる。少し値踏みするように巨人を眺め、サイアスが答える。

「あの様子じゃファイヤーレーザーでも駄目そうだな…となると、詠唱まで1分ってとこかな」

「了解だ。それで確実に薙ぎ払えるものとして突っ込むから、失敗

したら化けて出るぞ」
「男の霊なんかお断りだね。そりゃあ失敗できんな」

そう言って再度アニーの方に駆け出すルーク。その行く手を巨人が阻み、繰り出される攻撃を躱しながら剣で斬りつけていく。しかし、先ほどと同じく与えられているダメージはわずかだ。勿論、ルークも時間をかければこの巨人を倒すことは出来る。与えたダメージはわずかずつとはいえ確実に蓄積されているからだ。しかし、今求められているのは時間。急がなければジウの町が消し飛んでしまう。となれば巨人を一撃の下に吹き飛ばすような強力な範囲攻撃が必要なのだ。ルークの真空斬、真滅斬は共に単体攻撃。なればこそこの巨人を倒し、アニーへの道を開くのはサイアスの役目であった。

「さて、馬鹿にされたままなのもあれだし、四将軍の実力を見せてやるかね…」

サイアスの全身が黄色く光り始める。次に放つ魔法の為に全身に集中させた魔力が、ほんの少し漏れ出し、そのように黄色く光って見えているのだ。

「す、凄い…なんて魔力量…」

そう呟くのはキューティ。攻撃魔法が得意でない自分でも、今サイアスが放とうとしている魔法がどれだけ凄いのかは感じ取れる。状況は、ルークが迫ってくる触手や巨人の注意を引きつけ、サイアスが魔法を溜めている。少女たちを守るように後ろに控えているキューティだが、どうやら触手の攻撃はここまで届かないらしい。だとすれば、自分にも出来ることがある。

「ええい、ちょこまかと！四将軍の方から先に殺しなさい！」

単純な思考で動いている巨人の注意を引きつけていたルークだが、アニーが痺れを切らし指示を出す。サイアスの方に向かって巨人の腕が伸びる。真空斬で軌道を変えようとするが、その前に巨人の攻撃がウォール・ガイによって阻まれる。

「キューティか。良い援護だ！」
「私だって…アニーさんを救う手助けをしたいんです！防御付与！」

巨人が更に攻撃を加えようとしていたのを見たキューティは、ウォール・ガイに防御付与の魔法を掛ける。これこそが攻撃魔法をあまり得意としていないキューティを今の地位まで押し上げた真骨頂、付与魔法。警備隊という役職柄、優秀な支援魔法の使い手は非常に重宝されたのだ。巨人の重い一撃を、強化されたウォール・ガイが受けきる。

「ぐ…小娘がっ！！」
「サイアス様。今魔法付与を…」
「いや、必要ない。準備は終わった」

そう言ったサイアスの体は先ほどよりも更に光り輝いていた。先ほどまでと違うのは光っている色が黄色だけでないということ。その両腕が灼熱のように真っ赤に染まっていた。魔法使いでないアニーも、何か感じ取るものがあったのか、焦った様子で巨人に指示を出す。

「殺せ、殺すのよ！！」

その指示を受け、巨人の腕が再度サイアスに向かう。それを見ながら、されど慌てた様子はなく、サイアスはゆっくりと両腕を前に

出し、叫んだ。

「灰すら残すな！ゼットン！！！」

瞬間、サイアスの両腕から炎の塊が放たれ、それを受けた巨人が灼熱の業火に包まれる。奇声を上げながらその巨体が崩れ落ちていく。アニーが驚愕に目を見開く。一撃。あの高い魔法抵抗を持つ巨人がたったの一撃で崩れ落ちたのだ。しかし、直後その目は更に見開かれることになる。崩れ落ちていく巨人の向こうから、若干の残り火を纏ってルークが飛びかかってきたのだ。

「な！？」

サイアスがゼットンを放つと同時に、ルークは巻き込まれない程度に特攻していたのだ。万が一、巨人を一撃で倒せていなかったらその無防備な姿を巨人の前に晒すことになる。そんな特攻が出来たのは、サイアスへの絶対の信頼。触手でガードすることも間に合わず、目の前に剣を振り上げ飛びかかってきているルークにアニーが叫ぶ。

「殺す気かい！本当に！？この哀れな私を！？」

「殺す気など、初めから無い！」

ルークが狙うのはアニーではない。その後ろ、アニーと壁を融合させている触手だ。塔の振動が止まる。アトラスハニーがジウの町の前まで着いたようだった。もう時間がない。サイアスが叫ぶ。それに釣られるように、キューティもルークに向かって叫んだ。

「一撃で決めろ！ルーク！！」

「お願いします！！」

「真滅斬！」

振り下ろされた刃が、触手を覆っている魔法結界に食い込む。瞬間、ルークは感じる。この結界、先日のラギシスのものよりも質が上だということを。だが、決して破れないレベルではない。

「うぉぉぉぉぉっ！」

ルークの叫びと共に、その刃は結界を破り、アニーと壁を繋いでいた触手を一刀両断に斬り裂いた。壁と離され、倒れていくアニーを左腕で抱える。

「ありがとうございます…ルーク様」

アニーが気を失う寸前、そう呟いた。最後にまた人格が元に戻っていたのだろう。その礼を聞きながら、ルークは言いしれぬ不安を感じていた。あのフィールの指輪で強化されていたラギシスよりも格上の結界。この結界を張った術者は一体何者なのか、と。こうして、グリーンスコルピオンは壊滅したのだった。

―数日後　砂漠の塔―

事件解決より数日、今はジウの町の前にそびえ立っているアトラスハニーこと砂漠の塔の調査にゼスから魔法使いたちが派遣されていた。その場にはルーク、サイアス、キューティの三人も居合わせていた。事件時の状況の説明も終わり、調査を続ける魔法使いたちを横目にルークはサイアスと話をしていた。

「で、アニーさんはどうなる？」
「ゼスで裁かれることになるな。一応口利きはしておくが…重い罪にはなるだろうな」
「盗賊団を組織してならず者殺害に少女の誘拐、その上町一つ消そうとしたんだからな…」
「それに…アニーさんは魔法使いじゃないからな。ゼスだとそれが大きなマイナスだ」

重苦しい空気の中、キューティが話に入ってくる。

「それでも何とか極刑は免れそうなんですよ。町の人たちが請願書を出してきたんです」
「町の人たちが？町ごと吹き飛ばされそうになったのにか？」

キューティの言葉に驚くルーク。いくら慕われていた長だったとはいえ、自分たちを殺そうとした相手を庇うとは。

「アニーさんがならず者に襲われたとき、見て見ぬ振りをしたことをずっと悔やんでいたみたいです。執事さんと酒場の飯田橋さんが中心になって、署名を集めたんです」
「そうか…これがアニーさんにとって少しでも救いになればいいがな…」
「そうですね。文化が遅れているなんて、酷いことを言ってしまいましたが…いい人たちです」

そう言うキューティに、サイアスがルークに聞こえない程度のボリュームで問いかける。

「町の人たちをそうやって褒めるなんて、魔法使い至上主義は止めたのかな？」

「今でも魔法使いが一番優秀だとは思っています！ただ…」

キューティもルークに聞こえない程度に小さく返事をしながら、ルークの方を見る。魔法使いではないのに、自分に出来なかったアニー救出を成し遂げた冒険者。

「魔法使い以外の人たちも…決して劣っている訳じゃないと考えを改めただけです」

上層部に言われ、渋々連れて行った形になったが、無駄ではなかったなと静かに笑うサイアス。そのサイアスに、少し遠くを指差しながらルークが話しかけてくる。

「ところで…厳重にバリケードを張っているあの白い球はなんだ？」

ルークが指差す先には巨大な水晶のような球が置いてあった。その周りには厳重なバリケードが張ってある。

「ああ、あれがアトラスハニーを動かしていた魔力の塊だ。あれに触っちまうとアトラスハニーから魔法が発射されちまうんだ。せっかく食い止めたのに最後の最後にそれじゃ、馬鹿らしいだろ」

「確かに…そんなことになったら苦労が水の泡だな」

ルークの脳裏に一瞬がはは と笑う冒険者の顔が浮かぶ。なぜかあいつならそんな形で苦労を水の泡にしてしまいそうな気がしたからだ。その時、階段から一人の魔法使いが上がってきた。水色の髪に、特徴的な杖を持った女魔法使い。

「アニス・沢渡。ズバッと参上です！」

やってきたのはゼスが誇るへっぽこ最強魔法使い、アニス。サイアスが魔法ＬＶ３相当のものが使われていると報告したため、こうして派遣されていたのだ。因みに、千鶴子は最後まで反対していた。来るや否や辺りを見回し、おおー、と感嘆の声を上げる。そしてその目が水晶を捕らえた。

「むむっ！あからさまに怪しげなものが。どれ、ぺたぺた」

「「「あ！」」」

この日、ジウの町の一角が吹き飛んだ。居住区でなかったため、奇跡的にも人的被害は０。調査中の事故として内密に処理されたが、ゼスは復興支援金として多額の援助をジウの町にすることになる。

ーゼス　王者の塔ー

「…その、以上が今回の報告になります」

部下であるマクシミリアンの報告を受け、額に青筋を立てるのはこの塔の管理者でもある四天王、山田千鶴子。自らの弟子であるアニスの失態に頭を痛めていた。

「だから派遣には反対だったのに…ご苦労。もう行って良いわ」

「は！それと、もう一つご報告が…」

「何？今度はアトラスハニーそのものでも吹き飛ばしたのかしら？」

自嘲気味に言う千鶴子。現在の四天王でまともに仕事をしているのは彼女一人。相当疲れが溜まっているようだ。

「パパイア様が今回の事件に興味を持たれ、資料を持って行かれました」
「……パパイアが？」

飛び出したのは意外な名前。四天王、パパイア・サーバー。千鶴子の親友でもあった彼女は、数年前からその性格が一変し、怪しげな研究にのめり込んでいた。それは昨年四天王に就任してからも変わらず、むしろ研究が楽になるからというだけの理由で四天王になったかのようであった。そのパパイアが、資料を持って行った。

「何考えているのよ…パパイア…」

変わり果ててしまった親友を思い、千鶴子は小さく呟く。その問いに答える者は誰もいなかった。

ーゼス　跳躍の塔ー

「やっぱこれすごいわー。この生気を搾り取る装置すっごい良いセンスー」
「ぎゃはははは！これ造った奴も姐さんと一緒で狂ってるぜ！」

跳躍の塔の研究室に二人分の声が響き渡る。部屋の中には四天王、パパイア・サーバー
ただ一人。持ってきた資料を見ながら、その塔の素敵に狂った構造に目を輝かせていた。

「やーん。この壁と融合させるのなんか格好良すぎて濡れちゃうー」
「ケケケケケ！よっ、この淫乱！」

部屋には確かに一人しかいない。それなのに、どこからともなく下品な笑い声が響いていた。

「この壁と融合させる技術と生気の技術合体させて、女の子を壁一杯に貼り付けた部屋とか素敵そうじゃない？名付けて究極の美女の部屋！」

「融合、合体、コンバイーン！」

「ブイ、ブイ、ブイでビクトリー！」

新しい研究材料を見つけたパパイア。部屋からは一晩中笑い声が絶えなかった。

一魔人界　とある屋敷一

「お嬢様！大変です！」

屋敷の廊下をぺたぺたと駆ける不思議な生物。灰色の体に長い胴体。今では希少種となったネコムシの一種と思われる。焦った様子で主人のいる部屋に入っていく。

「何よアレフガルド。今お楽しみ中なんだけど？」

部屋の中は目を背けたくなる惨状。答えたのは黒髪の美しい長身の女性。彼女の股間から生えた白い蛇が、既に意識のない少女の股間から内部に進入し、その体を嬲っていた。アレフガルドと呼ばれた生物に答えた瞬間、嬲っていた少女の腹が裂け、内蔵が飛び散る。

「あ、殺しちゃった。勿体ない…で、何があったの？」

顔に付いた血を拭う女性。口では勿体ないと言いながらも特に気にした様子もなく、アレフガルドに問いかける。

「以前、お嬢様がゼスに建てられたという塔が人間に発見され、機能を停止しました」

「あら？レッドアイに協力して貰ったあの塔？今はあそこゼスじゃなくて砂漠なんだっけ？地下に隠していたはずなのにどうして見つかったのかしら…」

「突如塔が砂漠にせり上がったそうですぞ。原因は不明です」

「せっかくまた人間界に行くことになったら、あの塔で楽しもうと思ってたのに…どこのどいつよ、全く。許せないわ」

「お労しや、お嬢様…」

彼女の名はメディウサ。若い女性を嬲ることを趣味としている女性だ。その正体は人間ではない。人類の敵、魔人。その中でも特に凶悪な思想を持った一人であった。

「あー、なんかドッと気が抜けちゃったわ。寝るから枕よろしく」

「はい、お嬢様。いつも通りこの爺めが膝枕をさせていただきます」

「全く…機能停止させたその人間、もし見つけたら簡単には殺さないわよ」

今ここに新たな因縁が生まれる。しかし、その対象はルークではない。四将軍、サイアス・クラウン。彼はこれより数年後、その命を掛けてメディウサと対峙することになる。その因縁の始まりであったことを、その死闘の凄惨なる結末を、まだ誰も知る由はなかった。

第３５話　激闘は遙か遠く（後書き）

［人物］

山田千鶴子
ＬＶ　４０／５０
技能　魔法ＬＶ２

　ゼス四天王の一人。他の四天王がほとんど仕事をしないため、腐敗した長官連中と一人で渡り合う苦労人。主に情報魔法に長けており、ゼスの未来は彼女の双肩に掛かっていると言っても過言ではない。服のセンスは抜群に悪い。

パパイア・サーバー
ＬＶ　３７／４８
技能　魔法ＬＶ２

　ゼス四天王の一人。元々は真面目な性格で、千鶴子の親友でもあったが、数年前に突如性格が一変。怪しげな研究にのめり込む。

アニス・沢渡
ＬＶ　５４／８８
技能　魔法ＬＶ３

　山田千鶴子の弟子にしてゼスが誇るへっぽこ最強魔法使い。その魔力は国王すらも上回る。一度出撃すれば、敵味方区別無く全滅させてしまうため、味方殺しのアニスという異名で恐れられている。ジウの町の一角を消し飛ばしたため、千鶴子にこっぴどく説教を受ける。町の復旧にも積極的に協力していたが、周りはまた何かやらかすんじゃないかと冷や冷やしていたという。その際、同じく町の復旧に協力していたルークという冒険者と顔見知りになる。

マクシミリアン

ＬＶ　１８／２０
技能　魔法ＬＶ１
　山田千鶴子の忠実な部下。主に政治面で千鶴子を大きくサポートする。魔法使い至上主義にも懐疑的で、腐敗したゼス国内で、千鶴子が信頼し、重用する数少ない人物の一人である。

メディウサ
ＬＶ　１０５／１５２
技能　剣戦闘ＬＶ１　魔法ＬＶ１
　ケイブリス派に属するへびさんの魔人。女性を嬲ることを趣味とする残忍な性格。ルークたちの前に姿を現すのはまだ先のこと。

アレフガルド
ＬＶ　７０／７７
技能　執事ＬＶ３
　ネコムシ出身であるメディウサの使従。彼女のためなら何でもこなすスーパー執事。ケイブリス派リーダーであるケイブリスとの中も良好で、茶飲み友達。

［技］
ゼットン
　一兆度の高熱火炎弾を敵に放つ最上級魔法。炎属性魔法の中では最強に分類されているが、使用できるのは極僅かな者のみである。

防御付与
　仲間の防御力を一時的に上げる支援魔法。非常に使い勝手が良いが、あくまでサポートになってしまうため好んで使う者は少なく、使用者は重宝される。

魔法付与
　仲間の魔法力を一時的に上げる支援魔法。ゼス国内では特に重宝される魔法。

［都市］
ジウの町　（半オリ）
　キナニ砂漠南東部に位置する町。行商人などで活気に溢れている。ＯＶＡではジオの町だが、位置関係がおかしいのでオリジナルの町に変更。

［その他］
四天王の塔
　王者の塔、日曜の塔、弾倉の塔、跳躍の塔の四つの塔。四天王が管理することになっている。その地下にはある秘密が隠されているが、その事実を知る者は少ない。

アトラスハニー
　砂漠に突如現れた塔。正確にはハニーではなく、強力な魔法使いが作り出したものである。魔法ＬＶ３相当の技術が使われている。

ＧＩ０８１５　メディウサダーク　ゼス国内をメディウサが暴れ回る　この際に塔を建設
ＧＩ０８１６　キナニ砂漠が誕生　地面に埋めた塔は発見されず
ＧＩ０９１２　レッドアイダーク　レッドアイが使い魔を駆使して塔を魔改造
ＬＰ０００１　地中より塔が現れる　原因は今のところ不明とされている

第３６話　リーザス陥落

ＬＰ０００２　４月
―リーザス城　深夜―

時刻は既に日が変わる直前、本来であれば一部の護衛兵を残し城は閑散としている時間帯であった。しかし、この日は城の中にはまだ少数ではあるが普段より多くの兵が残っていた。城のとある部屋、そこは一般兵が入ることは許されず、副将以上の地位の者が主に作戦立案などの目的で使用している部屋。そこには七人の男がおり、会話をしていた。いずれも副将以上の地位の者である。

「バレス殿、コルドバ殿。遅くまで付き合って貰い申し訳ありません」
「気にするでない、リック。こういう事も偶にやっておかねば兵の刺激にならん」
「がははは、しかしまた腕を上げたな！」
「（やれやれ、相変わらず将軍たちは甘い。こんなに遅くまで付き合わされるこちらの身にもなって欲しい者だ…）」

リーザス赤の軍将軍のリックが深々と頭を下げる。それに応えたのは黒の軍将軍のバレスと青の軍将軍のコルドバ。この日はリックの発案で赤、黒、青の三軍合同訓練をしていたのだ。勿論全兵という訳ではなく、一部の者たちだけだが。本来もっと早く切り上げる予定であったのだが、三将軍全員がノリノリになってしまい、結局兵たちはこんなに遅くまで付き合わされることになったのだ。心の中で悪態をつくのは青の軍副将キンケード。彼は三将軍と違い、リーザス国を守るという熱意は薄く、仕事として軍務を行っていた。

とはいえ大国の副将、その実力は本物である。後ろで黙々と着替え、帰り支度を進めているのは黒の軍副将のドッヂ、サカナク、ジブルの三人。リーザス全6軍のトップに立っている黒の軍は、他の部隊とは違い特別に副将が三人存在していた。

「しかし…やはりバレス殿のように上手く兵を動かすことが出来ませんね」

「がはは、リックは攻め気が強すぎるからな。率先して最前線に立つ将軍…ま、兵は鼓舞するがな」

「現状維持で良い訳ではないが大きく変える必要もあるまい。儂の部隊とお主の部隊では求められる役割が違うからの」

進撃部隊である赤の軍、防衛部隊である青の軍、それらを統括する黒の軍。ただでさえ兵の損耗が激しい赤の軍であるが、現将軍のリックは将軍になってからまだ日が浅い。バレスのように損耗を抑える戦い方が出来ず、悩んでいた。その悩みを察し、今回の合同訓練をバレスとコルドバは引き受けたのだった。今日の訓練の総括をしながら、そろそろ帰路につこうとしている三将軍。ようやく帰れるとキンケードが安堵するが、突如一人の女性が部屋に駆け込んできた。

「どうした、メナド。そんなに慌てて」

部屋に入ってきたのは赤の軍副将メナド。まだ少女であるがその剣の腕は本物で、若年ながら副将という地位に就いていた。

「ご、ご報告します！ヘルマン軍が突如リーザス城内に現れました！！」

「「「「「「「！？」」」」」」」

あり得ない報告に部屋の中にいた七人全員が驚愕する。北の大国、ヘルマン帝国。鉱物資源は豊富だが気候に恵まれず、民が貧困に喘ぐこの国は、古くからリーザスの豊かな土地を狙い何度となく戦争を繰り広げてきた。しかし、リーザスとヘルマンの国境に高々とそびえるバラオ山脈が大規模な軍事行動を邪魔し、今日までリーザス侵略の野望は達成されていなかった。そう、本来であればヘルマン軍が国境警備隊に気づかれずリーザスにやって来られるはずがないのだ。一体どうやって、しかし今はそんなことを考えている場合ではない。

「現れたのは第3軍。城内部外部共にヘルマン兵で溢れており、その数は数万に及ぶと思われます！」
「第3軍…トーマか。厄介なのが来おったな」
「ですが、負けるわけにはいきませんね！」
「絶対に死守するぞ！朝になれば白の軍と魔法部隊、それに帰っちまった兵たちも集まる。今夜さえ凌げば勝機は俺たちのもんだ！」
「やれやれ…今夜はもう帰れそうにないな…」

将軍たちが速やかに武器を取り、部屋から飛び出していく。報告に来たメナドと黒の軍副将の三人もそれに続き、キンケードがため息を吐きながら、されど武器をしっかりと握りしめ部屋を後にする。こうして戦いが始まった。

―リーザス城　一階―

「はあっ！」

金色の鎧を纏った女戦士の一撃にヘルマン兵が崩れ落ちる。彼女

は親衛隊隊長レイラ。本日の合同訓練には参加していなかったが、国王の警備のため組織されている親衛隊は交代制で常に城に駐在。ヘルマン兵が現れた報告を聞き、真っ先に防衛に駆けつけていたのだ。じわじわと押されてはいるものの、必至にこの階を死守していた。その時、ヘルマン兵の波を押し退け、巨体の男がレイラの前に立った。

「……邪魔だ、人間の女よ」

「悪いけど通すわけにはいかないわよ！はぁっ！」

―リーザス城　東の塔前―

「この俺に向かうとは良い度胸だ、誉めてやるぞ！生かしては帰さんがな、ふんっ！」

「あ、あれがリーザスの青い壁…」

「リーザスの危機なんだ、給料貰った分は働きたまえよ。行け！」

コルドバとキンケードがまだ城に残っていた少数の青の軍を率い、防衛に当たっていた。その圧倒的な防衛力にヘルマン兵が攻めあぐねる。ここの兵たちを率いているオカマ言葉の中年男が金切り声を上げる。

「なにをもたもたやっているの！早くその下品な男を仕留めなさい！」

「がははは、後ろからごちゃごちゃ言ってないで自分で来たらどうだ、ヘンダーソンさんよぉ！」

「ふん、ヘルマン一美しいこのわたしの相手をしようなんて１００年早いわ。行きなさい！」

「美しいってのは、俺の奥さんみたいな人のことを言うんだよ！おらっ！」

―リーザス城　西の塔前―

「冷静に。訓練の成果をここで見せるんじゃ」

こちらではバレスが黒の軍を率い防衛に当たる。目の前に対峙する兵を率いているのは豚のような外見の中年男。側に二人の拳法家が控えている。

「かつての大拳法家が見る影もないな、フレッチャーよ」
「そんなこと言っていられるのも今のうちぶー。ボウ、リョク！お前たちの力を見せてあげなさいぶー！」

―リーザス城　二階―

リーザス城の二階を守るのは、リーザス最強の兵士リックと赤の軍。一階の親衛隊が逃してしまった兵たちを一人残らず斬り伏せていた。二階に上がってきたヘルマン兵は、リックの姿を見た瞬間一人残らず震え上がっていた。世界にその名を轟かす剛の者、リーザスの赤い死神。そのような腰の引けた者たちに遅れを取るリックとメナドではない。が、ここでリックの姿を見ても全く怖じけ付かず、堂々と目の前に対峙する者が現れる。ヘルマン第3軍将軍、トーマ・リプトン。

「トーマ将軍…」
「言葉はいらんぞ、赤い死神。行くぞ！」

トーマがその手に持つのは鎖の付いた巨大なトゲ付きの鉄球。鉄球をリック目がけて飛ばす。それをすんでのところで躱しながら、リックがトーマに斬りつける。素早く鉄球を手元に戻し、それを難なく受けるトーマ。大陸でも屈指の実力者である二人の対決にメナドが入り込む隙はなく、周りのヘルマン兵を倒しながらも、メナドはその戦いに見惚れていた。

リーザス軍は奮闘していた。不意を突かれた形で最初こそ後れを取っていたが、各所に将軍・副将たちが参戦すると状況は膠着。朝まで持つかもしれない、兵たちがそう思い始めていた。その時、リーザス場内に不気味な音色が響き渡る。

「むっ！なんじゃ！？」
「なんだ？この音色は…」
「これは…なん…だ…力が…」

キンケードの体が崩れ落ちる。いや、キンケードだけではない。各所で音を聞いた兵たちが次々と崩れ落ちていった。バレスとコルドバも例に漏れず、片膝を付き頭を抱え、遂にはその体が地に付く。

「……これは、トーマ将軍。一体何を…？」

片膝を付きながら、それでも意識を失うことを拒み、トーマに問いかけるリック。周りの兵たちはメナド含め既に全員が倒れていた。

「……すまんな、死神よ。正々堂々と決着をつけたくはあったが…こちらには、もう時間がない」
「無様だな、赤い死神よ！」

その時、トーマの後ろから三人の男と一人の女性、そしてガーディアンが二体現れる。その中央に立つ男にリックは見覚えがあった。

「パットン皇子…貴方がこの部隊を率いた張本人か…どうやってリーザスに…」
「そうだ、この私がリーザスを陥落させるのだ。どうだ、死神よ。これが魔人の力だ！」

パットンの言葉にリックの目が見開かれる。側に控えていた二人の男と一人の女性を見る。ヘルマン兵とは思えぬ姿。これが、魔人。

「馬鹿なっ…魔人と手を結んだというのか…無謀だ！」
「負け惜しみはそれまでにしてもらおうか。現にノスたちは忠実に私の命令を聞いている。ははは、これでリーザスも終わりだ！」
「トーマ将軍…貴方は本心で…この作戦に賛同しているのですか！？」
「……もう休め、死神よ」
「…無念…リア様…申し訳…」

こうして、リックは遂にその意識を手放す。その奥、事態を見守っていた女忍者が城の階段を駆け上がる。音色に意識を奪われそうにはなったが、奥にいたためその音色は少ししか届かず、気絶するまでには至らなかったのだ。その女忍者、かなみが目指すのは主君が隠れる最上階。

―リーザス城　最上階―

「リア様！ご報告です！」

リアが隠れる最上階の部屋にかなみが飛び込んできた。部屋の中にいるのはリアとマリスのみ。不安そうにするリアの背中をマリスがそっと抱き込んでいる。

「かなみ、下の様子は…」

唇を噛みしめながら、かなみはリアの問いに答える。

「地獄です。ヘルマン軍がここに来るのも時間の問題です」

「大丈夫よ。今この城にはリックもレイラもいる。朝になれば国境警備隊が駆けつけてくれるわ」

「…既にリックさん、レイラさん共に敗れました」

「そんな！レイラが！？」

「リックも…ですか」

「はい。奮戦していたリック将軍ですが、突如城内におかしな音色が鳴り響き、それを聞いた兵たちが次々と倒れていきました。恐らくバレス様やコルドバ様ももう…」

「そんな…」

「それと、この軍を率いているのはパットン皇子です。いえ、率いているのは軍だけではありません…魔人と手を結んでいます！」

かなみの報告にリアとマリスの目が見開かれる。人類の敵であり、自分たちを蹂躙する存在、魔人。それとヘルマンが手を結んだというのだ。

「魔人…ですって…マリス、奴らの狙いは…」
「はい、奴らの目的はカオスで間違いないかと」
「…カオス？」

リアとマリスの話の意味が判らず、かなみが問いかける。その時、リアの様子が変わる。震えが止まり、何かを決断したかのようにその目が鋭くなる。政治家として働いているときとはまた違う、王女としての威厳を持ったその姿にかなみは何故か不安を抱いた。

「……マリス、聖盾を」

言われるままにマリスが部屋に置いてあったリーザス聖盾を持ちリアに手渡す。この部屋に避難する際、何故かリアが持ってきていたのだ。受け取ったリアは、かなみの目の前に歩みを進め、その盾をかなみに手渡す。

「…リア様、これは？」
「かなみ、リーザス国王女として命じます。この城から貴方だけでも脱出しなさい」

リアの命令に驚愕するかなみ。これが、先ほどの不安の正体。主君を置いて自分だけ逃げろと、そう命じられたのだ。

「リア様！出来ません！！」
「かなみ、ただ逃げろと言っている訳ではないの。忍者の貴方ならこの城から気づかれずに脱出出来る可能性が高いわ。この聖盾を持ってランス様の元に行って、この事を伝えて。もし出来ればルーク様にも協力を要請して」

リアがランスをダーリンではなくランス様と呼ぶ。ルークを呼び

捨てではなくルーク様と呼ぶ。リア個人としてではない、一国の王女としての振るまい。断れるはずがない。不甲斐なさに唇を噛みしめながらかなみは盾を受け取る。

「かなみ、早く行きなさい。注意はこちらが引きつけます」
「……必ず……助けに来ます」
「ふふっ、期待して待っているわ。マリス、私と貴方に知識ガードの魔法を掛けなさい。魔人たちに情報が漏れることの無いように」
「はっ！」
「マリス…最後まで付き合ってくれるわね」
「地獄の底までもお供します」
「あら？やっぱり私は地獄行きなのかしら？」

そう言いながらリアとマリスが部屋を出る。部屋の外からいたぞ！という声が響き渡る。かなみが脱出しやすいように自ら囮になったのだ。その姿を見送り、胸が張り裂けそうになりながらもかなみは窓から抜け出す。

―リーザス城　外周―

今、陥落していくリーザス城から一人の忍者が抜け出した。それに気がついたヘルマン兵はいなかった。いや、正確にはたった一人、その姿に気がついた者がいた。

「……ん？」
「どうかしましたか、ミネバ様？」
「……いや、なんでもない」

部下に問いかけられた人物はヘルマン第3軍副将ミネバ。女性でありながら実力でこの地位までのし上がった彼女は、その部下の問いになんでもないと答え、夜の闇に消えていく忍者の背中を見送る。

「（あの距離じゃいまから追いかけても間に合わないね…報告してあの馬鹿皇子にあたしらの責任にされるのも癪だ。黙ってたほうが賢いってもんだ）」

こうして唯一の目撃者があえて報告を怠る。かなみはヘルマン兵に気づかれることなく脱出を遂げた。彼女は向かう、ある男たちの元へ。

「…ルークさん、ランスさん。お願い…リーザスを、リア様を助けて…」

この日、リーザスは陥落した。

第37話　聖装備の秘密

―数日前　ジウの町―

「それではルーク様、お元気で！」
「ああ、アニスも元気でな。それと、周りをよく見て行動するように」

リーザス陥落より数日前、ルークはジウの町を旅立っていた。アトラスハニーの事件後、ルークは町の一角が吹き飛んでしまったジウの町の復旧作業の手伝いを行っており、その間に千鶴子に命じられて復旧作業に来ていたアニスに妙に懐かれていたのだった。

「ああ…ルークさんがいなくなったら誰がアニス様の暴走を止めるんだ…」

復旧作業を行っているゼスの魔法使いが嘆く。初めこそ魔法使いでないルークを蔑んでいた復旧作業員たちだが、アニスが妙にルークに懐き、ルークもアニスの暴走を最小限に抑えるよう上手く扱ってくれたため、今では魔法使いでないということに関係なく、復旧作業に来ているゼスの魔法使い全員がルークに感謝しているのだった。一度千鶴子にこの事を話したら、「絶対に何が何でもゼスにスカウトするように！」と言われたほどだ。一応スカウトはしたが、やんわりとルークには断られた。因みにキューティも初めのうちは折を見て復旧作業に顔を出していたのだが、年が明けてからあまりその姿を見なくなる。サイアスに聞いたところ、どうも治安隊隊長に出世したらしく、激務の日々を送っているらしい。

「さて、アイスの町に帰るのも久しぶりだな…」

ジウの町の復旧もほぼ完了に近づき、アニスも近々ゼスに戻るように辞令が下るとサイアスから内密に教えて貰ったルークはここらが潮時と考え、アイスに戻ることを決めたのだった。ここ数ヶ月、ギルド仕事も碌に受けず、ゼスからの報奨金もジウの復旧に回してくれと断っていたためサイフの中が驚くほど軽い。この事もアイスの町に戻ろうと考えた要因の一端であった。１０００ＧＯＬＤも入っていないサイフを見て少し笑いながらルークが呟く。

「ま、それ以上に貴重な繋がりが手に入ったから良しとするか…」

それが、アニスとの繋がり。以前リーザスでアレキサンダーを鍛えたときのように、ルークはある理由から世界の強者との関わり合いを持とうとする傾向がある。勿論、打算的な理由だけでジウの町の復旧を手伝ったり、アニスと付き合っていた訳ではない。アニスとここまで仲良く慣れたのは偶然の副産物だ。その偶然に感謝しながらルークは帰路につくのだった。

―アイスの町近辺　街道―

かなみは全力で走っていた。少しでも早くリーザスの危機をランスに伝えるために。ランスがここ数ヶ月仕事をせずにアイスの町にいるのは知っていた。リアに命じられ、常にランスの動向を調べていたからだ。しかし、それとは逆にルークが数ヶ月アイスに戻っていないのも知っている。こちらはリアに命じられてはいなかったため、ランスの調査のついでに個人的に調べていたことであったため、何処にいるかまでは把握できていなかった。何とかルークにも救援

を要請したい。かつて自分に忠臣への道を指し示してくれた人、ルーク。かなみはルークに絶対の信頼を置いていた。だが、居場所の判らないルークを悠長に捜している時間はない。ひとまずランスに救援を要請しなければ。息も絶え絶え、身体中には擦り傷の付いた状態で何とかかなみはアイスの町の前まで辿り着いた。

「……かなみか？」

不意に後ろから声を掛けられる。その声は、かなみが一番会いたかった人物の声。まさか、と思いながら振り返る。かなみが通ってきた街道とは逆、ゼスからの街道からその人物は歩いてきていた。その姿を見た瞬間、自然と涙が頬を伝う。何という偶然、何という奇跡。

「どうしたんだ？また王女の命令か？」

「ルークさん！！」

気がつけば、かなみは街道を歩いてきていた男、ルークに抱きついていた。少し驚いた様子のルークだったが、かなみの体に付いた傷やそのただ事ではない様子を見て真剣な顔になる。

「どうした。何があった！」

「…お願い…リーザスを、リア様を助けて…」

―アイスの町　ランス家―

「うーむ…昨日新しく開発した大和流星松葉崩しＭＫ２という体位はあまり楽しくなかったな」

「あれの影響で背中が痛いです…ランス様…」
「うむ、次は世間で噂の乳山嵐を試してみるか」
「ひんひん…出来れば普通のでお願いします…」

朝食にへんでろぱとカレー饅頭を食べながら、ランスとシィルは昨晩の情事の話をしていた。食事を取りながらするような話ではないが、そこは流石ランスといったところか。この家は以前まで住んでいた借家ではない。カスタムの町の事件後、とある事件の報酬に無理矢理この一軒家をいただいたのだ。家賃を払う必要も無くなったランスは前よりも更にギルド仕事をしなくなっていた。その時、家の扉がノックされる。

「ランス様、お客様みたいです。出てきますね」
「放っておけ。そのうち諦めて帰るだろ」
「また借金取りでしょうか?ランス様、そろそろキースさんに仕事を貰わないと生活できませんよ」
「またその辺のアイテムや家具でも売ればいいだろ」
「もう売れるものは大半売ってしまいました…本当にお金ありませんよ」
「…ちっ。それにしてもいつまで扉叩いていやがるんだ。借金取りだったら殺すぞ」

その時、扉の外から声が聞こえてきた。

「…ランス、話がある。もし居留守なら開けてくれ」

聞き覚えのある声にシィルがはっとする。以前二度も冒険で一緒になった、頼りになる冒険者。

「ランス様、この声は!」

ランスも声を聞いた瞬間ガバッと立ち上がり、扉に向かっていった。よかった、ランス様もあれだけお世話になったルークさんのことをちゃんと覚えていたんだ、とシィルはホッとする。

「がはは、来たぞ！金づるだ！」

ズルッとシィルがこける音が聞こえた。

訪問者は二人。ルークとリーザスの女忍者かなみであった。大事な話があるという二人をとりあえず部屋に招き入れ、朝食の続きを取りながら話を聞くことにする。かなみの話を要約すると、突如現れたヘルマン軍にリーザス城が制圧され、リア王女が捕まったということだった。

「もぐもぐ、よく判った。で、俺様に何をしろと言うのだ？」

「リア王女を助け出して欲しいのです。王女はランスさんが助けに来てくれるのを待っているのですよ」

「んー、いやだ。リアは俺様の女の一人ではあるが、そんな面倒な事に関われんな」

「そんな！？」

ランスの返答にかなみが机に身を乗り出す。隣にいたルークはその成り行きを黙って見守っていた。

「お願いします。それじゃあリア王女があまりにも可哀想です！」

「ふん、今時なんの見返りもなく人助けする奴なぞただの偽善者だ。俺様は英雄だが、偽善者じゃない！」

「ランス様…可哀想ですから協力してあげましょうよ…そうだ、リ

ア王女を助けるとご褒美が沢山貰えると思いますよ。ねぇ、かなみさん！」

可哀想に思ったシィルが助け船を出す。その事に内心感謝をしながら、かなみがその話に乗っかる。

「はい、リア王女を救って下さった暁には、ランスさんに沢山の財宝を用意させていただきます！」

「ふん、財宝は当然一生遊んで暮らせるだけ貰う。だがそれだけじゃ動く気になれんなぁ。あともう一つ何か決め手になる物がないと」

そう言ってイヤらしい顔でかなみの体を見始めるランス。シィルがランスのその顔に気がつき、まずいと内心思う。

「決め手ですか…私で出来ることならなんでもします。ですから、お願いします！」

「なんでも？なるほど、ではお前の体を……」

「リーザスを救ったら、きっとリーザス中の美女からモテモテだろうな」

「……何？」

ランスの話を遮るように喋ったのはここまでほとんど黙っていたルーク。その話の内容にランスがピクリと反応する。ルークはそのまま話を続ける。

「そりゃそうだろ。リーザスは今ヘルマンに支配されている。そこに颯爽と現れ、リーザスに平和を取り戻す戦士ランス。正に英雄だ」

「うむ、俺様は英雄だな」

「見れば顔も美形。女の子たちは思うだろう、なんて素敵なお方。あの方にこそ私の体を差し出すべきなんだわ」

「うむ、うむ、世界中の美女は俺様のものだからな」
「きゃー、英雄ランス様！私を抱いて下さい（裏声）」
「がはは、よし、俺様が抱いてやろう！」
「何言ってるの、次は私が抱いて貰うのよ！あと１０００人は順番待ちしてるんだから（裏声）」
「なんと！俺様ハーレムではないか！」
「でもそんなに沢山の美女相手では前もって精力を溜めておかないと勿体ないわ。今の内からそれに備えておくべきよ、ランス様！（裏声）」
「がはははは、シィル！冒険の準備をしろ！リーザス中の美女が俺様を待っている！」
「はい、ランス様！」

かなみへの要求をすっかり忘れ、上機嫌で冒険の準備をするランス。シィルがランスの指示を受け装備やアイテムの準備をし始める。ランスに引き受けて貰え、ホッとするかなみ。ルークに礼を言ってくるが、自分の貞操の危機であったことには気がついていない様子だった。準備を続けるシィルがルークの側を通ったとき、ルークにしか聞こえない程度の声で呟いてきた。

「相変わらずお優しいですね、ルークさん」
「流石にあのまま放っておくのは可哀想だからな…」

程なくしてランスとシィルの冒険の準備が完了した。かなみはランスに持っていた白い盾を手渡す。

「ん？なんだ、これは？」
「リーザス王家に伝わる聖盾です。この間お渡しした聖剣、聖鎧とセットでお使い下さい」
「がはは、盾は邪魔になるから使わんのだが、貰える物は貰ってお

こう！」

そう言って盾を受け取るランス。その時かなみはおかしな事に気がつく。ランスが装備しているのが聖剣と聖鎧でなく、安いロングソードとプレイトメイルなのだ。

「あの…聖剣と聖鎧はどこに…？」

「聖盾ならここにあるぞ」

「いえ、盾ではなく剣と鎧です。以前カスタムでお渡ししましたよね？」

「あれはだな、売った」

場が凍り付く。シィルが申し訳なさそうにし、ルークがまたか、と呆れた表情になる。かなみはランスの言葉がすぐには理解できず、ランスに問いただす。

「……売っ……た……？」

「中々豪華だったから高く売れたぞ。なぁシィル」

「はい、セットで２０００ＧＯＬＤでした」

それを聞いた瞬間、バターン、とかなみがその場に倒れ込んでしまう。駆け寄ったルークに抱え起こされるが、上の空の様子でリーザスが滅んでしまうなどとぶつぶつ言っていた。

「なんだ？売ったらまずかったのか？」

そのランスの言葉にガバッと立ち上がり、かなみが食って掛かる。

「当たり前です！あれを売るなんて、どうしてそんな事をしたんですか！！」

「俺様の持ち物をどうしようと俺様の勝手だろう」
「すいません、かなみさん。実はお金に困って売ってしまったんです」
「かなみ、聖装備に拘るのには何か訳があるのか？」
ルークがかなみに尋ねる。かなみは一瞬考え込んだが、これから協力する三人には真実を話しておこう決断し、口を開く。
「リーザス城に攻め込んできたのはヘルマン軍だけじゃなかったの。彼らの中には魔人もいたわ」
「魔人だと！！」
人一倍反応したのはルーク。ルークの珍しいとも言える異常な反応に少し驚くかなみ。ランスとシィルもルークに少し驚くが、それ以上に魔人が人間界に来ていたことに反応する。
「魔人か……」
「どうして……魔人は仲間割れで戦争しているはずです。人間界に来る余裕なんて無いはずなのに……」
「そうだ…戦争をしている……はずなんだ……」
「はい。でも確かに魔人がいたのです。彼らの狙いは、リーザス城の地下に隠されているカオスです」
「カオス？なんだそれは？」
「それは私にも判りません。ただ、リア王女とマリス様が魔人たちの狙いはカオスと言ってました」
「だが、リーザス城が陥落してリア王女も捕まった今、そのカオスは魔神の手に落ちているんじゃないのか？」
「いいえ、いくら魔人といえどそれは無理です。カオスは強力な封印で隠されています。その封印の解くための鍵が…」
「聖剣と聖鎧、そして聖盾と言う訳だな。駄目だ、詰んだな」

「誰のせいですか！！」

ランスがまるで人ごとのように言う。かなみがそれを聞いて激怒するが、横のルークが少し考え込んだ様子でかなみに尋ねる。

「そのカオスは必要な物なのか？」

「リア王女が私に言いました。魔人を倒すにはカオスが必要だと。そして、ランスにならそれを使いこなせると。魔人を倒せるくらいだから凄い武器か何かなんだと思います」

「……そうか、以前話に聞いていた剣……カオスという名前だったのか……」

ルークが独りごちる。その呟きは三人に届かなかったが、ランスがルークに尋ねる。

「そういえばお前は結界を破れる技があるんじゃなかったか？」

「えっ！そうなんですか！？」

「……俺も一応考えてはいた。聖装備が無くても俺が解ける可能性はあるが……もし解けなかったときは相手の懐、取り返しが付かない。それは最後の手段として、聖装備を確実に揃えておくべきだな」

ルークはかつて自分が封印を解くことの出来なかった扉を思い出す。ヘルマン東部に存在する古代の遺跡と呼ばれる迷宮、マルグリット迷宮。その第1層、偶然見つけた隠し扉の奥に佇んでいた巨大な扉。左右には二つずつ、竹を斜めに切ったような台座が置いてあった。扉には強力な結界が張ってあり、ルークがどんなに試してもその扉が開かれることはなかったのだ。もし万が一、リーザスの封印がそれと同等のものだったら全てが終わる。確実に封印を破る手段があるのであれば、そちらの準備をしておくにこしたことはないのだ。

「それでは、まずは武器屋に剣と鎧を買い戻しに行きましょう」
「既に誰かに買われてたらリーザスはおしまいだな、がはは！」
「だから、誰のせいだと思ってるんですか！！」

―アイスの町　武器屋―

「む？変なおっさんがいるぞ！武器屋の店番はレンチという美少女だったはずだが」
「お前がランスだな」

武器屋にいたのは普段店番をしているレンチではなく、その父親。ランスが入ってくるや否やギロリとランスを睨み付ける。

「俺はレンチの父親だ。お前がいる限り絶対に娘は店番に出さんぞ！」
「なんだ？俺様は何も悪いことはしてないぞ」
「悪いことをしていないだと……さんざん娘を騙して傷物にしたくせにこのやろぅ！」
「ランス……お前な……」
「人聞きの悪い。俺様はレンチさんと合意の上でメイクラブしただけだ」
「ちょっと、喧嘩してないで聖剣と鎧の事を聞いてよ」

放っておくとどれだけの時間言い合いをするか判らなかったため、痺れを切らしたかなみが話に割って入る。

「おい、親父。俺様が以前ここに売ってやった聖剣と聖鎧だがまだ

あるか？」
「あるぜ。あんな高いモン中々買い手が付かなくて困ってたんだ」
「おお、ラッキーだ。なら返せ」
「馬鹿野郎！ただで返せるか！しっかり金を払いやがれ！」
「ちっ、確か３００ＧＯＬＤだったな」
「２０００ＧＯＬＤだ！利子が付いて２２００ＧＯＬＤ。耳を揃えて払って貰おうか！」
「ま、店の売値じゃなくランスが売った値段にちょっと上乗せしてる分、良心的な値段だな」

ルークがそう言う。普通店に売ったものを買うときは売値の二倍が相場だ。顔と口は悪いが、そこそこには話せる親父のようだ。

「強欲親父め。仕方ない、払ってやろう。行け、ルーク！」
「ん？何の話だ？」
「緊急事態だ。俺様の代わりにお前が払え」
「いや、今俺も持ち合わせがないぞ。しばらくギルド仕事受けてなかったし」
「な、な、なんだとー！！」

ランスが絶叫する。随分と意気揚々と武器屋に向かったと思ったら、どうやら初めからルークの金を当てにしていたらしい。

「馬鹿者！お前から金を取ったら、ただのちょっと強い冒険者ではないか！俺様の下僕としての自覚が足りんぞ！！」
「人の金を当てにするな！というかいい加減下僕扱いを止めろ！」
「え、何？聖剣と聖鎧買い戻せないの！？」
「すみません、かなみさん……」
「店の中で騒ぐんじゃねぇ！」

店の中で口論を始める一行。そんな中ルークはサイアスの言葉を思い出していた。金に無頓着すぎる、いつか痛い目見るぞと。確かにゼスからの報酬を全てジウの町の復興資金に回すのではなく、少しくらい貰っておけばこんなことにはならなかったと少し反省をするルークだった。

「駄目だ、リーザス終わった」
「だから誰のせいだと思っているのよ！ランス！！」

第３７話　聖装備の秘密（後書き）

［人物］

ランス　（３）
ＬＶ　１０／∞
技能　剣戦闘ＬＶ２　盾防御ＬＶ１　冒険ＬＶ１
　鬼畜冒険者。カスタムの事件後、一件だけ依頼をこなし自宅をゲット。その後はシィルと共に家でゴロゴロしていたためレベルが下がりまくった。ルークに乗せられリーザス奪還のために動く。

シィル・プライン　（３）
ＬＶ　１０／５０
技能　魔法ＬＶ１　神魔法ＬＶ１
　ランスの奴隷。ランス同様冒険をしていなかったため、レベルがかなり下がる。普段は冒険をすることをあまりよく思わないシィルだが、知人の窮地のため、今回は率先して冒険に賛同する。

見当かなみ　（３）
ＬＶ　２７／４０
技能　忍者ＬＶ１
　リーザス王女リア直属の忍者。カスタムでの再会後もしっかりと鍛錬を詰み、今では副将たちと模擬戦をしてもそれなりに渡り合えるほどには成長を遂げる。ランスのあんまりな振る舞いに、気がつけば呼び捨てにしていた。

レンチ
　アイスの町の武器屋の娘。ランスに散々騙されて傷物にされ、家に引きこもってしまった。それが原因で二重人格になる。

［装備品］

リーザス聖盾

　リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる盾。防御力も非常に高いが、実はリーザス国にある封印の間の鍵としての役割も担っている。

プレイトメイル

　安物の軽鎧。冒険者を始めるならまずはこれ、という触れ込みである初期装備。ある程度の冒険者なら自然と装備しなくなる代物。

［料理／食材］

カレー饅頭

　ピリリと辛い饅頭。へんでろぱだけではランスが満腹にならないため、シィルがこれも一緒に食卓に出すことが多い。

［その他］

マルグリット迷宮

　ヘルマン東部にある古代遺跡。数百年にも渡り探索研究がされているが、その全体像は未だに判っていない。現在では冒険の名所とされており、数多くの冒険者が腕試しに立ち寄る。ルークも１０年以上前一度だけこの迷宮に挑んだが、その際に第一層でおかしな扉を見つけることとなる。

第３８話　兄と妹、師匠と弟子

―アイスの町　キースギルド―

「おっ、ランスじゃねえか。久しぶりだな、元気にやっとるか。後ろにいるのは…ルークか！？」
「少し金が入り用でな。楽で役得で簡単ですぐ終わって報酬ががっぽりの仕事を紹介しろ」
「んなもんねーよ！」
「あ、ハイニさん、お久しぶりです」
「シィルちゃん、ご丁寧にどうも」

聖剣と聖鎧を買い戻すための金を稼ぐため、キースギルドに仕事を受けに来たルークたち。武器屋の親父には手付け金として５００ＧＯＬＤ置いてきた。ルークが。ランスがキースに無茶な注文をし、シィルはキースの側に控えている美人秘書ハイニと挨拶をしていた。

「ええい、なら何か稼ぎのいい仕事を紹介しろ！」
「一足違いだったな、ランス。美少女救出という美味しい仕事があったんだが、さっき決まったんだ。ウチのギルドの方針が早い者勝ちだから今から受けても良いが、無駄になると思うぞ」
「何だと。何処の馬の骨だか知らん奴が受けた仕事なぞ、俺様がそいつらよりも早く解決してやる！」
「受けたのはラーク＆ａｍｐ；ノアだ」
「げっ！」
「あー、そりゃ無駄になるかもな」

キースがその名前を出した瞬間ランスがイヤそうな顔をする。ル

ークもその二人よりも早く解決するのは難しいかもと頭を掻く。そんなルークにラーク&ノアを知らないかなみが尋ねる。

「その人たちは強いんですか？」

「キースギルドのエースだな。数多くの依頼をこなしてきた一流の剣士ラークと、神魔法も使う攻防一体の女戦士ノア。その上美男美女。最近じゃ魔獣カースAを倒したってことで、各地で敬意と信頼を得ている」

「もしかしてその方、ルークさんより、強いん……」

「なーに、他人事みたいに言ってやがる。カースAを倒したときはお前もラーク&ノアと一緒だったんだろ。ラークが言ってたぜ、ルークがいなければ勝てる相手じゃなかったのに、自分たちだけ有名になって申し訳ないってな」

かなみの問いかけに被せるようにキースが喋る。そうだったか、とルークはとぼけた様子。

「キース、その仕事の内容を教えろ。真の英雄である俺様がパパッと解決してやる！」

「やれやれ、無駄だとは思うがな。ハイニ、ランスにインダスの説明をしてやれ」

「はい、キースさん」

そう言って秘書のハイニが資料を持って一歩前に出てくる。

「今回の依頼は、インダス書房の会長であるジンゲル・剛・インダスの娘、ローラ・インダスを救出することです。報酬は２３００ＧＯＬＤ。ローラさんの写真はこちらです」

そう言ってローラの写真を手渡される。茶色い髪の少女がまだあ

どけない様子で笑っている。

「ふむ、75点といったところだな」
「失礼な奴だな。十分可愛いじゃないか」
「あの…ルークさんはこういった方が好みで…？」
「ん？」
「あ、いえ、なんでもないです！」
「ほーう」

かなみの様子を見て何かに気がついたようににやにやと笑うキース。そんな風に見たら駄目ですよ、とハイニがキースを軽く叱りながら話を続ける。

「ローラ・インダスはこの町の北東にあるリスの洞窟の主のリスに捕まっています。洞窟にはリス以外にも様々な魔物が生息しているようです」
「リス？そんなに強い魔物じゃないな。こりゃラークたちが苦戦するとは思えんな…」
「ふん、俺様の実力なら先に出発したラークごときすぐに追い抜いてやる。華麗に解決すれば、ノアさんも俺様の魅力に気がつき、ラークを捨てて俺様に体を許すだろう、がはは！」
「調子の良い奴だ」
「ハイニさんもそんなハゲ親父じゃなく、俺様の秘書にならないか？」
「…困ります」
「おいおい、勝手に人の秘書口説かないでくれるか。というか、ランスもルークもそろそろ結婚しないのか？俺はてっきりランスはシィルとすぐに結婚すると思っていたんだがな」

突然の話題変更に何故か当人たちではなくシィルとかなみに緊張

が走る。その様子を楽しんでいるのか、キースはにやにやとしながらランスとルークを見る。

「アホ、シィルは奴隷だ。それに俺様は結婚なんて面倒な事する気はない！」

シィルが後ろであからさまに落胆する。そのシィルをかなみが励ましている。

「残念だな。俺はお前の結婚式でクソ危ないスピーチをするのが楽しみなのに」

「叩けばいくらでも埃が出てくるからな、ランスは」

「それ以前の問題として、結婚式をしたところでお前は絶対に呼ばん！」

「こんだけ世話してやってるって言うのにつれない奴だ。ルークはどうなんだ？」

シィルを励ましていたかなみの耳が少しだけ大きくなる。

「んー……特にそういう相手はいないな。ランスやラークと違ってモテないしな」

今度はかなみが落ち込み、そのかなみをシィルが励ましていた。なんだかこの二人、すぐにでも仲良くなってしまいそうな雰囲気だった。

「何がモテないだ。何人にも告白されてるのに、ちっとも受けやしねぇ。お陰でランスと違って危ないスピーチが出来ないじゃねぇか」

「そんなスピーチ、されないに越したことはないだろ」

「何だ、こいつ童貞か？」

「いや、そう言う訳じゃないみたいなんだが……一晩限りとか思い出にとかってのが多いみたいだ。俺も前調査したんだが、こいつの元彼女みたいなのは見つからなかった」
「何、勝手に訳の判らん調査してるんだ！ランス、そろそろ行くぞ」
「うむ、キースのせいで下らん時間を取った。もし先を越されていたら賠償して貰わんといかんな」
「お前も話に乗ってたじゃねーか…。あ、ハイニ。俺はまだちょっとルークと話がある。先にランスたちだけ見送ってくれ」
「？はい、判りました」

そう言って部屋を出て行こうとする一行の中からルークだけ引き留めるキース。どうやら二人きりで話したいことがあるらしい。何となく、ルークにも話の内容に予想がついたため、素直にそれに応じる。ランスたちがハイニに連れて行かれ、部屋の中にはキースとルークだけが残っていた。ルークは近くにあったソファーに腰掛ける。キースが葉巻に火をつけ、一度だけ吸ってから話を始めた。

「あー……聞いときたいことがあってな……」
「言いあぐねるのは柄じゃないぞ、キース」
「ランスのこと何だがな……あいつは……」
「……知っている。ランスがそうなんだろ？」
「！？気がついていたのか？」

驚くキースにルークが表情を変えずに答える。

「リーザスの誘拐事件の時に薄々と、この間のカスタムの時に確信…って感じだな」
「そこまで判っていて…ランスと一緒に仕事をしているのか？大丈夫…なのか？」

フッと自嘲気味にルークが笑う。

「あいつが死んだのは…ランスのせいじゃないだろ。自分のわがままで……ただあの場所での生活が楽しかったからというだけで……十年も帰らなかった……俺の責任だ」

「……あまり気にするな。お前も若かったんだ。それにしても…どうして気がついたんだ？」

「よく似ているよ。迷宮を探索するときのちょっとした癖から、戦い方までな」

そう言って席を立つルーク。話は終わったとばかりに部屋を出て行こうとする。

「あいつに似てるから…一緒にいるのか？」

「そういう訳じゃないさ。何というか…放っておけないんだ」

それだけ言い残し部屋を出て行くルーク。碌に吸えずに短くなってしまった葉巻を名残惜しそうに灰皿に押しつけながら、キースは少し昔を思い出す。

GI1013

ーアイスの町　キースギルドー

「おい、聞いたぞリムリア。最近変な坊主と一緒に冒険しているんだってな。独身なのにこぶつきか。ルークが聞いたら悲しむぞ」

キースが依頼を受けにやってきた女戦士に話しかける。黒髪で整った顔立ち。右目は見えておらず、金属製の盾を加工したものを眼

帯代わりにしている。片目ではあるが、この女戦士は紛れもないキースギルドのエースであった。

「ふん、こんな事で悲しむようなやわな兄貴じゃないさ。何せ、もう姿を眩ませて8年だ」

「どこで何やってるんだかな……」

「ま、死んじゃいないだろ。帰ってきたら年数分全力で殴るけどな」

「それにしても、どういう気まぐれだ？お前がルーク以外と一緒に冒険をするなんて」

少し考えた後、女戦士はキースに向かってこう答えた。

「なんだか、放っておけなくてね」

LP0002
ーアイスの町　キースギルドー

「放っておけないか…兄妹ってのは似るもんなのかねぇ……」

キースが二本目の葉巻に火をつけ、フゥっと煙を吐き出した。

ーアイスの町　キースギルド前ー

ルークがギルドから出てくるとランスたちが待っていた。ルークの姿を見るとランスが文句を言ってくる。

「遅いぞ！ラークに負けたらキースとお前のせいだぞ！」
「すまん、だが文句ならキースに言ってくれ」
「それじゃあ、リスの洞窟に向けて出発しましょう」

そうして一行はリスの洞窟へと旅立つことになる。アイスの町を出る直前、かなみがルークに話しかけられる。

「かなみ、さっきの質問の答えなんだが…」
「し、質問ですか！？」

先ほどのキースギルドのやりとりをかなみが思い出し、質問と言われ真っ先にルークの好みを聞いたことが思い浮かび、顔を赤くし焦り出す。

「ああ、俺とラーク、どっちが強いかってことだが…」

あっ、そっちかと落ち着きを取り戻した後、勘違いした自分が少し恥ずかしくなるかなみ。そのかなみの様子を不思議そうに見ながら、ルークは先ほどのかなみの質問に答える。

「まあ、負ける気はしないな」

実に平然と言ってのけるが、嫌味に聞こえない。その頼りがいのある姿を見ながら、偶然町の前で会えた奇跡に、かなみはもう一度深く感謝するのだった。

―リスの洞窟　入り口―

「ありました、ランス様。この扉にＬＩＳって書いてあります」

アイスの町を出て北東に進んだ三人。それほど町から離れていない場所に、その洞窟はあった。緑色の扉にご丁寧にＬＩＳと書いてある。ここがリスの洞窟で間違いないだろう。

「よし、リスの洞窟に入るぞ」

「主はリスって事だが油断はするなよ。もしかしたら、恐ろしい相手が待ち構えているかもしれないからな」

「はい！ルークさん！」

こうして一行は洞窟に入っていく。このルークの予想は的中する。今現在、このリスの洞窟には恐るべき相手が待ち構えているのだった。

ーリスの洞窟　三層ー

「はあっ！」

「きゃああー」

ラークが女の子モンスターのパステルを倒す。その横ではノアがＮＥＯぬぼぼを斬り伏せていた。この二人がラーク＆ａｍｐ；ノア。ここまで来る間に出てきたモンスターをものともせず、ほぼ無傷で三層まで辿り着いていた。

「大丈夫か、ノア？」

「ええ、大丈夫よ。そろそろローラさんを見つけられると良いんだけど…」

「リスがそう洞窟の奥深くまで行けるとは思えない。そろそろ最深部のはずだ」

そう言ってラークとノアは洞窟を進んでいくラーク。流石は歴戦の冒険者といったところか、その予想は当たっていた。もう間もなくラークたちはリスとローラがいる部屋に辿り着く。そうすればリスはラークの敵ではない。ルークたちよりも早く、この依頼を達成するはずだった。そう、このリスの洞窟が普段通りの状態であったなら、だ。少し開けた場所に出たラークとノア、見ればその前に一人の女性が立っていた。赤い髪に、ボンデージのようなセクシーな黒い服を身に纏っている。

「ローラさん…ではないわね？」

「…ノア、何かおかしい。気を抜くな。貴方は？こんな洞窟の奥深くで一体何を？」

冷静に考えれば普通の女性がこんな洞窟の奥深くにいるはずがないのだ。だがそれ以上に、目の前の女の異質な雰囲気にラークは緊張を解けずにいた。女がにっと笑う。

「貴方…名前は？」

「……キースギルド所属、ラークだ！」

「聖剣と聖鎧、そして聖盾。持ってるんでしょ？寄越しなさい」

「……何のことだ？そんな物は知らない」

「ふふっ、嘘を言っても無駄。サテラには判るんだから…」

「嘘なんて言ってないわ！私たちは本当にそんなもの知らないの」

「ふーん…じゃあさ、ちょっといじわるすれば…嘘かどうか判るわよねっ！！」

「「！？」」

瞬間、サテラと名乗った女の後ろに二つの巨大な石の塊が現れる。見ればそれは人の形をしている。

「まさか…ガーディアンだとでもいうのか…」
「あんなに精巧なものが存在するの…ラーク…」
「ノア、俺の側から離れるな！」
「シーザー、イシス。やって！！」

―リスの洞窟　二層―

「ふん、思った通り大した敵はいないな。予想がはずれたなルーク」
「だから油断はするなと言ってるだろ。それにしてもかなみ、また腕を上げたな」
「あ、ありがとうございます！」

ルークたちもここまでほぼ無傷で進んでいた。出てくるのは雑魚モンスターばかり、その上かなみが以前よりも遙かに成長を遂げているのだ。ランスとシィルのレベルが下がっているとはいえ、苦戦するようなダンジョンではなかった。その時、下の階から女性の悲鳴が聞こえる。

「この声は……ノアの声だ！」
「急ぐぞルーク！ラークの奴はどうでもいいが、ノアさんのピンチには俺様が颯爽と駆けつけねば！」

駆け出すルークとランス。シィルとかなみもそれに続き、一行は三層へと下りていった。ラークたちが通ったばかりだったのだろうか、それとも何かに怯えているのだろうか、理由は判らないが何故

かモンスターが出現せず、一直線にルークたちは駆けていく。すると、少し開けた場所に出る。そこには地に倒れたボロボロの姿のラークとそれを足蹴にする女、それと二体のガーディアンとノアがいた。ガーディアンの一体は女の側に控えており、もう一体はノアを拘束している。こちらもラーク同様かなりの傷を負っている。

「まさか…ラークとノアがやられたのか!?何者だ…」
「イシス。まだ正直に言わないから、ちょっとその女いじめてあげて」

部屋の入り口にいるこちらにはまだ気がついていないようで、女はイシスと呼ばれたガーディアンに指示を出す。そのガーディアンは素早くノアの服を引きちぎる。
「いや……ラーク、助けて…」
「やめろ!ノアを離してくれ!!頼む!!!」
「あははは、どうして人間なんかと交渉しないといけない?さっさと喋っちゃえばいいのに」
「本当に知らないんだ…」
「……イシス。やって!」

己の巨大な物をノアの中に挿入しようとするイシス。その瞬間、何者かがイシスに飛びかかってきた。ルークだ。その剣を腕で受けるが、拍子にノアを離してしまう。ルークは素早くノアを抱きかかえると、ガーディアンから一歩離れる。

「……誰?」
「る、ルークさん!」
「ルークだけじゃない!この英雄の俺様もいるぞ!!」
「ルーク…それにランスもか…すまない…気をつけろ、こいつら普通じゃない!」

ラークとノアが突然のルークの登場に驚く。危ういところを救って貰った形になるが、目の前の敵の強さを実感している二人は安堵の表情を浮かべはしなかった。かなみが素早くルークからノアを受け取り、シィルがヒーリングを掛ける。目の前のガーディアンに対し臨戦態勢のルークだが、ランスは女にどうどうと近づいていき、高らかに宣言した。

「がはは、誰だと言ったな?この俺様こそ、愛と正義のヒーロー、ランス様だ!!こんな酷い行いを見過ごすわけにはいかん。この俺様の正義の熱棒で更正させてやる。がははははは!!」

「……馬鹿?」

「なんだとぉぉぉ!!」

ランスを蔑んだ目で見ながら、女がふん、と鼻を鳴らす。

「本当に持っていないみたいだからもういいわ。シーザー、イシス、帰るわよ。サテラ、馬鹿は嫌いなの。馬鹿が移る前に帰らなきゃ」

「俺様が馬鹿だと、ええい、待て!俺様が更正させてやる!!」

「そうです、ランス様は馬鹿じゃないです!」

この場から撤退しようとする女に対し、ランスとシィルが抗議する。が、ルークは女の名前を聞いて目を見開く。

「サテラ…だと…」

「今日は沢山遊んだから疲れたわ。よっと!」

そう言ってシーザーの肩に飛び乗り、この場を素早く離脱する。

サテラに向かってランスが叫ぶ。

「待て、逃げるのか！卑怯者め！！」
「どうして魔人であるこのサテラが人間ごときに逃げなきゃならない。見逃してあげるんだから感謝するんだな」
そう言い残し、サテラとガーディアンの姿が消えた。ランスが悔しそうにサテラが消えた方向に文句を言い、かなみとシィルはサテラたちがいなくなって気が抜けたのか、気を失ったラークとノアを介抱していた。そんな中、ルークが小さな声で呟く。
「馬鹿な…サテラだと…なぜ…なぜだ…」
それは、普通であれば知り得ないはずの情報。人の身が辿り着くことのないはずの領域。
「なぜホーネット派の魔人が…ここにいるんだ！」
その呟きは誰の耳にも届くことはなかった。

第３８話　兄と妹、師匠と弟子（後書き）

［人物］

リムリア・グラント　（半オリ）

ＬＶ　３２／７０　（生前）

技能　剣戦闘ＬＶ２　冒険ＬＶ１

　ルークの双子の妹でキースギルド所属の冒険者。ＧＩ１０１４年、冒険中にその命を落とす。冒険先で拾ってきた悪ガキの性根を叩き直すため、冒険に連れ歩くことになる。その悪ガキはリムリアに冒険のいろはを教わり、師匠と弟子のような関係になる。その悪ガキが今使っている必殺技も自分で考えたとはいっているが、リムリアが使っていた技に影響を受けている。そのリムリアが使っていた技も、元々は兄が使っていた技の影響を強く受けている。そのため、兄と悪ガキが使う技も、よく似ている。

キース・ゴールド　（３）

　アイスの町にあるキースギルドの主。ルークとランスの過去を知る数少ない人物であり、その動向を見守っている。秘書のハイニとは恋人関係にある。

ハイニ

　キースギルドの優秀な美人秘書。きりりとしたメガネとスーツが決まっている出来る女。ハイニ・ゴールドという名前になる日も近いのでは、と噂されている。

［モンスター］

魔獣カースＡ

　かつてゼスの２級市民を恐怖のどんぞこに陥れた恐るべきモンス

ター。ラーク&ノアとルークが協力して打ち倒す。身体中つぎはぎだらけで、まるで何者かが人工的に造ったかのような出で立ちであった。

ぬぼぼ

　生まれたときから実体を持たない霊体系モンスター。下級モンスターのため、霊体ではあるが武器でも簡単に倒すことが出来る。ＮＥＯぬぼぼという上位種もいるが、こちらもあまり強くない。

パステル

　全滅危惧種女の子モンスター。鎧や盾で武装した金髪の戦士。昔は各地に生息したが、最近はめっぽう見なくなり全滅危惧種入り。

第３９話　それぞれの思惑

―アイスの町　キースギルド―

「まさかラーク&ａｍｐ;ノアがやられるとは…」

ルークたちはラークとノアを放っては置けないと、一度アイスの町に戻ってきていた。ノアを病院に連れて行く際、ラーク自身も深手であるにも関わらず、先にキースギルドに報告に行くと言って別れたのだが、姿が見えない。

「ふん、所詮は二流の冒険者だったということだ。ノアさんを危険な目に遭わせやがって。ま、これでこの仕事を受けているのは俺様たちだけだな」

「そうなるな。ちゃんと成功させろよ」

「キース、ラークは？」

「…修行の旅に出るんだとよ。自分の未熟さを知ったって言ってたぜ」

「相手が魔人じゃ仕方ないと思うんだがな…」

「ノアを守れなかったのがショックだったみたいだ。それよりも、本当に魔人がいたのか？」

キースがルークたちにそう尋ねる。隣のハイニが若干怯えた様子だった。無理もない、人類の敵である魔人が現れたのだ。

「…相手はそう名乗っていたな。本当かどうかは判らんが」

「多分本当だと思います。あの女、最初は気がつかなかったけど、リーザス城で皇子の後ろに控えていた女だと思う…」

そう話に入ってきたのはかなみ。これが魔人の力と豪語していたパットン皇子の後ろに控えていた三人の内の一人があの女だとすれば、魔人であるという話も信憑性が出てくる。ルークはそれとは別に、彼女の名前からも信憑性を持っていたのだが、それは誰にも言っていない。かなみの言葉を聞き終えた後、キースに向き直る。

「……だそうだ。」

「ちっ、魔人がリーザスにいるってのかよ。勘弁してくれ…」

悪態をつきながらため息を吐くキース。ハイニを抱き寄せ、その不安を和らげてやっている。

「とにかく事件を解決しないとな。いつまでもこうしていても事態は悪化する一方だ」

「うむ、その前にノアさんの様子を見に行くぞ。弱いラークに愛想を尽かした今なら俺様に股を開くかもしれんからな、がはは！」

「あ、病院に行くなら言伝を預かってくれるか。ラークからノアにだ。「すまない、弱い俺を許さないでくれ。君は平穏に暮らしてくれ」、だとよ」

「……勝手な男だ。ノアの好意にも気づいているだろうに」

「ノアがもう戦えないことも察したんだろうな」

そう、ノアはもう戦うことの出来ない体になっていた。イシスに犯されそうになった恐怖心から精神を傷つけられ、武器を持つことが出来なくなっていた。ラークはそれを察し、修行の旅に出る自分についてきてくれとは言えなかったのだろう。

「これはラークが置いてった金だ。５００ＧＯＬＤ。お前らにだとよ」

「……ふん、こんなはした金貰ったところで聖剣と鎧を買い戻すには足りんな。事件解決したら金も十分だし、全く持って俺様たちには不用な金だ。ああ、最後まで使えん男だ」

そう悪態をつきながら部屋を出て行こうとするランス。出て行く直前でキースに振り返り、こう指示を出した。

「…俺様たちには不要だからノアさんの入院費にでも充ててやれ」
「ランス様……」
「ふん、さっさとノアさんに会いに行くぞ！」
「……ちょっと見直したわ」
「ああいう奴なんだよ」

さっさと出て行ってしまったランスの後を三人が追うが、キースがルークを引き留める。

「ルーク、お前にも言伝を預かってる」
「俺にもか？」
「ああ。「必ず強くなって帰ってくる。その時はもう一度一緒に冒険をしてくれ」、だとよ」
「…確かに承った。期待して待っているとするかな」

修行の旅というのは大変なものだ。その上あのラークの状況では自分を無理に追い込みかねない。無茶な修行をして分不相応なモンスターと戦い、命を落とす冒険者も少なくない。だけど、あいつは必ず戻ってくる。そうルークは確信しながらギルドを後にした。

―アイスの町　病院―

「そうですか…ラークが…」
「ああ、確かにそう言っていたらしい」
「ノアさん、お体の調子はどうなんですか？」
「うん、あまり大事には至ってなかったみたいで、これならすぐに退院出来そうなの。ルークさん、ランスさん。ありがとうございます。あの時二人がいなければきっと私たち…」

そう言いながら震え始めるノア。あの時の恐怖を思い出してしまったのだろう。確かに体は大事には至っていない。問題は心。同じ女性のシィルとかなみが側に寄っていき、手を握ってあげている。少しずつだが震えが収まってくる。

「ごめんなさい、私…」
「気にしなくていい」
「うむ、美人は震えていても美人だ」
「……もう聞いているかも知れませんが、冒険者は止めて田舎に帰ろうと思っています」
「……そうか」
「いい気になっていたんだと思います。無敵のヒーローだ、なんて町の人たちに言われて。あのサテラという女に会って…初めて冒険を本当の意味で怖いと思いました。全然…無敵のヒーローなんかじゃなかった…ただの臆病な女です…」

そう言って涙を零すノア。掛ける言葉が見つからず、部屋が静かになる中、何度もラーク＆ａｍｐ;ノアと行動を共にしたルークが口を開く。

「ヒーローだったさ」
「そんなこと…」

「魔獣カースAを倒したとき、何人もの子供たちが笑顔で駆け寄ってきてくれただろ。あの時だけじゃない、沢山の冒険をしてきたんだ。何人もの人に感謝をされてきたはずだ」

ノアの頭の中を今までの冒険がよぎる。大変なこともあった。嫌なことを言われることもあった。でも、事件を解決すると必ずみんな笑顔で感謝をしてくれた。駆け寄ってくる子供たち、涙を流しながら感謝する老人。その顔が、次々と浮かぶ。

「その人たちにとって…君らは間違いなくヒーローだったさ」

「……ルークさん、ありがとうございます」

ノアが先ほどよりも更に大粒の涙を流す。だが、その涙が持つ意味合いは大きく変わっていた。まだノアさんとやっていないと騒ぐランスを引っ張り、部屋を出て行こうとする一行にノアが後ろから声を掛ける。

「すぐには…無理だと思います。でも…またいつか、私が冒険者として戻って来られたら…その時は一緒に…」

ラークの時と違い、今度は全員が振り返り返事をする。

「がはは、もっと美女になって俺様の元に来るといい。可愛がってやるぞ」

「ノアさん。私、ずっと待っています！」

「ほとんど初対面なのにこういうのも何ですけど…頑張って下さい」

「ヒーローに出来ないことはないだろ?期待して待っているよ！」

「必ず…必ず戻ってきます！」

ノアと別れたルークたちは、再びリスの洞窟にやってきていた。捕らえられているローラを早く救い出してあげる必要があるからだ。勿論聖装備を買い直すためでもあるが、モンスターに捕らえられている少女を長いこと待たせるわけにもいかない。サテラたちと出会った場所よりも更に奥に進むと、奥で話し声が聞こえてきた。ローラか、あるいはサテラたち魔人がまだいるのか、四人に緊張が走る。声のした方へ進んでいくと、普通のリスと比べると中々に巨大なリスと、その横に座った少女が話していた。少女の顔は写真で見た顔と一致している。彼女がローラだ。だが、何か様子がおかしい。

「ローラ、僕は君のためならどんな事でもするよ」
「うれしい…でも私にとっての幸せは貴方がいつも側にいてくれる事よ…」
「なんてかわいいんだ…いつか人と魔物の仲が認めて貰える時代が来る。それまでの辛抱だよ」
「はい。お父様とお母様も貴方と話をすればきっと良さが判るはずなのに…」
「…ん？僕たちの愛を引き裂こうとする邪魔者が来たみたいだ」
「え？」

あちらもルークたちに気がついたようで、ジッとこちらを睨んでくる。ルークが頭を掻きながらため息をつく。

「参ったな…モンスターに捕らわれたと聞いていたが…」
「どう見てもあの二人、愛し合っていますよね。種族を越えた愛、ちょっと素敵かも…」
「何者だ！一体何をしに来た！！」

ローラを後ろに庇うようにしながらこちらに向かって叫ぶリス。
ランスが剣先をリスに向けながらそれに応える。

「がはは、そこのローラちゃんを返して貰おうか！リス風情が美少女と愛し合おうなんぞ１００億年早いわ！」
「リス…私恐い…」
「ローラ、奥の部屋に隠れていて。それと、奥の二人を呼んできてくれるかい」
「はい。気をつけてね、リス…」

そう言ってローラは奥の部屋へと下がっていく。

「あ、こら！ローラちゃんを返せ！」
「断る！僕とローラは愛し合っているんだ！邪魔をするな！！」
「…三人とも、気を抜くな。今奥の二人と言っていた。新手がいるぞ」
「はい、ルークさん」
「その通り！ローラを僕のいるここまで護衛してくれた二人だ！とっても強いんだぞ！謝って帰るなら今のうちだ！」

奥から二人分の足音が聞こえてくる。ランスはふてぶてしい態度のままだが、ルークはいつでも真空斬を撃てるように構え、かなみも忍剣を握り、シィルが後ろでいつでもサポートできるよう身構える。なにせ先ほど会った相手が魔人。否が応でも緊張感は増す。奥から現れたのは二人の女性だった。が、その容姿には見覚えがある。

「…あ！シャイラとネイじゃないか！」
「知り合いですか、ルークさん？」
「知り合いというか…理不尽な恨みを買っているというか…」

現れたのはかつて誘拐事件の時に出会った盗賊シャイラと、カスタムの事件の時に出会った冒険者のネイであった。

「あ、貴方たち、ランスとルーク！！」
「ここで会ったが１００年目！二人ともぶっ殺してやる！」
「あー…やっぱ俺も恨み買っているのね。というかお前ら、なんで一緒に？」
「酒場でお前らの愚痴で意気投合してな。今じゃ共に鍛練を積む相棒さ！」
「鍛え上げた私たちの力、見せてあげるわ！」

そう言って武器を取る二人。リスも臨戦態勢に入る。その時、部屋にランスの爆笑が響いた。

「がははは。とっても強い？弱すぎて盗賊団を抜け出せなかったへっぽこ盗賊と、水の彫像なんかにやられたへっぽこ冒険者ではないか。うむ、そんな弱い二人はもう一度この俺様が可愛がってやろう」
「「こ、こ、殺す！！！」」
「火に油注ぐなよ…」

目を血走らせながら飛びかかってくる二人。リスも二人に続いて駆けてくる。ランスがネイの相手をし、ルークがシャイラの相手をする形になるが、ルークに迫ったシャイラの剣をかなみが防ぐ。

「ルークさんはリスをお願いします。彼女は私が！」
「了解だ」
「くっ…小娘が…あたしの邪魔をするな！」

短剣を振るいながら、器用にも懐から投げナイフをかなみに放ってくる。確かに以前よりは成長しているらしい。だが、成長率という点では相手が悪すぎる。かなみは飛んできたナイフを全て忍剣で捌き、手裏剣を投げる。シャイラのナイフと違い、ほぼノーモーションだ。

「何!?くっ…」

「やっ!!」

「がっ…」

突然飛んできた手裏剣を無理に避けたため体勢を崩したシャイラの隙を見逃さず、腹部に膝蹴りを入れる。前のめりに倒れるシャイラの後ろに素早く回り込み、腕を掴んで後ろに回し、そのまま地面に体を叩きつけ拘束する。

「なっ…なんだこいつ…強い…」

「これ以上の抵抗は無駄です。おとなしくして下さい」

ルークの助言を受け鍛錬を続けていたかなみ。既にシャイラ程度が相手になるレベルではない。一瞬のうちに決着がつく。その華麗な動きにシィルがぱちぱちと拍手し、かなみが少し顔を赤らめる。

「僕たちの愛の邪魔をするな!」

「応援してあげたいのはやまやまなんだが、こちらも事情があってね。スマンな」

巨体から繰り出される鋭い爪の攻撃を難なく妃円の剣で受けながら、峰で攻撃を加えるルーク。あの二人の様子を見てしまっては、流石に殺すのは忍びない。攻撃が当たらず焦ったのか、大振りにな

る。がら空きの腹に剣の柄の部分を勢いよく押し込む。

「みぎゃぁ！」

そのまま崩れ落ちるリス。悔しそうに涙を零しながら言葉を漏らす。

「ちくしょう…ちくしょう…僕たちが何をしたって言うんだ」

「少なくともローラちゃんの両親に心配は掛けたな。確かに人間と魔物、受け入れられない恋かも知れないが、だからといって洞窟に引きこもって良い訳じゃないだろ」

「でも…僕たちの愛をどうやって認めて貰えれば…」

「他人事でしかないから無責任な発言しか出来ないが…誠心誠意伝えるしかないんじゃないか？」

「いや、そんなことでは無理だな。人間になれ！気合いと根性があれば人間になぞ簡単になれる！」

「んな、無責任な…」

後ろから無茶な野次を飛ばしてきたランスに振り返る。すると、ランスは思いっきりネイとお楽しみの最中だった。ネイの口を抑え、ばれないようにこっそりとやっていたらしい。ルークはリスと戦い、かなみも暴れるシャイラを取り押さえていたため気がつかなかった。

「またか！またこの展開か！！」

「ちょっ…こんなところで何してるのよ！！」

「ランス様…」

「ううっ…誰か助けて…」

「がはは、久しぶりのネイちゃんの体はグッドだ！」

「（…ネイには悪いが、あっちの相手じゃなくて良かった）」

毎度おなじみの展開に頭を抱えるルーク。その後ろで、リスが決意したように言葉を発する。

「人間…判った。僕は人間になる！」
「おい、そんな簡単に出来る事じゃ…」
「待っていてくれ、ローラ！僕は必ず人間になって帰ってくる！！」

そう言って走っていってしまうリス。そのリスをルークたちが見送ると、突然奥の部屋に隠れていたはずのローラが出てくる。どうやらリスのことが心配で出てきてしまったらしい。辺りを見回し、リスがいないことに気がつく。

「…リスは？リスは何処へ行ったの？……まさか、殺したの？この魔物殺し！魔物だって生きているのよ！！」
「いや…リスは別に死んでは…」
「リスはランスに殺されて経験値になってしまったの！ローラさん、彼らを許しちゃ駄目！」
「そうだ！あたしもこの目で確かに見たぞ！」
「こらっ！そう言うことというのはどの口だ？この口か？ならば俺様の皇帝液でお仕置きしてやろう。とぉーっ！」
「あんっ！」

混乱するローラに真実を話そうとするルークだが、その声をランスに犯されていたネイが遮り、ローラに嘘を吹き込む。シャイラもそれに便乗する。ローラがジッとこちらを涙目で睨んでくる。どうやら信じてしまったらしい。

「絶対…絶対に許さないんだから！仕返ししてやる…覚えておきなさい、ばかー！！」
「あっ、話を聞いて、ローラさん！」

リス同様、走っていってしまうローラをかなみが呼び止めようとするが、その際にシャイラの拘束が緩んでしまう。

「よし、抜けた。逃げるよ、ネイ！」
「あっ、しまった！」
「こら、待て！まだネイちゃんとしかやっていないんだぞ！！」

ネイに一発出して丁度まったりしていたランスの横からネイを奪還し、ローラの後に続いて二人も走っていってしまう。

「「おぼえてろー！！」」

最後に三流小悪党のような捨て台詞を残していった。なんだろう、凄くどうでもいいところでその内また会いそうな気がする、と考えるルークだった。

ーリーザス城　ヘルマン軍司令部ー

ヘルマン軍司令部、元々は王の間であった部屋だ。玉座に腰掛けているのはこの侵攻戦の首謀者、ヘルマン皇子パットン。皇子にしてはマシな方ではあるが、戦士として見ればあまり筋肉のついていないやせ形の青い髪の男。ワインを飲み、側には全裸の女性を数人侍らせている。彼女たちはリーザス城で働いていたメイドたちだ。屈辱なのだろう、その目には涙を浮かべている。

「はっはっは。リーザス全土は、ほぼ我が第3軍が制圧した。これもお前ら魔人の協力があったからだな。感謝しているぞ、ノス」

「はっ！」

返事をしたのはパットンの後ろに控えていた男。白い髭を蓄え、老人のようにも見えるが、２メートルはゆうに越すほどの巨体。そして、パットンの言ったようにこの男も魔人であった。

「それにしてもお前らの褒美は本当にリア王女だけでいいのか？褒美が欲しければいくらでも言え。何でも与えてやるぞ。何せこの私はヘルマンの皇子。いや、この成功で最早王の座も目の前というものだ！ははははは！」

「いえ、リア王女だけで十分です」

「くくく、本国で私のことを馬鹿にしていた奴らよ。震え上がるがいい。これからは、このパットン様の時代よ！」

「……」

「ノス、お前たちも俺によく尽くせよ。私が天下を取った暁には、お前たちにも領地を分けてやろう」

「…恐れ入ります。私は少し所用を思い出した故、これにて」

「…つまらん男だ。うっ、ははは、そこの女、うまいぞ。褒美に１０００ＧＯＬＤくれてやろう。どうだ、嬉しいだろう？わははは」

口で奉仕していたメイドに上機嫌に笑うパットン。部屋を出て行くノスを見送りながら、先ほどまでの高笑いを止め、思い詰めた表情になる。

「そうだ…これで…次の王は俺だ。くそ親父にも…パメラのババァにも…ステッセルの野郎にも…誰にも文句は言わせない。そのためなら…魔人だって利用してやる」

ーリーザス城　地下室への通路ー

通路を歩くのは二人の男。一人はノス。もう一人は金髪の美男子。この男が三人目の魔人、アイゼル。立場はノスの方が上なのだろうか。先ゆくノスの後をついて歩いている。そのアイゼルにノスが問いかける。

「我らが動き、主君ホーネット様には気がつかれていないな」
「はっ、ヘルマン第3軍前面で目立っていますので、我らのことには気がついていないでしょう」
「うむ、なんとしてもホーネット様に気づかれる前にカオスを手に入れるのだ。あれさえ手に入れれば、我らの天下だ」
「しかし、何故ホーネット様には内密で動いているのですか」

その問いかけに、一瞬だけノスの眉が動くが、すぐに何事もなかったかのように返事をする。

「あまり大げさに動いてはケイブリス共にも感づかれるからな。なに、成功すればホーネット様もお喜びになる。気にするな」
「……はっ！」
「アイゼル、お前は引き続きサテラと共に情報を集めろ」
「お任せを」
「我らが時代まで、あとしばらくの辛抱だ」

話しているうちに二人は地下牢へと辿り着く。そこではリアとマリスがヘルマンの女兵士、サヤに鞭で拷問を受けていた。その美しい身体には、多くのアザが出来てしまっている。

「うふふ、王女さん。そろそろ話してくれてもいいんじゃないの？

さぁ、聖装備を渡した相手の名前を言いなさい！」
「……ふふ、いやよ」
「このっ！これだけの拷問を受けてまだ言わないのか！むかつくんだよっ！」
「くっ……あぁっ……」

既に普通の女性が耐えられる範疇を超えた拷問を受けている二人。しかし、未だその口は固く閉ざされていた。そのリアとマリスの様子を見ながら、アイゼルが独りごちる。

「下等な人間ながら、見事。これぞ上に立つ者だ。…あの馬鹿皇子とは違う」

人間を下に見ているアイゼルだが、二人の覚悟には素直に感嘆の声を出す。かといって拷問の手を緩めるわけではない。サヤに拷問を更に強めるよう指示を出す。全ては、魔人界の統一のために。

第３９話　それぞれの思惑（後書き）

［人物］

ラーク　（３）
ＬＶ　２５／３５
技能　剣戦闘ＬＶ１
　キースギルド所属の冒険者。キースギルドの中でもトップクラスの実力者だが、サテラの前に敗れ、修行の旅に出る。いつかまた、ルークの前に姿を現すこともあるかもしれない。

ノア・セーリング　（３）
ＬＶ　２０／３３
技能　神魔法ＬＶ１
　キースギルド所属の冒険者。ルークが認めるほどの実力派コンビだったが、サテラに敗れた上に、ガーディアンに犯されそうになった恐怖で戦えなくなってしまう。田舎で療養することを決めた彼女だが、ルークたちとの約束通り、いつの日かまた冒険者として戻ってくるかもしれない。

シャイラ・レス　（オリモブ）
ＬＶ　８／２５
技能　剣戦闘ＬＶ１　シーフＬＶ１
　ランスとルークに恨みを持つ元盗賊。ローラに雇われてリスの洞窟までの警護を担当していた。捨て台詞を吐いて逃走。今回はランスに犯されずホッとしている。

ネイ・ウーロン
ＬＶ　１２／２７
技能　シーフＬＶ１

ランスとルークに恨みを持つ女冒険者。シャイラ同様、ローラに雇われていた。今回もランスに犯され、恨みを更に強くする。

サヤ

ヘルマン第３軍所属の女兵士。拷問好きであり、リアたちの拷問役として抜擢される。実は処女である。

［モンスター］

リス

丸い者と呼ばれる種族の最終進化形の一つ。白い毛に覆われており、大きさは様々だが基本的には小柄なものが多い。知性は高いが戦闘能力は低い。

［装備品］

忍剣

ＪＡＰＡＮから輸入した忍者用の短剣。かなみが通販で購入。斬れ味はそこそこ。

手裏剣

忍者の必需品。こちらも基本的に通販で購入。通販大好きかなみちゃん。

第４０話　奪われた聖剣と聖鎧

―アイスの町　武器屋前―

「あー、もう閉まっていますね」
「ま、時間を考えると仕方がないか」

リスの洞窟から戻ったルークたちだったが、その頃にはもう辺りは暗くなっていた。一度ラークたちを連れて町に戻っていたため、思っていたよりも時間を取られていたのだ。

「ギルドへの報告も明日にするか。疲れたしさっさと寝るぞ、シィル」
「くっ…今は少しでも時間が惜しいのに…」
「かなみ、気持ちは判る。リアたちの安否は心配だ。だが、あまり根を詰めすぎてもまずい。俺たちが倒れたら…本当にリーザスは終わってしまいかねん」
「…はい」

俯くかなみの肩に手を乗せるルーク。

「大丈夫。リアもリーザスも、必ず救うさ」
「ルークさんが言うと……なんだか信用が出来ます」
「ん？そうか？」
「はい！」
「聖剣と聖鎧買い戻し目前だな、がはは！気分がいいからお前ら二人もウチに泊めてやるぞ。寝るのは床だがな」
「へいへい、ありがとうございます」

「あの、お布団は敷かせていただきますから」
「ありがとうね、シィルちゃん」

武器屋の前を離れ、ランスの家に向かう一行。その四人の背中を見送る女が三人いたことに、ルークたちは気がついていなかった。

「……聞いたかい？」
「……ええ、目的はこの武器屋にある聖剣と聖鎧みたいね」
「……ふふふ」

―アイスの町　キースギルド―

「依頼は達成したぞ。さぁ、報酬を寄越せ！」

翌朝、キースギルドに報告に来たルークたち。ローラは逃げて行ってしまったので依頼達成と言えるかは微妙な状況であったが、キースの口から意外な言葉が飛び出す。

「ああ、インダス家から無事に娘が帰ってきたという連絡を受けている。依頼達成だな」
「…ちゃんと帰っていたのか。よかった」
「しかし、ローラ・インダスは帰ってからずっと泣いていたそうだ。何かしたんじゃないだろうな？」
「ローラには何もしてないな。…ローラにはな」
「がはは、ネイちゃんの体はしっぽりと楽しんだがな」
「……けだもの」

かなみがランスに聞こえないようボソッと呟く。実は昨晩、ルー

クとかなみが寝ている横でランスはシィルと情事を行っていたのだ。
中々寝付けなかったことに、それまで積み重なってきたものも合わさり、すっかりランスに対して敬語を使わなくなっていた。

「ネイ？誰だそりゃ？まあいいか、ほらよ。これが報酬の２３００ＧＯＬＤだ。確認しろ」
「シィル、確認しろ。１ＧＯＬＤのずれも見逃すんじゃないぞ」
「はい、ランス様。ひのふの…ぴったり２３００ＧＯＬＤあります」
「ちっ、少しくらいサービスしろ。強欲ジジイが」
「ま、何はともあれ、これで聖剣と聖鎧を買い戻せるな。ようやく第一歩だ」
「うむ、だいぶ遠回りをしたがな」
「…だから…誰のせいだと……」

２３００ＧＯＬＤを受け取るランス。その無責任な発言にかなみの額に青筋が浮かぶ。部屋を出て行く前にルークがキースに尋ねる。

「そういえばリーザスに何か動きはあったか？」
「知らないな。どこで戦争しようと俺には関係ない。流石に魔人に暴れられちゃ困るがな。いや、戦争が起こる事によって仕事が増えるから、俺にとっては良いこと尽くめだぜ」
「そんな！リーザスの危機をなんだと思っているんですか！」

そう言って笑うキースにかなみが食って掛かる。フッと葉巻を口に咥えながら、キースがかなみに向かって応える。

「悪いな、嬢ちゃん。だが、間違ったことは一つも言ってないぜ。俺はギルドを預かる身だからな。職員や冒険者たちを路頭に迷わす訳にはいかないだろ」
「それでも……戦争を喜ぶなんて……」

「そもそも冒険者なんて職業、平和すぎる世の中だったら食っていけるものじゃないからな。適度な動乱が丁度良いんだよ。それとも嬢ちゃんは、ルークの職業も否定すんのか？」
「……」
かなみが俯いてしまう。ハイニさんがキースを注意しようとするが、ルークがかなみの頭に手を置きながら真剣な表情で口を開く。
「キース、確かに間違ったことではないが途中から話をすり替えるな。俺の否定は関係ないだろ。それに……相手を選べ。かなみはリーザス王女付きの忍者だ」
「……そりゃ悪いことを言ったな。スマン」
「……いえ、大丈夫です」
吸っていた葉巻を灰皿に押しつけ、キースが頭を下げる。かなみもそれに応じる。
「リーザスを占領したヘルマンは周りの町も次々と制圧。既にジオとレッドも数日前には落ちたらしい。今はラジールが狙われているんだとよ」
「なんだ、知っているではないか。このクソ親父が！」
「ということは…白の軍や魔法部隊も、もう…」
「ラジール…まずいな」
「はい、アイスの町の近くですね」
「それもあるが…それ以上にカスタムに近い」
「あっ！マリアさんたち…大丈夫でしょうか…？」
ルークの頭をカスタムの町の人々たちの顔がよぎる。新しく組織した自警団でどれほど持ち堪えられるか、聖装備を手に入れたらリーザスへ向かう道中、カスタムにも寄る必要があるな、と考えるル

ークだった。

ーアイスの町　武器屋ー

「スマン、本当にスマン！！」
「うおっ、なんだ！お前みたいな親父に頭を下げられても嬉しくないぞ」
「何かあったのか？」

武器屋に入るや否や、親父がルークたちに向かって頭を下げてきた。ルークが尋ねると、申し訳なさそうにしながら口を開く。

「それが…昨晩泥棒に入られちまって、聖剣と聖鎧を盗まれちまったんだ！」
「なんだと！！何をしてやがる！！！」
「スマン、あの装備は諦めてくれ…」
「馬鹿者！そう言われて、はいそうですかと諦められるか！」
「リーザス国が……リア王女が……貴方の責任よ！」
「くされ親父、死んでわびて貰おうか！刀の錆にしてくれる！」
「そうよ！こんな悪人、殺してしまいましょう！」
「落ち着けかなみ。似合わないこと口走るな」
「ランス様、かなみさん。このおじさんも泥棒に入られた被害者なのですから可哀想ですよ」

ランスとかなみが激怒し、それをルークとシィルが宥める。ランスがこのように言うのは珍しくないが、かなみがこんな事を言うのは驚きだ。ランスのせいで疲れが溜まっているのだろうか。

「…はっ！いえ、ルークさん。これは違うんです。気の迷いというか…」
「よしよし、疲れが溜まっているんだな。気にしなくて良いぞ」
「あぅぅ……恥ずかしい……」
「親父、盗んだ相手に心当たりは？」
「ああ、盗まれた場所に置き手紙があった。これだ。どうもお前たち宛みたいだぞ」
「ふん、そういうのはさっさと出せ。シィル、読んでみろ」

そう言ってランスに手紙を渡してくる武器屋の親父。それを受け取ったランスは、シィルに手紙を読ませる。

「はい、ランス様。……軽蔑すべきランスとルークへ」
「なんだと、シィル！」

シィルの頭にポカーンとげんこつを入れるランス。シィルが涙目になりながら口を開く。

「ひんひん、違いますランス様。手紙に書いてあるのを読んだだけです」
「というかどう考えてもそうだろ。ちょっと可哀想だぞ」
「ふん、ならさっさと読め」
「はい…軽蔑すべきランスとルークへ。聖剣と聖鎧は私たちが盗んでやったわ。悔しいだろ、ばーか」
「むかむか、なんてふざけた手紙だ。シィル、送り主は誰だ！」
「なんとなく察しは付くが……」
「ローラ、シャイラ、ネイ。ローラさんと昨日の二人ですね」

ルークの予想通り、聖剣と聖鎧を盗んだのはあの三人だった。どこかでルークたちの目的が聖剣と聖鎧であるということを知ったの

だろう。実に的確な嫌がらせである。

「ローラさんは恋人が奪われたって勘違いしてますからね。どうしよう…聖剣と聖鎧がないと…」

「せめて三人がどこへ向かったかが判ればいいんだが…」

「あら？女性の三人組ですか？それならカンラの町に向かうと言っていましたよ」

武器屋に入ってきた少女が突然声を掛けてくる。見覚えのない娘だ。武器屋の親父に薬を手渡している。ランスに犯されて傷ついているレンチへの薬のようだ。

「君は？今の話は本当か？」

「申し遅れました。私、最近この町でアイテム屋を始めたコリンと言います。今朝女性の三人組が店に来て、世色癌を買っていったんですが、その時カンラの町に行くと話していました」

「隣町だな。よし、向かうぞ。あの三人め、見つけたらたっぷりとお仕置きしてやる！」

「それがますます恨みに拍車をかけてるんだがな…」

武器屋を出て行こうとするルークたちだったが、親父が引き留める。

「手付け金で預かっていた５００ＧＯＬＤだ。こんなことになっちまってスマン」

「盗みに入られたのは俺たちのせいだし、それは迷惑料として取っといてくれ」

「いや、それじゃあ俺の気がすまねえ。だったらウチにある武器を持っていってくれ」

「がはは、なら遠慮無く貰っていくぞ！シィル、この店で一番高い

武器を探せ」
「はい、ランス様！」
「って、おいランス！お前はウチの娘を傷物にしたんだ。お前は持ってくな！」

親父の文句を無視し、装備を見繕うランス。結局ランスが日本刀と鋼鉄の鎧を、シィルがシルフの杖を無料で持って行く。ルークは妃円の剣と幻獣の剣、真紅の鎧で事足りているため、かなみは忍者用の装備が売っていなかったため何も貰わずに店を出る。丁度ランスとシィルは装備品を全部売っており、心許ない装備だったため、これからの戦いに向けて良い補強にはなった。こうしてルークたちはアイスの町を後にする。向かうはカンラの町。

―カンラの町　酒場―

「あっという間に着いたな」
「隣町ですしね」

カンラの町に辿り着いたルークたちは情報収集のため酒場にやってきていた。店に入るとウェイトレスが注文を取りに来るが、その格好はかなり大胆なものであった。下着を穿いておらず、スカートには大きく切れ込みが入っている。

「いらっしゃーい」
「おおっ、なんと素晴らしい！」
「ちょっとあなた、なんて淫らな格好をしているのよ！」
「あの…下着を穿き忘れていますよ」
「ああ、ここはサービスの一環としてこういうことをしてるんだよ」

「あら、ルークさん。お久しぶり」

ウェイトレスのセティナがルークに声を掛ける。かなみが悲しそうな瞳でルークを見る。

「あの…ルークさんはこういう店によく来られるんですか？」
「ん？冒険者だからな。酒場にはよく来るが？」
「あ…いえ、そうじゃなくて…」
「くすくす。そこの忍者さん、心配しないで。ルークさん、私がいくら誘っても全然乗ってこない人だから」
「……どうも」
「馬鹿者。こういう店はさっさと教えろ。ぐふふ、この俺様がこれから常連になってやろう」
「ありがとうございまーす。こちらメニューです」
「あ、注文ついでに後で手が空いたら加藤さんを呼んで貰えるか」

セティナに注文をし、バーテンの加藤さんの手が空くのを食事をしながら待つ。バーテンハニーの加藤はこの町一番の情報屋でもある。ランスがカレーマカロロを貪り食う。シィルとかなみは焼き肉そうめんを二人で摘んでいるが、あまり美味しくなかったようでそれぞれレモンティーとほうじ茶で口直しをしている。しかしかなみ、ほうじ茶とは渋いな。ルークがダボラベベをバリバリと食べながら、かなみに話しかける。

「そういえばこの町の武器屋の親父が変わっていてな、しゃもじなんだ。後で一緒に行かないか？アイスで何も買わなかったし、この町は日本刀以外にもＪＡＰＡＮからの輸入品を取り扱っているから、何か買ってあげるよ」
「えっ、はい、ありがとうございます。……ひょっとして、それはデートなのでは…」

かなみがぶつぶつと言っていると、ようやく手が空いたのか、加藤がこちらのテーブルにやってくる。

「お待たせしました。ルークさん、お久しぶりです」
「久しぶり。少し聞きたいことがあってな。ローラっていう女の子を知らないか？１５歳くらいの茶髪の少女だ。他に二人ほど女を連れているんだが」
「ああ、知っているよ。ここでミルクセーキを飲んでいた子だ。もうこの町にはいないよ」
「何処へ行ったか聞いてないか？」
「確かラジールの町に向かったよ」
「まずいな…キースの話が本当ならラジールは今ヘルマンに襲われているはずだ…」
「いえ、その情報は古いですね。ラジールは二日前に占領されましたよ。今ヘルマン軍はカスタムの町を攻めています」
「なんだって！」
「ランス様、マリアさんたちが…」
「ええい、あのハゲ親父。古い情報なんぞ渡しおって！」

現状は着々と最悪の方向へ進んでいる。ローラは敵の渦中に飛び込んでいってしまい、カスタムは既に戦火の真っ直中。どちらも放っておくわけにはいかない。

「ラジールの町への街道は先ほどヘルマンによって封鎖されたみたいですね。ローラという娘たちはぎりぎり通れたでしょうが」
「そうなるとローラを追うのは難しいな。だが、封鎖された町の中にいるなら、ローラたちはある程度安全だろう。まさか奴らも彼女たちが聖剣と聖鎧を持っているとは思わないだろうし」
「それなら先にマリアさんたちを助けにいきましょう！」

「でも、ラジールの町を通らなきゃカスタムまではいけないわ」
「……加藤さん、カスタムの状況は判るか？」
「かなり強固に防衛しているみたいですよ。なんでも数千にも及ぶヘルマン軍に、たった数百人で渡り合っているみたいです」
「ふん、やるな。流石俺様の女たちだ」

カスタムの町を復興させる際、新しく組織した防衛軍が活躍しているようだ。早く救援に行きたいが、ヘルマン兵に占領されたラジールを通ることは出来ない。頭を抱えるルークたち。

「しかし、カスタムもあれだけ抵抗してしまうと、制圧された際には酷い扱いを受けるでしょう。早く降伏してしまった方がいいのに……」
「しない…だろうな。彼女たちの性格を考えれば」

ルークの頭に真っ先に浮かんだのは志津香。彼女が降伏する姿など想像が付かない。志津香だけではない。カスタムの少女たちは全員強い意志を持っている。降伏など絶対にしないだろう。その時、ルークたちの会話に入ってくるように女性の声が聞こえる。

「ほんと、あの子たち頑固なんだから。さっさと降伏すれば苦しい思いをしなくてすむのに」
「ん……げっ、ロゼ！」
「お久しぶり、ランスさん。それと、そちらの方がルークさん？」
「そうだが…どちらさんだ？」
「カスタムの町の神官さんです、ルークさん」

振り返ってそこにいたのはカスタムの町の淫乱シスター、ロゼ。カスタムの事件の際にランスから話を聞いたルークは教会を避けていたため、顔を会わすのはこれが初めてである。

「ん…待て。どうしてここにいるんだ?」
「カスタムの町は今や戦乱真っ直中よ。逃げて来たに決まってるじゃない」
堂々と胸を張るロゼにかなみが疑問を投げかける。
「神官なのに、傷ついた人を見捨てて逃げたんですか?」
「ナンセンスよ。そんな慈善事業、今時流行らないわ。神官の仕事っていうのは安全な場所で戦争を非難する事よ」
「……ま、いいがな。カスタムの状況は?」
「防衛軍が相当頑張っているわね。特にマリアと志津香が中心になって、みんなを鼓舞しているわ。でも、もう町全体を包囲されていたから、時間の問題ね。もう町からは誰も逃げられないわ」
「マリアさん、志津香さん、ミリさんとミルちゃん、ランさん、チサさん、真知子さんに今日子さん、トマトさん、エレナさん、ペペさん、それから…みなさん元気なんですか?」
ガイゼル…心の中で涙が止まらないルークだった。
「元気よ。今のところはだけどね。明日、明後日とどうなるかは判らないけど」
「待て、そんなギリギリの情報を持っているということは最近まで町にいたんだろう。包囲された町からどうやって逃げ出してきたんだ?」
「この町の近くにカスタムの町と直通で繋がっている悪魔の通路と呼ばれる道があるのよ。そこを通ってきたの。私の体を使ってね。中々楽しかったわ」
「楽しかった?」
「悪魔の道にはデーモンがいてね。通行料は女の体。もう思い出す

だけで濡れちゃうわ」
「ちっ、悪魔の分際で生意気な。俺様がぶっ殺してやる」
「ロゼ、悪魔の通路の場所を教えて貰っても良いか？」
「ふふ、いいわよ。あー、体が火照ってきたわ。後でもう一回行っちゃおうかしら」
「それなら一緒に来てくれないか？カスタムに付く前に引き返してくれて構わないから」
「んー、寄付金ちょうだい」
「あまり持ち合わせが無くてな…５００ＧＯＬＤでいいか？」
「まいどー！」

こうして一時的にロゼがパーティーに加わる。悪魔の通路がある洞窟はカンラの町から南に下った所の山の麓にあるらしい。カスタムの町を救うため、ルークたちはカンラを後にし、ロゼに案内され悪魔の洞窟を目指すのだった。因みに町を出る前に武器屋には寄りました。全員で。なぜか、かなみが少し落ち込んでいた。

―悪魔の洞窟　入り口―

洞窟の前には門番が立っていた。緑色の髪が特徴の悪魔の女。ぶつぶつと文句を言っている。

「くそっ…元六階級悪魔の私がどうしてこんな下っ端の仕事を…」

その女悪魔は、以前カスタムでランスに召喚され、さんざんやられたあげく契約を破棄され上司に降格処分を言い渡されたあの悪魔だった。六階級というエリートだった彼女だが、今は九階級まで降格させられていた。

「全部あの男のせいだ。今度会ったら八つ裂きにしてやる！」

ぶんぶんと持っていた鎌を振り回す女悪魔。やはり相当恨んでいるようだ。

「……でも、こういう地味な仕事を頑張って勤め上げて、いずれは元の階級に戻してもらうんだから。頑張れ、私！」

不幸は確実に近づいていた。

第４０話　奪われた聖剣と聖鎧（後書き）

［人物］

ロゼ・カド　（３）
ＬＶ　５／２０
技能　神魔法ＬＶ１

　カスタムの町の淫乱シスター。町のピンチにさっさと逃げ出す。薄情といえば薄情だが、現実主義者とも言える。悪魔の通路が気に入ったので、ルークに雇われて一時的に旅に同行する。

ローラ・インダス

　モンスターであるリスと恋に落ちた少女。最愛の彼が殺されたと勘違いし、ルークとランスに復讐を誓う。シャイラ、ネイと共に聖剣と聖鎧を盗んで逃走。

コリン

　アイスの町でアイテム屋を営む少女。店は最近オープンしたばかり。熱心なハニワ教の信者でもある。

セティナ

　カンラの町の酒場のウェイトレス。店の方針で常にノーパンである。何度かルークにアプローチを掛けるも、やんわりと断られている。

加藤清森

　カンラの町の酒場のバーテンハニー。町一番の情報屋でもあり、ルークとは顔見知り。

しゃも一郎

カンラの町の武器屋の親父。しゃもじ。ゼスに弟がいるらしい。

［装備品］

日本刀

ランスが無料でゲット。ＪＡＰＡＮからの輸入品の刀。斬れ味がよく、好んで使う冒険者も多いため、輸入品ながら多くの町で取り扱われている。

鋼鉄の鎧

ランスが無料でゲット。巷で生産されている鎧の中では最高クラスの品質。重量があるため、それなりの体格でなければ装備するのは逆効果。

シルフの杖

シィルがちゃっかり無料でゲット。魔法工房シルフ社製作の杖。中々に高性能な杖で、愛用する魔法使いも多い。

忍服

かなみがルークに買って貰った新しい服。ＪＡＰＡＮからの輸入品で取扱店が少ない。大事にするとか普段は着ないようにするとか、かなみは言っていたが、防具なので普段から着なさいとルークに窘められる。

［料理／食材］

カレーマカロロ

イタリアの神秘。フランスパンをくり貫いてシチューと餃子を詰め、うどんで巻いたもの。珍味。

焼き肉そうめん
　冷たくて暖かいお袋の味。鍋に入ったカレーライスを思わせる食べ物で、臭いはチャーシューメン。かなり好みの分かれる一品。

ダボラベベ
　大層な名前だが、普通のせんべい。食べると経験値が手に入る。子供の成長を祈って誕生日などによく食べる地方もあるらしい。

［都市］
カンラの町
　自由都市。アイスの隣町で、これといって特色もない普通の町。

第４１話　悪魔との契約

―悪魔の洞窟　入り口―

「はーい、到着！」
「ここが悪魔の通路がある洞窟か」
「ランス様、あそこに誰かいます」
「あら？私が通ってきたときはいなかったのに」

ロゼの案内で悪魔の洞窟の前までやってきたルークたち。シィルの指さす先、洞窟の入り口の前には一人の女悪魔が立っていた。しかし、どこか見覚えがある。あちらもルークたちに気がついたようで、訝しげにこちらを見た後、突如大声を上げた。

「あーーーっ、お前はランス！」
「…そうか。見覚えがあると思ったら、カスタムの事件の時の悪魔か」
「おお、あの時のドジな悪魔だな」

洞窟の前で門番をしていた悪魔が、かつてカスタムの事件の際ランスに召喚され、散々酷い目に会わされたあげく、契約を破棄されて逃げ帰った悪魔であることに気がつく。ランスの言葉に猛抗議をしてくる女悪魔。

「何がドジよ。卑怯な手で私を騙したくせに！」
「がははは、騙されるお前が悪い。悪魔のくせに人間様に卑怯など、片腹痛いわ！」
「ルークさん。この悪魔とは知り合いですか？」

「以前カスタムでの事件の時、ランスと契約を結んで魂を持っていこうとした悪魔だ。ま、失敗したがな」

かなみの問いかけに応えるルーク。その言葉を聞いたロゼが首を傾ける。

「魂回収役？だったら結構な上位悪魔のはずだけど？どうして門番なんかしてるのかしら？」

うぐっ、と女悪魔が顔をしかめる。どうやら指摘されたくなかったことらしい。ランスを睨みながら静かに呟く。

「……お前のせいで六階級悪魔だった私は…今じゃ九階級よ…」

「がはは、自業自得だ」

「くっ…」

「とにかくそこをどいて貰おうか。俺様はその洞窟に用があるんだ」

「悪魔でないあなたたちを通すわけにはいきません」

そう言って両腕を拡げ、入り口を通せんぼするような姿になる女悪魔。

「なら力尽くで通して貰おうか。ついでにまたその体も楽しませて貰うとするか、がはは！」

「…やる気？悪魔であるこの私と？九階級だと思って甘く見ない事ね。上司の温情でまだ実力は六階級のままなんだから」

女悪魔がそう言った瞬間、空気が変わる。女悪魔から物凄い量の殺気が発せられたのだ。ルークとかなみが身構える。ランスも額に汗を掻いている。

「ルークさん…この悪魔…」
「ああ、やばい相手だ。…気を抜くな」
「そりゃそうよ。六階級悪魔だったら、多分下級の魔人とならそれなりに渡り合えるわよ」
「魔人並か…ちっ、覚悟を決める必要があるな…」

ロゼが平然とそう言い放つ。それはかなり絶望的な言葉だ。この戦力でそんな強敵とやり合えというのか。ルークがかなみとロゼを庇うように前に出る。ランスも意識しているかは判らないが、シィルを庇うように前に出ている。

「どうやらやる気みたいね。丁度良いわ。ランスには恨みもあることだし、八つ裂きにして魂を回収させて貰うわ」
「あら？やりあう必要なんか無いわよ？」
「何？」

この状況であっけらかんと言い放つロゼ。後ろを見れば、鼻歌交じりに何やら魔方陣のようなものを地面に書いている。そして、ルークとランスに向かってこう言い放った。

「ね？悪魔の下僕、欲しくない？」
「そこの女、何を…？」
「いでよ、ダ・ゲイル！」

ロゼがそう言うと、魔方陣が光り出し、目の前に全身が青い毛で覆われた悪魔が現れる。角と羽が生え、目は三つ。予想だにしなかった事態に、女悪魔の目が見開かれる。

「あ、動いちゃ駄目よ悪魔さん。貴女、九階級って自分で言ってたわよね。ダ・ゲイル！」

「んだ。そこの小娘、動くでね。オラは八階級悪魔だべ。オラより下なんだから命令に従って貰うべ！」
「……くっ。」
「黙ってねで、返事は？」
「……はい」

ダ・ゲイルと呼ばれた、ロゼの呼び出した悪魔の命令に素直に従う女悪魔。

「どういうことだ？ロゼ、その悪魔は？」
「悪魔って完全な階級社会でね。上司の命令には逆らえないの。この悪魔はダ・ゲイル。私の大事なパートナーよ。主にHのね」
「んだんだ。オラ、ロゼ様の忠実な下僕だ」
「神官なのに悪魔とそんなことをしているんですか！？」
「あら？人間なんかよりよっぽど填るわよ？今晩貸してあげようかしら？」
「結構です！！」

神に仕える者としてあるまじき発言を平然とするロゼ。やはり信仰心というものは皆無らしい。かなみが苦言を呈すが、それを気にする様子もない。シィルがロゼに恐る恐る尋ねる。

「ロゼさん、どうして悪魔を支配できているんですか？もしかして…その悪魔より魔力が高いとか？」
「魔人じゃあるまいし、そんな魔力無いわよ。悪魔を下僕にするには、一つのキーワードを知ればいいの」
「キーワード？なんだそれは？」
「名前。真の名を知られた悪魔は、その相手に絶対の服従を誓わなければいけないのよ」

ピクッと女悪魔が震える。その事を知っている人間がこの場にいるとは思わなかったのだろう。女悪魔を横目で見ながら、ロゼが話を続ける。

「ただし、一人の人間が覚えられる真の名は一つだけよ。新しく悪魔の名前を聞いたら、どっちを下僕にするか自分で決めるの。そうじゃなきゃ私もあと数体の悪魔を下僕にして乱交パーティーするんだけどねー」

「なるほど。つまり、この悪魔の名前を知れば俺様は好きに出来るという訳だな」

「そう。いつ呼び出して命令するのも、Hするのも自由って訳」

ニヤリとランスがイヤらしい目で女悪魔を見る。続けてロゼもイヤらしい目で女悪魔を見る。既に女悪魔は涙目だ。

「ダ・ゲイル！聞き出しなさい！」

「ちょっ…待っ…」

「八階級悪魔として命ずるべ。真の名をオラに教えるだ！」

「……フェリスです」

「んだ。ロゼ様、これでいいだか？」

「お疲れ。また今晩呼び出すから帰っていいわよ」

ロゼがそう言うと、ダ・ゲイルは煙のように姿を消す。残されたのはルークたちと、真の名をばらされた女悪魔。ランスが声高らかに宣言する。

「悪魔フェリス。契約に基づき命じる。この英雄ランス様に従え！」

「う……」

「悪魔の契約を無視したら灰になって消えちゃうわよー」

「……はい、ランス様。第九階級悪魔フェリス、これよりランス様

の忠実な下僕になることを誓います」
「がははははは、悪魔の下僕ゲットだ！」
「貴女たちはどうする？契約結べるわよ」

ロゼがシィルとかなみにそう問いかける。二人とも物怖じしながらロゼに応える。

「ランス様が契約されたので私はいいです。恐いですし…」
「どんな恐ろしいことがあるか判らないし…私もいいです」

物怖じしながら断る二人。その時、二人の横から宣言する声が聞こえる。

「悪魔フェリスに命じる。契約に基づき、真の名を知るこのルークに従え」
「……はい、ルーク様。第九階級悪魔フェリス、ランス様同様、ルーク様にも忠実な下僕として仕えさせていただきます」

契約を結んだのはルーク。その行動が意外だったのか、シィルとかなみが心配そうにこちらを見る。最初に口を開いたのはロゼ。

「あら？意外ね。こういうのは可哀想とか言ってやらないフェミニストかと思ってたのに」
「そうですよ、ルークさん。危険です！」
「せっかくの機会だ、結べるものは結んでおくさ。契約に基づいているから危険も少ないだろうしな。まあ、下僕のように扱う気もないから心配しなくて良いぞ、フェリス」
「…ありがとうございます」
「がはは、この俺様も紳士に扱ってやろう。とりあえず今晩呼び出すから、準備をしておけ！どうだ、嬉しいだろう？」

「……ありがとう……ございます」

こうして二人の主を持つことになったフェリス。片方は当たりだが、もう片方が大ハズレだ。転落人生の第二幕の始まりであった。がはは、と笑うランスと肩を落とす悪魔を見ながら、ルークが一人呟く。

「魔人と渡り合える力…みすみす見逃す訳にはいくまい…」
「ん？何か言った？」
「いや、なんでもない。ところで、後で悪魔を呼び出す魔方陣の書き方を教えて貰えるか？」
「魔方陣？」
「さっき書いていただろ？」
「ああ、あんなもの書く必要ないわよ。カモーン、とか言って呼び出せば飛んでくるわ。レベル神とかと一緒よ」
「……じゃあさっきのは？」
「その方が気分出るでしょ？」
「……」

何となく、ランスがこのロゼを苦手にしている理由が判ってきたルークだった。この性格は、勝てない。

―悪魔の洞窟　一層―

フェリスと契約を結び、洞窟の中に入ったルークたち。因みにフェリスはもう悪魔界に帰った。夜にはランスに呼び出されるようだが。大層な名前の割に大した敵はおらず、特に苦戦もなく先に進む。すると、結界に守られた魔方陣が目の前に現れた。横にはねこのよ

うな生物が浮いている。ルークたちに気づいたその生物は、こちらに話しかけてくる。

「ここは悪魔の通路です。善良な心を持つ人間は通ることが出来ません。速やかにお帰り下さい」

「ロゼ、これは？」

「ああ、簡単よ。横の部屋にある光の神のプレートを踏んづければ結界を通れるようになるの。それで信仰心を調べているのよ」

「仮にも神官の貴女は…もちろん踏んだんですよね」

「当然！」

ロゼに連れられて隣の部屋に移るルークたち。その部屋には確かに床に老人が描かれたプレートが置いてあった。あれが光の神の絵らしい。何やら大層な光を放っている。あれは結構マズイ代物なんじゃないかと思ったルークは、ウィリスを呼び出す。

「レベルアップの儀式ですか？ルークさん」

「いや、そうじゃないんだが、あのプレートは神のウィリスから見ても相当な代物か？」

「へ？…あ、あれは光の神様のプレートではないですか！？お、恐れ多い代物です！！」

「やっぱりか…ランス、それを踏むのはあまりよくな…」

そう声を掛けようとしたルークだが、時既に遅く、ランスは思いっきりプレートを踏みつけ、ぐりぐりと動かし、挙げ句の果てに上でジャンプまで始めた。すると、バキッという音と共にプレートが壊れる。

「がはは、やわな絵だ。壊れてしまったぞ」

「あちゃー…遅かったか…」

「なんてことをー！わ、私は何も見ていません！」

そう言い残し、ウィリスが姿を消してしまう。がははと笑いながら元の結界の部屋に戻っていくランス。シィルとかなみが踏む前に壊れてしまったようで、どうしたものかと悩んでいたので部屋に戻っているように指示を出す。部屋に残ったルークは割れて散らばったプレートを集めて、くっつけることは出来ないまでも見た目だけは元の状態に戻す。そのルークの姿を見て、同じく部屋に残っていたロゼが声を掛ける。

「あれ、ルークさん信心深い人？ＡＬ教？」
「そういう訳ではないんだが…このプレートはなんかマズイ気がしてな」
「冒険者の勘？」
「そんなとこだな」

なむなむと手を合わせた後、ルークとロゼも結界の部屋に戻っていく。そのとき、プレートの部屋から声が聞こえた気がした。

「許さん……あのランスとかいう男、必ずバチを与えてやる……」

部屋に戻ったルークたち。まずランスが結界を通り、その後ルークが結界を無効化して通る。ロゼも既に踏んでいるため難なく通るが、シィルとかなみは踏んでいないため通れない。ルークがねこのような生物に、ランスがプレートを壊してしまって踏めなくなってしまったと言い訳をすると、三人が通ったことで善良な心の持ち主ではないと判断したのか、結界を解いてシィルとかなみも通れるようにしてくれた。結界を抜け、魔方陣を目の前にするルークたち。

「ランス様、どうやらワープの魔方陣みたいです」
「ふん、これがカスタムに繋がっている通路だな」
「そう、この先が悪魔の通路。同時にリターンデーモンの住み処となっているわ」
「リターンデーモン？強いのか？」
「強いというより厄介な相手ね。戦おうとするとリターンっていう魔法で洞窟の入り口まで飛ばされてしまうの」
「そんな、それじゃあ通れないじゃないですか」
「何か方法はあるんですか、ロゼさん？」

シィルのその問いに、ふと真剣な表情を見せるロゼ。先ほどまでのふざけた雰囲気とは違う。

「あるわ。たった一つだけ、誰かの犠牲の上に成り立つ、恐るべき手段がね」

誰かの犠牲という言葉に緊張が走る。かなみがゴクリと唾を飲み込み、シィルがランスの背中に抱きつく。そして、ロゼの口からその方法が発せられた。

―悪魔の洞窟　悪魔の通路―

「あっ、ああっ、んっ！さあっ、私が犠牲になっている間に、早く通って！んっ、いいっ！」
「何が犠牲だ。自分が楽しんでいるだけではないか！」

ロゼの乱交を見て悪態をつくランス。ロゼの言うところによると、リターンデーモンは人間の女を性的にいたぶるのが趣味らしく、体

を差し出すことによって悪魔の通路を通して貰えるらしい。口では犠牲と言いながら、喜んで体を差し出すロゼ。

「だが、ロゼがいなかったら通るのは大変だった。そこは感謝しなきゃな」

「確かに…考えただけでも恐ろしいです」

リターンデーモンにいたぶられる自分を想像してしまったのか、かなみが身震いをする。自分の快楽のためとはいえ、結果的にロゼのお陰で通路を通れるようになったのは事実。その事に感謝しつつ、ルークたちは先へ進んでいく。奥にあった階段を上っていくと、光が差し込んでくる。どうやら洞窟を抜けたようだ。階段を上りきったルークたちは爆音を耳にする。やはりカスタムは戦乱の真っ只中のようだ。みんなは無事なのか。周りを見回すと、そこにはルークたちを囲むように女の子たちが立っていた。どうやら本当にカスタムの町の一角に直通だったらしい。囲んでいた少女たちの内の一人が声を掛けてくる。数ヶ月前、よく耳にした声だ。

「ランス、ルークさんも！どうしてここに！？」

「むっ、むちむちの太もも娘が話しかけてきたぞ。俺様のファンか？」

「ランス様、この方はマリアさんですよ！」

「へっ？」

話しかけてきたのはマリア・カスタード。数ヶ月前、カスタムの事件で共に協力し、強敵ラギシスを打ち破った懐かしい仲間だ。悲しそうな顔でランスを見つめる。

「私よ、マリア・カスタード。ランス…忘れちゃったの？」

「なんだ、マリアか。髪型が変わっていたから一瞬判らなかったぞ。

ちゃんと俺様の許可を取ってから髪型を変えろ」
「もうっ！どうしてわざわざランスの許可を取る必要があるのよ！」

マリアは髪型を変えていた。まだ幼さが残っていたサイドポニーを止め、肩くらいまでの長さに下ろした髪型になっている。服装もワンピースから作業着のような色気の少ないものになっている。

「久しぶりだな、マリア。少し大人っぽくなったかな」
「えへへ、ありがとうございます。ルークさん」
「あ、こら。俺様の女に色目を使うな！」
「もうっ、誰がランスの女よ！」

階段から抜け出したルークたち。口論を始めるランスとマリアだが、マリアの表情はホッとしたものになっている。戦乱の中、ランスたちの顔を見て安心したのだろう。その時、近くで爆音が響き、同時に少女が走ってやってきた。

「マリアさん、東のランさんの部隊に攻撃が集中していて、危険な状態です」
「そんな、すぐに救援を…あ、ルークさん！」

―カスタムの町防衛線　東の部隊―

「ランさーん、もうみんなボロボロですー！」
「くっ…ここに来て攻撃を集中してくるなんて。もうすぐ撤退まで追い込んでいるのに…」

トマトの報告に、部隊を指揮するランがつい弱音を吐く。防衛軍

の働きにより、ヘルマン軍を撤退寸前まで追い詰めていたが、残っていた兵を集中させ、一点突破を狙ってきたのだ。もう少し、もう少し耐えれば他の部隊の増援が来てくれるはず。その時、後ろから声が聞こえる。西の部隊を指揮していた、ランが信頼を置く少女の声だ。その声に一瞬気が緩む。その隙を、目の前にいたヘルマン兵が突いてくる。

「貰った、死ねぇぇ！！」

「…っ！！」

目の前にヘルマン兵の剣が迫る。後悔しきれない油断。避けることも出来ず、ランが目を瞑る。が、聞こえてきたのはヘルマン兵の悲鳴と崩れ落ちる音。恐る恐る目を開けるラン。そこには戦士が立っていた。この戦乱の中、何度か彼が助けに来てはくれないものか、そう思い描いていた姿。

「無事か？ラン！」

「ルークさん…」

「おお、ルークさんですよ！これで百人力ですかねー！」

トマトも感激のあまり声を上げる。残っているヘルマン兵を真空斬で撃退しようとしたルークだが、突如残っていたヘルマン兵が炎に包まれる。ランでないとするなら、こんな強力な魔法を使用出来る者は、カスタムには一人しかいない。

「火爆破…久しぶりね、ルーク。救援に来てくれたのかしら？」

後ろから掛けられた声にルークが振り返る。緑の長い髪を風になびかせ、その少女は立っていた。

「まあな。無事か、志津香！」
「当然。来たからにはしっかりと働いてよ」
怪我などあるはずないだろう、と不敵に笑う少女、魔想志津香。肩を並べてラギシスを倒した仲間でもあり、共に復讐を誓ったパートナー。こうしてルークは、カスタムの人々と再会を果たすのだった。

第４１話　悪魔との契約（後書き）

［人物］

マリア・カスタード　（３）
ＬＶ　１８／３５
技能　新兵器匠ＬＶ２　魔法ＬＶ１
　カスタム四魔女の一人。カスタム防衛軍の総司令官を務めており、圧倒的な戦力差を覆す活躍を見せている。チューリップ１号の生産も徐々にだが行っており、チューリップ砲火部隊も指揮している。

魔想志津香　（３）
ＬＶ　２３／５６
技能　魔法ＬＶ２
　カスタム四魔女の一人。カスタム防衛軍魔法部隊指揮官。志津香以外はせいぜい炎の矢程度しか使えない者が殆どだが、志津香自身が前線に立ち、それを補ってあまりあるほどの活躍を見せている。

エレノア・ラン　（３）
ＬＶ　２０／３０
技能　剣戦闘ＬＶ１　魔法ＬＶ１
　カスタム四魔女の一人。実戦部隊第一軍指揮官。持ち前の剣と魔法を合わせた臨機応変な戦い方で前線を支える。危うくヘルマン兵の攻撃で大けがを負うところだったが、ルークに助けられる。

トマト・ピューレ　（３）
ＬＶ　１０／３７
技能　剣戦闘ＬＶ１
　カスタム防衛軍所属のアイテム屋店主。実戦部隊第一軍所属。初めこそ不安視されていたが、みるみる内に上達し、防衛軍の中でも

頼りになる人物の一人にまで成長を遂げた。

フェリス　（３）
ＬＶ　－／－
技能　悪魔ＬＶ１
　ルークとランスの二人と契約を結んだ悪魔。以前の失態で降格をさせられ、今は第九階級。しかし、実力は以前の第六階級のままであるため、並の魔人なら同等に渡り合える。

ウィリス　（３）
　ルークとランスを担当するレベル神。光の神のプレートを踏むという暴挙に恐れをなし逃げ帰ってしまう。

ダ・ゲイル
　ロゼが呼び出した第八階級悪魔。田舎弁が特徴。決して高位の悪魔ではないが、降格させられたフェリスは彼の言うことに従うしかなかった。

［モンスター］
リターンデーモン
　悪魔の通路を住み処としている悪魔。実力は悪魔の中では並だが、リターンという厄介な魔法のせいで倒すのが難しい。人間の女を性的にいたぶるのが趣味。

［技］
リターン
　対象をダンジョンの入り口まで強制転移する特殊魔法。攻撃性はないが、避ける手段も少なく、厄介な魔法。

第４２話　変身人間

―リーザス城　ヘルマン軍司令部―

「ふふふ、既にリーザスは、我が手中にあり。そして、もうすぐ自由都市地帯も制圧されるだろう」

玉座に深く腰掛けながら、パットンが高らかに宣言する。部屋には数人のヘルマン兵がいる。隊長や司令官たちは自由都市制圧に出払っているため、パットンの警護をするのは下っ端の兵たちだ。玉座の後ろにはノスとアイゼルが控えている。パットンの言葉を聞いた周りの兵たちから賞賛の声が上がる。

「おめでとうございます。パットン皇子。いえ、もう皇帝とお呼びになった方がよろしいでしょうか？」

「くく、皇帝か。中々に見所のある奴だ、名前は？」

「アイザックと申します」

「ふっ、覚えておこう」

周りにいる兵は全員パットンにおべっかを使っている。元々皇子という立場のため、普段から持ち上げられてはいたが、今は異常なほどだ。誰しもが勝ち馬に乗ろうと必死だった。それを無言で見ている魔人の二人。特にアイゼルの方は、下らないものを見るかのような態度が若干表情に表れている。その二人にパットンが声を掛ける。

「どうした？あまり見ていて面白いものではないかな？」

「……いえ」

「まあ、無理に付き合っている必要はないぞ。お前らもリア王女から情報を聞き出すのに必死なのだろう？魔人の世界を支配するための物の情報をな…」
「！？」

ノスは無表情のままだが、アイゼルの表情が明らかに変わる。この辺りは場数の違いといったところか。それを見たパットンが不敵に笑う。

「見くびるなよ。私が何も知らないと思っているのか？」
「……」
「なあ、ノスよ。その探している物とやらは必要な物なのだろう？」
「…御意」
「はっはっは、好きにするがいい。ただし……私に歯向かうな」

パットンが目を鋭くし、ノスとアイゼルに釘を刺す。二人は無言でそれに応じる。その時、部屋に一人のヘルマン兵が入ってきた。

「ご、ご報告に上がりました」
「何だ、騒々しい。そうか、ようやくカスタムの町を降伏させたのだな？」
「い、いえ…カスタムの町への攻撃は失敗に終わりました」
「……何？」
「敵は、司令官マリア・カスタードを中心に、少数ながら見事な防衛線を展開しています。更に、どこからともなく加勢に現れた冒険者一味がこれまた手強く…」
「言い訳はいい！」

ドン、とパットンが玉座の肘掛けを叩く。報告に来た兵が震えながら、話を続ける。

「ご、ご安心を。既にカスタムの町は包囲しています。次の攻撃で必ずや占領して見せます」
「…前線司令官のヘンダーソンに伝えろ。次にしくじったら、命はないと思え、とな！」

返事をし、報告に来た兵が部屋を後にする。数時間後、この報告を聞いた前線司令官ヘンダーソンは、すぐにカスタムの町に大規模な攻撃を仕掛けることになる。

―翌日　カスタムの町　作戦会議室―

前日、カスタムに到着したルークたちの協力の下、なんとかヘルマン兵を退け一息ついていた一行であったが、今日になって再び、しかも前日よりも大規模な部隊の侵攻準備が進んでいることを知り、緊急の作戦会議を開いていた。部屋の中には総司令官のマリア、各部隊を率いる志津香、ラン、ミリ、作戦参謀の真知子、現町長のチサ、そしてルーク、ランス、シィル、かなみの計十人だ。

「お久しぶりです、ルークさん。救援に来て下さり、助かりましたわ」
「久しぶりだな、真知子さん。まさか作戦参謀とは驚いた。礼ならまだ早いさ。何とかしてヘルマン兵を退けないとな…」
「ええ…防衛軍も限界が近づいていますからね…」

昨日はバタバタしていて顔を合わせていなかったため、軽く挨拶を済ます。シィルやかなみも周りと挨拶を交わしている。特にかなみは初めて会う顔も多いため、自己紹介も兼ねた挨拶をしていた。

程なくしてマリアが部屋の前に立ち、壁に掛けられた防衛軍とヘルマン軍の部隊配置図を手で叩きながら話を始めた。

「さあ、作戦会議を始めるわよ！」

「了解だ。とりあえず敵の規模は判るか？」

「真知子さん、お願い」

「ええ。次に攻めてくる敵の規模は約六千。内訳はヘルマン軍二千とリーザス軍四千といったところね」

「リーザス軍！？一体どうして！？誇り高いリーザス軍が、自主的に裏切るなんてあり得ない！」

マリアに促され、報告を始めた真知子だが、敵軍にリーザス軍が含まれていることにかなみが驚きの声を上げる。志津香がそれに応える。

「敵に洗脳を得意とする魔法使いがいるみたいね。でもこれだけの人数の洗脳、そう離れた場所からじゃ出来ないはずよ。多分、カスタム侵攻の司令部があるラジールにその魔法使いがいるはずよ」

「となれば、そいつを倒せばリーザス軍は丸々味方って訳か？」

「でも、それも容易ではありません。敵は人だけではないんです」

「そう、敵の部隊にモンスターも結構な数が加わってるぜ。最初はモンスターがいる意味が判らなかったが、魔人が手を引いているなら納得がいくってもんだ」

ルークの問いにランとミリが応える。昨日の内にヘルマン軍の裏に魔人がいることをルークたちは話していた。パニックになるのを避けるため、それを知っているのはここにいる面々と元町長ガイゼル、それとミリがうっかり口を滑らせてしまったミルだけだ。チサが不安そうに呟く。

「魔人…私たちは勝てるでしょうか…」
「がはは、チサちゃん。俺様に任せておけ。魔人など相手ではないわ。マリア、カスタム防衛軍はどんな感じなんだ？」
「ミリとランが各１００名を指揮、それと志津香の魔法部隊が３０名ほどと私のチューリップ砲火部隊が約２０名。総勢２５０名といったところね」
「相手は六千だろ。話にならんな。よく持ち堪えてきたもんだ」
「２５０名全てが戦える訳でもないだろ？」
「ええ、今まで何とか防衛してきたけど、傷ついて戦えない人も徐々に出てきてるわ。実際に戦えるのは…」
「多分、１００人もいないわ」

マリアが言いあぐねているのを見かねて、志津香がきっぱりと言う。恐らく、次の侵攻を持ち堪えることは出来ないだろう。だが、ミリがきっぱりと言い放つ。

「ふ、まだまだこれからさ。奴らにカスタムの町を侵略するには、高い血の代償がいることを教えてやるぜ」
「こんな所で死ぬ気はないけど、やるからには少しでも多くの敵を道連れにしてやるわ」

既に次の侵攻を完全に防ぎきるのは難しいことを皆悟っているのだろう。死なば諸共とも取れるミリと志津香の発言を否定する者は誰もいない。この空気を切り裂いたのはランスの笑い声だった。

「がはは、天才の俺様には確実に勝てる作戦が閃いたぞ！」
「本当！？」
「マリア、どうせ碌な案じゃないわよ。聞くだけ無駄」
「何だと！志津香、やはりお前には一度その体に判らせる必要が…」
「ランス、時間がない。どうせこのまま戦っても勝ち目は薄いんだ。

その案を教えてくれ」
「ちっ、まあいい。成功したら町の娘たちにはたっぷりとサービスして貰うぞ！」

こうして、ランスが思いついたという作戦を聞く面々。数分後、部屋に非難の声が飛び交う。

「酷すぎるわ、ランス！そんな作戦、マリアさんが可哀想よ！」
「やっぱり碌な案じゃなかったわね。だから言ったでしょ、マリア」
「ううう……流石にそれはちょっと…」
「ランス様…私もマリアさんが危険だと思います」

ランスに非難が集中する中、顎に手を当てて考え込むルーク。真知子も何か思うところがあるのか、ルークに話しかけてくる。

「…ルークさん、この作戦…意外と…」
「…ああ、妙案だな。一か八か、やる価値はあるかもしれん」

ルークの意外な言葉に驚き、部屋にいた全員が一斉にルークの方を見る。ランスが上機嫌に笑い出す。

「がはは、この作戦の素晴らしさが判るか？」
「ちょっと、ルーク！本気！？」
「マリアに危険を強いることにはなるが…このまま戦っても勝ち目は薄い」
「俺も賛成だ。ランスの作戦に乗ってみるのも悪くない。マリアが一時防衛軍からはずれるのはきついが、このままじゃ負けるだけだからな」
「……これしか勝つ手段がないなら…」
「マリア！？」

ミリもランスの作戦に乗り、マリアも作戦を実行する決意をする。
親友の事が心配なのか、志津香はやはりこの作戦には反対のようだ。
声を荒げる志津香に、ルークが真剣な表情で口を開く。

「大丈夫だ。マリアは必ず守りきる」
「がはは、マリアは俺様の女だからな！任せておけ」
「……傷一つでもつけたら、承知しないわよ！」
「ああ、任せろ。それと、一時的に俺とランス、シィル、マリアの四人が戦線から外れる。かなみ、志津香、ラン、ミリ、苦戦を強いると思うが頑張ってくれ。真知子さんとチサちゃんは後方から援護を」

反対していた面々もルークが賛同したことで納得したのか、強く返事をする。

「任せて下さい、ルークさん！」
「マリアを頼んだわ。何ならランスくらい犠牲にしても構わないわ」
「こちらの事は心配しないで下さい」
「ふ、腕が鳴るな」
「後方支援は私のコンピュータに任せて」
「シィルさんも気をつけて」
「ありがとうございます」

こうして、一行は各々持ち場に着くため、作戦室を後にする。失敗すれば全てが終わる、一か八かの作戦。鍵を握るのはルークとランス、そしてマリアだ。

―ラジールの町　入り口―

占領され、街道を封鎖されたラジールの町。町の入り口にはヘルマン兵が数人立っており、出入りを固く禁じている。カスタム侵攻に向けて、町の中の司令部では着々と準備が進んでいる。でっぷりと太った兵がぶつぶつと文句を言っている。

「育ちが良い僕がなんでこんな下っ端の仕事を…」
「おら、オルグ！サボってんなよ！」
「……ちっ、あんな雑魚兵士、僕が本気になったら…ん、誰か近づいてくる」

オルグと呼ばれた門番が、カスタムの方向から四人の人影が近づいてくるのに気がつく。その内の三人はヘルマン兵のようだ。連れている少女を指差しながらオルグが尋ねる。

「待て、そいつは誰だ？」
「はっ、こいつは敵の司令官マリア・カスタードです。一人で油断して歩いているところを捕獲しました！」
「何？ぐふふ、それが本当なら、こんな面倒くさい仕事ももうすぐ終わるぞ」
「門を開けろ、極悪指導者マリア・カスタードを捕まえてきたぞ！」
「…ちょっと、極悪って」
「捕虜が口答えするな！えーい、こうしてやる！」

マリアを連れていたヘルマン兵の一人がマリアの胸を揉み始める。マリアの顔を確認した門番たちは、特に疑う様子もなく、四人を中に招き入れ、司令室へと連れて行く。そう、これこそがランスの考えた作戦だ。マリアを連れてきたヘルマン兵はルーク、ランス、シィルの三人。カスタム防衛戦時に戦死したヘルマン兵の服を奪い、

カスタムの防衛軍でないため顔が割れていないこの三人がマリアを捕まえて事にしてラジールへと潜入したのだ。目的は司令官とリーザス軍を操っているという魔法使いの撃破。絶対に失敗することは許されない。

―ラジールの町　ラジール家―

ラジールを治めるラジール家の館に案内された三人。どうやらここを司令部として利用しているようだ。出迎えたのはちょび髭を生やしたオカマ言葉の中年男だった。

「ほほほ、でかしたわよ、確かにマリア・カスタード。このつやつやとした肌、間違いないわ」
「ちょっと、触らないでよ！」

これがこのラジールの司令官、ヘンダーソンだ。マリア曰く、以前からこの男から熱烈なラブレターが届いていたらしい。その数１０９９通にも及ぶという。

「うふふ、ヘルマン一の美形、みんなのアイドルであるこの私の誘いをあんなに断るなんていけない娘ね。さ、今からたっぷりと可愛がってあげるわ」
「誰がヘルマン一の美形よ、この変態じじい！」
「おほほほほ、この元気いっぱいなところがたまらないわ。貴方たち、お手柄よ！」
「はっ！ありがとうございます！」

その気持ち悪さから、今すぐにでも斬りかかってしまいそうなラ

ンスをルークとシィルが抑える。まだこの部屋にはヘルマン兵が数名いる。ここで騒ぎを起こせば全て台無しだ。

「スプルアンス、スプルアンスはいる？」

「はっ、ここに！」

ヘンダーソンがそう叫ぶと、奥から甲冑を着込んだ太った男が現れた。先ほどのオルグといい、軍人とは思えないような体型だ。

「マリアのいないカスタム軍なんて赤子の手を捻るも同然よ。失敗は許されないわ、すぐに叩きつぶしておしまい！おほほほほほ！」

「はい、ヘンダーソン様！リーザスの洗脳部隊も投入されますか？既にナースが集団コントロールを出来る状態になっておりますが」

「当然投入よ！地下にいるナースにそう命じておきなさい。町の近くで反抗を続けている傭兵部隊に少し向かわせて、後は全て他のヘルマン軍と一緒にカスタムに向かわせなさい！これでカスタムもおしまいよ！おほほほほ！」

この言葉にルークが無表情ながら反応する。リーザスを洗脳している魔法使いは地下にいるらしい。それさえ倒してしまえば、カスタムに向かうリーザス軍は味方になるのだ。それともう一つ、町の近くで傭兵部隊が戦っているようだ。誰に雇われたかは判らないが、ヘルマン軍と戦っているということは味方になり得る可能性がある。出来れば合流したい。

「じゃあ私は奥の部屋でマリアとメイクラブしてくるから、二時間ほど誰も通しちゃ駄目よ。スプルアンス、後の指示は任せたわよ！」

「はっ、お楽しみを、閣下！」

そう言ってマリアを抱きかかえて奥の部屋へと下がっていくヘン

ダーソン。ご丁寧に誰も入らないように指示を出すおまけ付きだ。千載一遇のチャンス。スプルアンスに一礼をし、ヘンダーソンの後をこっそりと追うルークたち。その時、屋敷にいたメイドに声を掛けられる。

「……もしかして、ルーク様ですか？」

「！？ミーキルちゃんか！スマン、ちょっとこっちへ」

「おい、この美少女は誰だ？俺様に紹介しろ！」

「ランス様、騒ぐと周りのヘルマン兵に怪しまれてしまいます…」

声を掛けてきたのはラジールの町を代々治めるラジール家の娘、ミーキルだ。ラジールの町はラジール家と都市長が協力して治めている町だ。かつてギルドの依頼で何度かこの町に立ち寄ったことがあるルークは、ラジール家とも都市長のアムロとも知り合いであった。ミーキルに事情を話し、同時にあちらの事情も聞く。ヘルマン軍に占領された後、父と母は地下牢に閉じ込められ、自分はメイドとして兵の慰安をさせられていたという。そのミーキルをそっと抱きしめるルーク。

「もう安心していい。必ず、ヘルマン軍は倒す」

「そうだ！ヘルマン兵は残らず俺様が皆殺しにするから、後で精一杯サービスするように！」

「ありがとうございます。ルーク様、ランス様！」

「とりあえずあのオカマ野郎をプチッと殺してくるかな、がはは！」

「あっ、待って下さい。ヘンダーソンの部屋に入るには合い言葉が必要です。「うっきーまるまる」と尋ねられたら、「朝ご飯食べたいな」と応えて下さい」

「…随分と変わった合い言葉だな」

ミーキルに合い言葉を聞いたルークたちはヘンダーソンの部屋の

前までやってくる。部屋の前に立っていたヘルマン兵がこちらに尋ねてくる。

「ん？誰も通すなと言われているが？」

「警護を変わるようスプルアンス様から仰せつかってきた。いざという時のために三人配置した方が安全だからな。あんたは休憩しに行ってくれ」

「そうか？では合い言葉だ。うっきーまるまる」

「がはは、知っているぞ。朝ご飯食べたいなだ！」

「よし、それじゃあ後は任せた」

扉の前で警護をしていたヘルマン兵が去っていく。これで邪魔者はいない。扉を開け、部屋の中に入ると服を脱がされ下着姿のマリアに今正に襲いかかろうとしているヘンダーソンがいた。こちらに気がついたヘンダーソンが不機嫌そうに言ってくる。

「貴方たち、入るなと言っておいたはずでしょう」

「マリア、何とか大事には至ってないようだな」

「がはは、もうちょい待ってから来た方が全裸になっていてよかったかな？」

「もう、ランス！」

「…不愉快ですね。さっきから美しいこの私を無視するなんて…」

「がはは、不男が何か言ってるぞ」

ランスがヘンダーソンを指差し笑う。ヘンダーソンが驚いている隙をついて、マリアが服を掴んでこちらに駆け寄ってくる。侮辱された事に腹を立てたのか、ブルブルとヘンダーソンが肩を振るわせる。

「ぶ、無礼な。この美しい紳士である私になんてことを…」

「美しいのを自負するのはいいが、自分になびかない女をこうして無理矢理犯そうとするのは紳士のする事じゃないな」
「紳士というのは俺様のような者のことを言うんだ！」

ルークとランスにそう言われ、怒りが限界に達したのかスッとヘンダーソンが立ち上がり、こちらに向き直る。表情は先ほどまでのものと違い、真剣そのもの。

「…どうやら私を甘く見ているようね」
「何だ？ただの変態スケベ親父だろ？」
「そうよ！絶対に許さないんだから！」
「ふふふ、ただの親父が、ヘルマン軍司令官になれる訳ないでしょう？」

そう言い放つと、ヘンダーソンの姿が少しずつ変わっていく。足と手の先が、岩に覆われていくのだ。

「まさか、リカーマンか！？生き残りがいたのか」
「そう！私はリカーマンの生き残り。ストーン・ガーディアンに変身するこの能力で、八つ裂きにしてあげるわ！！」

リカーマン。変身人間とも呼ばれる種族で、姿形を変える能力を持つ種族である。数年前、ゼスで実施された異文化撲滅政策により虐殺され、絶滅したと思われていたが、政策よりも前にヘルマン軍に所属していたヘンダーソンは虐殺から逃れていたようだ。

「普通のストーン・ガーディアンとは思わない事ね！数倍の強さよ！！」
「ちっ…」
「ランス様…」

「そんな…」

ヘンダーソンの腕と足が徐々に岩に覆われていく。

「ラ　ポタン　ポタン　ペロ…」

徐々に、徐々に覆われていく。

「ホシトマリノトヒソ　ビィー」

「……ふぁぁ」

ようやく腕は肘の辺り、足は膝下まで岩で覆われた。シィルがあくびを掻いている。

「……ランス」

「……うむ」

「おほほ、後十分ほど待ってなさい！この私の能力で…」

そう言った瞬間、ヘンダーソンの体にルークとランスの剣が突き刺さる。信じられないものを見るような目でこちらを見てくる。

「うっ…卑怯者…変身の呪文の最中に攻撃をするなんて…反則よ…」

「隙だらけだ、馬鹿」

「来世ではもう少し早く変身できるようになるんだな」

おびただしい量の出血をしながら、ヘンダーソンが崩れ落ち、程なくして息絶えた。これで目的の一つは果たした。後は地下の魔法使いを倒すだけだ。その時、部屋の窓から外の景色が見える。町の外、すぐ側で戦っている音が聞こえる。あれが先ほど話に出ていた傭兵部隊。遠目からでも壊滅寸前な事が判る。

「ランス、マリア、シィルちゃん。地下の魔法使いは任せていいか。リーザス兵を操るのに精一杯で大した驚異ではないはずだ」
「ルークさんはどうされるんですか？」
シィルの問いかけに、窓の外を親指で指さすルーク。
「あそこでリーザス兵と戦っている傭兵部隊とやらの加勢に行ってくる」
「集団戦なんだ。貴様一人が行ったところで何も変わるまい」
「いや、戦力としてではなく、伝令だな。あと少し耐えればリーザス兵の洗脳が解け、戦いが終わるっていう事のな。戦いの終わりが迫っていると判れば、それだけで大分持ち堪えられるはずさ」
「ふん、まあ魔法使いは任せろ。ナースという名前からして、女だろう。ぐふふ…」
「頼んだ、出来るだけ早く片付けてくれ。俺もカスタムのみんなも、あの傭兵たちもいつまで持ち堪えられるかは判らんからな」
「任せて下さい。ルークさんも気をつけて！」
そう言って一時的にルークはランスたちと別れる。ランスたちは屋敷の地下を目指し、ルークはヘルマン兵に化けて屋敷を後にし、戦いが行われている町の外へと駆け出す。洗脳されているリーザス軍の手によって、壊滅寸前にある傭兵部隊を救うために。

―ラジールの町周辺　荒野―

一人、また一人と傭兵が倒れていく。決して傭兵たちも実力がない訳ではないのだが、圧倒的な物量に押されている。そして、モチ

ベーションを下げているもう一つの理由がある。

「参ったねぇ。まさか雇われたリーザス軍に襲われるとは…」
「こういうゲスな行動をする国ではないはずだが…ヘルマンに無理矢理やらされているのか？」

そう、この傭兵たちはリーザスに雇われたのだ。リーザス陥落後、国を救うための戦力増強のため、白の軍将軍エクスが雇ったのだった。しかし、仲介役を通して救援に駆けつけてみれば、そのリーザス軍が襲ってきたのだ。これではモチベーションが上がるわけがない。傭兵部隊を仕切るのは二人。モヒカンの男戦士と、赤い甲冑に身を纏った女戦士。ボロボロになりながらも、二人は必死にリーザス軍の猛攻を耐えていた。

「これじゃ、報酬は無しか？プルーペット様になんて言やぁいいんだぁ？」
「ふん、報酬よりも生き延びることが先決だな。しかし…流石に厳しいな」
「おいおい、俺はまだまだ殺したりねぇぞ！」

１０００名引き連れてきた傭兵たちも、既に１００名を切った。周囲を囲まれている為、逃げることも出来ない。年貢の納め時か。諦めにも似た空気が漂う中、ラジールの町の方から一人のヘルマン兵がこちらに駆けてくる。仲間であるためリーザス軍は手を出さず、その男は傭兵たちの前までやってきた。

「なんだぃ、新手か？」
「いや、違う。俺はヘルマン兵じゃない。加勢に来た。それと、あと少し耐えればリーザス軍は正気に戻るはずだ」
「どういうことだ？」

「リーザス軍はヘルマンの魔法使いに操られているんだ。今仲間が魔法使いを倒しに向かっている。あと少しの辛抱だ」

突如現れたヘルマン兵の格好をした男の言葉に驚きを隠せない二人。

「どうする？信じるか？」

「ふ、わざわざこの状況で嘘を言いに来る奴もいないだろ。判った、救援感謝する！」

「あーあ、でも国がこの状況じゃ、報酬は期待できそうにねぇな」

「いや、そんな事はないぞ。どうせこのまま帰ってもほぼ無報酬だろ？このままリーザス解放戦に協力してくれないか？成功したらリーザス王女からたんまりと報酬が出るぞ」

「何だ？随分と大口を叩くな？」

「ま、一応知り合いなんでな。王女も侍女もそういうのにケチな性格でもないし、一応口利きをしてもいいが」

意外な返答に目を見開く二人の傭兵。モヒカンの男が問いかけてくる。

「おいおい、あんた思ったより大物か？」

「そんなんじゃないさ、ただの冒険者だ。偶然知り合う機会があってな」

「ふ、乗った。どうせこのまま帰ってもプルーペットの奴に小言を言われるだけしな」

「まだヘルマン兵を殺し足りないと思ってたところだ。俺も乗るぜ！」

「じゃあこれからは仲間だな。短い間だが宜しく頼む」

そう言い合い、武器を握りしめ迫ってくるリーザス軍に向き直る

三人。リーザス解放まで約束を取り付けたんだ。ここで死ぬのは傭兵としても、口利きを約束した者としても契約違反だ。

「俺の名はルーク・グラント。リーザス解放のために動いている」
「ルイス・キートワックだ！しばらくの間世話になるぜ！」
「セシル・カーナだ。宜しく頼む」

―カスタムの町防衛線―

「ルークさんに任されたんです！ヘルマン軍はそこまで迫っていますが、みなさん、張り切っていきますよ！！」

トマトが部隊の仲間たちにそう宣言する。ルークに声を掛けられてから、明らかに張り切っている。誰がどう見てもルークに何かしらの感情を抱いているのはバレバレだった。かなみがため息をつく。

「やっぱりルークさんって…もてるんだなぁ…アイスでもそんな事聞いたし…」
「かなみさん…で、よかったわよね？」

後ろから声を掛けられる。振り返ると声を掛けてきたのは魔法部隊を指揮する魔想志津香。先ほど作戦室で自己紹介をした相手だ。その時はクールだけど優しそうな女性と思ったが、何故か今は、口は笑っているのに目が笑っていない。

「はい、かなみで合っています。志津香さん、何か用ですか？」
「いえ、ちょっと面白いことを耳にしたものだから気になってね。今の話、少し聞かせて貰ってもいいかしら？」

「今のって…ルークさんの事ですか？」
「そう。アイスの町でどんなことを聞いたのかしら？」
「その…ギルドの人に…よく告白されていたとか…ひ、一晩限りの関係をよく持っていたとか…聞きまして…」
「……へーえ」

―ラジールの町周辺　荒野―

「…急に寒気が」
「おいおい、戦いの最中に倒れないでくれよ？」

第４２話　変身人間（後書き）

［人物］

ミリ・ヨークス　（３）
ＬＶ　２０／２８
技能　剣戦闘ＬＶ１
　カスタムで薬屋を営む女戦士。実戦部隊第二軍指揮官。指揮官には向いていないとは本人の談だが、前線で颯爽と戦うその姿に他の者たちも引っ張られる形となり、中々に良い形に収まっている。

チサ・ゴード　（３）
　カスタム町長。父親の後を引き継ぎ、精一杯頑張っている。防衛戦では戦えないながらも、手当や炊き出しなど奔走している。

芳川真知子　（３）
　カスタムの町の情報屋。防衛軍作戦参謀。コンピュータを駆使した作戦は、素人とは思えぬ働きを見せる。ルークと久しぶりの再会を果たし、内心はかなり喜んでいる。

ルイス・キートワック
ＬＶ　２３／３９
技能　剣戦闘ＬＶ１
　腕利きの傭兵。プルーペットという商人を仲介役としている。恩義があるようで、彼には頭が上がらないらしい。殺しに快楽を覚える危ない性格だが、義理堅く、受けた依頼を途中で投げ出すこともない。才能でこそセシルに劣るが、傭兵稼業はルイスの方が長く、経験でまだルイスの方が上回っている。

セシル・カーナ

ＬＶ　２１／４２
技能　剣戦闘ＬＶ１
　腕利きの傭兵。プルーペットという商人を仲介役としている。紅の天使の異名を持つ実力者で、女としてではなく戦士としての評価を欲している。ミリとは親友の間柄。

ミーキル・デバ・ラジール
　ラジール家の娘。ヘルマンに慰み者になり、人生を諦めていたが、ルークたちに助けられ希望を取り戻す。

ヘンダーソン
ＬＶ　１２／１８
技能　変身ＬＶ１
　ヘルマン第３軍司令官の一人。気持ちの悪いオカマだが、カスタムの町侵攻を指揮していた。絶滅したと思われていたリカーマンであり、変身能力を有する。変身できていれば強敵であった。

スプルアンス
　ヘルマン第３軍小隊長。ヘンダーソンの忠実な部下で、カスタムの町侵攻を前線で取り仕切る。豚のような醜い姿をしている。

アイザック
　ヘルマン第３軍小隊長。パットンの護衛に残っていた下っ端の中では一番偉い存在。評議員のハンティに憧れており、いつかカラーの恋人が欲しいと思っている。

オルグ
　ヘルマン第３軍一般兵。スプルアンスに負けず劣らず、見にくい豚のような姿。生まれが良いらしく、自分の階級にいつも愚痴を言っている。

［技能］

変身

自分の姿を変身させる技能。自分より強い者に変身することも可能。変身出来る時間は対象の強さで変化。

第４３話　リーザス解放軍

―ラジールの町周辺　荒野―

「ぎゃっはっはっは！死ね、死ね！死んじまぇい！！」

叫びながらルイスが愛用の剣を振り回す。握る箇所以外は余計な装飾が付いていない、ただ斬ることだけに特化した珍しい剣だ。敵を殺すのに最適な形を考えルイス自身が特注したものだ。チンピラ風の見た目に反し、ルイスの実力は本物であった。押し寄せてくるリーザス軍を次々に斬り伏せていく。

「油断するな、あと少し耐えれば戦いは終わる！」

周りの傭兵に檄を飛ばしながら、セシルが華麗に舞う。数に劣る傭兵部隊がここまで耐えきれているのは二つ理由がある。一つは、洗脳されているリーザス軍は深い思考の基で戦うことが出来ず、攻め方が単調になる。そしてもう一つの理由を迫ってきた男兵士を峰打ちで気絶させながらルークが呟く。

「赤の軍だったらここまで耐えきることは出来なかっただろうな」

「それが不幸中の幸いというものだ」

ルークたちを取り囲んでいるリーザス兵が纏っている鎧の色は白。カスタム侵攻のため、ラジールにいたリーザス軍は二部隊。黒の軍と白の軍だ。その内、黒の軍全部隊と白の軍の大半はカスタムに向かい、残りの白の軍が傭兵部隊討伐にやってきたのだ。白の軍、この軍は情報戦に長けた軍であり、戦力としては他の色の軍に劣って

いる。勿論、有事の際には遊撃部隊もこなすため決して弱い訳ではないが、ルークと残っている傭兵部隊を壊滅させるには決め手に欠けていた。ルークも疲弊しきっている周りの傭兵に檄を飛ばす。

「冷静に戦え！情報戦特化の軍の単純な攻撃、こんなので死んだら傭兵の名が泣くぞ」

周りを鼓舞するため、あえて白の軍を貶めるような事を言う。だが、効果は絶大。元々ルイスのように血の気の多いものが大半の傭兵たちは、この言葉に奮起した。これならまだ耐えられる、ルークがそう思った瞬間、今まで迫ってきていた兵たちとは比べものにならない速さの剣戟がルークを襲った。すんでのところを妃円の剣で受け止め、相手を見る。それは女性であった。その目は洗脳によって濁っているが、整った容姿。シィルと同じピンク色の長い髪を風になびかせながら、再度ルークに剣を振るう。それを躱しルークも剣を振るうが、相手もそれを躱す。深い思考が出来ないはずの洗脳兵がここまでの動きを出来るのは、本能によるものだろう。それだけで、目の前の女性が普段からどれほど鍛錬を詰んできたかが判るというもの。

「情報戦特化の白の軍とはいえ、流石に本物の一人や二人いるものだな。ランス、急いでくれ。これほどの猛将、ここで殺すには惜しい」

ルークは知らなかったが、目の前に対峙するのは、白の軍副将ハウレーン。これほどの剣戟を受けながら、自分が負けるのではなく、相手を殺すのが惜しいと平然と言ってのける。ハウレーンの剣を捌きながら、ルークはランスが洗脳を解いてくれるのをひたすら待った。

―ラジールの町　ラジール家　地下―

「ランス様、女の人です！」
「がはは、見つけたぞ、あれがナースちゃんだ！」

地下に潜ったランスたちが見たのは巨大な鍾乳洞。屋敷の地下にこんなものを作れるということは、相手にも相当の魔法使いがいる。それが今リーザス軍を洗脳しているナースなのか、はたまた別の魔法使いなのか。中は迷宮のようになっており、ナースを見つけるのに相当の時間が掛かってしまっていた。なんとか鍾乳洞の最奥の部屋まで辿り着いたランスたちは、部屋の中央で座禅を組んでいる赤い髪の魔法使いを発見する。あれがリーザス軍を洗脳している魔法使い、ナースに間違いないだろう。よほど集中しているのか、ランスたちが部屋に入ってきたことにすら気がついていない。

「ランス様、この方の集中を止めればリーザス軍の洗脳が解けると思われます」
「よし、シィル、マリア！ちょっとそこで見張りをしていろ」
「へ？」
「まさか…」
「紳士の俺様が暴力で集中を乱すのは似合わないな。では…あの手段しかあるまい…ぐふふ」

イヤらしい顔をしてナースに近づいていくランス。悲しげな顔をして後ろを向くシィルとその様子を見てため息をつくマリア。マリアもシィル同様後ろを向こうとしたが、その時ナースの左右に置いてある二つの水晶が目に飛び込んでくる。

「（…あれ？あの女よりもあっちの水晶の方が強い魔力を…）」
「お、なんだ、マリア？混ざりたいのか？」
「ば、馬鹿！そんな訳ないでしょ！」

ランスの言葉に、ふん、と後ろを向くマリア。数分後、部屋にナースの悲鳴が響き渡った。後ろを向いていたマリアは気がつかなかったが、悲鳴が響く瞬間、左右の水晶にヒビが入り、音もなく砕け散っていたのだった。

ーラジールの町周辺　荒野ー

「…はっ！私は…」

ルークに迫っていたハウレーンの剣が止まる。攻撃を止めたのはハウレーンだけではない。周りのリーザス軍が一斉に攻撃を止め、ざわつき始めたのだ。ルイスがルークに尋ねてくる。

「旦那ぁ？こいつはどういうことだ？」
「…ランスだ！どうやらリーザス軍の洗脳が解けたみたいだな」
「ふぅ、やれやれ。これで一息つけるか」

そう言いながらセシルがルークに向けて手を差し出す。

「重ね重ねになるが、感謝する、ルーク殿。貴方がいなければ持ち堪えられなかっただろう」
「こちらこそ、今後のリーザス解放戦でも協力して貰えるんだ。頼りにしているぞ」

固い握手を結び合う二人。周りでは傭兵たちが歓喜の声を上げており、洗脳から解けたリーザス軍が傭兵たちに謝罪をしている。どうやら洗脳されている間の記憶も、朧気ながら残っているようだ。厳しい戦いはこれからが本番だが、ひとまずこの戦況を乗り越えたことを全員で喜び合うのだった。

「ところでルイス。その旦那って呼び方は何とかならないか？お前の方が年上だろ？」
「けっけっけ。一応雇い主になるわけだからな。ルークの旦那って呼ばせて貰うぜ」

―カスタムの町防衛線付近　荒野―

「来たわ！ヘルマン軍よ！」
「ルーク、間に合わなかったの…？」

忍者のかなみがいち早くこちらに向けて進軍してきたヘルマン軍をその目に捕らえる。連れているリーザス軍の洗脳が解けている様子はない。作戦は失敗したのか。その報告を受けた面々に緊張が走る。

「ふふふ、ヘンダーソン殿下の仰られた通り、今のカスタムなぞ赤子の手を捻るも同然よ」

カスタムの町へ向けて進軍をしているヘルマンリーザス合同軍。その指揮を執るのはヘンダーソンの側近、スプルアンスだ。

「スプルアンス様。カスタムの町を滅ぼしたら、その後はお楽しみって事でいいんですよね？」
「ああ、男は殺し、女は犯し尽くせ。これほどの抵抗を行った見せしめにもなる」
「流石、スプルアンス様は話が分かるぜ！」
下卑た笑い声を上げるヘルマン兵。スプルアンスが側にいた年のいったリーザス兵の頭をぽんぽんと撫でる。
「くくく、リーザスの猛将、バレスもこうなってはただの耄碌ジジイだな」
「はっはっは、ナース様の洗脳は完璧ってもんだ。あの猛将がただの耄碌ジジイになっちまうんだからな！」
「……確かに、儂も耄碌したものじゃな…」
頭に手を乗せていた目の前の老兵、リーザス軍総大将バレスが静かに呟く。瞬間、スプルアンスは異変に気がつく。洗脳されているはずのリーザス兵が何故喋れるのだ。だが、スプルアンスがその答えに到ることはなかった。答えに到る前に、バレスによって首を飛ばされたからだ。
「目の前の敵をみすみす見逃していたのだからの！皆のもの、目を覚ませ！ヘルマン軍を打ち倒すのじゃ！！」
響き渡る怒声。洗脳から解けたリーザス軍が、ヘルマン軍に襲いかかったのだ。虚を突かれた形になったヘルマン軍は次々に打ち倒されていく。
「！？リーザス軍がヘルマン軍と戦っている！」

「どうやら間に合ったみたいだぜ！」
「ならばこちらも援護しましょう！突撃！」
「おー！張り切っていきますよー！」

リーザス軍の洗脳が解けたのを確認したカスタム防衛軍も動く。カスタムに侵攻してきていた兵の内訳は、ヘルマン軍２０００に対しリーザス軍４０００。これにカスタム防衛軍も加わり、ヘルマン軍は壊滅した。リーザス軍は即座にラジールの町に引き返し、町に残っていたヘルマン軍も打ち倒す。こうして、カスタムの危機は去り、ラジールの町は解放されたのだった。

―ラジールの町　司令部―

「ルークさん、お疲れ様です！」
「かなみたちも、無事で何よりだ」

ラジール解放に成功した一行は、ラジールに簡易の司令部を作った。洗脳から解けたリーザス軍とカスタム防衛軍が合流し、新たにリーザス解放軍と名付けられた。ルークが司令部に入ってくるとかなみが声を掛けてくる。今この部屋では、今後に向けての作戦会議が行われていた。部屋にいるのは各代表者たち。リーザスからは黒の軍将軍バレス、副将ドッヂ、サカナク、ジブル、白の軍副将ハウレーンが出席していた。ハウレーンの隣に空席がある。白の軍将軍がまだ来ていないようだった。カスタム防衛軍側からは司令官マリアと、部隊を率いるミリ、ラン、作戦参謀の真知子。これにルークとかなみが加わり、部屋の中には計十一名。ルークがこの場にいないのが不思議な二人の話題を出す。

「マリア、ランスと志津香はどうした？」
「ランスはそんな会議面倒くさいからパスだって。志津香は疲れたから寝るって。今までカスタム防衛で一番頑張っていたのは志津香だから目を瞑ってあげて」
「魔法は集中しなきゃならない分、精神的負担も大きいしな。ま、いいさ」

ランスと志津香が欠席している理由を聞き、納得したように席に着くルーク。すぐに思い出したように言葉を続ける。

「そうだ。申し訳ないが、後で誰かランスの部屋に行ってくれる人を捜してくれないか。作戦前に、成功したらたっぷりサービスするようにとか言っていたからな。こういうことを反故にするとヘソを曲げかねん」
「ガキかよ」
「ま、大きい悪ガキって感じだな。だが、頼りにはなる。ヘソを曲げられて、部隊を抜けられるのは困るからな。最悪、町で娼婦を買ってきてカスタムの娘だと名乗らせても構わん。誰もお礼に行かせないのだけはちょっとマズイ」
「しゃあない、俺が行くか」
「スマン、ミリ」
「なぁに、解放してくれたことには感謝してるしな」

気にするな、と手で合図をするミリ。これでランスがヘソを曲げることもないだろう。程なくして会議が始まる。前に立つのは両司令官のバレスとマリア。まずはバレスが謝罪の言葉を口にする。

「リーザス総大将、バレスじゃ。操られていたとはいえ、リーザスの為に戦ってくれていた人たちに刃を向けたこと、真に申し訳ない。この非礼、儂の首を持って許していただきたい…」

いきなり剣を抜きだしたバレスをマリアとハウレーンが慌てて止めに入る。

「止めて下さい！償いたいって言うのなら、一緒にリーザス解放のために戦って下さい！」

「父上…いえ、バレス将軍！そんなことをしても、リーザスの為になりません！」

「だが…」

「バレス将軍。リア王女を見捨てる気か？捨てた命であるなら、もう一度リア王女の為に捧げてくれ。貴方の力が必要だ」

気がつけばルークもバレスの前に立っていた。剣を持つ手を取り、バレスの目をジッと見る。頭を下げ、剣を仕舞うバレス。

「……ルーク殿と言ったか。恥の上塗り、かたじけない。…迷惑を掛けたが、もう迷いはない。共に戦わせていただく」

「ああ、これから宜しく頼む」

席に引き返そうとするルークに、白の軍副将ハウレーンが一礼をする。先ほど父上と言っていたことから、バレスの娘なのだろう。手で合図をし、黒の軍副将の三人とも一言ずつ交わした後、会議が再開する。

「騒がせてしまい申し訳ない。これから我々はヘルマン軍からリーザスを解放するため、戦争を仕掛けることとなる」

「これは正義の戦いよ。悪のヘルマン軍を絶対に許す訳にはいかないわ！」

「おもしれーじゃねえか。ここでヘルマン軍を叩いておかないと、いずれまたカスタムの町に攻めて来やがるからな。徹底的にやって

やろうぜ！」
「そうですわね。それに、最早この戦争はリーザスやカスタムだけの問題では無い。魔人が絡んでいる以上、世界の命運をも握っていると言っても過言では無いわ」
「捕まっているリア王女様も助け出す必要がありますし…負けられませんね。」

マリアの言葉にミリが奮起する。真知子とランも決意を新たにし、会議に臨む。リア王女の名前を聞いたバレスがかなみに一礼をする。

「かなみ、良くやってくれた。お主がいなかったら、今のこの状況はない」
「いえ、私なんか…リア王女をみすみす敵に…」
「いや、あの場ではそれが最善の策であったのだろう。リア王女とマリス殿がそう決断したのだ」
「あの二人なら判断を間違えるということもないだろう。気にするな、かなみ。必ず助け出す」
「…はい！」
「マリア。現状は？」
「私たちの軍は、カスタムの軍２００とリーザス軍４０００、傭兵部隊８０。リーザスの内訳は黒の軍１０００、白の軍５００、及び市民兵が２５００よ。これなら十分やれるわ！」

マリアが現状を報告する。リーザス軍に襲われていた傭兵部隊はかなり損耗し、戦える人数は１００を切っていた。カスタムの人数に引っかかったルークがマリアに問う。

「カスタムの戦える人数は１００を切っていたんじゃなかったのか？」
「ロゼさんが町に戻ってきてくれて、治療をしてくれているの」

「ロゼが？」

悪魔の通路で別れたロゼは、あのまま引き返したと思っていたのだが、どうやらカスタムにやってきて治療をしてくれたらしい。どういった心変わりだったのだろうか。

「対するヘルマン軍ってのはどの程度いるんだ？」

「うむ…儂が答えさせて貰おう。リーザスを占領しているのはヘルマン第３軍。その数１万。それに加え、洗脳したリーザス兵を儂らの他にあと１万と、魔物によって構成されたモンスター部隊２万。計４万。」

「なんて数…これでは…」

「心配召されるな、ラン殿。恥ずかしながら我が軍のように洗脳されたリーザス兵は、その洗脳を解けばそのまま味方になります。また、城に居らず洗脳を逃れた兵が、各地で抵抗を続けている」

「ええ、その人たちを加えて軍を強化していけば、必ず勝てるわ！それに、私たちには秘密兵器チューリップ３号がある！」

ナースの他に各地にリーザス軍を洗脳している魔法使いがいるらしい。少し考え込むルーク。心配そうに顔をのぞき込むかなみだが、思い至ったのか、口を開く。

「……捕らえたナースにヘルマン兵を洗脳させることは可能か？」

「ルーク殿！？それは騎士道に…」

「ハウレーン、申し訳ないがそれを問答している段階は過ぎている。リーザス奪還のために手段を選んでいる場合ではない」

「その意見には僕も賛成ですが、どうやら無理みたいですね」

ルークとハウレーンの会話に一人の男が割り込んでくる。言葉を発したのは丁度司令部に入ってきた男。白い甲冑を身に纏い、軍人

には珍しくメガネをかけている。

「遅くなりました。白の軍将軍、エクス・バンケットです」

「ルーク・グラントだ。他の者の自己紹介は後にしよう。無理というのは？」

「ええ、僕が遅れていたのはそのナースの尋問に立ち会っていたからなのですが、どうやら彼女の魔法で操っていたのではなく、アイゼルという魔人に貰った水晶の力で操っていたということのようです」

「……っ！」

魔人の名前を聞き、一瞬顔をしかめるが、すぐに元に戻し、会話を続ける。

「やはりか。ゼスならともかく、これほどの魔法を使える者がヘルマンにそう何人も居るはずはないと思っていたが…」

「ええ。魔人の力によるものです。利用できれば大きな戦力になったのですが、水晶は既に割れてしまい、使い物にはなりませんでした。それと、都市長が挨拶をしたいとお見えです。会議中ですがすぐに終わるとのことなので通しましたよ」

そう言ったエクスの後ろから都市長のアムロと、秘書のレィリィが現れ、一礼する。

「ラジールの町、都市長のアムロでございます。このたびはこの町を救っていただき、ありがとうございました」

「町の者、皆が感謝しております。ラジールの町はリーザス解放軍を全面的に支援します。この町には武力はありませんが、必要な資金は可能な限り捻出します」

「おお、かたじけない」

「ありがとうございます！」

アムロとレィリィが代表であるバレスとマリアに全面支援を宣言する。今は少しでも人手が欲しいとき。資金援助の申し出はかなりありがたい。部屋の人たちにも一礼をしていたレィリィがルークに気がつく。

「ルークさん!?貴方も解放軍に?」
「おお、ルーク様。そうですか、貴方がラジールの危機をまた救っていただいたのですな」
「知り合いですか?それにまたとは」

アムロの言葉にエクスがほう、と声を漏らす。

「一年ほど前に冒険者の仕事で町のモンスターを倒しただけさ。お久しぶりです、アムロ都市長、レィリィさん」
「お久しぶりです。謙遜なさらないでください、ルークさん。今でも町の者は貴方に感謝しているのですから」
「依頼をこなしただけさ。資金援助をしていただけるのは非常にありがたい。そこで、取り急ぎやって欲しい事がある。資金で傭兵部隊を…」
「ああ、失礼。それなら僕が既に頼んでおきました。二、三日中に傭兵部隊が千人ほど合流する予定です」
「……早いな。流石は白の軍将軍と言ったところか」
「それが僕に求められている仕事ですからね」

その後、会議は円滑に進んでいった。マリアの秘密兵器というチューリップ3号の完成と傭兵部隊の到着し次第、リーザスに向けて進軍。ひとまずの目的としてラジールとリーザスの間に位置するレッドの町の解放が最優先事項となった。ハウレーンやジブルからす

ぐにでも進軍するべきとの声も上がるが、ルーク、エクス、真知子の三人がこれに反対。レッドの町にはリーザス最強を誇る赤の軍がいるという情報を真知子が得ていたのだ。急がば回れ、負けの許されないこの戦争では確実な勝利のために、あえて数日待つことに決めたのだ。会議も終わりに近づき、バレスが大事なことを決め忘れたと言い、口を開く。

「解放軍のリーダーだが、ルーク殿かマリア殿のどちらかにお願いしたいのですが…」

「えっ！私！？」

「バレス将軍、貴方が一番適任なのでは？」

「いえ、愚かにも敵に操られていた儂がおめおめと総大将に収まる訳にはいきませぬ。ここはカスタムの司令官であるマリア殿か、ラジール解放の立役者でもあり傭兵部隊をまとめ上げたルーク殿が適任かと」

「エクス将軍は？」

「リーザスの総大将であるバレス将軍を僕が率いる訳にはいきませんので」

この場にランスが居れば、バレスはランスにも話を振っただろうが、流石にこの場にいない者をリーダーにするわけにもいかず、ルークとマリアに話を持ちかけたのだ。

「じゃあ…ルークさ…」

「マリアが適任だな」

「へぁ！？」

「私もルークさんが良いと思うのですが…」

まさかの指名にマリアが驚きの声を上げ、かなみがマリアに同意する。

「俺に上に立つほどの器はないし、指揮官としての経験もないからな。総司令官は後衛で全体を見通した方が良い。カスタムを少人数で守りきった経験もあり、後衛であるマリアが文句なしに適任さ」
「ふむ…まあ一理ありますね」
「では、マリア殿！これから解放軍のリーダーとしてお願いします！」
「あはは…えっと、到らないところはあると思いますが、よろしくお願いします！」

こうしてリーダーにはマリアが就任し、会議は終了した。司令室を出ると辺りはもう暗くなり始めていた。流石に戦い疲れたルークも、ランスに習って早めに休むかと宿に向かおうとする。酒場で飲んだくれているというローラがこの町から出ないように見張って欲しいと都市長のアムロには伝えてあるため、急いで会う必要も無い。が、後ろから呼び止められる。振り返るとそこに立っていたのはエクスだった。

「エクス将軍か。何か用で？」
「いえ、協力の感謝と、傭兵部隊を引き繋いでくれたことへの改めての礼を。洗脳が解けた後に僕らが説明をしても、今の今まで襲ってきていた相手の言うことを聞いてくれるかは微妙でしたからね。お陰で仲介役との繋がりも切れず、傭兵の補充を取り付けることも出来ました」
「ま、勝手に解放後の報酬上乗せを約束してしまったがな」
「構いませんよ。今、すぐに、戦力が欲しいのですから。それと、傭兵部隊はしばらく貴方が指揮していただけますか？」
「人の上に立つのは苦手と言ったはずだが？」
「何、とりあえず名目上だけでいいのですよ。実際にはセシル殿が指揮を執っていただけるでしょうし。ただ、傭兵が一番上に立つ部

隊があるというのはあまりよろしくない。普段は冒険者でしょうが、今の貴方は解放軍でも上位に位置する。その貴方が指揮官であるなら、後々文句が出にくくてね」

不敵に笑いながら、メガネの位置を直し、エクスが話を続ける。

「……僕は貴方がリーダーになってくれる事を望んでいたのですがね」

「……マリアの就任には賛成だったんではないのか？」

「反対ではないですよ。ですが、一理あると言っただけで、ベストだとは思っていません」

「俺がベストだと？買い被りすぎさ」

「……僕はそうは思いませんがね。どうです、リーザス解放の暁には白の軍に入隊する気はありませんか？歓迎させていただきますよ」

「悪いな、まだどこかに所属する気はないんだ。これで失礼させて貰う」

そう言って立ち去っていくルークの背中を見送りながら、エクスは陰に隠れ控えていたハウレーンに声を掛ける。

「ハウレーン、どう見ますか？先を見据えて傭兵部隊を繋ぎ止めた手腕、洗脳を有効活用しようとする広い視野、カスタムやラジールの人々からの信頼も厚そうでしたし、僕は適任だと思うのですがね」

「申し訳ありません、エクス将軍。そういった事は私には判りませんが…一つだけ確かなのは、ルーク殿は私よりも遙かに強いということです」

「…ほう？」

「洗脳されていた際、朧気な記憶ですがルーク殿と戦いました。私の剣を難なく捌き続けたあの手腕、恐らくリック将軍とも同等かと…」

「なるほど、リックとですか。ますます欲しい逸材ですね」
「多分、無理ですよ。エクス将軍」
話に入ってきたのはかなみ。不思議そうにエクスがかなみに問う。
「何故そう思うのですか？」
「ルークさん、リア王女とマリス様直々に一度軍に誘っています。それも、副将の地位を約束してです。それでも断られましたから」
「な！？副将の地位を！？」
「ほぅ……」
ハウレーンが驚愕している横で、エクスは更にルークへの興味が増す。白の軍とは言わない、リーザスの為になんとか味方に引き込みたい。そのような思いを更に強くしていた。
宿に向けて一人歩くルーク。先ほどの会議で出た名前を思い出し、一人静かに呟く。
「サテラに続き……アイゼルもか……ホーネット派に何が起こっているんだ……」
その呟きは誰の耳にも届くことなく、夜の闇の中に消えていった。

第４３話　リーザス解放軍（後書き）

［人物］

バレス・プロヴァンス
ＬＶ　３０／３７
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス黒の軍将軍にしてリーザス軍総大将。リアの祖父の代からリーザスに仕える隻眼の名将で、その名は世界中に知れ渡っている。８人の子供がおり、ハウレーンはその内の一人。妻亡き後、男手一つで育ててきたが、少し男勝りな性格に育ってしまったことを悩んでいる。

ドッヂ・エバンズ
ＬＶ　２１／２５
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス黒の軍副将の一人。常に黒い兜で顔を隠しているが、これはリック将軍に憧れて真似をしているだけで、特に深い理由はないらしい。

サカナク・テンカ
ＬＶ　２２／２４
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス黒の軍副将の一人。三人の副将の中では一番年配で、他の二人をまとめる存在。リーザスを思うあまり時に過激な発言が飛び出すこともあるが、全ては愛国心によるもの。

ジブル・マクトミ
ＬＶ　２０／２６
技能　剣戦闘ＬＶ１

リーザス黒の軍副将の一人。真っ赤な髪と太い眉毛ともみあげが特徴。黒の軍の副将は、一人一人の実力は他の軍の副将に劣るが、総大将として多忙なバレスを文武共に補佐している欠かせない人材である。

エクス・バンケット
ＬＶ　１７／２９
技能　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス白の軍将軍。リーザス一の知将と呼ばれており、直接剣を交えるのは苦手と本人は言っているが、そこそこに腕も立つ。四色の将軍の中では最も年が若く、同じく年の若いリックとは親友の関係でもある。ルークに興味を持ち、何とかしてリーザスに来て貰えないものかと考えている。

ハウレーン・プロヴァンス
ＬＶ　２８／３６
技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　リーザス白の軍副将。名将バレスの娘として幼い頃から父の背中を見て育った為、父に似て非常に生真面目な性格となる。騎士として生きることを望んでおり、結婚なども今は考えていないため、普通の女性として暮らして欲しいバレスは頭を悩ませている。

ナース
　ヘルマン第３軍魔法兵。元々は大した実力ではないが、魔人アイゼルから貰った水晶の力によりリーザス軍を操っていた。ナース以外にも他に数人、同様の魔法使いがいるらしい。

アムロ
　ラジールの町都市長。弱気な性格で、ヘルマン軍にすぐに降伏をしてしまったが、町を救ってくれた解放軍に感謝し、支援すること

を決める。ルークには以前町に侵入したモンスターを倒して貰ったことから、恩義を感じている。

レィリィ・芹香
ＬＶ　２／１７
技能　秘書ＬＶ１
　ラジールの町の敏腕秘書。美人秘書だが、寄ってくる男の誘いは全て断っている。密かに都市長のアムロに片思いしているが、アムロには妻がいるため思いを打ち明けられずにいる。

［都市］
ラジールの町
　自由都市。自由都市でも中央部に位置し、各都市との交通が便利なため、中継点として経済は発展している。

第４４話　新パーティー結成

ー翌日　ラジールの町ー

ラジール解放戦から一日が経った。町はヘルマンに占領されていた際に破壊された建物の復旧作業で人が忙しなく動いていた。それを横目で見ながら、ルークはローラが居るという酒場を目指す。歩いていると、目の前にかなみと志津香の姿が見えた。

「おはよう、かなみ、志津香。戦いの疲れは取れたか？」
「あ、ルークさん。おはようございます」
「……ああ、誰かと思えば色男さんね」
「は？」

元気に挨拶を返してくれたかなみとは対照的に、不機嫌そうにそう言ってくる志津香。それを不思議そうに見ていると、突然足を思いっきり踏まれる。

「がっ……いきなり何を……」
「あら、ごめんなさいね。でも、父の復讐に協力するとか言っておいて、何の協力も無しに女の子と遊び回っていた人には良い薬じゃない？」
「（もしかして、私のせい？それに…志津香さんがこんなに不機嫌なのって、もしかして…）」
「一体何の話をしているんだ…？と、そうだ。こんな時だが、これを渡しておく」

踏まれた足を押さえながら、ルークは道具袋の中から紙束を志津

香に手渡す。何かの資料のようだ。

「…これは？」

「ゼスに住むラガール姓の人物の資料だ。この中に篤胤さんの仇に繋がる奴がいるかは判らんがな」

「！？」

志津香が目を見開き、資料をパラパラと見る。そこには四人の人物が載っていた。アスビ、スター、アルプランド、ナギ。最後のナギの資料は少なかったが、他の三人はかなり詳細なことまで書かれている。自分の冒険の傍らにここまで調査をしてくれていたのかと驚く。

「こんなに…いつの間に…」

「ゼスの上層部に知り合いがいてね。色々協力して貰ったんだ。今渡してもリーザスを解放するまでは意味のない代物だが、モチベーションは上がるかと思ったんで、一応渡しておくよ」

ルークの言葉通り、この資料はサイアス協力の下作られたものだ。ナギの調査は未だ進んではいないが、ゼスの住民票に記載されているラガール姓の者を調査し、ジウの町の復興作業を手伝っていたルークにその情報を渡してくれたのだ。

「あ、あの…」

「ん？何か資料に不備があったか？」

「いえ…さっきは遊び回っていたとか言って…悪かっ…」

志津香が何かを言おうとしたその時、ランスがこちらに向けて全力疾走してくるのが見えた。かなみと志津香の後ろまで迫ると、叫びながら思いっきり二人のスカートを捲り上げた。

「なんで昨晩サービスに来たのがミリなんだぁぁぁぁぁ！！」
「っ！？」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

志津香は直に、かなみは下に着込んだ鎖かたびら越しにだが下着が丸見えになる。すぐに目を反らしながら、ルークがランスに向かって応える。

「いや、ミリもカスタムの娘だろ。その言い方はミリに失礼だぞ」
「違う、ミリの身体には何の文句もないが、あいつの相手は疲れるんだ！ええい、マリアに文句言って一発やってやる！」

そう言って司令部の方へ走って行ってしまうランス。その背中を見送ったルークだが、直後場の空気が凍り付くのを感じる。見ればかなみと志津香がこちらを睨んでいる。

「……見た？」
「……見ましたか？」
「いや、丁度目に埃が入って…」
「二人とも可愛い下着だったわねー」
「白とかえるだったな」
「！？ふんっ！！」

つい柄を応えてしまったルークの腹に、志津香が正拳突きを決めて立ち去ってしまう。かなみも顔を真っ赤にしながら走って行ってしまった。ルークが腹を押さえながら、後ろから声を掛けてきた人物に文句を言う。

「ロゼ、変なことを言わないでくれ…」

「あはは。ま、目の保養にはなったんじゃない？」

声を掛けてきたのはロゼ。マリアに聞いたとおり、カスタムでの治療を終え、ラジールまでやってきていたのだ。

「ところで、どうして前線のラジールにいるんだ？悪魔の通路で引き返したと思っていたんだが…」

「そりゃ、より安全なところにいるのが当然ってものでしょ」

「アイスやカンラにいるよりも、ここの方が安全だと？」

「ま、勝ち馬には乗る主義なのよねー」

そう言いながら、ルークを指さす。

「買い被り過ぎじゃないか？だが、治療をしてくれたことには感謝する」

「後でたっぷりと請求させて貰うわよ」

「それはリーザスに頼む。それじゃあ、俺は酒場に用があるんで、この辺で」

「はいはーい。あ、レッドの町に攻め込むならさ、一つお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「あの町にさ、優秀な神官がいるみたいなのよねー。商売敵だから、どさくさに紛れて殺してくれない？プチッと」

「物騒なお願いをしないでくれ…」

―ラジールの町　酒場―

ロゼと別れ、酒場までやってきたルーク。入り口の前に立ってい

た男が、ローラが店の中にいることを報告してくる。アムロとレィリィに頼まれ、監視していた者らしい。一言礼を言い、店の中に入っていく。バーテンハニーの伊集院がルークの顔を見て挨拶に寄ってくる。

「お久しぶりです、ルークさん。聞きましたよ、今回もラジールの町を救ってくれたのは貴方なんですって？」
「なに、ちょっと協力しただけだよ。ところでローラという娘は？」
「話は聞いております。あちらの席です。少しくらい騒いでしまってもこちらでフォローしますので…」
「荒事にはならないよう、努力はするさ…」

そう言って、奥の席に進んでいく。そこではローラとシャイラ、ネイの三人が昼から飲んだくれていた。ローラが飲んでいるのはミルクセーキなので、実際に酔っ払っているのは二人だけだが。

「数日ぶりだな」
「あ、お前はルーク！」
「ええぃ、ここであったが１００年目！」
「止めとけ、そんな酔っ払った状態で俺とやるつもりか？来るなら…手加減はしないぞ」
「「はぅっ…」」

一瞬だけ睨みを効かせると、それだけでシャイラとネイが黙ってしまう。そのままローラの正面に座る。

「……なによ？」
「盗んだ物を返して貰おうか。あれはリーザス王家の大事なものなんだ」
「いやよ！私の大事なリスを奪っておいて、よくもそんなこと言え

たものね！」
「…それは誤解だ。リスは死んでなんかいない。人間になるために旅に出ただけだ」
「そんな嘘に騙されるもんですか！もし生きているって言うのなら、この場にリスを連れてくることね！そうしたら返してやっても良いわ」
「あれがないと、この戦争が終わらないんだ」
「ふん、剣と鎧で戦争が終わるなんて信じられないわ。剣と鎧はある場所に隠したし、その場所は私しか知らないわ。例え拷問されたって場所は話さないわよ。リスのいない世界に未練なんて無いもの！」

頑としてルークの申し出を拒否するローラ。その決意は固いらしく、目を見る限り確かに生半可な拷問程度では話しそうになかった。この状態から口を割らせるには…ローラを殺す覚悟でやらないと難しいだろう。ヘルマン兵ならまだしも、ローラは巻き込まれただけの一般人。出来ればそれは避けたい。リーザス奪還まで成功し、魔人を倒すためにカオスが必要になるその最後の瞬間まで…その手段を使いたくはない。ローラから聞き出すのは難しいと判断したルークは、ちらりと横のシャイラとネイを見る。

「な、なんだよ？やる気か？」

シュッシュ、とシャドーボクシングをするシャイラ。だがその頬には汗が流れていた。二人に睨みを効かせるルーク。

「ちょっと来い」
「「はいっ！」」

素直に応じ、ローラとは離れた奥の席に二人を連れて行く。そこ

で二人を前にし、話を始める。

「確かにな、お前らが俺とランスを恨むのは判る。いや、俺はとばっちりだが、この際置いておくとする」

「はい……」

「だがな、一般人のローラを巻き込むのは酷すぎるだろ？あまつさえ恋人が死んだなんて嘘までついて」

「仰る通りです……」

「だったら、お前らからもローラを説得してくれないか？あの剣と鎧は、この戦争を終わらせる大事な鍵なんだ」

「そ、それなんだけどよ……」

ポリポリと頬を掻きながら、シャイラが口を開く。

「あたしらもさ…恋人が死んだと思い込んで泣いているローラを見て…流石に悪かったかなー、と思って死んでないって教えたんだけどさ…」

「その…慰めてくれるのね、ありがとうってな感じで…全然信じてくれなくて…」

「しかも、あまりにもそんな話が続くもんだから、最近じゃあたしらの事もあんまり信用していないみたいで…」

「剣と鎧の隠し場所…私たちにも教えてくれないの…」

「……最悪だ」

「ええぃ、使えん！！」

「「うわっ！」」

いつの間にか後ろにいたランスが、シャイラとネイの胸を揉む。

突然のことに驚く二人。そのまま二人を引きずっていく。

「悪い娘にはお仕置きだー、がはは！」

「ふざけんな、おい、離せ！」
「いやぁぁ…この前されたばっかりなのにぃぃ……」
「ま、今回は自業自得って事で…南無南無」

連れて行かれる二人に手を合わせるルーク。そのまま酒場を後にし、司令部へと顔を出す。入り口に衛兵が立っているが、ルークは顔パスで通れる。中に入ると、バレスとエクス、ハウレーンの三人がリーザス兵の動き方について会議をしているところだった。

「おお、ルーク殿。どうかされましたかの」
「軍の機密話し中、すまない」
「気にされなくていいですよ。今は同じ解放軍なのですから。むしろ貴方には参加して欲しいくらいですよ」
「リーザス兵の動かし方の作戦会議にか？」
「ええ…きっといつか役立つときが来ますよ」
「ほう…エクス殿。それはもしや……」
「いや、しばらくは来ないさ」

あえてしばらくと言うルーク。誘いであるのは判っていたが、エクスもそれに応じる。

「しばらく…ですか。まあ、今はその辺りで手を打っておきましょう。それで、こちらに寄られたのはどういった用で？」
「ああ、一つ追加の頼みがある。酒場のローラの監視をしているのは聞いていると思うが、その恋人のリス…モンスターなんだが、そいつの足取りも追って貰えるか？同時に、ローラが隠した聖剣と聖鎧の隠し場所も、可能な範囲で捜索を頼む」
「なっ！？人間とモンスターが恋人！？」
「ふむ…承りました。それと、リーザス奪還までどちらも達成できなかった場合は…不本意ではありますが…そういう事でよろしいで

すか」
「……やむを得ないな。だが、ローラは一般人だ。それは最後の手段にしてくれ」
「当然です。僕も女性を傷つけたくはありませんからね」

最後の会話はバレスとハウレーンに聞こえぬよう、小さく話し合う二人。騎士道を重んじる二人には、反対されかねないからだ。

「そういえばルーク殿。マリア殿がルーク殿がこちらに見えられたら、工場の方に寄って欲しいと言ってましたぞ」
「マリアが？判った、行ってみる。邪魔をした」

そう行って司令部を後にするルーク。その背中を見送った後、バレスが口を開く。

「それ程か？」
「ええ、武はリック並み、知は手前味噌ながら僕相当、人の上に立つ器もある。ですが、リア王女とマリス様直々に副将の地位を約束しても断られたようです」
「なんと……ただ者では無いと思っていたが。儂も軍人としてはそう長くはないだろう」
「父上！？」
「ハウレーン、ここではバレス将軍と呼べ。……リーザスでは儂、ヘルマンではトーマとレリューコフ。もう古い時代の人間じゃ。もうそろそろ、世代交代の時じゃろう。儂がまだ現役の内に、是非とも黒の軍に来て欲しいものだ」
「申し訳ありませんが、彼は白の軍が貰いますよ」
「ふふ。この調子では赤と青も狙ってきそうじゃの。リーザス奪還の暁には、一つ勝負と行くか」
「負けませんよ、バレス将軍」

ニヤリ、と笑いあう二人の将軍。その様子を見ながら、ハウレーンは将軍二人にこれほど認められているルークの凄さを改めて目の当たりにし、自分の中での評価も上方修正するのだった。ルークの知らないところで、争奪戦が始まっていた。

ーラジールの町　工場ー

ここはマリアが秘密兵器であるチューリップ3号を作るために臨時で建てた工場だ。狭い工場であり、中は物凄い騒音であった。

「あ、ルークさん！来てくれたのね」
「ここは凄い騒音だな」
「あはは。チューリップ3号を大急ぎで開発してますから」
「ところで、以前から話に出ていたが、そのチューリップ3号というのは？」
「よくぞ聞いてくれました！チューリップ3号というのは…」
「先生。チューリップ3号の事は極秘事項なので、あまり話すのは…」

マリアが言いかけたのを、奥から出てきた黒い髪の女性が止める。彼女もマリア同様メガネをかけており、服もマリアと同じ作業着を着ている。

「ああ、いいのよ、香澄。ルークさんは仲間だし、解放軍の中でもかなり上の人だから」
「マリア、彼女は？」
「彼女は香澄。私の助手で、チューリップ3号開発に大きく関わっ

ているわ」
「初めまして、香澄です」
「ああ、ルークだ。よろしく頼む」

ペコリと挨拶をした後、マリアに指示を受けて作業に戻る香澄。
カスタムの事件後、いつの間にか助手まで出来ていたのかと驚くルーク。

「それでね、チューリップ3号っていうのは物凄い兵器なのよ。ストーン・ガーディアンよりも強固で、ファイヤードラゴンより破壊力がある無敵の戦車なの。これが出来たらヘルマン軍なんか簡単に蹴散らしてやるわ！」
「そいつは頼もしいな。で、俺を呼んだ用っていうのは？」

チューリップ3号の素晴らしさを延々と語っていたマリアだが、ルークの言葉にピタっと止まる。

「あのね、チューリップ3号は動きさえすればヘルマン兵を簡単に蹴散らせるの…」
「ほう、動きさえすればか。以前にも聞いたような話だな。で、燃料か？」
「ピンポーン！流石ルークさん、話が早い！燃料になるヒララ合金が届かないの。烈火鉱山から送って貰える約束になっていたんだけど、鉱山で事故が起こったみたいで…」
「なるほど、それを取りに行って欲しいわけだな。了解だ、他に同行者は？」
「聞いた話だと、鉱山の事故の原因はモンスターみたいなの。みんな次のレッド解放戦の準備に向けて忙しいから、あまり戦力は避けないけど、なんとかミリさんとトマトさんに同行をお願いできたわ。ランス、シィルちゃん、かなみさんも独立部隊だから、六人で行っ

てください」
「ミリか。戦力として文句はないな」
「それじゃあ、お願いします。気を付けてくださいね」

―ラジールの町　入り口―

マリアからの依頼を受け、工場を後にしたルークは、烈火鉱山に向かうメンバーが町の入り口に揃っているという事なのでそこに向かう。ルークの前に既に他のメンバーには話を通していたようだった。ルークが町の入り口に到着すると、既に全員揃っていた。いや、いたのは五人だけではない。何故かセシルもこの場にいた。

「遅れてすまない」
「何、こっちも今揃ったところさ。また一緒に旅が出来て嬉しいぜ」
「ルークさんとこうして一緒に冒険が出来るなんて、感激です！」

ミリがニッと笑い、トマトが右手を振り回しながら大げさに喜ぶ。その横でかなみが赤い顔をしながら俯き、ぶつぶつ独り言を喋っていた。

「…どうして今日に限ってかえるなんて穿いて…いや、それよりもあんな恥ずかしい姿を見られたからには…せ、責任を取って貰うしか…」
「かなみ、どうかしたか？」
「ひゃい！？いえ、何でもないです、ルークさん！」
「？ならいいが、それとセシルはどうしてこの場に？一緒に来るのか？」
「いや、補充の傭兵部隊がいつ到着するか判らないから、それに備

えて町には残るよ。このミリとは親友でな、見送りに来ていただけさ」
「そうだったのか。一応俺がトップにはなっているが、傭兵部隊のことは任せる。ルイスと協力して二人でまとめてくれ」
「了解だ。こちらの心配はいらない。それより、ミリの事をよろしく頼む。前に突っ込みすぎて、怪我をしやすい性格だからな」
「おいおい、俺は猪か？」
「そんなとこだろ」

笑いあう二人。親友だからこその独特の空気がそこにはあった。
ランスとシィルにも話しかける。

「ランスも協力してくれるのか？」
「がはは！ま、俺様の女の頼み事は聞いてやらんとな」
「ランス様は、シャイラさんとネイさんを抱いた直後で機嫌がよろしかったんです」

シィルがそっとルークに耳打ちしてくる。ランスにしては珍しく素直に応じたと思えば、どうやらそういうことらしい。

「じゃあ、そろそろ行くか」
「うむ、さっさとヒララ合金とやらを取ってくるぞ」

そう言ってセシルを残し、門を潜る一行。ラジールを出たところに、一人の少女が立っていた。特徴的な緑の髪に、大きな帽子と風になびいたマント。志津香だ。

「志津香、どうした？」
「私も行くわ。ランスがいたんじゃ不安だしね。後衛もシィルちゃん一人じゃ大変でしょ？」

「なんだと！」
「戦争の準備は良いのか？」
「大丈夫、任せてきたわ」
「…頼りにしてるぞ、志津香」
「任せて」

こうして志津香を加え、七人は烈火鉱山を目指しラジールを後にした。まだ見ぬ秘密兵器、チューリップ３号。その燃料を手にするために。

ーラジールの町　工場ー

「マリア、大変よ！志津香がいないわ！！」
「えっ！？魔法部隊の準備は？」
「それが…こんな置き手紙が…」

工場に慌てて入ってきたランから、マリアは志津香が置いていったという手紙を受け取る。

ーランへ　ちょっと烈火鉱山に行って来るから、魔法部隊の準備はよろしく　志津香ー

「……ラン、頑張って！」
「ただでさえミリがいなくて大変なのに、これ以上は無理よ！」
「大丈夫、ランならやれるって、私信じてる！」

ランの顔が絶望に沈む。こうしてランは、三人分の仕事をする羽目になった。

「私だって…ルークさんと一緒に烈火鉱山に行きたかったのに…くすん」

とぼとぼと工場を後にするランの横を、二人の女性が泣きながら通り過ぎた。

「「うぇぇぇん！覚えてろ、ランス、ルーク！絶対復讐してやるんだからぁぁぁ！！」」

「……誰？」

そのまま町から出て行ってしまった二人を見送りながら、ランはこれからの仕事量を考えて胃が痛くなるのだった。

第４４話　新パーティー結成（後書き）

［人物］

香澄

ＬＶ　６／２４

技能　新兵器匠ＬＶ１

　マリアの助手にして弟子。マリアの才能に憧れ、弟子に志願する。実は彼女自身も類い希なる才能の持ち主で、マリアも彼女を開発主任の立場にし、絶対の信頼を置いている。年齢はマリアと一つしか違わないが、まだ弟子になったばかりなので遠慮しているところがあり、マリアのことを先生と呼ぶ。

伊集院

　ラジールの町の酒場のバーテンハニー。アムロやレィリィ同様、ルークに信頼を置いている。

アスビ・ラガール

　ゼスで洋服店を経営。仇候補。

スター・ラガール

　ゼスで喫茶店を経営。仇候補。

アルプランド・ラガール

　ゼスで大工として働く。元傭兵であるため、仇最有力候補。

第４５話　烈火鉱山

―烈火鉱山　入り口―

ラジールを出て数時間、烈火鉱山に辿り着いたルークたち。採掘場ともなれば、もう少し活気がありそうなものだが、今は人影一つ無い。辺りをきょろきょろ見回しながら、トマトが言葉を発する。

「誰もいないんですかねー？」

「マリアさんに聞いたところ、モンスターが現れて殆どの作業員の方は逃げ出してしまったみたいですよ」

「ランス様、静かですね」

「うむ、人影が無いのは丁度いい。金目になりそうな鉱石があれば拾って置けよ、シィル」

「何馬鹿なこと言ってるの。さ、鉱山の中へ入るわよ」

志津香の言葉に従い、中に入る。モワッとした空気が顔に当たる。鉱山独特の臭いが充満し、気温も高い。ミリが不満を口にする。

「ちっ、あんま空気は良くねーな」

「ああ、こんな場所に長居は無用だ。とっととヒララ合金を見つけるぞ」

「そうね。ヒララ合金は鉱山の奥にあるとマリアは言っていたわ」

「では向かうぞ。俺様の後についてこい！」

「はい、ランス様！」

ランスが先頭に立ち、奥へと進んでいく。少し進んだところで、まだ鉱山に残っている作業員を発見する。

「おい、そこの田舎臭い親父！」
「オラか？おっと、私はラインハルトってもんだ。なんだ、あんたら？」
「ラインハルトさんですかー？顔と全然合ってない名前ですかねー？」
「トマトさん…」
「鉱山で事故があったと聞いてな。約束していた物が届かないから直接取りに来たんだ」
「ああ、第８発掘現場の事故の件か。そういやヒララ合金を送るとか言ってたな。残念だが、そりゃ第８発掘現場でしか取れないぞ。奴ら地底怪獣を掘り当てやがってよ。おかげでモンスターがうじゃうじゃ出没するようになって困っているんだ」
「あんたは逃げ出さないのか？」
「そりゃ逃げ出したら金になんねーからな。それに、私の担当は第６発掘現場だし」
「それで、第８発掘現場へはどう行けばいいの？」
「ああ？よく見りゃいい女ばっかじゃねーか。あんたらがサービスしてくれたら教えてやってもいいぜ。けっけっけ」
「なっ！？」

イヤらしい顔をしながら下品な笑い声を出すラインハルト。女性陣が体を隠しながら侮蔑の視線を送り、ランスが明らかに不機嫌になる。

「……よし、この俺様がたたっ斬って…」
「まあ待て、ランス。今この鉱山に残ってる作業員は殆どいないみたいだし、ここでこの親父を殺すのは時間のロスだ。まあ、任せておけ」

そう言ってランスを制止し、ルークがラインハルトに近づいていく。

「なんだ？男はお呼びじゃねーぞ」

「まあまあ、そう邪険にせずに、話くらい聞いてくれ」

そう調子良く喋りながらラインハルトの首から肩にかけて手を回し、肩を組むような形になる。

「なんだ？何のはな…し…ひっ…」

訝しげにしていたラインハルトだが、ルークの肩から回された手の先、自分の首元にくないが突きつけられていることに気がつく。以前、カスタムの事件の時にかなみから貰っていたくないだ。

「悪いな、時間がないんだ…何なら指を一本ずつ斬って体に聞いてやろうか？丁度作業員も殆どいないことだしな…」

「お、奥のトロッコに乗れば第８発掘現場にいける」

「情報感謝する。人間、素直が一番だぞ。さ、行くぞ」

そう言い残すと、ルークはくないを仕舞ってラインハルトから手を離し、ランスたちのところへ戻ってくる。

「何だ、やってることは変わらんではないか」

「殺しちゃいないさ。ああいう輩には金を払う気にもならん」

「ま、同感だな」

「い、意外な姿でした…」

ランスとルークがトロッコに向けて歩いて行き、ミリとシィルも話しながらその後に続く。後に残された三人の内、トマトがぽつり

と呟いた。

「……ワイルドなルークさんも素敵ですー」
「……そうですね、危険な魅力というか…」
「（ああ、トマトさんだけじゃなくてかなみさんもそうなのね。おモテになることで…）」

―烈火鉱山　トロッコ乗り場―

ラインハルトの言っていた通りに進むと、確かに奥にトロッコが一台あった。これに乗れば事故の起きた第8発掘現場にいけるのだろう。

「よし、トロッコに乗り込んで奥へと進むぞ！」

そう言って一番に乗り込むランス。全員が乗り込んでいくがどうにもトロッコが狭い。

「ランス様、七人も乗ると凄く狭いです」
「確かに、二回に分けて乗った方が…」
「馬鹿者！今は一刻を争うときだ。ぐふふ…」
「……みんな、俺の後ろに回れ」
「？」
「ああ、そう言う事か。俺は前でいいよ。一人もいないんじゃ不機嫌になりそうだ」
「いいのか？悪いな、ミリ」

イヤらしい目つきのランスに何かを察したルークとミリは、出発

前にトロッコ内の位置を調整する。前にランスとシィルとミリ、中央にルーク、後ろにかなみと志津香とトマトという配置になった。

「では出発だ！がはは！」

そう言ってブレーキを外すと、トロッコは奥の発掘現場に向けて滑り出した。少しスピードが出たところでランスがわざとらしく体勢を崩す。

「おおっと、手が滑った！」
「きゃっ！ランス様！」
「おい、尻を触るな」
「がはは、狭いんだからしょうがない！」
「……ああ、そう言う事」
「すいません、ルークさん。気を回して貰って……」
「おかげで助かりましたー」

発車後、ランスが前で暴れ出してから後ろの三人も思惑に気がついたらしく、中央でランスの魔の手が伸びないようにガードしてくれているルークに礼を言う。

「いや、わざわざ礼を言われるような事じゃ…おっと！」

トロッコが急カーブを曲がる際、ルークが体勢を崩す。その右手がトマトの胸に当たってしまう。

「きゃん！ルークさん！」
「あ、すまない」
「ぽっ。…言ってくだされば…ルークさんにだったら私…」
「「ふんっ！」」

トマトがおかしな事を口走ると同時に、ルークの両脇腹に拳がめり込む。

「がっ…んっ？志津香は判るが二人？」

「しまった…つい…」

かなみが思わず手を出してしまっていた。その様子を見て、志津香の中で先ほどの疑惑が確信へと変わっていた。

―烈火鉱山　トロッコ乗り場終点―

「がはは！それでは先に進むぞ！」

トロッコに乗っている間中、シィルとミリ相手にお触りタイムを行っていたランスは上機嫌に先へと進む。ミリはなんとも無いようだったが、シィルはかなり疲れた様子だった。ルークたちも続けて下りるが、突如奥の方から少女の悲鳴が聞こえてくる。

「むっ！美少女の悲鳴だ！」

「急ぐぞ！」

駆け出す一行。少し進んだところで、黄色い巨体のモンスターに少女が襲われそうになっていた。

「きゃぁぁぁ！助けてぇぇ！」

「真空斬！」

「炎の矢！」

「火爆破！」
「はっ！」

遠距離攻撃を出来る面々がそれぞれ技を繰り出し、少女に迫っていたモンスターを倒す。かなみが再度手裏剣を構えながら、ルークに問う。

「あのモンスターは？」
「ちゃそばだ。主に鉱山なんかに出没するモンスターだな。となると、掘り当てた地底怪獣ってのは、ちゃそばクイーンだな」
「ちゃそばクイーン？」
「大量の卵を産み落として、ちゃそばを延々と増やす厄介な敵だ。そいつを倒さないことには永久に増え続けるぞ」
「それじゃ、やることは決まったわね。ヒララ合金の回収とちゃそばクイーンの退治。どうせそいつを倒さなきゃヒララ合金は回収できそうにないし。火爆破！」
「ふん、雑魚どもが。まとめてなます斬りにしてくれるわ！」
「げこーっ！」

モンスターの数は多いが、こちらも手練れ揃い。次々とその数を減らしていく。ミリが襲われていた少女に駆け寄っていく。

「おい、大丈夫か？名前は？」
「は、はい。ありがとうございます。カーナと言います」
「どうしてこんな所に？」
「この鉱山の奥にコーンという私の恋人がいるんです。彼のことが心配で…」
「そうかい。今から一人で引き返すのも危険だな。どこにちゃそばが潜んでいるかも判らないし。俺たちの側から決して離れるなよ！」
「は、はい。お姉様！」

「お姉様？ふ、恋人がいるのに悪い娘だね。後でたっぷり可愛がってやるよ」
「おいミリ、真面目に戦え！ええい、その娘は俺様も狙っていたんだぞ！」
「ランスも真面目に戦ってよね！」
「うふふ、楽しいですね」

かなみが苦言を呈しながら側にいたちゃそばを忍剣で斬る。トマトも憧れていた冒険を出来ることが楽しいようで、笑いながらちゃそばと戦っていた。トマトの戦いぶりを心配してルークは側で戦うようにしていたが、ちゃそば程度なら無理なく渡り合っている様子を見て安心する。

「どうですかー？ルークさん、私の戦いぶりは？」
「素晴らしいぞ。正直、ここまで成長しているとは思わなかった」
「えへへー。ありがとうございます」

不安要因であったトマトが十分強くなっていたため、安心して戦うルーク。程なくしてこの場にいたちゃそばは全滅した。ふう、と一息つきながらルークが口を開く。

「さて、奥に進むぞ。ちゃそばクイーンの周りにはもっと大量のちゃそばがいると思われるから、気を抜くなよ」
「えーい、面倒だ。俺様から素晴らしい提案だ。ヒララ合金は全て壊れていたことにして帰らないか？」
「駄目に決まってるでしょ！行くわよ！」
「カーナ、ついてこい」
「はい、お姉様！」

帰りたがるランスを無理矢理引っ張り、奥へと進んでいく。ルー

クもそれに続くが、部屋の端にキラリと光る何かを見つけ、それを手に取る。なにやら少女の絵が中途半端に描いてある鏡だ。

「これは…？とりあえず持っておくか」

「ルーク、ちょっといい？奥にはちゃそばが大量にいるって言ったわね？奥に着くまで私は戦闘に参加しなくていいかしら？」

「別に構わんが……何かする気か？」

「出会い頭に放つため、ちょっと集中力高めておくわ」

「志津香！貴様一人だけ楽をしようとしているな！」

「ランスは黙ってなさい！後で判るから！」

こうして志津香を欠いたメンバーだったが、特に苦戦することもなく奥へと進んでいった。が、ここまでの戦いでルークが一つ疑問を持つ。他のみんなに気がつかれないよう、こっそりとミリに近寄っていく。

「ミリ、話がある」

「お、なんだ？遂にルークの方から夜のお誘いか？」

「……調子悪いのか？」

「……どうしてそう思った？」

「以前、カスタムの事件の時の戦い方に比べて、明らかに切れが悪い」

「……なーに、ちょっとサボっちまっていただけだ。すぐにレベルも戻るさ」

「ならいいが…無理はするなよ」

そう言って離れていくルークを見ながら、ミリが誰にも聞こえないよう呟く。

「流石にいい男は違うね。いつまで騙し通せるか……お荷物になる

訳にはいかないからね」

そのまま進んでいくとかなり開けた場所に出る。そこでルークたちが目にしたのは、ちゃそばよりも更に一回り巨大なピンク色のちゃそばクイーンと、その周りにある１００を越える卵、そして、５０以上はいるであろう、大量のちゃそばだった。

「気持ち悪いです、ランス様……」
「やっぱり帰るぞ！こんな数と戦ってられるか！」
「大丈夫よ、シィルちゃん。すぐに数は減るから」

そう言って一歩前に出る志津香。見れば両手が赤く染まっている。ここまで来る間に魔法詠唱をし、準備していたようだ。その輝きにルークは見覚えがある。ルークの旧友、あの男が得意としている技。

「使えるのか、志津香！？」
「あら、何を使うかは判っているみたいね。当然、使えるわよ」
「流石だな。みんな、少し離れていろ」

ルークが全員を一歩下がらせる。自分が言う前にみんなを下がらせてくれたことに内心感謝しつつ、志津香が両手を前に出し、魔法を放つ。

「灰になりなさい！業火炎破！！」

両腕から放たれた業火が、部屋の中にいた全てのちゃそばと卵を包み込む。絶叫しながら崩れ落ちていくちゃそば。灰と化していく卵。志津香の魔法が凄いことは知っていたが、ラギシス戦に参加していなかったかなみとトマトは、これほどの魔法を目の当たりにす

るのは初めて。驚きに声を漏らす。

「す…すごいですー」

「なんて魔力…」

「これよりもっと凄い魔法も使えるぞ、志津香は」

「そんな!?それじゃあ、もしかしたらメルフェイスさんやチャカ様よりも上かも…」

「チャカ?……どこかで聞いたことあるような……駄目だ、思い出せん」

かなみが名前を挙げた人物の一人に聞き覚えがあるような気がしたルークだが、どうにも思い出せない。部屋の業火が段々と消えていく。志津香の一撃で、部屋の中にはところどころに焼け跡を残しながらこちらを睨んでくるちゃそばクイーン一体を残すのみとなった。

「あら、流石に親玉は根性あるわね。後はお願い」

「上出来だ!行くぞ、ランス!」

「がはは、ズルしてサボっていたことは許してやるぞ!」

「げこぉぉぉぉ!!」

真っ先に駆け出すルークとランス。子供たちを殺された怒りに燃え、こちらに体当たりを仕掛けてくるちゃそばクイーンだが、我を忘れた単調な攻撃ほど避けやすいものはない。ランスとルークが同時に飛び上がる。

「ランスアタァァァック!!」

「真滅斬!!」

「あはぁぁぁぁぁぁん!!」

二人の必殺技の直撃を受け、それぞれの攻撃箇所が両断される。
丁度右、中央、左と三部位に分かれ、絶叫しながら死んでいくちゃそばクイーン。

「がはは、三枚おろしだ」
「ランス様かっこいいです。ぱちぱち」
「ルークさんもかっこよかったですー！」

全員が駆け寄ってくる。ランスは上機嫌に笑いながら、ヒララ合金があるであろう、ちゃそばクイーンがいた奥へと進んでいく。その後を追うルークたちだったが、トマトがふいにルークに聞いてきた。

「それにしてもランスさんの技とよく似ていますですねー？ひょっとして、二人は生き別れの兄弟とかですかー？」
「やめてください、トマトさん！ルークさんとランスが兄弟だなんて、考えたくありません」
「そうね、考えるだけでもおぞましいわ」

かなみと志津香が全力で否定する中、ルークは心の中で呟いていた。今は亡き、妹に向けて。

「（そうか、やっぱり似ているってよ。聞こえているか、リムリア……お前が育てた悪ガキだ）」

―烈火鉱山　最深部―

「あったぞ！これか！？」

鉱山の最深部に一際輝く鉱石を発見する。以前ピラミッド迷宮で発見したヒララ鉱石によく似ている。恐らく間違いないだろう。ミリがランスの指さす鉱石を見て声を上げる。

「ああ、これだ。マリアから図鑑を見せられたことがある。間違いないぜ」

「そうだったかしら？」

「志津香、親友なんだからもうちょっと真面目にマリアの話を聞いてやれ」

「……放っておいたら五時間くらい平気で訳の判らない兵器の話をされるのよ」

「あー、そりゃすまんかった」

ヒララ合金の発見に安堵する一行だったが、途中からついてきていたカーナが言葉を発する。

「コーンが…どこにもいないの…」

「あっ……」

「ここに来るまでそれらしい人はいなかったわ。部屋の中にも、どこにも……」

「となると答えは一つだな。哀れコーンはちゃそばに食べられてしまったのだ。死んだ恋人のことなんか忘れて、俺様と新しい恋をしないか？」

「ランス、空気を読みなさいよ！」

「コーン……ううっ…」

「……ひとまず、この鉱山を出よう」

ルークがそう言い、帰り木を使用する。瞬時に一行は鉱山の外にワープする。直後、見慣れない男が声を掛けてくる。

「カーナ！無事だったのか？」
「コーン！？良かった、生きていたのね」
「そりゃそうさ、僕は第８発掘現場とは一番離れた第１発掘現場で働いていたんだから。君が第８発掘現場に向かったと聞いて、今から助けに行こうとしていたところさ！」
「ああ、コーン！」
「カーナ！」

ヒシっと抱き合う二人を尻目に、ルークたちはため息をついていた。

「なんて人騒がせな……」
「結局、ただ危険な目に会いにいっただけか、カーナちゃんは……」
「でも、二人が再会できて良かったです」
「良くない！俺様の女になるはずだったのに……」

ランスが悔しがる横で、ミリが静かにカーナに近づいていき、そっと耳打ちをする。

「戦争が終わったらカスタムの町に来な。人騒がせな娘にたっぷりお仕置きしてあげるよ」
「は、はい。お姉様！」
「？どうかしたのかい、カーナ？」
「気にしないで、コーン」

両刀にして百戦錬磨のミリ。この辺りは流石の手腕といったところか。

ーラジールの町　工場ー

辺りも暗くなっていたため、迷惑を掛けた礼ということでカーナの家で一泊した後、ラジールの町へ戻って来たルークたち。マリアの工場にヒララ合金を届けに行く。ヒララ合金を手にした瞬間、目の色を変えて喜ぶマリア。

「これよ、これ！これでチューリップ3号が完成するわ！」
「こら、マリア！まずはこれを取ってきた俺様に礼を言うのが先だろう！」
「ありがとう、ランス。それにみんなも！」
「うむ、それでいい！がはは！」
「マリア、完成はどれくらいだ？」
「一日もあれば完成するわ！任せておいて！」

そうマリアが宣言すると同時に、工場にルイスが入ってくる。

「ルークの旦那はいるかぃ？ちょっと報告が…」
「うおっ！見るからに悪役顔な男が！この俺様が叩っ斬ってくれる！」
「危ねぇ！なんだ、なんだ！」
「ランス、止めろ！そんな顔だが仲間だ！」

ルイスに剣を振りかぶっていたランスを止めるルーク。チッと何故か舌打ちしながら一応剣を仕舞うランス。

「随分と血の気の多い奴だな」
「お前も似たようなもんだろ。で、どうした？」
「ああ、追加の傭兵部隊が到着した。部隊としての準備も含め、ま、

明日には十分戦えるぜ」
「なるほど、丁度いいな。司令部に行ってバレス将軍たちにも伝えるぞ。レッド侵攻は明日だ！」

こうして、レッドの町への侵攻が明日に決定する。最後の準備を進める各部隊。ルークも傭兵部隊の準備に付き合い、司令部で開かれる会議にも参加をする。そんな中、若干問題が発生している所もあった。

「ラン、悪かったわよ。機嫌を直して」
「ふーんだ！」
「ラン、確かに志津香がいなかったらもっと苦戦していた。許してやってくれ」
「つーん！」
「あらあら」

志津香がランに平謝りし、ミリもフォローを入れるがランの機嫌は直らなかった。それをクスクスと笑って見ている真知子。どうしたものかと頭を抱える志津香だが、ミリに妙案が浮かぶ。

「そうだ、この戦争が終わったら俺がルークとの二人っきりの食事をセッティングしてやるよ。それでどうだ？」
「ちょっと、そんなんでランが……」

志津香がミリに苦言を呈そうとするが、ランが面白いほどに釣れる。

「本当っ！やだ、嘘！？何着ていこうかしら！」
「……ランもそうだったの」
「知らなかったのか？見りゃ判るだろ」

「ミリさん……」

そう言われ、肩を叩かれるミリ。振り返ると真知子が笑顔で立っていた。

「私にもお願いします」
「え、いや…」
「お願いします！」
「あ、ああ。判った……」
「はぁ…あの女誑しが…」

一翌日　ラジールの町　入り口一

翌日、町の正門前に来たルークが見た光景は凄まじい物であった。立ち並ぶリーザス軍、カスタム軍、傭兵部隊。その数約５０００。そして、その先頭には巨大な戦車がある。前面にチューリップの絵がペイントされている。その前に立っていたマリアがこちらに声を掛けてくる。

「おはようございます、ルークさん！」
「おはよう。これがチューリップ３号か？」
「その通りです！これが無敵戦車、チューリップ３号！これでヘルマン兵を一網打尽よ！」
「頼りにしているぞ」

そう話をしていると、突如辺りが静まる。バレスたちの方を向くと、丁度演説が始まるようだった。

「諸君！我らはこれより、悪のヘルマン軍からリーザスを取り戻す！覚悟はいいな！」

うぉぉぉぉ、と怒声が鳴り響く。特にリーザス軍のやる気は凄まじいものがある。

「我らが負ける要素は何もない！正義はこちらにある！総司令官ランス殿の下、ヘルマンを打ち破るのじゃ！！」

バレスの後ろからがはは、と笑いながらランスが出てくる。更に沸き立つ兵たち。

「なっ、総司令官だと！？いつの間に……」

「あはは…昨晩私の所に来てね、俺様にやらせないとここで降りるって暴れて…」

「そんな事をしていたのか…まあ、周りでフォローしてやれば問題ないか…？」

バレスからマイクを受け取り、ランスが侵攻の宣言をする。

「がはは、俺様の手に掛かればヘルマン軍などちょちょいのちょいだ！行くぞ、ヘルマンを殲滅だ！！」

周りから大歓声が上がり、皆が武器を取り進軍する。マリアもチューリップに乗り込み、ルークは傭兵部隊の先頭より少し中に入った位置にいく。これより、リーザス解放戦の第一段階、レッド解放戦が始まる。

―ラジールの町近辺　丘の上―

ラジールから進軍していく解放軍を見ている男がいた。ヘルマン兵ではない。ボロボロの服を身に纏い、肩には荷物を抱えている。旅の者といった感じであった。

「風の噂に聞き、リーザス付近まで来てみたが、戦争をしているというのは本当だったのか…」

その時、男の目に一人の戦士の姿が飛び込んでくる。

「あれは、ルーク殿！そうか、あの御仁もこの戦争に…ならば、修行の成果を見せるまたとないチャンス！」

そう言って男は丘を降りていく。目指すはリーザス軍。対峙するためではない。共に戦うために。赤い髪の武闘家は全力で丘を駆けていった。

―レッドの町　司令部―

「フレッチャー指令、無謀にもリーザスの残党が現れました」

リーザス軍がラジールからこちらに向けて進軍していることに気がついたヘルマン兵は、司令官のフレッチャーに報告に来る。でっぷりと太った司令官、フレッチャーは椅子に腰掛けながらニヤニヤと笑う。

「ぶーぶー。それは面白いぶー！力の違いを見せつけて上げるんだ

ぶー！」
「はっ！」

そう言って報告に来たヘルマン兵が部屋を後にする。フレッチャーが横に控える弟子、ボウとリョクに向かって喋りかける。

「ヘルマン軍だけでなく、リーザス赤の軍と魔法軍がいるレッドに攻めてくるなんて、なんたる無謀ぶー」
「その通りです」
「それに、もしこの部屋まで奇跡的に辿り着けた者がいたとしても、絶対に勝てないぶー」
「ええ、世界最強の格闘家、フレッチャー様とその弟子の我ら。そして、今この部屋には…」

ちらりと部屋の片隅を見る三人。そこには二人の騎士が立っていた。洗脳されているリーザス兵。一人は青い髪に赤い甲冑を纏った騎士。赤の軍副将メナド。そして、もう一人。同じく赤い甲冑に身を纏い、顔を覆った兜。その額には「忠」の文字が輝く。世界にその名を轟かす、リーザス最強の騎士。

「くくく…リーザスの赤い死神、リックを打ち破れる者がいる訳ないぶー！」

フレッチャーの高笑いが、いつまでも部屋に響いていた。

第４５話　烈火鉱山（後書き）

［人物］

カーナ・オオサカ
　烈火鉱山で働く恋人がいる少女。恋人が事故に巻き込まれたと聞き、単身救出に向かうが、それはただの勘違いであった。ミリの事をお姉様と呼び、メロメロになる。恋人がいるが、本人曰くミリは女だから浮気にはならないとのこと。

コーン・マーガリン
　烈火鉱山で働く鉱夫。カーナの恋人。事故には巻き込まれておらず、発掘現場に入っていってしまったカーナを心配していた。

ラインハルト
　烈火鉱山で働く鉱夫。大層な名前だが、ただのスケベな中年男。

［モンスター］

ちゃそば
　鉱山などでよく発生するカエル型の独立種族。動きは遅いが体力、腕力が高く、雑魚モンスターとは呼べない強さを持つ。これと渡り合えるトマトの成長は立派なものである。

ちゃそばクイーン
　ちゃそばの上位種。大量の卵を産み落とすため、ちゃそばを駆除するにはまずこいつを倒す必要がある。

［その他］

チューリップ3号
　ヒララ合金を使ってマリアが作り出した世界初の近代戦車。鉄壁の装甲と強力な砲撃を兼ね備えたマリアの秘密兵器。

第４６話　レッド解放戦

―レッドの町近辺　荒野―

レッドの町からそう離れていない荒野。ここにヘルマン軍は集まっていた。ヘルマン兵２０００と洗脳されたリーザス兵４０００、そして大型モンスターを含むモンスター部隊５０００だ。リーザス軍は赤の軍と魔法軍で組織され、数だけ見れば解放軍の二倍以上。だが、ヘルマン軍は油断をしていた。自分たちが負けるはずがないと。だからこそ司令部がある町からそう離れていない場所まで引きつけて、一気に叩こうとしていたのだ。しかし、それは悪手であった。

「へへへ、あんだけやられといてまだ向かってくるなんざ、リーザスの連中はマゾか？」
「ぎゃはは、違いねえ！お、来たみたいだぜ」

下品に笑いながら、ヘルマン兵が遠くから迫ってくるリーザス軍を視界に捉える。まだまだ戦闘が始まるには距離がある。だが、直後に近くで爆発が起こり、さっきまで笑いあっていたヘルマン兵が吹き飛ばされる。

「な、なんだぁ！？」

それは、想像だにしていない距離からの砲撃。軍の先頭を走る巨大な鉄の塊が、こちらに向けて砲撃してきたのだ。その砲身が、再度こちらを向く。

「う、うわぁぁぁぁ！！」

叫びと共にもう一人のヘルマン兵が吹き飛んだ。マリアのチューリップ3号による砲撃は、油断していたヘルマン兵に致命的な混乱を与えた。その隙を解放軍は見逃さない。一斉にヘルマン兵に進軍する。

「がははは！皆殺しだ！！」

チューリップ3号と共にランスが先頭を駆ける。総司令官だというのに隠れるなどということは微塵も考えていない。だが、その剛剣を止められるほどの者はこの戦場にはいなかった。獅子奮迅の活躍を見せる。その姿を見ながら、前線で黒の軍を指揮するバレスが感激に打ち震える。

「おお……あれこそ理想の総大将の姿！ルーク殿だけではない。あのランス殿も素晴らしい御仁じゃ！」

「リーザス軍総大将、バレス。貴様が死ねばリーザスは総崩れだ！死ねぇぇぇ！！」

ランスの方を見ていたバレスにヘルマン兵が迫る。が、バレスは即座に迫っていた剣を柄で弾き、その首を一突きにする。血飛沫が舞い、ヘルマン兵が崩れ落ちる。

「悪いのぉ。ルーク殿やランス殿ならいざ知らず、まだまだお主らごときにこの命くれてやるほど老いぼれてはおらんぞ」

老いてなお猛将。その威風堂々たる佇まいに、ヘルマン軍が怯み、解放軍は奮い立つ。

「バレス将軍の手を煩わせるな！自らの手でリーザスを奪還するんだ！」
「行くのだ、我々の信念のために！」
「訓練の成果、今見せずにいつ見せる！続けぇぇ！！」

ドッヂ、サカナク、ジブルが兵を率いて突撃する。ランスたちと黒の軍の活躍により正面の敵は総崩れとなる。

「あせらないで。しかし油断しないようにね」

左翼に広がるのは白の軍とミリ率いるカスタム第二軍。戦力でいえば一番劣っているとも思われるこの部隊だが、エクスの的確な指示により、当初の予想を覆し、現状最も被害の少ない部隊となっていた。

「行くぞ！遅れを取るな！」

ハウレーンが周りを鼓舞し、自らも華麗に敵を打ち倒していく。その横ではミリが同様に敵を斬る。最前線に立つのは美しき女性二人。負けていられるかと男兵士も奮起する。左翼のボルテージはマックス。が、一人脂汗を流す者がいる。ミリだ。もしこの場にルークがいれば、烈火鉱山の時以上に精細を欠いている動きに気がついただろう。だが、周りはミリの戦いを見たことがないリーザス兵が大半を占める。ゆえに、異変に気がつかない。

「ふぅ……生きて帰れたらいいねぇ……」

その呟きは喧騒の中に飲み込まれていった。

「雷撃！みんな、深追いは禁物よ！」
「とー！悪のヘルマン軍覚悟ですかー？」

右翼に展開するのはルーク率いる傭兵部隊とラン率いるカスタム第一軍。ランが魔法で周りを援護しながら、声を上げる。第一軍に所属するトマトがランの援護を受けながらヘルマン兵と渡り合う。本来であれば流石に正規の軍人相手は厳しいだろうが、チューリップ3号によって混乱しきっている今のヘルマン兵は、トマトに何人も打ち倒されていく。

「町の娘に負けていたら傭兵の名が泣くぞ！続け！」
「ルイス、リーザス軍は極力殺すな！洗脳が解ければ貴重な戦力だ！」
「へいよ、努力はするぜ、ルークの旦那！おらぁ、右ががら空きだぞ！フォローに周りやがれぇ！」

セシルとルークが傭兵部隊を指揮する。ルイスは前線でヘルマン兵やモンスターを殺すことに専念しているが、ちょくちょく周りにいる荒くれに的確な指示を出している。顔に似合わず気も回るらしい。

「了解だ、援護に回る。一式、ハヤブサ！！」

ルイスの指示に素早く援護に回った赤い髪の戦士が剣を一振りすると、鎌鼬が起こり敵数人を一度に斬り刻んだ。

「お、やるじゃねぇか若造！そっちは任せたぜ」
「ああ、任された！」
「ほう……」

リーザス解放軍の猛攻に焦り、中央部で部隊の指揮をしていた小隊長が声を荒げる。

「馬鹿野郎、押し負けるな！リーザスの魔法軍を出せ！」
「その、洗脳されていると大した魔法を使えないみたいで」
「問題ねぇ！どうせあっちに魔法を使える奴なんざ…」

瞬間、目の前に業火が迫っているのが見える。そして、ヘルマン軍の体が炎に包まれた。放ったのは志津香。後衛からカスタム魔法軍を率い、全軍をサポートする。

「業火炎破！さあ、まだまだいくわよ！」

圧倒するリーザス解放軍。荒野での戦いは二時間もしない内に決着がつく。解放軍の圧勝だ。ヘルマン軍の敗残部隊はレッドの町へと逃げ込み、町の外と中で最後の抵抗を続ける。解放軍は町の周りを包囲し、残党を殲滅していっている。ルークも傭兵部隊を率いて殲滅戦に当たる。抵抗していた敵を斬り伏せようとするが、ルークが斬る前にその額にくないが刺さりヘルマン兵が倒れる。飛んできた方を見ると、かなみがこちらにやってきていた。

「ルークさん！ランスが話があるみたいです」
「ランスが？」

直後、最前線にいたはずのチューリップ3号がこちらに近づいてくる。運転席からマリアが顔を出し、手を振ってくる。

「ルークさーん！」

「マリア？持ち場はどうした？」
「それがね…」
「ようルーク！俺様のために精一杯働いているか？」

マリアの後ろからヌッとランスが顔を出す。最前線で戦っているかと思っていたら、いつの間にかチューリップ３号に乗り込んでいたらしい。

「これからレッドの町の中に侵入して敵の司令官を叩く。お前も来い！」
「落ちるのは時間の問題だと思うが？」
「馬鹿者！それでは俺様の活躍が目立たんだろうが！他の雑魚共が雑兵を片付けている間に、敵司令官を颯爽と倒している英雄の俺様。やはりこうでなくてはいかん！」

実にランスらしい理由である。だが、ランスが自分を誘いに来たことがルークは意外だった。

「なるほどな。それで、わざわざ俺も誘いに来てくれたのか？」
「がはは、光栄に思え！たっぷりこき使ってやる。それと狭いからお前は戦車の外に座ってついてこい」
「ま、ついていくとするかね。かなみも来るんだろ？」
「勿論です！一緒に戦車の外で待機しています！」

こうしてチューリップ３号の上に座る形で乗り込むルークとかなみ。中にはランスとシィル、マリアと志津香がいるようだった。

「志津香？来て良かったのか？」
「大丈夫よ。もう大した敵の量じゃないし、ヘルマン軍やモンスターがかなり減ったから、これ以上はリーザス軍を大量に巻き込みか

ねないからね」
「なるほどな。セシル、ルイス、それと…そこの赤い髪の。傭兵部隊の指揮を頼んだ！」

そう言って、この場から離れる前にルークが指示を出す。セシルとルイスが了解だと返事をするが、赤い髪の戦士がこちらに問いかけてくる。

「俺もか？」
「ああ、お前だ！この場の傭兵の中でも文句なしに強い。後は頼んだぞ！」
「ええい、いつまで喋っている。マリア、出発だ！」

そう言い残し、チューリップ3号がレッドの町内部に向けて進軍を開始する。残された赤い髪の戦士に、セシルが話しかける。

「私もルークと同意見だ。お前になら背中を任せられる。名前はなんという？」
「アリオス・テオマンだ。一応勇者をやらせて貰っている」
「ほう…勇者ねぇ…よく判らんが、いい目をしているな。気に入ったぞ！」

残された傭兵部隊は、残存部隊は次々と殲滅していく。他の部隊も同様で、ルークの言うように、最早レッドの町が落ちるのは時間の問題となっていた。

―レッドの町　広場―

「行け！殲滅だぁぁぁ！！」
「ランス様、狭いのであまり暴れないでくださ…」

チューリップ3号を駆り、ルークたちは町の内部へと侵攻する。ヘルマン兵が弓を射ってくるが、チューリップ3号の装甲には傷一つ付かない。上に乗っている自分たちに射られた矢を真空斬と手裏剣で確実に叩き落としながら、ヘルマン兵を殲滅していく。町の中を見回し、かなみが言葉を漏らす。

「酷いですね……」

町の建物が所々崩れており、町の住民が避難しながらこちらを羨望の眼差しで見てくる。レッドは降伏が早く、本来ならこれほど酷い状況になっているはずがないのだ。ヘルマンがどれほど非道い占領をしていたかが判る。町の中を進軍していくと、教会が見えてくる。教会の前ではヘルマン兵が一体のデカントを引き連れ、シスターを人質にしていた。デカントの腕にシスターが握られている。

「来るんじゃないぞ！この女が握りつぶされたくなかったらな！」
「ええい、貴重な美女になんて酷いことを！」
「……外道ね！」
「ランス様…どうしますか…」
「かなみ、俺が合図をしたら、ヘルマン兵の注意を引きつけてくれ」
「……了解です」

チューリップ3号からランスたちも飛び出してくるが、シスターが人質に取られているため動けずにいる。その後ろ、ヘルマン兵に見えないようにランスたちの陰に隠れ、腰を落とし、ルークが静かに気を溜める。シスターが悲痛な声を上げる。

「わ、私に構わないで下さい…」
「馬鹿者！俺様がやる前に軽々しく死ぬなんて言うんじゃない！」
「こんな時に何言ってるの、ランス！」
「へへへ、それじゃあまず武器を置いてだな…」

優勢と見たヘルマン兵がゆっくりとこちらに近づきながら、要求を出してくる。デカントから視線を反らす。

「かなみ、今だ！」
「はい！はっ！」
「真空斬！！」

かなみがルークの合図と同時に煙玉を投げる。周囲を煙が覆い、ヘルマン兵が喚き立てる。

「舐めやがって！デカント、女を握り潰…」
「うごぉおおおっ！！」
「！？」

ヘルマン兵が指示を出す前に、デカントの絶叫が周囲に響き渡る。シスターを持っていた右腕が真空斬よって両断され、そのまま右腕が落ちてくる。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！」
「ふっ！」

真空斬を放つと同時に駆けだしていたルークが、落ちてきたシスターを抱きかかえる。

「怪我はないか？」

「は、はい。大丈夫です」
「ああ、馬鹿者！それは俺様の役目だろうが！」
「う…うごぉぉぉぉ！！」

ランスが騒ぎ立てるが、その声をかき消すようにデカントが怒りに絶叫し、ルークに向けて左腕を振り抜いてくる。志津香が炎の矢を放とうとし、ルークもシスターを抱きかかえたまま冷静に軌道を見据え、避ける体勢に入るが、どちらも成されることはなかった。

「この一撃が……分水嶺」

突如、ルークとデカントの間に男が駆けてきて飛び上がる。そして、デカントの腹に渾身の一撃を放つ。

「装甲破壊パンチ！！」
「ぐがぁぁぁぁぁ！！」
「うわぁぁ、馬鹿。こっちに倒れて来るな…ぎゃぁぁぁぁぁ！！」

強烈な一撃を食らったデカントは、後ろに倒れ込む。そのままヘルマン兵を押し潰し、絶命する。突如現れた武闘家に、全員が目を向ける。

「凄い…」
「何者？」
「ランス様、ご存じですか？」
「知らん！」
「いや、ランスは会ったことあるはずなんだがな…」
「男の顔なぞ、いちいち覚えてられるか」
「お久しぶりです、ルーク殿。息災で何より」

件の男がルークに向けて挨拶をしてくる。忘れようはずもない。自分がわざわざ強くなるようにけしかけた相手だ。だが、ルークは驚く。男の纏う空気にだ。強くなるとは思っていたが、これ程とは。

「久しぶりだな。ここまで腕を上げているとは、流石に驚いたぞ。アレキサンダー」

その男はアレキサンダー。かつてリーザスのコロシアムでルークに敗れ、一から鍛え直すべく修行の旅に出ていた武闘家だ。

「いえ、まだまだ修行の身です」
「協力感謝する。それで、ここへはたまたま寄ったのか？」
「いえ、リーザス解放軍の中にルーク殿の姿を見たゆえ」

そう言うと、両の拳を胸の前で合わせ、一礼をしながらルークに宣言をする。

「及ばずながら、この私もリーザス解放のための手伝いをさせていただきたい！」
「ありがたい！期待しているぞ、アレキサンダー！」
「なんだ、男はいらんぞ」
「ルークさん、この方は？」
「後で詳しく紹介する。アレキサンダー、頼りになる男だ」

こうして解放軍に新たにアレキサンダーが加わる。と、シスターが恥ずかしそうにルークに話しかける。

「あ、あの…そろそろ降ろしていただけるとありがたいのですが…」
「いつまで抱きかかえているつもりよ！」

志津香がルークの足を全力で踏み抜いた。

―レッドの町　教会―

「どうも危ないところを助けていただき、ありがとうございます」
「がはは、俺様の手に掛かれば軽い軽い！」
「ランスは何もやってないでしょ」

ランスが胸を張り、ふんぞり返るがそれを見たマリアが苦言を呈す。

「私はこの町で神官をしています、セル・カーチゴルフと言います。貴方がたは？」
「うむ。悪のヘルマン軍からこの町を解放しに来た英雄ランス様と、その女＆amp;下僕たちだ！」
「誰があんたの女よ！」
「まあ、それではこの町を救いに…」
「がはは。お礼に一発やらせてくれてもいいんだぞ！」

グッと人差し指と中指の間に親指を差し込み、セルの前に突き出すランス。

「神の教えに反しますからそれは出来ません。そもそも、そのような事を言っては…」
「セルさん。ランスへの説教は後で好きなだけやっていい。が、今は時間がない。ヘルマン軍の司令部へはどう行けばいい」
「こら、ルーク！俺様は説教など聞く気はないぞ！」

そう、ヘルマン軍の司令部への入り方がルークたちは判らなかったのだ。かなみが先行して偵察してきたところ、司令部の前は町の中にも関わらず崖のようになっており、進入することが不可能であった。志津香曰く、魔法で無理矢理崖を作ったとのことだった。唯一かなみだけが、ギリギリ飛べるかもしれないという距離ではあったが、単身突入させる訳にはいかない。崖向こうにはヘルマン兵もいるため、ロープなどを掛けて貰う訳にもいかなかった。

「それならば、この教会の地下道から司令部へ入れます。こちらです」

そう言ってセルが教会の奥へ案内する。避難道として町の都市長が大昔に作ったものらしい。ヘルマン兵はこれを使って崖向こうの司令部からこちらへ渡ってきているとのことだった。

「それでは行くぞ！」
「うう…地下道じゃチューリップ3号は入れないから、私は留守番か…」
「任せて、マリア。必ず司令官を倒してくるわ」
「皆さん、お気をつけて…」

マリアとセルが教会に残り、六人になった面々は地下道を通って司令部を目指した。

ーレッドの町　ヘルマン軍司令部ー

「ぶー！まだリーザスの奴らを殲滅出来ないのかぶー！」
「はっ！申し訳ありません」

部屋の中でフレッチャーが喚き立てる。弟子であるボウがそれを宥める。部屋の中にはフレッチャーとボウ、リョク、リーザス軍を洗脳している魔法使いのルナン、ルナンに洗脳されているリックとメナドの六人だった。と、その時どこからともなくフレッチャーの後ろから新たに二人の人物が部屋にやってくる。

「……何をモタモタしている」

「ぶー！魔人アイゼルぶー！まあ見ていろぶー！」

部屋にやってきたのは魔人アイゼル。金に染まった長髪を梳きながら、フレッチャーに汚らわしいものを見るかのような視線を送る。側に控えているのは女剣士。その瞳はリックやメナド同様、輝きを失っている。その時、司令部の扉が強く開け放たれた。

「だ、誰ぶー！」

「がはは、英雄ランス様登場！ヘルマンの司令官め、覚悟しろ！」

「ランス様、豚が椅子に座って話をしています。不思議です」

「本当。なんでこんな所に豚がいるのかしら」

シィルは天然で、志津香はわざとフレッチャーを挑発する。フレッチャーと横にいる弟子二人が怒りに顔を赤くする。

「ぶー！許さんぶー！」

「フレッチャー様になんと無礼な！」

「生きては帰さんぞ！」

「フレッチャー…まさか、あの世界最強の格闘家か！」

アレキサンダーが声を上げる。ルークもそれを聞き、驚く。まさかあの世界にその名を轟かす格闘家が、この目の前の豚のように太

った親父だとでもいうのか。

「おいおい、名を語るならもうちょっと騙せそうなものにしろ」
「馬鹿を言うな！この方がフレッチャー様本人だ！」
「……間違いないのか？」
「当然ぶー！」

ルークが眉をひそめ、アレキサンダーに問う。

「どう見る？」
「……あの者が本人かは判りかねるが、横の二人はそれなりに手練れだな。となると、可能性はあるかと」

その時、部屋の隅にいた人物を見て、かなみが声を上げる。

「そんな…メナド！リックさん！！それに、レイラさんも…」
「リック…まさか、赤い死神！？嘘でしょ！」
「他の二人も知り合いか？」
「はい、赤の軍副将で私の親友のメナドと、親衛隊隊長のレイラさんです」
「おいおい、強豪揃いじゃないか…」

相手の面子に流石にため息をつきたくなるルーク。ニタニタと笑いながら、フレッチャーが指示を出す。

「この最強の布陣にお前らなんかが勝てる訳ないぶー！ボウ、リョク、リック、メナド、レイラ！奴らを殺すぶー！」

その言葉にスッと前に出てくるレイラ以外の四人。フレッチャーが不思議そうにアイゼルの方を見る。

「おい、何をしてるぶー？」
「……この女は貴様の部下ではない。私の部下だ。何故私が貴様に手を貸さねばならない？」
「き、貴様！ふん、そこで見てるぶー！四人だけで十分ぶー！」
「なんだ？仲間割れか？醜い豚が喚いているぞ、がはは！」

ランスが更に挑発を加えている横で、ルークがかなみにそっと指示を出す。

「かなみ、奥にいる集中している魔法使いの娘。恐らくあれがリーザス兵を操っている。俺たちが目の前の四人を倒すから、隙をみてあの魔法使いを気絶させてくれ。だが、奥の男には気をつけろ。イヤな気配がする」
「はい！……あっ！」

ルークに言われ奥の男に目をやると、かなみが見覚えのある顔に気がつく。

「ルークさん！あいつ、魔人です！」
「なんだとっ！？……んっ！！」

再度奥の魔人を見ようとしたルークだが、突如迫ってきた剣をすんでのところで受け止める。が、すぐに二撃、三撃と振るわれる。恐るべき早業。それを全て捌きながら一瞬の隙を突いて横薙ぎにする。しかし、相手もすぐに剣先を下に向けてそれを受け止める。

「なるほど…これがリーザスの赤い死神か…魔人に気を向けている場合ではないか…」
「ルークさん！」

「やれぶー！殺すんだぶー！！」

その声に反応するように、更にルークに攻撃を加えるリック。驚異なのは尋常ではないその手数。かなみが援護しようにも、目が追いきれない。忍者であるかなみがこれなのだ。シィルと志津香も同様で下手に手出しが出来ずにいた。その太刀筋を、ルークは全て受けきる。あまつさえ隙を見ては反撃の太刀を繰り出しているのだ。だが、リックもその反撃を全て受けきり、超スピードでの攻防にも関わらず、未だどちらも一撃も受けていない。この剣速を完全に受けきるルークの強さを改めて目の当たりにする女性陣三人だが、その様子を面倒くさそうに見ながら、左隣からランスが文句を言う。

「馬鹿者！今の上段に反撃を取れただろうが！」

「何を適当な事を…」

「馬鹿言え！今の無理に取りに行ったら、次の攻撃で俺の胴体が両断されている！」

「それは貴様が遅いからだ！」

文句を言いかけたかなみと志津香が目を見開く。まさか、ランスにはこれが見えているのか。二人が驚いていると、ルークの右隣からアレキサンダーの声も飛ぶ。

「ルーク殿！先ほどからの相手の攻撃にはいくつかのパターンがあります！」

「ああ、把握している。数が多いんでまだ全てではないがな！」

まさか、アレキサンダーにも見えているのか。その時、ランスの前にメナドが、アレキサンダーの前にボウとリョクが歩み寄ってくる。

「いつまでよそ見をしている気だ？」
「さあ、我々ともやりあって貰うぞ。勝負になればいいがな…」

二対一。志津香がアレキサンダーの援護に入ろうとするが、それを手で制する。

「志津香殿。この密集した部屋では貴女の実力は発揮できないでしょう。ここは任せて貰おう」
「貴方、一人で戦うつもり!?」
「ルーク殿やランス殿の相手に比べれば、二対一が妥当な相手。問題ありません」

そう平然と言ってのけるアレキサンダー。そう言われたボウとリョクが額に青筋を浮かべながら、冷静を装ってアレキサンダーに問いかける。

「ふっ…まさか貴様、フレッチャー様の弟子でもある我らと、無謀にも一人でやるつもりか？」
「ふんっ!!」

ボウの言葉と同時に、リョクが右腕を開いた状態で前に思い切り押し出す。張り手をするような形になるが、突如アレキサンダーの横を突風が襲った。その頬に一筋線が入り、血が流れる。

「これぞ我ら二人がフレッチャー様より教えを受けた奥義、真空波」
「格闘家の最大の弱点である遠距離を克服した我らはフレッチャー様に次ぐ実力を得た」
「これでも一人で十分などと言うつもりか？驕るな!」
「我らの実力、侮るな!」

ボウとリョクの言葉に、アレキサンダーが静かに腰を落とし、静かに口を開く。

「驕った訳でも、侮っている訳でもない。貴殿らの実力は本物だ。だが、それを冷静に考慮した上で……一人で十分だと判断したに過ぎん！」

「「き、貴様ぁぁぁぁ！！！」」

部屋の左隅ではランスがメナドと対峙していた。メナドが間合いを詰めている段階で、ランスににじり寄ってきている。

「おお！中々に可愛いじゃないか！ぐふふ、むさい男共はあっちの二人に任せて、お楽しみといくか」

「ランス！メナドは私の親友なんだから、変なことをしたら許さないわよ！」

イヤらしい顔をしているランスにかなみが文句を言う。シィルもランスに声を掛ける。

「ランス様、援護を…」

「いらん。こんな密集した部屋じゃ邪魔だ。それに、メナドちゃんは傷つけずに手に入れなければならんからな。がはは！」

無防備に笑うランスを隙だらけと見たのか、メナドが一気に間合いを詰めてランスに斬りかかる。直後、剣が後方に飛ぶ。それはランスの剣ではない。メナドの剣だ。冷静にメナドの太刀筋を見切ったランスが、下から上に剣を振り上げ、メナドの剣を弾き飛ばした。と同時に、両腕でメナドの胸を鷲づかみにする。

「がははー！ターッチ！！」
「ぎゃぁぁぁぁ！メナドに何するのよ！！！」

かなみが悲鳴を上げると同時に、メナドが胸を押さえながら後方に飛ぶ。剣を拾いながらランスを睨み付ける。洗脳されて大して意識は残っていないはずだが、それでも羞恥心はあるらしい。

「ちっ、鎧の上からでは全然感触が伝わらん」
「ランス！次そんなことしたら手裏剣投げるからね！！」
「ふん、まあ鎧の上からではつまらん事も判ったし…」

そう言って剣を構えるランス。顔はにやけたままだが、メナドはランスの纏う空気に動けないでいた。メナドに向き合いながら、ランスが平然と宣言する。

「とっとと終わらせるとするか」

そして部屋の中央部、ルークとリックは未だ高速の剣舞を行っていた。不謹慎にも、ルークの口に笑みがこぼれる。洗脳され、実力を出し切れていないはずなのに、これほどか。再度リックに斬りかかるルークだが、その剣はまたもリックの剣に受け止められる。が、そのリックの腹に蹴りを繰り出す。先ほどまで剣の攻撃しかしていなかったため、不意を突かれた形のリックはそれを食らう。一歩後ろに下がりながら、すぐに体勢を整えるリック。洗脳されているリックも、いつの間にか笑みを浮かべていた。

「滾るぞ、赤い死神！」

この状況を見てなお、フレッチャーは勝利を疑っていなかった。

愛弟子に赤い死神、負ける要素が見当たらないからだ。だが、フレッチャーは知らなかった。洗脳によりリックの実力が出し切れていないことを。そして、目の前に対峙する三人の男がいずれもリックと肩を並べうる人類最強クラスの男であることを。

第４６話　レッド解放戦（後書き）

［人物］

アレキサンダー　（３）
ＬＶ　３６／７７
技能　格闘ＬＶ２

世界を旅する格闘家。７話でルークに敗れた後、一から鍛え直すべく世界を放浪していた。リーザスが陥落したという噂を聞き、リーザスを訪れルークと再会を果たす。

アリオス・テオマン
ＬＶ　１４／９９
技能　剣戦闘ＬＶ２

現在の勇者にして、ランス本編における三人の主人公の一人。正義感が強く、困った人を放っておけない性格で、リーザス解放軍にも自ら志願した。レベルの低さは勇者の特性によるもので、実力は本物である。

セル・カーチゴルフ
ＬＶ　１８／４４
技能　神魔法ＬＶ１

レッドの町の神官。真面目な性格で、町の人からの信頼も厚い。神官としての腕もかなりのもので、回復魔法の腕はシィルよりも上。いきなりとんでもない事を言い出したランスを改心させようと誓いつつ、抱きかかえられるなど初めての経験であったため、ルークに少しドキドキしている。

［モンスター］

デカント
　巨人のモンスター。手に持った棍棒で敵を粉砕する。知性も多少あり、時には傭兵として雇われることもある。

［技］
一式ハヤブサ　（半オリ）
使用者　アリオス・テオマン
　アリオスの必殺技。一太刀振るえば周りに鎌鼬を起こし、敵を一度に斬り刻む技。発生した鎌鼬を飛ばすことも可能なため、近、遠距離両方で活躍する

真空波
　フレッチャーが編み出した遠距離用格闘技。空気を押し出すようにし、鋭い風を相手に放つ。

［その他］
勇者
　魔王を倒す力を持った存在。いつの世にも必ず一人存在する。１３歳になると能力を発揮し、２０歳になると引退となる。一度受けた攻撃はすぐに見切れるようになる、どんなピンチでも絶対に死なない、レベルが上がりにくいがレベルダウンをしないなど、物凄い能力が付加される。また、人類の数が減れば減るほど威力を増す勇者の剣、エスクードソードを使うことが出来るのも勇者のみである。

第47話　決着は再戦の誓いと共に

―レッドの町　ヘルマン軍司令部―

「はっ！」
「……っ！」

部屋の中央では再びルークとリックの高速の戦いが繰り広げられていた。リックがたかが一戦士相手に苦戦していることに、フレッチャーが怒りの声を上げる。

「何をモタモタしているぶー！さっさと片付けるぶー！」
「（…愚図が。戦況すら判らぬのか？）」

フレッチャーの言葉に、後ろで事態を見守っていたアイゼルが内心、悪態をつく。確かに目の前で繰り広げられている打ち合いは、一見先程までと変わらないように見える。が、その実、徐々にではあるがリックが押され始めているのだ。目の前の一戦士に。この段階でそれに気がつくことが出来るのは相当の手練れであろう。だが、アイゼルは難なく事態の変化に気がつく。

「（このままではこの豚は負けるな…）」

そう考えながらも、アイゼルに動く気配はない。レイラを横に携えたまま、不気味に部屋の奥に佇んでいた。

「真空波！どうした？大口を叩いて置きながら、逃げ回るだけか？」

「真空波！いつでもかかってきていいのだぞ？出来る者ならな！」

部屋の右隅で、ボウとリョクがアレキサンダーとある程度の間合いを保ちながら真空波を連発する。それを躱し続けるアレキサンダーだが、真空波は二人から休むことなく放たれるため、近づけずにいた。だが、その顔に焦った様子はない。集中した様子で、何かぶつぶつと言葉を発している。

「……万物の祖よ……私に力を……」

「何をぶつぶつと…真空波！」

ボウが放った真空波に対し、アレキサンダーは避けるのを止め正面から受ける。右拳を突き出し、真空波とアレキサンダーの正拳がぶつかり合った。

「はぁっ！」

「馬鹿め！貴様の右手が風によって切り刻まれるだけだ！」

そう叫んだボウだが、結果は違った。風の塊である真空波が大気に四散した。アレキサンダーの右拳は無傷、いや、実際には無傷かどうか判らない。なぜなら、アレキサンダーの拳は燃えさかる炎を纏っていたからだ。

「し、真空波が！なんだそれは！？」

「貴様、魔法使いだったのか！？」

「いえ…魔法とは少し違う…」

ボウとリョクが驚愕の声を上げるが、魔法使いである志津香は、アレキサンダーが纏う炎が、魔法使いが体内の魔力を変換して生み出す炎とは違うものであることに気がつく。

「ルーク殿に敗れ、己の未熟さを知った私は一から鍛え直すべく修行に明け暮れた。その修行の日々の中、ある時私は感じ取ったのだ。八人の神を」

「か、神？」

「狂っているのか？こいつは？」

アレキサンダーの突然の発言に、正気を疑うボウとリョク。それを気にすることもなく、アレキサンダーは続ける。

「八人の神がどこにいるのかは判らない。恐らく、人が立ち入れる領域ではないだろう。だが、私は彼らの存在を確かに感じ取った。その事に八人の神も驚き召され、私ごときに多少の興味を持っていただけた。そして、彼らにとっては少しばかり、だが私にとっては大きな力を貸していただける事になった」

そう言って、炎を纏った右拳を前に突き出す。距離があるにも関わらず、怯むボウとリョク。

「これが、その力の一つだ！はっ！」

そう言ってアレキサンダーが駆け出す。慌てて真空波を放つボウとリョクだが、その風は全てアレキサンダーの拳に四散させられる。風の威力が弱すぎるため、右拳の炎の威力を更に増すだけで、傷つける前に四散してしまうのだ。為す術もないまま、目の前に迫ってくるアレキサンダーにボウは恐怖する。

「し、真空波がなぜ破られる！」

「奥義が破られたときの準備くらいしておくべきであったな！」

そう言って、アレキサンダーは炎を纏った右拳を全力でボウの顔面に放つ。

「属性パンチ・炎！」
「ぎゃぁぁぁぁぁ！」
「ボウっ！！」

崩れ落ちるボウの姿にリョクが声を上げる。が、すぐにアレキサンダーはリョクに狙いを定め駆け出す。右拳に炎を纏いながら近づいてくるその姿に恐怖し、リョクが絶叫する。

「く、来るなぁぁぁぁぁぁ！」

部屋の左隅ではメナドが攻めあぐねていた。洗脳され、意識が殆どなくても理解できる。目の前の男、ランスの纏う空気が自分のものとは比べものにならないことを。一見隙だらけに見えて、その実攻め込む隙がないことを。その時、ランスがこちらに向かってゆっくりと歩み始める。

「がはは、来ないならこっちから行くぞ！」
「ランス！殺したりしないでよ！あと、変なことも絶対にしないこと！」
「殺す訳ないだろう。メナドちゃんには傷一つつけん。最初に傷物にするのはベッドの上だからな！」
「だからそれも駄目って言ってるでしょ！」

隙を見いだせなかったメナドだが、ランスとかなみが言い合いをするのを隙と見たのか一気に距離を詰める。それと同時に、ランスは剣を両手持ちで上に構え、一気に振り下ろす。

「いきなりランスアタァァァック！！」
「……っ！！」

ランスアタックが地面に放たれる、だが、そこから発生した衝撃波でメナドの剣が後方に吹き飛ばされる。それを見たランスが距離を一気に詰める。先程メナドの胸を揉んだのと似たような流れだが、今度は剣をしっかりと握り、メナドに向かって剣を振るう。

「はっ！はっ！」
「……っ！っ！」
「…まさか、リックが押されているのかぶー！？」

部屋の中央部、ルークとリックの高速戦。ここへ来てフレッチャーも遂に気がつく。その圧倒的な手数で押していたはずのリックが、いつの間にか相手の手数に防戦に回る一方になっているのだ。

「当然だ。あの男は人間にしてはそれなりに強い。洗脳によって全力で戦えぬあの死神では負けるだろうな。……いや、例え全力であったとしても判らぬか。あの男も、全力で戦ってはいない」
「せ、洗脳で全力では戦えないだとぶー！無能な魔法ぶー！お前のせいだぶー！それに、どうしてあの男も全力で戦っていないぶー？」
「ふ、技の一つも使ってこない相手に、自分が技を使うのも失礼だとでも思っているのだろう。嫌いではない考え方だがね。ほら、決着がつくぞ」

フレッチャーの罵詈雑言など気にした様子もなく、目の前で繰り広げられる戦いが終わることを伝えるアイゼル。その言葉にフレッチャーが目を向けると、ルークが下から上に剣を振り上げ、リック

の剣を弾き飛ばしたところであった。

「死神よ！奥義の一つもあるだろうに、それすら使えず不本意であろう。こんなことで決着がついたとは思わん。いずれまた、互いに全力で！」

「……」

ルークの言葉に、洗脳されているリックが確かに笑う。是非、という声がルークには聞こえた気がした。そして、無防備になったその体に、剣を振り抜く。

「はぁっ！」

「妙技、手加減アタァァァック！」

「属性パンチ・炎！」

三人がほぼ同時に言葉を発し、リック、メナド、リョクが同時に崩れ落ちる。

「ば、馬鹿なぶー！」

「今だっ！」

敵が減ったことにより、かなみが遂に動く。部屋の奥まで一気に駆け、魔法でリーザス兵を洗脳している魔法使いルナンの腹に一撃入れ、気絶させる。

「くくく、洗脳も解けたな」

「笑ってるなぶー！こうなったら流石にお前が行けぶー！魔人の力を見せるぶー！」

そう指示を出すフレッチャーだが、冷たい目を送りながらアイゼ

ルがそれを再度断る。

「お前は醜すぎる。私は、限度を超した醜い者の指示を受ける気にはなれない」

「な、なんだとぶー！」

「たまには自分で戦わないと太りすぎて動けなくなるぞ。拳法の達人なんだろ？」

「アイゼル、この事は後でパットン様に報告してやるぶー！」

「おい豚、次に殺される奴は決まったか？」

怒り狂うフレッチャーに向けて、ランスが挑発をする。キッとこちらを睨んでくるフレッチャー。そして、その重い腰を遂に上げる。

「…どうやら死にたいらしいぶー！世界最強の格闘家と言われた私の力、見せてあげようぶー！光栄に思えぶー！」

「あれが……世界最強……私は夢を見ているのか……」

「油断するなと言いたいが……あれは……」

アレキサンダーの言葉に、ルークも同意してしまう。でっぷりとした肉を揺らしながら、ふっ、はっ、とフレッチャーが拳や足を繰り出す。その度に肉が揺れ動く。どう見ても強そうには見えない。

「どこからでもかかってきなさいぶー！必殺のモーデル脚で、全てにカウンターを取ってやるぶー！」

「ぶーぶー、うるさい！さっさと死ねぇぇぇ！！」

「ぶひぃーーーー！」

ランスの一太刀にカウンターなど合わせることが出来る訳もなく、絶叫と共にフレッチャーが瞬殺された。

「世界最強も、驕り高ぶるとああなるという良い見本だな」
「私たちも気をつけなければなりませんね……」
「ランスならともかく、ルークとアレキサンダーさんは大丈夫でしょ」
「ランス様があんな体になってしまったら…うぅ、嫌です…」
フレッチャーの死体を見ながら話す二人に志津香も加わる。シィルはでっぷりと太ったランスを想像してしまったらしい。

「志津香殿、自分が呼び捨てでないのに変な話ではありますが、呼び捨てで構いませんよ。恐らく年もそう離れていないでしょうし」
「待て、アレキサンダー！お前今いくつだ！」
「今年で２０になります。まだまだ若輩の身」
「と、年下…だと…」
「ふふっ、パーティー最年長はまだまだ譲らないわね。ルークおじさん？」
「大丈夫です、まだまだルークさんは若いです！」
「そうですよ。１０代…いえ、２０代前半でまだまだ通じます！」

アレキサンダーの予想外な年齢に驚くルーク。志津香が笑いながらおじさんと呼んでくる。かなみが部屋の奥からフォローし、シィルもそれに続くが、シィルのはあまりフォローになっていなかった。

「ええい、ルークが中年の親父なことなどどうでもいい！」
「ぐはっ！」
「ルークさん！しっかり！」
「魔人アイゼルとやら、次はお前だぞ！」

崩れ落ちるルークを尻目に、ランスがアイゼルに向けて剣を突き出す。それを見ながら、アイゼルは高笑いを上げる。

「ははははは、よくぞその醜い肉塊を倒してくれた。あんなのが仲間にいるのは、非常に不愉快だったのだ」
「そりゃそうよね。私だって、あれが仲間だったら不愉快だわ」
「ふふ、貴女とは美的センスが似ているようだ」

志津香の言葉にアイゼルが気をよくする。ルークたちを見回しながら、言葉を続ける。

「君たちをここで倒すのは簡単だが……」
「なにぃ！」
「ここで戦うと私があの豚の仇討ちをしたようで気分が悪い。今日の所は帰るとしよう」
「逃げる気か！この卑怯者が！」
「見逃されているという事に気がつかないとは愚かな。まあいい、いずれまた会うこともあるでしょう」
「待て！アイゼル！」
「ん？」
「……くっ……」
「……あっ……ぼくは……」
「！？」

逃げようとするアイゼルをルークが引き留める。こちらを向くアイゼルだが、それとほぼ同時に倒れていたリックとメナドが意識を取り戻し始める。かなみがルナンを倒したことが切っ掛けだろう。それを見たルークが言葉に詰まる。もし、この場にランス、シィル、かなみ、志津香だけであったのなら、ルークは言葉を続けていたかもしれない。だが、信用しているとはいえ共に行動をし始めたばかりのアレキサンダー、そしてリーザス軍人であるリックとメナドの前で話せる内容ではない。言いあぐねるルークを不思議そうに見な

がら、アイゼルが言葉を続ける。

「人間ごときが私を引き留めるな。レイラ、私はこの場から去るが、聞き分けのない奴らが私の妨害をしようとするんだ」
「はい、アイゼル様」
「レイラさん！どうして洗脳が解けてないの！」
「多分、レイラさんは魔人に直接操られているのよ！」
「ほう、聡明な魔法使いもいるのですね」

アイゼルの命令を聞くレイラの姿にかなみが声を上げるが、志津香が冷静に分析する。アイゼルが志津香の事を更に気に入った様子で声を漏らす。

「レイラ、私の為に奴らを倒してくれるね」
「はい、愛するアイゼル様の為でしたら何でもいたします」
「良い子だ。では、私の為に戦ってくれ」
「はい、アイゼル様」

そう言うと、レイラが剣を取りこちらに向かってくる。リックを含む強敵たちを倒したこの面子に、レイラ一人で敵うとはアイゼルも思っていないだろう。ただの時間稼ぎの捨て駒だ。迫ってくるレイラの剣をランスが受け止める。ルークがアイゼルを追おうとするが、すぐにレイラが立ちふさがる。勝つことなど考えていない、ただアイゼルが逃げるのを手助けするだけの妨害。流石に多勢に無勢、レイラはすぐに崩れ落ちることになるが、その時には魔人アイゼルの姿はどこにもなかった。

「……くそっ」
「ふん、俺様に恐れをなして逃げたか」
「ランス様、違うと思いますけど…」

「口答えをするな、シィル！」
「ひんひん、痛いです、ランス様…」
「とりあえずレッドの町はこれで解放完了ね」
「リーザスの方々を運びましょう。立てますか？肩を貸しましょう」
「すみません…」
「そうですね。とりあえずバレス将軍の下へ」
「ではナイスバディーのレイラさんは俺様が運ぼう。メナドちゃんも後で運ぶからそのままにしておけ」
「そんな事出来る訳ないでしょ！まったく…」
「あ、こら！どさくさに紛れてレイラさんの胸を揉まないの！」

シィルの頭に拳骨を入れるランス。志津香が戦いの終わりに一息つき、アレキサンダーが近くにいたリックに肩を貸す。ランスがレイラの胸を揉みながら運び、かなみと志津香に文句を言われている。ルークがメナドに声を掛ける。

「大丈夫か？意識ははっきりしているか？」
「あ…はい…貴方は…？」
「俺はルーク、解放軍の者だ。君たち赤の軍はヘルマンに洗脳されていたんだ。だが、もう大丈夫だ」
「そうだったんですか……ぼんやりとですが覚えています…あっ…」

ふらふらと立ち上がろうとするメナドだが、足がもつれて倒れ込む。

「あはは…すいません、もうちょっと掛かるみたいなんで先に…」
「そうだな、それじゃ悪いが失礼して…よっと」
「ひゃぁ！」

そう言ってメナドを抱き上げる。お姫様だっこのような状態にな

り、メナドが顔を赤くする。

「な、何を…お、降ろしてください。一人でも歩けます！」

「嫌かもしれないが、少しだけ我慢してくれ。可愛い女の子が無理するもんじゃないぞ」

「か、可愛い！？ぼ、ぼくが！？そんな、ぼくなんて男みたいだし…」

「ん？十分魅力的だと思うけどな」

「あ……あぅぅ……」

顔を更に赤くし、黙り込んでしまうメナド。そのままメナドを運ぶルークの様子を後ろから見つめる二人の女性。

「（やばい…全力で足を踏みたい…でもセルさんと違って、あの状態のメナドさんじゃルークがもし落としたら危ないわよね…くっ！）」

「（メナド…お願い、その段階で留まって…親友の貴女と取り合うのだけはイヤっ！）」

ルークたちは司令部を後にし、バレスたちの下に戻ると、残存兵を全て倒し終えたところで、これから司令部に乗り込もうとしているところだった。突如リーザス軍の洗脳が解けたことに驚いている様子だったが、先行したルークたちが司令部を落としたことに驚き、感激するバレス。こうして戦いは終わった。魔人アイゼルは逃したものの、フレッチャー率いるヘルマン軍を打ち破り、リーザス赤の軍と魔法軍の洗脳も解いた。圧倒的な勝利でレッドの町の解放に成功したのだ。

「やれやれ…なんとか生き残れたな…」

ミリがため息をつく。周りでは解放軍が忙しなく動いている。勝利の喜びに浸る間もなく、解放軍は戦後処理に大忙しであった。怪我人の治療や壊れた建物の修復、また、ラジールに置いていた司令部をより前線に近いレッドに移動させることも決定した。ランスは捕まえた女魔法使いのルナンとお楽しみ後、既に宿で寝ていたが、それ以外のものはしっかりと働いていた。ルークも各部隊の手伝いや、町の復興、更に作戦会議にも参加と休む間もなく奔走していた。

「メナド副将！無事だったんですね！」
「…ああ、ザラック。うん、ぼくは大丈夫。みんなも怪我はない？」
「はい、解放軍がリーザス軍には手を抜いてくれたお陰で、それほど大きな被害はありません」
「…そう、良かった」
「それにしても心配しましたよ！強いとは言ってもメナド副将はか弱い女の子ですから、ははは！」
「…そう。ごめんね、心配かけて。作戦会議があるからぼくは行くね」
「あ、あれ？」

どこか上の空の様子でこの場を離れるメナド。どこか当ての外れた様子でザラックはその背中を見送る。

「…ちっ、おかしいな。メナド副将は女の子扱いすれば簡単に落とせると思ったんだが」

とぼとぼと会議室に向かっていくメナド。ザラックの言葉はあまり届いておらず、女の子扱いされたことにも気がついていなかった。その頭の中を占めるのは先程のお姫様だっこ。

「ど、どうしよう…あんな風に女の子として扱ってくれる人なんて

初めてだ。うぅ、まだドキドキしてる…ルークさんか…」

タッチの差でメナドを初めて女の子として扱ってくれた男性がザラックではなくルークに変わる。それによりザラックの魔の手から逃れる形となったメナドだが、その代わりとしてかなみの願いは破られる形となってしまった。

―リーザス城　ヘルマン軍司令部―

「ハンティ、遠路はるばるよく来てくれた！」
「きしし、場所さえ判れば距離は関係ないさ」

玉座から立ち上がり、パットンが両手を広げて喜ぶ。目の前に立つのはハンティと呼ばれた黒髪のカラー。無邪気に笑うその見た目は若いが、少なくとも数百年は生きているカラーだ。パットンの乳母であり、姉のような存在でもある。このハンティは、パットンが最も信頼する人物だ。再開に喜び合う二人だが、ハンティが顔を引き締めながら、パットンに報告する。

「それより、今回のお前の行動で皇帝はかなりご機嫌ななめだ。パメラが焚きつけた形だがな。大丈夫なのか、パットン？」
「なーに、この作戦が成功すればどうとでもなる。それより、紹介しておかないと。こいつが魔人のノスだ。アイゼルとサテラという二人の魔神を引き連れ協力してくれた、中々頼りになる奴だ」
「……」
「……」

紹介されたノスがハンティの方に少しだけ頭を下げる。それをジ

ッと見るハンティ。一瞬不穏な空気が流れるが、パットンはそれに気がついた様子もなく話を続ける。

「ハンティ、お前も協力してくれるんだろう？」
「当然。その為に来たんだ、あんたを守るのがあたしの役目だからな」
「頼りにしているぞ」

その時、部屋に伝達兵が駆け込んできた。

「申し上げます。レッドの町にてフレッチャー司令官の部隊が…」
「どうしたのだ？」
「リーザス解放軍と戦闘状態に入り…壊滅しました。レッドの町も敵軍に制圧されました」

その報告に目を見開くパットン。周りに控えていた護衛兵にもざわざわと騒ぎ出す。その兵たちをハンティが一括する。

「いちいち騒ぐんじゃないよ！護衛だろうが、あんたらは！！」
「負けた…そんな馬鹿な…フレッチャーはどうした！」
「はっ、勇猛にも敵兵１００人に戦いを挑み、後一歩の所で無念の戦死をしたと伝えられています」
「…２０年前ならいざ知らず、今のフレッチャーがねぇ…」

その報告にハンティが疑いの眼差しを向ける。どうやら全く信じていないようだった。パットンが頭を抱えるが、伝達兵は更に報告を続ける。

「リーザス解放軍はレッドの町で既に進軍の準備を続けている模様。このままでは、ジオの町まで落とされる危険性があります」

「くっ、トーマに我が軍の主力を集めさせて解放軍を撃破させろ。急げ！」
「ですが、我が軍はリーザス各地に散らばっております。今この軍を動かすと、各地で反乱の火の手があがる恐れが…」
「構わん。まずはリーザス解放軍を撃破することが先決だ。これ以上、奴らが大きくなる前にだ！」
「はっ！判りました。全軍をトーマ将軍の下に集結させます」

そう言って伝達兵が部屋を後にする。玉座に座り込むパットンに、ハンティが声をかける。

「あたしが行ってやろうか？」
「い、いや…今回は俺の力でやってみたい」
「……そうか」

普段の「私」ではなく、ハンティの前では「俺」という一人称になる。皇帝に相応しい言動をと普段から気を張っているパットンだが、彼女の前でだけは素の自分に戻れる。だからこそ、情けない姿を見せる訳にはいかない。彼女の手は借りず、自分の力でリーザス解放軍を叩きつぶす。気がつけば、右拳を固く握りしめていた。

―リーザス城　地下牢―

地下牢には鎖に繋がれた状態のマリス。先程までサヤの拷問を受けていたが、今は奥でリアが拷問を受けている。毎日激しさを増す拷問、ここまで耐え切れているが先行きは不安である。その時、サヤがリアを連れて戻ってくる。

「ふふ、残念だったね。リア王女は墜ちたよ。さあ、言われたとおりにしな！」
「うふふ、マリス。リアと楽しみましょう？」
「リア様！？」

虚ろな表情をしながら、リアがマリスに迫ってきて、その胸を揉み、秘所を触ってくる。墜ちた、ということはランスたちの事を話してしまったのか。マリスが焦るが、サヤが話を続ける。

「まさか本当に何も知らず、全て侍女であるマリスに任せていたとは、王女様はとんだ無能だね。だが、聞いたよ。あんたはリアからの熱烈なアプローチを頑なに拒んでいたんだってね。そんなあんたにはリアにいたぶられるのが最大の拷問になりそうだ。今日から夜は徹底的にこの拷問で行くよ。覚悟するんだね！」
「（…なるほど、そう言う事ですか。流石はリア様）」

ジッとリアを見返すマリス。その虚ろな瞳の奥に、強い意志を秘めているのを確かに見た気がした。マリスも嫌悪の声を上げる演技をしながら、格段に楽になった拷問を受けきる。必ずランスたちが助けに来る、そのことを信じて二人はひたすら耐えるのだった。

第４７話　決着は再戦の誓いと共に（後書き）

［人物］

リック・アディスン　（３）
ＬＶ　４０／７０
技能　剣戦闘ＬＶ２

　リーザス赤の軍将軍。リーザス最強の戦士だが、洗脳されルークたちの前に立ちふさがった。ルークに敗れ、洗脳も解けた今、最も頼りになるリーザス軍の一人。朧気な記憶ではあるが、ルークが手を抜いていたことにも気がついており、いずれもう一度、互いに全力でやり合いたいと思っている。

メナド・シセイ
ＬＶ　２９／４６
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス赤の軍副将。まだ若いが、その実力を見いだされ副将に抜擢される。かなみの親友。男兄弟の中で育った為、本人も男のような性格をしている。それゆえ今まで口説かれたりした経験はなく、女の子として扱ってくれる男性に弱い。

ザラック
ＬＶ　１４／２０
技能　なし

　リーザス赤の軍一般兵。メナドの部下だが、実力は高くない。メナドのことをチョロそうな女として密かに狙っていたが、当てが外れる。

ハンティ・カラー
ＬＶ　１２６／１０００

技能　魔法ＬＶ３　剣戦闘ＬＶ１

　ヘルマン国評議委員の一人。パットンの乳母であり、最も信頼を置く人物。親友であったパットンの母親に頼まれ、幼い頃から彼の身辺警護を務める。パットンが立派な皇帝になるのが彼女の夢でもある。背中に二本の鉄の腕を背負い、併せて四本の腕から魔法を同時に繰り出す実力者。今では微かに伝説に残るのみだが、かつては黒髪のカラーと呼ばれ、人類から英雄視されていた。

フレッチャー・モーデル
ＬＶ　５／１００
技能　格闘ＬＶ３

　ヘルマン第３軍司令官の一人。かつては大陸にその名を轟かす世界最強の格闘家であったが、慢心故に修行をしなくなり、今ではぶくぶくと太りまともに動けない体になってしまった。２０年前の彼であれば、ルークやランスなど一瞬で叩き伏せていたであろう。

ボウ
ＬＶ　２２／３０
技能　格闘ＬＶ２

　フレッチャーの弟子。肥えた師匠とは違い、実力は本物。師より教わった真空波で敵を切り刻むが、それに頼りすぎたためアレキサンダーの前に敗れる。

リョク
ＬＶ　２２／３０
技能　格闘ＬＶ２

　フレッチャーの弟子。こちらも真空波を放つことが出来るため、実力は本物。師匠のことを盲目的に尊敬しており、それゆえ既に動けない体であることに気がついていない。

ルナン
　ヘルマン第3軍魔法兵。捕縛後はランスに美味しくいただかれました。名前はアリスソフト作品の「闘神都市2　そしてそれから…」より。ディアと名付ける予定が間違ってルナンに。ルナンは男だ。まあ女っぽい名前なのでそのままにしました。

［技］
手加減攻撃
使用者　ランス
　ランスの必殺技。どんな相手でも殺すことなく必ず体力を残す妙技。

属性パンチ・炎
使用者　アレキサンダー
　アレキサンダーの必殺技。炎の神の力を借り、己の拳に炎を纏わせる。格闘家でありながら属性攻撃を可能とする脅威の技である。

モーデル脚
使用者　フレッチャー・モーデル
　フレッチャーの必殺技。相手の攻撃に対してカウンターで蹴りを繰り出す。その威力は絶大で、これを受け手立ち上がることの出来た者は一握りである。

［都市］
レッドの町
　自由都市。町を覆う赤レンガが特徴的だが、警備体制としては甘い。最近教会に新しく赴任した美人神官セルが話題の的である。

［その他］

永遠の八神

人間界にその存在を知られていない、高位の神々。地位は三超神に次いで高い。本来は人間界に興味はなく、支配も望んでいないが、自分たちの存在に気がつくことの出来たアレキサンダーに少しばかり興味を示し、力を授ける。それぞれの仲は悪いため、同時に複数の力を借りることは出来ない。

第４８話　魔人の足音

―レッドの町　司令部―

レッドの町を解放し、次なる戦場であるジオの町奪還に向け、司令部では会議が行われていた。参加者は前回の面々に加え、欠席していたランスと志津香、更にはシィルとリックとメナドが加わる。エクスが遅刻してきた際、横に魔法軍副将のメルフェイスを携えてきて、そのままメルフェイスも加わる。総勢１８人、それもリーザスの将軍、副将が半数以上を占める。流石に壮観であった。何故かメナドがちらちらとルークの方を見ている事がリックは気になっていたが、会議は円滑に進む。話も終盤にさしかかった頃、会議の始まりからずっと寝ていたランスが起きる。

「ふぁぁぁ、おい、終わったか？」
「ふふふ、おはようございます、ランスさん」
「もう！ずっと眠っているだけなんだから！」

真知子がクスクスと笑い、マリアが苦言を呈す。このランスの対応にリーザス兵の評価は割れる。バレスやリックは剛胆と感じ、評価を下げていない。逆にエクスやハウレーン、黒の三副将などはあまり良く思っていないようだった。メナドは心ここにあらずで、ランスの事を考えている余裕がなかった。

「ランス殿、もうすぐ会議が終わるところでしての。後は解放軍の被害の確認と、補給経路の確認、それと…」
「なんだ、確認ばかりではないか。そんなものはパスだ。それより、レッドの解放で俺様たちの部隊にはどれだけ仲間が増えたんだ？」

「赤の軍と魔法軍、それと義勇軍が志願してきて、併せて約２００。更に、リーザス親衛隊も赤の軍に組み込まれ参加していたため、仲間になりました。これで残すリーザス軍は青の軍を残すのみですじゃ」

「ジオの町を守るヘルマン軍は約２０００。司令官ガイヤスもそれ程優秀な指揮官ではないため、よほどの事が無い限り負けることはないでしょうね」

バレスとエクスがそう報告する。いくら被害が出てもヘルマンが痛まないためか、リーザス軍はより前線に配備されていた。そのことが幸いし、解放軍の規模は巨大なものになっていた。

「そうだ、親衛隊で思い出した。あの美人のレイラさんはどうした？助けてやったんだから、お礼くらい…じゅるり」

「むっ…それは…」

ランスの言葉にバレスが言いにくそうにする。他の面々も同様に表情が変わる。

「何だ？レイラさんに何かあったのか？」

「…彼女には他の洗脳魔法とは違う、特殊な魔法が掛かっていて…」

「えーい、うだうだ言うな！さっさと結論を言え！」

「…判ったわ、こっちについてきて。それと、ルークさんやかなみさんも」

「マリア殿、それは…」

「…あまり男性に見せる姿ではないと思うのですがね」

「エクス、それほど酷いのか？」

「…ええ、特にリック。君は絶対に見てはいけませんよ。彼女のことを思うならね」

「？」

そう言うエクスは既に見ているのであろう。光景を思い出し、顔を歪める。リックは他のリーザス兵から止められ、その様子を見てはいない。かなみもまだ確認していなかったため、マリアはルークとかなみをランスと一緒に奥の部屋へ連れて行こうとする。

「見て貰った方が早いし、緊急性も伝わると思うわ。それに…ランスは見なきゃ納得しないと思うし…」

「ふん、とにかく案内しろ」

「さて、俺もついて行くか」

「ルーク！」

そう言って席を立つルーク。隣に座っていた志津香が声をかけてくる。

「出来れば、すぐに忘れてあげて。というか、忘れないと踏むわ」

「了解」

「メルフェイス。君も行って説明の補助を」

「はい、エクス様」

マリアに案内され、ルークとランス、シィルとかなみ、そしてメルフェイスは奥の部屋に向かう。廊下を歩いていると、奥の部屋から悩ましげなあえぎ声が聞こえてくる。部屋まで辿り着き、中の様子を覗く。そこでは、狂ったように乱れ、裸で自分を慰めているレイラの姿があった。

「そんな…レイラさん…」

「おおおっ！これは俺様を誘っているのか！」

「馬鹿言わないの！レイラさんは昨日の晩からずっとこの状態なの」

マリアの説明に補足するように、メルフェイスが一歩前に出て説明を始める。

「レイラさんは、どんどん衰弱しています。彼女だけは他のリーザス兵とは違う洗脳をされたようです」

「はぁ…あぁ…アイゼル様ぁ…」

「アイゼルだと？」

レイラの上げた声に、ランスが反応する。メルフェイスとマリアが説明を続ける。

「ええ、レイラさんは魔人アイゼルに直接洗脳を受けたようです」

「術を解く方法は、アイゼル自身が術を解くか…アイゼルを倒せば解けるはずだわ」

「アイゼルを倒す…か…」

「がはは、簡単ではないか！それでいこう！無事にレイラさんを助けた暁には、たっぷりと礼をして貰うことにしよう」

「ランス様、その事なんですが…アイゼルの居場所が判らないので、会議では無理だという結論になったんです」

「なに？進軍していけばその内、出会うんじゃないか？」

「いえ、レイラさんはもって数日。間に合わないわ」

「なんだと！それじゃあ、何か別の方法はないのか！」

ランスが騒ぎ立てる。みすみす美人を死なすことは納得がいかないのだろう。会議にちゃんと参加していたルークが口を開く。

「ある。真知子さんが見つけてきてくれた方法だ。ラジールの町から東の迷子の森に生息する、聖獣ユニコーンの蜜。それを飲ませればどんな催眠、洗脳もたちどころに消えるらしい」

「それさえあれば、きっとレイラさんを救えるわ」

「がはは、それではユニコーンを捕まえに行くとするか。その後はレイラさんと…ぐふふ…」
「お願いね、ランス。私たちはジオの町に攻め込む準備をしているから」

こうしてレイラを救うべく、少数精鋭の部隊が組まれることになった。リーザスの将軍たちは部隊を纏める必要があるため参加できない。マリアはチューリップの整備、ランも不参加、ミリも今回は部隊を纏めるからとパス。ミリにしては珍しい行動であった。そのため、ユニコーン捕縛に参加するのは、ルーク、ランス、シィル、かなみ、志津香、アレキサンダー、それと…

「トマト、復活です！」

両手を高々と上げながら叫んでいるトマト。先程までレッド司令部に連れて行って貰えなかった事に文句を言っていたが、迷子の森に連れて行って貰えることが決まり、こうして全身を使って喜んでいた。その側には、何故か神官のセルもいた。ルークが問いかける。

「セルさん。貴女も一緒に？」
「はい。迷子の森には少女がモンスターと一緒に住んでいるという噂があるんです。本当なら、放っては置けません。教会で保護しなければ…」
「なるほど。だが、部隊の治療は？」
「昨日までで大体終わらせました。それに、ロゼさんという方が引き継いでくれたので」
「ロゼか…本当に俺たちについて来ているんだな」
「がはは、美人のセルさんなら大歓迎だ。俺様と一発…」
「あ、ランスさん。貴方にお話したいことが…」
「しまった！ええい、説教を聞いている暇などない。さっさと行く

ぞ！」

ランスがセルから逃げるように町を飛び出していき、他の者もそれに続く。目指すは迷子の森のユニコーン。

―迷子の森　入り口―

「ランス様、大きな森ですね。迷子になりそうです」
「うむ」
「この森の名前の由来もそこから来ているんですよ」
「つけた人はネーミングセンスないですかねー？」
「そうですか？単純明快で、良い名前だと思いますが」
「ルークさん、アレキサンダーさんのセンスって……」
「……突っ込まないであげてくれ」

シィルの言葉にセルが説明をし、トマトがバッサリと命名者を切り捨てるが、アレキサンダーが不思議そうに返す。そのアレキサンダーをかなみと志津香が呆れた様子で見る。森の中を進んでいく一行だが、モンスターの気配が全くない。

「モンスターが出るという話だったのでは？」
「おかしいですね。この森を訪れた冒険者の話ではそうなっていたのですが……」
「！？ルークさん！」
「ああ、みんな止まれ、気配を感じる！」

セルと話していると、それまで感じなかった気配が近くからする。いち早く気がついたのは忍者のかなみとルーク。ランスとアレキサ

ンダーもほぼ同時に気がついたようで、ランスは剣を抜いている。他の者もルークの言葉と同時に構える。すると、巨大な木の下に湧き出るように一人の少女と変な生き物が現れる。

「ルークさん、あれが森で住んでいるという…」
「女だ！美少女だ！がはは、俺様のものだ！」

セルの言葉を遮るようにランスが叫ぶ。目の前に現れた少女は、赤い髪に美しい容姿、そして、野性的な薄い服を纏っていた。こちらを睨みながら、少女が言葉を発する。

「コノ　モリ　ラプ　ノ　オマエタチ　デテケ！」
「ん？なんだ？」
「ランス様、どうやら森を出て行けと言っているみたいです」
「片言だな。だが、人語が判るならまだやりやすいか」
「そうですね。ねえ、私たちと一緒に町に戻りましょう？」
「スー　イカナイ　ケイコクダ　スグニ　デテカナイト　シヌ　ワカッタナ」

セルの言葉に聞く耳持たず、それだけ言い残すと少女はこの場から瞬時に消え去った。

「瞬間移動！？…いえ、ワープしただけね」
「高度な魔法か？」
「瞬間移動だったらそうだけど、ワープだけならたいしたことないわ」
「あの少女を捜すぞ！こんな森に一人で放っておく訳にはいかんからな、ぐふふ」
「そういう事は、少しは顔に出さないで言ってよね。何考えてるか丸わかりよ」

「だが、あの少女を捜すのは賛成だ。保護する目的もあるが、この森に住んでいるんだ。ユニコーンの場所も知っているかもしれない」
「ですがルーク殿。どこへ行ったか見当が…」

消えた少女を捜すことに反対する者はいなかったが、どこへワープしたか見当がつかない。アレキサンダーの言葉に一同困った様子になるが、志津香が不敵に笑う。

「大体の見当ならつくわ。行きましょう！」
「流石だな。頼りになる」
「ふん、煽てても何も出ないわよ」

志津香が先頭を走り、それに他の面々が続く。ルークの言葉に軽く返した志津香だが、その表情は少しだけ嬉しそうであった。その表情を見たトマトが、そっとかなみに耳打ちする。

「もしかして、志津香さんもラブってますですかー？」
「……どうして私に聞くんですか？」
「それは勿論、ラブってる筆頭のかなみさんに聞くのが一番かとー」
「（嘘、バレてるの！？に、忍者として上手く隠していたはずなのに！）」

―迷子の森　中間部―

志津香が走った先、最初に目指していた箇所にはいなかったが、次に目指した箇所に確かに先程の少女がいた。巨大な木に腰掛け、やってきたルークたちを不思議そうに見る。

「マダ　イタノカ　ドウシテ　ココガ　ワカッタ？」
「ワープ呪文なら座標を固定しなきゃいけないでしょ。貴女が最初に現れた大木、若干魔力を感じたのよ。周りを見れば、この森には頭一つ突き出した木が数本あったわ。となれば、ワープ先はその大木のどれか。どう、当たってる？」
「アタリダ　オマエ　スゴイナ　デモ　ケイコク　ムシシタ」

そう言いながら、こちらを睨み付けてくる少女。

「オマエタチ　モリ　アラス　アクニン　ラプ　イジメル　ニンゲン」
「ラプ…ラプ…」

少女の側に控えていた小さな妖精のような生き物が怯えた声を出す。

「そうか…あれがラプか。初めて見た」
「知っているんですか？」
「丸い者の一種でリスとかの仲間だな。歌を愛する平和的種族だが、その美声を見世物にしようとした悪人から狙われ、森でひっそりと暮らしているという」
「ほえー。流石ルークさん、何でも知っているんですねー。解説役みたいですー。知っているのかー、ルーク！」
「あまり嬉しくない例えだな…」

ラプという種族がいた事を思い出したルークがかなみに説明する。トマトが感心して誉めてくるが、何故かあまりいい気はしなかった。そんなルークたちに、少女が持っていた槍を向ける。

「スー　タタカウ　オマエタチ　テキ」

「待ってください。私たちは貴女を保護しようと…」
「スー　ノ　ミラクルパワー！」
スーという少女がそう言うと、ルークたちの体を魔力が包む。
「まずい！ワープ魔法だわ！」
「バイバイ　トンデケー！」
スーがそう言うと、ルークたちを包んでいた魔力が白く発光し、次の瞬間この場からルークたちの姿が消えた。森のどこかへワープさせられたのだ。
「スータチモ　ムラ　モドル」
「ラプ！」

ー迷子の森　最深部ー

「みんな、怪我はないか？」
「はい。なんとか」
「バラバラに飛ばされないで助かったわね」
巨大な木の下には全員が揃っていた。だが、ワープで無理矢理飛ばされたため、完全に迷っていた。頭一つ抜き出た大木も、多すぎてどれが先程のものか見当もつかない。と、木の上に上って辺りを偵察していたかなみが降りてくる。
「ルークさん、近くに村みたいなものがあります」
「村？森の中にか？ラプの集落の可能性が高いか…だが、ワープし

た先にある訳が…」
「とりあえず向かうぞ。こんな所で話し合っていても仕方ないからな！」

かなみが見つけたという村に向かって歩くルークたち。その場所は近く、数分で村の前まで辿り着く。村の中ではラプたちが生活しており、こちらを見ると驚いて村の奥へと逃げて行ってしまった。追いかけようとしたが、先程の少女、スーが村の奥から現れる。

「シマッタ　マチガエテ　ムラ　ノ　ソバ　トバシテ　シマッタ」
「なるほどね。おかしいとは思ったが…」
「ドジですかねー？」

ポリポリと頭を掻いていたスーだが、突然キッとこちらを睨み付けてくる。

「ヨクモ　ココマデ　キタナ　ホメテヤル」
「無かったことにした！」
「ルークさん！可愛いです、あの子！」
「ダガ　ラプノムラ　シラレタ　イキテ　カエサナイ　シネ　ニンゲンドモ」
「待って、貴女たちの生活を邪魔する気は…」

セルの言葉に耳を貸さず、スーが宣言する。すると、周りにモンスターが集まってくる。どうやらラプだけでなく、他のモンスターとも仲良く暮らしているようだ。パワーゴリラZ、らーめん、ライカンスロープ、そしてラプと様々なモンスターの混合部隊となっていた。

「カカレ！」

スーの合図で一斉に襲いかかってくる。迫ってくるモンスターを見ながら、ルークが冷静に分析する。

「厄介なのはパワーゴリラZくらいか？」
「では私とルーク殿で担当しましょう」
「ランスは？」
「既に女の子モンスターの方に…」
「やれやれ。かなみとトマトはラプを頼む。超音波にだけ気をつければ大した相手じゃない。志津香とシィルちゃんは状況を見て援護を。セルさんは回復を頼む」
「了解。任せておいて」
「みなさん、気を付けてください」

ルークの指示に従い、各々が散らばっていく。パワーゴリラZを目の前にして、アレキサンダーが数を数え始める。

「ふむ、九体ですな。どうですか、ルーク殿？どちらがより多く倒せるか勝負というのは？」
「まあ、いいだろう。だが油断するなよ」
「御意！」

そう言うと二人がパワーゴリラZに向かっていく。パワーゴリラZは決して弱いモンスターではないが、相手が悪すぎる。真空斬で次々と斬り伏せていくルーク。対するアレキサンダーも装甲破壊パンチを腹部に放ち、パワーゴリラZを倒していく。

「何よ、あっちは援護なんていらないじゃない。火爆破！」
「炎の矢！」
「はっ！」

「とりゃー！」

志津香が悪態をつきながら、ラプに向かって火爆破を放ち、シィルも炎の矢を放つ。二人の援護を受けながら、かなみとトマトは確実にラプを気絶させていく。その奥ではランスがライカンスロープに向かっていた。

「変身！ワープリンセス！」
「がはは、らーめんに続き、ワープリンセスゲットだー！」
「きゃぁぁぁぁ！」
「ランスさん！女の子モンスターにとって人間の精は毒なんです！手を出してはいけません！」

左手にらーめんを抱えながら、ライカンスロープが変身した姿の一つである、ワープリンセスの胸を揉みしだく。そのランスの様子にセルが苦言を呈す。次々と数を減らしていくモンスター。既にこの程度のモンスターでは足止めすら出来ないほどに、ルークたちのパーティーは強力なものになっていた。三分と掛からずにモンスターが全滅する。

「六体、俺の勝ちだな」
「くっ…三体です。まだまだ修行が足りませんね」
「まあ、俺は遠距離攻撃持っているからな。そう気を落とすな」
「なに、遊んでいるのよ！全く…」
「バカナ　コンナニ　ツヨイ　ナンテ」

スーが驚いていると、奥から年老いたラプが現れる。どうやら村の長老らしい。悲しそうな瞳でこちらに問いを投げる。

「人間はなぜ我々をそっとしておいてくれないんだ…我々の生活を

破壊しないでくれ…」
「ユルセナイ　コロセ」
「待て、勘違いしているぞ」
「私たちはここに戦いに来たんじゃありません！」
「嘘を言うな。こちらは何もしていないのに、多くの同胞がやられたのだぞ」
「勝手なことを言うな。先に仕掛けてきたのはそっちだろ！」
「私たち、この森にはユニコーンに会いに来ただけなんです！」
「それと、森で暮らす少女の確認と保護を…」

ルークとセルの言葉を信じようとしない長老だが、ランスの言葉を聞いてその表情が驚きに変わる。シィルとセルも補足し、それを聞いた長老がスーの方を見る。

「スー！これはどういう事だ！」
「エッ…　ダッテ　ニンゲン　テキ　ワルイヤツ」
「スー、敵かどうか確かめずに攻撃したんだな？」
「…ゴメンナサイ」

それを聞いた長老が、こちらに深々と頭を下げる。

「申し訳ありません。こちらの早とちりだったようです」
「ゴメンナサイ」
「ランス様、どうやら無事に和解できそうですね」
「うむ、以後俺様に協力を誓うなら許してやろう」
「ありがとうございます。ささやかですが、謝罪の意味も込めて宴に案内させていただきます」
「そんな時間は…」

断ろうとしたかなみだが、そのお腹がくーとなり、顔が真っ赤に

なる。考えてみればそろそろお昼時だ。

「じゃあ、お言葉に甘えるか。長居は出来ないが、昼食を取るくらい問題ないだろ」

「そうね、丁度お腹も空いたことだし」

「そうですー！ペコペコですー！だから、かなみさん。あんなに盛大にルークさんの前でお腹を鳴らしても、気にしなくていいんですよー！」

「お願い…トマトさん。追い打ちを掛けないで…」

トマトの天然追い打ちを食らい、かなみが羞恥で死にたくなる。先日のかえるパンツといい、最近不運だと思うかなみだった。まだまだこの程度で不運と思えているあたり、かなり幸せなことなのだが。

―迷子の森　ラプの集落―

ラプに振る舞われた食事を取りながら、ルークが一息つく。流石に冒険の最中であるため、酒は断った。ルークの側にはかなみと志津香、トマトとセルが座り、ランスとシィル、アレキサンダーは三人で少し離れた所に座っていた。先程までランスと話していた長老が、今度はルークたちの方に近づいてくる。

「この度は真に申し訳ないことを…」

「気にしないでくれ。反撃とはいえ、こちらも手を出したんだ」

「どれよりも、スーさんはどうしてここで暮らしているんですか？」

セルの問いかけに長老が悲しそうに口を開く。

「スーは心ない人間に捨てられた捨て子だったのです。私たちがなんとかここまで育てました」
「そんな…」
「決して少なくはない話です。風の噂で聞いた話ですが、別の森でも捨てられた娘がモンスターたちと暮らしていると聞きました。そちらの森には人語を教えられるモンスターがおらず、娘は喋ることすらままならないそうです。名前もなく、周囲からはキバ子と呼ばれているそうで」
「酷い話ね…」
「そのキバ子という娘も、何とか保護してやりたいものだが…」
「しかし、スーはやはり人間。そろそろ人間界に戻って生活をしないと…スーの幸せのためにも」

その長老の言葉に、セルが優しく応える。

「それでは、スーさんは私の教会で保護します。レッドの町の方はいい人ばかりなので、大丈夫ですよ」
「ありがとうございます。スーは文化というものを知らない。色々と迷惑をかけるとは思いますが、スーをお願いします」
「任せてください。ところで、スーさんは？」

セルが周囲を見回す。確かにスーの姿が見当たらない。おまけに、ランスの姿も。先程までシィルと騒いでいたはずだが、今はシィルとアレキサンダーが静かに話しながら食事を取っていた。

「先程ランス様にも同じ話をしたら、スーに人間界の上流階級にも通用する文化を教えてやると、張り切って連れて行かれました。素晴らしいお方です」
「まあ、ランスさんにもようやく神の言葉が届いたんですね」

長老が嬉しそうに話し、セルも喜ぶが、それ以外の面々が一斉に立ち上がる。が、時既に遅し。笑いながらスーを引き連れて戻ってきたランス。スーの頬は赤く染まっていた。

「遅かったか…」
「スー　シラナカッタ　アンナ　オオキナ　モノガ　ハイル　ナンテ」
「がはは、グッドだったぞ、スー！」
「ニンゲン　ノ　ブンカ　スゴイ」

―迷子の森　湖―

長老にユニコーンがいるという湖の場所を教えて貰い、そこへ向かう一行。少し歩くと言われたとおり綺麗な湖に辿り着く。

「ランス様、いました。レア女の子モンスターのユニコーンです！」
「よし、捕まえて蜜を搾り取るぞ」
「待ってください、ランス様！」

そう言って駆け出すランスだが、シィルが引き留める。

「ん？何だシィル？」
「ランス様では捕まえることは出来ません。ユニコーンは、男の人が近寄るとすぐに逃げてしまいます。物凄い速さなので、触れることも無理かと…」
「ちっ、それじゃあシィル。お前が捕まえてこい」
「…それも無理です、ランス様。ユニコーンは、乙女にしか気を許

さないんです」
「乙女？」
「…処女の女の子です。私は…違います」
「面倒な。それじゃあこの中で処女のやつ、手を挙げろ」

ランスがそう言うと、次々と手が挙がる。かなみ、志津香、トマト、セルの四人。なんと、この場にいる女性で処女でないのはシィルだけであった。その事に驚愕するランス。

「な、な、なんだとぉぉぉ！言われてみれば、お前らの処女を奪っていないではないか！俺様ともあろう者がこれではいかん！とぉぉぉっ！」
「粘着地面」
「んがっ！」
「さあ、馬鹿は放っておいて、私たちでユニコーンの蜜を採取しましょう」

ランスが地面にくっついている間に、さっさとユニコーンの蜜を回収しようと湖に近づいていく志津香たち。四人もいたため、難なくユニコーンを捕獲し、その蜜を回収することが出来た。セルが嬉しそうに話しかけてくる。

「皆さん、身持ちが堅いのですね。素晴らしい事です！」
「ああ、良い事だ」
「誰か思い人でもいるのでしょうか？」
「……どうなんだろうな」

ルークがセルの問いかけに静かに返すが、その言葉を聞いていた三人が内心思う。

「（ルークさんです、ルークさんです、ルークさんです！）」
「（あんなに判りやすいかなみさんとトマトさんに向かってそう言うの！本気で言ってるなら殺すわよ…）」
「（トマトの初めては、ルークさんに決めていますですー！）」

こうして蜜を無事に回収したルークたちは、途中村にもう一度寄って教会で保護することになったスーを連れ、レッドの町へと引き返す事となった。ランスが騒ぎ立てているが、セルが説教をしている。帰り道でルークがアレキサンダーに問いかける。

「そういえば、村での食事の時に、どうしてランスたちの方にいたんだ？」

問われたアレキサンダーは、シィルの方を見ながら静かに呟いた。

「……可憐だ」
「なん…だと…」

―リーザス城下町　うし車屋―

「で、王女は確かにそう言ったんだな」
「は、はい！ランスという冒険者に、剣と鎧を届けなきゃと…」

城下町では、うし車屋を営む店主がガーディアンに頭を握られて持ち上げられていた。いつまでも口を割らない王女と侍女の拷問とは別に、ノスの命令でこうして城下町でも情報収集を続けていたのだ。それが、遂に実る。この男は、かつてリアたちがカスタムを訪れる際に利用したうし車を運転していた男だ。その時に聞こえてき

た会話の内容を話してしまう。こうしてリアとマリスの懸命の努力が水泡と化す。

「そう、じゃあもう用はない」
「それでは命は助けて貰え…」
「ばいばい」

グシャ、という音と共に男の頭がガーディアンによって握りつぶされる。血飛沫が辺りに飛び散り、店主の首から下だけになった体が下に落ちる。頬に少しだけついた血を指で拭いながら、少女が嬉しそうに呟く。

「聖剣と聖鎧の保有者、遂に見つけたぞ。このサテラ直々に出向いてやる！」

第４８話　魔人の足音（後書き）

［人物］

メルフェイス・プロムナード

ＬＶ　２４／４８

技能　魔法ＬＶ２

　リーザス魔法軍副将。かつて故郷を賊から守るため、禁断の秘薬を飲み強大な魔力を手にするが、その代償として二ヶ月に一度自分より強い男に抱かれないと気が狂ってしまう呪いを受ける。今は定期的にエクスに抱いて貰っている。

スー

　迷子の森でラプに育てられた少女。長老の願いもあり、セルが教会で保護することになる。セルが留守の間も町の人たちが親切にしてくれている。

［モンスター］

ユニコーン

　四つ星レア女の子モンスター。迷子の森に生息し、その蜜は催眠、洗脳を立ち所に治すと言われている。汚れのない乙女しか近寄ることが出来ない。

ラプ

　丸い者の一種。歌を愛する妖精のような種族で、争いを好まない。捨てられたスーを育てるなど、心優しい種族である。

パワーゴリラＺ

　体力と力に優れたモンスター。ぶたバンバラよりも強く、ぞうバ

ンバラよりは弱い中堅モンスター。

らーめん
　二つ星女の子モンスター。赤いチャイナ服が特徴的。麺類が好物で、それ以外は口にしない。

ライカンスロープ
　女の子モンスター。変身を得意としており、星の数は何に変身出来るかで変わってくる。素の状態なら一つ星。

ワープリンセス
　ライカンスロープの変身の一種。お姫様の格好をしており、ウルウルと涙目でお願いしながら攻撃してくる。

第４９話　襲撃

―レッドの町　司令部―

「がはは！英雄の俺様が、ユニコーンの蜜を取ってきてやったぞ！」
「なんと！流石はランス殿とルーク殿！」
「お疲れ様、みんな！」

司令部に入るや否や、ユニコーンの蜜を手に入れた事を宣言するランス。バレスが感激に打ちひしがれ、マリアがみんなを労う。シィルがマリアに蜜が入った瓶を手渡す。

「こちらです、マリアさん」
「ありがとう、これでレイラさんを救えるわ。早速飲ませてくるわね」
「よし、俺様も立ち会おう！」
「駄目に決まっているでしょ！」

そう言ってマリアは奥の部屋へと入っていく。ルークが椅子に腰掛けると、リックが話しかけてくる。

「ルーク殿！レイラ殿救出のための蜜を取ってきていただき、感謝します！」
「俺だけの力じゃないさ。それに、礼を言うのはまだ早い。レイラさんが助かるのを確認しないとな」
「ええ、上手く効けばいいのですが…」
「大丈夫よ。情報は完璧だわ」

真知子がそう言いながら、ルークの前にコーヒーの入ったコップを置く。

「お疲れ様、ルークさん。ブラックで良かったわよね？」
「ああ、ありがとう」
「ほう、ルーク殿と真知子殿はそんな事を知る間柄で？」

バレスがそう聞いた瞬間、明らかに反応した人物が数人部屋の中にいた。それに気がついたエクスは、おやおや、と声を出す。いつの間にかリーザス軍の副将が一人増えていたからだ。

「情報屋に客として出入りしていたから、その時に出されていただけさ」
「ふふ、ただのお客さんの好みなんか、いちいち覚えていないのだけれどね。大事な人だけよ」
「おー！ブラックなんて大人なのらー！」
「ん？」

コーヒーを飲むルークをキラキラとした目で見てくる少女がいる。まだ5歳にも満たないのではないか。そんな少女がなぜここに、と疑問に思うルークにエクスが説明してくる。

「紹介が遅れましたね。彼女がリーザス魔法軍の隊長、アスカです」
「アスカなのらー！よろしくだおー！」
「こんなに小さいのにか？」
「彼女は少々特別でね…正確には彼女が身につけている着ぐるみが隊長なんですよ」

エクスがそう言うと同時に、アスカが被っている帽子が動く。人の顔の形をしたそれが、ルークに話しかけてくる。

「どうも、儂が隊長のチャカですじゃ。アスカは儂の曾孫に当たります」
「何？生きているの、その服！？」
「……チャカ？」
「む？お主は……」

志津香が言葉を話す着ぐるみに驚くが、ルークはその声に聞き覚えがあった。チャカもルークの顔と声を見ると、考え込んでしまう。程なくして、チャカが絶叫する。

「ま、まさかルーク殿か！儂です、チャカですじゃ！魔女パンドーラを共に討った…」
「そうか！チャカという名前に聞き覚えがあったが、あの時の…」
「お懐かしゅうございます。生きていらっしゃったのですね！捜したんですぞ！」
「チャカ殿、ルーク殿と面識が？」
「ひじじ、知り合いらろ？」

エクスとアスカがチャカに問いかける。チャカが昔を思い出すように目を瞑りながら、それに答える。

「うむ。１０年以上前、この世を暴力が支配する世界にしようとした恐るべき魔女、パンドーラ。この者を倒す際、協力して貰ったのじゃ」
「依頼を受けた訳じゃなく、魔女と戦っている所にお節介にも割り込んだだけだがな」
「いえいえ、あの時ルーク殿が来てくれていなかったら、儂は死んでいた。感謝しておりますぞ」
「それよりも、ルークを捜していたっていうのは？」

「ルークさんに何かあったんですか？」

志津香とかなみが話に入ってくる。うむ、とチャカが答え、話を続ける。

「魔女になんとか勝利した儂らじゃったが、奴の死に際に放った魔法が強力での。儂はご覧の通り、着ぐるみの体にされてしまった。このせいでしばらく隠居していたのじゃが、最近生まれた曾孫のアスカが共に戦ってくれると言ってくれての。こうして軍に戻って来られた訳じゃ。じゃが、戻ってからもこれが大変での…」

「チャカ様、貴方のお話は後で聞きます。ルークさんはどうなったのですか？」

笑顔だが、どこか恐怖を感じる表情で真知子も話に入ってくる。子供のアスカが敏感にそれを感じ取る。

「恐いのらー…」

「う、うむ。魔女の魔法をかけられたルーク殿はその場から姿を消してしまったのじゃ。恐らく、どこかへ転移されたものと。後から駆けつけた別の仲間に儂は回収され、その後必死にルーク殿を捜したのじゃが、結局見つからなかったのじゃ…」

「そんな事が…」

「ですが、こうして再会出来て嬉しいですぞ。あの後、どこへ飛ばされていたのですかの？」

「それは……」

「みんな、お待たせ！ユニコーンの蜜はバッチリ効いたわ！」

ルークが言いあぐねる。すると、マリアが笑顔で司令部へと戻ってきた。その傍らにはレイラが立っている。若干衰弱した様子だが、特に問題はなさそうだ。部屋にいたみんなに深々と頭を下げる。

「ご迷惑おかけしました」
「レイラさん、無事で何よりです！」
「また貴女と肩を並べて戦えると思うと、嬉しい限りです」

メナドとハウレーンが声をかけて喜びを露わにする。自分の部下である親衛隊だけでなく、他の隊の女性からの人望もあるようだ。その様子を見ながら、コーヒーを飲み干してルークが席を立つ。

「それじゃあ、俺は傭兵部隊の方に行って来る。お飾りの隊長だが、何も把握していないのはマズイからな」
「あっ、ルークさん…」

司令部を後にするルーク。その姿はまるで、先程の話題から逃げるようにかなみには見えた。

ー レッドの町　傭兵部隊詰め所 ー

「それじゃあ、ジオの町の進行時もセシルとルイス、そしてアリオスが中心になってくれ」
「了解だ。傭兵の意地を見せてやろう」
「苦しんでいる人々を救い出すために、精一杯努力させて貰う」
「けっけっけ。ルークの旦那とも一緒に戦いたいんだがねぇ！」
「悪いな。極力指揮するようにはするが、どこから呼ばれるか判らないんでな」
「あのランスという男か。腕は立ちそうだが、唯我独尊を地で行きそうな男だったな」
「あの、ルークさんはいらっしゃいますか？」

「ん？セルさんか」

傭兵部隊との会合を終え、少し雑談しているとセルが詰め所にやってきた。後の処理をセシルたちに任せ、ルークは詰め所から出て行く。

「どうした？何か用か？」

「ルークさん、私…もう少し一緒に行動してもよろしいでしょうか？」

「それは構わないが…危険だぞ？それと、スーはどうした？」

セルの予想外の申し出に驚くルーク。彼女が争いごとを嫌っているという話を町の人から聞いていたが、そんな彼女が何故。

「スーさんは私が留守の間、町の人たちが見てくれることになりました。今は解放軍には治療部隊が足りないのでしょう？少しでもお役に立ちたくて。それに…」

「それに？」

「ランスさんの行動には神の子として許されない事が多くあります。彼を正しい行動へと導くのが、神が私に与えられた試練なのです！」

右手をグッと握りしめ、その瞳が決意に燃える。それを見ながらルークが苦笑する。

「それは茨の道だと思うがな…」

一夜　レッドの町　宿屋前一

「ふぅっ……」

ルークが軽く素振りを終え、宿の前にある石段に腰を下ろす。この数日の間に立て続けに出会った魔人、そして、先程のチャカとの再会で少し昔を思い出していたルークは、一人夜風に当たっていた。先程まで騒がしかった準備の音も止み、町は静寂に包まれていた。その時、宿の中から二人の人物が出てきて話しかけてくる。

「精が出るわね」
「お疲れ様です、ルーク殿」
「リック将軍とレイラさんか」
「呼び捨てで構わないですよ、ルーク殿」
「それではリックと。そちらも呼び捨てで構わないぞ」
「自分のは性分でして…」
「固いのよ、リックは。それじゃあ、私はルークって呼ばせて貰うわ」

そう言って笑いあう三人。すると、レイラがルークに礼を言ってくる。

「ありがとうね。お陰でまだまだ親衛隊を率いることが出来るわ」
「なに、こちらとしても貴重な戦力を失う訳にはいかんからな」
「ヘルマン第3軍…そして魔人…青の部隊も未だ洗脳されたままです」
「そういえば、ルークたちが森へ行っている間にヘルマンに動きがあったわ」
「なんだと?」

ルークがレイラの顔を見る。真剣な表情でレイラが話を続ける。

「リーザス各地に散らばっていた軍を一カ所に集めているみたい。解放軍を一気に叩くつもりらしいわ」
「ですが、各地でゲリラ的な抵抗が起こり、招集は思うように進んでいないようです」
「軍を引退したペガサスさんやアビァトールさん、フリーの女剣士ユランに天才学生カーチス、それに、来年軍に入ることが決まっている子たちも各地で反乱を起こしているみたい」
「彼らの思いに応えるためにも、負けられません」
「アビァトール…それは親衛隊に所属していたアビァトール・スカットか？」
「あら？知っているの？」

聞き覚えのある名前にルークが尋ねる。レイラが驚いたようにこちらを見てくる。

「もう１０年以上会っていないがな。そうか、引退したのか…」
「１０年？それじゃあアビァトールさんが私の前の親衛隊隊長だったことも知らないのかしら？」
「隊長！？そうか…彼女は夢を叶えたんだな…引退の理由は怪我か何かか？」
「寿引退よ。名前は変えてないみたいだけど、もう旦那さんがいるわ。今度リーザスに女子士官学校の校長になってくれないか、マリスさんが打診しているみたい」
「……そうか。そういう話を聞くと、時の流れを感じるな…」
「もしかして、昔アビァトールさんと？」
「さあ、どうだろうな」

フッと笑うルーク。その時少しだけ風が吹いた。薄手の鎧であるレイラが寒そうにする。

「春だっていうのにまだまだ冷えるわね。私は中へ戻るけど？」
「自分はまだルーク殿と話したいことが…」
「ああ、さっきのあれね。じゃあ、先に戻っているわ。程々にね」
呆れた顔をしながらレイラが宿に戻っていく。残されたルークがリックに問いかける。
「で、話したい事っていうのは？」
「……一度手合わせ願いたいのですが」
「侵攻戦も近いのにか？」
「軽くで構いません。朧気な記憶ですが、操られていた時のルーク殿の太刀筋が忘れられませんので…」
「ふ、まあ少しだけなら良いか。約束もしていたことだしな。ここだと邪魔だから宿の裏手に回ろう」
「おお、ありがとうございます」
リックが頭を下げ、二人は宿の裏手に回っていく。人気のない開けた場所で、二人が剣を抜く。前回の互いに全力を出していない状況とは違う、軽くとはいえ互いに手を抜く気はない。二人に緊張が走るが、その剣が交わることはなかった。すぐ近くで気配がし、同時にそちらを向いたからだ。そこに立っていたのは、全身が岩のようなもので覆われたガーディアン。頭に「ＩＩ」という数字が刻まれている。
「何者だ！？」
「こいつは…魔人サテラが連れていたガーディアンだ！」
「なんですって！？」
「……」
不穏な空気で佇むガーディアンにルークが問いかける。

「何のようでここに現れた？」
「……」
「どうやら言葉は喋れないようですね」
「そのようだな…貴様の目的は宿の中か？」
「……」

この質問に、ガーディアンはコクリと頷く。

「なるほど、理解は出来るようだな」
「そのようですね。ルーク殿、手合わせはまた近い内という事で」
「ああ、そうするしかあるまい」

ルークとリックが抜いていた剣をガーディアンの方に向ける。宿の中が目的と言われて、おめおめ通すわけにはいかない。こちらが臨戦態勢に入ったのを理解したガーディアンは、自身も剣を抜き、超スピードでルークとリックに迫ってきた。

―レッドの町　宿屋表玄関―

「き、貴様ら何者だ！？ぐぁぁぁぁぁ！！」

静けさを打ち破る悲鳴。同時に宿の玄関が破壊され、二人組が中へ進入してくる。いち早く駆けつけた警備隊は、ことごとく侵入者に打ち倒されていった。宿の中で休んでいたバレスに報告がいき、大急ぎで廊下に飛び出る。先程宿に戻ってきていたレイラと、ドッヂ、サカナク、ジブルの三人が既に廊下には立っていた。

「どこだ、乱入してきた不届き者は！」
「はっ、一階を壊滅させ、こちらに上がってきていると思われます」
「一階を壊滅だと！？白の軍と魔法軍の隊長格が寝ていたんじゃ…」
「！？来ました！」

ジブルの叫びに、一斉に階段の方を向く。赤い髪の女が、ガーディアンを引き連れて階段を上ってくる。バレスたちを発見するとため息をつく。

「また雑魚だ。お前らに用はない。さっさとランスを出せ」
「何者だ。この宿はリーザス解放軍の詰め所も兼ねている。それを知っての狼藉か！」
「当然だろう。このサテラ直々に聖剣をいただきに来たのだ。ランスが持っているのはもう判っているんだ。そこをどけ！」

そう宣言するサテラに対し、バレスが剣を抜く。他の四人も剣を抜き、臨戦態勢に入る。

「そういう輩に、ここを通す訳にはいかぬわ！」
「我らの剣の錆にしてくれる！」
「きゃははは！人間ごときがこのサテラに勝てるとでも？さっき一階でも威勢良く掛かってきたメガネとかいたけど、全く相手にならなかったぞ」
「エクス将軍！？となると、一階の者は本当に…」
「ハウレーン…くっ！かかれ！！」

バレスの号令と共に三人の副将が飛びかかる。ガーディアンに対し剣を振るおうとするが、その剣が届く前にガーディアンが持っていた長剣に叩き伏せられる。

「ぐぁっ！！」
「ドッヂ！ぬっ、ぐぁぁぁ！」
「うぐわっ！」
「よそ見してる場合か？馬鹿」

サテラが鞭を振り回し、サカナクとジブルを同時に倒す。三人ともリーザス軍の中では紛れもない精鋭。その三人が十秒と持たず倒れる。幸い息はあるようだが、気絶してしまっている。

「弱い、弱すぎるぞ。なぁ、シーザー！」
「ハイ、サテラ様」
「うぬっ、おのれ！」
「今度は私たちが相手よ！」

そう言ってバレスとレイラが飛びかかる。長剣を振るうシーザーだが、バレスはそれを躱し、その体に剣を振るう。剣はその体を確実に命中したが、あまりの硬さに傷一つ付いていない。

「うぐ、なんて硬さ…」
「バレス様！危ない！」

あまりの硬さに怯んでいるバレスの体に、シーザーが振るった長剣が命中する。斬られたというよりも、そのパワーで吹き飛ばされる形となったバレスは、壁に叩きつけられる。

「うぐぁっ…不覚…」
「くっ…やっ！！」

レイラが剣を振るうが、シーザーはまるで避ける気がない。全て命中するが、相手の体には傷一つ付かず、レイラの手が痺れるだけ。

「こんなの…どうすれば…」
「そうだ、絶望しろ！人間ごときが勝てる訳ないだろ！」

サテラの鞭が連続で振るわれ、レイラも崩れ落ちる。高笑いを浮かべるサテラだが、一つ気に掛かる事があった。

「裏口から回ったイシスは何をやってるんだ？」
「判リマセン」
「まあいい、行くぞ！」

そう言って宿の奥へと進んでいくサテラとシーザー。部屋の前を横切った時、突如扉が開け放たれミリとラン、かなみとメナドが飛び出してくる。シーザーの脇腹に剣が突き立てられる。

「おらよっ！」
「はっ！」
「ムッ…」

奇襲を受けたシーザーだが、先程まで同様全くダメージを受けていない。ミリが舌打ちをし、ランとメナドの目が見開かれる。

「化け物め…」
「お前ら人間が貧弱すぎるだけだ。やれ、シーザー！」
「ハイ、サテラ様。フン！」
「うわぁぁぁぁっ！」

剣を突き立てていた四人を長剣で横薙ぎにする。その驚異的なパワーに、一度に四人とも吹き飛ばされる。ランとメナドは気を失い、かなみとミリは意識はあるが立ち上がることが出来ない。その二人

を見下しながら、サテラが更に奥へと進んでいく。角を曲がり、最奥の部屋の扉を開けた瞬間サテラの体を光が包む。

「白色破壊光線！！」

ラギシスを打ち破った志津香の最強魔法がサテラとシーザーを飲み込む。扉の向こうで白色破壊光線の準備をしていた志津香は、扉が開けられると同時にそれを放ったのだ。少しでもダメージを与えられればと考えていた志津香だったが、光が晴れ、出てきたのは無傷のサテラであった。これが魔人の持つ能力、無敵結界。神や悪魔などの攻撃以外は全て無効化するこの結界を前にしては、解放軍はあまりにも無力であった。シーザーもサテラの後ろに立ち、結界の恩恵を受けて無傷でやり過ごしていた。

「そんな魔法じゃサテラには効かないぞ？もっと強い魔法を撃ったらどうだ？」

「……くっ」

「きゃははは、もしかしたら今のが最強の魔法か？やはり人間は情けないな。じゃあ、今度はサテラから行くぞ！」

そう言って鞭を振るうサテラ。その鞭に軽く吹き飛ばされ、志津香は気絶してしまう。

「この奥だな！」

サテラが部屋の奥の扉を開け放つ。中は寝室になっており、ランス、シィル、マリアの三人がいた。魔人の襲撃をマリアはランスの部屋まで報告に来ていたのだ。

「もうここまで…それじゃあみんなは…」

「馬鹿者！俺様に抱いて貰いたいんだったら、もっとおとなしく偲んでこい！」
「まさか、あの時の馬鹿が聖剣の保有者とは思わなかったぞ。痛い目に会いたくなかったら、さっさとサテラに聖装備を全て寄越せ！」
「ランス様…」
「ふん、誰が渡すか！どうしても欲しいなら一発やらして貰おうか！」

そのランスの言葉にサテラが笑い出す。

「きゃははは、勘違いするな。サテラはお願いしているんじゃない。命令しているんだ。早く渡せ」
「ふん、俺様の所有物を盗もうなど百年早いわ！」
「どうやら馬鹿には力で教えるしかなさそうだな。シーザー、行くぞ！」
「ファイヤーレーザー！」

向かってくるサテラに向けてシィルがファイヤーレーザーを放つ。しかし、無敵結界に阻まれ、ダメージを与えることが出来ない。シーザーが拳を振るい、側にいたマリアが吹き飛ばされる。

「きゃぁぁぁっ！」
「マリア！ええぃ、貴様！」

ランスが剣を抜き、高く飛び上がって剣を振り下ろす。

「必殺、ランスアタァァァック！！」
「ふん」

サテラがシーザーの前に立つ。ランスアタックはサテラを直撃す

るが、シィルと同様に結界に阻まれ、傷一つ与えられない。

「な、なんだとぉぉぉ！」

「弱いのにサテラに歯向かうから痛い目に会うんだ。はぁっ！」

「あんぎゃぁぁぁぁ！」

サテラの鞭がランスを襲う。無防備な状態で直撃を受けたランスの体が崩れ落ちる。そのランスを見下ろしながら、部屋の中にあった盾を手に取る。

「これが聖盾だな、貰っていくぞ。聖剣と聖鎧はどこだ？」

「……」

「まぁいい。サテラに隠し事は通用しないからな。シーザー！」

「きゃぁぁぁ、ランス様！」

「シ、シィル！」

シィルがシーザーに一撃を受け、気絶させられる。そのシィルを左腕に抱えたシーザー。サテラがその肩に乗り、ランスに宣言をする。

「この女を返して欲しければ、聖剣と聖鎧を持ってハイパービルまで来い！交換だ！」

「なんだと！」

「早く来なければこの女の命はないぞ。サテラは待つのが嫌いだからな。じゃあな」

そう言って窓をぶち破り、サテラとシーザーはシィルを連れ去ってしまう。宿の中の者は皆傷つき、後を追える者はいなかった。

ーレッドの町　宿屋裏口ー

「はぁっ！」
「ふんっ！」
「……！」

ルークとリックの猛攻を、イシスが両手に持った二刀で受けきる。と思えば、今度はイシスが二人に高速の剣を振るう。本来動きの遅いものが多いガーディアンだが、目の前のイシスは二人のスピードと互角。その上耐久力も高く、何度か体に命中させたが傷ついた様子はない。宿の中の騒ぎは聞こえていた。だが、イシスの足止めで精一杯であった二人は駆けつけられない。下手に動けばイシスも宿に侵入し、事態が悪化しかねない。

「宿の中では何が…」
「みんなを信じるしかあるまい。リック、一瞬気を引いてくれ」
「了解です」

ルークが剣を両手で握り直し、リックがイシスに向かって再度猛攻をかける。それを受けきるイシス。この場にいた三人、その全てが達人であった。リックの猛攻が止んだと思い、イシスが反撃に出ようとするが、ルークが飛びかかってくる。

「真滅斬！」
「……！」

剣でのガードが間に合わず、左腕で受けるイシス。しかし、その腕を切り落とすことは出来なかった。驚異的な耐久力。その時、真上の部屋の窓が割れ、そこから何者かが飛び出してくる。

「イシス、何を遊んでいる。行くぞ！」
「……」
「あれは…魔人サテラ！」
「ルーク殿、あのガーディアンが抱えているのはシィル殿です！」
「何！待て、サテラ！」
「きゃははは、人間の言うことなど誰が聞くか！サテラはハイパービルで待つ！聖剣と聖鎧を早く持って来ないと、この女は殺すからな！」

そう言ってサテラたちは去っていく。イシスもその後を追い、残されたのはルークとリックのみ。サテラたちの去るスピードはあまりにも速く、ルークたちでは追うことは出来なかった。

「シィル殿が攫われた…」
「こいつは…まずいことになったな…」

ジオの町侵攻戦を目前に控え起きた不足の事態。魔人が遂にその牙を剥いた。サテラは聖盾を持っていた。シィルと聖盾を取り返す必要がある。だが、立ちふさがるのは魔人。ガーディアン一体倒せない現状で勝ち目はあるのかと、ルークは拳を握りしめていた。

―街道―

「きゃははは、やっぱり人間なんかサテラたちの相手じゃないな！」

ハイパービルに向かい、闇の中を走るシーザーとイシス。サテラはシーザーの肩に乗りながら笑っていた。ふとイシスの方を見る。

「イシス、何あんな奴らに足止めされて…おい、その左腕どうしたんだ！」
「……」
「動かないのか？」
「……」

コクリと頷くイシスにサテラが驚愕する。

「そんな馬鹿な…人間ごときがイシスの装甲を破ったとでも言うのか…」
「信ジラレマセン、サテラ様」
「イシス、ビルに到着したら可能な限り修復してやるからな。ん、何で左腕が動かないのに嬉しそうなんだ？」
「……」
「サテラ様、イシスハアノ二人トノ戦闘ガ楽シカッタヨウデス」
「馬鹿！そんな油断しているから怪我するんだ。さっさとハイパービルに行くぞ！」

言い合いながら、魔人サテラたちは夜の闇に消えていった。

第４９話　襲撃（後書き）

［人物］

レイラ・グレクニー
ＬＶ　３４／５２
技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１

　リーザス親衛隊隊長。親衛隊とは女性だけで構成された女王直属の部隊で、地位は四色の将軍たちと変わらない。リーザスではリックに次ぐ剣の腕であり、周りにもよく気が利くため隊内外問わず信頼は厚い。

アスカ・カドミュウム
ＬＶ　３９／４４
技能　魔法ＬＶ２

　リーザス魔法軍隊長。アスカはまだ幼い少女であり、実際には彼女が身につけている着ぐるみのチャカが隊長である。レベルや技能もチャカのもの。かつてはゼスからもスカウトが来るほどの魔法使いであったが、魔女パンドーラの死に際に放った魔法で着ぐるみにされてしまう。ルークとは共にパンドーラを倒した間柄。

パンドーラ　（半オリ）
ＬＶ　４０／４５
技能　魔法ＬＶ２

　かつてルークとチャカが協力して倒した魔女。エターナルヒーローと死闘を繰り広げた魔女、エイナの末裔。七色の風を操り、変幻自在の攻撃を仕掛けてくる。この世を暴力が支配するものにしようと企んでいたが、その野望は破られる。死に際に放った魔法でルークをある場所へ飛ばし、チャカを着ぐるみにしてしまう。名前はノベル版ランス「極寒のパンドーラ」より。

サテラ
ＬＶ　１００／１０５
技能　魔法ＬＶ２　ガーディアンＬＶ２
　ホーネット派に属する人間の魔人。ホーネットの遊び相手として連れてこられた少女で、ガイの手により魔人になる。ホーネットとは幼なじみでもあり、親友。ガーディアン製作能力に長けており、その強さは驚異的。但し、彼女自身は生まれてからの期間や実力から、魔人の中では下位に位置している。

シーザー
ＬＶ　０／０
技能　剣戦闘ＬＶ１
　サテラに作られたガーディアン。２５０ｃｍの大剣から繰り出されるパワーと頑丈な体でサテラを警護する。その実力は主であるサテラとも互角である。片言であるが言葉を話せ、自我もある。サテラが最もお気に入りにしているガーディアン。

イシス
ＬＶ　０／０
技能　剣戦闘ＬＶ１
　サテラに作られたガーディアン。実力ではシーザーに劣るが、パワー型のシーザーに対し、イシスはスピード型。並の人間ではそのスピードについてくることすら出来ない。サテラが手抜きをしたため、言葉を話すことは出来ない。

［技能］
ガーディアン
　ガーディアンを製作する能力。レベルが高ければ、魔人と同等の

力を持ったガーディアンを作り出すことさえ可能にする。

［アイテム］

ユニコーンの蜜

催眠、洗脳などの状態異常を治療する秘薬。レア女の子モンスターユニコーンの愛液。

第５０話　セルの切り札

―翌朝　レッドの町　宿屋―

「えぇい、これだけ揃っておきながらあっという間に負けるとは、使えん奴らだ！！」

「面目ありません、ランス殿…」

宿にランスの怒声が響き渡り、バレスが頭を下げる。その様子を見ながらハウレーンが悔しそうに唇を噛む。サテラが去った後、駆けつけたセルの治療により、宿にいた者は何とか動けるまでには回復していた。奇跡的にも死亡者は０。遊ばれていたという事だろうか。

「あれが魔人の力なのね。強すぎるわ…」

「ぼくたちに…勝ち目はあるのかな…」

かなみとメナドがそう言葉を漏らす。普段であればその弱気な態度に他のリーザス兵が渇を入れているところだろうが、全員が魔人の強さをまざまざと見せつけられた直後。誰もメナドの言葉を否定できず、場の空気が一層暗くなる。と、そのメナドの肩に手を乗せながら、ルークが口を開く。

「勝てるさ、いや、勝たなきゃいけない」

「肝心なときにいなかったくせに何を偉そうに！」

「馬鹿、ルークとリックさんは外でガーディアンを一体足止めしてくれていたんでしょ！」

「我らが為す術なく敗れたガーディアンと同種の者を、たった二人

で足止めするとは…」

ランスがルークに文句を言うが、志津香がその言葉に反論する。
だが、リックがランスに向かって頭を下げる。

「いえ、肝心なときに駆けつけられなかったのは事実です。申し訳ありません、ランス殿」
「ふん！」
「で、どうするの？シィルちゃんは攫われちゃったし…やっぱり聖剣と聖鎧を見つけて返して貰うしか…」
「馬鹿言え！誰があんな女の言うことを聞くか。これからハイパービルに向かい、力尽くでシィルを奪い返す！」
「そんな、無茶よ！」

マリアの提案を切り捨て、魔人を倒すと宣言するランス。その言葉に周囲がざわつく。

「俺様を誰だと思っている。空前絶後の超英雄、ランス様だぞ！魔人なんぞクズ同然だ」
「負けたくせに」
「あれは不意を突かれた上に、寝ぼけていたから負けただけだ！正々堂々戦えば俺様の圧勝に決まっている！」
「しかしランス殿！ジオの町への侵攻はどうするつもりで？」
「もたもたしていたのでは、各地から敵が集結してきます」
「今がチャンスなのです！」

黒の三副将が次々と進言してくる。ランスが言い返そうとするが、その前にルークが口を開く。

「いや、今は魔人サテラが優先だ。奪われた聖盾は魔人討伐に必須

のもの。今ならサテラが持っていることが判っているから取り返しやすいが、もし時間をかけている間に他の魔人と合流され聖盾を手渡されたら、誰が持っているのか判らなくなり、取り返すのは困難になる」

「それに、兵を指揮する私たちがこんな状態では、ジオに攻め込んでも苦戦は必死だわ」

レイラの言うように、セルの治療で動けるようにはなったものの、全員完治とまではいっていない。今なおセルとロゼが治療を続けているのだ。

「そしてこれが一番の理由だが、シィルちゃんを放っておくわけにはいかない！」

「シィルは俺様の奴隷だ。人の所有物に手を出しやがって…ただのお仕置きでは済まさんぞ！」

「そうね…シィルちゃんを無事に取り返さないと！」

「エクス、リスの手がかりは掴めたか？」

ルークが以前頼んでおいた事をエクスに尋ねる。

「何だ？リスの手がかりなんて知ってどうする？」

「聖剣と聖鎧を持っていなければ会っても貰えない可能性があるからな。下手するとシィルちゃんの命も危ない。それでエクス、どうなんだ？」

「リスの手がかりも聖剣と聖鎧の隠し場所も掴めていません。ですが、一つだけ気になる事が…」

「気になる事？」

「自分を元はリスだと名乗る青年が見つかりました。一応言いくるめてこちらで保護しています。お会いになられますか？」

「元リスと名乗る人間？判った、案内してくれ」

―レッドの町　白の軍詰め所―

エクスに案内されて白の軍の詰め所までやってくるルークとランス、かなみと志津香の四人。エクスが部下に指示を出し、少し待っていると奥から白髪の青年が連れてこられた。こちらに気がつくと、青年は嬉しそうに駆け寄ってくる。

「ランスとルークだ！久しぶり！」
「誰だ？俺様のファンか？男のファンなぞいらんぞ」
「ランス、僕だよ。リスだよ」
「……？」
「ほら、人間になったんだ。ランスの言ったとおり、気合いと根性があれば何でも出来るんだね！」
「なっ！まさか、本当にあのリスか！？」
「信じられない…」

ルークとかなみが同時に驚く。ランスの適当な言葉を真に受けて旅立ったリスが、まさかこの短期間で本当に人間になって戻ってくるとは思わなかったからだ。あの場にいなかった志津香は話の流れが判らず、不思議そうにしている。

「大変だったけど、ローラへの愛が僕を支えてくれたんだ！もう誰も僕たちの愛を邪魔することは出来ない！」
「ローラ…そうだ、貴様の女のせいで大変な事になっているんだ！責任を取れ！」
「ローラが何かしたの？」
「まあ、お前から説得して貰えるか。ローラのいる所まで案内しよ

う」
「やったー！ずっとローラに会いたかったんだ！」
無邪気に喜ぶリス。ルークがエクスに礼を言い、詰め所を後にする。一行はリスを引き連れて、うし車に乗りラジールの町へと向かう。

―ラジールの町　酒場―

酒場では相も変わらずローラがミルクセーキで飲んだくれていた。町から出ないようにアムロとレィリィからの命令で見張っている男も、いい加減飽きてきていた。その男に一声かけつつ、ルークたちは酒場の中へ入っていく。こちらに気がついたローラがギロリと睨んできた。
「何よ！何度来たって聖剣と聖鎧は…」
「ローラ！やっと会えた！」
「…えっ？」
「僕だよ、リスだ！君と暮らすため人間になったんだ！」
「えっ…そんな…嘘よ…だって、リスは死んだんじゃ…」
動揺しながらルークの方を見てくる。
「だから勘違いだって言っていただろ」
「死んでないし、嘘でもないよ、ローラ。何を話せば信用して貰えるかな？君との出会い？両親に反対されたときの言葉？何でも聞いてくれ！」
「ほ…本当にリスなの…リス！」

そう言って二人は抱き合い、熱いキスを交わす。泣きじゃくるローラに、これからはずっと側にいるよと囁くリス。完全に二人だけの世界を作り出していた。かなみはその様子を羨ましそうに見ている。ランスがいらいらしながら口を開く。

「って、そんな事は後でやれ！どうだ、リスを目の前に連れてきてやったんだ、盗んでいた物を返して貰おうか！」

「ローラ、何か盗んだりしたのか？」

「そんな事していないわ。何の事かしら。はい、預かっていたこの聖剣と聖鎧は返しますね」

とぼけながらテーブルの下から聖剣と聖鎧を出してくるローラ。ランスがそれを受け取るのを見ながら、ルークがぽつりと呟く。

「灯台もと暗しとは言うが…白の軍はあれを発見できなかったのか…」

「何言ってるのよ、ルークだって彼女と酒場で会ったとき発見できなかったんでしょ」

「……どうだったかな？」

志津香の言葉にとぼけながら頭を掻くルーク。何はともあれ聖剣と聖鎧を遂に取り返したルークたち。また二人だけの空間を作り出しているリスたちをそのままにし、レッドの町へと引き返す。目指すはレッドの町の側に立つ、ハイパービル。

―ハイパービル　入り口―

ただ高さのみを追求した謎の巨大建造物、ハイパービル。いつ誰が建てたのかも判っていないビルだ。ここで魔人サテラが待っている。先程までの四人に、今はセルが加わっている。レッドの町に一度寄った際、ついて来たのだ。リーザス兵は傷ついた軍の状況を再確認するのに忙しく、ついて来ていない。あの状況でヘルマンに攻め込まれたらまずいため、あちらも早急に立て直す必要があるのだ。

「だがセルさん。どうして一緒に？」

「……もしかしたら、魔人相手に私の力がお役に立つかもしれません。治療はロゼさんがやってくれるとの事でしたので、お邪魔になってしまうかもしれませんが同行させて貰います」

「いや、シィルちゃんがいなくて回復にも困っていたところだ。頼りにしている」

「さあ、ビルに入るぞ！」

ランスが先頭を歩き、ビルの中に入っていく。ルークたちもその後を追うが、その背中を追いながらかなみがランスに尋ねる。

「ランス…聖剣と聖鎧を、サテラに渡すの…？」

「かなみ、お前は渡した方がいいと思うか？」

「それは……」

珍しくランスが意見を問う。困った様子のかなみ。彼女の立場からすると難しいところだろう。シィルのことは心配だが、聖装備はリーザス奪還の為には必要不可欠なものだからだ。代わりにセルが答える。

「人の命は何物にも代えられません。まずは聖剣と聖鎧を渡して、シィルさんを解放して貰うべきです」

「……そうですね。ランス、ひとまず聖剣と聖鎧は…」

セルの言葉に考え込んでいたかなみも同意する。ランスにそう言おうとするが、ランスの笑い声に阻まれる。

「がはは、どちらかというせこい考えをする必要はない。欲しい物は全ていただくのが俺様のやり方だ！聖装備もシィルも全て俺様の物、どれも渡す必要なんて無い！」

「ふ、お前ならそう言うと思っていたよ」

「でもランス、サテラの逆鱗に触れたらシィルちゃんがどんな目にあうか…」

志津香の言葉にランスが一言だけ返す。

「シィルに手を出したら…殺す」

確かな殺気を含んだその言葉に、かなみの背中を一筋の汗が伝うのだった。

ーハイパービル　1階　第一エレベーター前ー

ビルの中に入り、少し進んだところにあるエレベーターの前までやってきたルークたち。そこにサテラの姿はなく、代わりにサテラのガーディアンであるシーザーとイシスが立っていた。こちらの姿を見るとシーザーが話しかけてくる。

「ランスダナ。聖剣ト聖鎧、持ッテキタカ」

「がはは、知らんな！」

「サテラ様ハ２０１階デ待ツ。聖剣ト交換デ、コノエレベーターヲ

動カスＩＤカードを、聖鎧ト交換デ女ヲ返シテヤル」
「手の込んだことで」
「持ッテイナイナラ用ハナイ。出直シテ来イ」

そう言ってエレベーターの前から動かないシーザー。イシスは喋れないため、黙って横に立ったままだが、何故かルークの方をジッと見てきていた。一度この場を離れ、作戦会議をする。

「どうする？２０１階など上ってられんぞ」
「確か奥にもう一台エレベーターがあったはず。５０階くらいまでしかいけないが…」
「そこからはどうするつもり？」
「……歩くか？」
「イヤに決まっているだろ！何とかＩＤカードを手に入れる手段はないのか！？」
「確か５５階にこのビルの管理コンピュータがあったはずだ。それに頼めば…」
「じゃあ、とりあえず５５階を目指しましょう」

―ハイパービル　５５階　制御室―

第二エレベーターで５０階まで上がり、その後階段で５５階まで上がってきたルークたち。その階は巨大な制御室になっており、所々にコンピュータが置かれていた。その一番奥のコンピュータがルークたちに話しかけてくる。

「オハヨウゴザイマス　ワタシハ　ハイパービル　セイギョコンピュータ　エロヤックＡＬＶ」

「誰だ？変な声で話すのは」
「コンピュータが喋っているのよ」
「すごいわね。マリアが見たら大喜びするわ」
「オマエタチハ　デバッガー　チガウノカ？　ワタシハ　３２２ネンカン　デバッガー　マッテイル」
「デバッガー？悪いが違うな」
「ソウカ　ザンネンダ　５６カイニ　イル　バグヲ　タオシテ　モライタカッタ　ノダガ」
「…それを倒したら頼みを聞いてくれないか？第一エレベーターを使いたいんだ」
「ソンナコト　オヤスイ　ゴヨウダ　デハ　タノンダゾ」

そう言い残しエロヤックＡＬＶの声が止む。エレベーターを動かす手段が見つかったため、ルークたちはバグを倒すべく上の階に上っていった。

―ハイパービル　２０１階―

「離してください」
「うるさいな。少しは静かにしろ。まったく…」

サテラが退屈そうにしながら、ランスが現れるのを待っている。部屋の奥ではシィルが縄で縛られており、身動きが取れないでいる。

「ランス様…シィルは必ず来てくださると信じています…」
「ふん。ランスが聖剣と聖鎧を持ってきたら纏めて殺してやるからな」
「えっ…そんな…」

「あはは。人間なんかとの約束など、サテラが守るはずないだろう？」

そう笑いながら、サテラは足下をうろちょろしていたバグを踏みつぶす。

「みぎゃ！」

「それにしてもこのビルはバグが多いな。覚えておけばいつか何かの役に…立つ訳ないか。それにしても暇だ。１階にシーザーとイシス、両方を置いてきたのは失敗だったな」

ぶつぶつ言いながら待つサテラ。シィルはサテラの言葉にその表情が曇る。

「（ランス様…魔人は約束を守る気はありません…どうかお気をつけて…）」

ー ハイパービル　１階 ー

「……」

「ン？ドウシタ、イシス」

エレベーターの前で立っていたシーザーだが、イシスが肩を叩いてくる。そのままイシスがエレベーターの方を指さす。

「…ドウイウ事ダ。エレベーターガ動イテイル！マサカ、人間共カ！」

ＩＤカードがないと動かせないはずのエレベーターが動いている。不測の事態に主の身が心配になる。

―ハイパービル　第一エレベーター内―

「ががは！バグなんぞ俺様の手に掛かったらただの雑魚モンスターだ！」

「何言ってるのよ、結構苦戦したくせに」

「バグって強いんですね…」

「みなさん、大丈夫ですか？」

「素早い割に、攻撃力もあるからな。セルさんがついてきてくれていてよかったよ」

エレベーター内でセルが全員を回復しながら、ルークたちは２０１階を目指していた。５６階に大量発生していたバグを倒し、エロヤックＡＬＶにエレベーターの使用許可を貰ったのだ。程なくしてエレベーターが２００階に到着する。一気に２０１階まで上がり、目の前にサテラがいたら準備もないまま戦うことになるからだ。２００階で戦い方について話し合うルークたち。

「それで、どうするの？何か作戦は？」

「当然、俺様の圧倒的な強さで叩き伏せるだけだ！そして倒した後は…ぐふふ…」

「正気？あれだけ惨敗しておいて」

「……とりあえずフェリスを呼び出すか。勝てる可能性もこれで多少は…」

「待ってください」

フェリスを呼び出そうとするルークをセルが止める。

「私が……何とか出来るかもしれません」

セルのその言葉に全員が一斉にセルを見る。そのままセルの作戦を聞き、ルーク以外の全員が即座に賛成する。ルークは一瞬複雑な顔をしたが、最終的には賛成し、ルークたちは２０１階に上っていく。しかし、ルークたちは気がついていなかった。第一エレベーターが１階に向けて動き出していたことを。更なる驚異となるガーディアン二体が、迫ってきていることを。

―ハイパービル　２０１階―

「ふぁ、なんだか眠くなってきたな…」

「あの…トランプでもしますか？」

「おっ！…馬鹿言うな！なんでサテラが人間なんかと遊ばなきゃいけない！」

サテラが２０１階で暇を持て余している。シィルは部屋の隅で縛られたままだ。眠そうにしているサテラにシィルが提案をすると、一瞬嬉しそうな顔をしたサテラだが、すぐに怒鳴ってくる。その時、部屋の入り口から一人の男が現れる。

「がはは！スーパー英雄のランス様、参上！」

「ランス様！」

「えっ！どうしてここに…シーザーとイシスが見張っていたはずだが？」

「ふん、あんな奴ら俺様の相手ではなかったわ！軽く捻り潰してや

ったわ！」

その言葉にサテラの目が見開かれる。

「ばかな！人間如きにシーザーとイシスが負けるはずない！」

「弱すぎて相手にもならなかったぞ。さあ、次はお前だ！軽く叩きのめしてやる」

「シーザーとイシスを侮辱するな！殺してやる！」

サテラが鬼の形相でランスに迫る。それを見るとランスが部屋から出て行く。

「待て、逃げる気か！八つ裂きにしてやる！」

「がはは、鬼さんこちら、手の鳴る方へ！」

「ば、馬鹿にするな！」

サテラが怒り狂いランスを追う。ランスがとある部屋に入っていくのを見たサテラは、そのままの勢いで扉をぶち破り部屋に入る。そのまま部屋の奥にいたランス目がけて飛びかかるが、ランスがニヤリと笑う。

「馬鹿め、罠に掛かったな！」

「え？」

瞬間、サテラは気がつく。部屋の四方に結界志木と呼ばれる金属が立っていること、それぞれにルーク、かなみ、志津香、セルが側に立っていること、そして、自分が部屋の中心にいること。ルークが叫ぶ。

「セルさん、今だ！」

「はい！ワルヤテジ閉テシ間空ノ遠永カンナ物魔イ悪…魔封印結界！」

セルがそう叫ぶと、四方の結界志木から強力な魔力が部屋の中心にいたサテラに放たれる。それを受けたサテラは、無敵結界のお陰でダメージこそないが、身動きが取れなくなる。

「し…しまった…いきゃ…」

「がはは、そのまま永遠に封じられてしまえ！俺様の命令に聞くくらい従順になったら出してやってもいいがな！」

これがセルの使うことの出来る最強魔法、魔封印結界。準備や発動条件が厳しいため、実戦では中々役に立つ機会は少ないが、対象を永遠の空間と呼ばれる異次元に封じる恐るべき魔法だ。倒すことは出来ないが、セルが許可しなければいくら魔人のサテラでも二度とこちらの世界には戻ってこられない。サテラの表情が恐怖に歪む。

「い…やだっ…サテラ、封じられたくない…」

「……」

「まだ……ホーネット様の…ホーネットの役に立っていない…こんなところで…」

「！？セルさん、やはり魔法を止めろ！」

「……！！」

魔法を止めさせようとしたルークだが、それとほぼ同時に部屋の中にイシスが飛び込んでくる。そのままサテラを突き飛ばし、自ら身代わりに結界の中心へと入っていった。

「イ、イシス…」

「なっ！自分から飛び込むなんて…」

無理矢理結界の中に入っていったイシスは、魔力の暴走をその体に受け、体が消滅していく。崩れゆく体で、ルークの方を見てくる。言葉は発せず、表情も判らないガーディアン。だが、ルークにはどこか物悲しそうに見えた。先の決着をつけられなかったことを悲しんでいるのだろうか。が、その体が完全に消滅しきる前に魔法が止まる。セルが先程のルークの叫びに反応し、途中で魔法を中断していたのだ。頭部だけになったイシスが床に落ちる。

「イ、イシスぅ…貴様らよくも！」

「がはは、予定は狂ったが十分消耗したな。覚悟するんだな！」

サテラがふらつく体でイシスに近寄っていき、その頭部を大事に抱える。ランスが剣先を向けるが、イシスに遅れてシーザーが部屋に飛び込んでくる。一直線にサテラに近寄っていき、進言する。

「サテラ様、ココハ撤退ヲ！サテラ様ハ消耗シテイマス！」

「くっ…こいつらを八つ裂きにしてやりたいが、早くイシスを修復してやらないと…」

「な、そのガーディアンまだ生きているの！」

「頭さえ無事なら修復は可能だ。だがこの恨みは忘れないぞ！次に会うときは覚悟しろ！」

頭部だけになってもまだ生きていることにかなみが驚愕する。部屋の中にいた全員を睨みながら、サテラはシーザーに担がれる。

「ランスさん、ルークさん、魔の物を逃がしてはなりません！」

「待て！お前に聞きたいことが…」

「えーい、まだその体を味わっていないんだ！勝手に逃げるな！」

ルークとランスが叫ぶが、シーザーは壁を破壊しサテラを抱えてビルから飛び降りる。ルークがその壁に近づくが、その姿はすでにどこにも見当たらなかった。志津香が顔を歪める。

「くっ…もう一息だったのに…」

「ランス、とにかくシィルちゃんと聖盾を！」

「ああ、勝手に攫われたんだ。たっぷりとお仕置きしてやらんとな！」

そう言って奥の部屋へ駆けていくランスたち。程なくしてシィルが無事であった安堵の声や、聖盾を取り返し、聖装備が遂に全て揃った歓喜の声が聞こえてきた。だが、ルークはシーザーが破壊した壁の前に立ち尽くしながら、拳を握りしめていた。

「サテラ……やはりお前はホーネット派なんだな。ならば、何故こんな事をしている……」

―ハイパービル近辺　街道―

「むかつく、むかつく、むかつく！奴ら絶対八つ裂きにしてやる！」

「サテラ様、アマリ暴レルト体ニ触リマス」

「くそっ！とりあえずジオの町に向かってくれ。今あそこにはあいつがいるはずだ。イシスを修復するには魔人界に戻る必要があるな…イシス、この戦争が終わるまでちょっとだけ我慢していてくれ…」

「……」

抱えているイシスの頭部に話しかけるサテラ。イシスも無言ではあるが意識はあるようで、少しだけ反応したように見える。

「サテラ様、今度ハ言語機能モチャント付ケテアゲテ下サイ」
「ん、そうだな。だがここまでボロボロにされるとは…イシス復活まで何年かかるかな…ああ、むかつく！」

サテラのガーディアンは驚異的な強さだが、職人気質であるサテラは、納得のいかないガーディアンは途中で次々と壊してしまうため、一体作るのに長い年月が掛かる。その貴重なガーディアンを大破させられた事に、また怒りが再燃する。

「ソレト……」
「ん？」
「今度ハ寝ボケテ男性器ヲ付ケナイデアゲテ下サイ」
「ああ、判っている。イシスは女の子だからな」
「……」

魔人の中でも知っている者の少ない驚愕の真実をさらりと話しながら、シーザーはジオの町に向けて駆けていくのだった。ルークたちは遂に聖装備を全て揃える事が出来た。だが、この一件で侵攻が遅れている隙に、ジオの町にはヘルマン各地から部隊が集結していた。

―ジオの町　ヘルマン司令部―

「いよいよ明後日、リーザス反乱軍に殲滅戦を仕掛ける！」

司令部には各地の部隊を纏めていた司令官が集まっていた。まだ到着していない司令官が数人いたが、部屋にいる者はみな強者の空

気を纏っていた。その中でも一際強烈な空気を纏う男、部屋の中央で先程から声を荒げている男。この男こそ、ヘルマン第３軍総司令官にして、人類最強の男という呼び名で大陸にその名を轟かしている、トーマ・リプトン将軍だ。

「作戦は昼の会議で話した通りだ！戦力的には我が軍の圧倒、計画通りに戦えば負ける事はない！」

「はっ！」

「各部隊、準備は進んでいるか！」

「ガイヤス隊２０００、いつでも出発できます！」

「我がダルム隊２０００も準備万端でございます！」

「シルビア隊１０００、士気も高くいつでもいけます！」

「デストラー隊は、魔物の部隊１００００を率いて、いつでも出撃可能です」

「ナビオ隊１０００もいつでも大丈夫です。先陣は是非私に…」

「ナビオ、貴様のふぬけ隊に先陣など勤まるか。トーマ将軍、先陣はこのダルムにお任せを…」

「静かにしろ！先陣はデストラー隊に決定したはずだ！」

トーマが二人の司令官に一括する。デストラーが薄く笑いながら一歩前にでる。

「はっ！我が部隊だけでも十分撃破可能です。なんなら明日にでも出陣しても構いませんが？」

「全部隊揃っての出撃というパットン皇子の命令だ。ミネバ隊を待たねばならん」

「ミネバ副将には今セピアを向かわせています。明日には到着するかと…」

「それではミネバの到着を待ち、明後日の決戦に備えろ。出発は明日の夜、テラナ高原で休息の後、その明朝よりレッドの町を攻める

！」
「はっ！」

全員が返事をし、会議が終了する。指揮官が去り、司令部にはトーマだけになった。そこに、一人の男が突如闇の中から現れる。

「準備は万全か…？」
「魔人アイゼルか…貴様の手など借りずとも、我らだけで十分殲滅は可能だ」
「まあ、そう言うな。明後日は私も手を貸してやる」

そう言い残し、アイゼルはまた闇の中へ消えていった。それを見送るトーマ。その表情はどこか苦々しげであった。

ージオの町近辺　街道ー

「ミネバ様、お急ぎ下さい。既に他の指揮官は集結しています」
「判っている。全く騒がしい娘だねぇ…」

そう急かすのはミネバを呼びに来た司令官、セピア・ランドスターだ。その声を聞きながら面倒くさそうに部下を引き連れて歩いていたミネバだが、急に森の方に目を向ける。

「……悪い、少し話がある。立場上こいつらに聞かせられる話じゃない。こっちに来てくれるかい？」
「？判りました」

ミネバにそう言われ、部下をその場所に待機させた二人は森の中

へ入っていく。しばらく歩き、到底話し声は聞こえない位置まで来る。

「それで、話というのは？」
「……悪いねぇ」
「…えっ？ぐふっ！！」

突如腹に強烈な一撃を入れられ、崩れ落ちるセピア。その様子を見ながらミネバが後ろに声をかける。

「タミ、この女をうし車に乗せてレッドの町へ。さっき渡した手紙も一緒にな」
「はっ、ミネバ様」

いつからそこに控えていたのだろうか。木の後ろからタミと呼ばれた巨漢の男が現れ、セピアを肩に担ぐ。

「ですが、危険な橋では？」
「ふっ、大したことないさ。……本当なら、こんな事する気はなかったんだが、反乱軍が頑張るもんだから、欲が出ちまってねぇ…この戦争は長引かせるよ」
「……はい」
「トーマの奴には、そろそろ隊長の席を空けて貰わないとねぇ。名誉の戦死…ご立派じゃないか」

口元に笑みを浮かべながら、ミネバが部下たちの元へ戻っていく。陰謀が渦巻く中、ジオの町の決戦は着実に迫っていた。そして、その決戦において遂にルークは魔人と聞きたかったことについての対話をする事になる。そしてその対話は、非常に多くの者の運命を変えていくことになるのだが、まだそれを知る者はいない。

第５０話　セルの切り札（後書き）

［人物］

リス

元モンスターの青年。ランスの言葉を信じ、人間になるべく努力していたら案外何とかなってしまった。恋人のローラとはラブラブ。今は結婚式の準備を進めており、一応恩人ということでルークとランスも招待する予定。

［モンスター］

バグ

コンピュータのあるところに現れるモンスター。一説にはコンピュータが生みだしている生成生物という意見もある。小さな体だが、素早い動きに強烈な攻撃と、意外な強敵である。その姿はハニーキングすら震え上がらせるという。

［技］

魔封印結界

四本の結界志木と呼ばれる金属を使い、対象を異空間へ送り込む神魔法。準備が大変なため、実戦で使える機会は少ないが、その威力は絶大で、サテラ程度の魔人なら為す術もなく異空間へ送り込まれる。

［その他］

エロヤックＡＬＶ

ハイパービルを管理するスーパーコンピュータ。バグに悩まされ

ていたが、ルークたちに退治して貰い本来の機能を取り戻す。

第５１話　歴史の動くとき

―レッドの町　傭兵部隊詰め所前―

「ふぅ」
「これはルーク殿。会議は今終わりで？」
「ああ、そういうリックとエクスもか？」
「ええ。丁度いい時間ですし、食事でも一緒にどうですか？」

シィルを取り返し、聖装備も揃えたルークたちは、リーザス奪還に向けての心配事は無くなり、後はひたすら進軍するのみとなった。ジオの町に攻め込むのは三日後に決まり、それに向けて各部隊は最終調整を行っていた。アレキサンダーは傭兵部隊に参加することになり、話し合いを終えたルークが詰め所から出てくると、丁度前をリックとエクス、ハウレーンとメナドが通ったところだった。赤の軍と白の軍の会議もほぼ同時に終わり、酒場に食事を取りに行くところだったようだ。

「そうだな、じゃあご一緒させて貰おうか」
「歓迎しますよ」
「あ、あの。ルークさん！」
「ん？」

同行することを決めたルークに、メナドが話しかけてくる。

「こ、この戦争が終わったら、一度ぼくと手合わせをしていただきたいのですが…」
「別に構わないぞ。リックともする約束があるしな。戦争が終わっ

たら赤の軍に一度お邪魔させて貰おう」
「本当ですか!?ありがとうございます!」
「ルーク殿、自分も楽しみにしています」

メナドの顔がパアッと明るくなる。その様子を見ながら、エクスがハウレーンに小声で話しかける。

「これは赤の軍に一歩リードされてしまいましたかね…ハウレーン、貴女も手合わせに誘ってみてはどうです?」
「そうですね、私もルーク殿の腕には興味があります。今度誘ってみましょう」

そう何とも無しに答えるハウレーンを見ながら、かなみやメナドのように積極的に行ってくれるようにはならないものかとエクスは考える。白の軍副将ハウレーン、幼い頃からバレスの背中を見て育ったため、女性としてよりも騎士として生きたいという思いが強い。ランスに対するような不快感は無いが、まだまだルークに対して何とも思っていなかった。酒場に向けて歩いて行く一行だが、その時目の前に一台のうし車が止まり、運転していた男が話しかけてくる。

「すいません、リーザス軍の方ですか?」
「そうですが…なんの用ですか?」
「ゲリラ軍を名乗る男性から荷物を頼まれましてね。荷台に積んであるんで受け取ってください」
「荷物?一体何なんですか?」
「さあ?私も見ちゃいけない契約になっていまして…」
「とりあえず見てみましょうかね」
「プチハニーが敷き詰めてあって、いきなり爆発したりしてな」
「こ、恐いこと言わないでくださいよ、ルークさん…」

ルークの言葉にメナドが怯える。そのメナドの様子を見て悪戯心が働いたのか、エクスがそれに続く。

「あるいは…いきなりお化けが飛び出してくるかもしれませんね」

「ひっ！」

エクスの言葉に反応したのはメナドではない。ルークが後ろを振り返ると、ハウレーンが顔を赤らめながら、誤魔化すように咳払いをしていた。ルークとメナドが同時に吹き出し、ハウレーンが更に顔を赤くする。おやおや、という顔でその様子を見るエクスにリックが近づいていき、小声で話しかける。

「エクス、あまりそういう話はしないでくれ…」

「ああ、リックもそうでしたね。これは失礼しました」

穏やかな空気の中、うし車の後ろに回り、荷台を覆う布を開ける。瞬間、空気が凍り付く。荷物は女性。全裸で縛られ、薬を投与されているのか目は虚ろで涎の跡が口元にくっきりと残ってしまっている。側には手紙が置かれており、こう書かれていた。

―リーザス軍の皆様へ　ヘルマン軍の司令官を捕らえました。自白剤を投与してあるのでお好きにお使いください。　ゲリラ軍より―

それを読んだ瞬間、ルークが手紙を破り捨てた。

「リック、セルさん…いえ、ロゼさんを至急呼んできてください！」

「酷い…」

「これを…同じリーザスの民がやったというのか…」

エクスが即座に指示を出し、リックが全力で駆ける。メナドが悲

痛な声を漏らし、ハウレーンが嫌悪感を露わにする。その時、ルークが荷台の布を斬り、ヘルマン軍の女性にかけ、その体を隠してやる。

「…弁償代はこちらで払っておきますよ」
「すまん、頼む」

エクスと話し合うルークの横顔を、メナドとハウレーンは確かに見る。静かに、されど確実に怒りを燃やしているその表情。ルークの発する殺気に、メナドもハウレーンも動けなくなってしまっていた。

ーレッドの町　司令部ー

「なんと…そのような事が…」
「酷いわ…」

司令部で先程の出来事の報告を受け、バレスとマリアがその表情を曇らせる。二人だけではない、自分たちの味方のゲリラ軍が行った蛮行に、他の者も表情を曇らせていた。

「…とにかく、この事は他言無用。士気に関わる。それと、三日後に向けて準備を進めておくように」
「バレス将軍、三日後では間に合いません。今晩にでも進軍を！」

そこへ、司令部に入ってきたエクスが声を上げる。

「どういう事じゃ、エクス殿？薬を投与されていたヘルマンの者は

どうなった?」
「彼女なら今ロゼさんが治療に当たっています。名前はセピア・ランドスター。ヘルマンの司令官みたいです。幸い命に別状はなく、二、三日もすれば薬は抜け、後遺症も残らないようです」
「よかった…」
「ですが、投与させられた前後の記憶は残らない薬のようで、そのような行為をしたゲリラ軍が何者なのかは判らないようです」

エクスの報告に、とりあえず胸をなで下ろす一同。報告を聞きながら、ルークが口を開く。

「それで、今晩に進軍というのは?」
「ええ、彼女の話では明日、ヘルマン軍の大規模な襲撃があるようです。ヘルマン軍は、今晩テラナ高原で休息を取る模様。そこを奇襲するべきですね」
「エクス様…あの状態の彼女から情報を聞き出したのですか…」
「…軽蔑してくれて構いませんよ。全てはリーザスのためです」
「ふん、貴様の事なんかどうでもいい!セピアちゃんは必ず元の状態に戻せよ。お礼に一発やらせて貰うんだからな!…ゲリラ軍じゃなくて、ヘルマン軍が送ってきたんじゃないのか?」

それまで黙っていたランスが口を開くと、そのとんでもない発言に皆が驚く。真っ先に志津香が反論する。

「馬鹿ね!普通の状態ならいざ知らず、あんな状態で送られてきたら何話すか判ったもんじゃない。そんな事、ヘルマン軍がやる訳ないでしょ!」
「それに一般兵ではなく司令官。ヘルマン軍の仕業とは考えにくい」
「ふん、それが狙いなんじゃないのか?まあいい、今晩奇襲をかけるぞ!」

こうして今晩、テラナ高原へ奇襲をかけることが決定した。各部隊大急ぎで準備を整え、夜になり、ヘルマン軍に気がつかれないよう進軍を開始した。先頭を行くのはチューリップ3号、これまで以上に大規模な一戦。兵たちにも緊張が走る。このテラナ高原の戦いは、後の世に語り継がれる事となる。リーザスとヘルマンの戦争の最も大きな一戦として、そして、人類と魔人の歴史を変える邂逅のあった一戦として。

―テラナ高原―

「おお、寒い、寒い。まだまだ冷えるな…」
「デストラー司令官、お疲れ様です」

テラナ高原で夜営をしているヘルマン軍。その先頭では、明日先陣を切ることになっているデストラーが部下と談笑していた。

「ふふ、先陣を任されたのはラッキーだったな。魔物部隊を率いていて初めてよかったと思った瞬間だよ」
「おめでとうございます。明日はリーザスのクズ共を蹂躙しましょう」
「当然だ。ん？なんだか騒がしいな…」
「デ、デストラー様！大変です！敵の奇襲が…うわぁっ！」

報告に来た部下の体が爆風で吹き飛ぶ。それを見ながら、デストラーは確かに見る。高原の向こうから、リーザス軍が迫ってきているのを。その戦闘を走る鉄の塊から、再度砲撃がこちらに放たれたことを。逃げる間もなくデストラーはその砲撃に巻き込まれ、その

生涯に幕を閉じた。

「うわぁぁぁ、リーザスの連中だぁぁぁぁ！！」
「た、助けてくれぇぇぇぇ！！」
「がははは、ヘルマン軍をぶち殺せ！前進あるのみだ！後退した奴は俺様が斬り殺すぞ！」

ランスが上機嫌に笑う。奇襲作戦は完全に成功した。自分たちが解放軍に奇襲をかけるつもりだったのだ、まさか奇襲をかけられるなど夢にも思っていなかったのだろう。慌てふためく敵の部隊を、解放軍は易々と撃破していった。その報告にトーマが声を荒げる。

「奇襲だと！何故情報が漏れている！」
「判りません！我が軍は混乱、指揮が全くとれない状況です！」
「また、デストラー様、ナビオ様の戦死が確認されています！」
「何という事だ…乱戦状態、こういうのはミネバの隊が一番慣れているのだが…」
「ミネバ様の部隊は最後方ですし…」
「遅れた罰に最後方に回るなど、珍しいことを言い出したと思ったが、裏目に出たな…ええい、儂も出る！」

こうしてテラナ高原の戦いはなし崩し的に始まった。当初こそ解放軍が圧倒していたものの、夜襲という事もあり、いつの間にか敵味方入り交じる乱戦となる。こうなっては解放軍も統制の取れた戦いは不可能、敵も味方も判らない中、混乱したヘルマン軍との激戦が続く。

「大丈夫よ、私たちは優位に立っているわ！」
「このまま敵を攻めていりゃ、総崩れになるはずだぜ！」
「うぉぉぉ、やってやるですぅ！」

ランとミリもカスタム防衛軍を鼓舞する。ランの言うとおり、乱戦になっていて戦局は掴みづらいが、解放軍が押しているのは確かである。トマトが気合いを入れ、敵に突っ込んでいく。

「これは…青の軍も参加しているのか！」

「気をつけて！暗闇で判りにくいけど、青の軍がいるわ！極力殺さないように！」

リックがヘルマン軍の中に、洗脳された青の軍が参加していることに気がつき、レイラが周囲に聞こえるよう大声を上げる。洗脳されたリーザス最後の軍、防衛力に優れた青の軍は今の戦闘こそ驚異ではあるが、もしこの戦闘が終われば頼れる仲間になる。その事が更に解放軍の指揮を高めた。

「うむ、大分数が減ってきたな」

「はい、ランス様！みなさん頑張っていらっしゃいます」

ランスが更に高笑いを上げる。解放軍とヘルマン軍の激突から約二時間、既に勝敗は決していた。二倍以上の戦力を持つヘルマン軍だが、混乱と同様で本来の組織的な力を発揮できず、次々と撃破されていった。この頃にはデストラー、ナビオに続き、ダルム、ガイヤス両司令官も戦死。ミネバ隊は最後方で撤退を始めており、戦場に残っている指揮する立場の者は、シルビア司令官とトーマ将軍を残すのみだった。特に戦果を上げたのはマリアが乗るチューリップ３号。側にカスタム魔法軍とリーザス魔法軍を携えながら、大量の敵を蹴散らしていった。戦局は奇跡でも起こらない限り、変わり様はなかった。

戦場から少し離れた小高い丘の上、ヘルマン軍を見下ろしながらアイゼルが小さく呟く。

「馬鹿め、敵に奇襲されるとは…この戦は負けだな」

「アイゼル様、どうされますか？」

側に控えていた女性がアイゼルに問いかける。彼女たちはアイゼルの使徒と呼ばれる忠実な部下で、魔法使いの三姉妹だ。その問いかけにアイゼルが少し考え込みながら答える。

「お前たちの力を試す時が来たようだな。サファイア、オパール、ガーネット！お前たちは個々の力は小さいが、三人の力を合わせれば強力な魔法を使うことが出来る」

そう言いながら、アイゼルが丘の上から指を指す。その先は、解放軍の先頭を行くチューリップ3号。

「目標は、あの戦車だ！」

「「はっ！」」

「やれ！」

アイゼルがそう指示すると、三姉妹は魔法を唱える。三人の魔力が合わさり、その中心に強力な魔法の塊が出来上がっていく。そして、三姉妹が一斉に口を開く。

「「「黒色破壊光線！！」」」

黒い光線は一直線にチューリップ3号へ飛んでいく。その時、ア

イゼルは気がつく。チューリップ3号の側に、緑色の髪の魔法使いがいることに。

「あれは…あの位置はマズイ！」

「あ、アイゼル様！」

「私は戦場に行く。お前たちも適当に参加し、やられる前に撤退しろ！」

それだけ言い残し、アイゼルは全力で丘を降りていく。

「香澄、次の敵の集団に突入するわ！弾薬を補給しておいて！」

「はい、マリア先生！」

前線でヘルマン軍を蹂躙していくチューリップ3号。その驚異的な戦果に、ヘルマン軍は恐怖し、解放軍は鼓舞される。マリアが笑いながら進軍していく。

「ふふふ、このまま蹴散らしてやるわ。私のかわいいチューリップ3号は無敵よ！」

「マリア先生！黒い光が…こちらに…」

「えっ…きゃぁぁぁぁ！」

三姉妹の放った黒色破壊光線が、チューリップ3号を貫いた。戦車の右半分が吹き飛び、その爆風で側にいた魔法部隊も数名吹き飛ばされる。そしてその中には、解放軍の主力でもある人物も混ざっていた。

「おらおらおら、死にやがれって言ってんだろうがぁぁ！」

「属性パンチ・炎！大分数も減ってきましたな、ルーク殿！」
「ああ、もう一息だ！」

傭兵部隊と共に前線で戦うルーク。ルーク、アレキサンダー、ルイス、セシル、アリオスという五人が所属するこの部隊は、リーザス正規軍に劣らぬ活躍を見せていた。その時、かなみがルークに向かって戦場を駆けてくる。

「ルークさん、大変です！チューリップ３号が破壊されました！」
「なんだと！マリアは無事か！？」
「あの装甲を誇るチューリップ３号が…」
「マリアさんも香澄さんも奇跡的にほとんど怪我はありません。でも…」
「どうした！？」
「側で戦っていた志津香さんが爆風に巻き込まれて行方不明に…あっ！ルークさん」

かなみの言葉を聞いた瞬間、ルークは駆けだしていた。脳裏をよぎるのはかつて志津香と共に見た光景。志津香の父である篤胤が殺される瞬間。

「ルーク殿、こちらは我らに任せられよ！」
「ルークさん、私も行きます！」

アレキサンダーが後ろから声をかけ、かなみも後をついてくるが、ルークの耳には届いていなかった。一刻も早く志津香の下へ。それだけを考え、戦場を駆けていく。目の前にヘルマン兵が立ちふさがる。が、そのヘルマン兵は一瞬の内に首を斬り落とされる。

「邪魔をするな！どけぇぇぇ！」

普段のルークからは想像つかないような形相と絶叫を放ちながら、ルークはかなみと共に駆けていくのだった。

―テラナ高原近辺　森の中―

「んっ…」

志津香が目を覚ます。確か自分はチューリップ3号の爆風に巻き込まれて…そこから記憶がない。どうやら気を失っていたようだ。全身が痛む。ふと、自分が抱きかかえられていることに気がつく。傷ついた自分を誰かが運んでくれているのだろう。一瞬、志津香の頭にある男性の顔がよぎる。共に復讐を誓った男の顔。が、意識のはっきりした志津香が見たのは想像していた男の顔ではない。ラジールを解放する際、出会った男。

「魔人！くっ…」

「あっ、いけない！」

自分を抱きかかえ歩いているのが魔人アイゼルだと気がついた志津香はすぐに飛び上がる。腕から解放された志津香だが、全身の痛みに地面に倒れ込む。

「大丈夫か。気がついたようで何よりだ」

「くっ…魔人が…私を何故運んでいた…」

立ち上がることすらままならない体だが、気丈にもキッとアイゼルを睨み付ける。アイゼルが心配そうに声をかける。

「まだ動かない方が良いぞ。酷い怪我で、応急処置しか出来ていないんだ。今から小屋に運んでやろう。そこでなら、もう少しマシな治療が出来るはずだ」
「…どういうつもり!?」
「どういうつもりとは？」
「とぼけないで！敵である私をどうして助けたのよ！私をどうするつもり。拷問されたって情報は喋らないわよ！」

志津香の言葉に、アイゼルが一瞬躊躇いながらも口を開く。

「…どうもしない」
「嘘を…」
「嘘ではない。君を助けたのは、私の独断でしたことだ。他意はない！」
「えっ…」

アイゼルが若干顔を赤らめながら言葉を続ける。

「ラジールで会ったときから…気にはなっていた。あの乱戦の中、勇猛に戦うその姿、そして、傷つき倒れる君を見たとき…私は…」
「……」
「私は…君を…」
「志津香！無事か！！」
「ルーク！？」

アイゼルがある言葉を言おうとしたその時、ルークとかなみが森を掻き分けて現れた。ヘルマン兵から金髪の男が女を抱えて森に入っていったという情報を聞き出したルークたちは、ここまで追ってきてようやくアイゼルに追いついたのだ。アイゼルは見てしまう。

ルークを見た瞬間の志津香の表情を。そして、全てを察する。

「そうか…既に…心に決めた人が…ふっ、とんだピエロだな…」

「ま、魔人！」

「くっ…来い！フェリス！！」

かなみが魔人アイゼルの姿に驚き、ルークが瞬時にフェリスを呼び出す。

「お呼びですか、ルーク様。ランスの奴はHで頻繁に呼び出すのに、ルーク様が呼び出すのは初めてですね…って、どういう状況！？」

目の前に傷つき倒れている志津香、臨戦態勢のルークとかなみ、そして目の前で佇むアイゼル。状況が判らず混乱するフェリス。が、更にこの場が混沌と化す。

「アイゼル！こんな所にいたのか。イシスの修復材料調達の件なんだが…って、お前は！」

「サテラ様、ルークデス！」

「くっ…ここで魔人が増えるなんて…」

「えっ！？魔人！この二人魔人なの！？とんでもない状況で呼び出さないでよ！」

魔人サテラがアイゼルを捜しに森の奥からやってきて、ルークたちと対峙する。かなみの言葉にフェリスが驚きの声を上げる。呼び出されたら目の前に魔人が二人いるのだ、とんでもない状況だ。丁度、志津香を中心に対峙する形となった三人と三人。アイゼル以外は互いに臨戦態勢。一触即発だ。サテラがこちらに向かって叫ぶ。

「イシスの体の仇、ここで取らせて貰うぞ！シーザー、奴らを八つ

裂きに…」
「待て、サテラ！ここは退くぞ！」
「えっ！」
「…どういうことだ？」

アイゼルの言葉に、この場にいた全員が驚く。一番驚いているのは仲間のサテラで、アイゼルに食って掛かる。

「おい、何で逃げる！サテラはこいつらを八つ裂きにしないと気が済まないんだ！」
「今ここで戦えば…私は嫉妬に駆られて相手を殺した醜い男になる。そんな事は…我慢ならん…」
「何訳の判らない事言ってるんだ。とにかくこいつらを八つ裂きに…」
「サテラ、材料調達の協力を約束した際、何でも言うことを聞くと言っていたな。ならばここは退くぞ」
「んぐっ…ふん、命拾いしたな、ルーク！」
「さらばだ、人間共よ。次に会うときは覚悟しておけ」

そう言ってアイゼルがこの場から立ち去ろうとする。納得のいかない表情だが、サテラもシーザーの肩に乗り直し後に続く。かなみは内心安堵していた。ルークがいるとはいえ、この少人数に魔人二人にガーディアン。流石に無謀すぎる。去っていく背中を見送ろうとするかなみだが、ルークがそれを阻止する。

「待て！お前らに聞きたい事がある！」
「…？人間に話す事など、こちらには何もないぞ？」

アイゼルが振り返り、答える。ルークは少しだけ目を瞑り、考える。今この場にはかなみと志津香、そして自分の従者であるフェリ

ス。ならば…と決断する。そして、ラジールの町で会ったときに言えなかった言葉を口にする。

「…ホーネット派の魔人であるお前らが、何故ここにいる!?」

「「!?」」

「ホーネット…派?」

「ルークさん…それはいったい…?」

ルークの言葉にアイゼルとサテラの目が見開かれる。今目の前の男が発した言葉、それは人間が知るはずのない事。アイゼルが歩みを止め、ルークに体ごと向き直る。

「貴様…何を知っている!」

「知っているさ…魔人が二手に分かれて戦争をしているのは人類でも周知の事だが…それを指揮するのは前魔王の娘、魔人ホーネット、対峙するのは魔人ケイブリス!」

「な、なんで人間のお前がそんな事知っている!どうせ知ったかぶりだろ!そうじゃないっていうなら、ホーネット派のメンバーを言ってみろ!」

サテラの言葉にルークが少し考え込む。かなみと志津香は目の前で繰り広げられる状況に驚き、言葉を発せずにいた。考え終わったのか、ルークがサテラの問いに答える。

「少し誤差はあるかもしれんが…ホーネット、シルキィ、ノス、アイゼル、サテラ、サイゼル、ハウゼル、レイ、ジーク、メガラス…こんな所か?」

「ふん、やっぱり知ったかぶりだ。サイゼルもレイもジークもケイブリス派だ!」

「いや、これは…」

サテラがルークを罵るが、アイゼルはこのラインナップに驚愕していた。ルークの外した面々は、確かにケイブリス派ではあるがまだ話の通じる面子。サイゼルは本来ならホーネット派にいてもおかしくない魔人だし、レイもケイブリスに弱みを握られていなければこちらに属していただろう。ジークも最後まで悩み、より魔人らしいという理由でケイブリス派についたが、一つ何かが違えばこちらにいてもおかしくなかった。下手に的中されるよりも、こちらの方が恐ろしい。この男は、ただホーネット派とケイブリス派という情報を知っているだけではない。魔人の内情を、かなり深いところまで知っているのだ。冷や汗を掻くアイゼルに、ルークが更に問いかける。

「もう一度聞く。何故、人類不可侵のホーネット派がここにいる!?もう一人の魔人というのは誰だ!?」

「そんな事、人間なんかに教える訳…」

「もう一人はノスだ。我らはカオスを手に入れるため、リーザスに来た」

「おい、アイゼル!」

ルークの問いにアイゼルが答え、サテラが文句を言う。が、アイゼルはルークに興味が沸いていた。この男、一体どこまで知っているのかと。

「…その事を、ホーネットは知っているのか?」

「ホーネット様には知らせていない。だが、カオスを手に入れればケイブリス派に引導を渡せる。そうなればホーネット様も喜ぶとノスが言っていた」

「…そんな事はない!ホーネットは、人類を傷つけるこんなやり方を望んじゃいない!お前らは、ノスに騙されているんじゃないのか

!?」
「馬鹿言うな、どうしてノスがサテラたちを騙す必要がある!」
「…っ!」

サテラが先程以上にルークを罵るが、アイゼルが黙り込む。それは、一度アイゼルも考えた事であった。何故ホーネットに連絡せず、自分たち三人だけ独断で動いているのか、ノスには他に目的があるんじゃないかと。だが、ホーネット派でも上の立場であるノスが裏切るはずないと、これまで深くは考えずにいた。そのアイゼルの様子を見て、ルークが言葉を続ける。

「可能性は…あるんだな?」
「…あるな」
「おい、アイゼル!?」
「ならば自分たちで確認をしろ。こんな事、ホーネットがするはずがない!」

アイゼルの態度とルークの叫びにサテラが遂に切れる。普段、周りに他の人がいる時はホーネットの事を様付けで呼んでいるが、ついついそれも忘れてルークに食って掛かる。

「ホーネット、ホーネットって、お前がホーネットの何を知っているんだ!サテラはホーネットの親友だぞ!会った事もないお前なんかよりずっと…」
「会った事なら…あるさ」
「何?」

その言葉に、アイゼルが眉をひそめる。これまで黙って聞いていたかなみ、志津香、フェリスの三人も一斉にルークに注目する。

「俺はかつて…この命、彼女に救われた！」
「「！？」」
「魔人に…」
「ルークさん…」
「どうなっているのよ…」

ルークは目を閉じ、昔を思い出す。それは今より１０年以上前。
ルークの死の運命を変え、その後の目的の根幹になる出来事。魔人、
ホーネットとの出会いと生活の事を。

第５１話　歴史の動くとき（後書き）

［人物］

アイゼル
ＬＶ　９０／１４０
技能　魔法ＬＶ２　変身ＬＶ１
　ホーネット派に属する変身人間の魔人。ガイの手により魔人になり、その忠誠心は死後も変わっておらず、その為ホーネット派についた。人間を見下してはいるが、卑怯な戦法などは好んでおらず、その辺りはジークと気が合う。自身が操る洗脳魔法も、基本的には単純な戦闘しかさせず、脅迫などには使わない。また、一度目の前に対峙した相手を洗脳するのは礼儀に反するというポリシーを持つため、戦闘が始まれば洗脳魔法は使ってこない。

サファイア
ＬＶ　２５／４０
技能　魔法ＬＶ１
　アイゼルの使従。三姉妹の長女。本人の魔法の腕はたいしたことはない。

オパール
ＬＶ　２５／４０
技能　魔法ＬＶ１
　アイゼルの使従。三姉妹の次女。自分たちがアイゼルの評判を下げているんじゃないかと不安に思っている。

ガーネット
ＬＶ　２５／４０
技能　魔法ＬＶ１

アイゼルの使従。三姉妹の三女。姉妹仲は良く、三人が力を合わせれば黒色破壊光線を放つ事も可能。

セピア・ランドスター
ＬＶ　２２／３５
技能　弓戦闘ＬＶ１
ヘルマン第３軍司令官の一人。若いながらに優秀な女性で、性格は真面目一辺倒。ミネバの策略に填り、リーザス軍に送り届けられるが、無事に回復に向かっている。敵である自分に温かくしてくれたリーザスの人たちに心を打たれ、ヘルマンに戻るか悩んでいる。

ガイヤス
ヘルマン第３軍司令官の一人。本来はジオの町の司令官であったが、あまり優秀な人物ではなく、全軍集結の際には後方に下げられた。テラナ高原にてルークに討ち取られ、戦死。

ダルム
ヘルマン第３軍司令官の一人。目立ちたがり屋で、ナビオとは仲が悪い。テラナ高原にてリックに討ち取られ、戦死。

シルビア
ヘルマン第３軍司令官の一人。美しい女剣士で、本国にもファンが多い。テラナ高原にてランスに犯され、戦意喪失後捕虜に。

デストラー
ヘルマン第３軍司令官の一人。魔物部隊を率いる司令官で、先陣を任されていた。テラナ高原にてチューリップ３号の砲撃を受け、戦死。

ナビオ

ヘルマン第3軍司令官の一人。ふぬけと呼んでくるダルムと仲が悪い。テラナ高原にて、バレスに討ち取られ戦死。

第５２話　夢迷い無く、道険し

ＧＩ１００６
ー自由都市　とある農村近隣　森中ー

「真滅斬！」
「ぐ…がぁぁっ！！」
「おおっ！」

チャカが歓喜の声を上げる。昔なじみの農夫に頼まれて魔女の討伐に来てみれば、想像を遙かに超える強さ。しわくちゃのばーさんという話だったのに、戦闘が始まるや否や若返り、とてつもない魔法を繰り出してくる。チャカは死を覚悟していたが、颯爽と現れたルークという冒険者が助太刀をしてくれた。そして今、そのルークの剣が魔女パンドーラを斬り裂く。が、魔女が死に際に強力な魔法を放つ。

「き、貴様らにも地獄の苦しみを…」
「ぬおっ…体が！？」

チャカの体が光に包まれ、体が縮んでいく。身動きが取れなくなり、自分が着ぐるみになってしまったことに気がつく。そして、ルークの体も光に包まれていた。

「くっ…！？」
「そして貴様は…人間がとても生きてはいけない場所に転移を…絶望の中死んでいけぇぇ！」
「ルーク殿！」

魔女が絶叫し、ルークの体が光と共に消え去る。同時に、魔女の肉体が塵となって消えていく。

「何という事じゃ…誰か！誰か来てくれ！」

声を聞きつけた農夫によってチャカは救出される。その後、手を尽くしてリーザスと自由都市中を捜し回ったが、遂にルークの居場所を突き止める事が出来なかった。

ー魔人界　硫黄の森南部ー

「ここは…」

光に包まれ辺りが真っ白になったと思うと、次の瞬間ルークは森の中にいた。鼻につく硫黄の臭い。その時、後ろから物音がする。ルークが振り返ると、そこには今まで見た事もないようなモンスターが数体いた。見ただけで判る、こいつらは今まで戦ってきたモンスターとは格が違う。

「ニンゲン？」

「ニンゲンダ！キャキャキャ、ゴチソウダ！」

「ちっ、魔女と戦ったばかりだというのに…はぁっ！」

迫ってきたモンスターをルークが斬り伏せる。数分後、全てのモンスターを何とか倒したルークだったが、森を彷徨い歩いていると、また次から次へとモンスターがやってくる。それらを倒しながら森を進んでいくが、出てくるモンスターはどれも驚異的な強さだった。気がつけば鎧はひび割れ、全身から血を流している。特に危険なの

は、直前につけられた胸の傷。流れ出る血が止まる気配がない。意識が朦朧としてくる。

「15年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

気がつけばそんな事を呟いていた。自分が長くない事を悟っていたのだろう。その時、背後から物音がする。ルークがため息をつきながら、覚悟を決めて振り返る。

「さて…最後くらい楽に殺して欲しいものだがな…」

そして見る。自分を殺すであろう相手の顔を。背後に立っていたのは女性。その容姿は美しく、どこか気品に満ちあふれていた。髪の色は緑。周囲に五色の玉が浮かんでおり、驚いたようにこちらを見ている。ルークはその姿を見て内心思う。最後の相手としては、文句なしだな、と。

「人間…？なぜこのようなところに…？」

女性の呟きが耳に届くと同時に、ルークの意識は途絶えた。

ー魔人界　硫黄の森南部　ホーネット別宅ー

「……生きているのか、俺は」

ルークが目を覚ますと、ベッドの上に寝させられていた。全身が痛む。見れば身体中に包帯が巻かれている。少し不格好な巻き方。巻いた者があまり慣れていなかったのだろうか。すると、部屋の入

り口から声がする。

「目が覚めましたか？」

「貴女が…これを…？」

「すみません、治癒魔法は不得手でして…」

声の主は先程の女性。穏やかな表情を浮かべながらこちらの様子を見ている。その動作一つ一つが気品に溢れている。

「何故、このような場所にいらしたのですか？」

「…そこから聞いても良いかな？ここはどこなんだ？」

「…まさか、知らずにあの森を彷徨っていたのですか！？」

「色々あってな。気がつけばあの森にいたんだ」

「そうでしたか…それは災難でしたね。ここは魔人界、硫黄の森。人間界では魔の森と呼ばれている場所の一角です」

その言葉にルークがため息をつく。あの魔女め、とんでもないところに送ってくれたものだ。となると、目の前の彼女の正体も予想がついてくる。彼女の目を見ながら、ルークが問いかける。

「とすると、貴女も魔人か？」

「はい。私の名はホーネット。魔人であり、魔王ガイの娘です」

「なるほど…どうりで気品があるはずだ」

「…あまり驚かれないのですね？」

「魔人である事は見当がついていたんでな。今更魔王の娘と聞いたところで、これ以上驚きようもない。それに、魔王の娘という事は関係ない。貴女は貴女だしな」

「そういうものですか…」

ルークの言葉に、少し考え込むホーネット。名乗らせておきなが

ら自分が名乗っていない事に気がつき、ルークが話を続ける。

「名乗りが遅れた。俺はルーク・グラント。見ての通り人間だ。助けていただき、感謝する」

「感謝されるような事は…」

「そこだ。どうして魔人である貴女が俺を助けてくれたんだ？」

その言葉に、一瞬悲しそうな表情を浮かべながらホーネットが答える。

「我ら魔人、その全てが人間を蹂躙しようとしている訳ではありません。私の父、魔王ガイは人類に対して不可侵の方針を取っています。そして、それは娘である私も同じです」

「確かに、昔に比べ、今の時代は魔人の侵攻が殆ど無い。それは魔王の意志だったのか…」

「ですが、その方針に反対し、人間を卑下し、蹂躙する対象としてしか見ていない魔人が多いのもまた事実…」

「魔人も一枚岩ではないという事か。その辺は人間と変わらんな…」

「魔人と人間、根本では似ているのかもしれませんね。ですが、判り合える事はない…」

その言葉に、部屋にしばしの沈黙が訪れる。一分ほど立った頃、ルークが口を開く。

「それでは、次に細かい事を聞いていっても良いかな？この屋敷や怪我の状況、それと俺はどうしたら人間界に戻れる？」

「この屋敷は私の別宅です。父が一人での時間や鍛錬を積めるようにと私に与えてくれたものです。周囲には結界が張ってあり、基本的には私以外何者も入ってくることはありません」

「なるほど…だから誰にも襲われずにすんでいる訳か」

「怪我は…完治まで数ヶ月はかかると思います。治癒魔法を使える者も知り合いにいるのですが…」
「俺の存在をあまり広めるのは芳しくないだろ。この状況でも感謝し足りないくらいなんだ。これ以上迷惑はかけられんさ。だが、数ヶ月もの間お邪魔しても大丈夫なのか？」
「それは構いませんよ。元々、この別宅は月に一度ほどしか使っていませんでしたから」

そう話した後、ホーネットが少しだけばつの悪そうな顔をする。その表情を見て、ルークは覚悟する。悪い予想が当たってしまったか、と。

「それと…滞在するのは数ヶ月ではすまないかもしれません。貴方が人間界に戻るのは難しいと思います。この別宅は魔人界の中ではまだ人間界に近い位置にありますが、それでもほぼ丸一日森を走り抜けないと脱出出来ません。その間、魔人やモンスターに見つからないのは不可能かと。人間の臭いに敏感な魔物も多いですから…」
「そして一度見つかれば…」
「魔人界中に情報が行き渡り、貴方の命を狙ってきます。人間が魔人界に入るのを快く思わない者も多いですから。父も、魔人界に侵入してきた人間を生かしておくほど甘くはありません」
「まあ、こちらから不可侵を破っている訳だからな…ふぅ、脱出方法は無しか…」
「申し訳ありません…」

謝るホーネットにルークが慌てて答える。

「貴女が謝る必要はない。そもそも、貴女がいなければ俺は死んでいたんだ。何、その内チャンスがあるはずだ。迷惑かもしれないが、気長に待たせて貰うさ」

「そうですか…あら、もうこんな時間。すみません、私はこれで一度失礼させて貰います」
「色々と迷惑をかける」
「いえ…それと、申し訳ないのですが、私は毎日この屋敷に来られる訳ではありません。屋敷にある物は何でも使って良いですし、食事も勝手に取って貰って構いません。人間の口に合うかは判りませんが。碌に看病も出来なくて本当に…」
「いや、本当に何から何まで感謝する。魔王の娘ともなれば、立場上勝手には動けないんだろう？これ以上望んだらバチが当たるってもんだ」
「…出来る限り、顔は出すようにしますので」

そう言ってホーネットが部屋を出て行く。ルークが起こしていた体を再びベッドに沈め、これからの事を考え込む。これはしばらく帰れそうにない。もし帰れたとしても、時間が経ちすぎていたら妹に殺されるな。魔人界に飛ばされるという非現実的な出来事の中、ルークは極力現実的な事を考えるよう努力していた。そうでなければ、精神がおかしくなってしまう。その点では、ホーネットに出会えて事は幸運かもしれない。そんな事を思いながら、ルークは眠りについたのだった。

GI1007
ー魔人界　硫黄の森南部　ホーネット別宅ー

屋敷の庭、周りに被害を出さないよう、結界の中に更に結界を張った鍛錬用の場所。そこでホーネットが自身の体に魔力を帯びさせ、自らを鍛えていた。ふいに声をかけられる。

「相変わらず精が出るな、ホーネット」
「ルーク、勝手に外には出ないようにあれ程…」

屋敷の中から現れたルークにホーネットが苦言を呈す。あれから数ヶ月、ルークとホーネットは親交を深め、いつしか互いを呼び捨てで呼び合っていた。普段のホーネットを知る者なら、この光景には驚くだろう。静かに笑いながらルークが言葉を返す。

「ここは結界の中だろ。誰にも気がつかれないさ」
「そうでなく、怪我に触ると…」
「その事なんだが…ようやく完治したようだ」

そう言いながらルークが右腕をぐるんぐるん、と回す。怪我が治った事を確認し、穏やかな表情になるホーネット。そのホーネットに、ルークが言葉を続ける。

「それじゃあ、約束通りやるとするか。長い事鍛錬していないんで、迷惑なだけかもしれないがな」
「本当に大丈夫なのですか？魔人である私には結界が…」
「前にも言っただろう。俺は特別なんだよ」

ルークが剣を取り、結界を無効化して鍛錬場の中に入っていく。初めてこれを見せた時はいたく驚かれた。対結界技能。そして今、この技能を引っ提げルークはホーネットと模擬戦を行う。威勢良くホーネットに向かっていったルークだが、三分と持たず赤い玉から放たれた魔力に吹き飛ばされ敗北する。

「駄目だ、歯が立たん。筋トレはしていたんだが、流石にＬＶ１２じゃ話にならんか」
「ですが、驚きました。本当に結界を無効化出来るのですね。…も

しよろしければ、これからも定期的に模擬戦を行いませんか？」
「こちらとしては大歓迎だが…そちらはいいのか？経験値にならんだろ？」
「ええ、相手になりません」
「……」

そのホーネットの言葉にルークが惚ける。すぐにホーネットが慌てた様子で取り繕う。

「じょ、冗談だったのですが面白くなかったでしょうか？」
「いや、ホーネットの口からそういう冗談が出た事に驚いていただけだ」
「ふふ、ルークの影響でしょうね。それと、模擬戦は私にとっても十分鍛錬になります。私たち魔人は、結界がある安心感からつい防御をおろそかにした戦い方になりがちですので。結界を無効化されることを意識した戦いの良い練習です」
「そう言って貰えると、こちらも遠慮しないで付き合えるってもんだ。それで、次はいつ来られる？」
「次は…三日後ですね」
「それでは、それまで一つでもレベルを上げておくとするかな。楽しみにしているぞ」
「私も楽しみにしています。それでは、また三日後に」

GI1009
ー魔人界　シルキィの城ー

「シルキィ、私は別宅に行ってきますので、後はお願いします」
「はい、ホーネット様」

話し合いを終え、城を後にするホーネットを見送る魔人シルキィ。
そこにサテラがやってくる。

「ホーネット、最近暇があれば別宅に行ってばかりだ」
「…サテラ、呼び方」
「っと、ホーネット様だな」
「ふぅ、親友なのは判るけど、周りの目も考えなさい」

そう困ったようにしながらも、シルキィはホーネットを呼び捨てに出来るサテラの関係を羨ましく思っていた。サテラが謝りながら、話を続ける。

「それにしても、なんで今になって修行を積んでいるんだ？」
「立派な事です。最近は以前にも増して強くなっていますし、ケイブリスに迫る勢いだわ」
「でもさ…サテラ難しい事は判らないけど、あれなんだろ…」
「…まだ決まった訳ではないわ」

場の空気が重くなる。時期魔王としてホーネットは期待されているが、魔人たちの間ではある噂が流れていた。魔王ガイは、娘のホーネットに魔王を継がせる気はないのではないかと。生まれたときから魔王としての英才教育を施していたはずのガイは、ある日を境に魔王候補になれる器を別に捜し始める。当初は万が一の保険とも思われていたが、既に魔王の任期である１０００年は過ぎている。とすれば、そちらが本命なのではないのかと何人かの魔人が言い出し、その噂はじわじわと広がり続けていた。自分が変えてしまった空気を払拭するように、サテラが明るく話題を変える。

「でもさ、ホーネットは…じゃなかった、ホーネット様は最近明る

くなったよな」
「…そうね。ほんの少しだけれど、柔らかい表情をするようになったわ」
「ふふん。これも親友であるサテラのお陰だな！」
「違ウト思イマス、サテラ様」
「シーザー！お前が突っ込むな！」
「ふふっ」

一気に場の空気が変わる。やはりサテラはムードメーカー、ホーネットの側になくてはならない存在だ。だが、本当にサテラのお陰なのだろうか。ホーネットが纏う空気が変わったのは、別宅によく行くようになってから。何か別宅でしているのだろうかと思うシルキィだが、特に追求をすることはなかった。

一魔人界　硫黄の森南部　ホーネット別宅一

「ルーク、一週間も空けてしまい、申し訳ありません」
「その間に俺はまた強くなったぞ。さて、早速やるとするか」
「そうですね、早速手合わせを」

ルークが迷い込んで約三年、既にルークの傷は完治し、ホーネットがこうして足繁く通う必要もないのだが、怪我をしていたとき以上に頻繁に別宅に顔を出していた。魔王の娘という立場である彼女にとって、気の抜ける瞬間はほとんどない。その一挙手一投足に注目される。常に気を張っていなければいけないホーネットにとって、その必要のないルークの存在は貴重であった。気がつけば別宅に通い、共に鍛錬をし、近況を語っていた。ルークからも人間界の話を聞かされる。そのどれも新鮮で、穏やかな時間を過ごせていた。

「なるほど…サテラがそんな事を」
「ええ、メガラスにいきなり「ギャグの一つも言ってみろ！」って騒ぎ立てて。でも無口なメガラスがあんな事を言うなんて…ふふっ、笑いを堪えるのが大変でした」
「意外だな。他の魔人も大騒ぎだろ」
「そうですね。普段冷静なシルキィが吹き出し、ジークが大笑い。レイやカイトも笑いを堪えている様子でした。ケッセルリンクが途中で退席しましたが、口元を手で覆って出て行ったので、おそらく堪えられなくなったものだと」
「ふふ、俺も現場に居合わせたかったな」

穏やかな時を過ごせていたのはホーネットだけではない。ルークも彼女と過ごす時間が楽しく、気がつけば既に三年。脱出する方法がなかったというのは真実だが、それは言い訳に過ぎない。ただ、この日々が楽しかった。妹の事やギルドの仲間の事、旧友サイアスや魔想夫妻の事、気になる事は沢山あった。だが、この日々を捨てる気にはどうしてもなれなかった。そして、理由はもう一つある。魔人ホーネット、当初は彼女が強い女性であるとルークは思い込んでいたが、日々を過ごす内にそうでない事に気がつく。常に周囲に気を張っている彼女の繊細さに気がついてしまっていた。その彼女を放ってここを去る事が、ルークにはどうしても出来なかった。

「それでは、また五日後に」
「ああ、待っている」

互いを必要とし合っていた二人だが、男女の関係にはならなかった。恋人という関係とは少し違う。大切な友であり、互いを高め合う存在。いつしか二人共が、この日々がいつまでも続けばいいと思い始めていた。

GI1012
ー魔人界　硫黄の森南部　ホーネット別宅ー

その日は雨が降っていた。ホーネット以外の進入を防ぐ結界も、雨は通す。雨の中での鍛錬も積んだ方がいいというガイの考えだ。今日はホーネットが来る日。屋敷の外の屋根のある場所で雨宿りをしながら、ルークはホーネットがやってくるのを待っていた。程なくしてホーネットがやってくる。穏やかな表情で迎えようとするルークだが、その表情を見てルークの表情が一変する。

「…何があった！」
「…何の事ですか？」
「惚けるな。どれだけの付き合いだと思っている！」
「……」

その暗く沈んだ表情を見たルークは、理由を問う。少し言いあぐねたホーネットだが、静かに喋り始めた。

「今日正式に…私に魔王を継承する気はないと…言われました…」
「！？」

以前ルークもホーネット自身から聞いていた話、魔王の継承問題。それが今日、正式に言い渡されたのだ。生まれた頃から魔王になるべく努力をしてきた彼女にとって、その衝撃を、悲しみを、無念を、誰も理解する事は出来ないだろう。

「ただ…父の役に立ちたかった…」

「……」
「でも…私にはそれすらもする事が出来ない…」
「そんな事は…ない…」

かける言葉が見つからない。いや、下手な言葉をかけるべきではない。ルークがホーネットの前に立ち尽くしていると、思い詰めた表情でホーネットから思わぬ言葉が飛び出る。

「ルーク…私の使徒に…なってはくれませんか…？」
「……」

それは、ホーネットが初めてルークに見せた弱気な姿。ルークはその姿を見ながら、はっきりとホーネットに答える。

「それは…出来ない」
「…そうですか…私は…ルークにも…必要とされては…いないのですね…」
「そうじゃない！」

気がつけば、ルークはホーネットを抱きしめていた。力の入っていないその体を、強く抱きしめる。

「使徒になったら…俺は君よりも下の立場になる。それじゃ駄目なんだ！」
「……」
「俺は…君とは対等な関係でいなくてはいけない！対等な関係でいたいんだ！」
「ルーク…」
「魔王になれなくても…ホーネットはホーネットだろう！サテラが、シルキィが、そんな事で君から離れていくのか！」

「……」

ホーネットが体をルークに預けてくる。これだけ長い年月を共に過ごした二人の、たった一度の抱擁。どれだけの時間そうしていただろうか、いつの間にか雨は止み、晴れ間が差し込んでいた。程なくしてホーネットがルークから離れる。その顔には涙の跡がくっきりと残っていたが、その表情は普段通りに戻っていた。

「すいません、ルーク…もう二度と、弱気な姿は見せません」
「たまには頼ってくれてもいいんだけどな」
「恥ずかしいですし、私も貴方とは対等でいたいですから」
「それは嬉しい事を言ってくれる」

涙の跡を拭いながら、顔を洗ってくると屋敷の中へ向かう。屋敷に入る前に一度だけ振り返り、ルークに向かって言う。

「それと、たまにではなく、いつも頼りにしていますよ。ルーク」

そう言いながら、笑顔を向けてくるホーネット。ルークも自然と微笑む。穏やかな時間。しかし、この日々はある日唐突に終わりを告げる事になる。

GI1015
ー魔人界　硫黄の森南部　ホーネット別宅ー

その日、ルークは異変を感じていた。結界の外が騒がしい。魔人の間で何かあったのだろうか。どこか嫌な予感がする。そして、その予感は的中する。数時間後、ホーネットが慌てた様子で別宅にや

ってくる。ルークの顔を見るや否や、口を開く。

「父が…魔王ガイが殺されました」

「なん…だと…」

「既に次の魔王は継承されているのですが…その女性、魔王リトルプリンセスが、魔王を継ぐ気は無いと言って、父を殺した男と共に逃げ出しました。今は親衛隊長バークスハムが後を追っていますが…どうなるか判りません」

悲痛な面持ちで話を続けるホーネット。父が殺された直後、その悲しみは計り知れない。それに、ホーネットの立場を考えれば、そんな状況でルークの下にわざわざ来てくれたのだ。他の魔人の手前、一体どれほどの無茶をしてきたのか。ホーネットが話を続ける。

「リトルプリンセスがこのまま逃げ続ければ、これから魔人界は間違いなく二つに割れます。父の遺言通り、リトルプリンセスの下で人類不可侵を貫く派閥と、人類を蹂躙しようとする派閥に…」

「ケイブリスたちか…」

長い事ホーネットと過ごしていたルークは、魔人の内情をかなり深く知っていた。それぞれがどのような考えの持ち主か、ホーネットの知る範囲で聞かされていたからだ。その中でも真っ先に反乱する魔人として浮かぶのが、魔人ケイブリス。苦々しい顔をするルークに、ホーネットがその手を握り、口を開く。

「ルーク、今ならここから脱出出来ます！」

「！？」

「今、魔人だけでなく末端にいたるモンスターも含め、そのほとんどが魔王の城周辺に集まっています。今なら…今ならここから逃げ出せます」

「だが…」
「戦争が始まってしまえば、最早ここは安全な場所ではなくなります。そしてその戦争は、何年、何十年にも及ぶ激しいものとなるでしょう。もう、これしか方法がないんです…」
「…判った」

ホーネットも悲痛な表情をしている。そして、ここに留まっていてはホーネットに迷惑をかけるだけだ。魔人界から脱出する決断をするルーク。ホーネットに連れ添って屋敷の周りを覆っていた結界から出る。その時、一人の女性がこちらに駆けてくる。

「ホーネット様、こんな所で何をしているのですか！今は大事な…に、人間！？」
「シルキィ！？」
「彼女が…シルキィ…」

現れたのは魔人四天王であり、ホーネットの会話の中にサテラと並んでよく出てきた魔人、シルキィ。思わぬ事態に、互いに目を見開く。

「そう…別宅によく通うようになってから変わったとは思っていたけど…そういう事だったの」
「シルキィ…彼はもう、人間界に戻るところなの…お願い…」

シルキィが一度だけ目を閉じ、少しだけ過去を思い出す。人間として魔王ガイと対峙し、敗れた自分の姿。魔人となった後、魔王ガイに惹かれていく自分の姿。目の前に立つホーネットと人間を見て、自分のかつての姿を重ねてしまう。元人間でありながら、魔王を愛してしまった自分を。そして、決断する。

「行け、人間！一度だけ見逃す！」
「シルキィ！」
「…感謝する」
「ホーネット様、すぐに魔王の城へ！」
「ええ、行きましょう！ルーク、どうか元気で…さよなら」

別れの言葉を残し、シルキィに連れられこの場を後にするホーネット。その背中にルークが叫ぶ。

「また会いに来る！人類をまとめた後、共にケイブリス派を倒すため、必ず君の援軍に駆けつける！だから、それまで待っていてくれ！」
「人間が…魔人を倒す…馬鹿なことを…」

シルキィが怪訝な表情になるが、ホーネットが一度だけ振り返り、はっきりとルークに言う。先程までの悲痛な表情ではない。いつもルークに向けてくれた、穏やかな表情で。

「待っています、ルーク！」

そして二人は互いに逆方向に駆け出す。分かたれた二つの道が、また重なり合う日が来る日を信じて。ホーネットの言ったとおり、ルークはモンスターに出会うことなく魔人界を抜け出せた。目の前に広がるのはクリスタルの森。ここでルークは一人のカラーにお茶に誘われ、家に案内されるのだが、時間がなかったためすぐに抜け出す。寄り道などしていられない。目指すはアイスの町。

―ペンシルカウ　女王の屋敷―

「あれ、サクラ？連れてきたかっこいい冒険者さんは！？」
「逃げたようです。先程結界を破り出て行ったと報告がありました」
「あーん、せっかく一緒にお茶しようと思ったのに…あわよくば、精液貰って子供を…」
「モダン様、貴女様はもう長くないというのに、まだ子供を産むつもりなのですか？」
「えへ。女はいくつになっても女なのよ！」

一数日後　アイスの町　キースギルド一

キースが椅子に深く腰掛けながら、葉巻を吸う。先日新しく入った冒険者が、早くも戦死したのだ。

「リムリアも死んじまったし…安心して任せられるのはラークとノアくらいだな。ランスの奴がもうちょい仕事してくれりゃいいんだがなぁ。どっかに良い新人は転がってないもんかねぇ…」

煙を吐き出しながら一人愚痴る。その時、キースの部屋の扉が開く。扉の前に立っていたのは一人の男。どこか見覚えのあるその顔を見たキースは、一瞬考え込んだ後、一つの結論に辿り着く。

「ま、まさか…ルークか？お前…生きていたのか！？」
「キース。ギルドにまだ俺の席はあるか？」

こうしてルークは十年ぶりにキースギルドに復帰する。キースから妹の死を聞かされ、十年も帰らなかった自分を責め、後悔する。だが、立ち止まる訳にはいかなかった。ホーネットとの約束のため

にも。冒険者としてがむしゃらに依頼を受けた。繋がりを得るために。アレキサンダー、アニスといった強者との繋がり。リア、サイアスといった国との繋がり。全ては人類統一と、その後の大戦争のために。

LP0002
ーテラナ高原近辺　森の中ー

「何、黙り込んでいるんだ！」

急に黙り込んだルークに対し、サテラの怒声が森に響き渡る。その声でルークの目が開かれる。少しだけ昔を思い出していたルーク。そのルークに対し、サテラが言葉を続ける。

「ホーネットに命を救われただって？嘘を言うな！ホーネットは魔人界から出た事は一度だってないんだぞ！」

「いや、真実だ」

「…それが真実かどうかはさておき、貴様が魔人の事を詳しく知っているのは事実のようだな。それだけの知識を持った貴様の目的は何だ？」

「そうだ！ホーネットが知っていようが知っていまいが、お前には関係ないだろ。一々口出ししてきて。お前の目的は何だ！？」

アイゼルとサテラの問いかけに、ルークが少し考えた後、口を開く。

「俺の目的か…」

彼女を気高いと思った。その姿に惹かれた。だからこそ、対等でありたいと願った。人類不可侵、その高潔なる信念。

「俺の目的は…」

だからこそ、彼女よりも高い目標を立てた。対等であるために、彼女と同じ夢であってはいけない。彼女よりも更に高みへ。だがそれは、人間が持つにはあまりにも無謀な夢。その夢に、いつかルークは押し潰されてしまう日が来るかもしれない。

「人類と魔人の共存！」

「「「「「！？」」」」」

だがこの夢を、途中で投げ出すつもりはない。例えこの身が朽ち果てようとも。

第５２話　夢迷い無く、道険し（後書き）

［人物］

ルーク・グラント　（３）
ＬＶ　５０／２００
技能　剣戦闘ＬＶ２　対結界ＬＶ２　冒険ＬＶ１

　この物語の主人公。かつてホーネットと結んだ約束を守るため、人類と魔人の共存という無謀な夢を達成しようと動いている。この目的を他人に話すのは初めてである。ホーネットに抱いているのは恋愛感情ではなく、また別の何か。

ホーネット
ＬＶ　２１５／３２０
技能　魔法ＬＶ２　聖魔法ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ２

　ホーネット派を束ねる魔王と人間の間に生まれた魔人。前魔王ガイの娘で、現魔人筆頭。亡き父の遺言に従い、人類不可侵を決めている。常に鍛錬を積み続け、その実力は魔人内でもケイブリスに次ぐ。ルークの運命を変えた魔人であり、同時にルークも彼女の運命を変えた人間である。二人の道が再び交わるのは、まだ先の事である。

シルキィ・リトルレーズン
ＬＶ　１１８／２０５
技能　魔物合成ＬＶ２

　ホーネット派に属する人間の魔人。魔人四天王。かつて人間だったときに単身魔王ガイに挑み、瀕死になりながらも多くのモンスターを倒した事でガイに興味を持たれ、魔人に勧誘される。その際に人類不可侵をガイに約束させ、ガイがこれを承諾。これにより人類は魔人の支配から解放されたため、知る者は少ないが数多くの人類

を救った英雄。ホーネット派に属するのはホーネットへの忠誠心と、自分との約束を守ったガイを愛していたため。

モダン・カラー
ＬＶ　１７／２２　（生前）
技能　呪術ＬＶ２　魔法ＬＶ１
　カラーの女王。おおらかな性格で、捕らえた人間の内、気に入った男性とお茶をするなど自由に暮らしていた。こういった性格から、５０人もの娘を産む事になる。ルークと出会ってしばらくの後、亡くなる。女王は娘が継ぐ事になる。唯一の心残りは、死ぬ前にあったイケメンとお茶が出来なかった事と言い残し、娘に引っぱたかれ大往生。

［技能］
聖魔法
　闇属性の特殊な魔法を放つ事が出来る技能。治療魔法である神魔法とは全くの別物。

魔物合成
　合成魔物を作り出す事が出来る技能。高レベルであれば戦闘用の魔物だけでなく、装備品の用に身につける合成魔物も作り出す事が可能。

呪術
　様々な呪いを使う事の出来る技能。相手を殺すものから、思考を周囲にまき散らすものなど、その種類は様々。

第５３話　嵐の前の静けさ

―テラナ高原近辺　森の中―

「ルークさん…さっきの話は…」
「本気なの…？」

森の中には既に魔人の姿はない。先のルークの話を聞いた後、サテラが散々に罵ってから撤退していった。アイゼルは何も語らず去っていったが、ルークを見るその目は、まるで狂人を見るかのような目であった。志津香は今ルークに抱きかかえられており、ルークとかなみは部隊に戻ろうと歩いているところだ。先の話のことを、かなみが不安そうに尋ね、志津香もそれに便乗する。その問いかけに、ルークが静かに答える。

「…ああ、本気だ」
「でも、そんな事が…」
「不可能よ。魔人は人類の敵なのよ」
「…難しい事は判っているさ。それと、二人に頼みがある。この事は、他言無用でお願いしたい。あまり事を荒立てたくない」
「ルークさんがそう言うのでしたら、私は喋る気はありません」
「まあ、いいけどね…」

ルークの言葉にかなみと志津香が了承する。確かに、あまり多くの人に知られてしまうのは芳しくない。狂人と思われても仕方の無いような事だ。

「フェリスも他言無用で頼む」

「契約主の頼みだから従うけど…ルーク様、一つ良いですか？」
「ルークで構わないぞ。何だ？」

ルークが、まだ悪魔界に帰らずに後ろをついてきていたフェリスにも頼む。難しい顔をしながら何か言いたそうなフェリスに言葉を続けさせる。

「…そんな望みは絶対に叶わないぞ。人間と魔人。神と悪魔。対極に位置する関係だ。分かり合える事なんてない」

その言葉だけ残し、フェリスの姿が消える。悪魔界に帰ったのだ。それを無言で見送りながら、ルークたちは皆のところに戻っていった。ルークたちが部隊に合流して見れば、既に戦闘は終結。解放軍の勝利であった。混乱の中、敗走できた司令官はトーマ将軍とミネバ副将のみで、ヘルマン軍は大打撃。解放軍も全戦力の三割を失う大混戦であったが、新たに青の軍が解放軍に加わった。この戦いで遂に解放軍とヘルマン軍の戦力は逆転、リーザス解放が現実味を帯びてきたのだ。ジオの町を解放し、休息を取る解放軍。

「セルさん、志津香の治療を頼む」
「あっ、はい。任せてください」

セルに傷ついた志津香を預け、ルークも休息を取るべく宿に向かう。その背中を、かなみと志津香は複雑な表情で見送るのだった

―リーザス城　ヘルマン軍司令部―

「なにぃ…負けただと！？」

「敵に奇襲をかけられてしまい、暗闇の中の戦いで我が軍は指揮系統が混乱。そのまま撃破されてしまいました」
「おい…マジかよ…」
「あのトーマ将軍が…」

届けられた報告に、パットンが大声を上げる。周りに控えている警護兵もにわかに騒ぎ出す。ヘルマンが誇る名将、人類最強トーマ・リプトン。その指揮の下での敗北がもたらす影響はあまりにも大きい。

「リーザス国内に逃げおおせた司令官はトーマ様とミネバ様のみ。我が軍の主力は、既に壊滅状態です…」
「もう一度、軍を整備して反撃は出来ないのか！」
「我が第3軍には、もう反撃するだけの戦力は残されていません。各地でのゲリラもますます勢いづいており…もう限界なのです」
「ぐっ…」

パットンが頭を抱える。こんなはずではなかった。つい先日まで、リーザスと自由都市は自らの手に落ちる寸前だったはずだ。憎々しげに言葉を漏らす。

「親父は何をしているんだ…魔人の作ってくれた転移装置で援軍を送るよう、使いを出しておいたはずだ！」
「そ、そんな事を期待していたのか！？」
「ん？どういう意味だ、ハンティ？」

パットンの言葉に驚愕するハンティ。その理由が判らず、パットンは聞き返す。一瞬黙り込んだ後、静かに口を開く。

「援軍など…来やしないよ、パットン」

「なにぃ！それはどういう事だ！？」
「皇帝はパメラに誑かされている。シーラ姫を次の皇帝の座につけようと…それくらいは判っているだろう？」
「ああ、妾の子である私は、奴にとって邪魔な存在でしかない。…まさか！？」
「……」
「このまま私を見捨てるつもりか！？皇子である私を！ここにはトーマたちもいるんだぞ！」
「パットン…」

パットンの脳裏に最悪の予想が浮かび、口にする。そしてそれは、ハンティの反応を見て確信に変わる。勝てばもうけもの、負けても邪魔なパットンが死んでくれる。端から援軍など寄越す気はなかったのだ。狼狽えるパットン。

「そうだ…アリストレス！あいつなら来てくれるはずだ。いや、レリューコフでも、ロレックスでも誰でもいい！誰か…」
「…今上がった三人は特に厳重に監視されている。特にアリストレスは、ほとんど身動きが取れない状況だ…」
「…くそっ！」

パットンが玉座を叩きつける。意外にも玉座の端に少しだけヒビが入るが、それに気がついたものはいない。その狼狽ぶりは警護兵にも伝わり、部屋には嫌な空気が充満していた。そのパットンをじっと見ながら、ハンティが一喝する。

「皇帝を目指すものがこの程度で狼狽えるな！周りを不安にさせるんじゃないよ！」
「…ハンティ」
「まだトーマもミネバもいる。それに…お前にはあたしがついてい

るだろ！」

その言葉に、パットンが多少落ち着きを取り戻す。その人格においても、強さにおいても、最も信頼の置いている人物、ハンティ。人類最強トーマと、副将でありながらそのトーマに次ぐとも言われている実力者ミネバ。それに、魔人は未だ三人とも健在。ふう、とため息をつき、ハンティに向き直る。

「情けない姿を見せた。もう大丈夫だ」

「ふん、まだまだ手の掛かる奴だな」

静かに笑いあうパットンとハンティ。だが、パットンは気がついていなかった。魔人ノスの真の思惑に。そして、元から魔人を信用していないハンティだが、もう一人の暗躍にはこちらも気がつけずにいた。ミネバ・マーガレット、その獅子身中の虫には。

―リーザス城　地下牢―

「ひぃぃぃぃ！」

「あはは、王女さんは良い声で鳴いてくれるねぇ！」

地下牢では未だリアとマリスの拷問が続いていた。サテラがランスの情報を手に入れた今、既に拷問をする意味はない。これはサヤの悦楽のため。魔人ノスから許可を貰い、今なお拷問を続けていたのだ。

「どんな気持ちだい？必死に黙っていた情報が別の所から漏れてしまった気持ちは。残念だったねぇ？このまま一生可愛がってあげる

よ！」
「（ダー…リン…）」

隣の部屋ではマリスの悲鳴も聞こえてくる。終わりの見えない拷問の中、それでも二人は狂うことなくひたすらに待ち続けた。必ず助けが来る事を信じて。

ー ジオの町　司令部 ー

「迷惑かけちまったようだな。すまねぇ。これからはその分暴れさせて貰うぜ
「粉骨砕身、働かせて貰います」

ジオの町解放の翌日、司令部に新たな顔が加わる。青の軍将軍コルドバと、副将キンケードだ。先の戦いで洗脳の解けた二人は、こうして会議に参加していたのだ。志津香も思ったより怪我は酷くなく、セルの懸命な治療によりほぼ完治し、会議に参加している。被害状況や物資の補給などの話しが続く中、ランスが欠伸をしながら唐突に切り出す。

「で、次の進軍はいつなんだ？」
「そこが意見の分かれているところでして…」
「今攻め込めば楽に進軍できるでしょうけど…私たちにも大きな被害が出たから…チューリップ3号も壊れちゃったし…うぅっ…」

バレスとマリアがその問いかけに答える。面倒くさそうにランスが耳をほじりながら、一言告げる。

「そんなもの進軍に決まっているだろう」
「ですがランス殿！ここは冷静に行くべきでは！」
「怪我が完治していない人もまだ多いですし…」

ジブルとランが反論するが、その意見をバッサリと切り捨てる。

「相手が弱っているのに攻めない馬鹿がどこにいる。明日進軍だ！これは総司令官命令だ！」
「くっ…」

その横暴に一部の者が不快感を露わにするが、進軍派でもあるルークがフォローを入れる。

「オクの町ではゲリラ軍が戦っているんだろ？早く助けにいってやるのも軍の勤めさ。それに、心配しなくても大がかりな戦いにはならんさ。怪我人を置いていっても十分勝てる戦だ」
「はい。軽く偵察してきましたけど、オクの町からは既に多くのヘルマン兵が敗走しています。この状況で攻め込まれるのを恐れているんでしょう」
「私の得た情報でも同様です。ここは攻め込むのが得策かと…それに、自由都市のジオと違い、オクはリーザス領。協力者も増えるでしょうし、これまで以上に補給がしやすくなるはずですわ」

かなみと真知子もフォローを入れる。ランスの適当な采配には文句を言っていた者たちも、こう理論づけられれば考えも変わる。それに元々進軍派であったリックやコルドバ、ハウレーンも加わり、流れは完全に進軍ムードになる。

「では、明日オクの町に進軍する！怪我の酷い者は一度置いていき、後から合流させる。全軍で攻め込む必要も無い相手じゃ！」

バレスの言葉に、眠ってしまっているアスカ以外の全員が返事をする。オクの町侵攻戦、しかし、この侵攻戦はあっけなく終わる事になる。

一翌日　オクの町近辺　荒野一

「なんだ、全然敵のお出迎えが無いではないか。つまらん」
「何言っているのよ。敵なんかいないに越した事ないでしょ」

文句を言うランスに苦言を呈すマリア。ランスの言うように、ここまでまともな戦闘はほとんどなく、既にオクの町目前。やはりヘルマン軍の受けたダメージは大きいらしく、より奥へと敗走して体制を立て直しているのだろう。

「では全軍突撃！」
「油断はするなよ」

奥の町の中にも僅かなヘルマン軍しかおらず、それも先に町に攻め込んでいたゲリラ軍と戦っている最中であった。なだれ込む解放軍に慌てふためき、一時間も掛からずオクの町は解放されたのだった。長い自由都市での戦いを経て、遂にリーザス領の一角を取り返した解放軍。皆が歓喜する。

「遂に…遂にここまで…」
「バレス殿、まだまだ戦いはこれからですよ」
「うむ…だが、やはり感慨深いものがある…」

一夜　オクの町一

「がはは、宴だ！そこの娘、もっとこっちに来い！」
「ランス様、へんでろぱを取ってきました」

その夜、オクの町では軽い宴が開かれていた。これはランスの提案だ。まだ戦争の最中であるのにと反対意見も多かったが、辺りにヘルマン軍はいないという報告もあり、また、今回は碌な戦闘がなかったため被害は限りなく0。次の町の様子を探った斥候が帰ってこなければ大した会議も開けないため、軽いものならばと最終的には宴は承諾された。最初は渋っていた者たちも、やはりリーザス領を奪還できたことが嬉しかったのだろう。皆が宴を楽しんでいた。ルークも軽く酒を飲みながら、辺りの喧騒を楽しんでいた。そこに志津香が近寄ってくる。

「程々にしておきなさいよ。まだ戦争中なんだし」
「少しくらいなら、程よく気が抜けるもんさ。志津香は飲まないのか？」

その問いかけに、志津香がギロリと睨んでくる。

「私は飲まないわ。一生ね！」
「まだあの時の事を気にして…ぐっ…」
「まだ覚えていたの？忘れなさいって言ったでしょ？」

志津香が脇腹にパンチを入れてくる。カスタムの町での失態を未だに後悔しているらしい。そのような感じで自然に話す二人。先程かなみとも自然に話したルーク。あのような話を聞いたにも関わら

ずだ。そんな二人の態度がルークは嬉しかった。

「志津香…」
「ん？」
「ありがとな」
「…何のことだか判らないわ」
「なーに、良い雰囲気出してるの、お二人さーん！」

静かに話す二人に、いきなり肩を組んでくる人物。振り返れば顔を真っ赤にしたレイラがそこにいた。

「ぶっ…はーーー！」
「うっ…お酒臭い…」
「レイラさん、どれだけ飲んだんだ？」
「何言ってるのよ！こんなの…全然飲んだ内に入らないわよ！」
「典型的な酔っ払いね…」

志津香が眉をひそめると、その様子を見たバレスが叫ぶ。

「誰じゃ！レイラにこんなに酒を飲ませたのは！レイラに酒を飲ませすぎないのは、軍の暗黙の掟じゃろうが！」
「ミリさんがレイラさんを挑発して飲み比べになって…すいません、バレス様！」
「ええい、セル殿を呼んできてくれ！」

バレスに命じられてメナドが駆けていくが、すぐに慌てた様子で戻ってくる。

「駄目です。セルさんもトマトさんと一緒に潰れています！真知子さんと一緒に飲んでいたみたいです！」

「なんじゃと!?」
「ああ…真知子さんはああ見えて酒豪だからな…」
「そうなの!?」

メナドの声を聞いて、真知子と飲んだ事のあるルークが呟く。うふふ、と笑いながら次々と酒瓶を空けていく姿は中々に恐ろしいものがあった。あのペースに付き合っていたのでは、そりゃ潰れるなと酒を口にしながら考える。そのルークにレイラが更に絡んでくる。

「なーに、静かに飲んでるのよー!それと!ルークに一つ言っておきたい事があるわ!」
「言っておきたい事?」
「ランスくん程とは言わないまでも…もっと!女の子に!優しく!でも八方美人過ぎ!」
「耳が痛い話だな…」
「(……自覚はあったのね)」

レイラの言葉に、同じく肩を組まれて動けない志津香が耳を傾ける。レイラがそのまま続ける。

「そうよ!あんなに美人さんたちに好かれているのに!まずは手始めに誰かの想いに応えるべきなのよ!例えば…」
「ちょっ!」
「はい、そこまで!」
「きゃんっ!」

レイラが酔った勢いでとんでもない事を言い出しそうになり、焦る志津香だったが、そのレイラの頭に拳骨が落ちる。

「いたた…一体誰よ!…って、アビァトール隊長!?」

「元ね。いいから顔を洗ってらっしゃい。それとも、もう一発受けてみる？」
「い、今すぐ顔を洗ってきます！」

立っていたのは親衛隊前隊長アビァトール。お世話になった人の姿に、一気に酔いの覚めるレイラ。そのまま猛ダッシュでこの場を去っていく。その背中をやれやれ、と見送ったアビァトールが、ルークの方を向いてくる。

「お久しぶり。本当にルークなのね…」
「…ああ」
「…ちょっとマリアの様子を見てくるわ。ミリに巻き込まれているかもしれないし」

二人の様子に何かを感じ取ったのか、志津香が席を外す。少しの沈黙の後、ルークが口を開く。

「どうしてここに？」
「オクの町のゲリラ軍を率いていたの、私なの」
「…なるほど。どうりで俺たちが来る前に敵がボロボロな訳だ」
「…いつ戻ってきていたの？死んでしまったとばかり思っていたのよ」
「一年半くらい前だな」
「…そう」

二人がほぼ同時に酒を口に含む。アビァトールの左手の薬指に、指輪が光る。

「私も今じゃ主婦よ。貴方が行方不明になって十年以上…人が変わるには十分過ぎる時間だわ」

「…すまない」
「謝らないでよ。今の旦那の事は、本当に愛しているんだから」

かつて、リーザス親衛隊に入って間もない頃のアビァトールは、故郷の町にギルド仕事で訪れた冒険者に惹かれた。男の名はルーク。自分と同い年であったが、強く、大人びていたルークに稽古をつけて貰い、その実力を高めていった。だが告白を決意した矢先、ルークは行方不明になる。失意の中、それでも職務は全うし親衛隊隊長となるが、心の隙間は埋まらなかった。そんな時、士官学校の同期であった男性に優しくされ、その男と結婚をする。

「当時、私の気持ちには気がついていたんでしょ？」
「ああ…」
「そう…そうよね。これ以上は未練になるから、私はもう行くわ。今、側にいる娘たちには優しくしてあげて」
「…判った。そういえば、女子士官学校の校長を打診されているんだって？」
「ええ、少し迷っているんだけどね」
「受けてくれないか。君の教え子なら、リーザスの未来を安心して任せられる」
「…考えておくわ」

そう言って去っていくアビァトール。彼女も、ルークが魔人界で過ごした十年の時の中で悲しませてしまった人物の一人だ。妹の死に目に会えなかった事も思いだし、酒を一気に飲み干す。その時、少し離れた位置にいるキンケードが目に入る。

「…キンケード様。ご報告が…」
「…！？」

部下に耳打ちされ、目を見開くキンケード。そのまま周囲にばれないようにその場を抜け出していく。ルークはその姿が気に掛かり、気がつかれないように後を追った。そのルークの背中をかなみが見つける。そして、かなみもルークの後を追うのだった。

ーオクの町近辺　森中ー

「お、お前たちは何をしている！」

キンケードの怒声が飛ぶ。森の中ではキンケードの部下二人が一人の女性を犯していた。側には一人のヘルマン兵の死体が転がっている

「これはキンケード様。何、ヘルマン兵が女を人質にしながら森に隠れているのを発見しましてね」

「我ら二人が殺しておきましたのでご安心を。女性は既にヘルマンに犯され抜き、意識が朦朧としていたので我らもついでに楽しませて貰っているところです」

「さっき一瞬、意識を取り戻しかけましたが、強く殴ったら気絶したので顔は見られていません」

さも当然の事のように言ってのける二人の若者に、キンケードが更に語気を強める。

「ば、馬鹿者！今すぐ止めないか！」

「何言っているんですか？キンケード様がいつも戦闘の後、慰安でさせてくれる事じゃないですか」

「それは相手を選んでいる！その女性はリーザスの民だろうが！」

「これだけ朦朧としてりゃ、覚えちゃいませんって。キンケード様も混ざりませんか？」

確かにキンケードは、ヘルマン軍や盗賊といった輩を倒した際、それに属していた女性を捕らえ、慰安のために性処理要因として使っていた。だが、流石にリーザスの民を犯した事はない。こんな事がもしばれてしまえば、と焦るキンケード。その時、女性を犯していた二人の部下の首が飛ぶ。飛ばしたのは二人の背後にいた男。冒険者ルーク。意識を失っている女性を抱きかかえながら、キンケードを睨み付ける。

「こ、これはルーク殿」

「キンケード…話は聞かせて貰ったぞ。随分と軍規に違反した行為を行っているみたいだな」

「な、何の事でしょうか…」

惚けるキンケード。その時、ルークの後ろからかなみがやってくる。

「ルークさん？森の中で一体何を…えっ！？」

「かなみ、丁度良いところに来てくれた」

かなみが周囲に転がる死体と、ルークが抱きかかえていた女性に驚く。ルークがかなみに女性を預ける。キンケードは自分の地位の終わりを覚悟するが、ルークの発した言葉は意外なものだった。

「かなみ、この女性をロゼに治療させてやってくれ。リーザス兵に扮したヘルマン兵に犯され、意識を失っている。宴の席に水を差すのは士気に関わる。内密に事を運んでくれ。報告は…エクスだけにし、他の者には伝えないように。俺はこの場でヘルマン兵の死体を

片付けておく」
「は、はい！」

慌てていたのか、その指示に特に違和感を覚える事もなく、かなみは女性を連れてこの場を去っていく。この場に残されたのはルークとキンケード。まさか、助けて貰ったのか、とキンケードが安堵する。そのまま調子の良い声でルークに礼を言う。

「いやぁ、ルーク殿。危ないところを…」
「何を勘違いしている？別に助けた訳ではないぞ？俺がこの事を報告すれば、どうなるかは判っているだろう？」

冷たく言い放つルークに、キンケードの表情が再び凍り付く。目の前の男はただの冒険者ではない。自分が洗脳されている内に、いつの間にか隊長たちの評価を得ていた男。バレスも、リックも、エクスも、レイラも、チャカもこの男を信頼している。その男がこの事を報告し、自分が知らないと白を切ったとして、果たして皆はどちらを信用するのか。その上、目の前には部下の死体が転がってしまっている。このような行為を、リア王女もマリスも、バレスも毛嫌いしている。となれば、下手すれば処刑まで…。キンケードの背中を冷たい汗が流れる。その様子を見ながら、ルークが静かに口を開く。

「…助かりたいか？」
「も、勿論です」
「…ならば、やって貰いたい事がある。それをすれば…まあ口利きはしてやる」
「やって…貰いたい事…？」
「ああ、お前みたいな奴が適任の仕事だ。この二人に比べて、リーザスの民には手を出さない辺り、お前はまだ多少救いはあるみたい

だからな」
「……」
「選択する余地はないぞ？」
「…判りました」

この晩、ルークとキンケードの間である密約が結ばれる。死体はルークと駆けつけたエクスが処理。大規模な戦争の後で死人の把握まで完璧には行き渡っていなかったため、二人の失踪を疑問に思うものはいなかった。

ー翌日　オクの町　司令部ー

「斥候に行っていた者が情報を持ち帰った。ここから北のノースの町にはトーマ率いる部隊が、東のサウスの町にはミネバ率いる部隊が共に守備しているようじゃ」
「でも相手の戦力はどちらも１０００に満たないそうよ」
「ようやく相手の戦力が底をついてきたみたいね…いたた…」
「レイラさん、二日酔いなんですから無理しないでください…」

バレスとマリアの報告に、部屋が歓喜に沸く。いよいよリーザス奪還が現実味を帯びてきたからだ。

「とすると、どちらを先に落とすかですね」
「戦略的に見ると、ノースを落とすのが良さそうですわね」
「うむ、真知子殿の言う通りですじゃ」
「…真知子さん、二日酔いは大丈夫なんですか？」
「ふふ、あの程度、飲んだ内に入らないわ」
「……」

「がはは、こりゃ豪快なお嬢さんだ！」

メナドの問いかけに、ケロリと答える真知子。絶句するハウレーンの前の席でコルドバが大声で笑う。

「では、ノースから攻めるという事で。サウスからの攻撃も備えなければいけないので、向かう軍は…」

「ふん、一々そんな面倒な事を考えていられるか。既に敵の兵数はクズ同然。せこくいかず、両方同時に攻めるぞ！」

「えっ…」

「何と…」

「そりゃいいな。一気に倒しちまおうぜ！」

ランスの提案に絶句するバレス。ミリが賛同するが、エクスが口を開く。

「有利と思われていた戦において、両面作戦を取ったが為に負けた事例が、歴史上何度でもあります。無茶な戦いはせず、確実に行くべきでは…」

「そんな退屈な作戦を取れるか！両方同時に攻める！俺様はもう決めたのだ！」

「はぁ、また馬鹿な提案を…」

「まあ、成功すればその分早くリーザスに辿り着ける。なくはないな」

「自分は賛成です。ここは一気に叩くべきかと」

志津香がため息をつくが、ルークとリックは賛成のようだ。最終的にはランスの総司令官権限が発動し、二カ所同時攻略を行う事となった。

「では部隊の分け方だが、俺様と女たちはノース、むさ苦しい男共はサウスだ」
「そんな無茶苦茶な部隊分け、出来る訳ないでしょ！」

流石にこの提案は却下され、しばしの話し合いの末、部隊分けが決定した。ノースを攻めるのは、ランス、シィル、マリア隊、赤の軍、白の軍、リーザス魔法軍。サウスはルーク、かなみ、志津香隊、黒の軍、リーザス親衛隊、傭兵部隊。オクの防衛にはミリ隊、青の軍、ゲリラ軍が残る事となった。待ち受けるは僅かなヘルマン軍。だが、それを率いるのは共に猛将。トーマとミネバだ。一筋縄でいく戦いではないだろう。

ーリーザス城　東の塔ー

あまり他の者が立ち寄る事のない場所。ここにサテラは呼び出されていた。やってくると、呼び出した相手、アイゼルが既に立っていた。

「なんだよ、アイゼル。こんな所に呼び出して」
「サテラ、これより私はノスを探る。お前はいつも通り振る舞いつつ、もし私を怪しむような動きがノスにあれば、すぐに報告してくれ」
「なっ！？おい、人間なんかの言った事を本当に信じてるのか！？」
「…別に信じている訳ではない。だが、少しばかり気になる事があるのは事実」

そう話し合う二人。だが、その会話を遠見の魔法で見ている者がいた。その者は、魔人ノス。

「アイゼルめ、感づいたか。もし邪魔をするのであれば…二人とも始末する必要があるかもしれんな」

第５３話　嵐の前の静けさ（後書き）

［人物］

コルドバ・バーン
ＬＶ　２９／４４
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス青の軍将軍。リーザスの青い壁という異名を持ち、その鉄壁の部隊は世界に名を轟かせている。豪快な性格だが、趣味はハーモニカを吹く事。フルルという１５歳の幼妻がいる。バレスやリックの認めたルークの事を早くも気に入っている。

キンケード・ブランブラ
ＬＶ　２５／３６
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス青の軍副将。実力はあるのだが、軍務を職業的にこなしているため兵としての誇りや情熱は無い。年下のコルドバよりも下の地位だが、本人は副将辺りが一番好き勝手出来て良いと考えている。普段から陰に隠れて蛮行を行っていたが、その事がルークにバレ、ある密約を結ぶ。

アビァトール・スカット
ＬＶ　２１／５４
技能　剣戦闘ＬＶ１

　リーザス親衛隊元隊長。レイラの前任で、寿引退をし、現在では主婦をしていたが、リーザスの危機にゲリラ軍として動く。ルークとは旧知の仲。

［都市］

オクの町
　リーザスの南に位置する町。経済力、防衛力共にリーザスの中でも下位に位置する。

第５４話　人類最強の女

―サウスの町　広場―

「くっ…このわたくしが、こんな女に不覚を取るだなんて…」
「威勢が良かったのは最初だけだったようだねぇ、お嬢ちゃん」

長斧のハルバードを持ちながら、筋肉質の女が笑う。この女がヘルマン第３軍副将、ミネバ・マーガレットだ。見下されているのはサウスの町周辺でゲリラ活動を行っていた集団に属していた少女。他の仲間は既にミネバ率いる部隊に殺されたしまった。自分の実力に自信のあった彼女は、一矢報いようとミネバに向かっていったが、まるで歯が立たなかった。

「ゲリラ活動なんて、随分と無謀な事をしているねぇ」
「ふん、わたくしはリーザス親衛隊に内定していましてよ。このままリーザスが滅んだら、わたくしの人生設計がメチャクチャですわ！」
「国のためじゃなくて、自分のためかい。そういう考えは嫌いじゃないよ」

傷だらけで倒れ、殺される直前であるにも関わらず、少女は気丈にミネバの事を睨み付ける。その様子が面白いのか、ミネバが笑いながら少女を見下ろす。そこに、ミネバの部下であるタミが伝令に来る。

「ミネバ様。オクの町からリーザス軍が侵攻してきます。町まで辿り着くのは時間の問題かと…」

「ちっ、面倒だねぇ。この戦力でまともにぶつかったら、全滅は確実か。とはいえ、前回の戦いでちょっとばかしトーマの奴に目を付けられちまったから、このまま撤退という訳にもいかないか…」

テラナ高原の戦いで早々に撤退したミネバ隊は、現在ヘルマン軍で最も被害の少ない部隊であった。そのため、トーマに前線での死守を任されてしまっている。この状況でまた早々に撤退したのでは、更に全体の戦力が減る次は、最前線での特攻でも任されかねない。

「となると…適度にあたしらも損耗するとするかねぇ」
「では、準備の済んでいる穴でよろしいですか？」
「ああ、それと火も準備しておきな。最終的に撤退できないんじゃ意味がないからね」
「はっ！」

タミがミネバに敬礼し、駆けていく。

「穴…？火…？」
「すぐに判るさ。それと、お嬢ちゃんにも協力して貰うとするかねぇ」
「くっ…」

そう言ってミネバが少女を片手で掴み上げる。憎々しげにミネバを睨む少女だが、傷ついた体で抵抗する事は不可能であった。

ーサウスの町　入り口ー

「皆の者、町の中へ突撃じゃ！」

「はっ！」

バレスの指示で解放軍が町の中へ突入していく。オクの町の時ほどではないが、今回もここまでほぼ無傷で侵攻する事が出来た。やはりヘルマン軍は大した戦力が残っていない。町の中には流石に多くのヘルマン軍がいたが、解放軍の数はそれを遙かに上回る。町の中での戦いもじわじわと解放軍が押していき、バレスが確信を持ってルークに話しかけてくる。

「最早、勝利は時間の問題。無駄な抵抗を続けるものじゃ」
「…何かおかしい」
「ルーク、どうかしたの？」
「…ヘルマン軍の動きが変だ。まるで何かに誘導しているかのよう…」
「考え過ぎじゃない…うっぷ…」
「レイラさん、やっぱり後ろに下がっていた方が…」

その戦力差から、今回指揮官たちは前線には立たず、後方で待機していた。志津香の問いかけにルークが答えるが、二日酔いのレイラが心配ないと一蹴する。だが、その不安は的中する事となる。

「はっ！」
「ぐぁっ！」

町の前線でアレキサンダーがヘルマン兵を打ち倒す。圧倒的にこちらが押している。それにも関わらず、目の前の部隊を指揮する小隊長はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべている。そして、突如声を上げる。

「今だ！」

瞬間、地面に巨大な穴が空きその体が下に落ちていく。それは解放軍だけじゃない。目の前で指示を出したヘルマン兵も同様に落ちていくのだ。目を見開きながら、先程指示を出したヘルマン兵が口を開く。

「そ、そんなっ…俺たちの立つ場所は安全だって…」
「くっ…はぁっ！」
「ぐぎゃっ！」

穴に落ちていく中、アレキサンダーはヘルマン兵の背中を蹴り、空中へ高く飛び上がる。そのまますんでのところで木の枝を掴み、下に落ちるのを回避する。下を見下ろすと、穴の中には竹槍などが敷き詰められており、落ちた解放軍、ヘルマン軍共にその殆どが死んでいた。確かに落ちている人の数は解放軍の方が数倍多い。だが、このような味方を切り捨てる作戦に、アレキサンダーは嫌悪感を覚えていた。

「こ…このような事が…」
「酷い…」
「人間のやる事じゃないわ…」

周囲を見ながら、バレスたちは絶句していた。町の至る所で穴が空き、解放軍に尋常でない被害を与えてきたのだ。特に前線に配備されていた黒の軍と傭兵部隊の被害は大きく、伝えられる報告や阿鼻叫喚の惨状に、皆が立ち尽くしていた。味方であるヘルマン兵をも巻き込むやり口に、志津香が眉をひそめる。

「…行くぞ。この状況では俺らも動く必要がある。指揮官を必ず討つぞ」
「はい！」
「こんな作戦…認められるものではないわ…」
「穴には十分注意して進むわよ」

落とし穴の罠が落ち着いたのを確認し、ルークたちも駆け出す。
このような人道に外れた作戦、認められるはずがない。

ーサウスの町　広場ー

繰り広げられる惨状に、ミネバに捕らえられている少女が絶句する。少女は今木の杭に縛り付けられ、身動きが取らない状況だ。目の前には大きな穴が空いており、下には竹槍が敷き詰められている。

「こ、こんな作戦、認められる訳ありませんわ！貴女には騎士道というものがないんですの！？」
「そんな綺麗なものは、生憎持ち合わせていなくてね」
「自分の部下をなんだと思っていますの！？」
「部下の命なんざ、ゴミと一緒さ。あたしの役に立てばそれでいいのさ！」
「なんて人…」

その時、ミネバの元に一人の女騎士がやってくる。それはミネバの部下。前線に立っていた彼女は、かろうじて落とし穴を回避し、ここまで撤退してきた。周りの仲間たちは落とし穴で全滅していた。

「ミネバ様、前線はほぼ壊滅です」

「そうかい。じゃあ、あんたも撤退の準備を進めておきな」
「……」
「どうした？何か気に入らない事でもあるかい、アミトス？」
「…いえ」

命辛々逃げて来た部下のアミトスに何の労いもないミネバ。アミトスもこのような作戦を内心認めていなかったが、一兵卒である自分が副長のミネバに意見する事は出来ず、苦虫を噛みつぶしたような表情で下がっていく。

「何故貴女のような人がヘルマンの司令官なのですか…」
「結果だけを見てよく考えな、お嬢ちゃん。まともに戦ったところで、これだけの被害は与えられなかっただろうねぇ」
「くっ…」

ミネバの言うように、ヘルマン軍がまともに戦っても解放軍にこれだけの被害は与えられなかっただろう。この作戦を取ったからこそ、不可能とも思える成果を上げる事が出来たのだ。これこそが、ミネバが副将という地位にいる理由の一つ。騎士道精神を持つ兵からは嫌われていたが、常に結果を出し続けるその戦いぶりは、実利主義である王妃や宰相から高く評価されていた。その時、目の前に数人の解放軍が駆けてくる。

「いたぞ！あれが司令官のミネバじゃ！」
「バレス将軍と親衛隊のレイラか…火の準備はまだかい？」
「もう少々お待ちを…」
「急がせな！しょうがない、あたしが少し時間を稼ぐとするかね…」

タミにそう命じながら、ミネバは目の前の解放軍と対峙する。レイラが剣をミネバに向けながら華麗に言い放つ。

「観念しなさい、ミネバ！もう逃げ場は…ない…わ…うっぷ…」
「ああ、レイラさん。ほら、無理するから…」

かなみに連れられて下がっていくレイラ。その様子を見ながらミネバが笑う。木の杭に縛られている少女も呆れた様子。

「なんだい？無様な姿だねぇ」
「あれが親衛隊隊長レイラ…親衛隊に入るの、考え直した方が良さそうですわね…」
「さあ、覚悟するがよい。このような下劣な行為、断じて許す訳にはいかん。剣の錆にしてくれる！」

レイラに代わってバレスが宣言し、ルークや志津香も身構えるがミネバが大声で木の杭に縛られた少女を指さす。

「こいつが見えないかい？あたしが部下に命じりゃ、この嬢ちゃんは穴に真っ逆さまだねぇ」
「くっ…卑怯な…」
「まぁ、一対一だったらやりあってあげてもいいがね。勿論、他の者の手出しが入ったらこの嬢ちゃんは死ぬからね。さぁ、誰がかかってくる？」
「それでは儂が…」
「いや、ここは俺に任せてくれ」
「ぬっ…ルーク殿…」

出て行こうとするバレスを引き留め、ルークが前に出ていきミネバに近づいてく。

「ほう、あんたがあたしの相手かい？」

「ルークだ。覚える必要はないぞ。外道を生かしておく気はないんでな」
「つれない事言うじゃないか。さて…ふんっ！」
そう言うや否や、ミネバがいきなりハルバードを振るってくる。完全な奇襲。が、それをルークは妃円の剣で受け流し、一気に間合いを詰める。
「！？」
「はぁっ！」
ルークが真一文字に剣を振る。しかし、その剣は素早く手元に戻したハルバードに防がれ、そのまま力任せに剣をかち上げる。無防備になったルークの体にハルバードの頂点についた金属の棘を突き刺してくるが、それもルークは躱し、互いに後方に飛んで間合いを取る。この一瞬のやりとりで、互いに相手の力量を理解する。
「（ちっ…この男、強いじゃないか。時間を稼ぐだけのつもりだったんだが、厄介だねぇ…）」
「（この女、ただの外道じゃないな…本物の強者だ）」
内心そう思いつつ、互いに間合いを詰める。再度剣とハルバードが交差し、金属音が辺りに鳴り響いた。
ーノースの町近辺　ヘルマン軍砦ー
「がはは、全く持って相手にならん。このまま殲滅しろ！」

ランスが言うとおり、この戦では解放軍がヘルマン軍を圧倒していた。元々人数も少ないヘルマン軍、更にミネバと違いノースを指揮するトーマは真っ向から解放軍を迎え撃っていたため、その戦は順当に進んでいくのだった。リーザス最強リックが率いる赤の軍が、圧倒的な戦果を上げる。ランスも最前線に立ち、敵を殲滅していた。最早、砦が落ちるのは時間の問題だった。その時、ランスの前にリーザス兵が数人吹き飛んでくる。ランスが前を見れば、巨大な鉄球を振り回しながらこちらを睨んでくる男がいる。

「先程から周りに指示を出していたな！貴様が解放軍の司令官か！？」

「ランス殿、あれが敵の司令官トーマです」

「ふん、なるほどな。そうだ！俺様がかの偉大な英雄ランス様だ！そう言うお前も、ヘルマン軍の司令官だな！」

「いかにも。我が名はトーマ。ヘルマン第3軍の総司令官だ」

飛ばされてきたリーザス兵の言葉を聞き、相手が司令官である事を知ったランスは向き直る。直後にトーマが自ら名乗り上げる。

「だったら、とっとと降伏するんだな」

「ふん、騎士の誇りにかけて、死んでも降伏など出来ぬ！小童、かかってこい！」

「なにぃぃ！」

挑発されたランスがトーマに向かっていこうとするが、その時砦の奥からヘルマン兵数人が駆けてきて、トーマに進言する。

「トーマ司令官、この砦はもう駄目です。脱出してください！」

「まだ戦いは終わってはいないのです。ここでトーマ様に死なれては、我が軍は本当に勝ち目が無くなります。部隊を整え、再起して

ください！」
「……」

その言葉にトーマの動きが止まる。ランスが剣先を向けながら言葉を発す。

「貴様、まさか臆病風に吹かれて逃げようと思っているんじゃないだろうな！」
「…なに、まずは貴様を倒してからだ」
「トーマ様、戦っている余裕はありません。今撤退しなければ、もうチャンスはありません！」
「ここは私たちに任せて脱出を！」
「トーマ様！」
「……」

ランスに向かっていこうとするトーマに対し、周りのヘルマン兵が必死に懇願する。トーマが一度だけ目を閉じ、静かに口を開く。

「…わかった。ランスとやら、この勝負は預けたぞ」
「あっ、貴様逃げる気か！」

それだけ言い残し、トーマは砦の奥に消えた。慌てて追いかけようとする解放軍だが、その前にヘルマン兵が立ちふさがる。

「ええぃ、どけぇぇ！」
「トーマ様が脱出なされるまで時間を稼ぐのだ。行くぞ！」

トーマを逃がすため、残ったヘルマン兵が特攻を仕掛けてくる。圧倒的な戦力差を覆せるはずもなくヘルマン兵は敗れ去るが、トーマには逃げられてしまうのだった。とはいえ、この戦は解放軍の圧

勝、ノースの町解放に歓喜に沸くのだった。

「がはは、俺様のお陰だな！」
「お疲れ様です、ランス様」
「おい、マリア。ルークたちから連絡はないのか？サウスの町はどうなっている？」
「まだよ。でもルークさんたちが負ける訳ないわ」
「全く手間取りやがって。さっさと解放しろっていうんだ」

ドカッと腰掛けるランス。近くで赤の軍に指示を出していたリックに尋ねる。

「そこのお前。ええっと、何だったか？」
「もう、赤の軍のリック将軍でしょ！」
「ふん、一々男の名前など覚えてられん」
「自分に何か？」
「さっきのヘルマンの親父、何者だ？」
「ヘルマン第３軍隊長トーマ・リプトン将軍です。先程名乗られていたと思いますが…」
「そう言う事じゃない。なんだ、あの親父は！俺様程じゃないが、見ただけで強いと判ったぞ！」

ランスがそう口にする。リックがなるほど、と頷き、言葉を続ける。

「そうですね…トーマ将軍は人類最強と呼ばれています」
「ふん、俺様を差し置いて人類最強など、ふてぇ親父だ。だが、あの親父を殺せば、俺様が名実共に人類最強だな、がはは！」

ノースの町にランスの笑い声が響く。こうして、ノースの町解放

に成功し、ランスたちはサウスの町の報告を待つのだった。

ー サウスの町　広場 ー

「何て戦いですの…」

杭に縛られた少女が、目の前で繰り広げられる戦いに息を呑む。プライドの高い彼女にとって、認めるのは悔しいが、認めざるを得ない。自分よりも遙かに高い位置にいる二人の戦い。息を呑んでいたのは少女だけではない。周りで見ていたかなみや志津香、バレスなどもその光景に目を奪われていた。レイラは横になっていた。何と情けない、と少女がレイラの事を見下す。

「これ程の腕を持ちながら、あのような作戦を取るのか、貴様は！」
「勝つためには手段は選んでなんかられないからねぇ。それにしても、リーザスにあんたみたいなのがいたのは誤算だったよ！適当にあしらうつもりが、何だってマジにやらなきゃならないんだい！」

ミネバがそう言いながらハルバードを横薙ぎにする。砂煙と共にルークに迫るが、後ろ飛びでそれを躱す。

「別に俺はリーザス軍って訳じゃ…」
「ミネバ様、準備が整いました」
「遅いんだよ！さて、悪いけどここまでにさせて貰うよ。命がけの勝負なんてのは、柄じゃなくてね。ふんっ！」
「なっ！」

ミネバの言葉を否定しようとしたルークだが、タミの報告にかき

消される。報告を受けたミネバは、ハルバードをルークではなく木の杭に向かって振るう。木の杭は根本から真っ二つに折れ、穴に倒れ込んでいく。

「きゃぁぁぁぁ！」
「うぉぉぉぉっ！」

ルークは木の杭に向かって駆け、穴に落ちる前に両腕で支え、自分の方向に倒れさせる。少女がルークの体に覆い被さるように木の杭ごと倒れてくる。周りで見ていたかなみたちも駆け寄るが、瞬間、町の至る所から火の手が上がる。火の手はルークとミネバの間にも走り、後を追う事が出来なくなる。

「ははは、それじゃあ、この辺でお暇させて貰うよ。出来ればあんたとは二度と会いたくないねぇ」
「くそっ、真空斬！」
「ファイヤーレーザー！」

ルークと志津香が迫撃するが、それはミネバに届く事はなく、高笑いと共にミネバは去っていった。

「逃がしたか…」
「動ける者は消火活動に当たれ！急ぐのじゃ！」

バレスのその声に、穴に落ちていなかった解放軍が町の消火活動に当たる。逃げるためだけに町中に火を放つこのやり口、落とし穴同様とても認められるものではなかった。ルークが覆い被さってきていた少女を杭から解放し、話しかける。

「救出が遅れてすまない。大丈夫か？」

「え、ええ。危ないところを助けていただき、感謝しますわ。わたくしはチルディと申します。ゲリラ隊に所属していたのですが、生き残ったのはわたくしだけみたいですわ」
「そうか…」
「ルークさん、傭兵部隊の方の被害もかなりのものです。来て下さい！」
「判った。すまない、一人で大丈夫か？かなみ、彼女を頼んだ」
「はい、ルークさん！」

チルディをかなみに任せ、ルークがこの場を去る。その背中を見送りながら、チルディが心の中で思う。

「（レイラの不甲斐ない姿に迷ってはいましたけど、あのルークというお方がリーザスにいるのであれば、やはり親衛隊には入った方が良さそうですわね。それに、あのミネバという女に負けたのは腹が立ちますわ。見てなさい、わたくしの目標は女性最強。いつかわたくしが討ち取って見せますわ）」

ルークがリーザス軍に所属しているという勘違いをしたまま、チルディは親衛隊入りを決意する。こうして大きな被害を出したものの、解放軍はサウスの町の解放にも成功した。高い位置にあるサウスの町からは、リーザス城を見下ろす事が出来る。遂に目前へと迫ったリーザス城。間に大きな都市はもう無く、必然的に次がリーザス城での決戦になる。それ即ち、解放軍とヘルマン軍の最後の決戦。兵数では上回る解放軍だが、相手にはトーマとミネバという猛将に加え、魔人も未だ全員健在。激戦は必至。そして、切り札であるカオスも未だ謎に包まれたままであった。

―サウスの町近辺　街道―

「ミネバ様、お疲れ様です」
「あんな奴がいるとはねぇ…トマホークを持ってきておくべきだったよ」

ミネバがそう言いながら兵を率いてリーザス城へ撤退していく。
本来ミネバが得意とするのは近接戦闘であり、長斧のハルバードより短斧のトマホークの方が実力を出せるのだ。フッと笑いながらタミと話す。

「だが、丁度良い具合に兵も減ったようだねぇ。これなら後方にいても文句は言われまい」

小声で話していたミネバだが、その言葉を聞いたものがいる。アミトスだ。拳を握りしめながら、ミネバの背中を睨み付ける。

「（味方の兵が減った事を喜ぶだと…ミネバめ、貴様のやり方、私は絶対に認めんぞ…）」

―リーザス城　地下牢―

リアとマリスが捕らえられている牢とはまた別の場所。ここにリアの両親である王と王妃が捕らえられていた。聖装備の在処を知らなかった二人はそうそうに役立たずとされ、放置されていたが、ここに十分ほど前から一人の男がやってきていた。魔人アイゼル。聖装備ではなく、リーザス王家に伝わるカオスの事を聞くために。王を人質に取りながら、王妃であるカルピスに尋ねる。

「人間の女よ、カオスが魔人を倒せる武器なのは判った。だが、何故そんな武器を長い間封印していたのだ。人間界に魔人が攻めてきたこともあるだろう？」
「…カオスは、絶対に封印を解いてはならないのです。娘にはその事はまだ知らせていませんでしたが…」
「それは何故だ？」
「カオスは、ある者を封じているからです。それは…」
「何か判ったか？アイゼル」

突如後ろから声がする。その声の主がすぐに判ったアイゼルは、冷や汗と共に振り返る。立っていたのは、魔人ノス。

「ノス…」
「アイゼル、一度だけ忠告してやろう。余計な詮索はするな」

そう言いながら、ノスがアイゼルの首に手をかけてくる。アイゼルは身動きが取れない。立場だけでなく、実力でもノスはアイゼルの遙か上を行く。勝ち目がないのだ。アイゼルの首に手を当てながら、静かに、だがはっきりと言い放つ。

「死にたくなかったらな」
「……」

この瞬間、アイゼルの中でノスへの疑惑が確信へと変わる。だが、取れる手段は何もない。見張りを命じていたはずのサテラの身を案じながら、アイゼルはノスが部屋を出て行くまで一歩も動けずにいた。王妃に先の話を続けさせる事も出来ず、アイゼルは大慌てでサテラの元へ向かう。無事でいてくれと。サテラの部屋として使っている一室の前まで辿り着き、その扉を開ける。目の前に広がる光景

に、アイゼルが絶望する。

「んゆー…むにゃむにゃ…」

「人選を…間違えたな…」

サテラは熟睡していた。

第５４話　人類最強の女（後書き）

［人物］

ミネバ・マーガレット
ＬＶ　５５／１００
技能　斧戦闘ＬＶ２

　ヘルマン第３軍副将。一兵卒から現在の地位までのし上がった叩き上げで、力こそ全てという考えから、勝つために手段は選ばない。野心家であり、策略も巡らす頭脳派でもある。部下の事は手駒としか思っていないが、ある種のカリスマ性も持ち合わせているため、彼女に心の底からついてくる部下も多い。現人類最強の女。ルークとは長斧のハルバードで戦ったが、本来は短斧であるトマホークの扱いの方が得意であり、まだまだ手の内は見せきっていない。

タミ・ジョン
ＬＶ　３５／４２
技能　斧戦闘ＬＶ１　剣戦闘ＬＶ１

　ヘルマン第３軍一般兵。ヘルマン人ではないが、ミネバにかつて命を救われた事があり、忠誠を誓っている。ミネバの命令ならばどんな事でも忠実にこなし、実力も高い。ミネバにとっては優秀な手駒の一つ。

アミトス・アミテージ
ＬＶ　１７／４５
技能　剣戦闘ＬＶ１

　ヘルマン第３軍一般兵。軍人としての信念を重んじ、上司であるミネバの方針には納得がいっていないが、軍に入って日の浅い彼女は進言できるような立場にはない。

チルディ・シャープ
ＬＶ　１５／４４
技能　剣戦闘ＬＶ２
　リーザス親衛隊に内定が出ている少女。目の前で繰り広げられたルークとミネバの戦いに魅せられ、ルークが所属しているのであればとリーザス軍入りを決める。女性最強を目標としており、自分を倒したミネバに対抗心を燃やしている。出会いが悪かったため、レイラの事は下に見がち。普段から優雅に振る舞っているため、周りの者はそうと気がつかないが、努力家である。

第５５話　長い一日の始まり

―オクの町　司令部―

「皆のもの、リーザスはもう目の前じゃ。おそらく次が最後の戦。気を引き締めていくのじゃ」

「リーザス城…自分たちの城に攻め込むとはおかしなものですね」

オクの町の司令部では最後の侵攻戦に備え、作戦会議が行われていた。ノースとサウスは位置が離れており、どちらかに司令部を置くともう片方の守りが手薄になる。そこで、少し下がる事になるがどちらにも対応できるオクから司令部は動かさないでいた。守りに対応できるメリットの他に、ノース側とサウス側、どちらからリーザス城に攻めてくるか判りにくいという利点もある。

「ゲリラ軍を加え、怪我の治療も進んでいる今、私たちの兵力は８０００」

「対するヘルマン軍は、斥候の報告によりますと、トーマとミネバの率いる部隊が数百人。それとモンスター部隊じゃ」

「モンスターの数は不明ですわ。強力なものが多数存在すると報告が入っていますが、それでも私たちの方が圧倒的に数では上回っているでしょう」

マリア、バレス、真知子が順に報告していく。数で圧倒的に上回っている現状、モンスターが多少いたところで戦況は変わらないだろう。恐いのは、魔人の存在。報告を聞いたランスが椅子にふんぞり返りながら口を開く。

「ふん、楽勝だな」
「ただ、リーザス城は天涯の要塞ゆえに、数倍の兵力で攻め込んでも苦戦すると思われます」

サカナクの進言したとおり、今回は城攻め。単純に進軍したら、思わぬ痛手を受けるだろう。だが、ランスがそれを一蹴する。

「がはは、城の一つや二つ、俺様に掛かったらちょちょいのちょいだ」
「いくらリーザス城とはいえ、これだけの戦力差であれば問題はないはずじゃ」
「耄碌したな、バレス！その考えは甘いぞ！」

バレスがランスに賛同した瞬間、怒鳴り声を上げながら、司令部に一人の老兵が入ってくる。ランスがレイラに尋ねる。

「誰だ、このじじい？」
「なっ！？このワシを知らんじゃと！これだから最近の若いもんは…」
「悪いな、俺も知らない」
「ぷっ…」
「ぬぅぅ…ワシはかつてリーザスにその人ありと恐れられた猛将！」
「なるほど、アルト・ハンブラか」
「違ぁぁぁう！」

ルークの言葉に志津香が吹き出し、目の前の老兵が自分の武勲を語り始める。猛将と言われ、先代赤の軍将軍の名前を出したルークだが、どうやら違っていたらしく、目の前の老兵は更に怒りを増す。エクスが見かねて紹介をする。

「この方は先代白の軍将軍のペガサス様です。僕の前任者ですね」
「ああ…いたような気がするな、そんな将軍が…」
「ふん、勉強不足も甚だしいわ！」
「ペガサス様。甘いというのは？」

メナドの問いかけにペガサスが自信満々に答える。

「うむ、お主らはリーザス城の守備を甘く見過ぎじゃ。ノースの付近でゲリラ活動を行っていたワシらは、ヘルマンの奴らが城に敗走していくのを見て、城に攻め込んだ。だが、奴らは城壁に多数の兵器を配備しており、ワシらの１０００を越えるゲリラ軍は全滅。なんとかワシだけここまで逃げて来たのじゃ」
「お前だって敵を甘く見て、攻め込んで全滅したんじゃないか。自分の事を棚に上げて、何が甘く見過ぎじゃ、だ。このクソジジイが！」
「ぐっ！」
「ふっ…」
「ですが…１０００の部隊を圧倒するとは…ノース側にある東の城壁から攻めるのは得策ではありませんね…」

ランスの言葉にペガサスが苦虫を噛みつぶしたような顔をし、エクスが口元を隠しながら笑う。しかし、１０００の部隊が全滅したのは事実。リックの言葉にペガサスが乗っかる。

「その通り！流石は赤い死神じゃ。ここはサウス側にある表門から攻め込むべきじゃ！」
「このじじいの言葉は信用できるのか？」
「何を言うか！あの重い防御兵器を配置替えする事は容易ではない。軍を整え、すぐにでも進撃すれば…」
「それは得策ではありません」

ペガサスの言葉を遮るように、また新たな人物が司令部に入ってくる。

「おっ、美少女！…んっ、違う。こいつ男じゃないか！」
「案内ありがとうございます、もこもこさん」
「えへへ、お礼に今度一緒に出かけてね」
「お主は？」

司令部まで連れてきてくれた女学生に礼を言う人物。ランスが一瞬反応するが、がっかりした様子ですぐに椅子に座り直す。その美貌から女性と勘違いしそうになるが、れっきとした男である。バレスの問いかけにその男が答える。

「僕はカーチス・アベレンと言います」
「天才学生カーチスね。そういえば学生たちで組んだゲリラ軍を指揮していたんだったわね」
「そんな、天才なんかじゃありませんよ…」

メルフェイスの言葉に謙遜するカーチス。彼はまだ１５歳でありながら、大学院に在籍。現在首席であり、今年卒業予定の人物だ。卒業後の進路に国立大学や魔法軍、果てはゼスからもスカウトが来ている紛れもない天才。

「で、そのオカマのかまチスが何のようだ？」
「…好きでこんな顔しているんじゃありません。それで、表門から攻めるという事でしたが、それは難しいと思います」
「どういう事だ？」

ルークの問いかけにカーチスがはっきりと答える。

「僕はサウス方面でゲリラ活動をしていましたが、ヘルマン軍は表門の方にも城壁沿いに防御兵器を配備。また、デカントなどの巨大モンスターがその周りを囲む完璧な防衛ラインを築き上げていました。無理に突撃しても、表門を開けるのに手間取っている間に、兵の消耗を招くのみだと思います」
「それは手厳しいですね…接近戦に持ち込めればまだしも、城壁から石を投げられたり、火を吹かれたりしたら手も足も出ませんしね」
「貴方のゲリラ軍は？」
「進軍しても無駄と判断したので無理に攻めず、撤退してきました。２００人ほどですが、解放軍に参加させて下さい」
「ほう、被害を全く出さないとは、若いのにやるじゃねぇか」
「全くだ。１０００もの部隊を全滅させたどこかの無能じじいとは天地の差だな」
「ぐぬぬ…」

カーチスの言葉にコルドバが感嘆する。ランスがペガサスを挑発し、それに何も言い返せずペガサスが歯噛みする。

「しかし、ノースとサウス、どちらからの進軍も厳しいとは…」
「何か手はありませんか、エクス殿」
「…どちらか片方に戦力を集中させればあるいは…ですが、被害は相当なものになるでしょうね…」
「ルークは何かないの？」
「そうだな…城壁を破壊するのが厳しいとすれば、それ以外の方法で城に侵入する方法を考える必要があるな。数名が中に侵入し、表門を開ける。そうすれば全軍が突入できるからな。多少防御兵器でやられたところで、城の中に一度入ってしまえばこちらのものだ」
「では、忍者の私が城に潜入を…」

頭を抱える解放軍。志津香の問いかけにルークがそう答える。侵入と聞き、かなみが志願するが、ルークはこれを却下する。

「いや、流石に一人で行くのは危険だ。夜襲したとしても、表門には数人は警護がいるだろうからな。複数人潜入出来ないと意味がない」

「そんな都合の良い方法が…あるのかしら？」

「リーザス城に敵に知られていない秘密の侵入口のようなものは？」

「存じ上げませんね。リア様やマリス様ならご存じかもしれませんが」

「真知子さん、何か情報は？」

「流石にそこまでの機密は…ごめんなさい、ルークさん」

「がっはっは！侵入と聞いて、完璧な方法を思いついたぞ！」

ルークの言葉でピンと来たのか、司令部にランスの笑い声が響く。ハウレーンや黒の三副将は疑わしそうにランスを見るが、バレスが期待の目を向けながら尋ねる。

「おお、ランス殿。して、その方法とは？」

「うむ、その名もゴールデンランス作戦！英雄である俺様に相応しい名前だ」

「センス無いわね…」

「その内容とは？」

ゴクリと息を呑む一同。ランスが自信満々に説明を始める。

「まずは敵に降伏しますと言って巨大なゴールデンハニーをプレゼントする。ＧＯＬＤにしても良し、置物にしても良しのプレゼントに敵は歓喜。喜んで城の中に入れる！」

「はぁ…」

「ところが、ゴールデンハニーの中にはあらかじめ俺様たちが隠れていて、夜になったらこっそりと表門を開けるという訳だ。完璧だ…完璧すぎる」
「そんな馬鹿な…」
キンケードが絶句し、他の者も概ね呆れている。マリアが一応忠告を入れる。
「ランス…敵の司令官も馬鹿じゃないんだから、そんな作戦に引っかからないと思うけど…」
「それに、ゴールデンハニーは貴重なハニー。そう簡単に手に入れる事は…」
「いえ、今なら簡単に手に入れる事は可能よ」
「真知子さん…もしかしてあの事？」
入手の難しさを説くリックに、真知子が言葉を被せる。ランも何かを思い出したような表情になり、ルークが尋ねる。
「心当たりが？」
「先日カスタムの町で巨大なゴールデンハニーの死体が発掘されたの。大きすぎて運び出せないから、軍に協力して貰おうと思っていたところに今回の戦争が始まって、まだそのままにしてあるのよ」
「何と！それはきっと美人の女神が俺様に惚れてこれを使えとプレゼントしたものに違いない！そうなればゴールデンランス作戦で決まりだ！とっととカスタムからゴールデンハニーを運んでこい！」
「早計では！もう少し協議を…」
「ええぃ、それならここにゴールデンハニーが到着するまでもっと良い案が出たらそれでいってやる！」
そう言い放ち、解放軍の下っ端連中にゴールデンハニーの回収に

向かわせ、シィルと共に司令部を後にするランス。解放軍の面々は、何とか良い案を出そうと話し合いを続ける。その時、ルークも席を立ち、司令部を後にしようとする。

「ルーク殿、どこへ？」

「傭兵部隊の状況確認と、セルさんとロゼの手伝いに行こうと思ってな」

「話し合いには参加されないので？」

「そうですよ！ぼく、ルークさんの代替作戦も聞きたいです」

「…俺は別に、そう悪いもんじゃないと思っているんだがな、ゴールデンランス作戦」

「えっ？」

そう言い残して、ルークは司令部を出て行く。驚いた表情をしながら、部屋の面々はそれを見送る。

「それにしても司令部に勝手に人が入って来すぎだろ…見張りは何をしていたんだ？」

出て行く最中、ペガサスやカーチスが次々と入ってきた事に疑問を覚えたルークが司令部前で見張り番をしている女性の顔を見る。見事なまでの熟睡。その顔にルークは見覚えがあった。

「リーザスの牢番か。相変わらず仕事してないな、この娘は…」

「むにゃむにゃ…はんばーがー…」

眠っていたのは、かつてルークたちがリーザスに潜入したときに牢番をしていた女性。リアにクビにされたと思っていたが、なんだかんだで、まだリーザスで働いていたらしい。これはクビにした方がいいんじゃないかと思いつつ、ルークはこの場を後にした。

ーオクの町　教会ー

「よっ、何か手伝える事はあるかな？」
「ルークさん、お忙しい中わざわざ来てくれたんですか？」
「もう仕事なんていくらでもあるわよ。怪我人がボウフラのように沸いてくるからねぇ」
「相変わらずだな、ロゼ」

傭兵部隊の詰め所に先に行ったルークだが、既にセシルとアリオス、ルイスの三人によってしっかりと被害状況やリーザス城侵攻の際の話し合いなどは済んでいたため、怪我人の治療室として開かれている教会にやってきた。セルとロゼが怪我人の世話をしており、かなり急がしそうな状況だ。サウスでみすみす被害を出したルークは多少責任を感じており、こうして手伝いに来たのだ。

「とりあえずこの薬とこの薬を混ぜて、治療薬を片っ端から作っていって」
「ロゼさん、薬の調合は資格を持っていない方には禁止されて…」
「こんな簡単な調合、間違えたりしないって。セル頭固すぎー」
「了解。とりあえず薬を作っていくよ」

ロゼから指示を受け、ルークが手伝いを始める。セルは納得のいっていない様子だったが、怪我人の多さにすぐ教会内を奔走し始める。数時間後、ようやく一段落してきたときに、ロゼが何か気がついたようにルークに尋ねてくる。

「ね、なんか変な感じがするんだけど？悪魔とか魔女とか、それに

連なるアイテム何か持ってない？」
「ん？別に持っていないが？」
「何か感じますか？私は特別何も感じないのですが…」
「普段から悪魔とH三昧だから敏感になっちゃって。ね、道具袋開けて良い」
「なっ！？ロゼさん！貴方にもランスさん同様神の教えを…」
「別に見ても構わないぞ」

セルがロゼに説教を始めるが、全く気にした様子もなく道具袋を漁る。すぐに何かを見つけたようで、ルークにそれを見せてくる。

「あった、これだ。ね、この鏡どこで手に入れたの？」
「ああ、それは烈火鉱山で拾ったものだ。見た事ないアイテムで、気になったんでな」

ロゼが手にしていたのはルークが烈火鉱山で拾った鏡の破片。中に女性の絵が中途半端に描かれているものだ。セルもその鏡を覗き込む。

「…確かに、若干ですが禍々しい気を感じますね。よく気がつきましたね、ロゼさん」
「悪魔とのHも無駄じゃないのよ。セルも一緒にどう？ね、これ預かっても良い？ちょっと調べてみるわ」
「絶対にしません！」
「別に構わないぞ。調査してくれるならむしろ大歓迎だ。頼んだ」
「頼まれましたー。期待しないで待っててねー」

ロゼが鏡を見ながら答える。その鏡はロゼの手の中で妖しく光っていた。

一二日後　オクの町　司令部一

「それでは…ゴールデンランス作戦で決まりという事で…」
「がはは、当然の結果だな！」

結局ゴールデンハニーが届くまでの間ひたすら話し合ったが、良い作戦は思い浮かばず、ゴールデンランス作戦が決行される事になった。マリアが中を徹夜で改造し、ゴールデンハニーの中には七人が入れる隠しスペースが出来上がっていた。

「それでは使者と共にゴールデンハニーを送るんだ。使者は司令官にこう伝えろ。強いヘルマン軍様、逆らってごめんなさい。お詫びの印をプレゼントしますのでどうか仲直りしてください、とな」
「それでは、その役目は自分が承りました」

危険の伴う使者にリックが志願する。メナドやペガサスに止められるが、ある程度地位の高いものが使者に行けば、それだけ降伏の信憑性も増すというもの。ランスがゴールデンハニーの中に入って進入するメンバーを指名する。

「まずは俺様。当然だな。それとシィル、かなみ、志津香、ミリ、レイラさん。それと…」

見事なまでにハーレムメンバーになっていく。だが、最後の一人にランスは男を指名する。

「ルーク、お前も来い」
「…せっかくのご指名だ。張り切らせて貰うかね」

「ふん、せいぜい俺様の代わりに働けよ」

こうして進入するメンバーが決まる。ゴールデンハニーに隠れるため、ランスが司令部を出て行き、ルークたちもそれに続く。そのルークに、かなみが不安そうに話しかけてくる。

「でも…本当に大丈夫なんでしょうか？ハニーから出たらいきなり敵に囲まれてたりとか…」

「そうだな…もしそうなったら…」

かなみに振り返り、少し笑いながらルークが答える。

「俺が命がけで守るさ」

そう言って司令部を後にするルーク。かなみが真っ赤な顔でそのルークを見送る。後ろから、こちらも顔を赤らめ真知子が話しかけてくる。

「今の顔は反則ね…」

「はい…」

「（しまった、見逃した…）」

その心の声は一体誰のものだったか定かではないが、マリアは志津香が悔しそうにしているのを見て不思議そうにしていた。

―リーザス城　ヘルマン軍司令部―

「パットン皇子、リーザス解放軍の使者がやってきました」

「なに、解放軍の奴らが!?一体何の用だ!」
「停戦降伏の申し出だそうです」
「何だと!ふふ、ははは!そうか、遂に私の力に屈服したか!いいだろう、通せ!」
「はっ!」

突然の使者に驚くパットンだが、話を聞き勝ち誇った笑みを浮かべた後、使者を通させる。しばらくして部屋の中にリックが入ってきた。

「使者は赤い死神か!?これは信憑性が出てきたな」
「…我ら解放軍の意志をお伝えします。勇猛なるヘルマン軍に戦いを挑んできましたが、それは我々の過ちでした。ここで許しが得られるのでしたら、停戦並びに降伏をさせていただきたいと思います」
「ははは、そうか!私に降伏すると!やっと自分たちの無謀な行いに気がついたか!よし、いいだろう。降伏を許そう!」
「ありがたきお言葉。私は一旦司令部に戻り、降伏の準備を進めてきます。それと、お詫びの印として我が軍の宝であるゴールデンハニーの死骸をお納めしていただきたいと思い、用意してあります」
「それは素晴らしい!ははは、愉快だ!」
「では自分はこれで…」
「ご苦労、早く降伏の準備を整えておけ」

リックが一礼の後、部屋を後にする。パットンが上機嫌に笑い、周りの護衛兵が次々と拍手してくるが、それまでパットンの面子を立てて口出ししていなかったハンティは進言する。ノスは黙ってその様子を見ている。

「ちょっと待てパットン、怪しすぎるぞ。ここまで来て降伏はおかしすぎる」

「……」
「所詮、反乱軍などこの程度だ。私の敵ではない。ははは！これで、これで皇帝は俺だ！」

ハンティの助言に耳を貸さず、歓喜に震えるパットン。彼は焦っていたのだろう、届かぬ援軍、見捨てられた自分たち、そして、皇帝の座を奪われる事に。だからこそ、信じてしまった。いや、信じたかったのだろう、自分の勝利を。だがこれが、この戦争における最大の悪手となる。

ーリーザス城　ミネバ隊詰め所ー

「降伏だって？」
「はい、ゴールデンハニーの死骸を献上し、停戦降伏を申し込んできたようです」
「…ゴールデンハニーか、なるほどねぇ。無謀だが面白い作戦だ。それで、パットン皇子はどうする気だい」
「申し出を受けるそうです。既に城の中にゴールデンハニーが運ばれ、我々の部隊から数名警護に向かえとのことです」

部下からその報告を受けて、ミネバが爆笑する。タミは無表情で後ろに控えている。

「受ける、受けるのかい！馬鹿もここに極まれりだ！…警護だが、誰も行く必要はない」
「はい？」
「無駄だって言ってるんだよ。今更パットンに恩を売ったところで、何の意味もない」

「恩を…売る…？」
「気がついてないならお前も無能って事さ。こうなってくると、先の戦で被害を受けたのが効いてくるねぇ…」

ミネバの言うように、先の戦で傷ついたミネバ隊は城の後方に回されていた。前衛は城の兵力を寄せ集めたトーマ隊とモンスター部隊が守り、ミネバ隊は状況を見て動く遊撃部隊であった。

「くくく、当然状況は見て動くさ。それがどんな行動でも、文句は言わせないよ…」
「……」

一夜　リーザス城　中庭ー

「ところで、レイラさんは何でこの数日落ち込んでいるんだ？」
「ランス様…お酒の件です…」
「うぅ…もうしばらくお酒は飲まないわ…」
「やったな、志津香！仲間が増えたぞ！」
「…馬鹿にしているのかしら、ルーク」

ゴールデンハニーの中に隠れながら、小声で話し合うルークたち。特に疑われる事もなく、中庭まで運ばれ進入は成功していた。後はタイミングを見計らって抜け出すだけ。そうして深夜まで待ち、ゴールデンハニーの中からルークたちが抜け出す。周りにはヘルマン兵の姿は一人も見えない。

「まさか…誰も警護に来ていないのか？」
「私たちの思っていた以上に、司令官は無能だったみたいね」

「がはは、当然だ！俺様の考えた作戦だからな！」
「さぁ、夜明けになる前にさっさと行動しようぜ。時間は限られているんだからな」
「そうだな、では二手に分かれるか。表門を開けて主力部隊を城に誘導する部隊と、リアたちを救出してカオスを手に入れる部隊だ」
「どちらも危険なのは一緒だけど、表門開放の方が敵に会う可能性は高いな」
「聖装備を持つランスと、城の抜け道を知るかなみは救出部隊だな。となると、戦力的に俺とランスは分かれた方が良いから、俺は表門の方だな」
「えぇっ！そんな…」

ルークの言葉にかなみが明らかにショックを受ける。その言葉を受けて、ランスが言葉を続ける。

「では表門はルーク、志津香、ミリ、レイラさんが向かえ。俺様とシィル、かなみはリア救出に向かう」
「まあ、順当かね。それじゃあ、行くとするか」

ルークの言葉に全員が気合いを入れる。決戦を前に、互いに声を掛け合う。

「皆様、お気をつけて…」
「シィルちゃんも気をつけてね」
「腕がなるねぇ…」
「ルークさん、リア様は必ず救出してきます」
「頼んだぞ。城の中での行動はかなみだけが頼りなんだ」
「しくじるんじゃないわよ、ランス」
「それは俺様のセリフだ、馬鹿者！」

最後にルークとランス向かい合う。

「俺様の女たちに傷一つ付けるんじゃないぞ」

「当然だ。その為に俺がここにいる。シィルちゃんとかなみを頼んだぞ」

それだけ言い合い、互いに背を向けて歩き出す。ルークたちは表門へ、ランスたちは地下牢への抜け道がある彫像の前へ駆けていく。

リーザス解放戦の最終決戦は、こうして夜明けを前にして始まった。

そしてこの日は、ルークが今まで生きてきた中で、最も長く感じる一日となる。トーマ、ミネバ、ノス、アイゼル、サテラ、シーザー、残る敵は強敵ばかり。だが、この面々をも上回る強敵が復活を遂げようとしている事に、まだ解放軍は気がついていなかった。

「ジル…だと…」

アイゼルが王妃の部屋を漁り、ある文献を手にしながら呟く。ノスの目的に遂に至ったのだ。胸に宿るは絶望感。アイゼルはすぐに地下牢に駆け出すのだった。

―リーザス城近辺　森の中―

ルークたちが表門を開けるのを待機して待つ解放軍。セルも治療班として参加していた。そのセルにロゼが近寄ってくる。

「セル…まずい事になったわ」

「どうしました、ロゼさん」

「ミリの奴、薬を忘れていったわ…」
「！？」
暗雲は解放軍、ヘルマン軍、その双方の至る所から立ちこめていた。

第５５話　長い一日の始まり（後書き）

［人物］

ペガサス・フォート
ＬＶ　１７／３０
技能　剣戦闘ＬＶ１
　元リーザス白の軍将軍。本人はまだまだエクスに譲る気はなかったが、若干老害となり始めていたため、王に命じられて隠居させられる。リーザスの危機に黙っていられず、ゲリラ軍を率いて立ち上がるが、無茶な特攻に部隊は全滅。自分だけ何とか生き延び、解放軍に合流した。

カーチス・アベレン
ＬＶ　１０／１９
技能　魔法ＬＶ１　神魔法ＬＶ１
　リーザスの天才学生。女顔だがれっきとした男性。本来は戦闘を好んでおらず、将来は研究職に就こうと思っているのだが、リーザスの危機は見過ごせずゲリラ軍に参加。その戦闘力と先見の目から、いつしかゲリラ軍は彼の言う事に従って動くようにまでなっていた。

竹中もこもこ
ＬＶ　１／６
技能　なし
　サウスの町に住む女学生。カーチスを司令部のあるオクの町まで案内した。

リーザス城牢番　（３）
　なんだかんだでクビは免れていた牢番。洗脳が解け、解放軍に参加。相変わらず仕事はしていない。

［都市］

ノースの町

リーザス西に位置する町。町の側に砦を持つなど、高い防衛力を誇る。

サウスの町

リーザス南に位置する町。高い丘の上に位置する町で、経済力、防衛力共に優秀。

第５６話　離反

―リーザス城　表門　内側―

夜明け前のリーザス城表門には、解放軍の夜襲に備えて数人のヘルマン兵が配備されていた。新入りのヘルマン兵が心配そうに同僚に尋ねる。

「なあ、門の警護は俺らだけで大丈夫なのか？」

「解放軍は降伏したんだから何の心配もないだろ？今は明日の勝利記念パーティーの為に人員を割いているからしょうがないさ」

「まあ、もし解放軍が攻めてきたとしても門を開けられる前に応援が駆けつけるさ。いきなり城の中から攻められでもしない限り大丈夫ってもんだ」

「そんなまさか」

「悪いな。そのまさかなんだ」

その言葉にヘルマン兵が後ろを振り返った瞬間、意識が途絶える。ルークに斬り伏せられたのだ。周りのヘルマン兵がざわつく。本来あり得ない、城の中からの奇襲。慌てて武器を取ろうとするが、左右から剣を振るわれる。

「はぁっ！」

「遅いんだよ！」

レイラとミリがヘルマン兵を斬り、その体が崩れ落ちる。最後に残った一人が後ろに下がりながら、目の前に立つ四人の解放軍を見る。

「志津香！」
「任せて！ファイヤーレーザー！」

志津香の放った魔法は一直線に表門に飛んでいく。門の周りに数体いたモンスターを全て吹き飛ばし、それを確認したミリとレイラが門に近づき、左右から押す。徐々に開け放たれていく表門。開かれる門と、迫ってくるルークを見ながらヘルマン兵が絶叫する。

「て、て、敵襲だぁぁぁぁ！！」

その声は城に響き渡り、リーザス城に敵の侵入を知らせる鐘の音が鳴り始める。だが、それにいち早く反応したのはヘルマン軍ではない。

―リーザス城近辺　森中―

「開いたぞ！突撃じゃぁぁぁ！」
「ルーク殿たちの活躍、無駄にするんじゃねぇぞ！」

門が吹き飛ばされるのを確認し、森に潜んでいた解放軍が一気に城に雪崩れ込む。ランが後方に待機している部隊にも狼煙を上げて合図し、解放軍の全戦力がここに集結する。城の内部で戦う者、外でモンスターや防御兵器を破壊する者、想定外の襲撃にヘルマン軍の指揮系統は一気に混乱する。解放軍の奇襲はすぐにトーマの耳にも届く。

「奇襲だと！馬鹿な！」

「どうやら敵はゴールデンハニーの中に潜んでいたようです！」
「くっ…ミネバ隊に警護を任せていたはずじゃが、やられたのか！？」
「判りません！現在、指揮系統は完全に混乱しています」
「ええぃ、ワシも出る！まだ表門を破られただけじゃ。建物の中には入られていない！パットン皇子の為、何としても死守するのだ！」
「はっ！」

トーマ隊が大急ぎで戦場に出る。トーマを中心とした側近たちが城の入り口を固め、建物の中への進入は断固として死守する。他の隊員は城の至る所に散らばり、解放軍に立ち向かう。ヘルマン兵やモンスター部隊などとの戦いがリーザス城内の至る所で起こっていた。ルークたちも部隊に合流し、ヘルマン軍と戦い始める。

「真空斬！」
「うわぁぁぁっ！」

剣戟が乱れ飛ぶ中、ルークは城の内部に潜入したランスたちの事を考える。リア王女の救出とカオスの奪還。どちらも勝利には必要不可欠だ。成功を祈りながら目の前の敵を次々と斬り伏せていく。その時、こちらにロゼとセルが駆けてくるのが見える。

「ロゼ、セルさん！どうしてここに？ここは最前線だ、もう少し後方に…」
「ね、ミリはどこ？一緒じゃないの？」
「いや、部隊と合流後すぐに別れたが…どうかしたのか？」
「それは…」
「…セル、この際だからルークには話しておきましょう」
「…判りました。ルークさん、お願いがあります。実はミリさんは…」

ーリーザス城　地下牢ー

地下牢に捕らわれているマリスは異変に気がついていた。どうも上が騒がしい。何かあったのだろうか。その時、牢の前に三人の男女が立っている。その先頭に立つのは、見慣れた顔の忍者。

「マリス様、ご無事ですか！かなみです、今拘束を解きます！」
「かなみ…それに、ランス様も。来て下さったのですね…貴方様の勇気に感謝します」
「当然だ、俺様は英雄だからな。美女の頼みはなるべく聞くようにしているのだ！」

ルークたちと別れた後、ランスたちは彫像の下に隠されている隠し通路を使って城の中に潜入。通風口を通って地下牢までやってきたのだ。かなみがマリスの拘束を外し、自由の身となるマリス。一瞬安堵の表情を浮かべるが、すぐに表情を引き締める。

「リア王女はすぐ側の拷問室にいらっしゃいます。すぐに救出へ…」
「ランス様、行きましょう」
「うむ！」

マリスに連れられ地下牢の先へと進んでいく。すぐに拷問室まで辿り着くランスたち。そこでは壁に拘束された状態で、拷問官サヤの鞭を受けているリアの姿があった。サヤがすぐにランスたちに気がつく。

「何者だ！…マリス！？お前らが解放したのか！？」

「きゃー、ダーリン！」
「がはは、愛と正義の大英雄、ランス様参上！」
「その助手、シィル！」
「こら、お前は奴隷だろうが！」
「リア様、助けに来ました！」
「リア様、もうご安心下さい」

ランスたちの登場にリアが歓喜の声を上げ、サヤが戸惑う。

「警備兵は何をやっている、どうしてこんな奴らが…」
「さあ、リアを返して貰おうか！抵抗するならイヤっていうほど犯してやるぞ！」
「そうだ、そうだ！ダーリンやっちゃえ！」
「ちっ、こうなれば…」

サヤが拷問用の鞭を構えてランスに対峙する。

「ほう、やる気か？」
「サヤの鞭は痛いわよ！」

鞭で風を切りながら、サヤが自信満々に言い放った。

―リーザス城内　中庭―

「火爆破！」
「白冷激だおー！」

リーザス城中庭、モンスター部隊に魔法を放っている志津香やア

スカの声を少し遠くに聞きながら、ミリはサイクロナイト三体と対峙していた。モンスターとしては強い部類に入る相手に、奥まった場所で若干孤立してしまっていたミリは、三体からの攻撃を一人でギリギリ持ち堪えていた。

「流石に分が悪いな…誰か！加勢に…ごほっ…」

流石に厳しいと悟ったミリが助けを呼ぼうとするが、咳き込んでしまい大声を出せなかった。その隙を突き、サイクロナイトが突進してくる。無防備な状態で直撃し、吹き飛ばされる。

「ぐぁっ…ごほっ…ごほっ…ちきしょう…」

地面に倒れ込み、尚も咳き込みながら、サイクロナイトを睨み付ける。先頭のサイクロナイトがこちらに近づきながら剣を高々と振り上げる。アリスソードを握る手に力が入らない。ミリが歯噛みをしながら呟く。

「ふざけるな…俺はまだ…死ぬ訳には…」

ブォン、と風を切る音が聞こえ、剣がミリに振るわれた。だが、その剣先がミリに届くより早く、サイクロナイトの右腕が斬り落とされた。

「！？」

驚いた様子で剣が振るわれた右を見るサイクロナイトだが、直後今度は体が一刀両断される。ミリは見る。立っていたのは解放軍の中で、ミリが最も頼りにしている男、ルーク。向かってくる二体のサイクロナイトを一瞬の内に斬り伏せる。自分が苦戦していた相手

をこうも簡単に倒された事にため息をつきながら、ミリはルークに礼を言う。

「すまないね。でも、もうちょっと苦戦してくれないと俺の立場がないんだがな」

「ミリ…」

軽口で礼を言ったミリだが、ルークが真剣な表情でこちらを見てきて、口を開く。

「いつからだ…いつから病気だった？やはり烈火鉱山の時に感じた違和感は本物だったんだな」

「！？」

ルークの発言にミリが目を見開くが、後ろからセルとロゼが駆けてくるのが見える。それで全てを察したミリが、セルとロゼに文句を言う。

「黙っていてくれって、言っておいただろう…ごほっ…」

「殺されかけておいて、馬鹿言ってんじゃないわよ」

「ミリさん、薬です」

ロゼがミリを見下ろしながら言い放ち、セルが薬を渡す。その薬を右手で受け取り、小瓶の中から錠剤を飲み込む。ルークが更に問いかける。

「何故言ってくれなかった。知っていれば最前線には…」

「それじゃあ…困るんだよ…」

「…困る？」

「俺が最前線にいないってのは、誰が見たっておかしいだろ。そん

なことしたら、ミルに感づかれちまう…」
「ミリさん…」
「妹にだけは…心配かけたくないんだよ…」
「だが、病気は大丈夫なのか？」
「自分の体だから判るさ。今すぐ命がどうこうっていうものじゃない…」
「ロゼ、セルさん。ミリの病気は何なんだ？」

ルークのその問いかけに、セルが首を横に振る。

「判らないんです。病院でも見て貰いましたが、未知の病なんです。薬もいくつか試して、若干効果があったものを取って貰っているだけでして…」
「でも、すぐに命に別状はないってのは本当よ。数年後は判らないけどね。確実に体は蝕まれているわ」
「……」
「ルーク、頼みがある。この事は、胸に仕舞っておいちゃくれないか？妹に心配かけたくない気持ち…あんたなら判ってくれるだろ…？」
「お姉ちゃーん！」

ミリがルークに懇願する。すると、ほぼ同時に魔法部隊が戦っていた方角からミルが駆けてくる。魔法部隊の戦いが一段落し、ミリの姿が見えたため近寄ってきたのだろう。だが、ミリは気まずそうに近寄ってきたミルを見ている。倒れているミリを不思議そうに見ながら、ミリが手に持っていた小瓶を指さしてミルが尋ねる。

「お姉ちゃん、大丈夫？何で倒れているの？それにその瓶は…」
「いや、これは…」
「ミル…」

「ん？ルーク、どうかした？」

言いあぐねるミリだったが、隣からルークが真剣な表情でミルに話しかける。ミルも何事かとルークの方を見る。

「お前…解放軍に参加していたのか…？」
「ひどっ！何言ってるの、カスタムからずっといたじゃない！確かにルークたちとはすれ違い気味だったけど、ラジールでもレッドでもテラナ高原でもあんなに頑張ってたのに！テラナ高原での幻獣さんの大活躍、見てなかったの！」
「すまん、全く記憶にない」
「る、ルークの中年！おじさん！」

ミルがぷんすかと怒り、ルークが頭を掻く。場の空気は一変し、瓶の事は忘れてしまったようだった。ミリが立ち上がり、ミルの頭に手を乗せながら言う。

「俺はちゃんと見ていたからな、ミルの大活躍」
「えへへ、お姉ちゃん大好きー」
「ほら、志津香たちが呼んでるぞ。部隊に戻っておけ」
「あ、うん。じゃあまた後でね。お姉ちゃんたちも気をつけて」

そう言い残して部隊の方に戻っていくミルの背中を見送りながら、ミリがルークに向かって呟く。

「ありがとな、黙っていてくれて。それにしても煙に巻くのが上手いねぇ…それで何人の女を泣かしてきたんだか…」
「礼を言うなら礼だけにしろ、全く…」
「悪い、悪い。とにかく、俺の事は放っておいてくれ。治療法は自分でなんとかしてみせるさ…」

「放っておく気はないぞ」

その言葉にミリがルークの顔を見る。

「俺も全力で治療法は探してみせる。お前を死なせはしない」

「お節介だねぇ…」

「性分でな。とりあえず、無理はするなよ。ロゼ、前科持ちを見張っておいてくれ」

「りょーかい」

この場にロゼを残し、ルークがセルを連れて戦場に戻っていく。目指すのは最前線である城の入り口前。その背中を見送り、ロゼにヒーリングを受けながら、ミリが小さく呟く。

「本当に…いい男だねぇ…志津香たちが惚れた理由も判るってもんだよ」

「ほらほら、志津香が聞いたら後が恐い事言ってないで、今は治療に専念しなさい。それと、バラされたくなかったら、後で口止め料ね」

「げっ…」

―リーザス城　地下牢―

「うぅ…強い…」

「がはは、相手にならん！」

威勢よく戦いを挑んできたサヤだが、ランスに一撃で叩きのめされていた。どこからあの自信が沸いてきていたのか、はなはだ疑問

である。ランスがじりじりと近づいていく。

「がはは、ではお仕置きを…」

「待って、ダーリン！この女はリアに任せて。拷問の恨み、たっぷりとお返ししてやるんだから！」

「なんだ？俺様はこれからお楽しみを…」

「それなら後でリアがたっぷりしてあげるから。ねっ、お願いダーリン」

「ちっ、しょうがないな。今回だけだぞ」

「やったー！ダーリン大好き！」

リアがランスに抱きつき、シィルがその光景を悲しそうに見ている。怯えるサヤに冷たい視線を送りながら、サヤが持っていた鞭を手に取り床に振るう。風を切る音がサヤのものとは明らかに違う。

「さて、一国の王女を虐めてくれたお礼をたっぷりとしてあげなきゃね。二度とお痛の出来ない体にしてあげるわ」

「ひっ…」

「ただの拷問好きと…本物の違いを教えてあげるわ…くす」

かつて何人もの少女を拷問死させたリアの本領発揮であった。地下牢に悲鳴が響き渡り、十数分後、ランスたちはカオスの封印されている間を目指して地下牢を後にする。その数分後、ランスたちと入れ違いでアイゼルがやってくる。カオスの秘密を知るリア王女とマリスの身柄を確保し、解放軍の手に渡らないようにするためだ。だが、そこにリアたちの姿はなく、部屋に残されていたのは悦楽の表情で痙攣するサヤだけであった。

「まずいな…このままでは…」

すぐに引き返し、アイゼルもカオスの封印されている間を目指す。
何としてもカオスの封印を解かせる訳にはいかない。恐れているのはカオスそのものでなく、それが封じている者。

―リーザス城　入り口前―

「ぬぉおおおおっ!!」
「ぐあっ!」
「何という力…」
「くっ、属性パンチ・炎!大丈夫ですか、サカナク殿!」
「ほう、見事!」

リーザス城の建物の入り口の前でトーマが鉄球を振り回し、押し寄せるリーザス兵を次々と打ち倒していった。周りに控える部下も既に二十人を切っている。周りを囲むのは黒の軍と赤の軍。そして、一部の傭兵部隊と魔法部隊だ。数では圧倒的に勝っている余裕から、勇猛果敢に正面から掛かっていったサカナクだったが、あえなく鉄球に吹き飛ばされる。意識が朦朧とする中で追撃を受けそうになっていたが、アレキサンダーが鉄球を弾き、トーマがその姿に感嘆する。

「トーマ、いい加減諦めろ!お主の…いや、儂らの時代はもう終わったんじゃ!」
「そんな事は百も承知!これからは若い者の時代じゃ!だからこそ、ここでパットン皇子をやらせる訳にはいかんのだ!!」
「炎の矢!」
「ふんっ!」

バレスの忠告に頷きながらも、トーマが攻撃の手を緩めることはない。志津香の放った炎の矢を左腕で撃ち落とす。先程火爆破の直撃を食らったときも、何事もなかったかのように立っていた。恐るべきはその耐久力。流石は老いた今でも人類最強と呼ばれている猛将という事か。圧倒的な力に、数で勝っているはずの解放軍が気持ちで押され始める。そんな中、リックが一歩前に出る。

「赤い死神か！」

「リーザス城での決着がまだでしたね。自分とやり合ってはいただけませんか？」

「リック将軍！一騎打ちを挑むつもりですか！？」

「いえ…トーマ将軍は広範囲に攻撃できる武器を持っている事ですし、下手に力の足りない者が一緒にかかれば、リックの邪魔をするだけかもしれませんね」

メナドが驚いた様子でリックに叫ぶが、エクスがそう分析し、一騎打ちを肯定する。勿論、危なくなれば加勢に入るつもりではあるが。

「ふむ…そうじゃな。少し待っていて貰えるかの、赤い死神」

「待つ？」

「お主よりも気になる者が二人いてな。一人はランスという小童。今この場に姿が見えないのが残念じゃが…」

「ランス殿ですか…」

「トーマに興味を持たれるとは…流石ランス殿」

「そして、もう一人は…そこの若造。貴様、先程から随分とワシの部下を斬ってくれたな！」

トーマが近くで戦っていた一人の冒険者に鉄球を向ける。その冒険者は目を瞑りながらぶつぶつと言っていた。

「若い…久しく聞いていなかった良い響きだ…」
「ほら、ご指名よおじさん！」

ドンと志津香に背中を押されて、トーマの方に一歩出る。その冒険者はルーク。その顔を見ながらトーマがはっきりと言う。

「貴様の強さに興味がある。ワシと一騎打ちをして貰いたいのじゃが」
「ほう、人類最強からご指名とは嬉しい限りだな」
「という訳じゃ。決着は少し待っていて貰えるか？赤い死神よ」

前に出てきたルークと対峙しながら、トーマがリックにそう言ってのける。それを聞きながら、ルークが静かに笑う。

「悪いが、その約束は果たされんぞ」
「何？」
「随分と余裕だな。俺に負ける心配はゼロか？」

そう言いながら剣を構える。戦う者でその名を知らぬ者無しとまで言われている人類最強に、目の前の若造はそう言ってのけたのだ。

「ワシに勝てるとでも？」
「厳しい勝負ではあるが、負けるつもりはないな」

驕っている訳でも、実力が見抜けない訳でもない。目の前の若造は、純粋にお互いの実力を推し量り、確かな自信を持ってそう言う。トーマの口から、自然と笑みがこぼれる。

「気に入った！ヘルマン第３軍将軍、トーマ・リプトン！全力で行

かせて貰う！」
「キースギルド所属冒険者、ルーク・グラントだ！ここで越えさせて貰うぞ、人類最強！」

周囲で解放軍とヘルマン軍の戦いが続く中、互いに笑みを浮かべ金属音が鳴り響いた。

ーリーザス城　最上階　ヘルマン軍司令部ー

「くそっ…奴らめ、この私を謀ったな…何と卑劣な…」

先程ゴールデンハニーの中に敵が潜んでおり、現在城の中で戦が起こっている事を聞いたパットンは苛立ちを隠せずにいた。更に新たな報告を持ってヘルマン兵が司令部に駆けてくる。

「現在、トーマ将軍が騎士団を引き連れて城の入り口前で防戦。黒髪の剣士と戦っています。ですが、敵の数が多すぎます。ここに来るのも時間の問題かと…」
「おい…本当かよ…」
「俺たちもやばいんじゃないか…」

その報告に護衛兵がざわつく。パットンもその場に膝をつき、頭を抱える。

「おっ…な…なんてことだ…」
「パットン、お前はよくやったよ。今回はここまでだ。一時撤退するよ。カラーの森になら、あたしの口利きで身を隠せる」

パットンの肩に手を置いてそう言葉をかけるハンティ。だが、パットンはその手を振り払ってノスの方を見る。

「い、いや、まだだ！まだ私には魔人たちがいる！戦いはまだこれからだ！」

「そ、そうだ…俺たちには魔人の力がある」

「……」

その言葉に護衛兵も沸き立つが、ハンティは難しい顔をしながらノスの方を見る。

「ノス、お前の力を私に見せてくれ！今すぐリーザスの奴らを皆殺しにしてくるのだ！」

「……」

「ノス！」

「ふむ、どうやらお前は、もう利用価値がなさそうだ」

「な、なにぃ！」

そう静かに言い放つノス。パットンの目が見開かれ、護衛兵は呆然としていたが、ハンティが瞬時に身構える。

「間もなくカオスの封印は解ける。私の計画通りだ。パットン、もうお前の役目は終わった」

「ノス、気でも狂ったか！この私にそのような口の聞き方…」

「くくく、本当に魔人を利用できるとでも思っていたのか。本当におめでたい奴だ」

「裏切るつもりか！」

「元々、仲間であったつもりもないのだがな」

「ようやく本性見せたようだね」

「後は貴様らで自由にやっていろ」

そう言い残し、ノスが部屋から出て行こうとする。そのノスに向かって、パットンが笑みを浮かべながら言い放つ。

「忠告したはずだぞ、ノス。私に歯向かうなとな！」
「ほう、貴様如きで私を倒すつもりか？」
「周りを見てものを言うんだな！」

パットンが右手を挙げる。すると部屋の四隅にあったカーテンが上げられ、そこには四つの結界志木が立てられていた。それは紛れもない、セルがサテラを封じようとした際に用いたものと同じ。

「ノス、私を裏切った罰だ。永遠に時空の狭間を彷徨え！ハンティ、封印しろ！」
「ワルヤテジ閉テシ間空ノ遠永カンナ物魔イ悪…魔封印結界！」

ハンティが呪文を唱えると、結界志木から強力な魔法が放たれ、ノスの体を包む。ノスの動きがぴたりと止まる。

「どうだ、苦しいだろう！」
「…この程度で私を封印するつもりとは、愚かな」
「なにぃ！？」
「ふん！」

ノスが気合いを入れて手を振ると、四本の結界志木は吹き飛び消滅した。拘束から解かれるノス。

「ば、ばかなぁ…」
「サテラやアイゼルだったら封印できただろうがな…私は奴らとは格が違うぞ」

「ちっ！火炎流石弾！」

咄嗟にハンティが魔法を放つ。通常の魔法使いでは放つ事の出来ない超上級魔法だ。ノスの体が炎に包まれる。が、すぐに炎の中から手が出てきて、近くにいた護衛兵の頭を握りつぶす。ノスは全くの無傷であった。

「ぎゃぁぁぁぁ！」

「ふむ、中々に強力な魔法を使うカラーのようだな」

「ば、化け物だ。うわぁぁぁぁ！」

仲間の死に恐怖を思えた護衛兵小隊長のアイザックが、悲鳴を上げながら逃げ出す。他の数名もそれに続き、司令部を出て行ってしまう。

「お、お前たち！」

「ははは、良い部下を持ったではないか」

「くっ…」

「残るはお前たちだけだ。貴様のような無能は、死んだ方が良いな」

「や、やめろ…来るな…」

ノスが一歩ずつパットンに近づいてくる。怯えながら壁へと下がっていくパットン。その間に、ハンティが即座に割り込んでくる。

「パットンはやらせないよ！」

「邪魔をするな…女！」

ハンティが次々と魔法を繰り出すが、その全てが無敵結界に阻まれる。そのままハンティの腹に強烈な一撃を叩き込む。

「ぐぁっ…」
「ハンティ！貴様ぁぁぁぁ！！！」
「ほう、向かってくるだけの気概はあったか…」

崩れ落ちるハンティの姿を見たパットンは、かつてトーマに譲り受けた名剣スターブラスターを抜き、単身ノスに立ち向かう。その姿に一瞬驚いたノスだが、静かに笑いながらパットンに対峙する。

「だが…あまりにも無力」
「うぉぉぉぉ！」

ーリーザス城　二階ー

「だめだ、一階は魔人直属のモンスターが…うわぁぁぁ」
「に、二階だ！二階の窓から飛び降りるんだ！」

パットンを残し逃亡した護衛兵だが、魔人の命令しか聞かないモンスターに次々と殺されていき、アイザックともう一人の部下を残すのみであった。二階の窓から城の後方へ飛び降りる二人。その下にはミネバ隊が待機していた。既に戦闘が激化している中、遊撃に出る事もせず後方で待機していたのだ。飛び降りてきた二人を不思議そうに見るミネバ。

「なんだい、護衛兵の奴らじゃないか。上で何かあったのかい？」
「ま、魔人が裏切りました。上ではハンティ様が残りパットン皇子を守っていますが…化け物です。生き残れるはずがない！」
「で、逃げて来た訳かい。…そうかい、魔人がねぇ」
「すぐにトーマ将軍にも知らせないと！」

「いや、知らせる必要は無い」
「は?何を言っているんですか、すぐにでもトーマ将軍に知りゃぴゃ!?」

ミネバの言葉に反論したアイザックの部下が、瞬時に頭をかち割られる。その光景に目を見開くアイザック。

「察しの悪い奴は嫌いだよ。あんたはどうする?」
「わ、私はトーマ将軍に報告など行きません!」
「良い子だ。お前たち、撤退するよ!」

そう部隊の者に言い放つミネバ。タミのように心からミネバに使えている部下たちは黙っていたが、そうでない者たちが若干ざわつく。

「て、撤退って、パットン皇子を見捨てるんですか!?」
「もう助かりゃしないよ。そうなったら、これはもうヘルマン軍の戦じゃない。魔人とリーザスの争いだ。そんな関係ない戦いに巻き込まれるなんて馬鹿みたいじゃないか。えぇ?」
「しかし、どこから撤退を…」
「タミ!」

ミネバの言葉にタミが城の後方にある城壁の前に積んであった木材をどかす。そこには人が通るには十分な大きさの穴が開いていた。

「後ろはがら空きなんだよ。さあ、行くよ!とりあえずはまだ確認しなきゃならないことがあるから、ひとまず後方の丘を目指すよ!」
「トーマ将軍は…」
「残りたい奴は勝手に残りな!だが、確実に死ぬよ」
「うっ・・」

こうしてミネバ隊は解放軍にもヘルマン軍にも、そして魔人にも気がつかれる事無くリーザス城から撤退する。ただでさえ数で圧倒されていたヘルマン軍は更にその数が減り、最早勝ち目は無くなっていた。そして、それとほぼ同時に、最上階の司令部から微かに聞こえてきていた戦いの音が止んだ。暗雲は、ますます立ちこめていた。

第５６話　離反（後書き）

［人物］

リア・パラパラ・リーザス　（３）
ＬＶ　２／２０
技能　なし
　リーザス国王女。ヘルマン軍に捕らえられ激しい拷問を受けていたが、最後までランスの事を口にはしなかった。ランスにより救出され、共にカオスの間を目指す。

マリス・アマリリス　（３）
ＬＶ　３０／６７
技能　神魔法ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス国筆頭侍女。リアと共に激しい拷問を受けていたが、頑として口を割らなかった。ランスの手によって救出された今、頼りになる戦力である。

ミル・ヨークス　（３）
ＬＶ　１６／３４
技能　幻獣召喚ＬＶ１
　カスタム四魔女の一人。ミリの妹。カスタム魔法軍に所属し、各地の戦いで奮戦。幻獣で敵をばったばったと倒していたが、その姿を見ていた者は少ない。

［モンスター］

サイクロナイト
　甲冑に身を纏ったモンスター。攻撃、防御共に優れた強敵。

［技］

火炎流石弾

炎属性の最上級魔法。本来は二人がかりで放つ魔法だが、四本腕のある術者や、一部の魔法ＬＶ３の使い手ならば一人で放つ事も可能。その威力はゼットンをも凌駕する。

［装備品］

スターブラスター

パットンの持つ名剣。若い頃、トーマから稽古を受けていた際に譲り受けた。が、パットンでは上手く扱い切れていない。自分でもその事はよく判っており、歯がゆく思っている。

第57話　トーマの意地

―リーザス城　封印の間―

「おい、ここがカオスの隠されている封印の間なのか？」
「はい、ダーリン。ここにカオスが隠されているの」

リアとマリスを解放したランスたちは、リーザス城内の端に位置する小さな建物の中までやってきていた。普段は王家の者しか入れない神聖な間と言って何人も入れないようにしている部屋だ。だが、中には特段変わったものはなく、部屋の中央に祭壇のようなものがあるだけだ。奥に続く扉もなければ地下への階段も見当たらない。当然、カオスなど影も形もない。シィルが部屋の中を見回しながらマリスに問う。

「何もないみたいですけど…」
「いえ、ここがカオスを封印している間への入り口です」
「そもそもカオスとは一体何だ？かなみの無能が全く知らんから、魔人を倒すのに必要なものとしか聞いていないのだぞ」
「む、無能って…ランス！」
「カオスというのは自らの意志を持った魔剣です。魔人をも斬り裂く強いパワーを秘めています」
「なるほど、やはり剣か」
「魔剣カオスは世界最強の剣に違いありません。これと対抗できるのは、聖刀日光だけです」
「がはは、ならばさっさと手に入れて魔人をぶった斬るぞ！」
「きゃあ、素敵よダーリン！」

ランスが上機嫌に笑うが、横でシィルが不安そうな顔をしていた。かなみがその様子に気がつき、シィルに声をかける。

「シィルちゃん、どうかしたの？」

「いえ、どうしてそんな強力な武器を、過去のリーザス王たちは使わなかったのかなと思いまして…」

「そういえば…」

「…確かにおかしな話ですね。歴史上にあるヘルマンやゼスとの戦争において、カオスが使われたという記録は残されていません」

シィルの問いかけにかなみとマリスが考え込む。その疑問にリアが答える。

「リアね、お母さんにカオスは封印してあるから絶対に抜いちゃ駄目だって教わったの。理由は王妃となった際に教えるって言われていたわ」

「やはり何か理由があるのですね…」

「魔剣っていうからには…持った人が邪悪な心に染まってしまうとかでしょうか…」

「がはは、その程度の事ならこの俺様にはきっと通用せんな！」

「そうね、元から邪悪だもんね」

「なんだと、かなみ！」

「あんあん、ダーリン。喧嘩をしないで。とにかくカオスを取りに行きましょう。封印の事は判らないけど、あれがなければ魔人は倒せないんだから」

「そうだな、まずは魔人を倒す必要がある事だし。後の事は後で考える事にしよう。で、カオスっていうのはどこにあるんだ？」

ランスが部屋を見回しながらマリスに尋ねる。マリスは祭壇の方に目を向けながら口を開く。

「リーザス王家の正当なる後継者と、聖装備を持つ者が一緒にあの場所に立たれた時、封印の間への扉は開かれると伝えられています」
「なるほど、簡単じゃないか。俺様とリアがあの祭壇に乗ればいいんだろ」
「あのね、ダーリン。祭壇の上で、二人で愛を誓い合いながらキスしなきゃ駄目なの」
「何!?」
「リア様。お気持ちは判りますが、今は嘘を言っている状況ではありません。一刻も早くカオスの封印を解かねば…」
「リア、貴様嘘をついたな!」
「あーん、ちょっとくらいいいじゃない!」
「ほっ…」

リアが駄々をこねるが結局認められず、安心するシィルの目の前で二人が祭壇に立つ。すると、部屋が一瞬ぐらぐらと揺れ、振動が終わると先程床だった場所に地下に降りる階段が出来上がっていた。それを降りていくランスたち。降りた先の地下には、長い通路が続いており、その地面は黄色く光っていた。ランスが一歩踏み出すが、あまりの熱さにすぐに足を引っ込める。

「おわっち!何だこの床は!」
「これは…光の道ですね。一切の不浄を許さないと言われている結界です。魔の者がこの結界に触れれば、強力なダメージを負います」
「これでは通れんではないか」
「いえ、不浄の無い生まれたままの姿になれば人間は通る事が出来ます」

マリスのその言葉に、ランスの顔がイヤらしいものになる。

「おお！という事はここでみんな全裸にならねばならないのだな！ぐふふ、それは仕方がないな…」
「マリス様…他に手段はないのですか？」
「ごめんなさい、かなみ。この光の道を通るにはそれしか方法がないのです」
「そんな…」

かなみの表情が暗くなる。脳裏に浮かぶのはルークの顔。その時、唐突にリアがかなみに問いかける。

「そういえば、ルークもここに来ているのよね？」
「え、は、はい。一緒に潜入してきて、今は外でヘルマン軍と戦っているはずです」
「そう、じゃあリアとマリスが解放された事を早く伝えた方がいいわね。解放軍の士気も上がるだろうし。ここまで来たら後はカオスの封印を解くだけだし、こっちに人数がいても意味ないわね。かなみはもういいから、ルークにリアたちが解放された事を伝えてきてくれる？」
「リア様…はい、判りました！」

リアの命令を聞き、かなみが嬉しそうにこの場を離れていく。

「おい、余計な事をするな！」
「あん、ダーリン。裸ならリアのを好きなだけ見てから、かなみは許してあげて」
「ちっ、まあいい。さあ、脱げ脱げ。カオスを一刻も早く手に入れなければならんからな！」
「（あれ…？ランス様にしては、随分とすぐに引き下がったような…）」
「（ここまで一緒に旅をしていてかなみに手を出していないなんて、

珍しい事もあったものですね。もしかして、ルーク様に遠慮を…そんな事がある訳ないですね）」

こうしてかなみがルークに報告に向かい、ランス、シィル、リア、マリスの四人は服を脱ぎ光の道を歩いて行く。カオスは目前まで迫っていた。だが、後ろからは魔人が迫ってきている事をランスたちはまだ知らない。それも、二人もの魔人がだ。

ーリーザス城　最上階　ヘルマン軍司令部ー

「大丈夫か、パットン…しっかりしやがれ」

「…ハン…ティ」

先程までの戦いの音が止み、静まりかえった司令部。玉座は壊れ、周りに置いてあった壺や壁掛けの絵も一つ残らず壊れており、以前の司令部とは比べものにならないほど無残な状態であった。部屋の奥ではパットンが全身から血を流し、かろうじて意識を保っている状態。その肩をハンティが支えているが、こちらも全身傷だらけで、満身創痍の状態だ。ノスが二人の正面に立ち、笑いながら見下している。あえてとどめを刺さず、この状況を楽しんでいるのだ。ハンティに支えられながら、パットンが少しずつ言葉を口にする。もう言葉を発するのも困難なのだろう。

「俺は…もう駄目だ…お前…だけでも…逃げろ…」

「馬鹿野郎！そんな事出来るか！お前はヘルマンの皇帝になるんじゃないのか！」

「魔人を…仲間に引き入れたのも…解放軍を…侮ったのも…全て…俺だ…」

「とにかくしっかり掴まれ！一緒に跳ぶぞ！」

ハンティがパットンの肩に手を回し、呪文を唱えると、二人の体を白い光が包んでいく。それを見ながら、ノスが口を開く。

「フフッ、カラーの娘よ。逃げたければ逃げるがいい」
「あたしたちをみすみす見逃すつもりか…？」
「その男を連れて、そんな状態で跳べるのならな！」
「……」
「やめろ…ハンティ…こんな状態で…俺を連れて跳べば…異次元に…跳ばされるぞ…」

パットンの言葉に、ノスがニヤリと笑う。ハンティが使う事の出来る瞬間移動は、魔法ＬＶ３相当の超高度な魔法である。その為、自分一人跳ぶだけでもかなりの集中力を要する。そして、万が一失敗すれば異次元に取り残され、二度とこちらの世界には戻ってこられない。この満身創痍の状態で、パットンを連れて跳ぶのはかなり無謀な行為なのだ。ノスが二人にとどめを刺さないのは、この状況を楽しんでいるのだ。

「あたしを信用しな、パットン」
「ハンティ…」

心配するパットンにそう答え、ハンティが呪文を続ける。二人を包んでいた光が収縮していく。

「ははは、パットン。やはり貴様には逃げるのが一番似合っているぞ！」
「くそっ…」
「馬鹿にするなよ、魔人！」

「ん？」

ノスの侮蔑の言葉に、ハンティが睨み付けはっきりと断言する。

「パットンは、必ずヘルマンの皇帝になる男だ。そして、あんたたち魔人がこのまま人類と戦うっていうなら、いつかあんたたちの前に立ちふさがって驚異になる…必ずだ！」

「くくく、身内贔屓というのもここまでくると爽快だな」

「贔屓なんかじゃない。パットンにはそれだけの器がある！」

「……」

ハンティがそれだけ言うと、二人の姿が一瞬で消える。瞬間移動が発動したのだ。ノスが静かに笑いながら、司令部を後にする。目指すはカオス封印の間。ランスたちの後ろからはアイゼル、ノスという二人の魔人が着実に迫っていた。

―リーザス城　入り口前―

「バレス様」

「おお、かなみか。ランス殿たちと一緒にいたのでは？」

「こちらの状況を報告に来ました。リア様とマリス様の救出に成功、お二人とも無事です。今はカオスの封印を解くところです」

「おお、それは真か！」

かなみの報告にバレスだけでなく、周囲の兵たちも沸き立つ。遂に悲願の王女奪還を成し得たのだ。リアの目論見通り、この場にいる者だけでも士気は目に見えて上がっていた

「ところで、ルークさんはどちらに？」
「…うむ、ルーク殿ならあそこじゃ」

バレスが指示した方向、そこには人類最強トーマと一騎打ちをしているルークの姿があった。

「ル、ルークさん！バレス様、何故誰も加勢に入らないのですか！」
「かなみよ、あの二人の間に割って入れるのか？」
「っ…」
「それに、ルーク殿もトーマも一騎打ちを望んでいる。リックやアレキサンダー殿なら割って入れるかもしれんが…二人とも一騎打ちに割ってはいるような者でもないしの」
「そんな…どちらが優勢なのですか！？」
「互角！いや…流石にトーマの方に疲れが見え始めているようじゃ」

ルークとトーマの一騎打ちはまだ続いていた。互いに何度も攻撃を受けており、かなりの手傷を負っている。この状況で先に動きが鈍ってきたのは、人類最強であるトーマの方だった。だがそれも無理はない。トーマはここに至るまで多くの解放軍と戦い、城を死守してきたのだ。ルークの太刀がトーマの腹部を直撃する。鎧に阻まれはしたが、振動は伝わったのか、トーマが胸を押さえながら一瞬苦しそうな顔をする。

「むっ…」
「まだじゃ！まだやられはせんぞ！」

すぐに鉄球をルークの方に飛ばしてくる。それを避けながら真空斬を放つが、手元に戻した鉄球でそれを全て弾く。バレスがトーマに向かって叫ぶ。

「トーマよ！リア王女はすでにこちらが奪還した！もう勝ち目はない、降伏するのじゃ！」
「パットン皇子が健在な限り、ワシは戦いを止める気はない！ぬぉぉぉ！」
「ぐあっ！」
「ルークさん！」

トーマが方向と共に振り回した鉄球がルークを捕らえ、吹き飛ばす。地面に倒れ込みそうになるが、なんとか踏みとどまったルークはトーマにすぐに向き直り、口を開く。

「…流石に人類最強と呼ばれているだけの事はあるな。その状態でまだここまで戦えるとは…」
「それはこちらのセリフじゃ。よもやここまでとは思わんかったぞ…それに、いい目をしている」
「だからこそ解せない。何故あんたほどの猛将が、そんなに焦ったのだ？」
「焦る…じゃと…？」
「魔人と手を組んでリーザスを攻めた事だ。その危険性、あんたなら十分承知していただろう。なぜ皇子を止めなかった！？」
「焦りか…確かにな…だが、貴様には関係のないことじゃ！」
「！？」

トーマが会話を遮るように鉄球を投げてくる。だが、ルークの言葉に半ば挑発された形になってしまったその攻撃は単調極まりないものであった。この隙をルークは見逃さない。それまで何度もトーマの手と鉄球を繋いでいる鎖を斬り落とそうとしていたが、変幻自在なその動きで全て躱されていた。だが、今のこの単調な動きならやれる。ルークが鉄球を躱し、その鎖部分に全力で剣を振り落とす。

「真滅斬！」
「っ…しまった！」

鎖は斬り落とされ、トーマの武器の鉄球は使い物にならなくなる。自分のミスに顔の歪んだトーマだが、ルークは気を緩めることなく一気にその間合いを詰める。

「くっ…舐めるな！」
「甘いぞ！」

トーマが鉄球の持ち手部分を放り投げ、右拳を全力で振るうが、ルークはそれを空中に飛び上がり躱す。そしてそのまま、トーマに剣を振り下ろす。

「貰った、真滅斬！」
「ぬ、ぐぉぉぉぉぉっ！」

ルークの真滅斬がトーマに直撃し、鎧は砕け、血が吹き出る。体をふらつかせながら、トーマは昔の事を思いだしていた。

GI0993
ーヘルマン　帝都ラング・バウー

「トーマ、頼みがあるんだがいいか？」
「どうした、ハンティ？」

職務を終え、家に帰ろうとしていたトーマにハンティが声をかける。意外に思う者も多かったが、国を思う心や互いの強さなどから

気が合い、二人は親友の間柄だった。

「パットンの奴を鍛えてくれないか。皇帝になるものとして、貧弱なのはマズイからな」

「ふむ…だが皇子はまだ5歳。少し早くないか？」

「自分の息子は3歳の頃から剣を握らせているくせによく言うぜ。こういうのは早いに越した事はないからな」

「いいじゃろう。引き受けた。だが…手加減は出来んぞ」

「当然。手加減なんかしてもらっちゃ困る」

トーマがニヤリと笑い、ハンティも無邪気な顔で笑い返す。この日より、トーマはパットンの師匠となった。幼いパットンにとってはあまりにもスパルタな日々が続き、トーマを恐れるようになったが、同時にハンティに次いで信頼の出来る存在になっていった。

GI1000
ーヘルマン　帝都ラング・バウー

「とりゃ！」

「ふっ！」

トーマの目の前ではパットンと、実の息子であるヒューバートの手合わせ稽古が行われている。二人とも甘い動きをしようものなら、すぐにトーマの喝と鉄拳が飛んでくるので、一瞬たりとも気を抜けない。数分後、汗だくになりながら休憩を取る二人の横に、メガネをかけた少年が近づいてくる。

「アリストレス。どうだった？」

「もうすぐ産まれるみたいだ。しかし、パットンが兄とはな…」
「兄って面じゃねぇよな」
「そりゃどういう意味だよ！」

笑いあう三人。今現れたアリストレスは、ボウガンの名手であると同時に、頭もよく回り、ヘルマンでは神童と呼ばれている少年だ。周りからの畏怖や妬みから孤立していた彼を、トーマが先日パットンと引き合わせたのだ。まるで正反対な正確な二人だったが、それが幸いしたのかすぐに意気投合し、いまではヒューバートも加え三人は親友の間柄だった。三人が素晴らしい才の持ち主。他の二人に比べパットンは確かに成長が遅かったが、それでも普通の者に比べれば十分な強さであった。

「さあ、休憩は終わりじゃ。アリストレスも加わっていけ。次は弓の訓練じゃ」
「はい、トーマ様」
「ちっ、俺はアリストレスやヒューバートと違って弓は苦手なんだよな…その顔で弓が得意とか、ヒューバートの奴反則だろ」
「ま、アリストレスには敵わんがな」

その三人の姿を見ながら、トーマはいつしか夢描くようになっていた。いつの日かこの三人がヘルマンの上に立つ日が来る事を。皇帝にパットン、側近にアリストレス、軍を率いる総大将はヒューバート。間違いなく素晴らしい国になる事だろう。だが、トーマは一抹の不安を覚えていた。パットンは妾の子、そして、これから産まれる子は后の子。トーマの不安通り、その後ヘルマンはパットン派とシーラ派で割れる事になる。

LP0001
―ヘルマン　帝都ラング・バウ―

その日、トーマはパットンに内密の話があると言われ、部屋に呼び出されていた。扉を開けると部屋の中には思い詰めた表情のパットンが椅子に腰掛けていた。

「パットン皇子、話とは？」
「トーマ…正直に答えてくれ。今、俺とシーラ、どっちが優勢なんだ？」
「……」
「やはりシーラなんだな…くそっ！」

パットンもすでに２８歳。それにも関わらず皇帝の話がまるで持ち上がらない。それどころか后であるパメラは、明らかに自分の娘であるシーラをヘルマンの女帝にしようと画策しているのだ。最近ではパットンの父親である現皇帝もシーラを跡継ぎにと動き始めているのが明らかで、これまでパットン派であった者たちも次々とシーラ派に寝返り、パットンは焦りを感じていた。

「情けない男だ…シーラは腹違いの俺を兄と慕っていてくれているのに…最近ではあいつの顔をまともに見る事が出来ない…最低の兄貴だ…」
「…ワシらはどんな事になろうと、パットン皇子に付いて行くつもりですぞ」
「それじゃ駄目なんだよ。俺は皇帝にならなきゃ駄目なんだ！これまでの人生を全て否定される事になる！何より…俺を信じてくれている奴ら…ハンティ、アリストレス、ヒューバート、ロレックス、それにトーマ、あんたに顔向けが出来ない！」
「パットン皇子…」

「教えてくれ、トーマ！俺はどうすればいい！」
「……」

ハンティにこの弱気な姿を見せたくなかったのだろう。だからこそ、パットンはトーマを呼び出した。師匠であり、もう一人の父親のように思っているトーマを。だが、トーマはそのパットンの悲痛な表情を見ながら、かける言葉を見つける事が出来なかった。

ＬＰ０００２
―ヘルマン　帝都ラング・バウ―

「聞いてくれ、トーマ！協力者が見つかった！」

パットンが歓喜の表情でトーマに話しかけてくる。ここはパットンの部屋。またも内密の話があると呼び出されたのだが、前回とは対極的なその表情にトーマは驚いていた。

「協力者…とは？」
「紹介しよう。こいつが魔人のノスだ！リーザスを滅ぼす事に協力してくれる事になった。これが成功すれば、シーラ派の奴らも俺を皇帝と認めざるを得ないはずだ！」
「魔人…ですと…」
「……」

ノスが頭を下げてくるのを見ながら、トーマが目を見開く。魔人が人類に手を貸すなど、あり得ない。あまりにも危険すぎる。進言しようとした。この作戦は中止するべきだと。だが、その言葉を発する事が出来なかった。トーマは見てしまっている。パットンの思

い詰めた顔を。それとは対極的な今の表情を。葛藤の中、自分を押し殺し、トーマは膝を折った。

「その作戦、我が第3軍も協力させていただく。我が道は、パットン皇子と共に…」

「トーマ！お前ならそう言ってくれると思っていたぞ！」

これより数週間後、アリストレスの反対を押し切る形でパットンはヘルマン第3軍を率い、魔人の作った魔法の抜け道を通りリーザスに侵攻する。ヒューバートは野党鎮圧のため不在であり、この作戦を知るのはパットンが旅立った後であった。すぐに応援に向かおうとするが、すでにパメラの手により有力な軍人が国外に出る事は不可能になっていた。もしトーマ、アリストレス、ヒューバートの三人が挙ってパットンを止めていたのなら、歴史は変わっていたのかもしれない。いや、せめてトーマが反対していたら、ヒューバートが帰ってくるまでパットンは作戦決行を遅らせていたかもしれない。その後悔がトーマの中にはずっと残っていた。だが、すでに行動を起こしてしまった。ならばこそ、途中で止まる訳にはいかない。それが魔人の手のひらの上であったとしても…

―リーザス城　入り口前―

「ここで止まる訳にはいかんのじゃぁぁぁぁ！」

「！？」

ルークが目を見開く。崩れ落ちると思っていたトーマが、咆哮と共に腰に刺してあった剣を抜いたのだ。口から血を吐き出し、ルークの斬った斬り傷から更に大量の血が噴き出すが、それを気にする

様子もなく、ルークに向かって剣を振るう。

「秘剣、骸斬衡！」

「ぐっ…はっ…」

トーマの放った技の衝撃にルークが吹き飛ばされ、地面に倒れる。

トーマが仁王立ちのまま、ルークを睨み付ける。

「ヘルマンの未来のため、パットン皇子のため、ここでワシが倒れるわけにはいかぬ！」

「トーマ将軍…」

「なんという御仁だ…」

「これが…人類最強…」

その気迫にリック、アレキサンダー、志津香の三人も気圧される。

やはり目の前に立つのは、遙か高みの存在。老いてなお、傷ついてなお、そこに立ちふさがる。

「ルークさん！」

「来なくていい…」

かなみが地面に倒れたルークに駆け寄ろうとするが、ルークがゆっくりと立ち上がりながらそれを制す。小さな声でルークが呟く。

「未来のため、出来れば死んで欲しくない人物だったのだが…考えが甘かったな」

「ふん、ワシを生け捕りにでもするつもりだったのか？甘いわ！」

「ああ、痛い授業料を貰ってしまったようだ…」

ルークのその言葉と同時に、血が地面に落ちる。瞬間、周りの者

は気がつく。ルークの腹から大量の血が流れている事に。

「なっ…！」

「ルークさん！」

「酷い傷です、今すぐヒーリングを…」

「来なくていい。まだ勝負はついていない！」

志津香とかなみが絶句し、セルが治療に駆けつけようとするが、ルークは再びこれを制す。その腹部からは今も血が流れ続ける。同じくルークから受けた傷跡から血を流しながら、トーマがはっきりと言う。

「悪いが、ワシを捕らえてもそれは無理な相談じゃぞ。ワシはパットン皇子以外に仕える気はない！」

「そのようだな…下手に手を抜けば殺されるのは俺みたいだ。そんな状態でありながら、今なお立ちはだかるその姿、見事…」

「ならば、どうする？」

ルークの答えに、すでに予想がついているのだろう。トーマが口元に笑みを浮かべながら、剣を向けてくる。

「残念だが、あんたは諦めるとしよう。今度は全力で…殺りにいかせて貰う！」

「その気概や見事！来い、ルーク！」

互いに満身創痍。その出血量はいつ倒れてもおかしくない状況。だが、二人は互いに笑みを浮かべながら、再度対峙する。その見事な姿に、周りの者はみな息を呑んで見守るしかなかった。最早、長時間戦える体ではない。決着の時はすぐそこまで迫っていた。

第57話　トーマの意地（後書き）

［人物］

パットン・ヘルマン
ＬＶ　１８／７０
技能　格闘ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　ヘルマン帝国の皇子。魔人と第３軍を率いてリーザスを侵攻した張本人。その無謀とも思える作戦の裏には、皇帝の座を奪われるかもしれないという危機感があった。魔人に裏切られ、ハンティと共に逃亡。生死不明。武でも智でもパッとしない自分に劣等感を抱いているが、そのパットンに心の底からついていこうとする者が多いのも事実。それこそが、上に立つ者としての資質なのかもしれない。

トーマ・リプトン
ＬＶ　７８／９０
技能　剣戦闘ＬＶ２　槌戦闘ＬＶ２　弓戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　ヘルマン第３軍将軍。人類最強。パットンの師匠であり、ハンティの親友、ヒューバートの父であり、ヘルマンの誇り。周囲の期待や羨望に押し潰されることなく、それら全てを抱え込んで最前線で戦い、ヘルマンに勝利を呼び込んできた生きる英雄。多くの部下や国民に慕われているが、その実績と人望から一部の評議委員や皇帝からは、危険な存在として疎まれている。今の陰謀渦巻くヘルマンをパットン率いる若い力が一掃してくれる日を夢見ている。

ヒューバート・リプトン
ＬＶ　３０／６０
技能　剣戦闘ＬＶ１　弓戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　ヘルマン第２軍中隊長。人類最強であるトーマの実子で、パットンの親友。１１歳でヘルマンの正規兵試験に合格するなど、天才児

として期待されていたが、偉大すぎる父への劣等感から次第に反発するようになり、自由な生き方に憧れるようになる。そのため、本来であれば将軍になっていてもおかしくない人材でありながら中隊長でくすぶっている。パットンのリーザス進行の話を聞き、すぐにでも駆けつけようとしたが、皇后パメラに監視され動けないでいる。

アリストレス・カーム
ＬＶ　４１／５２
技能　弓戦闘ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ１

ヘルマン第２軍将軍。幼い頃から神童と呼ばれ、その期待に応えるかのように第２軍将軍に抜擢される。文武共に秀でたパットンの親友。だがパットンの妹のシーラを愛してしまっているため、板挟みに苦しんでいる。皇后や宰相の暗躍を調べようとしているが、シーラを上手くダシに使われ、調査は難航している。リーザス侵攻を最後まで危険だとパットンに進言したが、その言葉はパットンには届かなかった。皇后パメラからは徹底的に監視され、救援に動く事は出来ないでいる。

［技］
骸斬衡
使用者　トーマ・リプトン

トーマの必殺技。剣から放たれる衝撃で敵を吹き飛ばすと同時に、強烈な斬撃も与える。骨まで響く衝撃というハンティの言葉からこの名がついた。

第５８話　最強の死、最恐の復活

―リーザス城　入り口前―

互いの剣が交差する。金属音が辺りに響き、風を切る音が耳に入る。戦の真っ最中でありながら、この周囲だけはそれほど静かであった。周りで見ている者が息を呑む。言葉を発する者はいない。皆が二人の戦いに見入っていた。

「ぬぉぉぉぉ！」
「ちっ、真滅斬！」
「甘いわ！骸斬衝！」

互いの技がぶつかり合い、その衝撃で砂煙が巻き起こる。衝撃が互いの体に伝わり、ルークは腹の傷からまた出血が増し、トーマは胸を押さえながらルークを睨み付ける。だが、互いに口元には笑みが浮かんでいる。その様子を見ながら、かなみが不思議そうに呟く。

「どうして…二人とも笑っているんでしょうか？」
「私には気持ちが判りますね」
「自分もです。強者との戦いは、それだけで心躍るものです」

かなみの疑問に答えたのは側にいたアレキサンダーとリック。両者共に自己鍛錬を欠かさず、強者との出会いを求めている者。だからこそ、ルークとトーマの気持ちに共感していた。

「ふん、バトルジャンキーなんてただの馬鹿よ。楽しそうに笑っていたって、死んだら元も子もないでしょ」

「志津香さん…」

ルークが楽しんで戦っているのをバッサリと切り捨てる志津香。セルも同意見ではあるようだが、あまりにも直接的な物言いに困ったような表情を向ける。志津香は二人の戦いを見ながら、小さく口にする。

「だから…絶対に死ぬんじゃないわよ…」

「……」

気がつけば、志津香は右拳を固く握りしめていた。その呟きに応えるかのように、目の前の戦いは更に激化する。

「真空斬、乱れ撃ち！」

「一撃一撃がぬるいわぁぁぁ！」

ルークの連撃をものともせず、トーマが特攻する。既に鎧がひび割れているため、真空斬を生身で受けるが、ビクともしない。驚異的な耐久力。そのままルークに肩からぶつかっていく。

「ぐっ…」

「貰った！骸斬衝！」

「ちっ…！？」

超至近距離からトーマが骸斬衝を放つ。ルークが妃円の剣で受け止めるが、その剣が弾かれる。宙に舞う剣を見ながら、トーマがニヤリと笑う。

「これで終わりじゃぁぁぁ！！」

「止まる訳には…いかないか…」

無防備である自分に迫る剣を見ながら、ルークが小さく呟く。腹部からの出血は更に増し、口元からも血を流している。最早、避ける力は残されていないように見えた。かなみと志津香の絶叫が聞こえる。その声を耳にしながら、脳裏に浮かんだのは四人の女性。

「いつか、真の忠臣と呼ばれるように…」

その行く末を見届けたいと思った忍者の少女がいた。

「…役に立たないと判断したら…切り捨てるからね」

共に復讐の道を歩むと約束した恩人の娘がいた。

「兄貴のその能力はさ、きっと人々を救うために授かった能力なんだと思う」

自分はいつか大きな事を成し遂げると信じていた、今は亡き妹がいた。

「待っています、ルーク！」

そして…必ずもう一度会うと誓った女性がいた。

「止まれぬ理由なら…こちらにだってある！！」

「ぬっ！？」

迫っていたトーマの剣を、前に出ながらすんでの所で躱し、鎧が砕けて無防備に晒されているその左胸に全力で右拳を放つ。

「ぐっ…うぉぉ…」

真空斬をものともせず前進してきたトーマが、その右拳に明らかに苦しみ出す。胸を押さえながらよろめくトーマ。その瞬間にはルークは飛び上がっていた。腰に刺したもう一つの剣、幻獣の剣を高々と上に掲げながら、トーマ目がけて一気に振り下ろす。

「真滅斬！」

「ぐっ…がぁぁぁぁ！」

その一撃がトーマの体を直撃し、絶叫と血飛沫を上げながら、遂にその体が大地へと崩れ落ちた。周囲にいた解放軍は歓喜に沸き、解放軍と戦いながら遠目に様子を窺っていたヘルマン軍は絶望に打ちひしがれる。人類最強が、ヘルマンの誇りが、ただの戦士に敗れたのだ。

「トーマ将軍が…」

「そんな…何者だ…」

「ルーク…とかそんな名前だった気が…」

「黒髪の…剣士…」

解放軍とヘルマン軍の両方からざわざわと呟きが聞こえてくる。だが、そんな声は二人の耳には届かない。仰向けに倒れるトーマの前に立つルーク。その顔を見ながら、トーマが血を吐き出しながら口を開く。

「よもや…ワシが負けるとはな…見事じゃ…」

「あんたもな…人類最強の名に恥じぬ戦いぶりだった…」

トーマの顔を見ながら、ルークが疑問に思っていた事を口にする。

「リーザス侵攻を焦ったと言っていたな？…病か？」

「やはり気がついておったか…」

「しきりに胸を押さえていたからな。最後はそれを攻める形になったが…」

「相手の隙を突くのは上策。それを悟られ、直撃を食らったのはワシの失策じゃ」

「病は…」

「ワシはもう長くはない…」

ルークが黙り込む。トーマがその顔を見ながら、悔しそうな顔をする。

「見たかったのじゃ…生きている内に、パットン皇子がヘルマンを導く姿を。皇子のため、国のためと言いながらリーザスに侵攻したが、一番の理由はそれじゃ。ワシの…エゴじゃ…」

「……」

「ヘルマンの誇りか…情けない話じゃ。自分の我が儘で多くの兵を死なせ、あげくに皇子の命を危機に晒している。アリストレスのように止めるべきであった…」

「ああ…あんたは止めるべきだった。皇子を、国を思うのであれば…」

「死ぬ事に未練はない。最後にお主のような者とも戦えた。感謝するぞ、ルーク…」

「俺も、あんたと戦えた事を誇りに思う」

「だが…ヘルマンの行く末を…皇子の行く末を…見られない事だけが心残りじゃ…」

「トーマよ…」

同じ老兵として、バレスも思うところがあるのだろう。トーマを悲しげな目で見る。トーマが静かに問いかける。

「パットン皇子は…極刑で間違いはないか…」
「ああ。それは免れないだろうな…」
「そうか…残念じゃ…」

自分が止めなかった事への責任を再び感じているのだろう。そして、パットン亡き後のヘルマンを思い、悲しそうに目を閉じていく。だが、ルークが口を開く。

「だが、まだ死んだ訳ではない」
「……」
「パットン皇子とは会った事がないが、あんたが認めるほどの器なんだろう?」
「ああ…まだ荒削りじゃが…光るものがある…」
「ならば…時代がまだパットンを欲しているのなら…必ず生き延びる」
「……」
「出会って俺にも感じるものがあるなら、王女たちに減刑を進言しても言い。約束する」
「ルーク殿、勝手に…いや、何でもないですじゃ」

ルークの言葉にバレスが反応するが、すぐに言葉を取り下げる。死んでいくトーマの前で言う事ではない。

「あんたの夢見たヘルマンは、まだ終わってなんかいない」
「そうか…ルークよ、感謝する…」

そう呟きながら、トーマが静かに目を閉じていく。最後の瞬間に

見たのは、トーマが夢見ていた光景。パットンが皇帝として中央に立ち、その横でアリストレスが弓を引き、ヒューバートが剣を抜いている。だが、おかしな事に気がつく。その横に後二人、男が立っているのだ。その姿に気がついたとき、トーマは口元に笑みを浮かべる。立っていたのはノースで出会ったランスという戦士と、先程まで戦っていたルーク。五人の若者が共に肩を並べ、強大な敵と戦っているのだ。今際の際に見た妄想だったのかもしれない。だが、トーマはこの光景がいつか実現するような気がしていた。そして、そのまま意識を手放す。トーマ・リプトン、人類最強の男はこうしてその生涯に幕を閉じた。

「トーマよ…逝ったか…」

バレスがその満足そうなトーマの死に顔を見ながら、目を閉じその死を悲しむ。幾たびも対峙した敵であったが、その生き様には敵ながら見事に思っていた。その時、ルークがふらつき、後ろに倒れそうになる。

「ルークさん！」
「…っ！」

かなみやセルが駆け寄るが、ルークを支えたのは一番側にいた志津香であった。その出血量を見ながら、心配そうにする。

「ちょっと…大丈夫なの…」

志津香が尋ねるが、既にルークは意識を失っていた。それ程の死闘。崩れていく体を支えながら横にするが、ちょうど膝枕をするような形になる。かなみとセルが見ているので、恥ずかしそうにどかそうとするが、意識を失っているルークはピクリとも動かない。だ

が、息はある。ため息をつきながら、その頭を撫でて志津香が小さく呟く。

「お疲れ様…あんまり心配させないでよ…」

「はいはい、イチャイチャするのは後にして今は治療ね。あ、でも体勢はそのままね。下手に動かすとまずいから」

ぱんぱん、と手を鳴らしながらロゼが近づいてくる。ミリの治療を終え、いつの間にかこの場に到着していたのだ。顔を赤らめる志津香。

「ちょっと…このままって…」

「そのまま膝枕してあげておいて。美女の膝枕なんて貴重なんだから、きっとルークも喜んでいるわよ。あ、独り占めは厳禁。交代制ね。次はかなみで、その次は…」

「はいはい！トマトが立候補しますです！」

「トマトさん、いつの間に…」

「じゃあ、それで。さて、治療を始めるとしますかね…」

いつの間にかトマトもこの場に来ていたようだ。全力で膝枕係に立候補してくる。セルがその登場に驚くが、かなみは次の係りに決まった事と、ルークの怪我が心配で心ここにあらずであった。

「ロゼさん、ルークさんは…？」

「大丈夫、すぐに動けるようになるわ」

「えっ…この怪我ですぐに…？」

「ロゼさん、私も手伝います！」

「必要ないわ。セルは体力を温存しておいて。まだ戦は終わった訳じゃないんだからね。私はここでリタイアなんだし、後は頼んだわよー」

手伝いに入ろうとするセルの申し出を断り、ロゼが不穏な言葉を口にする。かなみと志津香がロゼの顔を見るが、その表情は普段通り飄々としていた。セルが何かに気がついたようで、驚きながら口を開く。

「ロゼさん…まさか大回復を…」

「そうでもしなきゃ、この戦中に戦線復帰は無理よ。重傷だもん」

ロゼが今から使おうとしているのは大回復という神魔法。対象の怪我を一瞬の内に完治させるが、代償に自身の体力を殆ど持って行かれるため、使用すればしばらくは動けなくなる。ロゼがそれを使用するという事は、これから戦で傷ついていく解放軍を治療する者が減るという事。だが、ロゼはルークを指差しながらはっきりと言う。

「まだまだ、ルークの力は必要でしょ？」

「はい！」

「ま、必要ね」

「うむ。ルーク殿抜きで魔人たちを倒すのは困難！」

「…ロゼさん、お願いします。後の事は、私に任せて下さい！」

「はいはい、やっぱ人気者ねー、こいつ」

周囲の即答を聞き、セルも決断する。ロゼがルークの頬をぷにぷにと突きながら、静かに笑う。

「あんまり真面目なのは柄じゃないんだけどね…」

そう呟きながら、呪文を唱える。すると、ロゼの全身を光が覆っていく。ヒーリングや回復の雨とは違う、神々しい光。ロゼがルー

クの顔を見ながら、フッとため息をつく。

「ま、頑張るとしますかね！」

―リーザス城近辺　丘の上―

「くくく、トーマが死んだようだね！」

リーザス城の後方に位置する丘の上から、城の中を双眼鏡で覗き込んでいる女がいる。ミネバだ。リーザス城から撤退をしたミネバは、未だその側で城の中を探っていた。パットンの死は確認できなかったが、どうしてもトーマの死は確認しておきたかったのだ。

「トーマ様が…」

「何と言う事だ…」

トーマの死にミネバの部下たちもざわつく。ミネバがため息をつきながら、一喝する。

「騒いでんじゃないよ！さぁ、撤退するよ。ヘルマンに帰るんだ」

「な、トーマ将軍の仇討ちを取るのでは…」

「取れると思うのかい？この戦力で…？」

「例え取れないにしても、トーマ将軍の無念は晴らすべきです！」

「そうかい…あんた新入りだったね…」

「はっ！」

「残念だが…あんたみたいな奴は、あたしの部下には不要でねぇ…」

「えっ…？」

瞬間、進言していた部下の首が飛ぶ。ミネバの側に控えていたタミが斧を振るったのだ。その光景に見慣れている者は何の反応もせず、ミネバの部下になったばかりの者は目を見開く。

「他にも同じ考えの奴がいたらよく聞きな。騎士の誇りとか言って特攻する事が国のためになるのかい？この状況をパメラ皇后に報告するのも、立派な騎士の勤めだと思うのはあたしだけかい？」

「……」

その言葉に、不満そうにしていた者が黙る。ミネバの言う事は尤もであった。魔人の裏切りにより、既に自分たちに勝ち目は無く、特攻しても無駄死には明らか。ならば、状況の報告に撤退するのも、軍人としての勤め。黙り込んだ新入りたちの様子を見ながら、ミネバが言葉を続ける。

「どうやら、判ったようだね。さぁ、魔人の作った光の道を通って撤退するよ。いつ消されるか判ったもんじゃない。急ぐんだよ！」

その言葉に、部下たちはぞろぞろと歩き出す。タミに先導させ、ミネバはもう一度トーマの死を確認するように双眼鏡を覗き込む。その背中を睨み付けながら、アミトスは拳を握りしめる。

「（貴様の口車には絶対に踊らされんぞ、ミネバめ…）」

そう思いながら、アミトスは他の者と共に歩いて行く。丘の上に残ったのはミネバ一人。双眼鏡で覗き込むと、確かにトーマの死体が横たわっている。側で治療を受けているのは、トーマを殺してくれた人物、先日対峙したルークだ。

「あいつもここで死んでくれるのが一番なんだが…どうなるかねぇ

…まぁ、生き残ったとしても、この後の魔人戦で確実に死ぬとは思うが…あいつとはまた会う気がしてならないねぇ…」

ミネバがイヤそうに呟く。すると、ミネバの視線の先、治療を受けているルークの姿が、一瞬だが死神に見える。

「……？」

目を擦り、再度双眼鏡を見れば、治療を受けているルークの姿。見間違いかと鼻で笑いながら、ミネバもこの場を後にする。ミネバが合流し、ミネバ隊は光の道を使ってリーザスを離れ、第3軍唯一の生存部隊としてヘルマンへと帰還する。人類最強の女は、こうしてルークの前から姿を消した。だが、これより数年後、ミネバは再びルークの前に立ちふさがる。人類圏統一、最後の壁として…

―リーザス城　封印の間―

「これが魔剣カオスか」
「そのようですね…」

ランスたち四人は光の道を抜け、カオスが封印された奥の部屋に辿り着いていた。部屋の奥には地面に突き刺さった漆黒の剣がある。これがカオスなのだろう。カオスの更に奥には、何やら棺のようなものがある。マリスがその棺を訝しげに見るが、今はカオスを手に入れる事が先決。ランスがカオスに手をかける。

「では引き抜くぞ」
「ダーリン、頑張って！」

「ランス様、頑張って下さい！」
「任せておけ、どりゃぁぁぁぁ！」

二人の声援を受け、ランスが力一杯カオスを引っ張る。そのかけ声と共に、魔剣カオスが地面から引き抜かれ、その瞬間、何か音が鳴り響いた。マリスが部屋の入り口に駆け寄ると、光の道が消えている。カオスを抜いた事による影響だろうか。

「ふっふっふ、遂に念願のカオスを手に入れたぞ！」
「ランス様、やりましたね」
「さすが、マイダーリン！」

ランスが剣を高々と掲げる。魔人を倒す切り札を手に入れた事に歓喜するシィルとリア。部屋の入り口にいたマリスもホッとするが、突如目の前に現れた男を見て声を上げる。

「なっ…魔人アイゼル…」
「なんだと！」

ランスたちが部屋の入り口を見れば、マリスの目の前に魔人アイゼルが立っていた。目を見開きながら、ランスの手元にあるカオスを見て叫ぶ。

「な、なんという事を…貴様らは何をしたのか判っているのか！？」
「え？」
「何を訳の判らん事を…丁度いい、貴様でカオスの斬れ味を試してやる」
「それよりも…何故ここに…」
「それは…」
「そうだ…アイゼルよ、何故貴様がここにいる…」

ランスがカオスをアイゼルの方に向け、マリスが突如現れたアイゼルに問いかける。アイゼルが答えようとするが、突如後ろから男の声が響く。アイゼルが振り返ると同時に、その体が右方向に吹き飛び、壁に叩きつけられる。

「ぐぁっ！」

「忠告は一度だけだと言っておいたはずだが…」

現れたのは魔人ノス。強烈な拳でアイゼルの体を吹き飛ばし、恐怖で体が動かないでいるマリスの首を掴んで持ち上げる。

「きゃぁぁぁぁ！」

「マリス！」

「誰だ、貴様！」

「私の名は魔人ノス。ヘルマンを率いた首謀者といったところか…」

「貴様も魔人か、丁度いい。カオスの実験台は貴様に決めたぞ！」

そのランスの言葉に、ノスがニヤリと笑いながら口を開く。

「ランスとやらよ、礼を言うぞ。よくぞカオスを引き抜いてくれた」

「なんだと…この魔剣カオスは魔人を殺す事の出来る剣だぞ。頭がおかしいのか？それとも殺されるのを楽しみに待っていた変態か？ならば、俺様が望み通りにしてやろう！」

「くっくっくっ…」

「何がおかしい！？」

「違う…カオスの封印の本当の目的は…」

壁に叩きつけられたアイゼルが苦しそうに呟く。ランスたちはその意味が判らなかったが、笑っていたノスが、奥の棺に向かって突

如大声を上げる。

「ジル様！封印は解けました！お目覚め下さい！」

「ランス様、棺が…」

突然シィルがランスの腕を掴んで後ろを指さす。ランスが振り返ると、棺の上には先程までいなかったはずの青い髪をした裸の女性が座っていた。その姿を見た瞬間、ランスに冷や汗が流れる。

「おい、裸のねーちゃん。いつからそこにいる？」

「……」

ランスが焦りを気取られないよう、そう問いかけるが、目の前の女性はそれを無視し、ノスに話しかける。

「ノスか…よくやってくれた。この忌々しき封印からようやく解放される事が出来た…」

「はい。忌々しきガイが死に、魔王不在のこの世界を統べるのは、やはりジル様しかいないと…再びこの世に暗黒の世界を…」

「ジル…ですって…まさか…」

ノスに掴まれているマリスが聞き覚えのある名前に呻き声を上げる。幼い頃から文献でその名をよく目にしていた。アイゼルが歯噛みしながら答える。

「そうだ…あれは魔王史上最も残忍と呼ばれた先々代魔王、ジルだ…」

「そんな！？」

「まさか…カオスの封印を解いてはいけないというのは…」

その言葉にシィルとリアが声を上げる。それらを全て無視するかのように、ジルがノスと話を続ける。

「ノス、私の力は長きの封印に渡り１００分の１も出せない状態だ。私が回復するまで頼んだぞ」
「はっ！お任せを…」
「それではまずは…そのカオスを破壊しろ」
「了解しました。さぁ、カオスをこちらに渡せ」

そう指示を出すジル。ノスがランスを見る。二人に挟まれた形になりながら、ランスが声を荒げる。

「ふざけるな！この剣は俺様のものだ。なんで貴様らに渡さなきゃならん！」
「そうか…」
「ぐっ…あっ…」

その言葉を聞いたノスは、右腕に力を込める。骨がきしむ音がし、マリスが苦しそうに呻き声を上げる。

「いやーっ！マリス！！」
「俺様が取引に応じるとでも思っているのか…」
「ではこの女がこのまま死ぬだけだ…」
「ランス様…」
「…くそっ！」

ランスがカオスをノスの足下に投げる。それを見たノスは満足そうにマリスを解放し、マリスはその場に倒れ込む。それを興味ないような目で見ながら、ノスがカオスに右足を乗せる。

「これがジル様を封印していた忌々しき魔剣カオスか…永久にこの世から消え去れ！」

そう言い放ち、渾身の力でカオスを踏みつける。バキン、という音と共に、カオスが真っ二つに折れる。ランスが悔しそうにその光景を見る。

「ぐっ…」

「ふはは、私を戒めていた悪しき剣は滅びた。これで私は自由だ！」

「さぁ、ジル様、こちらへ…」

ノスに導かれるように棺の前からノスに向かって歩いて行くジル。ランスたちの目の前を横切るが、その迫力にランスでさえも動けずにいた。ジルを目の前にして膝をつきながら、ノスが問いかける。

「ジル様、この者たちはどうしますか？」

「ふふふ、放っておけ。何せ私の封印を解いてくれた恩人だ。その後悔を抱えながら、人類の行く末を見ていく無力なこの者たちを見るのも、また一興…」

「御意」

そう言った後、壁の前で苦しそうにジルを見ているアイゼルを見る。

「見慣れぬ魔人だが…」

「ガイの作りだした魔人で、名はアイゼルと言います。気にする必要も無い小者です」

「小者…だと…」

その言葉にアイゼルが立ち上がろうとするが、ノスが一睨みする。

「来る気か…？」
「ほぅ…それはそれで楽しめそうだな…どうする、若き魔人よ…」

ノスとジルが見下すように笑いながらアイゼルを見てくる。悔しさに歯噛みし、拳を握りしめる。だが、体が動かない。現代の魔王ではないジルには、既に魔人に対しての絶対命令権は薄れているはず。それなのに、立ち向かう事が出来ない。アイゼルは、二人を恐れてしまっていた。

「ふむ…ただの腰抜けか」
「その通りです。ジル様の覇道の前に、特に必要も無い魔人でしょう」
「そのようだな…行くぞノス」
「はっ…」

アイゼルを散々に見下した後、ジルとノスは部屋から姿を消した。ランスたちにも、アイゼルにも、為す術は何も無かった。しばらくの後、アイゼルが立ち上がり、ランスたちを一瞥した後、部屋からふらふらと出て行く。それを呆然と見送るランスたち。なぜなら、アイゼルを倒す術がないからだ。ランスが床に視線を落とす。そこには真っ二つに折られた魔剣カオス。

「ランス様…カオスが…」
「くそっ…」

部屋に絶望感が漂う。封印されていた魔王を自らの手で復活させてしまい、魔人を倒せる唯一の武器は折れてしまった。流石のランスも頭を抱えている。その時、部屋に男の声が響く。

「ふぁぁぁぁ…」
「おい、誰だ！こんな時に欠伸しやがって！」

ランスがリア、マリス、シィルと順に見るが、全員が首を振る。

「じゃあ誰が…」
「ラ、ランス様…剣が…」

シィルが魔剣カオスを指さす。ランスがカオスを見ると、先程までは普通の剣だったはずなのに、今は目が浮かび上がっていた。そのまま剣が喋り出す。

「おっ、いてて…ノスの野郎思いっきり踏みやがって…折れちまったじゃないか」
「け、剣が喋った…」
「ランス様、剣のお化けです！」
「何だ！？何者だ！？」

ランスの問いかけに、剣が答える。

「儂か？見ての通り、儂はカオス。魔剣カオスじゃ」

折られているにも関わらず、陽気な声を出しながらカオスは言ってのける。これが、これから長い付き合いになるランスと魔剣カオスの出会いであった。

第５８話　最強の死、最恐の復活（後書き）

［技］

大回復

　自身の体力を犠牲に、対象の傷を完治させる神魔法。死者を蘇らせたり、病を治したりする事は出来ないが、ある程度の才能がないと使う事の出来ない高度な魔法である。

第59話　魔剣カオス

―リーザス城　封印の間―

「おい、剣が喋っているぞ!?魔剣カオスは喋る機能がついているのか？」

「伝説の魔剣ですから…意志を持っているという事なのでしょうか…」

突如喋り出したカオスに困惑するランスたち。その様子に構うことなく、カオスが陽気に喋り続ける。

「そうじゃ！儂は自らの意志を持った世界最強の剣。誉めろ、誉めろ」

「わー、すごいです」

「こら、暢気に拍手なんかするな」

無邪気に拍手するシィルを諫めるランス。すると、カオスがぐふぐふとイヤらしい声を上げ始める。

「うーむ、絶景じゃ。一人見苦しい男がいるが、後は裸の美女ばかり。うほほ。心のちんちんがうずくわい」

「きゃっ…」

「やん、ダーリン助けて。Hな剣がリアを視姦するの…」

「おい、カオス！俺様の女たちに色目を使うな！」

カオスの言うように、光の道を通ってきたランスたちは全員裸のままであった。女性陣が肌を隠し、ランスがカオスに文句を言う。

「なんじゃい、けちんぼ。減るもんじゃないだろうに」
「…ランス様の性格と似ていますね」
「おい、マリス！俺様をこんなへなちょこ剣と一緒にするな！」
「へなちょこって…儂泣いちゃうぞ。この世に一本しかない魔人を斬れる伝説の剣なのに…」
「なにが伝説の剣だ。すぐにポキンと折られた情けない剣のくせに！」
「儂が折られるのを黙って見てる事しか出来なかった弱虫剣士のくせに！」
「なにぃ！」
「なんじゃと！」
「確かに…似ているかもしれませんね…」

目の前で言い合うランスとカオスを見ながら、シィルがマリスに同意する。リアも隣で頷いている。

「ふん、魔人を斬れる伝説の剣だろうが、折れた今となっちゃ何の役にも立たん。それとも、ノリでくっつけたら復活でもするのか？」
「いや、そんな事しなくても、儂復活できますよ？」
「えっ！？」

カオスの言葉に四人が驚く。自信満々にカオスが言葉を続ける。

「女性のエクスタシーパワーがあればあっという間に復活可能じゃ！」
「エクスタシー…パワー…？」
「女を抱かせろと言っておるんじゃ。心のちんちんがビンビンに反応して、あっという間に元通りじゃ。がはは」
「ふざけた剣だ。俺様が叩き折ってやる」

「いや、もう儂、折れてますよ？」
「ランス様、魔剣カオスは魔人討伐の切り札です。折るなんて以ての外ですよ」

ランスの軽率な行動を諫めるマリス。仕方なさそうにカオスにランスが問いかける。

「ちっ、本当にそれで復活するんだろうな」
「もちろん。それと、抱くと言っても本当に挿入する訳じゃなく、精神的に楽しむだけじゃから安心していいぞ。儂、紳士なんで」
「どこがだ！」

カオスの言葉を聞き、マリスが一度目を瞑った後、決意したように一歩前に出る。

「判りました。では私がカオスに抱かれましょう。全てはリーザス、いえ、この世界の為です」
「ケバいからイヤ」
「ケバっ…！？」
「土台は悪くないんだが、二十過ぎた年増じゃ儂のちんちん萎え萎えじゃ。出直してきてちょ」
「ランス様、この世界の為に叩き折りましょう」
「マリス！？」

表情はいつものままだが、額にくっきりと青筋を浮かべたマリスがカオスを折る事を提案する。見た事もないマリスの姿に、リアが驚く。ランスもその威圧感に少し押されている。その空気を変えるように、リアが明るく挙手する。

「じゃ、リアがする。ダーリン以外に抱かれるのはイヤだけど、し

ょうがないものね。可愛がってね？」
「うーん…駄目じゃ。嬢ちゃんはそっちの年増と違ってピチピチじゃが、淫乱だ。儂はうぶなねーちゃんが好みなんじゃ」
「ふふふ…そんなに折られたいみたいですね…」
「マリス、恐い…」
「何て我が儘な剣だ！」

マリスのプレッシャーが更に増す中、我が儘な注文にランスが文句を言う。すると、カオスがシィルの方に視線を向けながら言葉を続ける。

「そこのピンクのもこもこちゃんなら全然オーケーじゃが」
「えっ…」
「馬鹿者！シィルは俺様専用の奴隷だ。他の誰にもやらせん！」
「ランス様…」
「ぶぅー…ダーリン…」

ランスの発言にシィルは嬉しそうにするが、対照的にリアは不満そうだった。

「でも、儂このままじゃ復活できませんよ？」
「ランス様、ここは世界の為にシィル様を…」
「駄目だ。それだけは世界が滅んでも許さん」
「……」
「ではカオス、好みを聞こう。どんな女がいいんだ？」
「そうじゃな…若い処女とか最高じゃな…考えただけで心のちんちんが…」

カオスの言葉にランスが考え込む。数多くの処女を自らの手で破ってきたランスだが、先日のユニコーンの蜜を手に入れるときの出

来事を思い出す。

「処女か…かなみと志津香が処女だったよな…」
「でも、ランス様。お二人は…その…」
「あ、名前的にその二人は東洋系じゃな？ならパスじゃ。西洋系の娘の方が好みじゃ」
「贅沢な…」
「そいでもって、清楚な神官とかじゃったら、もう最高じゃ！」
「…いるぞ！その条件に合う相手が一人！」

ランスがカオスの望みに合致する女性が思い浮かぶ。同時にシィルも思い浮かんだようで、はっきりと口にする。

「判りました、ランス様！ロゼさんですね！」
「お前はあの淫乱が清楚に見えるのかぁぁぁ！ええい、こうしてやる！」
「いたい…いたいです、ランス様…ひんひん」
「とにかくセルさんを呼んでくるぞ！」
「お、心当たりがあったようじゃな。それでは儂は待たせて貰うとするかの。１０００年以上ぶりのお楽しみじゃ…ぐひひ…」

こうしてランスたちはカオス復活の為にセルを呼んでくる。怪我で寝ていたルークに驚いたが、その側にいたセルを上手い事言いくるめてカオスの下へ連れてくる事に成功する。そして、封印の間にセルの嬌声が響くのだった。

―リーザス城　入り口前―

「んっ…」
「ルークさん！目が覚めましたか！？」
「かなみか…今の状況は…」

トーマとの激闘後、気を失っていたルークが目を醒ます。その顔を覗き込みながら、かなみが安心したような顔になる。

「今はバレス様たちが城内部の攻略に当たり、リックさんたちは東の塔攻略、コルドバさんたちが西の塔攻略、他の部隊はモンスターやヘルマン軍の残党退治を行っています。城を攻めるバレス様たちは延々と湧き出るオイウェートや、冷凍系の攻撃以外ダメージを受けないＮＡＴＯなどに苦戦しているようですが、徐々に進行しているようです」
「俺は…どれくらい寝ていた…？」
「２０分程だと思いますが…」
「なら、ぐずぐずしていられないな」

そう言って立ち上がろうとするルーク。ふと、かなみが膝枕をしていてくれた事に気がつく。

「すまない。重かっただろ？」
「い、いえ！気にしないで下さい！それよりも、もう大丈夫なんですか？もう少し休まれていた方が…」
「そうです、ルークさん！もう少し休んでいて下さい！次はトマトの番だったんですから！」
「うぉっ、トマトか」

急にドアップで迫ってきたトマトに少し驚く。次の番とか言っているが、ルークには意味がよく判らなかった。その横から志津香が出てきて話しかけてくる。

「おはよう、寝坊助さん」
「みたいだな。その分しっかり働かせて貰うさ」
「何言っているんですか。ルークさんはもう十分すぎるほど…」
「まだ、魔人が三人も残っている。こんな所で休んでいる訳にはいかないさ」

その時、一人の女性が駆け寄ってきてルークに抱きつく。見れば、セルが涙を流している。驚き、ルークが問いかける。

「どうした、セルさん!?」
「うぅ…ルークさん…私は汚れてしまいました…神に仕える者として情けないです…」
「汚れた?」
「なんじゃい、ちょっと体をまさぐったくらいで大げさな」

聞き覚えのない声を響かせながら、セルが駆け寄ってきた方向からランスたちが歩いてくる。志津香がランスを睨みながら口を開く。

「ランス、セルさんに何をしたのよ!?」
「俺様は何もやっていないぞ。全部コイツがやった事だ」

そう言って持っていた剣を目の前に突き出してくる。訝しげにその剣を見ながら、志津香が苦言を呈す。

「剣がどうやってセルさんを…」
「ハロー!」
「きゃっ!?」
「け、剣が喋った…」

急に喋り出した剣に驚く一同。泣いているセルを抱きしめながら、ルークがランスに問いかける。

「なるほど、それがカオスか？」
「ああ。死ぬほど面倒くさい奴だから、この戦いが終わったら叩き折る事にしている」
「それは素晴らしいですね」
「ヒドっ！儂、泣いちゃうよ？」
「ま、マリス様に一体何が…」

笑顔でランスの意見を肯定するマリスに、かなみが冷や汗を流す。あちらはあちらで色々あったらしい。

「それで、セルさんに何をしたんだ？」
「このへなちょこ剣が魔人に一度折られやがってな。復活のためには、清楚な神官にHな事をする必要があったんだ」
「ルークさん、一応緊急事態だったので…その…」

ふう、とため息をつきながら、ルークがセルの頭を更に抱きしめながら答える。

「緊急事態だったから仕方なかったのかもしれないが…あまり可哀想な事はするな」
「俺様に言うな！全部この馬鹿剣のせいだ！」
「なに、この兄ちゃん？話が判らなそうで判るような、頭が固そうで柔軟そうな、変な奴じゃの」
「ルークさんと言って、私たちのとても頼りになる仲間です」

カオスの問いかけにシィルが答える。ルークの胸に長い事抱きついているセルだったが、突如頭に何かがぶつかる。小石が飛んでき

たのだ。

「ほら、いつまでもイチャついてんじゃないわよ。神に仕える者がはしたない」

「ロゼさん…あっ、すみません。はしたない事を…」

「ロゼ。間違いなくお前が言っていい台詞ではないだろ…」

小石を投げたのはロゼ。ルークが寝ていた側のシートの上に横になっており、額には濡れタオルが置かれていた。明らかに疲労困憊といった様子。顔を赤くしながらセルがルークから離れ、ルークはロゼの様子を見て驚く。

「ロゼ!?一体どうした?」

「ルークさん、ロゼさんはルークさんの治療を行って、体力がほとんど残っていないんです」

「そうだったのか…すまない、ロゼ…」

「後でたんまり報酬貰うから覚悟しておいてねー」

額から汗を流しながら、気にするなという風にいつもと変わらない飄々とした笑顔を向けてくるロゼ。強い女性だ。その姿を見ながら、ルークは最大限の感謝をする。その様子を見ながら、ランスが尋ねてくる。

「そういや、さっきセルさんを呼びに来たとき重傷だったな。どうしたんだ?」

「ああ、人類最強とやり合った」

「人類最強…トーマ・リプトンとですか!?」

「はい、マリス様。それに、ルークさんが勝ったんですよ!」

「なんだと!?」

マリスが驚愕し、ランスも大声を上げる。流石のランスもトーマの事は知っていたのかと思うルークたちであったが、その直後ルークに文句を言ってくる。

「馬鹿者！あの親父は俺様が倒して人類最強の称号を手に入れる気だったのだぞ！横取りしやがって！」

「流石にそれは知らんなぁ…」

呆れるルーク。怒るランスを宥めながら、先行しているバレスたちの協力をするため、一行は城の中へ入っていく。

ーリーザス城　二階ー

「魔王…ジルが…」

「嘘…」

「残念ながら、本当の事です」

「あらー、知らない間にとんでもないことになってますかねー？」

「魔王…ああ、神よ…」

「儂の封印を解いたから仕方のない事なんじゃがな」

二階に上がり、バレスたちの姿を捜しながら城の探索をしているルークたち。歩きながら互いの情報交換をしていたのだが、ランスたちから驚愕の事態を聞かされ、空気が沈む。魔人打倒の武器は手に入れたが、代償として更に凶悪な魔王を解き放ってしまったのだ。

「魔人をまだ一体も倒せていないのに魔王だなんて…」

「ルークさん…私たち、勝てるんでしょうか」

「勝てるさ。いや、勝たなきゃならない。そうでなきゃ、世界が終

わる。心配するな。魔王ジルはカオスに封印されていたんだろう？なら、カオスの方が格上って事だ」
「お、判っとるじゃないか！」
「そう…ですね！必ず勝てますよね！」

かなみとシィル、セルとトマトの表情が明るくなり、志津香もやれやれという顔をしながらも、その表情は先程よりも安心した様子であった。リアとマリスがルークに近づいてきて、リアが小さく呟く。

「相変わらず口が上手いわね…」
「モチベーションで戦いは大分変わるものさ」
「その通りですね。ルーク様、感謝します」
「やっぱりリーザスに来ない？歓迎するわよ」
「そうだな…リア、その事で少し話があるんだが」
「あら？ようやく来てくれる気になったの？」
「この戦争を通してリーザス軍の兵たちを見てきたが…中々に腐った連中も多いぞ。この状況では仕える気にはならんな」
「中々、尻尾を掴みきれなくてね…」
「耳の痛い話です…」

リアとマリスも内情は把握してはいたのだろう。だが、ゼス程でないにしても膿というのは中々に抜ききるのは困難。痛いところを突かれたと顔を歪ませる。

「ま、全てとはいかないまでも、この戦争が終われば多少は膿を出せると思うぞ」
「？」
「それは…」
「がはは、かなみの部屋で面白いものを見つけたぞ！」

ルークの意味深な発言を尋ねようとしたリアとマリスだったが、その言葉をランスの笑い声が遮る。先行していたランスが本を抱えながら駆けてきた。どうやらこの階にかなみの自室があったようだ。

「ちょっ！勝手に部屋に入ったの！？」

「がはは。見ろ、この通販雑誌を。セクシーな黒い下着に赤丸が付けてある。はっきり言っておこう、お前に黒は似合わん。やめとけ」

「きゃぁぁぁぁ！何てもの見つけてくるのよ！」

かなみが真っ赤な顔をしながらランスの持っていた本をひったくる。すると、他の持ってきていた本がバサバサと地面に落ちる。ルークがそれを見ながらタイトルを口にする。

「魅力的な女性になる法、意中の相手を振り向かせる法…ふむ、女の子らしいな」

「み、見ないで下さい！」

「ふんっ！」

「うごっ！」

かなみが本を隠すようにうずくまり、ルークの足を思い切り志津香が踏み抜く。久しぶりの痛みに、ルークが呻き声を上げるのだった。

―リーザス城　三階―

「属性パンチ・氷！」

「ぐぉぉぉぉっ！」

「おお、格闘家でありながら、冷凍系の攻撃が出来るとは…見事ですじゃ、アレキサンダー殿」

三階ではアレキサンダーが必殺の拳でＮＡＴＯを打ち倒しているところだった。冷凍系の攻撃以外ダメージを受けないＮＡＴＯは、本来戦士や格闘家の天敵であるが、アレキサンダーはそれをものともしない。汗を拭いながらバレスに答える。

「いえ、まだまだ修行の身。先程のルーク殿の戦いを見て、それを改めて実感しました」
「俺も見たかったぜ」
「んー、ミルはランスの戦いの方が見たいかなー」

城の攻略に当たっているのはバレス率いる黒の軍だけではない。アレキサンダーやミリ、ミルなども行動を共にしていた。

「うむ、まさかトーマを倒すとは思わなんだ。是が非でもリーザスに来て欲しい人材じゃ…」
「先程の戦いを見てから体の火照りが止まりませぬ」
「お、見つけたぞ！」

話しながら城の攻略を進めていくバレスたちの後ろから声がかけられる。振り返ればルークたち。その後ろにいるリアの姿を見て、バレスが感激に打ち震える。

「おお、リア王女…マリス殿も…」
「やっほー、バレス！」
「ご心配おかけしました」
「ルーク殿、もうお怪我は…」
「ああ、いつまでも寝ていられないからな」

「がはは、俺様が来たからには貴様ら三下の出番はないぞ。全て叩き斬ってくれる！」
「お、遂に儂の出番か？」
「その事ですが、ランス殿。少し問題がありましての…」
ランスがやる気満々にカオスを抜くが、バレスが困ったような声を出す。
「どうした？」
「先遣隊の話では、この先にはどうも罠を発動されているようなのですじゃ。東西の…」
「…なるほど、知られていましたか」
「どういう事だ、マリス？」
「リーザス城には有事の際、敵の侵入を防ぐためのトラップを発動させる装置があるのです。発動、解除共に東の塔と西の塔の最上階にある二つの装置で行われます。解除するためには、両方の装置を切る必要があります」
「無視して先には進めんのか？」
「難しいですね。多くの犠牲を払う事になるでしょう…」
その言葉にランスが舌打ちをする。
「ちっ、面倒くさい。誰だ、こんなもん考えたのは」
「はーい、リアです！」
「となると、先に東西の塔で装置を解除する必要があるな」
「ではまた二手に分かれるとするか。一つずつ回っていたのでは手間だからな」
そう言い、ルーク組とランス組でメンバーを分けようとするが、ランスがその内訳に文句を言う。ルーク組がルーク、かなみ、志津

香、トマト、セル。ランス組がランス、シィル、リア、マリス。ランスの方が、女性が一人少ないのだ。

「馬鹿者！貴様の方が、女が多いのは許せん！誰か一人寄越せ！」
「そう言われてもな…誰か、ランス組に行ってもいいというのは…」
「イヤです」
「死んでもいや」
「トマトはルークさんと一緒が…ぽっ…」
「今は…カオスとは少しでも離れていたいので…トラウマが…」
「ええい、じゃんけんでいいから誰かこっちに来い！そうでなければ、俺様はテコでも動かんぞ」
「なんて我が儘な…」
「はぁ…しょうがない。恨みっこ無しの一発勝負ね」

ため息をつきながら志津香が折れる。他の三人も真剣な表情で頷き、一斉にかけ声を上げる。

「「「「じゃーん、けーん！」」」」

「これが…これが敗北のグーですかー…」

トマトが悲しみに打ちひしがれる。勝負は非情であった。シィルとマリスに肩を叩かれ慰められている。上機嫌なランスと、ため息をつくルーク組。

「儂らはトラップの発動箇所までのモンスターを掃討しておきますじゃ」
「皆様、ご武運を！」
「死ぬんじゃないよ、ルーク、ランス」

「この戦いが終わったら、ミルがサービスしてあげてもいいわよ、うふふ」
「いらね」
「がーん！」

こうして東の塔と西の塔に向かうメンバーが決まった。ルーク組とランス組が向かい合って話し合う。

「それじゃあ、互いに装置を解除したらまた中央の塔に来て先へ進む。相手を待つ必要は無い。どうも魔王ジルは不完全な力を取り戻そうとしているらしいからな」
「はい。ノスに力が戻るまでは頼むと言っていました」
「となれば、早く進まなければそれだけ相手が強くなるって事だ。時間は無駄にしたくない」
「ふん、遅れるんじゃないぞ」
「ああ、出来る限り早く着けるようにするさ」
「それで、どちらがどちらの塔に行くんですか？」
「そうだな…それじゃあ…」

互いに向かう塔が決まり、中央の塔を後にしようとする一行。すると、後ろからミリに呼び止められる。

「ルーク、ランス」
「ん？」
「なんだ？」
「ほらよ」

二人が振り返ると、小さな小袋を投げてくる。それをキャッチする二人。

「パラライズの粉だ。モンスターが落としたのを拾った。短時間だが、敵を麻痺させる効果があるアイテムだ。まぁ、魔人相手に効くかは判らないけどな。お前らが持っていた方がいいだろうと思ってな」
「感謝する」
「麻痺させるという事は、これを美女に使えば…ぐふふ…」
「お、儂もそれに賛成！」
「馬鹿コンビ…」

ランスとカオスに呆れる志津香。こうしてルークたちは二手に分かれ、トラップの装置を解除するため東西の塔に向かった。

―リーザス城　西の塔　三階―

「うおりゃぁ！キンケード、こいつでこの階の敵はあらかた終わったか？」
「ええ、残すは最上階のみですね」

ルークたちよりも先に西の塔の攻略に来ていたコルドバ率いる青の軍が、モンスターを一掃する。防衛に長けた部隊とはいえ、決して攻めがお粗末なわけではない。すると、階段をルークたちが上がってくるのが見える。

「おお、ルーク殿じゃねえか」
「こ、これはルーク殿。お元気そうで…」
「ああ、そういえば青の軍は西の塔を攻めているんだったな。だからここまで、殆どモンスターがいなかったのか」
「お陰で楽にここまで来られました」

「かなみも一緒か。なーに、これが俺たちの仕事だからな」

ゲラゲラと豪快に笑うコルドバ。対照的にキンケードはルークの顔を見てばつの悪そうな表情をしている。

「それで、後は最上階のみなんだな？」

「ああ…それなんだが、ちょっと厄介な事になっていてな…」

「厄介？」

「最上階で金髪の男が目を閉じて何か考え事をしているようなのです。近づこうとした部下は一睨みで恐怖を覚え、逃げ帰ってきた次第です」

「金髪の男…」

「まさか…」

「心当たりがあるのか？」

「恐らく…魔人アイゼルだ」

「な、なんだって！」

「（危ないところだった…知らずに突っ込めば怪我ではすまんぞ…）」

ルークの発言にコルドバが目を見開き、キンケードが冷や汗を流す。魔人という言葉にセルが不安そうにするが、かなみと志津香は別の事を考えていた。魔人アイゼル、一度対峙し、ルークの口から予想だにしない発言が出た、あの時の事を。

「コルドバ将軍、キンケード。ここは俺たちに任せて、外の残党処理の方に向かってくれ」

「おい、魔人がいるんだぜ。少しでも戦力は多い方が…」

「魔人は特殊な結界を持っていてな、普通ではダメージを与えられないんだ」

「なんと…」

「ちっ、みすみす見逃すしかないって事か…ルーク殿たちはどうするつもりだ？」
「少し…奴と話したい事があってな…」
「話？魔人とか？」
「……」

腑に落ちない顔をしていたが、結局コルドバが折れ、部隊を率いて塔を出て行った。複雑な表情をしているかなみと志津香の肩に手を乗せ、ルークが口を開く。

「大丈夫だ。さあ、行くぞ」

―リーザス城　東の塔　二階―

「あ、ランス！どうしたの、こんなところで？」
「うむ、少し最上階に用があってな」

東の塔にやってきたランスたちが見たのは、巨大な杭の先端に金属を取り付けているマリアと、その側で作業を手伝っている、リック、メナド、レイラ及び赤の軍の姿だった。作業中のマリアにシィルが尋ねる。

「何をなさっているんですか？」
「上の階にガーディアンのシーザーがいてね。まともに戦っても勝てそうにないから、これで壁に串刺しにして、身動き取れないようにしようと思って」
「お恥ずかしい話です…」

リックが少し悔しそうにしている。先程のルークの戦いを見て、沸き上がるものがあるのだろう。だが、今はリーザスの為勝利を優先。我が儘を言う訳にはいかないと、自分を押し殺している。

「あれ、かなみとルークさんは？」
「二人は西の塔よ、メナド」
「こ、これはリア王女！失礼しました！」
「あら、そんなにかしこまらなくてもいいのに。それと…かなみは親友だから判るけど…ルークねぇ…」
「こ、これは別に深い意味は…」
「むっ、待てよ…」
「どうかしたの、ランスくん」

しどろもどろになっているメナドを余所に、ランスがマリアの言葉を聞いて考え込む。そして、一つの結論に至る。

「ここにシーザーがいるという事は…ぐふふ」
「お、悪い顔。そして儂は良い予感」

パラライズの粉を見ながらイヤらしい顔で笑うランス。カオスがその顔を見ながら、何か良い予感に胸を弾ませる。

ー リーザス城　東の塔　最上階 ー

「なんか寒気が…」

ノスの裏切りとジルの復活をアイゼルから聞き、最上階で途方に暮れていたサテラが突然寒気を感じ、嫌な予感がする。それは数分

後、的中する事になる。

第５９話　魔剣カオス（後書き）

［モンスター］
オイウェート
　ゼス南の熱帯雨林地方にしか存在しない大型モンスター。特殊な転移魔法で、延々と召喚され続けていた。

ＮＡＴＯ
　冷凍系の攻撃しかダメージを与えられない巨大な鎧のモンスター。攻撃力も高く、中々の強敵。

［技］
属性パンチ・氷
使用者　アレキサンダー
　アレキサンダーの必殺技。水の神の力を借り、己の拳に冷気を纏わせる。殴られた相手は、その箇所が凍り付いてしまう驚異の技である。

［装備品］
魔剣カオス
　ランスが手に入れた魔人を斬る事の出来る伝説の魔剣。自らの意志を持っているが、その中身はスケベ親父そのもの。心の弱い者が持つと、その心を悪に染めてしまうという呪いの剣。本人は魔人を斬れる唯一の剣と主張しているが、対になる聖刀日光もその能力を保有する。

［アイテム］

パラライズの粉

対象を短時間の間麻痺させる事が出来る魔法の粉。強い相手には効きにくいが、多感症だったりすると、無駄に効いてしまったりする。

第６０話　無敵結界を破りし者

ーリーザス城　東の塔　最上階ー

「サテラ様」

「ん、どうしたシーザー。サテラは今忙しいんだ。うーん、どう謝ればホーネットは許してくれるかな…」

三階から報告に上がってきたシーザーを一瞥し、部屋の奥で頭を悩ませるサテラ。何せノスに騙されて魔王を復活させてしまったのだ。ごめんで済む話ではない。

「下ノ階ニイル侵入者デスガ、ランスノ声モ聞コエテキマス」

「なにっ！ふふ、遂にイシスの体の仇を取るときが来たみたいだな！」

うーん、と唸っていたサテラだが、シーザーの報告を聞いて俄然やる気を取り戻す。側に置いてあった鞭を握りしめ、シーザーに指示を出す。

「ランスの奴には地獄の苦しみを与えてやらないとな。シーザー、少しだけ下で足止めを頼む。どんな苦しみを与えれば満足できるか、サテラは少しだけここで考えてから行く」

「ハイ、サテラ様」

「ふふふ、今まで誰も聞いた事のないような情けない悲鳴を上げさせてやるぞ！」

「サテラ様、ソレハフラグトイウモノデス」

「ん？何か言ったか？」

「イエ、ソレデハ下デ足止メヲシテキマス」
「頼んだぞ」

下の階に降りていくシーザーを見送りながら、サテラは先程までとは違いノリノリで考え事を始める。未だホーネットへの謝罪方法が思いつかない中、嫌な事はとりあえず置いておいて、目の前の楽しい事だけを考えようとする。涙ぐましい努力であった。

ーリーザス城　西の塔　最上階ー

「……」

騒がしい東の塔とは対照的に、西の塔の最上階は静まりかえっていた。部屋の奥にはアイゼルが一人立ち尽くし、目を瞑りながら考えを巡らせている。人類圏侵攻、ノスの裏切り、そして、魔王ジルの復活。最も人類を虐殺した、歴代最悪の魔王。主であるホーネットが目指す人類不可侵とは正反対の思想を持つ彼女の復活に、アイゼルは深く後悔する。その復活の片棒を担いだのは、紛れもなく自分。ふと、少し前に出会った人間の言葉が思い出される。

「ホーネットは、人類を傷つけるこんなやり方を望んじゃいない！お前らは、ノスに騙されているんじゃないのか!?」

アイゼルがその言葉を思い返していると、階段を何者かが上がってくる。今誰かと会う気分ではない。それが人間なら尚更だ。不機嫌そうに階段の方を見るアイゼルだったが、上ってきた人物を見て驚く。それは、今思い返していた人間である、冒険者のルークであった。後ろには一度は惚れた相手である志津香と、あの場にいた女

忍者。それと、見慣れぬ神官を引き連れていた。

「あの時の人間か…」

「アイゼル。やはり最上階にいる金髪の男というのはお前だったか…」

「あれが、魔人アイゼル…」

ルークたちの中で唯一アイゼルを知らないセルが身構える。セルにとっては最も忌むべき存在、魔の者の筆頭である魔人だ。ルークたちを見ながら、アイゼルがため息をつきながら口を開く。

「悔しいが、貴様の言うとおりだった…ノスが裏切り、魔王ジルが復活を遂げた。最早どうする事も出来ん…」

「無責任な。あんたにも責任があるでしょ！」

「志津香さん…すみませんが、私ではノスもジルも止める事は出来ない…」

志津香に文句を言われ、アイゼルが悲しそうな表情で答える。そのアイゼルにルークが言葉を投げる。

「随分とまあ、情けない事を言うもんだな」

「…黙れ。貴様らのような下等な人間では、あの二人の恐ろしさも判らないのか。そもそも、貴様らはここに何しに来た？」

「ノスのいる中央の塔を上るためには、ここにある装置を動かしてトラップを止めなきゃならないんでな」

「装置…？ああ、これか」

志津香に対しての態度とは明らかに違うものを取るアイゼルだが、ルークの言葉を聞いて周囲を見回すと、アイゼルのすぐ側にレバー式の装置が置いてあった。それに手を伸ばし、すぐさまレバーを動

かして装置を解除する。ルーク以外の三人、特にセルがその行動に驚く。

「なっ！」

「魔人が装置を…」

「どういうつもり？」

「特に他意はありませんよ、志津香さん。最早ノスに義理立てする必要など、ないですからね」

「俺たちと敵対する気もないという事か…」

「ふん、貴様らとやりあうつもりももうない。さあ、装置は切った。今すぐ目の前から消えろ。今は誰とも会いたくない気分なんでな」

「自分の行動を後悔して、ウジウジと落ち込んでいると言ったところか。見た目ほど男らしくはないんだな」

「…さっさと消えろ！」

やりあう気がないのであれば、ここに長居する必要も無い。ホーネット派のアイゼルとわざわざやり合うのは、ルークにとっても無駄というもの。早くしなければジルが力を取り戻してしまう。他の三人に目配せをし、階段を下りていこうとするが、部屋を出る前にアイゼルに質問を投げる。

「それで、お前はこれからどうするんだ？まずはホーネットに今回の報告をして、その後は？」

「いや、私はホーネット様の下に戻るつもりはない」

「…なんだと？」

その言葉を聞いたルークの足が止まる。アイゼルに向き直り、若干の殺気を混ぜながらもう一度問いかける。

「どういう事だ？戻る気がないだと？」

「このような失態を晒しておきながら、おめおめと戻る事など出来ん。報告はサテラに任せ、私は姿を消すつもりだ」
「…自分の起こした事の責任も取らずにか？」
「責任？どう取れというのだ？まさかノスやジルに立ち向かえなどと言うのではあるまいな。貴様らのような人間と違って、圧倒的な力の差を私は理解している。無駄な行為だ」
「…ホーネット派はどうなる。ノスに引き続き、お前まで抜けられては、ケイブリス派との戦いはますます厳しいものとなるのではないのか？」
「確かにそれに関しては申し訳ないと思う。だが、このような恥を晒して戻るのは私のプライドが許さん。それに、ジルが復活した今、最早我らの戦争も無意味になる可能性があるな」
「ホーネットを見捨てるつもりか！？」
「ホーネット様はお強いお方だ。私などいなくとも、これまで通り立派に皆をまとめていくさ」

全てを投げたような表情をしながら、淡々と言い放つアイゼル。無責任な発言にかなみと志津香がアイゼルを睨み付けるが、それ以上に怒りを燃やしている人物が目の前にいた。ルークが静かに口を開く。

「かなみ、志津香、セルさん。装置は解除したから、先に三人で中央の塔に向かっていてくれ」
「先にって…ルークさん？」
「三人というのは…まさか、残るつもりですか！？」
「何する気よ？」
「あの野郎を一発ぶん殴らないと、俺の気がすまん！」

ーリーザス城　東の塔　最上階ー

「がははは、感度が良すぎるぞ！この淫乱魔人め！」
「んゆーっ！」

その頃東の塔では、パラライズの粉で痺れて動けなくなったサテラがランスに体をまさぐられながら、今まで誰も聞いた事のないような情けない悲鳴を上げていた。

ーリーザス城　最上階ー

「ぷはっ。ふん、不味いな」
「次はもっと上質な者を捕まえてきましょう」

リーザス城の最上階にはジルとノスがいた。ジルが手に持っていたものを放り捨てる。それは、先程まで人だったもの。ノスがモンスターに捕まえさせてきた若い女性だ。その生き血を吸いながらジルは自身の力の回復を行っていた。だが、既に三人もの女性の全身の生き血を啜ったが、大した効果はなかった。ジルが満足するほどの上質な血を持った女性、そんな者は中々手には入らない。ジルもそれは理解していたため、質よりも量を取る。

「いや、厳選する必要は無い。とにかく沢山の女を連れてこさせろ」
「かしこまりました。今城下町に大量のモンスターを放っています。もう少々お待ちを…」
「急げよ」

ノスはこれまでヘルマン軍には秘密で隠し持っていた自身の手駒

たるモンスターを、ここにきて大量に呼び出していた。戦に終わりの見えかけていた矢先のモンスターの大量発生に、解放軍も手をこまねく。そしてその一部は、リーザス城領地内にある城下町に向かっていた。

―リーザス城下町　情報屋前―

「きゃぁぁぁぁ！」

解放軍の後を追うように、城下町には少数ではあるがゲリラ軍がやってきていた。つい先程までの段階であらかたモンスターを退治し終え、一息ついていた矢先に大量のモンスターが町を襲う。ゲリラ軍も抵抗するが、次々とその数を減らされていき、町の住民にも被害が出始める。モンスターから悲鳴を上げながら逃げているのは情報屋の娘、由真。必死に逃げているが、車椅子では振り切る事は出来ず、椅子の後方にモンスターの手がかかる。

「っ！助けて…ルークさん…」

「幻夢剣！」

恐怖に目を瞑り、男性恐怖症である由真が唯一信頼している男の名前を出す。その直後、モンスターが両断される。由真が目を開いて見たのは、闘技場の元チャンピオン、ユラン・ミラージュ。

「ユランさん！」

「さっ、早く逃げるよ！とりあえず酒場へ！」

城下町に少数で乗り込んだゲリラ軍のリーダー、ユランが由真の

車椅子を押して駆ける。目指すのは一部の住人が避難している酒場、ぱとらっしゅ。側まで行くと、酒場の親父が外に出て扉の前に立ち、大手を振ってユランと由真を向かい入れる。酒場の中に入り、一息つく二人。

「大丈夫だったか、ユラン？」
「ああ。それより、危ない真似するんじゃないよ。外には出るなと言っておいただろ」
「女のお前が命張っているんだ。男の俺が黙っていられるか！それで、外の様子は？」
「最悪だ。どんどんモンスターが集まって来やがる」

ユランがため息をつく。少人数でゲリラ活動を続けていたユランは、既に疲労困憊。このまま戦えば、近い内に敗北は必至。ユランの言葉を聞いたパルプテンクスが、不安そうに父親の背中にしがみつく。

「お父さん…」
「心配すんな。お前は俺が必ず守ってやる」
「こんな時…ルークさんがいてくれたら…」
「アキ…そうね…ルークさん…」
「ルークか…それとランスなんかもいりゃ、最高なんだけどねぇ…」

由真同様、ユランに助けられて先に酒場に避難していたアキが呟く。姉のユキもその言葉に同意する。二人の言葉を聞いて、ユランが少し前に闘技場で戦ったルークとランスを思い出す。彼らがいてくれたら、どれほど頼もしい事か。その時、酒場の扉が強く叩かれる。部屋の中を緊張が包み、ユランが剣を構える。扉が開け放たれ、立っていたのはチンピラ風の男にユランが斬りかかろうとする。

「幻夢…」
「おい、待ちやがれ。解放軍のルイスってもんだ！いきなり斬りかかろうとするな！」
「なんだい、驚かすんじゃないよ。そんな面だから、モンスターが化けてるのかと思ったじゃないか」
「酷ぇ話だぜ、全く…」

救援に来たらいきなり斬られそうになったルイスが流石に焦る。構えを解きながら、ユランが外の様子を見ると、解放軍の一部が救援に来てくれたようで、モンスターの殲滅を開始していた。

「とりあえず、まだ隠れてな。だけど、俺たちが来たからにはもう安心だぜ！けっけっけ！」
「その面で笑うなよ…」
「それも爽やかとはほど遠い笑いだな、おい」
「救援に来てくれるなら、ランスさんが良かったなぁ…」
「私も…出来ればルークさんが…」

散々な言われようのルイス。だが、特に気にする風もない。割とこういう扱いには慣れているのだろう。パルプテンクスと由真がぽつりと呟いたその言葉にルイスが反応する。

「おっ、なんだい。ルークの旦那の知り合いか。城に来てるぜ、ランスの若造も一緒だ」
「えっ！？」
「なんだい、二人とも解放軍に参加していたのかい…」
「参加どころか、二人とも中心人物だぜ。今は城の方で、敵の親玉連中と戦ってるはずだぜぇ」

その言葉に、酒場の中の者たちが歓喜する。かつて自分たちを救

ってくれた知り合いの冒険者たちが、解放軍の中心人物としてリーザス奪還に動いているのだ。ユランがゆっくりと口を開く。

「さて…あの二人には負けてられないねぇ…もう一度行って来るかな！」

「お、やる気満々じゃねぇか、姉ちゃん。ぎゃはは、俺もまだまだ殺し足りねぇから、もう一暴れといくかい！」

笑いながらユランとルイスが扉から出て行き、酒場の前でモンスターと戦い始める。その背中を見送りながら、酒場の中に避難している者たちの目は希望を取り戻していた。

「姉さん…やっぱり、ルークさん来てくれたんだね…」

「ええ…本当に、白馬の王子様みたい…」

デル姉妹が肩を寄せ合い、手を握りあう。その手の中には、しっかりとやすらぎの石が握られていた。

―リーザス城　三階―

「ランス！東の塔も解除が終わったのね！？」

「おうよ、たっぷりと楽しませて貰ったぜ！」

「楽しみついでに、儂にあの魔人を斬らせてくれたら最高だったのに…」

「馬鹿者。魔人といえど、あんなに可愛い娘を殺すなど勿体ない。それに、処女もまだ奪っていないんだぞ！」

「そちらにも魔人がいたのですか！？」

お互いに装置の解除を終えたルーク組とランス組は、中央の塔で合流する事に成功した。東の塔にも魔人がいた事を聞き、セルが驚く。

「魔人サテラとシーザーがいました。どちらも逃がしてしまいましたが…」
「まあ、俺様の敵ではなかったがな。がはは！」
「そちらにも、という事は、西の塔にも？」
「はい、マリス様。魔人アイゼルが最上階に…」
「そういえばルークの奴はどうした？」

上機嫌だったランスが、ようやくルークがいない事に気がつく。言いにくそうにしているかなみとセルを見て、志津香がその問いに答える。

「…ルークは、一人で残ったわ。アイゼルをぶん殴るんですって」
「な！？たった一人で魔人と戦うつもりですか！？」
「無茶です！カオスも持っていないのに。今すぐルークさんを助けに行きましょうです！」
「あの兄ちゃん、死ぬよ？儂がなきゃ、魔人の結界破れないですよ？」

トマトが走っていこうとするが、ランスに掴まれ阻止される。じたばたと足を動かすが、先に進む事が出来ない。カオスがはっきりとルークが死ぬと言い放ち、その言葉を聞いて珍しくランスが考える。が、出した答えはトマトが望んでいたものとは逆。

「先へ進むぞ。ルークがそう指示したんだろう？」
「…ええ」
「モタモタしていたら、余計厄介な事になるからな。さっさと行く

ぞ！」
「でも、ダーリン。ルークじゃ魔人には…」
リアが尋ねてくるが、それを無視してランスは先に進んでいく。志津香がその後ろを歩き、珍しく不安そうな声でランスに問いかける。
「ランス…ルークのあの能力、魔人にも効くと思う…？」
「知らん。効かなかったら、ルークが死ぬだけだろ」
「ランス様…もう少し…その…」
「ルークさんが、死ぬ訳ありません！」
「なら、あいつを信じて待っていろ。馬鹿者」
かなみの反論を聞いてそう返すランス。ランスなりの不器用な励ましだったのかもしれないと、後ろで聞いていたマリスは思う。ルークを除いた面々を引き連れ、階段を上りながらランスが唐突に笑い声を上げる。
「がはは、だがルークののろまが遅れている間に、ノスとジルは俺様が倒してしまおう。そうすれば、この戦争の英雄は俺様だ。人類最強を倒した程度の功績、あっという間に吹き飛ぶな。そうすれば、リーザスの美女たちは俺様にメロメロだ」
「もう、あんたの頭の中にはそれしかないの…」
「全く…」
ランスの笑い声に、シィルとリア以外の面々が呆れかえる。だが、確実に空気は一変した。その狙いがあったのかは判らないが、ランスたちはそのまま最上階を目指していく。ノスとジル討伐のために。

ーリーザス城　西の塔　最上階ー

部屋の中は不気味な静寂に包まれていた。志津香たちが去ってから既に数分。目の前に対峙しながら、お互いに黙ったまま互いを睨み付ける。先に口を開いたのはアイゼル。

「私を殴ると言ったな？正気か？」

「当然だ」

「ふん、やはり狂人であったか。人類と魔人の共存などという、イカれた夢を持っている時点で、怪しいとは思っていたがな」

「狂人でも、腰抜けよりはマシだろ？」

「なんだと…」

ルークを挑発するつもりが、逆に挑発仕返され顔を歪ませるアイゼル。そのまま声を荒げる。

「この私を腰抜けと言うのか！」

「腰抜けだろう？ノスやジルからは尻尾を巻いて逃げ、恥ずかしいから雲隠れする。情けないな、アイゼル。そんなお前がプライドなどと口にするとは…」

「人間如きが、魔人であるこの私を侮辱するな！」

「人間も魔人も関係ないだろう。一人の男として、お前のその態度が気に入らん」

「驕るなよ、私がその気になれば、貴様のような人間など、一瞬の内に肉塊に出来るのだぞ！」

アイゼルが殺気を向けてくる。だが、ルークはそれに動じる様子もなく、更に言葉を続ける。

「まあ、お前が腰抜けかどうかは、正直どうでもいい。一番許せないのは、ホーネットを見捨てる事だ。ホーネットへの忠誠は、まだあるんだろう？」
「当然だ。あの方の為に私はケイブリス派と戦っているんだ」
「なのに、自分のちっぽけなプライドの為にそれを見捨てるだと…ふざけるな！」
「貴様のような人間には、魔人としての誇りなど判らん！」
「判りたくもないな。自分の大切な人を見捨てる気持ちなど…」

ルークもアイゼルに向けて殺気を飛ばす。アイゼルもそれに動じた様子もない。人間如きの殺気など、気にもしていないのだろう。

「アイゼル、もう一度だけ聞く。ホーネットの下に戻るつもりは…」
「愚問だな。戻るつもりはない！」
「そうか…なら、宣言通り貴様を殴らせて貰う！」

そう言い放ち、一気にアイゼルの方へ駆けてくるルークを、アイゼルは冷ややかな目で見る。なんと愚かな人間だ。無敵結界の事を知らないのだろう、と。魔人であるアイゼルの周りを包む無敵結界がある限り、ルークの拳が自分に届く事はない。目の前まで近づいたルークが右拳を振りかぶる。その姿を見ながら、アイゼルは無敵結界で防いだ後の対処法を考える。殺すのは容易いが、魔王ジルを復活させた落ち度もあるため、それは美学に反する。力の差を見せつける程度に壁に叩きつけるのが望ましいか。そんな事を考えながら、自分の左頬に迫っている拳を平然と眺めていた。

ゴッ――――

部屋に鈍い音が響く。その音を聞きながら、アイゼルは天井を見ていた。呆然としながらも、すぐに異変に気がつく。何故自分は倒

れているのだ。左頬を激痛が走る。手を添えてみれば、口から血が出ているのが判る。ここにきて、ようやくアイゼルは答えに至る。

「な…殴られたのか…私が…」

体を起き上がらせ、目を見開く。頬から脳に伝わる痛みは、確かに殴られた証。驚いた様子でルークを見る。自分とは少し離れた位置に立っている。いつの間に離れたのかと思ったが、離れたのはアイゼル。殴られた拍子で、ほんの少しだけ吹き飛ばされたのだ。

「馬鹿な…貴様、カオスを持っていたのか…」

「そんなもの持っちゃいないさ。宣言したはずだぞ、貴様を殴るとな」

「有り得ない…有り得るはずがない！」

立ち上がり、ルークの持ち物をジロジロと見回す。腰に下げた剣は、封印の間で見たカオスとは全くの別物。奴の言うように、どこにもカオスは見つからない。アイゼルは思う。ノスの裏切りやジルの復活にショックを受けていた自分は、無意識の内に無敵結界を解いてしまっていたのだろう、と。魔人ますぞぇのような事をしてしまったな、と自虐的に笑う。すると、ルークが剣を抜き、口を開く。

「約束して貰おうか。俺と戦い、負けたらホーネットの下に戻ると」

「魔人である私に一騎打ちを挑むだと…馬鹿が！命だけは助けてやろうと思っていたが…」

「口から血を流しながら、随分と大層な口をきくじゃないか」

「私の油断が貴様に勘違いさせてしまったようだな。奇跡は二度は起こらんぞ！」

あくまで無敵結界は破られたのではなく、自分が解いてしまって

いたと考えるアイゼル。意識を集中させ、自分の周りに無敵結界が張られているのを確認する。今度は問題ない。確実に張られている。

「奇跡かどうか…試してみるか？」

「驕るな、人間！力の差を見せてやる！」

アイゼルが右手で剣を抜きながら、左手で雷の矢を放ってくる。向かってきた雷の矢を躱しながら、ルークが再度アイゼルに駆け寄る。近寄ってきたルークの体目がけ、アイゼルが剣を振るうが、リックやトーマに比べれば遙かに劣る遅さ。ルークはそれを難なく受け止め、かち上げる。

「ぬっ！？」

アイゼルは剣を右腕ごとかち上げられ、無防備になったその腹を剣の峰で思い切り打ち付けられる。

「がはっ…」

激痛に顔が歪む。無敵結界は確かに張られているはず。なのに、何故人間の攻撃を自分が受ける。混乱するアイゼルの目の前に、再度ルークの右拳が迫っていた。目前まで迫っていた拳を避ける手段はなく、身構えるアイゼル。そして、気を張っていたからこそ、異変に気がつく。ルークの拳が、自分を覆っている無敵結界を無視するかのようにすり抜け、自分の顔面を捕らえた事に。グシャ、という鼻の骨が折れた音が聞こえる。そのままアイゼルは、再度地面に叩きつけられる。折れた鼻から血を流しながら、目を見開いてルークを見る。

「お前は何者だ…」

理由は判らない。だが、目の前の人間は魔人の結界を無効化している。その事に、アイゼルは得体の知れぬ恐怖を抱く。自然と体が震える。

「何故結界を無視出来る…」

本来、アイゼルは戦う必要のない相手。彼を無視し、すぐにでもノスやジルの討伐に行くのが正しい事はルークも判っている。だが、我慢できなかった。ホーネットを裏切った訳でもなく、今なお忠誠を誓っているにも関わらず、その下から離れようとしているアイゼルが。みすみすホーネット派を不利に追いやりかねない目の前の事態が。アイゼルを見下ろしながら、ルークははっきりと口にする。

「驕るな、魔人。力の差を見せてやる！」

―リーザス城　最上階―

「…ジル様、奥の部屋で食事を取りながら待っていて下さい」

「ん？どうかしたか、ノス」

ノスの言う食事というのは勿論吸血の事。今も若い女性の血を吸っているジルが、不思議そうにノスに尋ねる。ノスは遠見の魔法を使いながら、ジルに進言する。

「ここへ解放軍の連中が近づいています。既に部屋の外に放っていた四体の将軍も倒した模様。少し騒がしくなると思いますので…」

「ほう…我らに挑んでくるとは、人間は本当に愚かな存在だ…くく

く」
「はい。すぐに片付けます故、奥へ…」
「うむ。終わったら呼びに来い」

血を吸い終えた女を投げ捨て、部屋で気絶していた三人の別の女を魔法で宙に浮かばせて運ぶ。そのままジルは奥の部屋へと移り、この広間にはノスただ一人が残るのみとなった。近づいてくるランスたちを遠見の魔法で見ながら、その手に握られているカオスに気がつく。

「カオスめ、無事だったとは…今度こそ粉砕してくれよう」

そう呟き、ノスが呪文を唱え始める。ノスの周りに散らばっていた、ジルが血を吸い終わった女性たちの死体が集まっていき、肉塊が盛り上がっていく。

「出でよ、死複製戦士！」

ノスがそう言うと、その肉塊が形を成していく。すると、ランス、シィル、かなみ、志津香、トマト、セル、リア、マリスとそっくりの形をした八体の屍人形が出来上がる。それらを周りに待機させながら、ノスは部屋の中央に仁王立ちする。

「この死複製戦士で見極めさせて貰おう。貴様らの中で、誰を一番先に葬るべきなのかをな…」

アイゼルやサテラにあった油断や驕りは、ノスにはない。万全の体制で、ランスたちが来るのを待つ。西の塔でルークとアイゼルが相まみえる中、城の最上階ではルークを欠いたままでの決戦が始まろうとしていた。

第６０話　無敵結界を破りし者（後書き）

［人物］

ユラン・ミラージュ　（３）
ＬＶ　２１／２７
技能　剣戦闘ＬＶ２
　コロシアムの元チャンピオン。ランスに敗れたのが内心相当悔しかったようで、人知れず鍛錬を重ねていた。ゲリラ軍を指揮し、解放戦に参加。

パルプテンクス　（３）
　リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主の娘。かつて盗賊団から助けてくれたランスの事を今でも思っている。

「ぱとらっしゅ」の親父　（３）
　リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主。ヘルマンに城下町が支配された際、無料で炊き出しなどを振る舞っていた。

ユキ・デル　（３）
　冤罪の罪で投獄されていたのをルークに助けられた女性。今は妹と一緒にカジノで働いている。ルークに密かな思いを寄せる。

アキ・デル　（３）
　ユキの妹。今でもカジノで働いている。姉と思い人が一緒なのを少し悩んでいる。

朝狗羅由真　（３）
　リーザス城下町の情報屋「ＮＥＴ」のオペレーター。真知子とは情報屋仲間で知り合い。ルークの事を色々聞かされ、自分も積極的

に行くべきかと悩んでいる。

［モンスター］

将軍

　ノスが配下に置いているモンスター。鎧に守られた固い装甲と居合い斬りが特徴の強敵。

［技］

死複製戦士

　魔力を帯びた肉塊で対象とそっくりの屍人形を作り出す魔法。死体そのものを動かす死霊魔法とは少し違うが、こちらもまた禁呪であり、現代では殆ど知る者のいない魔法である。

第６１話　ノス始動

―リーザス城　西の塔　最上階―

「何故だ！何故当たらない！？」

アイゼルががむしゃらに剣を振るう。だが、その攻撃はルークに届かない。全て躱され、その度に反撃を食らう。近接戦闘において、アイゼルよりもルークの方が数段上手であった。

「真空斬！」
「ぐあっ！」

アイゼルが激痛に顔を歪める。魔人である自分が、目の前の人間に遅れを取っている事が信じられない。そして、それ以上に結界を無効化してダメージを与えられているという事態に混乱し、その攻撃は単調なものとなる。アイゼルは完全に悪循環に陥っていた。繰り出した剣をかい潜られ、三度顔面に拳を振るわれ、後方に吹き飛ぶ。奥歯が折れ、鼻から流れた血で顔は汚れていた。

「どうした、これが貴様の全力か？」
「な、舐めるなぁ！電極直雷！」

声を荒げながら、アイゼルが強烈な電撃を放つ。だが、それを全て躱すルーク。通常の魔法使いが放つよりも遙かに多い電撃であるにも関わらずだ。魔人の戦い方は少し人間のものとは違った特色がある。それは、防御を無敵結界に頼り切り、攻撃に全力を集中しがちになるというものだ。長い間染みついた戦い方は、互いに無敵結

界を無視しあえる魔人同士の戦争が始まった際、多くの魔人が矯正に苦労したものだった。アイゼルも例外ではない。ルークが結界を無効化出来る事は判っているのに、電極直雷に全力を傾けてしまい、結果無防備になる。それを待っていたとでも言うように、ルークが一気に間合いを詰め、アイゼルの腹に蹴りを入れる。

「がはっ…」

口から溜まっていた血が吐き出される。腰が落ち、下がった顔面を下から剣がかち上げる。

「うおりゃぁ！」
「……っ！」

顎の辺りに直撃し、首が真上を見る形にかち上げられる。天井を見ながら、アイゼルが一つの疑問を持つ。先程からルークは、魔人の自分の無防備になる隙を突いてきているのだ。長時間戦い、アイゼルの癖に気がついたというならいざ知らず、戦い始めた直後からそれは続いている。それはまるで、初めから魔人の戦い方の癖を知っているかのような振る舞い。

「（魔人と…戦い慣れているとでも言うのか！？有り得んっ！）」

体勢を立て直し、ルークを睨み付けながら、アイゼルはその考えを否定する。魔人と戦い慣れている人間など、存在するはずがないのだ。

「（昔のホーネットと戦い方が同じだな…貴様の動き、手に取るように判るぞ）」

ルークがそう思いながら、アイゼルに連撃を繰り出す。アイゼルが思うとおり、本来ならば魔人と戦い慣れた人間など存在するはずはない。だが、目の前の男は特別だった。十年もの長きに渡り、ただひたすらに一人の魔人と戦い続けた。多くの魔人の得意とする戦法を、その魔人から話に聞いていた。だからこそ、無防備になる瞬間が手に取るように判る。

「電極直雷！」
「ふっ！」

この魔法も全て躱す。以前、サイアスに尋ねられた事があった。行方不明から帰ってきてから、異常に魔法を躱すのが上手くなっているのは何故かと。だがそれも無理の無い事。ホーネットが操る五つの魔法玉から繰り出される、全方位攻撃に十年も付き合っていれば、自然と目が慣れてくる。あれに比べれば、冷静さを欠いたアイゼルの放つ魔法など躱すのは容易い。

「何故当たらん！電極ちょ…」
「ふんっ！」
「ぐらぁっ！」

肩口から真一文字に斬り伏せられ、アイゼルが膝をつき、恨めしそうにルークを見る。それを見下ろしながら、ルークが口を開く。

「ホーネットの下へ戻れ。まだホーネットには、お前の力が必要だ」
「はぁっ…はぁっ…断る！ホーネット様はお強い方だ。私一人いなくとも…」
「その認識が間違っているんだ」
「間違い…だと…？」

ルークの言っている事が理解できないアイゼルは、ルークの顔を見ながら言葉の真意を尋ねる。ルークがゆっくりとその問いかけに答える。

「ホーネットは…気高い女性ではあるが、強くなんかない。一人のか弱い女性だ」

「なっ！貴様、ホーネット様を侮辱するつもりか！？」

ルークの言葉にアイゼルが怒りを露わにする。その様子を見ながら、ルークがため息をつき弁解する。

「違う。そういう事ではない」

「許さん…許さんぞ！私だけでなく、ホーネット様も侮辱するなど。貴様は万死に値する！」

目を見開いたアイゼルの体が、突如として膨張する。筋肉が服を破き、その全長が三メートルを越す。アイゼルを見上げる形になりながら、ホーネットから聞いていたアイゼルの特技を思い返す。

「そうか…これがアイゼルの隠し球、自らの身体能力を上げる変身能力か…」

「愚かな発言をあの世で後悔するがいい。最早肉片一つ残さぬ！」

ルークを見下ろす形で、アイゼルが長身から剣を振り下ろす。巨体からは想像つかないスピードで振るわれた剣をなんとか躱すが、地面に叩きつけられた剣の衝撃で、大きな窪みが出来る。

「私を魔法使いタイプ等とでも思っていたのではないだろうな？私の真骨頂はこの…」

「知っている。ご託はいいから掛かってこい」

「知っているだと？ハッタリを…死ねぇ！」

ーリーザス城　最上階ー

広間の扉が開け放たれる。遠見の魔法で見ていたノスは、入り口の方を見ずとも、やってきたのはランスたちだという事が判る。部屋に入ってきたランスたちは呆然とする。ノスの周りに、自分たちそっくりの人間が立っているのだ。

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ…」
「魔人ノス…」
「なんだあれは！？」
「生気を感じないわ…多分、魔法で作った人形か何かだと思う…」
「面白い余興であろう？」
「ふん、俺様の超絶美形を再現出来ていないな。まだまだだ！」

ノスの言葉をランスが切って捨てる。そのやりとりの後ろで、トマトが部屋の中を見回しながら、疑問を口にする。

「あれ、ヘルマンの方々が見当たりませんですかねー？」
「復活した魔王ジルの姿も見当たりません」
「パットン皇子ならもういないぞ。計画にはもう不要だったんでな」
「まさか、殺したの！？」
「さて、運が良ければ生きているのではないかな。ははは！」
「何て奴…」

高笑いを上げるノスに嫌悪感を露わにする志津香。ランスがノスに剣先を向け、問いかける。

「で、ジルの奴はどこだ。一発やってやらんとな」
「ジル様なら奥の部屋だ。だが、貴様らが会う事はない。ここで死ぬからな」
「ふん、死ぬのは貴様だ。刀の錆にしてくれるわ！」
「いや、儂、錆びませんよ？」
「ふん、行け。人形共よ！」

ノスの言葉に、八体の屍人形が一斉に襲いかかってくる。すぐに他の者も身構え、正面から対峙する。後ろで腕を組みながら見ているノスに、ランスが文句を言う。

「楽しやがって、この卑怯者め！」
「そんな事は後でいいから、今は人形を倒すのに専念しなさい！」
「見極めさせて貰うぞ…」

迫ってくる屍人形。シィル人形が炎の矢を放ってくるのを、志津香が相殺。かなみが手裏剣を投げると、ランス人形の左腕に命中する。

「あれ？簡単に当たった…」
「こら、かなみ！俺様に何てことを！」
「知らないわよ！」

言い合いをしていると、志津香人形が火爆破を放ってくる。全員が直撃を受ける。

「おわっ！…って、そんなに熱くないぞ。がはは、志津香も大したことないな」
「違うわよ。あいつら、確かに似ているけど、そんなに強くないわ」

「みなさん、大丈夫ですか？いたいの、いたいの、とんでけー！」
「神のご加護を…」

一応弱いとはいえ火爆破を食らったので、シィルとセルがみんなを回復する。その様子を見ながら、ノスがにたりと笑う。

「ともかく、こんな雑魚どもさっさと片付けるぞ！」
「そのようね。火爆破！」
「はるまき、お願いね」
「がぉー！」

屍人形が恐るるに足りない相手だと判ったランスたちは、一気に攻撃に移る。リアが連れていたペットのはるまきが口から雷を吐き、志津香の火爆破が人形たちを包み込む。ランス、かなみ、トマトの三人も前線で人形を斬り伏せる。地面に崩れた人形たちは、ぐちゃぐちゃの肉塊へと戻っていく。

「うげ…気持ち悪いな」
「儂、あんなの斬ったのか…えんがちょ」
「見るに堪えませんね。神聖分解波！」

マリスが呪文を唱えると、肉塊はドロドロと溶けていき、部屋からその姿を消した。大したダメージを負う事もなく、屍人形を一掃したランスたち。

「がはは、弱すぎるわ！さあ、次は貴様だ！」

ランスがそう言ってノスの方を見ると、先程までその場にいたはずのノスがいない。

「むっ！？どこへ消えた？」
「きゃぁぁぁぁ！」

突如、広間に絶叫が響く。ランスが横を見ると、シィルとセルの目の前にノスが立っていた。右手を高々と掲げ、手のひらの上には巨大な炎の塊が浮かんでいた。

「なっ！？」
「シィルちゃん！セルさん！」
「貴様ぁぁ！」
「回復役を先に潰すのは、定石であろう？」

叫ぶランスにノスが平然と答える。その言葉を聞いたランスは、シィルとセルの方向に一直線に駆け出す。

「二人とも、逃げて！」

志津香が叫ぶが、目前に迫った死の恐怖に二人とも体が動かない。呆然と立ち尽くす二人を見ながら、ノスが炎の塊を投げつける。

「消えろ、グレートファイヤーボール！」
「あぁ…神よ…」
「ランス様…」

激しい炎の塊が、二人の体を包もうとするが、それは目前に間に入った者に阻まれる。二人を、特にシィルを庇うように間に入ったその男は、無防備な背中にグレートファイヤーボールの直撃を受け、業火に包まれながらその体が地面へと倒れ込んでいく。その光景を見ながら、シィルは目を見開き絶叫する。

「ら、ランス様ぁぁぁぁぁ！！」

―リーザス城　西の塔　最上階―

ランスが倒れたのと時をほぼ同じくして、西の塔でも男が膝をつく。だが、それはルークではない。肉体強化をしたはずのアイゼルが、ルークを睨み付ける。それを見下ろすルーク。しかし、ルークも先程までと違い、十分手傷を負っている。額からは血を流し、体には剣で斬りつけられた跡がある。それでもなお、先に膝をついたのはアイゼルであった。

「はぁっ…はぁっ…」

「強化された身体能力に頼りすぎだ。攻撃が単調すぎる」

「黙れ！ごほっ…」

アイゼルが咳き込む。ルークの言うように、身体能力では圧倒的に勝っているアイゼルであったが、変身後の戦法は完全な力押し。そこに技量などは織り交ぜておらず、力と速度でルークをねじ伏せようとしたのだ。だが、ランスの剣を側で見続け、リックやトーマと渡り合い、ホーネットとは十年の時を過ごした。これらの剣の達人と渡り合ってきたルークにとって、ただの力押しであるアイゼルの剣は御しやすかった。その上、ルークを自らの手で殺す事に拘ったアイゼルは、身体強化後殆ど魔法を使ってこなかった。戦いやすいにも程がある。アイゼルがゆっくりと立ち上がろうとする。

「まだだ…まだ勝負はついていない…」

「もういいだろう。俺はお前にトドメを刺すつもりはない。ホーネットの下に戻って貰う必要があるからな。それに、早く仲間と合流

する必要があるんだ」
「…貴様の目的は何だ」
「前にも言ったはずだが。人類と魔人の共存と」
「そうではない。何故ホーネット様にそこまで拘る！」
「……」
「貴様がホーネット様を知っているのは認めよう。命を助けられたというのも、真実かもしれん。だが、ホーネット様に拘る理由が、貴様のイカれた夢に利用しようとしているだけなら、私はこれを放っておく訳にはいかん！」

アイゼルが声を荒げるが、そのアイゼルに叫びながらルークが問う。

「そこまでの忠誠がありながら、貴様の安いプライドの為に主を裏切るなど、忠臣のする事ではない！」
「っ！」

殺気の含まれたその言葉に、アイゼルが押し黙る。言い返す事が出来ない。その様子を見ながら、ルークが先の質問に答える。

「それに、ホーネットを利用するつもりなど、更々ない」
「その言葉を信じろと？ならば、何故…」
「そうだな…口にするのは難しいんだが…一つあげるとするなら、ホーネットの笑顔のためだな」
「笑顔…だと…？」

ルークの言う理由に訳の判らない様子のアイゼル。ルークは頭を掻きながら、言葉を続けた。

ーリーザス城　最上階ー

「ランス様！お願いです、起きてください！ランス様ぁぁぁ！」

シィルが涙を流しながらランスに声をかける。だが、ランスは倒れたままでピクリとも動かない。その様子を見ながらノスが大笑いする。

「ふはははは、まさかカオスの使い手が自分から倒れてくれるとは思わなかったぞ！」

「いやぁぁぁ、ダーリン！！」

「くっ…」

ランスとノスの間に割り込む形でかなみと志津香、トマトとマリスが入り込む。真後ろではランスの体を覗き込みながら泣きじゃくるリアと、懸命の治療を続けるシィルとセルの姿があった。カオスの使い手であるランスを欠いた今、魔人を倒す事は不可能。ノスを睨みながらも、かなみの頬には汗が伝っていた。ノスがゆっくりと歩み寄ってくる。

「では…カオスは破壊させて貰おう」

身構える四人。が、直後広間の扉が大きく開け放たれる。

「突撃じゃぁぁぁ！」

「いっけぇぇぇ、チューリップ1号！！」

「ぬっ！？」

マリアの叫び声と共に放たれた砲撃がノスに直撃する。バレスの

掛け声と共に、部屋に何人かの者たちが一気に押し寄せる。

「マリア！ランたちも！」
「バレス将軍…リックさんとレイラさんも！」
「アレキサンダーさんです！これは頼もしいですかねー！」

広間に押し寄せたのはマリア、ラン、ミリ、ミル、バレス、リック、メナド、レイラ、アレキサンダーの九人。倒れているランスを守るように間に入り、ミリとメナドが飛びかかってノスを斬る。サテラに結界で攻撃が通らなかったのを思い出す志津香だったが、二人の剣はノスの両腕に傷を負わせた。

「嘘っ！なんでダメージを…」
「勿論、儂のお陰じゃ！」

ランスの側にあったカオスが喋り出す。マリスがカオスに向かって問いかける。

「どういう事ですか？魔人を斬れるのはカオス、貴方だけなのでは…」
「儂の能力は魔人の結界を中和する事。その効果範囲は、まあ一部屋分くらいじゃな。このくらいの距離を保っていてくれれば、魔人にダメージは与えられますよ？」
「なるほど、となれば、私たちだけでも十分撃破は可能だと」
「駄目じゃ！魔人を斬って、斬って、斬り刻んで、永遠の地獄に落とすのは儂の仕事じゃ。という訳で、早くランスの奴を回復してくれかんの」
「言われなくてもやっています」
「ランス様…目覚めてください…」

懸命に治療を続けるシィルとセル。その様子を見ながら、ノスが手を顎に当てる。見れば両腕の傷は既になく、傷があった場所を鎧のような皮膚が上から覆っていた。

「ふむ…やはりカオスを破壊する必要があるな…」
「させると思うのかい？」
「残念ながら、ここを通す気はありませんよ」

ミリとリックがそう宣言する。援軍に駆けつけた九名と、元から間に立っていた四名、総勢十三名もの戦士がノスと対峙する。その上、カオスのお陰でダメージを与えられる状況。それにも関わらず、ノスに慌てた様子はない。

「やれやれ。では、貴様らから先に片付けさせて貰おうか」
「よもや、この人数に勝つつもりか！」
「皆さん、油断は禁物です。相手は魔人、どのような秘密があるか…」
「ええ、判っているわ。火爆破！」
「雷撃！」

アレキサンダーの言葉に頷き、先手必勝とばかりに志津香とランが魔法を放つ。それを避ける気はないらしく、魔法はノスに直撃する。それを合図に、一気に数名の者が飛びかかる。

「ふんっ！」
「はぁっ！」
「属性パンチ・炎！」

バレスとレイラが斬りかかり、アレキサンダーが強烈な一撃を腹に命中させる。その全てが直撃し、斬った瞬間体から血が吹き出る。

「なんだい？口だけかい？」

ミリが再び飛びかかって斬りつける。ノスがそれを右腕でガードしようとする。だがその右腕は、先程メナドと共に飛びかかった際、ミリが斬りつけた箇所だ。防げる訳がない。ミリがアリスソードを全力で振るうが、ガキン、という音が周囲に響く。

「な…に…」

ミリが驚愕に目を見開く。ミリの剣は右腕を斬りつけることなく、その腕にしっかりと阻まれていた。先程斬りつけたときとは全く違う硬さ。直後、ノスの鉄拳がミリに迫り、その恐るべき威力にミリの身体が壁に叩きつけられる。

「がはっ…」
「おねえちゃん！」
「ミリさん！」
「よそ見をしている場合か？」
「はっ…きゃぁぁぁ！！」

一瞬の隙を突かれ、ランも同様に驚異的な鉄拳を胸に受け、ミリとは逆方向の壁に叩きつけられる。口から血を出し、地面に倒れ込んでいく。

「くっ…属性パンチ・炎！」

アレキサンダーが再度腹部に一撃入れるが、その顔が歪む。先程と比べ明らかに体が硬いのだ。これではダメージは伝わりきらない。ノスが鉄拳を振るってくるが、それをバックステップで躱し、ノス

を睨み付ける。

「どういう事だ…」

「見て、ノスの体が！」

「あややや、何ですかあれは！」

先程志津香が放った火爆破の煙が晴れてきて、ノスの全身が見える。その体が、所々鎧のような皮膚に覆われている。あんなもの先程までなかった。リックがそれを見てある事に気がつく。

「あれは…全てダメージを受けた箇所…」

「くくく、その通りだ。私の体はダメージを受ければ受けるほど、それに対応するように新たな皮膚が覆う。鉄壁の鎧だ。一度受けた攻撃は私には通用せん。と同時に、受けたダメージも完治する。無敵結界が無くとも、貴様らでは私を倒す事は出来ん！」

「そんなの、反則じゃないですかねー！？」

「受けよ、グレートファイヤーボール！」

ノスの放った魔法が一直線に飛んでくる。治療中のランスをリックが担ぎ、巻き込まれないように素早く避ける。他の者も左右に避けて躱すが、ノスはその動きをしっかりと見ながら一人ずつ潰しにかかる。

「まずは貴様だ…」

「なっ！…はぁっ！」

ノスが一番近くにいたレイラの目の前に移動する。レイラが剣を振るうが、それを先程斬りつけた箇所で受けられる。その鉄壁の体を傷つける事は出来ず、逆に自分の腕が痺れる。

「くっ…」
「レイラさん！はぁっ！」
「ふっ！」

レイラを助けるようにかなみとメナドが援護に入る。メナドが先程と違う箇所を斬りつけると、ダメージが通る。どうやら鎧が覆うのは、ダメージを命中させた箇所だけらしい。ノスがかなみに鉄拳を振るうが、かなみはそれを避け、すれ違い様にくないで斬りつける。その速さにノスが感心する。

「ほぅ、素早いな…では、魔法だ。火爆破！」
「！？」

自分も巻き込まれるという程の至近距離で魔法を放つノス。信じられない行動に、三人が目を見開く。かなみはバックステップでギリギリ躱すが、レイラとメナドが直撃を受ける。

「きゃぁぁぁぁ！」
「うわぁぁぁぁ！」
「メナド！レイラさん！」

かなみが叫ぶが、ノスの魔法の威力は高く、そのまま二人は倒れてしまう。この短時間の間に、既に四人の仲間がやられていた。ノスが火爆破の煙からゆっくりと出てくる。その装甲は更に増していた。

「じ、自分の魔法でも強化されるとは…」
「理不尽ね…」

バレスとマリスが絶句する。これが、魔人。ダメージを与えられ

るようになったところで、本当に勝ち目があるのか。その頬を汗が伝う。アレキサンダーがため息をつきながら、口を開く。

「どうやら、ちまちまとダメージを与えたところで、奴を強くするだけですね。ダメージも完治するようですし…」

「そのようですね。となれば、強烈な一撃で一気に倒してしまうのが得策かと」

「ううん…チューリップ3号が壊されていなければ…」

「となると、この場で最強の一撃というのは…」

トマトの言葉に、他の者も一斉に一人の人物を見る。解放軍での戦で、その魔法の威力は皆が目撃していた。黒色と対を成す、光属性最上級魔法。

「そう期待されると…流石にプレッシャーね…」

志津香が困ったように口を開く。この場で最強の威力を誇る技、白色破壊光線。その使い手である志津香が、ノス打倒の為のキーマンだ。バレスが決意したように言葉を発す。

「志津香殿。時間稼ぎは儂らにお任せを」

「必ず魔法を放つまでの時間は繋いで見せます。詰めはお任せしました」

「志津香、頼んだわ」

全員が志津香を見ている。ゆっくりと迫ってきているノス。その姿を見ながら、志津香が一度目を閉じ、皆の言葉に答える。

「了解。ルークやランスがいなくても勝てるって事を証明してやりましょう」

「ええ、いつまでも頼ってばかりじゃいられないものね」
「うぉぉ、やりますですよー！」

マリアとトマトがそう答える。他の者もそれぞれ剣を取り、拳を握り、幻獣を出す。ノスに向かっていこうとするその背中を見ながら、魔力を溜め始めた志津香が一言だけ呟く。

「みんな、絶対に死なないで」

その言葉に合図するかのように、全員がノスに向かっていく。ミリ、ラン、レイラ、メナドの四人が倒れ、残るはかなみ、志津香、マリア、ミル、トマト、マリス、バレス、リック、アレキサンダーの九人。向かってくる面々を見ながら、ノスが不敵に笑っていた。後方でランスを治療しているシィルとセルが、小さく呟く。

「ランス様…お願いします…起きてください…」
「ルークさん…早く…早く…」

その言葉は、直後聞こえてきた轟音に飲み込まれた。ルークとランスを欠いた中、戦いは更に激しさを増していった。

第６１話　ノス始動（後書き）

［技］

電極直雷

直線の電撃を放つ上級魔法。近年ではあまり使い手のいない、珍しい部類の技である。

神聖分解波

聖なる力で相手の肉体を溶かす神魔法。生きている者の体を溶かす事は出来ないが、その代わり相手の体力を削る事が出来る。

グレートファイヤーボール

巨大な炎の塊を放つ上級魔法。素早さはファイヤーレーザーに劣るが、攻撃範囲は遙かに上。

第６２話　傷だらけの戦士たち

―リーザス城　最上階―

「ぬぉぉっ！」
「あっ…」

バレスが地に倒れ、マリスが壁に叩きつけられる。倒れたバレスを踏みつけながら前進してくるノス。志津香は目の前の惨状を見ながら、静かに魔力を溜める。みんなの犠牲を無駄にする訳にはいかない。

「おねえちゃんの仇！幻獣さんアタック！」
「駄目です、ミルちゃん！」
「…下らん技だ」

ミルがトマトの制止を振り切って、幻獣と共に特攻をかける。が、ノスはその攻撃に眉一つ動かさず、ミルの頭を鷲づかみにし、その体を持ち上げる。

「…っ…っ…」
「子供といえど私は容赦せんぞ…」

ミルの頭からミシミシと音がなる。ノスがその握力でもって、ミルの頭を握りつぶそうとしているのだ。口から涎を垂らし、声にならない悲鳴を上げるミル。

「ミルちゃんを離すです！とぉぉぉぉ！」

「ふんっ！」

ミルを救うため、トマトとアレキサンダーがノスに攻撃を仕掛ける。迫ってくる二人を見たノスは、ミルを興味なさげに放り投げ、二人と対峙する。瞬間、その二人の隙間を縫うようにノスが志津香に魔法を放つ。

「赤色怪光線」

「っ！？」

「はっ！大丈夫ですか、志津香殿」

「ええ、ありがとう」

その赤色怪光線を、リックが愛剣のバイ・ロードで叩き落とす。魔法剣であるバイ・ロードは、魔法をも斬る事が出来る名剣なのだ。ノスは先程からこのように、こちらの隙を突いては志津香に魔法を放っていた。ノスの放つ魔法の速度は速く、無防備である志津香はその攻撃を避ける術がない。一度は他のみんなと共にノスに突っ込んだリックだったが、しきりに志津香を狙っている事にいち早く気がつき、志津香の側でノスの魔法からその身を守っているのだ。仕方のない事とはいえ、この場で最強の剣士であるリックが護衛に回ってしまっている。時間稼ぎをしている面々は更に厳しい戦いを強いられる事となっていた。

「かはっ…あっ…」

「騒がしいぞ、娘」

「貴様！属性パンチ・氷！」

「許さない！いっけぇぇ、チューリップ１号！」

「たあっ！」

ノスの鉄拳が腹部に直撃し、トマトが絶句する。そのまま崩れ落

ちた体を、ノスが蹴り上げ吹き飛ばす。その様子を見たアレキサンダーが怒りの形相で技を繰り出し、マリアとかなみも攻撃を仕掛ける。チューリップ1号の直撃を顔面に受けたノスだが、その皮膚が更に鎧に覆われていく。首だけ動かしマリアをギロリと睨みつけると、高速の赤色怪光線を放ち、マリアに直撃させる。

「きゃぁぁぁぁ！」

「マリアっ！くっ……」

親友であるマリアがやられ、つい動きそうになる体を必死に止める。ここで動く訳にはいかない。今この場でノスを倒す手段を持っているのは自分だけだ。唇を噛みしめ、ノスを睨みながら魔力を溜めていく。再度飛んできたノスの魔法をリックが叩き落とす。あれだけいた戦士たちも、既に殆どがやられ、現在立っているのは四人。かなみ、志津香、リック、アレキサンダーだ。リックは志津香の護衛に回ってしまっているため、現状足止めを出来る人物は僅か二人。志津香は焦る。白色破壊光線が放てるまで、もう少し時間が掛かるのだ。たった二人で、どこまで時間を稼げるか。

「はぁっ！てやっ！」

「たぁっ！」

アレキサンダーが全力で拳を振るう。二度、三度、拳は連続でノスの体に命中する。かなみも忍刀で斬りつけるが、ノスの体は既に鋼のような硬さになっていた。金属音と共に刀が弾かれる。

「くっ…それなら！」

かなみは懐から手裏剣とくないを出し、大量にノスに投げつける。だが、ノスはそれを躱そうとも、弾こうともしない。ノスの体に命

中した手裏剣とくないは、ノスの体に傷一つ付けることなく、地面へと落ちていった。

「そんな…」

「ふはは、感謝せねばならんな。この肉体、全て貴様らの攻撃が生み出したものだ。貴様らが無駄な攻撃をすればするほど、この私は強くなっていくのだ！」

「黙れ！属性パンチ・雷！」

電撃を纏った拳がノスの腹部に命中する。この鋼のような肉体に、まだダメージを与えられているようで、ノスが一歩後ろに下がる。アレキサンダーの強さと、自分の不甲斐なさにかなみが歯噛みするが、アレキサンダーの拳から、大量の血が出ている事に気がつく。

「アレキサンダーさん！その拳！？」

「心配ご無用です」

「ダメージを与えたところで、私を更に強くし、そのダメージはすぐに完治する。そのような無駄な行為の果てに、拳を壊す。それが貴様の望みか？人間の格闘家よ…」

「ここが世界の分水嶺！私の拳がどうなろうとも、ここは死守させて貰う！」

「愚かな…理解できぬな…」

「して貰わずとも結構！」

そう言い放ちながら、アレキサンダーはノスの首目がけて回し蹴りを放つ。普通の人間であれば、そのまま首の骨が折れてもおかしくないほどの一撃。だが、ノスは微動だにせず、返し際に拳を振るう。

「ぐっ…」

「いい加減貴様も消えろ！」

ノスの拳を両腕でガードしたアレキサンダーだが、その恐るべき威力に腕が痺れる。その隙をノスは見逃さず、アレキサンダーの顔面に思い切り拳を振るう。ガードが間に合わず、直撃を受けたアレキサンダーが吹き飛ぶ。

「アレキサンダーさん！」

「くっ…！？」

かなみが叫び、リックが飛び出ようとするが、ノスがこちらに魔法を放ってくる。その魔法を斬り落としながら、リックは飛び出すのを止めざるを得ない。自分が少しでも動けば、志津香がやられる。だが、ノスは目を見開く。吹き飛んでいたアレキサンダーはその体を地面に落とす事はなく、すんでの所で食いとどまったのだ。口の中に溜まった血を地面に吐き捨てながら、ノスと再び対峙する。

「まだ来るのか…最早、貴様に出来る事はないぞ」

「例えそうだとしても…ただ倒れる訳にはいかぬ！」

口から血を流しながら咆哮し、ノスに特攻していくアレキサンダーを見ながら、かなみが悔しさに拳を握りしめる。何が真の忠臣を目指すだ。ノスにダメージを与える事の出来ない自分では、最早一秒たりとも時間を稼ぐ事すら出来ない。倒れていったみんなとは違い、未だ立っている自分だが、やれる事がないのだ。これほど無力さを感じる事はない。

「悔しい…何も出来ない…」

「そんな事無いよ、かなみ…」

その時、かなみにメナドが話しかけてくる。ノスの火爆破にやられ、起き上がる事の出来ないメナドは、倒れたまま顔だけをかなみの方に向け、苦しそうに口を開く。

「かなみはまだ立っているじゃないか…ぼくと違って、まだ何だって出来る…」

「でも…私じゃ今のノスにダメージを与える事は…」

「ダメージを与えるのは…志津香さんの仕事だよ。かなみの仕事は時間稼ぎ…そういうの、一番得意なはずだよ…」

「メナド…」

「今戦っているアレキサンダーさんをサポートするだけでもいいんだ…頑張って、かなみ…」

メナドの言葉を聞き、かなみは懐から巻物を取り出して口に咥える。かなみの視線の先では、アレキサンダーがノスに拳を振るっていた。既にダメージを与える事は殆ど叶わず、ノスが邪魔そうにアレキサンダーに拳を振るうが、それをかろうじて躱し続けていた。

「ちょこまかと…カトンボが！」

「（一瞬…奴に隙さえ生じれば…）」

アレキサンダーは拳を躱しながら、虎視眈々とある一撃を狙っていた。それはノスの脇腹。まだ攻撃をあまり受けていないらしく、他の箇所に比べて装甲が薄い。あそこに渾身の一撃を叩き込めれば、奴にダメージを与えられる。一瞬でも奴がたじろげば、それだけで時間稼ぎになる。だが、ノスも脇の弱点の事は判っているらしく、アレキサンダーに対して隙を全く見せないでいた。その時、ノスが唐突に足払いをしてくる。完全に虚を突かれたアレキサンダーは、体勢を崩す。

「終わりだ…死ねい！」
「くっ…ここまでか…」

振り下ろされる拳を見上げるアレキサンダー。だが、突如二人の間に炎が現れ、ノスの体を包む。

「ぬっ！？」

ノスが驚いて周囲を見る。まさか、何か強力な呪文を放とうとしていた魔法使いの娘が、痺れを切らして放ったとでもいうのか。だが、その視線に入ってきたのは、先程までちょこまかと自分の周りを動き回っていた女忍者。口に巻物を咥えながら、静かに呟く。

「火丼の術！」

その炎の威力は火爆破よりも小さく、ノスにダメージを与えられるようなものではなかった。だが、魔力を全く感じない箇所から、突如として現れた炎に、魔法使いでもあるノスは困惑する。そして生まれる、一瞬の隙。アレキサンダーが体勢を直し、全力で拳をノスの脇腹目がけて振るう。放つのは、アレキサンダーの持つ技でも最強の一撃。かつてルークの剣を折り、先日の再会の際にはその成長ぶりを認めて貰った一撃。その拳は、例えどんな装甲でも打ち破る。

「装甲破壊パンチ！！！」
「ぐっ…ぬぉぉぉ！」

その一撃に、これまで余裕であったノスの表情が歪む。足がよろけ、腰が若干だが落ちる。その様子を見ながら、アレキサンダーの体が崩れ落ちる。満身創痍の体は、最早動かす事が出来ない。その

瞬間、志津香の魔力がようやく溜まる。白色破壊光線の魔力が。すぐさまノスに放とうとするが、このままではアレキサンダーを巻き込んでしまう。志津香が撃ちあぐねる。が、かなみがそれをすぐに察し、アレキサンダーに駆け寄り肩を取る。その重みに体が沈みそうになるが、自分以外運べるものはいない。渾身の力で持ち上げる。

「馬鹿め…逃がすか！」

「ふっ！」

志津香がアレキサンダーを気にして魔法を撃てない事にも気がついていたノスが手を伸ばす。そのノス目がけて、かなみが懐から煙玉を投げる。すぐさま二人の間に煙が立ちこめる。

「煙幕。小癪な…」

「今です、志津香さん！」

かなみがアレキサンダーを担ぎながら飛び上がり、志津香に叫ぶ。その言葉に合図するかのように、志津香が両手を前に出し、渾身の魔力をノス目がけて放つ。

「白色破壊光線！！！」

放たれた光の渦がノスを飲み込んでいく。ノスの姿が光の中へ消え、ノスの向こうにあった壁が消滅する。そのまま光は、轟音と共に空の彼方へと消えていった。

ー リーザス城　西の塔　最上階 ー

白色破壊光線が放たれる数分前、西の塔の最上階ではルークとアイゼルが互いに向き合い、言葉を発していた。

「笑顔…それがホーネット様に拘る理由だと…」
「ああ、ホーネットは穏やかな顔で静かに笑う。それは、こちらの気持ちも穏やかにしてくれる素晴らしい笑顔だ。その笑顔をもう一度見たい。そう思っている」
「そんな事のために…魔人と…？」
「男の戦う理由なんて、いつだってそんなもんだろ」

困ったように頭を掻きながら、ルークが答える。その言葉を聞いてアイゼルが記憶を掘り返すが、ホーネットのそのような笑顔を自分は見た事がない。

「それを信じろと？私はそのような顔、見た事がないがな…」
「そうか…一つ聞かせてくれ。今、ホーネットに…時々でいいんだ。笑顔は…あるか？」
「そんなものありはしない。ケイブリス派との戦い。魔王リトルプリンセスの逃亡。ホーネット様が笑う暇など、どこにもない！」
「そうか…なら、改めてだが俺の敵は決まったな」

頭を掻くのを止め、真剣な表情でルークはアイゼルを見る。真っ直ぐな瞳に、アイゼルが一瞬目を奪われる。人間が、このような表情をするのか、と。

「彼女から笑顔を奪ったケイブリスを、許しはしない。必ず、俺の手で滅ぼす」
「ケイブリスを殺すだと…無謀な…」
「それでも、譲れぬものがある」

はっきりとそう言い放つルークを見て、アイゼルの中には敗北感が芽生えていた。自分はノスやジルを恐れ、ホーネットの前から姿を消そうとしていた。だが、目の前の男は、人間の身でありながら魔人最強であるケイブリスを倒すというのだ。それは本来、自分が言わなくてはいけない事。ルークを真剣に見ながら、アイゼルが静かに口を開こうとする。が、その時部屋にサテラが泣きべそをかきながら入ってくる。

「うぇぇぇん、アイゼル！もう魔人界に帰ろう…って、お前は！？」
「サテラ様、ルークデス」

咄嗟に臨戦態勢に入るサテラとシーザーだが、アイゼルが口を開く。

「止めろ、サテラ！戦う必要は無い！」
「アイゼル、どういう事だ？」
「理由は後で話す」

そう言って、再度ルークを見るアイゼル。一度ため息をつき、ゆっくりと言葉を発す。

「貴様に聞きたい事がある」
「何だ？」
「今の言葉、嘘偽りはないな」
「ああ」
「ホーネット様の為なら、ケイブリスとでも戦うと？」

アイゼルのその問いに、サテラが目を見開いてルークを見る。一度静かに目を閉じ、ルークがはっきりと答える。

「ホーネットの目指す道が、かつてと違えていないのならば…誰とでも戦うさ。例えそれが、神であったとしても」
「そうか…それは…私が言うべきだったのであろうな…」

その言葉を聞いたアイゼルは、悔しそうに呟く。魔人として、ホーネットに仕える者として、そして、一人の男として、認めざるを得ない。ルークを見ながら、アイゼルはゆっくりと口を開く。

「人間…いや、戦士ルークよ。私の…負けだ…」
「なっ！おい、アイゼル！？」
「そうか。なら、約束通り…」
「ああ、もう逃げはしない。必ずホーネット様の下へ戻ると誓おう」
「何当たり前の事を言ってるんだ？」

アイゼルの言葉を聞いて、サテラは訳が判らないという様子でアイゼルを見る。ルークが何かを言いかけるが、突如中央の塔から轟音が鳴り響く。窓から見ると、壁を突き破り、光が空へと消えていった。ルークはあの魔法に見覚えがある。あれは、志津香の白色破壊光線。

「…急ぐ必要があるな」
「待て！その状態で行くつもりか！」

突如駆け出し、階段を下りていこうとするルークをアイゼルが呼び止める。アイゼルとの戦いでルークも無傷ではない。その状態でノスとジルの下へ向かおうと言うのか。

「ああ、ノスとジルを放っておく訳にはいかない」
「それも、ホーネット様の為か…？」
「それもあるが、これに関しては一番の理由は違うな」

そう言って、ルークは窓越しに中央の塔を親指で指す。
「あそこで、今も命をかけて戦っている仲間がいる。行かない訳にはいかないだろう？」
それだけ言い残し、ルークはアイゼルとサテラの前から姿を消す。
その背中を見送るアイゼルと、未だ訳の判らない様子のサテラ。
「サテラを無視して話を進めるな！一体何なんだ！」
「ああ、そうだな。魔人界に帰ったらちゃんと話してやるさ」
「ふん、絶対だぞ」
「そういえば、ここにいるって事は、サテラも人間に負けたのか？」
「ぐっ…あれは、卑怯な手を使われて…アイゼルもそうなんだろ？」
サテラがランスの事を思いだし、悔しそうに地団駄を踏む。アイゼルも同様の負け方をしたんだろと尋ねるが、アイゼルは静かに笑いながら答える。
「いや、正々堂々戦い、完敗した。実力でも…心でもな…」
「心で負け？訳の判らない事言ってないで、魔人界に早く帰ろう。サテラはもう疲れた」
「そうだな。それで、ホーネット様への謝罪の言葉は浮かんだのか？」
「うっ…ホーネットは優しいから、「魔王復活させちゃった、てへ！」で、許してくれないかな…」
「まあ、間違いなくシルキィにぶっ飛ばされるな」
「んぐっ…」
困った様子のサテラが、また頭を悩ませ始める。その様子を見な

がら、アイゼルが窓の外を見た後、少しだけ考え事をし、サテラの目をはっきりと見る。

「サテラ」
「ん？何だ？」
「少し…話がある」

―リーザス城　最上階―

ノスのいた場所に煙が立ちこめている。煙玉と白色破壊光線が合わさった事による結果で、ノスがどうなっているかまだ確認できずにいた。だが、無事なはずがない。直撃を食らったのだ。

「やったの…？」
「無事な訳がない…」
「城にあんな大穴が…弁償して貰うわよ、志津香」
「リア様、流石に緊急事態かと…」

ノスの立っていた場所を見ながら、レイラの呟きに志津香が答える。壁の大穴を見てリアが悲しそうにするが、かなみがそれを諫める。ゆっくりと煙が晴れてくる。その様子を見ながら、全員が目を見開く。

「あっ…」
「そ…んな…」
「化け物め…」

皆の視線の先、煙の晴れたその場所には全身を更に強固な鎧で覆

ったノスが平然と立っていた。肩からは禍々しい赤色の突起が盛り上がり、額からも角を生やしている。志津香が絶句し、かなみが恐怖でその場に座り込んでしまう。倒れた仲間たちも、悔しそうにしながらノスを見ている。その様子を見ながら、ノスがニヤリと笑う。

「人間にしては中々の技だったが…全て無駄だったな。既にダメージは完治し、私の肉体は更に強力なものになった」

「こんなの…勝てる訳…」

「ふはははは、悔しいか。貴様らの攻撃は私を強くしただけに過ぎん。全ては、無駄、無駄、無駄なのだ！」

「……」

その言葉に、志津香も頭を抱える。白色破壊光線を受けてなお健在、その装甲は更に強固になり、もう一度撃ったところでダメージを与えられないだろう。部屋を絶望感が包む。ちらりとランスの方を見るが、シィルとセルが首を横に振る。まだ意識は戻らないようだ。ひとしきり笑い終えた後、ノスが静かにこちらに問いかけてくる。

「さて、そろそろ死ぬか？」

その言葉に、死を覚悟する面々。だが、そのノスの前にゆっくりと歩みを進める者がいる。甲冑に身を包んだ男、リーザス最強の戦士、リック・アディスン。

「何だ？貴様は？」

「ここからは、自分がお相手させていただく」

その瞳は、まだ絶望に彩られていない。

部屋の中から再度聞こえてくる戦いの音。それを無意識に聞きながら、ランスの頭の中を考えがぐるぐると巡る。なぜ俺様は倒れている。シィルの馬鹿を庇ったからだ。何から。敵の強力な魔法からだ。それは、あの時の光景に似ていないか。あの時って何だ。

「何で俺を庇ったんだ！」

頬に当たる雨の中、今より少しだけ若い姿のランスが叫ぶ。目の前に倒れているのは、女戦士。ランスが冒険のいろはを教わった、姉のような、師匠のような、大切な存在。その命が、今失われようとしていた。ゆっくりとした動きで、その腕がランスの頭を撫でる。

「馬鹿だね…理由なんて…ないよ…」

ランスの頬を涙が伝う。今まで生きてきた中で、数えるほどしか流した事のない、ランスの涙。その顔を静かな笑顔で見ていた女戦士の腕が、ゆっくりと、地面に落ちていく。それは、シィルを庇った先程とは逆の光景。ランスが庇われ、女戦士が犠牲になった。誰が彼女を殺した。目の前に突如として現れた異形の男だ。頭の左半分から女性の上半身が生えていた。あれは人間ではない。どこへ行った。すぐに逃亡した。何故こちらを襲ってきた。判らない。判らない。だが、確かな事は一つ。奴は必ず殺す。俺様の手で殺す。無残に殺す。となれば、こんな所で死ぬ訳にはいかない。シィルとセルは気がつかなかったが、ランスの手が一瞬だけピクリと動いた。

広間に戦いの音が鳴り響く。リックがたった一人でノスと対峙しているのだ。鉄拳を避け続け、至近距離でノスに剣を振るい続ける。ノスに与えられるダメージは僅かなものだが、未だに傷を与え続け

られるリックを誉めるべきだろう。周囲の者は、呆然とそれを見る事しかできない。立ち上がる事の出来ないアレキサンダーただ一人だけが、悔しそうに歯噛みしていた。

「無駄だと言っておろう！更に私を強くするだけだ！」

ノスが左右の拳を交互に振るう。それを避けながら、リックは決まった距離でノスと戦い続ける。それを見たバレスが、不思議そうに呟く。

「リックは…何故あのような戦い方を…？」

リックが再度連撃をかける。息つく間もない程の超高速の攻撃。だが、ノスは余裕だった。攻撃を受けたところで大したダメージはない。それに、この男が振るう剣の射程も判ってきた。

「くくく、貴様の攻撃範囲もいい加減慣れてきたぞ。そろそろくたばれ！」

「ふっ！」

リックが剣を振り下ろす。それをノスがバックステップで躱し、魔法を放とうとする。リックは振り下ろした剣をすぐさま上にかち上げるが、後方に避けたノスにそれが当たるはずもない。その剣は空を切る、そうしたら魔法を直撃させる。ノスはそのつもりでいたが、直後目の前に剣が迫ってくる。それも、先程までの剣速よりも更に一段上。

「ぬうっ！」

下からかち上げる形で振るわれた剣は、ノスの体を切り裂く、鎧

が割れ、リックはその下の体をしかと見る。だがすぐにその皮膚を更なる鎧が多い、より強固なものへと変わる。ノスはリックの持っている剣を見る。今、確かに剣が伸びた。

「なるほど…伸縮自在の剣か…」

「……」

ノスが言うように、リックの持つ魔法剣バイ・ロードは伸縮自在の剣。その射程が次々と変わる中で繰り出される高速の連撃がリックの真骨頂だ。だからこそ、同じ射程で戦い続ける姿をバレスは不思議に思っていたのだが、それは全て今の一撃のため。だが、その一撃はノスを両断する事は叶わなかった。ニヤリとノスが笑う。

「奇襲のつもりだったようだが、これも無駄に終わったな。私は更に強くなり、今のダメージも既に完治。種も割れた今、貴様に勝ち目は…」

「魔人でもハッタリは言うのですね」

「…何？」

リックのその言葉に、ノスがピタリと止まる。リックがノスの脇腹に剣を向けながら、はっきりと言葉にする。

「動きが鈍っていますね。先程のアレキサンダー殿の一撃は確かに強烈なものでした」

「……」

「今斬った際に見えた装甲の下、随分と火傷を負っていましたね。志津香殿の魔法ですね？」

「それって…」

「そう。確かにダメージを与えるほどに強固になっていくのは事実。だが、ダメージが完治するというのは丸っきりのハッタリです」

脇腹に向けていた剣先を上げ、今度はノスの顔に向ける。リックの顔は兜に隠されていてよく見えないが、僅かに覗くその瞳がはっきりとノスを正面から見やる。

「ここにいる皆が与えた攻撃は、無駄になどなっていない。その一撃一撃が、確実に貴様に蓄積されている！そして、その積み重ねが…」

ノスがギリ、と歯ぎしりをし、リックを睨み付ける。

「魔人ノス、貴様を討つ！」

「人間風情が…」

第６２話　傷だらけの戦士たち（後書き）

［人物］

ノス

ＬＶ　１９８／２１０

技能　格闘ＬＶ２　魔法ＬＶ２

　ホーネット派に所属する地竜の魔人。ジル期に誕生。ジルを崇拝しており、前魔王ガイが死んで絶対忠誠が解けたのを期にジル復活の為の行動を起こす。アイゼル、サテラを騙し、ホーネットを裏切って見事ジル復活を成功させる。かつての魔人四天王でもあり、今でもその実力は四天王に劣るものではない。攻撃を受ければ受けるほど装甲が強固になり、近・遠距離の両方をこなす最強クラスの魔人。強化された装甲は、数日経つと剥がれる。

［技］

赤色怪光線

　右腕から高速の炎の渦を放つ上級魔法。今ではあまり使う者のいない古い魔法だが、威力はファイヤーレーザーを上回る。

火丼の術

使用者　見当かなみ

　かなみの必殺技。「丼」の字に浮かび上がった炎が相手を包む忍術。威力は低いが、魔力を感じさせない炎属性の攻撃は奇襲に最適。

属性パンチ・雷

使用者　アレキサンダー

　アレキサンダーの必殺技。雷の神の力を借り、己の拳に電撃を纏わせる。殴られた相手を麻痺させる事もある使い勝手の良い技。

［装備品］

バイ・ロード

リックの愛剣。代々赤の軍将軍に受け継がれている魔法の剣で、斬れ味の良さに加え、使い手の技量次第で伸縮自在。更には恐ろしく軽いという名剣。

第６３話　二人の英雄

―リーザス城　入り口前―

「ルーク殿！そのお怪我は！？」
「大丈夫。出血はしているが、大した怪我じゃない」
「西の塔を攻略しているという話でしたが…随分と強敵がいたようですね」
「まあな」

ルークが中央の塔の前までやってきたとき、入り口の前には白の軍が集まっていた。それを率いていたエクスとハウレーンがルークの姿を見るや否や話しかけてくる。それに答えながら、ルークは白の軍がここに集まっている事に疑問を持つ。

「それより、何故ここに？モンスターの遊撃担当ではなかったのか？」
「元々いたモンスターはある程度片付け終わったのですが、先程から城の中から次々と新手が出てきていましてね。それも、城下町目指して移動するモンスターが殆ど」
「こちらに陣を取り、出てくるモンスターを片っ端から倒しているところです。城下町へなど、行かせる訳にはいきません！」
「なるほどな。となると、今城を上るのは難しいか？」
「父…いえ、バレス将軍率いる援軍部隊は随分前に上っておりましたし、その頃はまだこれほどモンスターが発生していなかったため、恐らく最上階までは辿り着いているでしょうが、今からというのは…」
「難しいでしょうね。例え辿り着けたとしても、どれほど時間が掛

かるか…」

解放軍はジルの食事の為にノスが放ったモンスターに足止めされ、新たな援軍を向かわせられずにいた。エクスとハウレーンの報告を聞き、ルークが思考する。今から城を上っていたのでは間に合わない。となれば、ショートカット。上を向き、最上階を見る。そこには、先程志津香が放った白色破壊光線で開いた大穴。一気にあそこまで駆け上る手段があれば。そう考え、ルークは一つの方法に至る。

「ランスに呼び出されていなければ、俺の目の前に現れろ！フェリス！」

その呼び声に反応し、ルークの目の前に悪魔界からフェリスが呼び出される。ランスたちと共に最上階で戦っている可能性もあると考えていたが、そうではなかったらしい。大戦力であるフェリスを呼び出していないという事は、大して切羽詰まっていないか、あるいは、ランスが呼び出せないほどの状況にあるか。後者であれば、急ぐ必要がある。

「ルーク、呼んだかい？」
「なっ…悪魔!?」
「悪魔を使い魔にしているとは…流石に想定外でしたね」

突如目の前に現れた悪魔に、ハウレーンとエクスが驚愕する。だが今は説明をしている暇はない。フェリスの正面から見ながら、ルークが問いかける。

「フェリス。その羽で飛ぶ事は出来るか？」
「ん？ああ、多少なら飛ぶ事は可能だ。悪魔だからな」

ルークがフェリスの背中についている羽を指差しながら尋ねる。
その問いに、フェリスは羽をパタパタと動かして答える。

「そうか、なら頼みがある。俺をあの場所まで運んでくれ」
「あの場所？」

ルークが顔を上に向ける。それに釣られるように、フェリスも顔を上に向ける。随分と高い位置、階数にすれば6～7階といったところだろうか。建物の最上階に横穴が開いているのが見える。フェリスが頬に汗を流し、ギギギ、とまるで機械のようにルークの方に首を回す。

「なんか…随分と高い位置なんですが…？」
「ああ、城の最上階だ」
「ルーク…体重は？」
「んー…剣二本と鎧の重量も考えれば、１００は越えるかもしれんな」
「それを…一人で運べと…」
「頼んだぞ、フェリス」

プルプルと震え、涙目になるフェリスに向かって、ルークはグッと親指を突き立てる。そのやりとりを見ながら、ハウレーンが呆れた様子で口を開く。

「少し、悪魔に同情してしまったのですが…」
「ふふふ、間違った感情ではないですよ。あ、悪魔のお嬢さん。その次は僕たちを運んでいただけませんか？」
「絶対にイヤだ！！」

―リーザス城　最上階―

一人ノスに立ち向かうリックの姿に、自分たちの行動が無駄ではないというその言葉に、部屋の中の者たちは希望を取り戻しかけていた。もしかしたら、ダメージが積み重なってノスが倒れるのでは、と。だが、そんな希望はすぐに打ち砕かれる事となる。目の前にはノスの前に膝を折るリックの姿。

「はぁっ…はぁっ…」
「言ったであろう？全て無駄だと」
「リックさん…」

ノスに対し高速の剣技で立ち向かっていたリックだが、その強固な装甲には多少のダメージしか与えられない。防御を考えなくて良いノスの猛攻の前に、少しずつ攻撃を受けていき、遂にその膝が折れた。リックを見下しながらニヤリと笑うノス。

「確かに人間にしては中々の強さであったが、魔人である私の前では正に無力！」
「……」
「貴様を血祭りにすれば、最早私を阻む者はない。その後で、カオスはゆっくりと破壊させて貰うとしようか」

そう言い放ちながら、ノスが右手を高々と挙げる。その手のひらに魔力が集まっていき、巨大な炎の塊が出来ていく。ランスが直撃を受けた、グレートファイヤーボールだ。

「強い…僕が強いか…」
「リック！逃げるんじゃ！」

「リックさん！」

周囲の者の叫び声が聞こえる中、リックは膝をつきながら先程のノスの言葉を思い返していた。人間にしては中々に強い。それは魔人から送られる言葉としてはかなり上質のものかもしれない。だが、リックはその言葉を否定する。

「違うな…僕は…強くなんかない…」

ＧＩ１０００
―リーザス　とある農村―

「おーい、リック。どこにいったんだ！？」
「あ、はい！父さん！」
「おお、いたいた。ちょっと隣町に行ってきてくれるか。ストロツエンドからの行商人が来ているらしいんだ。納豆を買ってきてくれ」
「はい、判りました！」

農家の父からお使いを頼まれ、少年が駆けていく。年の程は１０前後といったところか。彼こそが後にリーザスの赤い死神と呼ばれる戦士、リック・アディスンだ。その背中を父親が見送っていると、同じく農家を営んでいる隣家の農婦が話しかけてくる。

「本当にリックちゃんは良い子ね。ウチの息子たちにも見習わせたいわ」
「ああ、本当に助かっているよ」
「立派な跡取りがいて羨ましいわ」
「……」

「あら？どうかしたの？」

困ったように頭を掻くリックの父を見て、不思議そうに農婦が尋ねる。

「あいつ…農家なんかじゃなくて、軍人になりたいみたいなんだよな…」

「ひょっとして、一昨年のパレードで？」

「ああ、騎士団に憧れちまったらしい」

二年ほど前、城下町で催されたパレードにリックを連れていったことがある。その時の騎士団を見る息子の顔が未だに忘れられない。本人は上手く隠している気でいるようだが、仕事の合間に剣を振るっている息子の姿を何度も目撃している。自分の小遣いを貯めて買ったのか、あるいはどこかで拾ってきたのか。ボロボロの剣を必死になって振るっている息子の姿を見て、なんとか騎士団に入隊させてやりたいと思う。だが、そんなに簡単な話ではない。

「叶えてやりたいが…ウチみたいな貧乏農家じゃ軍に入隊させる事なんてなぁ…」

「それなら、試しにこれに出場させてみたら」

「ん？」

「例え駄目でも、いい思い出にはなるでしょ」

隣家の農婦がエプロンにつけられたポケットから一枚のチラシを取り出す。今朝の新聞に入っていたものらしい。それは、一ヶ月後にリーザス城のコロシアムで開催される第３２回リーザスパラパラ杯の宣伝チラシ。優勝者特典の欄には、豪華景品と共に、必要経費免除でリーザス軍へ入隊出来る事が書かれていた。

一一ヶ月後　リーザス　コロシアム一

コロシアムの中は満員御礼、客席の後ろに立ち見席が出来るほどであった。パラパラ杯は既に一回戦が始まっており、集まった腕自慢たちが勝負を繰り広げていた。観客は沸き上がり、一回戦にも関わらず既に会場は興奮のるつぼ。その様子をＶＩＰ席で見ている三人の軍人がいた。

「どうじゃ、バレス。使えそうな奴はいるか？」
「うーむ、今の所２、３人といったところか…」

大規模な催し物であるパラパラ杯には、現役将軍として三人のリーザス軍将軍がゲストとして招かれていた。開場時の挨拶を終え、今は試合の様子をゆっくりと見ている。白の軍将軍であるペガサスが、隣で見ていた黒の軍将軍バレスに話しかける。バレスは資料をペラペラと捲りながらそれに答える。

「まあ、優勝しても使えるとは限らんがな。一昨年の奴なんか、入隊後一週間で逃げ出しちまった」
「そりゃあ、お主がスパルタ過ぎるんじゃ。アルト」

そう文句を言うのは赤の軍将軍、アルト・ハンブラだ。リーザス最強の看板を背負っている赤の軍を率いる、現リーザス最強の戦士だ。彼の扱きに耐えきれず、逃げ出した兵は数知れず。バレスは頭を抱えるが、その程度で逃げ出す生半可な兵などいらないという彼の言い分も判るところでもある。

「出来ればこの大会で、将来赤の軍を任せられるような奴を見つけ

たいんだがな…」
「お主の所にはザンがいるじゃろ？」
「俺と大して年の変わらないザンじゃ意味ないんだよ。もっとこう…若い力が欲しい」
「そうなると青の軍は羨ましいのう。新人にコルドバ、中堅にキンケードという二人が揃っておる」
「うむ。あの二人は確かに素晴らしい腕前じゃ」
「あ、俺キンケードはパスな。やる気が感じられねぇ」
「お主の好みは聞いとらんわ！」

そう話していると、丁度試合が終わり、次の対戦者が舞台に上がる。片方はボーダーという旅の戦士。今回の優勝候補であると、前評判の高い男だ。そして反対側から出てきたのは、まだ１０前後と思われる少年だった。それを見ていたＶＩＰ席の三人は目を見開き、観客席からは失笑が起こる。舞台上で対峙しているボーダーは困ったように頭を掻きながら忠告する。

「あー…坊主、本気か？向かってくるなら俺は手加減できねぇぞ」
「全力でいかせて貰います！」

ボロボロの剣を握りながら、真っ直ぐとボーダーを見据えてくる目の前の少年。その目を見たボーダーも、戦士の目になる。

「良い目だ。なら、手を抜くのは野暮ってもんだな」
「お願いします！」

こうして試合は始まる。だが、それは勝負とはとても呼べないようなものであった。十秒と持たずダウンする少年。二度、三度と立ち上がり、ボーダーに向かっていくが、その度に叩き伏せられる。観客席からは哀れみの声が出始め、見かねた審判が試合を止めよう

とするが、最後に立ち上がってきた少年が剣をふらふらと振るう。その姿を見たボーダーが目を見開く。少年の後ろに、死神の姿がうっすらと浮かび上がっていたのだ。直後、ボーダーは全力で剣を振るい、少年はその一撃で失神してしまう。

「しょ、勝者ボーダー・ガロア選手！リック・アディスン選手は残念ですが、一回戦敗退です！」

ようやく終わった試合にホッとしながら、観客席からはリックに同情の拍手が飛ぶ。だが、ボーダーは冷や汗を流しながら、気絶しているリックを見て思う。

「（この坊主…何者だ？もしあれが奴の殺気だとしたら…とんでもない才能の持ち主だぞ…）」

ＶＩＰ席で見ていたペガサスからため息が漏れ、直後ボーダーの強さを褒め称える。

「うむ。やはりボーダーは本物だな。白の軍に欲しい人材じゃ」
「ペガサス殿。ボーダーは優勝しても軍に入る気はないと宣言しておるぞ」
「なんと！？…んっ、どうしたアルト？」

バレスと話していたペガサスだったが、身を乗り出して舞台を見ているアルトに気がつき問いかける。アルトがその声に振り返る。その顔は、待ち望んでいたものを見つけたかのような、嬉しそうな顔。

「あのガキ、俺の前に連れてきてくれ！」

これより数日後、リックは赤の軍将軍、アルト・ハンブラの養子となる。実父はリックの夢を応援し、これを承諾。以後、アルトから剣を師事し、二年後、歴代最年少でリーザス軍に入団。瞬く間に頭角をあらわし、数々の武功をあげていく事となる。

GI1015
―パラパラ砦―

リーザスとゼスの国境であるパラパラ砦。今ここは、ヘルマン軍に攻められていた。ゼスの内通者とヘルマン軍が協力し、リーザスへ侵攻するため奇襲をかけてきたのだ。小規模とはいえ、一個軍。油断しているリーザスなど、敵ではない。笑いながら砦を攻めるヘルマン軍であったが、今までいた砦の警備員たちが退却し、それと入れ替わるように目の前に一人の男が立ちふさがった。全身を鎧に包み、額には「忠」の文字。ゆっくりと剣を振るい始める。

「一人？たった一人でこの数を相手にする気か？」
「……」

目の前に迫る大量のヘルマン兵を見ながら、立ちふさがった男、リックは少し前の事を思いだしていた。それは、自分がリーザス赤の軍将軍を義父のアルトから受け継いだ日の事。

「父上！軍を離れるというのは本当ですか！？」
「ああ、情けない話だが、もう昔ほど剣を振るえねえ。老兵は死なず、ただ去るのみ…ってな」
「そんな…それでは、赤の軍は一体誰が…」

戸惑うリックの前に、アルトが愛剣のバイ・ロードと兜を置く。どちらも、代々赤の軍将軍に受け継がれてきたものだ。

「次の将軍は、リック。お前だ」

「!?僕は…将の器では…」

「謙遜するな。既にお前は俺を越えている。反対する奴なんか、誰もいやしねぇよ」

「…僕は…強くなんかない…」

「おいおい、お前が弱かったら誰が…」

「違うんです!」

アルトの声を遮るようにリックが珍しく声を荒げる。下を向いたまま、泣き声にも似たような悲痛な声で言葉を続ける。

「恐いんです、戦うのが!人間相手ならまだそれほどでもないですが、モンスターを目の前にしたら体が震え上がってしまう。情けない話です。今まで騙し騙しやってきましたが…こんな僕が将軍になれる訳…」

「リック、よく聞け」

アルトの諭すような言葉に、リックが顔をあげ、アルトの顔を見る。とても優しげな表情。尊敬する、もう一人の父の顔。

「戦いが恐い?いいじゃないか。恐れを知らない奴なんか、獣と変わらん。俺はそんな奴に兵の命は任せられん」

「…父上」

「それに、お前は一人で戦う訳じゃねえ。頼りになる部下も一緒だ。それにこの剣、そして兜は、代々赤の軍将軍に受け継がれてきたものだ。その魂が、ここに宿っている!当然、俺のもな!」

「魂が…ここに…？」
「ああ、俺たちはいつでもお前と共に戦っている」

パラパラ砦に進軍していたヘルマン軍が退却を始める。たった一人の兵に、一個軍が敗れたのだ。前線にいた多くの兵が死に、命辛々逃げ延びた兵が震えながら語った。リーザスには死神がいる、と。この活躍により、「リーザスの赤い死神」リック・アディスンの名前は世界に轟く事になる。

ＬＰ０００２
―リーザス城　最上階―

「僕…いや、自分は…強くなんかない…」
「ぬっ…！？」

ノスが眉をひそめる。既に満身創痍だったはずの目の前の戦士が、ゆっくりと立ち上がったのだ。口では何か呟いている。

「貴方をここまで足止めできたのは…全てここにいる仲間たちのお陰。こうして今、自分が立ち向かえているのは…歴代の将たちの魂のお陰。まだまだ…一人で戦えている身ではない…。だからこそ…本当の強さを今なお追い求めている…」

そう言いながら、リックは剣をゆっくりと振るい始める。その流れるような動きの中に、ノスははっきりと見る。リックの後ろに浮かび上がる、死神の姿を。

「死神！？」
「そうですか…見えましたか…では謝らねばなりませんね…貴方に明日のない事を！」

瞬間、ノスの全身に赤い直線が走る。それはリックが繰り出す超高速の剣技。敵が多数であれば、剣を長くしての全体攻撃、単身であれば短くしての超高速集中攻撃。後ろに浮かび上がる死神が、鎌を振るったかのように錯覚すると言われている、まさしく必殺の技。リックが編み出した、剣技の一つの極地。

「バイ・ラ・ウェイ！！」
「ぬ…うごぉぉぉぉ！！」

その一撃にノスが絶叫する。硬い鎧が破られ、全身から血が吹き出す。瞬間、全身に震えが走る。それは恐怖。ノスはこの戦いで初めて死の恐怖を感じる。その事に、ノスのプライドが傷つき、ダメージとは別の感情で顔が歪む。

「（恐れている…私が？人間如きを…そんな事、あって良いはずがない！）」

全身から血を噴き上がらせながらも、ノスは鬼の形相をしながら、目の前のリックの首を左腕で掴み、引き寄せる。既に立っているのがやっとのリックには、それを逃れる術がない。

「ぐっ…」
「リックさん！」
「ふざけるなぁぁぁぁ！この私に恐怖を抱かせた事、死んで償えぇぇぇぇ！」

絶叫の中、宙に浮かび上がらせていたグレートファイヤーボールをリックの体に直撃させる。まだ不完全な状態ではあったが、強力な魔力の塊。リックの体が大きく後方に吹き飛ぶ。

「リック！！」

「ふはははは、愚かな人間が、私に楯突くからだ！」

ノスの笑い声が部屋に響く。ノスに立ち向かえる最後の一人であったリックが敗れ、この部屋にはもう戦える者がいない。いや、今背中から地に落ちていくリックを支えられる人間すらいないのだ。傷ついていないかなみや志津香も、ノスの前に立ち上がれないでいる。落ちていくリックを見ながら覚悟を決める面々であったが、その背中が地につく事はなかった。一人の男が、その背中を支えていた。

「ぬっ…」

「あ、あれは…」

「ラン…ス…殿…？」

それは、ランス。ノスの前に倒れたが、シィルとセルの治療を受け、遂に目覚めた一人の英雄。自分の体を支えているのがランスだという事を確認して、リックが小さく呟く。

「後は…頼みました…」

「ふん！シィル、治療しておけ」

「は、はい！ランス様！」

後ろにいたシィルにポイ、とリックの体を投げる。慌てて受け止めるシィルだが、その表情は満面の笑み。ランスが生きていた。こうして目覚めてくれた。その事に、笑みを隠せない。セルも既に部

屋の者たちの治療を開始している。

「生きていたのか…カオスの使い手よ…」
「まあ、男共はどうでもいいが…」

ノスの問いかけに答えようともせず、カオスを肩にかけながら部屋の中を見回すランス。そこには傷だらけの仲間たち。

「俺様の女たちを随分と痛めつけてくれたみたいだな…」
「だとしたら…どうする？」

その言葉を聞いた瞬間、ランスがカオスを両腕で持ち、一気にノスとの間合いを詰めて高く飛び上がる。

「ぶっ殺す！！！」
「ぬっ…！？」

上空から剣を振り下ろしてくるランスの姿を見て、ノスは先程以上の恐怖を感じる。この男は、死神よりも恐ろしいというのか。それまで引く事のなかったノスが、咄嗟に一歩後ろに下がる。歴戦の猛者であるノスが感じ取った、何か。その行動は好手であった。

「ランスアタァァァック！！」
「あいつの血で儂を染め上げろ！いけぇぇぇ！」

渾身の力で振り下ろしたランスアタックだったが、後方に避けたノスには命中せず、目の前の地面に叩きつけられる事になる。一瞬ニヤリと笑ったノスだったが、瞬間発生した衝撃波で後ろに吹き飛ばされる。

「ぬっ！？」

何とか倒れることなく、体勢を立て直したノスだったが、自分の体を見て驚愕する。今の衝撃波を受けた箇所がダメージを負い、新たな鎧が誕生しているのだ。直撃ではない、ただの衝撃波。いくら魔剣カオスとはいえ、これほどのダメージを与えられるものなのか。

「へたくそ！魔人を斬れていないではないか！」

「貴様がなまくらなのが原因だ！」

目の前でカオスと言い合いをするランスを見ながら、ノスは再び恐怖を覚える。この男と正面から戦うのは得策ではない。遠距離から魔法で攻撃し、自分に近づけるべきではない。最強の肉体を持つと自負するノスであったが、それに驕りはしない。右手を高々と上げ、その手のひらに再び炎の塊が集まり始める。

「あ、油断してる場合じゃないですよ」

「ん？うげっ！あの面倒くさい炎じゃないか！…んっ？あれは…」

カオスに言われ、口げんかを止めてノスを見れば、先程自分が直撃を食らったグレートファイヤーボールが出来上がり始めていた。顔を歪めるランスだが、そのノスの後方にある何かに気がつき、眉をひそめる。

「ふはははは、覚悟を決めたか！カオスと共にこの世から消え失せろ！！」

グレートファイヤーボールを放とうとするノスだったが、瞬間、後方に違和感を覚える。自分の後方には壁しかない。誰もいない。それによりノスは後方の警戒を怠っていた。だからこそ、これほど

間近に迫ってくるまで、この強烈な殺気に気がつけないでいた。振り返り、後方を見る。そこには、初めて見る剣士の姿。黒髪の剣士が、先程のランスと似たような構えで上空から剣を振り下ろす。

「真滅斬！！」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

その一撃で、ノスの右腕が宙を舞う。この剣士に一刀両断されたのだ。手のひらに溜めていたグレートファイヤーボールは宙に四散し、憎々しげに目の前の男を見る。

「貴様ぁぁぁぁぁ！何者だぁぁぁ！！」
「ルーク・グラント。冒険者だ」
「ルークさん！」
「遅いのよ…馬鹿…」

剣先をノスに向け、自分の名を返すルーク。待ち望んでいたルークの到着にかなみが歓喜の声をあげ、志津香が帽子に手をやりながらため息をつく。ノスが鬼のような形相をしながら、ルークに叫ぶ。

「一体どこから来た！転移呪文の使い手か！？」
「おあつらえ向きに壁が開いてたんでな。使わせて貰った」

ルークが後ろの穴を指し示す。先程志津香が魔法で開けた巨大な穴。かなみが視線を向けると、穴の横で一人の悪魔が汗を流しながらぜぇぜぇ言っているのが見える。

「絶対私は…もっと評価されても…いいと思うんだ…はぁっ…はぁっ…」
「スマンな、フェリス。感謝している」

「心が…こもっていない…はぁっ…はぁっ…」
「後で心の底から礼を言わせて貰うさ。随分と酷い状況みたいだな…」

フェリスの抗議を尻目に、部屋の中を見回すルーク。そこには倒れた仲間たちの姿が見える。心配そうにこちらを見るかなみ、志津香、ミリ、メナド、バレス、レイラ、マリス、アレキサンダー。気を失っているマリア、ラン、ミル、トマト、リック。治療に奔走するシィルとセル。それを応援するリア。自分が遅れた為に傷ついたものもいるだろう。後悔をしながら、ゆっくりと一度目を閉じ、ノスを睨み付けるルーク。

「覚悟は出来ているな、魔人ノス！」
「なっ…！？」

その殺気に、ノスが目を見開く。こいつもだ。この男も、自分に恐怖を抱かせるというのか。カオスも持っていない、まだ攻撃にも移っていない目の前の男の殺気が、先程ランスに感じたものと同等かそれ以上なのだ。その時、ノスの向こうに立っているランスがこちらに文句を言ってくる。

「遅ぉぉいっ！出前だったら返品だ！どこで油を売っていた、馬鹿者！」
「スマン。後でこの詫びはいくらでもさせて貰う。だが、ランス。お前も以前ラギシス戦で遅れてきたとき、言っていただろ？」
「ん？何をだ？」

ノスを挟み込むような形で立っているルークとランス。ノスが両方に注意を向けているのを見ながら、ルークがランスに答える。

「英雄は、遅れてやってくるものだってな」
「馬鹿者！英雄はこの俺様の事だ！」
「ふっ…確かにお前は英雄かもしれんな。それを否定する気はない。だが…」

ランスの言葉を聞いたルークが不敵に笑いながら、ノスに剣先を向ける。

「英雄が、二人いてもいいんじゃないか？」
「…ふん！足を引っ張るなよ！」

ランスもカオスをノスに向ける。その二人の姿を見ながら、周囲の面々は心の中で思っていた。ルークとランスは、本当に英雄かもしれないと。志津香がその考えをすぐに否定して頭を振る。ランスは絶対に違うと。肩口から斬れた腕から血を流しながら、ノスが咆哮を上げる。それが合図となり、二人の英雄はノスへと向かって駆け出していく。

―リーザス城　最上階　奥の間―

「これは…」

ここは先程までヘルマン軍の司令部として使われていた部屋。パットンの使っていた玉座に腰掛けながら、ジルが広間で起こっている異変に気がつく。周囲には血を吸い終わった女の死体が転がっている。

「ノスが敗れるか…そうか…ふふっ…」

広間で戦っているノスがどんどんと弱まっているのを感じるジル。だが、自分の部下を助けにいく様子はなく、それどころか口元に笑みが浮かぶ。

「ノスを倒す人間か…これは、楽しめそうだな…」

そう呟き、玉座に深く腰掛け直す。リーザス城での決戦は、まだ最終局面にすら辿り着いていないのだ。

第６３話　二人の英雄（後書き）

［人物］

アルト・ハンブラ　（半オリ）
ＬＶ　３８／５５　（当時）
技能　剣戦闘ＬＶ１　シーフＬＶ２

先代赤の軍将軍。リックの養父にして、当時のリーザス軍最強の男。力の衰えを感じ、軍から退いたが、まだまだ剣の腕は一流で、故郷で道場を開いている。本人にその気はなかったが、もし盗賊になっていたら大陸にその名を轟かす大盗賊になっていた。

ザン・サビス　（オリモブ）
ＬＶ　２７／４０　（当時）
技能　剣戦闘ＬＶ１　シーフＬＶ１

先代赤の軍副将。アルトと共に引退をしようとしていたが、良い人材が見つかるまで退役するなと蹴飛ばされる。その後、メナドという逸材に副将を任せ、悠々退役。今はアルトの道場を手伝っている。名前はアリスソフト作品の「ママトト」より。アルトの部下と言えばこの人。

ボーダー・ガロア　（オリモブ）
ＬＶ　３２／６５　（当時）
技能　剣戦闘ＬＶ２　冒険ＬＶ１

旅の冒険者。因みにパラパラ杯ではナクトという冒険者に負け、準優勝でした。今なお現役の冒険者であり、美人の奥さんと共に各地を旅している。実はルークとも以前会った事があり、顔見知りである。そろそろいい年のはずだが、かつてリックが対峙したときよりも更に強くなっているらしい。名前はアリスソフト作品の「闘神都市」シリーズより。いつかまた登場するかもしれない。

［技］

バイ・ラ・ウェイ

使用者　リック・アディスン

リックの必殺技。目にも止まらぬ速さで相手を斬る高速の剣技。一瞬の内に赤い直線が走る美しさに、周囲の者は目を奪われる。リックの後ろに死神の姿が浮かぶと言われているが、それはリックの強烈な殺気が生み出したもの。この姿を見たものはその日中に死ぬという噂さえ流れているほど。

第６４話　開幕の合図

―リーザス城　最上階―

「（何故だ、何故だ、何故だ！何故私がここまで追い詰められている！？）」

左右からの猛攻を必死に受けながら、ノスの心を怨嗟の声が満たす。

「（私の計画は完璧だった。今まで一度たりとも失敗した事はない。邪魔だったレキシントンもバークスハムも、この手で葬ってやった！）」

「どりゃぁぁぁ！」

ノスの脳裏に浮かぶのは、かつて自らの手で秘密裏に葬った魔人。

「（私と同等の力を持ちながら、魔人としての誇りを持たぬ変態魔人、レキシントン。奴には歴史上初めて人間に倒された魔人として汚名を着せてやった！リトルプリンセスを魔王として覚醒させようとした未来予知魔人、バークスハム。ジル様の復活の為に最大の障害であった奴を暗殺したのもこの私だ！）」

「真空斬！」

自身と同等の力を持つレキシントンの存在が邪魔だった。その予知能力から、自身最大の障壁であるバークスハムが邪魔だった。だから、殺した。

「（この計画にも、アイゼルやサテラは気づきもしなかったはず！ガイとホーネット、偽りの主に頭を垂れ続け、遂に悲願であったジル様復活も遂げた！魔人ですら気づかぬ、完璧な計画！）」
「やれー！儂で魔人をぶっ殺せー！」

１０００年以上もの間耐え続け、遂に達成した目的。多くの魔人を出し抜き、これまで暗躍してきた。その計画は、これまで破綻した事などなかった。

「（それなのに…何故だ！何故…）」

飛び上がり、自身に向かって剣を振り下ろしてくる二人の戦士に向かい、ノスが咆哮する。

「人間如きにぃぃぃぃ、邪魔されねばならぬのだぁぁぁぁ！！！！！」
「くっ…！」
「うがっ！」
「ルークさん！」
「ランス様！」

魔力を帯びた左腕をノスが振るう。衝撃波が発生し、ルークとランスが後方に吹き飛ばされる。鬼のような形相を浮かべ、斬れた右腕から血を流しながら、吹き飛んだ二人に歩みを進める。その姿に、周囲で見守っている者たちは再び恐怖を覚える。アイゼルやサテラとは格が違う。これが、魔人ノス。

「私にぃぃぃぃ、歯向かうなぁぁぁぁぁ！！」
「ふっ…冷静沈着な魔人と聞いていたが、化けの皮が剥がれたといったところか…」
「えっ、そんな話誰から聞いたんじゃ。儂にも教えてちょ」

「うるさい、なまくら！」
「ヒドっ！剣権侵害、反対！」

こちらに迫ってくるノスを見ながら、ルークとランスが冷静に話す。剣を握り直し、ノスの鋼の肉体に視線を移す。

「さて…生半可な攻撃では意味がないみたいだし、大技で決めるぞ！」
「俺様の攻撃は全て大技だが、まあ貧弱な貴様に併せてやるとするか」
「言っとけ。さて、合体技な訳だが、技名でも考えておくか。真滅アタックというのはどうだ？」
「馬鹿者！何故貴様と合体しなきゃならん！合体するのは美人のねーちゃんとだけだ。それに、百歩譲ったとしても名前は真ランスアタックだ、がはは！」
「それは俺の技の要素が殆ど残っていないな…」
「儂はカオスエターナルスラッシュという名前がかっちょいいと思うぞ」
「そんな下らない話は後にして、真面目に戦いなさい！！」

志津香がノスを前にして話し込む二人と一本に声を荒げる。周囲で見ていた面々も呆れた様子だが、不思議と先程ノスに感じた恐怖が薄れている。あの二人の声が、背中が、不思議な安心感をもたらすのだ。これこそが、英雄たる資質か。

「死ねぇぇぇぇ、人間がぁぁぁぁぁ！！」

目前まで迫ったノスが、その巨体から左腕を振り下ろす。それを左右に躱す二人。ノスの拳を受けた床がめり込み、破片が舞い踊る。

「俺様の女に手を出した奴がどうなるか、教えてやるわぁぁぁ！！」
「ホーネットを裏切った報いだ。滅びよ、ノス！」

その言葉と共に、二人が飛び上がる。両手で剣を握り、高く振り上げる。これまで何度も見てきた、二人のよく似た必殺の技。だが、ノスはそれを予見していた。振り下ろした左腕には魔力が帯びている。本来なら、今の一撃で四散しているもの。それが未だ帯びているという事は、今の一撃は誘い。ニヤリと口元を歪めるノス。

「滅びるのは…貴様ら人間だぁぁぁ！！！」

絶叫と共に体を起こし、左腕を二人に向かって振るおうとするノス。その時、激痛に顔が歪む。腕が上がらない。その脇腹に走る痛みはアレキサンダーによるもの。全身に広がる火傷の痛みは志津香によるもの。直線上に走っている斬り傷はリックによるもの。それだけではない。そこらかしこに広がる傷が、一斉に悲鳴を上げる。それは、今この場にいる全員が与えた、確かな傷跡。ノスの脳裏に先程倒したリックの言葉が蘇る。

「ここにいる皆が与えた攻撃は、無駄になどなっていない。その一撃一撃が、確実に貴様に蓄積されている！そして、その積み重ねが…」
「（違う！無駄だ、全て無駄なはずだ！人間如きが与えた傷など…人間如きが…）」

ノスがギリ、と歯ぎしりをし、宙から剣を振り下ろそうとしているルークとランスを睨み付ける。

「魔人ノス、貴様を討つ！」
「人間如きにぃぃぃ、このノスが敗れるなど、あるはずがないのだ

ぁぁぁぁぁ！！！！」
「ランスアタァァァック！！」
「真滅斬！！」

ノスの絶叫と同時に、二人の剣がその体を両断する。信じられないというような表情のまま、ノスの体が三つに分断され、ゆっくりとその体が崩れていく。全身を覆っていた鎧が剥がれ落ち、砂煙となって宙に四散していく。その様子を見ながら、部屋は一瞬静寂に包まれたが、ノスの体が完璧に崩れ落ちた瞬間、歓喜の声が部屋を包んだ。

「がっはっは！俺様の敵ではないのだ！！」
「流石です！ランス様！」
「やーん！やっぱりダーリン素敵！！」
「やりおった…魔人を…倒しおった…うぅっ…」
「はぁ…ドッと疲れがきたな…」
「お二人共…見事です。私もいつか、あの領域に…」
「はっ！目が覚めてみればルークさんが来ているです！これで勝つるです！」
「もう勝ったんですよ、トマトさん」

バレスがむせび泣き、ミリが気絶しているミルを抱きながらため息をつく。アレキサンダーは歓喜と同時に沸いた悔しさに拳を握り、気絶していたトマトがセルの治療によって目を醒ます。その様子を見ながら、怪我の浅いかなみが、座り込んでいる志津香に近づいていく。

「お疲れ様です。志津香さん」
「お疲れ。志津香で良いわよ。私もかなみって呼ぶから」
「えっ…はい、ではそれで。肩を貸しますよ、志津香」

「ふふっ。ありがとう、かなみ。でも大丈夫よ。私は怪我が浅いから」

そう答えて立ち上がる志津香。自然と笑いあう二人。だが、ルークの顔は未だ晴れていない。その顔を見たかなみが疑問を抱くが、それに答えるかのように、突如部屋に声が響いた。

「人間とは…つくづく愚かな生き物だ…その希望は…全て無駄だというのに…」
「っ！？」
「この声は…ノス！？」
「まだ生きているの！？」

全員が崩れたノスの体に視線を向ける。その前にはルークが立ち、既にノスに視線を落としていた。初めからノスが死んでいない事に気がついていたのだろう。その崩れた体の前に横向きに転がるノスの首、そのような状態になりながらも、ノスは静かに言葉を発していた。

「その希望は…すぐに絶望へ変わる…貴様ら如き人間が…あのお方に勝てる訳がない…」

ノスのその言葉に、全員がある事を思い出す。その事を忘れていたのは、ノス撃破の歓喜だけが原因ではないだろう。考えたくなかったのだ。まだこの先にもう一人、ノスよりも強大な力を持った者が控えている事を。

「貴様らは確実に死ぬ…魔王ジル様の手によってな…貴様らだけではない…人類は…再びジル様によって暗黒のじだっ！？」

そこまで言い放った瞬間、ノスの顔面に剣が突き刺さる。それは、ルークの持つ妃円の剣。じろりとルークに視線を向け、睨み付けるノス。

「きっ…さ…」
「もう滅びろ」

その言葉を最後に、ノスの体が消滅し、後に残されたのは赤い玉のみであった。コロリ、と床に転がる赤い玉を手に取るルーク。

「ルークさん…それは…？」
「…これは魔人の核、魔血魂という。魔人は死ぬとその体が消滅し、この玉に戻る」
「おうおう、よく知っとるじゃないか、兄ちゃん。それがある限り、魔人は何度でも復活する可能性があるのじゃ」

ルークの言葉にカオスが反応する。ノスがまだ復活する可能性があると聞き、周囲の者たちが目を見開き、マリスが一番に口を開く。

「それでは、今すぐ破壊すべきでは？」
「あ、それ無理よ、ケバねーちゃん」
「……っ！」
「おおっ、マリス様からノスばりの殺気が…」
「そ、それで、無理っていうのは？」

トマトがマリスからノス並の殺気を感じている中、先程意識を取り戻したマリアがカオスに問う。その問いに、ルークが答える。

「魔血魂を破壊できるのは、魔王だけだ」
「そういう事じゃ。流石の儂でも、魔血魂の破壊は無理無理」

「やはりなまくらだな、こいつ。やっぱりこの戦いが終わったら折る事にしよう」
「ランス様。リーザスが責任を持って、二度と復元できないほどに粉々にしておきますよ」
「ぶるぶる…」
「まあ、カオスの処遇はさておき、そういう訳だから、リア、マリス。この魔血魂はリーザス王国で厳重に封印しておいてくれ」

そう言って、ルークは魔血魂をリアに投げる。それを慌てて受け取りながら、リアが恐る恐る尋ねる。

「いきなり復活したりしない？」
「それは大丈夫だ。基本的には生物が飲み込まない限り、復活する事はない」
「それでは、封印の間に更に厳重な結界を加え、封印しておきましょう。どうせカオスは、二度とあそこに戻る事はないのですから…ふふふ…」
「あ、ああ。頼む。それとシィルちゃんとセルさん」
「はい？」
「何ですか？」
「5分…いや、10分で可能な限りみんなを回復してくれ」

そう言って、奥の間がある方へ視線を向けるルーク。先程まではノスと対峙していたから気がつかなかったが、今は確かに感じる。そこから流れてくる、不穏な空気が。

「まだ一人…倒さなきゃならない相手が残っているからな…」
「魔王…ジル…」
「他の将軍たちの到着を待っては…？」
「いや、今こうしている間にも、ジルは力を取り戻しているはずだ。

戦うのが遅れれば遅れるほど…状況は悪くなる」
「ノスよりも…強いんですよね…」
「ああ、確実にな」

その言葉を聞き、全員に緊張が走る。ほぼ万全の状態で、この人数で挑んで、それでようやく倒した魔人ノス。それよりも強い相手と、この満身創痍な状態で戦わなくてはならないのだ。倒れている仲間を見ながら、ルークが言葉を続ける。

「まず言っておく事がある。敵は更に強大。今度こそ死ぬかもしれん。既に動けない者がいたら、無理についてくる必要は無い」
「その通り。俺様の足手まといになるような奴は邪魔だ！」
「今更そんな人、いないと思うけどね…」
「お役に立てるかは判りませんが…最後までお供します」
「ぼくも…最後まで戦います」

ルークとランスの言葉に、レイラがフッと笑う。ランとメナドがその言葉に続き、他のみんなもしっかりとルークの顔を見てくる。誰一人、引く気はないらしい。あのリアでさえ、はるまきを胸に抱いてしっかりとルークの方を見ていた。

「そうか…。それでは、シィルちゃんとセルさんは回復の雨とヒーリング係に分かれて、みんなの治療を頼む。ヒーリング係の方は、リックとアレキサンダーを重点的に回復してくれ」
「はい！」
「まあ、文句はないの。あの二人は欠かせない戦力じゃ」
「ルーク様、治療でしたら、私も出来ます」
「そうか。ではマリスも協力してくれ。軽傷の者は、俺が正露丸３を持っているから、それで体力の回復を」
「はいはーい！元気の薬もありますですよー！アイテム屋の本領発

揮ですー！」

シィルとセルに指示を出し、ルークとトマトが周りに回復アイテムを配り始める。そのルークに、セルが申し訳なさそうに話しかけてくる。

「すいません、ルークさん。私が大回復を使えれば…」
「いや、気にする必要は無いさ。それに、あれは少し危険な魔法だ」
「ちょっと待って！セルさん、大回復使えないんですか？」
「…はい。あの魔法は高度な魔法です」
「でも、ロゼさんよりセルさんの方がレベルは上なんですよね…？」
「自身の体力を犠牲にする大回復は…ＡＬ教の教えでは少しグレーゾーンなところがありまして…今まで覚えようとした事がなかったんです…」
「私は一応使えるのですが…」

マリスがそう答えると同時に、リアがマリスにギュッと抱きつく。

「使ったら倒れる危険な魔法なんて、マリスには使わせないんだからね」
「このように言われていますので…」
「いや、無理に使う必要は無い。それに、マリスも貴重な戦力だ。ここで脱落は惜しい」
「ありがとうございます、ルーク様」
「というか、そんな高度な魔法を、大したレベルでもないのに使うロゼさんって…」
「ロゼさんは、とても優秀な神官ですよ。もう少し信仰心があればいいのですが…」

セルのその言葉に、全員がロゼの顔を思い出す。自由奔放、信仰

心ゼロ、金にがめつい淫乱シスター。突如、ランスが叫び出す。

「駄目だ！あいつが優秀な神官など、俺様は認めんぞ！！」
「でも、悪魔を呼び出すのだってそれなりに優秀な証なんじゃ…」
「ええい、それ以上言うな！俺様の何かが壊れる気がする！」
「そうじゃ、そうじゃ！ロゼってさっき入り口で倒れてた神官じゃろ？淫乱な神官なんぞ、儂は絶対に認めんぞ！」
「変な拘りを持っているわね、このスケベ剣」

ランスとカオスがやんや、やんやと騒ぎ立てる。それを横目に、ルークはミリへと近づいていく。ミルを抱いたまま、壁に背を預けているミリ。胸の中のミルは、まだ気を失ったままだった。

「…どうした、ルーク」
「…その様子なら、察しているんだろ。ミリ、お前はミルと一緒に残れ」
「っ！？俺は、まだ…」
「ミルはこの後の戦いを経験させるには、あまりにも幼すぎる。ミルだけをここに残し、目が覚めたとき奥の部屋に来たらどうするつもりだ？」
「っ…。留守番なら…俺以外にも…」

ミルを胸に抱きながら、ルークに反論するミリ。ルークはその目をジッと見ながら、はっきりと言う。

「足手まといだ」
「！？」
「いつ動きが鈍るか判らない、今のお前ではな…」
「そうかい…お優しいあんたが…そうはっきり言うって事は…足手まといなのか。くそっ…悔しいねぇ…最後の最後で、役に立てない

なんて…」

ミリが右手で顔を覆う。涙は流していなかったが、少しだけ見えたその表情は、あまりにも悲痛な表情。

「最後なんかじゃないさ」

「…？」

「リーザス解放戦という点で見れば、確かに最後かもしれない。だが、俺たちが共に戦う機会なんて、まだまだいくらでもあるさ」

「ふっ…ふふっ…そうだね。またあんたたちと…冒険がしたいよ。必ず…生きて帰ってくるんだよ」

「ああ、当然だ！」

互いに軽く右拳をぶつけ合う。それは、誓い。魔王という強大な敵を前にして、ルークはしっかりと勝利を約束する。ミリの顔に、自然と笑みがこぼれる。立ち去るその背中を見ながら、胸の中のミルをギュッと抱きしめた。

「お疲れ、フェリス」

「はぁっ…はぁっ…感謝の言葉は…」

ミリと話した後、ルークは壁の穴の前で未だに息を切らしているフェリスに声をかけにいく。ジロっとルークを睨み付けるフェリス。一応主人なので、出来る反抗はこれが精一杯である。

「いや、本当に感謝しているぞ。ほら、元気の薬だ。体力はこれで回復するはずだ」

「お、気が利く！んぐっ、んぐっ…で、魔人と共存するとか言っておいて、魔人をぶち殺した感想を聞いて良いか？」

「何、全ての魔人と仲良くできるとは思っていないさ。奴は倒すべ

き魔人だった、それだけだ」
「詭弁だな。んぐっ…んぐっ…」

他の者に聞こえないよう、小声で話すルークとフェリス。元気の薬をグビグビと飲みながら、意地悪そうな笑みを浮かべるフェリス。ちょっとした復讐のつもりなのだろうか。

「ぷはぁっ！で、私はもう帰って良いのか？」
「ん？何言っているんだ？」
「…？」
「この後の戦い、期待しているぞ」

ポン、とフェリスの肩に手を置くルーク。ルークの言葉を一瞬理解できず、先程までの会話を思い返した後、プルプルと震え始める。

「この後の戦いって…なんかさっきの奴が、魔王ジルがどうたらとか…」
「ああ、この先に待ち構えているのは、復活した魔王ジル。大丈夫、全盛期の数パーセントほどの力しか保有していないさ」
「いや、さっきの魔人より確実に強いって…あいつ、私よりも絶対に強い魔人だったんですけど…」
「何、危なくなったら俺が許可を出すから、そうなったらいつでも逃げていいさ」

その言葉に、フェリスがホッとする。その顔を見ながら、ルークがボソッと呟く。

「まあ、本当に死ぬ直前まで、許可を出す気はないがな…」
「鬼だ！鬼がいる！結局私の主人はどっちも大ハズレだ！！」

フェリスが涙目で叫び出す。その会話を聞いていた志津香が、ルークに後ろからチョップする。

「あんまり虐めるんじゃないの。悪趣味よ」
「いや、ジョークのつもりだったんだが…」
「嘘だ！目が本気だった！うわぁぁぁん…」

嘆くフェリスを見ながら、困ったように頭を掻くルーク。そこにかなみが駆け寄ってくる。それは、奇しくもあの時と同じメンバー。この場にいる者の中でルークの夢を知っている、三人の女性。フェリスを宥めるルークを見ながら、かなみが志津香に小さく呟く。

「志津香…」
「何？」
「絶対に…生きて帰りましょう…」
「当然でしょ、かなみ」

―リーザス城　最上階　奥の間―

静寂に包まれていた部屋に、ギィという扉を開けた音が響く。その音を聞き、玉座に腰掛け、目を閉じていたジルが、その目を開いていく。扉の前に立つ人間たちを捉え、ゆっくりと口を開く。

「…遅かったな。ようやく来たか」
「あれが…魔王ジル…」
「その口ぶりだと、ノスが敗れた事には気がついていたようだな」
「当然だ。その事で貴様らに興味を持った。ノスを倒すほどの人間…くくく、面白い」

「自分の部下の死を…悲しみもしないなんて…」
「悲しいぞ。胸が張り裂けそうだ。奴は一番使える駒だったからな」
そう大げさに自分の胸に手を当てるジル。その動作一つ一つに、否が応でも緊張が走る。ジルと対峙するのは総勢17人。ルーク、ランス、シィル、かなみ、志津香、マリア、ラン、トマト、セル、リア、マリス、バレス、レイラ、リック、メナド、アレキサンダー、そして涙目のフェリス。ぞろぞろと立ち並ぶ面々を見て、ジルが失笑する。
「これはまた…随分と大勢で来たものだ。これでは少し戦いにくいか…ふっ！」
ジルがそう言って立ち上がり、右手を横に払う。発生した魔力が、部屋の装飾品や玉座を吹き飛ばし、一瞬の内に部屋を更地にする。魔力を溜めている様子はなかった。それなのに、ほぼノータイムでこれ程の事をやってのけた事に、バレスが驚愕する。
「なんと…」
「ふん、手品と変わらんな！」
「カオスの使い手か…」
バレスの言葉を一蹴したランスに冷たい視線を送るジル。そのジルにカオスを向け、高らかにランスが宣言する。
「俺様の名はランス。世界一の大英雄だ。ジル、たっぷりと痛めつけて、可愛がった後で封印してくれるわ！」
「この儂から逃げられると思うなよ！封印じゃ足らんぞ。奴の血を儂の体が欲しておる！」
「ふっ…今度こそ完膚無きまでに消滅させてやろう、カオス。だが

…最初に破壊したのではつまらんな」

ニヤリと笑いながら、こちらを見下した表情で見てくるジル。

「カオスを破壊すれば、私にダメージを与える手段はなくなる。それでは興ざめだ。カオス、貴様の破壊は最後まで取っておいてやろう」

「随分と…余裕じゃない？」

「ふふふ、それ程の力の差があると判らぬほど、愚かな存在なのか？」

瞬間、ジルの体から殺気が溢れ出る。ジルにとってはまだまだ本気ではないであろう。だが、それは先程までのノスよりも遙かに禍々しさを含んでいた。その殺気に、構える面々。ジルも構えようとするが、相手の中に一人悪魔がいる事に気がつく。

「ほう…悪魔がいるな。そいつが貴様らの中で最強と見えるが？」

「げっ！目をつけられた！？」

「馬鹿者！最強はこの俺様だ！」

「貴様には聞いていない。主は誰だ？」

「何だと！」

「…俺とこの男だ。それがどうかしたか？」

ルークがランスを親指で示しながら答える。その返答を聞いて、ジルがくすくすと笑う。

「悪魔を連れていれば勝てるとでも思ったのか？」

「例えフェリスがいなくとも、貴様には挑んだぞ。ジル」

「ううう…だったら早く帰してくれ…」

「ふふふ…ははははは！そうか。やはりお前らは今までの人間の中

でもそれなりには面白い存在みたいだな。せいぜい楽しませてくれよ」

ジルが無邪気に笑う。その様子を見ている面々。ルークが、背中に隠していた志津香に目で合図を出す。コクリと頷き、ゆっくりと前に出ていく志津香。

「では…魔王の恐ろしさを知って貰おうか！」

ジルがそう言い放った瞬間、一歩前に出た志津香が両手を前に出す。魔力を帯びたその手から、志津香渾身の一撃が放たれる。

「白色破壊光線！！」

「ほう…」

先手必勝。部屋に入る前から魔力を溜めておき、開幕早々に大技をぶちかます。ジルの体を光の渦が包み、そのままその体が光へと消えていく。奥の壁をそのまま突き破り、光は彼方へと消えていく。

「相変わらずの威力だな…」

「油断しないで！ノスもこの攻撃は耐えたわ！」

「悔しいけど、この一撃で倒れるような相手じゃないでしょうね…」

レイラが周囲に檄を飛ばし、志津香も再び魔力を溜めていく。ジルの立っていた場所に立ちこめていた煙が晴れていく。全員が注目するが、そこにはジルの姿はない。

「いない…」

「これで終わったんじゃないか？がはは、あっけない幕切れだ！」

「いんや…まだ魔人の気配を感じるぞい…」

「皆の者、注意するのじゃ！どこから攻撃を仕掛けてくるか判らんぞ！」
「かなみ！どこへ逃げたか見えなか…った…」

カオスの断言に皆が気を引き締め直す。バレスが周囲を見回しながら声を荒げ、メナドもそれに習って隣に立っていたかなみに問いかける。そして、見てしまう。先程まで横に立っていたはずのかなみの体が、大地から離れているのを。

「……」
「あっ…かな…み…」

血が床に滴り落ちる。かなみの目の前に立つのは、先程まで遠くに立っていたはずの魔王ジル。その右腕から伸びた爪が、かなみの腹を貫き、その体を持ち上げていた。かなみは口から血を流し、その目は既に意識を失っている。腹から流れた血はジルの爪を伝い、一滴、また一滴と床に滴り落ちていた。

「かなみーーーっ！」
「！？」
「なっ！」
「かなみさん！」
「一体どうやって…」

メナドの絶叫に、全員がそちらを向き、貫かれたかなみを見る。それは有り得ない光景。全員が注意をしている中、ジルは悠々とかなみを貫いたのだ。煙が立ちこめていたとはいえ、人間には誰一人としてその動きを目に捉える事が出来なかった。転移魔法の類かとシィルやセルは疑う。だが、その動きを捉えていた者がたった一人だけいた。それは、人間ではなく、悪魔。フェリスが一歩後ろに下

がりながら、怯えた声を出す。

「こ…こんなの勝てる訳がない…こいつ、普通に動いただけだ！」

その言葉に周囲が驚愕する。何の種も仕掛けもない。魔法でもない。ジルは、ただ高速で動いただけであった。その動きを、フェリス以外誰も捉える事が出来なかったのだ。ジルが右手の爪を伝う血を左手で掬い、一口舐める。

「ふむ、中々に美味だな。それにしても、この場で一番素早そうな者でもこの様か。やはり、人間共に私の動きを見きるのは不可能か…これは少しスピードを落とすべきだったかな？」

「…っ…っ…」

今なお爪で貫かれたまま、虚ろな目をしているかなみを見て、志津香が声にならない声をあげる。思い出されるのは先程の会話。共に生きて帰ろうと誓った仲間の命が、今こうして散ろうとしているのだ。

「それで…」

かなみの血を口元につけたまま、ジルがゆっくりと他の面々を見る。目の前にいるメナドは、親友がやられているのにも関わらず、恐怖で身動きが取れないでいる。

「次はどいつだ？」

「俺だ！！」

瞬間、ジルの後ろから声がする。振り返ると、鬼のような形相で剣を振りかぶるルーク。一体いつの間に後ろに回ったのか。それと

も、フェリスほどではないにしろ、ルークにもその動きが追えていたとでもいうのか。剣を振り下ろすルークを見ながら、ジルが不敵に笑う。

「では、次はお前を殺すとしよう」

これより始まるは、文字通りの血戦。これよりルークたちは、十分と持たずパーティーが半壊する。その時ジルの前に立っていられたのは、僅かに五人。開幕の合図は、先程の白色破壊光線ではない。ジルにとっては、あのような正面からの魔法は、攻撃にも含まれない。爪を引き抜かれ、かなみの体が地に落ちる音が聞こえる。それが、真の開幕の合図であった。

第６４話　開幕の合図（後書き）

［人物］

ジル

ＬＶ　－／－

技能　魔王ＬＶ２

第５代魔王。先々代に位置し、最も人類を虐殺した歴代最悪の魔王。美しい容姿の女性だが、激しく人間を憎悪している。魔王の寿命を神との謁見で克服し、永遠の命を手に入れたが、カオスにより１０００年以上もの間封印されていた。魔王として覚醒した者のレベルは測定不能となり、技能レベルは魔王以外隠される。目覚めたばかりである今の力は、全盛期の１パーセントにも満たないが、その状態でもノスより遙か高みの存在。超高速の動きと、鋭く伸縮自在の爪、予備動作無しに放たれる強力なブレス、そのどれもが驚異である。

第６５話　立ち上がる五人

ーリーザス城　最上階　奥の間ー

ガキン、という音が部屋に響く。ルークの剣と、ジルの爪が交差した音。ジルの爪は伸縮自在で、いまは恐ろしいほどに長いが、反面その爪は異常に細い。まるで針のような細さ。それなのに、ルークの剣を、その爪で易々と受け止めている。

「くっ…」
「いい腕だ…二番目に殺すには惜しい…」

瞬間、ルークの脇腹を爪が貫く。口からゴプ、と血を吹き出し、ルークが目を見開いてジルを睨み付ける。

「だが死ね」
「ランスアタァァァック！！」
「バイ・ラ・ウェイ！！」
「装甲破壊パンチ！！」

ジルへの恐怖で身動きが取れずにいた面々の中、いち早く動いたのはこの三人。ランス、リック、アレキサンダーの三人が最強の技をジルに放つ。

「ふっ…」

三人を後ろ目で見つつ、ルークから爪を引き抜く。ルークの体が崩れ落ちるのと同時に、ジルの姿が消える。

「あんぎゃ！」
「ぐっ…」
「がっ…」

次の瞬間、三人が体から血を流し、その体が崩れ落ちる。その倒れる三人の背中を愉快そうに見ているのはジル。いつの間に三人の背後に回っていたのか。周囲の者が目を見開くが、フェリスだけははっきりと見ていた。ジルはただ、超高速で三人の横を通っただけだ。すれ違う瞬間、長く伸ばした爪で三人の体を斬り裂いた。ただ、それだけの事。倒れる五人を見ながら、ジルが平然と言ってのける。

「さて…貴様らの中でも強そうな面子が早々に退場した訳だが…次は誰だ？」
「っ…」
「あんたよ！ファイヤーレーザー！」

ジルのプレッシャーに全員が一歩引く中、志津香が勇猛果敢にファイヤーレーザーを放つ。だが、それがジルに到達するよりも早く、ジルは志津香の横にいて耳打ちをしていた。

「じゃじゃ馬だな…嫌いではないが、死期を早めるだけだぞ」
「っ！？」

間近に感じる強烈な殺気。瞬間、滝のように汗が噴き出る。迫る爪に志津香は死を覚悟したが、その爪は飛んできた斬撃に弾かれ、志津香の体を斬り裂く事はなかった。

「ぬっ…」

ジルは斬撃が飛んできた方向を不思議そうに見る。その隙に、志津香は後方に飛んで難を逃れる。ジルの見た方向には、脇を押さえながら剣を構えている戦士の姿。

「真空斬…」
「ルークさん！」
「おかしいな…殺したと思っていたのだが…」

そのジルの言葉に反応するように、同じく倒れていたランス、リック、アレキサンダーの三人がゆっくりと立ち上がる。出血はしているが、三人ともまだまだ戦えるという顔でジルを睨み付ける。小さく笑いながら、自分の爪に視線を落とすジル。

「ふっ…まさか、ここまで力が落ちているとはな…」
「貴様ぁぁ！この俺様を倒そうなんざ不届き先晩！泣いて謝っても、もう許さんぞ！」
「ランス様！よかった…」
「かなみも、まだ生きています！」

そう叫ぶのはマリス。その精神力から、それなりの速さで動けるようになったマリスは、倒れていたかなみに駆け寄りヒーリングをかける。意識は失っているが、息はある。ホッとするマリス。それを聞いたジルが残念そうに肩を落とす。

「やれやれ、一人も殺せていないとはな…まあ、じっくりといたぶる方針へと変更するかな」
「そう簡単に…人間はやられないわよ…」
「来るなら…来てみなさい…」
「でも、出来ればゆっくり来てくれると、嬉しいかもです…」

レイラとランが剣を構え直し、そう宣言する。横にいたトマトも震えながら剣を構えるが、つい弱気な言葉が口から出てしまう。だが、それを聞いたジルはその願いを聞き入れる。

「そうだな…気がつかない内に殺されても、恐怖心が足りんか…目の前に確実に迫る恐怖と絶望を感じさせた方が、より楽しめそうだ…ふふっ」

「どこまで…儂らを虚仮にする気じゃ！」

「ここは泣いて礼を言うところのはずだろう？」

「抜かせっ！属性パンチ・炎！」

完全に見下すようなジルに、アレキサンダーが突っ込んでいく。それに呼応するかのように、ランス、リック、ルークの三人も突っ込む。いや、今度は四人だけではない。ラン、トマト、バレス、レイラ、そしてメナド。この部屋にいる前衛全員がジルに向かっていったのだ。

「そうだ、もっと私を楽しませろ！」

「ぐっ…」

「希望が絶望へと変わるその瞬間こそが、最高の愉悦！」

「きゃぁぁぁ！」

「私に触れてみせろ。スピードはかなり落としてやっているのだぞ！」

「くそ…が…」

九人による猛攻。そのメンバーは生半可なものではない。リーザスの将軍が、大陸でも屈指の格闘家が、英雄たる資質を兼ね備えた二人が、その九人には含まれているのだ。だが、当たらない。四方八方から飛んでくる攻撃を、意図も容易くジルは躱し続ける。先程までの目にも止まらぬスピードではない。周りで見ているマリアや

志津香の目にもはっきりとジルの姿が映るほどのスピード。華麗に攻撃を躱し続け、すれ違い様に爪で相手を斬りつけていく。先程のように貫いたりはしない。少しずつ、確実に周囲にダメージを与えていた。それはあまりにも屈辱。速さでも、力でも、手を抜かれているのだ。激高し、更に攻撃の手が増えるが、一撃たりとも当たらない。舞い飛ぶ鮮血の中、ジルのその姿は踊っているかのようにさえ見えた。それはまるで、死の舞踏。

「あっ…くっ…たぁぁぁ！」
「ふっ…」

トマトの渾身の一撃をヒラリと躱し、すれ違い様に爪で斬りつけるジル。その攻撃を受けると同時に、トマトが床に倒れ込んだ。

「トマト！」
「ふっ…これで二人目…順当に落ちたか…」

ジルの攻撃を受け続けていた前衛の面々。初めに倒れたのはトマトであった。だが、それは無理もない事。他の面々に比べ、トマト一人があまりにも経験が足りていない。むしろ、ここまで耐え切れていたのが奇跡に近い。ジルもトマトが一番未熟なのを気づいていたのだろう。見下しながら死の舞踏を続ける。

「くっ…もうっ…」
「せめて…せめて一矢…」
「貴様らでは無理だ」
「っ！？」
「くそ…ちくしょう…ごめん、かなみ…」

次に動きが鈍り始めたのはランとメナド。かなみの仇討に、せめ

て一太刀とメナドが最後の一撃を放とうとするが、ジルはそれすらも許さず、二人を爪で斬り裂く。ランとメナドがその一撃で崩れ落ちる。メナドの目には涙が溢れ、悔しさに顔を歪ませながら倒れていった。

「ラン！メナド！ちっ…真滅斬！」
「貴様ぁぁぁ！ランスアタァァァック！！」

ルークとランスが同時にジルに打ち込む。それを悠々と躱すジル。ランスアタックが床に打ち付けられた衝撃で、破片が飛び床の残骸であった粉末で視界が曇る。その瞬間、ジルは周りで見ていた後衛陣の方に瞬時に移動していた。

「ぬおっ！ジルが！？」
「きゃぁぁぁぁぁ！」

視界が晴れ、ジルがいない事に驚愕するバレス。それと同時に、扉の付近から悲鳴が聞こえる。それはマリアの声。目の前に現れたジルに驚きながら、チューリップ1号の砲身を向ける。

「い…いって、チューリップ1ご…」
「遅い」

その爪がチューリップ1号を真っ二つに叩き斬る。ボン、と軽い小爆発を起こしたチューリップ1号を見て、マリアが目を見開く。

「わ、私のチューリップ1号が…」
「馬鹿！そんな心配してる場合じゃないでしょ！くっ…ファイヤーレーザー！」

志津香がマリアを助けるべく、ファイヤーレーザーを放つ。だが、ジルはすぐさまその姿を消し、ファイヤーレーザーは壁に命中するだけだった。それと同時に、マリアが床に崩れ落ちる。

「マリア…ねぇ、マリア…嘘でしょ！マリア、返事をして！」
「心配するな。次はお前だ」
「！？…がっ！」

ジルはファイヤーレーザーを避ける直前、マリアの腹を爪で貫いていた。そのまま崩れ落ちたマリアの姿に動揺し、十分目で追う事の出来るジルの動きを見失ってしまった志津香。目の前まで迫ったジルの爪を腹に受け、マリア同様崩れ落ちる。後衛は手加減して遊んでも仕方がないとでも言うように、一撃で倒していくジル。その視線が、ちらりとマリスの方を向く。

「くっ…神聖分解波！」
「当たらんよ…」
「…魔王！！」

かなみの治療をしていたマリスが瞬時に放った魔法をいとも簡単に躱し、目の前へと迫る。悔しそうにジルの睨みながら、マリスの腹も爪で貫かれ、血を吹き出しながら倒れていった。

「マリス！えっ…やん！はるま…」
「アリが…戦えぬ者は戦場に出てくるな…」
「リアさん！」

はるまきに攻撃させようとしたリアだったが、そのはるまきを平手打ちで遠くへ吹き飛ばすジル。恐怖で目を見開くリアに爪を突き立てようとするジルだったが、そこに割って入ってきたのはシィル。

爪の攻撃を代わりに受け、床に倒れ込む。

「もこもこちゃん…うっ！」

「無駄な事を…運命は1秒しか変わらなかったな…」

「ダー…リン…」

崩れ落ちたシィルを見て驚いた顔をしていたリアだったが、直後みんなと同様に腹を爪で貫かれる。崩れ落ちるリアを見下すように見ていたジルだったが、突如後ろから殺気を感じる。焦る様子もなく振り返ると、そこにはカオスを振りかぶったランスの姿。

「シィルに…何をしやがった貴様ぁぁぁぁぁ！！」

「ふっ…」

ランス渾身の一撃は空を切る。ここまで攻撃が当たらない事など、あっていいのか。あまりにも速さに差がありすぎる。他の前衛陣がジルに飛びかかるが、先程までと同様に全て躱され続ける。倒れているシィルとリアを抱きかかえるランス。二人とも気を失っている。腹部からの出血量は決して少なくない。辺りを見回すが、マリスはすでに倒れている。シィルやリアと違って意識はあるようで、自分にヒーリングをかけているのが見える。だが、あの様子では他に手は回らないだろう。その奥、呆然と立ち尽くすセルの姿が見える。

「セルさん！治療を頼む！」

「…っ…っ…」

「セルさん！おい、セル！早くシィルの治療を！！」

「はっ！はい！回復の…」

「倒れた者を起こすような無粋な真似はするな…」

回復の雨を唱えようとしたセルの前に、先程まで前衛陣と戦って

いたはずのジルが現れる。その姿を見た瞬間、先程までと同様に体が固まってしまうセル。

「あっ…あぁっ…」

「神官か、なるほど…私の存在をより大きく感じたか…無理もない…」

「神よ…ごぷっ…」

目に涙を溜めながら、セルが神に祈る。その瞬間、腹部に激痛が走り、口から血を吐きながらその体が崩れ落ちる。セルの腹から爪を抜き、血を舐めとりながらジルが呟く。

「神なら会った事があるぞ。あれは、貴様らの味方ではない」

「世迷い言を！バイ・ラ・ウェイ！！」

「はぁっ！」

「ふんっ！」

「真滅斬！！」

「属性パンチ・氷！！」

リック、レイラ、バレス、ルーク、アレキサンダーの五人が一斉に攻撃を仕掛ける。それを笑いながら、三度ジルが死の舞踏を始める。その様子を見ながら、ランスはシィルの体をゆっくりと床に置く。セルは治療に来られない。マリスは意識があるが、もう一度叫べばジルが確実にその意識を刈り取りに行くだろう。ならば、ここは放っておく。マリスならば、自分が動けるようになれば真っ先にリアの治療に来るはず。となれば、シィルの治療も早くしてくれるはず。目を閉じているシィルの頬に触れながら、ランスが小さく呟く。

「さっさと起きろよ、馬鹿。俺様が奴にトドメを刺す瞬間を見逃す

んじゃないぞ…」
「儂が貰くシーンもお忘れなくじゃな」

そう言い残し、ランスがカオスを握り直してジルに向かって駆け出す。ランスも加わった六人の猛攻。だが、当たらない。当たらない。一撃たりとも擦りもしない。自分たちの体は少しずつ傷ついていくのに、目の前のジルは未だ無傷。体に飛び散っている鮮血は、全てこちらのもの。これ程の戦力差に、一瞬でも勝利の夢を見たというのか。レイラの心を絶望が占めていく。その隙、ジルは見逃さない。瞬間、レイラの背後に回り込んだジルが、その頬を両手で覆い、その耳に静かに囁く。

「心が折れたか…？」
「っ！」

振り返り、剣を横薙ぎに振るうが、血が噴き出したのは自分の方。すれ違い様に斬りつけられた体から鮮血が舞い、レイラがゆっくりと倒れていく。

「レイラ殿！？」
「ええぃ、ちょこまかと！いい加減斬られろ！！」
「貴様らが遅すぎる。ふふ、ははは！これで判ったか？この私との圧倒的な差が？」
「ぐぬっ…」

攻撃を避け続けながら、まるで今は会話の時間だとでも言うように反撃の手を止めるジル。それに構うことなくこちらは攻撃を繰り出すが、ヒラリ、ヒラリ、と蝶のように舞い続けるジル。

「人間など…所詮我らに蹂躙される存在だ…」

「バイ・ラ・ウェイ！！くっ…」
「抱いてはならぬ夢というものがある…我ら魔の者に勝とうなどというのが、まさしくそれだ…」
「属性パンチ・雷！！くそっ！」
「その姿…あまりにも滑稽…あまりにも無様…」
「ここまで力の差が…あるというのか…リア様たちの仇も取れずして…何の為の将軍か…」
「神に対しての悪魔が蹂躙されるべき存在であるように、貴様ら人間やカラー、その他の種族、大陸にいる全ての種は魔の者に統制されるべき下級の存在だ…」
「ええぃ、このなまくら！少しは攻撃を当てろ！」
「ええぃ、このへたくそ！少しは儂を奴の血で染めろ！」
「家畜は家畜らしくしていろ…」
「人間を…舐めるなよ！真滅斬！」
「ははは、これだけ無様な姿を見せておいて、まだそう言える気概があるか。滑稽だ、あまりにもな…」
「あんた、むかつくね！」

瞬間、ジルの後ろから強烈な殺気が吹き出し、その立っていた場所を鎌が横薙ぎに振るわれる。鎌を振るったのは、それまで事態を見守っていたフェリス。一刀両断したかと思われた素早く、強烈な一撃であったが、そこにジルの姿はない。鎌を振るったフェリスの背後に悠然と立ちながら。ニヤリと笑って口を開く。

「悪魔が…ようやくやる気を出したか？」
「一応契約なんでね…それに、あんたが気にくわない！」

首だけ振り返り、ジルを睨み付けながら、不意打ちのように鎌を振るうフェリス。それをひょいと飛んで躱しながら、ジルが口元を歪める。

「人間には手加減をしてやったが…貴様には手加減できんぞ？」
「いらないよ！代わりに死ね！」
「真滅斬！！」
「ランスアタァァァック！！」

既に立っているのはルーク、ランス、バレス、リック、アレキサンダー、フェリスの六人。未だ一撃も与えられていない中、それでも諦めることなく立ち向かい続ける。その姿が、ジルにはあまりに滑稽に映り、溢れ出る笑みを隠しきれずにいた。

ーリーザス城　入り口前ー

「おう、エクス！城の周りはあらかた片づいたぜ！」
「城下町の傭兵部隊からも伝言が届いています。段々と数が減り、殲滅は時間の問題との事です」
「それはよかった」

城の入り口前に陣を引いたエクスとハウレーンの下に、コルドバとキンケードが報告にやって来る。ノスの放った大量のモンスターも、その数を着実に減らしていた。

「それで、上への援軍は行けそうか？」
「確実にモンスターの数は減っているのですが…まだまだという所ですね」
「先程から上で何度も轟音がしています。既に戦いは始まっているのでしょう…」
「ちっ！最後の戦いに駆けつけられないなんてよ！」

コルドバが悔しそうに陣に置いてあった机を叩く。その様子を見ながら、エクスが城を見上げる。

「信じましょう。先に行った者たちを…あそこにはリックも、レイラさんもいる。それに、ルーク殿も…」

「父上…どうかご無事で…」

「そうか…そうだよな。信じるしかねえ。それに、今からでも援軍は間に合うかもしれねえ！こうしちゃいられねぇ、行くぞキンケード！城のモンスターを殲滅するぜ！」

「（やれやれ…少し休みたかったのですがね…）」

コルドバが豪快に笑い飛ばし、キンケードを引き連れて城の攻略部隊に合流する。エクスとハウレーンはそれを見送り、各部隊の状況のまとめに再度奔走し始めた。その陣の中、疲労で倒れているロゼが仰向けに寝たまま城の最上階を見上げる。

「（みんな…必ず、生きて帰ってきなさいよ…）」

下にいる者たちは、ルークたちの勝利を信じていた。希望を抱いていた。だがそれは、あまりにも儚い希望。

―リーザス城　最上階　奥の間―

「ぜぇっ…ぜぇっ…」

「くそっ…」

「こんな事が…」

「もう終わりか？」

その部屋には、ジル以外立っている者がいなかった。ランスとルーク、リックとアレキサンダーの四人が膝をついてジルを睨む。立ち向かいたいが、体が言う事を聞かない。バレスは床に倒れていた。老体でありながら、よくぞここまで。本来であれば褒め称えるべきその奮戦も、今は無意味。ジルは、今なお無傷。その足下にはトマトが転がっていた。早々に脱落したトマトを馬鹿にするように踏みつけるが、トマトはピクリとも動かない。

「では、そろそろ死ぬか？あの悪魔のように…」

「フェリス…」

ルークが壁をちらりと見る。そこには、壁に背中を預け、夥しいほどの出血をしたフェリスがぐったりと座り込んでいた。意識があるのかは判らない。頭を下げ、ピクリとも動かない。ジルは最初に宣言したとおり、フェリスへ繰り出す攻撃は他の者と比べ遙かに強力なものであった。みるみる傷ついていくフェリスを見かね、ルークは悪魔界へ帰そうとしたが、フェリスがそれを手で制した。この女を殺さなきゃ気が済まない、最後まで戦わせろ。その彼女の言葉に従い、ルークは彼女を戻さなかったが、今はそれを後悔していた。あの状態になってしまったフェリスは、もう戻せない。下手に悪魔界に戻し、そのまま死んでしまったら…。最悪の予感がルークの頭をよぎる。せめてフェリスが意識を取り戻さなければ、帰す訳にはいかない。歯噛みするルークを見下ろしながら、ジルが口元を歪める。

「どんな気持ちだ？」

「…ふんっ！」

「私に傷一つ付ける事が叶わず、死んでいく今の気持ちは…」

「くっ…」

「私には、この光景は初めから予想がついていたぞ？」
「……」
「貴様らのその無様な姿も…この私の完全勝利も…」
「ちっ…」
「では、一人くらい死んで貰うと…！？」

瞬間、ジルが目を見開く。全身を駆け巡る不快感。これは、痛み。私が傷ついている。ゆっくりと視線を落とす。その左足に、確かに剣が突き刺さっている。一体誰が。前の四人は、驚愕に目を見開いている。こいつらじゃあない。もう一度、足に視線を戻す。その足の横、先程まで倒れていたはずの女が、ジルを笑いながら見上げている。

「初めから予想がついていたと言っていましたけど…」

ボロボロの体で、全身から血を流しながら、それでもトマトはニヤリと笑う。

「この状況は予想がついていたんですかねー？無様ですかねー？」
「小娘が…私に…傷をつけた…だと…貴様ぁぁぁぁぁ！」

ジルに最初の傷をつけたのは、トマト。戦えぬリアを除いたら、ジルが一番に見下していた相手。その痛み。その屈辱に、ジルが激高する。ジルの全身から殺気が溢れ、その衝撃でトマトの体が吹き飛ばされる。受け身も取れないその体を、ルークがしかと支える。瞬間、ジルが咆哮する。

「死ねぇぇぇぇ！！」

ジルがそう叫ぶと同時に、部屋を強烈なブレスが飲み込んだ。ジ

ルの体から、周囲３６０度全方向に放たれた強力なブレス。意識のあった者、そうでない者、その全てを吹き飛ばす。部屋に轟音が鳴り響き、真っ白な煙幕のように煙が立ちこめる。反響していた音が止み、煙が収まった頃、周りは先程以上にさっぱりとしていた。それはまるで、廃墟のような光景。吹き飛ばされた者たちが、そこらかしこの壁際に横たわっていた。呻き声を上げている者もいるところを見ると、意識がある者もいるようだ。その光景を見て、ジルが冷静さを取り戻す。

「しまった…やり過ぎたか…これでこの遊びも終わりか…」

頭を掻きながら部屋を見回す。思わぬ攻撃に冷静さを欠いた事を少し悔やむジル。もうそろそろ戦い始めて十分程といったところか。まあ、持った方だなとジルが思っていると、ガラッ、と音がする。ジルはそちらを向き、少しだけ驚く。起き上がるはずはないと思っていた者たちが、ゆっくりと起き上がっているのだ。その人影は五人。

「このまま…終わらせはしない…」

リックが全身から血を流しながら、それでも立ち上がる。リーザス最強の剣士として、その看板を背負っていた先代たちの魂を受け継ぐ者として、寝ている訳にはいかない。

「まだ…私は…戦えるぞ…」

アレキサンダーが、ふらふらと立ち上がっていく。既に満身創痍。だが、その瞳だけはしっかりとジルを睨み付けている。

「マリアを…かなみを…みんなを傷つけたあんたを…許さないんだ

から…」

志津香が、渾身の力を振り絞って立ち上がる。胸に宿るは、先程の誓い。必ず生きて帰る。その誓いを果たすために、倒さねばならない相手がいる。

「もう貴様は抱けなくてもいい…代わりに、必ず殺す！」

「くくっ…感じるぞ。儂がここにいる意味。これこそが、儂の生き甲斐！」

ランスが左手に持ったカオスを杖代わりにして立ち上がる。その目には確かな殺気。俺様の女たちを、シィルを、何度も傷つけた奴を生かしておくほど甘くはない。

「それで…お前に聞きたい事があるんだが…」

ルークがしっかりと立ち上がる。胸に抱いていたトマトの息がある事を確認し、静かに床に横たわらせる。数ヶ月前まで、ただのアイテム屋だった彼女の成長に胸が熱くなる。トマトから視線をゆっくりとジルに移し、トマトと同じ質問を投げる。

「この状況は…予想がついていたのかな？」

「そうか、そんなに死にたいか…」

未だジルには一撃を与えたに過ぎない。こちらは満身創痍の五人。だがその瞳は、誰一人として諦めている者はいない。ジルが髪をかき上げ、全員が身構える。それが、第二ラウンド開始の合図であった。

第６５話　立ち上がる五人（後書き）

［技］

白き制裁のブレス　（半オリ）

使用者　ジル

　ジルの放つ強烈なブレス。３６０度全方向に放たれるこのブレスから逃げる術はない。威力はそれ程ではないが、視界が奪われるため、ジルがその気であればその煙幕の中敵を斬り刻む事も可能な恐るべき技。

第６６話　プラス三人

―リーザス城　最上階　奥の間―

「…っ」
「かな…み…」
「マリス様…」

かなみが目を覚ます。痛む全身。中でも腹部に激痛が走っている。軽く手で触れると、すでに塞がってはいるが、夥しい量の出血の跡。側に倒れていたマリスが話しかけてくる。見ればマリスも腹部から出血しており、自分の手でヒーリングをかけているところだった。

「マリス様…その傷は…？」
「私も貴女も…ジルにやられたのよ…大丈夫、もうすぐ動けるようにはなるから…早くリア様を治療しにいかないと…」
「リア様！？」

マリスの言葉に目を見開き、その視線の方を追う。そこには、横向けで倒れているリアの姿。いや、リアだけではない。そこらかしこに、仲間が倒れているのだ。ピクリとも動かない者、悔しそうに傷を抑えている者、自分が意識を失っている間に、いったい何があったのか。

「マリス様…ジルは！？」
「あそこにいる五人が…戦っているわ…」

マリスに言われ、かなみは気がつく。部屋の中央に、五人の戦士

がジルと対峙している事を。ルーク、ランス、志津香、リック、アレキサンダー。全員が傷だらけの状態。それなのに、今なおジルに立ち向かっている。かなみは体を起こそうとするが、立ち上がる事が出来ない。

「悔しい…最後の最後で…役に立てないなんて…」

「それはみんな一緒よ…もう、あの五人に運命を託すしかないわ…」

周りでは意識のある者たちが、ルークたちを見守っている。虚ろな目をしたレイラが、悔しそうに歯噛みするバレスが、口から血を流しながら自身の傷を治療しているセルが、運命を五人に託す。

「あの五人が負けたら…リーザスは、いえ、人類は終わりよ…」

「みんな…」

かなみとマリスも、五人を見守っている。身構える五人の前で悠然と立つジル。髪を一度かき上げ、口元に笑みを浮かべる。

「それで…立ったのはいいが、勝てる手段でも見つかったのか？」

「ふん、そんなもの必要ない。俺様が一撃で叩き伏せればそれで終わりだ！」

「つまりは無策か…ふふふ、ははははは！」

ランスの言葉を聞き、ジルが腹を抱えて笑う。そのジルの様子を不快そうに見る五人。志津香が右手に魔力を溜め、ジルに放つ。

「何が…おかしいのよ！ファイヤーレーザー！」

「ふっ！」

自身に向かってくるファイヤーレーザーを見ながら、ジルが軽く

右手を振るう。瞬間、強烈な青い電撃がファイヤーレーザーの前に発生に、衝突した魔力は四散して消えた。

「なっ…！？」

「ははは、これが笑わずにいられるか。これまで貴様らが私に与えられたのはわずか一撃。またその愚行を繰り返そうというのか？実に滑稽、実に愉快！」

「黙れ！はっ！」

「貴様を…討つ！」

「ぶっ殺す！」

アレキサンダーとリック、そしてランスが飛び出す。志津香が魔力をもう一度溜め、ルークは真空斬の構えを取る。近寄ってくるランスたちを見ながら、ジルが右手を振るう。すると、大量の電撃が一直線にランスたちに向かう。

「なっ！？」

「ぐぁっ！」

「ぎゃっ！」

「無様な姿だ…」

高速で向かってきた電撃を避ける術はなく、直撃した三人はダメージと共に後方に吹き飛ぶ。

「真空斬！乱れ撃ち！」

「ファイヤーレーザー！」

ジルに向かって遠距離攻撃を放つルークと志津香。大量に飛んでくる攻撃に対し、ジルが左右の手を交互に振るう。すると、先程よりも更に大量の電撃が二人の攻撃を迎撃し、空中で四散した。ジル

は先程から一歩も動いていない。手を振るって発生する電撃だけで、遠距離攻撃を捌き、近寄ろうとする者を吹き飛ばす。ジルは口元を歪めながら、見下すようにルークたちに言ってのける。

「さあ…私を動かしてみろ…一歩でも動かせたら褒美をやってもいいぞ？」

「舐めやがって…叩っ斬る！！」

「……」

倒れていたランス、リック、アレキサンダーの三人が立ち上がり、再度ジルに向かって駆ける。だが、ジルから放たれる尋常でない量の電撃が、その歩みを防ぐ。志津香が放つ魔法も、ルークが放つ斬撃も、一撃たりともジルに届かない。

「ははははは！踊れ、踊れ！」

「くそっ…近づく事すらできんとは…」

「ええい、カオス！なんとかしろ！」

「そういわれてものう…」

電撃を躱すランスたちの姿を見て、無様だと笑うジル。先程までとジルの戦い方が変わる。それまでは近距離で自由に攻撃させ、その全てを躱しながら反撃していたジルだったが、今は遠距離からこちらの手を完全封鎖してくる。その事に、志津香が歯噛みする。

「これも…余裕って訳…」

「…本当にそうなのか？」

「えっ？」

志津香の呟きに、ルークが反応する。何か、違和感を覚える。こちらの滑稽な姿を楽しんでいたジルが、突如こちらの動きを制限す

るような戦法に出た事。確かにただの余裕かもしれない。だが、それとは別。もっと根本的な何かを見落としている気がする。奴は自身の力が本来の１００分の1も出せないと目覚めたときに言っていたらしい。それでもなお、ノスより遙かに上の強さ。では、全盛期のジルはこの１００倍強かったというのか。この１００倍素早く、この１００倍攻撃が重い。

「そんな事…ありえるのか…？」

「ははは！どうした、私を斬るのではないのか？近寄っていいのだぞ？」

「ええい、ならこの面倒な電撃を止めろ！」

ルークが真空斬を定期的に放ちながら、更に思考する。今でさえ目で追い切れない程の速さ。あれの１００倍など、想像できない。ジルの左足を見る。トマトが突き刺した剣の跡からは、未だ血が流れ出ている。それを見て、ルークが自身の抱いた疑問に辿り着く。

「トマトの攻撃が…何故通った…」

「それは、無敵結界をカオスで無効化しているからでしょ！火爆破！」

「それでも…相手は魔王だぞ。まさかあいつ…志津香、相談がある。こういう芸当は出来るか？」

「えっ？…出来なくはないけど、そんなのあいつには…」

「なら頼む！試したい事があるんだ…」

ルークがそう言って、深く腰を下ろす。先程までの連撃真空斬ではない。闘気を限界まで溜めた、一撃の威力が高い真空斬。その準備をしながら、ジルをしかと睨み付ける。

「ジルにはまだ一撃しか与えられていないというのに…くそっ！」

「ふはは、その絶望の表情！実に素晴らしいぞ！」
「この距離では、まだ届かない…もう少し…もう少し奴に近づければ…」

部屋にジルの笑い声がこだまする。その屈辱にアレキサンダーが眉をひそめ、リックは虎視眈々と何かを狙っているが、何度となく吹き飛ばされ実現できずにいた。そのとき、後方から闘気を感じる。それはルーク。強力な闘気を剣に纏い、ジルをしかと睨み付けていた。

「ほう…渾身の一撃といったところか…」
「真空斬！最大出力！！」

ルークがマックスパワーの真空斬をジルに放つ。ジルはそれを余裕の表情で見ながら、右腕でランスたちに電撃を出し続け、空いている左腕を真空斬に向けて振るう。放たれた大量の電撃が途中で一つになり、巨大な電磁砲となる。それが真空斬と直撃し、互いに相殺する。四散した真空斬を見ながら、静かに笑うジル。

「無駄な足掻きだったな…んっ？」

直後、ジルは見る。相殺した真空斬の後ろから、志津香のファイヤーレーザーが飛んできている事を。

「小賢しい…」

だが、そのファイヤーレーザーがジルに届く事はない。至近距離まで迫っていたファイヤーレーザーだが、ジルが全身から小規模なブレスを吹き出す。そのブレスに相殺され、ファイヤーレーザーも四散してしまった。が、ジルが目を見開く。ファイヤーレーザーの

更に後ろ、そこには炎の矢があった。ファイヤーレーザーを撃ち落としたのが既に至近距離であったため、それは目前まで迫っていた。撃ち落とす術はない。とはいえ、ただの初級魔法。ジルには傷一つつけられないはず。志津香も無駄な一撃だと思っていた。だが、ジルは炎の矢を横飛びで躱す。そのとき、顔が一瞬だけ歪むのをルークははっきりと見る。

「…ちっ」

横に飛んで避けたジルが悔しそうに舌打ちする。ルークがジルに向かって口を開く。

「確か、一歩動かしたら褒美をくれるんだったな…」
「ふん…」
「おっ！そうだったな！じゃあ貴様、神妙に俺様に斬られろ！」
「馬鹿が…」
「なんだと！この嘘つきが！」

ランスがジルを挑発するような願いを言うが、ジルがそれを一蹴する。そのやりとりを見ながら、ルークが静かに言葉を続ける。

「では、こちらの質問に答えてくれるだけでいいぞ。どうせ大層な願いを言ったところで、聞き入れられないだろうからな…」
「質問…？いいだろう、言ってみろ」

おかしな事を言ってきたものだと、ジルが不思議そうにしながらルークに問いかける。リックとアレキサンダーも、そのやりとりを見守る。向かったところで、電撃が飛んでくるだけだ。ルークの質問が勝利に繋がるような事であるなら、それを聞いてからの方が得策。ジルから許可の下りたルークが、はっきりとジルに言ってのけ

る。

「お前…弱いだろ？」
「「なっ！？」」
「……」
「何を…」
「…気でも狂ったのか？」

リックとアレキサンダーが目を見開き、ランスが両腕を組んで話を聞く。志津香も絶句し、ジルは不快そうにルークを見る。

「いや、少し言葉が足りないか…お前の力は本来の１００分の１以下。それは間違いないな」
「ああ、私の力は全盛期の１パーセントにも満たん。それでこの有様とは…くくく、無様だなぁ、人間」
「…だが、俺には今の貴様の速さや力が１００倍になるとはどうしても思えん」

その言葉に、少しだけジルが反応を示す。

「それは…貴様ら程度では想像の及ばぬだけの事だろう？」
「かもしれんな…だが、一つ仮定がある」
「仮定…？」
「何も全ての能力が順当に落ちている訳ではないという仮定だ。例えば、その速さや力、魔力なんかも当然全盛期に比べれば落ちているだろう。だが、それは１パーセントという程ではない。ならば、何を持って１パーセントか。全体だ。貴様の力全体を通して、トータルで１パーセント」
「……」
「とすれば…」

「ああ、1パーセントどころでない程に、極端に落ちている能力があるはずだ」
「極端に…落ちた能力…」

志津香の呟きの後、ルークが剣先をジルの足に向ける。それは、トマトがつけた傷。未だに血が出続けている。

「おかしいと思ったんだ。トマトには悪いが、魔王を貫ける程の攻撃ではない。だが、確かにその剣は貴様を貫き、未だに出血が止まらない様子…」
「まさか…」
「全盛期はそんな事なかったのだろうが…今のお前は、相当に打たれ弱い！」
「がはは、なるほど。急に遠距離攻撃に変えたのは、痛む足では俺様たちの攻撃を躱しきれないと踏んだからだな！」
「ふっ…はは！」

それまでルークの言葉を黙って聞いていたジルが、突如笑い出す。数秒ほど大声で笑った後、特に焦った様子もない余裕の表情で、はっきりと答える。

「貴様の言うとおりだ。我が身は屈辱な程に弱っている。そこの小娘の攻撃で傷を負うほどにな…まあ、この体に関しては封印が原因の全てではないのだがな…」
「なんと…」
「認めた…随分とあっさりと…」
「……」

ルークの考えは的中していた。直前まで脅威の装甲を誇るノスと戦い、それよりもジルが強いという事で、面々の大半は知らず知ら

ずの内に錯覚していたのだ。ジルには一体どれほどの攻撃を与えれば倒れるのかと。だが、実際にはその逆。トマトの一撃を受けただけで動きが鈍るほどに、今のジルは打たれ弱い。だが、ジルはそれを気にする様子もなくはっきりと言ってのける。

「それで、どうするつもりだ？」

「ぬっ…」

「貴様らは現に私に近寄れていないのだぞ？」

「いや、それが判れば戦いようはあります」

ジルの問いに答えたのはアレキサンダー。両拳を合わせ、一歩前に出る。

「まだまだ長期戦。そう考え、電撃を極力躱してきましたが、そうでないなら話は別！」

「アレキサンダーさん！まさか…」

「特攻か…」

「後の事は考えん！ただ一撃、貴様に渾身の一撃を放つ！」

「届くと思うのか…？その前に死ぬぞ…？」

「届かせる！例えこの身、朽ちようとも！！」

瞬間、アレキサンダーが走り出す。それに続くようにランスとリックも駆け出し、志津香とルークが遠距離攻撃で援護する。ジルが先程まで同様、大量の電撃を両手から放つ。

「うぉぉぉぉ！属性パンチ・雷」

「拳でガード！？あの拳…電撃を纏っている…小賢しい…」

電撃を両腕に纏わせ、顔を守るようにガードしながらアレキサンダーが駆けていく。ランスとリックも、アレキサンダーほどのスピ

ードではないが、確実にジルに近づいていく。先程とは状況が違う。長期戦、ジルの素早さ。それを考え無理な特攻は避けてきた。だが、これは短期戦。わずか数発で戦況は大きく変わる。その上、ジルは今足に怪我を負っている。これこそが、勝機。

「下がれ、下郎が！私に近づくな！」

「ぐあっ！」

気がつけばアレキサンダーはジルの目前まで迫っていた。ジルが声を荒げ、アレキサンダーに電撃を集めた電磁砲を放つ。拳に纏った電撃では抑えきれず、直撃してそのダメージが全身を駆け巡る。意識が飛びそうになる。

「アレキサンダー！」

だが、飛びそうになった意識は直後に聞こえてきたルークの声で呼び戻される。先のノス戦が蘇る。ルークとランスが戦うのを、見ている事しか出来なかった自分。その悔しさが、アレキサンダーの体を突き動かす。

「う…うぉぉぉぉ！！」

「何！？動けるのか！？だが、まだ迎撃は…」

「はぁっ！」

「赤い剣…ちいっ！？」

電磁砲の直撃を受けて、それでも前進してくるアレキサンダーにジルが目を見開く。すぐさま迎撃しようとしたジルだったが、その手を剣が払おうとしているのを見て一歩後退する。その剣はリックのバイ・ロード。リックの伸ばせる限界まで伸ばした剣をジルに振るい、アレキサンダーをサポートしたのだ。咆哮と共にアレキサン

ダーが飛び上がり、右の拳に纏っていた電撃が、白き光へと変わる。
その様子を、驚愕の表情で見上げるジル。

「滅せよ、魔王！属性パンチ・光！！！」

直後、轟音が部屋に響いた。それは、アレキサンダーの拳が放たれた音。だがそれは、ジルではない。ジルの立っていた床が、アレキサンダーの拳で大きく窪んでいた。右拳を床に叩きつけた状態のアレキサンダーの口から、ごぷ、と血が流れ出る。

「希望を…抱かせてしまったかな…？」
「ごふっ…がっ…」

ジルが不敵に笑う。いつの間にかアレキサンダーの背後に立っていたジルは、その爪でアレキサンダーの胸を貫いていた。血が滴り落ちる中、その表情に思わず歩みを止めてしまったランスとリック、呆然とこちらを見ているルークと志津香、その四人に向かって平然と言い放つ。

「打たれ弱いのは認めたが…別に貴様らの攻撃を避けられない程に、動きが落ちているというのは認めていなかったのだがな…くくく」
「む…無念…」

ドサリ、とアレキサンダーの体が崩れ落ちる。確かに動きは足の痛みで落ちているのかもしれない。だが、それでもアレキサンダーの攻撃を避ける事など、ジルにとっては容易い事であった。爪を引き抜き、血を舐めとりながら、ジルが目の前に立つランスとリックを見下すように見ていた。そのジルを見ながら、リックが決意したような声でランスに囁く。

「ランス殿…」
「あん？何だ…」
「後の事は、お三方にお任せします…自分が、道を開きます！」

―リーザス城　最上階　広間―

「おねえ…ちゃん…」
「ミル！目を覚ましたかい」

最終決戦に参加できず、広間でミルを抱いて座り込んでいたミリ。胸の中のミルが意識を取り戻し、ホッと一息つく。

「あれ？みんなは？」
「みんなは…今奥で戦っているよ」

ミリがそう返す。先程から聞こえてくる戦いの音。それを聞く度に、ミリは悔しい思いをしていた。足手まといなのは判っている。だが、それでもただ待っているだけなのは悔しい。そのミリに、ミルはしっかりと言う。

「おねえちゃん…行こう！」
「…駄目だ。ミル、あんたじゃ殺されちまうよ」
「それでも…みんなと一緒に戦いたい！」

ミルの真剣な眼差し。ああ、そうか。まだまだ幼いと思っていた妹は、いつの間にか立派な戦士へと成長していたのか。少しだけ目頭が熱くなるミリ。だが、ルークの言葉が思い出される。

「でもな…ミル。俺たちじゃ足手まといなんだ…」
「そんな事ない！ほんの少しくらいなら、みんなの役に…」
「いや、貴様らでは足手まといだ」

突如、会話を遮るように男の声が響く。ミリとミルが声のした方向を見て、ミリは目を見開く。ミルは見覚えが無いようだったが、ミリはその姿を、いや、正確にはその男ではなく、後ろに控えていた者たちを確かに知っている。

「何でここに…」

―リーザス城　最上階　奥の間―

「ん？」

アレキサンダーが崩れ落ちるのを振り返ろうともしていなかったジルの前に、リックが一歩踏み出す。

「次は貴様か？」
「リーザス赤の軍将軍、リック・アディスン。お相手させていただく！」
「相手になどならんぞ。一方的な虐殺だ…」
「はぁっ！」

リックが剣を振りかぶり、ジルに迫る。それを悠然と見ながら、すれ違い様に爪で斬り裂こうと準備するジル。リックが剣を振り下ろすよりも早く、ジルが高速で駆ける。が、何かおかしい。剣に全く殺気がこもっていないのだ。いつまで経っても振り下ろされない

剣。その体は無防備。誘っているとも一瞬思うが、見えていないはずの自分に何をしようというのか。

「諦めたか…幕切れは下らなかったな…死ね」

結局ジルは、リックのその無気力な姿を諦めたと結論づけ、すれ違い様に爪で全身を斬り裂いた。

「ぐっ…」

「ここまで立っていながら…最後に怖じ気づく…とは…！？」

全身から血を噴き上がらせ、その体が崩れていくリックを見下した目で見ていたジルだったが、全身に走る痛みに目を見開く。直後、ジルの全身から血が噴き出した。

「なっ！？」

「貴女の攻撃…反射させて貰いましたよ…」

激痛に顔が歪む。傷自体は深くないが、全身から出血している。いつの間に斬られた。ジルが混乱する。これが、リックの隠された必殺技、反射である。無防備な自分の体にあえて攻撃を与えさせ、そのダメージの一部を相手へと返す捨て身技。攻撃を受けた瞬間、無心の状態から放たれる剣技は、殺気がこもっていないため、ジルですら斬られた事に気づけなかった。相手に与えるダメージよりも、自身の受けるダメージの方が大きいため、実戦ではほとんど使う事のなかったこの技が、ここにきて最大限に効果を発揮する。

「き、貴様ぁぁぁ！」

「後は…頼みました…」

ジルが振り返り、リックを睨み付けるが、その背後から殺気を感じる。それは、ルークとランス。いつの間にかルークも間合いを詰めており、二人でジルに渾身の剣を振り下ろす。

「真滅斬！！」
「ランスアタァァァック！！」
「甘いわ！」

その一撃も、ジルには届かない。高速でルークとランスの間をすり抜け、すれ違い様に爪でその体を斬る。

「くっ…まだこれ程の動きが…」
「こんのっ…」
「この程度の薄傷、何の影響もないわ！魔王の力、見くびるな！」
「ファイヤーレーザー！」

背後からルークとランスに追撃を加えようとするジルに、志津香が魔法を放つ。だが、それをジルは平然と躱し、一瞬で志津香の背後に回り込む。

「当たらんよ…」
「くっ…きゃぁぁぁぁ！」
「志津香！」

振り返った志津香が、ジルの放った衝撃波をその身に受け、ルークとランスのところまで吹き飛ぶ。その背中をルークが支えるが、ジルを見ると、その体から殺気と共に白い魔力が吹き出している。

「あれは…」
「げっ！？さっきの面倒くさい技だ！」

「ちょっと待ってよ…あんなのもう一発受けたら、みんなは…」

志津香が絶望に目を見開く。３６０度全方向に放たれるジルのブレス。自分たちはまだ耐えられるかもしれない。でも、後ろに倒れているリックとアレキサンダーは。部屋のそこらかしこに倒れているみんなは。その志津香の顔を見ながら、ジルが笑う。

「さて…何人生き残れるかな…」
「てめぇぇぇ！」
「駄目だ…間に合わん…」

ルークの真空斬も、志津香の魔法も間に合わない。ジルのブレスを止める手立ては何も無い。今正に放たれようとしているブレスを、三人は見ているしかなかった。いや、それは三人だけではない。周囲で意識のある者たちも皆、全員が絶望に顔を曇らせる。それこそが、ジルの最大の喜び。嬉しそうに顔を歪ませ、ジルがブレスを放とうとする。

「その絶望を抱いたまま死ね、人間共よ…」
「メタルライン！！」
「！？」

が、それが放たれる事は無かった。ジルは、突如自分に迫ってきた強烈な電撃の束に目を見開き、それを放とうとしていたブレスの塊でガードする。相殺し、ブレスの塊が四散する。白い煙の向こうに立つ人物を見て、ジルは目を見開く。いや、目を見開いたのはジルだけではない。

「う…そ…」
「そんな…」

ルークに背中を預けながら志津香が絶句する。起き上がる事の出来ないかなみが我が目を疑う。中でも一番驚いているのはセルだ。信じられないものを見るような目で、やってきた来訪者に視線を向ける。

「帰ったと…思っていたのだがな…」

ルークがその人物を見て、静かに笑う。その問いに、来訪者がはっきりと答える。

「貴様らの為ではない。ノスに騙され、ジルを復活させたまま…おめおめと帰ったのでは、ホーネット様に会わせる顔がない！」

金色の髪をなびかせ、ジルをしっかりと睨み付ける男。それは、人間ではない。人類を蹂躙する存在、魔人。

「あの時の腰抜けか…」

「ここで滅んで貰うぞ、魔王ジル！」

「サ、サテラは関係ないからな！一緒についてきただけなんだからな！」

来訪者は三人。魔人アイゼル、魔人サテラ、シーザー。本来敵対すべき三人が、有り得ないはずの増援が、今こうしてルークたちの前に現れた。アイゼルたちを見ながら、ジルがニヤリと笑う。

「まさか…私に歯向かう愚かな魔人が二人もいるとはな…もういい、貴様らも殺すぞ…」

「か、数に入れられている…」

「サテラ様、覚悟ヲ決メルベキカト…」

今ここに、全ての役者が揃う。人間と魔人、憎み合う二つの種が、一つの目的の下、共闘するのだ。奇跡のような光景の中、舞台は最終局面へと移行していく。

第６６話　プラス三人（後書き）

［技］

青き絶望の雷　（オリ）

使用者　ジル

　ジルの放つ強烈な雷撃。ファイヤーレーザー以上の威力を、ほぼノータイムで連発する事が可能な、強力な一撃。何本かの雷撃をまとめ、強烈な電磁砲にする事も可能。

属性パンチ・光

使用者　アレキサンダー

　アレキサンダーの必殺技。光の神の力を借り、己の拳に光撃を纏わす。闇属性の敵は強力な者が多いため、いざという時に非情に役に立つ一撃。

反射

使用者　リック・アディスン

　リックの必殺技。無防備な体にあえて打ち込ませ、殺気の含まない攻撃で相手に跳ね返す反撃技。自分がダメージを受けないと発動せず、相手に与えるダメージよりも自身のダメージの方が大きいため、使いどころの難しい技である。

メタルライン

　激しい電撃の束を敵に突き刺す最上級魔法。ゼットンや白色破壊光線と並んで記される、最強クラスの魔法。

第67話　勝機は一度

―リーザス城　最上階　奥の間―

「魔の者が…人間の味方をするなんて…」

セルは目の前の事態に困惑していた。恐らく、その度合いはこの部屋にいる者の中でも一番だろう。自身が信じてきた神の教え、それを真っ向から否定するような事態が、今目の前で現実に起きているのだ。

「メタルライン！」

アイゼルがジルに向かって強力な魔法を放つ。ジルは右手を振るって電撃を放ち、その魔法を相殺する。

「くく…魔人が魔王である私に歯向かうか…懐かしい気分だよ…」

ジルの脳裏に思い出されるのは、かつて自分をカオスで封印した男、魔人ガイ。自分の愛人として寵愛していた、元人間の魔人だ。

「そちらの小娘にも見覚えが無いが…貴様もガイの手によって作り出された魔人か？」

「うげっ…そ、そうだけど、それが何だよ…！」

「サテラ様、腰ガ引ケテマス」

シーザーの後ろに隠れ、涙目で腰の引けているサテラと、その横でしっかりとこちらを睨み付けているアイゼルの容姿を見比べて、

ジルがニヤリと笑う。

「貴様ら…二人とも人間の魔人だな？そうか…くくっ、また人間か…」

サテラは人間の、アイゼルは変身人間の魔人。どちらも分類的には人間の魔人に位置する。反旗を翻されているはずなのに、何故かジルは嬉しそうに笑っていた。その笑顔に、ルークは何かおかしな感情を抱く。激しい恨みから、最も人類を虐殺した魔王。ならば、人間に裏切られて、何故ああも嬉しそうにしているのか。

「では…仕切り直しと行くか…」

「ファイヤーレーザー！」

「メタルライン！」

ジルの言葉を遮るかのように、前後からアイゼルと志津香が同時に魔法を放つ。その魔法がジルに到達する前に、フッと姿を消し、アイゼルとサテラに迫る。

「ぎゃー！こっちに来たー！」

「サテラ、無理はしなくていいからな。電極直雷！」

「当たり前だ！ううっ…何でこんな事に…」

サテラが文句を言いながら鞭をしっかりと握り、迫るジルに素早く振るう。だが、ジルはアイゼルとサテラの攻撃を簡単に躱し、爪を伸ばす。

「とりあえず…小娘、死ね！」

「げっ！よりにもよって、なんでサテラに！？」

一気に間合いを詰めたジルがサテラを爪で斬り裂く。だが、その攻撃はサテラに届かず、目の前に割って入ったシーザーに阻まれる。

「ぬっ…人形風情が…」
「サテラ様、ゴ無事デ？」
「おおっ、流石シーザーだ！そのままぶちのめせ！」
「了解シマシタ。フンッ！」

その硬い装甲でジルの爪を受けきり、返し様に鉄拳を振るう。が、元々あまり素早くはないシーザー。ジルは不快そうにしながらその攻撃を躱し、シーザーの体にピタリと両の手のひらをつける。

「邪魔だ…」
「！？」

そう冷たく言い放つと同時に、ジルの手から強力な魔力が放たれる。密接した状態で直撃したシーザーの腹部の岩が粉々に砕け、後方に吹き飛ぶ。

「ガッ…」
「全身を吹き飛ばすつもりだったのだが…頑丈だな。まあいい、人形風情はさっさと…」

ジルが右手を魔力で覆い、シーザーを追撃しようとする。が、直後に目の前から強烈な殺気。チラリと横目で見ると、先程までと表情の一変したサテラがジルを睨み付けている。

「お前…シーザーに何してるんだ？」
「…見て判らぬか？土に戻そうとしてやっただけだ」

ジルの返答と同時に、高速の鞭が振るわれる。

「お前、殺すぞ！」
「貴様では無理だ」
「はあっ！」

サテラの鞭を易々と躱すジルに、アイゼルも剣を振るう。魔人二人の放つ近接攻撃。だが、当たらない。アイゼルの剣技はそこそこといったレベルだが、サテラの鞭捌きは相当なもの。元々軌道の読みにくい鞭は敵に命中しやすい武器のはず。それなのに、一撃たりとも当たらないのだ。サテラの表情がだんだんと驚愕に彩られていく。

「なんなんだよ…なんなんだこいつ！？」
「くっ…」
「これが…魔王と魔人の差だ…」

そう言うと同時に、ジルがアイゼルとサテラに爪を振るう。サテラが思わず目を瞑ってしまうが、その爪はサテラまで届かず、ガキン、という音が部屋に響く。サテラに振るわれた爪をランスが、アイゼルに振るわれた爪をルークが防いでいる。

「ほう…」
「ふっ！」
「どりゃぁ！」

即座にルークとランスがジルを横薙ぎに斬る。その攻撃を後方に飛んで躱し、口元を歪めるジル。

「人間が、魔人を庇うか…」

「がはは、この魔人は俺様の女だからな！」
「おい、ふざけるな！いつからサテラがお前の女になった！」
「ん？さっきはあんなに可愛い声で喘いでいたじゃないか、がはは！」
「こ…殺す！やっぱり殺す！ジルの前に、お前から…」
「後にしろ、サテラ」

額に青筋を浮かべ、ランスに鞭を振るおうとするサテラを制するアイゼル。目の前のルークを見て、静かに口を開く。

「余計なお世話だ。施しは必要ない」
「そう言うな。目的は一緒だろ」
「そうよ。一時的にでも協力しましょう」
「志津香さん…」

ルークたちと共にこちらに駆け寄ってきていた志津香に声をかけられる。ルークと志津香の顔を一瞬だけ交互に見て、少しだけ悲しそうな表情を浮かべた後、アイゼルがジルの方を見ながらはっきりと言う。

「ジルを倒すまでの間だけだ」
「ああ、今はそれで十分だ！」
「…来い。精々、楽しませてみろ」

腹に穴が開いた状態のシーザーもふらふらと立ち上がり、志津香以外の五人が一斉にジルに向かっていき、それを志津香が魔法で援護する。人数は減ったが、先程までと似たような光景。ジルは魔法と死の舞踏、両方を併せた戦闘スタイルで五人を翻弄する。乱れ飛ぶ剣、鞭、魔法。だが、やはりジルには当たらない。未だにまともなダメージはトマトの一撃とリックの反射のみ。当たりさえすれば、

一度でも強力な攻撃が当たりさえすれば、一気に状況をひっくり返せる可能性はある。だが、当たらないのだ。

「ここまで…魔人がいても、ここまでの差があるというのか…」
「これが…魔王ジル…」
「ルークさん…」

バレスが右拳を握り、マリスがリアとシィルの治療をしながら歯噛みする。あまりにも、相手が強すぎる。かなみが不安そうな目でルークたちを見る。

「どりゃぁぁ！」
「ふっ！」
「ガァァァァ！」

目の前で繰り広げられる攻防。ジルの反撃で少しずつその体が傷ついていく五人。対するジルは、その体に新たな傷を付けることなく、笑みを浮かべながら踊る。これが、死の舞踏。その光景を、一人の悪魔がぼんやりと見ていた。

「人間と…魔人が…共闘している…」

それは、悪魔フェリス。ジルの猛攻で意識が朦朧としていた彼女だが、先程から繰り広げられている目の前の光景に目を奪われる。

「俺の目的は…人類と魔人の共存」
「…そんな望みは絶対に叶わないぞ。人間と魔人。神と悪魔。対極に位置する関係だ。分かり合える事なんてない」

少し前に、ルークに自分が言い放った言葉が思い出される。それ

は、至極当然の事。１００人に聞けば、１００人がフェリスの意見に賛同するだろう。それ程までに、ルークの考えはおかしい。それは狂人の域。

「それでも…あんたには…出来るっていうのか…？」

だが、現実に今目の前では、一時的とはいえ人間と魔人が分かり合っている。共に手を取り合い、戦っている。その姿が、何故かフェリスには神々しく映る。

「ルーク…あんたは…」

そう呟き、フェリスが側に落ちていた鎌に手を伸ばす。右手で鎌を握れるか確認する。まだ、握れる。まだ、私は戦える。

「ふはははは、さっきまでの威勢はどうした！」
「ちくしょう…」
「ええい、貴様ら！あんだけ決め顔で入ってきておいて、てんで役に立っていないではないか！」
「本当、本当。儂、超がっかり」
「ちっ…」

ジルが笑いながらルークたちを傷つけていく。ランスの文句にイラッとするアイゼルとサテラだったが、何も言い返せない。ジルには、まだ一撃も与えられていないのだ。

「くくく、カオスの使い手の言うとおりだな。情けない魔人共だ…」
「なんだと！サテラたちは情けなくなんかないぞ！」
「私に一撃も与えられないのにか？なんと無様な…」
「無様…だと…貴様！」

「!?よせ、アイゼル!」

ジルの挑発に応じるように、アイゼルが剣を振り上げる。だが、それはあまりにも無茶な攻撃。ルークがアイゼルを止めようとするが、アイゼルがチラリとだけルークを見てくる。その表情は、挑発に応じた者の顔ではない。何か、あるというのか。逆転の一手が。

「魔王ジル!滅びろ!」
「あまりにも…無様な姿だ…」

叫びながら剣を振り下ろすアイゼル。口元に笑みを浮かべながら、ジルはその攻撃を容易に躱し、アイゼルの背後に瞬時に回り込む。そして、その胸を鋭い爪で貫く。それは、先程見た光景。先程のアレキサンダー同様、ごぷ、と血を口元から垂らしたアイゼルだったが、その口元がニヤリと笑う。

「なに!?」

ジルの目が見開かれる。爪が抜けないのだ。見れば、目の前のアイゼルの姿が先程までと違う。一瞬の内に体がふくれあがり、優男風の姿からノスを思い出させるような巨体になっていた。

「貴様…変身人間か!?」
「今だ!この勝機、無駄にするな!」

アイゼルの鋼の筋肉に邪魔され爪が抜けず、困惑しているジルにルークたちが一斉に飛びかかる。真っ先に飛びかかったのはルークとシーザー。ジルに振り下ろすように剣と拳が振るわれる。

「!?くそっ!」

その二人を見ながら、ジルが忌々しげに自分の爪を自ら叩き折る。アイゼルの拘束から外れたジルが瞬時に後方に飛び、ルークとシーザーの攻撃をギリギリで躱す。だが、直後その体に激痛が走る。

「逃がさないぞ！」
「くっ…小娘がぁぁぁ！」

それは、サテラの鞭。射程の長いサテラの攻撃が、ジルの体に直撃していた。以前レッドの町を襲撃した際、解放軍を次々と倒していったその威力は健在。ジルの顔が歪み、叫びながらサテラを魔法で吹き飛ばす。

「ぐあっ…」
「…ちっ」
「どりゃぁぁぁぁ！」
「ファイヤーレーザー！」

今の一撃だけで、ジルの足が少しだけふらついている。自身のその無様な姿に舌打ちしながら、前からランスが迫ってきている事と、横から自身に向かって魔法が放たれたのを確認する。迎撃してもいいが、万が一カオスの攻撃を受ければ、今の自分では危ない。一度後方に飛び、体勢を立て直す。

「焦っている？私が…くくっ…」

ほんの少しとはいえ、追い詰められた形になったジルが自嘲気味に笑う。が、それもこれで終わり。一度体勢を立て直してしまえば、もう次はない。アイゼルは今の捨て身の一撃で膝をついている。サテラも魔法が直撃し、吹き飛んだ。もう遊びも終わりにしよう。後

方に飛ぶジル。立っていた場所にファイヤーレーザーが撃ち込まれるのを見ながら、ブレスで一気に終わらせる事を考える。そう、ジルは焦っていた。魔人であるサテラの一撃はそれ程までに強力で、迫ってきていたランスの持つカオスは、それ以上に驚異であった。そして、その前提にあるのは、この部屋にはもう立ち上がれる者はいないだろうという先入観。だからこそ、後ろに迫ってきていた殺気に、今の今まで気がつけずにいた。

「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

「！？」

ジルが目を見開いて後ろを振り返る。そこには、ボロボロの体でこちらに飛びかかってくる悪魔の姿。満身創痍の体で、フェリスが鎌を振るう。その一撃は、ジルの背中に直撃する。背中が横一文字に斬られ、血が噴き出す。

「がっ…くっ…貴様ぁぁぁぁぁ！」

ジルが激痛に顔を歪めながら、フェリスに溜めていたブレスの塊を放つ。強力な魔力の塊を、今のフェリスには避ける術がない。だが間違いなく直撃するはずだったその一撃は、空を切る事になる。

「戻れ！フェリス！！」

ルークの絶叫と共に、フェリスの体が現れた異空間の穴へ消えていく。その最後の表情は、一矢報いた事への満足感と、最後まで戦いを見届けられなかった悔しさの入り交じった表情であった。悪魔界へと帰り、姿を消したフェリスを忌々しげに見送ったジルだが、後方から迫る殺気に振り返る。そうだ、今自分には、迫ってきている者がいたんだ。

「どりゃぁぁぁぁ！死ねぇぇぇぇぇぇ！」

それは、ランス。カオスを両手で振りかぶり、飛びかかってくるその姿を見て、ジルが目を見開く。迎撃、駄目だ、間に合わない。体の痛みで完全回避も不可能。たった数発で、このような状態になるのか。悔しそうな表情を浮かべながら、痛む体をなんとか動かし、少しだけ後方に飛ぶ。自分を１０００年者間封印していたカオスの攻撃だ。直撃だけは防がねばならない。耐えきった後で反撃するため、右腕を魔力で覆う。そのジル目がけ、ランスが剣を全力で振り下ろした。

「ランスアタァァァック！！」
「いけー！ぶった斬れーっ！」

ランスの振り下ろした剣は、ジルの体を正面から斬り裂いた。後方に飛んだ事により、直撃は避けたジルだったが、斬り傷から血が吹き出る。これが、カオスの威力か。瞬間、地面に叩きつけられたランスの剣から衝撃波が生まれ、ジルの全身に浴びせられる。

「ぐっ…」

直撃ではないというのに、その威力は先程のサテラやフェリスのもの以上。ここに来て、ジルは理解する。これは、カオスの力だけではない。この目の前の男が強いのだ。だが、ジルは耐えきる。背中から、正面から、大量の血を流しながらも体勢を崩す事は無く、はっきりとランスを睨み付ける。剣を振り切ったその無防備な体に、全力で魔力を叩き込めば、この男は死ぬはず。ジルの口元が歪む。これ程の傷を負ったのだ。もう遊びは十分。ジルの右腕が振りかぶられ、ランスに放たれようとするが、その後方から剣を突き刺そう

と迫る姿が見える。それは、ルーク。

「うぉぉぉぉ！」

「っ！？」

迫ってくるルークを見ながら、ジルは思考する。この魔力を放つ相手は、誰が望ましいかを。無防備なランスは。確かにそれでランスは殺せるだろうが、迫ってきているルークの攻撃を躱す術がない。では、ルークか。これが一番安定。だが、ランスが体勢を立て直してもう一度こちらに剣を振るってきたら、多少面倒だ。では魔力を拡散させて二人同時に攻撃では。それは一番危険。確実に倒せる保証がない。その時、ジルに妙案が思いつく。これだ。これが一番の上策。ジルが右腕の魔力を解き放つ。その対象は、ルークでもランスでもない。ランスの左手に握られた、魔剣カオス。

「この場から消えよ、カオス！」

「ぐっ！」

「のぉぉぉぉ！」

ランスの左手から、カオスが弾き飛ばされる。強烈な魔力がカオスを吹き飛ばし、部屋の壁を突き破る。

「あーーれーー！！」

宙に放り出されたカオスは、悲鳴を上げながら城の外に落下していく。瞬間、ジル、アイゼル、サテラの三人に中和されていた無敵結界の感覚が蘇る。カオスの効果が及ぶ範囲から外れたのだ。これでいい。これでもう私を傷つけられるのは、無様に膝をついているアイゼルと、苦しそうに倒れているサテラしかいない。この男の剣では、私は傷つかない。

「おい！カオスがないんだ！止まれ！」
「ルーク殿…駄目じゃ…」
「駄目です…逃げてください…」

ジルに迫っていくルークを見て、サテラが声を荒げ、バレスとセルが小さく声を漏らす。その剣は、ジルに届く事はない。無防備な姿をさらしたルークは、その後の反撃でやられてしまうだろう。ここは退かねばならない。なのに、ルークは止まる気配を見せないのだ。周りで見ていた面々の殆どが、ルークを悲痛な目で見る。止まれ、止まってくれと。だが、そうではない者もいる。しっかりとルークを見据え、声を出す者たちがいる。

「ルークさん…」

ようやく体を起こせるところまできたかなみが、腹を押さえて膝をつきながら、そう呟く。

「あんたなら…やれる…」

志津香が心配そうに見守りながら、右拳を静かに握りしめる。

「いけ！ルーク！」

アイゼルがはっきりと言う。アイゼルは知っているのだ。そのルークの異能を。嫌というほど体験しているのだ。

「寛大な俺様が今回だけは譲ってやる…だから、必ずぶっ殺せ、ルーク！」

ランスがルークに叫ぶ。その叫びに応えるかのように、ルークがジルの体目がけて剣を前に突き出す。無駄な行為。無様な姿。そう思いながら、ジルはルークを見下していた。迫る剣先など見ていない。ダメージが通らぬと判った時に浮かべる、ルークの後悔の表情を待つ。瞬間、ザシュ、という音が耳に響く。笑みを浮かべていた口元から、ごぷ、と血が吐き出される。

「馬鹿…な…」

己の胸を貫いている剣を、ジルは信じられないような表情で見る。カオスは無い。無敵結界は発動している。なのに、何故攻撃が通る。魔王である私に、人間の攻撃が。

「カオスを狙った判断は…間違いではなかったが…やるならもっと早くやっておくべきだったな…」

自身の体に剣を突き刺した男が口を開く。間違いではない。当然だ。私が判断を間違える訳がない。それなのに、何故このような状況になっている。

「もっと早くやっていれば…俺がカオスの中和とは関係なく、貴様にダメージを与えられる存在だという事に気がつけていただろうに…」

「私に…貴様…一体…？」

「その傲慢…驕り…それこそが…」

「ぐっ…がっ…」

胸に突き刺した剣を、ルークはジリジリと上に引き上げていく。動かす度にジルの体から夥しい程の血が噴き出し、口元から更に血を吐き出す。ジルが睨み付けてくるのを正面からはっきりと見据え、

ルークが剣を勢いよく上に引き上げる。

「貴様の敗因だ！魔王ジル！」

「がっ…あぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ルークがそう言い放つと同時に、ジルの肩口から剣が引き抜かれる。胸から肩にかけて両断された形となったジルは、血を噴き上げながら絶叫した。それは、正に断末魔。が、ルークの攻撃はこれで終わりではない。剣を引き抜いたルークが、既にその剣を両手で握って振りかぶっているのだ。

「き…さま…」

「滅びろ！真滅斬！！」

「ぐ…がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

振り下ろされた剣が、ジルを直撃する。両断とまではいかなかったが、真一文字にジルの体に傷が走り、瞬間絶叫と共にジルの体が崩れ落ちる。その光景を見ていた周囲の者たちの口から、呟きが漏れる。

「やりおった…」

「魔王を…倒した…」

「ランス様…ルークさん…」

「がーはっはっは！俺様たちの勝利だ！！」

崩れていくジルを見ながら、ランスが高らかに笑い声を上げる。瞬間、部屋を歓喜の空気が包む。全員が満身創痍であるため、大声で喜び合う事は出来ない。だが、これで全てが終わった。自分たちは勝利したのだ。先程マリスの治療で意識を取り戻したシィルが、痛む体を引きずってランスに近づいていく。部屋にはサテラの暢気

な声が響く。

「これ大手柄だよな！これで怒られずに済むよな！」

「ふっ…まあ、自分たちの尻ぬぐいだから、手柄とは違うがな…」

だが、これでホーネット様の前に顔が出せると、アイゼルも安堵のため息をつく。見据えるはルークの背中。そのルークも、戦いの終わりに安堵のため息をつく。確かな手応えだった。長い戦いも、これで終わる。振り返れば、こちらに志津香とかなみが近寄ってこようとしていた。かなみは痛む脇腹を押さえながらだ。無理はするなと声を出そうとしたルークだったが、突如後ろから聞こえてきた声に体が固まる。

「バルハ　デル　バー　クデンゲー　レル　ガー…」

目を見開いて振り返ると、倒れたジルが不気味な笑みを浮かべながらこちらを見上げていた。

「私は…滅びぬぞ…封印もされぬ…貴様とカオスの使い手も…道連れだ…くくく…」

魔王ジル。その目は、未だ死んでいない。

第６８話　魔王ジル

―リーザス城　最上階　奥の間―

「ジル！まだ生きて…」
「何っ！？」
「くくく…」

ルークの言葉に、側にいたランスもジルを見る。瞬間、地を這っていたジルがルークとランスの足をガシッ、と掴み、三人の周りを暗黒の煙が包んだ。

「なっ！？」
「ランス様！」

周りで見ていた者も絶句する。あれだけの攻撃を受け、全身から大量の血を流し、それでもジルは生きていたのだ。ルークたちを包む煙から、何か不穏な気配が流れてくる。

「貴様！ええぃ、離さんか！」

ランスがジルをガシガシと蹴る。が、無敵結界のあるジルにはダメージが通らない。ルークが剣で斬ろうとするが、その右腕は煙に拘束され動かせなくなる。

「何をする気だ！？」
「くくく…道連れだと言っただろう？貴様らも、私と共に時空の狭間に落ちて貰う。一度落ちたら二度と抜け出す事の出来ない、異空

間だ…」
「なに…」

ルークが絶句する。その顔を見ながら、ジルが愉快そうに笑う。

「カオスに再び封印されるくらいなら…自ら時空の狭間に落ちさせて貰うさ…だが、一人では行かぬ…私はこう見えても寂しがり屋でな…くくく…」
「ふざけるな！行くなら一人で行け！俺様はそんな所にいかんぞ！離せ！」
「ふふふ…残念。もう遅い」

瞬間、三人を包んでいた煙から大量の魔力が放出され、異空間へと繋がっていく。三人の体を吸い込むように、煙がその体を飲み込んでいく。

「異空間に到着したら何をしようか…貴様らの四肢を切断して、置物にするのも一興か…楽には殺さぬぞ…こうして捕まえていれば、同じ場所に飛ばされるはずだからな…くく…」
「離せ！離しやがれ、ちくしょう！」
「ランス様…う…うあぁぁぁ…いやぁっ！ランスさまぁっ！！」
「止めろ、もう間に合わん！貴様も抜け出せなくなるぞ！」
「駄目、シィルちゃん！」

号泣しながらランス目がけて駆け出すシィル。アイゼルとレイラが叫んで引き留めるが、それに応じず、闇に飲み込まれていくランスに手を伸ばす。

「ランス様！手を…」
「シィル！」

ランスの手をしっかりと握り、闇から引っ張り出そうとするシィルだったが、ジルがニヤリと笑ったと思うと、シィルの体も闇が覆った。

「そんなに一緒にいたいなら…貴様も来い…」
「てめぇ！」
「…ランス様っ！」

ランスがジルを睨み付ける。自身の体も闇に飲まれていき、もう抜け出せないと悟ったシィルは、引っ張るのを止めてランスに思い切り抱きつく。その衝撃で、ランスの足を握っていたジルの手が一瞬緩む。それを見たルークが、ランスを思い切り蹴飛ばす。

「ぎゃっ！ルーク、貴様！」
「ルークさん！？」

その衝撃で、ランスが少し吹き飛び、ジルの手から完全に離れる。飲み込まれていく闇から抜け出す事は叶わなかったが、これでジルとは別の箇所に飛ばされるだろう。こちらを見ているランスとシィルの姿が、完全に闇に覆われた。

「ちっ…余計な事を…」
「ルークさん！！！」
「ルーク！！！」

ジルの呟きをかき消すように、シィル同様こちらに駆け寄ってくる二人の女性の姿が見える。その二人に向かって、ルークが声を荒げる。

「来るな！！」
「「！？」」

その声に、その表情に、二人が驚いたような表情でピタリと足を止める。それを確認したルークは、表情を和らげ、二人の目を見ながらはっきりと告げる。

「大丈夫だ！必ず帰るさ」

その言葉だけ残し、ランスたちに続いてルークとジルの姿も闇に飲み込まれた。呆然とそれを見送る一行。煙が晴れたとき、四人の姿は忽然と消えていた。

「う…そ…」
「ルーク殿…ランス殿…シィル殿…」

カラン、と金属音がする。それは、ルークに駆け寄っていた女性の一人が、手に持っていたくないを落とした音。膝をつき、号泣するその姿を見ながら、駆け寄っていたもう一人の女性が、自身の大きな帽子を深く被り直し、顔を覆うように隠す。その頬には、涙が流れていた。

「何が…必ず帰るよ…馬鹿っ…」

一時空の狭間　とある場所一

そこは、一面暗闇の世界。ほんの数メートル先の風景しか判らず、小石一つ落ちていない無の空間。そこにランスは座り込み、目を閉

じていた。その背中には、不安そうに抱きつくシィルの姿。

「ランス様…私たち、これからどうなるんでしょう…」
「さあな…心配するな。英雄の俺様がこんなところで死ぬ訳ない。きっと助かる」

一切の雑音すらない空間に、二人の声が反響する。先程まで少し歩いてみたが、すぐに自分たちがどちらから歩いてきたのかも判らなくなった。ここに飛ばされて一体どれだけの時間が経ったのか。まだ数分のようにも思えるし、もう数日はここにいるような気さえしてくる。この無の空間は、人の精神を蝕む。そんな中、ランスが背中に感じる唯一の温もり。絶対に口には出さないが、シィルの存在が何より心強かった。ボリボリと頭を掻くランス。

「おい、シィル！」
「どうかされましたか、ランス様？あっ…」

突如、シィルはランスに抱きしめられキスをされる。

「やるぞ！」
「こ…ここでですか！？」
「当然だ！他にする事もないしな！がはは、異空間での体験など、滅多に味わえるものじゃないぞ！」
「やん、ランス様！」
「おい…」
「脱げ脱げ！そして即挿入だ！がはは！」
「あんっ！」
「おい、お前たち…」

それは、ランスなりの照れ隠しだったのかもしれない。すぐにシ

ィルを押し倒し、一発始めてしまうランス。シィルは照れながらもそれに応じ、辺りに二人の情事の声が響く。

「ええぃ、話を聞け！」
「へ？」
「ん？うっ…」

その時、ランスたちの耳に大声が聞こえてくる。その声に反応して、ランスとシィルが繋がったまま振り返る。そこには、暗黒を押しのけて光り輝く人物が立っていた。眩しすぎて顔はよく見えない。神々しさを纏うその人物が、口を開く。

「私は…」
「貴様、俺様とシィルのHを覗いていやがったな！この変態め！」
「きゃん！」
「……」

その人物の声を遮るように、ランスが文句を言い、シィルも恥ずかしそうに自分の体を隠す。その二人の様子を見ながら、降臨した人物の額に青筋が浮き上がる。コホン、と一度咳払いをし、再度口を開く。

「私は神だ。お前に天罰を与えるため、こうしてわざわざ降臨したのだ」
「神？」
「うむ。光の神」
「天罰？俺様は別に何もしていないぞ」
「ランス様…もしかして、悪魔の通路でプレートを踏んだ件では…？」

光の神と聞いて、シィルが悪魔の通路での出来事を思い出す。ランスがぐりぐりと光の神が描かれたプレートを踏みつけ、挙げ句の果てにはジャンプして壊してしまった出来事。シィルの言葉を聞き、うむうむ、と頷く光の神だったが、ランスが鼻をほじりながら口を開く。

「知らん。そんな事覚えとらんわ」
「なっ…覚えてもおらんだと…」
「神のクセに細かい奴だ。威厳が足りん、威厳が！」
「…もう許さん！お前は少し苦労をしらねばならぬな。天誅！！」

光の神がそう叫ぶと、ランスとシィルの体を光が包む。

「なっ…」
「きゃっ…」
「ほほほほほほほ！さて、それともう一人…」

神の勝ち誇った高笑いが響き、強大な魔力が周囲に四散してランスとシィルの姿が光の中に消えた。ひとしきり笑った後、神はもう一人会わねばならぬ人物がいると一人呟き、姿を消した。

一時空の狭間　とある場所一

ランスたち同様、ルークも時空の狭間に飛ばされていた。辺りが闇で覆われていく中、足を掴んでいたジルがゆっくりと立ち上がった。肩口から胸にかけて斬れていた体が、既に再生し始めている。

「貴様…もうそこまで…」

「くくく…耐久力はないが、生命力はこの通りだ…さて、とりあえず…」

そう言って、ジルは爪の折れた右手に魔力をこめる。その魔力が段々と伸びていき、先が鋭くなる。それはまるで、剣のような形状。ジルの右手から発せられる、魔法の剣。

「両足を斬らせて貰うとするか…その後でゆっくりと楽しむとしよう…」

「とりあえずでやる事ではないな…」

ルークが剣を握り直し、ジルと対峙する。二人の発する音以外は、何の雑音もない世界。ジルがニヤリと笑い、右腕を高々と挙げ振り下ろす。ルークがそれを剣で受け止めた瞬間、遠くから大声が響いた。

「天誅！！」

「「！？」」

それは、ランスたちに天罰を下した光の神の声。同時に、四散した強力な魔力が二人に降りかかる。その魔力がジルの右腕の魔力と合わさり、禍々しい光が二人を包む。神と魔王、決して併せてはいけない魔力同士が融合してしまった事により、暴走を始める。

「これは…」

「ちっ…どこの馬鹿の魔力だ…マズイ、暴走する…くっ…」

ジルの呟きが聞こえると同時に、二人の視界を光が覆った。

―精神世界―

ルークの視界から光が消えていき、段々と周りに色が戻っていく。そこは、のどかな町であった。が、ルークはおかしい事に気がつく。何故、目の前に町がある。先程までジルと共に時空の狭間にいたはず。その時、町の中から声が聞こえてくる。

「あんまり遠くまで行っちゃ駄目よ」
「はーい、お母様！」

それは、親子の声。娘を心配する母親と、笑顔で返事をする幼い娘。だが、どこかその顔に見覚えがある。ルークが娘の顔をよく見ていると、母親の言葉が耳に届く。

「夕方までには帰ってくるのよ、ジル」
「ジ…ル…？」

ルークが目を見開く。それは、ジルが人間であった頃の記憶。一方その頃、ジルはルークとは別の風景を見ていた。のどかな町というのは変わらない。だが、目の前にいるのは両親の前で仲のいい様子で駆け回る双子。

「ほら、こっちだ、リムリア」
「待ってよ、ルークお兄ちゃん！」
「これは…奴の記憶か…」

眉をひそめるジルだったが、すぐに事態を飲み込む。魔力の暴走により、ルークとジルは互いの記憶を見てしまっていたのだ。そしてこの事態は、ルークとジルの運命を大きく変える事となる。

―精神世界　ルーク―

ルークの目の前で、大事なところだけ抜き取るように次々と記憶を見せられる。幼かったジルは、美しく成長を遂げていた。清廉潔白、聡明な賢者で、人々を差別することなく施しを与える。聖人という言葉が相応しいと思えるほどに、完璧な存在。だが、ルークは今目の前で繰り広げられている事態を苦々しい気持ちで見ている。そこで繰り広げられているのは、目を覆いたくなるような拷問。

「っ……」

「おっ？いい加減喋らなくなってきたな…そろそろ限界か？」

「さっき左足を斬ったら少しだけ反応したぜ。今度は右足を斬るか？」

「そりゃあいい。死なないよう、ヒーリングを使える奴を呼んでこないとな」

ジルはあまりにも完璧すぎた。その事が一部の者に激しい憎悪と嫉妬を生み、今はこうして捉えられ、暴力と陵辱の限りを尽くされている。数えるのも馬鹿らしくなるほどに犯されぬき、思いつく殺さない程度の拷問は全て受けた。その体には既に右腕と左足が無く、程なくして残っていた左腕と右足も切断される。今すぐこいつらを斬り捨てたい。そう思うルークだったが、精神体のような自分は過去に干渉する事が出来ず、ただただそれを見ている事しかできなかった。脳に直接送り込まれる映像であるため、目を瞑っても意味がない。その拷問を、ルークは全て見る事になる。数日後、十分楽しんだとばかりに、その者たちは監禁していた屋敷の二階から外に向かってジルを放り捨てる。

「……」

虚ろな目で地に横たわり、空を見上げるジル。頬に雨が当たる。後はこうして、ゆっくりと死を待つだけ。が、目の前に突如男が現れる。白い肌に赤い眼、金髪に漆黒のマント。禍々しさを纏ったその男が、ジルを見下ろしながら尋ねてくる。

「このまま朽ちるか…？」

「……」

「もし、ここで生きながらえたら、貴様は何を望む…？」

「…破壊を」

「ほう…」

「人類の…滅亡を…」

それは、ルークがこれまで聞いた事のないような激しい憎悪を含んだ声。そこにはかつての聡明な賢者の姿はなく、人間を憎悪するジルの姿があった。その答えと、ジルの顔を見て、目の前の男がニヤリと笑う。

「良い目だ。気に入った、貴様に力をやる」

その男は、ジルの先代魔王であるナイチサという男であった。こうしてナイチサから魔王を継承したジルは、たった一年で人類の国家を破壊し尽くす。人類の数が減ると力を発揮するという勇者の存在をナイチサから聞いていた彼女は、人類を滅ぼすのではなく、奴隷化して永久に虐殺し続ける道を選んだ。各地に設置された人間牧場により、人口が減りすぎないように統制された、人類にとって最大の暗黒の時代。その光景を見ながら、ルークの胸の内には複雑な感情が抱かれていた。決して許される行為ではない。だが、ジルの

憎悪の根源を、この目で見てしまっている。そんな中、ジルのおかしな行動がルークには引っかかっていた。

「ジル様、最近エターナルヒーローという人間共が力をつけてきているようです。今の内に摘み取ってしまうべきではないかと」
「放っておけ」
「へ？」
「二度は言わぬぞ…」
「は、はい！」

まただ。激しく人間を憎悪しているはずのジル。それなのに、力を持った人間をあえて放置する傾向にある。それだけではない。ジルは、各地の人間牧場の様子やどのような人間がいるかの情報を、逐一集めていたのだ。そして時に、この人間は殺すなという風な指示を出していた。以前そのように指示を出していた人間が成長し、ジルに挑んできた。レイという名の男だ。意図も容易くレイを倒したジルだったが、何を思ったのかその男を魔人にし、自分の配下に置いた。そしてそれと似たような事態が、今また目の前で行われている。

「愚かな…これ程の魔剣を持ちながら、自分の精神すらまともに支配できぬとは…」
「ぐっ…」
「だが…気に入ったぞ、ガイと言ったか？」

ジルの前に膝をついている男は、魔剣カオスを持ってジルに戦いを挑んできた。だが、二重人格であった彼は別人格に精神を奪われた隙をつかれ、ジルに敗れる。しかし、この男もレイと同じように魔人にし、魔人筆頭、更には自分の愛人にまでする。それは、激しく人間を憎悪するジルからすれば、完全に矛盾した行動。そして、

この記憶の旅も間もなく終演を迎える。ガイが魔人になってから数百年後、魔王ジルに反旗を翻したのだ。本来絶対命令権を持つはずのジルが、何故かこれを許し戦争が始まる。数年の後、この戦争は終結する。今、魔王の城にはジルとガイ二人の姿。ジルの心臓には、カオスが突き刺さっている。口から血を流しながら、ジルの手がガイの顔に触れる。

「お前は…そんなに私が憎いのか？」
「……」
「もう私がいらないのか…？」
「……」
「以前のように愛してはくれないのか…？」
「……」
「馬鹿な男だ…ガイ…」

くくく、と無邪気に笑うジル。こうしてジルはカオスに封印され、魔王はジルの血を浴びてしまったガイに継承される。これが、ルークの見たジルの記憶。だが、ルークは知らない。その記憶の中で、ある部分だけがぽっかりと抜け落ちている事を。ジルが神と対峙したその出来事を。

―精神世界　ジル―

「父さん！母さん！うっ…うわぁぁぁぁ！」
「殺せ！殺せ！全てあいつのせいだ！ルークが、全ての原因だ！」

ジルの目の前に映し出されているのは、モンスターの襲撃によって燃えさかる町。そして、目の前で両親を虐殺される幼いルークの

姿。だが、殺しているのはモンスターではない。それは、人間。同じ町に住む者たちが、激しい憎悪の目でルークを睨み付けている。その町は、元々周囲にモンスターが多い町であった。その為、町の周囲には結界を発生させる魔法装置が置かれており、モンスターの侵入を防いでいた。だが、ある日その装置が老朽化により壊れる。凶悪なモンスターが町を襲い、家が焼け落ち、人々は逃げ惑う。そんな中、誰かが不意に呟いた。結界は、ルークが破ったのではないか、と。町の住人は結界を無効化するルークの能力を知っていた。幼いルークは、自慢げにその異能を見せて回っていたからだ。その声に、また違う誰かが反応する。そうだ、ルークが結界を破壊したのだと。町をモンスターに襲われている中、人々の憎悪がルークに向けられる。それは完全に誤解であった。ルークは何度もそう言った。

「いやぁぁぁ！あっ…あぁぁぁぁぁ！」
「リムリアぁぁぁぁ！！」

だが、その声が町の人に届く事はなかった。目の前で行われる凶行。父の死体が斬り刻まれる。母の死体が犯される。そして今、双子の妹であるリムリアの右目が目の前で抉られた。やったのはルークの家の隣に住んでいた、心優しい中年の男。それが今では、ルークとリムリアを激しい憎悪を纏った目で睨み付けている。その男の足に、ルークが短剣を突き立てる。

「ぐっ…」
「立てるか？逃げるんだ、リムリア！」
「うっ…うん…」

右目を押さえているリムリアの手を引き、ルークが駆け出す。その後を、町の人たちが物凄い形相で追ってくる。逃がすな、捕まえ

ろ、必ず殺せ。今なおモンスターに町が焼かれているにも関わらず、避難する事よりもルークたちを捕まえるのに躍起になる住人たち。彼らはもう狂っていた。必死に逃げるルークとリムリアだったが、まだ幼い子供。すぐに追いつかれそうになる。が、そのルークを庇うように、住人とルークの間に一人の戦士が立ちふさがった。

「そこをどけぇぇぇぇ！」

「…ふっ！」

突っ込んできた住人を、戦士は峰打ちで気絶させる。戦士の登場に、追いかけてきていた住人がたじろぐ。ルークはその戦士の背中を見る。顔はフルフェイスの兜で覆われていたため判らないが、その男には左腕が無かった。隻腕の戦士。だが、実力は本物。チラリとルークの方を振り返った戦士が口を開く

「ルークくん…だね…」

「どうして…名前を？」

「…登録」

「えっ？…わぷっ！」

戦士は手に持った石のようなものに何やらぶつぶつ言っていたと思うと、突如ルークとリムリアにスプレーが吹きかけてくる。

「防敵スプレーだ。これでモンスターと出会いにくいはずだ。真っ直ぐ行けば町がある。早く逃げるんだ…」

「えっ…」

「ふざけるな！殺せ！殺せ！」

「早く行け！」

隻腕の戦士の強い語気に押され、ルークはリムリアの手を引いて

駆けだした。迫ってくる村人たちの前に一人立ちふさがるその戦士の背中を見ながら、必死に走った。丸一日走り、ルークは町へと辿り着く。そこについた頃には、ルークの目は濁りきっていた。まるで、この世全てを恨んでいるかのように。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

それが、魔想夫妻との出会い。その後ルークは、魔想夫妻の世話になった後、冒険者になる。風の噂で、ルークの故郷の町は滅んだと聞いた。住民たちも全滅、生き残りはいないという。ルークはあの時に自分を助けてくれた戦士の情報を必死に集めたが、その消息は分からなかった。あの背中が、今でもルークの脳裏に残っている。その男に憧れ、ルークは冒険者として名を上げていった。ジルはそれを黙って見ている。その後のホーネットとの出会い、生活、別れ。リーザス誘拐事件。カスタム四魔女事件。砂漠のガーディアン事件。そして、リーザス解放戦。その最中語られた、ルークの夢。その全てを見終わった後、ジルの視界を再び光が包んでいった。

ー時空の狭間　とある場所ー

「はっ！」

「…んっ？戻ったか…」

ルークとジルが同時に精神世界から戻る。時間にしたらほんの数秒の出来事。互いに目の前の相手を見る。ルークの先程までとは違う複雑な表情に、ジルが眉をひそめる。

「貴様…私の記憶を！？」

「っ……」

一瞬ルークを強く睨み付け、身構えようとしたジルだったが、頭を掻きその場に座り込む。

「いや…もういい…貴様とやり合う気が失せた…」

「ジル…お前は…」

「哀れみの言葉はいらんぞ。それは私を不快にさせる言葉だ。侮蔑の言葉ならもっと願い下げだな。それに、私も貴様の記憶を見た…」

「そうか…」

ルークも静かにその場に座り込む。場を静寂が包み、互いに話し出せないでいる。すると、突然ジルが吹き出す。

「くっ…くくっ…」

「何だ？」

「はっはっは！まさかメガラスがあのようなギャグを言うとは…くくっ…駄目だ…腹が…」

「一番の感想が、そんなどうでもいいところか…」

目に涙を浮かべ、腹を抱えながらジルが爆笑する。キャラが随分違うだろ、とルークがその様子を呆れた表情で見る。ひとしきりジルが笑った後、コホン、と咳払いを一つし、真面目な表情で正面からルークを見据える。

「何故貴様はまだ人間を信じている？」

「……」

「あれ程の事をされ、何故人々の為に戦える？」

「それは…」

「あの魔法使い夫婦と会ったときは、いい感じに瞳が濁っていたで

はないか。憎悪はないのか？」
「恨みもした。殺したいとも思った」
「では、何故…」
「だが…それ以上に…救ってくれた人もいた…」

隻腕の戦士、魔想夫妻、そしてギルドマスターのキース。幼い頃、ルークが世界を恨んでいたときに出会った人々の顔が頭をよぎる。

「詭弁だな。人間の本性は町の者の方が正しい。その世話になったという人間たちも、一つ皮を剥いてやれば醜い姿が現れるぞ…」
「だが…それでも…俺は人間を見捨てない」
「理解できんな…私には…お前の考えが理解できん…」

ジルがそう呟いて、場にまた静寂が戻る。その静寂を破ったのは、今度はルークだった。

「お前は…人間を恨んでいたんだな…」
「記憶を見たのなら、理由は判っているであろう？くくく、あの者たちは真っ先に殺してやったぞ…」
「俺にも…お前の気持ちは判らない…いや、理解出来ない…」
「くくく、聖人気取りか？」
「違う…お前のやった事は決して許される事ではないが…あのような理不尽な仕打ちを受け、世界を恨んだお前の心は…悲しみは…誰にも理解出来る者ではない…理解したなどと…軽々しく言ってはいけない…」
「…ふん」

ジルがぷい、と横を向く。少しだけルークが黙り、場に一瞬静寂が戻ったが、すぐにルークが言葉を続けた。

「お前は…何故人間をあのように扱った?」
「そこは見ていなかったのか?この世界には勇者という存在が…」
「いや、それは見た。そこではなく、お前の人間に対する行動だ」
「…どういう事だ?」
「人類を恨んでいたはずのお前が、レイとガイ、二人の人間を魔人にしている」
「…ただの気まぐれだ」
「人間牧場の情報を常に集め、一部の人間を殺さないよう命令を出していた」
「…魔王というのは存外退屈でな。ただの暇つぶしだ。殺さないようにしていた人間も、ただの気まぐれにすぎん」
「では、ガイが反旗を翻したとき、絶対命令権を発動させなかった訳は?」
「…奴がどこまでやれるのかを試してみたくなっただけだ。これも、ただの気まぐれだ」
「本当にそうか?」
「…何が言いたい」

横を見ていたジルがルークに視線を戻す。その表情は、どこか不快そうであった。その目をしっかりと見ながら、ルークは自分の辿り着いた結論を言う。

「それが何かは判らないが…お前は…人間に何かを期待し…待っていたんじゃないのか?」

その言葉を聞いたジルが、キッとルークを睨み付けてくる。

「あまり調子に乗るなよ、ルーク…貴様が今生きながらえているのも、私のきまぐれでしかないのだぞ…」

二人の間に緊張が走る。そのジルを見て、ルークは何かを言おうとするが、その瞬間辺りを神々しい光が包む。その中心には、顔はよく見えないが人の影が見える。

「ぬっ…」
「何だ？」
「ようやく見つけたぞ。私は光の神」
「光の神…悪魔の通路のか？」
「おお、お主は覚えておったか。今日はあの時の礼に降臨した訳でな。私の欠けたプレートを拾い集めてくれた礼にな」
「礼？」
「永遠の八神か…ちっ…」

現れた光の神に、ジルが舌打ちする。全快の状態であっても、勝てるかは微妙な相手。今の状態では相手にならない。だが、ジルは一つ勘違いをしていた。今目の前に現れている光の神は、ジルの思い浮かべた永遠の八神ではない。同一名称の別人だ。神の間ではＧＯＤと呼ばれ、混同しないようにされている。しかし、この神もジルより格上の第一級神。ＧＯＤの存在は知らなかったジルは、永遠の八神と勘違いをしてしまったのだ。光の神はルークの隣に座るジルを無視するように話を続ける。

「うむ。一つだけ願いを叶えてやろう。だが、死者の蘇りとかは不可能だ。魂は既に輪廻しているからな。それと、お主への礼だから、他人への干渉みたいにお主が直接関わらない願いも駄目だ。その上で可能な範囲での願いで頼む」
「ならば、ここからの脱出を！」
「そんな事でいいのか？それならお安いご用だ。飛ばす場所はさっきの男と同じ場所でいいな…いくぞ…はーっ！」

光の神が叫ぶと、ルークの体を神々しい光の渦が包む。それは光の神が放った転移魔法。魔力の奔流がルークをどこかへ飛ばそうとする。瞬間、ルークは手を伸ばした。

「…どういうつもりだ」

「ジル…お前がもう人間を蹂躙しないと約束できるのならば…一緒に来い！」

その手は、ジルの前に差し出される。頭では判っている。人類を最も虐殺した魔王、そんな存在を解き放ってはいけないという事は。だが、ルークは見てしまった。その根源にある、あの出来事を。四肢を切断されて雨空を見上げている、あの悲しい瞳を。だからこそ、咄嗟に手を差し出してしまった。

「ふっ…」

差し出された手を見て、ジルが静かに笑う。そして、ゆっくりとその手に自分の右手を伸ばし、一度ルークの顔をしっかりと見た後、パシンと振り払った。

「ジル…」

「私は魔王だ。施しは受けん。哀れみも受けん。くくく…はっはっは！」

ジルが笑い出すのと同時に、ルークの体が光に包まれ消えた。後に残されたのは、何も無い暗闇の世界に響くジルの笑い声だけ。これにより、ルークは次元の狭間から脱出し、ジルは一人取り残される事になった。最後に差し出されたルークの手を見るジルの胸中に何があったのか、それは本人にしか判らない。だが、もし運命を司る者がいるのだとしたら、その者は判断したのかもしれない。今は

まだ、ジルがこの世界から放たれるのは早いと。そう、『今はまだ』だ。

こうして、長きに渡るリーザス解放戦は幕を閉じる。ヘルマン軍は敗走し、リーザスの奪還は成功に終わった。解放軍が、リーザスの民が、各地のゲリラ軍が、悲願達成の歓喜に打ち震える。だが、その中心で戦っていた者たちの顔は晴れない。ルーク、ランス、シィル、以上三名の行方は、依然として掴めていない。

第６８話　魔王ジル（後書き）

［人物］
片腕の戦士
　ルークの恩人である一流の男戦士。必死にその消息を追ったが、見つける事は叶わなかった。その全てが謎に包まれている。

［アイテム］
防敵スプレー
　モンスターの嫌がる臭いを発生させ、遭遇率を下げるアイテム。町を移動する事の多い商人たちの間では必須アイテムである。

第69話　この想い、空に届け　前編

―リーザス城　王女の間―

リーザス解放戦より一週間ほどが過ぎた。リーザス各地や自由都市では復旧作業が続いており、まだまだ休む間もない状況ではあるが、リーザスの民には笑顔が戻っていた。長きに渡る戦争が終結し、待ち望んでいた平和が戻ってきたのだ。そんな中、王女の間には怒声が響き渡る。

「何故！何故私が処刑されなければならないのですか！」

兵に取り押さえられた男が、目の前のリアに向かって声を荒げる。この男は黒の軍中隊長、加藤疾風。その男を冷たい目で見下しながら、リアがマリスに指示を出す。

「マリス、罪状」

「はい。軍費及び戦死者の手当金横領、戦時下の略奪行為、邪魔な部下の暗殺及び死体隠蔽、実の娘の体を出世のために差し出した事も判明しています。それから…」

「あらあら。随分と埃が出てくる事ね…」

「うっ…」

読み上げられていく罪状は全て身に覚えがある事。ぐっ、と口を噤んだ疾風が顔を横に向けると、そこにはメイド服姿の実の娘、加藤すずめが立っていた。

「すずめ…何故そのような格好を…？」

「すずめはリーザスのメイドとして働いて貰う事にしたの。もうあなたがいなくても大丈夫だから、安心して死になさい」
「なっ…」
「お父様…さよなら…」
「す、すずめ…待ってくれ！父を…父を助けてくれ！」

ずるずると兵に引きずられていく疾風。その様子を悲しげな瞳ですずめは見送っていた。

「ウェンディ」
「はい、リア様。すずめちゃん、これから判らない事があったら何でも聞いてね。さ、行きましょう」
「…はい。リア様、本当にありがとうございます」

リアに深々と頭を垂れてくるすずめにヒラヒラと手を振るリア。その横顔を見ながら、よくぞここまで元気になってくれたものだとマリスは感慨深くなる。思い出されるのは数日前のリアの姿。

「ダーリンが…ダーリンが…うわぁぁん！」
「リア様…」

部屋に引きこもり、泣き崩れるリアを心配そうに見守るマリスとかなみ。この数日、碌に食事も取っていない。部屋に入れるのはマリスとかなみ、それからメイドのウェンディの三人のみ。他の者は完全に面会謝絶状態。

「リア様。お体に触ります。せめて食事だけでも…」
「いらない！もうリアの事は放っておいて！」
「リア様…」

「ダーリンが…ダーリンが死んじゃったなら、もうこんな世界どうだっていい！」

その瞬間、パシンという乾いた音が部屋に響く。リアが呆然とした顔で痛む頬に手をやる。平手打ちをされたのだ。それも、自分の部下であるかなみにだ。マリスも驚いた様子でかなみを見ている。

「リア様…申し訳ありません…でも、それでも…今の言葉だけは撤回してください！」

「かなみ…」

「ランスも、シィルちゃんも、ルークさんも…みんな絶対に生きています！必ず帰るって約束したんです！」

リアがかなみの顔を呆然と見る。今まで自分の事で精一杯だったため気がつかなかったが、かなみの目にもリア同様、真っ赤に泣きはらした跡が残っていた。

「はーい、じゃあ次の人連れてきて。あ、次は証言人にメナドも一緒か」

かなみに平手打ちされた次の日、リアは部屋から出てきて何事も無かったかのように職務をこなした。そして今、ある人物から手渡された資料を基にリーザスの膿を取り出している。これが後に歴史に名を残す出来事、リーザス大粛正である。疾風が連れて行かれ、次の膿が引きずられてくる。一緒にやってきたメナドが、その人物を悲しげな目で見ている。

「ザラック…」

「メナド副将！これは何かの間違いです！」

「マリス、罪状」
「はい。軍費横領、城下町での度重なる暴力事件、結婚詐欺まがいの事もしていますね。それから…」
チラリとメナドを見てから、マリスは言葉を続ける。
「メナドも狙われていたようですね。あの女は絶対チョロい女だと話しているのを、何人かの部下が聞いています」
その言葉を聞いて、メナドが真っ赤になってザラックを怒鳴りつける。
「ぼ、ぼくはそんなチョロい女なんかじゃないんだからね！ふんだ！」
そう言い残して、起こった様子で部屋から出て行ってしまうメナド。その背中を見送りながら、リアがマリスに耳打ちする。
「…ねえ、どう思う？」
「ルーク様がいなければ…正直危なかったのではないかと…」
「リアもそう思う。あ、証言者いなくなっちゃった。ま、いいか。とりあえず財産没収の上、国外永久追放ね。ついでに、下のものちょん切ってあげて」
「ひっ！？」
「はい、ちゃっちゃと連れて行っちゃって。はい、次の人どうぞ」
ずるずるとザラックが引きずられていく。その次の者が外で暴れているのか、中々連れてこられない。その空いた時間でマリスがリアに話しかける。

「本当に…お元気になられましたね…」
「…かなみに怒られちゃったしね。それに、リアは帰ってくるのを待っているだけの女じゃないの。必ずダーリンたちがどこにいるか見つけ出して、こっちから迎えに行くんだから！」
「その意気です、リア様！」
「ルークにも感謝しないとね。カスタムの時の貸しが、まあ随分と大きくなって返ってきた事で…」
「解放戦の中心人物でしたし、この粛正の提案者でもありますからね…」
「とりあえず膿共がため込んだ金は全部没収して、リーザス城、町、及び兵の立て直し、ダーリンたちの捜索費用、軍事学校と医療機関の増加。その辺を中心にどんどん使っちゃってね」
「はい！」
「さてと…そうなると王女じゃそろそろ権力が足りなくなってきたわね…ふふふ」

リア指導の下、ランスたちの捜索は大々的に行われる事となる。また、もし発見した際に救出が必要な場合、そのために回す費用も当初想定していたよりも倍近い金額が捻出される事になった。そしてこの三ヶ月後、リアは両親を隠居させ正式にリーザスの女王に即位する事となる。

―リーザス城　廊下―

「全く、失礼しちゃうよ！ぼくがチョロいだなんて…」
「メナド！」

メナドが心外だとばかりに怒りながら廊下を歩く。と、ふいに声

をかけられる。振り返れば親友のかなみの姿。

「かなみ。どうかしたの？」

「今、時間ある？一緒に訓練しようと思って」

「うん、大丈夫だよ」

二人は中庭に出て行き、共に鍛錬を始める。その最中、メナドがかなみに尋ねる。

「かなみは…もう大丈夫なの？」

「まだ完全にって訳じゃないけど…絶対に帰るって約束してくれたから…ルークさんの言葉を信じているから…」

「そうなんだ…」

「でも今はそれ以上に心配な事があって…」

「ん？どうかしたの？」

「この間…リア様を思いっきり引っぱたいちゃって…昨日、はっきりと言われちゃった。このお礼は絶対にいつかして貰うからねって…」

「かなみ。今まで楽しかったよ！ありがとう！」

「うわぁぁぁん！見捨てないで！」

かなみが涙目になり、その顔を見てメナドが吹き出す。お互いにひとしきり笑いあった後、メナドが少しだけ考え込んだ後、言いにくそうにしながらかなみに尋ねる。

「ね、ねえ。かなみ…」

「ん？」

「る、ルークさんってお付き合いしている人とかいるのかな？べ、別にそういんじゃないんだよ！その…ちょっとだけ素敵だなって…あはは…」

顔を真っ赤にして言い訳をするメナドを見ながら、ああ、やっぱりこうなってしまったかと遠い目をするかなみであった。

―リーザス城　会議室―

「ふぅ…まさか加藤疾風があのような男だったとは…見抜けなかった自分が恥ずかしいわい…」
「そう悲観しないでください、バレス将軍。どこの色の軍からも、多くの兵が粛正されているのですから」
「しばらく軍は揺れるな。こういう時こそ、俺らがしっかりしねぇと！」

会議室では将軍格の者たちが集まっていた。一応会議は終わり、今は雑談をしている時間。話題に上がるのは、現在進行形で行われている大粛正の話。バレスが頭を抱えるが、エクスの言うようにどこの部隊からも粛正者は大量に出ている。コルドバが拳を握りながらはっきりと言い、ちらりと横を見る。

「しかし…驚いたぜ。この大粛正の立役者がキンケード、あんただったとはな！」
「え、ええ。まあ…」
「以前から怪しい者たちの調査を秘密裏に行い、その調査費用も全て自分持ち。それにより完成したリストが今回の大粛正で使われている。素晴らしいです、キンケード様！これぞ正しい騎士の姿です！」
「うむ、あっぱれじゃ」
「は…はは…おっと。そろそろ部下との約束がありますので、この

辺で失礼させていただきます…」

コルドバ、ハウレーン、バレスに次々と賞賛されたキンケードは、何故だか罰の悪そうな顔をしてそそくさと部屋を出て行ってしまう。キンケードが出て行った後も、話題はその事で持ちきりだった。

「うむ…儂は今まで奴を誤解していたようじゃ。与えられた仕事しかこなさない職業軍人じゃとばかり思っていたが…なかなかどうして…」

「私もキンケード様の事を見直しました」

「かっかっか。こりゃ、俺の将軍の座も危ないかもしれねぇな」

次々とキンケードに対する賞賛の言葉が出てくる中、エクスは黙ってコーヒーを啜る。ルークに頼まれてキンケードの部下の死体の処理を手伝ったため、エクスは数少ないこの粛正の真実を知る人物であった。が、言わぬが花。ふと横を見ると、黙り込んでいるリックの姿。

「どうかしましたか？」

「いや…今回の戦争で、自分の未熟さを痛感してね…トーマ将軍も、魔人ノスも、魔王ジルも、全てルーク殿とランス殿お陰さ…」

「それを言うなら、誰一人として剣を交えていない僕はもっと役立たずですよ」

「今、リア様が本格的な捜索を始めようとしている。その上で、救助が必要な場合は救助隊も組むという噂が出ているが…本当かい？」

「ええ、恐らく本当ですよ」

「そうか…なら…」

「志願するつもりですか？」

「ああ。立場上止められるかもしれないが、何度頭を下げてでも、必ず参加する」

リックの決意を含んだ目を見ながら、エクスは内心残念に思う。これは、リックは必ず参加するなと。ハウレーンを参加させようかとも考えていたが、立場上二色以上の隊長格が参加するのは難しいだろう。どこか別の場所でポイントを稼がないとな、と考えを巡らせる。まだまだルークのスカウトは諦めていなかった。

―リーザス城　廊下―

「はぁ…やれやれ…」

キンケードがため息をつきながら廊下を歩く。ルークに脅され、嫌々蛮行を行っている者たちのリストを作成し、リアとマリスに提出した。蛇の道は蛇。上層部すら把握していないような細かいところまで網羅したそのリストは、大粛正に大いに役に立っていた。

「だが…お陰でこちらはマークされてしまったな…粛正されなかっただけマシではあるが…」

キンケードは今回の件で、リアにはっきりと言われていた。今回だけは役に立ったから見逃してあげるけど、もう要注意人物としてマークしているから、これ以降何かおかしな真似をしたら即処罰する、と。

「生活の潤いがなくなってしまったな…かといって、これ以上いい転職先もないだろうし…定年までつまらん軍人生活か…はぁ…」

今後の生活に張り合いを無くし、ため息が止まらないキンケード。

その時、中庭の方から金属音が聞こえてくる。窓から下を見てみれば、そこには必死に訓練しているかなみとメナドの姿。

「若いのは元気だね…こっちは散々だっていうのに。しかし、あの二人。最近妙に強くなってきているからな…」

若くして副将まで上り詰めたメナド。去年から急激な成長を遂げているかなみ。先日模擬戦をした際はまだキンケードの方が実力は上であったが、ギリギリの勝利であった。

「別に強くなりたいとは思わんが…まだまだあのような小娘に負けるのは癪だな。やる事も無くなったし、久しぶりに鍛錬でもするか…はぁ…」

ため息混じりに訓練場に向かうキンケード。これより数年後、リーザス青の軍はこれまで以上にその名を轟かす事になる。曰く、青の軍には二枚の壁がある。鉄壁の守りを誇るコルドバの壁と、兵を巧みに操る変幻自在のキンケードの壁。人々は二人をこう呼んだ。リーザスの青い双璧と。

―リーザス城　親衛隊詰め所―

「色々あった中、こうして貴女たちが無事に入隊してきた事を嬉しく思うわ」

レイラが目の前にずらりと並ぶ親衛隊の新兵にそう言葉をかける。今年入隊が決まっていた若き戦士たちだ。その数は当初予定していたものよりも少ない。今回の戦争で命を落とした者も少なからずい

るのだ。

「中にはゲリラ軍として働いていた娘もいるみたいね。リーザス軍を代表して、お礼を言わせて貰います。では、親衛隊の入隊するにあたっての説明をさせて貰うわね。まず…」

レイラが頭を下げ、しばらく話を続けた後、昼食の時間となる。ぞろぞろと詰め所から出て行く新兵の中に、一人見知った顔を見つける。

「あら?貴女はあの時の…」

「チルディ・シャープと申します。この度親衛隊に入隊させていただきましたわ」

「そう。あの時は恥ずかしい姿を見せちゃったわね。これからよろしくね」

「いえ…よろしくお願いしますわ」

レイラが差し出した手を握るチルディ。この程度の女、すぐにでも追い抜いてやらなければと野心を抱く。

「ところで…一つだけお聞きしてもよろしいでしょうか?」

「ん?さっきの説明で何か判らない事でもあった?」

「いえ…ルーク様というお方は、どちらの色の軍に所属していらっしゃるのでしょうか?」

「へ?ルーク?彼はリーザス軍じゃないわよ」

「…へ?」

「彼は旅の冒険者。あの時は協力して貰っていただけよ。さ、私たちも昼食を取りに行きましょう」

「(だ、騙されましたわ!)」

目に見えてショックを受けるチルディ。だが、そう遠くない内に、彼女はルークとの再会を果たす事になる。

―リーザス城　女子士官学校―

レイラが親衛隊の新兵に挨拶しているのとほぼ同時刻、新しく設立された士官学校でも挨拶が行われていた。

「私が校長のアビァトールです。みなさん、これからこの学校で大いに学んでいってください」

生徒たちがざわつく。アビァトール・スカットといえば、先代の親衛隊隊長。そんなに凄い人が校長だとは入学パンフレットには書かれていなかった。それもそのはず。アビァトールはこの話を断るつもりでいた。だが、解放戦中にルークと再会し、彼にこの話を受けてくれないかと頼まれてしまったアビァトールは、校長就任の話を受ける事にした。

「（ルーク…引退した私が貴方と共に戦う事はもうないけれど、貴方が安心して背中を任せられるような兵を必ず育て上げてみせるわ…）」

真っ直ぐと入学してきた者たちを見据えるアビァトール。そのアビァトールを見ながら、他の士官学校から転入してきたのは成功だったと笑う女子がいた。

「ふふ…元親衛隊隊長の推薦が貰えれば、私の未来は安泰ね。まぁ、ライバルなんていないでしょうけど…」

「その通りです。ラファリア様！」

入学式だというのに、既に大量の取り巻きを従えている転入生、ラファリア・ムスカ。自信満々といった表情の彼女とは対照的に、びくびくと周りを見回す少女がいた。

「（ううぅ…みんな凄そうな人たちばっかり…やっぱり私なんかじゃ…）」

彼女の名はアールコート・マリウス。資金援助を受けて入学してきた苦学生である。一瞬ラファリアと目が合ってしまい、すぐに目を反らす。

「（恐そうな人…うぅ…虐められないかな…）」

「（何よあの娘。あんな臆病そうな娘に武官は勤まらないわ。身の程を教えてあげないとね…）」

入学早々、目を付けられてしまう形となってしまったアールコート。彼女が歴史の表舞台に上がるのは、もう少し先の事になる。

―レッドの町　教会―

「待ちなさい、カオス！おとなしく封印されなさい！」

「嫌じゃい、嫌じゃい！まだまだ遊び足らん！」

悪しき剣は封印しようと追いかけてくるセルから、ぴょんぴょんと器用に飛んで教会の中を逃げ回るカオス。どたどたと追いかけっこをしていると、教会の扉が開く。

「セル　オキャクサンダ」
「あら、セピアさんにカーチスさん。それとそちらの方は？」
スーに引き連れられて教会に入ってきたのは、ミネバの策略によって解放軍に引き渡されたヘルマン司令官セピアと、ゲリラ軍として活動していた天才学生カーチス。そしてその横に、見慣れない緑色の髪の女性がいた。

「はじめまして」
「彼女はアーヤ・藤ノ宮さん。僕たち、これからリーザス城に向かう所なんです」
「あら？何か用事でも？」
「私とカーチスは、リーザス軍に志願しようと思っているんです。アーヤさんは今度建てられる病院の医師として志願しに行くというので、一緒にと…」
「セピアさん…ヘルマン軍の貴女が…？」
驚いたようにセピアを見るセル。だが、セピアに迷った様子はない。

「今回の事でヘルマンには愛想がつきました。それに、リーザスの方々には色々世話になりましたし…必死に治療をしてくれたセルさんにはもう一度お礼をしたいと思って寄らせていただきました」
「そんな…わざわざ…」
「出来れば私を一番に救助してくれたルークさんにも礼を言いたかったのですが…」
「そうですね…でも、ルークさんなら必ず帰ってきます。その時に伝えればいいと思いますよ」
「そうですね…リーザスは大粛正の真っ最中だと聞きます。元ヘル

マン司令官の私なら、普通の新兵よりも少しは役に立てるかもしれない」

「僕も似たような気持ちです。元々は研究員を目指していましたが、今のリーザスを放っておいて暢気に研究なんか出来ません！」

「みなさん…どうかお気をつけて。神のご加護があらん事を…」

「あ、ついでに儂も連れてってちょ」

「カオス！貴方はおとなしくしていなさい！」

どたばたと追いかけっこを再開するセルとカオス。失笑しながら、三人は教会を後にしてリーザス城へと旅立っていった。

ーMランドー

ジオの町の南に位置する自由都市の一つ、Mランド。都市丸ごと一つが遊園地になっているこの町に、アレキサンダーが立っていた。見上げるは、一つの塔。

「本当によろしいのですか…？」

「ええ、お願いします」

心配そうに話しかけてくるのは都市長の運河さより。目の前にある塔は、「なぐりまくりたわぁ」という冒険体験型娯楽施設。本来命の危険はないが、風の噂でアレキサンダーは隠されたコースが存在する事を聞いてきた。

「無茶苦茶モードは…凶悪なモンスターが出てきます。命の危険があるのですが…」

「Mランド側に責任は問いません。それと、カスタムの町から連絡

があったら、すぐに知らせてください」
「あ、それはご安心ください」

脳裏に浮かぶのはノスとジルを斬るルークの姿。少しでも近づけたと思ったが、差は広がっていた。ならば、もう一度鍛え直す。少しでもあの背中に近づけるように。ルークが発見されれば、報告される手はずになっている。救出部隊がもし組織されるのであれば、必ず参加する。その決意と共に、アレキサンダーは塔の中に入っていった。

―悪魔界―

「うぅっ…」

悪魔界に戻ってきたフェリスに告げられたのは、謹慎処分。勝手に大怪我して帰ってきた無能は、黙って引きこもっていろと上司のフィオリに冷たく言い渡された処置だ。別にフェリスの体を心配して出た言葉ではない。その証拠に薬の一つも持ってこない。元同階級の梨夢・ナーサリーにゴミを見るような目で見られた。

「何やっているんだろう…私…」

すぐに帰っていればこのような事にはならなかった。悪魔界での立場を悪くし、大怪我までしてしまった。誰一人としてお見舞いに来ないのが、現状のフェリスの立場を明示していた。その時、こんこんと小屋の扉がノックされる。返事をして招き入れてみれば、自分の真名をルークとランスに教えた悪魔、ダ・ゲイル。

「げ…何しに来たんだ!?」
「ロゼ様からお使いを頼まれただ。ほれ、傷薬だべ。悪魔にもよく効く、ロゼ様が調合した特別品だ」
「えっ…」
「それと、伝言だ。ロゼ様とマリアさと志津香さとトマトさと…とりあえずカスタムのみんなからの言伝だ。早く良くさなってくれって。じゃ、オラはもういくべ」

薬を置いてのっしのっしと帰って行くダ・ゲイル。その背中を見送って、傷薬を手に取る。先程の言葉が頭の中で繰り返される。

「何よ…悪魔の私に…何で人間の方が優しくしてくれるのよ…」

そう呟くフェリスの頬には、自然と涙が零れていた。

―カスタムの町　酒場―

「そう。情報ありがとう、由真さん。こちらも何か判ったら連絡するわ」

真知子が小型コンピュータ越しに朝狗羅由真と会話し、電源を落とす。二人はルークたちの動向を調べていた。エレナが不思議そうに尋ねてくる。

「真知子さん。その小型コンピュータどうしたの?」
「ルークさんたちの捜索に必要だって言ったら、リーザスがお金を出してくれてね。マリアさんに改造して貰ったのよ。ふふ、これで前線でも情報収集できるわ。いつまでも拠点で待ちぼうけの私じゃ

ないわよ」
「執念ですね…」
「私の知らないところで、ルークさんが行方不明になったんだもの…そんな気にもなるわ…」

真知子が悲しそうに笑う。だが、彼女の強さは誰もが知っている。ルークたちがジルと共に消えたという報告を受けた彼女は、すぐに各地から情報を集め始めた。決して涙を見せずにだ。その気丈な姿に、泣きはらしていたランやトマトも次第に元気を取り戻す。酒場の奥ではランとトマト、ミリとミルが笑いながら食事をしていた。

「しかし…みんな生きて帰れて何よりだな。ルークもランスもシィルちゃんも生きているだろうし」
「ぶぅ…でもミルの大活躍、覚えている人が少なくてなんか複雑…」
「そこよ！なんか私地味じゃなかった？かなり頑張っていたはずなのに、なんか全然印象に残っていない気がするんだけど！」
「まあまあ、ミルちゃん、ランさん。二人が頑張り屋さんなのはみんな知っていますですよ」

ランの愚痴をトマトが宥める。そのトマトをキッと涙目で見るラン。

「トマトさんはいいわよ！あれだけ活躍して、リーザスの人たちからもあんなに誉められたんですから！」
「親衛隊からスカウトも来たんだろ？」
「はっはっは！魔王ジルを斬りつけたのが、相当印象に残っていたみたいですかねー？」
「ジルにダメージ与えたのって、ルーク、ランス、リック、悪魔フェリス、魔人サテラ、それとトマトの六人だろ？そりゃ凄いわな…」
「はっはっは！まあ、大した事ないですかねー！」

「うぅ…ミルだって頑張ったのに…」

トマトの鼻がぐいーん、と伸びる。それを涙目で見るランとミル。が、鼻がしゅるしゅると元に戻っていき、トマトが真面目な表情で口を開いた。

「でも…今回の戦いで自分の未熟さを痛感しましたです。まだまだ、鍛えなきゃいけません」

「親衛隊の話は断ったんだろ？」

「はい。あくまで夢は冒険者なのです！いつかルークさんと一緒に、笑いあり、涙あり、恋愛あり、ポロリありの大冒険をするです！」

「ちょっと待った！最後の二つ聞き捨てならない！」

やんや、やんやと騒ぎ出すテーブルを見ながら、エレナが営業妨害だよと涙目になる。その顔を見て真知子が静かに笑いながら、ルークに思いを馳せる。

「（リア王女と一緒で、私もただ待つだけの女じゃないの。必ず捜し出してみせるわよ、ルークさん）」

ー カスタムの町　マリアの工場 ー

カーン、コーン、という金属音が鳴り響く。マリアの工場だ。そこに志津香がやってきて、マリアを呼ぶ。

「マリア、いる？」

「志津香。もうリーザスでの調査は終わったの？」

「ええ、痕跡はゼロ。流石は魔王の魔法といったところね…」

工場の外に出てきたマリアと話し出す。志津香は戦争終了後、今日まで城に残って魔力の痕跡を追っていた。だが、収穫はゼロ。ため息をつく志津香。

「大丈夫よ、志津香。みんなが必死に捜しているんだから、すぐに見つかるわ」

「ふん、あれだけかっこよく「必ず帰る！」だなんて言っておいて、迷惑極まりないわ…」

「ふーん…かっこよく…ねぇ…」

ニヤニヤとマリアが志津香の顔を見てくる。失言をしてしまった事に一瞬眉をひそめる志津香だが、すぐにそっぽを向いて言い返す。

「…言葉のあやよ。それより、あんたは何してるの？まだ調査段階だから、出来る事はないでしょ？」

「チューリップ1号の量産と、3号の修理。それと、4号の開発を進めているわ。今考えているのは飛行艇タイプ。これならランスたちが空の上にいても見つけられるわ！」

「いる訳ないでしょ、そんなところに…」

呆れた様子でマリアを見る志津香。なによー、と言い返そうとするマリアの口を塞いで、志津香が口を開く。

「とりあえず、私に調査で手伝える事はないから、魔法の修行をしておくわ。救助隊が組織されるような事になったら、必要になるでしょうしね」

「そうね。私も鈍らない程度にはしておかないと。それにしても…」

またもニヤニヤと志津香を見てくるマリア。

「…何よ？」
「別にー。でも、やっぱり愛よねー。あの時ジルの危険な魔法を気にせずに近づけたの、シィルちゃんとかなみさん、それと…うふふ」
「ふんっ！」
「い、いふぁい！いふぁいほ、しづふぁ！」

志津香が渾身の力でマリアの頬をつねる。涙目になるマリアを見て、そのおかしな顔に吹き出す志津香。互いに笑いあいながら、志津香がふと空を見上げた。

「（これだけみんなあんたたちの事を心配してるんだから…必ず無事でいなさいよ、ルーク、シィルちゃん！ランス…は別にどうでもいいけど）」

ハックション、とランスのくしゃみが聞こえたような気がした。悲しみを乗り越え、全員が次のステージへ歩み出す。ただ待っているだけの者はいない。帰ってくる前に、こちらから迎えに行く。全員の間で、いつの間にか暗黙の内に共通の目的となってしまっていた。待っていなさい、ルーク、と志津香が気合いを入れ直し、修行のため町の外へと歩いて行った。

第６９話　この想い、空に届け　前編（後書き）

［人物］

アールコート・マリウス
ＬＶ　１０／４３
技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　士官学校に入学してきた生徒。自分に自信が持てず、いつもびくびくとしている。だが、類い希なる才能の持ち主で、その指揮能力は大陸でも随一。すぐにアビァトールの目に止まる事になるが、それが原因でラファリアから虐められる事になる。

ラファリア・ムスカ
ＬＶ　１８／４１
技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　士官学校に転入してきた生徒。高い才能の持ち主で、いつも取り巻きを従えている女王様気質の女性。自分よりもアビァトールに評価されているアールコートの事が気にくわない。

加藤疾風
　リーザス黒の軍中隊長。裏では横領や娘の体を売って出世してきた外道。大粛正にて処刑される。

加藤すずめ
ＬＶ　１／７
技能　メイドＬＶ１
　加藤疾風の娘。外道である父親から解放され、笑顔が戻る。今はリーザスのメイドとして充実した日々を送っている。

ウェンディ・クルミラー

ＬＶ　１／１０
技能　メイドＬＶ１
　リーザス城メイド。以前より優しくなったリアに戸惑いつつも、実は以前の折檻してくる彼女の方が好きだったと内心思っている、天然のドＭ。

アーヤ・藤ノ宮
ＬＶ　１５／３０
技能　神魔法ＬＶ１　医学ＬＶ２
　流れの医師。リーザスに最新設備の整った病院が出来ると聞き、遙々やってきた。その実力は本物で、病院設立後はお抱えの医師として勤務する事になる。

運河さより
ＬＶ　１／７
技能　なし
　Ｍランド都市長。赤字続きの遊園地に頭を悩ませるが、亡き夫が残したＭランドを手放す事は出来ないと思い、経営を続けている。

エレナ・エルアール　（３）
　カスタムの町酒場の看板娘。彼氏との仲は良好。カスタム住人の中では、トマトや真知子と特に仲が良い。

［技能］
メイド
　従者としての才能。割とポピュラーな技能で、一国に数人は使えていると言われている。

医学

医者としての才能。ＬＶ２ともなれば判明しているほぼ全ての病気を、ＬＶ３にもなれば未知の病気ですら治すとされている。

［都市］

Ｍランド

自由都市。都市そのものが遊園地となっているが、最近は赤字が続き、潰れるのも時間の問題と噂されている。

第７０話　この想い、空に届け　後編

一川中島　テンプルＡＬ一

リーザスとゼスの間に流れる大河、テンマ川。その中央に浮かぶ巨大な島。この川中島は聖地とされ、いかなる国からも不可侵とされていた。なぜなら、この島には大陸最大の宗教団体、ＡＬ教の本部があるからだ。各国公認の宗教であるＡＬ教の信者は世界各地に多数存在し、冠婚葬祭などは全てＡＬ教の方針の下成されるのが通例である。今、本部の側に併設された建物の中のとある部屋で司教が信者の悩みを聞いていた。

「では、これで貴方たちお二人の今後は神によって祝福される事になりました。お二人の結婚式は冬という事でしたな。その際は、再び神の祝福を受けに来るのがよろしいでしょう」

「ありがとうございます。よかったね、リス。ようやく結婚できるわ。ちょっと先になっちゃったけど、その分恋人の期間を楽しみましょう」

「嬉しいよ、ローラ。ルークさんやランスさんにも紹介状を出さないとね」

「えー…」

「駄目だよ、二人とも恩人なんだから」

「では次の方、お入りなさい」

ＡＬ教信者でもあったローラが、リスと共に祝福を受けに来ていた。両親にも仲が認められ、幸せ一杯の表情で帰って行く。二人の次に部屋に入ってきたのは、ＡＬ教の神官でもある女性だった。

「ロゼか…」
「外で聞いていたわよ。相変わらず中身の無い神のお言葉だことで。あれでいくら寄付金貰っているのかしらね、パルオット司祭様。ま、私も似たような事しているから、人の事言えないんだけどねー」
「神の崇高なる教えに民が資材を投じるのは、至極当然の事だ」
「そりゃ随分と傲慢な神もいたもんね。ご託はいいから、頼んでいたものの報告をくれない？」
「…ふん」

パルオットがロゼの前に鏡を置く。それは、ロゼがルークから調査のために受け取っていたものだ。

「この鏡は魔女の手によるものだな。中に描かれている女性は本物だ。彼女を解放するためにはもう一つ対になる鏡を手に入れる必要がある」
「やっぱりそういう事か…予想はしていたけど、まあ面倒くさい代物ね」
「予想はついていたのか、流石だな。…真面目に信仰する気はないのか？貴様なら、司教になる事も夢ではないというのに…」
「あのスケベ親父の後釜なんかお断りよ。それに、クルックーとかいう娘が司教候補に挙がっているんでしょ？」
「き、貴様！ムーララルー様に何という事を！！」
「とりあえず、鏡は持って帰るわね。これ、寄付金。じゃあね」

机の上に１ＧＯＬＤだけ置いて、ロゼはさっさと部屋から出て行ってしまう。帰り際、廊下で女性の肩を抱いている中年男性とすれ違う。彼こそがＡＬ教の最大権力者、法王ムーララルーだ。

「あら、これからお楽しみ？相変わらずね、法王様」
「…ロゼ」

「じゃ、私は帰るから。あんまり張り切りすぎて、腹上死しないように気をつけてください、法王様」

ヒラヒラと手を振ってその場を後にするロゼ。ムーララルーに肩を抱かれていた女性、Ａ１教信者のエリザベートが不思議そうにムーララルーに尋ねる。

「法王様にあのような態度をされるなんて…あの方は？」

「ロゼという神官だ。特別才能があるわけでは無いが、着眼点が他の者とは少し違っていた鬼才だ。だが、信仰心が足りない悪い見本でもある。あのようにはなるな」

「はい、法王様」

ムーララルーが苦虫を噛みつぶした表情になる。ＡＬ教団の幹部内ではロゼの地位を取り上げるべきだという声も少なくない。しかし、ムーララルーがそれを認めず、ロゼは現在もＡＬ教の神官として活動をしている。だが、ムーララルー自身は内心ロゼを罷免したがっている。では何故彼女の罷免を認めないのか。それは、彼よりも上の存在、ＡＬ教の影の支配者であるエンジェルナイト、レダがロゼを気に入っているからだ。

「（レダ様は何故あのような信仰心のない小娘を…くそっ！）」

不快な気分になりながら、エリザベートの肩を抱いて廊下を歩いて行くムーララルー。初めてロゼの事をレダに報告した日の出来事が思い出される。悪魔を召喚している事に苦言を呈されたロゼが平然と言ってのけたのだ。神が真に望んでいるのは結局混沌だ、そうであれば神も悪魔も根本では変わらない、起源は同じなのではないか、と。それはあまりにも神を侮辱した言葉。憤慨した幹部たちがムーララルーに報告し、それをレダに報告したムーララルーだった

が、その話を聞いたレダは愉快そうに笑ったのだ。

「くくく…神は混沌を望み、悪魔との起源が同じか…その娘、面白い」

レダはロゼを気に入り、ＡＬ教に在籍させ続けるよう指示したのだった。それどころか、ロゼが望めば司教の立場を与えろとまで言ってきた。渋々ながらもそれに応じたムーララルー。こうしてロゼは未だにＡＬ教に在籍していたのだった。教団施設から出てきたロゼが空を見上げる。

「さてと…厄介なもん預かっちゃったわね。さっさと返したいけど、ルークは行方不明だし…救助隊が組織されたら、私も参加しようかしらね…」

鏡でお手玉をしながら、行方不明のルークを思い浮かべる。あいつと関わってから随分と厄介ごとに巻き込まれているなと思いながら、それも悪くはないとロゼが静かに笑みを浮かべた。

―ポルトガル―

「おーおー、よくやったで、ルイスはん、セシルはん。リーザスから報酬がっぽりでおま。全滅仕掛けたと聞いたときは焦ったでおまが、こりゃ笑いが止まらないどす」

傭兵部隊を派遣した商人、プルーペットがリーザスから受け取った大量の報酬に大笑いする。元々分の悪い戦争だと判っていたプルーペットは、前払い分のみでも十分利益の出るようぼったくってい

たのだが、結果として戦争には勝利し、多大な活躍を見せた傭兵部隊にリーザスから報酬が支払われていたのだ。プルーペットからしてみれば嬉しい誤算だ。

「ま、全部ルークの旦那のお陰ですぜ、プルーペット様。あの人がいなきゃ、俺もセシルも間違いなく死んでいた。」
「ああ、解放戦の中心人物だったというお方でっしゃろ？ルークはんか、こりゃ感謝しなきゃならんどすな。名前覚えておいた方がよさそうでごわすね」
「ルークの旦那…またどこかで出会いたいもんだぜ」

ルイスの報告を受け、プルーペットの中でルークの評価がうなぎ登りに上がる。こりゃいい財布になるかもしれない。ぐふふ、と笑うプルーペットを見ながら、ルイスと共に報告に来ていたセシルは別の人物の事を考えていた。

「（勇者アリオス…いつかまた出会いたいものだ…）」

解放戦が終わるや否や、次の人助けがあると言い残して姿を消した勇者アリオス。いつの間にかセシルは彼に惹かれていた。

―ヘルマン　帝都ラング・バウ―

皇帝の間には幹部たちが集まっていた。左右に広がって整列している幹部の前には、玉座に深く座る皇帝。長い事病床に臥していたが、内容が内容だけに体を引きずって公の場に現れたのだ。その横には皇妃パメラと皇女シーラが控えていた。そして、部屋の中央には膝をつきながら今回の戦争の報告をする兵の姿がある。第３軍数

少ない生き残りの一人、ミネバ・マーガレットだ。ミネバの報告を聞いたヘルマン皇帝が口を開く。

「そうか…パットンとトーマが死んだか…」

「パットン皇子の死体は確認できませんでしたが、状況からして間違いないかと…」

ミネバの報告を聞いて集まっていた幹部たちがざわつく。ヘルマンの最強の戦士と皇子、その両方を同時に失ったのだ。

「（トーマよ…儂より先に逝くとはな…あの世であったら酒でも酌み交わそう…）」

「（トーマ将軍…騎士としての貴方の生き様は、私の中に生き続けます。どうかお休みください…）」

トーマと盟友でもあった第1軍将軍レリューコフがその死を悲しみ、第4軍将軍ネロがその生き様を賞賛する。その横で、第2軍将軍アリストレスが悔しそうに拳を握っていた。

「（パットン…だからあれ程陰謀の臭いがすると止めたというのに…本当に、本当に死んでしまったのか…）」

その時、一瞬だが皇妃のパメラの口元に笑みが浮かぶのを、第5軍将軍ロレックスは見逃さなかった。

「（女狐が…これでヘルマンはシーラ様の…いや、パメラとステッセルのものか。ちっ…）」

不機嫌そうなロレックス。各将軍が抱く思いは様々であったが、一つ確かな事がある。ヘルマンの実権は、シーラ派のものになった

という事だ。

「報告ご苦労であった、ミネバ。今後はお前が第3軍の将軍になり、兵を率いてくれ」

「はっ！我が身に余る光栄、感謝します」

「先代のトーマは強いだけの無骨漢で、私に背いてばかりの男でした。あのような蛮人ではなく、知性を持った将としての働きを期待しますよ」

パメラのその言葉に、レリューコフとアリストレスの目が見開かれる。

「（ヘルマンにその身を捧げてきたトーマを…その誇りを…）」

「（亡くなって間もないというのに…このように侮辱するというのか、パメラ！）」

「（あー、駄目だ。こりゃ我慢ならねぇ…）」

頭を掻きながら、ロレックスがスッと一歩前に出ようとする。が、その瞬間、皇帝の間の扉が開き、兵が報告にやってきた。

「何ですか、騒々しい…」

「申し訳ありません。ロレックス将軍、今すぐ来て下さい！奥方様が…」

「リルが！？」

「突如倒れられ…既に危険な状態です…」

その報告に皇帝も許可し、ロレックスは慌てて兵と共に出て行ってしまった。その背中を振り返りもせず、皇帝の座る椅子を見ながらミネバが静かに笑った。

「（くくく、遂にここまできたよ！あたしが第3軍の将軍だ！もう少しだ…その汚い尻を乗せているその椅子、必ずいただくよ…）」

ここに新たなヘルマン第3軍将軍が誕生した。将軍ミネバ・マーガレット。だが彼女の野心は、更にその先を見据えていた。

「（お兄様…私は権力争いなどしたくなかった…また昔みたいに…貴方と笑いあいたかった…）」

シーラが亡き兄を思う。だが、シーラの思いとは裏腹に、これより二週間後にヘルマン皇帝が逝拠し、シーラは女帝へと即位する事になる。毒殺という噂も流れるが、真偽の程は定かではない。

ー自由都市　とある森中ー

森の中にひっそりと佇む小屋。この中のベッドに横たわっている男がいた。ヘルマン皇子、パットンだ。包帯を巻いた姿で、歯を噛みしめる。

「くそっ…親父もノスも絶対に許さん！」

「何、一人で気張っているんだよ。とりあえず食料を調達してくるから、安静にしているんだぞ」

そう言って扉から出て行くのはハンティ。二人はノスから逃げ延びた後、何とか生き残りこうして小屋に隠れ住んでいた。ハンティが集めてきた情報によれば、既にヘルマンでは自分は死んだ事にされており、皇位継承権も消滅したという。それどころか、これ以降パットンを名乗る者が現れたら、それは皇子の名を語る反逆者だと

いうお触れまで出ていた。このため、パットンはヘルマンに戻る事が出来なくなっていた。

「トーマ…すまん…俺が巻き込んだ…」

パットンが今は亡きトーマの事を思う。恩師にして、もう一人の父。今思い返せば、何と危険な作戦であった事か。アリストレスが引き留めた理由が今になって判る。それなのに、何も言わずついてきてくれたトーマ。だが、自分のせいで死んでしまった。自然と拳を握りしめる。

「このままでは終わらないぞ…これではトーマに会わす顔がない…くそっ！」

パットンが壁に右拳を叩きつける。すると、壁が一部崩れてしまった。

「うおっ！や、やべぇ…ハンティにどやされる…」

崩れた壁を見て焦るパットンだったが、彼は知らなかった。この小屋は敵の襲撃に備え、ハンティの魔法で強化されている小屋だという事を。その壁を素手で壊す事が、どれほど異常な事かを、パットンは気がつけずにいた。

―ゼス　サバサバ―

リーザス解放の話は当然ゼス国内にも伝わっていた。この日、キューティは有給を使って町に遊びに来ていた。ウィンドショッピン

グを楽しみ、今はオープンカフェで飲み物を飲んでいた。今時の若者といった振る舞い。

「ま、一人なんだけどね…」

「キュー、キュー！」

キューティが自嘲気味に呟いたのを聞いて、横に控えていたウォール・ガイが慰める。キューティ・バンド、その真面目な性格から相変わらず友達はいなかった。もう一体のウォール・ガイが新聞を持ってくる。

「ありがと、ライトくん。ふむふむ、新聞はここ数日リーザスの事ばっかりね。へー、アトラスハニーから魔力で空を飛べる小型の飛行艇が発掘されたんだ。あの建物、本当になんなのかしら。さて、占いのページはっと…」

新聞を受け取って一面にざっと目を通し、占いのページを見ようとするキューティだったが、一面の端の方に掲載されていた写真を見てその手が止まる。それは戦争の写真であったが、そこに小さく写っている後ろ姿にキューティは見覚えがあった。

「ルーク…さん…？」

それは、共に砂漠のガーディアン事件を解決したルークにそっくりであった。そして、そこの欄外に書かれていた説明文を読んで、キューティは目を見開く。そこにはこう書かれていた。

―解放戦での中心人物であったと思われる冒険者　生死不明―

「う…うそ…」

―ゼス　アダムの砦―

「サイアス様！サイアス様はいらっしゃいますか！？」
「どうしたんですか、キューティ様。いきなりやってきて？」
「話があるんです！サイアス様に会わせて下さい！」

突如やってきたキューティに困惑する砦の警備員。その手には新聞が握られていた。警備員は責任者のサイアスに報告をしに行く。

「あ、サイアス様！キューティ様が…」
「…奥の部屋に通せ。そして、誰も入れるな」
「え？は、はい…」

キューティの名前を告げた瞬間、サイアスは指示を出す。約束でもしていたのかなと警備員は納得し、キューティを奥の部屋に案内する。部屋に入ると、そこにはサイアスが座っていた。机の上には既に新聞が広げられている。キューティの持っていた新聞と同じものが。

「ルークの事だな？」
「ご存じでしたか！？やっぱり…これはルークさんなんですか！？」
「すぐに情報を集めて確認を取った。戦死者も多いから厳しいかとも思ったのだが、意外にすんなりと判ったよ。リーザス解放戦の最後で、三人の冒険者が行方不明になったらしい。ランス、シィル、そして…ルーク」
「そ…そんな…」

キューティが手に持っていた新聞を落とす。その悲しげな表情を見ながら、サイアスは真剣な表情で話を続ける。

「だが、生きている可能性は高いみたいだ。今その三人をリーザスは躍起になって捜索しているらしい」

「そ、そうなんですか…よかった…」

「キューティ。俺も独自でルークの捜索を開始するつもりだ。だがこれは他言無用で頼む。今回の戦争に関係のないゼスがそのような事をすれば、厄介ごとになりかねんからな…」

「サイアス様…微力かもしれませんが、私にもお手伝いさせていただけませんか？」

「…多少の危険は含んでいるぞ？立場が危うくなるかもしれん」

「それでも…放ってはおけません！」

「…判った、頼りにしている」

リーザスと自由都市の連合とは別に、ゼスでもサイアスとキューティの二人が極秘にルークの捜索を開始する。新聞に視線を落としながら、サイアスが呟く。

「以前のように１０年以上も消息不明など絶対にさせん。必ず見つけ出す。待っていろ、ルーク！」

―魔人界　シルキィの城―

「以上が今回起こった出来事の全てです」

「そうですか…ノスがそのような事を…」

「サ、サテラたちはノスに騙されていただけで…その…」

シルキィの城にはホーネット派に所属する魔人が集結していた。
この城の付近にあるカスケード・バウに、もうすぐケイブリス派が大規模な進軍をしてくるからである。若干こちらに不利な戦いだ。
そんな中、城ではアイゼルとサテラが頭を下げ、ホーネットに報告をしていた。聞かされたのは、ノスの裏切りと死、そしてジルの復活。シルキィが複雑な表情を浮かべる。

「裏切ったとはいえ…ノスの死はあまりにも痛いですね…」
「ですが、獅子身中の虫を抱えていたままよりは良かったのでしょう。二人とも、お疲れ様です」
「ノスに騙されて人間界に侵攻したのは許せる事ではないが…魔王ジルを封印してきたんだ。今回だけはお咎め無しにしておくぞ」
「ほ、本当か！」
「「「うえーん、アイゼル様よかったです！」」」

シルキィのその言葉にサテラがホッとし、使徒の宝石三姉妹がアイゼルに抱きつく。どっこい生きていた宝石三姉妹。その様子を見ながら、シルキィが小さく呟く。

「まあ、「魔王復活させちゃった、てへ！」とか言ってきたら、簀巻きにしてメディウサに引き渡しているところだったけどね…」
「そそそそそ、そんな事サテラが言う訳ないだろ…あはははは！」
「（言う気だったな…）」
「（言う気だったわね…）」

大量の汗をかいて作り笑いを浮かべるサテラを見て、魔人メガラスと魔人ハウゼルが冷ややかな視線を送る。シルキィがはぁ、とため息をつき、アイゼルに視線を向ける。

「しかし、よくジルを封印できたな…」

「一時的にだが、人間と共闘した結果だ」
「人間と!?」
「…何故ですか?」

その言葉にアイゼルとサテラ以外の全員が目を見開いて驚く。ホーネットがアイゼルに尋ねると、サテラが横から答える。

「ふん、あんな奴らいなくても、サテラたちだけで十分倒せたけどな」
「人間の中にはカオスの使い手がいたため、人間でも魔王にダメージを与えられたので、ここは協力すべきだと判断しました」
「そうですか…人間と…」

ホーネットが意味ありげに呟いたのを聞いて、アイゼルが言葉を続ける。

「それと…カオスの使い手とは別ですが、興味深い人間と出会いました」
「興味深い人間?」
「ええ、その男は人類と魔人の共存を目指していると言っていました。その名を、ルーク」
「「な!?」」
「……」
「ルー…ク…」

シルキィとハウゼルが先程よりも更に目を見開き、メガラスが顎に手を当てる。だが、この場で最も驚愕しているのは、アイゼルの目の前に立つホーネットであった。そして、アイゼルは更に口を開く。それは、西の塔で戦っていたとき、ホーネットのところへ戻るのであれば伝えて欲しいとルークに頼まれていた言葉。

「それと…ホーネット様、貴女に言伝が…」
「私に…？」
「はい。「あの時の約束を果たすため動いている、もう少しだけ待っていてくれ」だそうです」
「ルーク…そうか、あの時の人間か！」

シルキィがかつて魔人界で見た人間を思い出す。それと同時に、ホーネットが俯く。その胸中には、かつて交わした約束の言葉。

「また会いに来る！人類をまとめた後、共にケイブリス派を倒すため、必ず君の援軍に駆けつける！だから、それまで待っていてくれ！」

「そうですか…ルークが…そんな事を…」
「ホーネット…！？」

サテラが不安そうにホーネットの顔を覗き込む。そこには、とても穏やかな笑みを浮かべるホーネットの顔があった。こんな笑顔、この戦争が始まってから一度だって見た事はない。いや、戦争以前だってこんな無防備な笑顔を浮かべた事があっただろうか。

「なっ…」
「うそ…」
「ほぅ…」

シルキィも、ハウゼルも、メガラスも、三者三様の驚き方をしている。だが、アイゼルだけはルークの言葉を思い出していた。

「ホーネットは穏やかな顔で静かに笑う。それは、こちらの気持ち

も穏やかにしてくれる素晴らしい笑顔だ」

「（そうか…これが…なるほど、確かに素晴らしい笑顔だ…）」

その笑顔を見て、アイゼルはルークが行方不明になった事を報告するのを止める。この笑顔を崩したくなかったからだ。それと同時に、自分もルークの所在を掴むために調査をする事を決意する。穏やかな表情を真剣なものに戻し、ホーネットが高らかに宣言する。

「それでは、カスケード・バウに向かいましょう」

当初は不利と思われていたこの日の戦いは、蓋を開けてみればホーネット派の完勝に終わった。そこには、最前線でケイブリス派を圧倒するホーネットの姿があった。普段よりも遙かに調子のいいホーネットの姿に、ホーネット派は奮起し、ケイブリス派はすぐに敗走を始めた。そのホーネットの様子と先程の笑顔を思い出しながら、サテラがぐぬぬ、とシーザーに文句を言う。

「ランスだけじゃなく…ルークの奴も殺すリストに追加しないと駄目そうだな…」

「サテラ様、嫉妬ハ見苦シイデス」

「うるさい！くそっ…イシスの修復を急がないと…」

ケイブリス派が敗走していくのを見ながら、ホーネットは空を見上げた。

「（ルーク…あの日の約束通り、私もこうして待っています。ずっと…いつまででも…貴方を待っています…）」

その想いは時空を越え、遙か空の彼方まで届けられる事になる。

―どこかの森中―

「ランス様、起きてください、ランス様」
「んっ…ああ、シィルか。どうだった、何か判ったか？」

光の神によりどこかへと飛ばされてしまったランスとシィル。見覚えのない森の中であったため、周りの調査をシィルに頼んでランスは一眠りしていたのだった。

「すいません、どこかまでは判りませんでした…でも、少し進んだところにカサドという町があるみたいです」
「カサド…聞いた事のない町だな。とりあえず、ここがどこだか判らなければ話にならん。行くぞ、シィル！」
「はい、ランス様！」
「がはは、ついでに可愛い町娘とお楽しみだ！」
「…はい…ランス様」

のしのしと町を目指して歩いて行くランスとその後についていくシィル。二人は気がついていなかった。神の天罰により、自分たちのレベルが1になってしまっている事を。

―どこかの街道―

「ふむ…場所を指定しておくべきだったな…」

ルークが見た事もない風景に途方に暮れる。時空の狭間から脱出したのはいいが、自分がどこにいるのか見当がつかなかったのだ。願いを叶えると言っておきながら、気の利かない神だと想いながら頭を掻くルーク。その時、声が聞こえてきた気がした。その声は、ホーネットの声。いや、それだけではない。かなみと志津香の声。トマトと真知子の声。ロゼの声もあった。多くの人たちの声がルークに届いた気がした。

「…気のせいか？だが…そうだな、さっさと帰らなきゃまずいな…」

必ず会いに行くと約束した。必ず帰ると約束した。ならば、こんなところでいつまでも突っ立っている訳にはいかない。見れば近くに立て看板が突き刺さっていた。

「北にカサドの町か…聞いた事のない町だが、とにかくそこに向かうか…」

看板を見たルークは町に向けて歩き出す。ホーネットとの約束を果たすため、かなみと志津香との約束を果たすため、その歩みを止める事はない。彼女たちの想いは、こうして空へと届いたのだった。

第７０話　この想い、空に届け　後編（後書き）

［人物］

ムーララルー

ＬＶ　１／５

技能　説得ＬＶ２

　ＡＬ教団の法王。強力なカリスマと説得力を持っているが、それは影の支配者であるレダに与えられたもの。元々はデュラン・テュランという名前の田舎のおっさんであった。その絶対的な権力を悪用し、女性信者に猥褻な行為を繰り返している。

パルオット

ＬＶ　１０／３０

技能　説得ＬＶ１

　ＡＬ教団の司祭。司祭ではあるが、司教とほぼ同等の権威を持つムーララルーの側近。ロゼの振る舞いに憤りを感じながらも、その才能は認めており、人知れずロゼの立場を守るよう動いていたりする。

エリザベート・デス

ＬＶ　３／６

技能　なし

　ＡＬ教団の信者。ＡＬ教の教えを盲信しており、ムーララルーの蛮行も神に通じる行いだと信じてしまっている。

レダ

　第四級神。ＡＬ教を裏で操っているが、その目的は不明。

プルーペット

ＬＶ　１０／１５
技能　商人ＬＶ１
　ポルトガル出身の大商人。自称永遠の２２歳。金の臭いのするところならどこにでも現れ、かなりあくどい商売もしている。

シーラ・ヘルマン
ＬＶ　１／３９
技能　なし
　ヘルマン国皇女。実はヘルマン皇帝の娘ではなく、皇妃パメラと宰相ステッセルの間に出来た不義の子。これより数ヶ月後、女帝へと即位するが、シーラはパメラとステッセルの傀儡であるため、実権はこの二人が握った事になる。

パメラ・ヘルマン
ＬＶ　１／７
技能　なし
　ヘルマン国皇妃。ステッセルと共謀して前皇帝を毒殺した張本人。全ては愛するステッセルのため暗躍しているが、そのステッセルはパメラに愛情など持っていない事を彼女は知らない。

レリューコフ・バーコフ
ＬＶ　３５／４１
技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　ヘルマン第１軍将軍。ヘルマン国の大黒柱にして、トーマとは盟友の間柄である老兵。何度となく戦で相対したバレスとは自他共に認めるライバル関係。ヘルマンの現状を嘆いているが、パメラとステッセルの工作により自由に動けないでいる。

ネロ・チャペット7世
ＬＶ　３１／３３

技能　剣戦闘ＬＶ１　斧戦闘ＬＶ１　弓戦闘ＬＶ１
　ヘルマン第４軍将軍。軍事学校を首席で卒業したエリートで、正々堂々真っ正面から戦う騎士道を重んじている。だが、その思想は若干行きすぎているため、一部の部下からは不満を持たれている。

ロレックス・ガドラス
ＬＶ　５６／７１
技能　剣戦闘ＬＶ２
　ヘルマン第５軍将軍。二刀流の使い手で、ヘルマンではトーマに次ぐ実力者。寡黙な性格だが、胸の内には熱い義を持っており、パットンを支持していた。決して人望がある訳ではないが、その強さに憧れて彼についていく部下は多い。だがこの後、最愛の妻が亡くなり、人生を投げ酒に溺れる日々になる。その間にレベルはみるみる下がり、ヘルマン最強の座はミネバに移る。

リル・ガドラス
　ロレックスの妻。突如病に倒れ、亡くなってしまう。

サイアス・クラウン　（３）
ＬＶ　３５／４１
技能　魔法ＬＶ２
　ゼス四将軍の一人にして炎の魔法団団長。旧友であるルークの失踪を知り、人知れず調査を開始する。

キューティ・バンド　（３）
ＬＶ　２０／２８
技能　魔法ＬＶ１
　ゼス治安部隊隊長。サイアスと共にルーク捜索に動き出す。未だに友人は０。

メガラス
ＬＶ　９７／１４６
技能　剣戦闘ＬＶ１
　ホーネット派に属するホルスの魔人。アベルによって魔人化した古い魔人で、ホーネット派の最古参。無口な性格で殆ど口を開かないが、実力は高く頼りになる存在。そのスピードは魔人最速。

ラ・ハウゼル
ＬＶ　８８／１２０
技能　魔法ＬＶ２
　ホーネット派に属するエンジェルナイトの魔人。ジルによって魔人化する。常識を重んじ、仲間の事を思いやる心優しい魔人。戦闘時は炎を操る。ケイブリス派にいる姉の事を心配している。

［技能］
説得
　人々を説得する技能。レベルが高ければ洗脳の域にまで至る。

商人
　商いを営む才能。ポルトガル出身の者が多く保有するという不思議な傾向がある。

［都市］
テンプルＡＬ
　宗教都市。ＡＬ教の本部があり、毎日のように信者が押し寄せる大都市。本部は要塞のようになっており、普通の人では入る事が出来ないが、側に併設されたＡＬ教施設で司祭が神の教えを説いている。時には法王ムーララルーも降臨し、信者はその幸運にむせび泣

く事になる。

ポルトガル

自由都市。独特の訛りがある商人の国。ＪＡＰＡＮと繋がっている天満橋を管理している。

第７１話　教団の遺産

ＧＩ０３４４
―魔法院―

それは、魔法使いの能力が、世に認められていなかった頃の話。

「若き魔法使いの諸君。我が学院に入学してくれた事を心から感謝します」

ここは魔法使いの学校、魔法院。今ここに、多くの若き魔法使いたちが並んでいた。この日は学院への入学式。立ち並ぶ若者たちはみな、現状を変えたいと目を輝かせていた。

「今は「力」が世界を制している。だが、魔法は十分それに取って代わるだけのものである」

舞台上で学院の長が話を続ける。彼の言うように、この時代では魔法使いは詐欺師と罵られていた。剣が支配する時代。当然、今ここに集まっている若者たちもこれまで迫害を受けてきた者が殆どだ。魔法の力を世間に認めさせる。皆がその思いをしっかりと抱いていた。そしてそれは、この学院に首席で合格したこの若者も同じであった。

「（魔法使いの力を世間に認めさせるんだ…この学院でしっかりと学んで…）」

彼の名はルーカ・ルーン。常識を遙かに超えた魔力量を持ち、幼

少の頃には既に賢者と呼ばれるような魔法使いでさえ彼には敵わなかった。そのあまりに膨大な力を制御するため、普段は魔力の足枷で力を封じ込めている。それでも魔法院に首席で合格する程の、文字通り天才である。

「ではここで、我が学院に在籍する魔法使いの紹介に移らせていただきます。フリーク殿、こちらへ…」

「うむ」

促されて舞台上に上がってきたのは老魔法使い。フリークという名前を聞いて周囲がざわつくが、それも無理はない。魔法使いであればその名を知らぬ者などいない。瞬間的に放たれ、すぐに消えてしまう魔力。これを専用の装置に溜め込み、必要なときに取り出して自由に使うという「魔蓄技術」を発明した魔法工学の権威だ。これはあまりにも革新的な発明で、人類の歴史を大きく変えるほどのものであった。その第一声に注目が集まる。

「ではまず…この中に清楚で美しい母か祖母を持つ者がおったら、ワシに紹介するように」

学生たちが盛大にずっこけた。その様子を見ながら狙い通りだと意地悪そうに笑うフリーク。これが、ルーンとフリークの出会いであった。

GI0348
―魔法院―

「恩師フリーク、この空中都市の発案は素晴らしいです！」

「判るか、ルーン。じゃが、何度計算しても実現可能な魔力量に抑える事ができんのじゃ」

学院を卒業したルーンは、研究者としてそのまま残り続けていた。彼はフリークの人柄と鬼才ぶりに魅せられ、共に魔法工学の研究を行っていた。フリークもルーンの人柄と才能を認め、親子以上に年の離れた二人だったが、親友という間柄になっていた。今二人が話しているのは都市ごと空中に浮かび上がらせようとする魔法技術。だが、それには膨大な魔力を要し、他の魔法使いからは空想の産物と一笑にふせられたものであった。

「そうじゃの…もう少しこちらの魔力を転用して…ごほっ、ごほっ…」

「恩師フリーク！」

「大丈夫じゃ。年には勝てんのぉ…そろそろ徹夜で研究というのも厳しくなってきたわい…どれ、ちょっと顔を洗ってくるかの…」

そう言い残して部屋を出て行くフリーク。その背中を悲しげな瞳で見送るルーン。既に高齢のフリーク。最近はますますそれが顕著に表れていた。失いたくない。無二の親友、そして、偉大なる魔法使い。ふとルーンの目にある研究書物が目に入る。それは、フリークが研究を続ける中で意図せず生まれてしまった技術。人道に外れるこの技術をフリークは誰にも打ち明けず、こうして報告書類だけ残し後は全て処分していた。親友のルーンも、初めて見る技術。

「死体…死者…蘇らせる…この技術は…」

それは、ネクロマンサーと呼ばれる禁呪。これより二年、ルーンはフリークの下に殆ど通わなくなり、自身の研究室に閉じこもる事になる。

GI0350
ー魔法院ー

フリークは頭を抱えていた。研究を続けている空中都市の技術。この実現のためには後数十年はかかるだろう。だが、自身の死期が近い事をフリークは悟っていた。

「ワシの死後、この技術を継げる程の魔法使い…一人しかおらんのぅ…」

頭に浮かんだのは、かつて共に研究をしていた親友。最近では自分の研究室に閉じこもりきり。一体何を研究しているというのか。その時、部屋の扉がけたたましく叩かれる。

「なんじゃい、騒がしい…ルーンか、どうしたのじゃ?」
「恩師フリーク、見てください!遂に完成したんです。新技術…バイオメタルが!」
「バイオメタル…?」

ルーンが机の上に書類を広げる。その技術を見て、フリークが目を見開く。人間の細胞金属質変更し、永遠の命を手に入れる不死の技術。

「これは…」
「ネクロマンサーの技術を参考にさせていただきました。当初は肉体を完璧に維持しようと研究していたのですが、最終的に脳と眼球以外は全て金属の体になります。ですが、これなら永遠の命を手に

入れられる！」
「じゃがこれは…」
「死者を弄んでいるわけではありません。人の可能性を、たった数十年で終わらせないための進化です。恩師フリーク。既に終身刑の犯罪者を使ってこの技術が実現可能な証明は済んでいます。貴方もバイオメタルで永遠の命を授かってください！」
「人体実験をしたのか、ルーン…」
「罵ってくれて構いません。でも…それでも…私は貴方を失いたくない！」
「ルーン…」

これより数日後、フリークはその体を金属にし、永遠の命を手に入れる事になる。かくして老衰による優秀な人材の損失を防ぐ事に成功したルーンは、当初の目標であった魔法使いの地位向上のために動き出す事になる。

GI0353
ー魔教団ー

２６歳になったルーンは、既に世界最強の魔法使いとしてその名を轟かせていた。人々は尊敬と畏怖を込めて、彼の事を「Ｍ（マジックマスター）・Ｍ・ルーン」と呼んだ。ルーンは世界から選りすぐりの２４人の魔法使いを集め、「魔教団」という組織を結成。魔法使いの地位向上のため、自由と正義のため、本格的に動き始めていた。

「組織の長になった感想はどうじゃ、ルーン？」
「恩師フリーク…難しいものです。全員の足並みが揃っている訳ではない。中には過激派も存在する…」

「ふむ…」
「ですが、必ず成し遂げてみせます。人類に真の平和を…」
「人類に真の平和か…ふむ、お主になら、出来るような気がするわい」

そう笑うフリーク。その笑顔を見ながら、ルーンの表情は少しだけ曇る。ルーンにはある懸念があった。それは、自身がいつまで清廉潔白でいられるかという事。恩師フリークを救うためとはいえ、人体実験に手を出した。そして今、過激派の意見に賛同したくなる時も何度かあった。それは、人の道を外れた行為。一度だけ目を閉じ、ルーンは口を開いた。

「一つだけ…お願いがあります…」
「…なんじゃ？」

これ程までに真剣な表情のルーンを見た事がない。フリークもルーンの顔を正面から見据える。

「もし、私が間違った方向に進んでしまったら…恩師フリーク、貴方が私を止めてください。貴方に否定されたのなら、私は自分の死に疑問を抱かなくて済みます」

ＧＩ０３６０
ー バルシン王国 ー

世界最強の軍事国家、バルシン王国。今この国は宣戦布告を受けていた。それを行ったのは、わずか１００人足らずの魔法使いの集団、魔教団。世界中が無謀な宣戦布告だと馬鹿にしていた。バルシ

ン王国も完全に魔教団を見下していたが、一応の備えとして魔法使い対策は万全に行っていた。バルシン王国の圧勝。誰もがそう予想していたが、その予想は大きく覆される。この戦争に、魔教団から魔法使いは一人も参加しなかった。

「鉄の…兵士だと…」

参戦したのはわずか２４体の鉄兵。だが、この２４体にバルシン王国は滅ぼされる事になる。後に鉄兵戦争と呼ばれるこの戦争は、魔教団の圧勝に終わった。バルシン王国跡地に魔都デトナルーカを置き、世界中の国家に戦争を仕掛けた。そして数年後、ルーンは歴史上初めて人類統一を果たす。世界中の魔法使いは魔教団に所属し、魔力が世界を制する時代となった。

ＧＩ０３８９
ー魔都デトナルーカー

「完成だ…遂に完成した…」
「よもやこの目で空中都市を見られる日が来ようとは…」

長い年月をかけ、ルーンとフリークは遂に年を空中に浮かび上がらせる事に成功する。この頃には魔教団は「聖魔教団」と名前を変え、鉄兵を更に進化させた闘将と呼ばれる存在で、魔物たちを大陸の西に追いやり、人類に平和が訪れていた。だが、ルーンはまだ満足していなかった。

「まだだ…まだ真の平和は来ていない…魔人の支配から人類を完全に解放する…その為にも、この空中都市、闘神都市をもっと増やさ

なければ…」
「ルーン、あまり無茶はするでないぞ。それに、先日闘将へと改造したあのディオ。あれは本当に大丈夫なのか…？」
「恩師フリーク。今は少しでも力が必要なのです。魔人を、完全に駆逐するために…急がなければ…」
「……」

GI0420
―魔都デトナルーカ―

この年、西の大陸に追いやられ、闘神がモンスターたちを駆逐している事に痺れを切らした魔人たちが遂に聖魔教団に戦争を仕掛けてきた。

「想定よりも早すぎる…くっ、まだ20番目の闘神都市、ユプシロンは完成していないというのに…」
「やはりここは、人間よりも優秀な肉体を持つモンスターで闘将を作るべき…」
「黙れ、モガンダ！ダイロス、その狂人をさっさと連れて行け！」
「はっ！」
「その上、当初はケイブリスやメディウサなど2～3しか参戦していなかった魔人も、今では10体を越えています！」
「何故だ…何故魔人はそんなに早く動いた…」

ルーカの誤算は二つ。闘将があまりにも強すぎた事。最前線で戦っていた闘将バステトは、たった一人で2000を越えるモンスターを倒してしまった。それを見て、武闘派の魔人の血が滾った。

「くくく、此度の戦争など興味はなかったが、中々に楽しめそうじゃな。ジル様との時代を思い出すぞ…」
「ノス！どちらがより多くの相手を殺せるか勝負と行こうじゃないか。げっげっげ！」
「おー、面白そうな奴らがいるじゃねぇか。人類の飯は美味いし、ちょっとやる気出すかな！」
「魔王ガイ様に歯向かうとは愚かな…」

ノス、レキシントン、ガルティア、バークスハムが強者を求め戦場を駆ける。そしてもう一つの誤算。フリークが懸念していた闘将ディオ。この闘将があまりにも残虐にモンスターを殺しすぎた。その事に、多くの魔人が怒りを覚える。

「このような振る舞い、紳士のやる事ではありませんね…」
「ジーク、共に奴らを駆逐するぞ…」
「…許さん」
「行こう、姉さん！」
「闘将なんか、みんな氷漬けにしてやるわ！」

ディオの蛮行に、本来率先して人類に戦闘を挑まないジーク、ケッセルリンク、メガラス、ハウゼル、サイゼルの五人も参戦を決める。

「聖魔教団ねぇ…ちょっとは役に立つ技術でもあればいいんだけど…」
「けけけけけ、殺す殺す、人間殺す！ついでにあのボディをミーがいただくね！」

そして、自身の望みを果たすためパイアールやレッドアイといった魔人も参戦する。最終的にはなんと１５体もの魔人が、聖魔教団

との戦争に参加する事になる。

「仕方がない…未完成ではあるが、ユプシロンも参戦させる！怯むな、我らなら負けはしない！」

こうして魔人戦争が始まった。準備の整っていなかった聖魔教団は、闘将を闘神都市の護衛に回し、前線で戦うのはかつて魔法使いを力で支配していた蛮族と呼ばれる存在であった。だが、この時点では足並みは揃っていた。全ては人類の為、かつて対立し合っていた魔法使いと蛮族が共に肩を並べて戦っているという事実が皆を奮起させた。

「おいおい、なんでドラゴンがいるんだ！？食って良いのか？」

「立ち去れ、魔人！」

更にルーカは、一部のドラゴンとも手を結んでいた。防空ドラゴン部隊は闘将にも劣らない程の戦果を上げる。蛮行が続いた最強の闘将ディオはフリークの手によって戦争の最中に封印されるが、それでも人類の戦況は変わらなかった。こうして聖魔教団は、魔人相手に３０年以上も渡り合う事になる。だが、人類の絆は綻び始めていた。

ＧＩ０４５１
―魔都デトナルーカ―

それは、魔人ノスの一言から始まった。

「くくく、魔法使いにいいように扱われている愚かな人間共よ。痛

みを受けるのは貴様らばかりだというのに、何故そうも戦い続ける…」

この言葉は蛮族たちに波紋を呼んだ。魔法使いは危険の少ない後衛に引きこもったままか、鉄壁の闘将が出てくるだけ。何故俺たちばかりが痛い目を見なければならない。話はみるみる内に拡散し、遂にはこの戦争は聖魔教団が仕掛けたものだという噂にまで膨れあがった。そして、人類は割れる。

「M・M・ルーン様！蛮族が…我らに反旗を翻しました！」
「な…なんだと！ふざけるなぁ！」

戦争に嫌気がさしていた蛮族が、ノスの口車に乗って聖魔教団を裏切る。この人類の裏切りに、ルーンは激怒する。

「人類の…人類の平和のために戦っているんだぞ！ふざけるな…ふざけるなぁ！！」
「M・M・ルーン様…」
「ふふ…ふはははは！そうか…そうだよな…やはり魔法を使えぬ者と足並みを揃えるなど…無理であったのだ…くくく…」

報告を受けたルーンは不気味に笑い出し、デトナルーカの地下にある部屋へと一人で降りていった。そこは、闘神都市と闘将へと命令を出す司令室。

「全ての魔法使いに告げる…敵は魔人だけではない、魔法を使えぬ愚かな蛮人共を、皆殺しにするのだ！！」

この命令を受け、闘神都市は蛮族たちの住む大地に向けて魔導砲を発射する。たった一撃で町一つが消滅し、闘将たちが魔人やモン

スターだけでなく、人間を虐殺し始めたのだ。３１年目の悪夢と呼ばれるこの出来事から見て取れるように、ルーンは狂人の道を歩み始めていた。

「カレン…目を開けてくれ、カレン…」

闘神都市から放たれた魔導砲を受け、ある国の王女がその命を失った。亡骸を胸に抱き、号泣するのはその兄。王位を継ぐのが嫌で、魔鉄匠としての人生を歩んでいた男だ。

「許さない…聖魔教団を…絶対に許さない…」

魔法使いへの憎悪から、この男は魔法を通さないミスリル銀を使用し、妹のカレンを闘将として蘇らせた。鉄壁の防御に加え、魔法を通さない奇跡の闘将、レプリカ・ミスリー誕生の瞬間である。

ＧＩ０４５２
―王国跡―

「ルーンよ…お主が人類にもたらしたかったのは…この風景なのか…これが、真の平和だというのか…」

焼けただれた大地を見て、フリークが独りごちる。そこは王国跡。闘神都市の魔導砲で生きている者は誰一人としていない。地面に放り出されたクマのぬいぐるみを拾う。一体いくつくらいの子のものだったのだろうか。ふいに後ろに人の気配を感じる。振り返ると、そこに立っていたのは黒髪のカラー。

「…ワシを殺しに来たのか？」
「話が通じるのですか！？」

フリーク以外の闘将は全て人類抹殺の命の下動いていた。フリークただ一人だけが、自身の意志で動けていたのだ。黒髪のカラーが口を開く。

「貴方たち魔法使いが手を引かなければ…人類そのものが滅亡してしまう…」
「そうか…そうじゃの…」

その言葉を聞いて、フリークはかつての約束を思い出す。そして、自分ただ一人だけが自由に行動出来ている意味を考える。

「ワシが…やらねばならんな…」

こうしてフリークは黒髪のカラーと共に立ち上がる。強大な魔力を持つルーン打倒の手段を探し歩き、闘将レプリカ・ミスリーと出会う。ルーンを殺し得る、最大の天敵と。

―魔都デトナルーカ―

届く報告にルーンが顔を歪める。蛮族の虐殺は上手くいっているが、その分手薄になった闘神都市が魔人たちによって次々と落とされているのだ。遂にはユプシロンの内部に侵入されたらしい。だが、この際に魔人レキシントンが戦死。この報告には久しぶりに心が躍った。とはいえ、状況は圧倒的に不利。

「どうすればいい…やはり、魔導砲の一斉照射で大地を消すしか…」

その時、部屋の扉が開かれる。振り返れば、そこに立っていたのは見慣れぬ闘将と黒髪のカラー。そして、無二の親友。

「恩師フリーク…」

「約束通り、お主を止めに来た…」

スッと闘将ミスリーがルーンの目の前に立つ。その姿を見てルーンが口元を歪める。

「出来損ないの闘将が…私を殺すつもりか？身の程を知るがいい！」

右手をミスリーに向け、凶悪な魔力を放つ。空間が歪むとさえ思えるその魔力を感じ、黒髪のカラーが目を見開く。

「この魔力…あたし以上だ！？人間がこれ程の魔力を…」

「死ね！出来損ないが！！」

ミスリー目がけて魔法を解き放つ。だが、直後ルーンは目を見開く。ミスリーに直撃した魔力がすぐに四散したのだ。そして見る。そのボディの輝きが、他の闘将とは違うのを。

「ば、馬鹿な！ミスリルの体だと！？魔法を跳ね返す素材で、闘将を作れるはずがない！」

迫ってくるミスリーに次々と魔法を放つが、その体を傷つける事が出来ない。目前まで迫ったミスリーは、ルーンの額に小剣を深々と突き立てる。ザクッ、という肉を断つ音と共に、ルーンの体が崩れ落ちる。薄れていく意識の中、最後に見たのは佇んでいるフリー

ク。金属製の顔からは表情が判らないが、その顔にかつて魔法院で共に研究していた頃の顔が蘇る。それは走馬燈のように流れていき、最後に至ったのはあの日の約束。

「（そうか…私は…いつの間にか道を違えていたか…感謝します。そして、申し訳ありませんでした…恩師フリーク…）」

こうしてM・M・ルーンは死に、歴史上唯一であった人類統一国家も滅亡する。人類はまた、混迷の時代を歩む事になる。親友を殺した事、そして、多くの同胞を裏切った後悔から、一度は自ら命を絶とうとしたフリークだったが、共に戦った黒髪のカラーに止められる。

「再び人類が魔人に挑むとき、貴方にはするべき事があるはずです！」

この言葉を受け、フリークは自分には世界を見続ける義務があると感じ、黒髪のカラー、ハンティと永遠の友情を誓う。ルーンの死によってその活動を止めた闘将たちを全て封印し、その番人となる。魔人に落とされず空中に浮遊したままの闘神都市ユプシロンにはミスリーが番人として残り、こうして長きに渡る魔人戦争は終結した。そして数百年後、フリークはハンティと共にヘルマンの評議委員となる。あの時の約束が、今でも思い出される。

「もし、私が間違った方向に進んでしまったら…恩師フリーク、貴方が私を止めてください。貴方に否定されたのなら、私は自分の死に疑問を抱かなくて済みます」

「（ルーンよ…お主は最後の瞬間…疑問を抱かずに逝けたのか？ワシはこうして生きながらえておる。お主の技術のお陰じゃ。お主が

残した闘将が再び暴走をする事があれば…必ずワシの手で止めてみせるぞ…それが…ワシに出来る償いじゃ）」

それは、遠き日の約束。それからまた長い月日が流れ、ヘルマンではシーラが新たなる女帝として君臨する事になる。それと前後して評議委員のビッチ・ゴルチの提案により、闘神都市ユプシロンの調査が決定。フリークの反対を押し切っての決定であった。今は歴史に埋もれてしまった闘将が、再び表舞台に上がる事になる。そう、教団の遺産が…

第７１話　教団の遺産（後書き）

［人物］

ルーカ・ルーン

ＬＶ　６２／８０　（生前）

技能　魔法ＬＶ３　魔鉄匠ＬＶ１

聖魔教団の創始者。その膨大な魔力からＭ（マジック）・Ｍ（マスター）・ルーンと呼ばれた天才で、歴史上最強の魔法使い。人類圏を完全統一した唯一の存在だが、最後は親友であるフリークの手によってその生涯に幕を閉じる。

［技能］

魔鉄匠

魔法で動く鉄人形を作り出す技能。闘将を作れるのはこの技能を持つ者のみ。

［都市］

バルシン王国

かつて世界最強の軍事力を誇った国家。Ｍ・Ｍ・ルーン率いる魔教団の手によって滅ぼされる。

魔都デトナルーカ

バルシン王国の跡に建設された都市。歴史上で唯一、人類圏完全統一を果たした国家でもあるが、Ｍ・Ｍ・ルーンの死亡と共に滅亡する。

第７２話　気がつけば空の上

ＬＰ０００２　７月
―イラーピュ　建築物内―

リーザスの上空２５００メートルの位置に存在する謎の浮遊大陸、イラーピュ。ここはかつて、闘神都市ユプシロンと呼ばれた都市であった。長い事放置されていた空中都市、今ここに、ヘルマンから数名の調査隊が派遣されていた。

「すごいわ…動きそう…」
「そうか、メリム。急いでやれよ」
「はい、ビッチ様」

メリムと呼ばれたメガネの少女は熱心に壁の装置を調べている。ここは空中都市の中にある建築物の中。この場にいるのは６人。調査を続けるメリムと偉そうに命令を出しているビッチと呼ばれた中年親父、その側には赤髪の剣士と巨漢の男、魔法使い風の女が控えていた。巨漢の男は気絶した女性を担いでいる。

「メリム、まだか！？」
「もう少しです…」
「まったく、愚図が…わたくしとお前たちは、栄光ある大ヘルマン帝国の未来を背負ってここに来ておるのだぞ。この作戦は、わたくしがパメラ皇妃直々に承った名誉ある…」
「（まーた始まったよ…）」
「あっ！判りました、ここを動かせばいいんだわ！私、世紀の探索家ウェルップを越えちゃったかも…えへへ…メリム幸せ…」

「おい、聞いているのか！」

装置の謎が解けた喜びで小躍りするメリム。ビッチが不快そうに怒鳴りつけるが、後ろにいた剣士が口を開く。

「ほら、装置の謎が解けたみたいだぜ」

「おお、そうか！これでリーザスのクソどもに鉄槌を食らわす事の出来る超兵器が手に入るぞ…ケヒャケヒャ！」

一転して上機嫌になったビッチは他の者たちを率いて前進を開始する。闘神都市に眠る、触れてはならぬ教団の遺産を、ヘルマン軍は封印から解こうとしてしまっていた。

―カサドの町　うまうま食堂―

ここは空中都市の中にある町、カサド。この空中都市で生活している人々が存在した。町の中の店は大通りに集中しており、その店も必要最低限のものしかない。奥は民家が連なり、農業も営まれていた。大通りにあるメシ屋、うまうま食堂。ボロい店構えの店で、今は客が一人もいなかった。中では中年女性が暇そうにしている。と、そこに一人の客が入ってきた。

「おや、いらっしゃい！何にする？」

「そうだな…A定食を頼む」

「あいよ！」

食堂の店主である中年女性が料理を作り持ってくる。食事を始める客。その男の顔をよく見ると、見覚えのない顔だ。

「…見ない顔だね？」
「ああ、この町は初めて訪れたからな」
「それは本当かい！？一体どうやって訪れたんだい！？」
「ん、どうした？何かあるのか？」
「何かって…あんた、この町がどこにあるか判っていないのかい？」
「いや、気がついたらこの町の側の草原に飛ばされていたからな」
「何て事だい…」

中年女性が悲痛な面持ちで客を見る。その様子を見て、何かあるのかと客が眉をひそめ尋ねる。

「詳しく聞かせてくれないか。ここはどこだ？…と、その前に名乗りが遅れたな。俺はルーク。冒険者だ」
「ああ…あたしはフロンソワーズ。気軽にフロンちゃんと呼んでおくれ」

バチッ、とウインクをしてくるフロン。内心、年を考えてくれと思うルークだったが、口には出さず話を続ける。

「それで、ここはどこなんだ？何故初めて来たと聞いたとたん驚いた？」
「そりゃあ驚きもするさ。この町は、地上２５００メートルの位置に浮かぶ闘神都市の地表にあるんだからね…」
「なんだと！？」

そう言われてルークは自分がどこに飛ばされたのかを理解する。それは、リーザスの上空に浮かぶ浮遊大陸。

「イラーピュか…光の神め、全然礼になっていないぞ…」

「どうやってこの町に来たかは知らないけど…災難だったねぇ。あんたはもう、ここから抜け出す事は出来ないよ」
「ちっ…やはり地上への脱出手段は…」
「ないよ。あたしたちはここでもう２００年も暮らしているんだ」
「ここに…かつて訪れた者たちがいたのか」
「ああ、あたしたちはダラスの国の探索部隊の子孫なんだよ」
「ダラス…」

聞いた事のない国名にルークが眉をひそめる。その様子を見て、フロンが少しだけ悲しそうな表情をする。

「その様子じゃ…もう滅んじまってるみたいだね」
「おそらくは…」
「そうかい…いつか行ってみたいとは思っていたんだがね…あっと、ごめんよ。話が脱線しちまったね。当時小国だったダラスは、大国のヘルマンやリーザスに対抗するため、最強の兵器が眠るというこの闘神都市の調査に乗り出したんだよ」
「最強の…兵器？」
「まあ、それが何なのかは判らないんだけどね。一説にはこの空中都市そのものが兵器だって噂もあるよ。転移装置を使って８７人の精鋭がこの都市にやってきたんだけど…この闘神都市には強力なモンスターが多く生息していてね。探索隊は次々と殺されていった」
「転移装置で逃げはしなかったのか？」
「撤退を決意した頃には、もうモンスターに破壊されていたみたいだよ。何とか生き延びた者たちでここに町を作ったんだ。それが、このカサドの町さ」

カサドの町の成り立ちを説明し、フロンがため息をつく。

「あたしたちは…もう6世代目だ。未だに脱出の算段すらついちゃ

いない…生きている内に…地上に降りたいもんだねぇ…」

２００年もの間、この空中都市で生活してきた人々。その胸中はどれほどのものか。ルークが一度目を閉じる。これ程の長い期間脱出方法が見つからなかったのだ。地上に降りるのは容易ではないだろう。だが、脳裏に浮かぶのは二つの約束。ホーネットとの約束、かなみと志津香との約束。ならば、このままジッとしている訳にはいかない。

「諦める訳にはいかないな…必ず脱出手段を探してみせる」
「…どうするつもりだい？」
「町の側に五つの塔があったな？あれは？」
「あそこはモンスターが生息していてね…碌に調査されずに放っておかれている建物さ。それに殆どが施錠されていて中に入る事すら出来ない。入れるのは、西の塔だけだよ」

それを聞き、ルークは決意する。どう見ても怪しい五つの塔、あの中に脱出するための手段があるかもしれない。

「なら、その塔の探索をしてみるさ」
「およしよ！無駄死にするようなもんだよ！？」
「死にはしないさ。こう見えても、一応それなりの経験を積んだ冒険者なんでな…」

そのルークの眼差しをフロンは見る。こんな瞳をする若者と、フロンはこの数十年出会っていなかった。目の前の男は何かをしてくれる。そんな気がした。

「その腕…確かめさせて貰ってもいいかい？」
「ん？どうするつもりだ？」

「あたしと…戦っちゃくれないかね？」

フロンがフライパンを両手に持つ。それを見ながら、ルークは静かに口を開く。

「強さを見せるだけなら…あんたと戦う必要は無いな…」

「それは…んっ！？」

瞬間、フロンは動けなくなる。身体中から滝のように汗が流れ、指一本動かせない。ルークから発せられている殺気。ただそれでけで、勝負はついてしまっていた。しばらくして、ルークが殺気を解く。フロンが息を切らせながら、ルークに問いかける。

「い…今のは…」

「殺気を飛ばしただけだ。まだまだ…あの魔王の殺気には遠く及ばんがな。実力に差があればこういう事も出来る」

平然と言ってのけるルーク。それを見て、フロンが豪快に笑い出す。

「気に入ったよ！探索をするなら、ウチを自由に使っておくれ。寝食全部世話するよ。当然無料でね」

「いいのか！？だが何故…」

フロンの申し出にルークが驚く。今日初めて会った得体の知れない男に、そこまで何故世話をしてくれるのか。

「この町の若い者は、全て諦めて生活をしている。弱い男ばかりさ。でもあんたは違う。きっと何かをしてくれるような気がする」

「買い被り過ぎだ…」

「いや、あんたならあたしたちを地上に降ろしてくれる気がするんだ。女の勘は当たるもんさ」

再びバチッ、とウインクをしてくるフロン。だが、ルークが抱いた感情は先程と違っていた。

「あんた…いい女だな」
「おや、こんなおばさんに惚れちゃ駄目だよ。それと…こいつを持って行きな」

フロンがエプロンのポケットから手紙を出し、スッと机の上に置いた。

「こいつは？」
「紹介状さ。そいつを持って青年団事務所に行きな。色々情報を聞かせてくれるはずだよ。頼りにならない奴らだけど、ちょっとくらいなら役に立つ情報も持っているかもしれないしね」
「…スマン、感謝する」
「なーに、お礼はあたしたちを地上に降ろしてくれりゃ、それでいいよ」

二カッと笑うフロン。それにルークも笑顔で返す。

「ああ、必ず全員で地上に降りるぞ」

そう言い残し、食堂を出るルーク。すると、突然一人の少女に声をかけられる。

「あ…あの…」
「ん？」

「今のお話を聞かせていただきました…あたし、この町の住人のマイといいます。ルークさんは…お強いんですか？」
「…まあ、それなりにはな」
その言葉を聞いた瞬間、マイの目に涙が浮かぶ。
「…どうした？」
「あたしを…あたしを助けてください！あたし、生け贄にされるんです！」
「生け贄…モンスターのか？」
「…悪魔です。１００年ほど前から住み着いた悪魔が、３年に一度、町の女を一人寄越せと要求してくるのです。そして…今年はあたしが…もう一週間しかないんです…」
「抵抗は出来ないのか？青年団が組織されているんだろう？」
「かつて一度だけ、抵抗した事があります。ですが、その時は無数のモンスターが町を襲って、たくさんの人たちが殺されたそうです…それ以降、抵抗は諦めて生け贄を一人差し出しているんです…」
「……」
「死にたくない…まだあたし…恋もしていないのに…」
泣きじゃくるマイの頭に、そっと手を乗せるルーク。その熱が、マイに伝わっていく。
「探索の前にやる事が出来たな…」

―カサドの町　青年団事務所―

ここは町の青年団事務所。数名の団員が暇そうに椅子に座ってい

る。壁に立てかけられた剣には埃が被っており、長い事使われていないのが窺われる。団員の一人がふぁ、と欠伸をしたと同時に、事務所の扉が開き、一人の冒険者が入ってくる。

「おや、貴方は？ああ、地上からやってきたという冒険者の方ですか…ルークさんでしたっけ？」
「ほう、もう情報が届いているのか？」
「狭い町ですからね。私は青年団団長のキセダ・エスピラといいます」

やせ細り、とても剣など握れそうにない男が頭を下げてくる。これが団長だというのか。側にいた太りきった男が続けて口を開く。

「おいらはカネオでごんす。せっかく地上から来たというから、脱出方法を知っているのかと期待していたのに、とんだぬか喜びだったでごんす」
「…そいつは悪かったな」

ぷんすかと文句を言ってくるカネオ。他の青年団は遠巻きにルークを見ているだけで話しかけて来ようともしない。覇気が無さ過ぎる。フロンが嘆きたくなる気持ちも判ろうというもの。ルークは手紙を取り出し、キセダに渡す。

「フロンから紹介状を預かっていてな」
「えっ！フロンおば様が…」

驚いた様子でキセダは手紙を熱心に読む。カネオも横から覗き込み、しばらくすると目を見開いてルークを見る。

「ルークさん、フロンおば様に勝ったのですか？」

「信じられないでごんす！フロンおば様は、この町で最強の人でごんす！」
「食堂のおばさんに…誰も勝てないというのか…」

カネオの発言にルークは呆気にとられる。まさかここまで情けない有様だとは思っていなかったからだ。遠巻きに見ていた他の青年団も一気に尊敬の眼差しを向けてくる。そんな中、キセダがルークに提案してくる。

「ルークさん、青年団団長をやってくれませんか。それ程強い貴方になら、安心して任せられます」
「…それは一度置いておくとしよう。聞きたい事がある。先程マイという少女と会ったのだが、生け贄にされそうになっている少女を放っておくのか？」
「ああ、マイに会われたんですね。往生際の悪い娘だ…」
「マイちゃん、諦めが悪いでごんす」
「…なんだと？」

少女が生け贄に出されるのが、さも当然であるかのように話し出す二人。

「おかゆ様には誰も勝てないですから…可哀想ですが、尊い犠牲です」
「マイちゃん、サヨナラでごんす」

瞬間、ルークは目の前にあった青年団の机に剣を叩き降ろし、粉砕していた。木の屑が宙を舞い、キセダとカネオが腰を抜かす。

「な…何を…」
「腐っているな…フロンが嘆く気持ちも判る…その悪魔はどこにい

る？」
「教会にある地下通路を通った先ですが…どうするつもりで…」
「退治してくる」
「む、無茶言わないでください！下手に反抗すれば、町の人に多大な犠牲が…」
「人殺しでごんす！」
「…負けなければ問題ないだろう？」
「無理です！素直に生け贄を出していれば、丸く収まるんです」
「ふざけるな！少女を生け贄に出す事が、貴様らの言う丸く収まる方法か！？」

ルークの恫喝に、ヒッと悲鳴を上げる青年団たち。冷ややかな視線を送り、事務所を後にしようとするルーク。その背中を見て、キセダが小さく呟く。

「判っていない…貴方は、悪魔という存在の恐ろしさをまるで判っていない…」
「…来い、フェリス！」

ルークがそう言うと、突如青年団の目の前に空間を越えて悪魔が現れる。

「なっ…」
「悪魔なら知っている。頼りになる仲間だ」
「貴方はいったい…」

キセダの言葉に答えず、ルークはフェリスと共に事務所を出て行く。残されたのは、呆然とする青年団団員だけであった。

「悪かったな、特に用事もないのに呼び出して…」

「……」

事務所から出て、外でフェリスに話しかけるルーク。何故かフェリスは呼び出された直後から無言であった。ここでルークはある事を思い出す。フェリスはジル戦で大怪我を負っていたのではないか、と。それなら呼び出してしまったのは非情に不味い。が、フェリスの体には傷一つ無い。

「フェリス…お前、ジルに受けた傷は…」

「馬鹿野郎っ!!」

瞬間、ルークはフェリスに平手打ちを受ける。呆然とフェリスの顔を見るルーク。フェリスの瞳には、涙が溜まっていた。

「何ヶ月も人の事呼び出さないで…勝手に行方不明になって…カスタムの人間たちやリーザスの人間たちがどれだけ心配していると思っているんだ!?」

「…は?」

「は?じゃない!少しは反省しろ!」

「ちょっと待った。…今は、何月だ?」

「…何言ってるんだ?も、もしかして、行方不明の間に頭でも打ったのか?」

ペタペタと心配そうにルークの顔を触ってくるフェリス。

「いや…ジルとの戦いから一日も経ってないと思っているんだが…今は4月じゃないのか?」

「はぁ?今は7月だ。ルーク、あんたがいなくなってから、もう三ヶ月が過ぎているんだぞ!」

「な…なにぃぃぃぃ!!」

珍しくルークの大声が周囲に響く。フェリスも驚いたようで、ルークを再度心配そうに見つめる。

「お、おい…本当に大丈夫か？」

「どういう事だ…考えられるとすれば…」

そう、考えられるとすれば、時空の狭間での時間概念が狂っていたという事。数時間のつもりであった出来事が、実は外の世界では三ヶ月にも及ぶ時間であったという事だ。想定外の事態にルークが珍しく混乱し、意味不明な事を口走る。

「あの空間に長くいれば…もうおじさんと呼ばれなくて済むのか…？」

「何訳の判らない事口走ってるんだ！」

フェリスに頭をスパーン、と叩かれる。少し冷静さを取り戻したルークが思い浮かんだのが、あの時の約束。かなみと志津香に言った、あの言葉。

「あれだけ自信満々に必ず帰ると言っておいて…俺は三ヶ月も音信不通だったのか…」

「本当に一日も経っていないつもりだったのか…？」

「これは…足を踏まれるどころでは済まんな…」

ルークの額に冷たい汗が流れる。脳裏に浮かぶのは、志津香が満面の笑みで白色破壊光線を放とうとしている絵面だった。すぐにでも帰らなければ、命に関わる。

「フェリス…ここは空中都市なんだが、俺を抱えて地上に降りる事

は可能か？」
「…因みに高さはどれくらいだ？」
「２５００メートル」
「落ちるからな！二人で仲良く地上までダイブするからな！！」

やんや、やんやと騒ぎ出すルークとフェリス。その様子をキセダとカネオは事務所の窓から覗いていた。

「…なんか格好良く出て行ったと思ったら、悪魔と漫才しているでごんすよ？」
「本当に頼りにして良いのでしょうか…」

一方その頃、時をほぼ同じくして地上では大きな動きがあった。

―リーザス城　王女の間―

「…見えました！」
「やったー、マリス偉い！」
「…こちらもヒットよ！」
「本当、真知子さん！？」

水晶玉に魔力を込め、ランスたちの足取りを追っていたマリス。コンピュータでルークのその足取りを追っていた真知子。同時にその足取りが掴める。リアとかなみが二人に駆け寄る。真知子のは画面上で黄色い点が点滅しているだけだったが、マリスの水晶玉にははっきりとランスの姿が映っていた。

「きゃっ！やっぱりダーリン格好いい！」

「リア様、お静かに…場所は…」
「…ルークさん、貴方は今どこに…」

水晶玉が光り、空飛ぶ大陸が浮かび上がる。コンピュータの画面が変わり、リーザスと同じ座標を示す。その横には、２５００という数値。

「「イラーピュ…」」
「どこそれ？」
「ルークさんもランスも…同じ場所に…」
「そのようね。二人…いえ、多分シィルちゃんも一緒ね。三人は、リーザス上空に浮かぶ空中都市イラーピュにいるわ」

真知子の言葉にかなみが息を呑む。遂に…遂に見つけた。そしてこの報告は、すぐにみんなに知らされる事となる。

―リーザス城　中庭―

リーザス城の中庭には、現在マリアの臨時工場が建てられていた。飛行艇チューリップ４号の開発を行っているのだ。それも、二台だ。どのような場所にいても救出作戦には役に立つというマリアの進言をリアが聞き入れ、また、大粛正により余った資金を大量に投入し、当初の予定では一台の予定だったチューリップ４号は、何と二台目が完成していた。

「どう、調子は？」
「絶好調！テスト飛行も済んだし、いつでも発進できる状態よ」
「マリアさん、２号機の右翼のバランスが…」

「んー…ああ、ここの調整がおかしいわよ、香澄」

小型とはいえ飛行艇二台の開発を行うにはカスタムは手狭であったため、こうしてリーザスの中庭を借りているのだ。志津香が飛行艇をジロジロと見る。

「ふーん…本当に飛ぶの、これ？」
「あーっ！信じてないわね。もっ、完璧よ！科学はいずれ魔法を越えるんだから」
「はいはい、判りました」

志津香とマリアが楽しそうに話をしている。そこに、かなみが大急ぎで駆けてきた。

「志津香、マリアさん！三人の居場所が判ったんです！」
「「！？」」
「三人は…イラーピュにいます」
「イラーピュ…」
「また厄介なところに…」
「でも、チューリップ４号を開発していて大正解ね！これならイラーピュまでだって行けるわ！」

かなみの報告を受け、空を見上げる志津香とマリア。香澄も釣られるように空を見上げる。

「かなみ、みんなへの報告は？」
「早うしを飛ばして報告をしています。明日には自由都市にいる皆さんも集まるかと」
「となると…遂に勝負の時が来るのね…はぁ…」

そう、チューリップ4号に乗れる人数には限度がある。それに対し、救出部隊への志願者が多すぎるのだ。必然、数を絞らなければならない。

「マリアさん、何人乗れるの？」
「どっちも8人よ。でも3人を乗せて帰らなきゃ行けないから、1号機が6人、2号機が7人ね」
「結構多いわね…」
「そうでもないわよ。志願者本当に多いし。自由都市連合から5人、リーザスから6人が派遣される事になるわ」
「あれ、マリアさん。人数が合わないんですけど…」
「ああ、操縦士は省いたの。1号機は私が操縦するから、私はメンバー入り確定ね。それと、操縦士特権で志津香は絶対についてきて貰うから安心してね」
「…何が安心なのか判らないけどね」
「またまたー。いふぁ！いふぁいよ！」
「（志津香、羨ましい…）」

マリアの頬をつねる志津香を見ながら、かなみは内心思う。パチン、と頬を離され、真っ赤になった頬を涙目で擦るマリア。

「という訳で、自由都市の空き枠は4人ね」
「志願者は？」
「ラン、ミリ、ミル、トマト、真知子さん…ロゼとセルさんも志願していたわね。それとアレキサンダーさんと…ルイスさんも」
「…多いわね。そして何故ルイスさん…」
「リーザスは各将軍が志願していますが、実際には親衛隊と一つの色の軍から選ばれる事になると思います。あまり多くの色の軍がリーザスから離れると危険なので…」
「でもかなみはどの色になっても参戦出来そうね。色とは関係ない

ものね」
「…確定ではありませんが、リア様からも行ってきてくれと直接言われているので、おそらくは…」
その返事を聞いて、志津香とマリアが笑顔でかなみを見る。
「頼りにしてるわよ、かなみ」
「また一緒に頑張りましょう」
「はい、こちらこそ、よろしくお願いします」
笑いあう三人。側では香澄が飛行艇の最終チェックに奔走していた。ここで、志津香の頭に一つの疑問が浮かぶ。
「…あれ、2号機の操縦士は？」
「ああ、香澄よ」
ぶっ、と吹き出して奔走していた香澄が盛大に転ぶ。ずり落ちたメガネを直しながら、砂まみれの顔でマリアを見上げる。
「き、き、聞いていませんよ、マリアさん！」
「何言ってるのよ、私以外で操縦できるのは香澄しかいないでしょ。頼りにしてるわよ、香澄！」
「ひぇぇ…」
香澄、参戦決定。
ーゼス　王者の塔ー

四天王千鶴子が管理する王者の塔。今千鶴子が職務をしている目の前に、サイアスが立っていた。話があると言ってやってきたので。その口から語られたのは、浮遊都市イラーピュを探索するべきだという提案。かつての強力な魔法使いが残した遺産は、必ず無駄にはならない。並び立てられるメリット。イラーピュに彼がいると判ったのは今朝だというのに、よくもまあこの短時間でこれだけのメリットを考えたものだと千鶴子は感心する。

「という訳で、千鶴子様。先日発掘されたあの9人乗りの飛行艇で、今すぐ調査をするべきです。調査には発案者である私も向かわせて貰います」

「そこに…貴方の親友がいるからかしら？」

「っ！？」

「上手く隠していたつもりかもしれないけど…情報は私の専売特許よ。悪いけど、四将軍を送るだけのメリットを感じられないわ」

冷たく言い放つ千鶴子。一度歯噛みしたサイアスだが、千鶴子に進言する。

「ルークは…あの男はアトラスハニー事件の際にゼスに多大な協力をしてくれました。それに、アニスの不始末をもみ消したのも黙っています」

「…まあ、世話はあるわね」

「ならば、それをここで返さずしてどこで返すと言うんですか。ゼスが大国であるならば、ここはイラーピュの調査に乗り出すべきです。魔法使いでもない一人の冒険者の救助という体裁が悪いのであれば、先程申しましたように調査という名目で…」

「…下がりなさい、サイアス」

「千鶴子様…」

サイアスから視線を外し、手元の内線で部下のマクシミリアンに連絡を取る。もうこの話は終わりだとでも言うのか。サイアスが口を開こうとするが、千鶴子が先にマクシミリアンに指示を出す。

「マクシミリアン？ええ、この間発掘された飛行艇。こっちに運んでおいて。ええ…イラーピュの調査に使うから…」

「！？」

カチャリ、と内線を切る千鶴子。呆然としているサイアスを見て、静かに笑いながら口を開く。

「貴方が参加出来るかは…微妙な線よ。一応進言はしてみるけどね。それと、突然の事だからあまり人員は割けないわ。前衛の傭兵なんかは自分で集めてちょうだい」

「千鶴子様…感謝します！」

深く礼をして千鶴子の部屋を後にするサイアス。その背中を見送りながら、ため息をつく千鶴子。親友の為に、あそこまで動けるのか。炎の将軍でありながら、冷静沈着な男だとは思っていたが、やはり熱いところもあるのだなとサイアスの評価を改める。そして同時に、自分の親友パパイアの事が頭を過ぎる。私は、パパイアに何をしてあげられているのだろうか、と。内線に手を伸ばし、ガンジー王に許可の連絡を入れる。恩人のためとはいえ四将軍を動かすのに賛同して貰えるだろうか。無理は承知で、サポートとしてもう一人くらい四将軍クラスをつけて上げられるよう進言してみようか。そんな事を思いながら、千鶴子はガンジーに連絡を取った。

「四人だ」

「は？」

「四天王、将軍クラスから四人連れて行くのだ。恩義に報いるのは

国として当然の事。はっはっは！」

千鶴子の胃が急激に痛み出した。

―魔人界　魔王の城―

「イラーピュ？どうしてまた…？」

「ホーネット様はまだ生まれる前でしたからあまりご存じないのも無理はありませんが、かつて我ら魔人をも追い詰めたその技術は正に至高の域。無視出来るものではありません！」

アイゼルが声高らかにホーネットに進言する。突如、イラーピュの調査に乗り出すべきと言い出したのだ。シルキィはケイブリス派との小競り合いに出てしまっており、この場にはいなかった。あまりにも唐突な発言であったため、サテラとハウゼルは困惑する。ただ一人、メガラスだけが無言でアイゼルの言葉を聞いていた。

「…一日考えさせてください。今はケイブリス派との戦争中、シルキィとも話し合いたいので…」

「お願いします！」

そう言って、アイゼルが部屋から出て行く。それを不思議そうに見送るサテラとハウゼル。このとき、いつの間にかメガラスが部屋から消えている事に、まだ誰も気づけずにいた。部屋から出て、一人廊下を歩くアイゼル。角を曲がると、目の前にメガラスが立っていた。

「メガラス！いつの間に…」

「……」
「…何か用か？」
「ホーネット様を…笑わせた男か？」
「っ！？」

メガラスの言葉にアイゼルが目を見開く。ばれているはずがない。細心の注意を払って調査をした。だが、ここに至っては隠しようがない。汗を流しながら、アイゼルは口を開く。

「…どうすれば見逃して貰える」
「……」

その問いにメガラスは首を横に振る。ゴクリ、と唾を飲み込むアイゼル。

「見逃しては貰えぬか…」
「…違う」
「…違う、とは？」

予想していなかったメガラスの返答に、アイゼルが聞き返す。

「お前が魔人戦争に参加したのは…末期だったな…」
「…ああ、一年かそこらだ」

アイゼルが魔人として生まれたのはちょうど魔人戦争の時期。その為、戦争には最後の一年そこらしか参加していないのだ。その言葉を聞いたメガラスから放たれた言葉は、魔人戦争を初期から参加していた古参の魔人だからこそ出る言葉だった。

「闘神都市を…甘く見るな。死ぬぞ…」

「……」
「それと…」
メガラスが視線を横に向ける。それは、イラーピュの浮かぶ方角。
「その男…興味がある」

第７２話　気がつけば空の上（後書き）

［人物］

フェリス　（４）

ＬＶ　－／－

技能　悪魔ＬＶ１

　ルークとランスの二人と契約を結んだ悪魔。ジル戦で受けた傷は完治したが、上司や同僚の悪魔からは無能と蔑まれている。ダ・ゲイルを通じて定期的にロゼとは情報交換をしている。

フロンソワーズ

　カサドの町の『うまうま食堂』の女主人。意外に腕も立ち、カサドの町最強だったりする。

キセダ・エスピラ

　カサドの町青年団団長。見るからにひ弱そうな男で、モンスターに完全に怯えている。

カネオ

　カサドの町青年団団員。丸々太った体型で、剣など握った事もない。

［都市］

カサドの町

　闘神都市ユプシロン内にあるのどかな田舎町。何もないところから作り上げたため、かつては藁や木の家が建ち並んでいた。

ダラス王国

かつて存在した小国家。モエモエ王国とほぼ時を同じくして、ゼスに吸収合併され歴史上からその名前を消す。

第７３話　悪魔の誇り

―カサドの町　教会―

教会にあるという地下通路を通って悪魔を倒すため、ルークは教会を訪れた。入ってみれば、１０人も入れば一杯になってしまいそうな狭い教会。奥には神官の少女が一人祈りを捧げているところだった。ルークが入ってきた事に気がつき、神官が振り返る。

「…貴方が噂の異邦人の方ですね？」
「本当に噂が広まるのが早いんだな。俺はルーク、冒険者だ」
「ご丁寧にどうも。私はヨウナシ様に仕える神官のシンシアといいます」
「ヨウナシ様…？」
「こちらです」

シンシアが側にあった彫像に手を置く。楕円の形状におかしな顔をした彫像である。

「水菓子の神様であるヨウナシ様は偉大な神様です。ルークさんも入信されてはいかがですか？」
「悪いな、また別の機会にしておく。それよりも聞きたい事があるんだが…」
「聞きたい事？」
「地下通路へ案内してくれないか？」

その言葉を聞いた瞬間、シンシアが驚愕の表情を浮かべる。

「い、いけません！あそこは凶悪な悪魔が…」
「大丈夫。それを退治しにいくんだ。案内してくれないか」
「ですが…」

渋るシンシア。ルークの事を必死に止めようとしてくるが、何度も頼み込んだところ遂に折れてくれ、教会の祭壇近くの石床を一枚動かす。すると、地下への階段が出てきた。

「…悪魔だけではなく、モンスターも大量に出ます。ルークさん…やはり止めた方がいいのでは…」
「生け贄に捧げられるのを…君は黙って見ているのが正しいと思うのか？」
「それは…」

ルークのその問いかけに、悲しげな表情を浮かべるシンシア。

「…意地悪な質問だったかもしれんな。大丈夫、必ず悪魔は退治してくるさ」
「ルークさんに、ヨウナシ様の加護があらん事を…」
「水菓子の神の加護か…」

シンシアに見送られ、ルークは教会の階段を下りていく。ルークはまだ知らなかったが、この地下通路は町の周りに立つ五つの塔の一つ、南の塔の地下に続いていた。

―南の塔　地下一階―

「来い、フェリス」

モンスターをある程度倒しながら通路を歩いていたルークだが、モンスターの気配が更に濃くなったところでフェリスを呼び出す。悪魔界から呼び出されるフェリス。

「ん？どうした？まさか、また地上まで運べとか言うんじゃ…」
「いや、モンスターの気配が濃くなってきたんでな、戦闘を手伝って貰おうと思ってな…ふっ！」

フェリスと話している最中、二体の仏火が襲いかかってきた。が、瞬時にルークに両断され、消滅する。その様子を見て、フェリスが呆れた様子になる。

「手伝いねぇ…いるのか？」
「どうもこの奥に悪魔がいるみたいなんだ。階級にもよるが、厄介な敵の可能性もあるからな」
「おい、同士討ちさせるつもりか！？」
「まさか。無理に戦わなくていいさ。周りにモンスターがいたらそちらと戦っていてくれ」
「…あ、ああ。それならいいんだ」

ルークはフェリスと共に通路を進んでいく。すると、曲がり角に立て看板が置かれていた。ルークとフェリスがそれに目を通す。

「なになに、偉大なる悪魔、おかゆフィーバー様の御殿は北の方角にあるから、生け贄の女の子を連れて来い…おかゆフィーバー？」
「悪魔…ねぇ…」

おかゆフィーバー。それなりに強いモンスターだが、断じて悪魔などではない。フェリスの視線が一気に冷酷なものになる。

「…空中の都市だから、あまり知られていないと踏んで悪魔を語っているんだろうな」
「ふっ…ふふふ…悪魔を語るモンスターか…」
「…これは出番がなさそうだな」

心の中でおかゆフィーバーに黙祷を捧げるルーク。フェリスは未だ冷たい笑みを浮かべていた。

ー上部動力室ー

ルークが探索を続けている頃、ヘルマン調査隊は巨大な柱が奉られている部屋に来ていた。柱を見上げながら、ビッチが口を開く。

「メリム、この柱はなんだ!?」
「これは闘神都市が動くのに必要な魔力を蓄える魔気柱ですね。現在は魔力が入っていない状態のようですが…」
「うむ、その通り。当然わたくしも知っていたぞ。これを動かせば、闘神都市はわたくしのもの。ケヒャケヒャ!」
「（嘘をつけ、嘘を…）」
「（あんたのものじゃなくて、ヘルマンのものでしょうに…）」

後ろに控えていた赤髪の戦士と女魔法使いがそれぞれ内心で悪態をつく。調査隊リーダー、ビッチ・ゴルチ。人望は全くと言っていいほど無い人物であった。続けてこの部屋の近くにあった部屋に入る。そこには、巨大な水晶球が置かれていた。

「ほう、これが闘神都市の制御装置か。ヒューバート、デンズ。お

前たちのような無能な戦士では、到底理解の及ばぬ世界じゃな、ケヒャケヒャ！」
「……」
「あの…ビッチ様…」
「ん？何だねメリム」

後ろの部下を馬鹿にして愉悦に浸るビッチ。そのビッチに、メリムが言いにくそうにしながら口を開く。

「この水晶球は魔力注入装置で…制御装置ではないのですが…」
「へっ？」
「くっ…くくく…はっはっは！貴様らしい早とちりだな、ビッチ」

それを聞いて、後ろに控えていたヒューバートが笑い出す。顔を赤くしてヒューバートに言い寄ろうとしたビッチだったが、二人の間に巨漢の男、デンズが割って入る。その巨体から見下ろしてくるデンズを見て、ビッチは何も言えなくなる。そのまま水晶球の前まで歩いて行き、抱えていた少女を指し示しながらメリムに問いかける。

「こ、この女、ここに置けば…い、いいんだよな？」
「あっ…ええそうよ。デンズさん、その子をここに設置して」
「ふーん。この女の子をエネルギー源とする訳ね」
「はい、イオさん。可哀想ですけど…でも、全てが終われば解放して精一杯謝罪すれば…」
「えぇい、早くしたまえ！無駄話は私が許さん！」

女魔法使い、イオが興味深そうに水晶球を見る。メリムが悲しい表情を浮かべるが、ヒューバートへの怒りのやり場を失ったビッチが怒鳴りつける。少女にもう一度視線を送ったメリムだったが、静

かに口を開く。

「デンズさん…お願いします」
「こ、ここだな。うん」
「手伝うよ、ここにくくりつければいいんだね？」

水晶球にイオが少女をくくりつけ、メリムが側にあった装置を操作する。メリムの指示に従ってイオとデンズが手伝いをし、最後にメリムがボタンを押す。すると、少女が水晶球の中に吸い込まれていった。

「出来たのか？」
「はい。あぁ…お母様、お姉ちゃん、メリムは感激です。ここに今、超古代の魔法遺産が…」
「トリップしとらんで、どう操作すればいいか教えろ！」
「あ、はい！こちらになります」

ビッチに促されたメリムは部屋を出て行き、また別の部屋に入る。その中には先程までとはまた別の装置が置かれていた。メリムが装置の動かし方を説明すると、ビッチがみるみる上機嫌になっていく。

「ほう…これでこの闘神都市を動かせるのだな。ケヒャケヒャ！動け、闘神都市！リーザスのクソ共を根絶やしにしろ！」

高らかに宣言して制御装置を動かす。が、闘神都市が動いた様子はない。

「ん、あれ？メリム！一体どうなっている！？」

ビッチがメリムを怒鳴りつける。メリムも不思議そうにしながら、

装置と繋がっている奥の壁を調べる。

「…ロックされているわ。ビッチ様、この扉がロックされている限り、闘神都市の重要な部分の動作は、全て停止した状態になっています。簡単な指示が精一杯ですね」

「なんだと!?この無能が!」

ビッチが拳を振り上げる。メリムが怯えた表情でビッチを見るが、二人の間にヒューバートが割ってはいる。

「その辺にしておけ」

「なんだ、上官のわたくしに逆らうつもりか?軍法会議で死刑にしてやってもいいんだぞ?英雄の息子だからといって、罰を免れる事は出来んのだぞ!」

「ふん…メリム、こんな奴の言う事を気にする必要はない」

「ヒューバート!貴様!」

睨み合うビッチとヒューバート。メリムはヒューバートの背後でおろおろとしている。一触即発。が、イオがこの空気を破る。

「ロック…って事は、外す方法もあるんじゃないの?」

「…調べてみます」

装置を再び操作するメリム。先程までの怯えた表情から、いつのまにか真剣なものへと変わっていた。生粋の考古学者である。

「…判りました。このロックシステムは、四つの制御キーがあれば外す事が出来ます」

「キーの場所は判るのか?」

「はい!」

メリムが床に地図を広げ、全員がそれを覗き込む。

「闘将コア、防空コア、研究コア、食料コア。この四カ所にそれぞれ一つずつキーが設置されています」

「…面倒な。くそっ！ヘルマンの評議委員であるわたくしが、何故そのような手間のかかる事を…」

「なら帰るか、リーダーさんよ？」

「ヒューバート！貴様は黙っていろ！！」

「（あーあ、せっかく空気を変えてやったっていうのに…気持ちは判るけど、適当にあしらわないと面倒になるだけだっていうのにね…）」

再び睨み合うビッチとヒューバートを見ながらため息をつくイオ。メリムとデンズが二人の様子を心配そうに見守る。ヘルマン調査隊、その内情は一触即発というものであった。

―南の塔　地下一階―

地下一階北東にある部屋。ここでおかゆフィーバーは恋人のまじしゃんとイチャイチャいていた。生け贄が捧げられるまで後一週間を切った。今度の少女はどのような娘だろうと期待に胸躍らせていた。すると、突然部屋の扉が開かれる。

「うぽ？なんでうぽ？」

「なぁに…この人間たち？」

「おぉ、今年の生け贄はその緑髪の娘うぽね。さあ、こちらに渡すうぽ！」

扉を開けたのはルーク。隣に立っているフェリスを人間だと勘違いしている二体のモンスター。その事が、更にフェリスの怒りを買う。青筋を浮かべているフェリスを横目で見ながら、ルークが剣先を向ける。

「生け贄が届けられる事はもう無い。退治させて貰うぞ」
「いやだうぽ。悪魔である私の力を知らないうぽね！」
「ふふ、悪魔である私の彼に挑もうなんて、愚かな人間たちね。悪魔の力、たっぷり見せてあげるわ！」
「だとさ、フェリス。どうする？」
「殺すわ！」
「了解」

フェリスが鎌を手に取る。その二人の様子を見ながら、まじしゃんが魔法を唱える。

「火爆破！」

ルークは瞬時に避け、一気におかゆフィーバーとの間合いを詰めるが、その魔法にフェリスが直撃する。が、ルークは気にした様子もなく、おかゆフィーバーの目の前まで迫る。

「うぽ！？おかゆパンチ！」
「遅い！」

振り下ろしてきた拳を両断する。緑色の血飛沫を上げながら、おかゆフィーバーの四本ある内の一本の腕が宙を舞う。

「う…うぽーーーーっ！！」

「ダーリン！仲間の心配もしないなんて…でも、今度はあんたを火達磨に…」
「相手をよく見た方がいいぞ」
「えっ…？」

ルークの言葉にまじしゃんが火爆破を放った方向を見る。煙が立ちこめる中、すたすたとフェリスが平然と歩いてきていた。その体、無傷。目を見開くまじしゃん。

「う…嘘でしょ…火爆破！」
「おかゆ砲うぽ！」

二体のモンスターがフェリスに向かって技を放つ。瞬間、フェリスが空中に飛び上がりその攻撃を躱す。羽を動かして宙を飛び、おかゆフィーバーの肩に乗って首に鎌を突き立てる。

「う…うぽ…」
「死ね」

フェリスがそう言うと同時に、おかゆフィーバーの首が胴体から離れ、大量の血飛沫が噴き上がる。

「いやぁぁぁ！ダーリン！！…えっ！？」

絶叫するまじしゃんだったが、肩口に乗るフェリスを見て硬直する。背中から生えた羽、手に持つのは鎌、よく見れば頭から角が生えている。緑色の返り血を顔に受けながら、フェリスがまじしゃんを見下ろす。まさか、この女は人間じゃなく…

「悪魔の力を見せてあげるって言ってたわね？」

「ひ…ひ…」
「そんなに見たいなら…たっぷりと見せてあげましょうか!?」

目を見開いてまじしゃんに殺気を向けるフェリス。まじしゃんの表情がみるみる青ざめていき、体ががくがくと震え、遂には失禁し始める。

「い…命だけは助けてぇぇぇぇ!別のおかゆフィーバーとの新たな恋に生きますからぁぁぁぁ!!」

絶叫しながら逃げていくまじしゃん。それを見送りながら、ルークがため息をつく。

「流石…と言ったところか?」
「ふん、悪魔を侮辱するからだ」
「頼もしいことで…ほら」

ルークが道具袋に入れていた清潔なタオルをフェリスに投げる。

「そんな血まみれじゃ、せっかくの美人が台無しだ」
「…ふん」

タオルを受け取ってごしごしと顔についた血を拭うフェリス。ルークがおかゆフィーバーのいた奥を見ると、そこには牢屋があり、一人の女性が捕らえられていた。駆け寄ってみると、女性の方から話しかけてくる。

「助けに来てくれたんですか!?嬉しい!私、パープル・ソウルと言います」
「君は?今年の生け贄は、マイちゃんじゃなかったのか?」

「私は三年前の生け贄なんです」
「三年間もこんな所に…ふっ！」

ルークが牢の扉を壊してパープルを外に出してやる。泣いて喜んでいるパープルに、ルークは道具袋から薬を取り出して渡す。

「こちらは？」
「フィーバー下しという薬だ。長くおかゆフィーバーといると、おかゆ毒という病に感染する恐れがある。飲んでおいた方がいい。一応フェリスも飲んでおくか？」
「そんな毒、悪魔の私には効かないから必要ないよ。それより、あんたより前の生け贄の娘はどうしたんだい？」

タオルで血を拭い終わったフェリスがこちらに歩みを進めながら、パープルに問いかける。

「私も詳しくは知らないのですが…攫われた娘は次の生け贄が来ると同時に、アトランタという魔女に引き渡していたようです。おかゆフィーバーが何度かそういった事を話しているのを聞いた事があります」
「…魔女アトランタか」
「どうやら、おかゆフィーバーに命令を出していた親玉がいるみたいだね」
「そのようだな…だが、ひとまずはこれで任務完了だ。町に戻ろう」

長い事牢に閉じ込められていた為、衰弱していたパープルを抱きかかえ、ルークが来た道を戻る。その後ろをフェリスがついて歩きながら、タオルを手に持って何やら悩んでいる様子だった。

「ん？どうした？」

「いや…洗って返した方がいいのか、おかゆフィーバーの血がついたタオルなんか捨てた方がいいのか…どうするべきかと思って…」
「ふっ…そのまま返すという選択肢がないのが律儀だな。悪魔なのに」
「べ、別にいいだろ！」
顔を赤くしながらフェリスが文句を言ってくる。ルークはそれを笑いながら聞き、町へと戻っていった。

ー司令室ー

「あれ…ビッチ様、侵入者がいるみたいです？」
「なに？」
メリムが装置をカチャカチャと操作する。すると、目の前にある鏡のような板にルークとフェリスの姿が映し出される。丁度フェリスがルークの後ろに隠れ、悪魔というのが判りにくい映像であった。
「ふむ…冒険者のようですね。わたくしたちと比べたらレベルの低そうな連中だ」
「…そうか？あの男、かなり出来そうだぞ。少なくとも、お前よりはな…」
「何だと、ヒューバート！」
「あぁ？やる気か？」
ヒューバートがビッチを睨み付ける。先程までとは違い、若干の殺気が含まれているそれに、ビッチが一歩下がる。

「くっ…必ず軍法会議にかけてやる。貴様はヘルマンの恥だ。思えば貴様の親父もいけ好かない奴だった。気品の欠片もない蛮人で…」
「あらっ？奴ら５０人に増えたわよ。大軍団になって…あぁ、もうこの部屋の前に迫っているわ！」
「なななな、なんだと！早く逃げるぞ！」
「嘘ですよ、ビッチ隊長。お茶目な嘘」
「取り乱しすぎだ。その醜態ぶりがお前らしいがな」

イオの嘘に慌てふためくビッチを見て、ヒューバートが笑う。馬鹿にされた事に気がつき、苦虫を噛みつぶしたような顔になるビッチ。が、デンズが不思議そうにイオを見る。

「（め、珍しいんだな。イオが直接ビッチを馬鹿にす、するなんて）」
「ちっ…今は冒険者なんかどうでもいい。四つのキーを集める事が先決だ。だがどうすれば…おおっ、名案が浮かんだぞ！イオ！」
「はい？」

ビッチが映し出されたルークを指さして指示を出す。

「この冒険者と合流しろ。お前の催眠術でこの男を操り、四つのキーを集めるのだ」
「また、姑息な手段を…」
「私の呪文は、あまりレベル差があると効きませんが？」
「お前の今のレベルは？」
「１０です」
「十分だろう！どうせこんな冒険者、レベルが一桁台に決まっている！さあ、行け！」

こうしてイオは単身ルークたちの下へと向かう。相手のレベルが

５６という事も知らずに。

―カサドの町　教会―

「あっ、ルークさん！ご無事だったんですね」
「その方は…パープルさんですか！？」
「ああ、悪魔はもういない。これで君は自由の身だ」
「本当に勝つだなんて…」

フェリスを一度悪魔界に戻し、ルークが教会まで戻ってみれば、そこにはシンシアだけでなく、マイやキセダも集まっていた。マイが生け贄から解放された事に泣いて喜び、シンシアはパープルに話しかけている。ルークはキセダに視線を送る。

「お前はどうしてここに？」
「…貴方がおかゆ様の下へ行った時点で、どこにいても危険度は一緒です。ならば、一番にどうなったかが判るここにいようと思いまして」

震えながらそう言うキセダの傍らには、青年団で埃を被っていた剣が置いてあった。多少は勇気を振り絞ったというところだろうか。少しだけ嬉しく思うルーク。すると、キセダが予想外の事を口にする。

「そういえば、食堂にルークさん同様、闘神都市に飛ばされてきた二人の冒険者が来ていますよ」
「なんだと！？」

その話を聞き、ルークは食堂へと急ぐ。自分と同じように飛ばされてきた二人の冒険者など、該当するのはあいつらしかいない。戦力的にもかなり頼りになる人物。地上への脱出方法を協力して探すパートナーにはもってこいだ。ルークが勢いよく食堂の扉を開け放つ。

「うーん…」
「なんだい、口ほどにもない男だね」
「ランス様！…あれ、ルークさん！？」

そこには、フロンに負けて仰向けに倒れているランスと心配そうにヒーリングをかけるシィルの姿があった。

「…は？」

こうしてルークは、ランスとシィルとの再会を遂げた。それは、天罰によりレベルが1になってしまっている二人との再会であった。

―魔人界　シルキィの城―

「調査を認めます」
「シルキィ！」
「でもアイゼルが魔人界から出る事は許しません」

ガクッ、と肩を落とすアイゼル。シルキィが言葉を続ける。

「確かに調査をするだけの価値がある事は認めるわ。それに、今はケイブリス派もおとなしいから一人や二人数日抜けたところで戦況

は変わらないしね。但し、アイゼルとサテラは前回の件での謹慎処分がまだ解けていないでしょ！」
「ぐっ…」
「まあ、サテラは元々行く気ないけどな…」

そう、アイゼルとサテラは現在謹慎処分を言い渡されており、戦闘のための出動以外は外に出る事を禁じられていた。サテラは丁度いいとばかりにイシスの修復に励んでいたが、闘神都市へ向かう気であったアイゼルにとっては非常に困る処分だ。

「それ程のものなのですか？」
「ええ、ホーネット様は生まれる前だからご存じないのも無理はないですが…我ら魔人を相手取って３０年以上も渡り合った都市です。当時武闘派で知られていたレキシントンも、この戦争で戦死しています」
「凄い戦争だったわ…全然ダメージを与えられないんだもの…」

魔人戦争に参戦していたシルキィとハウゼルが昔を思い出す。人類が作り出したとは思えない技術と、強力な魔力。最後は自滅の道を歩んだが、そうならなければ、もしかしたらまだあの戦争は続いていたかもしれない。

「ひょっとしたらケイブリス派との戦いを有利にするような技術もあるかもしれないわね。それじゃあ、調査に向かうのは…」

シルキィがそう口を開くと、スッと一人の魔人が一歩前に出る。

「あら？メガラスが行ってくれるの？」
「……」

コクリと頷くメガラス。一瞬だけアイゼルの方に視線を向ける。
それは、調査だけでなくあの男の事も見てくると言っているようにアイゼルには思えた。メガラスを見ながらホーネットが口を開く。

「それ程の危険な都市、一人で向かわせて大丈夫なのですか？」
「…今はもう滅んだ都市だから大丈夫だとは思うけど…魔法が使える魔人がもう一人くらい一緒に行った方がいいかもしれないわね。そうじゃないと、調査が難しいし」
「ならば、やはりこの私が！」

アイゼルが再び口を開く。が、メガラスが首を横に振る。

「何故だ、メガラス！」
「男は…背中に乗せたくない…」
「ぶっ！」

メガラスの発言にシルキィが吹き出す。アイゼルは空を飛べないため、必然的にメガラスの背中に乗って闘神都市まで向かう事になる。だが、メガラスは自分の背中には女しか乗せないと固く誓っていた。シルキィは無口なメガラスのこういった意外な面が時折ツボに入った。込み上げてくる笑いの第二波を必死に堪えるシルキィを尻目に、メガラスが言葉を続ける。

「それと…サテラも避けた方が良い…あの戦争を体験していない者は…危険だ…」
「…なるほどね。少し気持ちは判るわ」
「となると…」
「あの戦争を体験していて、魔法を使える魔人って…」

みんなの視線が一人の魔人に集まる。美しい容姿で勘違いしがち

だが、ホーネット派ではメガラスに次いで古参である炎の魔人に。

「わ、私？」

「いいじゃない、ハウゼル。いつも働き尽くめなんだし、気分転換に行ってきたら？」

「…ハウゼルなら…背中にいつでも乗せよう」

「ぶはっ！」

「…一応自分で飛べるから、遠慮しておくわ」

シルキィが堪えきれずに吹き出し、ホーネットがその背中を擦る中、闘神都市の調査に向かう二人の魔人が決定した。数時間後、二人は闘神都市へと向けて飛び立ったのだった。

―魔人界　某所―

真っ暗な部屋の中を、モニターから発せられる光だけが照らしていた。カチャカチャと機械を叩く音がする。夥しい程の機械と１０を越えるモニター。この部屋の主はこれを全て把握しているとでもいうのか。

「…ん？」

突如、部屋の主がピタリと止まる。右上に立てかけてあったモニターの異変に気がつく。

「…闘神都市が予備動力とはいえ動いている？」

モニターを見上げ、顎に手をやる部屋の主。少しだけ考え込んだ

後、部下を呼び出して指示を出す。

「エンタープライズの準備を」

「はっ！」

部下がそれだけ言い残して部屋から出て行く。本来であればこのような指示は出さなかった。だが、数ヶ月前の惨敗で、今ホーネット派とケイブリス派は膠着状態。ならば、数日自分がいなくなったところで大きな問題はない。モニターを見上げながら、部屋の主が独りごちる。

「以前は碌に調査できなかったからね…空からの攻撃、今興味あるんだよね」

部屋の主は、少年であった。白髪の美少年。だが、この少年も人類を蹂躙する存在、魔人。

「それに…少しは姉様の為になるような技術もあるかもしれないし」

魔人パイアール。彼もまた、闘神都市に向かう事になる。リーザス、ヘルマン、ゼス、ホーネット派、ケイブリス派。ルークを中心に、こうして五つの勢力が闘神都市に集う。混迷を極める空中都市での戦いは、リーザスとゼスの出発を前に、魔人たちの手によって幕を開ける事となる。

第７３話　悪魔の誇り（後書き）

［人物］

シンシア

ＬＶ　２／１０

技能　聖魔法ＬＶ１

聖ヨウナシ降臨教会の神官。ヨウナシ様という水菓子の神を盲信している。アリシアという姉がいるが、信心深くない彼女とはあまり仲がよくない。

マイ

おかゆフィーバーへの生け贄にされそうだった少女。ルークが退治したため、現在は普通の生活に戻っている。

パープル・ソウル

三年前に生け贄にされた少女。もう少しで魔女アトランタに引き渡されるところだったらしい。

［モンスター］

仏火

全身が炎のモンスター。中心にある核を斬れば燃え尽きる。

おかゆフィーバー

四本腕の大型モンスター。人間の女が大好きで、生け贄に要求する事も多いスケベなモンスター。実力はそれなりに高い。

まじしゃん

三つ星女の子モンスター。上級呪文も唱える事が出来るため、前

衛モンスターと一緒に出現すると厄介な敵である。

第７４話　メンバー決定！？

―カサドの町　うまうま食堂―

「あら、本当にレベルが１になっていますね…」
「どれだけサボったんだ、お前は…」
「違う！えぇい、光の神め。くだらない天罰を与えやがって！」

ランスたちと再会したルークだったが、レベル神ウィリスに調べて貰ったところ、ランスとシィルのレベルが１になってしまっている事が発覚した。予想だにしていなかった事態に、全員が驚愕する。

「ここが空中都市だという事はもう聞いたのか？」
「ああ、このババアから一通りの説明は受けた」
「誰がババアだい。もう一度懲らしめてやろうかい、貧弱な坊や」
「上等だクソババア！今度こそ剣の錆びにしてくれるわ！」

店の中で再び戦闘を始めるランスを尻目に、ルークはシィルと会話を始める。

「何があったんだ？」
「あの…光の神様のプレートを踏んだ事を怒られてしまい…天罰でここに飛ばされた上にレベルダウンをされたみたいなんです…」
「レベルダウンは厳しい罰だが、罰と礼で飛ばす場所が一緒とは…適当な神め…」

ルークがため息をつく。空中都市からの脱出方法を探すための戦力として期待していただけに、ショックは大きい。とはいえこのま

ま放っておくわけにもいかない。

「とばっちりでレベルダウンさせられたシィルちゃんも大変だな。俺は地上への脱出方法を探すつもりだが、どうする？ついてきてもいいし、しばらくレベル上げに専念してもいい」

「あの…私はランス様の剣を買うお金をフロンさんにお借りしてしまったので…しばらくウェイトレスとして働かなきゃいけないんです…」

「剣？あぁ…カオスがないのか…」

ジルに飛ばされた際、カオスを持っていない状態だったランスは丸腰であった。その為、シィルはフロンにお金を借りて中古ソードを買っていた。その分の代償としてしばらく働かなければいけないとの事。

「ぎゃぁぁぁぁ！」

「ふん、出直しておいで！」

ランスが再びフロンに敗北する。倒れているランスを横目で見ながら、フロンに話しかける。

「フロン。シィルちゃんに貸したお金は俺が立て替えるから、二人を解放してもらえないか？」

「そりゃぁ構わないよ。別にあんたの連れだっていうなら、お金も返してくれなくていいんだけどね」

「そういう訳にはいかないさ。ランス、俺は地上への脱出方法を探すが、お前はどうする？とりあえずレベル上げに励むか？」

「馬鹿者！ちまちまレベル上げなど、英雄である俺様が出来るか！俺様も脱出方法を探すぞ」

「となれば…来い、フェリス！」

ルークの呼び出しに応じてフェリスが悪魔界からやってくる。いつの間にかランスとシィルがいる事に驚いた様子を見せながら、ルークの方を見てくる。

「スマンな、何度も呼び出して」
「…まあ、別にいいけど。今度は何だ？」
「それなんだが、しばらくこっちに滞在して一緒に探索を手伝って貰えないか？色々理由があって、ランスとシィルちゃんがレベル１になっちまったんだ。流石に一人でフォローするのは厳しそうなんでな」
「…どんだけサボったらそうなるんだ。はぁ…ま、別にいいけど」
「悪い。そっちも悪魔の仕事があるだろうに…」
「まぁ、最近悪魔界にいても居心地悪いから、いいんだけどね…」
「おや、悪魔が知り合いなのかい。本当に不思議な男だねぇ」

最後にフェリスがルークに聞こえない程度の声でボソッと呟く。フロンはフェリスが悪魔だという事をあまり気にしていない様子だ。

「とりあえずアイテム屋に行くかな。中古ソードじゃ戦力にならんし、フェリスに服もかってやらんと」
「は？あたしにか？」
「角と羽が隠れるようなフード付きの服を買っておかないと、町の人が怯えちまうからな」
「ああ、それならあたしの若い頃のローブがあるから、それを使うといい」
「何から何までスマンな」
「なーに、どうせもう着られないから捨てようと思っていた服さ。ちょっと待ってな」

フロンがローブを取りに行く。その間、呼び出していたままになっていたウィリスと会話する。

「ランスさんがレベル1な上に、イラーピュだなんて…大変な事になっていますね、ルークさん」
「ま、トラブルには慣れたさ。因みに俺のレベルは？」
「56ですね。もう人類では十本の指に入るんじゃないですか？」
「へぇ…」
「凄いです…」
「ふん！俺様も下がっていなければ、その二倍くらいはいっていたがな！」

ルークのレベルを聞いてフェリスが感心したようにルークを見る。シィルが素直に驚き、ランスが強がりを言う。

「一つの指針でしかないがな。ところで…そっちの子は？」

ルークが気になったのはウィリスの後ろに控えているオレンジ色の髪をした小さな女の子。ルークに話を振られ、その子が前に出てきて答える。

「ミカンはミカンだよ」
「この子は見習いレベル神のミカンちゃんです。実地研修として私のお供をしています」
「早くウィリスおねーさまみたいに立派なレベル神になりたいの。ランス、ルーク。よろしくね」
「ああ、早く立派なレベル神になれるといいな」
「そうだ。折角ですし儀式の練習をさせていただいてもよろしいですか？」
「別に構わないが」

「ミカンちゃん。さっきの私の儀式は見ていたわね。さぁ、頑張って」
「はーい！うーらん　めーたん　はらはら　うんぬん　するするぱんぱんだーっ　とこんてん　みらくるあんぱーーん！」

ウィリスの呪文を真似たのだろうが、所々適当な呪文でルークの儀式を行う。すると、ルークの体を光が包んだ。

「ん？」
「…あ、失敗して経験値が3倍になっちゃった」
「ミカンちゃん、それは違反行為よ！？」
「なんだと！おい、ガキンチョ！俺様にも儀式をしろ！」

ミカンの儀式失敗によって、現在の余剰経験値が3倍になり、LV57に必要な値までルークが達する。ランスがこれ幸いと便乗しようとする。ミカンがランスの儀式も行い、ランスの体を光が包む。

「…あ、失敗して経験値が0になっちゃった」
「なんだとぉぉ！えぇい、ガキンチョ！責任を取れ！」
「レベル1だったから被害は少なくてすんだな…」
「ミカンちゃん、もう練習は終わりにして帰りましょう！ルークさん、ランスさん、この事はどうか内密に…」
「ああ、こちらも得したんでな」
「えぇい、監督責任でウィリスが代わりに…」
「そ、それではー！」
「ばいばーい！」

逃げるようにウィリスとミカンが帰って行く。文句を言い続けるランスを宥め、ルークたちはランスの剣を購入するためアイテム屋へ向かった。

ーカサドの町　よっちゃんの店ー

「あんころぴー」

店に入るなり奇妙な挨拶をしてくるアイテム屋の少女。名前はよっちゃんと言うらしい。机の上には肌色の奇妙な生物がいる。聞けばレーガンという名前で、店のオーナーだという。

「アイテム屋っていうのは、頭のおかしな奴がやるもんなのか？」

「…完全に否定出来ないのが悲しいな」

少し前の否定形で話すトマトや、一年中下着姿のリーザスアイテム屋パティ、カンラの町ではしゃもじが武器屋を営んでいた。レーガンの頭を撫でながらランスの問いに答えるルーク。

「ぱぷー！」

「あら、遊んで貰ったの？よかったね、オーナー」

「おっ、この剣を買うぞ！」

「見るからに高そうな剣だな、おい！」

「がはは、金ピカの剣とは、俺様にピッタリの剣だ！」

「黄金の剣ですね。本当は２００００ＧＯＬＤだけど、レーガンさんと遊んでいただいたから５０００ＧＯＬＤでいいですよ」

「随分と適当な店だな…」

「あ、この特価の盆栽もください」

他の装備はジル戦のものがそのまま残っていたので、ランスが黄金の剣を、シィルが特価で売っていたお帰り盆栽を購入してアイテ

ム屋を後にする。目指すは教会の地下通路。立て看板に書いてあったが、おかゆフィーバーがいた方向とは逆側が、どうもどこかの塔の内部に繋がっているらしい。通路を通って塔の中を探索すれば、何か判るかもしれない。

ー カサドの町　教会 ー

「それじゃあ、またこの地下通路を通らせて貰うぞ」
「はい。パープルさんを救っていただき、本当にありがとうございます。これもヨウナシ様のご加護のお陰ですね」

教会にやってきたルークはシンシアに許可を得て地下通路へと向かおうとする。パープル救出の件でルークを信用したのか、深々とシンシアが頭を下げてくる。

「お、美人ではないか。俺様と一発やらんか？」
「私はヨウナシ様にこの身を捧げたので…あ、ルークさん。探索中にアリシアという女性を見つけたら、保護していただけますか？」
「それは…？」
「数日前、突然姿を消してしまった不肖の姉です。ヨウナシ様を信じなかった天罰かもしれませんが、一応姉妹なので…」
「心配という訳か。了解した。もし見つけたら連れ帰る事にするよ」

簡単に引き受けてしまうルークを見て、フェリスがため息をつく。

「自分が大変だっていうのに、安請け合いするよな…」
「ま、性分でな」

そうフェリスの返しながら、ルークたち四人は地下通路へと潜っていった。

―上部中央エリア―

「さて、南の塔の通路にあいつらがいたって事は、もうそろそろこの辺に来るはずだけど…手はず通りお願いね、ぬぼぼ」

上部中央エリアの通路では、ビッチに命令されたイオがルークたちの来るのを待ち構えていた。南の塔地下通路からこの場所付近へとワープしてくる転移装置があるのを知っていたからだ。側には得意とする縛魅了の魔法で手なずけたモンスターのぬぼぼが五体ほど控えていた。

「まずは私がぬぼぼに襲われているフリをする。やってきたあいつらは私を助けるためぬぼぼを倒すわ。それであちらの強さを調べる。大した事無さそうだったら、縛魅了の魔法で言う事を聞かせる。完璧な作戦ね」

自分の立てた作戦の穴の無さに一人で頷くイオ。その時、転移装置のある方向から人の声がした。

「むっ、来たみたいね。それでは…きゃー、誰か助けて―！」
「お、美女の悲鳴が聞こえる！行くぞ、ルーク！」
「レベルが低いんだからあまり前には出るなよ、ランス」

ぬぼぼに襲われているフリを始めるイオ。すると、すぐに先程見た冒険者二人と、新たな冒険者二人、計四名が現れた。

「（あら？人数が増えているわね。まあ、弱そうならついでに操れば…）」
「ぎゃぁぁぁぁ！」
「へ？」

イオが現れた冒険者たちを見て考え事をした瞬間、側にいたぬぼぼから悲鳴が聞こえる。振り返って見れば、ぬぼぼが両断されていた。

「真空斬！行くぞ、フェリス！」
「こんな雑魚で私の手を煩わせるなよな！」

一瞬の内に一体倒された事にぬぼぼが呆気にとられている隙に、ルークとフェリスは一気に敵との間合いを詰める。

「なっ！？早っ！」
「ふっ！」
「おりゃっ！」

ルークが剣を素早く振り下ろし、フェリスが鎌で敵を横薙ぎにする。イオがあまりの早技に呆然としている間に、ぬぼぼは全滅していた。敵の全滅を確認したルークが、座り込んでいるイオに手を差し伸べる。

「大丈夫か？怪我は？」
「え、ええ。お陰様で…（何よ、滅茶苦茶強いじゃない。でも、一か八かで縛魅了の魔法を…）」
「こら、フェリス。一体くらい俺様の経験値稼ぎように残しておけ。俺様の下僕悪魔なんだから、気を利かせろ」

「…申し訳ありません、ランス様」
「（あ、悪魔!?そういえば角が生えているわ…）」

ルークに縛魅了の魔法をかけようとしていたイオだったが、ランスの言葉を聞いてフェリスを見る。確かに角が生えているその風貌は、人間のものではない。

「それにしても、相変わらずお強いですね。レベル５６というのも納得です」
「ぶーっ!!」

そのシィルの言葉にイオが吹き出す。不思議そうにイオを見るルークたち。

「（む、無理無理無理無理、絶対無理!何よ、そのレベル。化け物じゃない!まぁ、あの人には遠く及ばないけどね…）」
「ん?本当に大丈夫か?」
「え、ええ。危ないところをどうもありがとうございます。私、イオ・イシュタルと申します」

自己紹介をしながらルークの手を取って立ち上がるイオ。頭の中では全力で方針転換を図っていた。

「（レベル５６の化け物に悪魔…後ろの二人がどんなもんかは判らないけど、何か策は…ああ、駄目、思い浮かばない!）」
「で、君はどうしてこんなところに?」
「この迷宮にタケノコ取りに来ていたのですが、現れたモンスターに急に襲われて…」
「それは大変だったな…で、冗談は置いておくとして、本当のところは?」

「（ちょっと、そんなの準備していないわよ…ああ、どうしよう…）」

咄嗟に出た嘘は冗談として取られ、本当の理由を聞いてくるルーク。パニックになるイオ。こんなところで言いあぐねていたら怪しまれてしまう。とにかく理由を考えなければ。パニックになったイオの口から咄嗟に考えた理由が出る。

「じ、実は…私は旅の魔法使いなのですが。気がついたらこの場所にいて、いきなりぬぼぼが…」
「気がついたら？」
「この場所に？」
「（だ、駄目かー！？）」

あまりにも酷い嘘に自分でも失敗だったと目を瞑るイオ。だが、シィルが意外な返答をする。

「それなら、私たちと一緒ですね」
「意外にいるもんなんだな、イラーピュに飛ばされる冒険者っていうのは」
「（つ、通じたー！やったぞ、私！）」

内心ガッツポーズを取るイオ。そのイオにルークが尋ねる。

「ここがどこかは知っているか？」
「ええ、空中都市イラーピュなのでしょう。私はここから脱出する方法を探していたの。すると、ぬぼぼの大群に襲われて…」
「さっきと言ってる事が微妙に変わってないか？」
「がはは、混乱していたんだろう」

フェリスの突っ込みが入るが、ランスがそれを一蹴する。

「ふむ…目的は一緒か。君さえよければ、一緒に行動しないか？一人では危険だしな」

「それは是非！あと、とても重要な情報を私は持っているんです。どうも隠された四つのキーが脱出のためには必要みたいなんです」

「四つのキーか…その情報は？」

「モンスターが話しているのを偶然聞いたんです」

「がはは、ならそのキーを手に入れれば、こんな辛気くさいところからはおさらばだな。では、とっととキーを探すぞ」

「レベル１なんだから、先行しすぎるなよ」

その言葉にイオの目が光る。

「レベル１…なんですか？」

「ああ、このランスとシィルちゃんは色々あってレベルが１なんだ。それと、俺の名はルーク。こっちは悪魔のフェリスだ」

「あんたのレベルはいくつなんだい？」

「私はレベル１０です」

「ふーん…」

フェリスがイオを見ながら言う。ランスの下僕でもあるため口には出さないが、内心では今のランスとシィルよりは役に立つだろうと思っていた。イオはランスを見ながら、今後の方針を決める。

「（とりあえずキーを集めて、頃合いを見計らってランスを操り、キーを奪って逃げる。完璧な作戦だわ！）」

ジロジロと見てくるイオを見て、ランスがイヤらしい顔になる。

「むっ、俺様に惚れたか？なら、助けた礼はその身体で払ってくれていいんだぞ」
「え、ええ。今夜ベッドの上でたっぷりと…」
「ぐふふ、中々話の判る奴ではないか！」

となればランスの機嫌を損ねる訳にはいかない。ランスのレベルが上がりすぎないように注意しなければ。

「それじゃあ、先に進むか。キーを探さないとな」
「ええ、全てはここからの脱出のために。しばらくの間ですけど、よろしくお願いします」

こうしてルークたちはイオをパーティーに加え、五人で塔の探索をする事になった。ランスの横に付き添って先を歩くイオを見ながら、シィルが心の中で呟く。

「（さっきルークさんに何か魔法をかけようとしているように思ったのですけど…勘違いだったみたいね…）」
「こら、シィル。ボサッとするな」
「あ、はい。ランス様！」

ランスに呼ばれ、シィルが駆け足で合流する。胸の中に芽生えた疑念は、既になくなってしまっていた。

―リーザス城　中庭―

「遂にこの時が来たわね…」
「長かったです…」

チューリップ４号の前に、自由都市からの救出部隊志願者が揃っていた。空を見上げながら真知子とトマトがルークの顔を思い出す。もう一度会うために、自らの手で助け出すために。集まったみんなにマリアが説明を始める。

「自由都市連合からの空きは４人よ。ここに集まったみんなでじゃんけんをして決めて貰う事になるわ」
「へへ、腕がなるぜ」
「おねーちゃん、一緒にランスたちを助けに行こうね！」

ミリとミルが仲良く話をしている。

「あれから更に鍛錬をしましたですー。今度もトマトは頑張りますですよー！」
「人捜しに必要とされるのは情報力よ。全員が戦闘用メンバーなんてナンセンスだわ」

トマトがぶんぶんと剣を振り、真知子が小型コンピュータ片手に宣言をする。

「へへっ、まさかちゃんと連絡を貰えると思わなかったぜぇ。この日のために仕事を一つキャンセルしてきたんだ。譲らねぇぜ！」
「…ルーク殿、今参ります。少しでも貴方に近づけていれば…」

ルイスがナイフに下を這わせ、アレキサンダーが目を閉じながら静かに呟く。

「ふふっ、負けないわよ！」
「…あれ？ランは仕事が忙しいから来られないかもって聞いていた

のに…」

ランが口を開くと、すかさずマリアから突っ込みが入る。静かに笑いながら、それに返事をするラン。

「こっそり抜け出してきたの。たまにはこんな我が儘をしても…」

「「駄目です！」」

「ひっ！チサさん、亮子さん！？」

突如、ランの後ろから町長のチサと同僚の長柄亮子が現れる。

「ど、どうしてここに！？」

「来る場所なんてここしかないでしょ！さ、帰りますよ。ランさんがいなくなったら、カスタムの町は回らないんですから」

「ごめんなさい、ランさん。でも数日でもいなくなられると本当にマズイの…」

「い、いやぁぁぁぁ！せめて勝負くらいには参加させてぇぇぇぇ！！」

亮子がずるずるとランを引きずっていき、チサが申し訳なさそうにしながらも亮子と共にランを連れて行く。

「ランさん…ほろり…」

「涙が出るわねー。勝負にも参加させて貰えないとは…」

トマトとロゼが悲しそうに連れて行かれるランを見る。その時、志津香が一人足りない事に気がつき、ロゼに尋ねる。

「あれ？セルさんは？」

「あぁ、セルも丁度ゼスで仕事が入っちゃったみたい。今頃は終わ

っているでしょうけど、この勝負には間に合わないからキャンセルだってさ」
「あちゃー、セルもついてないな」
「私はこの鏡をルークに届けないといけないしねー。それよりも…」
ミリが頭を掻く横で、ロゼがアレキサンダーとルイスを見ながら口を開く。
「どうしてアレキサンダーとルイスがいるの？ホモなの？」
「なっ！そんなの駄目です！ルークさんは渡さないですよ！」
「おいおい、なんでそうなる…」
「…私は、どちらかというとシィル殿が…いえ、忘れてください…」
トマトが二人に食って掛かるが、二人とも呆れた様子であった。
そんな中、真知子が一人その場に顔を覆いながらしゃがみ込んでいた。
「（ルークさんとアレキサンダーさんですって…何、この胸の高鳴りは…）」
「…大丈夫、真知子さん？」
真知子が開いてはいけない扉を開きそうになっていた。
「…さて、そろそろ始めましょうか。じゃんけん勝負は一度。勝った四人が参加メンバーよ」
マリアの宣言に、全員に緊張が走る。その時、トマトが不気味に笑い出す。
「ふふふ、遂にトマトのじゃんけん十三奥義、『ママの味』が火を

吹くときが来たようですかねー！」
「あ、グー、チョキ、パー以外出したら反則負けだから」
「なんですと！？」
「ありゃ、それじゃあ私の十三奥義、『買収』も封じられちゃったか…」
「それは最早奥義でも何でもないのでは…？」

頭を掻くロゼに、珍しくアレキサンダーが突っ込む。場が静まり、全員が一度だけため息をつく。

「「「「「「「じゃーん、けーん！！」」」」」」」

そして、七人の手が振り下ろされた。しばらくして、姉妹と傭兵の悔しそうな声が辺りに響き渡った。

―ゼス　王者の塔―

「四人…ですか…」
「ええ…ガンジー王の命令よ…ふふ、何日徹夜になるかしらね、私…」

出発前だというのに既に真っ白になっている千鶴子。出払ったメンバーの仕事のしわ寄せは間違いなく千鶴子にいくからだ。その姿を見てさすがに申し訳なくなるサイアス。

「…申し訳ありません」
「謝らなくて良いわ。明日には出発できるよう飛行艇は調整してい

るから、メンバーが9人になるように自分で声をかけてね」
「9人？8人では…？」

ルークを連れて帰る事を考えれば、一人分空きが必要になる。その事を尋ねるサイアス。

「一応調査の名目で行くのに空きを作っていたらおかしいでしょ。それに、一緒に行方不明になった冒険者が後二人いるみたいだし、何人連れ帰る事になるかは判らないでしょ？」
「それは確かに…ランスとシィルという冒険者が一緒にいる可能性もありますね…」
「そうなったら上に数人残して調査をさせておいて、往復すればいいだけでしょ？どうせ往復する可能性があるなら、戦力はあるに越した事はないわ。どんなモンスターがいるかも判らないしね」
「…確かに、その方が自然ですね」
「そう言う事。じゃあ、早くメンバーに声をかけてきなさい。出発はもう明日なんだから」
「…千鶴子様に声をかけても？」
「ゼスが腐敗した連中に乗っ取られてもいいなら行くわ…ふふっ…」
「…冗談が過ぎました」

遠い目をしている千鶴子。今にも灰になって消えてしまいそうだ。一礼をして部屋を出て行こうとするサイアス。

「あっ！ちょっと待って！」
「はっ！何か？」
「…アニスだけは絶対に連れて行かないように。どこから聞いたのか知れないけど、自分が連れて行って貰えると思って言いふらしているみたいだから」
「…心得ています。イラーピュが墜落しかねませんからね」

そう言い残してサイアスが部屋を後にする。廊下を歩いていると、キューティが近寄ってくる。

「どうでしたか、サイアス様」
「四天王、四将軍クラスから俺含めて四人連れて行っていいとさ」
「えぇっ！凄い…」
「そういう訳で、後衛はもう十分足りている。前衛の選抜は任せたぞ、キューティ」
「お任せください！ガードは私一人でそれなりに補えますから、アタッカーを中心に選抜してきます」

ビシッ、と敬礼をするキューティ。救助部隊として向かう事が決まった昨日のうちに、前衛募集のお触れをゼス中に出していたのだ。募集期限が一日しかなかった為、その分報酬を相場の五倍ほどに設定し、選抜会場には多くの冒険者が集まっているという報告を受けていた。キューティは今からその会場に向かうところだ。

「あ、そうだ。どうも確保出来たヒーラーがまだ学生で実戦経験もないらしい。出来ればヒーラーもそれなりの人物がいたら確保しておいてくれ。前衛3人と出来たらヒーラー1人。頼んだぞ」
「はい！では行ってきます！」

意気揚々と会場に駆けていくキューティを見送るサイアス。

「さて…こちらも後3人か。ま、パパイア様とナギ様が行く訳ないし、マジック様を連れて行ってもしもの事があるのも不味いな…となれば、四将軍揃い踏みが打倒か…」
「サイアス」

サイアスがメンバーを考えていると、ふいに後ろから声をかけられる。振り返ると、そこには意外な人物が立っていた。

「ナギ様…珍しいですね、このような所でお会いするとは…」
「聞いたぞ。イラーピュに行くんだな」
「え、ええ」
「私も連れて行け」
「!?」

公の場に殆ど出てこないナギの意外な言葉にサイアスが目を見開く。

「それは助かりますが…何故…」
「お父様があそこは魔法使いにとっての財産で、良い修行になると言った」
「ナギ様のお父様が…?」
「ああ。お父様の言葉は絶対だ」
「…それでは、出発は明日ですので遅れないようお願いします」
「あ、ちょっと待て。…ふっ!」
「!?」

ナギがサイアスに何かの魔法を放つ。サイアスの体を光が包み、すぐさま四散した。

「アスマ様、何を…んっ?」
「そういう事だ。私の事を偽名でしか呼べないよう魔法をかけさせて貰った。お父様の開発した偉大な魔法だ。私はイラーピュ探索の間、アスマを名乗る」
「…何故そこまでして名前を?」
「お父様の命令だからな。では、明日に」

そう言って立ち去ってしまうナギの背中を見送りながら、サイアスが考え込む。

「（そこまでして名前を隠したがるという事は…ルークの探しているラガールとやはり関係があるのか？）」

以前から調査を続けているが、未だに父親の情報は掴めていない。この問題は何とかしてルークに伝える必要があるなと考えつつ、今は先にメンバーを決める必要がある。

「さて…古代遺跡の調査に雷帝を連れて行かないのも不自然か。というか、連れて行かなかったら、雷撃を飛ばされそうだしな…」

四将軍カバッハーンは既に高齢であったが、未だに強者やモンスターとの戦いを楽しんでいるバイタリティ溢れる老人であった。その事を十分理解しているサイアスはカバッハーンをメンバーに決定する。後は一人。氷の四将軍ウスピラか、光の四将軍アレックス。サイアスが頭の中で天秤に置く。すると、置いた瞬間ウスピラの方の皿が一気に沈み、アレックスが飛んでいった。

「ま、男なら当然の選択だな。さて、二人に声をかけに行くか」

こうして、ナギ、ウスピラ、カバッハーンがメンバーに決定した。

ーゼス　選抜会場側ー

「うう…残念です…」

ゼスでの神官の仕事を終えたセルがとぼとぼと歩いていた。今頃リーザスではメンバーが決定しているだろう。涙目になりながらレッドの町に帰ろうとしているセルだったが、人の賑わいが目に入る。

「…イラーピュ探索隊募集会場？ゼスでもイラーピュに？それも出発が明日…ちょっとダメ元で見ていこうかしら…」

会場へと入っていくセル。そこには既に屈強な男たちが大勢集まっていた。これはメンバーに残るのはつらそうだな、と半ば諦めるセル。椅子に座って待つ事にしたセルだったが、男たちの会話が耳に入ってくる。

「へへ、まさかあんな大金が報酬とは…大奮発だぜ」
「珍しいよな。メンバー俺がなるぜ！一攫千金だ！」
「……」
「ん？顔色が悪いな？どうした？」
「俺…噂で聞いたんだ。今回のメンバー、アニス様がいるって…」

瞬間、会場の男たちが凍り付いた。

「う…嘘だろ…」
「でも…よく考えたらこんな大金おかしいぜ。まさか…死ぬのが前提何じゃ…」
「って事は…本当に味方殺しのアニスが！？」
「ちょっと俺、やっぱり帰る…」
「待ってくれ！俺も帰るぞ！」

完全にアニスの先走りによって流れてしまったデマ情報は、会場に一気に拡散し、集まっていた冒険者たちが青い顔をしながら一斉

に逃げ去っていく。その男たちをポカンとした様子で見送るセル。

ーゼス　選抜会場裏口ー

「ふっふっふ。これは人を見る目が試されますね。警備隊長としての手腕をバッチリと見せて、サイアス様、いえ、他の四天王や四将軍にも名前を覚えていただかなければ！」

キューティが意気揚々と会場までやってくる。先程聞いた話では１００人異常が集まる満員御礼状態だったらしい。ヒーラー含めて４人、これは中々に大変な選抜になるぞと気合いを入れ直し、いざ会場へと足を進める。

「さあ、お集まりのみなさん。これから選考を始め…たいと…」

キューティが壇上に出てきた会場に集まった冒険者たちを見る。聞いていた話とまるで違う。会場はガランとしており、椅子には女性が４人座っているだけだった。

「アニスって誰だ？知ってるか、ネイ？」
「さあ…？とりあえず飲み過ぎてお金もない事だし、しっかり稼ぐわよ、シャイラ！」
「…ぐう…ぐう…おおっ！…人が減っている？」
「どうしましょう…」

キューティが選考時のメモ用にと持っていたノートを落とす。

「選ぶ余地がない…ですって…」

呆然と立ち尽くすキューティを余所に、自動的に探索メンバーは決定してしまっていた。

第７４話　メンバー決定！？（後書き）

［人物］

ランス　（４）
ＬＶ　１／∞
技能　剣戦闘ＬＶ２　盾防御ＬＶ１　冒険ＬＶ１
　鬼畜冒険者。光の神の天罰によってレベルを１にされる。とりあえず面倒な事はルークにまかせつつ、さっさとレベルを上げて地上に帰るつもりでルークと行動を共にする。

シィル・プライン　（４）
ＬＶ　１／６０
技能　魔法ＬＶ１　神魔法ＬＶ１
　ランスの奴隷。とばっちりでレベルダウンさせられる。早く家に帰ってランスと共にのんびりしたいので、地上への戻り方を必死に探す。あまり戦力になれない事を申し訳なく思っている。

エレノア・ラン　（４）
ＬＶ　２３／３０
技能　剣戦闘ＬＶ１　魔法ＬＶ１
　カスタム四魔女の一人。ルークたちの救出に意気込んでいたが、勝負の舞台にすら上がらせて貰えなかった。しばらくは涙で枕を濡らす日々を送る事になる。

チサ・ゴード　（４）
　カスタム町長。申し訳ないと思いながらも、ランを連れて帰る。

長柄亮子　（４）
　ランの同僚。ランの気持ちは知っていたが、しわ寄せは間違いな

く自分に来るので、断固として行く事を許さなかった。

山田千鶴子　（４）
ＬＶ　４０／５０
技能　魔法ＬＶ２
　ゼス四天王の一人。既にＨＰは０であるが、ガンジー王の決定に逆らう事は出来ず、一週間くらいは家に帰れない事を覚悟完了した。サイアス、ウスピラ、カバッハーン、キューティと仕事をする面子が抜けたのが非常に痛い。せめてもの救いは、アレックスを連れて行かれなかった事。

ウィリス　（４）
　ルークとランスを担当するレベル神。ミカンのいきなりの失態に、バレたら監査役である自分もマズイと思い、そそくさと撤退する。

ミカン
　見習いレベル神。可愛い容姿だが、人間の頃は両親を含めた７人を殺害し投獄されていた。死刑直前で何故か見習いレベル神になる。

よっちゃん
　カサドの町アイテム屋『よっちゃんの店』店主。おかしな言動をする少女。

レーガン
　カサドの町アイテム屋『よっちゃんの店』オーナー。よく判らない生物だが、大金持ちである。

［技］
縛魅了

相手を自分の意のままに操れるようになる初級魔法。レベル差がありすぎたり、相手のレベルが高いと効果は薄い。

［装備品］

黄金の剣

ランスが購入。高価なだけあり、攻撃力はそれなりに高い。が、値段の半分以上は無駄にあしらわれた黄金のせい。

プレランンローブ

フェリスがフロンから貰う。よくあるフード付きのローブだが、多少の防御力もある。

［アイテム］

お帰り盆栽

シィルが特価で購入。帰り木の盆栽で、使用しても放っておけばまた自動的に帰り木が生えてくる。かなりの掘り出し物。

第７５話　目指すは研究コア

―上部中央エリア―

「ふむ…四つのコアか…」
「ええ、その四つのコアにそれぞれ一つずつキーが隠されているみたいなの」

モンスターを倒しながら上部中央エリアを進んでいたルークたちは、四つの扉の前に到着していた。扉の前には、それぞれ闘将コア、防空コア、食料コア、研究コアと書かれた看板が置いてあった。イオ曰く、それぞれの部屋の中には転移装置があり、指定されているコアに繋がっているらしい。しかし、この扉には問題があった。扉を調べていたシィルとフェリスが口を開く。

「ランス様、闘将コアへの扉が開きません」
「防空コアの扉もだ」
「…今開くのは一番奥にある研究コアへの扉だけみたいです」
「ちっ、なら研究コアに向かうとするか。適当に探索してりゃ、キーも他の扉を開く手段も見つかるだろ」
「まあ、他に手がかりもないし、そうするかね」

扉を開けるとイオの言ったとおり、中には転移装置が置かれていた。それを利用し、ルークたちはまず研究コアの探索をする事にした。

ー研究コア　地下一階ー

「…誰かいるぞ？」
「えっ？またイラーピュに飛ばされた冒険者の方でしょうか」

研究コアを進んでいたルークたちだったが、前から近づいてくる人の気配を感じ立ち止まる。すると、前からぶたバンバラを率いた老人が歩いてきた。あちらもルークたちを見つけるや否や、歩みを止める。

「誰じゃ、今日の実験体の管理者は。何故実験用の人間がうろうろしている！滅俸だ！」
「…何を言っているんだ、このじじいは」
「さぁ、ちょっとおかしいんじゃないの？」

ルークたちを指差しながら、後ろのぶたバンバラを怒鳴りつけている老人。ランスとイオが話していると、それまで怒鳴っていた老人が後ろのぶたバンバラに指示を出す。すると、ぶたバンバラが数体こちらに向かってきた。

「くくく、逃げ出した悪い実験体は、ワシの開発した新型の闘将で捕らえるとしよう。この研究さえ完成すれば、まだまだ聖魔教団は負けはせん、くひひ…」
「…確かにイオの言うとおり狂っているのかもしれんな。来るぞ！」
「ふん、ぶたバンバラ如き相手ではないわ！」

涎を垂らしながらぶつぶつと独り言を話している老人を見て、ルークも彼が狂っているかもしれないと感じる。迫ってきたぶたバンバラに全員が身構えるが、通常のぶたバンバラであれば相手ではない。ランスが黄金の剣をぶたバンバラ目がけて振るう。しかし、ガ

キンという金属音と共にランスの剣が弾かれる。

「なんだ！？」

「ちょっと！こいつの体、滅茶苦茶頑丈よ！？」

「ランス様…このぶたバンバラ、サイボーグです！」

イオも雷の矢が殆ど効いていない様子のぶたバンバラを驚愕の表情で見る。通常のぶたバンバラよりも遙かに強い事にシィルも驚き、ルークたちにも声をかける。

「ルークさんとフェリスさんも気をつけ…あれ？」

「ま、こんなもんだな」

「相手にならないな」

が、ルークとフェリスは既にランスとイオが相手をしていた以外の全てのぶたバンバラを倒していた。人類最強を倒した男と、下級魔人と同格の力を持つ悪魔。この程度の敵では足止めにもならない。

「早っ…」

「おっと、そっちにもいたか。ふっ！」

ルークが真空斬を放ち、イオとランスが対峙していたぶたバンバラに命中させる。悲鳴を上げながらぶたバンバラが倒れる。

「ほら、まだ息はあるからトドメをさして少しでも経験値を得ておけ」

「えぇい、何故俺様が貴様の施しを受けなければならんのだ。ふん！」

「それでもしっかりとトドメはさすんだな…」

ランスが倒れていたぶたバンバラにトドメをさし、敵が全滅する。
しかし、先程までいたはずの老人の姿が見えなくなっている。イオがきょろきょろと周囲を見回しながら、口を開く。

「あら、あのイカレた奴はどこへ行ったのかしら?」
「本当だな。こんな所で会った貴重な人間だ。情報を聞き出したかったんだがな…」
「シィル、見ていたか?」
「あの変なおじいさんでしたら、戦闘が始まるとすぐに走って逃げて行きましたよ」
「なにぃ、黙って見逃したのか!?」

シィルを怒鳴りつけるランスを見ながらイオが内心うずうずする。もし縛魅了の魔法が成功していれば、ここで上手い事誘導してあのシィルという小娘を鞭で叩き、ストレスを発散しているところだ。だが、そんな事は出来ない。それというのも、ランスではなくもう一人の男が厄介なのだ。

「あれだけの数が迫ってきた上に、速攻で逃げられたんじゃ仕方がないだろ。さぁ、追うぞ。逃げた方向は判っているんだしな」
「まったく…奴隷に文句を言う前に自分で捕まえろよな…」
「何か言ったか、フェリス!」
「…いえ、ランス様」
「ふん、まあいい。さっさとあのイカレたじじいをぶった斬るぞ」

そう、今ランスを宥めたこの男、ルークがもの凄く邪魔なのだ。ここまでに現れたモンスターを悪魔と一緒に次々と撃破し、今のぶたバンバラも瞬殺した。圧倒的に強いのだ。下手な動きを見せて反感を買う訳にはいかない。あの見るからに奴隷気質な娘をイジメるのをグッと堪え、イオはルークたちの後についていった。少し進む

と研究室のような部屋に辿り着く。

「さて、キーを探すわよ」

「すぐに見つかればいいんだがな」

手分けして研究室の中を探し始めるルークたち。シィルが本棚、イオが机周り、フェリスは羽で飛び他の者が届かない場所を見る。ランスは部屋に置いてあったベッドで横になっていた。それに文句を言いながら、ルークも部屋の中を探し回る。すると、机の上に置いてあった一枚の紙が目に入る。

「…闘将メモ。そういえば、さっきのじいさんが闘将とか言っていたな」

先程の事を思い出しながら、ルークはそのメモを手にとって読み始める。

「闘将を起動させるには脳に強力な魔力を注ぎ込む事。そもそも闘将とは何だ…闘将は食事を必要とせず、定期的な魔力供給さえあれば半永久的に動く。闘将は闘神の命令に絶対服従である…なるほどね、ここではその研究をしていたのか…」

先程現れたぶたバンバラは闘将の実験の末に生まれたものだったのかと納得するルーク。だが、闘神とは一体何なのか。気になるところではあるが、メモはここで終わっていた。他にも何かないかと机の上を探ると、机の正面にある壁に小さな穴が空いていた。

「…これは？」

丁度覗き込める程度の穴であったため、ルークがその穴に目を近

づける。

ー カスタムの町　ランの自宅 ー

チサと亮子に連行され、勝負すら出来ずにカスタムに戻ってきていたラン。今はピンクのパジャマ姿でベッドの上に横になっている。町の人から真面目で冷静な印象を持たれているラン。当然ルークも同様の印象を持っているが、部屋で一人のランは突如ベッドの上でジタバタと動き始める。

「ヤダヤダ！私もルークさんの事迎えに行きたいの！」
「もう地味な娘だってルークさんに思われるのはイヤなの！」
「ディナーの約束も有耶無耶になっちゃったし…ヒック…ぐすん…」

ひとしきりベッドの上でジタバタした後、自然とランの手が下腹部へと伸び始める。

「んっ…ルークさ…」

ー 研究コア　地下一階 ー

スッと穴から目を離し、机の上に置いてあった物を動かしてルークは壁の穴を塞ぐ。そのまま顎に手を当てて顔をうつむけていると、フェリスが心配そうに話しかけてくる。

「どうした？何かあったのか？」

「…イヤ、見えるはずのないものが見えたというか…見てはいけないものを見てしまったというか…疲れているのかもしれんな…」
「はぁ？」

遠い目をしながら答えるルークにフェリスが呆れたような顔をする。もし今見た光景が自分の妄想だったとしても、あるいは空間がねじ曲がって見えてしまった現実の光景だとしても、やるべき事は一つ。

「（地上に戻ったら、食事にでも誘うか…）」
「きゃっ！」

ルークがそんな事を考えていると、突如後ろからシィルの驚いた声が聞こえてくる。ルークとフェリスが振り返ると、空中に玉が浮かんでいた。玉は不思議な魔力を帯びているようで、青白く発光していた。

「なんだそれは…」
「判りません。部屋を調べていたら急に…」
「これはかつて世界を紅蓮の炎で包んだ灼熱の玉よ。あぁ、駄目。触ってはいけないわ。地上が燃やし尽くされるわよ！」
「なにぃ！シィル、さっさと離れろ！」
「ひぇぇぇぇ…」
「…そんな話聞いた事ないぞ」
「嘘だもの」
「……」

イオの嘘を聞いてランスとシィルが慌てているのを横目に、フェリスが冷静に突っ込む。そんな事をしていると、突如玉が輝きを増し始め、うっすらと人の形になっていく。現れたのは一人の少女で

あった。

「うらめしや…」
「おお、美少女ではないか。ラッキー！」

少女の容姿を見るや否や、ランスが飛びかかる。しかし、ランスの体は少女をすり抜けて地面へとダイブする。

「あが！」
「ゆ、幽霊さんみたいですね…」
「…貴方たちは教団の人ではないのですか？」
「教団…？いや、よく判らないが」

ランスとシィルのやりとりを見て不思議そうにしていた少女の幽霊がルークに尋ねてくる。聞き覚えのない単語にルークがそう返事をすると、少女の幽霊が驚いたような顔をし、直後頭を下げてくる。

「お願いします！私を成仏させてください！」
「がはは、やはりこのパターンか。優秀な冒険者である俺様は、美少女の幽霊と聞いた瞬間すぐに判ったぞ。ありきたりな王道パターンだ」
「流石です、ランス様！ぱちぱち」
「もうちょっと捻って欲しいわよねー」
「すいません、ありきたりで…」
「ああ、あっちは気にしなくて良いから話を続けな」

ランスとイオの言葉を聞いて申し訳なさそうにする幽霊に、フェリスがフォローを入れて話を続けさせる。

「私の名前はナチュリ・ドラといいます。何百年も前の事なのでし

っかりとは覚えていないのですが…村で生活をしていた私はある日教団に攫われ、生体実験をされた記憶があります」
「…酷い」
「あまり聞いていて気分の良い話ではないわね」

シィルとイオが顔を歪める。嘘を頻繁につくイオも、流石にこのような話は気分が悪いらしい。

「で、もし君を成仏させたら、何か俺様たちにメリットはあるのか？その体で払ってくれてもいいんだがな、ぐふふ…」
「…既に肉体がないので体でのお礼は出来ませんが、もし成仏させていただけたら私が持つ鍵を差し上げます」
「鍵！？それって…」
「…四つのキーの一つかもしれんな。それで、君はどうすれば成仏する？」
「この先に死者の安息の地という場所があります。そこに私の白骨死体があるはずです。それに聖水をかけていただければ…ですが、モンスターが多く発生する場所でもあるので…」
「聖水か…フェリス。一度帰り木で町に戻り、シンシアから受け取ってきて貰えるか？」
「…どうして私なんだ？」
「今一人で安心して行動させられるのはお前だけだからな。その間に、その場所にいるというモンスターたちを片付けておくさ」
「…まあ、ルークなら心配ないか。それじゃあ、ちょっと行って来るよ」

フェリスはルークから帰り木を受け取り、町へと帰還する。それを見届けた後、ルークたちはナチュリから指示された場所へと向かう。部屋に入ると、そこら中に白骨死体が散らばっていた。

「ここから探すのか？面倒くさいからその辺の骨に聖水かければナチュリちゃんも納得するんじゃないのか？」
「…確かに手間がかかりそうだな」
「それよりも、これ全部生体実験の被害者なの？教団っていうのはとんでもない集団みたいね…」
イオが不快そうに骨を眺める。すると、部屋に突如として声が響く。
「ここは死者の地。生者が近づく事は許されん。今すぐ立ち去れ！」
「ふん、ナチュリちゃんとのHが待っているんだ。そう言われて立ち去れるか！」
「…そんな約束していたか？」
「してないわね」
ランスが聞こえてきた声にそう返す。すると声が止み、代わりにカタカタという音がし出して散らばっていた骨たちが立ち上がり、先頭に立っていた骨がヌンチャクを振り回しながら口を開く。
「ならば、死あるのみ！」
「ファイティングボーンか…死者を冒涜するようで悪いが、倒させて貰うぞ！」

―闘神都市　とある一角―

「パイアール様、到着しました」
「ふぅ…ここに来るのも久しぶりですね」

戦艦エンタープライズから魔人パイアールが降りてくる。側に控えるのは十人の改造戦士。ＰＧシリーズと呼ばれる彼女たちは、パイアールが攫ってきた女性を人体改造して造り出した女性型戦闘兵器だ。パイアールが戦艦から下りてくるのを出迎えるようにずらっと並んでいる。その中心にいるのは他のＰＧシリーズよりも機械部分の少ない女性。彼女はＰＧ－７と呼ばれるＰＧシリーズの最新型で、他の者たちはＰＧ－ｘｍｋ２と呼ばれる量産型であった。性能差は段違いであるため、彼女がリーダー的役割を担っていた。

「パイアール様はこちらにいらした事が？」

「魔人戦争の終盤でね。ノスとレキシントンが道を開いてくれたので入りやすかったですけど、調査を始めてすぐに戦争が終結してしまったので、完全に調べきれていないのが心残りでね」

「そうだったのですか。それでは、どちらに向かわれますか？」

「以前調査途中だった場所へ向かいましょう。ＰＧ－７とｍｋ２の内６体ほどはついてきてください」

「はっ！他の者はエンタープライズで待機。近寄るものがいたら八つ裂きにしろ」

「ハイ、ソレガパイアール様トＰＧ－７様ノゴ希望」

機械的な口調で返事をするｍｋ２。パイアールを囲むように陣を取り、以前調査途中だったという箇所へ向けて歩みを進める。

「研究コア…まだ残っているといいんだけどね…」

―研究コア　地下一階―

「ありがとうございます。これで安心して成仏が出来ます」

「がはは、気持ちよかったぞ。ナチュリちゃん」

ランスが満足そうに裸のシィルに話しかける。今シィルの体にはナチュリが憑依していた。ファイティングボーンを片付けたルークたちは、何とかナチュリの白骨死体を見つけ出し、フェリスの持ってきた聖水を振りかけた。成仏する前にイオの提案でシィルの体に乗り移ったナチュリは、お礼にとランスに体を差し出していた。部屋の中で情事が終わるのを待っていたルークとフェリス。終わったようなので行こうとするが、イオが話しかけてくる。

「本当に強いのね。それと、さっきはありがとう」

「ああ、気にしなくていい」

先程のファイティングボーン戦でイオは危ないところをルークに助けられていた。その事に礼を言ってくるが、ルークが気にするなと返事をする。

「なんだか、恩人を思い出すわ」

「恩人？」

「ええ、私が見てきた中で最強の人間にして、今こうして私がここにいる切っ掛けをつくってくれた恩人。角が生えていて、口からは灼熱の業火を吐く。自在に空を飛んで…」

「それはもう人間じゃないだろ」

「ま、嘘だからね」

「ふっ…さて、ランスの行為も終わったみたいでし、鍵を受け取りに行くとするか」

ルークが立ち上がり、フェリスを伴ってランスたちに近づいていく。イオもそれに続きながら、ルークの背中を見る。一瞬だが、先程ルークに助けられた際、その強さに恩人の事を思い出していた。

先程の話は殆ど嘘だが、恩人がいたというのは本当の事である。少し昔を思い出しながら、小さな声でイオが呟く。

「トーマのおじ様…どうして死んでしまったのですか…」

その呟きは誰の耳にも届く事はなかった。ナチュリが成仏し、ランスが報酬の鍵を受け取りイオに見せてくる。

「がはは、これが一つ目のキーだな！」

「…研究室の鍵？これじゃないわ。必要なキーはWキー、Eキー、Nキー、Sキーの四つよ」

「なにぃ！ではタダの骨折り損ではないか！」

「あれだけ楽しんでおいて、骨折り損もくそもないだろ…」

「まあ、もしかしたらこの研究室にキーがあるかもしれない事だし、行ってみるか」

鍵を手に入れたルークたちは、一つ下の階にある研究室を目指す事になる。そこに魔人が近づいている事も知らずに。

ー闘神都市　とある一角ー

「ふぅ、ようやく到着ね」

「……」

パイアールに少し遅れて、ハウゼルとメガラスも闘神都市の地に降り立つ。辺りを見回しながらハウゼルがメガラスに話しかける。

「私はこの都市は初めてなのよね。ノスとレキシントンが潜入した

都市よね、確か？」
「…ああ…それに続いて…俺とパイアール、ガルティアとレッドアイが潜入した…」
「へぇ…それじゃあ道案内は頼んだわ」
そう言われたメガラスはすたすたと先行して歩き始める。その背中を追いながら、ハウゼルが会話を続ける。
「それで、どこに向かっているの？」
「…研究コアだ」
こうして、研究コアに魔人たちが集う。ルークと三人の魔人との出会いは目前まで迫っていた。

第７５話　目指すは研究コア（後書き）

［人物］

ナチュリ・ドラ

幽霊の少女。聖魔教団の一部の暴走した研究者の生体実験により、命を落とす。ルークたちのお陰で無事成仏した。

［モンスター］

ファイティングボーン

ヌンチャクを持った骨の戦士。見た目以上に耐久力もある、厄介な敵。

第７６話　天敵の影

―研究コア　地下三階―

研究室の鍵を手に入れたルークたちは地下三階まで降り、鍵を使って研究室の中を調べていた。

「シィル、フェリス。金目のものはあったか？」
「ありません、ランス様」
「真面目に調べろよな、まったく…」

フェリスがぶつぶつ言いながらも、主の命令であるため部屋の調査と平行して金目のものを探す。ルークも机の周りを調べていると、研究員の日記を発見する。少し中身を読んでみると、そこには先程のメモと同じように闘将の事ばかり書かれていた。だが、途中から同僚のモガンダという研究員の事が日記の大半を占め始める。

「禁止されていた人間以外での闘将造りを提唱し続けたマッドサイエンティスト、モガンダ。ふん、人体実験をしているこいつも十分マッドだと思うがな」

今はもう死んでいるだろう、日記の所有者に悪態をつきながら、ページを進めていく。

「モガンダは研究室の本棚の下に地下への階段を極秘で作り、研究を進めていた事が発覚し、上司に報告しようとしたところで日記が白紙になっている。殺されたか…」

研究員を殺したのは恐らくモガンダという同僚だろう。ルークは先程あった老人の事を思い出す。奴はモンスターを闘将へと改造しようとしていた。

「あいつがモガンダか…？」

「ちょっと、こっちに面白いものがあるわよ！」

突然イオが全員を呼び出す。イオに呼ばれて奥の部屋に集まるルークたち。そこには一体の機械人間が佇んでいた。表情はなく、左腕はもげてしまっているが、巨漢で見るからに強そうな風貌だ。だが、動く気配はない。

「これがメモに書かれていた闘将か…」

「ねぇ、確か脳に魔力を込めれば動くのよね。これ、動かしてみない？」

「闘将をか？」

イオの提案にルークが不思議そうな顔をしながら尋ねる。

「そう。闘将って命令には絶対服従の戦闘兵器なんでしょ？私たちの命令を聞く部下として使いましょうよ」

「おお、それはいい！」

「…あのメモには闘神の命令に絶対服従と書いてあったが」

「闘将の神っていうなら、起動させた人のことを指した俗語じゃないの？」

「一理ある…か…？」

ルークが顎に手を当てて考え込む。本当に命令を聞くのであれば、戦力にはなりそうだ。現状ランスとシィル、イオの三人のレベルが低いため、護衛要因としての戦力増強は欲しいところ。そのルーク

にフェリスが話しかけてくる。

「失敗して襲ってきたときの事を心配してるなら、私とルークがいるから大丈夫だろ」

「…そうだな。だが起動には強力な魔力が必要と書いてあった。起動できるのか？」

「あら、馬鹿にしないでよ。シィルも手伝って。脳に魔力を注入するわよ」

「本当に大丈夫なんでしょうか…」

イオがシィルを伴って闘将に近づいていく。二人で闘将の頭に手をかざし、魔力を注入し始める。魔力を注入し始めてしばらくすると、闘将がガタガタと震え始め、唐突に口を開く。

「我が名はボォルグ・ストマウス。停止状態を終了し、活動を開始する」

「動いた！？」

「ほら、見なさい。私の魔力だって十分高いんだから！」

イオが自慢げにルークに振り返る。が、イオが見たのはこちらに向かって飛び込むように駆けてきているルークとランスの姿。瞬間、後ろから風を切る音が聞こえる。

「イオ！」

「ええい、避けろ馬鹿者！」

ガキン、という金属音が鳴るとほぼ同時に、イオの体はルークに抱き寄せられ、胸の中にあった。ここにきてイオは先程の風を切る音の正体が判る。闘将ボォルグがイオとシィル目がけて鋼の右拳を振るっていたのだ。それをルークとランスが剣で防いだ形になる。

ランスの胸の中にシィルがいるのが見える。

「蛮族と共にいる魔法使い。裏切り者と判断した」
「貴様！起動させたのは俺様の命令を聞かんか！」
「我が主はルーン様ただ一人。それよりも、何故ここに蛮族がいる。攻めてきている魔人はどうした。現状の確認を…むっ？」
「魔人だと！？」

ボォルグがぶつぶつと言い始めたと思うと、その言葉の中に魔人という単語が出てきてルークが反応する。問いただそうとしたが、ボォルグは自身の左腕がない事に気がつき驚いたような声を出す。

「修理が完了していない。どういう事だ…戦争はどうなった！」
「よく判らないけど、このイラーピュが発見されてから数百年は経っているはずよ。その間イラーピュで戦争があったという話は聞いた事がないわ。その戦争っていうのは、とっくに終わっているんじゃないの？」
「なんだと…では、ルーン様や他の魔法使いたちは…」
「とっくに死んでいるでしょうね」
「…では、最後の闘将として私だけでも命令を実行させて貰うとしよう」

そう言うと、ボォルグが拳を振り上げ、こちらに振り下ろしてくる。

「我が使命は、聖魔教団の敵である魔人と地上の民の抹殺！」
「なにぃ！」
「させんさ…今度は再び起動できないよう、完全に破壊させて貰うぞ」

イオとシィルを後ろに押し出し、ルークとランスが剣でその拳を受け止める。瞬間、いつの間にか後ろに回り込んでいたフェリスがボォルグの首目がけて鎌を振るう。

「死ね！」

フェリスの鎌はボォルグの首に確かに命中した。だが、ボォルグの首が飛ぶ事はなかった。部屋に響いた金属音と同時に、フェリスが目を見開く。

「なにっ！？」

「悪魔の娘…敵とみなす！」

ボォルグが首だけ動かし、フェリスに狙いを定める。ルークたちが剣で受け止めていた拳を、フェリス目がけて後ろに振るう。

「ちっ！」

「がはは、腹ががら空きだ！」

「ふっ！」

フェリスが後方に飛んで躱すと同時に、がら空きになったボォルグの腹部目がけてルークとランスが剣を振るう。が、それもボォルグの鋼の体に遮られ、ランスの攻撃は傷一つつけられず、ルークの攻撃でも薄く斬り傷がついただけであった。剣を握っていた右腕が痺れる。

「何だこいつの体は！手が痛いではないか！」

「この硬さ…ノス以上だと！？」

「魔人ノスを知っているという事は、貴様らがここにいるのは奴の手引きか？どちらにせよ、死んで貰う！」

「炎の矢！」
「雷撃！」

ボォルグが今度はルークとランスに向かって拳を振るう。が、それ程動きは速くないため、二人も悠々と後方に飛んで躱す。それと同時にシィルとイオが魔法を放つが、それも殆ど効いていない様子。イオが顔を歪めながらルークに謝ってくる。

「さっきはありがとう。それと、ごめんなさい。余計な事しちゃったみたいね。闘将があんなに強いなんて…」
「気にするな。起動させるのにはこちらも納得していたんだ」
「ふん、あんな動きの遅い奴、俺様の敵ではないわ！」

ランスがふん、と鼻を鳴らす。だがランスの言うのも一理ある。硬いとはいえ全くダメージを与えられていない訳ではない。奴の動きはかなり遅いため、油断しなければ攻撃を躱すのは容易い。シィルという回復役もいる事も考えれば、長期戦に持ち込めばこちらの勝ちは揺るがないだろう。その時、ボォルグが右拳を高々と上げ、地面目がけて振り下ろした。

「ブレイク・バーン！」
「なんだ…ぐわぁぁぁ！」
「「きゃぁぁぁ！」」
「くっ…」
「おい、どうした！」

ボォルグの振るった拳が衝撃波を生み、地面を通ってルークたち全員の体にダメージを与えた。飛んでいたフェリスはその衝撃を免れたが、後ろにいたシィルとイオが倒れる。ランスも今の一撃でかなりのダメージを負った様子だ。それを見たルークが一気にボォル

グとの間合いを詰める。

「真滅斬！」
「ふん！」

最早悠長に長期戦をしている場合ではない。これほど強力な全体攻撃を持っているのであれば、レベルの低いランスたち三人はいつ殺されてもおかしくはない。特にシィルとイオは今の一撃だけでダウンしてしまっている。最強の技を早々に放つ。そのルークの剣を右拳で受け止めるボォルグ。

「…ちぃ！」
「ふむ…蛮族にしては中々の威力。だが、私の体はこの程度では破壊できぬぞ！」
「黙りな！」

だが、ノスの腕さえ両断したルークの真滅斬を持ってしても、闘将ボォルグの腕には多少の傷しかつける事が出来なかった。フェリスも短期戦を望んでいるルークの考えを理解し、再び鎌を振るう。だが、その一撃も殆どダメージを与えられない。

「ふん！」

ボォルグの振るう拳を避けながら、ルークとフェリスは歯噛みする。確かに強いが、勝てない相手ではない。単純な強さだけならサテラやアイゼルの方が上。ノスなどとは比べるまでもない程の差だ。動きの遅いボォルグに着実にダメージを与えていけば、フェリスもルークも十分一人で討伐が可能。だが、それは長期戦を見越したときの話。シィルやイオの為に時間はかけられない。そうなると一気に難度が増す。確かに先の魔人たちと比べれば格下だが、ある一点、

硬さだけは遙かにボォルグの方が上だ。

「厄介な…」

ルークが顔を歪める。魔法結界などで防御力を上げている敵はルークにとって対処しやすい。だが、目の前の闘将のように、ただ単純に硬い敵はルークにとってかなり対処の難しい相手だ。その時、ボォルグが再び拳を高々と上げ、地面に振り下ろそうとする。

「まずい！？」

「みんな、一瞬でもいいから空中に飛び上がれ！」

「くっ…」

「体が…」

「流石の俺様も二人抱えて飛ぶのは厳しいぞ！馬鹿者、立ち上がらんか！」

ルークが振り返り指示を出すが、シィルとイオが立ち上がれずにいる。ランスが二人を抱えようとしているが、流石に無理があるだろう。失策だ。すぐにでもこの部屋から出しておくべきだった。ルークが後悔している横で、ボォルグの拳が今正に地面に放たれようとしていた。だが、突如ボォルグの右肩から爆発音がする。

「ぬっ！がぁぁっ！」

「なんだ！？」

ルークとフェリスが目を見開く。続いて左足、右足と至る所から爆発音を響かせ、煙が吹き出し始める。

「ここまで修理がされていなかったというのか…いや、せめて注入された魔力がもっと高いものであれば…」

「がはは、ドジな奴め。勝手に自爆しているぞ」

ボォルグがふらふらと動き始め、最後に胴体と頭部から同時に爆発音がしたと思うと、その体が崩れ落ちた。

「無念…完璧な状態であれば…」

その言葉を最後に、闘将ボォルグは完全に動かなくなった。フェリスが本当にもう動かないのか闘将の残骸を念入りに確認し、シィルが他の三人の治療をする中、ルークは動かなくなったボォルグを見下ろしながら顔を歪める。

「（もし、こいつのように頑丈で、なおかつ動きの速い闘将がいたとしたら…そいつは間違いなく俺の天敵だ…）」

脳裏を過ぎる最悪の想像。ボォルグは自壊の原因を魔力不足とも言っていた。ルークの頭に志津香やサイアスの顔が浮かぶ。あいつらであれば、完璧な状態で起動させられたのだろうか。もしその天敵足り得る闘将が完璧な状態で起動したとしたら、それはルークにとってトーマやノス以上の強敵かもしれない。

「（いない事を祈るしかないか…まあ、いたとしても起動させなければいいだけだがな）」

ルークがそう考え、嫌な予感を振り払う。だが、この予想は的中する。ルークにとって最悪の相性を誇る闘将の復活は、これより少し後にヘルマン調査隊の手によって成される事になる。

ー研究コア　地下五階　秘密研究室ー

「研究、研究。古いタイプの研究者は、ニュータイプである私の研究に嫉妬して邪魔ばかりする。可哀想な奴らじゃ、ぐひひ。さて、今日はどんな材料で闘将を作ろうか」

研究室ではモガンダが実験道具片手に、気味の悪い笑みを浮かべていた。すると、部下のメカぶたバンバラが数体の石像を持って研究室に入ってくる。

「うーむ…５０年物のきゃんきゃんはまだ熟成が足りんな。１５年物の指圧マスターは…一昨日もこいつじゃったからパスじゃ。ん？」

石像を見て回っていたモガンダだったが、一つの石像の前で足が止まる。それは、石像安置場に置いてあった唯一の人間の石像。騎士風の格好をしている。

「うーむ…人間は闘将にするには力が足りん。あれ程言ったのに、無能な研究者共は全く判っとらん！」

ペッと自分の部屋であるのに床に唾を吐くモガンダ。ぶたバンバラがそれをすぐに拭き取る。が、急に何かを思いついたような顔をする。

「待てよ…無能な研究者であるなら良い闘将は生まれまい。だが、天才の私なら出来るはずだ。熟成期間は２００年以上の人間か…よし、久々に人間を使ってみるか。ぐひひ！」

馬鹿笑いをしながら、モガンダは石像を手術台の上に固定し、机の上に置いてあった水筒を開けて、中の液体を石像に振りかける。

すると、石化がみるみる内に解除されていき、元の人間の姿になる。実験の邪魔だからと鎧を脱がしていく。鎧を脱がし終えると、モガンダが驚愕の声を上げる。

「なんてこったい、弱い人間の中でも更に弱いメスとは…これはまいった」

「…んっ？ここは…」

その時、手術台の上に寝かされていた騎士風の女性が目を覚ます。ぼんやりとした眼で周囲を見回すが、モガンダの顔が見えた瞬間その目が一気に開かれる。

「お、お前は！くっ、何だこの拘束は！ボクをどうするつもりだ！」

「２００年前からご機嫌よう」

「２００年！？確かボクはお前に石に…」

拘束されているこの少女の名前はサーナキア。今から２００年以上前、ダラス国からイラーピュ探索のために派遣された探索隊のメンバーだった。だが、探索中にモガンダに捕まってしまい、今日に至るまで石化保存をされていた。サーナキアを見下ろしながらモガンダが言葉を続ける。

「非常に不本意ではあるが、ここまで準備したのに何もしないのも勿体ないからな。今から君には闘将になって貰うぞい」

「と、闘将…？」

サーナキアが不思議そうに尋ねると、ちょんちょんと指で肩を突かれる。首だけでそちらの方向を見ると、メカぶたバンバラが自分の事を指さしていた。

「ま、まさか…ボクもこいつらみたいに…」
「光栄に思うと良い。天才である私が直々に闘将にしてやるのだからな。ぐひひ」

キラリとモガンダが持っていたナイフが光る。サーナキアが暴れ出すが拘束は外れない。近づいてくるナイフを見て、声が震えてくる。

「や…止めろ！止めてくれ…ボクは…ボクは改造なんてされたくない！騎士としてそんな事…」
「騎士風の闘将がお望みか？ぐひひ！さて…ではその顔から…」
「っ！？」

モガンダのナイフがピタとサーナキアの頬に触れた瞬間、サーナキアは目を閉じる。瞬間、サーナキアの頬に鮮血が飛び散った。だが、それはサーナキアの血ではない。恐る恐る目を開いたサーナキアが見たのは、右腕が吹き飛んでいるモガンダの姿だった。

「なんじゃぁ！？」
「真空斬！フェリス！」
「はいよ！」

やってきたのはルークたち。部屋に入るや否や状況を把握したルークは真空斬をモガンダ目がけて放ったのだ。フェリスが手術台に一気に近づいていく。メカぶたバンバラが道を塞ぐが、鎌によって一刀両断される。近づいてくるフェリスに慌てたモガンダは、手術台から離れて部屋の奥に逃げる。壁に背を預けながら、モガンダがルークに向かって喚く。

「なんじゃ、なんじゃい！人の研究室に勝手に入ってきおって！部

屋の前には闘将コールを立たせておいたはずじゃぞ！」
「あのコールを改造していたやつか。ボォルグに比べればゴミみたいな弱さだったぞ」
「むっ！私の新型闘神が、ボォルグ程度の出来損ないに劣るじゃと！やってしまえ！」

モガンダの指示を受けてメカぶたバンバラがルークたちに迫ってくる。

「ふん、可愛い女の子を実験しようなどふてぇ野郎だ。ぶっ殺す！」
「同感だ。行くぞ！」

ランスが剣を抜き、ルークと共にメカぶたバンバラに向かっていく。ようやくじわじわとランスのレベルも上がってきたため、メカぶたバンバラを普通に倒せる程度にはなっていた。イオが魔法でそれを援護する中、フェリスが手術台の拘束を鎌で切る。

「あ、ありがとう…」
「ほら、いつまでも裸だとマズイだろ。とりあえずこれを着ていな」

フェリスがバサッと自分が着ていたローブを脱ぐが、その頭に生えている角を見てサーナキアが声を出す。

「あ、悪魔！？」
「まあね。だけど、一応あいつらの使い魔でね。ほら、とっとと着な」
「そうです。フェリスさんは信頼できる悪魔です。怪我はありませんか？ありましたらヒーリングをかけますので…」

シィルもフェリスに続いてサーナキアの元へ駆け寄ってくる。シ

ィルの言葉を聞いて、フェリスがふん、と鼻を鳴らして横を向いてしまう。だが、ローブを持った手はサーナキアの方に出したままだ。

「…感謝する。でも、そこの鎧を取ってくれないかな。騎士として、身につけるのはあの鎧と心に決めているので」

「あっ…はい！」

シィルがその言葉を受けて放られていた鎧を取りに行く。フェリスは無言でローブを着直し、サーナキアも鎧を身につける。

「あっ、馬鹿者！余計な事を…」

「集中してろ、ランス。まだまだよそ見出来るレベルじゃないだろ」

服を着せているのを横目で見てランスが文句を言うが、ルークに窘められる。サーナキアが鎧を完璧に着け終えた頃には、部屋のメカぶたバンバラは全滅しており、モガンダに向けてルークとランスが剣を突きつけているところであった。

「さて…お前にはいくつか聞きたい事がある。この空中都市から地上へ降りる方法を…」

「ええい、無能な蛮族が天才である私に話しかけるな！息が臭いんじゃ！顔も不細工ばかりで、このダンディーな私と比べるのもおこがましい集団じゃ。あぁ、これだから蛮族は…」

「むかむか…死ねぇぇぇぇ！」

「ぎゃぁぁぁぁ！」

モガンダの言葉にむかついたランスは剣を振り下ろし、モガンダを殺してしまった。

「…おい、殺すのが早すぎる。もしかしたら地上に戻れる方法を知

っていたかもしれないだろうが…」
「ふん。どうせこんな痴呆ジジイじゃ、なんの情報も持ってないに決まっている」
「やれやれ…」

剣を仕舞いながら、ルークはサーナキアに振り返る。すると、サーナキアが立ち上がってルークとランスに頭を下げてくる。

「危ないところを感謝する。ボクはダラス国第3騎士団団長のサーナキア・ドレルシュカフだ」
「ルーク・グラント、冒険者だ」
「偉大なる英雄ランス様だ。そっちにいるのはシィル、フェリス、イオで、全員俺様の下僕だ」
「ちょっと、私も下僕なの?」
「下僕…助けて貰った直後に言葉を返すようで悪いが、そのような振る舞いは騎士道から外れている」

ランスに苦言を呈してくるサーナキア。今のやりとりだけで何となくサーナキアの性格が見えてくるルーク。真面目一辺倒な少女で、騎士に憧れを抱いているというところか。だが、一国の騎士団団長までなっているという事は、実力はそれなりにあるのだろう。一つ確かな事は、間違いなくランスとはそりが合わないだろう事だ。その時、サーナキアの言った国に聞き覚えがある事を思い出す。

「んっ…ダラス?その国は確か…」
「そうだ!今は一体何年なんだ?教えてくれないか?」
「え?今はＬＰ2年ですけど…」
「ＬＰ?聞いた事ない年号だ…ＧＩ７９７年じゃないのか!?」

その言葉を聞いてルークは確信する。彼女はフロンの言っていた

ダラス国から派遣されたイラーピュ探索隊の生き残りだ。

「それは２００年以上前だな」

「そうか…本当に２００年間も石像にされていたのか…くそっ！」

頭を抱えて悲しそうな表情になるサーナキア。部屋の中にあるきゃんきゃんと指圧マスターの石像を見るルークたち。彼女もこのような形で年を取らずに２００年の時を過ごしたのだろう。いきなり目が覚めてみれば２００年後の世界。たった数ヶ月飛ばされただけでも若干パニックになったルークだ。彼女の衝撃は計り知れない。その時、イオが机の上に置いてある鍵を発見する。

「あったわ！これよ、これがEキーだわ！」

「お、それが目当ての鍵か。がはは、ようやく一つ目をゲットだ。後三つ集めれば地上へと戻れる訳だな！」

「えっ？地上へ戻れないのか？」

ランスの言葉を聞いてサーナキアが目を見開く。

「ああ、イラーピュから脱出する手段はなくなってしまっているんだ。君の仲間…探索隊の生き残りはイラーピュに残って町を作り、その子孫が今でもここで生活をしている」

「ボクの仲間たちの子孫が生活している町か…なんだか不思議な感覚だ」

「俺たちも偶然この場所に飛ばされてしまい、今は脱出方法を探しているところだ」

「それなら、ボクも一緒に連れて行ってくれないか？」

「ん？サーナキアちゃんは戦えるのか？」

「そんな軟弱な呼び方は止めてくれないか。騎士サーナキアか、少し譲ってサーナキアと呼び捨てにしてくれ。それと、これでも騎士

団団長を務めていた身だ」

サーナキアが腰にかけていた剣を抜いて高々と掲げる。それを見ながらフェリスがため息をつく。

「やれやれ、またアクの強そうなのが…」

「まっ、少しでも戦力が欲しい状況だ。そう言うな」

ルークがフェリスの肩をポンと叩く。こうして一つ目のキーが手に入ったルークたち。

「じゃあ、研究コアには用はなくなったし脱出するか」

「まてまて、まだ調べていない部屋があるはずだ。金目のもの…いやいや、脱出の手がかりがあるかもしれん」

「…金目のものは置いておいて、確かにEキーを見つけたからといって他に手がかりがない訳ではないか…それじゃあ、その部屋に向かうか」

「うむ」

「よろしくお願いしますね、サーナキアさん」

「ああ、騎士であるボクを頼ってくれて構わないからな」

「やれやれ…」

「簡単に騙せそうな子ね…」

サーナキアをパーティーに加え、ルークたちは研究室から出る。その瞬間、横の通路から声をかけられる。

「おや？人間がいますね。それに悪魔も」

「！？」

ルークたちがそちらの方向を見る。そこに立っていたのは白髪の

少年と、その周囲を囲む女性たち。

「おおっ、美女が大量だ！」

「ふぅん、この闘神都市で生活している人間がいたんですね…研究材料になるかな？」

「…何者だ？それと、悪いが俺たちはここで暮らしているわけではない」

「あれ？そうなんですか？」

「ええ、普段は普通に地上で生活をしているわ」

「なぁんだ…」

ルークとイオの言葉を聞いて残念そうな声を出す少年。すると突然、少年が先程までのトーンと全く変わらない口調で口を開く。

「それじゃあ、何の価値もないから殺して」

「ソレガゴ命令デアルノナラ」

「「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」

６体のＰＧ－ｘｍｋ２がルークたちに迫ってくる。魔人パイアールとの決戦は、こうして唐突に幕を開けた。

第７６話　天敵の影（後書き）

［人物］

サーナキア・ドレルシュカフ

ＬＶ　１８／２２

技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１

ダラス国第３騎士団団長の女性。幼い頃から騎士に憧れ、男として生まれなかった事を嘆いている。真面目で実直、騎士道精神を重んじる。モガンダに捕らえられ、２００年以上もの間石像にされていた。身につけている鎧はかつて騎士団の総団長から貰った思い出の品で、あの鎧以外を身につける気はない。

ボォルグ・ラウゼン・ストマウス

ＬＶ　１／４０

技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１

闘将。生前はバルシン王国の総大将であったが、聖魔教団の手によって闘将へと改造された。最初期に生まれた闘将であり、３０年以上もの間魔人戦争を戦い抜いた歴戦の猛者。魔人レキシントンに左腕を破壊され、修理を待っている状態だったが、そのまま聖魔教団が滅んだため待機状態のまま５００年以上の時を過ごす事になる。ルークたちとの戦いの最中、魔力供給が足りず、修理も終わっていない体で激しく動いたため、自滅する。長きに渡る待機状態でレベルは１になっているが、闘将は技の成長以外の自身の実力を最大限に発揮できるため、問題なく強い。

モガンダ

ＬＶ　１／８

技能　魔鉄匠ＬＶ１

闘将。聖魔教団の生き残りで、自身の体を闘将へと改造した老研

究員。禁忌とされていたモンスターでの闘将造りを提唱し続け、周囲から異端児扱いされていた。ランスに斬られ、その長い人生に幕が下ろされた。

［モンスター］

コール

モヒカン頭のモンスター。その巨体から繰り出してくるハンマー攻撃は強烈だが、動きが遅い。

指圧マスター

指圧で攻撃や回復を行うモンスター。指圧の心は下心らしい。

［技］

ブレイク・バーン

使用者　ボォルグ・ラウゼン・ストマウス

闘将ボォルグの必殺技。右拳を地面に振り下ろし、軽い地震を伴った衝撃波で複数の敵にダメージを与える。

［装備品］

古の鎧

サーナキア愛用の鎧。防御力はそれなりだが、魔抵力は低い。

第77話　迫り来るPGシリーズ

ー研究コア　地下五階　通路ー

パイアールの命令を受けてmk2迫ってくる。6体がそれぞれ別の人物に向かっていくのから考えると、一対一の構図にする気だろう。それは非情に不味い。

「フェリス！前に出て2人相手にしてくれ！俺も2人相手にする」
「了解だ！」
「ランスとサーナキアはそれぞれ1人ずつ相手を頼む。無理はするな。シィルちゃんとイオは後ろから援護を！」
「はい、ルークさん」
「任せておいて」
「ボクの力を見せてやる」
「ぐふふ…多少機械的な体ではあるが、全員美少女だな。これは勝った後が楽しみだ」

ルークの指示を受け全員が返事をする。それと同時にルークとフェリスが一気に前に出て、一番先頭にいたmk2に剣と鎌を振るう。

「「排除シマス」」

無機質な声を出しながら、右腕に接続されている機械から刃を出し、ルークとフェリスの攻撃を受け止める2体のmk2。その背後から更に2体のmk2が刃を出して二人に迫る。

「「排除シマス」」

「ふん、そこまで大した相手じゃないよ、ルーク」
「フェリス、油断はするなよ」

最前線ではルークとフェリスが４体のｍｋ２を相手にし始める。その少し後方でランスとサーナキアがそれぞれ一対一でｍｋ２と戦っていた。

「ふん！勝ってお楽しみだ！」
「くそ、こいつら速い…」

ランスはシィルの援護を受けてなんとか対等以上に渡り合っているが、サーナキアはイオの援護を受けてなお若干押されていた。現在レベルではサーナキアの方がランスより高いはずだが、そこは才能と実戦経験の差といったところか。苦戦しているサーナキアにイオが声をかける。

「雷の矢！無理はするんじゃないよ、サーナキア」
「無理なんかしていない！騎士として、こんな奴らに負ける訳にはいかない」
「目ノ前ノ敵ハ問題ノナイ相手ト判断。コレヨリ抹殺シマス」
「なんだと！くそっ、馬鹿にしやがって…」
「ああ、もう。そんな挑発に乗るんじゃないよ…」

ｍｋ２の言葉に激怒し、更に攻撃が単調になるサーナキア。イオのサポートがなければとっくにやられていた事だろう。だが、徐々に押され始めているのは明白だった。

「はぁっ！」
「ふっ！」

ルークとフェリスが同時にそれぞれ対峙していたｍｋ２の腹部に剣と鎌を命中させる。小さな爆発音が腹部からして、ガタガタとｍｋ２が震え始める。

「ピピピッ。制御不可能…」

「戦闘続行不能…」

機械的な言葉を残してその２体が動かなくなる。残りの２体はそれを見て悲しむ事もなく、すぐにルークとフェリスに攻撃をしかけてくる。

「４号機ト５号機ノ大破ヲ確認」

「戦闘ヲ続行シマス」

「へぇ、あの二人結構やりますね。ＰＧ－７、君もいってきてください。ここでｍｋ２全滅は避けたいので」

「はい、パイアール様」

パイアールから指示を受け、ＰＧ－７もルークたちに向かっていく。背中についたバーニアを噴射させ、右腕から刃を取り出しルークに迫る。

「とどめだ…んっ！？」

「死ぬのよ！薄汚い人間め！」

残りのｍｋ２にトドメを刺そうとしていたルークだったが、突如迫ってきたＰＧ－７が刃を振るってきたため、それを瞬時に剣で受け止める。

「どうやらあんたはひと味違うみたいだな」

「ＰＧシリーズ最新型の力を見せてやるわ」

「ふん、今の一撃を見る限りじゃ大した事なさそうだけどね」
「…悪魔風情が。貴様から死ね！」

フェリスの挑発に反応したＰＧ－７は、ルークと刃を交えながら腰のパーツから機関銃のような部品が盛り上がり、ｍｋ２と対峙していたフェリスに向けて乱射する。大量の銃撃がフェリスに降り注ぎ、床の破片が巻き起こした砂煙でフェリスの姿が見えなくなる。

「ふん、跡形も…」
「やっぱり、大した事ないじゃないか」
「！？」

ＰＧ－７の言葉に反応するようにフェリスの声が聞こえてくる。砂煙が晴れた先には、無傷のフェリスが立っていた。避けたのか、あるいは全てあの鎌でガードしたのか。どちらにせよ、あの悪魔は自分よりも格上だ。完全に思考も機械的になっているｍｋ２と違い、人間的な部分が多く残っているＰＧ－７。だからこそ、焦る。

「それで、俺は無視していて良いのかな？」
「っ！？」

それは、目の前に対峙していた男の声。注意を向けた瞬間、ＰＧ－７の刃が叩き折られ宙を舞う。

「くっ…」

足についている小型のバーニアを噴射して後方に飛ぶ。が、瞬間腹部に斬撃が飛んできて命中する。

「がっ…」

「真空斬」

その斬撃はルークの放ったもの。腹部についていたパーツが小規模の爆発を起こし、使い物にならなくなる。キッとルークとフェリスを睨み付けながら、ＰＧ－７の左腕が機関銃に変わる。隣に控えていたｍｋ２も同様に左腕から機関銃を出す。

「思い上がるな、人間風情が！」

「フェリス、さっきのはどうやったんだ？」

「全部鎌で撃ち落とした」

「なら、今回も頼む。俺だと多分半分くらいしか撃ち落とせん。剣の攻撃範囲は狭いしな」

「…それだけ落とせりゃ十分だろ。少しは手伝えよ」

「了解」

「死ね！」

ＰＧ－７と２体のｍｋ２が乱射をし始め、先程同様砂煙でルークとフェリスの姿が見えなくなる。その様子をパイアールは冷静に観察し、ため息をつきながら服の内側をまさぐり始める。

「はぁ…ＰＧ－７では荷が重そうですね。新しいＰＧシリーズの開発を急がないと。やれやれ、ボクが戦う事になるとは…」

そう言いながら、パイアールは一つのリモコン装置を取り出す。その装置についたボタンを押した瞬間、リモコンが瞬時に１０個のパーツに分かれ、パイアールの周りに浮かび始める。

「さて、殲滅しますかね…」

パイアールがそう呟くと同時に、ランスが盛大に叫び声を上げる。

「どりゃぁぁぁ、ランスアタァァァック！！」
「ピピピ、戦闘続行不能」

ランスが必殺のランスアタックを放ち、対峙していたｍｋ２が動作を停止する。それを確認すると、ランスがｍｋ２の装甲を脱がそうとし始める。

「がはは、ではご褒美タイムだ」
「ランス様、それよりもサーナキアさんが…」
「ん？」

シィルの言葉を受けてランスがサーナキアの方を見る。そこにはかなり苦しそうな顔をするサーナキアが立っていた。

「なんだ？サーナキアちゃん苦戦しているのか？」
「苦戦などしていない！この程度の相手、ボク一人で…」

サーナキアがそう強がりを言った瞬間、ｍｋ２の刃にサーナキアの剣が飛ばされる。

「あっ…」
「抹殺シマス」
「ちっ…雷撃！」

無防備なサーナキアの首を刎ねようとするｍｋ２。イオが雷撃で援護に入るが間に合わない。自身の首に迫る刃にサーナキアが目を見開く。が、その刃は直前で防がれる。金属音が鳴り響き、サーナキアが刃を防いだ剣の持ち主を見る。

「やれやれ、貧弱なサーナキアちゃんは俺様が守ってやるとするか」
「ひ…貧弱だと！」
「この礼は後でしっかりと払って貰うからな」
「礼？ボクはお金の持ち合わせは…」
「ぐふふ、そんなものでなく、もっと素晴らしい支払い方法があるではないか」
「？」

サーナキアがよく判らないというような顔をする。それを見ながらシィルは悲しそうな顔をする。ああ、犠牲者が増えそうだと。

「はっ！これで後2体だね」
「そんな馬鹿な…」

フェリスが鎌でｍｋ2を斬り伏せながらそう宣言する。機関銃の乱射を受けながら、再度無傷で現れた二人。ＰＧ－７はたじろぐ。このままでは負ける、と。自分とｍｋ2の二人では目の前の人間と悪魔には勝てない。奥で戦っていたｍｋ2も1体が倒れ、もう1体が四対一で戦っているのが見える。奥に視線をやった瞬間、ルークが一気に間合いを詰める。

「またよそ見か？」
「っ！？」

ルークの剣がＰＧ－７に迫る。やられる、そうＰＧ－７はそう確信した。だが、二人の間に小型の機械が割って入り、ルークの剣を受け止める。

「なにっ！？」
「これは…」

「何をボサッとしているのですか。邪魔だからこちらに退いてください」

ルークの剣を受け止めた小型の機械にはその表面に無数の刃が取り付けられていた。後ろからパイアールの声が響き、ＰＧ－７とフェリスとランス、それぞれと対峙していた２体のｍｋ２がパイアールの指示に従い後方に退く。

「全く…ボクの手を煩わせないでよ…」
「も、申し訳ありません。パイアール様…」
「もう君程度じゃ大して役に立たないね。ＰＧ－８の開発を早急に進めないと…」
「わ、私はＰＧ－６のように廃棄処分でしょうか…」
「それは追って考えるよ。ｍｋ３も作らないと駄目そうだな。さて、人間の皆さん、君たちがここまでやるとは思っていなかったよ。下衆な存在にしてはよく頑張りましたね」

後ろにＰＧ－７とｍｋ２を控えさせながら、パイアールがルークたちに向かって拍手をしてくる。だが、それはどこか小馬鹿にしたような仕草だ。ルークとフェリスがパイアールを静かに睨み付けるが、ランスとサーナキアは声を荒げる。

「えぇい、クソガキ！その小馬鹿にしたような声を止めろ！」
「ボクがその性根を叩き直して…えっ？」

瞬間、サーナキアの頬に痛みが走る。手を当ててみると、血が流れている。

「勝手に喋らないで貰えますか？次余計な事を言ったら、斬り刻みますよ…」

「なっ…」
「これは…」
「さっきの小型機械か…それもこんなに…」

ルークたちの周囲には、先程ルークの剣を受け止めたビット状の機械が１０個程浮いていた。その全てに刃が取り付けられており、サーナキアの頬を斬ったのはこの機械だ。

「それはボクが開発した新型の兵器です。取り付けられた刃は拷問戦士の鎧すら瞬時に斬り刻む特別製。そして…」

パチン、とパイアールが指を鳴らすと、ビットが高速でルークたちの間を動き回る。

「なっ！？」
「速い…」
「馬鹿な、このボクが残像しか見えない…」
「ちっ…」

極至近距離を高速のスピードで動き回るビットに、誰一人として動けなくなる。残像しか目に移らないほどの超高速。もし下手に動けばこの刃で斬り刻まれてしまうだろう。今一撃も受けていないのは、パイアールが完全にこちらを見下しているからだ。もしその気なら、既に何人かは殺されているだろう。

「ご覧の通り、人間程度の目では残像しか見えないほどのこの超スピード。これこそがこの兵器の最大の特徴。君ら人間では、後数百年はこの技術には辿り着く事が出来ないだろうね」
「さっきのジジイと違って、このガキは本当の天才みたいだね…ぐっ！？」

フェリスがそう呟く。瞬間、フェリスの右肩に激痛が走り、血が吹き出る。ビットの刃がフェリスを襲ったのだ。

「…汚らわしい悪魔の分際で、ボクをガキ扱いしないで貰えますか？それと、そっちの口の大きい人間。貴方もさっきボクをクソガキと呼びましたね…」

「げっ！？」

ランスの周りを一気に４つものビットが囲む。高速で動き始めたビットは、残像が出来、ランスの周囲には無数のビットが動き回っているかのように錯覚するほどであった。

「下衆な人間が…立場をわきまえてものを言ってください。ボクは貴方よりも年上なんですよ」

「クソガキにクソガキと言って何が悪いんだ？」

ルークのその言葉にピクリとパイアールが反応する。ジロリとルークに視線をやり、静かな口調で今の言葉を問う。

「…今何か？」

「くくく…いくら年齢を重ねていようと、中身が伴わなければいつまで経ってもガキさ。そういう奴に限って、ガキ扱いに敏感になる」

パチン、と指を鳴らす音が響く。すると、３個のビットがルークの周囲を囲む。ルークを見下すように見ながら、パイアールが口を開く。

「命乞いは？」

「ないな、クソガキ」

ルークがそう答えた瞬間、周囲に浮かんでいたビットの内の一つが高速でルークに迫る。その軌道は不規則で、四方八方に残像が出来る。

「ルークさん！」
「ちょっと！」
「軌道は不規則、速度は高速。人間如きに見切れるものではありません。このようなスピード、味わった事もないでしょう？死ね、下衆な人間！」

パイアールがそう勝ち誇った声を出し、シィルとイオの声が辺りに響く。それを聞きながら、ルークは静かにビットの軌道を見る。確かに高速、これ程の技術は人類が現在到達出来る域を遙かに超えているだろう。だが、味わった事のないスピードではない。

「おい、ルーク！」
「あの馬鹿…」
「……」

迫るビットの前に立ち尽くしているルークを見てサーナキアとフェリスの声を出し、ランスが黙ってルークの様子を見ている。残像が残るビットの軌道を冷静に見ながら、ルークはある人物を思い出していた。こんなものではない。奴のスピードは、残像すら残さなかった。超高速、いつ移動したのかさえ判らない、目に捉えることすら不可能。手加減して貰ってなお、攻撃を碌に当てる事すら出来なかった魔王。

「くくく…この程度で見切れぬとは滑稽だな。見せてやれ、ルーク」

ルークの頭にそんな声が響いた気がした。魔王ジル、奴のスピードはこんなものではなかった。迫るビット目がけ、剣を横薙ぎに振るルーク。その瞬間、全てのビットが突然爆発した。

「なっ!?」
「っ…」

PG－7が目を見開き、パイアールが顔を歪める。当然やったのはルークではない。超高速で飛んできた何かがビットを破壊したのだ。他のみんなも状況が判らず、突然爆発したビットを不思議そうに見ている。その時、フェリスが口を開く。

「…誰?」
「えっ?」

全員がそちらに注目する。いつの間にか、ルークたちとパイアールたちの間に割り込むように一体の生物が立っていたのだ。全身が白い岩のような肌で覆われた生物。その生物を見ながら、パイアールが顔を歪めながら口を開く。

「メガラス…何故ここに…」
「パイアール、死んで貰う…」
「メガラス!?それにパイアールだと!?」
「おい、ルーク。どうした?」
「ちょっと、急に一人で行かないでよ…って、パイアール!?」
「おおっ!美人の姉ちゃん!」

ルークが出てきた名前に驚愕していると、更にこの場に一人の女性が現れる。抜群のスタイルを持ち、容姿の整ったその美女を見てランスが飛びかかろうとするが、その女性は一気にメガラスの横ま

で駆け抜けて行ってしまったため、その飛びかかりは失敗し、地面に落ちるランス。

「ハウゼルまで…これは分が悪いですね。撤退しますよ！」
「はい、パイアール様！」
「待て…」

ＰＧ－７がパイアールを抱きかかえ、背中のバーニアで一気に通路を逆走していき、２体のｍｋ２もそれに続く。メガラスが追おうとするが、その瞬間地面に倒れていた４体のｍｋ２が爆発し、煙幕が周囲を覆う。

「ああ、何て勿体ない事を！？」
「逃がさん…」
「何でパイアールがここに…とりあえず、ここで倒せればかなり大きいわね」
「っ、待て！」

爆発したｍｋ２をランスが惜しむ中、メガラスとハウゼルが煙幕をかいくぐってパイアールを追う。それを呼び止めようとするルークだが、二人は物凄いスピードでこの場から去ってしまった。

「くっ…追うぞ、フェリス！ランスたちはお帰り盆栽で先に町に戻っていてくれ！」
「どうしたんですか、ルークさん？」
「あいつら三人とも魔人だ！」
「なっ！？」
「ま、魔人！？」
「あの美人の姉ちゃんもか？」
「行くぞ、フェリス！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

ルークがフェリスを伴って魔人の後を追っていく。カオスがない今、ダメージを与えられるのは対結界を持つルークと悪魔のフェリスだけだ。下手に大勢で向かっても危険が増えるだけ。ランスやシィルのレベルが下がっている現状なら尚更だ。

「それに…折角出会えたホーネット派の魔人だ。ここで見失う訳にはいかない…」

「……」

ルークの真剣な表情を見てフェリスが黙り込む。二人で魔人を追うなど、無謀な行為ではある。だが、人類と魔人の共存というルークの目指す夢を知っているからこそ、フェリスは魔人を追うルークを止めない。その代わり、その頭を思いっきり叩く。

「っ…！？」

「あんまり焦らないの。冷静なのがあんたでしょ」

「…スマン。行くぞ」

「はいよ！」

こうしてルークとフェリスはランスたちと一時的に分かれる事になる。イオもサーナキアも信頼できる人物、それにEキーを手に入れた今、このような状況になればすぐにでも町に引き返すだろう。そのような判断からの行動であったが、結果としてこの行動は失策となる。そう、イオの事をルークはあまりにも信頼しすぎていたのだ。

ー研究コア　地下五階　空き部屋ー

「いいんですか、ランス様。すぐにでも帰った方が…」
「馬鹿者。あと調べるのはこの部屋だけなのだ。調べずに帰ってもう一度研究コアに来るなど、面倒くさい真似出来るか！」
「ま、一部屋調べるくらいなら問題ないでしょう」

ランスたちはルークに帰れと言われていたが、まだ調査をしていなかった部屋までやってきていた。ランスがその部屋の扉を開けた瞬間、部屋の中には三体の女の子モンスターが立っていた。

「お、なんだなんだ？」
「私はセェラァ。悪逆非道と噂に名高いランス！ここで倒させて貰います」
「ブレザァと申します。その下品な物体をちょん切って差し上げますわ」
「ジャンスカです！びぇぇぇん！」

そこで待っていたのはセェラァ、ブレザァ、ジャンスカという名の女の子モンスターであった。空中都市のこの場所でどこから聞いてきたのか判らないが、ランスの悪行三昧を正すためやってきたのだった。三人とも可愛い顔をしており、それを見たランスがニヤリと笑う。

「がはは、飛んで火にいる夏の虫とはこの事だな。あの機械女ちゃんで楽しめなかった分、お前らでたっぷりと楽しませて貰うぞ！」
「舐めるな！」
「返り討ちにして差し上げますわ」
「びぇぇぇん！ランス死んで！」
「ぐふふ、お前らは手出し無用。俺様一人で十分だ！」

ランスがイヤらしい顔をしながら一人でセェラァたちに突っ込んでいく。その様子を心配そうに見ているシィルにイオが話しかける。

「ねぇ、さっきの魔人って話、本当なの？」

「多分、ルークさんがそう仰るのなら本当だと思います」

「そんな！？たった二人で向かうなんて、危険じゃないのか！？」

「…ルークさんでしたら、深追いしすぎる事はないと思います。それに、ランス様とルークさんは、魔人を倒した事もあるんですよ」

「なっ！？魔人を…」

「それは凄いわね…」

その話を聞きながら、イオはランスを見る。女の子モンスター三体を圧倒しているところを見ると、そろそろレベルは１５前後といったところだろうか。縛魅了で操るなら、今が最後のチャンスかもしれない。だが、イオは迷っていた。

「（居心地いいのよね…ここ…）」

短時間ではあるが、ルークたちと共に戦いイオの中に心境の変化が現れていた。シィルもとても良い子だし、ランスとサーナキアも根は悪い奴ではない。嘘のつき甲斐もある。それに、ルークには何度も危ないところを助けられているし、何よりその強さにどことなくトーマの面影を感じる。

「（トーマのおじ様がいない今、もうヘルマンに残る理由もないし…裏切っちゃおうかな…）」

そんな事を考えながら、ランスの戦闘を見ている。すると、横から先程の話を続けているシィルの言葉が耳に入ってくる。

「はい、リーザス解放戦という戦争で魔人を討伐したんです」

その単語が、イオの頭にしっかりと響き渡った。ゆっくりと視線を動かし、シィルに問いかける。

「リーザス解放戦…参加していたの？」

「はい。ランス様とルークさん、そして私も解放戦に参加していました。お二人共中心人物だったんですよ」

「そう…中心人物だったの…」

「はい、ランス様とルークさんは協力して魔人や復活した魔王を倒したんです。ランス様は町の解放作戦を成功させたりしましたし、ルークさんは…」

その言葉は、イオが絶対に聞きたくなかった言葉。ルークを信頼し始めていた。だからこそ、そうであって欲しくなかった。

「人類最強と呼ばれるトーマ将軍を討ち取ったんですよ」

だが、その望みは打ち砕かれる。

ー研究コア　地下三階　通路ー

「もっと出力を上げてください！追いつかれてしまいますよ！」

「申し訳ありません、パイアール様」

「2号機。ここに残って足止めをしてください」

「パイアール様ノゴ命令ナラバ」

ｍｋ２が１体で足止めのためにこの場に残る。結局パイアールはこの一連の戦いでｍｋ２を５体も失う羽目になった。その上、最新型のビット兵器もだ。ＰＧ－７に抱えられながらパイアールが爪を噛む。

「くそっ…自信作のビットを簡単に撃ち落としやがって。メガラスとあの人間め、忌々しい…」

「人間？メガラスが全て撃ち落としたのではないのですか？」

「…やはり君では最早力不足のようですね。いいですか、一度しか言わないからよく聞いてください」

「は、はい。申し訳ありません…」

「先程のビット兵器ですけどね…」

一研究コア　地下四階　通路一

「え？全部メガラスが撃ち落とした訳じゃなかったの？」

「……」

ハウゼルの問いかけにコクリと頷くメガラス。パイアールを追っている二人だったが、逃げながらそこらかしこにばらまいたトラップ兵器に阻まれ、パイアールとの距離はじわじわと開いていた。そんな中、先程のビット兵器を破壊したのがメガラスだけではないという事を聞き、驚くハウゼル。

「あの人間が…？」

「……」

この問いかけにもコクリと頷くメガラス。メガラスが破壊した兵

器は9個。残りの一つは、ルークが横薙ぎに振るった剣が命中し、破壊していたのだ。

「闇雲に振っても命中するものじゃないわよね…あのスピードに人間がついてくるなんて…一体何者？」

「…ルーク」

ハウゼルの呟きに、ポツリと返すメガラス。

「え？あの冒険者の名前？そういえば一緒にいた悪魔がそんな風に呼んでいたような…あれ、ルークって確か…まさか！？」

「ホーネット様を…笑わせた男だ…間違いない…」

「うそ！？失敗した、ちゃんと顔を見ておけばよかった…それにしても、なんでこんな場所に…」

先程の冒険者がアイゼルの言っていた人間であると知り、しっかりと顔を確認していなかった事を後悔するハウゼル。その横で、メガラスが嬉しそうな声で呟く。

「ルーク…気に入ったぞ…」

「もう、メガラス。判っていたならもっと早く教えてよ…」

メガラスとハウゼルは話しながらも、物凄いスピードでパイアールを追っていった。それでもトラップに阻まれてその差は広がっていたが、後方から追ってくるルークたちとの距離はどんどんと広げていた。

ー研究コア　地下五階　空き部屋ー

「「「うわぁぁぁん、覚えてろ！」」」
「がはは、またいつでも俺様を満足させに来るがいい！」

女の子モンスター三体で十分に楽しみ、満足そうに逃げて行く三体に手を振るランス。その様子を見ていたサーナキアの怒りが爆発する。

「き、貴様ぁぁ！あのような破廉恥な行為をするとは…許せん！」
「おっ、今度はサーナキアちゃんがさっきのお礼をしてくれるのか？」
「まさかさっきの礼っていうのは…えぇい、そこに直れ。ボクが騎士としての振る舞いを貴様に…」

サーナキアが剣を抜いてランスに突き出す。が、その横をイオが無言で通っていき、ランスに近づいていく。

「ああ、イオからも何とか言ってやれ！」
「お？何だ、次はイオが俺様のハイパー兵器の虜に…ん？」

ランスの目の前まで近づいたイオが、その頬に手を当て、ランスに静かに呟く。

「ねぇ、ランスさん。私のお願い…聞いてくれるわよね…」
「……」
「お願い…聞いてくれるわよね…」
「そうだな…俺様の大事な女であるイオの頼みは聞くしかないな…」

イオの目を見ながら、ランスがそう答える。イオがランスの頬から手を離し、シィルとサーナキアの方に向き直る。

「イオさん…？」
「さあ、ランス。騎士としてボクと勝負だ！」
「イオ、どうする？」
「…勝負しましょう。その後は、好きにしてしまっていいんじゃない？」
「がはは、そうだな。イオがそう言うなら間違いないだろう！」

むくりと立ち上がり、剣を抜いてサーナキアに迫っていくランス。そのランスの様子と先程イオから感じた魔力を思い出し、シィルが声を荒げる。

「イオさん！貴女まさかランス様を…」
「…ランスさん。サーナキアちゃんをいたぶった後は、シィルちゃんにもお仕置きが必要みたいよ。私、シィルちゃんに困らされているの」
「がはは、シィル！奴隷の分際でイオを困らせるんじゃない！俺様がたっぷりとお仕置きしてやる！」
「ランス様！」

シィルの悲痛な声はランスに届く事はなかった。サーナキアを倒し、その処女をランスが奪う。シィルもランスにお仕置きを受け、それを助けようとしたサーナキアが再度犯される。そのままサーナキアはランスに恨み言を残してどこかへと行ってしまった。その様子を冷たい視線で見ながら、イオが呟く。

「ルーク…絶対に許さない。必ずおじ様の仇は討つ…」

こうして一人の復讐鬼が誕生してしまった。これが、ルークの失策。万全に見えていたパーティーは、一つのすれ違いから、ルーク

の知らぬ間に完全に崩壊してしまっていた。その後、イオたちはカサドの町に戻る。既に暗くなっていたため、フロンの店で一晩過ごす事になる。その日、ルークとフェリスが帰ってくる事はなかった。しっかりとランスの洗脳を続けながら、ルークの帰りを待つイオ。その胸中に宿るのは、最早復讐心のみである。

ー食料コア　地下一階ー

「…ひょっとして見失ったのか、俺らは？」
「一晩中捜し回る前に気がついて欲しかったけどな！」

ルークの言葉を聞いてフェリスが涙目で答える。一晩中走り回ったフェリスはクタクタであった。

「…いや、もうちょっとだけ捜していくか」
「冷静じゃない！全然冷静になってない！」

さらに捜索を続けようとするルークにフェリスが叫ぶ。やはり魔人の事となると全然冷静じゃなくなるようだ。涙目のフェリスを引きずりながら、更に探索を続けるルーク。そして、それとほぼ時を同じくして三機の飛行艇が遂にイラーピュに降り立つのだった。

第７７話　迫り来るＰＧシリーズ（後書き）

［人物］

メガラス　（４）
ＬＶ　９７／１４６
技能　剣戦闘ＬＶ１

　ホーネット派に属するホルスの魔人。アイゼルの真意を読み取るが、闘神都市の危険度も知っていたため、自分が変わって調査に乗り出した。一瞬の邂逅であったが、高速の世界に一歩踏み込んでいるルークの事を気に入った様子。

ラ・ハウゼル　（４）
ＬＶ　８８／１２０
技能　魔法ＬＶ２

　ホーネット派に属するエンジェルナイトの魔人。魔人戦争を経験しているという理由から、メガラスのパートナーとして選ばれた。現在は調査よりも、偶然出くわしたパイアール討伐を最優先事項としている。

パイアール
ＬＶ　１００／１２０
技能　魔法ＬＶ１

　ケイブリス派に属する人間の魔人。ナイチサの時代に魔人を捕らえ、魔血魂を取り出し自ら魔人化。類い希なる頭脳を持ち、彼の科学技術は人類が数百年は到達できないとされており、紛れもない天才。不治の病にかかった最愛の姉を冷凍保存しており、ＰＧシリーズはその彼女を復活させるための実験材料に過ぎない。自身の強さはそれ程でもないが、新型の兵器の数々で敵を蹂躙する。

ＰＧ－７
ＬＶ　１／１
技能　剣戦闘ＬＶ１　魔法ＬＶ１
　パイアールが作り出したＰＧシリーズの最新型。攫ってきた少女を改造したもので、元は普通の人間である。ルークとフェリスには遅れを取っていたが、全身が兵器であり、その実力は一国の将軍クラスにも匹敵する。だが既に次のＰＧ－８の開発をパイアールは進めており、廃棄処分をされるのではないかと内心びくついている。

ＰＧ－ｘｍｋ２
ＬＶ　１／１
技能　機体によって可変
　パイアールが作り出した量産型ＰＧシリーズ。本来はＰＧ－ｘを束ねる指揮官機だが、今回はパイアールとＰＧ－７指揮の下、雑兵として働く。実力はレベル２５相当の冒険者と同等といったところ。パイアールの命令には絶対服従で、死すらも厭わない。

［モンスター］
セェラァ
　二つ星レア女の子モンスター。制服三姉妹の長女で、正義感からランスに強い敵対心を持っている。

ブレザァ
　二つ星レア女の子モンスター。制服三姉妹の次女で、丁寧な口調で強い毒を吐く。

ジャンスカ
　二つ星レア女の子モンスター。制服三姉妹の次女で、いつも泣いてばかりいるが攻撃力は一番高い。

［その他］

ＰＧシリーズ

パイアールが作り出した女性型戦闘兵器、パーフェクト・ガールシリーズ。攫ってきた少女を改造したもので、老化は殆どせず、パイアールの命令には絶対服従。処女性を重視しており、純血を失うと洗脳が解ける仕組みになっている。姉を永遠の美と強さを持たせた状態で復活させるための実験材料。ＰＧ－１０までで実験を完了し、姉を復活させる予定である。ＰＧシリーズはパイアールの道具と認識されており、その経験値は全てパイアールに入る。

第78話　いざ、イラーピュへ

―リーザス城　中庭―

「それじゃあ、ダーリンを絶対に見つけてきてね。手ぶらで帰ったら許さないんだから」
「かなみ、他の皆様と力を合わせてランス様たちをどうか救出してくるように」
「お任せください、リア様、マリス様」

チューリップ4号の前でリアとマリスがかなみに激励を送る。救助隊の面々は、今正に出発しようとしているところだった。自由都市連合軍の面々は既に揃っており、かなみ以外のリーザス陣営の出発準備が終わるのを待っている状態であった。

「これが…これが勝利のチョキです！ビクトリー！」
「はいはい。嬉しいのは判ったから、あんまりはしゃがないの」

トマトが右腕を高々と掲げてピースサインをする。以前リーザス解放戦の際にはじゃんけん勝負に敗れたトマト。リベンジ成功がよっぽど嬉しかったらしい。それを呆れた様子で眺めるロゼ。彼女も救助隊の一人だ。

「マリア、志津香、俺の分も頑張ってきてくれよな。真知子も気をつけてな」
「ううう…ミルも行きたかった」
「ありがとう、ミリ」
「ま、適当に頑張ってくるわ」

「ふふ、ミルちゃん。必ずランスさんたちは見つけてくるから、安心して待っていてね」

留守番組のミリとミルも見送りに来ていた。マリアと志津香がしっかりと返事をし、真知子がミルの頭を撫でる。彼女も姉という立場、妹の面倒見は慣れているのだろう。

「それと…香澄も気をつけるんだよ」
「ありがとうございます。でも、私は戦闘要員では…」
「あ、そうだった。はい、香澄」

2号機の調整をしていた香澄がミリに返事をすると、突然何かを思い出したかのようにマリアが声を出し、香澄にあるものを手渡してきた。それは、チューリップ1号。

「あ…あの、これは…？」
「いやー、何があるか判らないでしょ？大丈夫、護身用に持っていればいいだけだから。でも、いざという時は期待してるわよ！」
「ひぇぇぇ…」
「…何気に、マリアさんってああいう事するわよね…」
「あの子、時々周りが見えなくなるから…助手の香澄は結構被害被っていると思うわ」

手渡されたチューリップ1号にあたふたとする香澄。その様子を見ながら真知子と志津香がこそこそと小声で話す。その場所から少し離れた位置でアレキサンダーが瞑想をしていた。そこに、じゃんけんに負けてメンバーから外れたルイスが近寄ってくる。

「よぉ、瞑想中かい？話しかけない方が良かったかぃ？」
「いえ、問題ありません。ルイス殿は今日も傭兵の仕事を？」

「ま、見送りくらいわな。残念だぜ、一緒に行けないなんてよぉ」
「申し訳ありません…」
「謝んなよ。おめぇの実力は知ってるし、他の嬢ちゃんたちも十分戦力になるだろ。…ルークの旦那を頼んだぜ！」
「勿論です」

軽く右拳を合わせるアレキサンダーとルイス。その会話が耳に入ってきていた真知子が口を抑えながら一人考え込む。心なしか頬が赤い。

「（やっぱりあの二人ルークさんの事が…いえ、そんなはずは…ああ、でも…）」
「どうかしたの、真知子さん」
「ふふっ、何でもないわ」

マリアの質問に極めて冷静に答える真知子だったが、その頭の中はとてつもない事になっていた。その時、リーザス側の人員が準備を終えて中庭にやってくる。

「お待たせしました」
「かなみ、一緒に行けるなんて嬉しいよ」
「一緒にルークさんを助け出そうね、メナド！」
「リーザス軍最強のリックさんも一緒だなんて、心強いです！」

まず歩いてきたのはリックとメナド。各色の将軍が救助隊に志願したが、最終的にはリーザス最強の軍である赤の軍に向かわすというリアの決定で、救助隊には赤の軍と親衛隊からメンバーが選ばれる事となったのだ。隊長、副隊長自らの参戦にマリスは若干頭を抱えたが、リアが乗り気なのでは仕方がない。その後ろから親衛隊の三人が歩いてくる。先頭に立っているのはレイラだ。

「レイラさんもよろしくお願いしますね」
「よろしく。精一杯頑張らせて貰うわ」
「後ろの方たちは今回のメンバーの方ですか？」
「ええ…一応は…」
「きゃはははは！ジュリアちゃんでーす！」

真知子の問いかけに、レイラの後ろに控えていた赤い髪の親衛隊隊員が突然笑い出す。呆けたような顔になる真知子。そのままリアと仲良さそうに会話しているジュリアを見ながら、志津香がレイラに問いかける。

「あの子は…使えるの？」
「その…リア様と仲が良くて今回推薦された子なの。戦力としては…あまり期待しないで…」
「はぁ…」
「あ、その代わりこの子は十分戦力になるから安心して」

ため息をつく志津香。それを見て慌てて取り繕うようにもう一人の親衛隊隊員を前に出す。

「親衛隊隊員、チルディと申します。短い間ですけれど、どうぞよろしくお願いしますわ」
「あら？貴女はゲリラ軍の…」
「お久しぶりです、志津香様、マリア様。どこまでお役に立てるかは判りませんが、不肖このチルディ。出来る限りの尽力はさせていただきますわ」
「…あっちの娘とは偉い違いね」
「今年入隊してきた娘ではピカ一よ。実戦経験を積ませようと思って選出したの」

志津香とレイラが話しているのを聞きながら、チルディがリアとリックの方を見る。

「（ふふ…浮遊都市探索なんかに興味はないけれど、リック様の剣技を間近で見る良いチャンスですわ。それに、この救助に成功すればルーク様とリア様、両方に名前を覚えて貰えますわ…これはわたくしがレイラから隊長の座を奪う日も近そうですわね）」

くっくっく、と内心で色々な思惑を考えながらほくそ笑むチルディ。その表情を遠目で見ながらロゼがニヤリと笑う。

「（あらら、随分と野心の強そうな娘ね…）」

ポーン、と鏡でお手玉をしながらチルディの野心を一発で見破るロゼ。そんなこんなで出発が迫る。1号機には自由都市連合として、マリア、志津香、トマト、真知子、ロゼ、アレキサンダーが乗り込む。2号機にはリーザス軍選抜として、香澄、かなみ、リック、メナド、レイラ、ジュリア、チルディが乗り込む。乗り込む直前、リックとアレキサンダーの目が合う。

「…リック殿、また腕を上げられましたな」
「アレキサンダー殿も随分と…共に頑張りましょう」
「ええ。それと…救助が終わったらお手合わせ願えますか？」
「望むところです」

共にジル戦ではブレス後に立ち上がる事の出来た強者二人。この救助隊のエースだ。静かに笑いあいながら、互いの飛行艇に乗り込む。全員が乗り込んだのを確認し、マリアが声を上げる。

「さぁ、出発するわ！待ってなさいよ、ランス、シィルちゃん、ルークさん！」
「2号機、いつでもいけます！」
「よーし、発進！！」

マリアの宣言と共に飛行艇がイラーピュに向けて飛び上がる。見送り人の声を背中に聞きながら、リーザス救助隊はこうしてイラーピュに向けて出発したのだった。

ーゼス　王者の城ー

王者の塔の外周にある庭。そこにアトラスハニーから発見された飛行艇が置かれていた。飛行艇を見ながら炎の将軍サイアスと氷の将軍ウスピラが話し合う。

「これが…本当に動くの…？」
「ま、テスト飛行もしてみたみたいだし、そうみたいだぜ。それよりも、無理言ってついてきて貰う事になって悪かったな」
「別にいい…」
「これを機にあんたとの仲も発展してくれるとありがたいんだがな」
「それはない…」
「相変わらずなこって…」
「ふっ…お主も相変わらずじゃがな…」

そんな事を話しているサイアスの前に、緑色のローブを着た老人と金髪の美女がやってくる。雷の将軍カバッハーンと四天王ナギだ。カバッハーンとは学生時代から交流があるサイアス。未だに頭の上がらない人物だ。深々とカバッハーンに頭を下げる。

「雷帝も協力して貰って申し訳ありません」
「構わんよ。むしろ、誘わなかったらお主に電撃を落としているところじゃ」
「これは手厳しい…」
「それに聞いたぞ。本当の目的は人捜しなんじゃろ?それも、あの10年近く前に一緒に戦ったルークの小僧なんじゃって?」
「雷帝、その事は…」
「なーに、余計な連中には喋っとりゃせんよ。このメンバーくらいには言っておいても大丈夫じゃろ」
「ルーク…?知り合いなの?」
「あ、ああ。行方不明になっていた俺の旧友だ。イラーピュにいる事が判ってな…」
「それなら…早く救出してあげないと…」
「…スマン、恩に着る」
「さて、あの小僧がどれ程強くなっておるか楽しみじゃわい」

ニヤリと笑うカバッハーン。かつて共にモンスターを討伐した事のあるルークの成長が楽しみなのだろう。イラーピュへ行く理由に関して、結果として騙していたにも関わらず、ルーク救出にすぐに納得してくれたウスピラに感謝しつつ、カバッハーンの後ろに立っているナギに頭を下げるサイアス。

「アスマ様もよろしくお願いします」
「ああ」
「ふむ、しかし凄い魔法じゃの。本当にアスマ様の事をアスマ様としか呼べんわい。おっと、これじゃ訳が判らんの。はっはっは」
「ユニークな魔法…」
「お父様の開発した偉大な魔法だからな」

そんなやりとりをしているのを横目で見ながら、サイアスが顎に手を当てる。カバッハーンの言うように、ナギの事をアスマとしか呼ぶ事が出来ない。いや、この魔法の真に恐ろしいのはそれだけではない。筆談などの手段を使っても、全てアスマとなってしまうのだ。暗号で伝える事も実験してみたが、結果は同じ。ナギと伝えようとしたはずが、全てアスマとなってしまう。

「（それ程までして何故名前を隠す…調査を急がなければ…）」

「大変お待たせしました！キューティ・バンド、雇った傭兵を連れて来ました」

「おぉ、警備隊長のお嬢ちゃんも一緒か。聞いておるぞ、最近頑張っておるようじゃの」

「あ、ありがとうございます！まさかカバッハーン様に顔を覚えていただけているとは…」

やってきたキューティが深々と頭を下げる。厳選された傭兵部隊との顔合わせはこれが初めて。カバッハーンが嬉しそうな声で言葉を続ける。

「ふむ、厳選された傭兵か。どのような強者がやってくるのかのぅ…」

「おう、そうだ。一体どんな人材を選んだんだ、キューティ？」

「楽しみ…」

「強い相手ならば手合わせして貰うのもいいか。強くなればお父様が喜ぶしな」

サイアスたちの言葉を聞いてピシッとキューティが石化する。四天王と四将軍がこれ程までに期待しているのだ、あの面子を。ダラダラと汗をかき、ギギギ、と首をゆっくりと動かして言いにくそうに口を開く。

「あ…あのですね…その件なのですが…」
「ん？」
「「はっはっは！」」

キューティが言い訳をしようとした瞬間、突如笑い声が響き渡った。不思議そうにそちらに視線を向けたキューティ以外の四人が見たのは、掛け声と共に飛び上がる影二つ。華麗に四人の前に着地したかと思うと、高らかに宣言をしてきた。

「愛の戦士、シャイラ・レス！」
「勇気の戦士、ネイ・ウーロン！」
「「我ら二人に前衛はお任せを！」」
「…雷撃」
「「ぎゃぁぁぁぁ！」」

カバッハーンがノーモーションで雷撃を二人に放つ。悲鳴を上げながらギリギリその攻撃を躱すシャイラとネイ。

「おお、避けるのはそれなりに得意みたいじゃの」
「な、な、な、何すんだこのジジイ！」
「殺す気ですか！？」
「んっ！？」
「「すいませんでしたぁぁぁ！！」」

必死に抗議をする二人だったが、カバッハーンの一睨みですぐさま土下座の体勢になる。サイアスが呆れたような顔をしながらキューティに問いかける。

「…あれが厳選した人材か？」

「チェンジ…」
「見るからに弱そうだぞ」
「あの…アニス様がメンバーになるという噂が流れてしまったらしく、碌に人が集まらなかったんです。それでやむなく…」

キューティの言葉を聞いてサイアスが頭を抱える。まさかメンバーに入らなくてもこのように迷惑をかけられるとは。歩く災厄とはよく言ったものである。

「おかしいな…掴みとしては文句なしの挨拶なんだろ、あれ？」
「ええ、以前バードという冒険者仲間に教わった由緒ある自己紹介のはずなんだけど…」

ぶつぶつと話し込むシャイラとネイ。戦力としては到底期待出来なそうだ。そこへ、一人のシスターが歩いてくる。その肩にはもう一人女性が寄り添っていた。

「セル・カーチゴルフと申します。この度はヒーラーとして調査隊に参加させていただく事になりました。未熟者ではありますが、よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げてくる神官。彼女が学生の代わりにヒーラーとして調査隊に参加する女性のようだ。

「ふむ…こちらは問題なさそうじゃの。カバッハーンじゃ、よろしく頼む」
「サイアスだ。今度一緒にお茶でもどうかな？」
「ウスピラ…回復役は貴女だけだから、期待しています…」
「アスマだ」

一斉に自己紹介をされるセル。飛び出てきた名前を聞いて目を見開く。

「わ、私の間違いでなければ、お三方は四将軍の方では…？」
「うむ、一応雷の将軍をしておる」
「炎の将軍だ。これ、俺の連絡先だ」
「氷の将軍…」
「だ、大規模な調査なんですね…アスマさんもひょっとして凄い役職なんですか？」
「いや、私はただの一魔法兵だ」
「そうなんですか。よろしくお願いしますね」
「ああ」

セルとやりとりしたように、ナギは一魔法兵としてこの調査隊に参加している。名前同様、彼女を四天王だと口に出す事は出来ない。それもサイアスは調査済みだ。あまりにも徹底している。

「それで、もう一人はその寝ている娘かの？」
「あ、はい！セスナさん、起きてください！」
「セスナさん…」
「…おおっ！」

出発直前の顔合わせだというのに、セルの肩に寄り添って寝ている少女をキューティとセルで起こす。鼻提灯が割れ、目を覚ました少女が寝ぼけ眼でサイアスたちを見てくる。

「…セスナ・ベンビール」
「それが君の名前かな？」

コクリと頷くセスナ。

「…働かなければ、食べていけない」
「なるほど…出稼ぎという訳かな？」

この問いかけにもコクリと頷くセスナ。サイアスがジッと彼女を見つめる。決して強くは無さそうだが、あちらの二人よりはマシだろうか。正直、強さの程がよく判らない。

「それで、君の実力なんだが…」
「…ぐぅ」
「立ったまま寝ている…器用な娘…」
「サ、サイアス様たちの前で何て事を！」
「…失礼な娘だな」
「はぅっ！」

ナギの言葉がキューティィにクリティカルヒットする。このセスナをメンバーに選んだのは自分。つまり、監督責任も全てキューティィにある。崩れ落ちるキューティ。

「サイアス様。もういつでも出発できますが…？」
「さて…これで一応メンバーが揃った訳だが…」

飛行艇を整備していた魔法使いからいつでも出発できますと声をかけられるサイアス。周囲のメンバーを見回す。

「セスナさん…もうすぐ出発みたいですよ…」
「ぐぅ…ぐぅ…」
「出世がぁぁぁ…私の出世がぁぁぁ…」

暢気な二人と頭を抱えて転げ回るキューティ。

「ほぉれ、出発前にワシが鍛えてやろう。避けきってみせよ」
「ぎゃぁぁぁ！このクソジジイ！」
「ちょっ、まっ、死ぬ！感電死する！」

カバッハーンが楽しそうにシャイラとネイに向かって電撃を放っていた。必死に逃げ回るシャイラとネイ。

「なんと…ジャンケンには基本形の三つ以外にも手があるのか…」
「そうです、アスマ様…これが十三奥義の一つ『ジャッカル』…チョキの五倍の威力を誇ります…」
「これはお父様にも教えてさしあげなければ…」

いつの間にか仲良くなっているウスピラとナギがジャンケンについて語り合っている。

「まさか…俺が突っ込み役か…？」

少しだけ千鶴子の気持ちが判った気がしたサイアス。この少し後、リーザス組とほぼ時を同じくしてゼス組もイラーピュへと出発するのだった。

―リーザス城　チューリップ４号１号機―

「こちらマリア。香澄、聞こえていますか。どうぞ」
「こちら香澄。聞こえています、マリアさん。どうぞ」
「こちらリア。いいなぁ、やっぱりリアも行きたかったなぁ…」

リーザス上空に浮かぶ二機の飛行艇。リーザス城から出発したマリアたちだ。互いに連絡を取り合いながらイラーピュを目指し、リーザス城とも通信で連絡を取っている。初めの内はマリスが通信に出ていたが、いつの間にかリアが占領していた。

「絶対にダーリンを連れか…プッ…ピー…ガッ」
「リア様？」
「どうしたの、マリア？」
「魔法通信が途絶えたわ。この辺りは魔法結界が張られているみたい」
「ありゃー、困りましたですねー」
「ま、それだけイラーピュが近いって事でしょう」
「それにしても不思議なものね…これが本当に動くんですもの」

真知子が不思議そうにチューリップ４号の床を見る。

「うふふ、私の自信作だもの。さ、飛ばすわよ。ヒララエンジン最大出力！」

気をよくしたマリアが速度を上げる。ガタガタ、と音がして機体が揺れ始める。

「ちょっとマリア…す、少しゆっくり…」
「飛べ…飛べ…私のチューリップ！エンジン良好！」
「目が据わっていますですー！」
「マリア殿。少し冷静に…」
「面舵いっぱーい！取り舵いっぱーい！あっ、見えてきたわ！」

マリアがそう声を上げる。が、他のメンバーは揺れる機体にそれどころではない。唯一ロゼだけが指示された方向を見て声を出す。

「あれがイラーピュ…」

雲を割った先に一つの島が宙に浮かんでいた。溢れる緑の大地と、何やら塔のようなものも見える。

「うふふ、どうやら人口の建物もあるのね。ワクワクしちゃう」

「マリア…いい加減速度を落として着陸を…」

「もう駄目です…トマトはリバースカードオープン目前です…うぷっ…」

「あと少しだから耐えて、トマトさん！」

気持ち悪そうにしているトマトを必死に励ます真知子。正直なところ、もう少し周りを旋回して調査をしたかったマリアだったが、流石に可哀想なので着陸する事にする。

「そうね、それじゃあ一番高い塔の近くに着陸するわね…って、あれ？」

「なんか凄くイヤな言葉を聞いた気がするんだけど…って、煙が出てるわね」

「ちょっ！？」

ロゼが後方から煙が出ている事を発見する。額に汗をかきながら、マリアが必死に取り繕う。

「だ、大丈夫！ちょっと調子が悪いみたいだけど、着陸くらいなら出来るから。面舵いっぱーい！」

バキッという音が響き渡る。

「あっ…ハンドルも壊れた…」
「マリアぁぁぁぁ！！」
「ああ、こりゃ死んだわ」
「達観しないでください、ロゼ殿！」
「ルークさん…もう貴方には会えないのかしら…」
「おぉぉぉぉ…トマトはもう限界ですぅぅ…」

1号機は火を吹きながら横へと逸れていく。

―リーザス城　チューリップ4号2号機―

「最初は不安だったけど、全然問題なかったわね」
「安全第一ですから」

レイラが爽やかな風を受けながらそう口を開くと、香澄がそれに答える。2号機はマリアのように無茶な速度は出さず、安全第一で運転していた。1号機の姿は雲に隠れて見えないが、こちらもイラーピュが見えてくる。

「あそこにルーク殿たちが…」
「待っていてください、ルークさん」
「きゃははは、1号機面白そう！」
「1号機？」

急に笑い出したジュリアの言葉にメナドが首をかしげる。すると、チルディが震えた声で横の方向を指さす。

「あの…1号機が煙を出してこちらに近づいてくるんですけれど…」

「えっ！？」
「香澄さん、回避を！」
「駄目です、間に合いません！」

直後、1号機と2号機が接触し、2号機からも煙が出始める。パニックになる2号機の乗組員。

「ひぃっ…」
「いやっ…まだルークさんに気持ちを伝えて…」
「あわわわわわわ…」
「きゃはははは」
「この状況で笑えるなんて、どんな神経していますの！？」
「皆さん、落ち着いてください。自分に掴まって離れないように！」
「緊急着陸します！」

こうして両機は仲良くイラーピュへと落ちていった。両機はほぼ同じ位置に着陸し、奇跡的に全員無事だったが、マリアの頬は千切れるのではないかという勢いで志津香に引っ張られる事になるのだった。

第７８話　いざ、イラーピュへ（後書き）

［人物］

見当かなみ　（４）
ＬＶ　３３／４０
技能　忍者ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。ルーク捜索に闘志を燃やしている。メナドと鍛錬を積み重ね、その実力はリーザスでも上位に位置するほどにまでなった。

マリア・カスタード　（４）
ＬＶ　２０／３５
技能　新兵器匠ＬＶ２　魔法ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。チューリップ４号の開発に大忙しだったため、ジル討伐時よりもレベルは下がっている。墜落の原因を作った張本人。今は反省している。

魔想志津香　（４）
ＬＶ　３１／５６
技能　魔法ＬＶ２
　リーザス救助隊メンバー。一人鍛錬に励んでいたため、かなみ同様しっかりとレベルは上がっている。マリアにお仕置きはすんだため、多少気は晴れた模様。

香澄　（４）
ＬＶ　４／２４
技能　新兵器匠ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。マリアとはそれなりに打ち解けたため、先生ではなく、最近ではさんづけで呼んでいる。今回の被害者筆頭。

トマト・ピューレ　（４）
ＬＶ　２２／３７
技能　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。アイテム屋を営む傍ら、しっかりと鍛錬にも励んでいた。十分前線に立てるレベルの戦士へと成長。リバースは何とか持ち堪えた。

芳川真知子　（４）
ＬＶ　１／５
技能　戦術ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。じゃんけんに勝利し、見事メンバー入り。戦闘は不得手だが情報収集能力は頼りになる人物。

ロゼ・カド　（４）
ＬＶ　１３／２０
技能　神魔法ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。ルークに鏡の調査報告をするために志願しただけだと本人は言う。その着眼点の奇抜さから、ＡＬ教上層部からは危険視されている異端の神官。

アレキサンダー　（４）
ＬＶ　４３／７７
技能　格闘ＬＶ２
　リーザス救助隊メンバー。なぐりまくりたわぁで修行を積み、大陸でも屈指の格闘家へと登り詰めているが、本人はまだまだ満足していない。救助隊のエースの一人。

リック・アディスン　（４）
ＬＶ　４６／７０

技能　剣戦闘ＬＶ２
　リーザス救助隊メンバー。自ら志願し、救助隊に参加したリーザス最強の戦士。救助隊メンバーでも最強の人物で、アレキサンダーと共に最も頼りにされている存在。

メナド・シセイ　（４）
ＬＶ　３５／４６
技能　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。かなみと共に鍛錬を積み、今回の救助に意気込んでいる。憧れのルークとの再会を待ち望んでいる。

レイラ・グレクニー　（４）
ＬＶ　３８／５２
技能　剣戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　リーザス救助隊メンバー。リック、アレキサンダーに次ぐ救助隊の三番手。ジュリアのお守りを押しつけられた苦労人。

ジュリア・リンダム
ＬＶ　１３／３８
技能　剣戦闘ＬＶ０
　リーザス救助隊メンバー。リアと親友の為、行きたいと頼んだら無理矢理ねじ込んで貰えた。戦闘においては殆ど役に立たない。

チルディ・シャープ（４）
ＬＶ　２４／４４
技能　剣戦闘ＬＶ２
　リーザス救助隊メンバー。親衛隊の新人では屈指の実力を持つホープ。実戦経験を積ませるため、メンバーに選ばれた。

リア・パラパラ・リーザス　（４）

ＬＶ　２／２０
技能　なし
　リーザス国女王。自分も救助隊についていくと喚いたが、なんとかかなみとマリス宥める。チューリップ４号製作資金をほぼ全額援助している。

マリス・アマリリス　（４）
ＬＶ　３２／６７
技能　神魔法ＬＶ２　剣戦闘ＬＶ１
　リーザス国筆頭侍女。救助隊についていってはという意見も出るが、リアの側を離れる気は毛頭ないらしく、丁重に断った。

ミリ・ヨークス　（４）
ＬＶ　２４／２８
技能　剣戦闘ＬＶ１
　居残り組。密かに鍛錬を積んでいたため、内心かなり残念に思っている。

ミル・ヨークス　（４）
ＬＶ　１８／３４
技能　幻獣召喚ＬＶ１
　居残り組。また地味な印象しか残せないと枕を濡らす。

ルイス・キートワック
ＬＶ　２７／３９
技能　剣戦闘ＬＶ１
　居残り組。わざわざ仕事をキャンセルして参加しようとする辺り、本当に義理堅い男である。因みにホモではない。

［技能］

戦術

戦術を立てる才能。技能保有者は軍師として重宝される事が多い。

第７９話　揃い踏み

―イラーピュ　草原―

「ひとまず、全員無事で何よりです」
「けほっ、けほっ、ジュリアちゃん埃で汚れてしまいました。お風呂に入りたーい」
「埃を払いたいというのには同感ですわね」

墜落したチューリップ４号の前に救助隊メンバーが集まっていた。幸いな事に大きな怪我を負った者はおらず、擦り傷程度で済んでいた。その怪我もロゼがすでに治療済みだ。

「あはは…本当にみんな無事で…」
「んっ！？」
「…何でもないです」

首から「私は悪い事をしました」というプラカードを下げ、正座しているマリア。何か発言しようとしたが、志津香に睨まれすぐに口を閉じる。

「ふふ、捨て犬みたいで可愛いわね」
「はぁ…自業自得です、マリアさん」

ロゼがマリアを見ながらクスクスと笑い、香澄がため息をつきながら呆れた様子で見ている。レイラが周囲を見回しながら、口を開く。

「ここがイラーピュね。何とか上陸出来てよかったわ」
「そうですね、レイラさん」
「ここにルークさんたちが…」
「香澄殿。チューリップ４号の修理は可能ですか？」

レイラの言葉にかなみとメナドがグッと拳を握る。数ヶ月行方不明だった思い人のいる場所にようやく到着したのだ。自然と力が入る。アレキサンダーがチューリップ４号の点検をしていた香澄に問いかけるが、香澄は首を横に振りながら答える。

「駄目ですね、完全に壊れてしまっています…ここじゃあ部品も手に入らないでしょうし…」
「直らないものにいつまで執着していても、仕方がないわね」
「そうね。冒険に事故は付き物。それよりも、これからの事を考えましょう」
「ひとまず、テントでも作りましょうですー！」
「そうですわね。この場所にどのようなモンスターがいるかも判らないとなると、万全を期して戦うためには後方基地は必要不可欠ですわ」
「うん、やろう。ジュリアはみんなの邪魔にならないように応援しているね」
「私もみんなの邪魔にならないようにサボっているわ」
「言い訳くらいまともに考えなさいよ、ロゼ…」

一行はチューリップ４号から無事だった物資を運び出してテントを張る。その様子を見ていたマリアも手伝おうとするが、再び志津香に睨まれる。

「あぅ…」
「はぁ…反省してるの？」

「反省してます…」
「しょうがないわね…」

志津香からようやく許しが出て、マリアも無事な物資の確認を手伝い始める。遂にイラーピュへと到着したリーザス救助隊。だが、その様子を見ている者たちがいた。

―上部司令室―

「ビッチ様、闘神都市の探査システムに反応があります。侵入者です」
「なに?見せてみろ」
「はい」

メリムが機械を操作すると、目の前の鏡板に監視モニターから映像が映し出される。それは物資を運び出しているリーザス救助隊の姿だった。

「これは…」
「ちっ、リーザスのクソどもが。奴らもこの闘神都市の凄さを嗅ぎつけてやってきたみたいだな」

ビッチが文句を言いながら映像をまじまじと見る。映し出されているのは女性ばかり。

「ふむ…見たところ女ばかりで、男は騎士が一人と武闘家が一人か。まったく、馬鹿な奴らだ。こんな戦力でここまでやってくるんだからな」

「（こちらもまともな戦力は俺とデンズ、それと女のイオだけだろうが。よっぽどあちらの方がマシだと思うがね…）」

ヒューバートが内心悪態をつく。イオが冒険者と合流するためにこの場を離れる際、あまりビッチを刺激しすぎるなと念を押していったのだ。一応それに従い、多少自重気味のヒューバート。映し出されるリーザス軍を見ながら、メリムが心配そうな声を出す。

「戦いがおきるのですか…？」
「当然だ。リーザスのクソ共は生きている価値などない。メリム、奴らの場所はどこかね？」
「食料コアの端のようです」
「では、そこに向かうぞ。リーザスのクソ共にわたくしの力を思い知らせてやるのだ。ケヒャケヒャ！」
「…足手まといなんだからあんまり前に出るなよ」
「ん？何か言ったか、ヒューバート」
「別に、何も…」
「さあ、行くぞ！案内しろ、メリム！」
「は、はい」

メリムに先導させ意気揚々と食料コアへ向かうビッチ。その後を追おうとしたヒューバートだったが、ふと鏡板に映し出されていた騎士が視線に入る。特徴的な赤い鎧を身に纏った騎士。リーザス赤の軍の者だろう

「ん…あいつは…」
「ヒューバート、早くしたまえ。出撃だぞ」
「ヒューあにい、な、なにかあっただか？」

立ち止まったヒューバートにビッチとデンズが声をかけてくる。

「あのリーザスの騎士、もしかしたら…」
「す、すげぇ奴だか？」
「いや…気のせいだろう。奴は将軍だから、こんな場所に調査に来るはずがない…」
「ヒューバート、私語が多いぞ。慎みたまえ」
「うるせぇ、馬鹿」
「なっ…ヒューバート！！」
「さ、さあビッチ様。こちらです」
「くっ…この若造め。評議委員のわたくしに逆らうとどうなるか、国に帰ったら思い知らせてくれるわ」

イオの言いつけをあっという間に忘れ、ビッチに悪態をつくヒューバート。もう一度だけ鏡板を振り返り、ビッチの後についていく。

「（そうだ…いる訳がない。赤い死神が、こんな所にいる訳が…）」

こうしてヘルマン調査隊は食料コアへと向かう。部屋を出て一分ほど後に捕捉した、もう一組の侵入者の存在を知らぬまま、出発してしまったのだった。

―イラーピュ　草原―

「ふぅ…一応完成したわね」

ジュリアを除く全員の協力の下、無事だった物資の運び出しは完了し、テントもチューリップ４号に立てかけるような形で完成した。

「うるうる…私のチューリップ４号…こんな姿になっちゃって」
「マリア、あんたのせいでしょうが！」
「反省してます」
「テント、テント。キャンプファイヤーはいつするの？」
「ジュリア、遊びじゃないんだから親衛隊の一員としてちゃんとしなさい！」
「はーい、レイラ隊長！」
「（嘆かわしいですわ…何故このような女が親衛隊に…）」
「さて、これからどうしましょうか」
「勿論、ルークさんたちを捜すです！」

トマトが腰に手を当てて宣言するが、具体的な方針にはなっていない。真知子がみんなを見回しながら口を開く。

「とりあえず、リーダーを決めて行動しましょう。その方が方針も立てやすいわ」
「それならリックさんで決まりね」
「いえ、マリア殿。それは出来ません」
「え？どうしてですか、リックさん」

マリアの提案を断るリック。かなみが不思議そうに問いかける。

「自分の地位ではリーザス親衛隊隊長レイラ殿を先んじて上に立つ訳には参りません。レイラ殿にして頂いた方がよろしいかと」
「あら、それなら私も無理よ。親衛隊隊長と正規軍司令官は同じ身分だもの。リックの上に立つ事は出来ないわ」
「それじゃあ、誰か別の人に…」

そう口を開くかなみに全員の視線が集中する。慌てたように手を振るかなみ。

「り、リックさんとレイラさんの上に立つなんてとんでもないです！それに、影の職業の忍者は上に立てないわ！」
「アレキサンダーさんはどうですかー？」
「私はこれまで一人で旅をしてきた孤独の身。上に立って指示というのは…」
「しょうがない…私がやってあげるとしますかね…」
「ロゼさん！？」

スクッと立ち上がるロゼ。全員が驚きに目を見開く。こんな面倒な事を率先してやるタイプではないはずだが。ニヤリと悪そうな顔をしたかと思うと、右手を上げて宣言する。

「リーダーをやる条件だけど、ルーク発見時にルークに惚れている娘は全員あいつに告白する事が絶対条件ね」
「マリアさん！マリアさんがリーダーでどうですか！」
「ボクもそれがいいと思うな！」
「素晴らしい判断ね、かなみさん」
「えっ！？わ、私！？」

ロゼの無茶苦茶な条件を聞いた瞬間、かなみが大声でマリアを推薦する。それに乗っかるメナドと真知子。突然の指名に驚くマリアだったが、リックも顎に手を当てて口を開く。

「…そうですね、先の戦争でもランス殿が総司令官になる前はリーダーでしたし、適任ではないかと」
「マリア殿がリーダーでしたら文句も出ますまい」
「だってさ、大役ねマリア」
「マリアさん、凄いです！」
「そんな…」

「マリア隊長、よろしくね！キャンプファイヤーもお願い」
「あらら、折角やる気出したっていうのに」

そんな事を呟きながら、マリアが首から下げていたプレートに書かれている文字にバツ印をつけ、リーダーと書くロゼ。

「ふふ、お似合いよ、マリア」
「もう…どうなっても知らないわよ。それじゃあ、ランスたちを捜すためまずは周囲を探索しましょう」
「マリアさん。テントに誰かしら残っていなくてもいいんですか？」

全員の賛成票の下、救助隊リーダーにマリアが選ばれる。全員で周囲の探索を行おうとしたが、香澄からもっともな提案が飛び出る。

「いえ、不要でしょう。チューリップ４号が大破していますし、物資も大したものはない。ここは全員で探索し、ルーク殿たちの発見と脱出方法を見つけるのが得策かと」
「それに、留守番したい人なんて…あ、香澄がいたか」
「頑張ってついてきてね、香澄！」
「ううう…やっぱり戦闘する羽目になりそうですね…」

香澄ががっくりと肩を落とす。ポンポンと肩を叩いて励ますのは、香澄同様前線に立つ事はない真知子。しばらく周囲を探索すると、建物の入り口のようなものが発見される。入り口の上には像が奉られていた。真知子が入り口を見ながら口を開く。

「地下への入り口みたいね…」
「凄い…こんなものがあるだなんて…」
「きっとイラーピュには文明があったのね。なんだか興奮しちゃうわ」

「ダ・ゲイル呼び出そうかしら？」
「そういう興奮じゃありません！」
「…いるな」
「ええ、モンスターの気配がします」

ロゼのぶっ飛んだ提案にマリアが突っ込みを入れる横で、リックとアレキサンダーが身を引き締める。それは食料コアへの入り口。ヘルマン軍が迫っているともしらずに、マリアたちは階段を下りていくのだった。

―イラーピュ　建築物側―

「到着…これがイラーピュか」
「あまり乗り心地はよくなかったのぅ。腰が痛いわい」
「カバッハーン様…腰をお擦りましょうか…？」
「おお、すまんのうウスピラ」

リーザス救助隊とほぼ時を同じくして、ゼス調査隊もイラーピュへ到着していた。シャイラとネイが目を輝かせている。

「これが空中都市かー！」
「いい思い出になりそうね、シャイラ」
「観光気分じゃの、お主ら。性根を叩き直してやろうかのぅ？」
「「ぎゃぁぁぁ、来るな雷ジジイ！」」
「ぐぅ…ぐぅ…」

カバッハーンがネイとシャイラをいじって楽しんでいるのを見ていると、キューティとセルが駆けてくる。

「飛行艇を茂みに隠し終えました。もし見つかってとしても、魔力を注がなければ動きませんし、安全かと」
「ゼスにあんな凄い装置があったとは…驚きです」
「一応機密事項なんで心の内に仕舞っておいてください、セルさん。それに、あれはゼスで開発されたものではありませんよ」
「砂漠の塔から発掘された古代の遺産です」
「古代にあのようなものが…」
「ええ…一体誰が作ったのやら。さて、出発しますかね」
「あそこに入り口があるぞ」

ナギが指さす方向には、確かに建造物のようなものがあり、それは地下へと繋がっているようだった。側にあった看板が汚れで読めなかったが、それをサイアスが手で拭う。

「食料コア…」
「食べ物…」
「セスナさん、いつの間に起きたんですか!?」
「ふっ…何百年前の建造物だ。まともな食料があればいいがな」
「じゃが、当時の暮らしを知るにはもってこいの場所じゃな」
「では、ここから調査開始と行くか」

サイアスがそう言って建造物に入っていこうとするが、瞬間その歩みが止まり真剣な表情になる。次いでカバッハーン、ウスピラ、ナギも真剣な表情になり、キューティが不思議そうに問いかける。

「どうかされましたか…?」
「…感じるな」
「いる…」
「モンスターの気配…」

「セスナだったか？お前も判るのか？」
「なんか…ぞわぞわっとする…」
「ふむ、あちらの二人より到底使えそうじゃな。キューティは警備隊の仕事ばかりでモンスターとの実戦経験は少ないようじゃの。この感覚、覚えておくといいぞい」
「は、はい！カバッハーン様」

カバッハーンが丁寧にキューティにモンスターの気配を教え込む。
そんな中、セスナに対しての評価を聞いてシャイラとネイが声を荒げる。

「何だと、このジジイ！あたしたちが弱いとでもいうのか！」
「聞き捨てならないわ！」
「ではお主らは気配を感じ取れたかの？」
「ももも、もちろん！リスときゃんきゃんが秋の木陰でどんじゃらほい！」
「よくもまぁピンポイントで弱小モンスターの気配を…」
「それを感じ取れたら逆に凄いぞ。出任せ言うならもう少し信憑性のあるものにするんだな。さて鬼が出るか蛇が出るか…」

前衛陣が頼りないため、キューティとサイアスを先頭にしてゼス調査隊も食料コアを潜っていく。イラーピュ調査のため、そして、ルーク捜索のため、三大国が食料コアへと集まっていた。

―食料コア　地下一階―

「人工的な地下迷宮ね」
「となると…やはりイラーピュには文明が？」

迷宮を進みながらそんな話をする一行。中には水路が流れており、所々に通路を行き来する為の橋がかけられていた。水路を挟んだ向こうではかかしが畑を耕している。そのかかしを見ながら志津香が小さく呟く。

「あれ…魔農民だわ」

「魔農民？」

「魔法で動くかかしの事。半永久的に食料を作り続けるわ。結構高度な魔法のはずだけど…」

「魔農民を作り出すほどの魔法使いがこの地に？」

「単純な術式で、数百年は動くものだから、一概にそうとは言えないけどね…」

「そのようね。あの畑は一日二日で出来るものじゃないわ」

「一体誰が…何の為に畑を？」

かつて聖魔教団の拠点であったイラーピュ。そんな事を知らない一行は、調査すればするほどこの地の謎が深まるばかりであった。

一食料コア　地下二階一

「うむ、確かにあの人数をまともに相手にするのは得策ではないな。わたくしもそう考えていたところだ。ケヒャケヒャ」

「で、どうするつもりだ？」

内心嘘をつけと悪態を、ヒューバートがビッチに問いかける。ビッチは自信満々に水路を指差しながらそれに答える。

「奴らの主力と思われる前衛の騎士と格闘家共を水路に叩き落としてやれば、こちらが勝ったも同然」
「よくもまあ、そんな汚い手が思い浮かぶもので…」
「これが戦略だ。ケヒャケヒャ！さあ、身を隠すぞ。この水路に奴らが近づいてきたら叩き落とすのだ！」

―食料コア　地下一階―

「何かありましたかな、雷帝殿？」
「特に変わったものはないのぅ」

ゼス調査隊は食料コアにあった一室を調べていた。かかしが置かれていたり、肥料が置かれている他の部屋と違い、この部屋だけはまるで研究室のようであった。その為、念入りに調査していたのだが、特に何も見つからない。その時、壁に貼られていた一枚の写真をサイアスが手に取る。あどけない顔の少女がこちらにピースサインを取っている。服装から見て高貴な家柄のようだ。

「ミスリー・ソウ・カレン。将来が楽しみな美少女だな…」

くるりと写真を裏返すサイアス。そこにはＧＩ５５１と書かれていた。

「５００年以上も前か…残念だな、出会いたかったものだが」
「サイアス様。特に何も無いので、下の階の調査に行こうとカバッハーン様が…」
「ああ、すまない。今行くよ」

そう言って写真を壁に戻し、部屋から出て行こうとするサイアス。その時、地面に落ちていたものが微かに魔力を放っている事に気がつき、それを手に取る。

「鏡…？」
「サイアス様、どうかされましたか？」
「いや…」

その鏡の破片を懐にしまいながら、サイアスは他のメンバーと合流する。何故かシャイラとネイは焼き芋を食べていた。

「…それは？」
「あそこの畑で栽培されていた」
「いやー、やっぱり焼き芋は美味しいわね。キューティさんとウスピラさんとアスマさんもどう？」
「今は職務中で…」
「貰う…」
「そうですね！焼き芋は美味しいですからね！私も貰います！」

キューティが苦言を呈そうとしたが、ウスピラが受け取ったのを見て即座に意見を翻す。

「はい、セルさん」
「ありがとうございます」
「ほっほっほ。娘っ子は焼き芋が好きじゃのぅ」
「もぐ…もぐ…」

セルとセスナも焼き芋を受け取り、それを見ながらカバッハーンが笑う。次いでナギに焼き芋を手渡そうとするネイ。

「はい、アスマさん」
「…人の気配だ」
「えっ？」

焼き芋に見向きもせず、ナギは下の階に繋がる階段の方を見ている。

「誰か…いや、集団だな。いるぞ」

ー食料コア　地下二階ー

「魔農民が言うにはこの辺に地下三階へ行くための鍵が隠されているんですって？」
「ええ、水路にかかる橋の側の赤レンガの中ですって」

マリアたちは地下二階の探索を続けており、今は水路の前に集結していた。橋の側、水路に落ちそうな位置に赤レンガが見える。

「ねぇ、あれじゃない？」
「なるほど、確かに赤いですかねー」
「水路に落ちそうな位置ね…」
「危険ですね。自分が取らせて頂きます」
「気をつけてね、リック」

リックが水路に落ちそうなギリギリの位置にしゃがみ込み、赤レンガへと手を伸ばす。それをハラハラした様子で見ている一行。その為、周囲への警戒がおろそかになり、後方から全力で駆けてくるヘルマン調査隊に気がつけずにいた。

「うぉっ！」
「きゃぁぁぁ！」
「うわっ！」
「ぬっ！」

後方から突進してきたヒューバートとデンズに押され、リック、レイラ、メナド、アレキサンダーの四名が水路に落とされてしまう。驚いて振り返るマリアたち。

「だ、誰！？」
「ケヒャケヒャ！リーザスのクソ共、わたくしはヘルマン評議委員ビッチ・ゴルチ」
「ヘルマン！？」
「なんでこんな所に…」

突如現れたヘルマン軍に驚愕の表情を浮かべるマリアたち。目の前に立っているのは四人だが、リックたちを水路へ叩き落とした二人は明らかに強い。それに対し、こちらは九人いるものの、真知子、香澄、ジュリアは戦力外。戦えるのはかなみ、チルディ、トマトの前衛三人と、志津香、マリア、ロゼの後衛三人。エース級の四人は水路に落とされてしまったのだ。この状態で勝てるのか。かなみが声を荒げる。

「卑怯者！」
「ケヒャケヒャ！戦いは勝つ事が一番大事なのだ。あの四人がいなければ、貴様らなど烏合の衆」
「舐めないでいただきたいですわね…ふっ！」

チルディが先手必勝とばかりにケタケタと笑うビッチに攻撃を仕

掛ける。が、その攻撃はヒューバートの剣に阻まれる。すぐさまヒューバートに狙いを変えて再度攻撃を仕掛けようとするが、その時には首筋に剣が向けられていた。

「止めときな…死ぬぜ？」
「そんな…」
「強いわ、あの男…」
「火爆…」
「うぉぉぉぉ！」
「っ！？」

志津香が魔法を唱えようとした瞬間、デンズが突進してくる。かなみが即座にくないを投げ、それは確かにデンズに命中するが、そんな攻撃お構いなしとばかりにその突進は止まらず、志津香が吹き飛ばされる。

「志津香！」
「くっ…大丈夫…」
「無理するんじゃないわ、ヒーリング」
「ケヒャケヒャ！さあ、リーザスのクソ共を八つ裂きにしなさい！」

何とか水路に落ちずに済んだ志津香だったが、強烈な突進を受け口元から血を流す。どうやら唇が切れたようだ。ついでに体のあちこちも痛む。ロゼがすぐにヒーリングをかけてくれるが、それを見てビッチがケタケタと笑い、志津香たちを仕留めるよう指示を出す。剣を向けられていたチルディに、ヒューバートが静かに口を開く。

「悪いな嬢ちゃん…」
「くっ…」
「まずい！」

「チルディちゃ…はぅぅ…」
「じゃ、じゃまはさせない」

助けに入ろうとしたかなみとトマトだったが、こちらの前にはデンズが立ちふさがり、巨大な斧を二人に振り下ろそうとしてきた。
万事休す。振り下ろされる斧にトマトが目を閉じる。

「っ！？」
「ファイヤーレーザー！！」
「なにっ！？」
「う、うおっ！」

瞬間、ヒューバートとチルディの間、デンズとトマトの間に強烈な炎光線が割ってはいる。たじろぎ、後方に身を退く二人。志津香たちも驚いて、魔法が放たれた方向を見る。そこには五人の魔法使いが立っていた。

「とりあえず美女のピンチだったから救ってみたが…判断は正しかったかな？」
「アスマ様の仰る通りだ。何故こんなところに人間が…？」

サイアスが飄々と口を開き、キューティが驚いた表情でヘルマン調査隊とリーザス救助隊を交互に見る。

「あれはヘルマン評議委員のビッチじゃの。覚えがある」
「ら、雷帝カバッハーン！？」
「とんだ大物じゃないか…小物のこいつと違ってな…」

カバッハーンを見てビッチが声を上げる。その名前を聞いてヒューバートが構え直す。

「こちらはリーザス親衛隊…金色の鎧なんて他にない…」
「写真で見た事がありますわ…この二人、氷の将軍ウスピラと炎の将軍サイアスですわ…」
「三人とも間違いなく本物よ。今コンピュータで確認したわ…」
「どうなっているのよ…」

ウスピラがチルディの鎧でリーザス軍だと判断する。真知子が小型コンピュータで即座に調べたところ、目の前の三人と同じ顔をした写真の画像が出てくる。その横には四将軍の文字。

「つまり…どっちも敵という事だな！」
「やるしかないわね…」
「下がっていろ、ビッチ、メリム！邪魔だ！」

ナギが両手に魔力を込めてそう宣言する。三大国の精鋭がここに集結し、決戦の幕が開ける。

「行かなくていいのでしょうか…」
「私たちは置いていかれた…」
「とてもじゃないが参加出来るレベルではない…」
「傭兵としてそれはどうなのかと…」
「もぐ…もぐ…食べ終わったら本気を出す…」

少し離れた位置では、セルたちがここで待っているように指示されていた。リーザス救助隊との繋がりのあるセルが置いていかれ、本来必要のない戦闘が始まってしまう。そのような事態になっているとは知らないセルは、ただただサイアスたちの無事を祈るのみであった。

第７９話　揃い踏み（後書き）

［人物］

サイアス・クラウン　（４）
ＬＶ　３７／４１
技能　魔法ＬＶ２
　ゼス調査隊メンバー。炎の四将軍であり、ルークの旧友。行方不明になったルークを助け出すため今回の調査を発案する。

ウスピラ・真冬
ＬＶ　２９／３２
技能　魔法ＬＶ２
　ゼス調査隊メンバー。四将軍の一人にして氷の魔法団団長。冷静沈着で無口な性格。一見冷たい性格と誤解されがちだが、他の四将軍との仲は良好。大陸でも屈指の氷系魔法使いである。

カバッハーン・ザ・ライトニング
ＬＶ　４０／４６
技能　魔法ＬＶ２
　ゼス調査隊メンバー。四将軍の一人にして雷の魔法団団長。「雷帝」、「最も雷に愛された男」という呼び名でその名を世界に轟かす古強者。その実力はゼス国王ガンジーも一目置いており、豊富な実戦経験から来る戦い方はレベル以上のものを発揮する。四天王への誘いも何度も受けているが、後進育成のため四将軍にあえて留まっている。

ナギ・ス・ラガール
ＬＶ　６３／７０
技能　魔法ＬＶ２

ゼス調査隊メンバー。ゼス四天王。公の場に殆ど姿を現さないが、その実力はゼスでもトップクラス。父の方針で名前と役職を隠すよう命じられており、今回の調査ではアスマという名を名乗っている。

キューティ・バンド　（４）
ＬＶ　２５／２８
技能　魔法ＬＶ１
　ゼス調査隊メンバー。ゼス治安部隊隊長にして、サイアスと共に調査隊発足に尽力をした。ルーク救出のため、相棒のライトくんとレフトくんを伴いメンバー入り。他の前衛がいまいち信用ならないため、自分が頑張らねばと意気込んでいる。

セル・カーチゴルフ　（４）
ＬＶ　２２／４４
技能　神魔法ＬＶ１
　ゼス調査隊メンバー。仕事でリーザス救助隊のメンバー決めじゃんけんに参加出来なかったが、棚からぼた餅でゼスのメンバー入りを決める。ゼス勢唯一のヒーラー。

シャイラ・レス　（４）
ＬＶ　５／２５
技能　剣戦闘ＬＶ１　シーフＬＶ１
　ゼス調査隊メンバー。ルークとランスへの恨みも持ちつつ、最近ではネイと飲み歩きの日々。旅費が無くなったため、メンバー入り。以前よりレベルが下がっている辺り、やる気を感じられない。

ネイ・ウーロン　（４）
ＬＶ　７／２７
技能　シーフＬＶ１
　ゼス調査隊メンバー。シャイラと共にスチャラカ飲み歩きの日々。

一応恨みはまだ持っているが、徐々に薄れてはきている。

セスナ・ベンビール
ＬＶ　１０／１８
技能　槌戦闘ＬＶ１
　ゼス調査隊メンバー。フリーの傭兵で、出稼ぎの為にメンバー入り。元は一級市民の家の娘であったが、幼い頃にいとこのスリープの呪文が失敗し、いつでもどこでも寝てしまう体質に。そのため両親に見捨てられ、今は一人で生活している。

［その他］
チューリップ４号
　マリアが作り出した飛行艇。リーザスから支援を受けたため、２機も完成させる事が出来たが、自身の暴走運転により大破する。

第８０話　三つ巴の攻防

―食料コア　地下二階―

「死ね。エンジェルカッター！」
「くっ…チョウアンコク！」

相手がリーザスとヘルマンの人間だと判るや否や、いきなりナギが先制攻撃とばかりに全員に向かって全体魔法を放ってくる。それを志津香が闇の全体魔法を放ち、相殺する。

「始めちまいましたか…状況を確認してからにしたかったんですけどね…」
「なーに、やり合っておれば自ずと相手の人柄も判るってもんじゃ。情報を聞きたければそれからでも遅くないじゃろ」
「…ただ戦いたいだけではないのですか、雷帝。やりすぎないでくださいよ…」
「保証は出来んの」

サイアスが頭を掻きながら臨戦態勢に入り、カバッハーンも意気揚々と魔力を溜め始める。

「四将軍三人とは厄介だな…一時リーザスと共闘という訳には…」
「やれ、ヒューバート！リーザスのクソ共とゼスのクソ共を皆殺しにするのだ！」
「いかないか…状況判断くらいしろってんだ…はぁっ！」
「ふっ！」

ヒューバートが愚痴りながらかなみに剣を振る。その剣を躱しながら、かなみも忍刀で斬りかかる。即座に剣を反転させ、その刀を受け止めながらかなみの目を見るヒューバート。

「やるじゃないか、お嬢ちゃん。リーザスにも忍びがいたとはな」
「はぁっ！」
「おっと、真面目な忍びみたいだな。ヘルマンが契約を結んでいる女忍者に爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだな」
「ついでに親衛隊に在籍している、役立たずの先輩にも飲ませたいですわね。ふっ！」
「おいおい、二対一かよ…」
「（一撃も当たっていませんですけどね…）」
「（この人…強い…）」

軽口を叩きながらも、かなみとチルディの攻撃を易々と躱すヒューバート。明らかに自分たちよりも格上の相手。かなみとチルディの頬に汗が流れるが、次いで冷たいものが頬にあたる。

「雪…？」
「まさか！」
「ちっ！横やりを…」

いつの間にか三人の周りに雪が舞っていた。その奥には、右手を掲げてこちらを見ているウスピラの姿。

「氷雪吹雪…」
「火爆破！」

舞っていた雪が一気に二人に襲いかかろうとした瞬間、志津香が炎魔法でその雪を溶かし尽くす。

「大丈夫、かなみ、チルディ！？」
「ありがとう、志津香！」
「助かりましたわ」
「ついでに助けて貰っちまったな。上司の許しが出りゃ、共闘したいところなんだが…」
「そんな手には乗らないわよ。雷撃！」
「おっと…割と本気なんだがな…」

志津香がヒューバートにも魔法を放つが、それを後方に飛んで躱すヒューバート。が、着地した瞬間、横から炎の矢が飛んでくる。不意を突かれたため躱しきれず、左腕で振り払う。

「つっ…」
「まずは貴様からだ！」
「あ、あにいに…なにするだ！」

ナギの放った炎の矢で軽く火傷をするヒューバート。更に追撃しようとするナギだったが、デンズが斧を振りかぶりながら突進してくる。

「し、死ね！」
「防御付与！ライトくん！」
「キュー！」
「アスマ様、防御はこのキューティにお任せを！」
「ああ、任せる」

キューティの指示を受け、ナギとデンズの間にウォール・ガイが割って入る。防御付与で硬くなったウォール・ガイは、デンズの一撃を完全に受け止める。

「続いてレフトくん！左からこっそり近寄って来ている女の剣を受け止めて！」
「げっ！ばれていますですかー！ええぃ、とぉぉっ！」
「キュー！」

トマトがこっそりとゼス勢に近寄っていたが、しっかりと見ていたキューティがウォール・ガイに指示を出す。剣を振りかぶってキューティに攻撃をするトマトだが、こちらも割って入ってきたウォール・ガイに阻まれる。すると、ウォール・ガイが突然震え出す。それを見てデンズはすぐさま斧を引き抜くが、トマトは剣をウォール・ガイの角に刺したまま何事かと様子を見てしまう。

「いけない！トマトさん、早く剣を引き抜いて！」
「へ？」

真知子が叫んだが、時既に遅し。ウォール・ガイから強力な反撃の電撃が発せられ、トマトの全身に電流が走る。

「あわわわわわわ！痺れるですぅ…」
「あっちのでかいのは知っていた訳ね。トマトを引っ張ってくるから援護を」
「はい、チューリップ1号、いって！」
「いっけぇぇ、私のチューリップ！」

敵であるキューティの目の前で倒れ込んでしまうトマトを救うため、ロゼが駆けていき、その援護に香澄とマリアが砲撃をする。が、サイアスが指をパチンと鳴らすと、床から突如火柱が立ち上がり、キューティに向かっていた砲撃が空中で爆発する。

「なっ！？」
「火爆破。さて、そろそろ互いに冷静になってだな…」
「待て、サイアス。ワシの攻撃がまだじゃ」

サイアスの言葉を遮るカバッハーン。振り返って見れば、全身からバチバチと電流を帯びた魔力が溢れている。

「さて…耐えきれるかの？電磁結界！」
「防ぎきれるか…電磁結界！」

カバッハーンの全身から放たれた魔力が電撃を帯びてリーザスとゼスの面々を襲う。あまりの眩しさにカバッハーンの姿が一瞬見えなくなるが、志津香が即座に魔法を放ち真っ向から相殺しようとする。だが、流石に雷魔法での勝負ではカバッハーンに分があるため、完璧には相殺しきれない。残ってしまった魔力が志津香の全身を襲う。

「きゃぁぁぁ！」
「志津香！」
「ちょっと…えぇい、回復の雨！」

トマトを引きずってきていたロゼが回復の雨を唱える。その様子を見ながら、カバッハーンが顎に手を当てる。

「ふむ…先程からあの魔法使いの娘、中々にやりおるわい」
「闇、火、雷…既に三属性もの魔法を使っていますね…それに、威力も高いです…」
「ゼスに欲しいくらいの人材ですね」
「ふふ…面白いな、あの女…」

四将軍の三人と四天王のナギ、その全員が志津香に興味を持ち始める。たった一人でこちらの魔法攻撃を抑えているのだ。いやがおうにも注目は集まる。その時、水路の方から大声がする。

「属性パンチ・氷！！」

アレキサンダーが水に向かって拳を放つと、その場所だけ水が凍る。その氷の上に両手を置き、空中に高く飛び上がるアレキサンダー。そのままカバッハーンたちへと空中から拳を振り下ろそうとする。

「なんと。水上から一気に飛び上がってこちらに向かってくるとは…」

「器用な…本当に格闘家か？」

その様子を見ながら、特に焦った様子もないカバッハーンとサイアス。こちらに攻撃をしてこようともしない。眉をひそめるアレキサンダーだったが、考えている時間はない。

「ご老体、覚悟！属性パンチ・炎！」

「おぅおぅ、年寄りを労らんかい」

カバッハーンが余裕のある口ぶりでそう言うと同時に、アレキサンダーの拳がカバッハーンの顔面に命中する。

「おお、やりましたですー！」

「流石アレキサンダーさん！」

「いや…違う！」

トマトとマリアが歓声を上げるが、アレキサンダーが目を見開く。

全くと言っていいほど。手応えがなかったのだ。すると、今殴ったはずのカバッハーンの体と、その側に控えていたサイアスの体が四散する。

「幻影！？」

「雷と光の魔法を合わせると、こういった事も出来るのじゃよ」

「なっ！？」

その声はアレキサンダーが立っていた場所からはかなり離れた位置から聞こえてくる。カバッハーンは光の屈折を利用して、自身の幻影をその場に置いていたのだ。だが、そんな暇はなかったはず。志津香は雷帝の名はよく知っていたため、カバッハーンから極力視線を外さないようにしていた。完璧に視線を外したのは、先程電磁結界で周囲を強烈な光が覆ったとき。その考えに至り、志津香が目を見開く。

「まさか…さっきの電磁結界は、目眩ましも兼ねて…」

「戦いとは半歩先を読むものじゃよ。ライトニングレーザー！」

「スノーレーザー…」

「ホワイトレーザー！」

「やれやれ、ファイヤーレーザー」

「うぅ…一応雷撃！」

四将軍の三人とナギがそれぞれの属性のレーザーを放つ。そのレベルの魔法を放てないキューティは恥ずかしそうにしながら一応雷撃を放ち、五つの強力な魔法がリーザスとヘルマンの面々に迫る。志津香は白色破壊光線を放とうと思って光の魔力を両手に溜めていたが、とても間に合わない。瞬時にその光の魔力を別の魔法に変換し、迫り来る魔法に向けて放つ。

「光爆！」
「属性パンチ・炎！属性パンチ・雷！はっ！」

志津香の放った光爆がライトニングレーザーとホワイトレーザーを防ぎきる。アレキサンダーが右腕に炎を、左腕に雷を纏わせ、ファイヤーレーザーと雷撃を撃ち落とす。流石にサイアスの放ったファイヤーレーザーを完全に相殺する事は叶わず、多少のダメージを負うが、ゼスの面々がその二人の対応を見て驚く。

「なんと…光まで使えるのか！？」
「あちらの格闘家も凄いですよ。両手に炎と雷を纏っている。魔力とは少し違いますね…」
「特異体質か？」
「三人とも…ヘルマン兵が近づいてきている…」
「うぉぉぉ！」

ウスピラの言葉通り、デンズがゼスの四人に向かって猛突進を仕掛けてきていた。ウスピラの放ったスノーレーザーを正面から受けきり、肩に凍傷を負っていたが、まるで気にする様子もなく向かってくる。

「頑丈な奴じゃのう」
「皆様、下がってください。ライトくん、レフトくん、全力でガード！」
「その必要は無いな」
「へ？」

デンズが斧を振りかぶった瞬間、その横にいつの間にか新手の女が立っていた。ハンマーを横薙ぎに振るい、強烈な一撃がデンズの脇腹に直撃する。バキボキという骨が砕ける音を響かせながら、そ

の巨体が吹き飛ぶ。
「デンズっ！」
「セスナさん！」
「うぃ」
「かっかっか。やはりあの嬢ちゃんは、残りの二人とは違うようじゃの」
「一体どこにあれ程のパワーが…？」

セスナの強烈な一撃を受け、一気にヒューバートのいる辺りまで吹き飛んだデンズ。脇腹を押さえているデンズにヒューバートが近づいていく。

「大丈夫か？」
「な、何本か骨が砕けてるだ」
「俺も左腕を火傷しちまってるから、万全じゃないな。…んっ！？」
「そこまでよ！」
「不意をつかれたけど、もうそうはいかないからね！」
「レイラさん、メナド！」
「不味いな…リーザスの方にも新手か」

ヒューバートが水路から上がってきたレイラとメナドの姿を見て呟く。戦える人数的に、自分たちが圧倒的に不利な状況。ヘルマンとゼスを交互に見ながら、レイラが剣を抜いて宣言する。

「リックももうすぐ来るわ。覚悟しなさい！」
「リックだと！？」
「リーザスの赤い死神が来ているんですか！？」
「ふむ…そいつは厄介じゃのぉ…」
「やはり…先程の騎士は赤い死神か…となれな、取る手段は一つ。

逃げるぞ、ビッチ！」

リックの名前を聞いて驚いているゼス勢を尻目に、ヒューバートはデンズに肩を貸して一気に後ろへと駆けていく。ビッチがこちらへ駆けてくるヒューバートに文句を言う。

「くそっ、お前がさっさと奴らを始末しないから…この無能め！」
「こんな姑息な作戦立てる方が無能なんだよ。それに、人数が違いすぎる」
「とにかく撤退だ。クソ共め、覚えておけよ！」
「逃がすと…」
「メリム！」
「はい！」

メリムが懐から煙玉を出し、ヘルマン調査隊の姿を立ちこめる煙が隠す。そちらを睨み付けながら、チルディが叫ぶ。

「敵前逃亡など、騎士のやる事なんですの！」
「悪いな、ちっちゃい嬢ちゃん。俺は騎士じゃない、戦士だ」
「！？」
「くっ…雷の…」
「無駄だ、キューティ。もう遅い」

雷の矢を煙に向かって放とうとするキューティだったが、サイアスに止められる。煙が晴れた頃には、ヘルマン勢の姿は忽然と消えていた。少人数で遅れを取っていたヘルマン勢だったが、少人数だからこそ撤退も素早い。ふぅ、とサイアスが一息つき、リーザスの面々に向き直る。

「さて…どうするかな。そろそろ話し合いで解決とはいけないもの

かな」
「いきなり襲ってきておいて…」
「かっかっか。既にドンパチ始めている状況じゃったからの。少し汗を流した方が落ち着くというもんじゃ」
「どんな理論ですの！？」

カバッハーンが悪びれる様子もなく笑い飛ばす。先に仕掛けたのはナギなのだが、そこら辺の責任は取るつもりのようだ。互いに向き直り、身構える。リーザスは前衛が多く、ゼスは後衛が多い。相性的にいえばリーザス側が逆転した状況ともいえる。だが、ゼス陣営には全く焦りの色は見えない。その堂々とした立ち振る舞いが、リーザス陣営に焦りを生ませる。

「レイラさん…リックさんがもうすぐ来るというのは…」
「本当よ。でも…あまり当てにしないで…」
「え？」

小声でレイラに耳打ちするマリアだったが、レイラから帰ってきたのは意外な言葉。リーザス最強の戦士、リックを期待するなとは一体どういう事なのか。すると、こちらに駆けてくる足音が聞こえる。リックかと期待してそちらを見る面々だったが、駆けてくるのは三人の女性だった。

「おい、セスナ。勝手に一人で行くな！」
「貴女みたいな眠り姫が戦えるほど甘い相手では…」
「いや、十分役に立ったぞ」
「使えないのは…貴女たち二人だけ…」
「「なんとっ！？」」
「これは後で徹底的に鍛えるとするかの。楽しみじゃわい」
「勝手に決めるな、クソジジイ！」

「断固として断ります！」
「んっ！？」
「「お手柔らかにお願いしますっ！」」

カバッハーンの一睨みを受け、抗議をしていたシャイラとネイが即座に土下座をする。

「また新手が…」
「それも前衛みたいね…」
「でも、大した事はなさそうですー」
「…あの二人、どこかで」

やってきた二人にどこか見覚えのあるかなみは顎に手を当てて記憶を探る。その時、ゼス勢の頭上に雨が降る。

「回復の雨。皆様、大丈夫ですか？」
「マズイ、ヒーラーの増援とは…」

シャイラとネイの影に隠れてよく見えなかったが、もう一人の増援はヒーラーらしい。全員がその女性に注目する。神官の服を着た女性が視線を感じたのか、リーザス陣営を見る。

「…って、セルじゃないの！？」
「えぇぇぇぇぇ！」
「な、なんでゼスの人と一緒に？」
「あら、皆さん。もしかしたら会えるかもと思っていましたが、本当に会えるとは…これも神の思し召しですね」
「…知り合いかい、セルさん」
「はい。以前お世話になった方たちです。とてもいい人たちなんですよ」

「で、敵なのか？」
「へ？て、敵ではないかと…」

ナギのど直球な質問にたじろぎながら答えるセル。その答えを聞いたサイアスが、スッと手を下ろし、レイラに向かって提案を投げる。

「ひとまず…状況確認といかないかい？そちらの知り合いもいるみたいですしね」
「…ええ、こちらも異論はないわ。無駄な戦闘は避けられるに越した事はないからね」

レイラも構えていた剣を下ろす。マリアはその場に漂っていた緊張感が解けるのを感じた。

「さて、何から話したものか…」
「そちらの目的は？ゼスが何故イラーピュに？」
「技術力の塊である空中都市の調査が目的さ。それと、もう一つ理由はあるがな」
「セルさん？」
「本当です。もう一つの理由というのは知らされていませんが…」

サイアスの言葉が真実かどうか、セルに問いかけるレイラ。レイラに向かってコクリと頷くセル。

「それで、そちらの目的は…」
「あー、思い出した！」
「かなみ！？」

今度はサイアスがレイラに尋ねようとした瞬間、かなみが大声を

出してシャイラとネイを指さす。

「貴女たち、リスの洞窟で以前会った…」
「ん？お、お前はあの時の女忍者！」
「ルークとランスの仲間だった奴じゃない！何でこんな所に？あれ、あの二人は？」

シャイラとネイもかなみの顔を思い出し、互いに指をさし合う。
メナドがどういう関係なのかかなみに尋ねている目の前で、サイアスは飛び出したルークという名前に表情を変える。

「ルーク…だと？」
「ええ、それが私たちの目的よ。ルーク、ランス、シィルの三人の冒険者を救助するためにここに来たの。リーザス解放戦における恩人たちなの」
「何だと！？」
「なんじゃ、こちらと理由が被っておるようじゃの」
「え！？」
「さっきのもう一つの理由は…冒険者のルークの救助…」

ウスピラが言った理由にリーザス救助隊の面々と、理由を聞かされていなかったゼス側の面々が揃って目を見開く。

「なっ！？」
「ゼスもルークさんを…」
「一体どうして…」
「口から出任せという訳ではないでしょうね？」
「違うさ。調査がメインで、こちらは個人的な理由でな。ルークと俺は旧友でな」
「それだけで軍を？」

「まあ、似たような事態で以前十年も行方を眩ませているんでな。心配にもなるさ」
「十年って…あの時の？」
「ほう。そちらにも知っている方がいるみたいだな」

十年と聞いてかなみと志津香は以前聞いた話を思い出す。その様子を見て、サイアスがフッと笑う。その時、真知子が以前カスタムの町の祝賀会でルークが話していた事を思い出す。

「そういえば…ペペさんをゼスにいる知り合いの偉い軍人に紹介すると以前…」
「ペペ。写真家の娘かな？それなら、紹介して貰ったぞ」
「どうやら嘘じゃないみたいね」
「なによ、ただの骨折り損じゃないの」

はぁ、とロゼがため息をつくと同時に、何人かがその場に座り込んでしまう。緊張の糸が完璧に解けたのだろう。レイラも腰に手を当てながら、サイアスに向かってこちらの結論を投げる。

「目的は同じみたいだし、お互い邪魔はしないで不干渉って事でいいかしら？」
「そうだな…いや、ここは互いに協力しないか？」
「協力？敵国であるゼスと？」
「ああ、正直言うと、調査よりもルークの捜索の方がメインでな。救助の可能性が高まるなら、こちらとしてもありがたい。どうですかな、雷帝？」
「ふむ…そうじゃの。こちらは前衛がイマイチ弱い。そちらも後衛をその魔法使いの娘に任せすぎな節がある。そちらにも悪い提案ではないと思うがの」
「い、いえ。そうでなくて、大丈夫なの？魔法使いでない私たちと

協力して…」
「ん？ああ、そういう事か。ウチの国の悪習も世界に広まっている事で…」
「別に…構わない…」
「かっかっか。有事の際の出来事じゃ。後から文句を言う輩が出てきたら、ワシが責任を取る。キューティィ、お主はどうじゃ？」
「私も特に異論はありません」
「アスマ様とウスピラは？」
「構わない」
「……」

グッと親指を突き立てるウスピラ。傭兵として下に置くのではなく、あくまで協力関係。魔法使い絶対主義のゼス側から出た提案とは思えなかったため、レイラが戸惑うが、どうも目の前にいる五人の魔法使いはその思想が薄いようだ。

「反対！ルークには恨みがある！」
「そうだ、そうだ！」

全員が賛成ムードの空気を破ったのは、シャイラとネイ。ぶーぶーと抗議をしてくる。

「恨み？どんな恨みが…？」
「私たち二人は、あいつに無理矢理犯されたんだ！」
「「「なっ！？」」」
「えっ、えぇぇぇ！？」
「ルーク殿が…まさか…」
「嘘です！ルークさんがそんな事するはずありません」
「女の敵…本当にその男大丈夫なの、サイアス？」
「いや、ルークがそんな事をするはずが…」

「それ、やったのランスだけじゃないの？」

予想外の発言に慌てふためく一同。だが、腕を組んでいた志津香が冷静に問いかける。

「…まあ、あたしはランスだけだな。でもネイが…」
「えっ？私もランスだけだけど？」
「へ？じゃあなんであたしたちルークを恨んでるんだ？」
「…さぁ？」
「ホッ…よかったです」
「人騒がせのバツじゃ。電磁結界」
「「ぎゃぁぁぁぁ！」」
「きゃはははは、骨が見えてる」

カバッハーンの電撃をまともに食らい、骨が見えるほどの衝撃を受けるシャイラとネイ。それを横目で見て失笑しながら、サイアスがレイラに手を差し出す。

「勘違いで攻撃を仕掛けてしまい申し訳ない」
「それはこちらも同じようなものよ」
「だが、これからは味方だ。よろしく頼む」
「あ、ちょっと待って。リーダーは私じゃないの。マリアさん」
「え？は、はい」
「ほう。こちらがリーダーか。サイアス・クラウン。一応調査隊の責任者をやらせて貰っている。短い間だがよろしく頼む」
「マリア・カスタードです。こちらこそよろしくお願いします」

互いに手を握り合うサイアスとマリア。一時的とはいえ、リーザスとゼスが手を組んだ瞬間であった。やれやれと帽子を深く被り直す志津香に、ナギがゆっくりと近づいてくる。

「…何か？」
「お前、中々強いな。これほどの使い手に会ったのはゼスの軍人以外では久しぶり…いや、初めてかもしれない」
「貴女もね…四将軍や四天王という訳ではないんでしょう？」
「ああ、ただの一魔法兵だ」
「本当に人材豊富なのね、ゼスは…」
「名前は？」
「志津香よ。貴女は？」
「アスマだ」
「そう、短い間だけどよろしくね。アスマ」

スッと志津香が手を差し出す。それを不思議そうに見るナギ。

「…これは？」
「握手よ。それくらい知っているでしょう？」
「なるほど、これが握手か」
「ふふっ、変な娘ね」

ナギのおかしな様子に自然と笑いが込み上げる志津香。しっかりと手を握り合う二人を遠目で見ながら、マリアが首を傾ける。

「（あの二人…なんだろう。全然違うのに、どこか似ている気がする…）」

それは、志津香と長年連れ添ってきた親友のマリアだからこそ感じた、微かな感覚。

「あ、リックさんが戻ってきたです」
「よかった、リックさんも無事だったのね」

「噂に名高いリーザスの赤い死神か…」

水路に落とされ、ずぶ濡れ状態のリックがふらふらと戻ってくる。が、どこか様子がおかしい。何やらビクビクしているようにも見える。よく見れば、愛用のヘルメットをしていない。どうやら水路に落ちた際、水に流されてしまったらしい。普段は隠れている顔がはっきりと見えている。

「あれ?リックちゃんってそんな顔だったんだ。可愛い。もっと恐い顔してるかと思ってた」
「確かにな」

まじまじとリックの顔を見る一同。その様子を見ながら、リックが口を開く。

「あの…モンスターが出そうですし…恐いし…一旦テントまで帰りませんか?」
「…へ?」
「り、リックさん?」
「これが…赤い死神?」

まさかのリックの発言に一同が困惑する。はぁ、とレイラが深くため息をつき、頭を掻きながら言いにくそうに口を開く。

「そう、これが赤い死神リック・アディスンのもう一つの顔よ…リックはヘルメットがないと、気弱な性格になってしまうの。まさかゼスに知られちゃうなんてね…」
「ふむ…赤い死神の弱点見たりじゃな」
「この事はどうか内密に…」

ゼスに機密クラスの事を知られてしまい、レイラは内心焦るが、カバッハーンもサイアスも内密にしてくれると約束してくれた。ウスピラもグッと親指を立てて合図してくれた。こうして一時的に協力関係になったリーザス救助隊とゼス調査隊。ひとまずリックのヘルメットを探し、その後ルークたちの捜索をする方針となった。

―上部司令室―

「くそっ！クソ共め、忌々しい！」
「ビッチ様、落ち着いてください」

何とか逃げ延びたヘルマン調査隊。ヒューバートとデンズの怪我は既にビッチが治療していた。ビッチが忌々しげに喚き、メリムが宥めているのを横目で見ながら、ヒューバートが考え事をする。

「な、何考えてるだ、あにい。や、奴らの事だか？」
「ん…ああ、そんな事じゃない。そんな事じゃ…」
「お、皇子の事だな…」

デンズがそう言うと、ヒューバートの表情が歪む。

「パットンが魔人に裏切られて死んだだと？嘘だ！ミネバのくそババアめ…あいつは生きている。絶対に…そんな簡単にくたばるような奴じゃない…」
「おでも…そう思うだよ…し、シーラ派の言う事なんか…嘘に決まってるだ」
「早く…早く帰ってきやがれ、グータラ皇子め…」
「……」

ヒューバートの悲痛な呟きに、デンズが一瞬黙った後、言葉を続ける。

「あにい…おでたちも…い、生きて帰らないと…」

「そうだな…こんな、こんな所で…死ねないな…」

ヒューバートがかつての事を思い出す。パットン、アリストレス、そして自分。父であるトーマの指導の下、共にヘルマンの未来の為に鍛錬を積んだ子供時代。

「あいつが帰ってくるまで…死ぬ訳にはいかない…」

第８０話　三つ巴の攻防（後書き）

［人物］

ビッチ・ゴルチ
ＬＶ　４／１２
技能　神魔法ＬＶ１
　ヘルマン調査隊メンバー。ヘルマン評議委員の一人で、親の七光りを利用して出世してきたが、本人の才能は文武共にない。超兵器発見のため、イラーピュ調査へと乗り出す。

ヒューバート・リプトン　（４）
ＬＶ　４０／６０
技能　剣戦闘ＬＶ１　弓戦闘ＬＶ１　盾防御ＬＶ１
　ヘルマン調査隊メンバー。トーマの息子にして、パットンの親友。リーザス解放戦においてパットンが死んだというミネバの報告を信じておらず、今でもパットンの生存を信じている。

デンズ・ブラウ
ＬＶ　４５／５２
技能　剣戦闘ＬＶ１
　ヘルマン調査隊メンバー。ヘルマン第２軍に所属する兵士で、ヒューバートの事を「あにい」と呼んで慕っている。実力は高く、もう少し周りに指示を出せる性格であったのなら、将軍・副将といった地位にいてもおかしくない隠れた強者。剣の才能に気がついておらず、斧を使っているのも惜しい点の一つ。

［技］

エンジェルカッター

光属性の中級魔法。複数の光の刃で敵を切り裂く魔法で、高威力でありながら比較的覚えやすい。

チョウアンコク

闇属性の中級魔法。魔力を帯びた暗雲を敵に放つ技だが、使い手があまりいない魔法である。

電磁結界

雷属性の中級広域魔法。敵の周囲を高電圧の電磁波が襲う魔法で、麻痺効果も付属する。

ライトニングレーザー

雷属性の上級魔法。強力な電磁砲を敵に放つ。

スノーレーザー

氷属性の上級魔法。両手から冷凍光線を放ち、敵を氷漬けにする。

ホワイトレーザー

光属性の上級魔法。ライトニングレーザーと混同しがちだが、こちらが光属性。

光爆

光属性の中級広域魔法。ライトボムと読む。強力な光の波動が敵に襲いかかる。

第81話　歓喜の瞬間

―食料コア　地下二階―

「アレキサンダーさん、サイアスさん。どうですか？」
「奥に何か…んっ…」
「やれやれ…いきなり水浸しとはな」
「ごめんなさい…迷惑をかけてしまって…」

水の中にはアレキサンダーとサイアスが入り、水路の中継地点にある柵を探っていた。魔農民から南の水路に何かが詰まって水の流れが悪くなっているという情報を聞いたからである。リックが申し訳なさそうにしている。

「雷帝も手伝っては下さいませんか？」
「馬鹿者。年寄りをこんな冷たい水の中に入れようとするなど、何を考えておるのじゃ」
「サイアス様。やはり私も手伝います」
「それならボクも…」
「いや、いや。こういうのは男の仕事さ。二人もあちらの儀式に合流してくるといい」

手伝おうとするキューティとメナドを手で制すサイアス。アレキサンダーが奥に詰まっていたものを手に取るが、それは何かの鉱物であった。

「違いましたか…」
「あら、サイアス様。あちらに何か光るものが…」

「あれか？よっと」

真知子が指さす方向には確かに何か光っている。その指示を受けたサイアスがそちらに向かっていくのをロゼが眠そうに見ている。

「いやー、夏だけど迷宮内は結構寒いのに、よくやるわ」

「ロゼさん。そういえばどうしてさっきはダ・ゲイルさんを呼んでくれなかったんですか？」

「万が一戦闘で死んじゃったら、誰が私の夜の相手をしてくれるのよ。戦闘でダ・ゲイルは使わないって、神に誓っているのよ。神様なんて信じてないけどね」

「こいつ本当に神官か？」

シャイラが訝しげな目でロゼを見ているが、ロゼは全く気にした様子もなく欠伸をしている。

「でも、ロゼさん。最近ダ・ゲイルさんを呼び出す回数減ってませんですかー？」

「あら？どうしてそう思うの？」

「そういえば…以前はいつ教会にいっても…その…悪魔と交わっている印象がありましたが、ここ数ヶ月は少なくとも昼はそういう行為をしているのを見ませんね」

「遂にロゼさんも真面目に神の道を歩む決意を？素晴らしい事です！」

トマトと香澄の言葉を聞いてセルが感激に打ち震える。が、ロゼ本人は頭を掻きながら口を開く。

「んー…別にそんな気は更々ないんだけどね。でもまあ、ダ・ゲイルとする回数は減ったかな。最近どうも気分が乗らなくて…」

「心境の変化ですか？ま、まさか…！？」
「あー、トマトの心配してるような事はないから安心しなさい」
「ほっ。これ以上ライバルが増えるのは避けたかったので、安心ですー」
「…正直、私よりもセルの方が怪しいと思うけどね」
「な、何を急に！？」
「ロゼさん詳しく」
「真知子…いつの間に…」

わいわいとガールズトークに花を咲かしている自由都市の面々。
その後方では、水路調査の合間にお互いの戦力確認をするため、レベル神を呼び出してのレベルアップ及びレベル確認の作業を行っていた。サイアスに促されたキューティとメナドもいつの間にかこちらに座っていた。

「ちちんぷいぷい…ぷるるんぷるるん…んーえいっ！スイートハニーかなみのレベルは３３だね。次のレベルにはまだ経験値が足りないようだねぇ」
「くっ…どうしてもこの辺から伸びにくいなぁ…」
「いやいや。その年でこのレベルなら十分じゃぞ、嬢ちゃん」
「うん…私より高い…」
「というか、とんでもないレベル神を呼び出したわね。マリアのドジ…」
「うっ…ごめん…」

マリアが呼び出したレベル神のじょにぃは非常に変わったレベル神であった。レベル神には珍しい男性体で、ピエロ風の格好をした彼はマリアたちの事を男女問わずスイートハニーと呼んできた。ただ、階級はルークとランスが契約しているウィリスよりも上らしい。

「スイートハニーチルディはレベル２４、スイートハニーアレキサンダーはレベル４３、スイートハニー志津香はレベル３１、スイートハニーカバッハーンはレベル４０、スイートハニーサイアスはレベル３７、スイートハニーウスピラはレベル２９、スイートハニーキューティはレベル２５…」

じょにぃが離れている面々のレベルも読み上げていくが、その度にゼスの面々が驚く。

「高いですね…アレキサンダーさんも貴女もリーザスの軍人ではないのですよね？」
「ええ、まあね」
「強いとは思っておったが、レベルだけならウスピラよりも上とはな…これはより精進しないといかんの、キューティ、ウスピラ」
「は、はい！」
「頑張らないと…」
「（くっ！わたくしがこんなゼスの警備隊長如きに遅れをとるだなんて…）」

チルディがキューティに対抗心を燃やしている中、ナギ以外のレベルが読み上げられた。最後の一人となったナギをちらりと見て静かに笑うじょにぃ。周囲にかけられている魔法に気がついたのだ。流石は高位のレベル神といったところか。

「ま、郷に入っては郷に従わせて貰うよ。スイートハニーアスマはレベル６３だね。トレビアァン」
「えっ！？」
「た…高いですわ…」
「これで一魔法兵なのですか、カバッハーン様」
「うむ。アスマ様は一魔法兵に過ぎん」

レイラが疑問を口にするが、カバッハーンがそれに答える。それを聞いていたマリアが質問を続ける。

「でも、様と呼んでいるんですね」
「それは私のお父様が偉いからだ」
「なるほど…高貴な生まれという訳ですわね」
「凄いわね、アスマ。鍛錬は父親と？」
「ああ、最高のお父様だ」
「そう。仲の良い親子なのね」

父と聞いて志津香が両親の事を思い出し、フッと笑う。自分では最早叶わぬ望みを、目の前のナギは今も行っているのだ。だがそれに嫉妬したりなどはしない。自分よりもレベルの高いナギだが、どこか放っておけないところがある。ナギの事を静かに笑いながら見ていると、ナギが志津香に向かって言葉を投げる。

「志津香、ゼスに来ないか。それ程の才能を埋もれさせるのは惜しいぞ」
「悪いけど、今の生活がそれなりに気に入っているから行く気はないわね」
「そうか…残念だ」
「悪いわね。ああ、もう。そんな顔しないの」

目に見えて気落ちするナギを宥める志津香。その様子を見ていたカバッハーンとマリアは内心で思う。

「（ナギ様があれ程誰かに執着するとは珍しいのう）」
「（なんだか…姉妹みたい）」
「ビンゴだ！見つけたぞ」

「あ、ボクのヘルメットです…」

その時、水路からサイアスの声が響く。リックのヘルメットをようやく見つけたようだ。リックに手渡し、それを被るリック。すると、先程までの弱気な様子が一変する。

「…ご迷惑をおかけしました。汚名返上出来るよう、これからは働かせていただきます」
「ほう。本当に変わるもんじゃな。面白いのう」
「ユニーク…」
「あーん。ジュリアちゃんは可愛いリックちゃんの方がよかったのにぃ…」
「アレキサンダー殿とサイアス殿にも大変ご迷惑を…」
「ああ、気にしなくていいさ」
「これから期待しています、リック殿。それと、マリア殿。変わった鉱石を発見したのですが…」

二人に頭を下げるリックだが、二人とも気にするなと答える。アレキサンダーが水路で見つけた鉱物をマリアに見せると、その目の色が変わる。

「こ、これはヒララ合金！これがあればチューリップ1号を更にパワーアップすることが出来る！アレキサンダーさん、これ…」
「必要ならば差し上げますよ。私には不要ですので」
「あーん、ありがとうございます！香澄、今夜は徹夜よ！」
「ひぇぇぇぇぇ…」

ガールズトーク側にいた香澄に大声で叫び、状況も判らず困惑する香澄。地味に香澄が更に不幸になっているのを横目に、濡れた体を小さな炎を出して乾かしながら、ウスピラに向き直るサイアス。

「どうだい。水も滴るいい男…ってな」
「別に…」
「つれないねぇ…」
「お、ようやく現状確認が終わったか？」
「ふふふ、この愛と勇気の戦士の強さに驚きましたか？」
「……」

ガールズトークをしていた面々も立ち上がってこちらに歩いてくる。シャイラとネイがレベル神での結果はどうだったかと尋ねるが、カバッハーンが無言で電磁結界を二人に放つ。

「「ぎゃぁぁぁぁぁ！！」」
「戦闘要員でない真知子殿と香澄殿を除けば、お主らがずば抜けて低いわ！よく一桁で志願したもんじゃな！別の意味で驚いたわい！」
「私はジュリアさんがセスナさんよりもレベルが高かった事の方が驚きましたけど…」
「きゃははは！ジュリアちゃん無敵！」
「ぐぅ…ぐぅ…」
「ま、レベルは一つの目安でしかないって事だな」
「さぁ、それじゃあ捜索を続けましょう。この鍵があれば地下三階に行けるはずよ」

現状確認を終えた連合軍は地下三階に向けて出発する。ぞろぞろと歩いて行く中、痺れているシャイラとネイがロゼに助けを求める。

「か、回復を…」
「一回５０ＧＯＬＤ」
「くっ…微妙に払えそうな値段を…」
「駄目よシャイラ！それだけあれば一回飲めるわ！」

「あんたらも駄目人間ねー。私と一緒」

結局２０ＧＯＬＤで二人を回復するロゼ。セルに頼めばいいという事に気がついていないシャイラとネイだった。

―闘将コア―

「見ろ。これが闘将だ。役立たずの貴様らではわたくしの護衛に不安が残る。これを復活させ、わたくしの護衛にする。そうなればお前たちなんか用無しだな、ケヒャケヒャ！」

「……」

闘将コアにビッチに笑い声が響く。リーザスとゼスに敗れたヘルマン調査隊は、戦力不足を補うため、闘将が奉られているという闘将コアにやってきていた。中々闘将は見つからず、イライラしていたビッチだったが、ようやく一体の闘将を発見し一気に上機嫌になる。その闘将はとある部屋の中の椅子に腰掛けたままその動きを止めていた。椅子には人間の頭蓋骨と思われるものが装飾されており、部屋の至る所に頭蓋骨が飾られていた。メリムが怯えた声を出す。

「これ…この闘将がやったのでしょうか…」

「さあな…だが、あまり良い趣味ではないな」

「メリム。それではこの闘将を動かせ！」

「…出来ません」

「なにぃ！？」

「この闘将は何らかの方法で昏睡状態にあるみたいです。魔法で脳に刺激を与えないと目覚めないと思われます。それと…」

「それと何だ？」

「闘将はこの闘神都市の中枢より行動命令を受けているため、それ以外の命令は聞かないようです。動かしたところで、ビッチ様の命令を聞くかどうかは…判りません」

メリムが俯きながらそう答えるが、ビッチはニヤリと笑う。

「ケヒャケヒャ。そんな事なら心配無用だ。絶対にわたくしの命令を聞くようになる手段がある」

「…また姑息な手か？」

「このヘルマン特性のぷちハニー爆弾をこいつの体内のあちこちに仕掛ける。頑丈な外部装甲ではなく、内部や関節などを重点的にな。わたくしの命令を聞かなければ…ドカーンだ！」

「やはりそんな手段か…」

「よし、メリム。さっさと取り付けろ」

「は、はい！」

ビッチの指示を受けてメリムが爆弾を取り付けていく。最終的に13個もの爆弾を取り付けた後、ビッチが闘将に近づいていく。

「では、動かすとするか。魔力を注ぎ込めばいいのだな」

「はい。でも魔法を使えるイオさんがここに居られないのでは…」

「わたくしがいるではないか。神魔法を極めたわたくし自ら魔力を注いでやろう」

そう、無能そうに見えるビッチであるが、一応神魔法の使い手ではあった。ヒューバートとデンズが負った怪我も、ここに来るまでにヒーリングで治療しており、既に完治していた。闘将の頭に両手を当て、ビッチが魔力を注ぎ始める。

「はぁぁぁぁぁぁ…はぁぁぁぁぁぁ…はぁはぁ…なんだ、動かないで

はないか！メリム、貴様間違えたな！」
「い、いえ。あの…ビッチ様の力が…」
「ん？わたくしが何だって！？」
「はっはっは。お前じゃ闘将を動かすには力不足だとさ。なっ、メリム」
「えっ…はぁ…まぁ…そうです」
「くっ…生意気な人形め」

忌々しげに闘将を睨むビッチ。だがその表情はすぐに一変する。

「おお、そうだ。先程のクソ共の中に魔法使いがいたな。あれを捕まえてやらせよう」
「ゼスの連中か？四将軍を捕まえるなど到底…」
「いや、四将軍の他に無名の魔法使いが四人いただろう。リーザスに二人、ゼスに二人だ」
「あいつらか…そう簡単にいく相手とは思えんが…」

ビッチが言っているのは志津香、ロゼ、ナギ、キューティの四人。実際に手を合わせたヒューバートが苦言を呈すが、ビッチは聞く耳を持たない。

「あの程度の奴らなら捕らえるのは容易い。適当に二人くらい捕まえて、わたくしに服従させ、この人形を動かす手伝いをして貰おう。自分たちの仲間を皆殺しにする手伝いをね、ケヒャケヒャ！」
「…悪趣味な」
「そうとなれば早速捕まえるとしよう！食料コアの地下三階には確かあのトラップがあったな」
「え、あれですか！？あれは落とされた方が危ないのでは…？」
「リーザスとゼスのクソ共の命など知った事か。では行くぞ！ケヒャケヒャ！」

こうしてヘルマン調査隊は再び食料コアへと向かう。先に調査を進め、上部司令室まで探索をし終えたアドバンテージで、闘神都市の中を自由に動き回っていた。闘将の部屋を後にしたが、彼らは気がついていなかった。いや、気がつけなかった。この部屋の入り口には本来注意書きが張られていたのだが、長い年月と共に風化したそれは、到底読めるものではなくなっていたからだ。そこにはこう書かれていた。

―最強の闘将　ディオ・カルミス封印の間　何人も封印を解く事をフリークの名においてここに禁ず―

ルークにとって、そしてゼス勢にとって最悪の相性を誇る闘将の復活が、近づいていた。

―食料コア　地下三階―

貯蔵庫の鍵を使い、三階まで降りてきた一行。道中何度もモンスターが現れていたが、全て瞬殺であった。

「大したモンスターはおらんの」
「そのようですね」
「なんて頼もしい…」
「これだけの豪華面子、中々揃わないわよ…」

それも当然の結果であった。リック、レイラ、メナドというリーザスの猛者。志津香、アレキサンダーという自由都市の猛者。更にゼスからは四天王一人と四将軍三人という夢のような状況。襲いか

かってくるモンスターが可哀想になる程であった。すると、先頭を歩いていたリックが急に立ち止まる。

「これは…？」
「ん？…雷帝、これはまさか…」
「ふむ、男結界とは珍しい結界じゃな」
「男結界？」

カバッハーンが珍しそうに通路に張られた結界をしげしげと眺める。メナドが不思議そうに尋ねると、代わりに志津香がその問いに答える。

「その名の通り、男の人は通る事の出来ない結界よ」
「となると、俺らはここで待つしかありませんね」
「えっ！？それってかなり不味いんじゃ…」
「いやいや、十分な戦力だろ」
「ライトくんとレフトくんも男の子判定なんですね…」
「キュー、キュー…」

ウォール・ガイのライトとレフトもどうやら男の子モンスターと判定されたらしい。結界を通れず、悲しそうな目をするライトとレフト。

「ふむ…生成生物であるウォール・ガイは本来性別などないのじゃがな…」
「長く連れ添う事で自我でも芽生えましたね。よかったな、キューティ。立派な友達だ」
「喜んで良いのでしょうか…」

結界を通る事の出来ないリック、アレキサンダー、サイアス、カ

バッハーンの四人と二体のウォール・ガイが通路で待機する事になる。不安そうにするマリアだが、この四人が減ってもまだウスピラやナギ、志津香、かなみ、メナドと戦力的には十分だ。サイアスが笑い飛ばす。

「結界の解除装置が多分中にあるはずじゃ。それを解除してくれれば、すぐにでも追いつくぞい」
「…結界解除しても、ジジイだけここに置いていかないか？」
「…賛成」
「何か言ったかの？」
「「いえ、何でもありません！」」

小声で話していたシャイラとネイだが、カバッハーンに睨まれて即座に土下座をする。

「この二人は土下座をするのと痺れるのが仕事なのか？」
「うっ…否定できません…」
「やれやれ…もっとマシな人材いなかったの？」

ナギにそう問われ、キューティが申し訳なさそうにする。志津香がため息をつき、シャイラとネイを見る。既にその土下座は板についていた。

「それじゃあ、先に行って結界を解除してきますね」
「お気をつけて…」
「レイラ殿、メナド。頼みます」
「任せておいて、リック」
「ウスピラ、アスマ様、キューティ。油断はするなよ」
「任せて…」
「問題ない」

「では行って参ります、サイアス様、カバッハーン様！」

キューティがビシッと敬礼をし、女性陣だけで先に進む事になる。
それを見送りながら一息つく男性陣。

「大丈夫でしょうか」
「ま、あれだけ戦力が揃っていればなんとかなるだろ」
「まさかゼスと協力する日が来るとは思いませんでしたよ」
「それは俺もさ、赤い死神」
「サイアス殿はルーク殿と長い付き合いで？」
「まあな。出会ったのは十年以上も前だ。新聞であいつが行方不明になったと知ったときは驚いたものさ。まさか解放軍の中心人物だったとはな…」
「ええ、ルーク殿がいなかったらリーザスは滅びていたでしょう」
「やれやれ、相変わらずお人好しで苦労しているな、あいつは…」
「だが、それがルーク殿らしいといったところでしょうね…」

本来敵同士であるリックとサイアスだが、ルークという共通の知り合いの話題で盛り上がる。そこにアレキサンダーも加わり、更に話題は広がっていく。ふと、サイアスは気がつく。カバッハーンが会話に参加していない。カバッハーンもルークの事は知っているはずだ。視線をやると、真剣な表情でサイアスたちが歩いてきた通路を見ている。

「雷帝、どうされましたか？」
「…構えるのじゃ。こちらに凄いのが近づいているぞい」
「何ですって！？」

カバッハーンの言葉に三人が目を見開く。サイアスもリックもアレキサンダーも間違いなく大陸で有数の強者。だが、その三人より

も早くカバッハーンはこの場に近づいてくる者の気配を察する。これが、場数を踏んできた老兵の経験といったところか。

「二人じゃな…間違いなく強いの」
「それは我ら四人と比較しても…」
「勝てるかは微妙じゃな。ふふ、滾る滾る…」
「いったい、何者が…」
「……」

全員が身構え、通路の先を見る。ここに来てカバッハーン以外の三人もその気配を感じる。強い、それも二人共だ。ひょっとしたら自分よりも格上では。アレキサンダーの頬を汗が流れる。だが、サイアスだけは他の三人と違う表情になる。

「（いや…この気配はまさか…）」

そして、通路の角を曲がり二つの人影がこちらに姿を現す。それは他の三人にとって意外な人物であったが、サイアスの予想通りの相手であった。

ー食料コア　地下三階　結界操作室ー

通路を進んでいるマリアたちがとある部屋を発見する。扉にかかったプレートには結界操作室と書かれている。

「ここね。さっさと結界を解除してしまいましょう」
「なあ、なんとかあのジジイだけ結界の向こうにやれないか…？」
「出来ません！あんまり酷いと報酬払いませんよ！」

「横暴だ！」
「職権乱用だ！」

シャイラとネイがキューティに猛抗議するのを尻目に、マリアは扉を開ける。部屋の中には結界解除装置と思われるものがあったが、その側には羽の生えた赤ん坊が飛んでいた。

「あ、可愛い」
「おねーちゃん、遊んででちゅー」
「はーい、ジュリアちゃんが遊んであげますよー」
「あ、ずるいですー。トマトもあの子と遊びたいですー」
「いやいや、ここは母性本能溢れる愛の戦士シャイラが…」

赤ん坊に近づいていこうとする三人だったが、スッと手で止められる。レイラ、真知子、セスナの三人だ。

「駄目よ、ジュリア」
「トマトさん。下がってください」
「危険…」
「は？危険って、あの赤ん坊がか？」
「レイラさん。ちょっとくらい近づいても…」
「死にたいの？」

マリアも不思議そうに尋ねるが、レイラが真剣な口調でそう返す。見れば側にいたウスピラとナギも身構えている。キューティも困惑してウスピラに尋ねようとするが、その前にセスナが口を開く。

「あれは…女殺しというモンスター…」
「私も以前コンピュータの情報で見た事があります。絶対に近づいては駄目…」

「…ちっ」

セスナと真知子の言葉を聞いて、女殺しが舌打ちをする。レイラが剣を抜きながら、ジリジリと後方に下がる。

「男結界の奥に潜んでいるとは…厄介なトラップね」
「どういうモンスターなんですか？」
「女性ではダメージを与える事が出来ないの、絶対にね」
「そんなモンスターが存在するだなんて…」
「知らなかったわ…」
「あんたらは知ってなさいよ！冒険者でしょ！」

驚愕するシャイラとネイに突っ込む志津香。あまりモンスターと戦う機会のないかなみやキューティが知らないのは無理もないが、冒険者であるこの二人が知らないのは流石に擁護できない。事実、セスナは知っていた訳だし。

「後でカバッハーン様に報告を…」
「「それだけは止めてください、キューティ様！！」」
「ホワイトレーザー！」

瞬間、ナギが女殺しに向かって魔法を放つ。その魔法は見事に直撃したが、全く効いている素振りがない。

「お父様から聞いた事はあったが、本当にダメージを与えられないんだな」
「そんな…今ここには女性しかいないんですよ！？」
「ランスよりタチが悪いわ！？」
「おねーちゃん、ぼくちゃんと遊びまちょう。綺麗に皮を剥いであげるでちゅよ！」

かなみの言葉に反応するように女殺しの表情が一変し、パンツの中から血濡れた包丁を取り出して、一気にこちらに向かって飛んでくる。

「逃げるわよ！」
「ひぇぇぇぇ…」
「セスナさん！何でもう寝ているんですか！」
「ぐぅ…ぐぅ…おおっ！」

セルに引っ張られながらセスナも目覚め、歩いてきた通路を全力で引き返す一行。その後を女殺しが笑いながら追ってくる。

「待ってでちゅ！ぼくちゃんと遊びまちょう！」
「イヤに決まってるでしょ！」

必死に逃げるマリアたちだったが、あまりにも人数が多すぎるため、狭い通路を思うように走れない。女殺しがどんどん近づいてくる。その時、真知子と香澄が転んでしまう。

「香澄！」
「真知子さん！」

元々他のメンバーと違い、体力では劣る二人。必死に立ち上がろうとするが、女殺しはもうすぐ後ろまで迫ってきていた。

「スノーレーザー…」
「ファイヤーレーザー！」
「ホワイトレーザー！」
「はっ！」

「ら、ライトくんとレフトくん。すぐにガードを！って、いないんだった！」

ウスピラと志津香、ナギとかなみが即座に攻撃を放つが、それを気にする様子もなく女殺しが二人に迫る。これだけの強者が揃っているが、最悪の相性である女殺しにはどう足掻いてもダメージを与えられないのだ。

「マズイわ…ダ・ゲイル、今すぐ…」

ロゼが先程戦闘には使わないと宣言していたダ・ゲイルを呼び出そうとする。それ程までに窮地なのだ。だが、間に合わない。真知子と香澄の目前まで迫っていた女殺しが包丁を振りかぶる。

「えっ…！？」

その時、メナドが目を見開く。助けに入ろうとしていた自分の横を、猛スピードで駆けていく人物がいたのだ。

「ひっ…」
「ルークさん…」

香澄が声にならない悲鳴を上げ、真知子が思い人の名前を口にする。全員が助けに入ろうとする中、その包丁がゆっくりと振り下ろされていく。だが、その刃が二人に届く事はなかった。

「真滅斬！！」
「ぎゃぁぁぁぁぁ！」
「…えっ？」
「うそ…」

突如現れた男が女殺しを一刀両断にしたのだ。口をぱくぱくとさせながら、地面に落ちていく女殺し。その光景を見ながら、ウスピラとナギが不思議そうに呟く。

「誰…？どうやって男結界を…？」

「強いな…」

「ぐぅ…ぐぅ…」

「あーん、可愛かったのにジュリアちゃんショックー」

この四人だけが、現れた男の正体を知らない。だが、他の者たちは目を見開く。知っている。いや、この男を捜すためにここまで来たのだ。男結界など、この男の前では意味を持たない。剣を仕舞いながら、現れた男が口を開く。

「サイアスから話は聞いた。こんな所まで来て貰って…迷惑かけてしまったみたいだな…」

「あ…ああ…」

「出るタイミング…狙ってたんじゃないの…馬鹿…」

かなみの目に涙が浮かぶ。志津香がその目を他のみんなに見られないよう帽子を深く被って隠す。

「怪我はないか、真知子さん、香澄？」

「っ…ルークさん！」

瞬間、真知子はルークに抱きついていた。それをしっかりと受け止めながら、ルークは周りにいる人物たちをしっかりと見る。自分とランス、シィルの三人を助けるために、こんな場所まで来てくれた仲間たちの姿を。泣きながら、笑いながら、こちらに向かってく

る少女たちの姿を。

「久しぶりだな、みんな」
「ルークさん！」
「よかった…本当に…」
「真知子さん抜け駆けですー！」

どどど、とルークの胸にかなみ、メナド、トマトの三人が飛び込んでくる。三人ともその目には涙が浮かんでいた。真知子を抱きしめたまま、その三人もルークはしっかりと受け止める。

「セルは行かなくていいのー？」
「私は別に…」
「……」

うずうずしているセルにロゼが呟く。否定するセルだったが、その横に立っているキューティはもっとうずうずしていた。そんな状況の中、マリアに向かってルークが声をかける。

「ランスとシィルちゃんも、今は一緒じゃないがいる場所は判っている。昨日まで一緒に行動していたからな！」
「本当ですか！？よかった…ランスたちも無事だったのね…」
「よかったわね、マリアさん」

マリアがランスの無事を聞いてホッとする。レイラがその肩を叩く横で、チルディが疑問を口にする。

「でも…帰還用の飛行艇が…」
「それなら、私たちが乗ってきた飛行艇があります。全員は無理ですが、順番に何往復かすれば全員無事に帰れますよ」

「本当ですの。あぁ、これで帰れますのね…」
「案外あっけなく終わったものね」

キューティの言葉にチルディが胸をなで下ろす。これで帰りの心配はなくなった。

「どうする…ここで会ったが百年目とか言いだし辛い空気だぞ…」
「そもそも、ルークを恨む理由が皆無になった今、私たちはどうすれば…」

こそこそと話し合うシャイラとネイを余所に、ウスピラとナギがジロジロとルークを観察する。

「あれが…サイアスの親友…」
「赤い死神以上じゃないか?ん、志津香、どうした?」

ナギの横を、帽子を深く被った志津香がずんずんと歩いて行く。不思議そうにそれを見るナギ。歩みを進め、ルークの前に立つ。

「志津香、久しぶりだな」
「大丈夫だ…必ず帰るさ…だったわよね…」

空気が凍るのが判る。抱きついていたかなみ、メナド、トマト、真知子の四人がススス、とルークから離れていく。

「それは…」
「で、言い残す言葉は?」
「違うんだ。俺の中ではまだあの事件から数日しか…」
「何を訳の判らない事言ってんのよ!」

魔力を帯びさせた強烈な平手打ちがルークの頬に放たれ、乾いた音が通路に鳴り響いた。それを見ていたナギが笑いながら呟く。

「仲良いんだな、あの二人は」
「どうして…そう思うのですか…？」
「志津香が笑っている」

無事合流を果たしたルークと救助隊の面々。これでランスとシィルの二人と合流すれば、任務は終わり。ゼスは多少調査をしていく事になる。もしそうだったら少しくらい手伝っていっても良いかもしれない。だが、危険が迫れば帰ればいい。誰もが胸をなで下ろしていた。そう、これで終わるはずだったのだ。

―食料コア　地下三階　通路―

「それでは、フェリス殿はルーク殿と何ヶ月も一緒だったのですね」
「いや…そうじゃなくて…」
「あのルークに遂に春が来たか。で、どういう出会いだったんだ？」
「私はただの使い魔だってあれ程…」
「それよりもフェリス殿。ジル戦での活躍、見事でした。是非ともお手合わせ願いたいのですが」
「おお、その時はワシも一緒に頼むぞ」
「うわぁぁぁん！早く帰ってきてくれ、ルーク！！」

男四人に絡まれながら、涙目になりながらルークの帰りを待っているフェリスであった。

―イラーピュ　草原―

「オ帰リナサイマセ、パイアール様」
「邪魔ですよ」

エンタープライズに帰還したパイアールが出迎えたｍｋ２を押しのけて中に入る。帰還できたのはＰＧ－７とｍｋ２一体のみ。大損害である。ごそごそと飛行艇の中にある研究室を探るパイアールに、ＰＧ－７が問いかける。

「パイアール様、闘神都市からは今すぐ撤退を？」
「馬鹿言わないでください。メガラスとハウゼル如き、準備さえ万端であれば恐れる相手ではありません。武器を補充してもう一度調査に向かいますよ」
「はっ！申し訳ありません、パイアール様」

研究室を探って、メガラスとハウゼルに相性の良い兵器を準備し始める。そこに、留守を頼んでいたｍｋ２の一体がＰＧ－７に報告に来る。

「ん？…そうか、判った」
「どうかしましたか？」
「少し離れた辺りの茂みに飛行艇が隠されていたようです。既にこちらに搬送してあります。かなりのボロ船です」
「飛行艇…？」

研究室のモニターを操作し、搬送された小型の飛行艇を見るパイアール。それは、ゼス調査隊が乗ってきた飛行艇。

「これは…ボクの作った飛行艇ではないですか。あまりにも出来が悪かったので、メディウサにくれてやった物が何故ここに…？」
「ぱ、パイアール様の作ったものでしたか…」

思いっきりボロ船扱いしてしまったＰＧ－７が焦るが、特に気にした様子もなく、パイアールが考え込む。

「そういえば、以前人間界の塔に置いてきたとか言っていたような…なるほど、これを使ってここまであの人間共はやってきたのですね」
「パイアール様、それでは？」
「破壊しておいてください」
「はっ！」

闘神都市での戦いは、まだ終わらない。

第８１話　歓喜の瞬間（後書き）

［人物］

じょにぃ

　マリアが呼び出したレベル神で、階級は第八級とレベル神としてはかなりの高位。相手をスイートハニーと呼び、呼び出し方も「へい、じょにぃ。かもーん」と呼ばないと出て来ないなどクセのある神だが、腕は確か。儀式呪文は「ちちんぷいぷい…ぷるるんぷるるん…んーえいっ！」。

［モンスター］

ライトくん　（半オリ）

　キューティ・バンドの相棒である指揮ウォール・ガイ。防御付与を受け続けた結果、普通のものよりも頑丈に育つ。自我も芽生えたキューティの数少ない親友。ご主人様大好き。

レフトくん　（半オリ）

　キューティ・バンドの相棒である指揮ウォール・ガイ。多生破壊されても、生成生物であるため回復魔法で復活できる。ご主人様だけじゃなく、以前共に冒険をしたルークやサイアスにも懐いている。

女殺し

　可愛い顔をして残忍な性格のモンスター。相手がメスであれば一切の攻撃を受け付けないという恐るべき能力を持っており、女性にとっての天敵。女の子モンスターもつい殺してしまうため、中々繁殖出来ない事から絶滅危惧種に指定されている。

第８２話　油断

ー食料コア　地下三階　通路ー

「おったぞい」

「よう。結界が消えたみたいなんで勝手に来た…って、どうしたんだ？」

「いや、別に大した事じゃないさ」

男結界が消えたのを確認したサイアスたちは通路を進み、ルークたちと合流した。ルークの頬に手の跡がくっきりと残っていたのを突っ込まれるが、ルークは特にその事についての説明を避ける。

「やれやれ…フェリスから聞いたが、あんまり女性を泣かせるなよ」

「何か言ったのか、フェリス？」

「事実しか言ってない。というか、お前がさっさとしないから色々聞かれて大変だったんだぞ！」

ポカポカとルークの胸を叩いてくるフェリス。その様子を見ていたかなみが悲しそうに呟く。

「いつの間にかフェリスさんともあんなに仲良く…」

「数ヶ月は人の心を変えるのには十分だったのね…よよよ…」

「いや、さっき説明したとおり、体感時間では数日しか経っていないんだ。というか、ロゼは完璧に煽っているだろ」

サイアスたちが合流するまでの間、ルークは自分に起こった事を説明していたが、反応はまちまち。トマトやメナドは「ルークさん

がそう言うなら」と信じ、真知子は興味深そうにコンピュータで同一の事例がないか調べ始める。魔法使い勢も興味深そうにしていたが、志津香などは口から出任せではないかと疑っており、ルークを睨み付けていた。ルークがロゼに突っ込んでいるのを聞いたサイアスが口を開く。

「ああ、その事もフェリスから聞いた。大変だったみたいだな」
「ふむ、時空の狭間に数分だけでなく、完全に送られて戻ってくる事例は初めて見たぞい。それも時間の流れがワシの知っているのと逆じゃな。実に興味深い」

フェリスからその事も聞いていたサイアスがそう労う。後ろではカバッハーンが顎に手を当てて一人頷いている。そのサイアスに志津香が不思議そうに問いかける。

「随分と簡単に信じるんですね」
「ルークの言う事だからな。嘘の訳がない」
「…信頼、しているんですね」
「ふっ…嘘が下手な男だからな。そのせいで女性を泣かせてばかりの罪な男さ」
「変な事言うな、サイアス」

サイアスの腰に軽く肘を入れるルーク。悪い悪い、と笑いながら謝るサイアスとのやりとりを見ながら、マリアが驚いたような声を出す。

「ルークさんのあんな無邪気な顔、初めて見た」
「こ、これは激レアですー」
「旧友という言葉は本当だったみたいですね」
「旧友ねぇ…あれはもう親友じゃないの？」

ロゼが呆れたようにしていると、ウスピラがカバッハーンに近づいていき、問いかける。

「カバッハーン様…時空の狭間に数分だけ、というのは？」
「ん？」
「ああ、それだ。雷帝、その事はこちらも気に掛かっていたんだ。時空の狭間に送るというのはかなりの高位魔法で、使い手が今はいないはずでは？それに、一度行ったら帰って来られないというのが定説のはずです。魔封印結界でしたら任意にこちらに戻ってこさせられますが、あれが送るのが違う空間ですし…」
「ああ、知らんでも無理はないか。あまり知られていない事柄じゃからの。ワシも古い文献で読んだだけじゃが…」
「このジジイより古い文献っていつのだよ…」
「きっとＮＣ期とかよ」
「…雷の矢」
「「ぎゃぁぁぁぁ！」」
「なんでこう自爆するんだ、こいつらは？」
「アスマ様、あまり見ない方がよろしいかと」

痺れているシャイラとネイを尻目にカバッハーンが言葉を続ける。

「うむ。時空の狭間に送るというのはかなりの大魔法。今では使い手はいないとされておる失われた魔法じゃ。じゃが、かつてそれを使う事の出来たカラーがおった。そのカラーはゼスの高官を脅したあげく、たった一人でゼスの軍、警備隊と何日にも渡って戦い抜いた手練れらしい」
「無茶苦茶だな」
「私たちの知っているカラーの印象と大分違いますね…」
「そのカラーが三分だけ対象を時空の狭間に送る魔法を使ってきた

と文献には残されておる。ゼスの軍人が何人か時空の狭間に送られたらしい」

「三分？それはこちらの体感時間で…ですよね。ルークの言うとおりならば…なるほど、時間の流れが逆というのは」

「その通り。三分後にこちらの世界に戻ってきたゼスの兵は、皆老人になっておったそうじゃ。中には既に老衰で死んでいるものもおったらしい」

カバッハーンの言葉に、全員、特に女性陣がゾッとする。ルークが考え込む。ジルが送る先を間違えたとも思えない。となれば、結論は一つ。

「時空の狭間には、時の流れが速い場所と遅い場所がある…という事でしょうか」

「おそらく。しかし、無事で帰って来られて良かったの。それに、かつて会ったときと比べて相当に腕を上げておる。随分と鍛錬を積んだようじゃの」

「雷帝もお元気そうで何よりです」

ルークがカバッハーンに頭を下げる。サイアス同様、ルークもカバッハーンにはどこか頭が上がらないところがある。笑いながらそれに対応するカバッハーン。ルークは頭を上げ、今度はキューティに向き直る。

「まさかキューティも来てくれるとは思わなかったぞ。ありがとうな」

「わ、私はサイアス様の付き添いというか…その…」

「そうか。だが…思想も大分柔らかくなったんだな」

ルークは初めて出会った頃のキューティを思い出す。ガチガチの

魔法使い至上主義者、だが今の彼女は普通にマリアや真知子などと接していた。ルークの顔を見ながら静かに笑うキューティ。

「まぁ、貴方のお陰でしょうね。それが本当に正しいのか、魔法使い至上主義が間違いなのかは…まだ模索中ですけど」

「その答えは自分で見つけ出すんだ。だが、今のキューティの方があの頃より魅力的だと思うぞ。良い表情をしている」

「なっ…」

ルークの言葉に顔を真っ赤にするキューティ。それを見ていたウスピラがサイアスにボソッと呟く。

「女誑しの友人は…女誑し…？」

「あちらは天然だけどな」

「それはそれで…タチが悪い…」

「ひょっとして…俺の事もタチが悪いとか思っているのか？」

「ノーコメント…」

「言っているようなものだろ、それは…」

サイアスががっくりと肩を落とす横で、トマトが真知子と作戦会議をし始める。

「ど、どうしますですか？ゼスからの刺客とは考えてもいなかったですー！」

「大丈夫、私にとっては想定の範囲内よ。まだどうとでもなるわ」

コソコソと二人が話していると、ルークがカバッハーンの魔法で痺れているシャイラとネイにも話しかける。

「まあ、それ以上に驚いたのはお前らがいる事だけどな…」

「な、なんだよ。ローラにはあの後ちゃんと謝りには行ったんだぞ。もういいだろ」
「それに、別に貴方を助けに来た訳ではないわ。傭兵として雇われただけなんだから」
「傭兵…？以前会ったときより弱くなってないか？」

チラリとサイアスを見るルーク。失笑しているところを見ると、不本意な選出だったのだろう。

「べ、別に愚痴を肴に酒ばっかり飲んでた訳じゃないんだからな！」
「誤解が解けたとはいえ、貴方の顔を見たくないのは変わらないわ。ランスの顔を思い出してしまうからね。同じパーティーになるのは仕方ないけれど、必要な事以外話しかけないで貰える？」

言い訳をするシャイラと冷たく言い放つネイ。ルークがため息をつきながらそれを了承し、そろそろ通路の先に進もうとサイアスに言おうとするが、何かを思い出したかのようにネイに向き直り、道具袋から何かを手渡す。

「そうだ…随分と長い事預かりっぱなしになっていたが、ほら」
「ん…？こ、これは私の耳飾り」

ルークがネイに手渡したのは、かつてネイがカスタムの事件の際に落としたかえるの耳飾りであった。

「ずっと…持っていたの？あれから一年近く経つのに…」
「大切なものなんだろ。それより…返すのが遅くなって悪かったな」
「ドッキン！！」

自然とネイのルークを見る瞳が柔らかくなった気がする。それを

見ていたトマトが再度真知子に話しかける。

「ど、どうするですか、真知子さん！思わぬ所からの刺客も発生しそうです！」
「流石に想定外ね…」
「あの二人仲良いわねー」
「はぁ…」

ロゼの言葉に志津香が頭を抱える。ふと横を見ると、かなみとメナドも何やらコソコソ話しているのが見える。どうせ似たような事を話しているんだろうと思うと、更にため息が出る。その時、ポンと肩を叩かれる。振り返ると叩いてきたのはフェリス。

「今度、一緒に飲まない？」
「…お酒は飲まないって決めているから、それでもいいなら」

闘神都市に来てから新たな交友関係が広がっている志津香だった。そんな面々の様子を見ながら、サイアスがカバッハーンに問いかける。

「そういえば…そのカラーというのは一体何者だったのですか？」
「カラーの女王の中でも伝説と呼ばれている存在じゃ。名を、フル・カラー」
「既に亡くなっているんですよね？」
「うむ。ルークの言うとおり、同じく使い手であった魔王ジルもいない今、時空の狭間への道は永久に閉ざされたかもしれんな」
「何で残念そうなんですか？」
「貴重な魔法が失われるのは、残念なものじゃよ」

カバッハーンの言うとおり、元々複雑な魔法である時空の狭間へ

転移させる魔法を使えるものは、今では存在しない。文献も殆ど残されていないため、今後この魔法が再び世に出る事はないだろう。そんな中サイアスはある考えに至り、自重気味に笑う。

「（フル・カラーが蘇りでもしない限り、二度と時空の狭間へ行く者は出ないだろうな…ふっ、死者が蘇るなど、有り得ないな）」

ー食料コア　地下三階　階段脇ー

「ビッチ様。奴らがいました」
「ふむ…リーザスのクソ共とゼスのクソ共は手を組んだのか。面倒な…」

食料コアまでやってきたビッチたちはルークたちを発見する。気配で察せられないよう、司令室にあった小型の魔法モニターを持ってきて、それで少し離れた位置から確認するという徹底ぶりだ。

「だが、この先のあのトラップで一網打尽にしてやるのだ。ケヒャケヒャ！」
「笑うな。見つかるだろうが」
「う、動き出すみたいだ…」
「では行くぞ。ボサッとするな、メリム」
「も、申し訳ありませんビッチ様」

ルークたちが通路の奥に進んでいくのをモニターで確認し、その後をついていくビッチたち。その存在にルークたちは気がつけずにいた。

一食料コア　地下三階　通路一

「なんと…ではこの闘神都市に魔人が…」
「本当に…？」
「ああ、確かにこの目で確認した。調査はせず、早めに切り上げた方が得策だ。脱出手段もある訳だしな」
「ふむ…確かにのう。口惜しいが、そうするとするかの。町の者たちも順番に少しずつ下ろしていけばいいんじゃな」
「ああ、そうしていただけるとありがたい」
「では、この食料コアの探索だけで引き上げるとしますかね」
「それと、行方不明のアリシアという子も捜さなきゃね」

ルークから魔人の存在を聞いたゼス勢は、調査をこの食料コアだけで切り上げ、行方不明のアリシアを見つけたら早々にゼスに引き上げる事を決定する。同時に地上に降りる事を望んでいる町の人たちの救助も約束してくれた。地上へ一緒に降ろして貰う事になるリーザス勢は食料コアの調査に協力すると言いだし、通路を共に進んでいく。魔人と出くわす可能性があるのは危険だが、いざとなればルークが帰り木を使って町へ帰還すればいい。他の者はカサドの町に行った事がないため帰り木を使っても洞窟の入り口に出るだけだが、町の教会からここに入ってきたルークは帰り木を使えばそちらに帰還する。帰り木の効果は周囲の者も共に連れて行く。つまり、ルークと離れない限りいつでもカサドの町に行けるのだ。その安心感が、全員を油断させていたのかもしれない。本来であれば、魔人がいると判った時点で残酷な話ではあるがアリシアを放っておき、早々に帰還すべきなのだ。

「分かれ道だな」

「右の方には部屋が一つあるだけのようです」

かなみがそう言う。他の者は確認できないが、忍者であるかなみは視力2．5以上あるため、遠方凝視で真っ直ぐ続く通路の奥に扉があるのを確認する。

「それじゃあ、そこの調査をして、次に左に進みましょう」

「…悪いけど、左の通路で待っているから調査してきてくれない？ルークと話があるの」

「俺か？」

「ロゼさん、話って言うのは？」

「ちょっと聞かれたくない事なの」

「ま、まさか…」

「ああ、そう言う事じゃないから安心して」

「ふむ…なら俺が一応護衛に残るとするかな。雷帝、そちらは任せましたよ」

「私も一応使い魔だからこっちに残るかな…」

「サイアスとフェリスか…ま、二人くらいしょうがないか」

ロゼがサイアスの顔を見ながらそう呟く。ルークの親友であり、先程から見ていると話の判る男でもある。フェリスも使い魔であれば問題ないだろう。トマトが抜け駆けは駄目ですよー、と叫んでいるのを手を振って見送るロゼ。右の通路を進んでいった面々を見送り、左の通路に少しだけ進んでいき、多少行ったところで立ち止まる。壁により沿うロゼにルークが口を開く。

「それで、話というのは？」

「これの事よ」

ロゼが懐から鏡を取り出す。それは、以前ルークが預けていた鏡。

その鏡を見てサイアスが眉をひそめる。

「それは…」

「調査が終わったのか？」

「あんたが行方不明になっている間にとっくにね。ちょっと聞かれたくない話だったから…特に、若い娘たちにはね…」

「…どういう事だ？」

ルークが真剣な表情でロゼを見る。ロゼは一度ため息をついた後、持っていた鏡を指さして口を開く。

「結論から言うわ。この鏡に映っている少女は本物の人間よ」

「なに！？」

「これが本当の人間だって！？」

フェリスも驚いて鏡を受け取り、その中に描かれた少女を見る。言われてみれば絵にしては良く出来すぎている。半分に欠けたその鏡には、少女の上半身だけが映っていた。

「そう。おそらくは、強い力を持った魔女の仕業よ。鏡の中に人間を閉じ込める凶悪な魔女。一体何が目的なのかまでは判らないけどね…」

「その鏡なら俺も持っている」

「なんですって！？」

サイアスが懐から鏡を取り出す。それは、リーザス勢と出会う前に食料コアの一室で発見したもの。その時、やってきた通路から声がする。

「それなら私も持っているぞ」

「っ！？」
「アスマ様…何故こちらに？」

四人が慌てて振り返った先にいたのはナギ。その手には鏡を持っている。

「少しその男に話があった。あちらは退屈そうだし、丁度良いと思って来てみれば、面白そうな話をしているな」
「…ちょっと貸して貰える？」
「ああ」
「ん」

サイアスとナギがロゼに鏡を手渡す。サイアスの持っていた鏡はまた別の女性の上半身が映し出されていたが、ナギの持っていた鏡はルークのものと合致する。鏡を併せた瞬間、鏡が光り出し、その封印が解除される。鏡が砕け散ると共に、中に封印されていた少女が外に出てくる。

「あ…やっと…やっと出られた…」
「本当に人間が封印されていたというのか…」
「…ふむ」

サイアスが目を見開き、ナギが興味深そうに見ている。ルークが現れた少女の肩に手を置きながら問いかける。

「君は一体…やっとというのは、どれ程の年月鏡の中で？」
「私はオイチと言います。カサドの町出身で、もう十年以上も鏡に…」
「十年…」
「鏡の中で十年も…」

「ありがとうございます…やっと、やっと私…」

泣きながらそう言うオイチは、そのままフッと意識を失ってしまう。安心して気が抜けたのだろう。オイチを抱きかかえながら、ルークが口を開く。

「サイアス、アスマ。これをどこで？」
「この闘神都市で拾った。魔力を放っていたから、後で調査しようと思ってな」
「私もさっき上の階で拾った」
「という事は…魔女はこの闘神都市を中心に活動していそうね。まぁ、十年以上も前じゃもうどこかに行っているかもしれないけど」
「だが、俺は地上でこの鏡を…」
「十年もあったんだから、何かのはずみで地上に落ちちゃったんでしょ。残酷な話よね…偶然見つかったからいいものの、地上と空中都市なんて、下手したら一生見つからなくてもおかしくないわよ。それに、こっちの女性はまだ捕まったままだしね。この調子じゃ、被害者はまだまだいそうね。老いる事もなく、死ぬ事も出来ない。そんな状態で鏡に閉じ込められ続ける…どれ程の絶望かしら。ねっ、あんまりみんなには聞かせたくない話でしょ。トマトとか、かなみとか、メナドとか…真っ直ぐな娘には特にね…」

ロゼがサイアスの拾った鏡を手に持ちながらそう口にする。サイアスの、フェリスの、そしてルークの表情が歪む。

「許せる事ではないな…」
「死すら与えないなんて…悪魔よりも外道だぞ、その魔女は…」
「アトランタだ」
「え？」

ルークが小さく名前を呟く。聞き覚えのない名前にロゼが聞き直す。

「アトランタ。闘神都市に存在し、百年以上もの間カサドの町から少女を攫っていた魔女だ。それは、今年も実行されようとしていた」
「カサド…オイチの出身も…」
「恐らく、そいつで間違いないな」

サイアスが確信する。これ程の人道に外れた行為をした魔女。放っておく訳にはいかない。

「で、どうするルーク？」
「ぶちのめして全ての人を解放させる」
「聞くまでもなかったな。ゼスに帰るのは少し後になりそうだな」
「スマン、頼りにしているぞ」

ルークの答えにサイアスがそう返す。サイアスも魔女討伐に参加するつもりらしい。ルークがそれを確かめる様子もなく、当然の事のようにサイアスの協力を受け入れている。フェリスは思う。これが相棒か、と。そのフェリスにルークが言葉をかける。

「フェリスも頼りにしているぞ」
「ま、私はお前の使い魔だからな。可能な限り手伝うさ」

そう、使い魔。サイアスとは、ランスとは、違う立ち位置。自分でも気がつかないほどの小さな歯痒さを感じていたフェリスだったが、サイアスとルークの話が耳に入ってくる。

「それにしても、いつの間に悪魔と契約したんだ？」
「解放戦の時に色々あってな。まあ、使い魔というよりは…仲間と

いう風に思っているがな」
「…馬鹿か、お前は。悪魔である私が…仲間だなんて…」

ぷい、と横を向いてしまうフェリス。その時、一連の様子を見ていたナギが口を開く。

「やはり、強いな貴様。今の魔女の話をしていたときの殺気も中々のものだ」
「そういえば、俺に話というのは？」
「貴様の強さに興味があった。それと、男結界を無視して入ってきたのも気になった。あれはどうやったのだ？」
「あれか…俺は結界を無効化する能力を保有しているんだ。生まれ持っての体質でな」
「ほう…面白いな。志津香共々ゼスに欲しい」
「魔法使いでない俺がか？」
「結界を無効化するなら、いい修行相手になるだろう？強くなれるのなら、魔法使いだろうとなんだろうと関係ない」
「ふむ…強さ至上主義か。嫌いではないがな。だが、申し訳ないが一つの国に収まる気はまだないんだ」
「そうか…残念だ」

ナギとルークが会話を続ける。互いに現在レベルでは大陸でも屈指の高さ。更に、強さを求めるところなども共通している。互いに感じるものがあるのだろう。その様子を、サイアスは静かに見守る。

「（どう伝えればいい…筆談も暗号も駄目なこの魔法は思った以上に厄介だ…彼女がナギだと伝える方法は…何かないのか…）」
「そんな顔をするな。地上に戻ったらお礼参りでゼスにも寄る予定だ。その時でよければ手合わせくらいさせて貰うさ」
「ほう…それは楽しみだ」

少しだけ口元に笑みを浮かべる。瞬間、その後ろに志津香の母アスマーゼの姿がダブって見える。決して顔が似ている訳ではない。雰囲気も違う。だが、確かにその顔がダブる。

「ん？どうした」
「いや…何でもない」

呆けた顔のルークにナギが問いかけてくる。すぐに表情を戻し、気にするなとジェスチャーをするルーク。その頃にはアスマーゼの顔は消えていた。

「（思ったよりも疲れているのかもしれんな…）」
「それで、まずはどうするつもり？」
「そうだな…右の部屋に行った面々が戻ってきたら一度町に戻ろう。オイチをこのままにする訳にもいかないしな…その上で、少しずつ町の人を地上に降ろしつつ、俺たちはアリシアとアトランタの捜索を続けよう」
「それが妥当なところだな。面子的にはどうする？俺らだけか？」
「雷帝やアレキサンダー、リックあたりなら事情を話せば手伝って貰えるだろうな。他にも手伝って貰えそうなメンバーがいたら、鏡の事は少しオブラートに包んで説明するか」
「志津香は必要だろう。志津香は戦力になる」
「ん…ああ。そうだな」
「それじゃあ、とりあえずの方針は決まりね。後はあっちの面子の合流を待って…」
「きゃぁぁぁぁぁ！！」
「「「「「！？」」」」」

ロゼがそう話していると、突如遠くから悲鳴が聞こえてくる。遠

すぎて誰の悲鳴かは定かではなかったが、それは確実に右の通路の方向。

「っ！」

「行くぞ！」

瞬時に駆け出すルークたち。魔人か、ヘルマンか、それとも別の何かか。不安を抱えながら通路を進んで行く。

「ごめん…」

「気にするな。俺のミスでもある」

ロゼが小さく謝ってくる。今この迷宮が危険な事は判っていた。例え一瞬でも、離れるべきではなかった。だがあちらにはリックもカバッハーンもいた。だからこそ油断していたのかもしれない。後悔を抱えながら、ルークは右の通路に進んだメンバーの無事を祈った。

―食料コア　地下三階　右の部屋―

時は少しだけ前に遡る。ルークたちと別れたマリアたちは右の通路を進んでいた。途中ナギがあちらに用があると言って引き返したが、それ以外の面々は全員こちらについてきていた。少し進むと、かなみの言ったとおり扉が見えてくる。その扉を開けると中は少し奥行きのある部屋。その最奥には宝箱が見えるが、それを隔てるように巨大な穴が空いていた。

「あの宝箱、何か意味ありげね」

「かなみさん、あそこまで跳べませんか？」
「ちょっと遠すぎるわ…」
「ふむ…空を飛べるフェリスもこちらについてきて貰うべきだったかのう」

穴を前に考え込む面々。その時、突如穴の上に道が現れる。

「んっ！？急に道が…」
「面妖な…」
「マリアさん。この石版の上に乗ると道が現れる仕掛けみたいです」

香澄がマリアにそう言葉を投げる。見れば香澄が部屋の入り口近くの床に置かれている石盤の上に乗っていた。石版の上から下りた瞬間、道が消える。

「なるほどね…この上に誰かが乗っていれば道が出来るという仕掛けね」
「ライトくんとレフトくんに乗らせて奥の宝箱を取りに行きますか？」
「…いえ、この装置以外にもまだトラップがある可能性がある以上、ガード要因のウォール・ガイを置いていくのは心許ないかと」
「そうね。あの宝箱がミミックの可能性もあるし、取った瞬間敵が現れるかもしれないわ」

キューティの提案をリックとレイラが断る。その時、ジュリアが手を挙げる。

「はーい、じゃあジュリアちゃんがこの石版に乗ってここで待ってます」
「ジュリアが？」

「大丈夫？絶対に動いちゃ駄目よ」
「大丈夫だよ。歩くの疲れたからお留守番してる」
「それじゃあ、あたしたちもここらで休憩を…じゃなかった。ジュリアの護衛を！」
「決して歩き疲れた訳じゃないんだからね」
「…はぁ」
「まあいいんじゃない？」

ジュリアが石版の上に座り込み、シャイラとネイがそれに続く。ため息をつくキューティだが、レイラがそれを許す。正直ジュリア、シャイラ、ネイの三人は戦力的に役に立たない。トラップがあった場合を考えれば、ここでおとなしくして貰っている方がマシだろう。

「わかったわ。じゃ、ジュリアちゃんお願いね」
「絶対に動いたら駄目だからね」
「うん、ジュリア動かない」
「お主ら二人もちゃんと護衛するんじゃぞ！もしサボったら…」
「「精進させていただきます！」」

こうして石版の上にジュリア、シャイラ、ネイの三人だけを残し、マリアたちは穴の上に出来た道を通って宝箱へと近づいていく。だが、これは失策。部屋の中のトラップにばかり気がいって、後ろに気を配っていなかったのだ。いや、通路の反対側にはルークたちがいるため、誰もここに来るはずはないという先入観もあったのかもしれない。宝箱まで辿り着き、リックやレイラ、カバッハーンやウスピラが周囲を警戒する中、マリア、香澄、真知子の三人が宝箱を調べる。

「真知子さん、トラップはなさそうですかねー？」
「そうね…特に怪しい点は見受けられないわ」

「マリア、開けられそう？」
「大丈夫そうね…香澄はどう思う？」
「特に異常はないかと…」
「それじゃあ…開けるわ」

三人で罠の掛かっていない事を確認し、マリアがゆっくりと宝箱を開けていく。

「何か入っていた？」
「空っぽだわ…」
「…いえ、その底のシート、剥がれそうではなくて？」
「あっ、本当だ！」

チルディの指摘で二重底に気がつく。底のシートを捲ると、そこには鍵が置かれていた。

「鍵だわ…えっと、Wキーって書かれているわ」
「何の鍵なんだろう」
「随分と丁重な作りの鍵だし、ここまで厳重に隠されていた事を考えると、かなり重要そうな鍵のようね」

メナドと志津香が鍵を覗き込みながらそう答えると同時に、部屋の入り口から声が響く。

「その通り。その鍵は非常に重要なものなのだよ、諸君」
「っ！？」
「ヘルマン軍！？」
「しまった…」
「ぬぅ…こちらに注意を向けすぎたの…」

声と同時にヘルマン調査隊が扉から入ってくる。ビッチがこちらをニヤニヤと笑いながら見ており、宝箱のトラップに注意を向けすぎて反応が遅れた事をアレキサンダーとカバッハーンが悔やむ。

「スノー…」
「おおっと、動かないように。動いたらこの騒がしい娘がどうなるかくらい、頭の悪い君たちでもわかりますよね？」
「きゃはははは！」

ウスピラがスノーレーザーを放とうとするが、デンズも石版の上に乗り、ジュリアを抱え上げてその首に斧の先端を向けていた。護衛のシャイラとネイは既にヒューバートにやられており、床に倒れていた。

「卑怯な…」
「というかあの二人、瞬殺ですよ…」
「役に立たんのう…」
「ケヒャケヒャケヒャ！」
「くっ…」
「さて、その鍵なのだが、わたくしに必要なものなのだよ。渡してくれるかな？さもなくば…」

スッとデンズの方を指さすビッチ。

「…判ったわ」
「そうじゃの。ではワシがそちらに…」
「待った。鍵を持ってくる人物はこちらで指定させて貰う。赤い死神や雷帝が来たのでは、何をしでかすか判りませんからね」
「ふむ…流石にそこまで無能ではなかったか」

カバッハーンが残念そうにそう呟くと、両手から魔力が四散する。やはり何かしらやるつもりだったようだ。ビッチが宝箱の前にいる面々を見る。狙いは四人。志津香、ナギ、キューティ、ロゼ。ナギとロゼが左の通路に行ったのはモニターで見ていたため、今この場には志津香とキューティ、それと、先程の戦闘ではいなかった神官のセルが加わっていた。だが、セルの実力は未知数。それよりも、先程の戦闘である程度の実力があると判っている二人の方が、あの闘将を動かす魔力を注入するのには適任だ。

「ではそこの帽子を被った魔法使いの娘と、ゼスの警備隊の服を着た娘。二人でキーを持ってこちらに来なさい」

「……」

「二人…ですか？」

「おっと、不用意な事は考えない方が身のためですよ」

「きゃー、きゃー、死んじゃう！」

デンズに抱えられているジュリアが、何故か嬉しそうにジタバタと叫んでいる。だが、見捨てるわけにもいかない。いや、それ以前に、石版から離れられたら穴に真っ逆さまなのだ。奴らの命令を聞くしかない。

「キューティ、行きましょう」

「…それしかありませんね」

「志津香、キューティさん。駄目よ、絶対罠だわ」

「でも、それしか出来る事はないでしょ」

「ヘルマン軍。今からそちらに行くので、絶対にその子には手を出さないでください！それと、鍵が手には入ったらその子を解放するように！」

「ケヒャケヒャ。安心しろ、約束は守る」

キューティがそう宣言し、志津香と共に来た道を歩いて行く。その後ろから二体のウォール・ガイがついていく。

「むっ！こら、そのウォール・ガイは置いていけ！」
「すいません…これは新型のオート型ウォール・ガイなので、自動的についてきてしまうんです」
「むっ…ゼスではそんなものを開発していたのか。ならば仕方ないな」
「…ふっ。オート型ねぇ…」

当然キューティの口から出任せである。ビッチは信じ込んでしまったようだが、後ろでシャイラを縛っているヒューバートが意味深に笑う。流石に厳しい嘘だったかとキューティが焦るが、ヒューバートは特に何も言わず、そのまま黙っていた。歩いて行く二人の背中を見ながら、マリアが泣きそうな顔になる。

「私…リーダー失格だわ。こんな事になるなんて…」
「抱え込むな、お嬢ちゃん。ワシらの失策でもあるんじゃからな」
「大丈夫…チャンスは必ず来る…」
「マリアさん。貴女が今悩んだところで何も解決しないわ。諦めないで」

マリアが落ち込んでいるのを、カバッハーン、ウスピラ、レイラの三人が慰める。そうしている間に、志津香とキューティがあちらまで辿り着く。志津香から鍵を受け取り、ビッチが高笑いをする。

「ケヒャケヒャ！」
「…イヤな男」
「小娘が生意気を言うな。ヒューバート、この二人を縛れ！」

気絶しているシャイラとネイを縛り終えていたヒューバートに、ビッチがそう指示を出す。ロープを握ったまま志津香とキューティに近づいていき、その腕を縛り始める。

「すまんな…」
「ふん…」
「ヘルマンの犬が…」

志津香とキューティが憎々しげにヒューバートを睨み付けるが、そのまま黙々と縛られていく。少しの後、完全に二人は拘束され、身動きが取れなくなる。そのような状態でも気丈にビッチを睨み付けながら、志津香が声を荒げる。

「約束通り、ジュリアを解放しなさい」
「ケヒャケヒャ。当然だ。おい、デンズ。その娘を離してやれ。貴様はあちらにゆっくりと歩いて行け！」
「きゃー、きゃー！ジュリアちゃん恐い！」

デンズが石版の上に乗ったまま、まずはジュリアを解放する。だが、新たに志津香とキューティ、それと一応シャイラとネイが人質になっているため、他の面々は動けない。ビッチの指示通り、ジュリアは騒ぎながら穴の上に出来ている道を歩いて行き、レイラの胸に飛び込む。

「あーん、ジュリアちゃん恐かった！」
「よく頑張ったわね…」
「（親衛隊として、あんな情けない姿を晒すだなんて…この人にプライドはありませんの？）」
「よしよし、これで貴様らは用済みだ。おい、デンズ。台から離れてこっちに歩いてこい」

その瞬間、全員に緊張が走る。マリアが額に汗をかきながら、声を絞り出す。

「台から離れてって…ちょっと待ってよ…」
「そんな事をしたら…」
「穴に真っ逆さまですかー！」
「ルークさん…」
「神よ…私たちに慈悲を…」
「…おでが動いたら、み、道が無くなって、こいつらが落ちるのでないか？」
「ケヒャケヒャ！構わん、やれ！」
「いやぁぁぁぁ！止めてぇぇぇぇ！！」
「カバッハーン様…」
「…打つ手無しじゃな。死ぬなよ、皆の者。後で合流と行こう」

カバッハーンの言葉と同時に、デンズが石版の上から離れる。その瞬間、立っていた道が無くなり、連合軍が穴へと落ちていく。

「きゃぁぁぁぁぁ！！」
「ケヒャケヒャケヒャ！みんな落ちよったわ！」
「ひ…卑怯者！」
「これが…ヘルマンのやり方ですか！」
「どのような手段を用いても、結果的に勝てばいいのだよ。君たちはこれからわたくしの為にたんまりと働いて貰うよ…ケヒャケヒャ！」
「くっ…」

縛られている二人を見下しながら、ビッチが高笑いをする。その時、メリムがモニターを見ながら声を出す。

「ビッチ様。左の通路に進んでいた者たちがこちらに向かってきます」
「ふむ…もう用は無いな。あちらには炎の将軍がいたな…出くわすのも面倒だ。一度帰り木で入り口まで戻り、その後闘将の部屋を目指すぞ」
「はい」
「ではデンズ、その二人を抱えろ」
「こ、この二人はどうするだ？」
「ん？」

志津香とキューティを抱えたデンズが、床で気絶しているシャイラとネイを指さす。

「ふむ…役には立ちそうにないが…」

ジロジロと二人の身体を眺めるビッチ。その目がイヤらしい目つきへと変わっていく。

「これはこれで使い道くらいあるだろう…わたくしの欲求不満の捌け口とかな。ヒューバート、その二人も連れて行くぞ」
「……」

ビッチの指示を受け、気絶している二人を抱えるヒューバート。メリムが帰り木を袋から出し、使用する。

「ケヒャケヒャ！わたくしの完全勝利だ！」
「（マリア…かなみ…みんな、無事でいて。ルーク…）」
「（ルークさん…）」

帰り木の効果でヘルマン勢の姿が部屋から消え去る。そのすぐ後に、部屋の扉が蹴破られる。ルークたちが到着したのだ。

「何があった！」
「もぬけの殻…だと…」
「穴が空いているな。あれに落ちたんじゃないか？」

ルークとサイアスが部屋を見回していると、ナギが部屋の中央にある巨大な穴を指さす。すると、その穴から声が響く。

「ルーク殿…ですか…」
「！？」
「この声は…リックか！？」

ルークたちは穴に駆けていき、下を見る。そこには、バイロードを伸ばして壁に突き立て、それにぶら下がっているリックの姿があった。いや、リックだけではない。右腕でバイロードを掴んでぶら下がりながら、左腕では眠っているセスナを抱えていた。穴に落とされた瞬間、即座にバイロードを伸ばして落ちるのを防いだリックは、側にいた者に手を伸ばす。いたのはレイラ、ジュリア、チルディ、セスナの四人。初めは下に落ちた際に生き延びる可能性の低いジュリアを助けようとしたが、直前でセスナが眠っている事に気がつき、この状態で落とす訳にはいかないとそちらを掴んだのだった。

「フェリス、リックを…」

ルークが指示を出そうとするが、既にフェリスはリックに向かって飛び降りていた。

「大丈夫かい？」

「ありがとうございます。まずはセスナ殿を…」
「ぐぅ…ぐぅ…」
「そ、その次はわたくしをお願いしますわ…」
「ん？」

リックからセスナを受け取ったフェリスは、下から聞こえてきた声に不思議そうに視線をやる。そこには、リックの左足にしがみついているチルディの姿があった。

「あんたも無事だったのかい。執念だね」
「で、出来れば早くしていただけると助かりますわ…」

リックがセスナを抱えた直後、チルディは執念でその足にしがみついていたのだ。フェリスがセスナ、チルディ、リックと順番に穴から上げていく。全員の救出が終わったところで、改めてルークがリックに向き直る。

「一体何があった！？」
「ルーク殿…申し訳ありません。志津香殿、キューティ殿、シャイラ殿、ネイ殿の四名がヘルマン軍に攫われ、他の者は穴に…」
「なんですって…」
「雷帝がいながら…ヘルマンに不覚を取ったのか…」
「…志津香が…攫われたのか…」

リックの説明を受け、ルークだけではなく、ロゼ、サイアス、ナギの目も見開かれる。状況の詳しい説明をリックから聞いていると、穴の下の調査に行っていたフェリスが戻ってくる。

「駄目だな…下には水路が流れていて、誰もいなかった。その水路もいくつかにばらけていたから…何組かでバラバラになっていると

思う」
「なんて事だ…」

サイアスが頭を抱える。この迷宮内にはモンスターだけでなく、ヘルマン軍、更には魔人まで存在している。そんな中、バラバラになってしまったのだ。ロゼも自分が通路に呼び出した事に責任を感じているのか、口に手を当てながら押し黙ってしまっていた。その時、ルークが床を殴る音が部屋の中に響く。全員がそちらに注目すると、ルークが表情を歪めながら口を開く。

「悔やむのは後だ…必ず見つけ出すぞ。全員無事に、地上に降りる」
「…ああ、別れた面々には雷帝もウスピラもいる。それ以外にも、レイラやアレキサンダーだっている。全員…必ず無事なはずだ」
「ヘルマン軍に攫われたのも…ネイやシャイラだけだったら不安だけど、志津香とキューティがいるしね」
「志津香がいるなら大丈夫だな。あいつはヘルマン如きに遅れを取りはしない」
「無事で…いてくれるといいのですけどね…」
「この失態は…必ず挽回します…」
「ぐぅ…ぐぅ…おおっ！」
「今起きたのかい。暢気な娘だね…」

ヘルマンの策略により、盤石と思われていた連合軍はバラバラになる。志津香、キューティ、シャイラ、ネイの四人はヘルマン調査隊に攫われ、かなみ、マリア、香澄、トマト、真知子、セル、アレキサンダー、メナド、レイラ、ジュリア、カバッハーン、ウスピラの十二人が穴に落ちて行方不明となる。この場に残ったのは、ルーク、サイアス、フェリス、ロゼ、リック、チルディ、ナギ、セスナの八名と気絶しているオイチ。

「必ず…全員助け出す…」

離ればなれのパーティー、ヘルマンの暗躍、復活間近の闘将、イオの裏切り、魔女アトランタ、そして、魔人。闘神都市の戦いは、混迷を極めていく。

第８２話　油断（後書き）

［人物］

オイチ

　鏡に封じ込められていた少女。カサドの町出身の学生で、十年以上前のおかゆフィーバーへの生け贄。その後長きに渡り、鏡に封印されていた。

第８３話　その名はディオ

一下部動力エリアー

「周囲にモンスターはいないようですね。この辺りで一度休憩を取りましょう」

「大分流されてしまったみたいですね…」

アレキサンダーが先頭を歩き、周囲にモンスターの気配が無い事を確認する。少し開けた場所、周囲のどの方向からモンスターが来ても対応できる場所で休憩を取る事にする。後ろを歩いていたセルが礼を言い、その場に座り込む。

「さあ、香澄殿も休憩を取ってください。周囲の警戒は私が行いますので」

「あ、はい…本当にありがとうございます…アレキサンダーさんが掴んでくれなかったら、私…」

「何、戦えぬ香澄殿を守るのが、近くに立っていた私の勤めですから」

この場にいるのは三人。アレキサンダー、セル、香澄だ。穴に落ちる際、アレキサンダーは側に立っていた香澄とセルを両方の腕で一人ずつ抱きかかえ、離れないよう水路に流されている間も掴んでいたのだ。香澄とセルを一人にさせる訳にはいかないという思いからだ。香澄が申し訳なさそうに口を開く。

「すいません…私みたいに戦闘補助も出来ないような役立たずが一緒で…」

「何を言いますか。先程宝箱の罠をマリア殿や真知子殿と一緒に解明していたではありませんか。それに、ここまで来られたのも香澄殿とマリア殿が作られたチューリップ４号のお陰。どちらも私には到底出来ぬ事です」
「アレキサンダーさん…」
「あら、アレキサンダーさん。その手に抱えているのは？」

アレキサンダーがいつの間にか大量の木材を持っていた。セルがその事について尋ねる。

「あちらの部屋に机がありましたので、そちらを破壊して少しだけ失敬してきました。恐らく、昔の研究室か何かかと。属性パンチ・炎！」

アレキサンダーが拳に炎を纏わせ、それを木材に燃え移らせる。それを地面に置き、口を開く。

「さあ、まずは濡れた体を暖めなければ。服も乾かさねばなりませんからね」
「すいません、何から何まで…」
「この程度、大した事ではありません。必ず、生きて戻らねばなりませんからね」
「そうですね…皆様に神の加護があらん事を…」
「すいません…私、アレキサンダーさんの事を今まで誤解していました…」
「ん？」

香澄が申し訳なさそうに呟くのを、アレキサンダーが不思議そうな表情で見る。

「その…旅の格闘家っていうから…恐い人なのかと…」
「はっはっは。概ね間違ってはいませんよ。拳一つ、修行に明け暮れる毎日。仕事の一つもまともに出来やしない」

香澄の言葉をアレキサンダーが笑い飛ばす。香澄とセルが見ている中、燃える炎を前に、右拳をグッと握りしめる。

「ですが…こんな私でもお二人を守る事くらいなら出来ます」
「アレキサンダーさん…」
「共に帰りましょう。ルーク殿たちの下へ…そして、地上へ！」
「凄いんですね、アレキサンダーさんって。なんていうか…頼りになる…」
「なに、まだまだ修行の身です」

炎で体を暖めながら、アレキサンダーたちは和気藹々と話し合う。今いる位置も判らず、アレキサンダーが持っていた帰り木も水路に流されている間に無くなってしまっていた。だが、諦めはしない。アレキサンダーは拳を胸の前で合わせ、目の前にいる二人を守りきる事を誓った。

―南の塔―

「どう、真知子さん」
「…よかった。壊れてはいないみたい」

ホッと胸をなで下ろす真知子。水浸しになったコンピュータが壊れていないか心配だったが、どうやら無事のようだ。後ろで見守っていたメナドも胸をなで下ろす。

「それにしても…ここはどこなんだろう…」
「少なくとも食料コアではないでしょうね…大分流されたみたいですし…」

二人が周囲を見回す。先程までいた場所とはかなり装飾が違う。石造りの床や壁、そしてそこにかけられた燭台などを見て、真知子が呟く。

「…塔、かもしれないわね」
「塔って、空の上からいくつか見えたあの？」
「ええ。装飾的に見て、あのどれか一つに私たちは流されてしまったのかもしれないわね。あの水路は、差し詰め全ての塔やコアの水路に繋がっていたのかも…」
「なるほど…」
「メナドさん。モンスターが現れたらお願いしますね」
「任せてよ。その為にボクは鍛えているんだから」

メナドが胸を張る。本当の事を言うならば、魔人がいると言う話を聞いていたメナドも若干の不安がある。だが、目の前にいる真知子は今回のメンバーでは最も戦闘が出来ない人物だ。自分が守らなければいけない。その使命感がメナドを奮い立たせていた。その時、上の階から物音がする。

「真知子さん、今の聞こえた？」
「ええ…それと、人の声のようなものも聞こえたわ」
「流された内の誰かかな…」
「慎重に行きましょう。魔人やモンスターの可能性もあるし」
「真知子さん、ボクの側から離れないでね」
「ええ。頼りにしているわ、ナイトさん」

メナドと真知子の二人は、微かに聞こえた人の声を頼りに南の塔を上っていった。

―上部中央エリア―

「うーん…誰もいないのは流石のジュリアちゃんも不安になります…」

リックの手を掴み損ねたジュリアは、一人上部中央エリアを彷徨っていた。はっきり言って、非常に危険な状態である。もし凶悪なモンスターに出くわせば、間違いなく殺されるであろう。その時、通路の奥から声が聞こえてくる。

「ハニホー…ハニホー…」
「きゃはは！あっちで声がする、行ってみよう！」

声のする方向に進んでいくジュリア。生まれ持っての悪運か、声の主がいる部屋に辿り着くまでの間、一体のモンスターとも彼女は出くわさなかった。

―防空コア―

「よかった…目が覚めたかい？」
「あれ、ここはどこですかねー…」

水路に流されて溺れかけていたトマトは、ある人物によって助け出されていた。意識を取り戻したトマトは、虚ろな目で周囲を見回す。

「ここは防空コア。それよりも、どうして水路から?」
「色々ありまして…あ、これは危ないところを助けていただき、感謝感激ですー。私はトマトと申しますです」
「ボクの名前はサーナキア。今はこの防空コアで、ある男を倒すために修行を積んでいるんだ」
「修行ですかー。それは大変ですかねー?」
「勿論。でももっと鍛錬を積まないと、あの憎きランスを打ち倒す事は…」
「ランスさんですか!?ランスさんを知っているんですかねー!?」

サーナキアから思わぬ人物の名前が出て、ガバッと起き上がるトマト。そのままサーナキアの肩を掴む。

「あ、ああ。ボクはあの男に…くっ、思い出すだけでも忌々しい」
「あー…ランスさんは平常運転って事ですかねー」
「この先に隠された剣があるという情報を手に入れてね。それを手に入れて、再びランスに挑むつもりさ」
「むっ!と言う事は、ランスさんの居場所は知っているんですかねー?」
「ああ、剣を手に入れてからでよければ、連れて行ってあげるよ。それも騎士の勤めだからね」
「これはラッキーです。すぐにでもルークさんに合流できそうです!」
「それじゃあ、ボクはもう少し先に進むから、離れないようについてきてね」

剣を抜いてコアの奥へと進もうとするサーナキア。トマトも剣を抜き、サーナキアの横に並ぶ。

「こう見えてもトマトも冒険者を目指す戦士だったりしますです。隠された剣の奪取、お手伝いするですよ」

「ふふ、君が戦士か。あまり無理はしないようにね」

トマトの事を軽く笑いながら流すサーナキア。とても戦えるとは思っていないのだろう。だが、その評価は数分後に覆る。

「とーっ！」

「ふしゅるるる……」

「お、オクトマンをいとも簡単に…この子、ボクよりも強いんじゃ…くっ、そんなはずはない！」

「ルークさん、トマトはすぐに帰るですよー！」

一下部司令エリアー

「ふむ…一人か…」

カバッハーンが周囲を見回す。辺りには誰もいない。その代わり、多くの部屋が立ち並んでいた。その中の一つに入ってみれば、研究材料となりそうな書物が大量に置かれていた。

「こいつは凄い…しばらくここで調査をしていくとするかの」

他のメンバーと違い、特に歩き回る事をせず、カバッハーンはその部屋の書物を片っ端から読んでいくのだった。

―食料コア　地下四階　とある一室―

ウスピラが炎を前に暖を取っている。そこに、周囲を探っていたかなみが戻ってくる。

「どうでした…？」
「周囲には誰もいませんでした」
「そう…」
「でも、私たちはそれ程流されていないはずです。すぐに合流も出来るはずです」
「ええ…」
「（ま、間が持たない…）」

反応の薄いウスピラを前にかなみが内心焦る。自分はリーザスの忍び、相手はゼス四将軍。会話が弾むはずもない。困っていると、ウスピラが手招きをしてくる。

「この炎は…かなみさんが出した炎…かなみさんも暖まらないと…」
「あ、じゃあお言葉に甘えて…」

かなみがウスピラに近づいていき、一緒に炎で暖を取る。この炎はかなみが火丼の術で出したものである。水で濡れた服が乾くのを感じていると、またも無言になる。ふと、隣で衣擦れの音がする。

「って、ウスピラさん!?何を急に脱ぎだして!?」
「？濡れた服を乾かさないと…」
「そうですけど…恥ずかしくないんですか？」

「男性がいたら恥ずかしいけど、今は別に…」

下着姿になって服を乾かすウスピラ。かなみも顔を真っ赤にしながらも、結局ウスピラの説得に折れて服を脱いで乾かす事になる。

「うう…今だけはルークさん、私の事を見つけないで…」
「早く見つけて貰った方が…いいに決まっている…」
「でも、ウスピラさん…この状況でルークさんやカバッハーンさんに見つかったらどう思いますか？」
「…別に。少し恥ずかしいけど、緊急事態だから何も…」
「それじゃあ、サイアスさんだったら？」
「氷漬けにする…」
「ぷっ…」

かなみがサイアスの事を不憫に思うと同時に、即答したウスピラを見て少しだけおかしくなる。案外面白い人なのかもしれない、と考えを改め、この後も積極的に会話をしていくのだった。

一食料コア　地下四階　通路一

「そう落ち込まないの、マリアさん」
「でも…私がリーダーとして不甲斐ないばっかりに…」
「それを言うなら、親衛隊隊長としてヘルマンの接近に気がつけなかった私にも責任はあるわ。悩んでいたって、何も解決しない。幸い、そう流されてはいないみたいだし、なんとかしてここを脱出しましょう」

マリアとレイラが通路を歩いている。あまり流されなかった二人

は、ここがまだ食料コアであるという確信を持っており、なんとかして地上への階段を探そうとしていた。

「とにかく、一度チューリップのあった場所まで戻れば、誰かしらと合流できるはずよ」
「そうですね…ランスたちともうすぐ合流できそうだったのに…」
「ねえ、マリアさん。もしかして、ランスくんの事が好きなの？」
「えっ！？」

唐突なレイラの質問にマリアが戸惑う。今まで深く考えた事はなかった。だが、そう言われて改めて自分の気持ちに向き合うマリア。

「…判らないです。でも、今まで何度も助けて貰って…頼りにしているとは…思います」
「ふふふ、ランスくんも頼りになるからね」
「でも、ランスの隣にはシィルちゃんがいるし…あの二人の間に入り込む事なんて…」
「そうね…なんだかんだで、ランスくんはシィルちゃんを大事にしているからね。でも、それで諦めがつくの？」
「…諦めなきゃ、いけないんです」

マリアが悲しそうにそう呟くのを見て、レイラがフッと笑う。

「私もね…好きな人がいるのよ」
「えっ！？レイラさんもですか？」
「ええ。でもその人には好きな人がいるの。私なんかじゃ、とても敵わないくらいに素敵な女性」
「そんな…レイラさんより魅力的な女性なんてそうは…」
「マリスさんなの、その人の好きな相手」
「うっ…」

「ふふ。素直な反応ありがとう」

悲しい話をしているはずなのに、レイラは明るく話す。その態度がマリアには不思議で仕方がなかった。

「諦めたりは…しないんですか？」

「そうね…その人が振り向いてくれるかは判らない。でも、自分からは諦めたくないわね。いつか…もっと鍛錬を積んで、彼の隣に並んでも見劣りしないくらい強くなれば…振り向いてくれるかもしれないでしょ？」

清々しいほどの笑顔を向けてくるレイラ。その笑顔に、マリアの心も晴れてくる。よくよく考えれば、ルークを好きな面々は誰一人諦めていない。お互いに彼の事を思っているのを知りながら、正々堂々と勝負している。ルークの思い人が存在するのか判らないので、ランスとは若干違う立ち位置ではあるが、振り向かせるのが難しいという点では変わらない。自分の親友の顔を思い浮かべて、少しだけ笑みがこぼれる。

「ふふ、ようやく笑顔が戻ったわね」

「…ありがとうございます、レイラさん」

励ましてくれたレイラに礼を言うマリア。余裕が戻ったマリアは、ここでレイラの思い人について考えを巡らせる。レイラより強く、並んで戦うような人物。そして、マリスが好きという事はリーザス関係者の可能性が高い。そんな人物は限られている。

「ひょっとして…レイラさんの好きな人って、リッ…」

「危ないっ！！」

マリアの言葉を遮るようにレイラがマリアを突き飛ばす。体勢を崩したマリアがそちらを見れば、巨大なぷりょにレイラの左腕が飲み込まれていた。

「レイラさん!?」
「くっ…はぁっ!」

残った右腕で剣を握り、巨大ぷりょを斬りつけるレイラ。だが、斬った先からすぐに再生してしまい、ダメージを与える事が出来ない。

「効かない…くっ…あぁっ…」

更に巨大ぷりょの拘束は増し、レイラが剣を落としてしまう。

「レイラさん…待って、今助け…きゃっ!?」
「マリアさん!?」

レイラを助けようとしたマリアだったが、突如後ろから何者かに襲われる。レイラがそちらを見れば、そこには新手の巨大ぷりょがおり、マリアをレイラ同様取り込もうとしていた。

「もう一体いたなんて…くっ…」
「ランス…」

しばらくの後、二人の声は完全に聞こえなくなり、巨大ぷりょがのそのそと通路を後にする。その場には、レイラの剣が残されるだけであった。

―闘将コア　ディオ封印の間―

「ケヒャケヒャ。今度こそ、この人形を動かす事が出来るぞ！」
「なんなのよ、これ…」
「君たちが知る必要は無い」

闘将コアまで戻ってきたビッチたちは、闘将が封印されている間にやってくる。拘束された状態の志津香とキューティは不満そうにしながら人形を見る。頭蓋骨だらけの部屋、その中央の椅子に座り込んだまま動かない人形。これは一体何なのか。

「というか、起きたらめちゃくちゃ気味の悪い部屋なんだけど！？」
「離しなさいよ！」
「ええい、うるさい小娘共め。わたくしが黙らせてやろう！」

目を覚ましたシャイラとネイが騒ぎ立てる。ビッチが不愉快そうに二人を見ながら、そちらに近寄っていく。が、二人の口をデンズが塞ぎ、耳元で囁く。

「い、今は黙ってないと、あの男に殴られるだ。少しの間だけ、し、静かにしてろ」
「「っ…」」

コクコクと頷き、黙り込むシャイラとネイ。それを見て近寄っていたビッチが歩みを止める。その手には、鉄棒が握られていた。

「おや、急に静かになりましたね。聞き分けの良い小娘共だ」
「（ひょっとして…助けてくれたのか？）」
「（見かけによらず、案外優しい人…？）」

シャイラとネイが口を塞がれながらデンズを見る。その様子をヒューバートが黙って見守る中、ビッチが志津香とキューティの縄を切って闘将の前に押し出す。

「さあ、この人形にお前たちの魔力を注ぎ込むのだ。やりたまえ」

「いやよ」

「どうしてそんな事を…」

志津香がきっぱりと拒絶し、キューティもビッチを睨み付ける。

「いやだと？どうも君たちは自分の立場を理解していないようだね…」

「ふん。ブ男の命令は聞かない事にしているの」

「ケヒャケヒャ！…ふん！」

「っ！？」

志津香の言葉を笑い飛ばしていたビッチは、その表情を歪ませて鉄棒を志津香の頬目がけて振るう。思わず目を瞑ってしまった志津香だったが、その頬に鉄棒が届く事はなかった。

「むっ…ウォール・ガイ！？」

「キュー！！」

「あぎゃぎゃぎゃぎゃ！！」

鉄棒から守るように間に割り込んだライトくんがビッチの攻撃を受け止め、反撃に電撃をお見舞いする。絶叫と共にビッチの体を電撃が襲う。

「き、貴様！わたくしに歯向かうなど…」

「あ、すいません。この新型ウォール・ガイは自動で私たちを守ってしまうんです」
「くっ…忌々しいウォール・ガイだ…」

ビッチがライトくんを睨み付けるが、当然キューティの口からでまかせである。それを見ていたヒューバートが静かに吹き出すが、ビッチがシャイラとネイに視線を移したのを見て、ゆっくりと志津香たちへ近づいていく。おそらく、あの二人を代わりに殴って言う事を聞かせるつもりなのだろう。その前に、志津香たちに魔力を注入させる必要がある。

「悪いが、魔力を注入して貰えるかな」
「くっ…」
「逆らうのは止めておけ。もしそうなれば、ウォール・ガイごと叩き斬る」
「キュー…」

ヒューバートが剣を抜く。父、トーマ・リプトンから譲り受けた妖刀。その斬れ味は、間違いなく名剣の域。ライトとレフトが怯えるのをキューティが宥め、ヒューバートを睨み付ける。

「上官の命令を聞くばかりのヘルマンの犬が…」
「上官？ああ、奴か。あんなのが上官とは、俺もついてないな」
「ヒューバート。その娘の髪の毛でも斬ってやれ。それでも言う事を聞かなければ、その忌々しいウォール・ガイを破壊し、足の一本くらい斬ってやれ。わたくしは、あちらの二人をいたぶるからな。ケヒャケヒャ」
「うぉぉい！なんか知らない間にとんでもない事に！」
「勘弁してください！」

ビッチの発言に志津香が唇を噛み、キューティが青ざめる。デンズに口を塞がれていたシャイラとネイも、自分たちの現状を把握して再び騒ぎ出す。一連の流れを見ていたヒューバートが顔を歪め、志津香とキューティに聞こえる程度の小声で話す。

「おい、お前ら。あの馬鹿は本当にやる。そんな事になるのは俺も望んではいない。今は言う事を聞いておけ」

「判ったわ。やるわよ…」

「それしか…ないんですね…」

遂に志津香とキューティが屈服し、椅子に腰掛けている闘将へ両手を差し出す。二人の両手が光り出し、闘将へと魔力を注入していく。すると、ガタガタと目の前の闘将が動き出し、椅子から立ち上がる。

「おのれ、フリーク！」

突然目の前の人形が喋り出した事に驚き、志津香とキューティは後ろに下がる。恐ろしいまでの殺気を放っている闘将に、ビッチが近づいていく。この殺気に気がつけていないのだろう。

「おい、そこの人形」

「人形…この私の事かね？」

「そうだ。お前を動かしてやったのは、このわたくしだ。これからはわたくしの為に働いて貰おう」

「ク…ククク…ハッハッハ！！」

ビッチの言葉を聞いて、目の前の闘将が笑い出す。その溢れ出る殺気に、ヒューバートが剣を握りしめ、怯えるライトくんとレフトくんをキューティが抱きしめる。ゆらりとビッチに向き直る闘将。

「面白い事を言う男だ。では、最初に死んで貰うのはお前にするか」
「そうかね、ケヒャケヒャ！」

ゆっくりとビッチに歩みを進める人形に対し、ビッチがボタンを押す。すると、突如闘将の肩が爆発した。

「ぐはっ…なんだ！？」
「人形よ。お前の体には今のと同じぷちハニー爆弾がまだまだ仕掛けてある。この意味が判るね」
「……」
「わたくしの為に働いて貰うぞ。命令を聞かなければ…ドカーンだ！」

両腕を上げてジェスチャーをするビッチ。その顔は完全に勝ち誇っていた。その様子を見ながら、志津香とキューティの顔が歪む。

「人形相手にも卑怯な…」
「見るに堪えないわ…」

二人が吐き捨てる中、肩を爆破された闘将が自分の体を見る。爆弾は鉄壁を誇る表面ではなく、内部に取り付けられている。外す事も難しそうだ。静かに笑い出す闘将。

「ククク…いいだろう。その爆弾とやらがある内は、貴様の話を聞いてやろう。あるうちはな…貴様如きに、私を扱いきれるとは思えんがな…」
「ふん、負け惜しみを。人形、貴様の名前を聞いておこうか。もっとも、人形に名前があるのかは知らんがね」

ビッチがそう尋ねると、ディオがゆっくりと口を開く。

「私の名は、ディオ・カルミス。最強の闘将だ」

「最強の…闘将…？」

「ディオ…」

「頼もしいぞ、これでリーザスとゼスのクソ共は皆殺しだわ！ケヒャケヒャ！」

高らかに宣言するビッチ。だが、彼はまだ気がついていなかった。たった今復活させた闘将が、とても扱いきれる存在では無い事を。最凶の悪意が、今こうして復活を遂げた。

―カサドの町　うまうま食堂―

「おや、ルーク。戻ったんだね」

「ああ、ランスたちは？」

「とっくに戻って、今は上で休んでいるよ」

一旦カサドの町まで戻ってきたルークたちは、ランスたちと合流すべくフロンの下へやってきていた。ルークを出迎えるフロンだが、後ろからぞろぞろと見知らぬ顔が入ってきた事に目を丸くする。

「おや、また地上からの来客者かい？あんた同様、ここまで飛ばされたのかい？」

「まあ、そんな所だな。それと、この娘を預かって貰えるか？」

「これは…オイチちゃんかい！？いや…でも…オイチちゃんは十年以上も前に…」

「フロンの考えている通り、この娘はオイチちゃんだ。訳は後で説

明する」

十年以上も前に生け贄に捧げられた少女が、当時と変わらぬ姿で帰ってきたのだ。フロンは困惑するが、ルークの言葉に一応頷き、気絶しているオイチをとりあえず食堂の奥のソファーに横にする。

「ここが空中都市の町か…」
「田舎ですわね…」
「田舎ねー」
「でも…なんだか居心地が良い…」
「おや、そこのお嬢ちゃん判ってるね。お腹空いてないかい？サービスするよ！」
「うぃ。A定食で…」
「あいよ！」

チルディとロゼがジロジロと食堂や外の風景を見回しながらそう言うが、セスナがボソッと呟いた言葉にフロンが気を良くする。セスナもお腹が空いていたのか、壁に掛かっていたA定食の札を指さして注文する。

「おばさま。わたくしにもA定食を…」
「5GOLDだよ」
「くっ…第一印象に失敗しましたわ…」
「冗談だよ。ルークの知り合いからお金は取れないよ。ちょっと待ってな！」

チルディの注文も受け、定食を作り始めるフロン。その時、町の中を探索していたサイアスが戻ってくる。

「ルーク。どうやらここからあの場所へはそう遠くないな。ちょっ

と行って確認をしてくる」
「一人で大丈夫か？」
「自分が護衛に…」
「問題ないさ。リックはこちらに残っていてくれ。すぐに戻ってくる」

サイアスの言うあの場所とは、ゼスの飛行艇が隠してある場所。万が一の事を考え、ぬか喜びさせないために飛行艇の無事を確かめるまでその事は黙っておく事にしたルークたち。サイアスが飛行艇をカサドの町まで移動させに、単身飛行艇の隠してある場所へと向かう。それを見送ったルークは、二階に視線を向ける。

「さて…ランスに事情を説明しないとな」
「その男は使えるのか？」
「ああ。訳あって現在レベルは低いが、かなり頼りになる男だ。まあ、色々とクセのある性格だがな…」
「はぁ…そのクセが問題なんだけどな…」
「アスマ。気を許しちゃ駄目よ。食べられちゃうから」
「人を食べるのか？」

フェリスがため息をつき、ロゼがナギに笑いながら忠告するが、ナギはその比喩表現を真面目に受け止める。

「ああ、そうじゃないわ。襲われちゃうって事。Hな事されちゃうのよー」
「それは困るな。私の体はお父様以外には許すなと固く言われている」
「ぶっ！！」
「危ない…」

フロンの作った定食を食べていたチルディが吹き出す。目の前で食事を取っていたセスナがお盆を持ちながらそれを華麗に躱し、食事を続ける。

「と、とんでもない事を言いませんでしたか！？」
「あー…アスマ、後でちょっと話を聞かせてくれる？」
「ん？」
「ロゼ、その件については頼んだ。女性同士の方が良いだろうからな。酷そうなら後で報告してくれ…」
「任せておいて。やれやれ…ムーララルーよりもタチ悪いんじゃないの…？」
「少なくとも、悪魔よりタチが悪いかもな…気分が悪い」

ロゼが頭を掻きながらナギにそう告げるが、何がおかしいのか判らない様子のナギ。ルークも顔を歪めながら口元に手を当て、ロゼにナギの事を頼む。フェリスも顔を歪めている。

「とりあえず、上の部屋に行くか」
「ランス殿と会うのも久しぶりです。あの剣の腕前、また間近で見られると思うと心が躍ります。ですが、今はそのような事を言っている場合ではありませんね…」
「ああ、早いところみんなを見つけ出さないと…」

ルークが階段を上がっていき、フェリス、リック、ロゼ、ナギがその後からついてくる。セスナとチルディは食事を続けていた。ランスたちがいるという部屋の前まで辿り着き、その扉を開ける。部屋の中には二人、ランスとイオだけだ。

「遅いわ、馬鹿者！」
「お帰りなさい、ルーク。そちらの方々は？」

「悪かったな。こっちのメンバーは俺の仲間だ。地上から俺たちを捜しに来てくれたんだ」
「お久しぶりです、ランス殿」
「やっほー」
「ん…？ああ…」

リックが深々と頭を下げ、ロゼがヒラヒラと手を振る。ランスが一度だけそちらを見るが、一言だけ返しすぐにルークの方を見る。部屋の中を見回しながら、ルークが窓の側に立っているイオに問いかける。

「それよりもシィルちゃんとサーナキアはどうした？」
「それがね…二人で迷宮に潜りに行っちゃったのよ。それでまだ帰ってこないの」
「なんだと！？本当か、ランス！？」
「ん、ああ。まあ、大丈夫だろう。シィルの事なんか放っておけ」
「……」
「放っておけ…ねぇ…」

イオの言葉を聞いてランスに問いかけるルークだったが、返ってきた言葉に顔を歪める。ロゼも口元に手を当て、何事かと顔を歪めている。

「イオ。何かあったのか？」
「さぁ…突然出て行っちゃったし。それよりも、大事な話があるの。聞いてくれる？」
「話…？」

イオに大事な話があると言われ、向き直ったルーク。そのルークに、横からランスがゆっくりと近づいていく。一歩、また一歩、ル

ークはもう目の前という位置まで近づいたとき、ナギが不思議そうに口を開く。

「それで、この男はどうしてその女に操られているんだ？」

「「「！？」」」

「殺れっ！！」

ナギの言葉に目を見開くリック、フェリス、ロゼの三人。瞬間、イオの絶叫が部屋に響く。ランスがいつの間にか剣を左手で握りしめ、ルークの腰目がけて剣を突き刺す。ガキン、という金属音が部屋に鳴り響く。それは、ランスの剣をルークの剣が防いだ音。

「なっ…」

「様子がおかしかったからな…シィルちゃんは、ランスと別行動で迷宮に潜るような子じゃない。ランスも…それを許すような男ではない！」

「どりゃぁぁぁぁ！！」

ランスが剣を振るってくるのを、全て受け止めるルーク。その時、奥の押し入れの扉が倒れ、中から縛られたシィルが出てくる。口の猿ぐつわが外れ、ルークを見ながら叫ぶ。

「ルークさん！ランス様はイオさんに魔法で操られているんです！イオさんは…ヘルマンの人間です！」

「なっ！？」

「ヘルマン軍…奴らの仲間か？」

「シィル！何を言うんだ！イオは俺様の大事な女だ！」

「ランス…」

「駄目だな。完全に洗脳されているぞ」

ランスの様子を見てナギが冷静に言い放つ。ルークも剣を握り直し、ランスと対峙する。その視線の先には、イオ。

「イオ…お前は…」
「殺せ！ランス、ルークを殺すのよ！！」
「よし、イオが言うならそれが正しいのだろう！」

ランスも剣を握り直し、ルークと対峙する。リックが即座に奥のイオに向かおうとするが、押し入れから倒れてきていたシィルの首筋にナイフを当て、イオが叫ぶ。

「動くな！」
「くっ…」
「がはは、俺様の方が上だという事を見せてやろう」
「まさか…お前と戦う日が来るとはな…」

ランスとルーク、二人の英雄が対峙する。それは、望まぬ対決。

「殺せ！！」

イオの絶叫が開幕の合図となり、二人の剣が交差した。

第８３話　その名はディオ（後書き）

［モンスター］

ぷりょ

丸いオレンジ色のゼリー状生物。細胞分裂で際限なく増殖し、自己再生能力を持つ。本来は小型の雑魚モンスターだが、極稀に多数のぷりょが融合した巨大ぷりょという存在が確認される事もある。融合を解除するためには、ぷりょスレイヤーという特殊な剣が必要になる。

第８４話　嘘つきイオ

―カサドの町　うまうま食堂―

「どりゃぁぁぁぁ！！」

「はっ！」

ランスが剣を全力で振り下ろすが、それをいとも簡単に受け流し、ルークはその腹に峰打ちを入れる。一撃で倒れはしなかったが、ランスの体がよろける。その隙を見逃さず、ルークが連撃を加える。

「なんだ、相手になっていないではないか」

「先程、訳あってレベルが下がっていると仰ってましたが…まさかこれ程とは…」

「ああ、闘神都市に飛ばされた際に、レベルを１にされたらしい」

「レベルを１にされる！？そんな事が出来る存在なんて…いや…まさか…」

ナギが冷静に戦況を分析し、リックが眉をひそめる。ノスやジルと対峙していた時のランスとは動きがまるで違う。今のランスならば、恐らく自分でも容易に勝てるだろう。それ程までにランスは弱体化している。フェリスがその疑問に答えると、今度はロゼが驚く。経験値を奪うモンスターというのは存在するが、レベルを１にするような事は、正に神の所行。少し考えを巡らせ、何かに至ったのかロゼが言いよどむ。

「くっ…えぇい、避けるな！」

「流石に今のお前に負ける訳にはいかないな」

ランスがいらいらしながらも剣を振るう。現在レベルは２０に満たないといったところか。その事を考えれば、十分に驚異的な強さだ。だが、負ける訳にはいかない。その理由はレベル差だけではない。

「ふんっ！」

「（やはり似ているな…あいつの戦い方に…）」

そう、ルークはランスの剣筋を、その戦い方の癖をイヤというほど知っている。かつて、何度となく修行に付き合ってやった、妹の剣にそっくりだ。それならば、兄として負ける訳にはいかない。

「くっ…」

イオがシィルにナイフを向けながら、爪を噛む。ルークとランスのレベル差は判っていた。だからこその奇襲。しかし、それも失敗に終わってしまった。本来ならばそこで諦めて逃げるべきだったのかもしれない。だが、イオはルークを諦めきれない。それ程までに、目の前の男が憎い。

「動くな、ルーク！この女の命が惜しければ…」

「少しでもナイフを動かしてみろ。次の瞬間、貴様の体は丸焦げだぞ」

「っ！？」

イオが叫んだが、その言葉を遮るように冷たい声が放たれる。見れば、見覚えの無い金髪の女が手に魔力を込め、イオに冷たい視線を送っている。

「ハッタリを…お前の仲間だろう！？」
「そんな女、知らんな。そいつがどうなろうと私には関係ない。一応、貴様が動くまでは攻撃しないでおいてやるが、少しでも動けば容赦はしないぞ」
「なっ…」

イオがシィルに視線を向けると、コクコクとシィルが頷く。本当に知らない間柄らしい。そして何より、ナギのその目が今の言葉が本気出るある事を物語っている。イオの頬に一筋の汗が流れる。動けない。真に殺したい相手はシィルではない。何故人質を取っているこちらが追い詰められねばならない。

「……」
「（迫真の演技、という訳ではないわね。この娘…本気ね）」
「（だが、相手は怯んでいる）」
「（下手に動かない方がよさそうだな…）」

ナギとイオのやりとりを無言で流すルーク。ロゼ、リック、フェリスの三人も、あえて止める事はしない。当然シィルを傷つけさせるつもりはない。だが、今はナギとシィルに面識がない事と、ナギの性格が功を奏し、上手い具合にイオが動けなくなっている。その間に、早々にランスと決着をつけるのが得策。ルークは腰を落とし、剣を横薙ぎに振るう。

「真空斬！」
「ちぃっ…ランスアタ…」
「誘いの攻撃に引っかかって簡単に空中に飛び上がるなと、教わってはいないのか！！」
「っ！？」

ルークの言葉を受けてランスの目が見開かれる。それはかつて、耳にたこができるほど聞いた言葉。ランスの脳裏に、一人の女戦士の顔が浮かぶ。

「あね…さん…？」

「貰った！！」

空中に飛び上がっていたランスが完全に無防備になる。その体に、ルークは全力で一撃を入れる。

「あんぎゃぁぁぁ！！」

「ランス様っ！！」

絶叫と共に崩れ落ちるランス。シィルが声を上げるが、ルークがすぐにそれに答える。

「シィルちゃん、安心しろ。気を失わせただけだ」

「よかった…ランス様…」

「さて…本題といくか」

ルークがそのままシィルにナイフを当てているイオに視線を向ける。一瞬怯んだイオだったが、シィルにナイフを当てたまま声を荒げる。

「動くな！」

「イオ…」

ルークが悲しげな視線を向ける。つい先程まで、このような視線を向けてくる相手ではなかった。詳しい正体は判らないが、嘘が好きで、だがその嘘はすぐ嘘と見破れるものばかりで、そして、信頼

できる仲間。

「サーナキアは…？」

「邪魔だったからランスに犯させたら、どこかへ消えたわ。多分、復讐のために修行でも積んでいるんじゃないかしらね」

「そんな事を…」

「あんたの目的は何なんだい！？」

フェリスが鎌を前に突き出し、イオに問いかける。イオがナイフを持つ腕とは反対の手でポケットをまさぐり、Eキーを取り出す。リックはその鍵に見覚えがある。先程、宝箱から発見した鍵に似ている。

「あれは…ルーク殿、ヘルマンのビッチという輩も、あれと似た鍵を探していました」

「そうよ。私の目的は、このキーの奪取と…ルーク、あんたの抹殺よ！」

「俺の…」

ルークが眉をひそめる。ランスに奇襲をさせ、先程からイオが自分ばかり睨んでいる事から、若干の察しはついていた。だが、イオとはこの闘神都市が初対面のはず。ならば、原因は本人への直接的なものではなく、間接的な何か。

「イオ…初めから…それが目的だったのか？」

「…ええ。初めから、あんたを殺すために近づいたのよ」

「……」

ルークの問いかけに、一瞬だけイオが口ごもるが、声を荒げてそう答える。ロゼがその様子を見ていると、イオはシィルを連れたま

まジリジリと窓に近寄っていく。窓の目の前まで移動したイオは、シィルをドンと前に押して、素早く窓から逃走を図る。

「逃がすか。ファイヤー…」
「やめろ、アスマ！」

ファイヤーレーザーを放とうとしていたナギをルークが手で制し、窓から外へ下りていくイオを見やる。憎しみのこもった目でルークを睨み付けながら、イオが怨嗟の声を出す。

「必ず…おじ様の仇は討つ…」
「仇…だと…」

外へと逃げるイオ。リックとフェリスが素早く窓に近づき、外を確認するが、既にイオの姿はどこにもなかった。

「ちっ…逃げられたみたいだ」
「シィル殿。今、拘束を外します」
「何故止めた。私なら奴が逃げる前に仕留められたぞ」
「俺に恨みを抱いているというなら…それを確認したい…そう思ったからだ」

ルークがナギにそう答え、窓の方を見る。少しの間だけだが、共に肩を並べた女性。信頼できる、そう思っていた。

「初めから…俺が目的だったのか…いや、だが…」

先程のイオの言葉が思い出される。だが、初めの内はあのような目はしていなかった。すると、ルークの後頭部に軽くチョップが見舞われる。

「ていっ！」
「っ…ロゼ…」
「なーに、騙されているのよ。あれ、嘘よ」
「嘘？それはどういう事ですか？」

ロゼの言葉にシィルの拘束を解いていたリックが問いかける。

「鍵が狙いっていうのは本当ね。あんたの事を殺したいっていうのも本当ね。でもね、最初からあんたを殺すために近づいたっていうのは、嘘よ」
「何故だ？」
「女の勘。アスマももうちょっとすれば判るわ」

ナギの問いかけに笑いながら答えるロゼ。そのまま視線をシィルに向ける。

「鍵は初めからだったんだろうけど、暗殺は間違いなく嘘。となれば、途中からね。シィル、ルークのいない間に、あの女…イオだっけ？あれと何か喋らなかった？」
「何か…ですか？そう言われましても…」
「そうね…ヘルマン関係者とか、中年の親父。その辺をルークが倒したとか、そんな話はしなかった？」
「中年…そうか、おじ様！」

去り際にイオが放った言葉を思い出して、フェリスがロゼの質問の意図を察する。少し考え込んでいたシィルだったが、突如声を上げる。

「あっ！ルークさんが、トーマ将軍を倒したっていう話をしました。

そういえば、イオさんがおかしくなったのも、その話をした直後です！」
「ビンゴ！」
「トーマか…」

ルークがトーマ将軍との激闘を思い出す。ルークが戦った人間に中では、間違いなく最強の人物であった。その強さ、立ち振る舞い、そして、最後。ヘルマンの未来を憂いながら、それでも最後はルークの言葉に満足し、口元に笑みを浮かべながら死んでいった、人類最強の男。

「トーマ将軍の怨恨ならば…俺が仇というのは正しいな。なら、真正面から受け止めるほかあるまい」
「戦争での出来事だろう。一々そんなもの気にしている必要も無いだろう」
「まあな…だが、無視する訳にもいくまい」
「難儀な奴ね、相変わらず」

フェリスとロゼが呆れるが、ルークはしっかりと窓の外を見据える。トーマ将軍。敵ながら、その生き様には感じるものがあった。ならば、その恨みを受けるのも、倒した者の義務。

ー闘神都市　街道ー

「はぁっ…はぁっ…」

カサドの町を飛び出たイオは、自分たちが発見した迷宮への入り口目指して走る。思い出すのは、幼い頃の思い出。

「トーマのおじ様…」

それは、イオがヘルマン軍に入り、軍の中でも評判の嘘つきと呼ばれるようになった出来事。

GI1004
ーヘルマン　計画都市ポーンー

「大変よ、おばさん。おじさんが急に倒れたの！」
「えっ！？ウチの旦那が！？」

少女にそう言われ、織物の仕事をしていた中年女性が自宅に駆けていく。だが、旦那に異変はない。平然としながら、唐突に返ってきた女房を唖然と見ている。

「っ…イオ！またあの子に騙された…」
「またか…最近更に酷くなっているな…」

イオ。町で評判の嘘つき少女だ。ちょっとした嘘ならばあの年代なら良くある事。だが、イオの嘘が厄介なのはその信憑性。イオが嘘つきだと判っていても、何度でも騙される。町の大人たちは憤慨していたが、なかなかイオに強く言えずにいた。それにはある理由がある。

「リーザス軍が三日後に攻めてくるらしいわ。ポーンの町も襲われるって噂よ」
「なっ…」

「本当かよ…でもイオの言う事だし…」
「本当よ。リーザスの作戦は…」

町の広場でイオがまた嘘をつき始める。イオの言う事なので疑っていた者たちも、ペラペラとリーザスの作戦を話し始めるイオの言葉に段々とそれを信じ始める。幼い少女が嘘で考えたとは思えない、穴の無い作戦。広場がざわざわとなり始めるのを、丁度視察に訪れていたヘルマン兵が見る。

「あれは何だ？」
「ああ…多分、この町で噂の嘘つき少女ですね」
「嘘つき？噂になるほどなら、何故誰も叱らないのじゃ？」
「あの娘は…生まれて間もなく両親を亡くしている孤児です。その事から、周りの大人が叱りづらいらしく…」
「ふむ…」

しばしの間、そのヘルマン兵はイオの作り話であるリーザス軍の作戦を聞き、広場へとゆっくりと歩いて行く。広場で話を聞いていた大人たちは、歩いてきたヘルマン兵の顔を見て驚き、道を開けていく。イオがペラペラとリーザスがどのようにヘルマンを蹂躙するか話していると、いつの間にかざわざわとしていた声が聞こえなくなっているのに気がつく。話を止めて周囲を見回すと、イオのすぐ側に中年のヘルマン兵が立っていた。

「なに、おじさん」
「ふんっ！！」

イオの頭に拳骨が落ちる。それと同時に、目の前のヘルマン兵が声を荒げる。

「リーザス軍が攻めてくるなど、このトーマが知らぬ情報を何故知っている！嘘を言うでない！！」
「ふぇっ…」
「なんだ、やっぱり嘘だったのか…」
「真面目に聞いて損した」

あまりの激痛にイオが涙目になって頭を抑える。ヘルマン第3軍将軍のトーマ・リプトンが嘘と断定した事により、広場から次々と人が去っていく。残ったのはイオとトーマ、そして、トーマが連れ歩いている部下数名のみとなった。涙を流しているイオの前にしゃがみ込み、視線の位置を合わせる。

「娘、何故嘘をつく」
「ひっく…ひっく…」
「みんな困っているのじゃぞ」
「ひっく…だって…嘘つかないと…みんな私の事を見てくれないんだもん…」

イオが涙ながらにぽつりぽつりと言葉を漏らす。孤児である自分の事を、本気で親身に考えてくれる人はいない。気がつけばいつも孤独だった。でも、嘘をついている間は、みんなが自分に注目してくれる。その話を聞いたトーマは、優しく諭すように言葉を続ける。

「嘘をつくのは止められんか？」
「うん…」
「娘よ、良く聞くのじゃ。少々お主の嘘は上手すぎる。それでは、みんなが困る。そうじゃな…もっと、すぐに嘘と判るような嘘をつきなさい。それならば、みんなが困る事はない」
「でも…それじゃあ誰も私の嘘を信じてくれない…また私は独りぼっちに…」

「いいや、そんな事は無いぞ」

ぽん、とイオの頭に手が乗せられる。大きく、ごつごつとしているが、とても温かい手。俯いていた顔を上げ、目の前のトーマの顔を見る。そこには、満面の笑みを向けているトーマの顔があった。

「案外、そんな嘘でも騙される馬鹿正直な人間はおるものじゃぞ。例えば…ワシのようにな」

「おじさん…」

「ワシにはいつでも嘘をつきに来い。馬鹿なワシはいつでも騙されるぞ。娘よ、名前は？」

「イオ…」

「良い名前じゃ。それと、さっきのリーザス軍の作戦は、嘘にしては見事じゃったぞ」

これが、イオとトーマの出会い。

GI1006
ーヘルマン　計画都市ポーンー

「大変よ、トーマのおじ様！町の外れで女郎蜘蛛ハツネ・ヒラサカが蘇ったの！」

「なんじゃと！？ええい、このトーマが退治してくれるわ！」

「頑張って、おじ様！」

トーマとの出会いから二年。イオからはかつての信憑性ある嘘がなくなり、代わりにすぐに嘘と判るような嘘しかつかなくなっていた。これにより、手が空いている大人はその嘘に付き合ってやり、

そうでない大人は騙されることなく仕事を続けられるようになった。
度々この町に視察に来ていたトーマは、毎回その嘘に乗ってやり、イオの気が済むまで遊んであげていた。いつしかイオはトーマの事をおじ様と呼び、本当の娘か孫なのではないかという程に懐いていた。かつてはどこか影のあるイオだったが、この頃には非常に明るくなり、町の人からも好かれる存在となっていた。

「ねえ、おじ様」
「ん？なんじゃ？」
「私が将来軍人になりたいって言ったら、どうする？」
「うーむ…嘘であって欲しいのう」
「うふふ…さて、どうでしょう」

GI1014
ーヘルマン　計画都市ポーンー

「トーマのおじ様。やったわ！私、入軍試験に受かったの！」
「本当か！？」
「もう…本当は知っているんでしょ。おじ様はお偉いさんだものねー」
「ばれたか。ワシも嘘が下手じゃの。嬉しくもあり、悲しくもある。複雑な気分じゃよ」

視察に来ていたトーマに、ヘルマン軍への合格をいの一番に知らせるイオ。トーマは複雑そうな顔をしながら、イオに問いを投げる。

「それで、どうしてヘルマン軍に？」
「実は…神様のお告げで」

「それは聞くしかないのう…って、今くらい真面目にせんかい！」
「あーん、ちゃんと乗ってくれてありがとう。そうね…おじ様、昔私の考えた作戦を、良く出来ていたって誉めてくれたでしょ？」

イオはトーマとの出会いを思い出す。リーザス軍の作戦を、自分のついた嘘を、トーマは誉めてくれた。

「ふむ…確かに誉めたが、それだけか？何か思いみたいなものは…」
「…エレナちゃん。今日も花を売ってるの？」
「あ、イオお姉ちゃん」

トーマの言葉を遮るように、イオが花売りの少女に近づいていく。

「うーん、今日も綺麗な花ね。もう全部買っちゃう！」
「えっ！？また！？お姉ちゃん、そんなにお花買って大丈夫？」
「もう、世界中の男からモテモテの私は、これっぽちの花じゃ足りないのよ」
「うふふ、ありがとう、お姉ちゃん」

エレナから大量の花を受け取り、代金を支払う。手を振りながら帰って行くエレナを見ながら、イオが口を開く。

「あの子ね…継母と連れ子のお姉さんにイジメられているの…まだ小さいのに、この寒い中花売りを強要させられているわ…」
「……」
「私がね…少しでも国を良くする役に立つなら…あの子みたいな子供たちを減らせるなら…素敵だと思ってね…」
「軍は甘くないぞ…」
「うん…判っているわ、おじ様」
「そうか…イオ・イシュタル。ヘルマン第3軍将軍として、お主を

歓迎する！」

その言葉がイオの胸に響く。溢れそうになる涙を必死に堪え、トーマに敬礼をする。軍を志望したもう一つの理由、トーマがそこにいるからという事は、胸に秘めながら。

ＬＰ０００１
―ヘルマン　帝都ラング・バウ―

ヘルマン軍に入軍したイオだったが、希望していた第３軍ではなく、第１軍への配属となってしまった。最初こそ不満であったが、第１軍将軍のレリューコフはトーマと盟友であり、その事から第３軍との合同演習も多いため、軍の中でトーマとは十分顔を合わせられていた。ヘルマンには少ない魔法使いとして、イオは第１軍でその実力を注目され始める。同時に、嘘つきというのもすぐに広まった。

「イオ！」
「はい、なんでしょうか、レリューコフ将軍」
「少し話がある」

将軍のレリューコフに呼び止められ、敬礼をしながら向き直るイオ。

「…イオ、もう少し嘘を抑える事は出来ないのか？」
「…性分でして」
「儂はトーマから話を聞いておるし、お主のつく嘘が基本的に無害な事は周知の事実。じゃが、嘘は嘘じゃ。プラスには働かんぞ」

レリューコフがわざわざ忠告するのには訳があった。いくら判りやすい嘘とはいえ、普段から嘘を頻繁につくイオは同僚の間で孤立し、嫌われ者の部類に入っていた。だが、幼い頃に出来たトーマとの繋がりである嘘。イオにはそれを捨てる事がどうしても出来なかった。

「これぱっかりは中々…」
「そうか…それで、トーマには伝えられたのか？」
「うっ…それはまだ…」
「ふふ…こうなっては嘘つきイオも形無しじゃな」

顔を赤らめるイオ。以前一度だけレリューコフに相談した事があった。その内容は、お世話になっているトーマへどのように感謝の気持ちを伝えればいいのか、という内容だった。嘘ならつきなれているが、本心の気持ちとあっては中々恥ずかしくて伝えられない。

「あまり長くトーマを待たせるんじゃないぞ。儂もトーマも、老い先短いかもしれんからな」
「ふふ。お二人共、二百歳を超えても元気そうですけどね」
「せめて百じゃないのか…やれやれ…」

レリューコフの言葉がちくりと胸を刺す。確かに出会った頃に比べてトーマは老けた。それに、最近トーマが何か悩み事を抱えているのは知っている。おそらく、パットン皇子とシーラ皇女の権力争いの件。

「早く伝えないと…ああ、でも言いづらい…」

ＬＰ０００２　４月
―ヘルマン　帝都ラング・バウ―

「聞いたか？パットン皇子が第３軍を率いてリーザスを攻めたってよ」

周囲の声が耳に届く。イオは結局この日までトーマに思いを伝えられずにいた。トーマはリーザスに侵攻したという。先程将軍たちが会議しているのをこっそり覗いた。そこには、レリューコフやアリストレス、ロレックスといった所謂パットン派の将軍たちの苦々しい顔。それを見て、イオに不安が増す。トーマがこのまま帰ってこないのではないかという不安が。

「大丈夫…トーマのおじ様は…ヘルマン…いえ、人類最強の男なんだから…」

イオがトーマの無事を祈る。帰ってきたら、今度こそ今までの感謝の気持ちを伝えよう。そう決意するイオ。だが、その数週間後に届いたのは、望んでいなかった報せ。

「皆の者…集まっているな」

その日、第１軍は緊急招集をかけられていた。当然イオの姿もある。レリューコフが集まった第１軍の兵を見回す。一度だけイオと目が合い、レリューコフが悲しげな瞳になる。そして、その言葉は発せられた。

「パットン皇子率いる部隊は壊滅。パットン皇子は生死不明、そし

て…トーマ将軍が戦死した」
「えっ…？」

自然と、そんな言葉がイオの口から漏れる。目の前が歪む。体が震え、息苦しくなる。

「（死んだ？誰が？トーマのおじ様が？）」

レリューコフが話を続けている。トーマの死を無駄にするなとか、ヘルマンはこれを乗り越え更に強くなるだとか、そんな事を言っている。だが、イオの頭には響かない。

「（嘘よ…だって…私、まだ伝えていない…）」

足がふらつき、目から涙が零れる。思い出されるのは、今までの日々。

「（大好きだって…お父さんみたいに思っていたって…伝えて…いや…）」

瞬間、イオの体が崩れ落ち、地面に突っ伏す。周囲のヘルマン兵が何事かと見守る中、イオが大声で泣き出す。

「いや…いやぁぁぁぁぁぁ！！！うぁぁぁぁぁぁっっ！！！！」
「イオ…」

レリューコフがそのイオの姿を見て悲痛な表情になる。知っているからだ。イオがどれ程トーマを思っていたかを。だが、周囲のヘルマン兵はそうではない。イオのその姿を見て、ぽつりぽつりと声が漏れ始める。

「おい、イオが泣いてるぞ」
「今回の作戦の失敗がそんなに悲しいのかねぇ」
「ま、でもイオの事だからあの涙も…」
「「嘘なんだろうけどな」」

イオの涙が、その思いが、周囲に届く事はない。そして、一番届いて欲しかった相手は、もうこの世にはいない。

ＬＰ０００２　７月
―闘神都市　街道―

イオが拳を握りしめる。盟友であるレリューコフも、息子であるヒューバートも、戦いの中で死んだのなら本望だっただろうと言い放った。そんなはずはない。人類最強のトーマが、正々堂々戦って敗れる訳がないのだ。卑怯な手で殺されたに決まっている。それがどれほど悔しかったか、心残りだったか。気がつけばイオの瞳からは涙が零れ、唇を噛みしめていた。

「ルーク…殺す…殺してやる…必ず私の手でおじ様の仇は取る…」

この誓いは、嘘ではない。

第８４話　嘘つきイオ（後書き）

［人物］

イオ・イシュタル
ＬＶ　１２／３８
技能　魔法ＬＶ１
　ヘルマン調査隊メンバー。ヘルマン第１軍に所属する魔法使いで、軍でも有名な嘘つき。だがその嘘は、冷静に聞けばすぐに嘘だと判るものばかり。幼い頃に出会ったトーマを父のように慕っており、軍に志願した理由もトーマの存在が大きい。トーマを殺したルークに深い憎悪を抱いている。

エレナ・フラワー
ＬＶ　１／５
技能　なし
　花売りの少女。継母と姉にイジメられながらも、健気に花を売っている。イオはお得意さん。

第８５話　宿敵の鼓動

―イラーピュ　草原―

「さて…キューティが隠したのはこの辺りだったかな…？」

カサドの町を出て、単身飛行艇の隠してある場所へと向かったサイアス。もうそろそろキューティが隠した茂みのはずだと口にしながら、頭では先程聞いたルークの話を思い出していた。

「闘神都市にいる魔人は三人。岩で覆われたような容貌のメガラス、美人のハウゼル、そして、白髪のガキのパイアール。メガラスとハウゼルはこちらから手を出さなければ害はないが、パイアールは危険、と。やれやれ、俺の友人はどうしてこんなに魔人の事に詳しいのかねぇ…深く突っ込むと蛇どころでは済まなそうだがな」

ため息をつきながら歩き続けるサイアス。ルークの目指す人類と魔人の共存という目的、これを本人の口からはっきりと言われた事は無いが、何となくそうなのではないかと見当はついていた。ルークもサイアス相手には特に隠すような素振りを見せていなかったため、そこに至るのは必然だったのだろう。だが、それを知った上で、サイアスはあえて聞くような事はしなかった。ルークを信頼しているからである。

「どうせ出会うなら、ハウゼルでお願いしたいところだが…んっ？」

軽口を叩いていたサイアスだが、突如表情が真剣味を帯びる。茂みの奥、飛行艇を隠したと思われる場所から気配がするのだ。サイ

アスが身構えながら、茂みを掻き分ける。そこに立っていたのは、女性。だがその体の半分以上が機械に覆われている。そして、肝心の飛行艇が見当たらない。

「これは…」

「破壊シタ飛行艇ノ持チ主ト思ワレル人物ヲ発見」

「破壊しただとっ！？」

サイアスが目を見開くと、突如目の前の女性、ＰＧ－ｘｍｋ２の腕が剣に変わる。

「パイアール様ノ命令通リ、現レタ人間ヲ抹殺シマス」

「パイアール…そうなると、こいつは魔人の部下か！」

「魔法使イ一人、問題アリマセン。抹殺ニ移リマス」

そう言葉を発し、サイアスに向かって駆けてくるｍｋ２。彼女はやってきた人間を殺すようパイアールに命じられていたため、一人でこの茂みに待ち伏せていたのだ。相手の人数が多く、分が悪そうならば状況収集だけして撤退しろと言われていたが、現れたのが魔法使い一人であったため、自分が後れを取る訳がないと思い、サイアスに向かっていった。

「問題ないか…舐められたものだな。火爆破！」

サイアスがｍｋ２目がけて火爆破を放つ。地面から噴き上がった火柱がｍｋ２に直撃したが、そのすぐ後に炎の中からｍｋ２がこちらに向かって飛び出してくる。機械に覆われていない部分には火傷の跡、だが、それを全く気にする様子もない。

「心まで機械という事か…」

「多少ノダメージヲ負ッテモ、接近戦ニ持チ込メバコチラノ勝チデス。抹殺シマス」

サイアスに向かって剣を振るう。後衛である魔法使いが自分の剣を避けられるはずがない。万が一避けたとしても、間違いなく体勢を崩す。勝ちを確信していたｍｋ２だったが、サイアスが臆することなく前進し、振るわれた剣をすんでのところで右に躱す。そのままｍｋ２に足払いをし、魔法使いがそんな事をやってくるとは思っていなかったｍｋ２は完全に虚を突かれ、体勢を崩す。すぐに立て直そうとしたｍｋ２だったが、突如その顔面を鷲づかみにされる。

「ナッ…」

「悪いな。女性の味方を自負しているが、人類の敵に情けをかけるほど甘くはない」

直後、ｍｋ２の顔を鷲づかみにしているサイアスの手のひらが熱を持ち、赤く光り輝く。

「掌炎爆破！」

ボン、という音が周囲にこだまする。サイアスの手のひらで起こった小規模の爆発がｍｋ２に直撃し、そのまま崩れ落ちる。

「魔法使イガ…接近戦ダト…」

「護身程度だがな。友人に近接戦闘のエキスパートがいるもんでな」

「ピピッ…行動不能。情報漏洩ヲ防グタメ、自爆シマス」

「ちっ…火爆破！」

そう言い残し、ｍｋ２が爆発してその体が砕け散る。サイアスは爆発直前に自身の目の前に火爆破で火柱を出し、爆発の衝撃から自

分の身を守る。煙が晴れ、ｍｋ２が立っていた場所に視線をやると、そこにはｍｋ２だったものの残骸が転がっているだけだった。顔を歪ませながら、先程のｍｋ２の言葉を思い出す。確かに飛行艇を破壊したと言っていた。

「マズイ事になったな…」

サイアスは舌打ちをする。魔人の存在するこの都市からの脱出の手段が断たれた。全員無事で脱出する事が出来るのだろうか。不安になるサイアスだったが、この事を早くルークに知らせるべくカサドの町へと急いで引き返す事にした。

―闘将コア付近　ヘルマン上陸艇　ビッチの部屋―

闘将コアに繋がっている入り口の側にヘルマンの上陸艇は止まっていた。その艦内へ志津香たちを連れてきたビッチは、四人を拘束したまま自分の部屋へと連れ込んでいた。柱や壁に縛り付けられ、身動きの取れない四人。その四人を見ながら高笑いをするビッチ。

「ケヒャケヒャ。拘束されて自由を奪われた娘ほど可愛いものはないのう」
「ぐっ…」
「最低ね…」

志津香とキューティが気丈にビッチを睨むが、下品な笑みを向けられるだけであった。そのキューティのスカートを捲り、下着を覗き込むビッチ。

「青と白のストライプか…子供っぽいですね」
「見るな！この変態！」

キューティが足をじたばたとさせ、ビッチがその手を離す。ウォール・ガイはこの部屋から追い出されているため、キューティを守る者はいない。志津香、キューティ、シャイラ、ネイと順番に見回し、ビッチが高らかに宣言する。

「君たちは幸せだよ。これからわたくしが女としての最高の喜びを教えてあげよう」
「い、イヤすぎる！」
「これならまだランスの方がマシだわ！」

シャイラとネイが叫ぶ。その二人を見ながらビッチが懐からナイフを取り出す。

「さて、まずは髪の毛を切らせて貰おうかな。わたくしは短い髪の方が好みでね」
「ふざけるな！」
「髪は女の命よ！」

更に喚き始めるシャイラとネイ。すると、ビッチが部屋に置いてあった机に向かってナイフを振り下ろす。ガン、という音と共にナイフが深々と机に突き刺さる。

「うるさい。そうだな…まずはその眼球に一度ナイフを突き刺させて貰おう。これがまた凄く楽しいんだ。豆腐でも切るように、信じられないくらい簡単に刺せるんだよ。ケヒャケヒャ！」
「っ…」
「狂ってるわ、こいつ…」

恐ろしい事を笑顔で言ってのけるビッチ。シャイラとネイが一気に黙り、キューティの顔が青ざめる。志津香がビッチの顔を見ながら、吐き捨てるように口を開く。志津香は確信する。これは、狂人の顔だ。

「では…誰からがいいかな?そうだな…では貴様から」

「あ、あたしか!?」

「シャイラ!」

「っ…その二人は私が雇っただけの無関係な人間です!やるなら…私からやりなさい!」

「キューティ…」

「なーに、残念がらなくても、すぐにみんなお仲間だよ。片目仲間だ、ケヒャケヒャ!」

シャイラに狙いを定めたビッチに、キューティが震えながらも声を振り絞る。志津香がそのキューティの顔を見る。青ざめている。こんな状態であのような事を言えるとは、どれ程の勇気か。だが、ビッチはシャイラにゆっくりと近づいていく。手に持ったナイフが妖しく光り、シャイラが涙目になりながら首を振る。

「止めろ…止めてくれ…」

「ではプスッと…」

「ふんっ!!」

「あんぎゃっ!?」

シャイラの眼球目前まで迫っていたナイフは、あわやという所で取り落とされる。それと同時に、ビッチも地面に倒れ込む。

「ふぅ…あ、あぶないところだっただ…」

「えっ…？」
「あんたは…こいつの仲間の…」

志津香たち四人は状況が飲み込めず目を丸くする。ビッチは、突如部屋に入ってきたデンズに後ろから殴られ、気絶してしまっていた。デンズがすぐさまシャイラとネイの拘束を解き始める。

「行げ…早く行げ！」
「あんた…どうして？」
「やっぱり…優しい人？」

すると、続けざまにヒューバートとメリムも部屋に入ってきてそれぞれ志津香とキューティの拘束を解く。

「大丈夫でしたか？ウォール・ガイも無事ですよ」
「キュー！キュー！」
「ライトくん、レフトくん！よかった…」

メリムが一緒にライトとレフトを連れてきてキューティに返す。キューティの胸に飛び込むライトとレフトを見ながら、ヒューバートがこっちだと合図をし、上陸艇の外へと四人を連れ出す。

「さぁ、ここから逃げて仲間のところへ戻れ！」
「い、急いで行くだ！」
「ちょ、ちょっと待ってよ」

見送ろうとするヒューバートたちの言葉をシャイラが遮る。それに続くように、志津香が口を開く。

「ヘルマン軍の貴方たちが、どうして私たちを助けるの？」

「……」
「まさか…何かの罠？そういえば闘将の姿が見当たらない…」
「違います。誤解なさらないでください」

志津香の言葉を聞いたメリムが、首を横に振る。その目は真剣そのもの。とても罠とは思えない。ヒューバートがコアの入り口の方を指差しながら口を開く。

「闘将は、今は周囲の索敵に出ている。とりあえずコアの中に逃げ込めば出くわす事はない」
「罠じゃないとしたら…何故？」
「お前ら、あんな奴にいたぶられて楽しいか？」

キューティの問いかけに、ヒューバートが問いで返す。

「楽しい訳ないでしょ！」
「気分が悪かったです！」
「あのクソジジイ！一発殴っておけば良かった」
「くっ…思い出すだけで腹が立つわ」

四人が口々に答える。それを聞いたヒューバートは、静かに笑いながら口を開く。

「なら、そういう事だ。俺たちもあいつの行動にはついていけんのでな」
「でも、あの男は貴方たちの隊長じゃ…」
「ああ、あんなクズでも隊長だ」
「三人とも…こんな事をしたらただじゃ…」
「お、おでたちの心配は必要ねえ」

心配するシャイラを見て二カッと笑うデンズ。ヘルマン軍という事で先入観を持ってしまっていたが、この三人は悪い人間ではないのかもしれない。志津香がヒューバートの目をしっかりと見ながら提案する。

「貴方たち、あんな奴裏切ってリーザスに来ない？」
「それなら、ゼスでも歓迎しますよ。これでも警備隊長の地位は持っていますので、口利きくらいなら…」
「おっと、あたしたちと一緒に傭兵という道もあるぞ！」
「それがいいわ。きっと楽しいわよ！」
「……」

四人から口々に飛び出す勧誘の言葉。それを聞いたヒューバートは一度目を閉じる。今のヘルマンは腐っている。どこかへ行ってしまいたいと何度思った事か。だが、それは出来ない。

「気持ちはありがたいが…出来ない。あんな腐敗したヘルマンでも…奴が戻ってくるまでは…」
「奴…？」
「いや、お前たちには関係ない事だ」
「お、おでも、あにぃと一緒にいるだ」
「私も…国に家族がいますので…」
「そうですか…」
「さぁ、早く行け！」

ヒューバートがそう指示を出す。確かにいつビッチが起きてきても、あの闘将が帰ってきてもおかしくはないのだ。コアの中へ続く入り口に向かいながら、志津香たちは一度だけ振り返る。

「一応、礼は言っておくわ。名前を聞かせて貰える？私は志津香」

「ヒューバートだ」
「キューティです。何かあったら、いつでもゼスに来て下さい」
「メリムと言います。その時は是非…」
「でっかい兄ちゃん。二度も助けてくれてサンキューな。あたしはシャイラ」
「ネイです。いつかこの恩は返します」
「デンズだ。べ、別にきにしなくていい」

互いに名乗りあい、そのまま志津香たちはコアの中へと再び潜っていく。こうして志津香たちはヒューバートたちに助けられ、危機を脱したのだった。今どこにいるかは判らないが、少しでも遠くへ。そして、なんとかしてルークたちの下へ。志津香たちは駆けていくが、しばらくして異変に気がつく。戦闘を走っていた志津香が後ろを振り返ると、そこにはキューティとウォール・ガイしかいない。

「…あの二人は？」
「あ、あれ！？さっきまで後ろにいたはずなのに…」

キューティが困惑し、ライトとレフトもきょろきょろと目玉を動かす。いつの間にかシャイラとネイの姿が消えていたのだ。志津香たちのいる場所とは少し離れた場所、下部司令エリアと呼ばれるところに二人はいた。

「なんで二人になってるのよ！」
「あれ、転移装置だったんだなぁ…」

シャイラが遠い目をして答える。志津香たちの後ろを走っていたシャイラとネイだったが、壁に何か文様が書かれている事に気がつき、シャイラがそれに触ったのだった。すると、突如光が二人を包み、見知らぬ場所へとワープさせられていた。どうやら一方通行だ

ったらしく、戻る手段が見当たらない。

「ど、どうするのよ！自分で言うのもなんだけど、私たち滅茶苦茶弱いわよ！こんな状況でモンスターと出くわしたら…」

「し、心配しなくても、そんな都合良くモンスターなんて…」

「カカカカカ」

「「出たぁぁぁぁぁ！！逃げろぉぉぉぉぉ！！！」」

噂をすれば影。二人の後ろにはスマイルボーンが立っていた。慌てて逃げ出す二人を笑いながら追いかけるスマイルボーン。こうして志津香たちは、戦闘要員の中では文句なしに最弱クラスのシャイラとネイのパーティー、前衛ガードキューティと後衛魔法使い志津香の理想的なパーティーという二組に分かれた。

―カサドの町　うまうま食堂―

それは、泡沫の夢。

「ほら、もう火が通ってるから食べな」

「おう」

たき火を前にしながら、ランスはモンスターの肉を手渡される。がつがつと食べ始めると、目の前に座っている女戦士がこちらをじっと見ている。

「ん、なんだ姐さん」

「いや…ほらほら、ポロポロとこぼすな」

「ガキ扱いすんなよ…ぐふふ、大人なところを今夜にでも見せて…」

「昨日あれだけ懲らしめてやったのに、まだ懲りてないのかい？」

ギロリと女戦士がランスを睨み付ける。昨晩夜這いをかけたランスだったが、こてんぱんに叩きのめされ一晩木の上に吊されていた。はあ、とため息をつく女戦士。

「下の子を相手にするのは大変だねぇ…兄貴もこんな気持ちだったのかな…」

「ん？姐さんは兄貴がいるのか？」

「まあな。兄貴って言っても双子だから、年は一緒なんだけどな。幼い頃から面倒を見て貰っていた」

「ふぅん…どんな奴なんだ」

「そうだな…とりあえず、強いよ。私の剣は兄貴から教わったものだ。それと、あんたとは性格が全然違うね。でも、相性はいい気がするよ。案外良い相棒になるかも…」

「ま、男の話はどうでもいいか。姐さん、おかわり！」

ランスが骨を投げ捨て、次の肉を取ってくれと手を差し出す。自分から聞いておきながら、なんという態度。もう一度ため息をつきながら、女戦士は新しい肉を手渡してやった。それは、随分と昔の話。

「んっ…」

「ランス様！」

「おっ、目を覚ましたか？」

ランスが目を覚ます。どうやら夢を見ていたようだ。それにしても、何故あんな夢を見たのか。ぼんやりとしながら部屋の中を見回すと、ルークが立っているのが見える。先程の事はよく覚えていな

い。覚えていないが、ルークにやられて事だけはなんとなく覚えている。

「ルーク！貴様、よくもやってくれたな！」
「ランス様、待って下さい！説明をしますから！」

ルークに向かっていこうとするランスをシィルが抑え、イオに操られていたという事を説明する。

「つまり、俺様が洗脳から解けたのはルークのお陰だと？」
「はい、ランス様」
「馬鹿者！余計な事をしやがって。イオの洗脳如き、俺様一人で十分脱出出来たわ！そのイオにも逃げられやがって…ええい、こうしてやる！」
「ひんひん、痛いですランス様…」

文句を言いながらシィルの頭をぐりぐりとお仕置きするランス。その様子を見ながら、ルークが言葉を漏らす。

「ふぅ…これぞいつものランスって感じだな」
「これが普通なのか。変わった男だな」

ナギが観察するようにランスの事を見る。部屋の中には食事を終えたチルディとセスナも上がってきており、今後の方針を話し合っているところだった。サイアスの帰りを待って教会の地下から再び迷宮に入り、みんなを捜すという方針にほぼ決まっていた。シィルへのお仕置きを終えたランスがチルディ、ナギ、セスナの顔を見る。

「ん？見知らぬ美女がいるな。誰だ？俺様ハーレム希望者か？」
「リーザスとゼス、それぞれから俺たちを救うためにここまで来て

くれたんだ」
「チルディと申しますわ。以後お見知りおきを。解放戦の時には縁がなくお会いできませんでしたが、ランス様の武功はリア様から聞いております」
「アスマだ」
「セスナ…ぐぅ…」
「ロゼって言うの。仲良くしてね」
「げぇ、ロゼ！」

ロゼがからかうように自己紹介に混ざると、ランスがイヤそうな顔をする。どうもロゼに苦手意識を持っているらしい。

「とりあえず、サイアスが飛行艇を持ってくるのを待つか…」
「うむ。ここにもそろそろ飽きてきた頃だからな。地上に戻るとするか」
「ランス、その事なんだが…」

ルークはランスにマリアや志津香といった他のメンバーが行方不明になってしまった事を説明する。

「なにぃ、ルーク！お前がついていながら、どうしてそんな事になっている！」
「…スマン、俺の油断が招いた結果だ」
「ランス殿。ルーク殿のせいではありません。ヘルマンの奴らが卑劣な手を使ってきたからです」

ランスがルークに怒鳴り散らすが、リックが間に入って説明をする。ランスが舌打ちをし、窓の外を見る。

「あいつら俺様に余計な手間ばかりかけさせやがって…犯したるぞ、

まったく」
「マリアたちとは食料コアではぐれた。サイアスが帰ってきたら、すぐに捜索に向かう予定だ」
「そういえば、さっきから名前が出ている、そのサイアスというのは誰なんだ？」
「ゼスの炎の将軍ですわ。ご存じないのですか？」
「知らん。美人か？」

ランスがチルディにそう尋ねた瞬間、部屋の扉が開かれる。全員がそちらに注目すると、入ってきたのはサイアス。ルークがサイアスに問いかける。

「サイアス。どうだった？」
「それがマズイ事になった…」
「なんだ、男か」

サイアスの顔を確認したランスは、興味なさそうにそう呟く。その声でランスに視線を向けるサイアス。

「ん、何だこの坊やは。こいつがランスか？」
「ぼぼぼ、坊やだと！？貴様、ぶっ殺す！」
「ふっ…血の気が多いな」
「止めろ、ランス。今のお前じゃ勝ち目はないぞ。こういう奴だから、サイアスも程々に頼む」

剣を抜くランスをシィルとリックが必死に取り押さえる。その様子を見ながら、ルークがサイアスにも忠告する。その時、セスナが口を開く。

「飛行艇…無くなったか、壊されてた？」

「えっ!?急に何を言うんですの、セスナさん!?」

隣に立っていたチルディが目を見開くが、セスナが言葉を続ける。

「この状況でマズイ事になったなんて…それしかない。飛行艇に乗って帰ってくるはずだったのに、乗ってきていないし…」

「ああ、セスナの言うとおりだ。飛行艇が破壊されていた」

「そんな…」

その言葉を聞いて、チルディが絶望する。これでまた帰れる手段が無くなってしまったのだ。

「ヘルマンか?」

「いや、やったのは魔人パイアール」

「なっ!?」

「部下から聞いた話だ。間違いない」

サイアスの更なる報告に、チルディがまたも声を出してしまう。魔人がいると聞かされても、これまでどこか実感が沸かなかった。だが、魔人の存在を今は確かに感じる。

「となると、他に脱出手段を探すしかあるまい」

「ん?イオの話だと、キーを集めればいいんじゃないのか?」

「信憑性は薄くなったな。キーに関しては元々利用しようとしていた節があるし…」

「…ヘルマンの飛行艇がある」

「…あっ!」

セスナの言葉を聞いて、シィルが声を漏らす。ヘルマンもここに来ているという事は、間違いなく飛行艇に乗ってきているのだ。既

にうたた寝状態のセスナの頬をぷにぷにと触りながら、フェリスが感心したように口を開く。

「この子、意外に出来るわね…」
「ぐぅ…ぐぅ…」
「まぁ、何にせよこれで方針は決まったわね」

ロゼがそうルークに言葉を投げる。

「ああ、全員の捜索と飛行艇の奪取。それと、見つかればアリシアの救出と魔女退治だな」
「とりあえず、見つけた人を片っ端から救って、敵を倒せばいいんだろ」
「ふっ…フェリスの言うとおりだ。それなら、判りやすくて良い」
「敵は殺す。それだけだな」

サイアスがフッと笑い、ナギが一言だけ漏らす。それに続くように、チルディが口を開く。

「リーザス最強のリック様に、四将軍のサイアス様、悪魔のフェリス様にルーク様とランス様までいらっしゃるんですもの。きっと大丈夫ですわ」
「ま、何にせよ気をつけるべきは…」
「魔人だな。だが、ヘルマンの動向にも注意するんだ。どんな隠し球があるか判らんからな」

そう、ヘルマンには隠し球がある。ルークたちの知らない、ディオという最悪の隠し球が。

「……」

「イオの事か？」
「ああ」

フェリスに問いかけられ、ルークが答える。ヘルマンの飛行艇を奪取する事を目的にした今、ヘルマンとの激突は必至。即ち、イオとの再会もまた必然となる。

「…あんまり、背負い込みすぎるなよ」
「ああ…よし、行くか！」

そうルークが合図をし、一同は食堂を出て教会を目指す。そんな中、ランスがルークに近寄ってきて、小さな声で呟く。

「勘違いするなよ。俺様が負けたのは洗脳されていたからと、レベルが下がっていたからだ。本来の俺様なら、貴様如き敵ではない」
「ふっ…そうだな」

わざわざそんな事を言いに来たのかと、ルークは軽く笑う。そういえば、妹も負けず嫌いだったなと少し昔を思い出す。

「がはは、待っていろよ。俺様が華麗に救出してやる」
「さて、ヘルマンが出るか魔人が出るか…」
「不吉な事を言わないでくださいませんこと」

サイアスの言葉にチルディが苦言を呈しながら、教会の隠し扉を通って、一同は再び迷宮へと戻っていった。そして、近づく。ルークとディオの出会いが。これから深い因縁で結ばれる、ケイブリスとは別の、もう一人の宿敵との邂逅が。その初戦は…ルークの完全敗北に終わる事となる。

第８５話　宿敵の鼓動（後書き）

［モンスター］
スマイルボーン
　笑顔のまま戦う骸骨戦士型のアンデット系モンスター。剣と盾で武装し、実力はそれなりに高いため、生半可な冒険者では太刀打ちできない。

［技］
掌炎爆破　（オリ技）
使用者　サイアス・クラウン
　魔力を溜めた手のひらを直接相手に押し当て、至近距離で爆破させる近接専用魔法。魔法使いは接近戦に弱いという概念を払拭するため、ルークとの手合わせの間にサイアスが考え出したオリジナル技。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5750x/

ランスIF　二人の英雄

2012年1月6日12時35分発行